現代日本文學全集

XXVII

有島武郎集

有島生馬集

杉浦非水裝幀

改造社版

凡てが終つた。僕は今日姿を隠くす。これ
から僕が如何するか又如何なるかは君の知つ
た事ぢやない。
君のなまぬるい神経に僕等三人の運命の結
末が如何映るか。兎に角僕
は魂の藻抜けになつたM子を君に与へる。人
間が一生の間に恐らくは一度より経験しない
尊い深い生命の燃焼を、一片の思ひやりもな
く、ふざけ切つた心で弄んだ君が、果して君
の恋人を灰より救ひ得る
かで楽みに見てゐるぞ。

右、有島武郎氏筆蹟

右、最近の有島生馬氏

上、晩年の有島武郎氏

「有島武郎集」目次

「有島生馬集」目次

有島武郎集

有島武郎小傳

兄は明治十一年三月四日、小石川區水道町の借家で生れた。當時父武は三十六歳、大藏省書記官を勤めてゐたが、生れは薩摩川内北郷家の家臣であつた。母幸子も南部藩々士の娘だつたが、祖父が江戸表留守居役をしてゐたので、十歳までは都で育つた。兎も角二人は南と北の果から出て、新帝都に新時代の生計を營む努力を初めたのである。

同十五年父が横濱稅關長に轉任し、十年間の官邸生活が續いた。その間兄は長官の長男たる故と天稟の德望とで、衆童から小さい王子のやうな待遇を受けてゐた。父は兄を米國人の家庭や學校へ送り、專ら英語を學ばしめた。十歳から虎門學習院へ寄宿せしめた。一體父は子供の教育に就いては自由放任であつたが、兄だけは除外例だつたと云はれてゐる。然し兄の性格等に就いては言葉を極めて常に賞揚してゐた。中學時代は溫良聰明な模範的學生の一人だつた。皇太子殿下の御相手に選ばれた一事でもそれは知られる。

二十九年學習院中等科を卒業、札幌農學校へ入學、新渡戸博士の家に寄寓してゐた。かく兄は幼少の頃から家を出、多くは人なかで成人する運命を持つてゐた。

札幌に於ける五年間の大自然の感化と素朴勤勉な學風とは彼に學問と德性と信仰とを賦與した。かくて學習院時代の貴族的物質的な教養を脫し、身心鍛錬向上の機會を得た。初め禪に參し、後内村鑑三氏等の感化から基督教に入つた。森本氏と共著になる「リヴィングストン傳」は卽ち當時の信仰の所產である。

三十四年「鎌倉幕府初代の農政」を殘して卒業し、兩親の膝下に歸つたが、席溫まる遑なく、志願兵として入營、越えて三十六年米國へ渡り、ハアヴァフォードでマスター・オブ・アーツを授けられた。その夏はフランクフォルド精神病院に至り、狂人の看護をした。その頃から明かに基督教に對し、專攻の歷史經濟に對し懷疑的となり、文學及び社會主義、唯物史觀等に興味を抱くやうになつた。ハーヴァドに遊ぶやうになつて、益々その傾向は顯著になつた。

三十九年の夏、私は米國から渡航して來た兄をナポリの埠頭に迎へた。兄はまだ文學者たる具體的の道を見出してゐなかつたが、既に專攻の學問には全然興味を失つて終つてゐた。ロンドンでクロポトキンに會つた兄は翌年の四月久々で故鄕へ歸り、その十二月から東北帝國大學の教師として赴任した。

四十二年神尾光臣の二女安子と結婚した、三十二歳である。四十四年以後次ぎ〳〵に行光、敏行、行三の三男が生れた。然し嫂は程なく健康を害したので、兄も職を辭し東京下六番町の本宅へ歸つて來た。安子の病勢は思ふやうに恢復しなかつた、同棲八年、大正五年八月平塚の杏雲堂病院に瞑目した。兄は最上の努力を盡し自ら看護にあたつた。その十二月父も亦歿した。兄の平安無事だつた生活は一轉し、重荷と煩累とが急にのしかゝつて來た。

結婚の翌年、白樺が發行された。同人は悉く吾等兄弟三人の舊友であつた。その關係上兄も執筆し、四十四年一月から長篇『或る女』が掲載され出した。それ以後の十三年間は文壇人として、讀者の記憶にまだ新なことと思ふ。

大正十二年春、財產及び農場の讓與を公言し、その六月八日午後三時頃母及び姉に挨拶して家を出た。吾々は今日まで空しく兄の歸宅を待つた。時に四十六歳。今日生存してゐれば丁度五十歳になる。

昭和二年六月八日

有島生馬

小さき者へ

お前たちが大きくなつて、一人前の人間に育ち上つた時、――その時までお前たちのパヽは生きてゐるかゐないか、それは分らない事だが――父の書き殘したものを繰り擴げて見る機會があるだらうと思ふ。その時この小さな書き物もお前たちの眼の前に現はれ出るだらう。時はどん〳〵移つて行く。お前たちの父なる私がその時お前たちにどう映るか、それは想像も出來ない事だ。恐らく私が今こゝで、過ぎ去らうとする時代を嗤ひ憐れんでゐるやうに、お前たちも私の古臭い心持を嗤ひ憐れむのかも知れない。私はお前たちの爲めにさうあらん事を祈つてゐる。お前たちは遠慮なく私を踏臺にして、高い遠い所に私を乘り越えて進まなければ間違つてゐるのだ。然しながらお前たちをどんなに深く愛したものがこの世にゐるか、或はゐたかといふ事實は、永久にお前たちに必要なものだと私は思ふのだ。お前たちがこの書き物を讀んで、私の思想の未熟で頑固なのを嗤ふ間にも、私達の愛はお前たちを暖め、慰め、勵まし、人生の可能性をお前たちの心に味覺させずにおかないと私は思つてゐる。だからこの書き物を私はお前たちにあてて書く。

お前たちは去年一人の、たつた一人のマヽを永久に失つてしまつた。お前たちは生れると間もなく、生命に一番大事な養分を奪はれてしまつたのだ。お前達の人生はそこで既に暗い。この間ある雜誌社が「私の母」といふ小さな感想をかけといつて來た時、私は何んの氣もなく、「自分の幸福は母が始めから一人で今も生きてゐる事だ」と書いてのけた。而して私の萬年筆がそれを書き終へるか終へないに、私はすぐお前たちの事を思つた。私の心は惡事でも働いたやうに痛かつた。しかも事實は事實だ。私はその點で幸福だつた。お前たちは不幸だ。恢復の途なく不幸だ。不幸なものたちよ。

曉方の三時からゆるい陣痛が起り出して不安が家中に擴がつたのは今から思ふと七年前の事だ。それは吹雪も吹雪、北海道ですら、滅多にはないひどい吹雪の日だつた。市街を離れた川沿ひの一つ家はけし飛ぶ程搖れ動いて、窓硝子に吹きつけられた粉雪は、さらぬだに綿雲に閉ぢられた陽の光を二重に遮つて、夜の暗さがいつまでも部屋から退かなかつた。電燈の消えた薄暗い中で、白いものに包まれたお前たちの母上は、夢心地に呻き苦しんだ。私は一人の學生と一人の女中とに手傳はれながら、火を起したり、湯を沸かしたり、使を走らせたりした。産婆が雪で眞白になつてころげこんで來た時は、家中のものが思はずほつと息氣をついて安堵したが、晝になつても晝過ぎになつても出産の模樣が見えないで、産婆や看護婦の顏に、私だけに見える氣遣ひの色が見え出すと、私は全く慌ててしまつてゐた。書齋に閉ぢ籠つて結果を待つてをられなくなつた。私は産室に降りていつて、産婦の兩手をしつかり握る役目をした。陣痛が起る度毎に産婆は叱るやうに産婦を勵まして、一分も早く産を終らせようとした。然し暫らくの苦痛の後に、産婦はすぐ又深い眠りに落ちてしまつた。鼾さへかいて安々と何事も忘れたやうに見えた。産婆も、後から驅けつけてくれた醫者も、顏を見合はして吐息をつくばかりだつた。醫師は昏睡が來る度毎に何か非常の手段を用ゐようかと案じてゐるらしかつた。

晝過ぎになると戸外の吹雪は段々鎭まつていつて、濃い雪雲から漏れる薄日の光が、窓にたまつた雪に來てそつと戲れるまでになつた。然し産室の中の人々にはます／＼重い不安の雲が蔽ひ被さつた。醫師は醫師で、産婆は産婆で、私は私で、銘々の不安に捕はれてしまつた。その中で何等の危害をも感ぜぬらしく見えるのは、一番恐ろしい運命の淵に臨んでゐる産婦と胎兒だけだつた。二つの生命は昏々として死の方へ眠つて行つた。

　丁度三時と思はしい時に――産氣がついてから十二時間目に――夕べを催す光の中で、最後と思はしい激しい陣痛が起つた。肉の眼で恐ろしい夢でも見るやうに、産婦はかつと瞼を開いて、あてどもなく一所を睨みながら、苦しげといふよりは恐ろしげに顏をゆがめた。而して私の上體を自分の胸の上にたくし込んで、背中を羽がいに抱きすくめた。若し私が産婦と同じ程度にいきんでゐなかつたら、産婦の腕は私の胸を押しつぶすだらうと思ふ程だつた。そこにゐる人々の心は思はず總立ちになつた。醫師と産婆は場所を忘れたやうに大きな聲で産婦を勵ました。

　ふと産婦の握力がゆるんだのを感じて私は顏を擧げて見た。産婆の膝許には血の氣のない嬰兒が仰向けに横たへられてゐた。産婆は毬でもつくやうにその胸をはげしく敲きながら、葡萄酒々々々といつてゐた。看護婦がそれを持つて來た。産婆は顏と言葉とでその酒を盥の中にあけろと命じた。激しい芳芬と同時に盥の湯は血のやうな色に變つた。嬰兒はその中に浸された。暫らくしてかすかな産聲が息氣もつけない緊張の沈默を破つて細く響いた。

　大きな天と地との間に一人の母と一人の子とがその刹那に忽如として現はれ出たのだ。

　その時新たな母は私を見て弱々しくほゝゑんだ。私はそれを見ると何んといふ事なしに涙が眼がしらに滲み出て來た。それを私はお前たちに何んといつていひ現はすべきかを知らない。私の生命全體が涙を私の眼から搾り出したとでもいへばいゝのか知らん。その時から生活の諸相が凡て眼の前で變つてしまつた。

　お前たちの中最初にこの世の光を見たものは、このやうにして世の光を見た。二番目も三番目も、生れやうに難易の差こそあれ、父と母とに與へた不思議な印象に變りはない。

　かうして若い夫婦はつぎ／＼にお前たち三人の親となつた。

　私はその頃心の中に色々な問題をあり餘る程持つてゐた。而して始終齷齪しながら何一つ自分を滿足に近づけるやうな仕事をしてゐなかつた。何事も獨りで嚙みしめて見る私の性質として、表面には十人並みな生活を生活してゐながら、私の心はやゝともすると突き上げて來る不安にいら／＼させられた。ある時は結婚を悔いた。ある時はお前たちの誕生を惡んだ。何故自分の生活の旗色をもつと鮮明にしない中に結婚なぞをしたか。妻のある爲めに後ろに引きずつて行かれねばならぬ重みの幾つかを、何故好んで腰につけたのか。何故二人の肉慾の結果を天からの賜物のやうに思はねばならぬのか。家庭の建立に費す勞力と精力とを自分は他に用ゆべきではなかつたのか。

　私は自分の心の亂れからお前たちの母上を屢〻泣かせたり淋しがらせたりした。またお前たちを沒義道に取りあつかつた。お前達が少しでも泣いたりいがんだりする聲を聞くと、私は何か殘虐な事をしないではゐられなかつた。原稿紙にでも向つてゐた時に、お前たちの母上が、小さな家事上の相談を持つて來たり、お前たちが泣き騷いだりしたりすると、私は思はず机をたゝいて立ち上つたりした。而して後では

たまらない淋しさに襲はれるのを知りぬいてゐながら、激しい言葉を遣つたり、嚴しい折檻をお前たちに加へたりした。

然し運命が私の我儘と無理解とを罰する時が來た。どうしてもお前達を子守に任せておけないで、毎晩お前たち三人を自分の枕許や、左右に臥らして、夜通し一人を寝かしつけたり、一人に牛乳を温めてあてがつたり、一人に小用をさせたりして、碌々熟睡する暇もなく愛の限りを盡したお前たちの母上が、四十一度といふ恐ろしい熱を出してどつと床についた時の驚きもさる事ではあるが、診察に來てくれた二人の醫師が口を揃へて、結核の徴候があるといつた時には、私は唯ゞ譯もなく靑くなつてしまつた。檢痰の結果は醫師たちの鑑定を裏書きしてしまつた。而して四つと三つと二つとになるお前たちを殘して、十月末の淋しい秋の日に、母上は入院せねばならぬ體となつてしまつた。

私は日中の仕事を終ると飛んで家に歸つた。而してお前達の一人か二人を連れて病院に急いだ。私がその町に住まひ始めた頃働いてゐた克明な門徒の婆さんが病室の世話をしてゐた。その婆さんはお前たちの姿を見ると隱し隱し涙を拭いた。お前たちは母上を寝臺の上に見つけると飛んでいつてかじり附かうとした。結核症であるのをまだあかされてゐないお前たちの母上は、寶を抱きかゝへるやうにお前たちをその胸に集めようとした。私はいゝ加減にあしらつてお前たちを寝臺に近づけないやうにしなければならなかつた。忠義をしようとしながら、周圍の人から極端な誤解を受けて、それを辯解してならない事情に置かれた人の味ひさうな心持を幾度も味つた。それでも私はもう怒る勇氣はなかつた。引きはなすやうにしてお前たちを母上から遠ざけて歸路につく時には、大抵街燈の光が淡く道路を照してゐた。玄關を這入ると雇人だけが留守してゐた。彼等は二三人もゐる癖に、殘しておいた赤坊のおしめを代へようともしなかつた。氣持ち惡げに泣き叫ぶ赤坊の股の下はよくぐしよ濡れになつてゐた。

お前たちは不思議に他人になつかない子供たちだつた。やう〳〵お前たちを寝かしつけてから私はそつと書齋に這入つて調べ物をした。體は疲れて頭は興奮してゐた。仕事をすまして寝つかうとする十一時前後になると、神經の過敏になつたお前たちは、夢などを見ておびえながら眼をさますのだつた。曉方になるとお前たちの一人は乳を求めて泣き出した。それにおこされると私の眼はもう朝まで閉ぢなかつた。朝飯を食ふと私は赤い眼をしながら、堅い心のやうなものの出來た頭を抱へて仕事をする所に出懸けた。

北國には冬が見る〳〵逼つて來た。ある時病院を訪れると、お前たちの母上は寝臺の上に起きかへつて窓の外を眺めてゐたが、私の顏を見ると、早く退院がしたいといひ出した。窓の外の楓があんなになつたのを見ると心細いといふのだ。成るほど入院したてには燃えるやうに枝を飾つてゐたその葉が一枚も殘らず散りつくして、花壇の菊も霜に傷められて、萎れる時でもないのに萎れてゐた。私はこの寂しさを毎日見せておくだけでもいけないと思つた。然し母上の本當の心持はそんな所にはなくつて、お前たちから一刻も離れてゐられなくなつてゐたのだ。

今日いよ〳〵退院するといふ日は、霰の降る、寒い風のびゆう〳〵と吹く惡い日だつたから、私は思ひ止らせようとして、仕事をすますとすぐ病院に行つて見た。然し病室はからつぽで、例の婆さんが、貰つたものやら、座蒲團やら、茶器やらを部屋の隅でごそ〳〵と始末してゐた。

急いで家に歸つて見ると、お前たちはもう母上のまはりに集まつて嬉しさうに騷いでゐた。私はそれを見ると涙がこぼれた。

知らない間に私たちは離れられないものになつてしまつてゐたのだ。五人の親子はどん／＼押し寄せて來る寒さの前に、小さく固まつて身を護らうとする雜草の株のやうに、互により添つて暖みを分ち合はうとしてゐたのだ。然し北國の寒さは私たち四人の暖みでは間に合はない程寒かつた。私は一人の病人と頑是ないお前たちとを勞はりながら旅雁のやうに南を指して遁れなければならなくなつた。

それは初雪のどん／＼降りしきる夜の事だつた、お前たち三人を生んで育ててくれた土地を後にして旅に上つたのは。忘れる事の出來ないいくつかの顏は、暗い停車場のプラットフォームから私たちに名殘を惜しんだ。陰鬱な津輕海峽の海の色も後ろになつた。東京までついて來てくれた一人の學生は、お前たちの中の一番小さい者を、母のやうに終夜抱き通してゐてくれた。そんな事を書けば限りがない。兎も角私たちは幸に怪我もなく、二日の物憂い旅の後に晩秋の東京に着いた。

今までゐた所とちがつて、東京には澤山の親類や兄弟がゐて、私たちの爲めに深い同情を寄せてくれた。それは私にどれ程の力だつたらう。お前たちの母上は程なくK海岸にさゝやかな貸別莊を借りて住む事になり、私たちは近所の旅館に宿を取つて、そこから見舞ひに通つた。一時は病勢が非常に衰へたやうに見えた。お前たちと母上と私とは海岸の砂丘に行つて日向ぼつこをして樂しく二三時間を過ごすまでになつた。

どういふ積りで運命がそんな小康を私たちに與へたのかそれは分らない。然し彼れはどんな事があつても仕遂ぐべき事を仕遂げずにはおかなかつた。その年が暮れに迫つた頃お前達の母上は假初の風邪からぐん／＼惡い方へ向いて行つた。而してお前たちの中の一人も突然原因の解らない高熱に侵された。その病氣の事を私は母上に知らせるのに忍びなかつた。病兒は病兒で私を暫らくも手放さうとはしなかつた。お前達の母上からは私の無沙汰を責めて來た。私は遂に倒れた。病兒と枕を竝べて、今まで經驗した事のない高熱の爲めに呻き苦しまねばならなかつた。私の仕事？　私の仕事は私から千里も遠くに離れてしまつた。それでも私はもう私を悔やまうとはしなかつた。お前たちの爲めに最後まで戰はうとする熱意が病熱よりも高く私の胸の中で燃えてゐるのみだつた。

正月早々悲劇の絕頂が到來した。お前たちの母上は自分の病氣の眞相を明かされねばならぬ破目になつた。そのむづかしい役目を勤めてくれた醫師が歸つて後の、お前たちの母上の顏を見た私の記憶は一生涯私を驅り立てるだらう。眞蒼な清々しい顏をして枕についたまま母上には冷たい覺悟を微笑に云はして靜かに私を見た。そこには死に對するresignationと共にお前たちに對する根強い執着がまざ／＼と刻まれてゐた。それは物凄くさへあつた。私は凄慘な感じに打たれて思はず眼を伏せてしまつた。

愈々H海岸の病院に入院する日が來た。お前たちの母上は全快しない限りは死ぬともお前たちに逢はない覺悟の臍を堅めてゐた。二度とは着ないと思はれる——而して實際着なかつた——晴着を着て座を立つた母上は內外の母親の眼の前でさめ／＼と泣き崩れた。女ながらに氣性の勝れて强いお前たちの母上は、私と二人だけゐる場合でも泣顏などは見せた事がないといつてもいゝ位だつたのに、その時の涙は拭くあとからあとから流れ落ちた。その熱い涙は

お前たちだけの尊い所有物だ。それは今は乾いてしまつた。大空を亙る雲の一片となつてゐるか、谷河の水の一滴となつてゐるか、大洋の泡の一つとなつてゐるか、又は思ひがけない人の涙堂に貯へられてゐるか、それは知らない。然しその熱い涙は兎も角もお前たちだけの尊い所有物なのだ。

自動車のゐる所に來ると、お前たちの中熱病の豫後にある一人は、足の立たない爲めに下女に背負はれて、——一人はよち〳〵と歩いて、——一番末の子は母上を苦しめ過ぎるだらうといふ祖父母たちの心遣ひから連れて來られなかつた——母上を見送りに出て來てゐた。お前たちの頑是ない、驚きの眼は、大きな自動車にばかり向けられてゐた。お前たちの母上は淋しくそれを見やつてゐた。自動車が動き出すとお前達は女中に勸められて兵隊のやうに擧手の禮をした。母上は笑つて輕く頭を下げてゐた。お前たちは母上がその瞬間から永久にお前たちを離れてしまふとは思はなかつたらう。不幸なものたちよ。

それからお前たちの母上が最後の息氣を引きとるまでの一年と七箇月の間、私たちの間には烈しい戰が鬪はれた。母上は死に對して最上の態度を取る爲めに、お前たちに最大の愛を遺すために、私を加減なしに理解する爲めに、私は母上を病魔から救ふ爲めに、自分に迫る運命を男らしく肩に擔ひ上げるために、お前たちは不思議な運命から自分を解放するために、身にふさはない境遇の中に自分をはめ込むために、鬪つた。血まぶれになつて鬪つたといつていゝ。私も母上もお前たちも幾度彈丸を受け、刀創を受け、倒れ、起き上り、又倒れたらう。

お前たちが六つと五つと四つになつた年の八月の二日に死が殺到した。死が凡てを壓倒した。而して死が凡てを救つた。

お前たちの母上の遺言書の中で一番崇高な部分はお前たちに與へられた一節だつた。若しこの書き物を讀む時があつたら、同時に母上の遺書も讀んで見るがいゝ。母上は血の涙を泣きながら、死んでもお前たちに會はない決心を飜さなかつた。それは病菌をお前たちに傳へるのを恐れたばかりではない。又お前たちを見る事によつて自分の心の破れるのを恐れたばかりではない。お前たちの清い心に殘酷な死の姿を見せて、お前たちの一生をいやが上に暗くする事を恐れ、お前たちの伸び伸びて行かなければならぬ靈魂に少しでも大きな傷を殘す事を恐れたのだ。幼兒に死を知らせる事は無益であるばかりでなく有害だ。葬式の時は女中をお前たちにつけて樂しく一日を過ごさして貰ひたい。さうお前たちの母上は書いてゐる、

「子を思ふ親の心は日の光世より世を照る大きさに似て」

とも詠じてゐる。

母上が亡くなつた時、お前たちは丁度信州の山の上にゐた。若しお前たちの母上の臨終にあはせなかつたら一生恨みに思ふだらうとさへ書いてよこしてくれたお前たちの叔父上に强ひて頼んで、お前たちを山から歸らせなかつた私をお前たちが殘酷だと思ふ時があるかも知れない。今十一時半だ。この書き物を草してゐる部屋の隣りにお前たちは枕を列べて寢てゐるのだ。お前たちはまだ小さい。お前たちが私の齡になつたら私のした事を、即ち母上のさせようとした事を價高く見る時が來るだらう。

私はこの間にどんな道を通つて來たらう。お前たちの母上の死によつて、私は自分の生きて行くべき大道にさまよひ出た。私は自分を愛護してその道を踏み迷はずに通つて行けばいゝのを知るやうになつた。私は嘗て一つの創作の

中に妻を犠牲にする決心をした一人の男の事を書いた。事實に於て お前たちの母上は私の爲めに犠牲になつてくれた。私のやうに持ち合はした力の使ひやうを知らなかつた人間はない。私の周圍のものは私を一個の小心な、魯鈍な、仕事の出來ない、憐れむべき男と見る外を知らなかつた。私の小心と魯鈍と無能力とを徹底さして見ようとしてくれるものはなかつた。それをお前たちの母上は成就してくれた。私は自分の弱さに力を感じ始めた。私は仕事の出來ない所に仕事を見出した。大膽になれない所に大膽を見出した。鋭敏でない所に鋭敏を見出した。言葉を換へていへば、私は鋭敏に自分の魯鈍を見貫き、大膽に自分の小心を認め、勞役して自分の無能力を體驗した。私はこの力を以て己れを鞭ち他を生きる事が出來るやうに思ふ。お前たちが私の過去を眺めて見るやうな事があつたら、私も無駄には生きなかつたのを知つて喜んでくれるだらう。

雨などが降りくらして悒鬱な氣分が家の中に漲る日などに、どうかするとお前たちの一人が黙つて私の書齋に這入つて來る。而して一言パヽといつたぎりで 私の膝によりかゝつたましく／＼と泣き出してしまふ。あゝ何がお前たちの頑是ない眼に涙を要求するのだ。不幸なものたちよ。お前たちが謂れもない悲しみにくづれるのを見るに増して、此の世を淋しく思はせるものはない。またお前たちが元氣よく私に朝の挨拶をしてから、母上の寫眞の前に駈けて行つて、「マヽちやん御機嫌よう」と快活に叫ぶ瞬間ほど、私の心の底までぐさと刮り通す瞬間はない。私はその時、ぎよつとして無劫の世界を眼前に見る。

世の中の人は私の述懐を馬鹿々々しいと思ふに違ひない。何故なら妻の死とはそこにもここにも厭きはてる程夥しくある事柄の一つに過ぎないからだ。そんな事を重大視する程世の中の人は閑散でない。それは確かにさうだ。然しそれにもかゝはらず、私といはず、お前たちも行く／＼は母上の死を何物にも代へがたく悲しく口惜しいものに思ふ時が來るのだ。世の中の人が無頓着だといつてそれを恥ぢてはならない。それは恥づべきことぢやない。私たちはそのありうちの事柄の中からも人生の淋しさに深くぶつかつて見ることが出來る。小さなことが小さなことでない。大きなことが大きなことでない。それは心一つだ。

何しろお前たちは見るに痛ましい人生の芽生えだ。泣くにつけ、笑ふにつけ、面白がるにつけ、淋しがるにつけ、お前たちを見守る父の心は痛ましく傷つく。

然しこの悲しみがお前たちと私とにどれ程の強みであるかをお前たちはまだ知るまい。私たちはこの損失のお蔭で生活に一段と深入りしたのだ。私共の根はいくらかでも大地に延びたのだ。人生を生きる以上人生に深入りしないものは災ひである。

同時に私たちは自分の悲しみにばかり浸つてゐてはならない。お前たちの母上は亡くなるまで、金錢の累ひからは自由だつた。飲みたい薬は何んでも飲む事が出來た。食ひたい食物は何んでも食ふ事が出來た。私たちは偶然な社會組織の結果からこの特權ならざる特權を享樂した。お前たちのあるものはかすかながらU氏一家の模様を覺えてゐるだらう。死んだ細君から結核を傳へられたU氏があの理智的な性情を有ちながら、天理教を信じて、その御祈禱で病氣を癒さうとしたその心持を考へると、私はたまらなくなる。薬がきくものか祈禱がきくものかそれは知らない。然しU氏は醫者の薬が飲みたかつたのだ。然しそれが出來なかつたのだ。U氏は毎日下痢しながら役所に通つた。ハ

ンケチを巻き通しな喉からは皺嗄れた聲しか出なかつた。働けば病氣が重る事は知れ切つてゐた。それを知りながらU氏は御祈禱を賴みにして、老母と二人の子供との生活を續けるために、勇ましく飽くまで働いた。而して病氣が重つてから、なけなしの金を出して貰つた古賀液の注射は、田舍の醫師の不注意から靜脈を外れて、激烈な熱を引き起した。而してU氏は無資產の老母と幼兒とを後に殘してその爲めに斃れてしまつた。その人たちは私たちの隣りに住んでゐたのだ。何んといふ運命の皮肉だ。お前たちは母上の死を思ひ出すと共に、U氏を思ひ出すことを忘れてはならない。而してこの恐ろしい溝を埋める工夫をしなければならない。お前たちの母上の死はお前たちの愛をそこまで擴げさすに十分だと思ふから私はいふのだ。

十分人世は淋しい。私たちは唯ゝさういつて濟してゐる事が出來るだらうか。お前たちと私とは、血を味つた獸のやうに、愛を味つた。行かう、而して出來るだけ私たちの周圍を淋しさから救ふために働かう。私はお前たちを愛した。而して永遠に愛する。それはお前たちから親としての報酬を受けるためにいふのではない。お前たちを愛する事を敎へてくれたお前たちに私の要求するものはたゞ私の感謝を受取つて貰ひたいといふ事だけだ。お前たちが一人前に育ち上つた時、私は死んでゐるかも知れない。一生懸命に働いてゐるかも知れない。老衰して物の役に立たないやうになつてゐるかも知れない。然し何れの場合にしろ、お前たちの助けなければならないものは私ではない。お前たちの若々しい力は既に下り坂に向はうとする私などに煩はされてゐてはならない。斃れた親を喰ひ盡して力を貯へる獅子の子のやうに、力强く勇ましく私を振り捨てて人生に乘り出して行くがいゝ。

今時計は夜中を過ぎて一時十五分を指してゐる。しんと靜まつた夜の沈默の中にお前たちの平和な寢息だけが幽かにこの部屋に聞こえて來る。私の眼の前にはお前たちの叔母が母上にとて贈られた薔薇の花が寫眞の前に置かれてゐる。それにつけて思ひ出すのは私があの寫眞を撮つてやつた時だ。その時お前たちの中に一番年たけたものが母上の胎に宿つてゐた。母上は自分でも分らない不思議な望みと恐れとで始終心をなやましてゐた。その頃の母上は殊に美しかつた。希臘の母の眞似だといつて、部屋の中にいゝ肖像を飾つてゐた。その中にミネルヴァの像や、ゲーテや、クロムウエルや、ナイティンゲール女史やの肖像があつた。その少女じみた野心をその時の私は輕い皮肉の心で觀てゐたが、今から思ふとたゞ笑ひ捨ててしまふことはどうしても出來ない。私がお前たちの母上の寫眞を撮つてやらうといつたら、思ふ存分化粧をして一番の晴着を着て、私の二階の書齋に這入つて來た。私は寧ろ驚いてその姿を眺めた。母上は淋しく笑つて私にいつた。產は女の出陣だ。いゝ子を生むか死ぬか、そのどつちかだ。だから死際の裝ひをしたのだ。——その時も私は心なく笑つてしまつた。然し、今はそれも笑つてはゐられない。

深夜の沈默は私を嚴肅にする。私の前には机を隔ててお前たちの母上が坐つてゐるやうにさへ思ふ。その母上の愛は遺書にあるやうにお前たちを護らずにはゐないだらう。よく眠れ。不可思議な時といふものの作用にお前たちを打ち任してよく眠れ。さうして明日は昨日よりも大きく賢くなつて寢床の中から跳り出して來い。私は私の役目をなし遂げる事に全力を盡すだらう。私の一生が如何に失敗であらうとも、又私が如何なる誘惑に打ち負けようとも、

お前たちは私の足跡に不純な何物をも見出し得ないだけの事はする。屹度する。お前たちは私の斃れた所から新らしく歩み出さねばならないのだ。然しどちらの方向にどう歩まねばならぬかは、かすかながらにもお前達は私の足跡から探し出す事が出来るだろう。

小さき者よ。不幸な而して同時に幸福なお前たちの父と母との祝福を胸にしめて人の世の旅に登れ。前途は遠い。而して暗い。然し恐れてはならぬ。恐れない者の前に道は開ける。

行け。勇んで。小さき者よ。

（一九一八年一月、新潮所掲）

カインの末裔

一

長い影を地にひいて、痩馬の手綱を取りながら、彼れは默りこくつて歩いた。大きな汚い風呂敷包みと一緒に、章魚のやうに頭ばかり大きい赤坊をおぶつた彼れの妻は、少し跛脚をひきながら三四間も離れてその跡からとぼ〳〵とついて行つた。

北海道の冬は空まで逼つてゐた。蝦夷富士と云はれるマツカリヌプリの麓に續く膽振の大草原を、日本海から内浦灣に吹きぬける西風が、打寄せる紆濤のやうに跡から跡から吹き拂つて行つた。寒い風だ。見上げると八合目まで雪になつたマツカリヌプリは少し頭を前にこゞめて風に刃向ひながら默つたまゝ突つ立つて居た。昆布岳の斜面に小さく集まつた雲の塊を眼がけて日は沈みかゝつてゐた。草原の上には一本の樹木も生えてゐなかつた。心細い程眞直な一筋道を、彼れと彼れの妻だけが、よろ〳〵と歩く二本の立木のやうに動いて行つた。

二人は言葉を忘れた人のやうにいつまでも默つて歩いた。馬が溺りをする時だけ彼れは不承不承に立ちどまつた。妻はその暇にやうやく追ひついて背の荷をゆすり上げながら溜息をついた。馬が溺りをすますと二人は又默つて歩き出した。

「こゝらおやぢ(熊の事)が出るづら」

四里にわたるこの草原の上で、たつた一度妻はこれ丈けの事を云つた。慣れたものには時刻と云ひ、所柄と云ひ、熊の襲來を恐れる理由があつた。彼れはいま〳〵しさうに草の中に唾を吐き捨てた。

草原の中の道がだん〳〵太くなつて國道に續く所まで來た頃には日は暮れてしまつてゐた。物の輪郭が圓味を帶びずに、堅いまゝで黑ずんで行くこちんとした寒い晩秋の夜が來た。

着物は薄かつた。而して二人は餓ゑ切つてゐた。妻は氣にして時々赤坊を見た。生きてゐるのか死んでゐるのか、兎に角赤坊はいびきも立てないで首を右の肩にがくりと垂れたまゝ默つてゐた。

國道の上にはさすがに人影が一人二人動いてゐた。大抵は市街地に出て一杯飲んでゐたのらしく、行違ひにしたゝか酒の香を送つてよこすものもあつた。彼れは酒の香をかぐと急にゑぐられるやうな渴きと食慾とを覺えてすれ違つた男を見送つたりしたが、いま〳〵しさに吐き捨てようとする唾はもう出て來なかつた。糊のやうに粘つたものが脣の合せ目をとぢ附けてゐた。

内地ならば庚申塚か石地藏でもある筈の所に、眞黑になつた一丈もありさうな標示杭が斜になつて立つてゐた。そこまで來ると干魚をやく香ひがかすかに彼れの鼻をうつたと思つた。彼れははじめて立ち停つた。痩馬も歩いた姿勢をそのまゝにのそりと動かなくなつた。鬣と尻尾だけが風に從つてなびいた。

「何んて云ふだ農場は」

脊丈けの圖抜けて高い彼れは妻を見おろすやうにしてからつぶやいた。

「松川農場たら云ふだが」

「たら云ふだ？　白痴」

彼れは妻と言葉を交はしたのが癪にさはつた。而して馬の鼻をぐんと手綱でしごいて又歩

き出した。暗くなつた谷を距てて少し此方よりも高い位の平地に、忘れたやうに闇をおいてともされた市街地のかすかな灯影は、人氣のない所よりも却つて自然を淋しく見せた。彼れはその灯を見るともう一種のおびえを覺えた。人の氣配をかぎつけると彼れは何んとか身づくろひをしないではゐられなかつた。自然さがその瞬間に失はれた。それを意識する事が彼れをいやが上にも佛頂面にした。「敵が眼の前に來たぞ。馬鹿な面をしてゐやがつて、尻子玉でもひつこぬかれるな」とでも云ひさうな顔を妻の方に向けて置いて、歩きながら帶をしめ直した。良人の顔附きには氣も着かない程眼を落した妻は口をだらりと開けたまゝ一切無頓着でたゞ馬の跡について歩いた。

K市街地の町端れには空屋が四軒までならんで居た。小さな窓は髑髏のそれのやうな眞暗な眼を往來に向けて開いてゐた。五軒目には人が住んでゐたがうごめく人影の間に圍爐裡の根粗朶がちよろ／＼と燃えるのが見えるだけだつた。六軒目には蹄鐵屋があつた。怪しげな煙筒からは風にこきおろされた煙の中にまじつて火花が飛び散つてゐた。店は熔爐の火口を開いたやうに明るくて、馬鹿々々しくだだつ廣い北海道の七間道路が向側まではつきりと照らされてゐた。片側町ではあるけれども、兎に角家並みがあるだけに、強ひて方向を變へさせられた風の脚が意趣に砂を捲き上げた。砂は蹄鐵屋の前の火の光りに照りかへされて濛々と渦卷く姿を見せた。仕事場の鞴の側には三人の男が働いてゐた。鐵砧にあたる鐵槌の音が高く響くと疲れ果てた彼れの馬さへが耳を立てなほした。彼れはこの店先きに自分の馬を引つ張つて來る時の事を思つた。妻は吸ひ取られるやうに眩かさうな火の色に見惚れてゐた。二人は妙にわくわくした心持になつた。

蹄鐵屋の先きは急に闇が濃くなつて、大抵の家はもう戸じまりをしてゐた。荒物屋を兼ねた居酒屋らしい一軒から食物の香と男女のふざけ返つた濁聲がもれる外には、眞直な家並みは廢村のやうに寒さの前にちゞこまつて、電信柱だけが、けうとい唸りを立ててゐた。彼れと馬と妻とは前の通りに押し默つて歩いた。歩いては時折り思ひ出したやうに立ち停つた。立ち停つては又無意味らしく歩き出した。

四五町歩いたと思ふと彼等はもう町はづれに來てしまつて居た。道がへし折られたやうに曲つて、その先きは、眞闇な窪地に、急な勾配を取つて下つてゐた。彼等はその突角まで行つて又立ち停つた。遙か下の方からは、うざ／＼する程繁り合つた濶葉樹林に風の這入る音の外に、シリベシ川のかすかな水の音だけが聞こえてゐた。

「聞いて見づに」

妻は寒さに身をふるはしながらかううめいた。

「汝聞いて見べし」

いきなりそこにしやごんでしまつた彼れの聲は地の中からでも出て來たやうだつた。妻は荷をゆりあげて鼻をすゝり／＼取つて返した。一軒の家の戸を敲いて、やうやく松川農場のありかを敎へてもらつた時は、彼れの姿を見分けかねる程遠くに來てゐた。大きな聲を出す事が何んとなく恐ろしかつた。恐ろしいばかりではない、聲を出す力さへなかつた。そして跛脚をひき／＼又返つて來た。

彼等は眠くなる程疲れ果てながら又三町程歩かねばならなかつた。そこに下見圍ひ、板葺の眞四角な二階建が外の家並みを壓して立つてゐた。

妻が默つたまゝ立ち留つたので、彼れはそれが松川農場の事務所である事を知つた。ほん

たうを云ふと彼れは始めからこの建物がそれにちがひないと思つてゐたが、這入るのがいやなばかりに知らんふりをして通りぬけてしまつたのだ。もう進退谷まつた。彼れは道の向側の立樹の幹に馬を繋いで、燕麥と雜草とを切りこんだ亞麻袋を鞍輪からほどいて馬の口にあてがつた。ぼり〳〵と云ふ齒ぎれのいゝ音がすぐ聞こえ出した。彼れと妻とは又道を横切つて、事務所の入口の所まで來た。そこで二人は不安らしく顔を見合はせた。妻がぎごちなさうに手を擧げて髮をいぢつてゐる間に彼れは思ひ切つて半分ガラスになつてゐる引戶を開けた。滑車がけたゝましい音をたてて鐵の溝を滑つた。がたぴしする戶ばかりをあつかひ慣れてゐる彼れの手の力があまつたのだ。妻がぎよつとするはずみに背の赤坊も眼を覺まして泣き出した。帳場に居た二人の男は飛び上らんばかりに驚いてこちらを見た。そこには彼れと妻とが泣く赤坊の始末もせずに のそりと突つ立つてゐた。

「何んだ手前達は、戶を開けつぱなしにしくさつて風が吹き込むでねえか。這入るのなら早く這入つて來う―」

紺のあつしをセルの前垂れで合せて、樫の角火鉢の横座に坐つた男が眉をしがめながらかう怒鳴つた。人間の顔――殊にどこか自分より上手な人間の顔を見ると彼れの心はすぐ不貞腐れるのだつた。刃に刃向ふ獸のやうに捨鉢になつて彼れはのさ〳〵と圖拔けて大きな五體を土間に運んで行つた。妻はおづ〳〵と戶を閉めて戶外に立つてゐた、赤坊の泣くのも忘れ果てるほどに氣を顚倒させて。

聲をかけたのは三十前後の、眼の鋭い、口髭の不似合な、長顔の男だつた。農民の間で長顔の男を見るのは、豚の中で馬の顔を見るやうなものだつた。彼れの心は緊張しながらもその男の顔を珍らしげに見入らない譯には行かなかつた。彼れは辭儀一つしなかつた。

赤坊が縊り殺されさうに戶の外で泣き立てた。彼れはそれにも氣を取られてゐた。

上り框に腰をかけてゐたもう一人の男はや暫らく彼れの顔を見つめてゐたが、浪花節語りのやうな妙に張りのある聲で突然口を切つた。

「お主は川森さんの緣のものぢやないんかの。どうやら顔が似とるぢやが」

今度は彼れの返事も待たずに長顔の男の方を向いて、

「帳場さんにも川森から話いた筈ぢやがの。主がの血筋を岩田が跡に入れて貰ひたい云うてな」

又彼れの方を向いて、

「さうぢやろがの―」

それに違ひなかつた。然し彼れはその男を見ると蟲唾が走つた。それも百姓に珍らしい長い顔の男で、禿げ上つた額から左の半面にかけて火傷の跡がてら〳〵と光り、下瞼が赤くべつかんこをしてゐた。而して脣が紙のやうに薄かつた。

帳場と呼ばれた男はその事なら呑み込めたと云ふ風に、時々上眼で睨み〳〵、色々な事を彼れに聞き糺した。而して帳場机の中から、美濃紙に細々と活字を刷つた書類を出して、それに廣岡仁右衞門と云ふ彼れの名と生れ故鄕とを記入して、よく讀んでから判を押せと云つて二通つき出した。仁右衞門、是れから彼れと云ふ代りに仁右衞門と呼ばう―は固より明盲だつたが、農場でも漁場でも鑛山でも飯を食ふ爲めにはさう云ふ紙の端に盲判を押さなければならないといふ事は心得てゐた。彼れは腹がけの丼の中を探り廻してぼろ〳〵の紙の塊りをつかみ出した。そして筍の皮を剝ぐやうに幾枚

もの紙を剝がすと、眞黒になつた三文判がころがり出た。彼れはそれに息氣を吹きかけて證書に孔のあく程押しつけた。而して渡された一枚を判と一緒に丼の底にしまつてしまつた。是れだけの事で飯の種にありつけるのはありがたい事だつた。戸外では赤坊がまだ泣きやんでゐなかつた。

「俺ら錢こ一文も持たねえからちよつぴり借りたいだが」

赤坊の事を思ふと、急に小錢がほしくなつて、彼れがかう云ひ出すと、帳場は惘れたやうに彼れの顏を見詰めた、――こいつは馬鹿な面をしてゐる癖に油斷のならない横紙破りだと思ひながら。而して事務所では金の借貸は一切しないから緣者になる川森からでも借りるがいゝし、今夜は何しろ其處に行つて泊めて貰へと注意した。仁右衞門はもう向腹を立ててしまつてゐた。默りこくつて出て行かうとすると、そこに居合せた男が一緒に行つてやるから待てととめた。さう云はれて見ると彼れは自分の小屋が何處にあるのかを知らなかつた。

「それぢや帳場さん何分宜しう頼むがに、鹽梅よう親方の方にも云うてな。廣岡さん、それぢや行くべえかの。何んとまあ孩兒の痛ましくさかぶぞい。ぢやまあおやすみ」

彼れは器用に小腰をかゞめて古い手提鞄と帽子とを取り上げた。裾をからげて砲兵の古靴をはいてゐる樣子は小作人と云ふよりも雜穀屋の鞘取りだつた。

戸を開けて外に出ると事務所のボン〳〵時計が六時を打つた。ぴゆう〳〵と風は吹き募つてゐた。赤坊の泣くのに困じ果てて妻はぽつりと寂しさうに玉蜀黍殼の雪圍ひの陰に立つてゐた。

足場が惡いから氣を附けろと云ひながら彼の男は先きに立つて國道から畦道に這入つて行つた。

大濤のやうなうねりを見せた收穫後の畑地は、廣く遠く荒涼として擴がつてゐた。眼を遮るものは葉を落した防風林の細長い木立だけだつた。ぎら〳〵と瞬く無數の星は空の地を殊更ら寒く暗いものにしてゐた。仁右衞門を案內した男は笠井と云ふ小作人で、天理教の世話人もしてゐるのだと云つて聞かせたりした。

七町も八町も歩いたと思ふのに赤坊はまだ泣きやまなかつた。縊り殺されさうな泣き聲が反響もなく風に吹きちぎられて遠く流れて行つた。

やがて畦道が二つになる所で笠井は立ち停つた。

「この道をな、かう行くと左手にさへて小屋が見えようがの。な――」

仁右衞門は黑い地平線をすかして見ながら、耳に手を置き添へて笠井の言葉を聞き漏らすまいとした。それほど寒い風は激しい音で募つてゐた。笠井はくど〳〵とそこに行き着く注意を繰り返して、仕舞に金が要るなら川森の保證で少し位は融通すると附け加へるのを忘れなかつた、然し仁右衞門は小屋の所在が知れると後は聞いてゐなかつた。餓ゑと寒さがひし〳〵と應へ出してがた〳〵身をふるはしながら、挨拶一つせずにさつさと別れて歩き出した。

玉蜀黍殼といたどりの莖で圍ひをした二間半四方程の小屋が、前のめりにかしいで、海月のやうな低い勾配の小山の半腹に立つてゐた。物の饐えた香と堆肥の香が恣にたゞよつてゐた。小屋の中にはどんな野獸が潛んでゐるかも知れないやうな氣味惡さがあつた。赤坊の泣き續ける暗の中で仁右衞門が馬の背からどすんと重いものを地面に卸す音がした。瘦馬は荷が輕くなると、鬱積した怒りを一時にぶちまけるやうに嘶いた。遙かの遠くでそれに應へた馬があつ

た。後は風だけが吹きすさんだ。

夫婦はかじかんだ手で荷物を提げながら小屋に這入つた。長く火の氣は絶えてゐても、吹きさらしから這入るとさすがに氣持よく暖かかつた。二人は眞暗な中を手さぐりで有り合せの古蓆や藁をよせ集めて、どつかと腰を据ゑた。妻は大きな溜息をして背の荷と一緒に赤坊を卸して胸に抱き取つた。乳房をあてがつて見たが乳は涸れて居た。赤坊は堅くなりかゝつた齒齦でいやと云ふほどそれを噛んだ。而して泣き募つた。

「腐孩子！　乳首食ひちぎるに」

妻は慳貪にかう云つて、懷から顋煎餅を三枚出して、ぼり〳〵と噛みくだいては赤坊の口にあてがつた。

「俺らがにも越せ」

いきなり仁右衛門が猿臂を延ばして殘りを奪ひ取らうとした。二人は默つたまゝで本氣に爭つた。食べるものと云つては三枚の煎餅しかないのだから。

「白痴」

吐き出すやうに良人がかう云つた時勝負はきまつてゐた。妻は爭ひ負けて大部分を掠奪されてしまつた。二人は又押し默つて闇の中で足しない食物を貪り喰つた。然しそれは結局食慾をそゝる媒介になる計りだつた。二人は喰ひ終つてから幾度も固唾を飲んだが、火種のない所では南瓜を煮る事も出來なかつた。赤坊は泣きづかれに疲れてほつぽり出されたまゝに何時の間にか寢入つてゐた。

居鎭まつて見ると隙間もる風は刃のやうに鋭く切り込んで來てゐた。二人は申し合せたやうに兩方から近づいて、赤坊を間に入れて、抱き寢をしながら藁の中でがつ〳〵と震へてゐた。然しやがて疲勞は凡てを征服した。死のやうな眠りが三人を襲つた。

遠慮會釋もなく迅風は山と野とをこめて吹きすさんだ。漆のやうな闇が大河の如く東へ東へと流れた。マッカリヌプリの絶巓の雪だけが燐光を放つてかすかに光つてゐた。荒くれた大きな自然だけがそこに甦つた。

からして仁右衛門夫婦は、何處からともなくK村に現はれ出て、松川農場の小作人になつた。

二

仁右衛門の小屋から一町程離れて、K村から倶知安に通ふ道路沿ひに、佐藤與十と云ふ小作人の小屋があつた。與十と云ふ男は小柄で顔色も青く、何年たつても齢をとらないで、働きも甲斐なさうに見えたが、子供の多い事だけは農場一だつた。あすこの嚊は子種を他所から貰つてでもゐるんだらうと農場の若い者などが寄ると戯談を言ひ合つた。女房と言ふのは體のがつしりした酒喰ひの女だつた。大人數なために稼いでも〳〵貧乏してゐるので、だらしのない汚い風はしてゐたが、その顔付きは割合に整つてゐて、不思議に男に逼る婬蕩な色を湛へてゐた。

仁右衛門がこの農場に這入つた翌朝早く、與十の妻は袷一枚にぼろ〳〵の袖無を着て、井戸――と云つても味噌樽を埋めたのに赤銹の浮いた上層水が四分目ほど溜つてる――の所でアネチヨコと云ひ慣はされた舶來の雜草の根に出來る藷を洗つてゐると、そこに一人の男がのそりとやつて來た。六尺近い脊丈けを少し前こゞみにして、榮養の惡い土氣色の顔が眞直に肩の上に乘つてゐた。當惑した野獸のやうで、同時に何處か奸譎い大きな眼が太い眉の下でぎろぎろと光つてゐた。それが仁右衛門だつた。彼れは與十の妻を見ると一寸ほゝゑましい氣分になつて、

「おつかあ、火種べあつたらちよつぴり分けて

吳れづに」

と云つた。與十の妻は犬に出遇つた猫のやうな敵意と落ち付きを以て彼れを見た。而して見つめたまゝで默つてゐた。

仁右衞門は脂のたまつた大きな眼を手の甲で子供らしくこすりながら、

「俺らあすこの小屋さ來たもんだのし。乞食では無えだよ」

と云つてにこ〳〵した。罪のない顏になつた。與十の妻は默つて小屋に引きかへしたが、眞暗な小屋の中に臥亂れた子供を乘りこえ〳〵圍爐裡の所に行つて粗朶を一本提げて出て來た。仁右衞門は受取ると、口をふくらましてそれを吹いた。而して何か一言二言話しあつて小屋の方に歸つて行つた。

この日も昨夜の風は吹き落ちてゐなかつた。空は隅から隅まで底氣味惡く晴れ渡つてゐた。そのために風は地面にばかり吹いてゐるやうに見えた。佐藤の畑は兎に角秋耕をすましてゐたのに、それに隣つた仁右衞門の畑は見渡す限りかまどがへしとみづひきとあかざととびつかとで茫々としてゐた。ひき殘された大豆の莢が風に吹かれて剽輕な音を立ててゐた。あちこちにひよろ〳〵と立つた白樺はおほかた葉をふるひ落してなよ〳〵とした白い幹が風にたわみながら光つてゐた。小屋の前の亞麻をこいだ所だけは、こぼれ種から生えた細い莖が青い色を見せてゐた。後は小屋も畑も霜の爲めに白茶けた鈍い狐色だつた。仁右衞門の淋しい小屋からはそれでもやがて白い炊煙がかすかに漏れはじめた。屋根からともなく圍ひからともなく湯氣のやうに漏れた。

朝食をすますと夫婦は十年も前から住み馴れてゐるやうに、平氣な顏で畑に出かけて行つた。二人は仕事の手配もきめずに働いた。然し、冬を眼の前にひかへて何を先きにすればいゝかを二人ながら本能のやうに知つてゐた。妻は、模樣も分らなくなつた風呂敷を三角に折つて露西亞人のやうに頰かむりをして、赤坊を背中に背負ひこんで、せつせと小枝や根つこを拾つた。仁右衞門は一本の鍬で四町にあまる畑の一隅から掘り起しはじめた。外の小作人は野良仕事に片をつけて、今は雪圍ひをしたり薪を切つたりして小屋のまはりで働いてゐたから、畑の中に立つてゐるのは仁右衞門夫婦だけだつた。少し高い所からは何處までも見渡される廣い平坦な耕作地の上で、二人は巢に歸り損ねた二匹の蟻のやうにきり〳〵と働いた。果敢ない勞力に句點をうつて、鍬の先きが日の加減でぎらつぎらつと光つた。津波のやうな音をたてて風のこもる霜枯れの防風林には烏もゐなかつた。荒れ果てた畑に見切りをつけて鮭の漁場にでも移つて行つてしまつたのだらう。

晝少しまはつた頃仁右衞門の畑に二人の男がやつて來た。一人は昨夜事務所にゐた帳場だつた。今一人は仁右衞門の縁者と云ふ川森爺さんだつた。眼をしよぼ〳〵させた一徹らしい川森は仁右衞門の姿を見ると、怒つたらしい顏付をしてづか〳〵とその傍によつて行つた。

「汝や辭儀一つ知らねえ奴の、何條云うて俺らがには來くさらぬ。帳場さんのう知らしてくさずば、いつまでも知んやうも無えだつた。先づもつて小屋さ行くべし」

三人は小屋に這入つた。入口の右手に寢藁を敷いた馬の居所と、皮板を二三枚ならべた穀物置場があつた。左の方には入口の掘立柱から奧の掘立柱にかけて一本の丸太を土の上にわたして土間に麥藁を敷きならしたその上に、處處蓆が擴げてあつた。その眞中に切られた圍爐裡にはそれでも眞黑に煤けた鐵瓶がかゝつてゐて、南瓜のこびりついた缺椀が二つ三つころがつてゐた。川森は恥ぢ入る如く、

「やばつちい所で」

と云ひながら帳場を爐の横座に請じた。

そこに妻もおづ〳〵と這入つて來て、恐る恐る頭を下げた。それを見ると仁右衛門は土間に向けてかつと唾を吐いた。馬はびくんとして耳をたてたが、やがて首をのばしてその香をかいだ。

帳場は妻のさし出す白湯の茶碗を受けはしたがそのまゝ飲まずに蓆の上に置いた。而してむづかしい言葉で昨夜の契約書の内容を云ひ聞かし初めた。小作料は三年毎に書換への一反歩二圓二十錢である事、滯納には年二割五分の利子を附する事、村税は小作に割り宛てる事、仁右衛門の小屋は前の小作から十五圓で買つてあるのだから來年中に償還すべき事、作跡は馬耕して置くべき事、亜麻は貸附地積の五分の一以上作つてはならぬ事、博奕をしてはならぬ事、隣保相助けねばならぬ事、豐作にも小作料は割增しをせぬ代りどんな凶作でも割引は禁ずる事、場主に直訴がましい事をしてはならぬ事、掠奪農業をしてはならぬ事、それから云々、それから云々。

仁右衛門は云はれる事がよく飲み込めはしなかつたが、腹の中では糞を喰らへと思ひながら、今まで働いてゐた畑を氣にして入口から眺めてゐた。

「お前は馬を持つてる癖に何んだつて馬耕をしねえだ。幾日もなく雪になるだに」

帳場は抽象論から實際論に切り込んで行つた。

「馬はあるが、プラオが無えだ」

仁右衛門は鼻の先きであしらつた。

「借りればいゝでねえか」

「錢子が無えかんな」

會話はぷつんと途切れてしまつた。帳場は二度の會見でこの野蠻人をどう取扱はねばならぬかを飲み込んだと思つた。面と向つて埒のあく奴ではない。うつかり女房にでも愛想を見せれば大事になる。

「まあ辛抱してやるがいゝ。こゝの親方は函館の金持で物の解つた人だかんな」

さう云つて小屋を出て行つた。仁右衛門も戸外に出て帳場の元氣さうな後姿を見送つた。

川森は財布から五十錢銀貨を出してそれを妻の手に渡した。何しろ帳場につけとゞけをして置かないと萬事に損が行くから今夜にも酒を買つて挨拶に行くがいゝし、プラオなら自分の所のものを貸してやると云つてゐた。仁右衛門は川森の言葉を聞きながら帳場の姿を見守つてゐたが、やがてそれが佐藤の小屋に消えると、突然馬鹿らしい程深い嫉妬が頭を襲つて來た。彼れはかつと喉をからして痰を地べたにいやと云ふ程はきつけた。

夫婦きりになると二人は又別々になつてせつせと働き出した。日が傾きはじめると寒さは一入に募つて來た。汗になつた所々は氷るやうに冷たかつた。仁右衛門は然し元氣だつた。彼れの眞闇な頭の中の一段高い所とも覺しいあたりに五十錢銀貨がまんまるく光つて何うしても離れなかつた。彼れは鍬を動かしながら眉をしがめてそれを拂ひ落さうと試みた。然しいくら試みても光つた銀貨が落ちないのを知ると白痴のやうににつこりと獨笑ひを漏らしてゐた。

昆布岳の一角には夕方になると又一叢の雲が湧いて、それを目がけて日が沈んで行つた。

仁右衛門は自分の耕した畑の廣さを一わたり滿足さうに見やつて小屋に歸つた。手ばしこく鍬を洗ひ、馬糧を作つた。而して鉢卷の下ににじんだ汗を袖口で拭つて、炊事にかゝつた妻に先刻の五十錢銀貨を求めた。妻はそれをわたすまでには二三度横面をなぐられねばならなか

つた。仁右衞門はやがてぶらりと小屋を出た。妻は獨りで淋しく夕飯を食つた。仁右衞門は一片の銀貨を腹がけの丼に入れて見たり、出して見たり、親指で空に彈き上げたりしながら市街地の方に出懸けて行つた。

九時――九時と云へば農場では夜更けだ――を過ぎてから仁右衞門はいゝ酒機嫌で突然佐藤の戸口に現はれた。佐藤の妻も晩酌に醉ひしれてゐた。與十と鼎座になつて三人は圍爐裡をかこんで又飲みながら打ち解けた馬鹿話をした。仁右衞門が自分の小屋に着いた時には十一時を過ぎてゐた。妻は燃えかすれる圍爐裡火に背を向けて、綿のはみ出た蒲團を柏に着てぐつすり寢込んで居た。仁右衞門は悪戯者らしくよろけながら近寄つて、わつと云つて乘りかゝるやうに妻を抱きすくめた。驚いて眼を覺ました妻は然し笑ひもしなかつた。騷ぎに赤坊が眼をさました。妻が抱き上げようとすると、仁右衞門は遮りとめて妻を横抱きに抱きすくめてしまつた。

「そうれまんだ肝べ燒けるか。かう可愛がられても肝べ燒けるか。可愛い獸物ぞい汝は。見づに。今にな俺ら汝に絹の衣裳べ着せてこすぞ。帳場の和郞（彼れは所きらはず唾をはいた）が寢言べこく暇に、俺ら親方と膝つきあはして話して見せるかんな。白痴奴。俺らが事誰れ知るもんで。汝や可愛いぞ。心から可愛いぞ。宜し。宜し。汝や是れ嫌ひでなかんべさ」

と云ひながら懷から折木に包んだ大福を取り出して、その一つをぐちや〳〵に押しつぶして息氣のつまる程妻の口にあてがつてゐた。

三

から風の幾日も吹きぬいた擧句に雲が青空をかき亂しはじめた。霙と日の光とが追ひつ追はれつして、やがて何處からともなく雪が降るやうになつた。仁右衞門の畑はさうなるまでに一部分しか耡き起されなかつたけれども、それでも秋播小麥を播きつけるだけの地積は出來た。妻の勤勞のお蔭で一冬分の燃料にも差支ない準備は出來た。唯ゞ困るのは食料だつた。馬の背に積んで來ただけでは幾日分の足しにもならなかつた。仁右衞門はある日馬を市街地に引いて行つて賣り飛ばした。而して麥と粟と大豆とを可なり高い相場で買つて歸らねばならなかつた。馬がないので馬車追ひにもなれず、彼れは居食ひをして雪が少し硬くなるまでぼんやりと過ごしてゐた。

根雪になると彼れは妻子を殘して木樵に出かけた。マッカリヌプリの麓の拂下官林に入り込んで彼れは骨身を惜しまず働いた。雪が解けかゝると彼れは岩内に出て鰊場稼ぎをした。而して山の雪が解けてしまふ頃に、彼れは雪燒けと潮燒けで眞黑になつて歸つて來た。彼れの懷は十分重かつた。

仁右衞門は農場に歸るとすぐ逞しい一頭の馬と、プラオと、ハーローと、必要な種子を買ひ調へた。

彼れは毎日々々小屋の前に仁王立になつて、五箇月間積り重なつた雪の解けた爲めに膿み放題に膿んだ畑から、惠み深い日の光に照らされて水蒸氣の濛々と立ち上る樣を待ち遠しげに眺めやつた。マッカリヌプリは毎日紫色に暖かく霞んだ。林の中の雪の叢消えの間には福壽草の莖が先づ綠をつけた。つぐみとしじふからとが枯枝をわたつてしめやかなさゝ啼きを傳へはじめた。腐るべきものは木の葉と云はず小屋と云はず存分に腐つてゐた。

仁右衞門は眼路の限りに見える小作小屋の何軒かを眺めやつて糞でも喰へと思つた。未來の夢がはつきりと頭に浮んだ。三年經つた後には彼れは農場一の大小作だつた。五年の後に

は小さいながら一箇の獨立した農民だつた。十年目には可なり廣い農場を讓り受けてゐた。その時彼れは三十七だつた。帽子を被つて二重マントを着た、護謨長靴ばきの彼れの姿が、自分ながら小恥かしいやうに想像された。

とう／＼播種時が來た。山火事で焼けた熊笹の葉が眞黑にこげて奇蹟の護符のやうに何處からともなく降つて來る播種時が來た。畑の上は急に活氣立つた。市街地にも種物商や肥料商が入込んで、たつた一軒の曖昧屋からは夜毎に三味線の遠音が響くやうになつた。

仁右衞門は逞しい馬に、磨ぎすましたプラオをつけて、畑におりたつた。耡き起される土壤は適度の濕氣をもつて、裏返るにつれてむせるやうな土の香を送つた。それが仁右衞門の血にぐん／＼と力を送つてよこした。

凡てが順當に行つた。播いた種は伸びをするやうにずん／＼生ひ育つた。仁右衞門はあたり近所の小作人に對して二言目には喧嘩面を見せたが、六尺ゆたかの彼れに楯つくものは一人もなかつた。佐藤なんぞは彼れの姿を見るとこそこそと姿を隱した。「それ『まだか』が來おつたぞ」と云つて人々は彼れを恐れ憚つた。もう顏がありさうなものだと見上げても、まだ顏はその上にあると云ふので、人々は彼れを「まだか」と諢名してゐたのだ。

時々佐藤の妻と彼れとの關係が、人々の噂に上るやうになつた。

一日働き暮すとさすが勞働に慣れ切つた農民達も、眼の廻るやうなこの刧節の忙がしさに疲れ果てて、夕飯もそこ／＼に寢込んでしまつたが、仁右衞門ばかりは日が入つても手が痒くてしやうがなかつた。彼れは星の光をたよりに野獸のやうに畑の中で働き廻つた。夕飯は圍爐裡の火の光でそこ／＼にしたゝめた。而してはぶらりと小屋を出た。而して農場の鎭守の社の傍の小作人集會所で女と會つた。

鎭守は小高い密樹林の中にあつた。ある晩仁右衞門はそこで女を待ち合はしてゐた。風も吹かず雨も降らず、音のない夜だつた。女の來やうは思ひの外早い事も、腹の立つ程おそい事もあつた。仁右衞門はだだつ廣い建物の入口の所で膝をだきながら耳をそばだててゐた。

枝に殘つた枯葉が若芽にせきたてられて、時時かさつと地に落ちた。天鵞絨のやうに滑かな空氣は動かないまゝに彼れをいたはるやうに押し包んだ。荒くれた彼れの神經もそれを感じない譯には行かなかつた。物なつかしいやうななごやかな心が彼れの胸にも湧いて來た。彼れは闇の中で不思議な幻覺に陷りながら淡くほゝゑんだ。

足音が聞こえた。彼れの神經は一時に叢立つた。然し軈て彼れの前に立つたのはたしかに女の形ではなかつた。

「誰れだ汝や」

低かつたけれども闇をすかして眼を据ゑた彼れの聲は怒りに震へてゐた。

「お主こそ誰れだと思うたら廣岡さんぢやな。何んしに今時こないな所にゐるのぞい」

仁右衞門は聲の主が笠井の四國猿奴だと知るとかつとなつた。笠井は農場一の物識りで金持だ。それだけで癇癪の種には十分だ。彼れはいきなり笠井に飛びかゝつて胸倉を引つかんだ。かーつと云つて出した唾を危くその面に吐きつけようとした。

この頃浮浪人が出て毎晩集會所に集まつて焚火なぞをするから用心が惡いと人々が云ふので、神社の世話役をしてゐた笠井は、おどかしつける積りで見廻りに來たのだつた。彼れは固より樫の棒位の身じたくはしてゐたが、相手が「まだか」では口もきけない程縮んでしまつた。

「汝や俺らが媾曳の邪魔べこく氣だな、俺らがする事に汝が手だしはいんねえだ。首ねつこべひんぬかれんな」

い、彼れの言葉はせき上る息氣の間に押しひしいやげられてぐわら〳〵震へてゐた。

「そりや邪推ぢやがなお主—」

と笠井は口早に、そこに來合せた子細と、丁度いゝ機會だから折入つて賴む事がある旨を云ひだした。仁右衛門は卑下して出た笠井にちよつと興味を感じて胸倉から手を離して、閾に腰をすゑた。暗闇の中でも、笠井が眼をきよとんとさせて火傷の方の半面を平手で撫でまはしてゐるのが想像された。而してやがて腰を下ろして、今までの慌てかたにも似ず悠々と煙草入を出してマッチを擦つた。折入つて賴むと云つたのは小作一同の地主に對する苦情に就いてであつた。一反歩二圓二十錢の畑代はこの地方にない高相場であるのに、どんな凶年でも割引きをしないために、小作は一人として借金をしてゐないものはない。金ではたれないと見ると帳場は立毛の中に押收してしまふ。從つて市街地の商人からは眼の飛び出るやうな上前をはねられて食代を買はねばならぬ。だから今度地主が來たら一同で是非とも小作料の値下げを要求するのだ。笠井はその總代になつてゐるのだが一人では心細いから仁右衛門も出て力になつてくれと云ふのであつた。

「白痴なことこくなてえば。二兩二貫が何高値いべ。汝たちが骨節は稼ぐやうには造つてねえのか。親方には半文の借りもした覺えは無えからな。俺らその公事には乘んねえだ。汝先づ親方にべなつて見べし。こゝのがよりも慾にかゝるべえに。……藝も無え事に可愛くも無え面つんだすなてば」

仁右衛門は又笠井のてか〳〵した顏に唾をはきかけたい衝動にさいなまれたが、我慢してそれを板の間にはき捨てた。

「さうまあ一概には云ふもんでないぞい」

「一概に云つたが何條惡いだ。去ね。去ねべし」

「さう云へど廣岡さん……」

「汝や拳固こと喰らひていがか」

女を待ちうけてゐる仁右衛門にとつては、この邪魔者の長居してゐるのがいま〳〵しいので、言葉も仕打ちも段々荒らかになつた。執着の強い笠井も立たなければならなくなつた。その場を取りつくらふ世辭を云つて、怒つた風も見せずに坂を下りて行つた。道の二股になつた所で左に行かうとすると、闇をすかしてゐた仁右衛門は吼えるやうに「右さ行くだ」と嚴命した。笠井はそれにも背かなかつた。左の道を通つて女が通つて來るのだ。

仁右衛門は又獨りになつて闇の中にうづくまつた。彼れは憤りにぶる〳〵震へてゐた。生憎女の來やうがおそかつた。怒つた彼れには我慢が出來切らなかつた。女の小屋に荒れこむ勢で立ち上ると彼れは白晝大道を行くやうな足どりで、藪道をぐん〳〵歩いて行つた。ふと或る疎藪の所で彼れは野獸の敏感さを以て物のけはひを嗅ぎ知つた。彼れははたと立ち停つてその奥をすかして見た。しんとした夜の靜かさの中で惡謔ふやうな婬らな女の潛み笑ひが聞こえた。邪魔の這入つたのを氣取つて女はそこに隱れてゐたのだ。嗅ぎ慣れた女の臭ひが鼻を襲つたと仁右衛門は思つた。

「四つ足めが—」

叫びと共に彼れは疎藪の中に飛びこんだ。とげ〳〵する觸感が、寢る時のほか脱いだ事のない草鞋の底に二足三足感じられたと思ふと、四足目は軟かいむつちりした肉體を踏みつけた。彼れは思はずその足の力をぬかうとしたが、同時に狂暴な衝動に驅られて、滿身の重みをそれに託した。

「痛い」

それが聞きたかつたのだ。彼れの肉體は一度に油をそゝぎかけられて、そゝり立つ血のきほひに眼がくるめいた。彼れはいきなり女に飛びかゝつて、所きらはず毆つたり足蹴にしたりした。女は痛いと云ひつゞけながらも彼れにからまりついた。而して嚙みついた。彼れはとうとう女を抱きすくめて道路に出た。女は彼れの顏に鋭く延びた爪をたてて逃れようとした。二人はいがみ合ふ犬のやうに組み合つて倒れた。倒れながら爭つた。彼れはとう／＼女を取り逃がした。はね起きて追ひにかゝると、一目散に逃げたと思つた女は、反對に抱きついて來た。二人は互に情に堪へかねて又毆つたり引つ搔いたりした。彼れは女のたぶさを摑んで道の上をずる／＼引つ張つて行つた。集會所に來た時は二人とも傷だらけになつてゐた。有頂天になつた女は一塊の火の肉となつて、ぶる／＼震へながら床の上にぶつ倒れてゐた。彼れは闇の中に突つ立ちながら燒くやうな興奮の爲めによろめいた。

四

春の天氣の順當であつたのに反して、その年は六月の初めから寒氣と淫雨とが北海道を襲つて來た。旱魃に饑饉なしと云ひ慣はしたのは水田の多い內地の事で、畑ばかりのK村なぞは雨の多い方はまだ仕易いとしたものだが、その年の長雨には溜息を漏らさない農民はなかつた。

森も畑も見渡すかぎり眞青になつて、掘立小屋ばかりが色を變へずに自然をよごしてゐた。時雨のやうな寒い雨が閉ざし切つた鈍色の雲から止處なく降りそゝいだ。低味の畦道に敷きならべたスリッパ材はぶか／＼と水の爲めに浮き上つて、その間から眞菰が長く延びて出た。郭公が森の中で淋しく啼いた。小豆を板の上に遠くでころがすやうな雨の音が朝から晩まで聞こえて、それが小休むと濕氣を含んだ風が木でも草でも萎ましさうに寒く吹いた。

ある日農場主が函館から來て集會所で寄り合ふと云ふ知らせが組長から廻つて來た。仁右衞門はそんな事には頓着なく朝から馬力をひいて市街地に出た。運送店の前にはもう二臺の馬力があつて、脚をつまだてるやうにしよんぼりと立つ輓馬の鬣は、幾本かの鞭を下げたやうに雨によれて、その先きから水滴が絕えず落ちてゐた。馬の背からは水蒸氣が立ち昇つた。戶を開けて中に這入ると、馬車追ひを內職にする若い農夫が三人土間に焚火をしてあたつてゐた。馬車追ひをする位の農夫は、農夫の中でも冒險的な氣の荒い手合だつた。彼等は顏にあたる焚火のほてりを手や足を擧げて防ぎながら、長雨につけこんで村に這入つて來た博徒の群れの噂をしてゐた。捲き上げようとして這入り込みながら散々手を燒いて驛亭から追ひ立てられてゐるやうな事も云つた。

「お前も一番乘つて儲かれや」

とその中の一人は仁右衞門をけしかけた。店の中はどんよりと暗く濕つてゐた。仁右衞門は暗い顏をして唾をはき捨てながら、焚火の座に割り込んで默つてゐた。ぴしや／＼と氣疎い草鞋の音を立てて、往來を通る者がたまさかにあるばかりで、この季節の賑ひ立つた樣子は何處にも見られなかつた。帳場の若いものは筆を持つた手を頰杖にして居眠つてゐた。かうして彼等は荷の來るのをぼんやりして二時間あまりも待ち暮した。聞くに堪へないやうな若者共の馬鹿話も自然と陰氣な氣分に抑へつけられて、動ともすると、沈默と欠伸が擴がつた。

「一はたりはたらづに」

突然仁右衛門がさう云つて一座を見廻した。彼れはその珍らしい無邪氣な微笑をほゝゑんでゐた。一同は彼れのにこやかな顏を見ると、吸ひ寄せられるやうになつて、云ふ事をきかないではゐられなかつた。蓆が持ち出された。四人は車座になつた。一人は氣輕く若い者の机の上から湯呑茶碗を持つて來た。もう一人の男の腹がけの中からは骰子が二つ取り出された。

店の若い者が眼をさまして見ると、彼等は興奮した聲を押しつぶしながら、無氣になつて勝負に耽つてゐた。若い者は一寸誘惑を感じたが氣を取り直して、

「困るでねえか、さうした事店頭でおつ廣げて」

と云ふと、

「困つたら積荷こと探して來う」

と仁右衛門は取り合はなかつた。

晝になつても荷の回送はなかつた。仁右衛門は自分から云ひ出しながら、面白くない勝負ばかりしてゐた。何方に變るか自分でも分らないやうな氣分が驀地に惡い方に傾いて來た。氣を腐らせれば腐らす程彼れのやまは外づれてしまつた。彼れはくさ〱してふいと座を立つた。相手が何とか云ふのを振り向きもせずに店を出た。雨は小休なく降り續けてゐた。晝餉の煙が重く地面の上を這つてゐた。

彼れはむしやくしやしながら馬力を引つぱつて小屋の方に歸つて行つた。だらしなく降りつづける雨に草木も土もふやけ切つて、空までがぽとりと地面の上に落ちて來さうにだらけてゐた。面白くない勝負をして焦立つた仁右衛門の腹の中とは全く裏合せな煮え切らない景色だつた。彼れは何か思ひ切つた事をしてでも胸をすかせたく思つた。丁度自分の畑の所まで來ると佐藤の年嵩の子供が三人學校の歸途と見えて、荷物を斜に背中に背負つて、頭からぐつしより濡れながら、近路する爲めに畑の中を步いてゐた。それを見ると仁右衛門は「待て」と云つて呼びとめた。振り向いた子供達は「まだか」の立つてゐるのを見ると、三人とも恐ろしさに顏の色を變へてしまつた。毆りつけられる時するやうに腕をまげて目八分の所にやつて、逃げ出す事もし得ないでゐた。

「童子連は何條云うて他人の畑さ踏み込んだ。百姓の餓鬼だに畑のう大事がる道知んねえだな。來う」

仁王立ちになつて睨みすゑながら彼れは怒鳴つた。子供達はもうおびえるやうに泣き出しながら恐づ〱仁右衛門の所に步いて來た。待ちかまへた仁右衛門の鐵拳はいきなり十二程になる長女の痩せた頰をゆがむ程たゝきつけた。三人の子供は一度に痛みを感じたやうに聲を揚げてわめき出した。仁右衛門は長幼の容赦なく手あたり次第に毆りつけた。

小屋に歸ると妻は蓆の上にぺつたんこに坐つて馬にやる藁をざくり〱切つてゐた。赤坊はいゝちこの中で章魚のやうな頭を襤褸から出して、軒から滴り落ちる雨垂れを見やつてゐた。彼れの氣分にふさはない重苦しさが漲つて、運送店の店先に較べては何から何まで便所のやうに穢かつた。彼れは默つたまゝで唾をはき捨てながら馬の始末をするとすぐ又外に出た。雨は肩まで沁み徹つてぞく〱寒かつた。彼れの癇癪は更につのつた。彼れはすた〱と佐藤の小屋に出かけた。が、ふと集會所に行つてる事に氣がつくとその足ですぐ神社をさして急いだ。

集會所には朝の中から五十人近い小作者が集まつて場主の來るのを待つてゐたが、晝過ぎまで待ちぼけを喰はされてしまつた。場主はがて帳場を伴につれて厚い外套を着てやつて來た。上座に坐ると勿體らしく神社の方を向いて柏手を打つて默拜をしてから、居合はせてる者等には半分も解らないやうな事をしたり顏に

云ひ聞かした。小作者等はけげんな顏をしながら、「場主の言葉が途切れると尤もらしくうなづいた。やがて小作者等の要求が笠井によつて提出せらるべき順番が來た。彼れは先づ親方は親で小作は子だと說き出して、小作者側の要求を可なり強く云ひ張つた後で、それは然し無理な御願ひだとか、物の解らない自分達が考へる事だからだとか、そんな事は先づ後廻しでもいい事だとか、自分の云ひ出した事を自分で打ち壞すやうな添言葉を附け加へるのを忘れなかつた。仁右衞門はちやうどそこに行き合せた。彼れは入口の羽目板に身をよせてぢつと聞いてゐた。

「からまあ色々とお願ひしたぢやからは、お互も心をしめて帳場さんにも迷惑をかけぬだけにはせずばなあ。(こゝで彼れは一同を見渡した樣子だつた。)『萬國心をあはせてな』と天理敎のお歌樣にもある通り、定まつた事は定まつたやうにせんとならんぢやが、多い中ぢやに無理もないやうなものの、亞麻などを親方、ぎやういゝさんにつけたものもあつて、まこと濟まん次第ぢやが、無理が通れば道理もひつこみよるで、なりませんぢやもし」

仁右衞門は場規もかまはず畑の半分を亞麻にしてゐた。で、その言葉は彼れに對するあてこすりのやうに聞こえた。

「今日なども顏を出しよらん橫道者もありますぢやで……」

仁右衞門は怒りの爲めに耳がかあんとなつた。笠井はまだ何か滑らかにしやべつてゐた。

場主がまだ何か訓示めいた事をいふらしかつたが、やがてざわ〳〵と人の立つ氣配がした。仁右衞門は息氣を殺して、出て來る人々を窺つた。場主が帳場と一緒に、後から笠井に傘をさしかけさせて出て行つた。勞働で若年の肉を鍛へたらしい嚴乘な場主の姿は、何處か人を憚からした。仁右衞門は笠井を睨みながら見送つた。稍ゝ暫らくすると場内から急にくつろいだ談笑の聲が起つた。而して二三人づつ何か語り合ひながら小作者等は小屋をさして歸つて行つた。やゝ遲れて伴れもなく出て來たのは佐藤だつた。小さな後姿は若々しくつて青年のやうだつた。仁右衞門は木の葉のやうに震へながらづか〳〵と近づくと、突然後ろからその右の耳のあたりを毆りつけた。不意を喰つて倒れんばかりによろけた佐藤は、後も見ずに耳を押へながら、猛獸の遠吠を聞いた兎のやうに、前に行く二三人の方に一目散にかけ出してその人々を楯に取つた。

「汝や乞食か盜賊か畜生か。よくも汝が餓鬼共さ敎唆けて他人の畑こと踏み荒したな。毆ちのめしてくれづに。來」

仁右衞門は火の玉のやうになつて飛びかゝつた。當の二人と二三人の留男とは毬になつて赤土の泥の中をころげ廻つた。折り重なつた人人がやうやく二人を引き分けた時は、佐藤は何處かしたゝか傷を負つて死んだやうに青くなつてゐた。仲裁したものはかゝり合ひから巳むなく、仁右衞門に附添つて話をつけるために佐藤の小屋まで廻り道をした。小屋の中では佐藤の長女が隅の方に丸まつて痛い〳〵と云ひながらまだ泣きつゞけてゐた。爐を間に置いて佐藤の妻と廣岡の妻とはさし向ひに罵り合つてゐた。佐藤の妻は安坐をかいて長い火箸を右手に握つてゐた。廣岡の妻も背に赤坊を背負つて、早口に云ひ募つてゐた。顏を血だらけにして泥まみれになつた佐藤の後から仁右衞門が這入つて來るのを見ると、佐藤の妻は譯を聞く事もせずにがた〳〵震へる齒を嚙み合せて猿のやうに脣の間からむき出しながら仁右衞門の前に立ちはだかつて、飛び出しさうな怒りの眼で睨みつけた。物が云へなかつた。いきなり火箸を振

り上げた。仁右衞門は多愛もなくそれを奪ひ取つた。噛みつかうとするのを押しのけた。而して仲裁者が一杯飮まうと勸めるのも聽かずに妻を促して自分の小屋に歸つて行つた。佐藤の妻は素跣のまゝ仁右衞門の背に罵詈を浴せながら怒精　やうについて來た。而して小屋の前に立ちはだかつて、囀るやうに半ば夢中で仁右衞門夫婦を罵りつゞけた。

仁右衞門は押し默つたまゝ圍爐裡の横座に坐つて佐藤の妻の狂態を見つめてゐた。それは仁右衞門には意外の結果だつた。彼れの氣分は妙にかたづかないものだつた。彼れは佐藤の妻の自分から突然離れたのを怒つたりをかしく思つたり惜しんだりしてゐた。仁右衞門が取り合はないので彼女はさすがに小屋の中には這入らなかつた。而して皺枯れた聲でをめき叫びながら雨の中を歸つて行つてしまつた。仁右衞門の口の邊にはいかにも人間らしい皮肉な歪みが現はれた。彼れは結局自分の智慧の足りなさを感じた。而してまゝよと思つてゐた。

凡ての興味が全く去つたのを彼れは覺えた。彼れは少し疲れてゐた。始めて本當の事情を知つた妻から嫉妬がましい執拗い言葉でも聞いたら少しの道樂氣もなく、どれ程な殘虐な事でもやり兼ねないのを知ると、彼れは少し自分の心を恐れねばならなかつた。彼れは妻に物を云ふ機會を與へない爲めに次から次へと命令を連發した。而して晩い晝飯をしたゝか喰つた。がらつと箸を措くと泥だらけなびしよぬれな着物のまゝで又ぶらりと小屋を出た。この村に這入りこんだ博徒等の張つてゐた賭場をさして彼れの足はしやう事なしに向いて行つた。

五

よく是れほどあるもんだと思はせた長雨も一箇月程降り續いて漸く晴れた。一足飛びに夏が來た。何時の間に花が咲いて散つたのか、天氣になつて見ると、林の間に在る山櫻も、辛夷も、青々とした廣葉になつてゐた。蒸風呂のやうな氣持の惡い暑さが襲つて來て、畑の中の雜草は作物を乘りこえて葎のやうに延びた。雨の爲め傷められたに相違ないと、長雨の只一つの功德に農夫等の云ひ合つた昆蟲も、すさまじい勢で發生した。甘藍のまはりにはえぞしろてふが夥しく飛び廻つた。大豆にはくちかきむしの成蟲がうざ〳〵する程集まつた。麥類には黑穗の、馬鈴薯にはべと病の徵候が見えた。虻と蚋とは自然の斥候のやうにもや〳〵と飛び廻つた。濡れたまゝに積み重ねておいた汚れ物をかけわたした小屋の中からは、あらん限りの農夫の家族が武具を持つて畑に出た。自然に刃向ふ必死な爭鬪の幕は開かれた。

鼻歌も歌はずに、汗を肥料のやうに畑の土に滴らしながら、農夫は腰を二つに折つて地面に噛り附いた。耕馬は首を下げられるだけ下げて、乾き切らない土の中に脚を深く踏みこみながら、絶えず尻尾で虻を追つた。しゆつと音をたてて襲つて來る毛の束にしたゝか打たれた虻は、血を吸つて丸くなつたまゝ、馬の腹からぽとりと地に落ちた。仰向けになつて鋼線のやうな脚を伸ばしたり縮めたりして藻掻く樣は命の薄れるもののやうに見えた。暫らくすると然しそれはまた器用に翅を使つて起きかへつた。而してよろ〳〵と草の葉裏に這ひよつた。而して十四五分の後にはまた翅をはつてうなりを立てながら、眼を射るやうな日の光の中に勇ましく飛び立つて行つた。

夏物が皆無作と云ふ程の不出來であるのに、亞麻だけは平年作位にはまはつた。青天鵞絨の海となり、瑠璃色の絨氈となり、荒くれた自然の中の姫君なる亞麻の畑はやがて小紋のやうな果をその纖細な莖の先きに結んで美しい狐色

に變つた。
「こんなに亞麻をつけては仕様が無えでねえか。畑が枯れて跡地には何んだつて出來はしねえぞ。困るな」
ある時帳場が見廻つて來て、仁右衞門にから云つた。
「俺らがも困るだ。汝れが困ると俺らが困るとは困りやうが土臺ちがわい。口が干上るんだあぞ俺らがのは」
仁右衞門は突慳貪にから云ひ放つた。彼れの前にあるおきては先づ食ふ事だつた。
彼れは或る日亞麻の束を見上げるやうに馬力に積み上げて倶知安の製線所に出かけた。製線所では割合に斤目をよく買つてくれたばかりでなく、他の地方が不作な爲めに結實がなかつたので、亞麻稈を非常な高値で引き取る約束をしてくれた。仁右衞門の懷の中には手取り百圓の金が暖かくしまはれた。彼れは畑にまだしこたま殘つてゐる亞麻の事を考へた。彼れは居酒屋に這入つた。そこにはK村では見られない樣な綺麗な顏をした女もゐた。仁右衞門の酒は必ずしも彼れをきまつた型には醉はせなかつた。或る時は彼れを怒りつぽく、或る時は悒鬱に、或る時は亂暴に、或る時は機嫌よくした。
その日の酒は勿論彼れを上機嫌にした。一緒に飲んでゐるものが利害關係のないのも彼れには心置きがなかつた。彼れは醉ふまゝに大きな聲で戲談口をきいた。さう云ふ時の彼れは大きな愚かな子供だつた。居合せたものは釣り込まれて彼れの周圍に集まつた。女まで引つ張られるまゝに彼れの膝に倚りかゝつて、彼れの頰ずりを無邪氣に受けた。
「汝れがの頰に俺らが髭こ生へたらをかしかんべなし」
彼れはそんな事を云つた。重いその口からこれだけの戲談が出ると女なぞは腹をかゝへて笑つた。陽がかげる頃に彼れは居酒屋を出て反物屋によつて派手なモスリンの端切れを買つた。又ビールの小瓶を三本と油糟とを馬車に積んだ。倶知安からK村に通ふ國道はマッカリヌプリの山裾の椴松帶の間を縫つてゐた。彼れは馬力の上に安坐をかいて瓶から口うつしにビールを煽りながら濁歌をこだまにひゞかせて行つた。幾抱へもある椴松は羊齒の中から眞直に天を突いて、僅かに覗かれる空には晝月が少し光つて見え隱れに眺められた。彼れは遂に馬力の上に醉ひ倒れた。物慣れた馬は凸凹の山道を上手に拾ひながら歩いて行つた。馬車はかしいだり跳ねたりした。その中で彼れは快い夢に入つたり、面白い現に出たりした。
仁右衞門はふと熟睡から破られて眼をさました。その眼にはすぐ川森爺さんの眞面目くさつた一徹な顏が寫つた。仁右衞門の輕い氣分にはその顏が如何にもをかしかつたので、彼れは起き上りながら聲を立てて笑はうとした。そして自分が馬力の上にゐて自分の小屋の前に來てゐる事に氣がついた。小屋の前には帳場も佐藤も組長の某も居た。それはこの小屋の前では見慣れない光景だつた。川森は仁右衞門が眼を覺ましたのを見ると、
「早う内さ行くべし。汝れが嬰子はおつ死ぬべえぞ。赤痢さ取ツつかれただ」
と云つた。多愛のない夢から一足飛びにこの恐ろしい現實に呼びさまされた彼れの心は、最初に彼れの顏を高笑ひにくづさうとしたが、すぐ次ぎの瞬間に、彼れの顏の筋肉を一時にこきしめてしまつた。彼れは顏ぢゆうの血が一時に頭の中に飛び退いたやうに思つた。仁右衞門は醉ひが一時に醒めてしまつて馬力から飛び下りた。小屋の中にはまだ二三人人がゐた。妻はと見ると蟲の息に弱つた赤坊の側に蹲つておいおい泣いてゐた。笠井が例の古鞄を膝に引きつ

けてその中から護符のやうなものを取り出してゐた。

「お、廣岡さんえゝ所に歸つたぞな」

笠井が逸早く仁右衛門を見附けてかう云ふと、仁右衛門の妻は恐れるやうに怨むやうに訴へるやうに夫を見返つて、默つたまゝ泣き出した。仁右衛門はすぐ赤坊の所に行つて見た。章魚のやうな大きな頭だけが彼れの赤坊らしい唯ゝ一つのものだつた。たつた半日の中にかうも變るかと疑はれるまでにその小さな物は衰へ細つてゐた。仁右衛門はそれを見ると腹が立つ程寂しく心許なくなつた。今まで經驗した事のないなつかしさ可愛さが燒くやうに心に逼つて來た。彼れは持つた事のないものを強ひて押し附けられたやうに當惑してしまつた。その押し附けられたものは恐ろしく重い冷たいものだつた。何よりも先づ彼れは腹の力の拔けて行くやうな心持をいま〳〵しく思つたが、どうしやうもなかつた。

勿體ぶつて笠井が護符を押し頂き、それで赤坊の腹部を呪文を唱へながら撫で廻すのが唯一の力に思はれた。傍にゐる人達も奇蹟の現はれるのを待つやうに笠井のする事を見守つてゐた。赤坊は力のない哀れな聲で泣きつゞけた。

仁右衛門は腸をむしられるやうだつた。それでも泣いてゐる間はまだよかつた。赤坊が泣きやんで大きな眼を引ツつらしたまゝ瞬きもしなくなると、仁右衛門はおぞましくも拜むやうな眼で笠井を見守つた。小屋の中は人いきれで蒸すやうに暑かつた。笠井の禿げ上つた額からは汗の玉がたら〳〵と流れ出た。それが仁右衛門には尊くさへ見えた。小半時赤坊の腹を撫で廻すと、笠井は又古鞄の中から紙包を出して押しいたゞいた。而して口に手拭を喰はへてそれを開くと、一寸四方程な何か字の書いてある紙片を摘まみ出して指の先きで丸めた。水を持つて來さしてそれをその中へ浸した。仁右衛門はそれを赤坊に飲ませろとさし出されたが、飲ませるだけの勇氣もなかつた。妻は甲斐甲斐しく良人に代つた。渇き切つて居た赤坊は喜んでそれを飲んだ。仁右衛門は難有いと思つてゐた。

「わしも子は亡くした覺えがあるで、お主の心持はようわかる。この子を助けようと思つたら何んせ一心に天理王様に賴まつしやれ。な。合點か。人間業では及ばぬ事ぢやでな」

笠井はさう云つてしたり顏をした。仁右衛門の妻は泣きながら手を合せた。

赤坊は續けさまに血を下した。而して小屋の中が眞暗になつた日のくれ〳〵に、何物にか助けを求める成人のやうな表情を眼に現はして、あてどもなくそこらを見廻してゐたが、次第次第に息が絶えてしまつた。

赤坊が死んでから村醫は巡査に伴れられて漸くやつて來た。香奠代りの紙包を持つて帳場も來た。提灯と云ふ見慣れないものが小屋の中を出たり這入つたりした。仁右衛門夫婦の嗅ぎつけない石炭酸の香は二人を小屋から追ひ出してしまつた。二人は川森に附添はれて西に廻つた月の光の下にしよんぼり立つた。

世話に來た人達は一人去り二人去り、やがて川森も笠井も去つてしまつた。

水を打つたやうな夜の涼しさと靜かさとの中にかすかな蟲の音がしてゐた。仁右衛門は何と云ふ事なしに妻が癪にさはつてたまらなかつた。妻は又何と云ふ事なしに良人が憎まれてたらなかつた。妻は馬力の傍にうづくまり、仁右衛門はあてもなく唾を吐き散らしながら小屋の前を行つたり歸つたりした。他所の農家でこの凶事があつたら少くとも隣近所から二三人の者が寄り合つて、買つて出した酒でも飲みちらしながら、何かと話でもして夜を更かすのだ

らう。仁右衛門の所では川森さへ居殘つてゐないのだ。妻はそれを心から寂しく思つてしくしくと泣いてゐた。物の三時間も二人はさうしたまゝで何もせずにぼんやり小屋の前で月の光にあはれな姿をさらしてゐた。

やがて仁右衛門は何を思ひ出したのかのそそと小屋の中に這入つて行つた。妻は眼に角を立てて首だけ後ろに廻して洞穴のやうな小屋の入口を見返つた。暫らくすると仁右衛門は赤坊を背負つて、一挺の鍬を右手に提げて小屋から出て來た。

「ついて來う」

さう云つて彼れはすた〳〵と國道の方に出て行つた。簡單な啼聲で動物と動物とが互を理解し合ふやうに、妻は仁右衛門のしようとする事が呑み込めたらしく、のつそりと立ち上つてその後に隨つた。而してめそ〳〵と泣き續けてゐた。

夫婦が行き着いたのは、國道を十町も倶知安の方に來た左手の岡の上に在る村の共同墓地だつた。そこの上からは松川農場を一面に見渡して、ルベシベ、ニセコアンの連山も川向ひの昆布岳も手に取るやうだつた。夏の夜の透明な空氣は青み渡つて、月の光が燐のやうに凡ての光るものの上に宿つてゐた。蚊の群れがわんわんうなつて二人に襲ひかゝつた。

仁右衛門は死體を背負つたまゝ、小さな墓標や石塔の立ち列なつた間の空地に穴を掘りだした。鍬の土に喰ひ込む音だけが景色に少しも調和しない鈍い音を立てた。妻はしやがんだまゝで時々頬に來る蚊をたゝき殺しながら泣いてゐた。三尺程の穴を掘り終ると仁右衛門は鍬の手を休めて額の汗を手の甲で押し拭つた。夏の夜は靜かだつた。その時突然恐ろしい考へが彼れの吐胸を突いて浮んだ。彼れはその考へに自分ながら驚いたやうに惘れて眼を見張つてゐたが、やがて大聲を立てて頑童の如く泣きをめき始めた。その聲は醜く物凄かつた。妻はきよつとんとして、額中を涙にしながら恐ろしげに良人を見守つた。

「笠井の四國猿めが、嬰子事殺しただ。殺しただあ」

彼れは醜い泣き聲の中からさう叫んだ。

翌日彼れは又亞麻の束を馬力に積まうとした。そこには派手なモスリンの端切れが、亂雲の中に現はれた虹のやうにしつとり朝露にしめつたまゝ穢い馬力の上に仕舞ひ忘られてゐた。

六

狂暴な仁右衛門は赤坊を亡くしてから手がつけられない程狂暴になつた。その狂暴を募らせるやうに烈しい盛夏が來た。春先きの長雨を償ふやうに雨は一滴も降らなかつた。秋に收穫すべき作物は裏葉が片端から黄色に變つた。自然に抵抗し切れない失望の聲が、默りこくつた農夫の姿から叫ばれた。

一刻の暇もない農繁の眞最中に馬市が市街地に立つた。普段ならば人々は見向きもしないのだが、畑作をなげてしまつた農夫等は、捨鉢な氣分になつて、馬の賣買にでも多少の儲けを見ようとしたから、前景氣は思ひの外強かつた。當日には近村からさへ見物が來た程賑はつた。丁度農場事務所裏の空地に假小屋が建てられて、爪まで磨き上げられた耕馬が三十頭近く集まつた。その中で仁右衛門の出した馬は殊に人の眼を牽いた。

その翌日には競馬があつた。場主までわざわざ函館からやつて來た。屋臺店や見世物小屋がかゝつて、祭禮に通有な香ひのむし〳〵する間を着飾つた娘達が、刺戟の强い色を振り播いて歩いた。

競馬場の埒の周圍は人垣で埋まつた。三四軒の農場の主人達は決勝點の所に一段高く棧敷をしつらへてそこから見物した。松川場主の側には子供に附添つて笠井の娘が坐つてゐた。その娘は二三年前から函館に出て松川の家に奉公してゐたのだ。父に似て細面の彼女は函館の生活に磨きをかけられて、この邊では際立つて垢拔けがしてゐた。競馬に加はる若い者はその妙齢な娘の前で手柄を見せようと爭つた。他人の妾に目星をつけて何になると皮肉を云ふものもあつた。

何しろ競馬は非常な景氣だつた。勝負がつく度に揚る喝采の聲は乾いた空氣を傳はつて、人人を家の内にぢつとさしては置かなかつた。

仁右衛門はその頃博奕に耽つてゐた。始めの中はわざと負けて見せる博徒の手段に甘々と乘せられて、勢ひ込んだのが失敗の基で、深入りする程損をしたが、損をするほど深入りしないではゐられなかつた。亞麻の收利は疾うの昔にけし飛んでゐた。それでも馬は金輪際賣る氣がなかつた。剩す所は燕麥があるだけだつたが、是れは播種時から事務所と契約して、事務所から一手に陸軍糧秣廠に納める事になつてゐた。その方が競爭して商人に賣るのよりも割がよかつたのだ。商人共はこのボイコットを何うして見過ごしてゐよう。彼等は農家の戸別訪問をして糧秣廠よりも遙かに高價に引受けると勸誘した。糧秣廠から買入代金が下つてもそれは一應事務所にまとまつて下るのだ。その中から小作料だけを差引いて小作人に渡すのだから、農場としては小作料を回收する上に是れほど便利な事はない。小作料を拂ふまいと決心してゐる仁右衛門は、馬鹿な話だと思つた。彼れは腹をきめた。而して競馬の爲めに人の注意がおろそかになつた機會を見すまして、商人と結託して、事務所へ廻すべき燕麥をどんどん商人に渡してしまつた。

仁右衛門はこの取引をすましてから競馬場にやつて來た。彼れは自分の馬で競走に加はる筈になつてゐたからだ。彼れは裸乘りの名人だつた。

自分の番が來ると彼れは鞍も置かずに自分の馬に乘つて出て行つた。人々はその馬を見ると敬意を拂ふやうに互になづき合つて、今年の糶では一番物だと賞め合つた。仁右衛門はさういふ私語を聞くといゝ氣持になつて、いやでも勝つて見せるぞと思つた。六頭の馬がスタートに近づいた。さつと旗が降りた時仁右衛門はわざと出おくれた。彼れは外の馬の後から内埒へ内埒へとよつて、少し手綱を引きしめるやうにして駈けさした。ほてつた彼れの顏から耳にかけて埃を含んだ風が息氣のつまる程ふきかゝるのを彼れは快く思つた。やがて馬場を八分目程廻つた頃を計つて手綱をゆるめると馬は思ひ存分頸を延ばしてずん／＼おくれた馬から拔き出した。彼れが鞭とあふりで馬を責めながら最初から目星をつけてゐた先頭の馬に迫ひせまつた時には決勝點が近かつた。彼れはいらだつてびし／＼と鞭をくれた。始めは自分の馬の鼻が相手の馬の尻とすれ／＼になつてゐたが、やがて一歩々々二頭の距離は縮まつた。狂氣のやうな喚呼が夢中になつた彼れの耳にも明かに響いて來た。もう一息と彼れは思つた。――その時突然棧敷の下で遊んでゐた松川場主の子供がよた／＼と埒の中へ這入つた。それを見た笠井の娘は我れを忘れて駈け込んだ。「危ねえ」――觀衆は一度に固唾を飲んだ。その時先頭にゐた馬は娘の派手な着物に驚いたのか、さつときれて仁右衛門の馬の前に出た。と思ふ暇もなく仁右衛門は空中に飛び上つて、やがて敲きつけられるやうに地面に轉がつてゐた。彼れは氣丈にも轉がりながらすつくと起き上つた。

直ぐ彼れの馬の所に飛んで行つた。馬はまだ起きてゐなかつた。後脚で反動を取つて起きさうにしては、前脚を折つて倒れてしまつた。訓練のない見物人は潮のやうに仁右衞門と馬とのまはりに押し寄せた。

仁右衞門の馬は前脚を二足とも折つてしまつてゐた。仁右衞門は惘然したまゝ、不思議相な顏をして押し寄せた人波を見守つて立つてる外はなかつた。

獸醫の心得もある蹄鐵屋の顏を群集の中に見出してやうやく正氣に返つた仁右衞門は、馬の始末を賴んですご〳〵と競馬場を出た。彼れは自分で何が何だかちつとも分らなかつた。彼れは夢遊病者のやうに人の間を押し分けて歩いて行つた。事務所の角まで來ると何んといふ事なしにいきなり路の小石を二つ三つ摑んで入口の硝子戸にたゝきつけた。三枚程の硝子は微塵にくだけて飛び散つた。彼れはその音を聞いた。それは然し耳を押へて聞くやうに遠くの方で聞こえた。彼れは悠々として又そこを歩み去つた。

彼れが氣がついた時には、何方をどう歩いたのか、昆布岳の下を流れるシリベシ河の河岸の丸石に腰かけてぼんやり河面を眺めてゐた。彼れの眼の前を透明な水が後から〳〵同じやうな渦紋を描いては消し描いては消して流れてゐた。彼れはぢつとその戯れを見詰めながら、遠い過去の記憶でも追ふやうに今日の出來事を頭の中で思ひ浮べてゐた。凡ての事が他人事のやうに順序よく手に取るやうに記憶に甦つた。然し自分が抛り出される所まで來ると記憶の絲はぷつつり切れてしまつた。彼れはその所を幾度も無關心に繰返した。笠井の娘―笠井の娘―笠井の娘がどうしたんだ―彼れは自問自答した。段々眼がかすんで來た。笠井の娘……笠井……笠井だな馬を片輪にしたのは。さう考へても笠井は彼れに全く關係のない人間のやうだつた。其の名は彼れの感情を少しも動かす力にはならなかつた。彼れはさうしたまゝで深い眠りに落ちてしまつた。

彼れは夜中になつてからひよつくり小屋に歸つて來た。入口からぷんと石炭酸の香がした。それを嗅ぐと彼れは始めて正氣に返つて改めて自分の小屋を物珍らしげに眺めた。さうなると彼れは夢からさめるやうにつまらない現實に歸つた。鈍つた意識の反動として細かい事にも鋭く神經が働き出した。石炭酸の香は何よりも先づ死んだ赤坊を彼れに思ひ出さした。若し妻に怪我でもあつたのではなかつたか―彼れは爐の消えて眞闇な小屋の中を手さぐりで妻を尋ねた。眼をさまして起きかへつた妻の氣配がした。

「今頃まで何處さゐただ。馬は村の衆が連れて歸つたに。傷はしい事べおつぴろげてはあ」

妻は眠つてゐなかつたやうなはつきりした聲でかう云つた。彼れは闇に慣れて來た眼で小屋の片隅をすかして見た。馬は前脚に重味がかゝらないやうに、腹に蓆をあてがつて胸の所を梁からつるしてあつた。兩方の膝頭は白い切れで卷いてあつた。その白い色が凡て黑い中にはつきりと仁右衞門の眼に映つた。石炭酸の香はそこから漂つて來るのだつた。彼れは火の氣のない圍爐裡の前に、草鞋ばきで頭を垂れたまま安坐をかいた。馬もこそつとも音をさせずに默つてゐた。蚊のなく聲だけが空氣のさゝやきのやうにかすかに聞こえてゐた。仁右衞門は膝頭で腕を組み合せて、寢ようとはしなかつた。馬と彼れは互に憐れむやうに見えた。

然し翌日になると彼れは又この打擊から跳ね返つてゐた。彼れは前の通りな狂暴な彼れになつてゐた。彼れはプラオを賣つて金に代へた。雜穀屋からは、燕麥が賣れた時事務所から直接

に代價を支拂ふやうにするからと云つて、麥や大豆の前借りをした。然し馬力を賴んでそれを自分の小屋に運ばして置いて、賭場に出かけた。

競馬の日の晩に村では一大事が起つた。その晩おそくまで笠井の娘は松川の所に歸つて來なかつた。こんな晩に若い男女が畑の奧や森の中に姿を隱すのは珍らしい事でもないので初めの中は打ち捨てておいたが、餘りおそくなるので、笠井の小屋を尋ねさすとそこにもゐなかつた。笠井は驚いて飛んで來た。然し廣い山野をどう探しやうもなかつた。夜のあけ〳〵に大搜索が行はれた。娘は河添の窪地の林の中に失神して倒れてゐた。正氣づいてから聞きたゞすと、大きな男が無理やりに娘をそこに連れて行つて殘虐を極めた辱かしめかたをしたのだと判つた。笠井は廣岡の名を云つてしたり顏に小首を傾けた。事務所の硝子を廣岡がこはすのを見たと云ふ者が出て來た。

犯人の搜索は極めて祕密に、同時にこんな田舍にしては嚴重に行はれた。場主の松川は少からざる懸賞までした。然し手がかりは皆目つかなかつた。疑ひは妙に廣岡の方にかゝつて行つた。赤坊を殺したのは笠井だと廣岡の始終云ふのは誰れでも知つてゐた。廣岡の馬を頸かしたのは間接ながら笠井の娘の仕業だつた。蹄鐵屋が馬を廣岡の所に連れて行つたのは夜の十時頃だつたが廣岡は小屋にゐなかつた。その晩廣岡を村で見かけたものは一人もなかつた。賭場にさへゐなかつた。仁右衛門に不利益な色色な事情は色々に數へ上げられたが、具體的な證據は少しも上らないで夏がくれた。

秋の收穫時になると又雨が來た。乾燥が出來ないために、折角實つたものまで腐る始末だつた。小作はわや〳〵と事務所に集まつて小作料割引の歎願をしたが無益だつた。彼等は案の定燕麥賣上代金の中から嚴密に小作料を控除された。來春の種子は愚か、冬の間を支へる食料も滿足に得られない農夫が澤山出來た。

その間にあつて仁右衛門だけは燕麥の事で事務所に破約したばかりでなく、一文の小作料も納めなかつた 綺麗に納めなかつた。始めの間帳場はなだめつすかしつして幾らかでも納めさせようとしたが、如何しても應じないので、財產を差押へると脅威した。仁右衛門は平氣だつた。押へようと云つて何を押へようぞ、小屋の代金もまだ事務所に納めてはなかつた。彼れはそれを知りぬいてゐた。事務所からは最後の手段として多少の損はしても退場さすと迫つて來た。然し彼れは頑として動かなかつた。ペテンにかけられた雜穀屋をはじめ諸商人は貸金の元金は愚か利子さへ出させる事が出來なかつた。

七

「まだか」、この名は村中に恐怖を播いた。彼れの顏を出す所には人々は姿を隱した。川森さへ疾うの昔に仁右衛門の保證を取消して、仁右衛門に退場を迫る人となつてゐた。市街地でも農場内でも彼れに融通をしようと云ふ者は一人もなくなつた。佐藤の夫婦は幾度も事務所に行つて早く廣岡を退場させてくれなければ自分達が退場すると申し出た。駐在巡査すら廣岡の事件に關係する事を體よく避けた。笠井の娘を犯したものは――何等の證據がないにも係はらず――仁右衛門に相違ないときまつてしまつた。凡て村の中で起つたいかゞはしい出來事は一つ殘らず仁右衛門になすりつけられた。

仁右衛門は押し太く腹を据ゑた。彼れは自分の夢をまだ取消さうとはしなかつた。彼れの後悔してゐるものは博奕だけだつた。來年からそれにさへ手を出さなければ、而して今年同樣に働いて今年同樣の手段を取りさへすれば、三四年の間に一かど纏まつた金を作るのは何ん

でもないと思つた。いまに見かへしてくれるから――さう思つて彼れは冬を迎へた。

　然し考へて見ると色々な困難が彼れの前には横はつてゐた。食料は一冬事かゝぬだけはあつても、金は哀れな程より貯へがなかつた。馬は競馬以來廢物になつてゐた。冬の間稼ぎに出れば、その留守に氣の弱い妻が小屋から追ひ立てを喰ふのは知れ切つてゐた。と云つて小屋に居殘れば居食ひをしてゐる外はないのだ。來年の種子さへ工面のしやうのないのは今から知れ切つてゐた。

　焚火にあたつて、きかなくなつた馬の前脚をぢつと見つめながらも考へこんだまゝ暮すやうな日が幾日も續いた。

　佐藤をはじめ彼れの輕蔑し切つてゐる場内の小作者共は、おめ／＼と小作料を捲り取られ、商人に重い前借をしてゐるにも係はらず、兎に角さした屈託もしないで冬を迎へてゐた。相當の雪圍ひの出來ないやうな小屋は一つもなかつた。貧しいなりに集まつて酒も飲み合へば、助け合ひもした。仁右衞門には人間がよつてたかつて彼れ一人を敵にまはしてゐるやうに見えた。

　冬は遠慮なく進んで行つた。見渡す大空が先づ雪に埋められたやうに何處から何處まで眞白になつた。そこから雪は滾々としてとめ度なく降つて來た。人間の哀れな敗殘の跡を物語る畑も、勝ちほこつた自然の領土である森林も等しなみに雪の下に埋もれて行つた。一夜の中に一尺も二尺も積もり重なる日があつた。小屋と木立だけが空と地との間にあつて汚い斑點だつた。

　仁右衞門は或る日膝まで這入る雪の中をこいで事務所に出かけて行つた。いくらでもいゝから馬を買つてくれろと賴んで見た。帳場はあざ笑つて、脚の立たない馬は、金を喰ふ機械見たいなものだと云つた。而して竹箆返しに跡釜が出來たから小屋を立退けと逼つた。愚圖々々してゐると今までのやうな煮え切らない事はして置かない、この村の巡査でまにあはなければ倶知安からでも賴んで處分するからさう思へとも云つた。仁右衞門は帳場に物を云はれると妙に向腹が立つた。鼻をあかしてくれるから見て居れと云ひ捨てて小屋に歸つた。

　金を喰ふ機械――それに違ひなかつた。仁右衞門は不便さから今まで馬を生かして置いたのを後悔した。彼れは雪の中に馬を引つ張り出した。老いぼれたやうになつた馬はなつかしげに主人の手に鼻先を持つて行つた。仁右衞門は右手に隱して持つてゐた斧で眉間を喰らはさうと思つてゐたが、どうしてもそれが出來なかつた。彼れは又馬を牽いて小屋に歸つた。

　その翌日彼れは身支度をして函館に出懸けた。彼れは場主と一喧嘩して笠井の仕終せなかつた小作料の輕減を實行させ、自分も農場にゐつゞき、小作者の感情をも柔らげて少しは自分を居心地よくしようと思つたのだ。彼れは汽車の中で自分の云ひ分を十分に考へようとした。然し列車の中の澤山の人の顏はもう彼れの心を不安にした。彼れは敵意をふくんだ眼で一人一人睨めけつた。

　函館の停車場に着くと彼れはもうその建物の宏大もないのに膽をつぶしてしまつた。不恰好な二階建ての板家に過ぎないのだけれども、その一本の柱にも彼れは驚くべき費用を想像した。彼れは又雪のかきのけてある廣い往來を見て驚いた。然し彼れの誇りはそんな事に敗けてはゐまいとした。動ゝともするとおびえて胸の中ですくみさうになる心を勵まし／＼彼れは巨人のやうに威丈高にのそり／＼と道を歩いた。人々は振り返つて、自然から今切り取つたばかりのやうなこの男を見送つた。

やがて彼れは松川の屋敷に這入つて行つた。農場の事務所から想像してゐたのとは話にならない程ちがつた宏大な邸宅だつた。敷臺を上る時に、彼れはつまごを脱いでから、我れにもなく手拭を腰から拔いて足の裏を綺麗に押し拭つた。澄んだ水の表面の外に、自然には決してない滑らかに光つた板の間の上を、彼れは氣味の惡い冷たさを感じながら、奥に案内されて行つた。美しく着飾つた女中が主人の部屋の襖をあけると、息氣のつまるやうな強烈な不快な匂ひが彼れの鼻を強く襲つた。而して部屋の中は夏のやうに暑かつた。

板よりも固い疊の上には處々に獸の皮が敷きつめられてゐて、障子に近い大きな白熊の毛皮の上の盛り上るやうな座布團の上に、はついいの褞袍を着込んだ場主が、大火鉢に手をかざして安坐をかいてゐる。仁右衛門の姿を見るとぎろつと睨みつけた眼をそのまゝ床の方に振り向けた。仁右衛門は場主の一眼でどやし附けられて這入る事も得せずに逡巡みしてゐると、場主の眼が又床の間からこつちに歸つて來さうになつた。仁右衛門は二度睨みつけられるのを恐れるあまりに、無器用な足どりで疊の上ににちやつ／＼と音をさせながら場主の鼻先までのそ／＼歩いて行つて、出來るだけ小さく窮屈さうに坐りこんだ。

「何しに來た」

底力のある聲にもう一度どやし附けられて、仁右衛門は思はず顔を擧げた。場主は眞黒な大きな卷煙草のやうなものを口に銜へて青い煙をいいほがらかに吹いてゐた。そこからは息氣づまるやうな不快な匂ひが彼れの鼻の奥をつん／＼刺戟した。

「小作料の一文も納めないで、どの面下げて來臭つた。來年からは魂を入れかへろ。而して辭儀の一つもする事を覺えてから出直すなら出直して來い。馬鹿」

而して部屋をゆするやうな高笑ひが聞こえた。仁右衛門が自分でも分らない事を寢言のやうにいふのを、始めの間は聞き直したり、補つたりしてゐたが、やがて場主は堪忍袋を切らしたといふ風にかう怒鳴つたのだ。仁右衛門は高笑ひの一とくぎり毎に、たゝかれるやうに頭をすくめてゐたが、辭儀もせずに夢中で立ち上つた。彼れの顔は部屋の暑さの爲めと、のぼせ上つた爲めに湯氣を出さんばかり赤くなつてゐた。

仁右衛門はすつかりいい打ち挫かれて自分の小さな小屋に歸つた。彼れには農場の空の上までも地主の嚴乘さうな大きな手が廣がつてゐるやうに思へた。雪を含んだ雲は息氣苦しいまでに彼れの頭を押へつけた。「馬鹿」その聲は動ゝともすると彼れの耳の中で怒鳴られた。何んといふ人間の違ひだ。何んといふ暮しの違ひだ。親方が人間なら俺れは人間ぢやない。俺れが人間なら親方は人間ぢやない。彼れはさう思つた。而して唯ゞ惘れて默つて考へこんでしまつた。

粗朶がぶし／＼と燻ぶるその向座には、妻が襤褸につゝまれて、髪をぼう／＼と亂したまゝ、愚かな眼と口とを節孔のやうに開け放してぼんやり坐つてゐた。しん／＼と雪はとめ度なく降り出して來た。妻の膝の上には赤坊もゐなかつた。

その晩から天氣は激變して吹雪になつた。翌朝仁右衛門が眼をさますと、吹き込んだ雪が足から腰にかけて薄ら積つてゐた。鋭い口笛のやうないいうなりを立てて吹きまく風は、小屋をめきり／＼とゆすぶり立てた。風が小凪ぐと、滅入るやうな靜かさが閻魔神まで逼つて來た。

仁右衛門は朝から酒を欲したけれども一滴もありやうはなかつた。寢起きから妙に思ひ入つ

てゐるやうだつた彼れは、何かのきつかけに勢よく立ち上つて、斧を取り上げた。而して馬の前に立つた。馬はなつかしげに鼻先をつき出した。仁右衛門は無表情な顔をして口をもごもごさせながら馬の眼と眼との間をおとなしく撫でてゐたが、いきなり體を浮かすやうに後ろに反らして斧を振り上げたと思ふと、力まかせにその眉間に打ちこんだ。うとましい音が彼れの腹に應へて、馬は聲も立てずに前膝をついて横倒しにどうと倒れた。痙攣的に後脚で蹴るやうなまねをして、潤みを持つた眼は可憐にも何かを見詰めてゐた。

「やれ怖い事するでねえ、傷ましいまあ―すゝぎ物をしてゐた妻が、振り返つて此の様を見ると、恐ろしい眼附きをしておびえるやうに立ち上りながらかういつた。

「默れつてば。物いふと汝れもたゝき殺されつぞ」

仁右衛門は殺人者が生き殘つた者を脅かすやうな低い皺枯れた聲でたしなめた。

嵐が急にやんだやうに二人の心にはかーんとした沈默が襲つて來た。仁右衛門はだらんと下げた右手に斧をぶらさげたまゝ、妻は雜巾のやうに汚い布巾を胸の所に押しあてたまゝ、憚るやうに顔を見合せて突つ立つてゐた。

「こゝへ來う」

やがて仁右衛門は呻くやうに、斧を一寸動かして妻を呼んだ。

彼れは妻に手傳はせて馬の皮を剝ぎ始めた。生臭い匂ひが小屋一杯になつた。厚い舌をだらりと横に出した顔だけの皮を殘して、馬はやがて裸身にされて藁の上に堅くなつて横はつた。白い腱と赤い肉とが無氣味な縞となつてそこに曝された。仁右衛門は皮を棒のやうに卷いて藁繩でしばり上げた。

それから仁右衛門のいふまゝに妻は小屋の中を片附けはじめた。背負へるだけは雜穀も荷造りして大小二つの荷が出來た。妻は良人の心持が分ると又長い苦しい漂浪の生活を思ひやつて、おろ〳〵と泣かんばかりになつたが、夫の荒立つた氣分を怖れて涙を飲みこみ〳〵した。仁右衛門は小屋の眞中に突つ立つて隅から隅まで目測でもするやうに見廻した。二人は默つたまゝでつまごをはいた。妻が風呂敷を被つて荷を背負ふと仁右衛門は後ろから助け起してやつた。妻はとう〳〵身を震はして泣き出した、意外にも仁右衛門は叱りつけなかつた。而して自分は大きな荷を輕々と背負ひ上げてその上に馬の皮を乘せた。二人は言ひ合せたやうにもう一度小屋を見廻した。

小屋の戸を開けると顔向けも出來ない程雪が吹き込んだ。荷を背負つて重くなつた二人の體はまだ堅くならない白い泥の中に腰のあたりまで埋まつた。

仁右衛門は一旦戸外に出てから、待てと云つて引き返して來た。荷物を背負つたまゝで、彼れは藁繩の片つ方の端を圍爐裡にくべ、もう一つの端を壁際にもつて行つてその上に細く刻んだ馬糧の藁をふりかけた。

天も地も一つになつた。颯と風が吹きおろしたと思ふと、積雪は自分の方から舞ひ上るやうに舞ひ上つた。それが横なぐりに靡いて矢よりも早く空を飛んだ。佐藤の小屋やそのまはりの木立は見えたり隱れたりした。風に向つた二人の半身は忽ち白く染まつて、細かい針で絶間なく刺すやうな刺戟は二人の顔を眞赤にして感覺を失はしめた。二人は睫毛に氷りつく雪を打ち振ひ〳〵雪の中をこいだ。

國道に出ると雪道がついてゐた。踏み堅められない深みに落ちないやうに仁右衛門は先きに立つて瀨踏みをしながら歩いた。大きな荷を背負つた二人の姿はまろび勝ちに少しづつ動いて

行つた。共同墓地の下を通る時、妻は手を合せてそつちを拜みながら歩いた――わざとらしい程高い聲を擧げて泣きながら。二人がこの村に這入つた時は一頭の馬も持つてゐた。一人の赤坊もゐた。二人はそれらのものすら自然から奪ひ去られてしまつたのだ。

その邊から人家は絶えた。吹きつける雪の爲めにへし折られる枯枝がやゝともすると投槍のやうに襲つて來た。吹きまく風にもまれて木と云ふ木は魔女の髮のやうに亂れ狂つた。

二人の男女は重荷の下に苦しみながら少しづつ倶知安の方に動いて行つた。

椴松帯が向うに見えた。凡ての樹が裸かになつた中に、この樹だけは幽鬱な暗綠の葉色をあらためなかつた。眞直な幹が見渡す限り天を衝いて、怒濤のやうな風の音を籠めてゐた。二人の男女は蟻のやうに小さくその林に近づいて、やがてその中に呑み込まれてしまつた。

（一九一七年六月一三日、蟬鳴を聞きつゝ擱筆）

（一九一七年七月、新小說所載）

生れ出づる惱み

一

私は自分の仕事を神聖なものにしようとしてゐた。ねぢ曲らうとする自分の心をひつぱたいて、出來るだけ伸び〳〵した眞直な明るい世界に出て、そこに自分の藝術の宮殿を築き上げようと藻掻いてゐた。それは私に取つてどれ程喜ばしい事だつたらう。と同時にどれ程苦しい事だつたらう。私の心の奥底には確かに――凡ての人の心の奥底にあるのと同樣な――火が燃えてはゐたけれども、その火を燻らさうとする塵芥の堆積は又ひどいものだつた。かき除けても〳〵容易に火の燃え立つて來ないやうな瞬間には私は慘めだつた。私は、机の向うに開かれた窓から、冬が來て雪に埋もれて行く一面の畑を見渡しながら、滯りがちな筆を叱りつけ〳〵運ばさうとしてゐた。

寒い。原稿紙の手ざはりは氷のやうだつた。

陽はずん〳〵暮れて行くのだつた。灰色から鼠色に、鼠色から黑色にぼかされた大きな紙を眼の前にかけて、上から下へと一氣に神線を落して行く時に感ずるやうな速さで、晝の光は夜の闇に變つて行かうとしてゐた。午後になつたと思ふ間もなく、どん〳〵暮れかゝる北海道の冬を知らないものには、日が逸早く蝕まれることの氣味惡い淋しさは想像がつくまい。ニセコアンの丘陵の裂け目から驀地にこの高原の畑地を眼がけて吹きおろして來る風は、割合に粒の大きい輕やかな初冬の雪片を煽り立て〳〵横さまに舞ひ飛ばした。雪片は暮れ殘つた光の迷子のやうに、ちか〳〵した印象を見る人の眼に與へながら、惡戯者らしく散々飛び廻つた元氣にも似ず、降りたまつた積雪の上に落ちるや否や、寒い薄紫の死を死んでしまふ。たゞ窓に來てあたる雪片だけがさら〳〵さら〳〵とさゝやかに音を立てるばかりで、他の凡ての奴等は殘らず啞だ。快活らしい白い啞の群れの舞踏――それは見る人を涙ぐませる。

私は淋しさの餘り筆をとめて窓の外を眺めて見た。而して君の事を思つた。

二

私が君に始めて會つたのは、私がまだ札幌に住んでゐる頃だつた。私の借りた家は札幌の町端れを流れる豐平川といふ川の右岸にあつた。その家は堤の下の一町歩程もある大きな林檎園の中に建ててあつた。

そこに或る日の午後君は尋ねて來たのだつた。君は少し不機嫌さうな、口の重い、癖で脊丈けが伸び切らないと云つたやうな少年だつた。汚い中學校の制服の立襟のホックをうるさゝうに外づしたまゝにしてゐた、それが妙な事には殊にはつきりと私の記憶に殘つてゐる。

君は座につくとぶつきらぼうに自分の描いた畫を見て貰ひたいと云ひ出した。君は片手では抱へ切れない程油畫や水彩畫を持ちこんで來てゐた。君は自分自身を平氣で虐げる人のやうに、風呂敷包みの中から亂暴に幾枚かの畫を引き拔いて私の前に置いた。而してぢつと探るやうに私の顏を見詰めた。明らさまに云ふと、その時私は君をいやに高慢ちきな若者だと思つた。而して君の方には顏も向けないで、據どころなく差出された畫を取り上げて見た。

私は一眼見て驚かずにはゐられなかつた。

少しの修練も經てはゐないらしい幼稚な技巧ではあつたけれども、その中には不思議に力が籠もつてゐてそれが直ぐ私を襲つたからだ。私は畫面から眼を放してもう一度君を見直さないではゐられなくなつた。で、さうした。その時、君は不安らしいその癖意地張りな眼付きをして矢張り私を見續けてゐた。

「どうでせう。それなんかは下らない出來だけれども」

さう君は如何にも自分の仕事を輕蔑するやうに云つた。もう一度明らさまに云ふが、私は一方で君の畫に喜ばしい驚きを感じながらも、いかにも思ひ昂つたやうな君の物腰には一種の反感を覺えて、一寸皮肉でも云つて見たくなつた。

「下らない出來がこれ程なら、會心の作と云ふのは大したものでせうね」とか何んとか。

然し私は幸にも咄嗟にそんな言葉で自分を穢す事を遁れたのだつた。それは私の心が美しかつたからではない。君の畫が何んと云つても君自身に對する私の反感に打ち勝つて私に迫つてゐたからだ。

君が其の時持つて來た畫の中で今でも私の心の底にまざ〳〵と殘つてゐる一枚がある。それは八號の風景に描かれたもので、轄川あたりの泥炭地を寫したと覺しい晩秋の風景畫だつた。荒涼と見渡す限りに連なつた地平線の低い葦原を一面に蔽うた霙雲の隙間から午後の日がかすかに漏れて、それが、草の中からたつた二本ひよろ〳〵と生ひ伸びた白樺の白い樹皮を力弱く照らしてゐた。單色を含んで來た筆の穗が不器用に畫布にたゝきつけられて、そのまゝけし飛んだやうな手荒な筆觸で、自然の中には決して存在しないと云はれる純白の色さへ他の色と練り合はされずに、そのまゝべとりとなすり附けてあつたりしたが、それでもぢつと見てゐると、そこには作者の鋭敏な色感が存分に窺はれた。それぱかりか、その畫が與へる全體の效果にもしつかりと纏まつた氣分が行き渡つてゐた。悒鬱——十六七の少年には哺めさうもない重い悒鬱を、見る者は直ぐ感ずる事が出來た。

「大變いゝぢやありませんか」

畫に對して素直になつた私の心は、私にかう云はさないではおかなかつた。

それを聞くと君は心持ち顏を赤くした——と私は思つた。すぐ次ぎの瞬間に來ると、君は然し私を疑ふやうな、自分を冷笑ふやうな冷やかな表情をして、暫らくの間私と畫とを等分に見較べてゐたが、ふいと庭の方へ顏を背けてしまつた。それは人を馬鹿にした仕打ちとも思へば思はれない事はなかつた。二人は氣まづく默りこくつてしまつた。私は所在なさに默つたまゝ畫を眺めつゞけてゐた。

「そいつは何處ん所が惡いんです」

突然又君の無愛想な聲がした。私は今までの妙にちぐはぐになつた氣分から、一寸自分の意見をずば〳〵と云ひ出す氣にはなれないでゐた。然し改めて君の顏を見ると、云はさないぢや置かないぞと云つたやうな眞劍さが現はれてゐた。少しでも間に合はせを云はうものなら輕蔑してやるぞと云つたやうな鋭さが見えた。

好し、それぢや存分に云つてやらうと私もとう〳〵本當に腰を据ゑてかゝるやうにされてゐた。

その時私が口に任せてどんな生意氣を云つたかは幸ひな事に今は大方忘れてしまつてゐる。然し兎に角惡口としては技巧が非常に危なつかしい事、自然の見方が不親切な事、モティヴが耽情的過ぎる事などを列べたに違ひない。

君は默つたまゝまじ〳〵と眼を光らせながら、私の云ふ事を聽いてゐた。私が云ひたい事だけをあけすけに云つてしまふと、君は暫らく默りつゞけてゐたが、やがて口の隅だけに始めて

笑ひらしいものを漏らした。それがまた普通の微笑とも皮肉な痙攣とも思ひなされた。

　それから二人はまた二十分程默つたまゝで向ひ合つて坐りつゞけた。

「ぢや又持つて來ますから見て下さい。今度はもつといゝものを描いて來ます」

　その沈默の後で、君が腰を浮かせながら云つたこれだけの言葉は又僕を驚かせた。丸で別な、初な、素直な子供でもいつたやうな無邪氣な明るい聲だつたから。

　不思議なものは人の心の働きだ。この聲一つだつた。この聲一つが君と私とを堅く結びつけてしまつたのだつた。私は結局君を色々に邪推した事を悔いながらやさしく尋ねた。

「君は學校は何處です」

「東京です」

「東京？　それぢやもう始まつてゐるんぢやないか」

「えゝ」

「何故歸らないんです」

「どうしても落第點しか取れない學科があるんでいやになつたんです。……それから少し都合もあつて……」

「君は畫をやる氣なんですか」

「やれるでせうか」

　さう云つた時、君はまた前と同樣な強情らしい、人に迫るやうな顔付きになつた。

　私もそれに對して何んと答へやうもなかつた。專門家でもない私が、五六枚の畫を見ただけで、その少年の未來の運命全體を何うして大膽にも決定的に云ひ切る事が出來よう。少年の思ひ入つたやうな態度を見るにつけ、私には凡てが恐ろしかつた。私は默つてゐた。

「僕はその中郷里に――郷里は岩内です――歸ります。岩内のそばに硫黄を掘り出してゐる所があるんです。その景色を僕は夢にまで見ます。その畫を作り上げて送りますから見て下さい。……畫が好きなんだけれども、下手だから駄目です」

　私の答へないのを見て、君は自分をたしなめるやうに堅い淋しい調子でかう云つた。而して私の眼の前に取り出した何枚かの作品を目茶苦茶に風呂敷に包みこんで歸つて行つてしまつた。

　君を木戸の所まで送り出してから、私は獨りで手廣い林檎畑の中を歩きまはつた。林檎の枝は熟した果實でたわゝになつてゐた。或る樹などは葉がすつかり散り盡して、赤々とした果實だけが眞裸で累々と日にさらされてゐた。それは快く空の晴れ渡つた小春日和の一日だつた。私の庭下駄に踏まれた落葉は乾いた音をたてて微塵に押しひしやがれた。豐滿の淋しさといふやうなものが空氣の中にしんみりと漂つてゐた。丁度その頃は、私も生活の或る一つの岐路に立つて疑ひ迷つてゐた時だつた。私は冬を眼の前に控へた自然の前に幾度も知らず知らず棒立ちになつて、君の事と自分の事とをまぜこぜに考へた。

　兎に角君は妙に力強い印象を私に殘して、私から姿を消してしまつたのだ。

　その後君からは一度か二度問合せか何かの手紙が來たきりでぱつたり消息が途絶えてしまつた。岩内から來たといふ人などに遇ふと、私はよくその港にかういふ名前の青年はゐないか、その人を知らないかなぞと尋ねて見たが、更に手がかりは得られなかつた。硫黄採掘場の風景畫もとう／＼私の手許には届いて來なかつた。

　かうして二年三年と月日がたつた。而して何かした拍子に君の事を思ひ出すと、私は人生の旅路の淋しさを味はつた。一度兎に角顔を合せて、或る程度まで心を觸れ合つた同志が、一旦別れたが最後、同じこの地球の上に呼吸

しながら、未來永劫復たと邂逅はない　それは何んといふ不思議な、淋しい、恐ろしい事だ。人とは云ふまい、犬とでも、花とでも、塵とでもだ。孤獨に親しみ易い癖に．何處か殉情的で人なつツこい私の心は、何うかした拍子に、との已むを得ない人間の運命をしみ〴〵と感じて深い悒鬱に襲はれる。君も多くの人の中で私にそんな心持を起させる一人だつた。

　而かも淺はかな私等人間は猿と同樣に物忘れする。四年五年といふ歳月は君の記憶を私の心から綺麗に拭ひ取つてしまはうとしてゐたのだ　君は段々私の意識の閾を踏み越えて、潜在意識の奥底に隠れて仕舞はうとしてゐたのだ。

　この短かからぬ時間は私の身の上にも私相當の變化を齎き起してゐた。私は足かけ八年住み慣れた札幌　極く手短かに云つても、そこで私の上にも色々な出來事が湧き上つた。妻も迎へた。三人の子の父ともなつた　永い間の信仰から離れて舊友とも縁を切つた。それまでやつてゐた仕事に段々失望を感じ始めた。新らしい生活の芽が周圍の拒絕をも無みして、そろそろと芽ぐみかけてゐた　私の眼の前の生活の道にはおぼろげながら氣味惡い不幸の雲が蔽ひかゝらうとしてゐた。私は始終私自身の力を信じてゐゝのか疑はねばならぬのかの二筋道に迷ひぬいた——を去つて、私には物足らない都會生活が始まつた。而して眼にあまる不幸のつぎ〳〵に足許からまくし上るのを手を拱いてぢつと眺めねばならなかつた。心の中に起つたそんな危機の中で、私は捨て身になつて、見も知らぬ新らしい世界に乘り出す事を餘儀なくされた。私は今度こそは全く獨りで歩かねばならぬと決心の臍を堅めた。又此の道に踏み込んだ以上は、出來ても出來なくても人類の意志と取組む覺悟をしなければならなかつた。私は始終自分の力量に疑ひを感じ通しながら原稿紙に臨んだ。人々が寢入つて後、草も木も寢入つて後、獨り目覺めてしいんとした夜の寂寞の中に、萬年筆のペン先が紙にきしり込む音だけを聞きながら、私は神がかりのやうに夢中になつて筆を運ばしてゐる事もあつた。私の周圍には亡靈のやうな魂がひしめいて、紙の中に生れ出ようと苦しみあせつてゐるのをはつきりと感じた事もあつた。そんな時氣が付いて見ると、私の眼は感激の涙に漂つてゐた。藝術に溺れたものでなくつて、さういふ時のエクスタシーを誰れが味ひ得よう。然し私の心が痛ましく裂け亂れて、純一な氣持が何處の隅にも見付けられない時の淋しさは又何んと喩へやうもない。その時私は全く一塊の物質に過ぎない。私には何んにも殘されない。私は自分の文學者である事を疑つてしまふ。文學者が文學者である事を疑ふ程、世に空虛な頼りないものが復たとあらうか。さういふ時に彼れは明かに生命から見放されてしまつてゐるのだ。こんな瞬間に限つて何時でも決まつたやうに私の念頭に浮ぶのは君のあの時の面影だつた。自分を信じてゐゝのか惡いのかを決しかねて、逞ましい意志と冷刻な批評とが互に衷に戰つて、思はず知らず凡てのものに向つて敵意を含んだ君のあの面影だつた。私は筆を捨てて椅子から立ち上り、部屋の中を歩き廻りながら自分につぶやくやうに云つた。

「あの少年は何うなつたらう。道を踏み迷はないでゐてくれ。自分を誇大して取り返しのつかない死出の旅をしないでゐてくれ。若し彼れに獨自の道を切り開いて行く天稟がないのなら、萬望正直な凡人として一生を終つてくれ。もうこの苦しみは俺れ一人だけで澤山だ」

　處が去年の十月——と云へば、川岸の家で

偶然君と云ふものを知つてから丁度十年目だ——の或る日、雨のしよぼ〳〵と降つてゐる午後に一封の小包が私の手許に屆いた。女中がそれを持つて來た時、私は干魚が送られたと思つた程部屋の中が生臭くなつた。包みの油紙は雨水と泥とでひどく汚れてゐて、差出人の名前が漸くの事で讀める位だつたが、そこに記された姓名を私は誰れともはつきり思ひ出すことが出來なかつた。兎に角もと思つて私はナイフで巖乘な澁びきの麻絲を切りほごしにかゝつた。油紙を一皮めくるとその中に又麻絲で堅く結はへた油紙の包みがあつた。それをほごすと又油紙で包んであつた。一寸腹の立つ程念の入つた包み方で、百合根を剝がすやうに一枚々々むいて行くと、やうやく幾枚もの新聞紙の中から、手垢でよごれ切つた手製のスケッチ帖が三冊、きり〳〵と棒のやうに卷き上げられたのが出て來た。私は小氣味惡い魚の匂ひを始終氣にしながらその手帖を擴げて見た。

それはどれも鉛筆で描かれたスケッチ帖だつた。而してどれにも山と樹木ばかりが描かれてあつた。私は一眼見ると、それが明かに北海道の風景である事を知つた。のみならず、それは明かに本當の藝術家のみが見得る、而して描き得る深刻な自然の肖像畫だつた。

「やッつけたな！」咄嗟に私は少年のまゝの君の面影を心一杯に描きながら下脣を嚙みしめた。而して思はず微笑んだ。白狀するが、それが若し小說か戲曲であつたら、その時の私の顏には微笑の代りに苦がい嫉妬の色が濃く漲つてゐたかも知れない。

その晚になつて一封の手紙が君から屆いて來た。矢張り厚い書簡紙に擦り切れた筆で亂雜にから走り書きがしてあつた。

「北海道ハ秋モ晚クナリマシタ。野原ハ、毎日ノヤウニツメタイ風ガ吹イテヰマス。日頃愛惜シタ樹木ヤ草花ナドガ、イツトハナク落葉シテシマツテヰル。秋ハ人ノ心ニ色々ナ事ヲ思ハセマス。

日ニヨリマストアタリノ山々ガ浮キアガツタカト思ハレル位空ガ美シイ時ガアリマス。然シ大テイハ風ト一所ニ雨ガバラ〳〵ヤツテ來テ路ヲ惡クシテヰルノデス。

昨日スケッチ帖ヲ三冊送リマシタ。イツカあなたニ畫ヲ見テモラヒマシテカラ、故鄕デ貧乏漁夫デアル私ハ、毎日忙シイ仕事ト激シイ勞働ニ追ハレテヰルノデ、ツイ今年マデ畫ヲカイテ見タカツタノデスガ、ツイ描ケナカツタノデス。

今年ノ七月カラ始メテ畫用紙ヲトヂテ畫帖ヲ作リ、鉛筆デ（モノ）ニ向ツテ見マシタ。併シ勞働ニ害サレタ手ハ思フヤウニ自分ノ感力ヲ現ハス事ガ出來ナイデ困リマス。

コンナツマラナイ素描帖ヲ見テ下サイト云フノハ大ヘンツライノデス。然シ私ハイツハラナイデ始メタ時カラノヲ全部送リマシタ。（中略）

私ノ町ノ智的素養ノ幾分ナリトモアル靑年デモ、自分トイフモノニツイテ思ヒヲメグラス人ハ少ナイヤウデス。靑年ノ多クハ小サクサカシクヲサマツテヰルモノカ、ツマラナク時ヲ無爲ニ送ツテヰマス。デスガ私ハ私ノ故鄕ダカラ好キデス。

色々ナモノガ私ノ心ヲドラセマス。私ノスケッチニ取ルベキ所ノアルモノガアルデセウカ。

私ハ何トナクコンナツマラヌモノヲあなたニ見テモラフノガハヅカシイノデス。

山ハ繪具ヲドツシリ付ケテ、山ガ地上カラ空ヘモレアガツテヰルヤウニ描イテ見タイモノダト思ツテヰマス。私ノスケッチデハ私ノ感ジガドウモ出ナイデコマリマス。

私ノ山ハ私ガ實際ニ感ジルヨリモアマリ平面ノヤウデス。樹木モドウモ物體感ニトボシク思ハレマス。

色ヲツケテ見タラヨカラウト考ヘテキマスガ、時間ト金ガナイノデ、コンナモノデ腹イセヲシテキルノデス。

私ハ色々ナ構圖デ頭ガ一パイニナツテキルノデスガ、何シロマダ描クダケノ腕ガナイヤウデス。御忙ガシイあなたニコンナ無遠リヨヲカケテ大ヘンスマナク思ツテキマス。イツカ御ヒマガアツタラ御教示ヲ願ヒマス。

十月末」

から思つたまゝを書きなぐつた手紙がどれ程私を動かしたか、君には一寸想像がつくまい。自分が文學者であるだけに、私は他人の書いた文字の中にも眞實と虚僞とを直感する可なり鋭い能力が發達してゐる。私は君の手紙を讀んでゐる中に涙ぐんでしまつた。魚臭い油紙と、立派な藝術品であるスケッチ帖と、君の文字との間には一分の隙もたかかつた。「感力」といふ君の造語は立派な内容を持つ言葉として私の胸に響いた。「山ハ綸目ヲドツシリ付ケテ山ガ地上カラ空ヘモレアガッテキルヤウニ描イテ見タイ」……山が地上から空にもれあがる……それは素晴らしい自然への肉迫を表現した言葉だ。言葉の中に沁み渡つたこの力は、輕く對象を見て過ごす微温な心の、眞似にも生み出し得ない調子を持つた言葉だ。

一誰れも氣も付かず注意も拂はない地球の隅つこで、尊い一つの魂が母胎を破り出ようとして苦しんでゐる」

私はさう思つたのだ。さう思ふとこの地球といふものが急により美しいものに感じられたのだ。さう感ずると何んとなく涙ぐんでしまつたのだ。

その頃私は北海道行きを計畫してゐたが、雜用に紛れて躊躇する中に寒くなりかけて來たので、もう一層やめようかと思つてゐた所だつた。然し君のスケッチ帖と手紙とを見ると、是非君に會つて見たくなつて、一徹にすぐ旅行の準備にかゝつた。その日から一週間とたゝない十一月の五日には、もう上野驛から青森への直行列車に乘つてゐる私自身を見出した。

札幌での用事を濟まして農場に行く前に、私は岩内にあてて君に手紙を出して置いた。農場からはさう遠くもないから、來られるなら來ないか、成るべくならお目に懸りたいからと云つて。

農場に着いた日には君は見えなかつた。その翌日は朝から雪が降り出した。私は窓の所へ机を持つて行つて、原稿紙に向つて呻吟しながら心待ちに君を待つのだつた。而して澁り勝ちな筆を休ませる間に、今まで書き連ねて來たやうな過去の回想やら當面の期待やらをつぎつぎに腦裡に浮ましてゐたのだつた。

三

夕闇は段々深まつて行つた。事務所をあづかる男が、ランプを持つて來た序でに、夜食の膳を運ばうかと尋ねたが、私はひよつとすると君が來はしないかと云ふ心づかひから、わざとその儘にしておいて貰つて、またかじり附くやうに原稿紙に向つた。大きな男の姿が部屋からのつそりと消えて行くのを、視覺のはづれに感じて、都合から久しぶりで來て見ると、物でも人でも大きくゆつたりしてゐるのに、今更ながら一種の壓迫をさへ感ずるのだつた。

澁りがちな筆がいくらもはかどらない中に、夕闇はどん〳〵夜の暗さに代つて、窓ガラスの先方は雪と闇とのぼんやりした明暗になつ

てしまつた。自然は何かに氣を障へ出したやうに、夜と共に荒れ始めてゐた。底力の籠もつた鈍い空氣が、音もなく重苦しく家の外壁に肩をあてがつてうんと凭たれかゝるのが、疊の上に坐つてゐても何んとなく感じられた。自然が粉雪を煽りたてて、處きらはずたゝきつけながら、のたうち廻つて呻き叫ぶその物凄い氣配はもう迫つてゐた。私は窓ガラスに白木綿のカーテンを引いた。自然の暴威をせき止める爲めに人間が苦心して創り上げたこのみじめな家屋といふ領土が脆く小さく私の周圍に眺めやられた。

突然、ど、ど、ど……といふ音が――運動が（さういふ場合、音と運動との區別はない）天地に起つた。さあ始まつたと私は二つに折つた背中を思はず立て直した。同時に自然は上齒を下脣にあてがつて思ひきり長く息氣を吹いた。家がぐら／＼と搖れた。地面から跳り上つた雪が二三度彈みを取つておいて、どつと一氣に天に向つて、謀叛でもするやうに、降りかゝつて行くあの悲壯な光景が、まざ／＼と部屋の中にすくんでゐる私の想像に浮べられた。駄目だ。待つた所がもう君は來やしない。停車場からの雪道はもう疾うに埋まつてしまつたに違ひないから。私は吹雪の底にひたりながら、物淋しくさう思つて、又机の上に眼を落した。

筆は益々澁るばかりだつた。輕い陣痛のやうなものは時々起りはしたが、大切な文字は生れ出てくれなかつた。かうして私に取つて情けないもどかしい時間が三十分も過ぎた頃だつたらう、農場の男が又のそりと部屋に這入つて來て客來を知らせたのは。私の喜びを君は想像する事が出來る。矢張り來てくれたのだ。私は直ぐに立つて事務室の方へかけ附けた。事務室の障子を開けて、二疊敷程もある大圍爐裡の切られた臺所に出て見ると、そこの土間に、一人の男がまだ靴も脱がずに突つ立つてゐた。農場の男も、その男にふさはしく肥つて大きな内儀さんも、普通な脊丈けにしか見えない程その客といふ男は大きかつた。言葉通りの巨人だ。頭からすつぽりと頭巾のついた黑つぽい外套を着て、雪まみれになつて、口から白い息氣をむら／＼と吐き出すその姿は、實際人間といふ感じを起させない程だつた。子供までがおびえた眼付きをして内儀さんの膝の上に丸まりながら、その男をうろんらしく見詰めてゐた。

君ではなかつたなと思ふと僕は期待に裏切られた失望の爲めに、いら／＼しかけてゐた神經のもどかしい感じが更につのるのを覺えた。

「さ、ま、ずつとこつちにお上りなすつて」

農場の男は僕の客だといふので出來るだけ丁寧にかう云つて、圍爐裡のそばの煎餅布團を裏返した。

その男は一寸頭で挨拶して圍爐裡の座に這入つて來たが、天井の高いだだつ廣い臺所に點された五分心のランプと、ちよろ／＼と燃える木節の圍爐裡火とは、黑い大きな塊的とよりこの男を照らさなかつた。男がぐつしより濕つた兵隊の古長靴を脱ぐのを待つて、私は默つたまま案内に立つた。今はもう、この男によつて、無駄な時間がつぶされないやうに、いやな氣分にさせられないやうにと心竊かに願ひながら。

部屋に這入つて二人が座についてから、私は始めて本當にその男を見た。男はぶきつちやうに、それでも四角に下座に坐つて、丁寧に頭を下げた。

「暫らく」

八疊の座敷に餘るやうな鏽を帶びた太い聲がした。

「あなたは誰方ですか――」

大きな男は一寸きまりが惡さうに汗でしとどになつた眞赤な額を撫でた。

木本です」
「え、木本君!?」
　これが君なのか。私は驚きながら改めてその男をしげしげと見直さなければならなかつた。癇の爲めに脊丈けも伸び切らない、何處か病質にさへ見えた憂鬱な少年時代の君の面影は何處にあるのだらう。又落葉松の幹の表皮からあすこゝに覗き出してゐる針葉の一本をも見遁さずに、愛撫し理解しようとする、スケッチ帳で想像されるやうな鋭敏な神經の所有者らしい姿はどこにあるのだらう。地をつぶしてさしこをした厚衣を二枚重ね着して、どつしりと落ち付いた君の坐り態は、私より五寸も高く見えた。筋肉で盛り上つた肩の上に正しく據ゑ込まれた、牡牛のやうに太い頸に、稍〻長めな赤銅色の君の顏は、健康そのもののやうにしつかりと乘つてゐた。筋肉質な君の顏は、何處から何處まで引き締つてゐたが、輪廓の正しい眼鼻立ちの隈隈には、心の中から湧いて出る寛大な微笑の影が、自然に漂つてゐて、脂肪氣のない君の容貌をも暖かく見せてゐた。「何んといふ無類な完全な若者だらう」私は心の中でかう感歎した。戀人を君に紹介する男は、深い猜疑の眼で戀人の心を見守らずにはゐられまい。君の與へる素晴らしい男らしい印象はそんな事まで私に思はせた。
「吹雪いてひどかつたらう」
「何んの。……溫くつて〳〵汗がはあえらく出ました。けんど道が分んねえで困つてると、仕合せよく水車番に遇つたからすぐ知れました。あれは親身な人だつけ」
　君の素直な心はすぐ人の心に觸れると見える。あの水車番といふのは實際この邊で珍らしく心持ちのいゝ男だ。君は手拭を腰から拔いて湯氣が立たんばかりに汗になつた顏を幾度も押し拭つた。
　夜食の膳が運ばれた。「もう我慢がなんねえ」と云つて、君は今まで堅くしてゐた膝を崩して胡坐をかいた。「きちやうめんに坐ることなんぞはあ無えもんだから」二人は子供同志のやうな樂しい心で膳に向つた。君の大食は愉快に私を驚かした。食後の茶を飯茶碗に三杯續けさまに飲む人を私は始めて見た。
　夜食をすましてから、夜中まで二人の間に取りかはされた樂しい會話を私は今だに同じ樂しさを以て思ひ出す。戸外ではこゝを先途と嵐が荒れまくつてゐた。部屋の中ではストーヴの向座に胡坐をかいて、癖のやうに時折り五分刈りの濃い頭の毛を逆さに撫で上げる男惚れのする君の顏が部屋を明るくしてゐた。君は嚴乘な文鎭になつて小さな部屋を吹雪から守るやうに見えた。溫まるにつれて、君の周圍から蒸れ立つ生臭い魚の香は狹く部屋中に籠もつたけれども、それは荒い大海を生々しく聯想させるだけで、何んの不愉快な感じも起させなかつた。人の感覺といふものも氣儘なものだ。
　樂しい會話と云つた。然しそれは面白いと云ふ意味では勿論ない。何故なれば君は屢〻不器用な言葉の尻を消して、曇つた顏をしなければならなかつたから。而して私も君の苦しい立場や、自分自身の迷ひ勝ちな生活を痛感して、暗い心に捕へられねばならなかつたから。
　その晩君が私に話して聞かしてくれた君のあれからの生活の輪廓を私はこゝにざつと書き連ねずには置けない。
　札幌で君が私を訪れてくれた時、君には東京に遊學すべき途が絶たれてゐたのだつた。一時北海道の西海岸で、小樽をすら凌駕して賑やかになりさうな氣勢を見せた岩内港は、さしたる理由もなく、少しも發展しないばかりか、段々さびれて行くばかりだつたので、それにつれて君の一家にも生活の苦しさが加へられて

來た。君の父上と兄上と妹とが氣を揃へて水入らずにせつせと働くにも係はらず、そろ〳〵と泥沼の中に滅入り込むやうな家運の衰勢を何うする事も出來なかつた。學問といふものに興味がなく、從つて成績の面白くなかつた君が、藝術に捧誓したい熱意を抱きながら、その淋しくなりまさる古い港に歸る心持になつたのはその爲めだつた。さういふ事を考へ合はすと、あの時君が何んとなく暗い顔付きをして、いらいらしく見えたのがはつきり分るやうだ。君は故郷に歸つても、仕事の暇々には、心あてにしてゐる景色でも描く事を、せめてはの頼みにして札幌を立ち去つて行つたのだらう。

　然し君の家庭が君に待ち設けてゐたものは、そんな餘裕のある生活ではなかつた。年のいつた父上と、どつちかと云へば漁夫としての健康は持ち合はせてゐない兄上とが、普通の漁夫と少しも變りのない服裝で網をすきながら君の歸りを迎へた時、大きい漁場の持主といふ風が家の中から根こそぎ無くなつてゐるのを眼のあたりに見やつた時、君はそれまでの考への呑氣過ぎたのに氣が付いたに違ひない。十分の思慮もせずにこんな生活の渦卷きの中に我れから飛び込んだのを、君の藝術的欲求は何處かで悔んでゐた。その晩磯臭い空氣の籠もつた部屋の中で、枕にはつきながら、陥穽にかゝつた獸のやうな焦噪さを感じて、瞼を合はす事が出來なかつたと君は私に告白した。さうだつたらう。その晩一晩だけの君の心持を委しく考へただけで、私は一つの力強い小品を作り上げる事が出來ると思ふ。

　然し親思ひで素直な心を持つて生れた君は、君を迎へ入れようとする生活から逃れ出る事をしなかつたのだ。詰襟のホックをかけずに着慣れた學校服を脱ぎ捨てて、君は厚衣を羽織る身になつた。明鯛から鱈、鱈から鰊、鰊から烏賊といふやうに、四季絶える事のない忙がしい漁撈の仕事にたづさはりながら、君は一年中かの北海の荒波や激しい氣候と戰つて、淋しい漁夫の生活に沒頭しなければならなかつた。而かも港內に築かれた防波堤が、技師の飛んでもない計算違ひから、波を防ぐ代りに、砂をどんどん港內に流し入れる破目になつてから、船繫りのよかつた海岸は見る〳〵淺瀨に變つて、出漁には都合のいゝ日ぬきの位置にあつた君の漁場は廢れ物同樣になつてしまひ、已むなく高い駄賃を出して他人の漁場を使はなければならなくなつたのと、北海道第一と云はれた鰊の群來が年々減つて行く爲めに、さらぬだに生活の壓迫を感じて來てゐた君の家は、親子が氣心を揃へ力を合はして、命がけに働いても年々貧窮に追ひ迫られ勝ちになつて行つた。

　親身な、やさしい、而して男らしい心に生れた君は、默つてこの有樣を見て過ごす事は出來なくなつた。君は君に近いものの生活の爲めに、正しい汗を額に流すのを悔いたり恥ぢたりしてはゐられなくなつた。而して君は驀地に勞働生活の眞中に乘り出した。寒暑と波濤と力業と荒くれ男等との交りは君の筋骨と度胸とを鐵のやうに鍛へ上げた。君はすく〳〵と大木のやうに逞ましくなつた。

「岩內にも漁夫は多いども腕力にかけて俺らに叶ふものは一人だつてゐねえ」

君はあたり前の事を云つて聞かせるやうにかう云つた。私の前に坐つた君の姿は私にそれを信ぜしめる。

　パンの爲めに生活のどん底まで沈み切つた十年の月日――それは短いものではない。大抵の人は恐らくその年月の間にさう云ふ生活から跳ね返る力を失つてしまふだらう。世の中を見渡すと、何百萬、何千萬の人々が、こんな生活にその天稟の特異な力を踏みしだかれて、

空しく墳墓の草となつてしまつたらう。それは全く悲しい事だ。而して不條理な事だ。然し誰れがこの不條理な世相に非難の石を抛つ事が出來るだらう。是れは悲しくも私達の一人々々が肩の上に背負はなければならない不條理だ。特異な力を埋め盡してまでも、當面の生活に沒頭しなければならない人々に對して、私達は尊敬に近い同情をすら捧げねばならぬ悲しい人生の事實だ。あるがまゝの實相だ。

パンの爲めに精力のあらん限りを用ゐ盡さねばならぬ十年――それは短いものではない。それにも係はらず、君は性格の中に植ゑ込まれた憧憬を一刻も捨てなかつたのだ。捨てる事が出來なかつたのだ。

雨の爲めとか、風の爲めとか、一日も安閑としてはゐられない漁夫の生活にも、爲す事なく日を過ごさねばならぬ幾日かが、一年の間には偶に來る。さう云ふ時に、君は一冊のスケッチ帖・小學校用の粗雜な畫學紙を不器用に綴絲で綴つたそれ　と一本の鉛筆とを、魚の鱗や肉片がこびりついたまゝ、ごは〳〵に乾いた仕事着の懷ろにねぢ込んで、ぶらりと朝から家を出るのだ。

「逢ふ人は俺ら事氣違ひだといふんです。けんど俺ら山をぢつとから見てゐると、何もかも忘れてしまふです。誰れだつたか何かの雜誌で『愛は奪ふ』と云ふものを書いて、人間が物を愛するのはその物を强奪くるだと云つてゐたやうだが、俺ら山を見てゐると、そんな氣は起したくも起らないね。山がしつくり俺ら事引きずり込んでしまつて、俺ら唯ゞ惘れて見てゐるだけです。その心持が描いて見たくつて、あんな下手なものをやつて見るが、から駄目です。あんな山の心持を描いた畫があらば、見るだけでも見たいもんだが、ありませんね。天氣のいゝ氣持のいゝ日にうんと力瘤を入れてやつて見たらと思ふけんど、暮しも忙しいし、やつても俺らにはやつぱり手に餘るだらう。色も付けて見たいが、繪具は國に引つ込む時、繪の好きな友達にくれてしまつたから、俺らのやうな繪には又買ふのも惜しいし　海を見れば海でいゝが、山を見れば山でいゝ。勿體ない位そこいらに素晴らしい好いものがあるんだが、力が足んねえです」

と云つたりする君の言葉も容子も私には忘れる事の出來ないものになつた。その時は胡坐にした兩脛を手でつぶれさうに堅く握つて、胸に餘る興奮を靜かな太い聲でおとなしく云ひ現はさうとしてゐた。

私共が一時過ぎまで語り合つて寢床に這入つた後も、吹きまく吹雪は露ほども力をゆるめなかつた。君は君で、私は私で、妙に寢つかれない一夜だつた。踏まれても踏まれても、自然が與へた美妙な優しい心を失はない、失ひ得ない君の事を思つた。仁王のやうな逞ましい君の肉體に、少女のやうに敏感な魂を見出すのは、この上なく美しい事に私には思へた。君一人が人生の生活といふものを明るくしてゐるやうにさへ思へた。而して私は段々私の仕事の事を考へた。どんなに藻搔いて見てもまだ本當に自分の所有を見出だす事が出來ないで、動もするとこぢれた反抗や敵愾心から一時的な滿足を求めたり、生活を歪んで見る事に興味を得ようとしたりする心の貧しさ――それが私を無念がらせた。而してその夜は、君のいかにも自然な大きな生長と、その生長に對して君が持つ無意識な謙讓と執着とが私の心に強い感激を起させた。

次ぎの日の朝、かうしてはゐられないと云つて、君は嵐の中に歸り支度をした。農場の男達すらもう少し空模樣を見てからにしろと强ひて止めるのも聞かず、君は素足にかちん〳〵に

凍つた兵隊長靴をはいて、黒い外套をしつかり着こんで土間に立つた。北國の冬の日暮しには殊更ら客がなつかしまれるものだ。名殘を心から惜しんでだらう、農場の人達も親身に彼れ是れと君を勞つた。すつかり頭巾を被つて、十二分に身支度をしてから出懸けたらいゝだらうと皆んなが寄つて勸めたけれども、君は素朴な憚りから帽子も被らずに、重々しい口調で別れの挨拶をすますと、ガラス戸を引き開けて戸外に出た。

私はガラス窓をこづいて、外面に降り積んだ雪を落しながら、吹き溜つた眞白な雪の中をこいで行く君を見送つた。君の黒い姿は――矢張り頭巾は被らないまゝで、頭をむき出しにして雪になぶらせた――君の黒い姿は、白い地面に腰まで埋まつて、或は濃く、或は薄く、縞になつて横降りに降りしきる雪の中を、たゞ一人段々遠ざかつて、とう〳〵霞んで見えなくなつてしまつた。

而して君に取り殘された事務所は、君の來る前のやうな單調な淋しさと降りつむ雪とに閉ぢこめられてしまつた。

私がそこを發つて東京に歸つたのは、それから三四日後の事だつた。

四

今は東京の冬も過ぎて、梅が咲き椿が咲くやうになつた。太陽の生み出す慈愛の光を、地面は胸を張り擴げて吸ひ込んでゐる。君の住む岩内の港の水は、まだ流れこむ雪解の水に薄濁る程にもなつてはゐまい。鋼鐵を水で溶かしたやうな海面が、動もすると角立つた波を擧げて、岸を目がけて終日攻めよせてゐるだらう。それにしてももう老いさらぼへた雪道を器用に拾ひながら、金魚賣りが天秤棒を擔つて、無理にも春を喚び覺ますやうな賣聲を立てる季節にはなつたらう。濱には津輕や秋田邊から集まつて來た旅雁のやうな漁夫達が、鰊の建網の修繕をしたり、大釜の据ゑ付けをしたりして、黒ずんだ自然の中に、毛布の甲がけや外套のけば〳〵しい赤色を播き散らす季節にはなつたらう。この頃私は又妙に君を思ひ出す。君の張り切つた生活の有樣を頭に描く。君はまざ〳〵と私の想像の視野に現はれ出て來て、見るやうに君の生活とその周圍とを私に見せてくれる。藝術家に取つては夢と現との閾はないと云つていゝ。彼れは現實を見ながら眠つてゐる事がある。夢を見ながら眼を見開いてゐる事がある。

私が私の想像にまかせて、こゝに君の姿を寫し出して見る事を君は拒むだらうか。私の鈍い頭にも同感といふものの力がどの位働き得るかを私は自分で試して見たいのだ。君の寛大はそれを許してくれる事と私はきめてかゝらう。

君を思ひ出すにつけて、私の頭にすぐ浮び出て來るのは、何んと云つても淋しく物すさまじい北海道の冬の光景だ。

五

長い冬の夜はまだ明けない。雷電峠と反對の灣の一角から長く突き出た造り損ねの防波堤は、大蛇の亡骸のやうな眞黒い姿を遠く海の面に横たへて、夜目にも白く見える波濤の牙が、小休みもなくその胴腹に嚙ひかゝつてゐる。砂濱に繋はれた百艘近い大和船は、舳を沖の方へ向けて、互にしがみ付きながら、長い帆柱を左右前後に振り立ててゐる。その側に、樣々の漁具と辨當のお櫃とを持つて集まつて來た漁夫達は、言葉少なに物を云ひ交はしながら、防波堤の上に建てられた組合の天氣豫報の信號燈を見やつてゐる。暗い闇の中に、白と赤との二つの火が、夜鳥の眼のやうにぎらりと光つてゐる。

赤と白との二つ球は、危險警戒を標示する信號だ。船を出すには一番鳥が啼きわたる時刻まで待つてからにしなければならぬ。町の方は寢鎭まつて灯一つ見えない。それ等の凡てを被ひくるめて凍つた雲は幕のやうに空低く懸つてゐる。音を立てないばかりに雲は山の方から沖の方へと絕間なく走り續ける。汀まで雪に埋まつた海岸には、見渡せる限り、白波がざぶん／＼碎けて、風が――空氣そのものをかつ浚つてしまひさうな激しい寒い風が雪に閉された山を吹き、漁夫を吹き、海を吹きまくつて、蕁地に水と空との閉ぢ目を眼がけて突きぬけて行く。

漁夫達の群れから少し離れて、一團りになつたお內儀さん達の背中から赤子の激しい泣き聲が起る。暫らくしてそれが鎭まると、風の生み出す音の高い不思議な沈默がまた天と地とに漲り滿ちる。

稍ゝ二時間も經つたと思ふ頃、綾目も知れない闇の中から、硫黃ケ嶽の山頂――右肩を聳やかして、左を撫で肩にした――が雲の產んだ鬼子のやうに、空中に現はれ出る。鈍い土がまだ振り向きもしない中に、空は逸早くも曉の光を吸ひ始めたのだ。

模範船（港內に四五艘あるのだが、船も大きいし、それに老練な漁夫が乘り込んでゐて、他の船に駈け引き進退の合圖をする）の船頭が頭を鳩めて相談をし始める。何處とも知れず、あの晝には氣疎い羽色を持つた烏の聲が勇ましく聞こえ出す。漁夫達の群れもお內儀さん達の團りも、石のやうな不動の沈默から急に生き返つて來る。

「出すべ」

そのさゞめきの間に、潮で錆び切つた老船頭の幅の廣い鹹辛聲が高く斯う響く。

漁夫達は力強い鈍さを以つて、互に今まで立ち盡してゐた所を步み離れて、銘々の持ち場につく。お內儀さん達は右に左に良人や兄や情人やを介抱して駈け步く。今まで陶醉したやうに多愛もなく波に搖られてゐた船の艫には、漁夫達が膝頭まで水に浸つて、喚き始める。罵り騷ぐ聲が一としきり聞こえたと思ふと、船は據どころなさゝうに、右に左に搖らぎながら、船首を高く擡げて波頭を切り開き／＼、狂ひ暴れる波打際から離れて行く。最後の高い罵りの聲と共に、今までの鈍さに似ず、あらゆる漁夫は猿のやうに船の上に飛び乘つてゐる。動ともすると舳を岸に向けようとする船の中からは、長い竿が水の中に幾本も突き込まれる。船は已むを得ず又立ち直つて沖を眼指す。

この出船の時の人々の氣組み働きは、誰れにでも激烈なアレッグロで終る音樂の一片を思ひ起さすだらう。がや／＼と騷ぐ聽衆のやうな雲や波の擾亂の中から、漁夫達の鈍い「Lento」「Lentissimo」とも云ふべき運動が起つて、それが始めの中は周圍の騷音の中に消されてゐるけれども、段々とその運動は熱情的となり力附いて行つて、靈を得たやうに、漁夫の乘り込んだ船が波を切り、段々と早くなる一定のテンポを取つて沖に乘り出して行く樣は、力強い樂手の手で思ひ存分大膽に奏でられる「allegro molto」を思ひ出させずには置かぬだらう。凡てのものの緊張した其處には、いつでも音樂が生れるものと見える。

船はもう一個の敏活な生き物だ。船緣からは百足蟲のやうに櫓の足を出し、艫からは鯨のやうに舵の尾を出して、あの物悲しい北國特有な漁夫の懸聲に囃されながら、眞闇に襲ひかゝる波のしぶきを凌ぎ分けて、沖へ沖へと岸を遠ざかつて行く。海岸に一團りになつて船を見送る女達の群れはもう命のない黑い石ころのやうにしか見えない。漁夫達は艪を漕ぎながら、帆綱を整へながら、畏水を汲み出しながら、

その黑い石ころと、模範船の艫から一の字を引いて怪火のやうに流れる炭火の火の子とを眺めやる。長い鐵の火箸に火の起つた炭を挾んで高く擧げると、それが風を喰つて盛んに火の子を飛ばすのだ。凡ての船は始終それを目あてにして進退をしなければならない。炭火が一つ擧げられた時には、天候の惡くなる印しと見て船を停め、二つ擧げられた時には安全になつた印しとして再び進まねばならぬのだ。曉闇を、物々しく立ち騷ぐ風と波との中に、海面低く火花を散らしながら青い焰を放つて、燃え上り燃えかすれるその光は、幾百人の漁夫達の命を勝手に支配する運命の手だ。その光が運命の物凄さを以て海の上に長く尾を引きながら消えて行く。

何處からともなく海鳥の群れが、白く長い翼に羽音を立てて風を切りながら、船の上に現はれて來る。猫のやうな聲で小さく呼び交はすこの海の沙漠の漂浪者は、さつと落して來て波に腹を撫でさすかと思ふと、翼を返して高く舞ひ上り、やゝ暫らく風に逆らつてぢつとこたへてから、思ひ直したやうに打ち連れて、小氣味よく風に流されて行く。その白い羽根が或る瞬間には明るく、或る瞬間には暗く見え出すと、長い北國の夜もやうやく明け離れて行かうとするのだ。夜の闇は暗く濃く沖の方に追ひつめられて、東の空には黎明の新らしい光が雲を破り始める。物すさまじい朝燒けだ。過まつて海に落ち込んだ惡魔が、肉付きのいゝ右の肩だけを波の上に現はしてゐる、その肩のやうな雷電峠の絕巓を撫でたり敲いたりして叢立ち急ぐ嵐雲は、爐に投げ入れられた紫のやうな光に燃えて、山懷ろの雪までも透明な藤色に染めてしまふ。それにしても明け方のこの暖かい光の色に比べて、何んと云ふ寒い空の風だ。長い夜の爲めに冷え切つた地球は、今その一番冷たい呼吸を呼吸してゐるのだ。

私は君を忘れてはならない。もう港を出離れて木の葉のやうに小さくなつた船の中で、君は配繩の用意をしながら、恐ろしいまでに莊嚴なこの日の序幕を眺めてゐるのだ。君の父上は舵座に胡坐をかいて、時々晴雨計を見やりながら、變化の烈しいその頃の天氣模樣を考へてゐる。海の中から生れて來たやうな老漁夫の、皺にたゝまれた鋭い眼は、雲一片の徵をさへ見落すまいと注意しながら、顏には木彫のやうな深い落ち付きを見せてゐる。君の兄上は、凍つて自由にならない手の平を腰のあたりの荒布に擦りつけて熱を呼び起しながら、帆綱を握つて、風の向きと早さに應じて帆を立て直してゐる。傭はれた二人の漁夫は二人の漁夫で、二尋置きに本繩から下がつた針に餌をつけるのに忙はしい。海の上を見渡すと、港を出てからてん／＼ばら／＼に散らばつて、朝の光に白い帆をかゞやかした船といふ船は、等しく沖を眼がけて波を切り開いて走りながら、君の船と同樣な仕事にいそしんでゐるのだ。

夜が明け離れると海風と陸風との變り目が來て、さすがに荒れがちな北國の冬の海の上も暫らくは穩かになる。やがて瀨は達せられる。君等は水の色を一眼見たばかりで、海中に突き入つた陸地と海そのものの界とも云ふべき瀨がどう走つてゐるかを直ぐ見て取る事が出來る。

帆が下ろされる。勢ひで走りつゞける船足は、舵の爲めに右なり左なりに向け直される。同時に浮標の附いた配繩の一端が氷のやうな波の中にざぶん／＼と投げこまれる。二十五町から三十町に餘る長さを持つた繩全體が、海上に長長と橫たへられるまでには、朝早くから始めても、日が子午線近く來るまでかゝらねばならないのだ。君等の船は艪に操られて、橫波を食ひながらしぶ／＼進んで行く。ざぶり……ざぶり……寒氣の爲めに比重の高くなつた海の水は、

凍りかゝつた油のやうな重さで、物凄い印度藍の底の方に、雲間を漏れる日光で鈍く光る配繩の餌を呑み込んで行く。

今まで花のやうな模樣を描いて、海面の處々に日光を惠んでゐた空が、急にさつと薄曇ると、何處からともなく時雨のやうに霰が降つて來て海面を泡立たす。船と船とは、見る／＼薄い糊のやうな青白い膜に距てられる。君の周圍には小さな白い粒が乾き切つた音を立てて、慌だしく船板を打つ。君は小賢しい邪魔者から毛絲の襟卷きで包んだ顏をそむけながら、配繩を丹念に下ろし續ける。

すつと空が明るくなる。霰は何處かへ行つてしまつた。而して眞青な海面に、漁船は蔭になり日向になり、堅い輪郭を描いて、波にもまれながら淋しく漂つてゐる。

機嫌買ひな天氣は、一日の中に幾度となくかうした顏のしかめ方をする。而して日が西に廻るに從つてこの不機嫌は募つて行くばかりだ。寒暑をかまつてゐられない漁夫達も吹きざらしの寒さにはひるまずにはゐられない。配繩を投げ終ると、身ぶるひしながら五人の男は、舵座におこされた焜爐の火の圍りに慕ひ寄つて、大きなお櫃から握り飯を鷲掴みに掴み出して喰ひ貪る。港を出る時には一とかたまりになつてゐた友船も、今は木の葉のやうに小さく互々からかけ隔たつて、心細い弱々しさうな姿を、涯もなく露領に續く海原のこゝかしこに漂はせてゐる。三里の餘も離れた陸地は、高い山々の半腹から上だけを水の上に見せて、降り積んだ雪が、日を受けた所は銀のやうに、雲の蔭になつた所は鉛のやうに、妙に險しい輪郭を描いてゐる。

漁夫達は口を食物で頬張らせながら、昨日の漁の有樣や、今日の豫想やらをいかにも地味な口調で語り合つてゐる。さういふ時に君だけは自分が彼等の間に不思議な異邦人である事に氣付く。同じ艪を操り、同じ帆綱をあつかひながら、何んといふ悲しい心の距たりだらう。押し潰してしまはうと幾度試みても、すぐ後からまくしかゝつて來る藝術に對する執着をどうする事も出來なかつた。

とはいへ、飛行機の將校にすらならうといふ人の少い世の中に、生きては人の冒險心をそゝつて如何にも雄々しい賴み甲斐ある男と見え、死んでは萬人にその英雄的な最後を惜しみ仰がれ、遺族まで生活の保障を與へられる飛行將校にすらならうといふ人の少い世の中に　荒れても晴れても毎日々々、一命を投げてかゝつて、緊張し切つた終日の勞働に、玉の緒で炊き上げたやうな飯を食つて一生を過ごして行かねばならぬ漁夫の生活。それには聊かも遊戯的な餘裕がないだけに、命とかけがへの眞實な仕事であるだけに、言葉には現はし得ない程の尊さと嚴粛さとを持つてゐる。況して彼等がこの目覺ましい健氣な生活を、已むを得ぬ、苦しい、然し當然な正しい生活として、誇りもなく、矯飾もなく、不平もなく、素直に受け取り、轅にかゝつた輓牛のやうな柔順な忍耐と覺悟とを以て、勇ましく迎へ入れてゐる、その姿を見ると、君は人間の運命の果敢なさと美しさとに同時に胸をしめ上げられる。

こんな事を思ふにつけて、君の心の眼にはまざ／＼と難破船の痛ましい光景が浮び出る。君は矢張り舵座に坐つて他の漁夫と同様に握り飯を食つてはゐるが何時の間にか人々の會話からは遠のいて、物思はしげに默りこくつてしまふ。而して果てしもなく回想の迷路を辿つて歩く。

六

それは或る年の三月に君が遭遇した苦がい經驗の一つだ。模範船からすぐ引き上げろと云

ふ信號がかゝつたので、今までも氣遣ひながら仕事を續けてゐた漁船は、打ち込み打ち込む波濤と戰ひながら配繩をたくし上げにかゝつたけれども、吹き始めた暴風は一秒毎に募るばかりで、船頭は已むなく配繩を切つて捨てさせなければならなくなつた。

「又はあ錢こ海さ捨てるだ」

と君の父上は心から歎息してつぶやきながら君に命じて配繩を切つてしまつた。

海の上は唯々狂ひ暴れる風と雪と波ばかりだ。縱横に吹きまく風が、思ひのまゝに海をひつぱたくので、つるし上げられるやうに高まつた三角波が互に競つて取つ組み合ふと、取つ組み合つただけの波は忽ち眞白な泡の山に變じて、その巓が風にちぎられながら、すさまじい勢ひで目あてもなく倒れかゝる。眼も向けられないやうな濃い雪の群れは、波を追つたり波から遁れたり、宛ら風の怒りを挑む小惡魔のやうに、面憎く舞ひながら右往左往に飛びはねる。吹き落して來た雲のちぎれは、大きな霧のかたまりになつて、海とすれ〳〵に波の上を矢よりも早く飛び過ぎて行く。

雪と浸水とで湖よりも滑る船板の上を君は這ふやうにして舳の方へにじり寄り、左の手に友綱の鐵環をしつかりと握つて腰を据ゑながら、右手に磁石をかまへて、大聲で船の進路を後ろに傳へる。二人の漁夫は大竿を風上になつた舷から一本突き出して、動かないやうに結びつける。船の顚覆を少しなりとも防がう爲めだ。君の兄上は帆綱を握つて、舵座にゐる父上の合圖通りに帆の上げ下げを誤るまいと一心になつてゐる。而してその間にもしつきりなしに打ち込む浸水を急がしく汲んでは舷から捨ててゐる。命懸けに呼びかはす互々の聲は妙に上ずつて、風に半分がた消されながら、それでも五人の耳には物凄くも心強くも響いて來る。

「おも舵つ—」

「右にかはすだつてえば—」

「右だ‥右だぞつ—」

「帆綱をしめろやつ」

「友船は見えねえかよう。ゐたらくつつけや—い—」

何う吹かうかと躊つてゐたやうな疾風がやがてしつかり方向を定めると、是れまで唯々あてもなく立ち騷いでゐたらしく見える三角波は、段々と丘陵のやうな紆濤に變つて行つた。言葉通りに水平に吹雪く雪の中を、後ろの方から、見上げるやうな大きな水の堆積が、想像も及はない早さでひた押しに押して來る。

「來たぞーつ」

緊張し切つた五人の心は又更に恐ろしい緊張を加へた。眩しい程早かつた船足が急によどんで、後ろに吸ひ寄せられて、艫が薄氣味惡く持ち上つて、船中に置かれた品物ががら〳〵と音をたてて前にのめり、人々も何かに取りついて腰のすわりを定めなほさなければならなくなつた瞬間に、船は一と煽り煽つて、物凄い不動から、奈落の底までもと凄じい勢で波の背を滑り下つた。同時に耳に餘る大きな音を立てて、紆濤は屛風倒しに倒れかゝる。湧きかへるやうな泡の混亂の中に船を揉まれながら行手を見ると、一旦壞れた波はすぐ又物凄い丘陵に立ちかへつて、眼の前の空を高くしきりながら、見る〳〵惡夢のやうに遠ざかつて行く。

ほつと安堵の息氣をつく隙も與へず、後ろを見れば又紆濤だ。水の山だ。その時、

「危ねえ—」

「ぼきりつ—」

と云ふけたゝましい聲を同時に君は聞いた。而して同時に野獸の敏感さを以て身構へしながら後ろを振り向いた。根元から折れて横倒しに倒れかゝる帆柱と、急に命を失つたやうに皺に

なつてたゝまる帆布と、その蔭から、飛び出しさうに眼をむいて、大きく口を開けた君の兄上の顔とが映つた。

君は咄嗟に身をかはして、頭から打つてかゝらうとする帆柱から身をかばつた。人々は騒ぎ立つて艪を構へようとひしめいた。けれども無二無三な船足の動搖には打ち勝てなかつた。帆の自由である限りは金輪際船を顛覆させないだけの自信を持つた人達も、帆を奪ひ取られては途方に暮れないではゐられなかつた。船足のとまつた船ではもう舵も利かない。船は波の動搖のまに／＼勝手放題に荒れ狂つた。

第一の紆濤、第二の紆濤、第三の紆濤には天運が船を顛覆から庇つてくれた。しかし特別に大きな第四の紆濤を見た時、船中の人々は觀念しなければならなかつた。

雪の爲めに薄くぼかされた眞黒な大きな山、その頂からは、火が燃え立つやうに、ちらりちらり白い波頭が立つては消え、消えては立ちして、瞬間毎に高さを增して行つた。吹き荒れる風すらがその爲めに遮りとめられて、船の周圍には氣味の惡い靜かさが滿ち擴がつた。それを見るにつけても波の反對の側をひた押しに押す風の激しさ強さが思ひやられた。艫を波の方へ向ける事も得しないで、力なく漂ふ船の前まで來ると、波の山は、いきなり、獲物に襲ひかゝる猛獸のやうに思ひきり脊延びをした。と思ふと、波頭は吹きつける風に反りを打つて鞺と崩れこんだ。

はつと思つたその時遲く、君等はもう眞白な泡に五體を引きちぎられる程もまれながら、船底を上にして顛覆した船體にしがみ附かうと藻搔いてゐた。見ると君の眼の屆く所には、君の兄上が頭からずぶ濡れになつて、ぬる／＼と手がかりのない舷に手をあてがつては滑り、手をあてがつては滑りしてゐた。君は大聲を揚げて何か云つた。兄上も大聲を揚げて何か云つてるらしかつた。然しお互に大きく口を開くのが見えるだけで、聲は少しも聞こえて來ない。

割合に小さな波が後から／＼押し寄せて來て、船を揺り上げたり押し卸したりした。その度毎に君達は船との緣を絕たれて、水の中に漂はねばならなかつた。而して君は、着込んだ厚衣の芯まで水が透つて鐵のやうに重いのにもかかはらず、一心不亂に動かす手足と同じ程の忙はしさで、眼と鼻位の近さに押し逼つた死から遁れ出る道を考へた。心の上澄みは妙におどおどとあわててゐる割合に、心の底は不思議に氣味惡く落ちついてゐた。それは君自身にすら物凄い程だつた。空と云ひ、海と云ひ、船と云ひ、君の思案と云ひ、一つとして眼あてなく動搖しないものはない中に、君の心の底だけが惡落ち付きに落ち付いて、「死にはしないぞ」とちやんと決め込んでゐるのが却つて薄氣味惡かつた。それは「死ぬのがいやだ」「生きてゐたい」「生きる餘席の有る限りは何うあつても生きなければならぬ」「死にはしないぞ」といふ本能の論理的結論であつたのだ。この恐ろしい盲目な生の事實が、而してその結論だけが、眼を見据ゑたやうに、君の心の底に落ち付き拂つてゐたのだつた。

君はこの物凄い無氣味な衝動に驅り立てられながら、水船なりにも顛覆した船を裏返す努力に力を盡した。殘る四人の心も君と變りはないと見えて、險しい困苦と戰ひながら、四人とも君のゐる舷の方へ集まつて來た。而して申し合はしたやうに、一緒に力を合せて、船の胴腹に這ひ上るやうにしたので、船は一方にかしぎ始めた。

「それ今一と息だぞつ」

君の父上が搾り切つた生命を聲にしたやうに叫んだ。一同は又懸命な力を籠めた。

折りよく――全く折りよく、天運だ――そ

の時船の横面に大きな波が浴びせこんで來たので、片方だけに人の重りの加はつた船はくるりと裏返つた。舷までひた／＼と水に埋もれながらも兎に角船は眞向きになつて水の面の浮び出た。船が裏返る拍子に五人は五人ながら、すつぽりと氷のやうな海の中にもぐり込みながら、急に勢ひづいて船の上に飛び上らうとした。然ししこたま着込んだ衣服は思ふざま濡れ透つてゐて、動ともすれば人々を波の中に吸ひ込まうとした。それが一方の舷に取りついて力を籠めれば又顚覆するにきまつてゐる。生死の瀬戸際にはまり込んでゐる人々の本能は恐ろしい程敏捷な働きをする。五人の中の二人は咄嗟に反對の舷に廻つた。而して互に顏を見合せながら、一度にやつと聲をかけ合せて半身を舷に乗り上げた。足の方を船底に吸ひ寄せられながらも、半身を水から救ひ出した人々の顏に現はれた何んとも云へない緊張した表情――それを君は忘れる事が出來ない。次ぎの瞬間にはわつと聲をあけて男泣きに泣くか、それとも我れを忘れて狂ふやうに笑ふか、どちらかをしさうな表情――それを君は忘れる事が出來ない。

凡てかうした懸命な努力は、降りしきる雪と、荒れ狂ふ水と、海面をこすつて飛ぶ雲とで表はされる自然の憤怒の中で行はれたのだ。怒つた自然の前には、人間は塵一とひらにも及ばない。人間などと云ふ存在は全く無視されてゐる。それにも係はらず君達は頑固に自分達の存在を主張した。雪も風も波も君達を考へにいれてはゐないのに、君達は強ひてもそれらに君達を考へさせようとした。

舷を乗り越して奔馬のやうな波頭がつぎ／＼にすり拔けて行く、それに腰まで浸しながら、君達は船の中に取り殘された得物を何んでも構はず取り上げて、それを働かしながら、死から遁るべき一路を切り開かうとした。或る者は艪を拾ひあてた。或るものは船板を、或るものは長いたわしの柄を、何ものにも換へがたい武器のやうにしつかり握つてゐた。而して舷から身を乗り出して、子供がするやうに、水を漕いだり、浸水をかき出したりした。

吹き落ちる氣配も見えない嵐は、果てもなく海上を吹きまくる。眼に見える限りは唯ゞ波頭ばかりだ。犬のやうな敏捷さで方角を嗅ぎ慣れてゐる漁夫達も、今は東西の定めやうがない。東西南北は一つの鉢の中で擦りまぜたやうに渾沌としてしまつた。

薄い暗黑。天からともなく地からともなく湧き起る大叫喚。外には何んにもない。

「死にはしないぞ」――そんなはめになつてからも、君の心の底は妙に落ち着いて、薄氣味惡くこの一事を思ひつゞけた。

君の傍には一人の若い漁夫がゐたが、その右の顳顬の邊から生々しい色の血が幾條にもなつて流れてゐた。それだけがはつきり君の眼に映つた。「死にはしないぞ」――それを見るにつけても君はまたしみ／＼とさう思つた。

かう云ふ必死な努力が何分續いたのか、何時間續いたのか、時間といふもののすつかり無くなつてしまつたこの世界では少しも分らない。然しながら兎に角君が何物も納れ得ない心の中に、疲勞といふ感じを覺え出して、これは困つた事になつたと思つた頃だつた、突然一人の漁夫が意味の分らない言葉を大きな聲で叫んだのは。今までも五人が五人ながら始終何か互に叫び續けてゐたのだつたが、この叫び聲は不思議に際立つて皆んなの耳に響いた。

殘る四人は思はず云ひ合はせたやうにその漁夫の方を向いて、その漁夫が眼をつけてゐる方へ視線を辿つて行つた。

船！……船！

濃い吹雪の幕のあなたに、ただかには見えないが、波の背に乘つて四十五度位の角度に船首を下に向けながら、帆を一ぱいに開いて、矢よりも早く走つて行く一艘の船！

それを見ると何かが君の胸をどきんと下からつき上げて來た。君は思はずすゝり泣きでもしたいやうな心持になつた。何はさて措いても君達はその船を目懸けて助けを求めながら近寄つて行かねばならぬ筈だつた。餘の人達も君と同樣、確かに何物かを眼の前に認めたらしく、奇怪な叫び聲を立てた漁夫が、眼を大きく開いて見つめてゐる邊を等しく見つめてゐた。その癖一人として自分等の船をそつちの方へ向けようとしてゐるらしい者はなかつた。それを訝かる君自身すら、心が唯わく〳〵と感傷的になりまさるばかりで、急いで働かすべき手は却つて萎えてしまつてゐた。

白い帆を一ぱいに開いたその船は、依然として船首を下に向けたまゝ、矢のやうに走つて行く。降りしきる吹雪を隔てた事だから、乘組みの人の數もはつきりとは見えないし、水の上に割合に高く現はれてゐる船の胴も、木の色といふよりは白堊のやうな生白さに見えてゐた。而して不思議な事には、波の腹に乘つても波の背に乘つても、舳は依然として下に向いたまゝである。風の強弱に應じて帆を上げ下げする樣子もない。いつまでも眼の前に見えながら、四十五度位に船首を下向きにしたまゝ、矢よりも早く走つて行く。

ぎよつとして氣が付くと、その船はいつの間にか水から離れてゐた。波頭から一二段も上と思はれる邊を船は傾いだまゝ矢よりも早く走つてゐる。君の頭はかーんとして竦み上つてしまつた。同時に船は段々大きくぼやけて行つた。何時の間にかその胴體は消えてなくなつて、唯眞白い帆だけが矢よりも早く動いて行くのが見やられるばかりだ、と思ふ間もなくその白い大きな帆さへが、降りしきる雪の中に薄れて行つて、やがてはかき消すやうに見えなくなつてしまつた。

怒濤。白沫。さつ〳〵と降りしきる雪。眼をかすめて飛び交はす雲の霧。自然の大叫喚……その眞中心に賴りなく揉みさいなまれる君達の小さな水船……やつぱりそれだけだつた。

生死の間にさまよつて、疲れながらも緊張し切つた神經に起る幻覺だつたのだと氣が付くと、君は急に一種の薄氣味惡さを感じて、力を一度にもぎ取られるやうに思つた。

先き程奇怪な叫び聲を立てたその若い漁夫は、やがて眠るやうにおとなしく氣を失つて、ひよろ〳〵とよろめくと見る間に、崩れるやうに胴の間にぶつ倒れてしまつた。漁夫達は何か魔でもさしたやうに思はず極度の不安を眼に現はして互に顏を見合せた。

「死にはしないぞ」

不思議な事にはそのぶつ倒れた男を見るにつけて、又漁夫達の不安げな容子を見るにつけて、君は懲りずまに薄氣味惡くさう思ひつゞけた。

君達がほんたうに一艘の友船と出喰はしたまでには、どれ程の時間が經つてゐたらう。然し兎に角運命は君達には無關心ではなかつたと見える。急に十倍も力を回復したやうに見えた漁夫達が、必死になつて君達の船とその船とを繋ぎ合はせ、半分がた凍つてしまつた帆を形ばかりに張り上げて、風の追ふまゝに船を走らせた時には、何んとも云へない幸福な感謝の心が、抑へても〳〵むら〳〵と胸の先きにこみ上げて來た。

着く處に着いてから思ひ存分の手當てをするから暫らく我慢してくれと心の中に詫びるやうに云ひながら、君は若い漁夫を卒倒したまゝ胴の間の片隅に抱きよせて、すぐ自分の仕事にか

かつた。

　やがて行手の波の上に、ぼんやりと雷電峠の突角が現はれ出した。山脚は海の中に、山頂は雲の中に、山腹は雪の中に揉みに揉まれながら、決して動かないものが始めて君達の前に現はれたのだ。それを見付けた時の漁夫達の心の勇み……魚が水に遇つたやうな、野獸が山に放たれたやうな、太陽が西を見付け出したやうな、その喜び……船の中の人達は思はず足爪立てんばかりに總立ちになつた。人々の心までが總立ちになつた。

「峠が見えたぞ……北に取れや舵を……隱れ岩さ乘り上げんな……雪崩にも打たせんなよう……」

　さういふ聲がてん〴〵に人々の口から喚かれた。それにしても船はひどく流されてゐたものだ。雷電峠から五里も離れた瀨にゐたものが、何時の間にかこんな處に來てゐるのだ。見る見る風と波とに押しやられて船は吸ひ付けられるやうに、吹雪の間から眞黑に天までそゝり立つ斷崖に近寄つて行くのを、漁夫達はさうはさせまいと、帆をたて直し、艪を押して、横波を喰はせながら船を北へと向けて行つた。

　陸地に近づくと波はなほ怒る。鬣を風に靡かして暴れる野馬のやうに、波頭は波の穗になり、波の穗は飛沫になり、飛沫はしぶきになり、しぶきは霧になり、霧はまた眞白い波になつて、息もつかせず後から後からと山裾に襲ひかゝつて行く。山裾の岩壁に打ちつけた波は、煮えくりかへつた熱湯をぶちつけたやうに、湯氣のやうな白沫を五丈も六丈も高く飛ばして、反りを打ちながら海の中にどつと崩れ込む。

　その猛烈な力を感じてか、斷崖の出鼻に降り積つて、徐々に斜面を辷り下つて來てゐた積雪が、地面との緣から離れて、すさまじい地響と共に、何百丈の高さから一氣になだれ落ちる。巓を離れた時には一握りの銀末に過ぎない。それが見る〳〵大きさを增して、隕星のやうに白い尾を長く引きながら、音も立てずに驀地に落して來る。あなやと思ふ間にそれは何十里にも亙る水晶の大簾だ。ど、ど、どどしーん

・さあーつ　。廣い海面が眼の前で眞白な平野になる。山のやうな五百重の大波は忽ち逐ひ退けられて漣一つ立たない。どつとそこを目懸けて狂風が四方から吹き起る……その物すさまじさ。

　君達の船は惡鬼に逐ひ迫られたやうにおびえながら、懸命に東北へと舵を取る。磁石のやうな陸地の吸引力からやう〳〵自由になる事の出來た船は、また搖れ動く波の山と戰はねばならぬ。

　それでも岩内の港が波の間に隱れたり見えたりし始めると、漁夫達の力は急に五倍にも十倍にもなつた。今までの人數の二倍も乘つてゐるやうに船は動いた。岸から打ち上げる目標の烽火が紫だつて暗黑な空の中でぱつと彈けると、鬖々として火花を散らしながら闇の中に消えて行く。それを目懸けて漁夫達は有る限りの艪を默つたまゝでひた漕ぎに漕いだ。その不思議な沈默が、互に呼び交はす慘たらしい叫び聲よりも却つて力強く人々の胸に響いた。

　船が波の上に乘つた時には、波打際に集まつて何か騷ぎ立ててゐる群衆が見やられるまでになつた。やがて嵐の間にも大砲のやうな音が船まで聞こえて來た。と思ふと救助繩が空をかける蛇のやうに曲りくねりながら、船から二三段距たつた水の中にざぶりと落ちた。漁夫達はその方へ船を向けようとひしめいた。第二の爆聲が聞こえた。繩は過たず船に屆いた。

　二三人の漁夫がよろけ轉びながらその繩の方へ駈け寄つた。

　音は聞こえずに烽火の火花は間を置いて怪

火のやうに遙かの空にぱつと咲いてはすぐ散つて行く。

船は繩に引かれてぐん／＼陸の方へ近寄つて行く。水底が淺くなつた爲めに無二無三に亂れ立ち騷ぐ波濤の中を、互にしつかりしがみ合つた二艘の船は、半分がた水の中を潛りながら、半死の有樣で進んで行つた。

君は始めて氣が付いたやうに年老いた君の父上の方を振り返つて見た。父上は膝から下を水に浸して舵座に坐つたまゝ、ぢつと君を見詰めてゐた。今まで絕えず君と君の兄上とを見詰めてゐたのだ。さう思ふと君は何んとも云へない骨肉の愛着にきびしく捕へられてしまつた。君の眼には不覺にも熱い淚が浮んで來た。君の父上はそれを見た。

「あなたが助かつてよござんした」

「お前が助かつてよかつた」

兩人の眼は咄嗟の間にも互に親しみを籠めてかう云ひ合つた。而してこの嬉しい言葉を語る眼から互々の眼は離れようとしなかつた。さうしたまゝで暫らく過ぎた。

君は滿足し切つて又働き始めた。もう眼の前には岩内の町が、汚く貧しいながらに、君に取つてはなつかしい岩内の町が、新らしく生れ出たまゝのやうに立ち列なつてゐた。水難救濟會の制服を着た人達が、右往左往に驅け廻る有樣もまざ／＼と眼に映つた。

何んとも云へない勇ましい新らしい力――上潮のやうに、腹のどん底からむら／＼と湧き出して來る新らしい力を感じて、君は「さあ來い」と云はんばかりに、艪をひしげる程押し掴んだ。而して矢聲をかけながら漕ぎ始めた。淚が後から／＼と君の頰を傳つて流れた。

啞のやうに今まで默つてゐた外の漁夫達の口からも、矢庭に勇ましい懸聲が溢れて出て君の聲に應じた。艪は梭のやうに波を切り破つて激しく働いた。

岸の人達が呼びおこす聲が君達の耳にも這入るまでになつた。と思ふと君は段々夢の中に引き込まれるやうなぼんやりした感じに襲はれて來た。

君はもう一度君の父上の方を見た。父上は舵座に坐つてゐる。然しその姿は前のやうに君に何等の逼つた感じを牽き起させなかつた。

やがて船底にじやり／＼と砂の觸れる音が傳はつた。船は滯りなく君が生れ君が育てられたその土の上に引き上げられた。

「死にはしなかつたぞ」

と君は思つた。同時に君の眼の前は見る／＼眞暗になつた。君はその後を知らない。

七

君は漁夫達と膝をならべて、同じ握り飯を口に運びながら、心だけはまるで異邦人のやうに距たつてこんなことを想ひ出す。何んと云ふ眞劍な而して險しい漁夫の生活だらう。人間と云ふものは、生きる爲めには、厭でも死の側近くまで行かなければならないのだ。謂はば捨て身になつて、こつちから死に近づいて、死の油斷を見すまして、かつぱらひのやうに生の一片をひつたくつて逃げて來なければならないのだ。死は知らんふりをしてそれを見やつてゐる。人間は奪ひ取つて來た生をたしなみながらしやぶるけれども、程なくその生はまた盡きて行く。さうすると又死の眼の色を見すまして、死の方に偸み足で近寄つて行く。ある者は死が餘り無頓着さうに見えるので、つい氣を許して少し大膽に高慢に振舞はうとする。と鬼一口だ。もうその人は地の上にはゐない。ある者は年と共に意氣地がなくなつて行つて、死の姿がいよ／＼恐ろしく眼に映り始める。而してそれに近寄る冒險を躊躇する。さうすると死はやをら物憂げ

な腰を上げて、そろ〳〵とその人に近寄つて來る。ガラ〳〵蛇に見こまれた小鳥のやうに、その人は逃げも得しないですくんでしまふ。次ぎの瞬間に、その人はもう地の上にはゐない。人の生きて行く姿はそんな風にも思ひなされる。實に果敢ないとも何んとも云ひやうがない。その中にも漁夫の生活の激しさは格別だ。彼等は死に對して喧嘩をしかけんばかりの切羽つまつた心持で出懸けて行く。陸の上では何んと云つても僞善も彌縫も或る程度までは通用する。ある意味では必要であるとさへも考へられる。海の上ではそんな事は薬の足しにしたくもない。眞裸な實力と天運ばかりが凡ての漁夫の賴みどころだ。その生活はほんとに悲壯だ。彼等がそれを意識せず、生きると云ふ事は凡てかうしたものだと諦めをつけて、疑ひもせず、不平も云はず、自分の爲めに、自分の養はなければならない親や妻や子の爲めに、毎日々々板子一枚の下は地獄のやうな境界に身を放げ出して、せつせと骨身を惜しまず働く姿はほんたうに悲壯だ。而して慘めだ。何んだつて人間と云ふものはこんなしがない苦勞をして生きて行かなければならないのだらう。

　世の中には、殊に君が少年時代を過ごした都會といふ所には、毎日々々安逸な生を食傷する程貪つて一生夢のやうに送つてゐる人もある。都會とは云ふまい。段々とさびれて行くこの岩內の小さな町にも、二三百萬圓の富を祖先から受け嗣いで、小樽には立派な別宅を構へてそこに妾を住まはせ、自分は東京の或る高等な學校を兎も角も卒業して、話でもさせればそんなに愚鈍にも見えない癖に、一年中是れと云つてする仕事もなく、退屈をまぎらす爲めの行樂に身を任せて、それでも使ひ切れない精力の餘剩を、富者の贅澤の一つである痼癖に漏らしてゐるのがある。君はその男をよく知つてゐる。小學校時代には教室まで一つだつたのだ。それが十年かそこらの年月の間に、二人の生活は恐ろしく懸け隔たつてしまつたのだ。君はそんな人達を一度でも羨ましいと思つた事はない。その人達の生活の內容の空しさを想像する十分の力を君は持つてゐる。而して彼等の導くやうな生活をするのは道理があると合點がゆく。金があつて才能が平凡だつたら勢ひあゝして僅かに生の倦怠から遁れる外はあるまいと密かに同情さへされぬではない。その人達が生に飽滿して暮すのはそれでいゝ、然し君の周圍にゐる人達が何故あんな恐ろしい生死の境の中から生きる事を僥倖しなければならない運命にあるのだらう。何故彼等はそんな境遇――死ぬ瞬間まで一分の隙を見せずに身構へてゐなければならないやうな境遇にゐながら、何故生きようとしなければならないのだらう。これは君に不思議な謎のやうな心地を起させる。ほんたうに生は死よりも不思議だ。

　その人達は他人眼にはどうしても不幸な人達と云はなければならない。然し君自身の不幸に比べて見ると、遙かに幸福だと君は思ひ入るのだ。彼等には兎に角さう云ふ生活をする事がそのまゝ生きる事なのだ。彼等は綺麗さつぱりと諦めをつけて、さういふ生活の中に頭からはまり込んでゐる。少しも疑つてはゐない。それなのに君は絕えずいら〳〵して、目前の生活を疑ひ、それに安住する事は出來ないでゐる。君は喜んで君の兩親の爲めに、君の家の苦しい生活の爲めに、君の巖乘な力強い肉體と精力とを提供してゐる。君の父上の假初めの風邪が癒つて、暫らくぶりで一緒に漁に出て、夕方になつて家に歸つて來てから、一家が睦まじくちやぶ臺のまはりを圍んで、暗い五燭の電燈の下で箸を取り上げる時、父上が珍らしく木彫のやうな固い顏に微笑を湛へて、

——今夜はあおまんまが甘えぞ——と云つて、飯茶碗を一寸押しいたゞくやうに眼八分に持ち上げるのを見る時なぞは、君は何んと云つても心から幸福を感ぜずにはゐられない。君は目前の生活を決して悔やんでゐる譯ではないのだ。それにも係はらず、君は何かにつけてすぐ暗い心になつてしまふ。

——畫が描きたい——

君は寢ても起きても祈りのやうにこの一つの望みを胸の奧深く大事にかき抱いてゐるのだ。その望みをふり捨てゝ仕舞へる事なら世の中は簡單なのだ。

戀——互に思ひ合つた戀と云つてもこれ程の執着はあり得まいと君は自身の心を憐れみ悲しみながらつくづくと思ふ事がある。君の厚い胸の奧からは深い溜息が漏れる。

雨の日などに土間に坐りこんで、兄上や妹さんなぞと一緒に、配繩の繕ひをしたりしてゐると、どうかした拍子に皆んなが仕事に中になつて、睦まじく交はしてゐた世間話すら途絶えさして、默りこんで手先ばかりを忙はしく働かすやうな時がある。かういふ瞬間に、君は我れにもなく手を休めて、茫然と夢でも見るやうに、君の見て置いた山の景色を思ひ出してゐる事がある。この山とあの山との距たりの感じは、界の線をかう云ふ曲線で力強く描きさへすれば、屹度いゝに違ひない、そんな事を一心に思ひ込んでしまふ。而して鋏を持つた手の先きで、自然に、想像した曲線を膝の上に幾度も描いては消し、描いては消ししてゐる。

又ある時は沖に出て、配繩をたぐり上げる大事な忙はしい時に、君は板子の上に坐つて、二本ならべて立てられたビール瓶の間から繩をたぐり込んで、釣りあげられた明鯛が瓶にせかれる爲めに、鉤の緣を離れて胴の間にぴつ〳〵跳ねながら落ちて行くのをぢつと見やつてゐる。而してクリムソンレーキを水に薄く溶かしたよりもつと鮮明な光を持つた鱗の色に吸ひつけられて、思はずぼんやりと手の働きをやめてしまふ。

これらの場合はつと我れに返つた瞬間ほど君を慘めにするものはない。居睡りしたのを見付けられでもしたやうに君はきよとんと恥かしさうにあたりを見廻して見る。ある時は兄上や妹さんが、暗まつて行く夕方の光に、なほ氣ぜはしく眼を繩によせて、せつせとほつれを解いたり、切れ目をつないだりしてゐる。ある時は漁夫達が、寒さに手を海老のやうに赤くへしまげながら、息せき切つて配繩をたくし上げてゐる　君は子供のやうに思はず耳許まで赤面する。

——何んといふだらしのない二重生活だ。俺れは一體俺れに與へられた運命の生活に男らしく服從する覺悟でゐるんぢやないか。それだのにまだ小つぼけな才能に未練を殘して、柄にもない野心を捨てかねてゐると見える。俺れはどつちの生活にも眞劍にはなれないのだ。俺れの畫に對する熱心だけから云ふと、畫かきになるためには十分過ぎる程なのだが、それだけの才能があるかどうかと云ふ事になると判斷のしやうが無くなる。勿論俺れに畫の描き方を敎へてくれた人もなければ、俺れの畫を見てくれる人もない。岩内の町でのたつた一人の話相手のKは、俺れの畫を見る度毎に感心してくれる。而してどんな苦しみを經ても畫かきになれと勸めてくれる。然しKは第一俺れの友達だし、第一に畫が俺れ以上に判るとは思はれぬ。Kの言葉は何時でも俺れを勵まし鞭つてくれる。然し俺れは何時でもその後ろに自惚れさせられてゐるのではないかといふ疑ひを持たずにはゐない。何うすればこの二重生活を突き拔ける事が出來るのだらう。生れから云つても、今ま

での運命から云つても、俺れは漁夫で一生を終へるのが相當してゐるらしい。Kもあの氣むづかしい父の下で調劑師で一生を送る決心を悲しくもしてしまつたらしい。俺れから見るとKこそは立派な文學者になれさうな男けれども、Kは誇張なく自分の運命を諦めてゐる。悲しくも諦めてゐる。待てよ、悲しいと云ふのはほんたうはKの事ではない。さう思つてゐる俺れ自身の事だ。俺れはほんたうに悲しい男だ。親父にも濟まない。兄や妹にも濟まない。この一生をどんな風に過ごしたら、俺れはほんたうに俺れらしい生き方が出來るのだらう」

そこに居ならんだ漁夫達の間に、どつしりと男らしい嚴乘な胡坐を組みながら、君は彼等とは全く異邦の人のやうな淋しい心持になつてこんなことを思ひつゞける。

やがて漁夫達はそこらを片付けてやをら立ち上ると、胴の間に降り積んだ雪を摘まんで、手の平で擦り合はせて、指に粘りついた飯粒を落した。而して配繩の引き上げにかゝつた。

西に舂き出すと日脚はどん〳〵歩みを早める。おまけに上の方からたるみなく吹き落して來る風に、海面は妙に彈力を持つた凪ぎ方をして、その上を霰まじりの粉雪がさーつと來ては過ぎ、過ぎては來る。君達は手袋を脱ぎ去つた手を眞赤にしながら、氷點以下の水でぐつしより濡れた配繩をその一端からたぐり上げ始める。三間四間置き位に、眼の下二尺もあるやうな鱈がぴち〳〵跳ねながら引き上げられて來る。

三十町に餘る位な配繩を全然たくしこんでしまふ頃には、海の上は少し墨汁を加へた牛乳のやうにぼんやり暮れ殘つて、そこらに眺めやられる漁船の或るものは、帆を張り上げて港を目指してゐたり、或るものは淋しい掛け聲をなほ海の上に響かせて、忙はしく配繩を上げてゐるのもある。夕暮れに海上に點々と浮んだ小船を見亙すのは悲しいものだ。そこには人間の生活がその果敢ない末梢を淋しくさらしてゐるのだ。

君達の船は、海風が凪ぎて陸風に變らない中にと帆を立て、艪を押して陸地を目懸ける。晴れては曇る雪時雨の間に、岩内の後ろに聳える山々が、高いのから先きに、水平線上に現はれ出る。船歌を唄ひつれながら、漁夫達は見慣れた山々の頂きを繋ぎ合せて、港のありかをそれと朧ろげながら見定める。そこには妻や母や娘等が、寒い濱風に吹きさらされながら、噂取り〳〵に汀に立つて君達の歸りを待ち詫びてゐるのだ。

是れも牛乳のやうな色の寒い夕霧に包まれた雷電峠の突角がいかつく大きく見え出すと、防波堤の突先きにある燈臺の灯が明滅して船路を照らし始める。毎日の事ではあるけれども、それを見ると、君と云はず人々の胸の中には、今日も先づ命は無事だつたといふ底深い喜びがひとりでに湧き出して來て、陸に對する不思議なノスタルヂヤが感ぜられる。漁夫達の船歌は一段といさましくなつて、君の父上は船の艫に漁獲を知らせる旗を揚げる。その旗がばた〳〵と風に煽られて音を立てる——その音がいゝ。

段々間近になつた岩内の町は、茶色い街燈の灯の外には、まだ燈火もともさずに黑く淋しく横たはつてゐる。雪のむら消えた砂濱には、今朝と同樣に女達が彼處此處にいくつかの固い群れになつて、石ころのやうにこちんと立つてゐる。白波がかすかな潮の香と音とをたてて、その足許に行つては消え、行つては消えするのが見え渡る。

帆が卸された。船は海岸近くの波に激しく動搖しながら、艫を海岸の方に向けかへて段々と汀に近寄つて行く。海産物會社の印袢天を着たり、犬の皮か何かを裏につけた外套を深々と

羽織つたりした男達が、右往左往に走りまはるその邊を目がけて、君の兄上が手慣れたさばき、、でさつと友綱を投げると、それがすぐ幾十人もの男女の手で引つ張られる。船は頻りと上下する舳に波のしぶきを喰ひながら、どん／＼砂濱に近寄つて、やがて疲れ切つた魚のやうに黑く横たはつて動かなくなる。

漁夫達は艪や舵や帆の始末を簡單にしてしまふと、舷を傳はつて陸に跳り上がる。海産物製造會社の人夫達は、漁夫達と入れ替つて、船の中に猿のやうに飛び込んで行く。而してまだ死に切らない鱈の尾をつかんで、礫のやうに砂の上に抛り出す。濱に待ち構へてゐる男達は、眼にもとまらない早業で數を數へながら、魚を畚の中にたゝき込む。漁夫達は吉例のやうに會社の數取人に對して何かと故障を云ひたててわめく。一日ひつ、、そりかんとしてゐた濱も、この暫らくの間だけは、さすがに賑やかな氣分になる。景氣にまき込まれて、女達の或る者まで男と一緒になつて喧嘩腰に物を云ひつのる。

然しこの華々しい賑はひも長い間ではない。命をなげ出さんばかりの險しい一日の勞働の結果は、僅か十數分の間で多愛もなく會社の人達に處分されてしまふのだ。君が君の妹を女達の群れの中から見付け出して、忙はしく眼を見交はし、言葉を交はす暇もなく、濱の上には亂暴に踏み荒らされた砂と、海藻と小魚とが砂まみれになつて殘つてゐるばかりだ。而して會社の人夫達は後をも見ずに又他の漁船の方へ走つて行く。

かうして岩内中の漁夫達が一生懸命に捕獲して來た魚は瞬く中にさらはれてしまつて、墨のやうに煙突から煙を吐く怪物のやうな會社の製造所へと運ばれて行く。

夕燒けもなく日は、、、とつぷりと暮れて、雪は紫に、灯は光なくたゞ赤くばかり見える初夜になる。君達は今朝の通りに幾かたまりかの黑い影になつて、疲れ切つた五體を銘々の家路に運んで行く。寒氣の爲めに五臟まで締めつけられたやうな君達は口をきくのさへ物惰くて出來ない。女達がはしやいだ調子で、その日の中に陸の上で起つた色々な出來事――色々な出來事と云つても、際立つて珍らしい事や面白い事は一つもない――を話し立てるのを、ぶつ、、つり押し黙つたまゝで聞きながら歩く。然しそれが何んといふ快さだらう。

然し君の家が近くなるにつれて妙に君の心を脅かし始めるものがある。それは近年引き續いて君の家に起つた種々な不幸がさせる業だ。長病ひの後に良人に先立つた君の母上に始まつて、君の家族の周圍には妙に死といふものが執念くつき纏はつてゐるやうに見えた。君の兄上の初生兒も取られてゐた。汗水が凝り固まつて出來たやうな銀行の貯金は、その銀行が不景氣のあふりを食つて破産した爲めに、水の泡になつてしまつた。命とかけがへの漁場が、間違つた防波堤の設計の爲めに、全然役に立たなくなつたのは前にも云つた通りだ。耐へ性のない人々の寄り集まりなら、身代が朽木のやうにがつくりと折れ倒れるのはありがちと云はなければならない。唯ゞ君の家では、父上と云ひ、兄上と云ひ、根性骨の强い正直な人達だつたので、凡ての激しい運命を眞正面から受取つて、骨身を惜しまず働いてゐたから、曲つたなりにも今日々々を事缺かずに過ごしてゐるのだ。然し君の家を襲つたやうな運命の壓迫はそこいら中に起つてゐた。軒を竝べて住みなしてゐると、どの家にもそれ相當な生計が立てられてゐるやうだけれども、一軒々々に立ち入つて見ると、この頃の岩内の町には鼻を襲くしなければならないやうな事がそこいら中にまくしあがつてゐた。ある家は默に立つて零落してゐた。嵐に

吹きちぎられた屋根板が、いつまでもそのまゝで雨の漏れるに任せた所も尠くない。眼鼻立ちの揃つた年頃の娘が、嫁入つたといふ噂もなく姿を消してしまふ家もあつた。立派に家框が立ち直つたと思ふとその家は代が替つたりしてゐた。そろ〳〵と地の中に引きこまれて行くやうな薄氣味惡い零落の兆候が町全體に何處となく漂つてゐるのだ。

人々は暗々裡にそれに脅かされてゐる。何時どんな事がまくし上るかも知れない――さういふ不安は絶えず君達の心を重苦しく押しつけた。家から火事を出すとか、家から出さないまでも類焼の災難に遇ふとか、持船が沈んでしまふとか、働き盛りの兄上が死病に取りつかれるとか、鰊の群來がすつかり外づれるとか、ワク船が流されるとか、色々に想像されるこれ等の不幸の一つだけに出喰はしても、君の家に取つては足腰の立たない打撃となるのだ。疲れた五體を家路に運びながら、而して馬鹿に建物の大きな割合に、それにふさはない暗い灯でそこと知られる柾葺きの君の生れた家を眼の前に見やりながら、君の心は運命に對する疑ひの爲めに妙におくれ勝ちになる。

それでも閾を跨ぐと土間の隅の竈には火が暖い光を放つて水飴のやうに軟かく撓ひながら燃えてゐる。どこからどこまで眞黒に煤けながら、だだつ廣い圍爐裡の間はきちんと片付けてあつて、居心よささうにしつらへてある。

嫂や妹の心づくしを君はすぐ感じてうれしく思ひながら、持つて歸つた漁具――寒さの爲めに凍り果てて、觸れ合へば石のやうに音を立てる――をそれ〴〵の處に始末すると、是れもから〳〵と音を立てる程凍り果てた仕事着を一枚々々脱いで、竈のあたりに懸けつらねて、普段着に着かへる。一日の寒氣に凍え切つた肉體はすぐ熱を吹き出して、顔などはのぼせ上る程ぽか〳〵して來る。普段着の輕い暖かさ、一椀の熱湯の味のよさ。

小氣味よい程したゝか夕餉を食つた漁夫達が、

「親方さんお休み」

と挨拶してぞろ〳〵出て行つた後には、水入らずの家族五人が、圍爐裡の火に眞赤に顔を照らし合ひながらさし向ひになる。戸外ではさらさらと音を立てて霰まじりの雪が降りつゞけてゐる。七時といふのにもうその界隈は夜更け同様だ。どこの家もしいんとして赤子の泣く聲が時折り聞こえるばかりだ。唯ゞ遠くの遊廓の方から、朝寝の出來る人達が寄り集まつてゐるらしい騒狂のさゞめきだけが途切れ〳〵に風に送られて傳はつて來る。

「俺らはお寢まるぞ」

僅かな晩酌に晝間の疲勞を存分に發して、眼をとろんこにした君の父上が、まづ圍爐裡の側に床をとらして横になる。やがて兄上と嫂とが次ぎの部屋に退くと、圍爐裡の側には、君と君の妹だけが殘るのだ。

時が靜かに淋しく、然し睦まじくじり〳〵と過ぎて行く。

「寢づに――」

針の手をやめて、君の妹はおとなしく顔を上げながら君に云ふ。

「先きに寢れ、いゝから――」

胡坐の膝の上にスケッチ帖を擴げて、と見かう見してゐる君は、振り向きもせずに、ぶつきらぼうにさう答へる。

「朝げに又眠むいとつてこづき起されべえに」

につと片頬に笑みを湛へて妹は君に惡戯らしい眼を向ける。

「何んの」

「何んのでねえよ、そんだもの見こくつて何んのたしになるべえさ。皆んなよつて笑つとるで

ねえか、仐の兄さんこと暇さへあれば見つたくもない畫べえ描いて、何んするだべつて」
君は思はず顏を上げる。
「誰れが云つた」
「誰れつて……皆んな云つてるだよ」
「お前もか」
「私は云はねえ」
「さうだべさ。それならそれでいゝでねえか。譯のわからねえ奴さ何んとでも云はせておけばいゝだ。これを見たか」
「見たよ。……莊園の裏から見た所だなあそれは。山は私氣に入つたども、雲が黑過ぎるでねえか」
「差出口はおけやい」
而して君達二人は顏を見合つて溶けるやうに笑み交はす。寒さはしん／＼と脊骨まで徹つて、戸外には風の落ちた空を默つて雪が降り積んでゐるらしい。
今度は君が發意する。
「おい寢べえ」
「兄さん先きに寢なよ」
「お前寢べし……明日又一番に起きるだから……」
「……戸締りは俺らがするに」
二人はわざと意趣に爭つてから、妹はとう／＼先きに寢る事にする。君はなほ半時間ほどスケッチに見入つて居たが、寒さに堪へ切れなくなつてやがて身を起すと、藁草履を引つかけて土間に降り立ち、竈の火許を十分に見届け、漁具の整頓を一わたり注意し、入口の戸に錠前を卸し、雪の吹きこまぬやう窓の隙間をしつかりと閉ぢ、而して又圍爐裡座に歸つて見ると、ちよろ／＼と燃えかすれた根粗朶の火に朧ろに照らされて、君の父上と妹とが爐縁の二方に寢くるまつてゐるのが物淋しく眺められる。一日々々生命から遠ざかつて行く老人と、若々しい生命の力に惱まされてゐるとさへ見える妹との寢顏は、明滅する焰の前に幻のやうな不思議な姿を描き出す。この老人の老先きをどんな運命が待つてゐるのだらう。この處女の未來の行末をどんな運命が待つてゐるのだらう。未來は凡て暗い。そこではどんな事でも起り得る。
君は二人の寢顏を見つめながらつく／＼とさう思つた。さう思ふにつけて、その人達の行末については、素直な心で幸あれかしと祈る外はなかつた。人の力と云ふものがこんな嚴肅な瞬間には一番便りなく思はれる。
君はスケッチ帖を枕許に引きよせて、垢染みた床の中にそのまゝもぐり込みながら、氷のやうな蒲團の冷たさが體の温みで暖まるまで、まじ／＼と眼を見開いて、君の妹の寢顏を、憐れみとも愛ともつかぬ涙ぐましい心持で眺めつづける。それは君が妹に對して幼少の時から何かの折に必ず抱くなつかしい感情だつた。
それもやがて疲勞の夢が押し包む。
今岩内の町に目覺めてゐるものは、恐らく朝寢坊の出來る富んだ怠け者と、燈臺守りと犬位のものだらう。夜は寒く淋しく更けて行く。

八

君。君はこんな私の自分勝手な想像を、私が文學者であると云ふ事から許してくれるだらうか。私の想像は後から後からと引き續いて湧いて來る。それが中つてゐようが中つてゐまいが、君は私がかうして筆取るその目論見に惡意のない事だけは信じてくれるだらう。而して無邪氣な微笑を以て、私の唯一の生命である空想が勝手次第に育つて行くのを見守つてゐてくれるだらう。私はそれに頼つて更に書き續けて行く。
鰊の漁期――それは北方に住む人の胸にのみしみ／＼と感ぜられるなつかしい季節の一つだ。この季節になると長く地の上を領してゐる

た冬が老いる。―北風も、雪も、圍爐裡も、綿入れも、雪鞋も、等しく老いる。一片の雲のたゝずまひにも、自然の目論見と豫言とを人一倍鋭敏に見て取る漁夫達の眼には、朝夕の空の模様が春めいて來た事をまざ〳〵と思にせる。北西の風が東に廻るにつれて、單色に堅く凍りついてゐた雲が、蒸されるやうにもや〳〵と崩れ出して、淡いながら暖かい色の晴雲に變つて行く。朝から風もなく晴れ渡つた午後なぞに波打際に出て見ると、稍〻綠色を帶びた青空の遙か遠くの地平線高く、幔幕を眞一文字に張つたやうな雪雲の堆積に日が射して、萬遍なく薔薇色に輝いてゐる。何んと云ふ美妙な美しい色だ。冬はあすこまで遠退いて行つたのだ。さう思ふと、不幸を突き拔けて幸福に出遇つた人のみが感ずる、あの過去に對する寛大な思ひ出が、ゆるやかに濱に立つ人の胸に流れこむ。五箇月の長い嚴冬を牛のやうに忍耐強く辛抱しぬいた北人の心に、もう少しでひねくれた根性にさへなり兼ねた北人の心に、春の約束がほのぼのと恵み深く響き始める。

　朝晩の凍み方は大して冬と變りはない。濡れた着物がべた〳〵と糊のやうに指先に粘りつく事は珍らしくない。けれども日が高くなると、さすがに何處か寒さにひゞがいる。濱邊は急に景氣づいて、納屋の中からは大釜や締め框が擔ぎ出され、ホック船やワク船をつとのやうに蔽うてゐた蓆が取りのけられ、旅烏と一緒に集まつて來た漁夫達が、綾を織るやうに雪の解けた砂濱を行き違つて、目まぐるしい活氣を見せ始める。

　鱈の漁獲が一先づ終つて、鰊の先驅もまだ群來て來ない。海に出て働く人達はこの間に少しの間息をつく暇を見出すのだ。冬の間から一心に覗つてゐたこの暇に、君は或る日朝からふいと家を出る。勿論懷ろの中には手馴れたスケッチ帖と一本の鉛筆とを潛まして。

　家を出ると往來には漁夫達や、女でめん（女勞働者）や、海産物の仲買ひと云つたやうな人々が賑やかに浮き〳〵して行つたり來たりしてゐる。根雪が氷のやうに磐になつて、その上を雪解の水が、一冬の塵埃に染まつて、泥炭地の湧き水のやうな色でどぶ〳〵と漂つてゐる。馬橇に材木のやうに大きな生々しい薪をしこたま積み載せて、その惡路を引つぱつて來た一人の年配な内儀さんは、君を認めると、引綱をゆるめて腰を延ばしながら、戯れた調子で大きな聲をかける。

「はれ兄さんもう濱さ行くだね―

――うんにや―

――濱で無え？　たら又山かい。魚を商賣にする人が暇さへあれば山さ突つぱしるだから怪體だあてばさ。いゝ人でもゐるだんべさ。は、は、は、……。うんすら好いてこすに、一押し手を貸すもんだよ―

一口はゞつたい事べ云ふと鰊様が群來てはくんねえぞ。をかしな婆様よなあお前も―

――婆様だ!?　人聞きの惡い事べ云はねえもんだ。人様が笑ふでねえか―

　實際この内儀さんの喋いだ雜言には往來の人達が面白がつて笑つてゐる。君は當惑して、橇の後ろに廻つて三四間ぐん〳〵押してやらなければならなかつた。

「そだ。そだ。兄さんいゝ力だ。濱まで押してくれたら己らお前に惚れてこすに―

　君は憫れて橇から離れて逃げるやうに行手を急ぐ。面白がつて二人の問答を聞いてゐた群集は思はず一度にどつと笑ひ崩れる。人々のその高笑ひの聲にまじつて、内儀さんがまた誰れかに話しかける大聲がのびやかに聞こえて來る。

――春が來るのだ―

　君は何につけても好意に滿ちた心持で この

人達を思ひやる。

やがて漁師町をつきぬけて、この市街では目ぬきな町筋に出ると、冬中空屋になつてゐた西洋風の二階建の雨戸が繰り開けられて、札幌の或る大きなデパートメント。ストアの臨時出店が開かれようとしてゐる。藁屑や新聞紙のはみ出た大きな木箱が幾個か店先に抛り出されて、廣告のけば〳〵しい色旗が、活動小屋の前のやうに立て列べてある。而して氣の利いた手代が十人近くも忙がしさうに働いてゐる。君はこの大きな臨時の店が・岩内中の小賣商人にどれ程の打撃であるかを考へながら、自分達の漁獲が、資本のない爲めに、外の土地から投資された海産物製造會社によつて捨て値で買ひ取られる無念さをも思はないではゐられなかつた。「大きな手には摑まれる」……さう思ひながら君はその店の角を曲つて割合にさびれた横町にそれた。

その横町を一町も行かない所に一軒の藥種店があつて、それにつゞいて小さな調劑所がしつらへてあつた。君はそこのガラス窓から中を覗いて見る。ずらつと列べた藥種瓶の下の調劑卓の前に、凭れのない扶抜きの事務椅子に腰かけて、黒い事務マントを羽織つた悒鬱さうな小柄な若い男が、一心に小形の書物を讀み耽つてゐる。それはKと云つて、君が岩内の町に持つてゐる唯ゝ一人の心の友だ。君はくすんだ硝子板に指先を持つて行つてほと〳〵と敲く。Kは機敏に書物から眼を擧げてこちらを振りかへる。而して驚いたやうに座を立つて來て硝子障子を開ける。

「何處に」

君は・默つたまゝ懷中からスケッチ帖を取り出して見せる。而して二人は互に理解するやうに微笑みかはす。

「君は今日は出られまい」

君は東京の遊學時代を記念する爲めに、大事にとつて置いた書生の言葉を使へるのが、この友達に會ふ時の一つの樂しみだつた。

「駄目だ。この頃は漁夫で岩内の人數が急に殖えたせゐか忙はしい。然し今日はまだ寒いだらう。手が自由に動くまい」

「何、畫は描けずとも山を見てゐればそれでいいだ、久しく出て見ないから」

「僕は今これを讀んでゐたが（と云つてKはミケランジェロの書翰集を君の眼の前にさし出して見せた）素晴らしいもんだ。かうしてゐてはいけないやうな氣がするよ。だけれども迚も及びもつかない。いゝ加減な藝術家と云ふものになつて納まつてゐるより、この薄暗い藥局で、默りこくつて一生を送る方が矢張り僕には似合はしいやうだ」

さう云つて君の友は、悒鬱な小柄な顏を一際悒鬱にした。君は勵ます言葉も慰める言葉も知らなかつた。而して心尤めするもののやうにスケッチ帖を懷ろに納めてしまつた。

「ぢや行つて來るよ」

「さうかい。そんなら歸りには寄つて話して行き給へ」

この言葉を取り交はして、君はその薄汚れたガラス窓から離れる。

南へ〳〵と道を取つて行くと、節婦橋と云ふ小さな木橋があつて、そこから先きにはもう家並みは續いてゐない。溝泥を捏ね返したやうな雪道は段々綺麗になつて行つて、地面に近い所が水になつてしまつた積雪の中に、君の古い兵隊長靴はやゝともするとすぽり〳〵と踏み込んだ。

雪に蔽はれた野は雷電峠の麓の方へ爪先上りに廣がつて、折から晴れ氣味になつた雲間を漏れる日の光が、地面の蔭日向を銀と藍とでくつきりと彩つてゐる。寒い空氣の中に、雪の照

り返しがかつ／＼と顏を火照らせる程強く射して來る。君の顏は見る／＼雪燒けがして眞赤に汗ばんで來た。今まで巖乘に被つてゐた頭巾をはねのけると、眼界は急に遙々と廣がつて見える。

何んと云ふ宏大な嚴かな景色だ。膽振の分水嶺から分れて西南を指す一連の山波が、地平から力強く伸び上つて段々高くなりながら、岩內の南方へ走つて來ると、そこに圖らずも陸の果てがあつたので、突然水際に走りよつた奔馬が、揃へた前脚を踏み立てて、思はず平頸を高く聳やかしたやうに、山は急にそゝり立つて、沸騰せんばかりに天を摩してゐる。今にもすさまじい響を立てて崩れ落ちさうに見えながら、何百萬年か何千萬年か、昔のまゝの姿でそゝり立つてゐる。而して今は唯ゝ一色の白さに雪で被はれてゐる。而して雲が空を動く度毎に、山は居住ひを直したかのやうに姿を變へる。君は久し振りで近々とその山を眺めるともう有頂天になつた。而して餘の事は綺麗に忘れてしまふ。

君は唯ゝ一圖にがむしやらに本道から道のない積雪の中に足を踏み入れる。行手に黑ずんで見える楡の切株の所まで腰から下まで雪に塗れて辿り着くと、君はそれに兵隊長靴を打ちつけて脚の雪を拂ひ落しながら佇む。而して眼を据ゑてもう一度雪野の果てに聳え立つ雷電峠を物珍らしく眺めて、魅入られたやうに茫然となつてしまふ。幾度見ても倦きる事のない山のたたずまひが、この前見た時と相違のある筈はないのに、全く異つた表情を以て君の眼に映つて來る。この前見に來た時は、それは嚴冬の一日のことだつた。矢張り今日と同じ處に立つて、凍える手に鉛筆を運ぶ事も出來ず、默つたまま立つて見てゐたのだつたが、その時の山は地面から靜々と盛り上つて、雪雲に閉された空を確かと摑んでゐるやうに見えた。その感じは恐ろしく執念深く力強いものだつた。君はその前に立つて押しひしやげられるやうな威壓を感じた。今日見る山はもつと素直な大さと豐かさとを以て靜かに君を掻き抱くやうに見えた。普段自分の心持が誰れからも理解されないで、一種の變屈人のやうに人々から取扱はれてゐた君には、此の自然が君に對して求めて來る親しみは、しみ／＼としたものだつた。君はまた更に眼を擧げて、なつかしい友に向ふやうにしみ／＼と山の姿を眺めやつた。

丁度親しい心と心とが出遇つた時に、互に感ぜられるやうな溫かい淚ぐましさが、君の雄々しい胸の中に湧き上つて來た。自然は生きてゐる。而して人間以上に強く高い感情を持つてゐる。君には同じ人間の語る言葉だが英語は解らない。自然の語る言葉は英語よりも遙かに君には解りいゝ。ある時には君が使つてゐる日本語そのものよりももつと感情の表現の豐かな平明な言葉で自然が君に話しかける。君はこの淚ぐましい心持を描いて見ようとした。

そして懷中からいつものスケッチ帖を取り出して切株の上に置いた。開かれた手帳と山とをかたみがはりに見やりながら、君は丹念に鉛筆を削り上げた。而して粗末な畫學紙の上には、逞ましく荒くれた君の手に似合はない纖細な線が描かれ始めた。

丁度人の肖像を描かうとする畫家が、その人の耳目鼻口をそれ／＼綿密に觀察するやうに、君は山の一つの皺一つの襞にも君だけが理解すると思へる意味を見出さうと努めた。實際君の眼には山の總ての面は、そのまゝ總ての表情だつた。日光と雲との明暗に彩られた雪の重りには、熱愛を以て見極めようと努める人にのみ說き明かされる貴い謎が潛めてあつた。君は一つの謎を解き得たと思ふ毎に、小躍

りしたい程の喜びを感じた。君の周圍には今はもう生活の苦情もなかつた。世間に對する不安も不幸もなかつた。自分自身に對するおくれ勝ちな疑ひもなかつた。子供のやうな快活な無邪氣な一本氣な心……君の唇からは知らず／＼輕い口笛が漏れて、君の手は躍るやうに調子を取つて、紙の上を走つたり、山の大さや角度を計つたりした。

さうして幾時間が過ぎたらう。君の前には「時」といふものさへなかつた。やがて一つのスケッチが出來上つて、輕い滿足の溜息と共に、働かし續けてゐた手をとめて、片手にスケッチ帖を取り上げて眼の前に据ゑた時、君は輕い疲勞――輕いと云つても、君が船の中で働く時の半日分の勞働の結果よりは輕くない――を感じながら、今日が仕事のよい收穫であれかしと祈つた。畫學紙の上には、吹き變はる風の爲めに亂れがちな雲の間に、その頂を見せたり隱したりしながら、眞白にそゝり立つ峠の姿と、その手前の廣い草の野のこゝかしこに叢立つ針葉樹の木立や、薄く炊煙を地に靡かして處々に立つ慘めな農家、是等の間を鋭い刃物で斷ち割つたやうな深い峽間、それ等が特種な深い感じを以て特種な筆觸で描かれてゐる。君は稍ゝ暫らくそれを見やつて微笑ましく思ふ。久し振りで自分の隱れた力が、哀れな道具立てによつてではあるが、兎に角形を取つて生れ出にと思ふと嬉しいのだ。

然しながら狐疑は待ちかまへてゐたやうに、君が滿足の心を十分味はふ暇もなく、足許から押し寄せて來て君を不安にする。君は自分に諂ふものに對して警戒の眼を向ける人のやうに、自分の滿足の心持を嚴しく調べてかゝらうとする。そして今描き上げた畫を容赦なく山の姿と較べ始める。

自分が滿足だと思つた所は何處にあるのだらう。それは謂はば自然の影繪に過ぎないではないか。向うに見える山はその儘寛大と希望とを象徴するやうな一つの生きた塊的であるのに、君のスケッチ帖に縮め込まれた同じものの姿は、何んの表情も持たない線と面との集まりとより君の眼には見えない。

この悲しい事實を發見すると君は躍起となつて次ぎのページをまくる。而して自分の心持を一際謙遜な、而して執着の強いものにし、粘り強い根氣でどうかして山をそのまゝ君の畫帖の中に生かし込まうとする。新たな努力が始まると、君はまた總ての事を忘れ果てて一心不亂に仕事の中に魂を打ち込んで行く。而して君が晝辨當を食ふ事も忘れて、四枚も五枚ものスケッチを作つた時には、もう大分日は傾いてゐる。

然しとてもそこを立ち去る事は出來ない程、自然は絶えず美しく蘇つて行く。朝の山には朝の命が、晝の山には晝の命があつた。夕方の山には又しめやかな夕方の山の命がある。山の姿は、その線と蔭日向とばかりでなく、色彩にかけても、日が西に廻ると素晴らしい魔術のやうな不思議を現はした。峠の或る部分は鋼鐵のやうに寒く硬く、また他の部分は氣化した色素のやうに透明で消え失せさうだ。夕方に近づくにつれて、稍ゝ煙り始めた空氣の中に、聲も立てずに蕭然と聳えてゐるその姿には、汲んでも／＼盡きない平明な神祕が宿つてゐる。見ると山の八合目と覺しい空高く、小さな黑い點が靜かに動いて輪を描いてゐる。それは一羽の大鷲に違ひない。眼を定めてよく見ると、長く伸ばした兩の翼を微塵も動かさずに、身體全體を稍ゝ斜めにして、大きな水の渦に乘つた枯葉のやうに、その鷲は靜かに伸びやかに輪を造つてゐる。山が物云はんばかりに生きてると見える君の眼には、この生物は却つて死物のや

うに思ひなされる。況してや平原の處々に散在する百姓家などは、山が人に與へる生命の感じに較べれば、慘めな幾個かの無機物に過ぎない。

晝は眞冬からは著しく延びてはゐるけれども、もう夕暮の色はどん／＼催して來た。それと共に肌身に寒さも加はつて來た。落日に彩られて光を呼吸するやうに見えた雲も、煙のやうな白と淡藍との蔭日向を見せて、雲と共に大空の半分を領してゐた山も、見る／＼寒い色に堅くあせて行つた。而して靄とも云ふべき薄い膜が君と自然との間を隔てはじめた。

君は思はず溜息をついた。云ひ解きがたい暗愁――それは若い人が戀人を思ふ時に、その戀が幸に幸福であるにもかゝはらず、胸の奧に感ぜられるやうな――が不思議に君を涙ぐましくした。君は鼻をすゝりながら、ばたんと音を立ててスケッチ帖を閉ぢて、鉛筆と一緒にそれを懷ろに納めた。凍てた手は懷ろの中の温味をなつかしく感じた。辨當は食ふ氣がしないで、切株の上からそのまゝ取つて腰にぶらさげた。半日立ち盡した脚は、動かさうとすると電氣をかけられたやうに痺れてゐた。やう／＼の事で君は雪の中から爪先をぬいて一歩々々本道の方へ歸つて行つた。遙か向うを見ると山から木材や薪炭を積み下ろして來た馬橇がちらほらと動いてゐて、馬の首につけられた鈴の音が冴えた響きをたてて幽かに聞こえて來る。それは漂浪の人が遙かに故郷の空を望んだ時のやうななつかしい感じを與へる。その消え入るやうな、淋しい、冴えた音が殊になつかしい。不思議な誘惑の世界から突然現世に歸つた人のやうに、君の心はまだ夢心地で、藝術の世界と現實の世界との淡々しい境界線を辿つてゐるのだ。而して君は歩きつゞける。

何時の間にか君は町に歸つて例の調劑所の小さな部屋で、友達のKと向き合つてゐる。Kは君のスケッチ帖を興奮した目つきで彼處此處見返してゐる。

「寒かつたらう」

とKが云ふ。君はまだ本當に自分に歸り切らないやうな顏付きで、

「うむ。……寒くはなかつた。……その線の鈍つてるのは寒かつたからではないんだ」

と答へる。

「鈍つてゐはしない。君がすつかり何もかも忘れてしまつて、駈けまはるやうに鉛筆をつかつた樣子がよく見えるよ。今日のは皆んな非常に僕の氣に入つたよ。君も少しは滿足したらう」

「實際の山の形に較べて見給へ。……僕は親父にも兄貴にもすまない」

と君は急いで言ひわけする。

「何んで？」

Kは怪訝さうにスケッチ帖から眼を上げて君の顏をしげ／＼と見守る。

君の心の中には苦がい灰汁のやうなものが湧き出て來るのだ。漁にこそ出ないが、本當を云ふと漁夫の家には一日として安閑としていゝ日とてはないのだ。今日も、君が一日を畫に暮らしてゐた間に、君の家では家中で忙はしく働いてゐたのに違ひないのだ。建網に損じの有る無し、網をおろす場所の海底の模樣、大釜を据ゑるべき位置、棧橋の改造、薪炭の買入れ、米鹽の運搬、仲買人との契約、肥料會社との交渉……その外鰊漁の始まる前に漁場の持主がして置かなければならない事は有り餘る程あるのだ。

君は自分が畫に親しむ事を道樂だとは思つてゐない。ゐない所か、君に取つてはそれは、生活よりも更に嚴肅な仕事であるのだ。然し自然と抱き合ひ、自然を畫の上に活かすといふ事は、君の住む所では君一人だけが知つてゐる

喜びであり悲しみであるのだ。外の人達は――君の父上でも、兄妹でも、隣り近所の人でも――唯々不思議な子供じみた戯れとよりそれを見てゐないのだ。君の考へ通りをその人達の頭の中にたんのうが出來るやうに打ちこむといふのは思ひも及ばぬ事だ。

君は理窟では何等恥づべき事がないと思つてゐる。然し實際では決してさうは行かない。藝術の神聖を信じ、藝術が實生活の上に玉座を占むべきものであるのを疑はない君も、その事柄が君自身に關係して來ると、思はず知らず足許がぐらついて來るのだ。

「俺れが藝術家であり得る自信さへ出來れば、俺れは一刻の躊躇もなく實生活を踏みにじつても、親しいものを犠牲にしても、歩み出す方向に歩み出すのだが…家の者共の實生活の眞劍さを見ると、俺れは自分の天才をさう易々と信ずる事が出來なくなつてしまふんだ。俺れのやうなものを描いてゐながら彼等に藝術家顔をする事が恐ろしいばかりでなく、僭越な事に考へられる。俺れはこんな自分が恨めしい、而して恐ろしい。皆んなはあれ程心から滿足して今日々々を暮してゐるのに、俺れだけは丸で陰謀でも企らんでゐるやうに始終暗い心をしてゐなければならないのだ。どうすればこの苦しさこの淋しさから救はれるのだらう」

平常のこの考へがKと向ひ合つても頭から離れないので、君は思はず親父にも兄貴にもすまない」と云つてしまつたのだ。

「どうして？」と云つたKも、君も、そのまゝ默つてしまつた。Kには、物を云はれないでも君の心はよく解つてゐたし、君は又君で、自分は綺麗に諦めながら何處までも君を藝術の捧誓者たらしめたいと熱望する、Kの淋しい、自己を滅した、溫い心の働きをしつくりと感じてゐたからだ。

君等二人の眼は悒鬱な熱に輝きながら、互に瞳を合はすのを憚るやうに、やゝ燃えかすれたストーヴの火を眺め入る。

さうやつて默つてゐる中に君はたまらない程淋しくなつて來る。自分を憐れむともKを憐れむとも知れない哀情がこみ上げて、Kの手を取り上げて撫でて見たい衝動を幾度も感じながら、女々しさを退けるやうにむづがゆい手を腕の所で堅く組む。

ふと煤けた天井から垂れ下つた電球が光を放つた。驚いて窓から見るともう往來は眞暗になつてゐる。冬の日の舂き隱れる早さを今さらに君はしみ〴〵と思つた。掃除の行き屆かない電球は埃と手垢とで殊更ら暗かつた。それが部屋の中をなほ悒鬱にして見せる。

「飯だぞ」

Kの父の荒々しい癇走つた聲が店の方から如何にも突慳貪に聞こえて來る。普段から自分の一人息子の悪友でもあるかの如く思ひなして、君が行くと曾て機嫌のいゝ顔を見せた事のないその父らしい聲だつた。Kは一寸反抗するやうな顔付きをしたが、陰性なその表情を益々陰性にしただけで、きぱ〳〵と盾をつく樣子もなく、父の心と君の心とを窺ふやうに聲のする方と君の方とを等分に見る。

君は長座をしたのがKの父の氣に障つたのだと推すると座を立たうとした。然しKはさういふ心持に君をしたのを非常に物足らなく思つたらしく、君にも是非夕食を一緒にしろと勸めてやまなかつた。

「ぢや僕は晝の辨當を喰はずにこゝに持つてるからこゝで食はうよ。遠慮なく濟まして來たまへ」

と君は云はなければならなかつた。

Kは夕食を君に勸めながら、ほんたうはそれを兩親に打ち出して云ふ事を非常に苦にして

ゐたらしく、さればとてまづい心持で君を還すのも堪へられないと思ひなやんでゐたらしかつたので、君の言葉を聞くと活路を見出したやうに少し顏を晴れ〴〵させて調劑室を立つて行つた。それも思へば一家の貧窮がKの心に染み渡つたしるしだつた。君は獨りになると段々暗い心になり增さるばかりだつた。

それでも夕飯といふ聲を聞き、戸の隙から漏れる燒魚の匂ひをかぐと、君は急に空腹を感じ出した。而して腰に結び下げた辨當包みを解いてストーヴに寄り添ひながら、椅子に腰かけたまゝの膝の上でそれを開いた。

北海道には竹がないので、竹の皮の代りにへぎで包んだ大きな握り飯はすつかり凍ててしまつてゐる。春立つた時節とは云ひながら一日寒空に、切株の上にさらされてゐたので、飯粒は一粒々々ぼろ〳〵に固くなつて、持つた手の中から零れ落ちる。試みに口に持つて行つて見ると米の持つ甘味はすつかり奪はれてゐて、無味な纖維のかたまりのやうな觸覺だけが冷たく舌に傳はつて來る。

君の眼からは突然、君自身にも思ひかけなかつた熱い淚がほろ〳〵とあふれ出た。ぢつと坐つたまゝではゐられないやうな寂寥の念が眞暗に胸中に廣がつた。

君はそつと座を立つた。而して辨當を元通りに包んで腰にさげ、スケッチ帖を懷ろにねぢこむと、こそ〳〵と入口に行つて長靴をはいた。靴の皮は夕方の寒さに凍つて鐵板のやうに堅く冷たかつた。

雪は燐のやうなかすかな光を放つて、眞黑に暮れ果てた家々の屋根を被うてゐた。淋しいこの横町は人の影も見せなかつた。暫らく步いて例のデパートメント・ストアの出店の角近くに來ると、一人の男の子がスケート下駄（下駄の底にスケートの齒をすげたもの）をはいて、できぼくに凍つた道の上をがり〳〵と音をさせながら走つて來た。その兒はスケートに夢中になつて君の側をすりぬけても君には氣が付いてゐないらしい。

「氷の上が辷れ出した時はほんとに夢中になるものだ」

君は自分の遠い過去を覗き込むやうに淋しい心の中にから思ふ。何事を見るにつけても君の心は痛んだ。

デパートメント・ストアの在る本通りに出ると打つて變つて賑やかだつた。電燈も急に明るくなつたやうに兩側の家を照らして、そこには店の者と購買者との影が綾を織つた。それは君に取つては、その場合の君に取つては、一つ一つ見知らぬものばかりのやうだつた。そこいらから起る人聲や荷橇の雜音などがぴん〳〵と君の頭を針のやうに刺戟する。見物人の前に引き出された見世物小屋の野獸のやうないらだたしさを感じて、君は眉根の所に電光のやうに起る痙攣を小うるさく思ひながら、むづかしい顏をしてさつさと賑やかな往來を突きぬけて漁師町の方へ急ぐ。

然し君の家が見え出すと君の足はひとりでにゆるみ勝ちになつて、君の頭は知らず識らず、尙ほ低くうなだれてしまつた。而して君は疑はしさうな眼を時々上げて、見知り越しの顏にでも遇ひはしないかと氣遣つた。然しこの界隈はもう靜まり返つてゐた。

「駄目だ」

突然君はから小さく云つて往來の眞中に立ち停つてしまつた。さうして立ちすくんだその姿の首から肩、肩から背中に流れる線は、若しそこに見守る人がゐたならば、思はずぞつとして異常な憂愁と力とを感ずるに違ひない不思議に強い表現を持つてゐた。

暫らく釘づけにされたやうに立ちすくんでゐ

た君は、やがて自分自身をもぎ取るやうに決然と肩をそびやかして歩き出す。

君は自分でも何處をどう歩いたか知らない。やがて君が自分に氣が付いて君自身を見出した所は、海産物製造會社の裏の險しい崕を登りつめた小山の上の平地だつた。

全く夜になつてしまつてゐた。冬は老いて春は來ない——その壞れ果てたやうな荒涼たる地の上高く、寒さをかすかな光にしたやうな雲のない空が、息氣もつかずに、凝然として延び廣がつてゐた。色々な光度と色々な光彩でちりばめられた無數の星々の間に、冬の空の誇りなる參宿が、微妙な傾斜を以て三つならんで、何かの凶徴のやうに一際ぎら／＼と光つてゐた。星は語らない。たゞ遙かな山裾から、干潮になつた無月の潮騷が、海妖の單調な誘惑の歌のやうに、なまめかしく撫でるやうに聞こえて來るばかりだ。風が落ちたので、凍り付いたやうに寒く沈み切つた空氣は、この海のさゝやきの爲めに鈍く顫へてゐる。

君はその平地の上に立つてぼんやりあたりを見廻してゐた。君の心の中には先程から恐ろしい企圖が眼ざめてゐたのだ。それは今日に始まつた事ではない。ともすれば君の油斷を見すまして、泥沼の中からぬるりと頭を出す水の精のやうに、その企圖は心の底から現はれ出るのだ。君はそれを極端に恐れもし、憎みもし、卑しみもした。男と生れながら、そんな誘惑を感ずる事さへ、やくざな事だと思つた。然し一旦その企圖が頭を擡げたが最後、君は魅入られた者のやうに、藻搔き苦しみながらもじり／＼とそれを成就する爲めには凡てを犧牲にしても悔いないやうな心になつて行くのだ、その恐ろしい企圖とは自殺する事なのだ。

君の心は妙にしいんと底冷えがしたやうに棘々しく澄み切つて、君の眼に映る外界の姿は突然全く表情を失つてしまつて、固い、冷たい、無慈悲な物の積み重なりに過ぎなかつた。無際限な唯ゝ一つの荒廢——その中に君だけが呼吸を續けてゐる、それが堪らぬ程淋しく恐ろしい事に思ひなされる荒廢が君の上下四方に廣がつてゐる。波の音も星の瞬きも、夢の中の出來事のやうに、君の知覺の遠い／＼末梢に、感ぜられるともなく感ぜられるばかりだつた。凡ての現象がてん／＼ばら／＼に互の連絡なく散らばつてしまつた。その中で君の心だけが張りつめて死の方へとじり／＼深まつて行かうとした。重錘をかけて深い井戸へ投げ込まれた燈明のやうに、深みに行く程君の心は、光を增しながら、感じを强めながら、最後には死といふその冷たい水の表面に消えてしまはうとしてゐるのだ。

君の頭が痺れて行くのか、世界が痺れて行くのか、ほんたうに判らなかつた。恐ろしい境界に臨んでゐるのだと幾度も自分を警めながら、君は平氣な氣持でとてつもない吞氣な事を考へたりしてゐた。而して君は夜の更けて行くのも寒さの募るのも忘れてしまつて、そろ／＼と山鼻の方へ歩いて行つた。脚の下遠く黑い岩濱が見えて波の遠音が響いて來る。

唯ゝ一飛びだ。それで煩悶も疑惑も綺麗さつぱり帳消しになるのだ。

「家の者たちはほんたうに氣が違つてしまつたとでも思ふだらう。……頭が先きにくだけるか知らん。足が先きに折れるか知らん—」

君は瞬きもせずにぼんやり崖の下を覗きこみながら、他人の事でも考へるやうに、さう心の中でつぶやく。

不思議な痺れはどん／＼深まつて行く。波の音などは少しづゝかすかになつて、耳に這入つたり這入らなかつたりする。君の心はたゞ一圖

に、眠り足りない人が思はず瞼をふさぐやうに、崖の底を目がけてまろび落ちようとする。危い……危い……他人の事のやうに思ひながら君の心は君の肉體を崖の際から眞逆樣に突き落さうとする。

突然君は跳ね返されたやうに正氣に歸つて後ろに飛び退ざつた。耳をつんざくやうな鋭い音響が君の神經をわなゝかしたからだ。

ぎよつと驚いて今更のやうに大きく眼を見張つた君の前には平地から突然下方に折れ曲つた崖の緣が・地球の傷口のやうに底深い口を開けてゐる。そこに知らず〳〵近づいて行きつゝあつた自分を省みて、君は本能的に身の毛をよだてながら正氣になつた。

鋭い音響は眼の下の海產物製造會社の汽笛だつた。十二時の交代時間になつてゐたのだ。遠い山の方からその汽笛の音にかすかに反響になつて、二重にも三重にも聞こえて來た。

もう自然はもとの自然だつた。いつの間にか元通りな崩壞したやうな淋しい表情に滿たされて涯しなく君の周圍に廣がつてゐた。君はそれを感ずると、ひたと底のない寂寥の念に襲はれ出した。男らしい君の胸をぎゆつと引きしめるやうにして・熱い涙が留度なく流れ始めた君は唯ゝ獨り眞夜中の暗闇の中にすゝり上げながら、眞白に積んだ雪の上に蹲つてしまつた、立ち續ける力さへ失つてしまつて。

九

君よ!!

この上君の內部生活を忖度したり揣摩したりするのは僕のなし得る所ではない。それは不可能であるばかりでなく、君を瀆すと同時に僕自身を瀆す事だ。君の談話や手紙を綜合した僕のこれまでの想像は謬つてゐない事を僕に信ぜしめる。然し僕はこの上の想像を避けよう。兎も角君はかゝる內部の葛藤の激しさに堪へかねて、去年の十月にあのスケッチ帖と眞率な手紙とを僕に送つてよこしたのだ。

君よ。然し僕は君の爲めに何を爲す事が出來ようぞ。君とお會ひした時も、君のやうな人が――全然都會の臭味から免疫されて、過敏な神經や過量な人爲的智見に煩はされず、強健な意力と、強靭な感情と、自然に哺まれた叡智とを以て自然を端的に見る事の出來る君のやうな土の子が――藝術の捧誓者となつてくれるのをどれ程望んだらう。けれども僕は喉まで出さうになる言葉を強ひて抑へて、總てを擲つて藝術家になつたらいゝだらうとは君に勸めなかつた。

それを君に勸めるものは君自身ばかりだ。君が唯ゝ獨りで忍ばなければならない煩悶――それは痛ましい陣痛の苦しみであるとは云へ、それは君自身の苦しみ・君自身で癒さなければならぬ苦しみだ。

地球の北端――そこでは人の生活が、荒くれた自然の威力に壓倒されて、瘦地におとされた雜草の種子のやうに弱々しく頭を擡げてゐ、人類の活動の中心からは見逃がされる程隔たつた地球の北端の一つの地角に、今、一つのすぐれた魂は惱んでゐるのだ。若し僕がこの小さな記錄を公けにしなかつたならば誰れもこのすぐれた魂の惱みを知るものはないだらう。それを思ふと凡ての現象は恐ろしい神祕に包まれて見える。如何なる結果を齎らすかも知れない恐ろしい原因は地球のどの隅つこにも隱されてゐるのだ。人は畏れないではゐられない。

君が一人の漁夫として一生を過ごすのがいゝのか、一人の藝術家として終身働くのがいゝのか、僕は知らない。それを輕々しく云ふのは餘りに恐ろしい事だ。それは神から直接君に示されなければならない。僕はその時が君の上

に一刻も早く來るのを祈るばかりだ。

而して僕は、同時に、この地球の上のそこ こに君と同じい疑ひと惱みとを持つて苦しんでゐる人々の上に最上の道が開けよかしと祈るものだ。この切なる祈りの心は君の身の上を知るやうになつてから僕の心の中に殊に激しく強まつた。

ほんたうに地球は生きてゐる。生きて呼吸してゐる。この地球の生まんとする惱み、この地球の胸の中に隱れて生れ出ようとするものの惱み——それを僕はしみ〴〵と君によつて感ずる事が出來る。それは湧き出で跳り上る強い力の感じを以て僕を涙ぐませる。

君よ！ 今は東京の冬も過ぎて、梅が咲き椿が咲くやうになつた。太陽の生み出す慈愛の光を、地面は胸を張り擴げて吸ひ込んでゐる。春が來るのだ。

君よ、春が來るのだ。冬の後には春が來るのだ。君の上にも確かに、正しく、力強く、永久の春が微笑めよかし……僕はたゞさう心から祈る。

（一九一八年四月、大阪毎日新聞に一部所載）

クララの出家

○

これも正しく人間生活史の中に起つた實際の出來事の一つである。

○

又夢に襲はれてクララは暗い中に眼をさました。妹のアグネスは同じ床の中で、姉の胸によりそつてすや〱と靜かに眠りつゞけてゐた。千二百十二年の三月十八日、救世主のエルサレム入城を記念する棕櫚の安息日の朝の事。

數多い見知り越しの男達の中で何う云ふ譯か三人だけがつぎ〱にクララの夢に現はれた。その一人は矢張りアッシジの貴族で、クララの家からは西北に當るヴィヤ・サン・パオロに住むモントルソリ家のパオロだつた。夢の中にも、腰に置いた手の、指から肩に至るしなやかさが眼についた。クララの父親は期待をもつた微笑を頰に浮べて、品よくひかへ目にしてゐるこの青年を、もつと大膽に振舞へと勵ますやうに見えた。パオロは思ひ入つたやうにクララに近づいて來た。而して佛蘭西から輸入されたと思はれる精巧な頸飾りを、美しい金象眼のしてある青銅の箱から取り出して、クララの頸に卷かうとした。上品で端麗な若い青年の肉體が近寄るに從つて、クララは甘い苦痛を胸に感じた。青年が近寄るなと思ふとクララはもう上氣して輕い眼眩に襲はれた。胸の皮膚は擽られ、肉はしまり、血は心臟から早く強く押し出された。胸から下の肢體は感觸を失つたかと思ふほどこはばつて、その存在を思ふ事にすら、消え入るばかりの羞恥を覺えた。毛の根は汗ばんだ。その美しい暗綠の瞳は涙よりももつと輝く分泌物の中に浮き漂つた。輕く開いた脣は熱い息氣の爲めにかさ〱に乾いた。脂汗の沁み出た兩手は氷のやうに冷えて、青年を押しもどさうにも、迎へ抱かうにも、力を失つて垂れ下つた。肉體はやゝともすると後ろに引き倒されさうになりながら、心は進二無二前の方に押し進まうとした。

クララは半分氣を失ひながらもこの恐ろしい魔術のやうな力に抵抗しようとした。破滅が眼の前に迫つた。深淵が脚の下に開けた。さう思つて彼女は何とかせねばならぬと悶えながらも何んにもしないでゐた。慌て戰く心は潮のやうに荒れ狂ひながら青年の方に押し寄せた。クララはやがてかのしなやかなパオロの手を自分の首に感じた。熱い指先と冷たい金屬とが同時に皮膚に觸れると、自制は全く失はれてしまつた。彼女は苦痛に等しい表情を顏に浮べながら、眼を閉ぢて前に倒れかゝつた。そこにはパオロの胸がある筈だ。その胸に抱き取られる時にクララは元のクララではなくなるべき筈だ。

もうパオロの胸に觸れると思つた瞬間は來て過ぎ去つたが、不思議にもその胸には觸れないでクララの體は抵抗のない空間に傾き倒れて行つた。はつと驚く暇もなく彼女は何處とも判らない深みへ驀地に陷つて行くのだつた。彼女は眼を開かうとした。然しそれは堅く閉ぢられて盲目のやうだつた。眞暗な闇の間を、颶風のやうな空氣の抵抗を感じながら、彼女は落ち放題に落ちて行つた。

―地獄に落ちて行くのだ―膽を裂くやうな心咎めが突然クララを襲つた。それは本當はクララ

が始めから考へてゐた事なのだ。十六の歳から神の子基督の婢女として生き通さうと誓つた、その神聖な誓言を忘れた報いに地獄に落ちるのに何んの不思議がある。それは覺悟しなければならぬ。それにしても聖處女によつて世に降誕した神の子基督の御顏を、金輪際拜し得られぬ苦しみは忍びやうがなかつた。クララはとんぼがへりを打つて落ちながら一心不亂に聖母を念じた。

ふと光つたものが眼の前を過ぎて通つたと思つた。と、その兩肱は棚のやうなものに支へられて、膝がしらも堅い足場を得てゐた。クララは改悛者のやうに啜泣きながら、棚らしいものの上に組み合せた腕の間に顏を埋めた。

泣いてる中にクララの心は忽ち輕くなつて、やがては十ばかりの童女の時のやうな何事も華やかに珍らしい氣分になつて行つた。突然華やいだ放膽な歌聲が耳に入つた。クララは首をあげて好奇の眼を見張つた。兩肱は自分の部屋の窓枠に、兩膝は使ひなれた樫の長椅子の上に乘つてゐた。彼女の髮は童女の習慣どほり、侍童のやうに、肩あたりまでの長さに切下にしてあつた。窓からは、朧夜の月の光に下に、この町の堂母なるサン・ルフヰノ寺院とその前の廣場とが、滑らかな陽春の空氣に柔らめられて、夢のやうに見渡された。寺院の北側をロッカ・マヂョーレの方に登る坂を、一つの集團となつてよろけながら、十五六人の華車な青年が、聲をかぎりに青春を讃美する歌をうたつて行くのだつた。クララはこの光景を窓から見おろすと、夢の中にありながら、これは前に一度目撃した事があるのにと思つてゐた。

さう思ふと、同時に窓の下の出來事はずんずんクララの思ふ通りにはかどつて行つた。

夏には夏の我れを待て。
春には春の我れを待て。
夏には隼を腕に据ゑよ。
春には花に口を觸れよ。
春なり今は。春なり我れは。
春なり我れは。春なり今は。
我がめぐはしき少女。
春なる、あゝ、この我れぞ春なる。

寢しづまつた町並みを、張りのある男聲の合唱が鳴りひゞくと、無頓着な無恥な高笑ひがそれに續いた。あの青年達はもう立ち止まる頃だとクララが思ふと、その通りに彼等は突然坂の中途で足をとめた。互に何か探し合つてゐるやうだつたが　やがて彼等は廣場の方に、「フランシス」「ベルナルドーネの若い騎士」「圓卓子の盟主」などと聲々に呼び立てながら、はぐれた伴侶を探しにもどつて來た。而して彼等は廣場の手前まで來た。而して彼等の方に二十二三に見える一人の青年が夢遊病者のやうに足もともしどろに歩いて來るのを見つけた。クララも月影でその青年を見た。それはコルソの往還を一つへだてたすぐ向うに住むベルナルドーネ家のフランシスだつた。華美を極めた晴着の上に定紋をうつた蝦茶のマントを着て、飮み仲間の主權者たる事を現はす笏を右手に握つた樣子は、ほかの青年達にまさつた無頼の風俗だつたが、その顏は痩せ衰へて物凄いほど青く、眼は足もとから二三間さきの石疊を孔のあく程見入つたまゝ瞬きもしなかつた。而してよろけるやうな足どりで、見えないものに引きずられながら、堂母の廣場の方に近づいて來た。それを見つけると、引き返して來た青年達は一度にいゝときをつくつて駈けよりざまにフランシスを取りかこんだ。「フランシス」「若い騎士」などとその肩まで搖つて呼びかけても、夢からさめる樣子はなかつた。青年達はそのていたらくに又どつと高笑ひをした。「新妻の事でも想像して魂がもぬけたな」一人がフラン

シスの耳に口をよせて叫んだ。フランシスはつ いた狐が落ちたやうにきよとんとして、石疊から眼をはなして、自分を圍むいくつかの酒にほてつた若い笑顏を苦々しげに見廻した。クララは即興詩でも聞くやうに興味を催して、窓から上體を乘り出しながらそれに眺め入つた。フランシスはやがて自分の纏つたマントや手に持つ笏に氣がつくと、始めて今まで耽つてゐた歡樂の想ひ出の絲口が見つかつたやうに苦笑ひをした。

「よく飮んで騷いだもんだ。さうだ、私は新妻の事を考へてゐる。然し私が貰はうとする妻は君等には想像も出來ない程美しい、富裕な、純潔な少女なんだ」

さう云つて彼れは笏を上げて青年達に一足先きに行けと眼で合圖した。青年達が騷ぎ合ひながら堂母の蔭に隱れるのを見屆けると、フランシスはいま／＼しげに笏を地に投げつけ、マントと晴着とをづた／＼に破りすてた。

次ぎの瞬間にクララは錠のおりた堂母の入口に身を投げかけて、犬のやうにまろびながら、悔恨の涙にむせび泣く若いフランシスを見た。彼女は奇異の思ひをしながらそれを眺めてゐた。春の月は朧ろに霞んでこの光景を初めから仕舞まで照してゐる。

寺院の戸が開いた。寺院の內部は闇で、その闇は戸の外に溢れ出るかと思ふほど濃かつた。その闇の中から一人の男が現はれた。十歲の童女から、いつの間にか、十八歲の今のクララになつて、年に相當した長い髮を編下げにして寢衣を着たクララは、恐怖の豫覺を持ちながらその男を見つめてゐた。男は入口にうづくまるフランシスに眼をつけると、きつとクララの方に鋭い眸を向けたが、フランシスの襟元を摑んで引きおこした。ぞろ／＼と華やかな着物だけが宙につるし上つて、肝腎のフランシスは溶けたのか消えたのか、影も形もなくなつてゐた。クララは恐ろしい衝動を感じてそれを見てゐた。と、やがてその男の手に殘つた着物が二つに分れて、一つはクララの父となり、一つは母となつた。而して二人の間に立つその男は、クララの許婚のオッタヴィアナ・フォルテブラッチョだつた。三人はクララの立つてゐる美しい芝生より一段低い沼地がかつた黑土の上に單調に、づらつとならんで立つてゐた——父は脅かすやうに、母は歎くやうに、男は怨むやうに。戰の街を幾度もくゞつたらしい、日に燒けて男性的なオッタヴィアナの顏は、飽く事なき功名心と、強い意志と、生一本な氣性とで、固い輪郭を描いてゐた。而してその上を貴族的な誇りが包んでゐた。今まで誰れの前にも弱味を見せなかつたらしいその顏が、恨みを含んでぢつとクララを見入つてゐた。クララは許婚の仲であるくせに、而してこの青年の男らしい强さを尊敬してゐるくせに、その愛をおとなしく受けようとはしなかつたのだ。クララは夢の中にありながら生れ落ちるとから神に獻げられてゐたやうな不思議な自分の運命を思ひやつた。晩かれ早かれ生みの親を離れて行くべき身の上も考へた。見ると三人は自分の方に手を延ばしてゐる。而してその足は黑土の中にじり／＼と沈みこんで行く。脅かすやうな父の顏も、歎くやうな母の顏も、怨むやうなオッタヴィアナの顏も見る見る變つて、眼に逼る難儀を救つてくれと、恥も忘れて叫ばんばかりにゆがめた口を開いてゐる。然し三人とも聲は立てずに死のやうに靜かで陰欝だつた。クララは芝生の上からそれをたゞ眺めてはゐられなかつた。口まで泥の中に埋まつて、涙を一ぱいためた眼でぢつとクララに物を云はうとする三人の顏の外に、果てしのないその泥の沼には多くの男女の頭が靜かに沈んで行きつゝあるのだ。頭が沈みこむとぬるりと四方

からその跡を埋めに流れ寄る泥の動搖は身の毛をよだてた。クララは何もかも忘れて二人を救ふために泥の中に片足を入れようとした。

その瞬間に彼女は眞黄に照り輝く光の中に投げ出された。芝生も泥の海ももうそこにはなかつた。クララは眼がくらみながらも起き上らうともがいた。クララの胸を掴んで起させないものがあつた。クララはそれが天使ガブリエルである事を知つた。「天國に嫁ぐ爲めにお前は淨められるのだ」さう云ふ聲が聞こえたと思つた。同時にガブリエルは爛々と燃える炎の劍をクララの乳房の間からずぶりとさし通した。燃えさかつた尖頭は下腹部まで屆いた。クララは苦悶の中に眼をあげてあたりを見た。まぶしい光に明滅して、十字架にかゝつた基督の姿が厳かに見やられた。クララは有頂天になつた。全身は嘗て覺えのない苦しい快い感覺に木の葉の如くをのゝいた。喉も裂け破れる一聲に、全身に張り滿ちた力を搾り切らうとするやうな瞬間が來た。その瞬間にクララの夢はさめた。

クララはアグネスの眼をさまさないやうにそつと起き上つて窓から外を見た。眼の下には夢で見たとほりのルフヰノ寺院が暁闇の中に聳かな姿を見せてゐた。クララは扉をあけて柔かい春の空氣を快く吸ひ入れた。やがてポルタ・カプチイニの方にかすかな東明の光が漏れたと思ふと、救世主のエルサレム入城を記念する寺の鐘が一時に鳴り出した。快活な同じ鐘の音は、麓の町からも聞こえて來た、牡鷄が村から村に時鳴を啼き交はすやうに。

今日こそは出家して基督に嫁ぐべき日だ。その朝の淺い眠りを覺ました不思議な夢も、思ひ入つた心には神の御告けに違ひなかつた。クララは涙ぐましい、しめやかな心になつてアグネスを見た。十四の少女は神のやうに眠りつゞけてゐた。

部屋は靜かだつた。

○

クララは父母や妹達より少しおくれて、朝の禮拜に聖ルフヰノ寺院に出かけて行つた。在家の生活の最後の日だと思ふと、さすがに名殘が惜しまれて、彼女は心を凝らして化粧をした。「クララの光りの髪」とアッシジで歌はれたその髪を、眞珠紐で編んで後ろに垂れ、ヱネチヤの純白な絹を着た。家の者の居ない隙に、手早く、置手紙と形見の品物を取りまとめて机の引出しにしまつた。クララの眼にはあとから〳〵涙が湧き流れた。眼に觸れるものは何から何までなつかしまれた。

一人の婢女を連れてクララは家を出た。コルソの通りには織るやうに人が群れてゐた。春の日は麗かに輝いて祭日の人心を更に浮き立たした。男も女も僧侶もクララを振りかへつて見た。「光りの髪のクララが行く」さう云ふ聲があちらこちらで私語かれた。クララは心の中で主の祈りを念佛のやうに繰返し〳〵一向に眼の前を見つめながら歩いて行つた。この雜鬧な往來の中でも障碍になるものは一つもなかつた。廣い秋の野を行くやうに彼女は歩いた。

クララは寺の入口を這入るとまつすぐにシッフヰ家の座席に行つてアグネスの側に座を占めた。彼女はフォルテブラッチョ家の座席からオッタヴィアナが送る視線をすぐに左の頬に感じたけれども、もうそんな事に頓着はしてゐなかつた。彼女は座席につくと面を伏せて眼を閉ぢた。やゝともすると所も辨へずに熱い涙が眼がしらににじまうとした。それは悲しさの涙でもあり喜びの涙でもあつたが、同時にどちらでもなかつた。彼女は今まで知らなかつた涙が眼を熱くし出すと、妙に胸がわく〳〵して來て、急に深淵のやうな深い靜かさが心を襲つた。ク

ララは明かな意識の中にありながら、凡てのものが夢のやうに見る〳〵彼女から離れて行くのを感じた。無一物な清浄な世界にクララの魂だけが唯〻一つ感激に震へて燃えてゐた。死を宣告される前のやうな、奇怪な不安と沈静とが交る〴〵襲つて來た。不安が沈静に代る度にクララの眼には涙が湧き上つた。クララの處女らしい體は蘆の葉のやうに細かくをのゝいて居た。光のやうなその髪も亦細かに震へた。クララの手は自らアグネスの手を覓めた。

「クララ、あなたの手の冷たく震へる事」

「しつ、靜かに」

クララは頼りないものを頼りにしたのを恥ぢて手を放した、而して咽せる程な参詣人の人いきれの中で又孤獨に還つた。

「ホザナ……ホザナ……」

内陣から合唱が聞こえ始めた。會衆の動搖は一時に鎭まつて座席を持たない平民達は敷石の上に跪いた。開け放した窓からは、柔かい春の光と空氣とが流れこんで、壁に垂れ下つた旗や旒を靜かになぶつた。クララはふと眼をあげて祭壇を見た。花に埋められ香をたきこめられてビザンチン型の古い十字架聖像が奧深くすゑられてあつた。それを見るとクララは咽せ入りながら「アーメン」と心に稱へて十字を切つた。何んと云ふ貧しさ。そして何んと云ふ慈愛。

祭壇を見るとクララはいつでも十六歳の時の出來事を思ひ出さずにはゐなかつた。殊にこの朝はその回想が厳しく心に逼つた。

今朝の夢で見た通り、十歳の時眼のあたり目撃した、ベルナルドーネのフランシスの面影はその後クララの心を離れなくなつた。フランシスが狂氣になつたと云ふ噂も、父から勘當を受けて乞食の群れに加はつたと云ふ風聞も、クララの乙女心を不思議に強く打つて響いた。フランシスの事になるとシッフキ家の人々は父から下女の末に至るまで、いゝ笑ひ草にした。クララはさう云ふ雑言を耳にする度に、自分でそんな事を口走つたやうに顔を赤らめた。

クララが十六歳の夏であつた、フランシスが十二人の伴侶と羅馬に行つて、イノセント三世から、基督を模範にして生活する事と、寺院で説教する事との印可を受けて歸つたのは。この事があつてからアッシジの人々のフランシスに對する態度は急に變つた。ある秋の末にクララが思ひ切つてその説教を聞きたいと父に歎願した時にも、父は物好きな奴だと云つたばかりで別にとめはしなかつた。

クララの回想とはその時の事である。クララは矢張りこの堂母のこの座席に坐つてゐた。着物を重ねても寒い秋寒に講壇には眞裸なレオと云ふフランシスの伴侶が立つてゐた。男も女もこの奇異な裸形に奇異な場所で出遇つて笑ひくづれぬものはなかつた。卑しい身分の女などはあからさまに卑猥な言葉をその若い道士に投げつけた。道士は凡ての反感に打ち克つだけの熱意を以て語らうとしたが、それには未だ少し信仰が足りないやうに見えた。クララは顔を上げ得なかつた。

そこにフランシスが是れも裸形のまゝで這入つて來てレオに代つて講壇に登つた。クララはなほ顔を得上げなかつた。

—神、その獨子、聖靈及び基督の御弟子の頭なる法皇の御許しによつて、末世の罪人、神の召によつて人を喜ばす輕業師なるフランシスが善良なアッシジの市民に告げる。フランシスは今日教友のレオに堂母で説教するやうにと云つた。レオは神を語るだけの辯才を神から授かつてゐないと拒んだ。フランシスはそれなら裸かになつて行つて、體で説教しろと云つた。レオは雄々しくも裸かになつて出て行つた。偖て

レオが去つた後、レオに斯かる苦行を強ひながら、何事もなげに居殘つたこのフランシスを神は嚴しく鞭ち給うた。眼ある者は見よ。懺悔したフランシスは諸君の前に立つ。諸君はフランシスの裸形を憐れまるゝか。然らば諸君が眼を注いで見ねばならぬものが彼處にある。眼あるものは更に眼をあげて見よ」

　クララはいつの間にか男の裸體と相對してゐる事も忘れて、フランシスを見やつてゐた。フランシスは「眼をあげて見よ」と云ふと同時に祭壇に安置された十字架聖像を恭々しく指さした。十字架上の基督は痛ましくも痩せこけた裸形のまゝで會衆を見下ろしてゐた。二十八のフランシスは何處と云つて際立つて人眼を引くやうな容貌を持つてゐなかつたが、祈禱と、斷食と、勞働の爲めにやつれた姿は、靈化した彼れの心をそのまゝ寫し出してゐた。長い說教ではなかつたが、神の愛、貧窮の祝福などを語つて彼れがアーメンと云つて口をつぐんだ時には、人々の愛心がどん底からゆすりあげられて思はず互に固い握手をしてすゝり泣いてゐた。

　クララは人々の泣くやうには泣かなかつた。彼女は自分の眼が燃えるやうに思つた。

　その日彼女はフランシスに懺悔の席に列なる事を申しこんだ。懺悔するものはクララの外にも澤山居たが、クララはわざと最後を選んだ。クララの番が來て祭壇の後ろのアプスに行くと、フランシスはたゞ一人獸色と云はれる樺色の百姓服を着て、繩の帶を結んで、胸の前に組んだ手を見入るやうに首を下げて、壁添ひの腰かけにかけてゐた。クララを見ると手まねで自分の前にある椅子に坐れと指した。二人は向ひあつて坐つた。而して眼を見合はした。

　曇つた秋の午後のアプスは寒く淋しく暗み渡つてゐた。ステインド・グラスから漏れる光線は、いくつかの細長い窓を暗く彩つて、それがクララの髮の毛に來てしめやかに戲れた。恐ろしい程にあたりは物靜かだつた。クララの燃える眼は命の綱のやうにフランシスの眼にすがりついた。フランシスの眼は落ち着いた愛に滿ち滿ちてクララの眼をかき抱くやうにした。クララの心は醉ひしれて、フランシスの眼を通してその尊い魂を拜まうとした。やがてクララの眼に涙が溢れる程たまつた、と思ふと、ほろ〳〵と頰を傳つて流れはじめた。彼女はそれでも眞向にフランシスを見守る事をやめなかつた。かうして又いくらかの時が過ぎた。クララはたゞ默つたまゝで坐つてゐた。

「神の處女」

　フランシスはやがて嚴かにかう云つた。クララは眼を外にうつすことが出來なかつた。

「あなたの懺悔は神に達した。神は嘉し給うた。アーメン」

　クララはこの上控へてはゐられなかつた。椅子からすべり下りると敷石の上に身を投げ出して、思ひ存分泣いた。その小さい心臟は無上の歡喜の爲めに破れようとした。思はず身をすり寄せて、素足のまゝのフランシスの爪先に手を觸れると、フランシスは靜かに足を引きすざらせながら、いたはるやうに祝福するやうに、彼女の頭に輕く手を置いて間遠につぶやき始めた。小雨の雨垂れのやうにその言葉は、淸く、小さく鋭く、クララの心を打つた。

「何よりもいゝ事は心の淸く貧しい事だ」

　獨語のやうなさゝやきがかう聞こえた。而して暫らく沈默が續いた。

「人々は今のまゝで滿足だと思つてゐる。私にはさうは思へない。あなたもさうは思はない。神はそれをよしと見給ふだらう。兄弟の日、姉妹の月は輝くのに、人は輝く喜びを忘れてゐる。飛雀は歌ふのに人は歌はない。木は跳るのに人は跳らない。淋しい世の中だ」

又沈默

「沈默は貧しさ程に美しく尊い。あなたの沈默を私は美酒のやうに飲んだ」

それから恐ろしい程の長い沈默が續いた。突然フランシスは慄へる聲を押し鎭めながらつぶやいた。

「あなたは私を戀してゐる」

クララはぎよつとして更めて聖者を見た。フランシスは激しい心の動搖から咄嗟の間に立ちなほつてゐた。

「そんなに驚かないでもいゝ」

さういつて靜かに眼を閉ぢた。

クララは自分で知らなかつた自分の祕密をその時フランシスによつて而めて知つた。長い間の不思議な心の迷ひをクララは種々に解きわづらつてゐたが、それがその時始めて解かれたのだ。クララはフランシスの明察を何んと感謝していゝのか、どう詫びねばならぬかを知らなかつた。狂氣のやうな自分の泣き聲ばかりがクララの耳にやゝ暫らくいたましく聞こえた。

「わが神、わが凡て」

また長い沈默がつゞいた。フランシスはクララの頭に手を置きそへた。ゝ默禱してゐた。

「私の心もそのゝく。‥私はあなたに値しない。あなたは神に行く前に私に寄道した。‥‥さりながら愛によつてつまづいた優しい心を神は許し給ふだらう。私の罪をも亦許し給ふだらう」

かく云つてフランシスはすつと立ち上つた。而して今までとは打つて變つて神々しい威嚴でクララを壓しながら言葉を續けた。

「神の御名によりて命ずる。永久に神の清き愛兒たるべき處女よ。腰に帶して立て」

その言葉は今でもクララの耳に燒きついて消えなかつた。而してその時からもう世の常の處女ではなくなつてゐた。彼女はその時の回想に心を上ずらせながら、その時泣いたやうに激しく泣いてゐた。

ふと「クララ」と耳近く囁くアグネスの聲に驚かされてクララは顏を上げた。空想の中に描かれてゐたアプスの淋しさとは打つて變つて、堂内にはひし／＼と群集がひしめいてゐた。祭壇の前に集まつた百人に餘る少女は、棕櫚の葉の代りに、月桂樹の枝と花束とを高くかざしてゐた——夕榮えの雲が棚引いたやうに。クララの前にはアグネスを從へて白い衣を長く胸に垂れた盛裝の僧正が立つてゐる。クララが顏を上げると彼れは慈悲深げにほゝゑんだ。

「嫁ぎ行く處女よ。お前の喜びの涙に祝福あれ。この月桂樹は僧正によつて祭壇から特にお前に齎らされたものだ。僧正の好意と共に受けをさめるがいゝ」

クララが知らない中に祭事は進んで、最後の儀式即ち參詣の處女に僧正手づから月桂樹を渡して、救世主の人城を頌歌する場合になつてゐたのだ。而してクララだけが祭壇に來なかつたので僧正自らクララの所に花を持つて來たのだつた。クララが今夜出家するといふ手筈をフランシスから知らされてゐた僧正は、クララに他所ながら告別を與へるためにこの破格な處置をしたのだと氣が附くと、クララは又更に涙のわき返るのをとゞめ得なかつた。クララの父母は僧正の言葉をフォルテブラッチョとの縁談と取つたのだらう、笑みかまけながら挨拶の辭儀をした。

やがて百人の處女の喉から華々しい頌歌が起つた。シオンの山の凱歌を千年の後に反響さすやうな熱と喜びのこもつた女聲高音が内陣から堂内を震動さして響き渡つた。會衆は蠱惑されて聞き惚れてゐた。底の底から清められ深められたクララの心は、露ばかりの愛のあらはれにも嵐のやうに感動した。花の間に顏

を伏せて彼女は少女の歌聲に搖られながら、無我の祈禱に浸り切つた。

○

「クララ‥‥クララ」

クララは眼をさましてゐたけれども返事をしなかつた。幸に母のゐる方には後ろ向きに、アグネスに寄り添つて臥てゐたから、そのまゝ息氣を殺して默つてゐた。母は二人ともよく寢たもんだと云ふやうな事を、母らしい愛情に滿ちた言葉で云つて、何か衣裳らしいものを大椅子の上にそつくり置くと、忍び足に寢臺に近よつてしげ〳〵と二人の寢姿を見守つた。而して夜着をかけ添へて輕く二つ三つその上をたゝいてから靜かに部屋を出て行つた。

クララの枕はしぼるやうに涙に濡れてゐた。

無月の春の夜は次第に更けた。町の諸門をとぢる合圖の鐘は二時間も前に鳴つたので、コルソに集まつて賣買に忙がしかつた村の人々の聲高な騷ぎも聞こえず、軒なみの店ももう仕舞つて寢しづまつたらしい。女猫を慕ふ男猫の思ひ入つたやうな啼き聲が時折り聞こえる外には、クララの部屋の時計の錘子が靜かに下りて齒車をきしらせる音ばかりがした。山の上の春の空氣はなごやかに靜かに部屋に滿ちて、堂母から二人が持つて歸つた月桂樹と花束の香を隅々まで籠めてゐた。

クララは取りすがるやうに祈りに祈つた。眼をあけると間近にアグネスの眠つた顏があつた。クララを姉とも親とも慕ふ無邪氣な、素直な、天使のやうに淨らかなアグネス。クララがこの二三日やゝともすると眼に涙をためてゐるのを見て、自分も一緒に涙ぐんでゐたアグネス。‥‥そのアグネスの睫毛はいつでも涙で洗つたやうに美しかつた。殊に色白なその頰は寢入つてから健康さうに上氣して、その間に形よく盛り上つた小鼻は穩やかな呼吸と共に微細に震へてゐた。「クララの光りの髮、アグネスの光りの眼」と云はれた、無類な潤みを持つて童女にしてはどこか哀れな、大きなその眼は見る事が出來なかつた。クララは、見つめる程、骨肉のいとしさがこみ上げて來て、そつと掌で髮から頰を撫でさすつた。その手に感ずる暖かいなめらかな觸感はクララの愛欲を火のやうにした。クララは抱きしめて思ひ存分いとしがつてやりたくなつて半身を起して乘しかゝつた。同時にその場合の大事がクララを思ひとゞまらした。クララは肱をついて半分身を起したまゝで、アグネスを見やりながらほろ〳〵と泣いた。死んだ一人兒を母が撫でさすりながら泣くやうに。

彈條のきしむ音と共に時計が鳴り出した。クララは數を數へないでも丁度夜半である事を知つてゐた。而して涙を拭ひもあへず靜かに床からすべり出た。打ち合せておいた時刻が來たのだ。安息日が過ぎて神聖月曜日が來たのだ。

クララは床から下り立つと昨日堂母に着て行つたヱネチヤの白絹を着ようとした。それは花嫁にふさはしい色だつた。然し見ると大椅子の上に昨夜母の持つて來てくれた外の衣裳が置いてあつた。それはクララが好んで着た藤紫の一揃ひだつた。神聖月曜日にも聖ルフヰノ寺院で式があるから、昨日のものとは違つた服裝をさせようと云ふ母の心盡しがすぐ知れた。クララは嬉しく難有く思ひながらそれを着た。而して着ながら若し是れが兩親の許しを得た結婚であつたならばと思つた。父は恐らくあすこの椅子にかけて微笑しながら自分を見守るだらう。母と女中とは前に立ち後ろに立ちして化粧を手傳ふ事だらう。さう思ひながらクララは音を立てないやうに用心して、かけにくい背中のボタンをかけたりした。而していつもの習慣通りに小簞笥の引出しから頸飾りと指輪との入れてあ

る小箱を取り出したが、それはこの際になつて何んの用もないものだと氣が附いた。クララは不圖その寶玉に未練を覺えた。その一つ〳〵にはそれ〳〵の思ひ出がつきまつはつてゐた。クララは小箱の蓋に輕い接吻を與へて元の通りにしまひこんだ。淋しい花嫁の身じたくは靜かな夜の中に淋しく終つた。その中に心は段々落ち着いて力を得て行つた。こんなに泣かれてはいよ〳〵家を逃れ出る時にはどうしたらい〻だらうと思つた床の中の心配は無用になつた。沈んではゐるがしやんと張り切つた心持になつて、クララは部屋の隅の聖像の前に跪いて燭火を捧げた。而して靜かに身の來し方を顧みた。

幼い時からクララには云ひ現はし得ない不滿足が心の底にあつた。いら〳〵した氣分はよく髮の結ひ方、衣服の着せ方に小言を云はせた。さん〴〵小言を云つてから獨りになると何んとも云へない淋しさに襲はれて、部屋の隅でたゞ一人半日も泣いてゐた記憶も甦つた。クララはそんな時には大好きな母の顏さへ見る事を嫌つた。ましてや父の顏は野獸のやうに見えた。いまに誰れか來て私を助けてくれる。堂母の壁畫にあるやうな天國に連れて行つてくれるからい〻とさう思つた。色々な宗教畫が有る度に自分の行きたい所は何處だらうと思ひながら注意した。その中にクララの心の中には二つの世界が考へられるやうになりだした。一つはアッシジの市民が、僧侶をさへこめて、上から下まで生活してゐる世界だ。一つは市民等が信仰してゐるにせよ、ゐぬにせよ、敬意を捧げてゐる基督及び諸聖徒の世界だ。クララは第一の世界に生ひ立つて榮耀榮華を極むべき身分にあつた。第二の世界に何故渴仰の眼を向け出したか、クララ自身も分らなかつたが、當時ペルジヤの町に對して勝利を得て獨立と繁盛との誇りに賑やか立つたアッシジの辻を、豪奢の市民に立ち交りながら、「平和を求めよ而して永遠の平和あれ」と叫んで歩く名もない乞食の姿を彼女は何んとなく考へ深く眺めないではゐられなかつた。軈て死んだのか宗旨代へをしたのか、その乞食は影を見せなくなつて、市民は誰れ憚らず思ふさまの生活に耽つてゐたが、クララはどうしても父や父の友達などの送る生活に從つて活きようと思ふ心地はなかつた。その頃にフランシス――この間まで第一の生活の先頭に立つて雄々しくも第二の世界に盾をついたフランシス――が百姓の服を着て、子供等に狂人と罵られながらも、聖ダミヤノ寺院の再建勸進にアッシジの街に現はれ出した。クララは人知れずこの乞食僧の擧動を注意してゐた。その頃にモントルソリ家との婚談も持ち上つて、クララは度々自分の窓の下で夜おそく歌はれる夜曲を聞くやうになつた。それはクララの心を躍らし、ときめかした。同時にクララは何物よりもこの不思議な力を恐れた。

その時分クララは著者の知れない或る古い書物の中に下のやうな文句を見出した。

「肉に溺れんとするものよ。肉は靈への誘惑なるを知らざるや。心の眼鈍きものはまづ肉によりて愛に目ざむるなり。愛に目ざめてそを哺むものは靈に至らざればやまざるを知らざるや。されど心の眼さときものは肉に倚らずして直ちに愛の隱る〻所を知るなり。聖處女の肉によらずして救主を孕み給ひし如く、汝等心の眼さときものは聖靈によりて諸善の胎たるべし。肉の世の醜きに恐る〻事勿れ。一度恐れざれば汝等は神の恩惠によりて心の眼さとく生れたるものなることを覺るべし」

クララは幾度もそこを讀み返した。彼女の迷ひはこの珍らしくもない句によつて不思議に晴れて行つた。而してフランシスに對して好意を

持ち出した。フランシスを辯護する人がありでもすると嫉妬を感じないではゐられない程好意を持ち出した。その時からクララは凡ての緣談を顧みなくなつた。フォルテブラッチョ家との婚約を父が承諾した時でも、クララは一應辭退しただけで、跡は成行きにまかせてゐた。彼女の心はそんな事には止つてはゐなかつた。唯々心を籠めて淨い心身を基督に獻げる機ばかりを覗つてゐたのだ。その中に十六歳の秋が來て、フランシスの前に懺悔をしてから、彼女の心は全く肉の世界から逃れ出る事が出來た。それからの一年半の長い〳〵天との婚約の試煉も今夜で果てたのだ。是れからは一人の主に身も心も獻げ得る嬉しい境涯が自分を待つてゐるのだ。

クララの顏はほてつて輝いた。聖像の前に最後の祈りを捧げると、いそ〳〵として立ち上つた。而して鏡を手に取つて近々と自分の顏を寫して見た。それが自分の肉との最後の別れだつた。彼女の眼にはアグネスの寢顏がひ附くやうに可憐に映いた。クララは靜かに寢床に近よつて、自分の賦てゐた跡に堂母から持ち歸つた月桂樹の枝を敷いて、その上に聖像を置き、そのまはりを花で飾つた。而してもう一度聖像に祈禱を捧げた。

「御心ならば、主よ、アグネスをも召し給へ」

クララは輕くアグネスの額に接吻した。もう思ひ殘す事はなかつた。

ためらふ事なくクララは部屋を出て、父母の寢室の前の床板に熱い接吻を殘すと、戸を開けてバルコンに出た。手欄から下をすかして見ると、暗の中に二人の人影が見えた。「アーメン」と云ふ重い聲が下から響いた。クララも「アーメン」と云つて應じながら用意した綱で道路に降り立つた。

空も路も暗かつた。三人はポルタ・ヌオバの門番に賂ひして易々と門を出た。門を出るとウムブリヤの平野は眞暗に遠く廣く眼の前に展け渡つた。モンテ・ファルコの山は平野から暗い空に崛起しておごそかにこつちを見つめてゐた。淋しい花嫁は頭巾で深々と顏を隱した二人の男に守られながら、すがりつくやうにエホバに祈禱を捧げつゝ、星の光を便りに山坂を曲りくねつて降りて行つた。

フランシスとその伴侶との禮拜所なるポルチウンクウラの小龕の灯が遙か下の方に見え始める坂の突角に、炬火を持つた四人の教友がクララを待ち受けてゐた。今まで氷のやうに冷たく落ち着いてゐたクララの心は、瀕死者がこの世に最後の執着を感ずるやうにきびしく烈しく父母や妹を思つた。炬火の光に照されてクララの眼は未練にももう一度涙でかゞやいた。いひ知れぬ淋しさがその若い心を襲つた。

「私の爲めに祈つて下さい」

クララは炬火を持つた四人にすゝり泣きながら歎願した。四人はクララを中央に置いて默つたまゝうづくまつた。

平原の平和な夜の沈默を破つて、遙か下のポルチウンクウラからは、新嫁を迎ふべき教友等が、心をこめて歌ひつれる合唱の聲が、靜かにかすかにおごそかに聞こえて來た。

（一九一七年八月一五日、於碓氷峠）

（一九一七年九月、太陽所載）

或る女

一

新橋を渡る時、發車を知らせる二番目の鈴が、霧とまではいへない九月の朝の、烟つた空氣に包まれて聞こえて來た。葉子は平氣でそれを聞いたが、車夫は宙を飛んだ。而して車が、鶴屋といふ町の角の宿屋を曲つて、いつでも人馬の群がるあの共同井戸のあたりを駈けぬける時、停車場の入口の大戸を閉めようとする驛夫と爭ひながら、八分がた閉まりかゝつた戸の所に突つ立つてこつちを見戍つてゐる青年の姿を見た。

「まあおそくなつて濟みませんでした事……まだ間に合ひますか知ら」

と葉子が云ひながら階段を昇ると、青年は粗末な麥稈帽子を一寸脫いで、默つたまゝ青い切符を渡した。

「おや何故一等になさらなかつたの。さうしないといけない譯があるから代へて下さいましな」

と云はうとしたけれども、火がつくばかりに驛夫がせき立てるので、葉子は默つたまゝ青年とならんで小刻みな足どりで、たつた一つだけ開いてゐる改札口へと急いだ。改札はこの二人の乘客を苦々しげに見やりながら、左手を延ばして待つてゐた。二人がてん〴〵に切符を出さうとする時、

「若奥様、これをお忘れになりました」

と云ひながら、羽被の紺の香ひの高くするさつきの車夫が、薄い大柄なセルの膝掛を肩にかけたまゝ慌てたやうに追つ駈けて來て、オリーヴ色の絹ハンケチに包んだ小さな物を渡さうとした。

「早く〳〵、早くしないと出つちまひますよ」

改札が堪らなくなつて癇癪聲をふり立てた。

青年の前で「若奥様」と呼ばれたのと、改札ががみ〳〵怒鳴り立てたので、針のやうに鋭い神經はすぐ彼女をあまのじやくにした。葉子は今まで急ぎ氣味であつた步みをぴつたり止めてしまつて、落ち付いた顏付で、車夫の方に向きなほつた。

「さう御苦勞よ。家に歸つたらね、今日は歸りが遲くなるかも知れませんから、お孃さんたちだけで校友會にいらつしやいつてさう云つておくれ。それから橫濱の近江屋——西洋小間物屋の近江屋が來たら、今日こつちから出かけたからつて云ふやうにつてね」

車夫はきよと〳〵と改札と葉子とを片身がはりに見やりながら、自分が汽車にでも乘りおくれるやうに慌ててゐた。改札の顏は段々險しくなつて、あはや通路を閉めてしまはうとした時、葉子はする〳〵とその方に近よつて、

「どうも濟みませんでした事」

といつて切符をさし出しながら、改札の眼の先きで花が咲いたやうに微笑んで見せた。改札は馬鹿になつたやうな顏付をしながら、それでもいゝおめ〳〵と切符に孔を入れた。

プラットフォームでは、驛員も見送人も、立つてゐる限りの人々は二人の方に眼を向けてゐた。それを全く氣付きもしないやうな物腰で、葉子は親しげに青年と肩を並べて、しづ〳〵と步きながら、車夫の屆けた包物の中に何があるか中ててみろとか、橫濱のやうに自分の心を牽く町はないとか、切符を一緒にしまつておいて

くれろとか云つて、音樂者のやうにデリケートなその指先で、わざとらしく幾度か青年の手に觸れる機會を求めた。列車の中からは有る限りの顔が二人を見迎へ見送るので、青年が物慣れない處女のやうに羞かんで、而かも自分ながら自分を怒つてゐるのが葉子には面白く眺めやられた。

一等近い二等車の昇降口の所に立つてゐた車掌は右の手をポケットに突つ込んで、靴の爪先きで待遠しさうに敷石を敲いてゐたが、葉子がデッキに足を踏み入れると、いきなり耳を劈くばかりに呼子を鳴らした。而して青年（青年は名を古藤といつた）が葉子に續いて飛び乘つた時には、機關車の應笛が前方で朝の町の賑やかなさざめきを破つて響き渡つた。

葉子は四角なガラスを篏めた入口の繰戸を古藤が勢よく開けるのを待つて、中に這入らうとして、八分通りつまつた兩側の乘客に稻妻のやうに鋭く眼を走らしたが、左側の中央近く新聞を見入つた、痩せた中年の男に視線がとまると、はつと立ちすくむ程驚いた。然しその驚きは瞬く暇もない中に、顔からも脚からも消え失せて、葉子は悪びれもせず、取りすましもせず、自信ある女優が喜劇の舞臺にでも現はれるやうに、輕い微笑を右の頰だけに浮べながら、古藤に續いて入口に近い右側の空席に腰を下ろすと、あでやかに青年を見返りながら、小指を何んとも云へない好い形に折り曲げた左手で、鬢の後れ毛をかき撫でる序でに、地味に裝つて來た黑のリボンに觸つて見た。青年の前に座を取つてゐた四十三四の脂ぎつた商人體の男は、いゝいゝあたふたと立ち上つて自分の後ろのシェードを下ろして、折ふし横ざしに葉子に照りつける朝の光線を遮つた。

紺の飛白に書生下駄をつつかけた青年に對して、素性が知れぬほど顔にも姿にも複雜な表情を湛へたこの女性の對照は、幼い少女の注意をすら牽かずにはおかなかつた。乘客一同の視線は綾をなして二人の上に亂れ飛んだ。葉子は自分が青年の不思議な對照になつてゐるといふ感じを快く迎へてでもゐるやうに、青年に對して殊更ら親しげな態度を見せた。

品川を過ぎて短いトンネルを汽車が出ようとする時、葉子はきびしく自分を見据ゑる眼を眉のあたりに感じて徐ろにその方を見かへつた。それは葉子が思つた通り、新聞に見入つてゐるかの痩せた男だつた。男の名は木部孤笻と云つた。葉子が車内に足を踏み入れた時、誰れよりも先きに葉子に眼をつけたのはこの男であつたが、誰れよりも先きに眼を外らしたのもこの男で、すぐ新聞を目八分にさし上げて、それに讀み入つて素知らぬふりをしたのに葉子は氣がついてゐた。而して葉子に對する乘客の好奇心が衰へ始めた頃になつて、彼れは本氣に葉子を見詰め始めたのだ。葉子は豫めこの刹那に對する態度を決めてゐたから慌てても騷ぎもしなかつた。眼を鈴のやうに大きく張つて、親しい媚びの色を浮べながら、默つたまゝで輕く點頭かうと、少し眉と顔とをそつちにひねつて、心持ち上向き加減になつた時、稻妻のやうに彼女の心に響いたのは、男がその好意に應じて微笑みかはす樣子のないと云ふ事だつた。實際男の一文字眉は深くひそんで、その兩眼は一と際鋭さを增して見えた。それを見て取ると葉子の心の中はかつとたつたが、笑みかまけた眸はそのまゝで「するする」と男の顔を通り越して、左側の古藤の血氣のいゝ頰のあたりに落ちた。古藤は繰戸のガラス越しに、切割りの崖を眺めていゝいゝつくねんとしてゐた。

「又何か考へていらつしやるのね」

葉子は痩せた木部にこれ見よがしと云ふ物腰で華やかに云つた。

古藤はあまりはずんだ葉子の聲にひかされて、いゝいゝ、まんじりとその顔を見守つた。その青年の單純な明らさまな心に、自分の笑顔の奧の苦い澁い色が見抜かれはしないかと、葉子は思はずたじろいだ程だつた。

「何んにも考へてゐやしないが、蔭になつた崖の色が、餘りに綺麗だもんで……紫に見えるでせう。もう秋がかつて來たんですよ」

青年は何も思つてゐはしなかつたのだ。

「本當にね」

葉子は單純に應じて、もう一度ちらつと木部を見た。痩せた木部の眼は前と同じに鋭く輝いてゐた。葉子は正面に向き直ると共に、その男の眸の下で、悒鬱な險しい色を引きしめた口のあたりに漲らした。木部はそれを見て自分の態度を後悔すべき筈である。

二

葉子は木部が魂を打ちこんだ初戀の的だつた。それは丁度日清戰爭が終局を告げて、國民一般は誰れ彼れの差別なく、この戰爭に關係のあつた事柄や人物やに事實以上の好奇心をそゝられてゐた頃であつたが、木部は二十五といふ若い齡で、ある大新聞社の從軍記者になつて支那に渡り、月並みな通信文の多い中に、際立つて觀察の飛び離れた心力のゆらいだ文章を發表して、天才記者といふ名を博して目出度く凱旋したのであつた。その頃女流基督教徒の先覺者として、基督教婦人同盟の副會長をしてゐた葉子の母は、木部の屬してゐた新聞社の社長と親しい交際のあつた關係から、ある日その社の從軍記者を自宅に招いて慰勞の會食を催した。その席で、小柄で白皙で、詩吟の聲の悲壯な、感情の熱烈なこの少壯從軍記者は始めて葉子を見たのだつた。

葉子はその時十九だつたが、既に幾人もの男に戀をし向けられて、その圍みを手際よく繰りぬけながら、自分の若い心を樂しませて行くタクトは十分に持つてゐた。十五の時に、袴を紐で締める代りに尾錠で締める工夫をして、一時女學生界の流行を風靡したのも彼女である。その紅い脣を吸はして首席を占めたんだと、嚴格で通つてゐる米國人の老校長に、思ひもよらぬ浮名を負はせたのも彼女である。上野の音樂學校に這入つてヴァイオリンの稽古を始めてから二箇月程の間にめき／＼上達して、教師や生徒の舌を捲かした時、ケーベル博士一人は澁い顔をした。而して或る日「お前の樂器は才で鳴るのだ。天才で鳴るのではない」と無愛想に云つて退けた。それを聞くと「さうで御座いますか」と無造作に云ひながら、ヴァイオリンを窓の外に抛りなげて、そのまゝ學校を退學してしまつたのも彼女である。基督教婦人同盟の事業に奔走し、社會では男勝りのしつかり者といふ評判を取り、家内では趣味の高い而して意志の弱い良人を全く無視して振舞つたその母の最も深い隱れた弱點を、拇指と食指との間にちやんと押へて、一歩もひけを取らなかつたのも彼女である。葉子の眼には凡ての人が、殊に男が底の底まで見すかせるやうだつた。葉子はそれまで多くの男を可なり近くまで潜り込ませて置いて、もう一歩といふ所で突き放した。戀の始めにはいつでも女性が祭り上げられてゐて、或る機會を絕頂に男性が突然女性を踏み躪るといふ事を直覺のやうに知つてゐた葉子は、どの男に對しても自分との關係の絕頂が何處にあるかを見ぬいてゐて、そこに來かかると情け容赦もなくその男を振り捨ててしまつた。さうして捨てられた多くの男は、葉子を恨むより、自分達の獸性を恥ぢるやうに見えた。而して彼等は等しく、葉子を見誤つてゐた事を悔いるやうに見えた。何故といふと彼等は

一人として葉子に對して怨恨を抱いたり、憤怒を漏らしたりするものはなかつたから。而して少しひがんだ者達は自分の愚を認めるよりも葉子を年不相應にませた女と見る方が勝手だつたから。

それは戀によろしい若葉の六月の或る夕方だつた。日本橋の釘店にある葉子の家には七八人の若い從軍記者がまだ戰塵の拔けきらないやうな風をして集まつて來た。十九でゐながら十七にも十六にも見れば見られるやうな華奢な可憐な姿をした葉子が、愼みの中にも才走つた面影を見せて、二人の妹と共に給仕に立つた。而して強ひられるまゝに、ケーベル博士から罵られたヴァイオリンの一手も奏でたりした。木部の全靈はたゞ一目でこの美しい才氣の漲り溢れた葉子の容姿に吸ひ込まれてしまつた。葉子も不思議にこの小柄な青年に興味を感じた。而して運命は不思議な惡戲をするものだ。木部はその性格ばかりでなく、容貌――骨細な、顏の造作の整つた、天才風に蒼白い滑らかな皮膚の、よく見ると他の部分の繊麗な割合に下顎骨の發達した――まで何處か葉子のそれに似てゐたから、自意識の極度に強い葉子は、自分の姿を木部に見付け出したやうに思つて、一種の好奇心を挑發せられずにはゐなかつた。木部は燃え易い心に葉子を燒くやうにかき抱いて、葉子は又才走つた頭に木部の面影を輕く宿して、その一夜の饗宴はさりげなく終りを告げた。

木部の記者としての評判は破天荒といつてもよかつた。苟も文學を解するものは木部を知らないものはなかつた。人々は木部が成熟した思想を提げて世の中に出て來る時の華々しさを噂し合つた。殊に日清戰役といふ、その當時の日本にしては絕大な背景を背負つてゐるので、この年少記者は或る人々からは英雄の一人とさへして崇拜された。この木部が度々葉子の家を訪れるやうになつた。その感傷的な、同時に何處か大望に燃え立つたやうなこの青年の活氣は、家中の人々の心を捕へないでは置かなかつた。殊に葉子の母が前から木部を知つてゐて、非常に有爲多望な青年だと讚めそやしたり、公衆の前で自分の子とも弟ともつかぬ態度で木部をもてあつかつたりするのを見ると、葉子は胸の中でせゝら笑つた。而して心を許して木部に好意を見せ始めた。木部の熱意が見る〳〵抑へがたく募り出したのは勿論の事である。

かの六月の夜が過ぎてから程もなく木部と葉子とは戀といふ言葉で見られねばならぬやうな間柄になつてゐた。かういふ場合葉子がどれ程戀の場面を技巧化し藝術化するに巧みであつたかは云ふに及ばない。木部は寢ても起きても夢の中にあるやうに見えた。二十五といふその頃まで、熱心な信者で、淸教徒風の誇りを唯一の立場としてゐた木部がこの初戀に於てどれ程眞劍になつてゐたかは想像する事が出來る。葉子は思ひもかけず木部の火のやうな情熱に燒かれようとする自分を見出す事が屢〻だつた。

その中に二人の間柄はすぐ葉子の母に感づかれた。葉子に對して豫てから或る事では一種の敵意を持つてさへゐるやうに見えるその母が、この事件に對して嫉妬とも思はれる程嚴重な故障を持ち出したのは、不思議でないと云ふべき境を通り越してゐた。世故に慣れ切つて、落ち付き拂つた中年の婦人が、心の底の動搖に刺戟されてたくらみ出すと見える殘虐な譎計は、年若い二人の急所をそろ〳〵と窺ひよつて、腸も通れと突き刺してくる。それを拂ひかねて木部が命限りに藻搔くのを見ると、葉子の心に純粹な同情と、男に對する無條件的な捨身な態度が生れ始めた。葉子は自分で造り出した自身の穽に多愛もなく醉ひ始めた。

葉子はこんな眼もくらむやうな晴れ〴〵しいものを見た事がなかつた。女の本能が生れて始めて芽をふき始めた。而して解剖刀のやうな日頃の批判力は鉛のやうに鈍つてしまつた。葉子の母が暴力では及ばないのを悟つてすかしつなだめつ、良人までを道具につかつたり、木部の尊信する牧師を方便にしたりして、あらん限りの智力を搾つた懐柔策も、何んの甲斐もなく、冷靜な思慮深い作戰計畫を根氣よく續ければ續ける程、葉子は木部を後ろにかばひながら、健氣にもか弱い女の手一つで戰つた。而して木部の全身全靈を爪の先き想ひの果てまで自分のものにしなければ、死んでも死ねない樣子が見えたので、母もとう〳〵我を折つた。而して五箇月の恐ろしい試煉の後に、兩親の立會はない小さな結婚の式が、秋の或る午後、木部の下宿の一間で執行はれた。而して母に對する勝利の分捕品として、木部は葉子一人のものとなつた。

　木部はすぐ葉山に小さな隱れ家のやうな家を見付け出して、二人は睦まじくそこに移り住む事になつた。葉子の戀は然しながらそろ〳〵と冷え始めるのに二週間以上を要しなかつた。彼女は競爭すべからぬ關係の競爭者に對して見事に勝利を得てしまつた。日淸戰爭といふものの光も太陽が西に沈む度每に減じて行つた。それ等はそれとして一番葉子を失望させたのは同棲後始めて男といふものの裏を返して見た事だつた。葉子を確實に占領したといふ意識に裏書された木部は、今までおくびにも葉子に見せなかつた女々しい弱點を露骨に現はし始めた。後ろから見た木部は葉子には取り所のない平凡な氣の弱い精力の足りない男に過ぎなかつた。筆一本握る事もせずに朝から晩まで葉子に膠着し、感傷的な癖に恐ろしく我儘で、今日々々の生活にさへ事缺きながら、萬事を葉子の肩になげかけてそれが當然な事でもあるやうな鈍感なお坊ちやん染みた生活のしかたが葉子の鋭い神經をいら〳〵させ出した。始めの中は葉子もそれを木部の詩人らしい無邪氣さからだと思つて見た。而してせつせ〳〵と世話女房らしく切り廻す事に興味をつないで見た。然し心の底の恐ろしく物質的な葉子にどうしてこんな辛抱がいつまでも續かうぞ。結婚前までは葉子の方から迫つて見たにも係はらず、崇高と見えるまでに極端な潔癖屋だつた彼れであつたのに、思ひもかけぬ貪婪な陋劣な情慾の持主で、而かもその慾求を貧弱な體質で表はさうとするのに出喰はすと、葉子は今まで自分でも氣が附かずにゐた自分を鏡で見せつけられたやうな不快を感ぜずにはゐられなかつた。夕食を濟ますと葉子はいつでも不滿と失望とでいら〳〵しながら夜を迎へねばならなかつた。木部の葉子に對する愛着が募れば募る程、葉子は一生が暗くなりまさるやうに思つた。かうして死ぬために生れて來たのではない筈だ。さう葉子はくさ〳〵しながら思ひ始めた。その心持が又木部に響いた。木部は段々監視の眼を以て葉子の一擧一動を注意するやうになつて來た。同棲してから半箇月もたゝない中に、木部はやゝもすると高壓的に葉子の自由を束縛するやうな態度を取るやうになつた。木部の愛情は骨に沁みる程知り拔きながら、鈍つてゐた葉子の批判力は又磨きをかけられた。その鋭くなつた批判力で見ると、自分と似寄つた姿なり性格なりを木部に見出すといふ事は、自然が巧妙な皮肉をやつてゐるやうなものだつた。自分もあんな事を想ひ、あんな事を云ふのかと思ふと、葉子の自尊心は思ふ存分に傷けられた。

　外の原因もある。然しこれだけで十分だつた。二人が一緒になつてから二箇月目に、葉子は突然失踪して、父の親友で、所謂物事のよく解る

高山といふ醫者の病室に閉ぢ籠もらしてもらつて、三日ばかりは食ふ物も食はずに、淺ましくも男の爲めに眼のくらんだ自分の不覺を泣き悔んだ。木部が狂氣のやうになつて、やうやく葉子の隱れ場所を見つけて會ひに來た時は、葉子は冷靜な態度でしら〴〵しく面會した。而して、あなたの將來のお爲めに乾度なりませんから一と何氣なげに云つて退けた。木部がその言葉に骨を刺すやうな諷刺を見出しかねてゐるのを見ると、葉子は白く揃つた美しい齒を見せて聲を出して笑つた。

葉子と木部との間柄はこんな多愛もない場面を區切りにしてはかなくも破れてしまつた。木部はあらんかぎりの手段を用ゐて、なだめたり、すかしたり、強迫までして見たが、凡ては全く無益だつた。一旦木部から離れた葉子の心は、何者も觸れた事のない處女のそれのやうにさへ見えた。

それから普通の期間を過ぎて葉子は木部の子を分娩したが、固よりその事を木部に知らせなかつたばかりでなく、母にさへ或る他の男によつて生んだ子だと告白した。實際葉子はその後、母にその告白を信じさす程の生活を敢へてしてゐたのだつた。然し母は眼敏くもその赤坊に木部の面影を探り出して、基督信徒にあるまじき惡意をこの憐れな赤坊に加へようとした。赤坊は女中部屋に運ばれたまゝ祖母の膝には一度も乘らなかつた。意地の弱い葉子の父だけは孫の可愛さからそつと赤坊を葉子の乳母の家に引き取るやうにしてやつた。而してそのみじめな赤坊は乳母の手一つに育てられて定子といふ六歲の童女になつた。

その後葉子の父は死んだ。母も死んだ。木部は葉子と別れてから、狂瀾のやうな生活に身を任せた。衆議院議員の候補に立つても見たり、純文學に指を染めても見たり、旅僧のやうな放浪生活も送つたり、妻を持ち子を成し、酒に耽り、雜誌の發行を企てた。而してその凡てに一々不滿を感ずるばかりだつた。而して葉子が久し振りで汽車の中で出遇つた今は、妻子を里に返してしまつて、或る由緖ある堂上華族の寄食者となつて、これと云つてする仕事もなく、胸の中だけには色々な空想を浮べたり消したりして、兎角回想に耽り易い日送りをしてゐる時だつた。

三

その木部の眼は執念くもつきまつはつた。然し葉子はそつちを見向かうともしなかつた。而して二等の切符でもかまはないから何故一等に乘らなかつたのだらう。かう云ふ事が乾度あると思つたからこそ、乘り込む時もさう云はうとしたのだのに、氣が利かないつちやないと思ふと、近頃になく起きぬけから冴え〴〵してゐた氣分が、沈みかけた秋の日のやうに陰つたり滅入つたりし出して、冷たい血がポンプにでもかけられたやうに腦の透間といふ透間をかたく閉ざした。たまらなくなつて向ひの窓から景色でも見ようとすると、そこにはシェードがドろしてあつて、例の四十三四の男が厚い脣をゆるく開けたまゝで、馬鹿な顏をしながらまじ〳〵と葉子を見やつてゐた。葉子はむつとしてその男の額から鼻にかけたあたりを、遠慮もなく發矢と眼で鞭つた。商人は、本當に鞭たれた人が泣き出す前にするやうに、笑ふやうな、はにかんだやうな、不思議な顏のゆがめ方をして、さすがに顏を背けてしまつた。その意氣地のない樣子がまた葉子の心をいら〳〵させた。右に眼を移せば三四人先きに木部がゐた。その鋭い小さな眼は依然として葉子を見守つてゐた。葉子は震へを覺えるばかりに激昂した神經を兩手に集めて、その兩手を握り合せて膝の上のハン

ケチの包みを押へながら、下駄の先きをぢつと見入つてしまつた。今は車內の人が申合せて侮辱でもしてゐるやうに葉子には思へた。古藤が隣り座にゐるのさへ一種の苦痛だつた。その瞑想的な無邪氣な態度が、葉子の內部的經驗や苦悶と少しも緣が續いてゐないで、二人の間には金輪際理解が成り立ち得ないと思ふと、彼女は特別に毛色の變つた自分の境涯にそつと窺ひ寄らうとする探偵をこの青年に見出すやうに思つて、その五分刈りにした地藏頭までが顧みるにも足りない木の屑か何んぞのやうに見えた。

痩せた木部の小さな輝いた眼は、依然として葉子を見詰めてゐた。

何故木部はかほどまで自分を侮辱するのだらう。彼れは今でも自分を女とあなどつてゐる。小ぽけな才力を今でも賴んでゐる。女よりも淺ましい熱情を鼻にかけて、今でも自分の運命に差出がましく立ち入らうとしてゐる。あの自信のない臆病な男に自分はさつき媚を見せようとしたのだ。而して彼れは自分がこれ程まで誇りを捨てて與へようとした特別の好意を眦を反へして退けたのだ。

痩せた木部の小さな眼は依然として葉子を見つめてゐた。

この時突然けたゝましい笑ひ聲が、何か熱心に話し合つてゐた二人の中年の紳士の口から起つた。その笑ひ聲と葉子と何んの關係もない事は葉子にも分り切つてゐた。然し彼女はそれを聞くと、もう慾にも我慢がし切れなくなつた。而して右の手を深々と帶の間にさし込んだまゝ立ち上りざま、

「汽車に醉つたんでせうかしらん、頭痛がするの」

と捨てるやうに古藤に云ひ殘して、いきなり繰戸を開けてデッキに出た。

大分高くなつた日の光がぱつと大森田圃に照り渡つて、海が笑ひながら光るのが、並木の向うに廣過ぎる位一どきに眼に這入るので、輕い眩暈をさへ覺える程だつた。鐵の手欄にすがつて振り向くと、古藤が續いて出て來たのを知つた。その顏には心配さうな驚きの色が明らさまに現はれてゐた。

「ひどく痛むんですか」

「えゝ可なりひどく」

と答へたが面倒だと思つて、

「いゝえ這入つてゐて下さい。大袈裟に見えるといやですから……大丈夫危なかありませんとも……」

と云ひ足した。古藤に强ひてとめようとはしなかつた。而して、

「それぢや這入つてゐるが本當に危なう御座んすよ……用があつたら呼んで下さいよ」

とだけ云つて素直に這入つて行つた。

「Simpleton!」

葉子は心の中でかうつぶやくと、燒き捨てたやうに古藤の事なんぞは忘れてしまつて、手欄に臂をついたまゝ放心して、晩夏の景色をつゝむ引き締つた空氣に顏をなぶらした。木部の事も思はない。綠や藍や黃色の外、これと云つて輪郭のはつきりした自然の姿も眼に映らない。唯だ涼しい風が習々と鬢の毛をそよがして通るのを快いと思つてゐた。汽車は目まぐるしい程の快速力で走つてゐた。葉子の心は唯だ渾沌と暗く固まつた物の周りを飽きる事もなく幾度も〳〵左から右に、右から左に廻つてゐた。かうして葉子に取つては永い時間が過ぎ去つたと思はれる頃、突然頭の中を引つ掻きまはすやうな激しい音を立てて汽車は六鄕川の鐵橋を渡り始めた。葉子は思はずぎよつとして夢からさめたやうに前を見ると、釣橋の鐵材が蛛手になつて上を下へと飛び跳るので、葉子は思はず

デッキのパンネルに身を退いて、兩袖で顏を押へて物を念じるやうにした。

さうやつて氣を靜めようと眼をつぶつてゐる中に、睫を通し袖を通して木部の顏と殊にその輝く小さな兩眼とがまざ〳〵と想像に浮び上つて來た。葉子の神經は磁石に吸ひ寄せられた砂鐵のやうに、堅くこの一つの幻像の上に集注して、車內にあつた時と同樣な緊張した恐ろしい狀態に返つた。停車場に近づいた汽車は段々と步度をゆるめてゐた。田圃のこゝかしこに、俗惡な色で塗り立てた大きな廣告看板が連ねて建ててあつた。葉子は袖を顏から放して、氣持の惡い幻像を拂ひのけるやうに、一つ〳〵その看板を見迎へ見送つてゐた。處々に火が燃えるやうにその看板は眼に映つて木部の姿はまたおぼろになつて行つた。その看板の一つに、長い黑髮を下げた姬が經卷を持つてゐるのがあつた。その胸に書かれた「中將湯」といふ文字を、何氣なしに一字づつ讀み下すと、彼女は突然私生兒の定子の事を思ひ出した。而してその父なる木部の姿は、かゝる亂雜な聯想の中心となつて、又まざ〳〵と燒きつくやうに現はれ出た。

その現はれ出た木部の顏を、謂はば心の中の眼で見つめてゐる中に、段々とその鼻の下から髭が消え失せて行つて、輝く眸の色は優しい肉感的な溫みを持ち出して來た。汽車は徐々に進行をゆるめてゐた。稍々荒れ始めた三十男の皮膚の光澤は、神經的な靑年の蒼白い膚の色となつて、黑く光つた軟かい頭の毛が際立つて白い額を撫でてゐる。それさへがはつきり見え始めた。列車は既に川崎停車場のプラットフォームに這入つて來た。葉子の頭の中では、汽車が止り切る前に仕事をし通さねばならぬといふ風に、今見たばかりの木部の姿がどんどん若やいで行つた。而して列車が動かなくなつた時、葉子はその人の傍にでもゐるやうに恍惚とした顏付で、思はず識らず左手を上げて——小指をやさしく折り曲げて——軟かい鬢の後れ毛をかき上げてゐた。これは葉子が人の注意を牽かうとする時にはいつでもする姿態である。

この時繰戶がけたゝましく開いたと思ふと、中から二三人の乘客がどや〳〵と現はれ出て來た。

而かもその最後から、涼しい色合のインバネスを羽織つた木部が續くのを感付いて、葉子の心臟は思はずはつと處女の血を盛つたやうに時めいた。木部が葉子の前まで來てすれ〳〵にその側を通り拔けようとした時、二人の眼はもう一度しみ〴〵と出遇つた。木部の眼は好意を込めた微笑に浸されて、葉子の出やうによつては、直ぐにも物を云ひ出しさうに脣さへ震へてゐた。葉子も今まで續けてゐた回想の惰力に引かされて、思はず微笑みかけたのであつたが、その瞬間燕返しに、見も知りもせぬ路傍の人に與へるやうな、冷刻な驕慢な光をその眸から射出したので、木部の微笑は哀れにも枝を離れた枯葉のやうに、二人の間を空しくひらめいて消えてしまつた。葉子は木部のあわて方を見ると、車內で彼れから受けた侮辱に可なり小氣味よく酬い得たといふ誇りを感じて、胸の中がやゝすが〳〵しくなつた。木部は瘦せたその右肩を癖のやうに怒らしながら、急ぎ足に濶步して改札口の所に近づいたが、切符を懷中から出す爲めに立ち止つた時、深い悲しみの色を眉の間に漲らしながら、振り返つてぢいつと葉子の横顏に眼を注いだ。葉子はそれを知りながら固より侮蔑の一瞥をも與へなかつた。

木部が改札口を出て姿が隱れようとした時、今度は葉子の眼がぢいつとその後姿を逐ひかけた。木部が見えなくなつた後も、葉子の視線は

そこを離れようとはしなかつた。而してその眼には淋しく涙がたまつてゐた。

「又會ふ事があるだらうか」

葉子はそゞろに不思議な悲哀を覺えながら心の中でさう云つてゐたのだつた。

四

列車が川崎驛を發すると、葉子はまた手欄に倚りかゝりながら木部の事を色々と思ひめぐらした。稍ゝ色づいた田圃の先きに松並木が見えて、その間から低く海の光る、平凡な五十三次風な景色が、電柱で句讀を打ちながら、空洞のやうな葉子の眼の前で閉ぢたり開いたりした。赤蜻蛉も飛びかはす時節で、その群れが、燧石から打ち出される火花のやうに、赤い印象を眼の底に殘して亂れあつた。何時見ても新開地じみて見える神奈川を過ぎて、汽車が横濱の停車場に近づいた頃には、八時を過ぎた太陽の光が、紅葉坂の櫻並木を黄色く見せる程に暑く照らしてゐた。

煤烟で眞黑にすゝけた煉瓦壁の蔭に汽車が停ると、中から一番先きに出て來たのは、右手にかのオリーヴ色の包物を持つた古藤だつた。葉子はパラソルを杖に弱々しくデッキを降りて、古藤に助けられながら改札口を出たが、ゆるゆる歩いてゐる間に乘客は先きを越してしまつて、二人は一番あとになつてゐた。客を取りおくれた十四五人の停車場附きの車夫が、待合部屋の前にかたまりながら、やつれて見える葉子に眼をつけて何かと噂し合ふのが二人の耳にも這入つた。「むすめ」「らしやめん」といふやうな言葉さへそのはしたない言葉の中には交つてゐた。開港場のがさつな卑しい調子はすぐ葉子の神經にびりびりと感じて來た。

何しろ葉子は早く落ち付く所を見付け出したがつた。古藤は停車場の前方の川添ひにある休憩所まで走つて行つて見たが、歸つて來るとぶりぶりして、驛夫のあがりらしい茶店の主人は古藤の書生つぽ姿をいかにも馬鹿にしたやうな斷り方をしたといつた。二人は仕方なくうるさく附き纏はる車夫を追ひ拂ひながら、潮の香の漂つた濁つた小さな運河を渡つて、ある狹い穢い町の中程にある一軒の小さな旅人宿に這入つて行つた。横濱といふ所には似もつかぬやうな古風な外構へで、美濃紙のくすぶり返つた置行燈には太い筆付きで相模屋と書いてあつた。葉子は何んとなくその行燈に興味を牽かれてしまつてゐた。惡戯好きなその心は、嘉永頃の浦賀にでもあればありさうなこの旅籠屋に足を休めるのを恐ろしく面白く思つた。店にしやがんで番頭と何か話してゐるあばずれたやうな女中までが眼に留つた。而して葉子が體よく物を言はうとしてゐると、古藤がいきなり取りかまはない調子で、

「何處か靜かな部屋に案内して下さい」

と無愛想に先きを越してしまつた。

「へいへい、どうぞこちらへ」

女中は二人をまじまじと見やりながら、客の前もかまはず、番頭と眼を見合せて、蔑んだらしい笑ひを漏らして案内に立つた。

ぎしぎしと板ぎしみのする眞黑な狹い階子段を上つて、西に突き當つた六疊程の狹い部屋に案内して、突つ立つたまゝで荒つぽく二人を不思議さうに女中は見比べるのだつた。油じみた襟元を思ひ出させるやうな、西に出窓のある薄汚い部屋の中を女中をひつくるめて睨み廻しながら古藤は、

「外部よりひどい……何處か他所にしませうか」

と葉子を見返つた。葉子はそれには耳を假さずに、思慮深い貴女のやうな物腰で女中の方に向いて云つた。

―隣室も明いてゐますか……さう。夜までは何處も明いてゐる……さう。お前さんがこゝの世話をしておいで？……なら餘の部屋も序でに見せておもらひしませうか知らん―

女中はもう葉子には輕蔑の色は見せなかつた。而して心得顏に次ぎの部屋との間の襖を開ける間に、葉子は手早く大きな銀貨を紙に包んで、

「少し加減が惡いし、又色々お世話になるだらうから―

と云ひながら、それを女中に渡した。而してずいつと竝んだ五つの部屋を一つ〳〵見て廻つて、掛軸、花瓶、團扇さし、小屛風、机と云ふやうなものを、自分の好みに任せてあてがはれた部屋のとすつかり取りかへて、隅から隅まで綺麗に掃除をさせた。而して古藤を正座に据ゑて小ざつぱりした座布團に坐ると、につこり微笑みながら、

―是れなら半日位我慢が出來ませう―

と云つた。

―僕はどんな所でも平氣なんですがね―

古藤はかう答へて、葉子の微笑を追ひながら安心したらしく、

―氣分はもうなほりましたね―

と附け加へた。

―えゝ―

と葉子は何けなく微笑を續けようとしたが、その瞬間につと思ひ返して眉をひそめた。葉子には假病を續ける必要があつたのをつい忘れようとしたのだつた。それで、

―ですけれどもまだこんなんですの。こら動悸が―

と云ひながら、地味な風通の單衣物の中にかくれた華やかな繻袢の袖をひらめかして、右手をあぶなげに前に出した。而してそれと同時に呼吸をぐいつとつめて、心臟と覺しいあたりに烈しく力をこめた　古藤はすき通るやうに白い手頸を暫らく撫で廻してゐたが、脈所に探りあてると急に驚いて眼を見張つた。

―どうしたんです、え、ひどく不規則ぢやありませんか……痛むのは頭ばかりですか―

―いゝえお腹も痛みはじめたんですの―

どんな風に―

「ぎゆいつと錐ででももむやうに……よくこれがあるんで困つてしまふんですのよ―

古藤は靜かに葉子の手を離して、大きな眼で深々と葉子をみつめた。

―醫者を呼ばなくつても我慢が出來ますか。

葉子は苦しげに微笑んで見せた。

―あなただつたら乾度出來ないでせうよ。……慣れつこですから堪へて見ますわ。その代りあなた、永田さん……永田さん、ね、郵船會社の支店長の……あすこに行つて船の切符の事を相談して來ていたゞけないでせうか。御迷惑ですわね、それでもそんな事まで御願ひしちやあ……宜う御座んす、私、車でそろ〳〵行きますから―

古藤は女といふものはこれ程の健康の變調をよくもかうまで我慢をするものだと云ふやうな顏をして、勿論自分が行つて見ると云ひ張つた。

實はその日、葉子は身のまはりの小道具や化粧品を調へかた〴〵、米國行きの船の切符を買ふ爲めに古藤を連れてこゝに來たのだつた。葉子はその頃既に米國にゐる或る若い學士と許嫁の間柄になつてゐた。新橋で車夫が若奧樣と呼んだのも、この事が出入りのものの間に公然と知れわたつてゐたからの事だつた。

それは葉子が私生子を設けてから暫らく後の事だつた。ある冬の夜、葉子の母の親佐が何かの用でその良人の書齋に行かうと階子段を昇りかけると、上から小間使がまつしぐらに駈け

下りて來て、危く親佐に打つ突からうとしてその側をすりぬけながら、何か意味の分らない事を早口に云つて走り去つた。その島田髷や帶の亂れた後姿が、嘲弄の言葉のやうに眼を打つと、親佐は脣を噛みしめたが、足音だけはしとやかに階子段を上つて、いつもに似ず書齋の戸の前に立ち止つて、しはぶきを一つして、それから規則正しく間をおいて三度戸をノックした。

から云ふ事があつてから五日とたゝぬ中に、葉子の家庭即ち早月家は砂の上の塔のやうに脆くも崩れてしまつた。親佐は殊に冷靜な底氣味惡い態度で夫婦の別居を主張した。而して日頃の柔和に似ず、傷ついた牡牛のやうに元通りの生活を恢復しようとひしめく良人や、中に這入つて色々云ひなさうとした親類達の言葉を、い、い、きつぱりと斥けてしまつて、良人を釘店のだだつ廣い住宅にたつた一人殘したまゝ、葉子とも三人の娘を連れて、親佐は仙臺に立ち退いてしまつた。木部の友人等が葉子の不人情を怒つて、木部のとめるのも聽かずに、社會から葬つてしまへとひしめいてゐるのを葉子は聞き知つてゐたから、普段ならば一も二もなく父を庇つて母に楯をつくべき所を、素直に母のする通りになつて、葉子は母と共に仙臺に埋もれに行つた。母は母で、自分の家庭から葉子のやうな娘の出た事を、出來るだけ世間に知られまいとした。女子教育とか、家庭の薫陶とかいふ事を折ある毎に口にしてゐた親佐は、その言葉に對して虛僞と云ふ利子を拂はねばならなかつた。一方を揉み消す爲めには一方に、、どんと火の手を擧げる必要がある。早月母子が東京を去ると間もなく、ある新聞は早月ドクトルの女性に關するふい、い、しだらを書き立てて、それにつけこの親佐の苦心と貞操とを吹聽した序でに、親佐が東京を去るやうになつたのは、熱烈な信仰から來る義憤と、愛兒を父の惡感化から救はうとする母らしい努力に基づくものだ。その爲めに彼女は基督教婦人同盟の副會頭といふ顯要な位置さへ投げ棄てたのだと書き添へた。

仙臺に於ける早月親佐は暫らくの間は深く沈默を守つてゐたが、見る〳〵周圍に人を集めて華々しく活動をし始めた。その客間は若い信者や、慈善家や、藝術家達のサロンとなつて、そこからリバイバルや、慈善市や、音樂會といふやうなものが形を取つて生れ出た。殊に親佐が仙臺支部長として働き出した基督教婦人同盟の運動は、その當時野火のやうな勢で全國に擴がり始めた赤十字社の勢力にもをさをさ劣らない程の盛況を呈した。知事令夫人も、名だたる素封家の奧さん達もその集會には列席した。而して三箇年の月日は早月親佐を仙臺には無くてならぬ名物の一つにしてしまつた。似た性質が母親と何處か似過ぎてゐる爲めか、似たやうに見えて一と調子違つてゐる爲めか、それとも自分を愼しむ爲めであつたか、はたの人には判らなかつたが、兎に角葉子はそんな華やかな雰圍氣に包まれながら、不思議な程沈默を守つて、碌々晴れの座などには姿を現はさないでゐた。それにも拘らず親佐の客間に吸ひ寄せられる若い人々の多數は葉子に吸ひ寄せられてゐるのだつた。葉子の控目なしをらしい樣子がいやが上にも人の噂を引く種となつて、葉子といふ名は、多才で、情緒の細やかな、美しい薄命兒を誰れにでも思ひ起させた。彼女の立すぐれた眉目形は花柳の人達をさへ羨ましがらせた。而して色々な風聞が、淸教徒風に質素な早月の侘住居の周圍を霞のやうに取り捲き始めた。

突然小さな仙臺市は雷にでも打たれたやうに或る朝の新聞記事に注意を向けた それはその新聞の商賣敵である或る新聞の社主であり主

筆である某が、親佐と葉子との二人に同時に慇懃を通じてゐるといふ、全紙に亙つた不倫極まる記事だつた。誰れも意外なやうな顏をしながら心の中ではそれを信じようとした。

この日髮の毛の濃い、口の大きい、色白な一人の青年を乘せた人力車が、仙臺の町中を忙しく駈け廻つたのを注意した人は恐らく無かつたらうが、その青年は名を木村といつて、日頃から快活な活動好きな人として知られた男で、その熱心な奔走の結果、翌日の新聞紙の廣告欄には、二段抜きで、知事令夫人以下十四五名の貴婦人の連名で、早月親佐の寃罪が雪がれる事になつた。この稀有な大袈裟な廣告が又小さな仙臺の市中をどよめき渡らした。然し木村の熱心も口辯も葉子の名を廣告の中に入れる事は出來なかつた。

こんな騷ぎが持ち上つてから早月親佐の仙臺に於ける今までの聲望は急に無くなつてしまつた。その頃丁度東京に居殘つてゐた早月が、病氣に罹つて藥に親しむ身となつたので、それをいゝ汐に親佐は子供を連れて仙臺を切り上げる事になつた。

木村はその後すぐ早月母子を追つて東京に出て來た。而して毎日入りびたるやうに早月家に出入して、殊に親佐の氣に入るやうになつた。親佐が病氣になつて危篤に陷つた時、木村は一生の願ひとして葉子との結婚を申し出た。親佐はやはり母だつた。死期を前に控へて、一番氣にせずにゐられないものは、葉子の將來だつた。木村ならばあの我儘な、男を男とも思はぬ葉子に仕へるやうにして行く事が出來ると思つた。而して基督教婦人同盟の會頭をしてゐる五十川女史のまあ〳〵と云ふやうな不思議な曖昧な切盛りで、木村は、何處か不確實ではあるが、兎も角葉子を妻とし得る保障を握つたのだつた。

五

郵船會社の永田は夕方でなければ會社から退けまいと云ふので、葉子は宿屋に西洋物店のものを呼んで、必要な買物をする事になつた。古藤はそんなら其處らをほつつき歩いて來ると云つて　例の麥稈帽子を帽子掛から取つて立ち上つた。葉子は思ひ出したやうに肩越しに振り返つて、

「あなた先刻パラソルは骨が五本のがいゝと仰しやつてね」

と云つた。古藤は冷淡な調子で、

「さういつたやうでしたね」

と答へながら、何か他の事でも考へてゐるらしかつた。

「まあそんなにとぼけて……何故五本のがお好き？」

「僕が好きと云ふんぢやないけれども、あなたは何んでも人と違つたものが好きなんだと思つたんですよ」

「何處までも人をおからかひなさる……ひどい事　行つていらつしやいまし」

と情を迎へるやうに云つて向き直つてしまつた。古藤が縁側に出ると又突然呼びとめた。障子にはつきり立姿をうつしたまゝ、

「何んです」

と云つて古藤は立ち戻る樣子がなかつた。葉子は惡戲者らしい笑ひを口のあたりに浮べてゐた。

「あなたは木村と學校が同じでいらしつたのね」

「さうですよ級は木村の……木村君の方が二つも上でしたがね」

「あなたはあの人を何うお思ひになつて」

丸で少女のやうな無邪氣な調子だつた。古藤は

微笑んだらしい語氣で、

「そんな事はもうあなたの方が委しい筈ぢやありませんか……心のいゝ活動家ですよ」

「あなたは？」

葉子はぽんと高飛車に出た。而してにやりとしながらがつくりと顔を上向きにはねて、床の間の一蝶のひどい僞物を見やつてゐた。古藤が咄嗟の返事に窮して、少しむつとした樣子で答へ澁つてゐるのを見て取ると、葉子は今度は聲のを調子落して、如何にも賴りないといふ風に、

「日盛りは暑いから何處ぞでお休みなさいましね。……なるたけ早く歸つて來て下さいまし、もしかして、病氣でも惡くなると、こんな所で心細う御座んすから……よくつて」

古藤は何か平凡な返事をして、緣板を踏みならしながら出て行つてしまつた。

朝の中だけからつと破つたやうに晴れ渡つてゐた空は、午後から曇り始めて、眞白な雲が太陽の面を撫でて通る度每に暑氣は薄れて、空一面が灰色にかき曇る頃には、肩寒く思ふほどに初秋の氣候は激變してゐた。時雨らしく照つたり降つたりしてゐた雨の脚も、やがてじめ〳〵と降り續いて、煮しめたやうな穢い部屋の中は殊更ら濕りが強く來るやうに思へた。葉子は居留地の方に在る外國人相手の洋服屋や小間物屋などを呼び寄せて、思ひ切つた贅澤な買物をした。買物をして見ると葉子は自分の財布のすぐ貧しくなつて行くのを怖れないではゐられなかつた。葉子の父は日本橋では一かどの門戶を張つた醫師で、收入も相當にはあつたけれども、理財の道に全く暗いのと、妻の親佐が婦人同盟の事業にばかり奔走してゐて、そのなみなみならぬ才能を少しも家の事に用ゐなかつた爲め、その死後には借金こそ殘れ、遺產と云つては憐れな程しかなかつた。葉子は二人の妹を抱へながらこの苦しい境遇を切り拔けて來た。それは葉子であればこそし遂せて來たやうなものだつた。誰れにも貧乏らしい氣色は露ほども見せないでゐながら、葉子は始終貨幣一枚々々の重さを計つて仕拂ひするやうな注意をしてゐた。それだのに眼の前に異國情調の豐かな贅澤品を見ると、彼女の貪慾は甘いものを見た子供のやうになつて、前後も忘れて懷中にありつたけの買物をしてしまつたのだ。使をやつて正金銀行で換へた金貨は今鑄出されたやうな光を放つて懷中の底にころがつてゐたが、それを何うする事も出來なかつた。葉子の心は急に暗くなつた。戶外の天氣もその心持に合槌を打つやうに見えた。古藤はうまく永田から切符を貰ふ事が出來るだらうか。葉子自身が行き得ない程葉子に對して反感を持つてゐる永田が、あの單純なタクトのない古藤をどんな風に扱つたらう。永田の口から古藤は色々な葉子の過去を聞かされはしなかつたらうか。そんな事を思ふと葉子は悒鬱が生み出す反抗的な氣分になつて、湯をわかさせて入浴し、寢床をしかせ、最上等の三鞭酒を取りよせて、したゝかそれを飮むと前後も知らず眠つてしまつた。

夜になつたら泊り客が有るかも知れないと女中の云つた五つの部屋は矢張り空のまゝで、日がとつぷりと暮れてしまつた。女中がランプを持つて來た物音に葉子はやうやく眼を覺まして、仰向いたまゝ、煤けた天井に描かれたランプの丸い光輪をぼんやりと眺めてゐた。

その時じたつ〳〵と濡れた足で階子段を昇つて來る古藤の足音が聞こえた。古藤は何かに腹を立ててゐるらしい足どりでづか〳〵と緣側を傳つて來たが、ふと立ち止ると大きな聲で帳場の方に怒鳴つた。

「早く雨戶を閉めないか……病人がゐるんぢやないか。……」

「この寒いのに何んだつてあなたも言ひ付けないんです」

今度はかう葉子に云ひながら、建付けの悪い障子を開けていきなり中に這入らうとしたが――その瞬間にはつと驚いたやうな顔をして立ちすくんでしまつた。

香水や、化粧品や、酒の香をごつちやにした暖かいいきれがいきなり古藤に迫つたらしかつた。ランプがほの暗いので、部屋の隅々までは見えないが、光りの照り渡る限りは、雑多に置きならべられたなまめかしい女の服地や、帽子や、造花や、鳥の羽根や、小道具などで、足の踏みたて場もないまでになつてゐた。その一方に床の間を背にして、郡内の布團の上に搔巻を脇の下から羽織つた、今起きかへつたばかりの葉子が、派手な長襦袢一つで、東欧羅巴の嬪宮の人のやうに、片臂をついたまゝ横になつてゐた。而して入浴と酒とでほんのりほてつた顔を仰向けて、大きな眼を夢のやうに見開いてぢつと古藤を見た。その枕許には三鞭酒の瓶が本式に氷の中につけてあつて、飲みさしのコップや、華奢な紙入れや、かのオリーヴ色の包物を、しごきの赤が火の蛇のやうに取り巻いて、その端が指輪の二つ嵌まつた大理石のやうな葉子の手に弄ばれてゐた。

「お遅う御座んした事。お待たされなすつたんでせう。・・・さ、お這入りなさいまし。そんなもの足ででもどけて頂戴、散らかしちまつて」

この音楽のやうなすべ／＼した調子の聲を聞くと、古藤は始めて illusion から目覚めた風で這入つて来た。葉子は左手を二の腕がのぞき出るまでずいつと延ばして、そこにあるものを一と掃ひに掃ひのけると、花壇の土を掘り起したやうに汚い畳が半畳ばかり現はれ出た。古藤は自分の帽子を部屋の隅にぶちなげて置いて、掃ひ残された細形の金鎖を片付けると、どつかと胡坐をかいて正面から葉子を見すゑながら、

「行つて来ました。船の切符もたしかに受取つて来ました」

と云つて懐ろの中を探りにかゝつた。葉子は一寸改まつて、

「ほんとに難有う御座いました」

と頭を下げたが、忽ち roguish な眼付きをして、

「まあそんな事は何れあとで、ね、・・・何しろお寒かつたでせう、さ」

と云ひながら飲み残りの酒を盆の上に無造作に捨てて、二三度左手をふつて滴を切つてから、コップを古藤にさしつけた。古藤の眼は何かに激昂してゐるやうに輝いてゐた。

「僕は飲みません」

「おや何故」

「飲みたくないから飲まないんです」

この角ばつた返答は男を手もなくあやし慣れてゐる葉子にも意外だつた。それでその後の言葉を何う繼がうかと、一寸躊つて古藤の顔を見やつてゐると、古藤はたゝみかけて口を切つた。

「永田つてのはあれはあなたの知人ですか。思ひ切つて尊大な人間ですね。君のやうな人間から金を受取る理由はないが、兎に角あづかつて置いて、いづれ直接あなたに手紙で云つてあげるから、早く帰れつて云ふんです、頭から。失敬な奴だ」

葉子はこの言葉に乗じて氣まづい心持を變へようと思つた。而して驀地に何か云ひ出さうとすると、古藤はおつかぶせるやうに言葉を續けて、

「あなたは一體まだ腹が痛むんですか」

ときつぱり云つて堅く坐り直した。然しその時に葉子の陣立ては既に出来上つてゐた。始めの微笑みをそのまゝに、

「えゝ、少しはよくなりましてよ」

と云つた。古藤は短兵急に、
「それにしても中々元氣ですね」
とたゝみかけた。
「それはお藥にこれを少しいたゞいたからでせうよ」
と三鞭酒を指した。
正面からはね返された古藤は默つてしまつた。然し葉子も勢に乘つて追ひ迫るやうな事はしなかつた。矢頃を計つてから語氣をかへてずつと下手になつて、
「妙にお思ひになつたでせうね。惡う御座いましたね。こんな所に來てゐて、お酒なんか飮むのは本當に惡いと思つたんですけれども、氣分がふさいで來ると、私にはこれより外にお藥はないんですもの。先刻のやうに苦しくなつて來ると私はいつでもお湯を熱めにして浴つてから、お酒を飮み過ぎる位飮んで寢るんですの。さうすると」
と云つて、一寸云ひよどんで見せて、
「十分か二十分ぐつすり寢入るんですのよ……痛みも何も忘れてしまつていゝ心持に……。それから急に頭がかつと痛んで來ますの。而してそれと一緒に氣が滅入り出して、もう〳〵どうしていゝか分らなくなつて、子供のやうに泣きつゞけると、その中に又眠たくなつて一寢入りしますのよ。さうするとその後はいくらかさいゝつぱりするんです。……父や母が死んでしまつてから、頼みもしないのに親類達から餘計な世話をやかれたり、他人力なんぞを的にせずに妹二人を育てて行かなければならないと思つたりすると、私のやうな、他人樣と違つて風變りな、……そら、五本の骨でせう」
と淋しく笑つた。
「それですものどうぞ堪忍して頂戴。思ひきり泣きたい時でも知らん顔をして笑つて通してゐると、こんな私見たいな氣まぐれ者になるんです。氣まぐれでもしなければ生きて行けなくなるんです。男の方にはこの心持はお分りにはならないかも知れないけれども」
から云つてる中に葉子は、ふと木部との戀が果敢なく破れた時の、我れにもなく身に沁み渡る淋しみや、死ぬまで日蔭者であらねばならぬ私生子の定子の事や、計らずも今日まのあたり見た木部の、心からやつれた面影などを思ひ起した。而して更に、母の死んだ夜、日頃は見向きもしなかつた親類達が寄り集まつて來て、早月家には毛の末程も同情のない心で、早月家の善後策について、さも重大らしく勝手氣儘な事を親切ごかしにしやべり散らすのを聞かされた時、どうにでもなれと云ふ氣になつて、暴れ拔いた事が、自分にさへ悲しい思ひ出となつて、葉子の頭の中を矢のやうに早くひらめき通つた。葉子の顔には人に譲つてはゐない自信の色が現はれ始めた。
「母の初七日の時もね、私はたて續けにビールを何杯飮みましたらう。何んでも瓶がそこいらにごろ〳〵轉がりました。そして仕舞には何が何んだか夢中になつて、宅に出入りするお醫者さんの膝を枕に、泣寢入りに寢入つて、夜中をあなた二時間の餘も寢續けてしまひましたわ。親類の人達はそれを見ると一人歸り二人歸りして、相談も何も目茶苦茶になつたんですつて。母の寫眞を前に置いといて、私はそんな事までする人間ですの。お惘れになつたでせうね。いやな奴でせう。あなたのやうな方から御覽になつたら、さぞいやな氣がなさいませうねえ」
「えゝ」
と古藤は眼も動かさずにぶつきらぼうに答へた。
「それでもあなた」
と葉子は切なささうに半ば起き上つて、
「外面だけで人のする事を何んとか仰しやるの

は少し殘酷ですわ。……いゝえね」
と古藤の何か云ひ出さうとするのを遮つて、今度はきつと坐り直つた。
「私は泣き言を云つて他人様にも泣いて頂かうなんて、そんな事はこれんばかりも思やしませんとも……なるなら何處かに大砲のやうな大きな力の強い人がゐて、その人が眞劍に怒つて、葉子のやうな人非人はかうしてやるぞと云つて、私を押へつけて心臟でも頭でも摧けて飛んでしまふ程折檻をしてくれたらと思ふんですの。どの人もどの人もい、ちやんと自分を忘れないで、いゝ加減に怒つたりいゝ加減に泣いたりしてゐるんですからねえ。何んだつてから生温いんでせう。
義一さん（葉子が古藤をかう名で呼んだのはこの時が始めてだつた）あなたが今朝、心の正直な何んとかだと仰しやつた木村に縁づくやうになつたのもその晩の事です。五十川が親類中に贊成さして、晴れがましくも私を皆んなの前に引き出しておいて、罪人にでも云ふやうに宣告してしまつたのです。私が一と口でも云はうとすれば、五十川の云ふには母の遺言ですつて。死人に口なし。ほんとに木村はあなたが仰しやつたやうな人間ね、仙臺であんな事があつたでせう。あの時知事の奥さんはじめ母の方は何んとかしようが娘の方は保證が出來ないと仰しやつたんですとさ」
云ひ知らぬ侮蔑の色が葉子の顏に漲つた。
「所が木村は自分の考へを押し通しもしないで、おめ〳〵と新聞には母だけの名を出してあの廣告をしたんですの。母だけがいゝ人になれば誰れだつて私を……さうでせう。その擧句に木村はしいやあ〳〵と私を妻にしたいんですつて。義一さん、男つてそれでいゝものなんですか。まあね物の譬へがですわ。それとも言葉では何んと云つても無駄だから、實行的に私の潔白を立ててやらうとでも云ふんでせうか」
さう云つて激昂し切つた葉子は嚙み捨てるやうに甲高くほゝと笑つた。
「一體私は一寸した事で好き嫌ひの出來る惡い質なんですからね。と云つて私はあなたのやうな生一本でもありませんのよ。母の遺言だから木村と夫婦になれ。早く身を堅めて地道に暮さなければ母の名譽を汚す事になる。妹だつて裸かでお嫁入りも出來まいといはれれば、私立派に木村の妻になつて御覽に入れます。その代り木村が少しつらいだけ。こんな事をあなたの前で云つては嘸ぞ氣を惡るくなさるでせうが、眞直なあなただと思ひますから、私もその氣で何もかも打ち明けて申してしまひますのよ。私の性質や境遇はよく御存じですわね。こんな性質でこんな境遇にゐる私がかう考へるのに若し間違ひがあつたら、どうか遠慮なく仰しやつて下さい。
あゝいやだつた事。義一さん、私こんな事はおくびにも出さずに今の今までしつかり胸にしまつて我慢してゐたのですけれども、今日は何うしたんでせう、何んだか遠い旅にでも出たやうな淋しい氣になつてしまつて……」
弓弦を切つて放したやうに言葉を消して葉子は俯向いてしまつた。日は何時の間にかとつぷりと暮れてゐた。じめ〳〵と降り續く秋雨に濕つた夜風が細々と通つて來て、濕氣でたるんだ障子紙をそつと煽つて通つた。古藤は葉子の顏を見るのを避けるやうに、そこらに散らばつた服地や帽子などを眺め廻して、何んと返答をしていゝのか、云ふべき事は腹にあるけれども言葉には現はせない風だつた。部屋は息苦しい程しんとなつた。
　葉子は自分の言葉から、その時の有様から、妙にやる瀨ない淋しい氣分になつてゐた。強い

男の手で思ふ存分兩肩でも抱きすくめて欲しいやうな頼りなさを感じた。而して横腹に深々と手をやつて、さし込む痛みを堪へるらしい姿をしてゐた。古藤はやゝ暫らくしてから何か決心したらしくまともに葉子を見ようとしたが、驚いた顔付をして我れ知らず葉子の方にゐざり寄つた。葉子はすかさず豹のやうに滑らかに身を起して逸早くもしつかり古藤のさし出す手を握つてゐた。而して、

「義一さん」

と震へを帶びて云つた聲は存分に涙に濡れてゐるやうに響いた。古藤は聲をわなゝかして、

「木村はそんな人間ぢやありませんよ」

とだけ云つて默つてしまつた。

駄目だつたと葉子はその途端に思つた。葉子の心持と古藤の心持とはちぐはぐになつてゐるのだ。何んといふ響きの惡い心だらうと葉子はそれをさげすんだ。然し樣子にはそんな心持は少しも見せないで、頭から肩へかけてのなよやかな線を風の前のてつせんの蔓のやうに震はせながら、二三度深々とうなづいて見せた。

暫らくしてから葉子は顏を上げたが、涙は少しも眼に溜つてはゐなかつた。而していとしい弟でもいたはるやうに布團から立ち上りざま、

「濟みませんでした事、義一さん、あなた御飯はまだでしたのね」

と云ひながら、腹の痛むを堪へるやうな姿で古藤の前を通りぬけた。湯でほんのりと赤らんだ素足に古藤の眼が鋭くちらつと宿つたのを感じながら、障子を細目に開けて手をならした。

葉子はその晩不思議に惡魔じみた誘惑を古藤に感じた。童貞で無經驗で戀の戯れには何んの面白味もなささうな古藤、木村に對してと云はず、友達に對して堅苦しい義務觀念の強い古藤、さう云ふ男に對して葉子は今まで何んの興味をも感じなかつたばかりか、働きのない沒情漢と見限つて、口先ばかりで人間並みのあしらひをしてゐたのだ。然しその晩葉子はこの少年のやうな心を持つて肉の熟した古藤に罪を犯させて見たくつて堪らなくなつた。一夜の中に木村とは顏も合はせる事の出來ない人間にして見たくつて堪らなくなつた。古藤の童貞を破る手を他の女に任せるのが妬ましくて堪らなくなつた。幾枚も皮を被つた古藤の心のどん底に隱れてゐる慾念を葉子の蠱惑力で掘り起して見たくつて堪らなくなつた。

氣取られない範圍で葉子があらん限りの謎を與へたにも拘らず、古藤が堅くなつてしまつてそれに應ずる氣色のないのを見ると葉子は益々いらだつた。而してその晩は腹が痛んで何うしても東京に歸れないから、いやでも横濱に宿つてくれと云ひ出した。然し古藤は頑として聽かなかつた。而して自分で出かけて行つて、品もあらう事か眞赤な毛布を一枚買つて歸つて來た。葉子はとう〳〵我を折つて最終列車で東京に歸る事にした。

一等の客車には二人の外に乘客はなかつた。葉子はふとした出來心から古藤を陷れようとした目論見に失敗して、自分の征服力に對するかすかな失望と、存分の不快とを感じてゐた。客車の中では又色々と話さうといつて置きながら、汽車が動き出すとすぐ、古藤の膝の側で毛布にくるまつたまゝ新橋まで寢通してしまつた。

新橋に着いてから古藤が船の切符を葉子に渡して人力車を二臺傭つて、その一つに乘ると、葉子はそれにかけよつて懷中から取り出した紙入れを古藤の膝に放り出して、左の鬢をやさしくかき上げながら、

「今日のお立替へをどうぞその中から……明

日は乾度入らしつて下さいましね……お待ち申しますことよ……左様なら─

と云つて自分ももう一つの車に乘つた。葉子の紙入れの中には正金銀行から受取つた五十圓金貨八枚が這入つてゐる。而して葉子は古藤がそれをくづして立替へを取る氣遣ひのないのを承知してゐた。

六

葉子が米國に出發する九月二十五日は明日に迫つた。二百二十日の荒れそこねたその年の天氣は、何時までたつても定まらないで、氣違日和とも云ふべき照り降りの亂雜な空合ひが續き通してゐた。

葉子はその朝暗い中に床を離れて、藏の陰になつた自分の小部屋に這入つて、前々から片付けかけてゐた衣類の始末をし始めた。模様や縞の派手なのは片端からほどいて丸めて、次ぎの妹の愛子にやるやうにと片隅に重ねたが、その中には十三になる末の妹の貞世に着せても似合はしさうな大柄なものもあつた。葉子は手早くそれをえり分けて見た。而して今度は船に持ち込む四季の晴衣を、床の間の前にある眞黒に古ぼけたトランクの處まで持つて行つて、蓋を開けようとしたが、不圖その蓋の眞中に書いてあるY・K・といふ白文字を見て忙はしく手を控へた。是れは昨日古藤が油繪具と畫筆とを持つて來て書いてくれたので、乾き切らないテレピンの香がまだかすかに殘つてゐた。古藤は、葉子・早月の頭文字Y・S・と書いてくれと折り入つて葉子の頼んだのを笑ひながら退けて、葉子・木村・の頭文字Y・K・と書く前に、S・K・とある字をナイフの先きで丁寧に削つたのだつた。S・K・とは木村貞一のイニシャルで、そのトランクは木村の父が歐米を漫遊した時使つたものなのだ。その古い色を見ると、木村の父の太つ腹な鋭い性格と、波瀾の多い生涯の極印がすわつてゐるやうに見えた。木村はそれを葉子の用にと殘して行つたのだつた。木村の面影はふと葉子の頭の中を抜けて通つた。空想で木村を描く事は、木村と顔を見合す時ほどの厭はしい思ひを葉子に起させなかつた。黒い髪の毛をい、い、ぴつたりと綺麗に分けて、怜かしい中高の細面に、健康らしい薔薇色を帯びた容貌や、甘過ぎる位人情に溺れ易い殉情的な性格は、葉子に一種のなつかしさをさへ感ぜしめた。然し實際顔と顔とを向い合せると、二人は妙に會話さへはずまなくなるのだつた。その怜かしいのが厭やだつた。柔和なのが氣に障つた。殉情的な癖に恐ろしく勘定高いのがたまらなかつた。青年らしく土俵際まで踏み込んで事業を樂しむといふ父に似た性格さへ小ましやくれて見えた。殊に東京生れと云つてもいゝ位都慣れた言葉や身のこなしの間に、ふと東北の郷土の香を嗅ぎ出した時には嚙んで捨てたいやうな反感に襲はれた。葉子の心は今、おぼろげな回想から、實際膝つき合せた時に厭やだと思つた印象に移つて行つた。而して手に持つた晴衣をトランクに入れるのを控へてしまつた。長くなり始めた夜もその頃には漸く白み始めて、蠟燭の黄色い焰が光の亡骸のやうに、ゆるぎもせずに點つてゐた。夜の間靜まつてゐた西風が思ひ出したやうに障子にぶつかつて、釘店の狭い通りを、河岸で仕出しをした若い者が、大きな掛聲でがらがらと車を牽きながら通るのが聞こえ出した。

葉子は今日一日に眼まぐるしい程ある澤山の用事を一寸胸の中で數へて見て、大急ぎで其處らを片付けて、錠を下ろすものには錠を下ろし切つて、雨戸を一枚繰つて、そこから射し込む光で大きな手文庫からぎつしりつまつた男文字の手紙を引き出すと風呂敷に包み込んだ。而してそれを抱へて手燭を吹き消しながら部屋を出よう

とすると、廊下に叔母が突つ立つてゐた。

「もう起きたんですね‥片付いたかい」

と挨拶してまだ何か云ひたさうであつた。兩親を失つてからこの叔母夫婦と、六歳になる白痴の一人息子とが移つて來て同居する事になつたのだ。葉子の母が、どこか重々しくつて男々しい風采をしてゐたのに引きかへ、叔母は髮の毛の薄い、何處までも貧相に見える女だつた。葉子の眼はその帶しろ裸かな、肉の薄い胸のあたりをちらつとかすめた。

「おやお早う御座います‥‥あらかた片付きました」

と云つてそのまゝ二階に行かうとすると、叔母は爪に一杯垢のたまつた兩手をもや〳〵と胸の所でふりながら、遮るやうに立ちはだかつて、

「あのお前さんが片付ける時にと思つてゐたんだがね、明日のお見送りに私は着て行くものが無いんだよ。お母さんのもので間に合ふのは無いだらうか知らん。明日だけ借れば後はちやんと始末をして置くんだから一寸見ておくれでないか」

葉子は又かと思つた。働きのない良人に連れ添つて、十五年の間丸帶一つ買つて貰へなかつた叔母の訓練のない弱い性格が、からさもしくなるのを憐れまないでもなかつたが、物怯ぢしながら、それでゐて、慾にかゝると圖々しい、人の隙ばかりつけねらふ仕打ちを見ると、蟲唾が走る程憎かつた。然しこんな思ひをするのも今日だけだと思つて部屋の中に案内した。叔母は空々しく氣の毒だとか濟まないとか云ひ續けながら錠を下ろした簞笥を一々開けさせて、色々と勝手に好みを云つた末に、りうとした一と揃へを借る事にして、それから葉子の衣類までを兎や角云ひながら去りがてにいぢくり廻した。臺所からは味噌汁の香がして、白痴の子がだらしなく泣き續ける聲と、叔父が叔母を呼び立てる聲とがすが〳〵しい朝の空氣を濁すやうに聞こえて來た。葉子は叔母にいゝ加減な返事をしながらその聲に耳を傾けてゐた。而して早月家の最後の離散といふ事をしみ〳〵と感じたのであつた。電話は、或る銀行の重役をしてゐる親類がいゝ加減な口實を作つて只持つて行つてしまつた。父の書齋道具や骨董品は藏書と一緒に競賣りをされたが、賣上げ代はとう〳〵葉子の手には這入らなかつた。住居は住居で、葉子の洋行後には、兩親の死後何かに盡力したといふ親類の某が、二束三文で讓り受ける事に親族會議で決つてしまつた。少しばかりある株券と地所とは愛子と貞世との教育費に充てる名義で某々が保管する事になつた。そんな勝手放題なまねをされるのを葉子は見向きもしないで默つてゐた。若し葉子が素直な女だつたら、却つて食ひ殘しといふ程の遺産はあてがはれてゐたに違ひない。然し親族會議では葉子を手におへない女だとして、他所に嫁入つて行くのをいゝ事に、遺産の事には一切關係させない相談をした位は葉子は疾うに感付いてゐた。自分の財産となればなるべきものを一部分だけあてがはれて默つて引つ込んでゐる葉子ではなかつた。それかと云つて長女ではあるが、女の身として全財産に對する要求をする事の無益なのも知つてゐた。で「犬にやる積りでゐよう」と臍を堅めてかゝつたのだつた。今、後に殘つたものは何がある。切り廻しよく見かけを派手にしてゐる割合に、不足勝ちな三人の姉妹の衣類諸道具が少しばかりあるだけだ。それを叔母は容赦もなくそこまで切り込んで來てゐるのだ。白紙のやうなはかない寂しさと、「裸かになるなら綺麗さつぱり裸かになつて見せよう」といふ火のやうな反抗心とが、無茶苦茶に葉子の胸を冷やしたり燒いたりした。葉子はこんな心持になつて、先程の手紙の包を抱へて立ち上りなが

ら、俯向いて手ざはりのいゝ絹物を撫で廻してゐる叔母を見下ろした。

「それぢや私まだ外に用がありますしますから錠を下ろさずにおきますよ。御綴り御覧なさいまし。そこにかためてあるのは私が持つて行くんですし、こゝにあるのは愛と貞にやるのですから別になすつておいて下さい」

と云ひ捨てて、ずん／＼部屋を出た。往來には砂塵が立つらしく風が吹き始めてゐた。

二階に上つて見ると、父の書齋であつた十六疊の隣りの六疊に、愛子と貞世とが抱き合つて眠つてゐた。葉子は自分の寢床を手早くたゝみながら愛子を呼び起した。愛子は驚いたやうに大きな美しい眼を開くと半分夢中で飛び起きた。葉子はいきなり嚴重な調子で、

「あなたは明日から私の代りをしないぢやならないんですよ。朝寢坊なんぞしてゐてどうするの。あなたがぐづ／＼してゐると貞ちやんが可哀さうですよ。早く身じまひをして下のお掃除でもなさいまし」

と睨みつけた。愛子は羊のやうに柔和な眼を眩ゆさうにして、姉を偸み見ながら、着物を着かへて下に降りて行つた。葉子は何んとなく性の合はないこの妹が、階子段を降り切つたのを聞きすまして、そつと貞世の方に近づいた。面ざしの葉子によく似た十三の少女は、汗じみた額には下げ髪がねばり附いて、頬は熱でもあるやうに上氣してゐる。それを見ると葉子は骨肉のいとしさに思はず微笑ませられて、その寢床にゐざり寄つて、その童女を羽がひに輕く抱きすくめた。而してしみ／＼とその寢顔に眺め入つた。貞世の輕い呼吸は輕く葉子の胸に傳はつて來た。その呼吸が一つ傳はる度に、葉子の心は妙に滅入つて行つた。同じ胎を借りてこの世に生れ出た二人の胸には、ひたと共鳴する不思議な響きが潛んでゐた。葉子は吸ひ取られるやうにその響きに心を集めてゐたが、果ては寂しい唯ゞ寂しい涙がほろ／＼と留度なく流れ出るのだつた。

一家の離散を知らぬ顔で、女の身空を唯ゞ獨り米國の果てまでさすらつて行くのを葉子は格別何んとも思つてゐなかつた。振分髪の時分から、飽くまで意地の強い眼はしの利く性質を思ふまゝに増長さして、ぐん／＼と世の中を傍眼もふらず押し通して二十五になつた今、こんな時にふと過去を振り返つて見ると、いつの間にかあたり前の女の生活をすりぬけて、たつた一人見も知らぬ野末に立つてゐるやうな思ひをせずにはゐられなかつた。女學校や音樂學校で、葉子の強い個性に引きつけられて、理想の人でもあるやうに近寄つて來た少女達は、葉子におど／＼しい同性の戀を捧げながら、葉子に inspire されて、我れ知らず大膽な奔放な振舞ひをするやうになつた。その頃國民文學や「文學界」に旗擧げをして、新らしい思想運動を興さうとした血氣なロマンティックな青年達に歌の心を授けた女の多くは、大方葉子から血脈を引いた少女等であつた。倫理學者や、教育家や、家庭の主權者などもその頃から猜疑の眼を見張つて少女國を監視し出した。葉子の多感な心は自分でも知らない革命的とも云ふべき衝動の爲に的もなく搖ぎ始めた。葉子は他人を笑ひながら、而して自分をさげすみながら、眞暗な大きな力に引きずられて、不思議な道に自覺なく迷ひ入つて、仕舞には驀らに走り出した。誰れも葉子の行く道のしるべをする人もなく、他の正しい道を教へてくれる人もなかつた。偶ゞ大きな聲で呼び留める人があるかと思へば、裏表の見えすいたぺてんにかけて、昔のまゝの女であらせようとするものばかりだつた。葉子はその頃から何處か外國に生れてゐればよかつたと思ふやうになつた。あの自由ら

しく見える女の生活、男と立ち並んで自分を立てて行く事の出來る女の生活……古い良心が自分の心をさいなむたびに、葉子は外國人の良心といふものを見たく思つた。葉子は心の奥底でひそかに藝者を羨みもした。日本で女が女らしく生きてゐるのは藝者だけではないかとさへ思つた。こんな心持で年を取つて行く間に葉子は勿論何度も蹉いてころんだ。而して獨りで膝の塵を拂はなければならなかつた。こんな生活を續けて二十五になつた今、ふと今まで歩いて來た道を振り返つて見ると、一所に葉子と走つてゐた少女達は、疾うの昔に尋常な女になり濟ましてゐて、小さく見える程遠くの方から、憐れむやうなさげすむやうな顔付きをして葉子の姿を眺めてゐた。葉子はもと來た道に引き返す事はもう出來なかつた。出來た所で引き返さうとする氣は微塵もなかつた。「勝手にするがいゝ」さう思つて葉子は又譯もなく不思議な暗い力に引つ張られた。かう云ふいはめになつた今、米國にゐようが日本にゐようが少しばかりの財産があらうが無からうが、そんな事は些細な話だつた。境遇でも變つたら何か起るかも知れない。元のまゝかも知れない。勝手になれ。葉子を心の底から動かしさうなものは一つも身近には見當らなかつた。

然し一つあつた。葉子の涙は唯ゝ譯もなくほろ〳〵と流れた。貞世は何事も知らずに罪なく眠りつゞけてゐた。同じ胎を借りてこの世に生れ出た二人の胸には、ひたと共鳴する不思議な響きが潜んでゐた。葉子は吸ひ取られるやうにその響きに心を集めてゐたが、この子もやがては自分が通つて來たやうな道を歩くのかと思ふと、自分を憐れむとも妹を憐れむとも知れない切ない心に先き立たれて、思はずぎゆつと貞世を抱きしめながら物を云はうとした。然し何を云ひ得ようぞ。喉もふさがつてしまつてゐた。貞世は抱きしめられたので始めて大きく眼を開いた。而して暫らくの間、涙に濡れた姉の顔をまじ〳〵と眺めてゐたが、やがて默つたまゝ小さい袖でその涙を拭ひ始めた。葉子の涙は新らしく湧き返つた。貞世は痛ましさうに姉の涙を拭ひつゞけた。而して仕舞にはその袖を自分の顔に押しあてて何か云ひ〳〵しやくり上げながら泣き出してしまつた。

七

葉子はその朝横濱の郵船會社の永田から手紙を受取つた。漢學者らしい風格の、上手な字で唐紙箋に書かれた文句には、自分は故早月氏には格別の交誼を受けてゐたが、貴女に對しても同樣の交際を續ける必要のないのを遺憾に思ふ。明晩(即ちその夜)のお招きにも出席しかねる、と劍もほろゝに書き連ねて、追伸に、先日貴女から一言の紹介もなく訪問して來た素性の知れぬ青年の持參した金は要らないからお返しする。良人の定つた女の行動は、申すまでもないが愼むが上にも殊に愼むべきものだと私共は聞き及んでゐる、ときつぱり書いて、その金額だけの爲替が同封してあつた。葉子が古藤を連れて横濱に行つたのも、假病をつかつて宿屋に引き籠つたのも、實を云ふと船商賣をする人には珍らしい嚴格なこの永田に會ふ面倒を避ける爲めだつた。葉子は小さく舌打ちして、爲替ごと手紙を引き裂かうとしたが、ふと思ひ返して、丹念に墨をすりおろして一字々々考へて書いたやうな手紙だけずた〳〵に破いて屑籠に突つ込んだ。

葉子は地味な他所衣に寢衣を着かへて二階を降りた。朝食は喰べる氣がなかつた。妹達の顔を見るのも氣づまりだつた。

姉妹三人のゐる二階の、隅から隅まできちんと小綺麗に片付いてゐるのに引きかへて、叔母

一家の住まふ下座敷は變に油ぎつて汚れてゐた。白痴の兒が赤坊同樣なので、東の緣に干してある襁褓から立つ鹽臭い匂ひや、疊の上に踏みにじられたまゝこびりついてゐる飯粒などが、すぐ葉子の神經をいら〳〵させた。玄關に出て見ると、そこには叔父が、襟の眞黑に汗じんだ白い飛白を薄寒さうに着て、白痴の子を膝の上に乘せながら、朝つぱらから柿をむいてあてがつてゐた。その柿の皮があか〳〵と紙屑とごつたになつて敷石の上に散つてゐた。葉子は叔父に一寸挨拶をして草履を探しながら、

「愛さん一寸こゝにお出で。玄關が御覽、あんなに汚れてゐるからね、綺麗に掃除しておいて頂戴よ。――今夜はお客樣もあるんだのに……」

と駈けて來た愛子にわざとつんけんいふと、叔父は神經の遠くの方であてこすられたのを感じた風で、

「おゝ、それは俺しがしたんぢやて、俺しが掃除しとく。構うて下さるな、おいお俊――お俊といふに、何しとるぞい」

とのろまらしく呼び立てた。帶しろ裸かの叔母がそこにやつて來て、又くだらぬ口論をするのだと思ふと、泥の中でいがみ合ふ豚か何んぞを思ひ出して、葉子は踵の塵を拂はんばかりにそこ〳〵家を出た。細い釘店の往來は場所柄だけに門並み綺麗に掃除されて、打水をした上を、氣のきいた風體の男女が忙がしさうに往き來してゐた。葉子は拔け毛の丸めたのや、卷煙草の袋の千切れたのが散らばつて箒の目一つない自分の家の前を眼をつぶつて驅け拔けたい程の思ひをして、ついそばの日本銀行に這入つてありつたけの預金を引き出した。而してその前の車屋で始終乘りつけの一番立派な人力車を仕立てさして、その足で買物に出かけた。妹達に買ひ殘しておくべき衣服地や、外國人向きの土產品や、新らしい、どつしりしたトランクなどを買ひ入れると引き出した金はいくらも殘つてはゐなかつた。而して午後の日がやゝ傾きかゝつた頃、大塚窪町に住む内田といふ母の友人を訪れた　内田は熱心な基督教の傳道者として、憎む人からは蛇蝎のやうに憎まれるし、好きな人からは豫言者のやうに崇拜されてゐる天才肌の人だつた。葉子は五つ六つの頃母に連れられて、よく其の家に出入りしたが、人を恐れずにいい〳〵思つた事を可愛らしい口許から云ひ出す葉子の樣子が、始終人から隔てをおかれつけた内田を喜ばしたので、葉子が來ると内田は、何か心のこだはつた時でも機嫌を直して、窄つた眉根を少しは開きながら、「父子猿が來たな」といつて、そのつや〳〵したおかつぱを撫で廻したりなぞした。その中母が基督教婦人同盟の事業に關係して、忽ちの中にその牛耳を握り、外國宣教師だとか、貴婦人だとかを引き入れて、政略がましく事業の擴張に奔走するやうになると、内田はすぐ機嫌を損じて早月親佐を責めて　基督の精神を無視した俗惡な態度だと息捲いたが、親佐が一向それに取り合ふ樣子がないので、兩家の間は見る〳〵疎々しいものになつてしまつた。それでも内田は葉子だけには不思議に愛着を持つてゐたと見えて、よく葉子の噂をして、「子猿」だけは引き取つて子供同樣に育ててやつてもいゝなぞと云つたりした。内田は離緣した最初の妻が連れて行つてしまつたたつた一人の娘にいつまでも未練を持つてゐるらしかつた。どこでもいゝその娘に似たらしい所のある少女を見ると内田は日頃の自分を忘れたやうに甘々しい顏付きをした。人が恐れる割合に葉子には内田が恐ろしく思へなかつたばかりか、その峻烈な性格の奥にとぢこめられて小さく澱んだ愛情に觸れると、ありきたりの人間からは得られないやうななつかしみを感

ずる事があつた。葉子は母に默つて時々内田を訪れた。内田は葉子が來るとどんな忙がしい時でも自分の部屋に通して笑ひ話などをした。時には二人だけで郊外の靜かな並木道などを散歩したりした。ある時内田はもう娘らしく生長した葉子の手を堅く握つて、「お前は神樣以外の私の唯ゝ一人の道伴れだ」などと云つた。葉子は不思議な甘い心持でその言葉を聞いた。その記憶は永く忘れ得なかつた。

　それがあの木部との結婚問題が持ち上ると、内田は否應なしにある日葉子を自分の家に呼びつけた。而して戀人の變心を詰り責める嫉妬深い男のやうに、火と涙とを眼から迸らせて、打ちもすゑかねぬまでに狂ひ怒つた。その時ばかりは葉子も心から激昂させられた。「誰れがもうこんな我儘な人の所に來てやるものか」さう思ひながら、生垣の多い、家並みの疎らな、轍の跡の滅入りこんだ小石川の往來を歩き〳〵、憤怒の齒ぎしりを止めかねた。それは夕闇の催した晩秋だつた。然しそれと同時に何んだか大切なものを取り落したやうな、自分をこの世につり上げてゐる綫の一つがぷつんと切れたやうな不思議な淋しさの胸に逼るのを何うする事も出來なかつた。

―基督に水をやつたサマリヤの女の事も思ふから、この上お前には何も云ふまい――他人の失望も神の失望もちつとは考へて見るがいゝ、……罪だぞ、恐ろしい罪だぞ」

　そんな事があつてから五年を過ぎた今日、郵便局に行つて、永田から來た爲替を引き出して、定子を預つてくれてゐる乳母の家に持つて行かうと思つた時、葉子は紙幣の束を算へながら、不圖内田の最後の言葉を思ひ出したのだつた。物のない所に物を探るやうな心持で葉子は人力車を大塚の方に走らした。

　五年經つても昔のまゝの構へで、まばらにさし代へた屋根板と、めつきり延びた垣添ひの桐の木とが目立つばかりだつた。砂きしみのする格子戸を開けて、帶前を整へながら出て來た柔和な細君と顏を合せた時は、さすがに懷舊の情が二人の胸を騷がせた。細君は思はず知らず「まあどうぞ」と云つたが、その瞬間にはつと躊つたやうな樣子になつて、急いで内田の書齋に這入つて行つた。暫らくすると嘆息しながら物を云ふやうな内田の聲が途切れ〳〵に聞こえた。「上げるのは勝手だが俺れは會ふ事はないぢやないか」と云つたかと思ふと、はげしい音をたてて讀みさしの書物をぱたんと閉ぢる音がした。葉子は自分の爪先を見詰めながら下脣をかんでゐた。

　やがて細君がおど〳〵しながら立ち現はれて、先づと葉子を茶の間に招じ入れた。それと入れ代りに、書齋では内田が椅子を離れた音がして、やがて内田はづか〳〵と格子戸を開けて出て行つてしまつた。

　葉子は思はずふいいふらいいつと立ち上らうとするのを、何氣ない顏でぢつと堪らへた。せめては雷のやうな激しいその怒りの聲に打たれたかつた。あはよくば自分も思ひ切り云ひたい事を云つて退けたかつた。何處に行つても取りあひもせず、鼻であしらひ、鼻であしらはれ慣れた葉子には、何か眞味な力で打ち摧かれるなり、打ち摧くなりして見たかつた。それだつたのに思ひ入つて内田の所に來て見れば、内田は世の常の人々よりも一層冷やかに酷く思はれた。

「こんな事を云つては失禮ですけれどもね葉子さん、あなたの事を色々に云つて來る人があるもんですからね、あの通りの性質でせう。どうも私には何んとも云ひなだめやうがないのですよ。内田があなたをお上げ申したのが不思議な程だと私思ひますの。この頃は殊更ら誰れにも云はれないやうなごた〳〵が家の内にある

もんですから、餘計むしやくしやしてゐて、本當に私どうしたらいゝかと思ふ事がありますの」

意地も生地も内田の强烈な性格の爲めに存分に打ち碎かれた細君は、上品な顔立てに中世紀の尼にでも見るやうな思ひ諦めた表情を浮べて、捨て身の生活のどん底にひそむ寂しい不足をほのめかした。自分より年下で、而かも良人から散々惡評を投げられてゐる筈の葉子に對してまで、すぐ心が碎けてしまつて、張りのない言葉で同情を求めるかと思ふと、葉子は自分の事のやうに齒痒かつた。眉と口とのあたりに憎たらしい輕蔑の影がまざ〳〵と浮び上るのを感じながら、それを何うする事も出來なかつた。葉子は急に青味を増した顔で細君を見やつたが、その顔は世故に慣れ切つた三十女のやうだつた。（葉子は思ふまゝに自分の年を五つも上にしたり下にしたりする不思議な力を持つてゐた。感情次第でその表情は役者の技巧のやうに變つた）

「齒痒くはいらつしやらなくつて」

と切り返すやうに内田の細君の言葉をひつたくつて、

「私だつたら何うでせう。すぐをぢさんと喧嘩して出てしまひますわ。それは私、をぢさんを偉い方だとは思つてゐますが、私こんなに生れついたんですから何うじやうもありませんわ。一から十まで仰しやる事をはい〳〵と聞いてはゐられませんわ。をぢさんもあんまりでいらつしやいますのね。あなた見たいな方にさう笠にかゝらずとも、私でもお相手になさればいゝのに……でもあなたがいらつしやればこそをぢさんもあゝやつてお仕事がお出來になるんですのね。私だけは除け物ですけれども、世の中は中々よく行つてゐますわ。……あ、それでも私はもう見放されてしまつたんですものね、いふ事はありやしません。本當にあなたがいらつしやるのでをぢさんはお仕合せですわ。あなたは辛抱なさる方。をぢさんは我儘でお通しになる方。尤もをぢさんにはそれが神樣のお思召しなんでせうけれどもね。……私も神樣のお思召しか何んかで我儘で通す女なんですからをぢさんとは何うしても茶碗と茶碗ですわ。それでも男は良う御座んすのね我儘が通るんですもの。女の我儘は通すより仕方がないんですから本當に情けなくなりますのね。何も前世の約束なんでせうよ……」

内田の細君は自分より遙か年下の葉子の言葉をしみ〴〵と聞いてゐるらしかつた。葉子は葉子でしみ〴〵と細君の身なりを見ないではゐられなかつた。一昨日あたり結つたまゝの束髮だつた。癖のない濃い髮には薪の灰らしい灰がたかつてゐた。糊氣のぬけ切つた單衣も物淋しかつた。その柄の細かい所には里の母の着古しといふやうな香ひがした。由緒ある京都の士族に生れたその人の皮膚は美しかつた。それが尙更らその人を哀れにして見せた。

「他人の事なぞ考へてゐられやしない」暫らくすると葉子は捨鉢にこんな事を思つた。而して急にはずんだ調子になつて、

「私明日亞米利加に發ちますの、獨りで」

と突拍子もなく云つた。餘りの不意に細君は眼を見張つて顔を擧げた。

「まあ本當に」

「はあ本當に……而かも木村の所に行くやうになりましたの。木村、御存じでせう」

細君がうなづいてなほ子細を聞かうとすると、葉子は事もなげに遮つて、

「だからから今日はお暇乞ひの積りでしたの。それでもそんな事は何うでも好う御座いますわ。をぢさんがお歸りになつたら宜しく仰しやつて下さいまし、葉子はどんな人間になり下るかも知

れませんつて……あなたどうぞお體をお大事に。太郎さんはまだ學校で御座いますか。大きくおなりでせうね。何んぞ持つて上がればよかつたのに、用がこんなもんですから」

と云ひながら兩手で大きな輪を作つて見せて、若々しくほゝゑみながら立ち上つた。

玄關に送つて出た細君の眼には涙がたまつてゐた。それを見ると、人はよく無意味な涙を流すものだと葉子は思つた。けれどもあの涙も内田が無理無體にしぼり出させるやうなものだと思ひ直すと、心臟の鼓動が止る程葉子の心はかつとなつた。而して唇を震はしながら、

「もう一言をぢさんに仰しやつて下さいまし。七度を七十倍はなさらずとも、せめて三度位は人の尤も許して上げて下さいましつて……尤もこれはあなたのお爲めに申しますの。私は誰れにあやまつていたゞくのもいやですし、誰れにあやまるのもいやな性分なんですから、をぢさんに許して頂かうとは頭から思つてなどゐはしませんの。それも序でに仰しやつて下さいまし」

口のはたに戲談らしく微笑を見せながら、さう云つてゐる中に、大濤がどすん／＼と橫隔膜につきあたるやうな心地がして、鼻血でも出さうに鼻の孔が塞がつた。門を出る時も唇はなほ口惜しさうに震へてゐた。日は植物園の森の上に舂いて、暮方近い空氣の中に、今朝から吹き出してゐた風はなぎた。葉子は今の心と、今朝早く風の吹き始めた頃に、土藏わきの小部屋で荷造りをした時の心とを較べて見て、自分ながら同じ心とは思ひ得なかつた。而して門を出て左に曲らうとして不圖道傍の捨石にけつまづいて、はつと眼が覺めたやうにあたりを見廻した。矢張り二十五の葉子である。いゝえ昔たしかに一度けつまづいた事があつた。さう思つて葉子は迷信家のやうにもう一度振り返つて捨石を見た。その時に日は……矢張り植物園の森のあの邊にあつた。而して道の暗さもこの位だつた。自分はその時内田の奥さんに内田の惡口をいつて、ペテロと基督との間に取り交はされた寛恕に對する問答を例に引いた。いゝえそれは今日した事だつた。今日意味のない涙を奥さんがこぼしたやうに、その時も奥さんは意味のない涙をこぼした。その時にも自分は二十五……そんな事はない。そんな事のあらう筈がない……變な……。それにしてもあの捨石には覺えがある、あれは昔からあすこにちやんとあつた。かう思ひ續けて來ると、葉子は、いつか母と遊びに來た時、何か怒つてその捨石に噛り付いて動かなかつた事をまざ／＼と心に浮べた。その時は大きな石だと思つてゐたのにこれんぼつちの石なのか。母が當惑して立つた姿がはつきり眼先きに現はれた。と思ふとやがてその輪郭が輝き出して、眼も向けられない程耀いたが、すつと惜氣もなく消えてしまつて、葉子は自分の體が中有からどつしり大地に下り立つたやうな感じを受けた。同時に鼻血がどく／＼口から顎を傳つて胸の合せ目をよごした。驚いてハンケチを袂から探り出さうとした時、

「どうかなさりましたか」

といふ聲に驚かされて、葉子は始めて自分の後に人力車がついて來てゐたのに氣が付いた。見ると捨石の在る所はもう八九町後ろになつてゐた。

「鼻血なの」

と應へながら葉子は始めてのやうにあたりを見た。そこには紺暖簾を所せまくかけ渡した紙屋の小店があつた。葉子は取りあへずそこに這入つて、人目を避けながら顏を洗はして貰はうとした。

四十恰好の克明らしい内儀さんがわが事のやうに金盥に水を移して持つて來てくれた。葉

子はそれで白粉氣のない顏を思ふ存分に冷やした。而して少し人心地がついたので、帶の間から懷中鏡を取り出して顏を直さうとすると、鏡がいつの間にか眞二つに破れてゐた。先刻けつまづいた拍子に破れたのか知らんと思つて見たが、それ位で破れる筈はない。怒りに任せて胸がいゝとなつた時破れたのだらうか。何んだかさうらしくも思へた。それとも明日の船出の不吉を告げる何かの業かも知れない。木村との行末の破滅を知らせる惡い辻占かも知れない。又さう思ふと葉子は襟元に凍つた針でも刺されるやうに、ぞく／＼とわけの分らない身慄ひをした。一體自分は何うなつて行くのだらう。葉子はこれまでの見窮められない不思議な自分の運命を思ふにつけ、これから先きの運命が空恐ろしく心に描かれた。葉子は不安な悒鬱な眼付きをして店を見廻した。帳場に坐り込んだ内儀さんの膝に凭れて、七つほどの少女が、ぢつと葉子の眼を迎へて葉子を見詰めてゐた。瘦せぎすで、痛々しいほど眼の大きな、その癖黑眼の小さな、青白い顏が、薄暗い店の奧から、香料や石鹸の香につゝまれて、ぼんやり浮き出たやうに見えるのが、何か鏡の破れたのと縁でもあるらしく眺められた。葉子の心は全く普段の落ち付きを失つてしまつたやうにわく／＼して、立つても坐つてもゐられないやうになつた。馬鹿なと思ひながら怖いものにでも追ひすがられるやうだつた。

暫らくの間葉子はこの奇怪な心の動搖の爲めに店を立ち去る事もしないで佇んでゐたが、ふと何うにでもなれといふ捨鉢な氣になつて元氣を取り直しながら、いくらかの禮をしてそこを出た。出るには出たがもう車に乘る氣にもなれなかつた。是れから定子に會ひに行つてよそながら別れを惜しまうと思つてゐた其の心組みさへ物憂かつた。定子に會つた所が何うなるものか。自分の事すら次ぎの瞬間には取りとめもないものを、他人の事――それはよし自分の血を分けた大切な獨子であらうとも――などを考へるだけが馬鹿な事だと思つた。而してもう一度そこの店から卷紙を買つて、硯箱を借りて、男恥しい筆跡で、出發前にもう一度乳母を訪れる積りだつたが、それが出來なくなつたから．この後とも定子を宜しく頼む。當座の費用として金を少し送つておくといふ意味を簡單に認めて、永田から送つてよこした爲替の金を封入して、その店を出た。而していきなりそこに待ち合はしてゐた人力車の上の膝掛をはぐつて、蹴込みに打ち付けてある鑑札にしつかり眼を通しておいて、

「私はこれから歩いて行くから、この手紙をここへ屆けておくれ、返事はいらないのだから……お金ですよ、少しどつさりあるから大事にしてね―」

と車夫に云ひつけた。車夫は碌に見知りもないものに大金を渡して平氣でゐる女の顏を今更のやうにきよと／＼と見やりながら空俥を引いて立ち去つた。大八車が續けさまに田舍に向いて歸つて行く小石川の夕暮の中を、葉子は傘を杖にしながら思ひに耽つて歩いて行つた。

こもつた哀愁が、發しない酒のやうに、葉子の顳顬をちか／＼と痛めた。葉子は人力車の行方を見失つてゐた。而して自分では眞直に釘店の方に急ぐつもりでゐた。ところが實際は眼に見えぬ力で人力車に結び付けられでもしたやうに、知らず／＼人力車の通つたとほりの道を歩いて、はつと氣がついた時には何時の間にか、乳母が住む下谷池の端の或る曲り角に來て立つてゐた。

そこで葉子はぎよつとして立ち停つてしまつた。短くなりまさつた日は本鄉の高臺に隱れて、往來には厨の煙とも夕靄ともつかぬ薄い

霧がたゞよつて、街頭のランプの灯が殊に赤くちらほら〳〵と點つてゐた。通り慣れたこの界隈の空氣は特別な親しみを以て葉子の皮膚を撫でた。心よりも肉體の方が餘計に定子のゐる所に牽き付けられるやうにさへ思へた。葉子の脣は暖い桃の皮のやうな定子の頰の膚ざはりにあこがれた。葉子の手はもうめれんすの彈力のある軟い觸感を感じてゐた。葉子の膝はふうはりとした輕い重みを覺えてゐた。耳には子供のアクセントが燒き付いた。眼には、曲り角の朽ちかゝつた黑板塀を透して、木部から稟けた笑窪の出來る笑顏が否應なしに吸ひ付いて來た。……乳房はくすむつたかつた。葉子は思はず片頰に微笑を浮べてあたりを偸むやうに見廻した。と丁度そこを通りかゝつた內儀さんが、何かを前掛の下に隱しながらぢつと葉子の立姿を振り返つてまで見て通るのに氣がついた。

葉子は惡事でも働いてゐた人のやうに、急に笑顏を引つ込めてしまつた。而してこそ〳〵とそこを立ち退いて不忍の池に出た。而して過去も未來も持たない人のやうに、池の端につくねんと突つ立つたまゝ、池の中の蓮の實の一つに眼を定めて、身動きもせずに小半時立ち盡してゐた。

八

日の光がとつぷりと隱れてしまつて、往來の灯ばかりが足許の便りとなる頃、葉子は熱病患者のやうに濁り切つた頭をもてあまして、車に搖られる度每に眉を痛々しく顰めながら、釘店に歸つて來た。

玄關には色々の足駄や靴が列べてあつたが、流行を作らう、少くとも流行に遲れまいといふ華やかな心を誇るらしい履物と云つては一つも見當らなかつた。自分の草履を始末しながら、葉子はすぐに二階の客間の模樣を想像して、自分の爲めに親戚や知人が寄つて別れを惜しむといふその席に顏を出すのが、自分自身を馬鹿にし切つたことのやうにしか思はれなかつた。こんな位なら定子の所にでもゐる方が餘程增しだつた。こんな事のある筈だつたのを何うして又忘れてゐたものだらう。何處にゐるのもいやだ。木部の家を出て、二度とは歸るまいと決心した時のやうな心持で、拾ひかけた草履をたゝきに戾さうとしたその途端に、

「姉さんもういや……いやー」

と云ひながら、身を震はして矢庭に胸に、抱きついて來て、乳の間の窪みに顏を埋めながら、成人のするやうな泣きじやくりをして、

「もう行つちやいやですと云ふのに」

とからく言葉を續けたのは貞世だつた。葉子は石のやうに立ちすくんでしまつた。貞世は朝から不機嫌になつて誰れの云ふ事も耳には入れずに、自分の歸るのばかりを待ちこがれてゐたに違ひないのだ。葉子は機械的に貞世に引つ張られて階子段を昇つて行つた。

階子段を昇り切つて見ると客間はしいんとしてゐて、五十川女史の祈禱の聲だけがおごそかに聞こえてゐた。葉子と貞世とは無人のやうに抱き合ひながら、アーメンと云ふ聲の一座の人々から擧げられるのを待つて室に這入つた。列の人々はまだ殊勝らしく頭を首垂れてゐる中に、正座近くすゑられた古藤だけは昻然と眼を見開いて、襖を開けた葉子がしとやかに這入つて來るのを見戍つてゐた。

葉子は古藤に一寸眼で挨拶をして置いて、貞世を抱いたまゝ末座に膝をついて、一同に遲刻の詫びをしようとしてゐると、主人座に坐り込んでゐる叔父が、我子でもたしなめるやうに威儀を作つて、

「何んたら遲い事ぢや。今日はお前の送別會ぢやぞい。……皆さんにいからお待たせするが濟

まんから、今五十川さんに祈禱をお賴み申して、箸を取つて頂からと思つた所であつた……一體何處を……」

　面と向つては、葉子に口小言一つ云ひ切らぬ器量なしの叔父が、場所も折もあらうにこんな場合に見せびらかしをしようとする。葉子はそつちに見向きもせず、叔父の言葉を全く無視した態度で急に晴やかな色を顏に浮べながら、

「ようこそ皆樣……遲くなりまして。つい行かなければならない所が二つ三つありましたもんですから……」

と誰れにともなく云つておいて、する〳〵と立ち上つて、釘店の往來に向いた大きな窓を後ろにした自分の席に着いて、妹の愛子と自分との間に割り込んで來る貞世の頭を撫でながら、自分の上にばかり注がれる滿座の視線を小うるささうに拂ひ除けた。而して片方の手で大分亂れた鬢のほつれをかき上げて、葉子の視線は人もなげに古藤の方に走つた。

「暫らくでしたのね……とう〳〵明日になりましたよ。木村に持つて行くものは一緒にお持ちになつて？……さう—

と輕い調子で云つたので、五十川女史と叔父とが切り出さうとした言葉は、物の見事に遮られてしまつた。葉子は古藤にそれだけの事を云ふと、今度は當の敵とも云ふべき五十川女史に振り向いて、

「伯母さま、今日途中でそれはをかしな事がありましたのよ。かうなんですの—

と云ひながら男女を併せて八人程居列んだ親類達にずつと眼を配つて、

「車で駈け通つたんですから前も後もよくは解らないんですけれども、大時計の角の所を廣小路に出ようとしたら、その角に大變な人だかりですの。何んだと思つて見て見ますとね、禁酒會の大道演説で、大きな旗が二三本立つてゐて、急拵へのテーブルに突つ立つて、夢中になつて演説してゐる人があるんですの。それだけなら何も別に珍らしいといふ事はないんですけれども、その演説をしてゐる人が……誰れだとお思ひになつて……山脇さんですの—

　一同の顏には思はず知らず驚きの色が現はれて、葉子の言葉に耳を傾てゝゐた。先刻しかつめらしい顏をした叔父はもう白痴のやうに口を開けたまゝで薄笑ひを洩しながら葉子を見つめてゐた。

「それが又ね、いつもの通りに金時のやうに頭筋まで眞赤ですの。「諸君」とか何んとか云つて大手を振り立てて饒舌つてゐるのを、肝心の禁酒會員達は呆氣に取られて、默つたまゝ引きさがつて見てゐるんですから、見物人がわい〳〵と面白がつてたかつてゐるのも全く尤もですわ。その中に、あ、叔父さん、箸をおつけになるやうに皆樣に仰しやつて下さいまし—

　叔父が慌てて口の締りをして佛頂面に立ち歸つて、何か云はうとすると、葉子は又それには頓着なく五十川女史の方に向いて、

「あのお肩の凝りはすつかりお治りになりまして—

と云つたので、五十川女史の答へようとする言葉と、叔父の云ひ出さうとする言葉は氣まづくも鉢合せになつて、二人は所在なげに默つてしまつた。座敷は、底の方に氣持の惡い暗流を潛めながら造り笑ひをし合つてゐるやうな不快な氣分に滿たされた。葉子は「さあ來い」と胸の中で身構へをしてゐた。五十川女史の側に坐つて、神經質らしく眉をきらめかす、中老の官吏は、射るやうないま〳〵しげな眼光を時々葉子に浴せかけてゐたが、ゐたゝまれない樣子で一寸居住ひをなほすと、ぎくしやくした調子で口を切つた。

「葉子さん、あなたもいよ〳〵身の堅まる瀬戸

際まで漕ぎ付けたんだが……」

葉子は隙を見せたら切り返すからと云はんばかりな緊張した、同時に物を物ともしない風でその男の眼を迎へた。

「何しろ私共早月家の親類に取つてはこんな目出度い事は先づない。無いには無いがこれからがあなたに頼み所だ。どうぞ一つ私共の顏を立てて、今度こそは立派な奥さんになつておもらひしたいが如何です。木村君は私もよく知つとるが、信仰も堅いし、仕事も珍らしくはきはき出來るし、若いに似合はぬ物の分つた仁だ。こんなことまで比較に持ち出すのは何うか知らないが、木部氏のやうな實行力の伴はない夢想家は、私などは始めから不贊成だつた。今度のはぢたい段が違ふ。葉子さんが木部氏の所から逃げ歸つて來た時には、私もけしからんと云つた實は一人だが、今になつて見ると葉子さんはさすがに眼が高かつた。出て來ておいて誠によかつた。いまに見なさい木村といふ仁なりや、立派に成功して、第一流の實業家に成り上るにきまつてゐる。是れからは何んと云つても信用と金だ。官界に出ないのなら何うしても實業界に行かなければうそだ。擲身報國は官吏たるものの一特權だが、木村さんのやうな眞面目な信者にしこたま金を造つて貰はんぢや、神の道を日本に傳へ擴げるにしてからが容易な事ぢやありませんよ。あなたも小さい時から米國に渡つて新聞記者の修業をすると口癖のやうに妙な事を云つたもんだが（こゝで一座の人は何んの意味もなく高く笑つた。恐らくは餘りしかつめらしい空氣を打ち破つて、何んとかそこに餘裕をつける積りが皆んなに起つたのだらうけれども、葉子に取つてはそれがさうは響かなかつた。その心持は解つても、そんな事で葉子の心をはぐらかさうとする彼等の淺はかさがぐつと癪に障つた）新聞記者は兎も角も……ぢやない、そんなものになられては困り切るが（ここで一座はまた譯もなく馬鹿らしく笑つた）米國行の願はたしかに叶つたのだ。葉子さんも御滿足に違ひなからう。後の事は私共がたしかに引き受けたから心配は無用にして、身をしめて妹さんの方のしめしになる程の奮發を頼みます……えゝと、財産の方の處分は私と田中さんとで間違ひなく固めるし、愛子さんと貞世さんのお世話は、五十川さん、あなたにお願ひしようぢやありませんか、御迷惑ですが。何うでせう皆さん（さう云つて彼れは一座を見渡した。豫め申し合せが出來てゐたらしく一同は待ち設けたやうに點頭いて見せた。）どうぢやら葉子さん」

葉子は乞食の嘆願を聞く女王のやうな心持で、○○局長と云はれるこの男の云ふ事を聞いてゐたが、財産の事などは何うでもいゝとして、妹達の事が話題に上ると共に、五十川女史を向うに廻して詰問のやうな對話を始めた。何んと云つても五十川女史はその晩そこに集まつた人々の中では一番年配でもあつたし、一番憚られてゐるのを葉子は知つてゐた。五十川女史が四角を思ひ出させるやうな嚴乘な骨組みで、がつしりと正座に居直つて、葉子を子供あしらひにしようとするのを見て取ると、葉子の心は逸り熱した。

「いゝえ、我儘だとばかりお思ひになつては困ります。私は御承知のやうな生れで御座います。是れまでも度々御心配をかけて來て居りますから、人樣同樣に見ていたゞかうとは是れつぱかりも思つては居りません」

と云つて葉子は指の間になぶつてゐた楊枝を老女史の前にふいと投げた。

「然し愛子も貞世も妹で御座います。現在私の妹で御座います。口幅つたいと思召すかも知れませんが、此の二人だけは私縱令ひ米國に

居りましても立派に手鹽にかけて御覽に入れますから、どうかお構ひなさらずに下さいまし。それは赤阪學院も立派な學校には違ひ御座いますまい。現在私も伯母さまのお世話であすこで育てていたゞいたのですから、惡くは申したくは御座いませんが、私のやうな人間が皆樣のお氣に入らないとすれば‥‥それは生れつきも御座いませうとも、御座いませうけれども、私を育て上げたのはあの學校で御座いますかられえ。何しろ現在居て見た上で、私この二人をあすこに入れる氣にはなれません。女といふものをあの學校では一體何んと見てゐるので御座んすか知らん‥‥」

かう云つてゐる中に葉子の心には火のやうな回想の憤怒が燃え上つた。葉子はその學校の寄宿舍で一箇の中性動物として取扱はれたのを忘れる事が出來ない。やさしく、愛らしく、しをらしく、生れたまゝの美しい好意と欲念との命ずるまゝに、おぼろげながら神といふものを戀しかけた十二三歳頃の葉子に、學校は祈禱と、節慾と、殺情とを強制的にたゝき込まうとした。十四の夏が秋に移らうとした頃、葉子は不圖思ひ立つて、美しい四寸幅程の角帶のやうなものを細絲で編みはじめた。藍の地に白で十字架と日月とをあしらつた模樣だつた。物事に耽り易い葉子は身も魂も打ち込んでその仕事に夢中になつた。それを造り上げた上で何うして神樣の御手に屆けよう、と云ふやうな事は固より考へもせずに、早く造り上げてお喜ばせ申さうとのみあせつて、仕舞には夜の目も碌々合はさなくなつた。二週間に餘る苦心の末にそれはあらかた出來上つた。藍の地に簡單に白で模樣を拔くだけならさしたる事でもないが、葉子は他人のまだしなかつた試みを加へようとして、模樣の周圍に藍と白とを組み合せにした小さな笹縁のやうなものを浮き上げて編み込んだり、ひどく伸び縮みがして模樣が歪形にならないやうに、目立たないやうにカタン絲を編み込んで見たりした。出來上りが近づくと葉子は片時も編針を休めてはゐられなかつた。ある時聖書の講義の講座でそつと机の下で仕事を續けてゐると、運惡くも教師に見付けられた。教師は頻りにその用途を問ひたゞしたが、恥ぢ易い乙女心にどうしてこの夢よりも果敢ない目論見を白狀する事が出來よう。教師はその帶の色合から推して、それは男向きの品物に違ひないと決めてしまつた。而して葉子の心は早熟の戀を追ふものだと斷定した。而して戀といふものを生來知らぬげな四十五六の醜い容貌の舍監は、葉子を監禁同樣にして置いて、暇さへあればその帶の持主たるべき人の名を迫り問うた。

葉子はふと心の眼を開いた。而してその心はそれ以來峰から峰を飛んだ。十五の春には葉子はもう十も年上な立派な戀人を持つてゐた。葉子はその青年を思ふさま飜弄した。青年は間もなく自殺同樣な死方をした。一度生血の味をしめた虎の子のやうな渴慾が葉子の心を打ちのめすやうになつたのはそれからの事である。

―古藤さん愛と貞とはあなたに願ひますわ。誰れがどんな事を云はうと、赤阪學院には入れないで下さいまし。私昨日田島さんの塾に行つて、田島さんにお會ひ申してよつくお頼みして來ましたから、少し片付いたら憚り樣ですがあなた御自身で二人を連れていらしつて下さい。愛さんも貞ちやんも分りましたらう。田島さんの塾に這入るとね、姉さんと一緒にゐた時のやうな譯には行きませんよ‥‥」

「姉さんてば‥‥自分でばかり物を仰しやつて」

といきなり恨めしさうに、貞世は姉の膝を搖りながらその言葉を遮つた。

―さつきから何度書いたか分らないのに平氣で

ほんとにひどいわ」

一座の人々から妙な子だといふ風に眺められてゐるのにも頓着なく、貞世は姉の方に向いて膝の上にしなだれかゝりながら、姉の左手を長い袖の下に入れて、その掌に食指で假名を一字づつ書いて手の掌で拭き消すやうにした。葉子は默つて、書いては消し書いては消しする字を辿つて見ると、

「ネーサマハイイコダカラ『アメリカ』ニイツテハイケマセンヨヨヨヨ」

と讀まれた。葉子の胸は我れ知らず熱くなつたが、強ひて笑ひにまぎらしながら、

「まあ聞きわけのない兒だこと、仕方がない。今になつてそんな事を云つたつて仕方がないぢやないの」

とたしなめ諭すやうに云ふと、

「仕方があるわ」

と貞世は大きな眼で姉を見上げながら、

「お嫁に行かなければよろしいぢやないの」

と云つて、くるりと首を廻して一同を見渡した。貞世の可愛い眼は「さうでせう」と訴へてゐるやうに見えた。それを見ると一同は唯々何んと云ふ事もなく思ひ遣りのない笑ひ方をした。叔父は殊に大きなとんきよな聲で高々と笑つた。先刻から默つたまゝで俯向いて淋しく坐つてゐた愛子は、沈んだ恨めしさうな眼でぢつと叔父を睨めたと思ふと、忽ち湧くやうに涙をほろほろと流して、それを兩袖で拭ひもやらず立ち上つてその部屋をかけ出した。階子段の處で丁度下から上つて來た叔母と行き遇つたけはひがして、二人が何か云ひ爭ふらしい聲が聞こえて來た。

一座は又白け亙つた。

「叔父さんにも申上げておきます」

と沈默を破つた葉子の聲が妙に殺氣を帶びて響いた。

「是れまで何かとお世話様になつて難有う御座いましたけれども、この家もたゝんでしまふ事になれば、妹たちも今申した通り塾に入れてしまひますし、この後はこれと云つて大して御厄介はかけない積りで御座います。赤の他人の古藤さんにこんな事を願つてはほんとに濟みませんけれども、木村の親友でいらつしやるのですから、近い他人ですわね。古藤さん、あなた貧乏籤を背負ひ込んだと思召して、どうか二人を見てやつて下さいましな。いゝでせう。から親類の前ではつきり申しておきますから、ちつとも御遠慮なさらずに、いゝとお思ひになつたやうになさつて下さいまし。あちらへ着いたら私又乾度どうとも致しますから。乾度そんなに長い間御迷惑はかけませんから。いかゞ、引受けて下さいまして？」

古藤は少し躊躇する風で五十川女史を見やりながら、

「あなたは先刻から赤阪學院の方がいゝと仰しやるやうに伺つてゐますが、葉子さんの云はれる通りにして差支へないのですか。念の爲めに伺つておきたいのですが」

と尋ねた。葉子は又あんな餘計な事を云ふと思ひながらいらいらした。五十川女史は日頃の圓滑な人ずれのした調子に似ず、何かにひどく激昂した樣子で、

「私は亡くなつた親佐さんのお考へはかうもあらうかと思つた所を申したまでですから、それを葉子さんが惡いと仰しやるなら、その上兎や角云ひともないのですが、親佐さんは堅い昔風な信仰を持つた方ですから、田島さんの塾は前から嫌ひでね……空しう御座いませうさうなされば。私は兎に角赤阪學院が一番だと何處までも思つとるだけです」

と云ひながら、見下げるやうに葉子の胸のあたりをまじまじと眺めた。葉子は貞世を抱いたま

ましやんと胸をそらして眼の前の壁の方に顏を向けてゐた、例へばばら〳〵と投げられるつぶてを避けようともせずに突っ立つ人のやうに。
古藤は何か自分一人で合點したと思ふと、堅く腕組みをしてこれも自分の前の眼八分の所をぢつと見詰めた。
一座の氣分はほと〳〵動きが取れなくなつた。その間で一番早く機嫌を直して相好を變へたのは五十川女史だつた。子供を相手にして腹を立てた。それを年甲斐ないとでも思つたやうに、氣を變へてきさくに立ち支度をしながら、
「皆さんいかゞもうお暇に致しましたら……お別れする前にもう一度お祈りをして」
「お祈りを私のやうなものの爲めになさつて下さるのは御無用に願ひます」
葉子は和らぎかけた人々の氣分には更に頓着なく、壁に向けてゐた眼を貞世に落して、いつの間にか寢入つたその人の艶々しい顏を撫でさすりながらきつぱりと云ひ放つた。
人々は思ひ〳〵な別れを告げて歸つて行つた。葉子は貞世がいつの間にか膝の上で寢てしまつたのを口實にして人々を見送りには立たなかつた。
最後の客が歸つて行つた後でも、叔父叔母は二階を片付けには上つて來なかつた。挨拶一つしようともしなかつた。葉子は窓の方に頭を向けて、煉瓦の通りの上にぼうつと立つ灯の照り返しを見やりながら、夜風にほてつた顏を冷やさせて、貞世を抱いたまゝ默つて坐り續けてゐた。間遠に日本橋を渡る鐵道馬車の音が聞こえるばかりで、釘店の人通りは淋しい程疎らになつてゐた。
姿は見せずに、何處かの隅で愛子がまだ泣き續けて鼻をかんだりする音が聞こえてゐた。
「愛さん……貞ちやんが寢ましたからね、一寸お床を敷いてやつて頂戴な」
我れながら驚く程やさしく愛子に口をきく自分を葉子は見出だした。性が合はないと云ふのか、氣が合はないといふのか、普通愛子の顏さへ見れば葉子の氣分は崩されてしまふのだつた。愛子が何事につけても猫のやうに從順で少しも情といふものを見せないのが殊更ら憎かつた。然しその夜だけは不思議にもやさしい口をきいた。葉子はそれを意外に思つた。愛子がいつものやうに素直に立ち上つて、鼻をすゝりながら默つて床を取つてゐる間に葉子は折々往來の方から振り返つて、愛子のしとやかな足音や、綿を薄く入れた夏蒲團の疊に觸れるさゝやかな音を見入りでもするやうにその方に眼を定めた。さうかと思ふと又今更のやうに、食ひ荒らされた食物や、敷いたまゝになつてゐる座蒲團のきたならしく散らかつた客間をまじまじと見渡した。父の書棚のあつた部分の壁だけが四角に濃い色をしてゐた。そのすぐ側に西洋暦が昔のまゝにかけてあつた。七月十六日から先きは剝がされずに殘つてゐた。
「姉さま敷けました」
暫らくしてから、愛子がかすかに隣りで云つた。葉子は、
「さう御苦勞さまよ」
と又しとやかに應へながら、貞世を抱きかゝへて立ち上らうとすると、又頭がぐら〳〵つとして、夥しい鼻血が貞世の胸の合せ目に流れ落ちた。

九

底光りのする雲母色の雨雲が縫目なしにどんよりと重く空一杯にはだかつて、本牧の沖合まで東京灣の海は物凄いやうな草色に、小さく波の立ち騷ぐ九月二十五日の午後であつた。昨日の風が凪いでから、氣温は急に夏らしい蒸暑さに返つて、横濱の市街は、疫病にかゝつて弱り

切つた勞働者が、そぼふる雨の中にぐつたりと喘いでゐるやうに見えた。

　靴の先きで甲板をこつ〳〵と敲いて、俯向いてそれを眺めながら、帶の間に手をさし込んで、木村への傳言を古藤は獨語のやうに葉子に云つた。葉子はそれに耳を傾けるやうな樣子はしてゐたけれども、本當はさして注意もせずに、丁度自分の眼の前に、澤山の見送人に圍まれて、應接に暇もなげな田川法學博士の眼尻の下つた顏と、その夫人の痩せぎすな肩との描く微細な感情の表現を、批評家のやうな心で鋭く眺めやつてゐた。可なり廣いプロメネード・デッキは田川家の家族と見送人とで縁日のやうに賑つてゐた。葉子の見送りに來た筈の五十川女史は先刻から田川夫人の側に付き切つて、世話好きな、人の好い叔母さんといふやうな態度で、見送人の半分がたを自身で引き受けて挨拶してゐた。葉子の方へは見向かうとする模樣もなかつた。葉子の叔母は葉子から二三間離れた所に、蜘蛛のやうな白痴の兒を小婢に背負はして、自分は葉子から預かつた手鞄と袱紗包みとを取り落さんばかりにぶら下げたまゝ、花花しい田川家の家族や見送人の群を見て呆氣に取られてゐた。葉子の乳母は、どんな大きな船でも船は船だといふやうにひどく臆病さうな青い顏付きをして、サルンの入口の戸の蔭に佇みながら、四角に疊んだ手拭を眞赤になつた眼の所に絕えず押しあてては、偸み見るやうに葉子を見やつてゐた。その他の人々はぢみな一團になつて、田川家の威光に壓せられたやうに隅の方にかたまつてゐた。

　葉子はかねて、五十川女史から、田川夫婦が同船するから船の中で紹介してやると云ひ聞かせられてゐた。田川と云へば、法曹界では可なり名の聞こえた割合に、何處と云つて取りとめた特色もない政客ではあるが、その人の名は寧ろ夫人の噂の爲めに世人の記憶に鮮かであつた。感受力の鋭敏な而して何等かの意味で自分の敵に廻さなければならない人に對して殊に注意深い葉子の頭には、その夫人の面影は永い事宿題として考へられてゐた。葉子の頭に描かれた夫人は我の强い、情の恣まゝな、野心の深い割合に手練の露骨な、良人を輕く見てやゝともすると笠にかゝりながら、それでゐて良人から獨立する事の到底出來ない、謂はば心の弱い强がり家ではないか知らんと云ふのだつた。葉子は今後ろ向きになつた田川夫人の肩の樣子を一と目見たばかりで、辭書でも繰り當てたやうに、自分の想像の裏書きされたのを胸の中で微笑まずにはゐられなかつた。

「何んだか話が混雜したやうだけれどもそれだけ云つて置いて下さい」

　ふと葉子は幻想から破れて、古藤の云ふこれだけの言葉を捕へた。而して今まで古藤の口から出た傳言の文句は大抵聞き漏らしてゐた癖に、空々しげにもなくしんみりとした樣子で、

「確かに……けれどもあなた後から手紙ででも詳しく書いてやつて下さいましね。間違ひでもしてゐると大變ですから」

と古藤を覗き込むやうにして云つた。古藤は思はず笑ひを漏らしながら、「間違ふと大變ですから」と云ふ言葉を、時折り葉子の口から聞くチャームに滿ちた子供らしい言葉の一つとでも思つてゐるらしかつた。而して、

「何、間違つたつて大事はないけれども、……だが手紙は書いて、あなたの寢床の枕の下に置いときましたから、部屋に行つたら何處にでもしまつておいて下さい。それから、それと一緒にもう一つ……」

と云ひかけたが、

「何しろ忘れずに枕の下を見て下さい」

　この時突然「田川法學博士萬歲」といふ大きな

聲が、棧橋からデッキまでどよみ渡つて聞こえて來た。葉子と古藤とは話の腰を折られて互に不快な顏をしながら、手欄から下の方を覗いて見ると、すぐ眼の下に、その頃人の少し集まる所には何處にでも顏を出す轟といふ劍舞の師匠だか擊劍の師匠だかする嚴乘な男が、大きな五つ紋の黑羽織に白つぽい鰹魚縞の袴をはいて、棧橋の板を朴の木下駄で踏み鳴らしながら、こゝを先途と喚いてゐた。その聲に應じて、デッキまでは昇つて來ない壯士體の政客や某私立政治學校の生徒が一齊に萬歲を繰り返した。デッキの上の外國船客は物珍らしさに逸早く、葉子が倚り掛つてゐる手欄の方に押し寄せて來たので、葉子は古藤を促して、急いで手欄の折れ曲つた角に身を引いた。田川夫婦も微笑みながらサルーンから挨拶の爲めに近づいて來た。葉子はそれを見ると、古藤の側に寄り添つたまゝ、左手をやさしく上げて、鬢のほつれをかき上げながら、頭を心持ち左にかしげておつと田川の眼を見やつた。田川は棧橋の方に氣を取られて急ぎ足で手欄の方に歩いてゐたが、突然見えぬ力にぐつと引きつけられたやうに、葉子の方に振り向いた。

田川夫人も思はず良人の向く方に頭を向けた、田川の威嚴に乏しい眼にも鋭い光がきらめいては消え、更にきらめいて消えたのを見すまして、葉子は始めて田川夫人の眼を迎へた。額の狹い、顎の間い夫人の顏は、輕蔑と猜疑の色を漲らして葉子に向つた。葉子は、名前だけを豫てから聞き知つて慕つてゐた人を、今眼の前に見たやうに、恭しさと親しみとの交り合つた表情で之れに應じた。而してすぐそのそばから、夫人の前にも頓着なく、誘惑の眸を凝らしてその良人の横顏をぢつと見やるのだつた。

—田川法學博士夫人萬歲—萬歲—萬歲—

田川その人に對してよりも更に聲高な大歡呼が、棧橋にゐて傘を振り帽子を動かす人々の群れから起つた。田川夫人は忙はしく葉子から眼を移して、群集に取つときの笑顏を見せながら、レースで笹縁を取つたハンケチを振らねばならなかつた。田川のすぐ側に立つて、胸に何か赤い花をさして型のいゝフロック・コートを着て、ほゝゑんでゐた風流な若紳士は、棧橋の歡呼を引き取つて、田川夫人の面前で帽子を高く擧げて萬歲を叫んだ。デッキの上は又一しきりどよめき渡つた。

やがて甲板の上は、こんな騷ぎの外に何んとなく忙はしくなつて來た。事務員や水夫達が、物せはしさうに人中を縫うてあちこちする間に、手を取り合はんばかりに近よつて別れを惜む人々の群れがこゝにも彼處にも見え始めた。サルーン・デッキから見ると、三等客の見送人がボーイ長にせき立てられて續々舷門から降り始めた。それと入れ代りに、帽子、上衣、ズボン、襟飾、靴などの調和の少しも取れてゐない癖に、無闇に氣取つた洋裝をした非番の下級船員達が、濡れた傘を光らしながら駈けこんで來た。その騷ぎの間に、一種生臭いやうな暖かい蒸氣が甲板の人を取り捲いて、フォクスルの方で今までやかましく荷物をまき上げてゐた扛重機の音が突然やむと、かーんとする程人々の耳は却つて遠くなつた。隔たつた所から互に呼びかはす水夫等の高い聲は、この船にどんな大危險でも起つたかと思はせるやうな不安を播き散らした。親しい間の人達は別れの切なさに心がわく／＼して碌に口もきかず、義理一遍の見送人は、動ともするとまはりに氣が取られて見送るべき人を見失ふ、そんな慌たゞしい拔錨の間際になつた。葉子の前にも急に色々な人が寄り集まつて來て、思ひ／＼に別れの言葉を殘して船を降り始めた。葉子はこんな混雜な間にも田川の眸が時々自分に向けられるのを意識

して、その眸を驚かすやうななまめいた姿體や、頼りなげな表情を見せるのを忘れないで、言葉少なにそれらの人に挨拶した。叔父と叔母とは墓の穴まで無事に棺を運んだ人夫のやうに、通り一遍の事を云ふと、預り物を葉子に渡して、手の塵をはたかんばかりにすげなく、眞先きに舷梯を降りて行つた。葉子はちらつと叔母の後姿を見送つて驚いた。今の今まで何處とて似通ふ所の見えなかつた叔母も、その姉なる葉子の母の着物を帯まで借りて着込んでゐるのを見ると、はつと思ふ程その姉にそつくりだつた。葉子は何んと云ふ事なしにいやな心持がした。而してこんな緊張した場合にこんなちよつとした事にまでこだはる自分を妙に思つた。さう思ふ間もあらせず、今度は親類の人達が五六人づつ、口々に小やかましく何か云つて、憐れむやうな妬むやうな眼付きを投げ與へながら、幻影のやうに葉子の眼と記憶とから消えて行つた。丸髷に結つたり教師らしい地味な束髪に上げたりしてゐる四人の學校友達も、今は葉子とはかけ隔たつた境涯の言葉づかひをして、昔葉子に誓つた言葉などは忘れてしまつた裏切者の空々しい涙を見せたりして、雨に濡らすまいと袂を大事にかばひながら、傘にかくれてこれも舷梯を消えて行つてしまつた。最後に物怯ぢする様子の乳母が葉子の前に來て腰をかゞめた。葉子はとう〳〵行き詰まる所まで來たやうな思ひをしながら、振り返つて古藤を見ると、氣拔けでもしたやうに、眼を据ゑて自分の二三間先きをぼんやり眺めてゐた。

「義一さん、船の出るのも間が無ささうですからどうか此女……私の乳母ですの……の手を引いて下ろしてやつて下さいましな。辷りでもすると怖うござんすから」

と葉子に云はれて古藤は始めて我れに歸つた。

而して獨語のやうに、

「この船で僕も亞米利加に行つて見たいなあ」

と暢氣な事を云つた。

「どうか棧橋まで見てやつて下さいましね。あなたもその中是非いらつしやいましな……義一さんそれでは是れでお別れ。本當に、本當に」

と云ひながら葉子は何んとなく親しみを一番深くこの青年に感じて、大きな眼で古藤をぢつと見た。古藤も今更のやうに葉子をぢつと見た。

「お禮の申しやうもありません。この上のお願ひです、どうぞ妹達を見てやつて下さいまし。あんな人達にはどうしたつて頼んではおけませんから。……左様なら」

「左様なら」

古藤は鸚鵡返しに沒義道にこれだけ云つて、ふいと手欄を離れて、麥稈帽子を眼深かに被りながら、乳母に附添つた。

葉子は階子の上り口まで行つて二人に傘をかざしてやつて、一段々々遠ざかつて行く二人の姿を見送つた。東京で別れを告げた愛子や貞世の姿が、雨に濡れた傘の邊を幻影となつて、見えたり隱れたりしたやうに思つた。葉子は不思議な心の執着から定子にはとう〳〵會はないでしまつた。愛子と貞世とは是非見送りがしたいと云ふのを、葉子は叱りつけるやうに云つてとめてしまつた。葉子が人力車で家を出ようとすると、何んの氣なしに愛子が前髪から抜いて鬢を掻かうとした櫛が、脆くもぽきりと折れた。それを見ると愛子は堪へ〳〵てゐた涙の堰を切つて聲を立てて泣き出した。貞世は始めから腹でも立てたやうに、燃えるやうな眼から止度なく涙を流して、ぢつと葉子を見詰めてばかりゐた。そんな痛々しい様子がその時まざ〳〵と葉子の眼の前にちらついたのだ。一人ぽつちで遠い旅に鹿島立つて行く自分といふものがあぢきなくも思ひやられた。そんな心持になると忙は

しい間にも葉子はふと田川の方を振り向いて見た。中學校の制服を着た二人の少年と、髪をお下げにして帶をおはさみにしめた少女とが、田川と夫人との間にからまつて丁度告別をしてゐる所だつた。附添ひの守の女が少女を抱き上げて、田川夫人の脣をその額に受けさしてゐた。葉子はそんな場面を見せつけられると、他人事ながら自分が皮肉で鞭たれるやうに思つた。龍をも化して牝豚にするのは母となる事だ。今の今まで燒くやうに定子の事を思つてゐた葉子は、田川夫人に對してすつかり反對の事を考へた。葉子はそのいま／＼しい光景から眼を移して舷梯の方を見た。然しそこにはもう乳母の姿も古藤の影もなかつた。

　忽ち船首の方からけたゝましい銅鑼の音が響き始めた。船の上下は最後のどよめきに搖らぐやうに見えた。長い綱を引きずつて行く水夫が帽子の落ちさうになるのを右の手で支へながら、あたりの空氣に激しい動搖を起す程の勢で急いで葉子の傍を通りぬけた。見送人は一齊に帽子を脫いで舷梯の方に集まつて行つた。その際になつて五十川女史ははたと葉子の事を思ひ出したらしく、田川夫人に何か云つておいて葉子のゐる所にやつて來た。

「いよ／＼お別れになつたが、いつぞやお話しした田川の奧さんにおひきあはせしようから一寸」

　葉子は五十川女史の親切振りの犧牲になるのを承知しつゝ、一種の好奇心に牽かされて、その後について行かうとした。葉子は初めて物をいふ田川の態度も見てやりたかつた。その時、

「葉子さん」

と突然云つて、葉子の肩に手をかけたものがあつた。振り返ると麥酒の醉の匂ひがむせかへるやうに葉子の鼻を打つて、眼の心まで紅くなつた知らない若者の顏が近々と鼻先きにあらはれてゐた。はつと身を引く暇もなく、葉子の肩はびしよ濡れになつた醉どれの腕でがつしりと捲かれてゐた。

「葉子さん覺えてゐますか私を……あなたは私の命なんだ。命なんです」

といふ中にも、その眼からはほろ／＼と煮えるやうな淚が流れて、まだうら若い滑かな頰を傳つた。膝から下がふらつくのを葉子にすがつて危く支へながら、

「結婚をなさるんですか……お目出度う……お目出度う　だがあなたが日本にゐなくなると思ふと……ゐたゝまれない程心細いんだ……私は……」

もう聲さへ續かなかつた。而して深々と息氣をひいてしやくり上げながら、葉子の肩に顏を伏せてさめ／″＼と男泣きに泣き出した。

　この不意な出來事はさすがに葉子を驚かしもし、きまりも惡くさせた。誰れだとも、何時何處で遇つたとも思ひ出す由がない。木部孤笻と別れてから、何と云ふ事なしに捨鉢な心地になつて、誰れ彼れの差別もなく近寄つて來る男達に對して勝手氣儘を振舞つたその間に、偶然に出遇つて偶然に別れた人の中の一人でもあらうか。淺い心で弄んで行つた心の中にこの男の心もあつたのであらうか。兎に角葉子には少しも思ひ當る節がなかつた。葉子はその男から離れたい一心に、手に持つた手鞄と包物とを甲板の上に拋りなげて、若者の手をやさしく振りほどかうとして見たが無益だつた。親類や朋輩達の事あれがしな眼が等しく葉子に注がれてゐるのを葉子は痛い程身に感じてゐた。と同時に、男の淚が薄い單衣の目を透して、葉子の肩に沁みこんで來るのを感じた。亂れたつやつやしい髮の匂ひもつい鼻の先きで葉子の心を動かさうとした。恥も外聞も忘れ果てて、大空の下ですゝり泣く男の姿を見てゐると、そこに

は微かな誇りのやうな氣持が湧いて來た。不思議な憎しみといとしさがこんがらがつて葉子の心の中で渦卷いた。葉子は、

「さ、もう放して下さいまし、船が出ますから」

ときびしく云つて聞いて、噛んで含めるやうに、

「誰れでも生きてる間は心細く暮すんですのよ」

とその耳許にさゝやいて見た。若者はよく解つたといふ風に深々とうなづいた。然し葉子を抱く手はきびしく震へこそすれ、ゆるみさうな樣子は少しも見えなかつた。

物々しい銅鑼の響は左舷から右舷に廻つて又船首の方に聞こえて行かうとしてゐた。船員も乘客も申し合はしたやうに葉子の方を見守つてゐた。先刻から手持無沙汰さうに唯ゝ立つて成行きを見てゐた五十川女史は思ひ切つて近寄つて來て、若者を葉子から引き離さうとしたが、若者はむづかる子供のやうに地だんだを踏んでます／＼葉子に寄り添ふばかりだつた。船首の方に群がつて仕事をしながら、此の樣子を見守つてゐた水夫達は一齊に高く笑ひ聲を立てた。而してその中の一人はわざと船中に聞こえ渡るやうな嚔をした。拔錨の時刻は一秒々々に逼つてゐた。物笑ひの的になつてゐる、さう思ふと葉子の心はいとしさから激しいいとはしさに變つて行つた。

「さ、お放し下さい、さ」

と極めて冷刻に云つて、葉子は助けを求めるやうにあたりを見廻した。

田川博士の側にゐて何か話をしてゐた一人の大兵な船員がゐたが、葉子の當惑し切つた樣子を見ると、いきなり大股に近づいて來て、

「どれ私が下までお連れしませう」

と云ふや否や、葉子の返事も待たずに若者を事もなく抱きすくめた。若者はこの亂暴にかつとなつて怒り狂つたが、その船員は小さな荷物でも扱ふやうに、若者の胴のあたりを右脇にかいこんで、易々と舷梯を降りて行つた。五十川女史はあたふたと葉子に挨拶もせずにその後に續いた。暫らくすると若者は棧橋の群集の間に船員の手から下ろされた。

けたゝましい汽笛が突然鳴りはためいた。田川夫妻の見送人たちはこの聲で活を入れられたやうになつて、どよめき渡りながら、田川夫妻の萬歳をもう一度繰り返した。若者を棧橋に連れて行つたかの巨大な船員は、大きな體軀を猿のやうに輕くもてあつかつて、音も立てずに棧橋からしづ／＼と離れて行く船の上に唯ゝ一條の綱を傳つて上つて來た。人々は又その早業に驚いて眼を見張つた。

葉子の眼は怒氣を含んで手欄から暫らくの間かの若者を見据ゑてゐた。若者は狂氣のやうに兩手を擴げて船に驅け寄らうとするのを、近所に居合せた三四人の人が慌てて引き留める。それを又振り拔けようとして組み伏せられてしまつた。若者は組み伏せられたまゝ右の腕を口にあてがつて思ひ切り噛みしばりながら泣き沈んだ。その牛の唸き聲のやうな泣き聲が氣疎く船の上まで聞こえて來た。見送人は思はず鳴りを靜めてこの狂暴な若者に眼を注いだ。葉子も葉子で、姿も隱さず手欄に片手をかけたまゝ突つ立つて、同じくこの若者を見据ゑてゐた。と云つて葉子はその若者の上ばかりを思つてゐるのではなかつた。自分でも不思議だと思ふやうな虚ろな餘裕がそこにはあつた。古藤が若者の方には眼もくれずにぢいつと足許を見詰めてゐるのにも氣が付いてゐた。死んだ姉の晴着を借着していゝ心地になつてゐるやうな叔母の姿も眼に映つてゐた。船の方に後ろを向けて（恐らくそれは悲しみからばかりではなかつたらう。その若者の舉動が老いた心をひしいだに違ひない）手拭をしつかりと兩眼にあてゝゐる乳母

も見逃してはゐなかつた。

　何時の間に動いたともなく船は棧橋から遠ざかつてゐた。人の群れが黒蟻のやうに集まつたそこの光景は、葉子の眼の前に展けて行く大きな港の景色の中景になるまでに小さくなつて行つた。葉子の眼は葉子自身にも疑はれるやうな事をしてゐた。その眼は小さくなつた人影の中から乳母の姿を探り出さうとせず、一種のなつかしみを持つ横濱の市街を見納めに眺めようとせず、凝然として小さく蹲る若者ののらしい黒點を見詰めてゐた。若者の叫ぶ聲が、棧橋の上で打ち振るハンケチの時々ぎら／＼と光る毎に、葉子の頭の上に張り渡された雨よけの帆布の端から餘滴がぽつり／＼と葉子の顔を打つ度に、斷續して聞こえて來るやうに思はれた。

「葉子さんあなたは私を見殺しにするんですか……見殺しにするん……」

十

　始めての旅客も物慣れた旅客も、拔錨したばかりの船の甲板に立つては、落ち付いた心でゐる事が出來ないやうだつた。跡始末の爲めに忙しく右往左往する船員の邪魔になりながら、何がなしの興奮にぢつとしてはゐられないやうな顔付きをして、乘客は一人殘らず甲板に集まつて、今まで自分達が側近く見てゐた棧橋の方に眼を向けてゐた。葉子もその樣子だけでいふと、他の乘客と同じやうに見えた。葉子は他の乘客と同じやうに手欄に倚りかゝつて、靜かな春雨のやうに降つてゐる雨の滴に顔をなぶらせながら、波止場の方を眺めてゐたが、けれどもその眸には何んにも映つてはゐなかつた。その代り眼と瞬との間と覺しいあたりを、親しい人や疎い人が、何か譯もなくせはしさうに現はれ出て、銘々一番深い印象を與へるやうな動作をしては消えて行つた。葉子の知覺は半分眠つたやうにぼんやりして注意するともなくその姿に注意してゐた。而してこの半睡の狀態が破れでもしたら大變な事になると、心の何處かの隅では考へてゐた。その癖、それを物々しく恐れるでもなかつた。身體までが感覺的にしびれるやうな物うさを覺えた。

　若者が現はれた。（どうしてあの男はそれ程の因縁もないのに執念く附きまつはるのだらうと葉子は他人事のやうに思つた）その亂れた美しい髪の毛が、夕日とかゞやく眩しい光の中で、ブロンドのやうにきらめいた。嚙みしめたその左の腕から血がぽた／＼と滴つてゐた。その滴りが腕から離れて宙に飛ぶ毎に、虹色にきらきらと巴を描いて飛び跳つた。

「……私を見捨てるん……」

　葉子はその聲をまざ／＼と聞いたと思つた時、眼が覺めたやうにふつと更めて港を見渡した。而して、何んの感じも起さない中に、熟睡から一寸驚かされた赤兒が、又多愛なく眠りに落ちて行くやうに、再び夢とも現ともない心に歸つて行つた。港の景色は何時の間にか消えてしまつて、自分で自分の腕にしがみ附いた若者の姿が、まざ／＼と現はれ出た。葉子はそれを見ながら何うしてこんな變な心持になるのだらう。血の故とでも云ふのだらうか。事によるとヒステリーに罹つてゐるのではないか知らんなどと暢氣に自分の身の上を考へてゐた。云はば悠々閑々と澄み渡つた水の隣りに、薄紙一重の界も置かず、たぎり返つて渦卷き流れる水がある。葉子の心はその靜かな方の水に浮びながら、瀧川の中にもまれ／＼て落ちて行く自分といふものを他人事のやうに眺めやつてゐるやうなものだつた。葉子は自分の冷淡さに惘れながら、それでもやつぱり驚きもせず、手欄によりかゝつてぢつと立つてゐた。

——田川法學博士——

葉子は又ふと悪戯者らしくこんなことを思つてゐた。が、田川夫妻が自分と反對の舷の籐椅子に腰をかけて、世辭々々しく近寄つて來る同船者と何か戯談口でもきいてゐると獨りで決めると安心でもしたやうに幻想は又かの若者に還つて行つた。葉子はふと右の肩に暖みを覺えるやうに思つた。そこには若者の熱い涙が滲み込んでゐるのだ。葉子は夢遊病者のやうな眼付きして、やゝ頭を後ろに引きながら肩の所を見ようとすると、その瞬間、若者を船から棧橋に連れ出した船員の事がはつと思ひ出されて、今まで盲ひてゐたやうな眼に、まざ／＼とその大きな黒い顔が映つた。葉子はなほ夢みるやうな眼を見開いたまゝ、船員の濃い眉から黒い口髭のあたりを見守つてゐた。

船はもう可なり速力を早めて、霧のやうに降るともなく降る雨の中を走つてゐた。舷側から吐き出される捨水の音がざあ／＼と聞こえ出したので、遠い幻想の國から一足飛びに取つて返した葉子は、夢ではなく、まがひもなく眼の前に立つてゐる船員を見て、何んといふ事なしにぎよつと本當に驚いて立ちすくんだ。始めてアダムを見たイヴのやうに葉子はまじ／＼と珍らしくもない筈の一人の男を見やつた。

「隨分長い旅ですが、何、もうこれだけ日本が遠くなりましたんだ」

と云つてその船員は右手を延べて居留地の鼻を指した。がつしりした肩をゆすつて、勢よく水平に延ばしたその腕からは、強く烈しく海上に生きる男の力が迸つた。葉子は默つたまま輕くうなづいた。胸の下の所に不思議な肉體的な衝動をかすかに感じながら。

「お一人ですな」

皺がれた強い聲がまたかう響いた。葉子は又默つたまゝ輕くうなづいた。

船はやがて乘りたての船客の足許にかすかな不安を與へる程に速力を早めて走り出した。葉子は船員から眼を移して海の方を見渡して見たが、自分の側に一人の男が立つてゐるといふ、強い意識から起つて來る不安はどうしても消す事が出來なかつた。葉子にしてはそれは不思議な經驗だつた。こつちから何か物を云ひかけて、この苦しい壓迫を打ち破らうと思つてもそれが出來なかつた。今何か物を云つたら屹度ひどい不自然な物の云ひ方になるに決つてゐる。さうかと云つてその船員には無頓着にもう一度前のやうな幻想に身を任せようとしても駄目だつた。神經が急にざわ／＼と騷ぎ立つて、ぼうつと煙つた霧雨の彼方さへ見透せさうに眼がはつきりして、先程のおつかぶさるやうな暗愁は、いつの間にか果敢ない出來心の仕業としか考へられなかつた。その船員は傍若無人に衣嚢の中から何か書いた物を取り出して、それを鉛筆でチェックしながら、時々思ひ出したやうに顔を引いて眉を顰めながら、襟の折り返しについた汚點を、拇指の爪でごし／＼と削つては彈いてゐた。

葉子の神經はそこにゐたゝまれない程ちかちかと激しく働き出した。自分と自分との間にのそ／＼と遠慮もなく大股で這入り込んで來る邪魔者でも避けるやうに、その船員から遠ざからうとして、つと手欄から離れて自分の船室の方に階子段を降りて行かうとした。

「何處にお出でです」

後ろから、葉子の頭から爪先きまでを小さなものでもあるやうに一と目に籠めて見やりながら、その船員はかう尋ねた。葉子は、

「船室まで參りますの」

と答へない譯には行かなかつた。その聲は葉子の目論見に反して恐ろしくしとやかな響きを立ててゐた。するとその男は大股で葉子とすれすれになるまで近づいて來て、

一船室ならば永田さんからのお話もありました し、お獨旅のやうでしたから、醫務室の傍に移しておきました。御覽になつた前の部屋より少し窮屈かも知れませんが、何かに御便利ですよ。御案内しませう」

と云ひながら葉子をすり抜けて先きに立つた。何か芳醇な酒のしいゝと葉卷烟草との匂ひが、この男個有の膚の匂ひででもあるやうに強く葉子の鼻をかすめた。葉子は、どしん／＼と狹い階子段を踏みしめながら降りて行くその男の太い頸から廣い肩のあたりをぢつと見やりながらその後に續いた。

二十四五脚の椅子が食卓に背を向けてずらいつと列べてある食堂の中程から、横丁のやうな暗い廊下を一寸這入ると右の戸に「醫務室」と書いた嚴乘な眞鍮の札がかゝつてゐて、その向ひの左の戸には「NO. 12 早月葉子殿」と白墨で書いた漆塗りの札が下つてゐた。船員はつかつかとそこに這入つて、いきなり勢よく醫務室の戸をノックすると、高いダブル・カラーの前だけを外づして、上衣を脱ぎ捨てた船醫らしい男が、あたふたと細長いなま白い顏を突き出したが、そこに葉子が立つてゐるのを目ざとく見て取つて、慌てて首を引つ込めてしまつた。

船員は大きな憚りのない聲で、

「おい十二番はすつかり掃除が出來たらうね」

と云ふと、醫務室の中からは女のやうな聲で、

「さしておきましたよ。綺麗になつてる筈ですが、御覽なすつて下さい。私は今一寸」

と船醫は姿を見せずに答へた。

「こりや一體船醫の私室なんですが、あなたの爲めにお明け申すつて云つてくれたもんですから、ボーイに掃除するやうに云ひつけておきましたんです。ど、綺麗になつとるか知らん」

船員はさうつぶやきながら戸を開けて一わたり中を見廻した。

「むゝ、いゝやうです」

而して道を開いて、衣嚢から「日本郵船會社繪島丸事務長勳六等倉地三吉」と書いた大きな名刺を出して葉子に渡しながら、

「私が事務長をしとります。御用があつたら何んでもどうか」

葉子は又默つたまゝうなづいてその大きな名刺を手に受けた。而して自分の部屋ときめられたその部屋の高い閾を越えようとすると、

「事務長さんはそこでしたか」

と尋ねながら田川博士がその夫人と打ち連れて廊下の中に立ち現はれた。事務長が帽子を取つて挨拶しようとしてゐる間に、洋裝の田川夫人は葉子を目指して、スカーツの絹ずれの音を立てながらつか／＼と寄つて來て眼鏡の奧から小さく光る眼でじろいゝと見やりながら、

「五十川さんが噂していらしつた方はあなたね。何んとか仰しやいましたねお名は」

と云つた。この「何んとか仰しやいましたね」といふ言葉が、名もないものを憐れんで見てやるといふ腹を十分に見せてゐた。今まで事務長の前で、珍らしく受身になつてゐた葉子は、この言葉を聞くと強い衝動を受けたやうになつて我れに返つた。どういふ態度で返事をしてやらうかといふ事が、一番に頭の中で二十日鼠のやうに烈しく働いたが、葉子はすぐ腹をきめてひどく下手に尋常に出た。「あ」と驚いたやうな言葉を投げておいて、丁寧に低くつむりを下げながら、

「こんな所まで……恐れ入ります。私早月葉と申しますが、旅には不慣れで居りますのに獨旅で御座いますから……」

と云つて、眸を稻妻のやうに田川に移して、

「御迷惑では御座いませうが何分宜しく願ひます」

と又つむりを下げた。田川はその言葉の終るの

を待ち兼ねたやうに引き取つて、
「何不慣れは私の妻も同様ですよ。何しろこの船の中には女は二人ぎりだからお互です」
と餘り滑らかに云つて退けたので、妻の前でも憚るやうに今度は態度を改めながら事務長に向つて、
「チャイニース・ステアレーヂには何人程ゐますか日本の女は—」
と問ひかけた。事務長は例の鹽から聲で、
「さあ、まだ帳簿も碌々整理して見ませんから、しつかりとは判り兼ねますが、何しろこの頃は大分殖えました。三四十人も居ますか。奥さんこゝが醫務室です。何しろ九月と云へば舊の二八月の八月ですから、太平洋の方は暴ける事もありますんだ。偶にはこゝにも御用が出來ますぞ。一寸船醫も御紹介しておきますで」
「まあそんなに荒れますか」
と田川夫人は實際恐れたらしく、葉子を顧みながら少し色をかへた。事務長は事もなげに、
「暴けますんだ隨分」
と今度は葉子の方をまともに見やつて微笑みながら、折から部屋を出て來た興録といふ船醫を三人に引き合はせた。
田川夫妻を見送つてから葉子は自分の部屋に這入つた。さらぬだに何處かじめ〳〵するやうな船室には、今日の雨の爲めに蒸すやうな空氣がこもつてゐて、汽船特有な西洋臭い匂ひが殊に強く鼻についた。帶の下になつた葉子の胸から背にかけたあたりは汗がじんわり滲み出たらしく、むし〳〵するやうな不愉快を感ずるので、狹苦しい寢臺を取りつけたり、洗面臺を据ゑたりしてあるその間に窮屈に積み重ねられた小荷物を見廻しながら、帶を解き始めた。化粧鏡の附いた箪笥の上には、果物の籠が一つと花束が二つ乘せてあつた。葉子は襟前をくつろげながら、誰れからよこしたものかとその花束の一つを取り上げると、その側から厚い紙切れのやうなものが出て來た。手に取つて見るとそれは手札形の寫眞だつた。まだ女學校に通つてゐるらしい、髪を束髪にした娘の半身像で、その裏には「興録さま。取り殘されたる千代より」としてあつた。そんなものを興録が仕舞ひ忘れる筈がない。わざと忘れた風に見せて、葉子の心に好奇心なり輕い嫉妬なりを煽り立てようとする、あまり手許の見え透いたからくりだと思ふと、葉子はさげすんだ心持で、犬にでもやるやうにぽいとそれを床の上に抛りなげた。一人の旅の婦人に對して船の中の男の心が何う云ふ風に動いてゐるかをその寫眞一枚が語り顏だつた。葉子は何んと云ふ事なしに小さな皮肉な笑ひを唇の所に浮べてゐた。
寢臺の下に押し込んである平べつたいトランクを引き出して其の中から浴衣を取り出してゐると、ノックもせずに突然戸を開けたものがあつた。葉子は思はず羞恥から顏を赤らめて、引き出した華手な浴衣を楯に、しだらなく脱ぎかけた長襦袢の姿をかくまひながら立ち上つて振りかへつて見るとそれは船醫だつた。華やかな下着を浴衣の所々からのぞかせて、帶もなく細つそりと途方に暮れたやうに身を斜にして立つた葉子の姿は、男の眼にはほしいまゝな刺戟だつた。懇意づくらしく戸もたゝかなかつた興録もさすがにどぎまぎして、這入らうにも出ようにも所在に窮して、閾に片足を踏み入れたまゝ當惑さうに立つてゐた。
「飛んだ風をしてゐまして御免下さいまし。さ、お這入り遊ばせ。何んぞ御用でもいらつしやいましたの」
と葉子は笑みかまけたやうに云つた。興録はいよ〳〵度を失ひながら、
「いゝえ何、今でなくつてもいゝのですが、元のお部屋のお枕の下にこの手紙が殘つてゐま

したのを、ボーイが届けて來ましたんで、早くさし上げておかうと思つて實は何したんでしたが……」

と云ひながら衣嚢から二通の手紙を取り出した。手早く受取つて見ると、一つは古藤が木村に宛てたもの、一つは葉子にあてたものだつた。興録はそれを手渡すと、一種の意味ありげな笑ひを眼だけに浮べて、顔だけはいかにも尤もらしく葉子を見やつてゐた。自分のした事を葉子もしたと興録は思つてゐるに違ひない。葉子はさう推量するとかの娘の寫眞を床の上から拾ひ上げた。而してわざと裏を向けながら見向きもしないで、

「こんなものがこゝにも落ちて居りましたの。お妹さんでいらつしやいますか。お綺麗ですこと」

と云ひながらそれをつき出した。

興録は何か云ひ譯のやうな事を云つて部屋を出て行つた。と思ふと暫らくして醫務室の方から事務長のらしい大きな笑ひ聲が聞こえて來た。それを聞くと、事務長はまだそこにゐたかと、葉子は我れにもなくはつとなつて、思はず着かへかけた着物の衣紋に左手をかけたまゝ、俯向き加減になつて横眼をつかひながら耳をそばだてた。破裂するやうな事務長の笑ひ聲がまた聞こえて來た。而して醫務室の戸をさつと開けたらしく、聲が急に一倍大きくなつて、

「Devil take it! No time to venture then, eh?」と亂暴に云ふ聲が聞こえたが、それと共にマッチを擦る音がして、やがて葉卷をくはへたまゝの口籠りのする言葉で、

「もうぢき檢疫船だ。準備はいゝだらうな」

と云ひ殘したまゝ事務長は船醫の返事も待たずに行つてしまつたらしかつた。かすかな匂ひが葉子の部屋にも通つて來た。

葉子は聞耳をたてながらうなだれてゐた顔を上げると、正面をきつて何と云ふ事なしに微笑を漏らした。而してすぐぎよつとしてあたりを見廻したが、我れに返つて自分一人きりなのに安堵して、いそ／＼と着物を着かへ始めた。

十一

絵島丸が横濱を拔錨してからもう三日たつた。東京灣を出拔けると、黒潮に乘つて、金華山沖あたりからは航路を東北に向けて、眞直に緯度を上つて行くので、氣溫は二日目あたりから目立つて涼しくなつて行つた。陸の影は何時の間にか船のどの舷からも眺める事は出來なくなつてゐた。背羽根の灰色な腹の白い海鳥が、時々思ひ出したやうに淋しい聲で啼きながら、船の周圍を群れ飛ぶ外には、生き物の影とては見る事も出來ないやうになつてゐた。重い冷たい潮霧が野火の煙のやうに濛々と南に走つて、それが秋らしい狹霧となつて、船體を包むかと思ふと、忽ちからつと晴れた青空を船に殘して消えて行つたりした。格別の風もないのに海面は色濃く波打ち騷いだ。三日目からは船の中に盛んにスティームが通り始めた。

葉子はこの三日といふもの、一度も食堂に出ずに船室にばかり閉ぢ籠つてゐた。船に醉つたからではない。始めて遠い航海を試みる葉子にしては、それが不思議な位にやすい旅だつた。普段以上に食慾さへ増してゐた。神經に強い刺戟が與へられて、兎角鬱結し易かつた血液も濃く重たいなりに滑らかに血管の中を循環し、海から來る一種の力が體の隅々まで行き亙つて、うづ／＼する程な活力を感じさせた。漏らし所のないその活氣が運動もせずにゐる葉子の體から心に傳はつて、一種の憂鬱に變るやうにさへ思へた。

葉子はそれでも船室を出ようとはしなかつた。生れてから始めて孤獨に身を置いたやうな

彼女は、子供のやうにそれが樂しみたかつたし、又船中で顏見知りの誰れ彼れが出來る前に、是れまでの事、是れからの事を心にしめて考へても見たいとも思つた。然し葉子が三日の間船室に引き籠り續けた心持にはもう少し違つたものもあつた。葉子は自分が船客達から激しい好奇の眼で見られようとしてゐるのを知つてゐた。立役は幕明きから舞臺に出てゐるものではない。觀客が待ちに待つて、待ち草臥れさうになつた時分に、しづ〳〵と乘り出して、舞臺の空氣を思ふさま動かさねばならぬのだ。葉子の胸の中にはこんな狡猾いいたづらな心も潛んでゐたのだ。

三日目の朝電燈が百合の花の萎むやうに消える頃葉子はふと深い眠りから蒸暑さを覺えて眼を覺ました。スティームの通つて來るラディエーターから、眞空になつた管の中に蒸氣の冷えた滴りが落ちて立てる激しい響きが聞こえて、部屋の中は輕く汗ばむ程暖まつてゐた。三日の間狹い部屋の中ばかりにゐて坐り疲れ寢疲れのした葉子は、狹苦しい寢臺の中に窮屈に寢ちゞまつた自分を見出すと、下になつた半身に輕い痺れを覺えて、體を仰向けにした。而して一度開いた眼を閉ぢて、美しく圓味を持つた兩の腕を頭の上に伸して、寢亂れた髮を弄びながら、覺め際の快い眠りに又靜かに落ちて行つた。が、程もなく本當に眼をさますと、大きく眼を見開いて、慌てたやうに腰から上を起して、丁度眼通りの所にある一面に水氣で曇つた眼窓を長い袖で押し拭つて、ほてつた頰をひや〳〵するその窓ガラスに擦りつけながら外を見た。夜は本當には明け離れてゐないで、窓の向うには光のない濃い灰色がゝゝどんよりと擴がつてゐるばかりだつた。而して自分の體がずゝつと高まつてやがて又落ちて行くなと思はしい頃に、窓に近い舷にざゝあつとあたつて碎けて行く波濤が、單調な底力のある震動を船室に與へて、船は幽かに橫にかしいだ。葉子は身動きもせずに眼にその灰色を眺めながら、噛みしめるやうに船の動搖を味はつて見た。遠く〳〵來たと云ふ旅情が、さすがにしみ〳〵と感ぜられた。然し葉子の眼には女らしい淚は浮ばなかつた。活氣のずんずん恢復しつゝあつた彼女には何かパセティックな夢でも見てゐるやうな思ひをさせた。

葉子はさうしたまゝで、過ぐる二日の間暇にまかせて思ひ續けた自分の過去を夢のやうに繰り返してゐた。聯絡のない終りのない繪卷が次ぎ〳〵に擴げられたり捲かれたりした。基督を戀ひ戀うて、夜も晝もやみがたく、十字架を編み込んだ美しい帶を作つて獻げようといふ一心に、日課も何もそつちのけにして、指の先きがささくれるまで編針を動かした可憐な少女もその幻想の中に現はれ出た。寄宿舍の二階の窓近く大きな花を豐かに開いた木蘭の香までがそこいらに漂つてゐるやうだつた。國分寺跡の、武藏野の一角らしい櫟の林も現はれた。すつかり少女のやうな無邪氣な素直な心になつてしまつて、孤笻の膝に身も魂も投げかけながら、淚と共にさゝやかれる孤笻の耳うちのやうに震へた細い言葉を、唯「はい〳〵」と夢心地にうなづいて呑み込んだ甘い場面は、今の葉子とは違つた人のやうだつた。さうかと思ふと左岸の崕の上から廣瀨川を越えて青葉山を一面に見渡した仙臺の景色がする〳〵と開け渡つた。夏の日は北國の空にもあふれ輝いて、白い礫の河原の間を眞青に流れる川の中には、赤裸な少年の群れが赤々とした印象を眼に與へた。草を敷かんばかりに低くうづくまつて、華やかな色合のパラゾルに日をよけながら、默つて思ひに耽ける一人の女――その時には彼女はどの意味からも女だつた――何處までも滿足の得られない心で、黯々と世間から埋もれて行かね

ばならないやうな境遇に押し込められようとする運命。確かに道を踏みちがへたとも思ひ、踏みちがへたのは誰れがさした事だと神をすら詰つて見たいやうな思ひ。暗い産室も隱れてはゐなかつた。そこの恐ろしい沈默の中から起る強い快い赤兒の産聲――やみがたい母性の意識――我れ既に世に勝てり―とでも云つて見たい不思議な誇り――同時に重く胸を抑へつける生の苦い急變。かゝる時思ひも設けず力強く迫つて來る振り捨てた男の執着。明日をも頼み難い命の夕闇にさまよひながら、切れ〳〵な言葉で葉子と最後の愛撫を結ばうとする病床の母――その顏は葉子の幻想を斷ち切る程の強さで現はれ出た。思ひ入つた決心を眉に集めて、日頃の樂天的な性情にも似ず、運命と取組むやうな眞劍な顏付きで大事の結着を待つ木村の顏。母の死を憐れむとも悲しむとも知れない涙を眼には湛へながら、氷のやうに冷え切つた心で、俯向いたまゝ口一つきかない葉子自身の姿。……そんな幻像が或はつぎ〳〵に、或は折り重つて、灰色の心の中に動き現はれた。而して記憶は段々と過去から現在の方に近づいて來た。と、事務長の倉地の淺黑く日に燒けた顏とその廣い肩とが思ひ出された。葉子は思ひもかけないものを見出したやうにはつとなると、その幻像は多愛もなく消えて、記憶は又遠い過去に歸つて行つた。それが又段々現在の方に近づいて來たと思ふと、最後には乾度倉地の姿が現はれ出た。

それが葉子をいら〳〵させて、葉子は始めて夢現の境から本當に目ざめて、うるさいものでも拂ひのけるやうに、眼窓から眼をそむけて寢臺を離れた。葉子の神經は朝からひどく興奮してゐた。スティームで存分に暖まつて來た船室の中の空氣は息苦しい程だつた。

船に乘つてから碌々動きもせずに、野菜氣の薄い物ばかりを貪り食べたので、身内の血には激しい熱がこもつて、毛の尖へまでも通ふやうだつた。寢臺から立ち上つた葉子は目眩を感ずる程に上氣して、氷のやうな冷たいものでもひしと抱きしめたい氣持になつた。で、ふらふらと洗面臺の方に行つて、ピッチャーの水をなみ〳〵と陶器製の洗面盤にあけて、ずつぷり浸した手拭をゆるく絞つて、ひやつとするのを構はず、胸をあけて、それを乳房と乳房との間にぐつとあてがつて見た。強い烈しい動悸が押へてゐる手の平へ突き返して來た。葉子はさうしたまゝで前の鏡に自分の顏を近付けて見た。まだ夜の氣が薄暗くさまよつてゐる中に、頬をほてらしながら深い呼吸をしてゐる葉子の顏が、自分にすら物凄い程なまめかしく映つてゐた。葉子は物好きらしく自分の顏に譯のわからない微笑をすら湛へて見た。

それでもその中に葉子の不思議な心のどよめきは鎭まつて行つた。鎭まつて行くにつれ、葉子は今までの引き續きで又瞑想的な氣分に引き入れられてゐた。然しその時はもう夢想家ではなかつた。極く實際的な鋭い頭が針のやうに光つて尖つてゐた。葉子は濡手拭を洗面盤に抛りなげておいて、靜かに長椅子に腰をおろした。

笑ひ事ではない。一體自分は何うする積りでゐるんだらう。さう葉子は出發以來の問ひをもう一度自分に投げかけて見た。小さい時からまはりの人達に憚られる程才はじけて、同じ年頃の女の子とはいつでも一と調子違つた行き方を、するでもなくして來なければならなかつた自分は、生れる前から運命にでも呪はれてゐるのだらうか。それかと云つて葉子はなべての女の順々に通つて行く道を通る事は何うしても出來なかつた。通つて見ようとした事は幾度あつたか解らない。からさへ行けばいゝのだらうと通つて來て見ると、いつも飛んでもなく違

つた道を歩いてゐる自分を見出だしてしまつてゐた。而して蹤いては倒れた。まはりの人達は手を取つて葉子を起してやる仕方も知らないやうな顏をして唯ゝ馬鹿らしく嘲笑つてゐる。そんな風にしか葉子には思へなかつた。幾度ものそんな苦い經驗が葉子を片意地な、少しも人を頼らうとしない女にしてしまつた。而して葉子は謂はゞ本能の向せるやうに向いてどん〳〵歩くより仕方がなかつた。葉子は今更のやうに自分のまはりを見廻して見た。何時の間にか葉子は一番近しい筈の人達からもかけ離れて、たつた一人で崖の際に立つてゐた。そこで唯ゝ一つ葉子を崖の上に繋いでゐる綱には木村との婚約といふ事があるだけだ。そこに踏みとゞまればよし、さもなければ、世の中との緣はたちどころに切れてしまふのだ。世の中に活きながら世の中との緣が切れてしまふのだ。木村との婚約で世の中は葉子に對して最後の和睦を示さうとしてゐるのだ。葉子に取つて、この最後の機會をも破り捨てようといふのはさすがに容易ではなかつた。木村といふ首桎を受けないでは生活の保障が絕え果てなければならないのだから。葉子の懷中には百五十弗の米貨があるばかりだつた。定子の養育費だけでも、米國に足を下すや否や、すぐに木村にたよらなければならないのは眼の前に分つてゐた。後詰となつてくれる親類の一人もないのは勿論の事、やゝともすれば親切ごかしに無いものまでせびり取らうとする手合ひが多いのだ。たま〳〵葉子の姉妹の內實を知つて氣の毒だと思つても、葉子ではと云ふやうに手出しを控へるものばかりだつた。木村――葉子には義理にも愛も戀も起り得ない木村ばかりが、葉子に對する唯ゝ一人の戰士なのだ。あはれな木村は葉子の蠱惑に陷つたばかりで、早月家の人々から否應なしにこの重荷を背負はされてしまつてゐるのだ。

何うしてやらう。

葉子は思ひ餘つたその場逃れから、筆筒の上に興錄から受取つたまゝ放げ捨てゝ置いた古藤の手紙を取り上げて白い西洋封筒の一端を美しい指の爪で丹念に細く破り取つて、手筋は立派ながらまだ何處かたど〳〵しい手跡でペンで走り書きした文句を讀み下して見た。

「あなたはい、い、い、おさんどんになるといふ事を想像して見る事が出來ますか。おさんどんといふ仕事が女にあるといふ事を想像して見る事が出來ますか。僕はあなたを見る時は何時でもさう思つて不思議な心持になつてしまひます。一體世の中には人を使つて、人から使はれると云ふ事を全くしないでいいといふ人があるものでせうか。そんな事が出來得るものでせうか。僕はそれをあなたに考へていたゞきたいのです。

あなたは奇體な感じを與へる人です。あなたのなさる事はどんな危險な事でも危險らしく見えません。行きづまつた末にはかうといふ覺悟がい、いちやんと出來てゐるやうに思はれるからでせうか。

僕があなたに始めてお目に懸つたのは、この夏あなたが木村君と一緒に八幡に避暑をして居られた時ですから、あなたに就いては僕は何んにも知らないと云つてい位です。僕は第一一般的に女と云ふものについて何んにも知りません。然し少しでもあなたを知つただけの心持から云ふと、女の人と云ふものは僕に取つては不思議な謎です。あなたは何處まで行つたら行きづまると思つてゐるんです。あなたは既に木村君で行きづまつてゐる人なんだと僕には思はれるのです。結婚を承諾した以上はその良人に行きづまるのが女の人の當然な道ではないのでせうか。木村君で行きづまつて

下さい。木村君にあなたを全部與へて下さい。木村君の親友として是れが僕の願ひです。

全體同じ年齡でありながら、あなたからは僕などは子供に見えるのでせうから、僕の云ふ事などは頓着なさらないかと思ひますが、子供にも一つの直覺はあります。そして子供はきつぱりした物の姿が見たいのです。あなたが木村君の妻になると約束した以上は、僕の云ふ事にも權威がある筈だと思ひます。

僕はさうは云ひながら一面にはあなたが羨ましいやうにも、憎いやうにも、可哀さうなやうにも思ひます。あなたのなさる事が僕の理性を裏切つて奇怪な同情を喚び起すやうにも思ひます。僕は心の底に起るこんな働きをも強ひて押しつぶして理窟一方に固まらうとは思ひません。それほど僕は道學者ではない積りです。それだからと云つて、今のまゝのあなたでは、僕にはあなたを敬親する氣は起りません。木村君の妻としてあなたを敬親したいから、僕は敢てこんな事を書きました。さういふ時が來るやうにしてほしいのです。

木村君の事を——あなたを熱愛してあなたのみに希望をかけてゐる木村君の事を考へると僕はこれだけの事を書かずにはゐられなくなります」

古藤義一

木村葉子樣

それは葉子に取つては本當に子供つぽい言葉としか響かなかつた。然し古藤は妙に葉子には苦手だつた。今も古藤の手紙を讀んで見ると、馬鹿々々しい事が云はれてゐるとは思ひながらも、一番大事な急所を偶然のやうにしつかり捕へてゐるやうにも感じられた。本當にこんな事をしてゐると、子供と見くびつてゐる古藤にも憐れまれるはめになりさうな氣がしてならなかつた。葉子は何んと云ふ事なく悒鬱になつて古藤の手紙を巻きをさめもせず膝の上に置いたまま眼をすゑて、ぢつと考へるともなく考へた。

それにしても、新らしい教育を受け、新らしい思想を好み、世事に疎いだけに、世の中の習俗からも飛び離れて自由でありげに見える古藤さへが、葉子が今立つてゐる崖の際から先きには、葉子が足を踏み出すのを憎み恐れる樣子を明らかに見せてゐるのだ。結婚といふものが一人の女に取つて、どれ程生活といふ實際問題と結び付き、女がどれ程その束縛の下に惱んでゐるかを考へて見る事さへしようとはしないのだ。さう葉子は思つても見た。

是れから行かうとする米國といふ土地の生活も葉子はひとりでに色々と想像しないではゐられなかつた。米國の人達はどんな風に自分を迎へ入れようとはするだらう。兎に角今までの狹い惱ましい過去と縁を切つて、何の關はりもない社會の中に乘り込むのは面白い。和服よりも遙かに洋服に適した葉子は、そこの交際社會でも風俗では米國人を笑はせない事が出來る。歡樂でも哀傷でもしつくりと實生活の中に織り込まれてゐるやうな生活がそこにはあるに違ひない。女のチャームといふものが、習慣的な絆から解き放されて、その力だけに働く事の出來る生活がそこにはあるに違ひない。才能と力量さへあれば女でも男の手を借りずに自分を周りの人に認めさす事の出來る生活がそこにはあるに違ひない。女でも胸を張つて存分呼吸の出來る生活がそこにはあるに違ひない。少くとも交際社會のどこかではそんな生活が女に許されてゐるに違ひない。葉子はそんな事を空想するとむづ／＼する程快活になつた。そんな心持で古藤の言葉などを考へて見ると、丸で

老人の繰り言のやうにしか見えなかつた。葉子は長い默想の中から活々と立ち上つた。而して化粧をすます爲めに鏡の方に近付いた。

木村を良人とするのに何んの屈託があらう。木村が自分の良人であるのは、自分が木村の妻であるといふ程に輕い事だ。木村といふ假面．：葉子は鏡を見ながらさう思つて微笑んだ。而して亂れかゝる額際の髮を、振り仰いで後ろに撫でつけたり、兩方の鬢を器用にかき上げたりして、良工が細工物でもするやうに樂しみながら元氣よく朝化粧を終へた。濡れた手拭で、鏡に近づけた眼のまはりの白粉を拭ひ終ると、脣を開いて美しく揃つた齒並みを眺め、兩方の手の指を壺の口のやうに一所に集めて爪の掃除が行き屆いてゐるか確めた。見返ると船に乘る時着て來た單衣のぢみな衣物は、世捨人のやうにだらりと淋しく部屋の隅の帽子かけにかゝつたまゝになつてゐた。葉子は派手な袷をトランクの中から取り出して寢衣と着かへながら、それに眼をやると、肩にしつかりとしがみ附いて泣きをめいた彼の狂氣じみた若者の事を思つた。と、すぐその側から若者を小脇に抱へた事務長の姿が思ひ出された。小雨の中を、外套も着ずに、小荷物でも運んで行つたやうに若者を棧橋の上に下して、ちよつと五十川女史に挨拶して船から投げた綱にすがるや否や、靜かに岸から離れて行く船の甲板の上に輕々と上つて來たその姿が、葉子の心をくすぐるやうに樂しませて思ひ出された。

夜はいつの間にか明け離れてゐた。眼窓の外は元のまゝに灰色はしてゐるが、活々とした光が添ひ加はつて、甲板の上を毎朝規則正しく散歩する白髮の米人とその娘との跫音がこつ／＼快活らしく聞こえてゐた。化粧をすました葉子は長椅子にゆつくり腰をかけて、兩脚を眞直に揃へて長々と延ばしたまゝ、いゝ、うつとりと思ふもなく事務長の事を思つてゐた。

その時突然ノックをしてボーイが珈琲を持つて這入つて來た。葉子は何か惡い所でも見附けられたやうに一寸ぎよつとして、延ばしてゐた脚の膝を立てた。ボーイは毎時ものやうに薄笑ひをして一寸頭を下げて銀色の盆を疊椅子の上においた。而して今日も食事は矢張り船室に運ばうかと尋ねた。

「今晩からは食堂にして下さい」

葉子は嬉しい事でも云つて聞かせるやうにかう云つた。ボーイは眞面目くさつて「はい」と云つたが、ちらりと葉子を上眼で見て、急ぐやうに部屋を出た。葉子はボーイが部屋を出てどんな風をしてゐるかがはつきり見えるやうだつた。ボーイはすぐにこ／＼と不思議な笑ひを漏らしながら、ケーク・ウォークの足つきで食堂の方に歸つて行つたに違ひない。程もなく、

「え、いよ／＼御來迎？」

「來たね」

と云ふやうな野卑な言葉が、ボーイらしい輕薄な調子で聲高に取り交はされるのを葉子は聞いた。

葉子はそんな事を耳にしながら矢張り事務長の事を思つてゐた。三日も食堂に出ないで閉ぢ籠つてゐるのに、何んといふ事務長だらう、一遍も見舞ひに來ないとはあんまりひどい」こんな事を思つてゐた。而してその一方では縁もゆかりもない馬のやうに唯ゞ巖乘な一人の男が何んでかう思ひ出されるのだらうとも思つてゐた。

葉子は輕い溜息をついて何氣なく立ち上つた。而して又長椅子に腰かける時には棚の上から事務長の名刺を持つて來て眺めてゐた。「日本郵船會社絵島丸事務長勳六等倉地三吉」と明朝ではつきり書いてある。葉子は片手で珈琲をすゝりながら、名刺を裏返してその裏を眺めた。

而して眞白なその裏に何か長い文句でも書いてあるかのやうに、二重になる豐かな顎を襟の間に落して、少し眉をひそめながら、永い間まじろぎもせず見詰めてゐた。

十二

その日の夕方、葉子は船に來てから始めて食堂に出た。着物は思ひ切つて地味なくすんだのを選んだけれども、顏だけは存分に若くつくつてゐた。二十を越すや越さずに見える、眼の大きな、沈んだ表情の彼女の襟の藍鼠は、何んとなく見る人の心を痛くさせた。細長い食卓の一端に、カップ・ボードを後ろにして座を占めた事務長の右手には田川夫人がゐて、その向ひが田川博士、葉子の席は博士のすぐ隣りに取つてあつた。その外の船客も大概は既に卓に向つてゐた。葉子の足音が聞こえると、逸早く眼くばせをし合つたのはボーイ仲間で、その次ぎにひどく落ち付かぬ樣子をし出したのは、事務長と向ひ合つて食卓の他の一端にゐた鬚の白い亞米利加人の船長であつた。慌てて席を立つて、右手にナプキンを下げながら、自分の前を葉子に通らせて、顏を眞赤にして座に返つた。葉子はしとやかに人々の物數寄らしい視線を受け流しながら、ぐるつと食卓を廻つて自分の席まで行くと、田川博士は偸むやうに夫人の顏を一寸窺つておいて、肥つた體をよけるやうにして葉子を自分の隣りに坐らせた。

坐り住ひをたゞしてゐる間、澤山の注視の中にも、葉子は田川夫人の冷たい眸の光を浴びてゐるのを心地惡い程に感じた。やがてきちんと愼ましく正面を向いて腰かけて、ナプキンを取り上げながら、先づ第一に田川夫人の方に眼をやつてそつと挨拶すると、今までの角々しい眼にもさすがに申し譯程の笑みを見せて、夫人が何か云はうとした瞬間、その時までぎごちなく話を途切らしてゐた田川博士も事務長の方を向いて何か云はうとした所であつたので、兩方の言葉が氣まづくぶつかりあつて、夫婦は思はず同時に顏を見合せた。一座の人々も、日本人と云はず外國人と云はず、葉子に集めてゐた眸を田川夫妻の方に向けた。「失禮」と云つてひかへた博士に夫人は一寸頭を下げておいて、皆んなに聞こえる程はつきり澄んだ聲で、

「とんと食堂にお出でがなかつたので、お案じ申しましたの。船にはお困りですか」

と云つた。さすがに世慣れて才走つたその言葉は、人の上に立ちつけた重みを見せた。葉子はにこやかに默つてうなづきながら、位を一段落して會釋するのをさう不快には思はぬ位だつた。二人の間の挨拶はそれなりで途切れてしまつたので、田川博士は徐ろに事務長に向つてし續けてゐた話の緖目をつながうとした。

「それから……その……」

然し話の緖口は思ふやうに出て來なかつた。事もなげに落ち付いた樣子に見える博士の心の中に、輕い混亂が起つてゐるのを、葉子はすぐ見て取つた。思ひ通りに一座の氣分を動搖させる事が出來るといふ自信が裏書きされたやうに葉子は思つてそつと滿足を感じてゐた。而してボーイ長の指圖でボーイ等が手器用に運んで來たポタージュを啜りながら、田川博士の方の話に耳を立てた。

葉子が食堂に現はれて自分の視界に這入つて來ると、臆面もなくぢつと眼を定めてその顏を見やつた後に、無頓着に食匙を動かしながら、時々食卓の客を見廻して氣を配つてゐた事務長は、下脣を返して髭の先きを吸ひながら、鹽さびのした太い聲で、

「それからモンロー主義の本體は」

と話の緖目を引つ張り出しておいて、まともに博士を打ち見やつた。博士は少し面伏せな樣子

で、

「さう、その話でしたな。モンロー主義もその主張は始めの中は、北米の獨立諸州に對して歐羅巴の干渉を拒むと云ふだけのものであつたのです。所がその政策の内容は年と共に段々變つてゐる。モンローの宣言は立派に文字になつて殘つてゐるけれども、法律と云ふ譯ではなし、文章も融通がきくやうに出來てゐるので、取りやうによつては、どうにでも伸縮する事が出來るのです。マッキンレー氏などは隨分極端にその意味を擴張してゐるらしい。尤も之れにはクリーヴランドといふ人の先例もあるし、マッキンレー氏の下にはもう一人有力な黒幕がある筈だ。どうです齋藤君」

と二三人おいた斜向ひの若い男を顧みた。齋藤と呼ばれた、ワシントン公使館赴任の外交官補は、眞赤になつて、今まで葉子に向けてゐた眼を大急ぎで博士の方に外らして見たが、質問の要領をはつきり捕へそこねて、更に赤くなつて術ない身振りをした。これ程な席にさへ當て臨んだ習慣のないらしいその人の素性がその慌て方に十分に見え透いてゐた。博士は見下したやうな態度で暫時その青年のどぎまぎした樣子を見てゐたが、返事を待ちかねて、事務長の方を向かうとした時、突然遥か遠い食卓の一端から、船長が顏を眞赤にして、

「You mean Teddy the roughrider? 」

と云ひながら子供のやうな笑顏を人々に見せた。船長の日本語の理解力をそれ程に思ひ設けてゐなかつたらしい博士は、この不意打ちに今度は自分がまごついて、一寸返事をしかねてゐると、田川夫人がさそくにそれを引き取つて、

「Good hit for you, Mr. Captain !」

と癖のない發音で云つて退けた。これを聞いた一座は、殊に外國人達は、椅子から乘り出すやうにして夫人を見た。夫人はその時人の眼にはつきかねるほどの敏捷さで葉子の方を窺つた。葉子は眉一つ動かさずに、下を向いたまゝでスープを吸つてゐた。

愼み深く大匙を持ちあつかひながら、葉子は自分に何か際立つた印象を與へようとして、色々な眞似を競ひ合つてゐるやうな人々の樣を心の中で笑つてゐた。實際葉子が姿を見せてから、食堂の空氣は調子を變へてゐた。殊に若い人達の間には一種の重苦しい波動が傳はつたらしく、物を云ふ時、彼等は知らず〳〵激昂したやうな高い調子になつてゐた。殊に一番若く見える一人の上品な青年──船長の隣座にゐるので葉子は家柄の高い生れに違ひないと思つた──などは、葉子と一と眼顏を見合はしたが最後、震へんばかりに興奮して顏を得上げないでゐた。それだのに事務長だけは、一向動かされた樣子が見えぬばかりか、どうかした拍子に顏を合せた時でも、その臆面のない、人を人とも思はぬやうな熟視は、却つて葉子の視線をたじろがした。人間を眺めあきたやうな氣倦るげなその眼は、濃い睫毛の間から insolent な光を放つて人を射た。葉子はかうして思はず眸をたじろがす度毎に事務長に對して不思議な憎しみを覺えると共に、もう一度その憎むべき眼を見すゑてその中に潜む不思議を存分に見窮めてやりたい心になつた。葉子はさうした氣分に促されて時々事務長の方に牽き附けられるやうに視線を送つたが、その度毎に葉子の眸は脆くも手きびしく追ひ退けられた。

かうして妙な氣分が食卓の上に織りなされながらやがて食事は終つた。一同が座を立つ時、物慣らされた物腰で、椅子を引いてくれた田川博士にやさしく微笑を見せて禮をしながらも、葉子は矢張り事務長の擧動を子細に見る事に半ば氣を奪はれてゐた。

一少し甲板に出て御覽になりましな。寒くとも氣分は晴々しますから。私も一寸部屋に歸つてショールを取つて出て見ます」
から葉子に云つて田川夫人は良人と共に自分の部屋の方に去つて行つた。

葉子も部屋に歸つて見たが、今まで閉ぢ籠つてばかりゐると左程にも思はなかつたけれども、食堂程の廣さの所からでもそこに來て見ると、息づまりがしさうに狹苦しかつた。で、葉子は長椅子の下から、木村の父が使ひ慣れた古トランク――その上に古藤が油繪具でY・K・と書いてくれた古トランクを引き出して、その中から黑い駝鳥の羽のボアを取り出して、西洋臭いその匂ひを快く鼻に感じながら、深々と頸を捲いて甲板に出て行つて見た。窮屈な階子段をやゝよろ〳〵しながら昇つて、重い戶を開けようとすると外氣の抵抗が中々激しくつて押しもどされようとした。きりつと捲り上げたやうな寒さが、戶の隙から縱まゝに細長く葉子を襲つた。

甲板には外國人が五六人厚い外套にくるまつて、堅いティークの床をかつ〳〵と踏みならしながら、押し默つて勢よく右往左往に散步してゐた。田川夫人の姿はその邊にはまだ見出されなかつた。鹽氣を含んだ冷たい空氣は、室內にのみ閉ぢ籠つてゐた葉子の肺を押し擴げて、頰には血液がちく〳〵と輕く針をさすやうに皮膚に近く突き進んで來るのが感ぜられた。葉子は散步客には構はずに甲板を橫ぎつて船べりの手欄によりかゝりながら、波また波と果てしもなく連なる水の堆積をはる〴〵と眺めやつた。折り重つた鈍色の雲の彼方に夕日の影は跡形もなく消え失せて、闇は重い不思議な瓦斯のやうに力強く總ての物を押しひしやげてゐた。雪をたつぷり含んだ空だけが、その闇と僅かに爭つて、南方には見られぬ暗い、燐のやうな、淋しい光を殘してゐた。一種のテンポを取つて高くなり低くなりする黑い波濤の彼方には、更に黑ずんだ波の穗が果てしもなく連なつてゐた。船は思つたより激しく動搖してゐた。赤いガラスを嵌めた檣燈が空高く、右から左、左から右へと廣い角度を取つて閃いた。閃く度に船が橫かしぎになつて、重い水の抵抗を受けながら進んで行くのが、葉子の足から體に傳はつて感ぜられた。

葉子はふら〳〵と船にゆり上げゆり下げられながら、まんじりともせずに、黑い波の峰と波の谷とが交る〴〵眼の前に現はれるのを見つめてゐた。豐かな髮の毛を透して寒さがしん〳〵と頭の中に滲みこむのが、始めの中は珍らしくいゝ氣持だつたが、やがて痺れるやうな頭痛に變つて行つた。……と、急に、何處をどう潜んで來たとも知れないいやな淋しさが盜風のやうに葉子を襲つた。船に乘つてから春の草のやうに萌え出した元氣はぽつきりと心を留められてしまつた。顳顬がじん〳〵と痛み出して、泣きつかれの後に似た不愉快な睡氣の中に、胸をついて嘔氣さへ催して來た。葉子は慌ててあたりを見廻したが、もうそこいらには散步の人足も絕えてゐた。けれども葉子は船室に歸る氣力もなく、右手でしつかりと額を押へて、手欄に額を伏せながら念じるやうに眼をつぶつて見たが、云ひやうのない淋しさはいや增すばかりだつた。葉子はふと定子を懷妊してゐた時の烈しい惡阻の苦痛を思ひ出した。それは折から痛ましい回想だつた。……定子……葉子はもうその答には堪へないと云ふやうに頭を振つて、氣を紛らす爲めに眼を開いて、留度なく動く波の戲れを見ようとしたが、一と眼見るやぐら〳〵と眩暈を感じて一たまりもなく又突つ伏してしまつた。深い悲しい溜息が思はず出るのを留めようとしても甲斐がなかつた。一船に醉つたの

だと思つた時にはもう體中は不快な嘔感の爲めにわな〳〵と震へてゐた。

「嘔けばいゝ」

さう思つて手欄から身を乘り出す瞬間、體中の力は腹から胸元に集まつて、背は思はずも激しく波打つた。その後はもう夢のやうだつた。

暫らくしてから葉子は力が拔けたやうになつて、ハンケチで口許を拭ひながら、賴りなくあたりを見廻した。甲板の上も波の上のやうに荒涼として人氣がなかつた。明るく灯の光の漏れてゐた眼窓は殘らずカーテンで蔽はれて暗くなつてゐた。右にも左にも人はゐない。さう思つた心のゆるみにつけ込んだのか、胸の苦しみは又急によせ返して來た。葉子はもう一度手欄に乘り出してほろ〳〵と熱い涙をこぼした。例へば高くつるした大石を切つて落したやうに、過去といふものが大きな一つの暗い悲しみとなつて胸を打つた。物心を覺えてから二十五の今日まで、張りつめ通した心の絲が、今こそ思ひ存分ゆるんだかと思はれるその悲しい快さ。葉子はその空しい哀感にひたりながら、重ねた兩手の上に額を乘せて手欄によりかゝつたまゝ重い呼吸をしながらほろ〳〵と泣き續けた。一時性貧血を起した額は死人のやうに冷え切つて、泣きながらも葉子はどうかするとふつと引き入れられるやうに假睡に陷らうとした。而してはいゝと何かに驚かされたやうに眼を開くと、また底の知れぬ哀感が何處からともなく襲ひ入つた。悲しい快さ。葉子は小學校に通つてゐる時分でも、泣きたい時には、人前では齒を喰ひしばつてゐて、人のゐない所まで行つて隱れて泣いた。涙を人に見せるといふのは卑しい事にしか思へなかつた。乞食が哀れみを求めたり、老人が愚痴を云ふのと同樣に、葉子には穢らはしく思へてゐた。然しその夜に限つては葉子は誰れの前でも素直な心で泣けるやうな氣がした。誰れかの前でさめ〳〵と泣いて見たいやうな氣分にさへなつてゐた。しみ〳〵と憐れんでくれる人もありさうに思へた。さうした氣持で葉子は小娘のやうに多愛もなく泣きつゞけてゐた。

その時甲板のかなたから靴の音が聞こえて來た。二人らしい跫音だつた。その瞬間までは誰れの胸にでも抱きついてしみ〳〵泣けると思つてゐた葉子は、その音を聞きつけるとはつといふ間もなく、張りつめたいつものやうな心になつてしまつて、大急ぎで涙を押し拭ひながら、踵を返して自分の部屋に戻らうとした。が、その時はもう遲かつた。洋服姿の田川夫妻がはつきりと見分けがつく程の距離に進みよつてゐたので、さすがに葉子もそれを見て見ぬふりでやり過ごす事は得しなかつた。涙を拭ひ切ると、左手を擧げて髮のほつれをしなをしながらかき上げた時、二人はもうすぐ傍に近寄つてゐた。

「あらあなたでしたの。私共は少し用事が出來ておくれましたが、こんなにおそくまで室外にいらしつてお寒くはありませんでしたか。氣分はいかゞです」

田川夫人は例の目下の者に云ひ慣れた言葉を器用に使ひながら、はつきりとかう云つて覗き込む樣にした。夫妻はすぐ葉子が何をしてゐたかを感付いたらしい。葉子はそれをひどく不快に思つた。

「急に寒い所に出ました故ですかしら、何んだか頭がぐら〳〵致しまして」

「お嘔しなさつた……それはいけない」

田川博士は夫人の言葉を聞くと尤もと云ふ風に、二三度こつくりとうなづいた。厚外套にくるまつた肥つた博士と、暖かさうなスコッチの裾長の服に、露西亞帽を眉際まで被つた夫人との前に立つと、やさ形の葉子は脊丈けこそ高いが、二人の娘ほどに眺められた。

「どうだ一緒に少し歩いて見ちや」

と田川博士が云ふと、夫人は、
「好う御座いませうよ、血液がよく循環して」
と應じて葉子に散歩を促した。葉子は已むを得ず、かつ〳〵と鳴る二人の靴の音と、自分の上草履の音とを淋しく聞きながら、夫人の側にひき添つて甲板の上を歩き始めた。ギーイときしみながら船が大きくかしぐのにうまく中心を取りながら歩かうとすると、また不快な氣持が胸先にこみ上げて來るのを葉子は強く押し靜めて事もなげに振舞はうとした。

博士は夫人との會話の途切れ目を捕へては、話を葉子に向けて慰め顏にあしらはうとしたが、いつでも夫人が葉子のすべき返事をひつたくつて物を云ふので、折角の話は腰を折られた。葉子は然し結句それをいゝ事にして、自分の思ひに耽りながら二人に續いた。暫らく歩きなれて見ると、運動が出來た爲めか、段々嘔氣は感ぜぬやうになつた。田川夫妻は自然に葉子を會話からのけものにして、二人の間で四方山の噂話を取り交はし始めた。不思議な程に緊張した葉子の心は、それらの世間話には些かの興味も持ち得ないで、寧ろその無意味に近い言葉の數々を、自分の瞑想を妨げる騷音のやうにうるさく思つてゐた。と、不圖田川夫人が事務長と云つたのを小耳にはさんで、思はず針でも踏みつけたやうにぎよつとして、默想から取つて返して聞耳を立てた。自分でも驚く程神經が騷ぎ立つのを何うする事も出來なかつた。

「隨分したゝか者らしう御座いますわね」
さう夫人の云ふ聲がした。
「さうらしいね」
博士の聲には笑ひがまじつてゐた。
「賭博が大の上手ですつて」
「さうかねえ」

事務長の話はそれぎりで絶えてしまつた。葉子は何んとなく物足らなくなつて、又何か云ひ出すだらうと心待ちにしてゐたが、その先きを續ける樣子がないので、心殘りを覺えながら、また自分の心に歸つて行つた。

暫らくすると夫人がまた事務長の噂をし始めた。

「事務長の側に坐つて食事をするのはどうも厭やでなりませんの」
「そんなら早月さんに席を代つて貰つたらいゝでせう」

葉子は闇の中で鋭く眼をかゞやかしながら夫人の樣子を窺つた。

「でも夫婦がテーブルに列ぶつて法はありませんわ……ねえ早月さん」

から戲談らしく夫人は云つて、一寸葉子の方を振り向いて笑つたが、別にその返事を待つといふでもなく、始めて葉子の存在に氣付きでもしたやうに、色々と身の上などを探りを入れるらしく聞き始めた。田川博士も時々親切らしい言葉を添へた。葉子は始めの中こそ愼ましやかに事實にさ程遠くない返事をしてゐたものの、話が段々深入りして行くにつれて、田川夫人と云ふ人は上流の貴婦人だと自分でも思つてゐるらしいに似合はない思ひやりのない人だと思ひ出した。それはあり内の質問だつたかも知れない。けれども葉子にはさう思へた。縁もゆかりもない人の前で思ふまゝな侮辱を加へられるとむつとせずにはゐられなかつた。知つた所で何んにもならない話を、木村の事まで根ほり葉ほり問ひたゞして一體何にしようといふ氣なのだらう。老人でもあるならば、過ぎ去つた昔を偲人にくど〳〵と話して聞かせて、せめて慰むといふ事もあらう。一老人には過去を、若い人には未來を、といふ交際術の初歩すら心得ないがさつな人だ。自分ですらそつと手もつけないで濟ませたい血なまぐさい身の上を……自分は老人ではない。葉子は田川夫人が意地にかゝつて、

こんな惡戲をするのだと思ふと激しい敵意から脣をかんだ。

然しその時田川博士がサルーンから漏れて來る灯の光で時計を見て、八時十分前だから部屋に歸らうと云ひ出したので、葉子は別に何も云はずにしまつた。三人が階子段を降りかけた時、夫人は、葉子の氣分には一向氣付かぬらしく、——若しさうでなければ氣付きながらわざと氣付かぬらしく振舞つて、

「事務長はあなたのお部屋にも遊びに見えますか」

と突拍子もなくいきなり問ひかけた。それを聞くと葉子の心は何んと云ふ事なしに理不盡な怒りに捕へられた。得意な皮肉でも思ひ存分に浴びせかけてやらうかと思つたが、胸をさすり下してわざと落ち付いた調子で、

「いゝえちつともお見えになりませんが……」

と空々しく聞こえるやうに答へた。夫人はまだ葉子の心持には少しも氣付かぬ風で、

「おやさう。私の方へは度々いらして困りますのよ」

と小聲で囁いた。「何を生意氣な」葉子は前後なしにかう心の中に叫んだが一言も口には出さなかつた。敵意——嫉妬とも云ひ代へられさうな——敵意がその瞬間からすつかり根を張つた。その時夫人が振り返つて葉子の顏を見たならば、思はず博士を楯に取つて恐れながら身をかはさずにはゐられなかつたらう、——そんな場合には葉子は固よりその瞬間に稻妻のやうにすばしこく隔意のない顏を見せたには違ひなからうけれども。葉子は一言も云はずに默禮したまゝ二人に別れて自分の部屋に歸つた。

室内はむつとする程暑かつた。葉子は嘔氣をもう感じてはゐなかつたが、胸元が妙にしめつけられるやうに苦しいので、急いでボアをかいやつて床の上に捨てたまゝ、投げるやうに長椅子に倒れかゝつた。

それは不思議だつた。葉子の神經は時には自分でも持て餘す程鋭く働いて、誰れも氣のつかない匂ひがたまらない程氣になつたり、人の着てゐる衣服の色合が見てゐられない程不調和で不愉快であつたり、周圍の人が腑拔けな木偶のやうに甲斐なく思はれたり、靜かに空を渡つて行く雲の脚が瞑眩がする程めまぐるしく見えたりして、我慢にもぢつとしてゐられない事は絕えずあつたけれども、その夜のやうに鋭く神經の尖つて來た事は覺えがなかつた。神經の末梢がまるで大風に遇つた梢のやうにざわ〳〵と音がするかとさへ思はれた。葉子は脚と脚とをぎゆつとからみ合せてそれに力をこめながら、右手の指先を四本揃へてその爪先を、水晶のやうに固い美しい齒で一思ひに激しく噛んで見たりした。惡寒のやうな小刻みな身ぶるひが絕えず足の方から頭へと波動のやうに傳はつた。寒いためにさうなるのか、暑い爲めにさうなるのかよく分らなかつた。さうしていら〳〵しながらトランクを開いたまゝで取り散らした部屋の中をぼんやり見やつてゐた。眼はうるさく霞んでゐた。ふと落ち散つたものの中に葉子は事務長の名刺があるのに眼をつけて、身をかゞめてそれを拾ひ上げた。それを拾ひ上げると眞二つに引裂いてまた床になげた。それはあまりに手應へなく裂けてしまつた。葉子はまた何かもつとうんと手應へのあるものを尋ねるやうに熱して輝く眼でまじ〳〵とあたりを見廻してゐた。と、カーテンを引き忘れてゐた。恥かしい樣子を見られはしなかつたかと思ふと胸がどきんとしていきなり立ち上らうとした拍子に、葉子は窓の外に人の顏を認めたやうに思つた。田川博士のやうでもあつた。田川夫人のやうでもあつた。然しそんな筈はない、二人はもう部屋に歸つてゐる。事務長……

葉子は思はず裸體を見られた女のやうに悶くなつて立ちすくんだ。激しい戰きが襲つて來た。而して何んの思慮もなく床の上のボアを取つて胸にあてがつたが、次ぎの瞬間にはトランクの中からショールを取り出してボアと一緒にそれを抱へて、逃げる人のやうに、あたふたと部屋を出た。

船のゆらぐ毎に木と木との擦れあふ不快な音は、大方船客の寐しづまつた夜の寂寞の中に際立つて響いた。自動平衡器の中にともされた蠟燭は壁板に奇怪な角度を取つて、ゆるぎもせずにぼんやりと光つてゐた。

戶を開けて甲板に出ると、甲板のあなたは先割のまゝの波又波の堆積だつた。大煙筒から吐き出される煤煙は眞黑い天の河のやうに無月の空を立ち割つて水に近く斜めに流れてゐた。

十三

そこだけは星が光つてゐないので、雲のある所がやうやく知れる位思ひ切つて暗い夜だつた。おつかぶさつて來るかと見上ぐれば、眼のまはる程遠のいて見え、遠いと思つて見れば、今にも頭を包みさうに近く逼つてる銅色の沈默した大空が、際限もない羽を垂れたやうに、同じ暗色の海原に續く所から波が湧いて、闇の中をのたうちまろびながら、見渡す限り喚き騷いでゐる。耳を澄して聞いてゐると水と水とが激しくぶつかり合ふ底の方に、

「おうい、おい、おい、おうい」

と云ふかと思はれる聲ともつかない一種の奇怪な響きが、舷をめぐつて叫ばれてゐた。葉子は前後左右に大きく傾く甲板の上を、傾くままに身を斜めにして辛く重心を取りながら、よろけ／＼ブリッヂに近いハッチの物蔭まで辿りついて、ショールで深々と頸から下を卷いて、白ペンキで塗つた板閤に身を寄せかけて立つた。佇んだ所は風下になつてゐるが、頭の上では、檣から垂れ下つた索綱の類が風にしなつてうなりを立て、アリューシャン群島近い高緯度の空氣は、九月の末とは思はれぬ程寒く霜を含んでゐた。氣負ひに氣負つた葉子の肉體は然しさして寒いとは思はなかつた。寒いとしても寧ろ快い寒さだつた。もうどん／＼と冷えて行く衣物の裏に、心臟のはげしい鼓動につれて、乳房が冷たく觸れたり離れたりするのが、なやましい氣分を誘ひ出したりした。それに佇んでゐるのに踝が爪先から段々に冷えて行つて、やがて膝から下は知覺を失ひ始めたので、氣分は妙に上ずつて來て、葉子の幼い時からの癖である夢とも知れない音樂的な錯覺に陷つて行つた。五體も心も不思議な熱を覺えながら、一種のリズムの中に搖り動かされるやうになつて行つた。何を見るともなく凝然と見定めた眼の前に、無數の星が船の動搖につれて光のまたゝきをしながら、ゆるいテンポを調へてゆらりゆらりと靜かにをどると、帆綱の呻りが張り切つたバソの聲となり、その間を「おうい、おい、おい、おうい……」と心の聲とも波のうめきとも分らぬトレモロが流れ、盛り上り、くづれこむ波又波がテノルの役目を勤めた。聲が形となり、形が聲となり、それから一緒にもつれ合ふ姿を葉子は眼で聞いたり耳で見たりしてゐた。何んの爲めに夜寒を甲板に出て來たか葉子は忘れてゐた。夢遊病者のやうに葉子は驀地にこの不思議な世界に落ちこんで行つた。それでゐて、葉子の心の一部分はいたましい程醒めきつてゐた。葉子は燕のやうにその音樂的な夢幻界を翔け上り潛りぬけて樣々な事を考へてゐた。

屈辱、屈辱……屈辱――思索の壁は屈辱といふちか／＼と寒く光る色で一面に塗りつぶされてゐた。その表面に田川夫人や事務長や

田川博士の姿が目まぐるしく音律に乘つて動いた。葉子はうるささうに頭の中に在る手のやうなもので無性に拂ひ除けようと試みたが無駄だつた。皮肉な横目をつかつて青味を帶びた田川夫人の顏が、攪き亂された水の中を、小さな泡が逃げてでも行くやうに、ふら〳〵とゆらめきながら上の方に遠ざかつて行つた。先づよかつたと思ふと、事務長の insolent な眼付きが低い調子の伴奏となつて、ぢつと動かない中にも力ある震動をしながら、葉子の瞳眼の奥を網膜まで見透す程ぎゆつと見据ゑてゐた。「何んで事務長や田川夫人なんぞがこんなに自分を煩はすだらう。憎らしい。何んの因縁で……」葉子は自分をかう卑しみながらも、男の眼を迎へ慣れた媚びの色を知らず〳〵上瞼に集めてそれに應じようとする途端、日に向つて眼を閉ぢた時に綾をなして亂れ飛ぶあの不思議な種々な色の光體、それに似たものが繚亂として心を取り圍んだ。星はゆるいテンポでゆらり〳〵と靜かにをどつてゐる。「おうい、おい、おい、おらい」……葉子は思はずかつと腹を立てた。その憤りの膜の中に凡ての幻影はすうつと吸ひ取られてしまつた。と思ふと、その憤りすらが見る〳〵ぼやけて、後には感激の更にない死のやうな世界が果てしなくもどんよりと澱んだ。葉子は暫らくは氣が遠くなつて何事も辨へないでゐた。

やがて葉子はまた徐ろに意識の閾に近づいて來てゐた。

煙突の中の黒い煤の間を、横すぢかひに休らひながら飛びながら、上つて行く火の子のやうに、葉子の幻想は暗い記憶の洞穴の中を右左によろめきながら奥深く辿つて行くのだつた。自分でさへ驚くばかり底の底に又底のある迷路を恐る〳〵傳つて行くと、果てしもなく現はれ出る人の顏の一番奥に、赤い衣物を裾長に着て、眩しい程に輝き渡つた男の姿が見え出した。葉子の心の周圍にそれまで響いてゐた音樂はその瞬間ぱつたり靜まつてしまつて、耳の底がかーんとする程空恐しい寂寞の中に、船の舳の方で氷をたゝき破るやうな寒い時鐘の音が聞こえた。「カン〳〵、カン〳〵、カーン」……。葉子は何時の鐘だと考へて見る事もしないで、そこに現はれた男の顏を見分けようとしたが、木村に似た容貌がおぼろに浮んで來るだけで、どう見直して見てもはつきりした事はもどかしい程分らなかつた。木村である筈はないんだがと葉子はいら〳〵しながら思つた。「木村は私の良人ではないか。その木村が赤い衣物を着てゐるといふ法があるものか。……可哀さうに、木村はサン・フランシスコから今頃はシヤトルの方に來て、私の着くのを一日千秋の思ひで待つてゐるだらうに、私はこんな事をしてこゝで赤い衣物を着た男なんぞを見詰めてゐる。千秋の思ひで待つ？ それはさうだらう。けれども私が木村の妻になつてしまつたが最後、千秋の思ひで私を待つたりした木村がどんな良人に變るかは知れ切つてゐる。憎いのは男だ……木村でも倉地でも……又事務長なんぞを思ひ出してゐる。さうだ、米國に着いたらもう少し落ち着いて考へた生き方をしよう。木村だつて打てば響く位はする男だ。彼地に行つて纏まつた金が出來たら、何んと云つてもかまはない定子を呼び寄せてやる。あ、定子の事なら木村は承知の上だつたのに。それにしても木村が赤い衣物などを着てゐるのはあんまりをかしい……」ふと葉子はもう一度赤い衣物の男を見た。事務長の顏が赤い衣物の上に似合はしく乘つてゐた。葉子はぎよつとした。而してその顏をもつとはつきり見詰めたい爲めに重い〳〵瞼を強ひて押し開く努力をした。

見ると葉子の前にはまさしく、角燈を持つて

焦茶色のマントを着た事務長が立つてゐた。而して、

「どうなさつたんだ今頃こんな所に、……今夜はどうかしてゐる……岡さん、あなたの仲間がもう一人こゝにゐますよ」

と云ひながら事務長は魂を得たやうに動き始めて、後ろの方を振り返つた。事務長の後ろには、食堂で葉子と一と眼顔を見合はすと、震へんばかりに興奮して顔を得上げないでゐた上品な彼の青年が、眞青な顔をして物に怯ぢたやうに慎ましく立つてゐた。

眼はまざ／＼と開いてゐたけれども葉子はまだ夢心地だつた。事務長のゐるのに氣付いた瞬間からまた聞こえ出した波濤の音は、前のやうに音樂的な所は少しもなく、唯ゝ物狂ほしい騷音となつて船に迫つてゐた。然し葉子は今の境界が本當に現實の境界なのか、先刻不思議な音樂的の鍾聲にひたつてゐた境界が夢幻の中の境界なのか、自分ながら少しも見境がつかない位ぼんやりしてゐた。而してあの荒唐な奇怪な心の adventure を却つてまざ／＼とした現實の出來事でもあるかのやうに思ひなして、眼の前に見る酒に赤らんだ事務長の顔は妙に蠱惑的な氣味の惡い幻象となつて葉子を脅かさうとした。

「少し飲み過ぎた處に、溜めといた仕事を詰めてやつたんで眠れん。で散歩の積りで甲板の見廻りに出ると岡さん」

と云ひながらもう一度後ろに振り返つて、

「この岡さんがこの寒いに手欄から體を乘り出してぽいかんと海を見とるんです。取り押へてケビンに連れて行かうと思うとると、今度はあなたに出喰はす。物好きもあつたもんですねえ。海を眺めて何が面白いかな。お寒かありませんか、ショールなんぞも落ちてしまつた」

何處の國訛とも判らぬ一種の調子が嗄さびた聲で操られるのが、事務長の人と爲りによくそぐつて聞こえる。葉子はそんな事を思ひながら事務長の言葉を聞き終ると、始めてはつきり眼がさめたやうに思つた。而して簡單に、

「いゝえ」

と答へながら上眼づかひに、夢の中からでも人を見るやうにうつとりと事務長のしぶとさうな顔を見やつた。而してそのまゝ默つてゐた。

事務長は例の insolent な眼付きで葉子を一眼に見くるめながら、

「若い方は世話が燒ける……さあ行きませう」

と強い語調で云つて、から／＼と傍若無人に笑ひながら葉子をせき立てた。海の波の荒涼たるをめきの中に聞くこの笑ひ聲は diabolic なものだつた。「若い方」老成ぶつた事を云ふと葉子は思つたけれども、然し事務長にはそんな事を云ふ權利でもあるかのやうに葉子は皮肉な竹箆返しもせずに、おとなしくショールを拾ひ上げて事務長の云ふまゝにその後に續かうとして驚いた。所が長い間そこ佇んでゐたものと見えて、磁石で吸ひ付けられたやうに、兩脚は固く重くなつて一寸も動きさうにはなかつた。寒氣の爲めに感覺の麻痺しかゝつた膝の關節は強ひて曲げようとすると、筋を絶つ程の痛みを覺えた。不用意に歩き出さうとした葉子は、思はずのめり出さした上體を辛く後ろに支へて、情けなげに立ちすくみながら、

「ま、一寸」

と呼びかけた。事務長の後に續かうとした岡と呼ばれた青年はこれを聞くと逸早く足を止めて葉子の方を振り向いた。

「始めてお知合ひになつたばかりですのに、すぐお心安だてをして本當に何んで御座いますが、一寸お肩を貸していたゞけませんでせうか。何んですか足の先きが凍つたやうになつてしまつて……」

と葉子は美しく顔をしかめて見せた。岡はそれらの言葉が拳となつて續けさまに胸を打つとでも云つたやうに、暫らくの間どぎまぎ躊躇してゐたが、やがて思ひ切つた風で、默つたまゝ引き返して來た。身の丈けも肩幅も葉子とさう違はない程な華車な體をわな〳〵と震はせてゐるのが、肩に手をかけない中からよく知れた。事務長は振り向きもしないで靴の踵をこつこつと鳴らしながら早や二三間のかなたに遠ざかつてゐた。

　鋭敏な馬の皮膚のやうにだち〳〵と震へる青年の肩におぶひかゝりながら、葉子は黒い大きな事務長の後姿を仇かたきでもあるかのやうに鋭く見詰めてそろ〳〵と歩いた。西洋酒の芳醇な甘い酒の香が、まだ醉から醒めきらない事務長の身のまはりを毒々しい靄となつて取り捲いてゐた。放縱といふ事務長の心の臟は今無用心に開かれてゐる。あの無頓着さうな肩のゆすりの蔭にすさまじい desire の火が激しく燃えてゐる筈である。葉子は禁斷の木の實を始めて喰ひかいだ原人のやうな渇慾を我れにもなく煽りたてて、事務長の心の裏を引つ繰り返して縫目を見窮めようとばかりしてゐた。おまけに青年の肩に置いた葉子の手は、華車とは云ひながら男性的な强い彈力を持つ筋肉の震へをまざ〳〵と感ずるので、これら二人の男が與へる奇怪な刺戟はほしいまゝに絡まりあつて、恐ろしい心を葉子に起させた。木村‥‥何をうるさい、餘計な事を云はずと默つて見てゐるがいい。心の中を閃き過ぎる斷片的な影を葉子は枯葉のやうに拂ひのけながら、眼の前に見る蠱惑に溺れて行かうとのみした。口から喉は喘ぎたい程に干からびて、岡の肩に乘せた手は、生理的な作用から冷たく堅くなつてゐた。而して熱をこめて濕んだ眼を見張つて、事務長の後姿ばかり見詰めながら、五體はふら〳〵と多愛もなく岡の方に倚りそつた。吐き出す息氣は燃え立つて岡の横顔を撫でた。事務長は油斷なく角燈で左右を照らしながら甲板の整頓に氣を配つて歩いてゐる。

　葉子はいたはるやうに岡の耳に口をよせて、

「あなたはどちらまで」

と聞いて見た。その聲はいつものやうに澄んではゐなかつた。而して氣を許した女からばかり聞かれるやうな甘たるい親しさが籠つてゐた。岡の肩は感激の爲めに一入震へた。頓には返事もし得ないでゐるやうだつたがやがて臆病さうに、

「あなたは」

とだけ聞き返して熱心に葉子の返事を待つらしかつた。

「シカゴまで參るつもりですの」

「僕も‥‥私もさうです」

岡は待ち設けたやうに聲を震はしながらきつぱりと答へた。

「シカゴの大學にでもいらつしやいますの」

　岡は非常に慌てたやうだつた。何んと返事をしたものか恐ろしく躊ふ風だつたが、やがて曖昧に口の中で、

「えゝ」

とだけつぶやいて默つてしまつた。そのおぼこさ‥‥葉子は闇の中で眼をかゞやかして微笑んだ。而して岡を憐れんだ。

　然し青年を憐れむと同時に葉子の眼は稻妻のやうに事務長の後姿を斜めにかすめた。青年を憐れむ自分は事務長に憐れまれてゐるのではないか。始終一歩づつ上手を行くやうな事務長が一種の憎しみを以て眺めやられた。嘗て味はつた事のないこの憎しみの心を葉子はどうする事も出來なかつた。

　二人に別れて自分の船室に歸つた葉子は殆んど delirium の狀態にあつた。眼睛は大きく開

いたまゝで、盲目同樣に部屋の中の物を見る事をしなかつた。冷え切つた手先はをど〳〵と兩の袂を掴んだり放したりしてゐた。葉子は夢中でショールとボアとをかなぐり捨て、もどかしげに帶だけほど〳〵と、髮も解かずに寢臺の上に倒れかゝつて、横になつたまゝ羽根枕を兩手でひしと抱いて顔を伏せた。何故と知らぬ涙がその時堰を切つたやうに流れ出した。而して涙は後から〳〵漲るやうにシーツを濕しながら、充血した脣は恐ろしい笑ひを湛へてわな〳〵と震へてゐた。

一時間程さうしてゐる中に泣き疲れに疲れて、葉子はかけるものもかけずにそのまゝ深い眠りに陷つて行つた。けば〳〵しい電燈の光はその翌日の朝までこの媚めかしくもふしだらな葉子の丸寢姿を畫いたやうに照してゐた。

十四

何といつても船旅は單調だつた。縱令日々夜々に一瞬もやむ事なく姿を變へる海の波と空の雲とはあつても、詩人でもないなべての船客は、それ等に對して途方に暮れた倦怠の視線を投げるばかりだつた。地上の生活からすつかり遮斷された船の中には、極く小さな事でも眼新らしい事件の起る事のみが待ち設けられてゐた。さうした生活では葉子が自然に船客の注意の焦點となり、話題の提供者となつたのは不思議もない。毎日々々凍りつくやうな濃霧の間を、東へ東へと心細く走り續ける小さな汽船の中の社會は、あらはには知れないながら、何か淋しい過去を持つらしい、妖艷な、若い葉子の一擧一動を、絶えず興味深くぢつと見守るやうに見えた。

かの奇怪な心の動亂の一夜を過ごすと、その翌日から葉子はまた普段の通りに、如何にも足許があやふく見えながら少しも破綻を示さず、動もすれば他人の勝手になりさうでゐて、よそからは決して動かされない女になつてゐた。始めて食堂に出た時の愼ましやかさに引きかへて、時には快活な少女のやうに晴れやかな顔付きをして船客等と言葉を交はしたりした。食堂に現はれる時の葉子の服裝だけでも、退屈に倦んじ果てた人々には、物好きな期待を與へた。ある時は葉子は愼み深い深窓の婦人らしく上品に、ある時は素養の深い若いディレッタントのやうに高尚に、又ある時は習俗から解放された adventuress とも思はれる放膽を示した。その極端な變化が一日の中に起つて來ても、人人はさして怪しく思はなかつた。それ程葉子の性格には複雜なものが潛んでゐるのを感じさせた。繪島丸が横濱の棧橋に繋がれてゐる間から、人々の注意の中心となつてゐた田川夫人を、海氣にあつて息氣をふき返した人魚のやうな葉子の傍において見ると、身分、閲歷、學殖、年齡などといふいかめしい資格が、却つて夫人を固い古ぼけた輪郭にはめこんで見せる結果になつて、唯ゞ神體のない空虛な宮殿のやうな空いかめしい興なさを感じさせるばかりだつた。女の本能の鋭さから田川夫人はすぐそれを感付いたらしかつた。夫人の耳許に響いて來るのは葉子の噂ばかりで、夫人自身の評判は見る〳〵薄れて行つた。ともすると田川博士までが、夫人の存在を忘れたやうな振舞をする、さう夫人を思はせる事があるらしかつた。食堂の卓を挾んで向ひ合ふ夫妻が他人同志のやうな顔をして互々に竊み見をするのを葉子がすばやく見て取つた事などもあつた。と云つて今まで自分の子供でもあしらふやうに振舞つてゐた葉子に對して、今更ら夫人は改まつた態度も取りかねてゐた。よくも假面を被つて人を陷れたといふ女らしいひねくれた妬みが明らかに夫人の表情に讀まれ出した。然

し實際の處置としては、口惜しくても蟲を殺して、自分を葉子まで引き下げるか、葉子を自分まで引き上げるより仕方がなかつた。夫人の葉子に對する仕打ちは、戸板を返すやうに違つて來た。葉子は知らん顔をして夫人のするがまゝに任せてゐた。葉子は固より夫人の慌てたこの處置が夫人には致命的な不利益であり、自分には都合のいゝ仕合せであるのを知つてゐたからだ。案の定田川夫人のこの讓步は、夫人に何等かの同情なり尊敬なりが加へられる結果とならなかつたばかりでなく、その勢力はます／＼下り坂になつて、葉子は何時の間にか田川夫人と對等で物を云ひ合つても少しも不思議とは思はせない程の高みに自分を持ち上げてしまつてゐた。落ち目になつた夫人は年甲斐もなくしどろもどろになつてゐた。恐ろしいほどやさしく親切に葉子をあしらふかと思へば、皮肉らしく馬鹿丁寧に物を云ひかけたり、或は突然路傍の人に對するやうなよそ／＼しさを裝つて見せたりした。死にかけた蛇ののたうち廻るを見やる蛇使ひのやうに、葉子は冷やかにあざ笑ひながら、夫人の心の葛藤を見やつてゐた。

　單調な船旅に厭き果てて、したゝか刺戟に餓ゑた男の群れは、この二人の女性を中心にして知らず／＼渦卷きのやうにめぐつてゐた。田川夫人と葉子との暗鬪は表面には少しも目に立たないで戰はれてゐたのだけれども、それが男達に自然に刺戟を與へないではおかなかつた。平らな水に偶然落ちて來た微風のひき起す小さな波紋ほどの變化でも、船の中では一かどの事件だつた。男達は何故ともなく一種の緊張と興味とを感ずるやうに見えた。

　田川夫人は微妙な女の本能と直覺とで、じり／＼と葉子の心の隅々を探り廻してゐるやうだつたが、遂にこゝぞと云ふ急所を摑んだらしく見えた。それまで事務長に對して見下したやうな丁寧さを見せてゐた夫人は、見る／＼態度を變へて、食卓でも二人は席が隣り合つてゐるからといふ以上な親しげな會話を取り交はすやうになつた。田川博士までが夫人の意を迎へて、何かにつけて事務長の室に繁く出入りするばかりか、事務長は大抵の夜は田川夫妻の部屋に呼び迎へられた。田川博士は固より船の正客である。それを外らすやうな事務長ではない。倉地は船醫の興錄までを手傳はせて田川夫妻の旅情を慰めるやうに振舞つた。田川博士の船室には夜おそくまで灯がかゞやいて、夫人の興ありげに高く笑ふ聲が室外まで聞こえる事が珍らしくなかつた。

　葉子は田川夫人のこんな仕打ちを受けても、心の中で冷笑つてゐるのみだつた。既に自分が勝味になつてゐるといふ自覺は、葉子に反動的な寬大な心を與へて、夫人が事務長を虜にしようとしてゐる事などはてんで問題にはしまいとした。夫人は餘計な見當違ひをして、痛くもない腹を探つてゐる。事務長が何うしたと云ふのだ。母の胎を出るとそのまゝ何んの訓練も受けずに育ち上つたやうなぶしつけな、動物性の勝つた、どんな事をして來たのか、どんな事をするのか分らないやうな高が事務長に何んの興味があるものか。あんな人間に氣を引かれる位なら、自分は疾うに喜んで木村の愛になづいてゐるのだ。見當違ひもいゝ加減にするがいゝ。さう歯がみをしたい位な氣分で思つた。

　ある夕方葉子はいつもの通り散步しようと甲板に出て見ると、遙か遠い手欄の所に岡がたつた一人しよんぼりと倚りかゝつて、海を見入つてゐた。葉子はいたづら者らしくそつと足音を盜んで、忍び／＼近付いて、いきなり岡と肩をすり合せるやうにして立つた。岡は不意に人が現はれたので非常に驚いた風で、顏をそむけてその場を立ち去らうとするのを、葉子は否應

なしに手を握つて引き留めた。岡が逃げ隠れようとするのも道理、その顔には涙のあとがまざまざと殘つてゐた。少年から青年になつたばかりのやうな、內氣らしい、小柄な岡の姿は、何もかも荒々しい船の中では殊更らデリケートな可憐なものに見えた。葉子はいたづらばかりでなく、この青年に一種の淡々しい愛を覺えた。

「何を泣いてらしつたの」

小首を存分傾けて、少女が少女に物を尋ねるやうに、肩に手を置きそへながら聞いて見た。

「僕……泣いてゐやしません」

岡は兩方の頰を紅く彩つて、から云ひながらいゝ、くるりと體をそつぽうに向け換へようとした。それがどうしても少女のやうな仕草だつた。抱きしめてやりたいやうなその肉體と、肉體につつまれた心。葉子は更にすり寄つた。

「いゝえ〳〵泣いてらつしやいましたわ」

岡は途方に暮れたやうに眼の下の海を眺めてゐたが、遁れる術のないのを覺つて、大びらにハンケチをズボンのポケットから出して眼を拭つた。而して少し恨むやうな眼付きをして始めてまともに葉子を見た。脣までが苺のやうに紅くなつてゐた。青白い皮膚に嵌め込まれたその紅さを、色彩に敏感な葉子は見逃す事が出來なかつた。岡は何かしら非常に興奮してゐた。その興奮してぶる〳〵震へるしなやかな手を葉子は手欄ごとぢつと押へた。

「さ、これでお拭き遊ばせ」

葉子の袂からは美しい香りのこもつた小さなリンネルのハンケチが取り出された。

「持つてるんですから」

岡は恐縮したやうに自分のハンケチを顧みた。

「何をお泣きになつて……まあ私つたら餘計な事まで伺つて」

「何いゝんです……唯ゞ海を見たら何んとなく涙ぐんでしまつたんです。體が弱いもんですから下らない事にまで感傷的になつて困ります。……何んでもない……」

葉子はいかにも同情するやうに合點々々した。岡が葉子とかうして一緒にゐるのをひどく嬉しがつてゐるのが葉子にはよく知れた。葉子はやがて自分のハンケチを手欄の上においたまま、

「私の部屋へもよろしかつたらいらつしやいまし。又ゆつくりお話しませうね」

となつこく云つてそこを去つた。

岡は決して葉子の部屋を訪れる事はしなかつたけれども、この事のあつて後は、二人はよく親しく話し合つた。岡は人なじみの惡い、話の種のない、極く初心な世慣れない青年だつたけれども、葉子は僅かなタクトですぐ隔てを取り去つてしまつた。而して打ち解けて見ると彼れは上品な、どこまでも純粹な、而して賢かしい青年だつた。若い女性にはそのはにかみやな所から今まで絕えて接してゐなかつたので、葉子にはすがり附くやうに親しんで來た。葉子も同性の戀をするやうな氣持で岡を可愛がつた。

その頃からだ、事務長が岡に近づくやうになつたのは。岡は葉子と話をしない時はいつでも事務長と散歩などをしてゐた。然し事務長の親友とも思はれる二三の船客に對しては口もきかうとはしなかつた。岡は時々葉子に事務長の噂をして聞かした。而して表面はあれ程粗暴のやうに見えながら、考への變つた、年齡や位置などに隔てをおかない、親切な人だと云つたりした。もつと交際して見るといゝとも云つた。その度毎に葉子は激しく反對した。あんな人間を岡が話し相手にするのは實際不思議な位だ。あの人の何處に岡と共通するやうな優れた所があらうなどとからかつた。

葉子に引き付けられたのは岡ばかりではなか

つた。午餐が濟んで人々がサルーンに集まる時などは團欒が大抵三つ位に分れて出來た。田川夫妻の周圍には一番多數の人が集まつた。外國人だけの團體から田川の方に來る人もあり、日本の政治家實業家連は勿論我れ先きにそこに馳せ參じた。そこから段々細く縒のやうにつながれて若い留學生とか學者とかいふ連中が陣を取り、それから又段々太くつながれて、葉子と少年少女等の群れがゐた。食堂で不意の質問に辟易した外交官補などは第一の連絡の綱となつた。衆人の前では岡は遠慮するやうにあまり葉子に親しむ樣子は見せずに不卽不離の態度を保つてゐた。遠慮會釋なくそんな所で葉子に狎れ親しむのは子供達だつた。眞白なモスリンの衣物を着て赤い大きなリボンを裝つた少女達や、水兵服で身輕に裝つた少年達は葉子の周圍に花輪のやうに集まつた。葉子がさういふ人達をかたみがはりに抱いたりかゝへたりして、お伽話などして聞かせてゐる樣子は船中の見ものだつた。どうかするとサルーンの人達は自分等の間の話題などは捨てておいてこの可憐な光景をうつとり見やつてゐるやうな事もあつた。

たゞ一つこれらの群れからは全く沒交渉な一團があつた。それは事務長を中心にした三四人の群れだつた。いつでも部屋の一隅の小さい卓を圍んで、その卓の上にはウヰスキー用の小さなコップと水とが備へられてゐた。一番いゝ香ひの煙草の烟もそこから漂つて來た。彼等は何かひそ〳〵と語り合つては、時々傍若無人な高い笑ひ聲を立てた。さうかと思ふとぢつと田川の群れの會話に耳を傾けてゐて、遠くの方から突然皮肉の茶々を入れる事もあつた。誰れ云ふとなく人々はその一團を犬儒派と呼びなした。彼等がどんな種類の人でどんな職業に從事してゐるかを知る者はなかつた。岡などは本能的にその人達を忌み嫌つてゐた。葉子も何かしら氣のおける連中だと思つた。而して表面は一向無頓着に見えながら、自分に對して十分の觀察と注意とを怠つてゐないのを感じてゐた。

何うしても然し葉子には、船にゐる凡ての人の中で事務長が一番氣になつた。そんな筈、理由のある筈はないと自分をたしなめて見ても何んの甲斐もなかつた。サルーンで子供達と戲れてゐる時でも、葉子は自分のして見せる蠱惑的な姿態が何時でも暗々裡に事務長の爲めにされてゐるのを意識しない譯には行かなかつた。事務長がその場にゐない時は、子供達をあやし樂しませる熱意さへ薄らぐのを覺えた。そんな時に小さい人達はきまつてつまらなさうな顏をしたり欠伸をしたりした。葉子はさうした樣子を見ると更に興味を失つた。而してそのまゝ立つて自分の部屋に歸つてしまふやうな事をした。それにも係はらず事務長は嘗て葉子に特別な注意を拂ふやうな事はないらしく見えた。それが葉子を鋭く不快にした。夜など甲板の上を漫歩きしてゐる葉子が、田川博士の部屋の中から例の無遠慮な事務長の高笑ひの聲を漏れ聞いたりなぞすると、思はずかつとなつて、鐵の壁すら射通しさうな鋭い瞳を聲のする方に送らずにはゐられなかつた。

ある日の午後、それは雲行きの荒い寒い日だつた。船客達は船の動搖に辟易して自分の船室に閉ぢこもるのが多かつたので・サルーンががら明きになつてゐるのを幸ひ、葉子は岡を誘ひ出して、部屋の角になつた所に折れ曲つて据ゑてあるモロッコ皮のディワンに膝と膝を觸れ合さんばかり寄り添つて腰をかけて、トランプを弄つて遊んだ。岡は日頃さういふ遊戲には少しも興味を持つてゐなかつたが、葉子と二人きりでゐられるのを非常に幸福に思ふらしく、

いつになく快活に札をひねくつた。その細いしなやから手からぶきつちように札が捨てられたり取られたりするのを葉子は面白いものに見やりながら、繼續的に言葉を取り交はした。

「あなたもシカゴにいらつしやると仰しやつてね、あの晩」

「えゝ、云ひました。……これで切つてもいゝでせう」

「あらそんなもので勿體ない……もつと低いものはおありなさらない？……シカゴではシカゴ大學にいらつしやるの？」

「これでいゝでせうか……よく分らないんです」

「よく分らないつて、そりやをかしう御座んすわね、そんな事お決めなさらずに米國にいらつしやるつて」

「僕は……」

「これでいたゞきますよ……僕は……何」

「僕はねえ」

「えゝ」

葉子はトランプを弄るのをやめて顏を上げた。岡は懺悔でもする人のやうに、面を伏せて紅くなりながら札をいぢくつてゐた。

「僕の本當に行く所はボストンだつたのです。そこに僕の家で學資をやつてる書生がゐて僕の監督をしてくれる事になつてゐたんですけれど……」

葉子は珍らしい事を聞くやうに岡に眼をすゑた。岡は益々云ひ憎さうに、

「あなたにお逢ひ申してから僕もシカゴに行きたくなつてしまつたんです」

と段々語尾を消してしまつた。何んといふ可憐さ……葉子はさらに岡にすり寄つた。岡は眞劍になつて顏まで青ざめて來た。

「お氣に障つたら許して下さい……僕は唯々……あなたのいらつしやる所にゐたいんです、どういふ譯だか……」

もう岡は涙ぐんでゐた。葉子は思はず岡の手を取つてやらうとした。

その瞬間にいきなり事務長が激しい勢でそこに這入つて來た。而して葉子には眼もくれずに激しく岡を引つ立てるやうにして散歩に連れ出してしまつた。岡は唯々としてその後に隨つた。

葉子はかつとなつて思はず座から立ち上つた。而して思ひ存分事務長の無禮を責めようと身構へした。その時不意に一つの考へが葉子の頭をひらめき通つた。「事務長は何處かで自分達を見守つてゐたに違ひない」

突つ立つたまゝの葉子の顏に、乳房を見せつけられた子供のやうな微笑がほのかに浮び上つた。

十五

葉子はある朝思ひがけなく早起きをした。米國に近づくにつれて緯度は段々下つて行つたので、寒氣も薄らいでゐたけれども、何んと云つても秋立つた空氣は朝毎に冷え〳〵と引きしまつてゐた。葉子は溫室のやうな船室からこのきりつとした空氣に觸れようとして甲板に出て見た。右舷を廻つて左舷に出ると計らずも眼の前に陸影を見つけ出して、思はず足を止めた。そこには十日ほど念頭から絶え果ててゐたやうなものが海面から淺くもれ上つて續いてゐた。葉子は好奇な眼をかゞやかしながら、思はず一旦停めた足を動かして手欄に近づいてそれを見渡した。オレゴン松がすく〳〵と白波の激しく嚙みよせる岸邊まで密生したヴァンクーヴァー島の低い山波がそこにあつた。物凄く底光りのする眞青な遠洋の色は、いつの間にか亂れた波の物狂はしく立ち騷ぐ沿海の青灰色に變つて、その先きに見える暗綠の樹林はどんよりとした雨

空の下に荒涼として横はつてゐた。それは慘な姿だつた。　りの遠い故か船がいくら進んでも景色にはいさゝかの變化も起らないで、荒涼たるその景色は何時までも眼の前に立ち續いてゐた。古綿に似た薄雲を漏れる朝日の光が力弱くそれを照す度每に、煮え切らない影と光の變化がかすかに山と海とをなでて通る計りだ。長い長い海洋の生活に慣れた葉子の眼には陸地の印象は寧ろ汚いものでも見るやうに不愉快だつた。もう三日程すると船はいやでもシャトルの淺橋に繫がれるのだ。向うに見えるあの陸地の續きにシャトルはある。あの松の林が切り倒されて少しばかりの平地となつた所に、こゝに一つ彼處に一つと云ふやうに小屋が建ててあるが、その小屋の數が東に行くにつれて段々多くなつて、仕舞には一かたまりの家屋が出來る。それがシャトルであるに違ひない。うら寂しく秋風の吹きわたるその小さな港町の棧橋に、野獸のやうな諸國の勞働者が群がる處に、この小さな綸鳥丸が疲れ切つた船體を横へる時、あの木村が例の眩るしい機敏さで、亞米利加風になり濟したらしい物腰で、まはりの景色に釣合はない景氣のいゝ顏をして、船梯子を上つて來る樣子までが葉子には見るやうに想像された。

「いやだ〳〵。どうしても木村と一緒になるのはいやだ。私は東京に歸つてしまはう」

葉子はだだつ子らしく今更らそんな事を本氣に考へて見たりしてゐた。

　水夫長と一人のボーイとが押し竝んで、靴と草履との音をたてながらやつて來た。而して葉子の傍まで來ると、葉子が振り返つたので二人ながら慇懃に、

「お早う御座います」

と挨拶した。その樣子がいかにも親しい目上に對するやうな態度で、殊に水夫長は、

「御退屈で御座いましたらう。それでもこれであと三日になりました。今度の航海には然しお蔭樣で大助かりをしまして。昨夕から際だつてよくなりましてね」

と附け加へた。

　葉子は一等船客の間の話題の的であつたばかりでなく、上級船員の間の噂の種であつたばかりでなく、この長い航海中に何時の間にか下級船員の間にも不思議な勢力になつてゐた。航海の八日目かに、ある老年の水夫がフォクスルで仕事をしてゐた時、錨の鎖に足先を挾まれて骨を挫いた。プロメネード・デッキで偶然それを見つけた葉子は、船醫より早くその場に駈けつけた。結びつこぶのやうに丸まつて、痛みの爲めに藻掻き苦しむその老人の後に引きそつて、水夫部屋の入口までは澤山の船員や船客が物珍らしさうについて來たが、そこまで行くと船員ですらが中に這入るのを躊躇した。どんな祕密が潛んでゐるか誰れも知る人のないその內部は、船中では機關室よりも危險な一區域と見做されてゐただけに、その入口さへが一種人を脅かすやうな薄氣味惡さを持つてゐた。葉子は然しその老人の苦しみ藻掻く姿を見るとそんな事は手もなく忘れてしまつてゐた。ひよつとすると邪魔物扱ひにされてあの老人は殺されて了ふかも知れない。あんな齡までこの海上の荒々しい勞働に縛られてゐるこの人には賴りになる緣者もゐないのだらう。こんな思ひやりが留度もなく葉子の心を襲ひ立てるので、葉子はその老人に引きずられてでも行くやうにどんどん水夫部屋の中に降りて行つた。薄暗い腐敗した空氣は蒸れ上るやうに人を襲つて、蔭の中にうよ〳〵と蠢く群れの中からは太く錆びた聲が投げかはされた。闇に慣れた水夫達の眼は矢庭に葉子の姿を引つ捕へたらしい。見る〳〵一種の興奮が部屋の隅々にまで充ち溢れて、それが奇怪な罵りの聲となつて物凄く葉子に逼つ

た。だぶ〳〵のズボン一つで、筋くれ立つた厚みの有る毛胸に一絲もつけない大男は、やをら人中から立ち上ると、づか〳〵葉子に突きあたらんばかりにすれ違つて、すれ違ひざまに葉子の顔を孔の開くほど睨みつけて、聞くにたへない雜言を高々と罵つて、自分の群れを笑はした。然し葉子は死にかけた子にかしづく母のやうに、そんな事には眼もくれずに老人の傍に引き添つて、臥易いやうに寢床を取りなほしてやつたり、枕をあてがつてやつたりして、なほもその場を去らなかつた。そんなむさ苦しい汚い處にゐた老人がほつたらかして置かれるのを見ると、葉子は何んと云ふ事なしに涙が後から〳〵流れてたまらなかつた。葉子はそこを出て無理に船醫の興錄をそこに引つ張つて來た。而して權威を持つた人のやうに水夫長にはつきりした指圖をして、始めて安心して悠々とその部屋を出た。葉子の心には自分のした事に對して子供のやうな喜びの色が浮んでゐた。水夫達は暗い中にもそれを見逃さなかつたと見える。葉子が出て行く時には一人として葉子に雜言を擲けつけるものがゐなかつた。それから水夫等は誰れ云ふとなしに葉子の事を「姉御々々」と呼んで噂するやうになつた。その時の事を水夫長は葉子に感謝したのだ。

　葉子はしんみに色々と病人の事を水夫長に聞きたゞした。實際水夫長に話しかけられるまでは、葉子はそんな事は思ひ出しもしてゐなかつたのだ。而して水夫長に思ひ出させられて見ると、急にその老水夫の事が心配になり出したのだつた。足はとう〳〵不具になつたらしいが痛みは大抵なくなつたと水夫長がいふと葉子は始めて安心して、又陸の方に眼をやつた。水夫長とボーイとの跫音は廊下の彼方に遠ざかつて消えてしまつた。葉子の足許にはたゞかすかなエンジンの音と波が舷を打つ音とが聞こえるばかりだつた。

　葉子は又自分一人の心に歸らうとして暫らくぢつと單調な陸地に眼をやつてゐた。その時突然岡が立派な西洋絹の寢衣の上に厚い外套を着て葉子の方に近づいて來たのを、葉子は視角の一端にちらりと捕へた。夜でも朝でも葉子が獨りでゐると、何處で何うしてそれを知るのか、何時の間にか岡が屹度身近に現はれるのが常なので、葉子は待ち設けてゐたやうに振り返つて、朝の新らしいやさしい微笑を與へてやつた。

「朝はまだ隨分冷えますね」

と云ひながら、岡は少し人に慣れた少女のやうに顔を赤くしながら葉子の傍に身を寄せた。葉子は默つてほゝ笑みながらその手を取つて引き寄せて、互に小さな聲で輕い親しい會話を取り交はし始めた。

　と、突然岡は大きな事でも思ひ出した樣子で葉子の手をふりほどきながら、

「倉地さんがね、今日あなたに是非願ひたい用があるつて云つてましたよ」

と云つた。葉子は、

「さう……」

と極く輕く受ける積りだつたが、それが思はず息氣苦しい程の調子になつてゐるのに氣がついた。

「何んでせう、私になんぞ用つて」

「何んだか私ちつとも知りませんが、話をして御覧なさい。あんなに見えてゐるけれども親切な人ですよ」

「まだあなた瞞されていらつしやるのね。あんな高慢ちきな亂暴な人私嫌ひですわ。……でも先方で會ひたいと云ふのなら會つて上げてもいいから、こゝにいらつしやいつて、あなた今すぐ走つて呼んで來て下さいましな。會ひたいなら會ひたいやうにするが好う御座んすわ」

葉子は實際激しい言葉になつてゐた。

「まだ寢てゐますよ」

「いゝから構はないから起しておやりになればよござんすわ」

岡は自分に親しい人を親しい人に近づける機會が到來したのを誇り喜ぶ樣子を見せて、いそ〳〵と駈けて行つた。その後姿を見ると葉子は胸に時ならぬときめきを覺えて、眉の上の所にさつと熱い血の寄つて來るのを感じた。それがまた憤ろしかつた。

見上げると朝の空を今まで蔽うてゐた綿のやうな初秋の雲は處々ほころびて、洗ひすました青空が眩ゆく切れ目〳〵に輝き出してゐた。青い灰色に汚れてゐた雲そのものすらが見違へるやうに白く輕くなつて美しい笹縁をつけてゐた。海は眼も綾な明暗をなして、單調な島影もさすがに頑固な沈默ばかりを守りつゞけてはゐなかつた。葉子の心は抑へよう〳〵としても輕く華やかにばかりなつて行つた。決戰……と葉子はその勇み立つ心の底で叫んだ。木村の事などは疾うの昔に頭の中からこそぎ取るやうに消えてしまつて、その後にはたゞ何とはなしに子供らしい浮き〳〵した冒險の念ばかりが働いてゐた。自分でも知らずにゐたやうなwind な激しい力が、想像も及ばぬ所にぐんぐんと葉子を引きずつて行くのを、葉子は恐れながらも何處までも跟いて行かうとした。どんな事があつても自分がその中心になつてゐて、先方を牽き付けてやらう。自分をはぐらかすやうな事はしまいといふ始終張り切つてばかりゐた是れまでの心持と、この時湧くが如く持ち上つて來た心持とは比べものにならなかつた。あらん限りの重荷を洗ひざらひ思ひ切りよく投げ棄ててしまつて、身も心も何か大きな力に任し切るその快さ心安さは葉子をすつかり夢心地にした。そんな心持の相違を比べて見る事さへ出來ない位だつた。葉子は子供らしい期待に眼を輝かして岡の歸つて來るのを待つてゐた。

「駄目ですよ。床の中にゐて戸も開けてくれずに、寢言見たいな事をいつてるんですもの」

と云ひながら岡は當惑顏で葉子の傍に現はれた。

「あなたこそ駄目ね。ようござんすわ、私が自分で行つて見てやるから」

葉子にはそこにゐる岡さへなかつた。少し怪訝さうに葉子のいつになくそは〳〵した樣子を見守る青年をそこに捨てておいたまゝ葉子は險しく細い階子段を降りた。

事務長の部屋は機關室と狹い暗い廊下一つを隔てた所にあつて、日の目を見てゐた葉子には手さぐりをして歩かねばならぬ程勝手がちがつてゐた。地震のやうに機械の震動が廊下の鐵壁に傳はつて來て、むせ返りさうな生暖かい蒸氣の匂ひと共に人を不愉快にした。葉子は鋸屑を塗りこめてざら〳〵と手觸りのいやな壁を撫でて進みながらやうやく事務室の戸の前に來て、あたりを見廻して見て、ノックもせずにいきなりハンドルをひねつた。ノックをする隙もないやうなせか〳〵した氣分になつてゐた。戸は音も立てずに易々と開いた。「戸も開けてくれずに……」との岡の言葉から、てつきり鍵がかゝつてゐると思つてゐた葉子にはそれが意外でもあり、當り前にも思へた。然しその瞬間には葉子は我れ知らずはつとなつた。たゞ通りすがりの人にでも見付けられまいとする心が先きに立つて、葉子は前後の辨へもなく、殆んど無意識に部屋に這入ると、同時にぱたんと音をさせて戸を閉めてしまつた。

もう凡ては後悔にはおそすぎた。岡の聲で今寢床から起き上つたらしい事務長は、荒い棒縞のネルの筒袖一枚を着たまゝで、眼のはれぼ

つたい顔をして、小山のやうな大きな五體を寢床にくねらして、突然這入つて來た葉子をぎつと見守つてゐた。疾うの昔に心の中は見透し切つてゐるやうな、それでゐて言葉も碌々交はさない程に無頓着に見える男の前に立つて、葉子はさすがに暫らくは云ひ出づべき言葉もなかつた。あせる氣をも押し鎮め〳〵顔色を動かさないだけの沈着を持ち續けようと勉めたが、今までに覺えない惑亂の爲めに、頭はぐら〳〵となつて、無意味だと自分でさへ思はれるやうな微笑を漏らす愚さをどうする事も出來なかつた。倉地は葉子がその朝その部屋に來るのを前からちやんと知り抜いてでもゐたやうに落ち付き拂つて、朝の挨拶もせずに、

「さ、おかけなさい。こゝが樂だ」

といつもの通りな少し見下ろした親しみのある言葉をかけて、晝間は長椅子代りに使ふ寢臺の座を少し譲つて待つてゐる。葉子は敵意を含んでさへ見える様子で立つたまゝ、

―何か御用がおありになるさうで御座いますが……―

聞くなりながら云つて、あゝ又見え透く事を云つてしまつたとすぐ後悔した。事務長は葉子の言葉を追ひかけるやうに、

―用は後で云ひます。まあおかけなさい」

と云つてすましてゐた。その言葉を聞くと、葉子はその云ひなり放題になるより仕方がなかつた。―お前は結局はこゝに坐るやうになるんだよ、と事務長は言葉の裏に未來を豫知し切つてゐるのが葉子の心を一種捨鉢なものにした。「坐つてやるものか」といふ習慣的な男に對する反抗心は唯譯もなくひしがれてゐた。葉子はつか〳〵と進みよつて事務長と押し竝んで寢臺に腰かけてしまつた。

この一つの擧動が――この何んでもない一つの擧動が急に葉子の心を輕くしてくれた。葉子はその瞬間に大急ぎで今まで失ひかけてゐたものを自分の方にたぐり戻した。而して事務長を流し眼に見やつて、一寸ほゝゑんだその微笑には、先刻の微笑の愚しさが潜んでゐないのを信ずる事が出來た。葉子の性格の深みから湧き出る怖ろしい自然さがまとまつた姿を現はし始めた。

―何御用でいらつしやいます―

そのわざとらしい造り聲の中にかすかな親しみをこめて見せた言葉も、肉感的に厚みを帶びた、それでゐて賢しげに締りのいゝ二つの脣にふさはしいものとなつてゐた。

―今日船が檢疫所に着くんです、今日の午後に。所が檢疫醫がこれなんだ―

事務長は朋輩にでも打ち明けるやうに、大きな食指を鍵形にまげて、たぐるやうな恰好をして見せた。葉子が一寸判じかねた顔付きをしてゐると、

「だから飲ましてやらんならんのですよ。それからポーカーにも負けてやらんならん。美人がゐれば拜ましてもやらんならん―

となほ手まねを續けながら、事務長は枕許においてある頑固なパイプを取り上げて、指の先きで灰を押しつけて、吸ひ殘りの煙草に火をつけた。

―船をさへ見ればさうした惡戲をしをるんだから、海坊主を見るやうな奴です。さういふと頭のいゝ、つるりとした水母じみた入道らしいが、實際は元氣のいゝ意氣な若い醫者でね。面白い奴だ一つ會つて御覧。私でからがあんな所に年中置かれればあゝなるわさ」

と云つて、右手に持つたパイプを膝頭に置き添へて、向き直つてまともに葉子を見た。然しその時葉子は倉地の言葉にはそれほど注意を拂つてはゐない様子を見せてゐた。丁度葉子の向側に在る事務卓の上に飾られた何枚かの寫

眞を物珍らしさうに眺めやつて、右手の指先きを輕く器用に動かしながら、煙草の煙が紫色に顏をかすめるのを拂つてゐた　自分を囮にまで使はうとする無禮もあなたなればこそ何んとも云はずにゐるのだといふ心を事務長もさすがに推したらしい。然しそれにも係はらず事務長は言ひ譯一つ云はず、一向平氣なもので、綺麗な飾り紙のついた金口煙草の小箱を手を延ばして棚から取り上げながら、

「どうです一本」

と葉子の前にさし出した。葉子は自分が煙草をのむかのまぬかの問題を彈き飛ばすやうに、

「あれはどなた？」

と寫眞の一つに眼を定めた。

「どれ」

「あれ」

葉子はさういつたまゝで指さしはしない。

「どれ」

と事務長はもう一度云つて、葉子の大きな眼をまじ〳〵と見入つてからその視線を辿つて、暫らく寫眞を見分けてゐたが、

「はあれか。あれはね私の妻子ですんだ。荊妻と豚兒共ですよ」

と云つて高々と笑ひかけたが、ふと笑ひやんで、險しい眼で葉子をちらつと見た。

「まあさう。ちやんと御寫眞をお飾りなすつて、おやさしら御座んすわね」

葉子はしんなりと立ち上つてその寫眞の前に行つた。物珍らしいものを見るといふ樣子をしてはゐたけれども、心の中には自分の敵がどんな獸物であるかを見極めてやるぞといふ激しい敵愾心が急に燃えあがつてゐた。前には藝者でもあつたのか、それとも良人の心を迎へる爲めにさう造つたのか、何處か玄人じみた綺麗な丸髷の女が着飾つて、三人の少女を膝に抱いたり側に立たせたりして寫つてゐた。葉子はそれを取り上げて孔の開くほどぢつと見やりながら卓の前に立つてゐた。ぎごちない沈默が暫らくそこに續いた。

「お葉さん」

（事務長は始めて葉子をその姓で呼ばずにかう呼びかけた）突然震へを帶びた、低い、重い聲が燒きつくやうに耳近く聞こえたと思ふと、葉子は倉地の大きな胸と太い腕とで身動きも出來ないやうに抱きすくめられてゐた。固より葉子はその朝倉地が野獸のやうな assault に出る事を直覺的に覺悟して、寧ろそれを期待して、その assault を、心ばかりでなく、肉體的な好奇心を以て待ち受けてゐたのだつたが、かくまで突然、何んの前觸れもなく起つて來ようとは思ひも設けなかつたので、女の本然の羞恥から起る貞操の防衞に驅られて、熱し切つたやうな冷え切つたやうな血を一時に體内に感じながら、抱へられたまゝ、侮蔑を極めた表情を二つの眼に集めて、倉地の顏を斜めに見返した。その冷やかな眼の光は假初めな男の心をたじろがす筈だつた。事務長の額は振り返つた葉子の顏に息氣のかゝる程の近さで、葉子を見入つてゐたが、葉子が與へた冷刻な眸には眼もくれぬまで狂はしく熱してゐた。（葉子の感情を最も強く煽り立てるものは寢床を離れた朝の男の顏だつた。一夜の休息に凡ての精氣を十分に回復した健康な男の容貌の中には、女の持つ總てのものを投げ入れても惜しくないと思ふ程の力が籠つてゐると葉子は始終感ずるのだつた）葉子は倉地に存分な輕侮の心持を見せつけながらも、その顏を鼻の先きに見ると、男性といふものの強烈な牽引の力を打ち込まれるやうに感ぜずにはゐられなかつた。息氣せはしく吐く男の溜息は霰のやうに葉子の顏を打つた。火と燃え上らんばかりに男の體からは desire の焔がぐん〳〵葉子の血脈にまで擴がつて行つ

た。葉子は我にもなく異常な興奮にふたゝび凄へ始めた。

＊　　　＊　　　＊

……と倉地の手で[illegible]葉子は[illegible]て落ちた[illegible]にへた〳〵とよろけながら、危く踏み止つて眼を開いた時、倉地が部屋の戸に鍵をかけようとしてゐる所だつた。鍵が合はないので、

「糞つ」

と後向きになつてつぶやく倉地の聲が最後の宣告のやうに絶望的に低く部屋の中に響いた。

倉地から離れた葉子は宛ら母から離れた赤子のやうに、總ての力が急に何處かに消えてしまふのを感じた。後に殘るものとては底のない、頼りない悲哀ばかりだつた。今まで味つて來た凡ての悲哀よりも更に殘酷な悲哀が、葉子の胸をかきむしつて襲つて來た。それは倉地のそこにゐるのすら忘れさす位だつた。葉子はいきなり寢床の上に丸まつて倒れた。而して俯伏しになつたまゝ痙攣的に激しく泣き出した。倉地がその泣き聲に一寸躊つて立つたまゝ見てゐる間に、葉子は心の中で叫びに叫んだ。

「殺すなら殺すがいゝ。殺されたつていゝ。殺されたつて憎みつゞけてやるからいゝ。私は勝つた。何んと云つても勝つた。こんなに悲しいのを何故早く殺してはくれないのだ。この哀しみにいつまでも浸つてゐたい。早く死んでしまひたい。」

一六

葉子は本當に死の間を彷ひ歩いたやうな不思議な、混亂した感情の狂ひに泥醉して、事務長の部屋から足許も定まらずに自分の船室に戻つて來たが、精も根も盡き果ててそのまゝソファの上に打ち倒された。眼の周りに薄黑い暈の出來たその顏は鈍い鉛色をして、瞳孔は光に對して調節の力を失つてゐた。輕く開いたまゝの唇から漏れる齒並みまでが、光なく、唯白く見やられて、死を聯想させるやうな醜い美しさが耳の附根まで漲つてゐた。雪解時の泉のやうに、あらん限りの感情が目まぐるしく湧き上つてゐたその胸には、底の方に暗い悲哀がこちんと澱んでゐるばかりだつた。

葉子はこんな不思議な心の狀態から逝れ出ようと、思ひ出したやうに頭を働かして見たが、その努力は心にもなく微かな果敢ないものだつた。そしてその不思議に混亂した心の狀態も言はば堪へ切れぬ程の切なさは持つてゐなかつた。葉子はそんなにしてぼんやりと眼を覺ましさうになつたり、意識の假睡に陷つたりした。猛烈な胃痙攣を起した患者が、モルヒネの注射を受けて、間斷的に起る痛みの爲めに無意識に顏をしかめながら、麻藥の恐ろしい力の下に、唯々昏々と奇怪な假睡に陷り込むやうに、葉子の心は無理無體な努力で時々驚いたやうに亂れさわぎながら、忽ち物凄い昏睡の淵深く落ちて行くのだつた。葉子の意志は如何に手を延ばしても、もう心の落ち行く深みには屆きかねた。頭の中は熱を持つて、唯ぼーと黄色く燻つてゐた。その黄色い眼の中を時々紅い火や青い火がちか〳〵と神經をうづかして驅け通つた。息氣づまるやうな今朝の光景や、過去のあらゆる回想が、入り亂れて現はれて來ても、葉子はそれに對して毛の末程も心を動かされはしなかつた。それは遠い〳〵木魂のやうに虛ろにかすかに響いては消えて行くばかりだつた。過去の自分と今の自分とのこれほどな恐ろしい距りを、葉子は恐れげもなく、成るがまゝに任せて置いて、重く澱んだ絶望的な悲哀に唯ゞ譯もなく何處までも引つ張られて行つた。その先きには暗い忘却が待ち設けてゐた。涙で重つた瞼は段々打ち開いたまゝの瞳を被つて行つた。

少し開いた唇の間からはらめくやうな輕い鼾が漏れ始めた。それを葉子はかすかに意識しながら、ソファの上に俯向きになつたまゝ、何時とはなしに夢もない深い眠りに陷つてゐた。

どの位眠つてゐたか分らない。突然葉子は心臓でも破裂しさうな驚きに打たれて、はつと眼を開いて頭を擧げた。づき／＼と頭の心が痛んで、部屋の中は火のやうに輝いて面も向けられなかつた。もう正午頃だなと氣が付く中にも、雷とも思はれる叫喚が船を震はして響き互つてゐた。葉子はこの瞬間の不思議に胸をどきつかせながら聞耳を立てた。船のをのゝきとも自分のをのゝきとも知れぬ震動が、葉子の五體を木の葉のやうに弄んだ。暫らくしてその叫喚がやゝ鎭まつたので、葉子はやうやく、横濱を出て以來絶えて用ゐられなかつた汽笛の聲である事を悟つた。檢疫所が近づいたのだなと思つて、襟元をかき合せながら、静かにソファの上に膝を立てて、眼窓から外面を覗いて見た。今朝までは雨雲に閉ぢられてゐた空も見違へるやうにからつと晴れ互つて、紺青の色は日の光の爲めに奥深く輝いてゐた。松が自然に美しく配置されて生え茂つた岩がかつた岸がすぐ眼の先きに見えて、海はいかにも入江らしく可憐な漣をつらね、その上を繪島丸は機關の動悸を打ちながら徐かに走つてゐた。幾日の荒々しい海路からこゝに來て見るとさすがにそこには人間の隱れ場らしい静かさがあつた。

岸の奥まつた所に白い壁の小さな家屋が見られた。その傍には英國の國旗が微風に煽られて青空の中に動いてゐた。「あれが檢疫官のゐる所なのだ」さう思つた意識の活動が始まるや否や、葉子の頭は始めて生れ代つたやうにはつきりとなつて行つた。而して頭がはつきりして來ると共に、今迄切り放されてゐた凡ての過去があるべき姿を取つて、明瞭に現在の葉子と結び付いた。葉子は過去の回想が今見たばかりの景色からでも來たやうに驚いて、急いで眼窓から顔を引つ込めて、強敵に襲ひかゝられた孤軍のやうに、たじろぎながら又ソファの上に臥し倒れた。頭の中は急に叢がり集まる考へを整理する爲めに激しく働き出した。葉子をひとりでに兩手で髪の毛の上から顳顬の所は押へた。而して少し上眼をつかつて鏡の方を見やりながら、今まで閉止してゐた亂想の寄せ來るまゝに機敏にそれを迭り迎へようと身構へた。

葉子は兎に角恐ろしい崕の際まで來てしまつた事を、而して殆んど無反省に、本能に引きずられるやうにして、その中に飛び込んだ事を思はない譯には行かなかつた。親類縁者に促されて、心にもない渡米を餘儀なくされた時に自分で選んだ道――兎も角木村と一緒にならう。而して生れ代つた積りで米國の社會に這入りこんで、自分が見付けあぐねてゐた自分といふものを、探り出して見よう。女といふものが日本とは違つて考へられてゐるらしい米國で、女としての自分がどんな位置に坐る事が出來るか試して見よう。自分はどうしても生るべきでない時代に、生るべきでない處に生れて來たのだ。自分の生るべき時代と處とはどこか別にある。そこでは自分は女王の座になほつても恥かしくない程の力を持つ事が出來る筈なのだ。生きてゐる中にそこを探し出したい。自分の周圍にまつはつて來ながらいつの間にか自分を裏切つて、何時どんな處にでも平氣で生きてゐられるやうになり果てた女達の鼻をあかさしてやらう。若い命を持つた中にそれだけの事を是非してやらう。木村は自分のこの心の企みを助ける事の出來る男ではないが、自分の後に跟いて來られない程の男でもあるまい。葉子はそんな事も思つてゐた。日清戰爭が起つた頃から

葉子位の年配の女が等しく感じ出した一種の不安、一種の幻滅――それを激しく感じた葉子は、謀叛人のやうに知らず識らず自分の周りの少女達に或る感情的な教唆を與へてゐたのだが、自分自身ですらがどうしてこの大事な瀬戸際を乘り抜けるのかは少しも解らなかつた。その頃の葉子は事毎に自分の境遇が氣に喰はないでたゞいら〳〵してゐた。その結果は唯ゞ思ふ儘に振舞つて行くより仕方がなかつた。自分はどんな物からも本當に訓練されてはゐないんだ。而して自分にはどうにでも働く鋭い才能と、女の強味（弱味とも云はば云へ）になるべき優れた肉體と激しい情緒とがあるのだ。さう葉子は知らず〳〵自分を見てゐた。そこから盲滅法に動いて行つた。殊に時代の不思議な目覺めを經驗した葉子に取つては恐ろしい敵は男だつた。葉子はその爲めに何度躓いたか知れない。然し世の中には本當に葉子を扶け起してくれる人がなかつた。――私が惡ければ直すだけの事をして見せて御覽――葉子は世の中に向いてかう云ひ放つてやりたかつた。女を全く奴隷の境界に沈め果てた男はもう昔のアダムのやうに正直ではないんだ。女がぢつとしてゐる間は屈從にして見せるが、女が少しでも自分で立ち上らうとすると、打つて變つて恐ろしい暴王になり上るのだ。女までがおめ〳〵と男の手傳ひをしてゐる。葉子は女學校時代にしたゝかその苦い杯を嘗めさせられた。而して十八の時木部孤笻に對して、最初の戀愛らしい戀愛の情を傾けた時、葉子の心はもう處女の心ではなくなつてゐた。外界の壓迫に反抗するばかりに、一時火のやうに何物をも燒き盡して燃え上つた假初めの熱情は、壓迫のゆるむと共に脆くも萎えてしまつて、葉子は冷靜な批評家らしく自分の戀と戀の相手とを見た。どうして失望しないでゐられよう。自分の一生がこの人に縛りつけられて萎びて行くのかと思ふ時、又色色な男に弄ばれかけて、却つて男の心といふものを裏返してとつくりと見極めたその心が、木部といふ、いゝ空想の上でこそ勇氣も生彩もあれ、實生活に於ては見下げ果てた程貧弱で簡單な一書生の心と強ひて結びつかねばならぬと思つた時、葉子は身震ひする程失望して木部と別れてしまつたのだ。

葉子の嘗めた凡ての經驗は、男に束縛を受ける危險を思はせるものばかりだつた。然し何んといふ自然の惡戯だらう。それと共に葉子は男といふものなしには一刻も過ごされないものとなつてゐた。砒石の用法を謬つた患者が、その毒の恐ろしさを知りぬきながら、その力を借りなければ生きて行けないやうに、葉子は生の喜びの源を、まかり違へば生そのものを蝕むべき男といふものに求めずにはゐられないディレンマに陷つてしまつたのだ。

肉慾の牙を鳴らして集まつて來る男達に對して、（さう云ふ男達が集まつて來るのは本當は葉子自身がふり撒く香ひの爲めだとは氣付いてゐて）葉子は冷笑しながら蜘蛛のやうに網を張つた。近づくものは一人殘らずその美しい四手網にからめ取つた。葉子の心は知らず〳〵殘忍になつてゐた。唯ゞあの妖力ある女郎蜘蛛のやうに、生きてゐたい要求から毎日その美しい網を四つ手に張つた。而してそれに近づきもし得ないで罵り騷ぐ人達を、自分の生活とは關係のない木か石ででもあるやうに冷然と尻眼にかけた。

葉子は本當を云ふと、必要に從ふといふ外に何をすればいゝのか分らなかつた。

葉子に取つては、葉子の心持を少しも理解してゐない社會ほど愚かしげな醜いものはなかつた。葉子の眼から見た親類といふ一群れは唯ゞ貪慾な賤民としか思へなかつた。父は憐れむべ

く影の薄い一人の男性に過ぎなかつた。母は一―母は一番葉子の身近かにゐたと云つてい丶。それだけ葉子は母と兩立し得ない仇敵のやうな感じを持つた。母は新らしい型にわが子を取り入れる事を心得てはゐたが、それを取扱ふ術は知らなかつた。葉子の性格が母の備へた型の中で驚くほどずる／＼と生長した時に、母は自分以上の法力を憎む魔女のやうに葉子の行く道に立ちはだかつた。その結果二人の間には第三者から想像も出來ないやうな反目と衝突とが續いたのだつた。葉子の性格はこの暗闘のお蔭で曲折の面白さと醜さとを加へた。然し何んと云つても母は母だつた。正面からは葉子のする事爲す事に批難を打ちながらも、心の底で一番よく葉子を理解してくれたに違ひないと思ふと、葉子は母に對して不思議ななつかしみを覺えるのだつた。

　母が死んでからは、葉子は全く孤獨である事を深く感じた。而して始終張りつめた心持と、失望から湧き出る快活さとで、鳥が木から木に果實を探るやうに、人から人に歡樂を求めて歩いたが、何處からともなく不意に襲つて來る不安は葉子を底知れぬ悒鬱の沼に蹴落した。自分は荒磯に一本流れよつた流木ではない。然しその流木よりも自分は孤獨だ。自分は一ひら風に散つて行く枯葉ではない。然しその枯葉より自分はうら淋しい。こんな生活より外にする生活はないのか知らん。一體何處に自分の生活をぢつと見てゐてくれる人があるのだらう。さう葉子はしみ／＼思ふ事がないでもなかつた。けれどもその結果はいつでも失敗だつた。葉子はかうした淋しさに促されて、乳母の家を尋ねたり、突然大塚の内田に遇ひに行つたりして見るが、そこを出て來る時には唯〻一入の心の空しさが殘るばかりだつた。葉子は思ひ餘つて又婬らな滿足を求める爲めに男の中に割つて這入るのだつた。然し男が葉子の眼の前で弱味を見せた瞬間に、葉子は驕慢な女王のやうに、その捕虜から面を背けて、その出來事を惡夢のやうに忌み嫌つた。冒險の獲物はきまりきつて取るにも足らないやくざものである事を葉子はしみじみ思はされた。

　こんな絶望的な不安に攻めさいなめられながらも、その不安に驅り立てられて葉子は木村といふ降參人を兎も角その良人に選んで見た。葉子は自分が何んとかして木村にそりを合せる努力をしたならば、一生涯木村と連れ添つて、普通の夫婦のやうな生活が出來ないものでもないと一時思ふまでになつてゐた。然しそんないゝつぎはぎな考へ方が、どうしていつまでも葉子の心の底を蝕む不安を醫す事が出來よう。葉子が氣を落ち付けて、米國に着いてからの生活を考へて見ると、かうあつてこそと思ひ込むやうな生活には、木村は除け物になるか、邪魔者になる外はないやうにも思へた。木村と暮さう、さう決心して船に乘つたのではあつたけれども、葉子の氣分は始終ぐらつき通しにぐらついてゐたのだ。手足のちぎれた人形を玩具箱に仕舞つたものか、いつそ捨ててしまつたものかと躊躇する少女の心に似たぞんざいな躊ひを葉子はいつまでも持ち續けてゐた。

　さういふ時突然葉子の前に現はれたのが倉地事務長だつた。横濱の棧橋に繋がれた繪島丸の甲板の上で、始めて猛獸のやうなこの男を見た時から、稻妻のやうに鋭く葉子はこの男の優越を感受した。世が世ならば、倉地は小さな汽船の事務長なんぞをしてゐる男ではない。自分と同樣に間違つて境遇づけられて生れ來た人間なのだ。葉子は自分の身につまされて倉地を憐れみもし畏れもした。今まで誰れの前に出ても平氣で自分の思ふ存分を振舞つてゐた葉子は、この男の前では思はず知らず心にもない

矯飾を自分の性格の上にまで加へた。事務長の前では、葉子は不思議にも自分の思つてゐるのと丁度反對の動作をしてゐた。無條件的な服從といふ事も事務長に對してだけは唯々望ましい事にばかり思へた。この人に思ふ存分打ちのめされたら自分の命は始めて本當に燃え上るのだ。こんな不思議な、葉子にはあり得ない慾望すらが少しも不思議でなく受け入れられた。その癖表面では事務長の存在をすら氣が附かないやうに振舞つた。殊に葉子の心を深く傷けたのは、事務長の物懶げな無關心な態度だつた。葉子がどれ程人の心を牽きつける事を云つた時でも、した時でも、事務長は冷然として見向かうともしなかつた事だ。さういふ態度に出られると、葉子は、自分の事は棚に上げておいて、激しく事務長を憎んだ。この憎しみの心が日一日と募つて行くのを非常に恐れたけれども、どうしやうもなかつたのだ。

然し葉子はとう／＼今朝の出來事に打つ突かつてしまつた。葉子は恐ろしい崕の際から滅茶苦茶に飛び込んでしまつた。葉子の眼の前で今まで住んでゐた世界はがらつと變つてしまつた。木村がどうした。米國がどうした。養つて行かなければならない妹や定子がどうした。今まで葉子を襲ひ續けてゐた不安はどうした。人に犯されまいと身構へてゐたその自尊心はどうした。そんなものは木葉微塵に無くなつてしまつてゐた。倉地を得たらばどんな事でもする。どんな屈辱でも蜜と思はう。倉地を自分獨りに得さへすれば……。今まで知らなかつた、捕虜の受くる蜜より甘い屈辱！

葉子の心はこんなに順序立つてゐた譯ではない。然し葉子は兩手で頭を押へて鏡を見入りながらこんな心持を果てしもなく嚙みしめた。而して追想は多くの迷路を辿りぬいた末に、不思議な假睡狀態に陷る前まで進んで來た。葉子はソファを牝鹿のやうに立ち上つて、過去と未來とを斷ち切つた現在刹那の眩むばかりな變身に打ちふるひながら微笑んだ。

その時ノックもせずに事務長が這入つて來た。葉子の啻ならぬ姿には頓着なく、

「もうすぐ檢疫官がやつて來るから、さつきの約束を賴みますよ。資本入らずで大役が勤まるんだ。女といふものはいゝものだな。や、然しあなたのは大分資本がかゝつとるでせうね。……賴みますよ」

と戲談らしく云つた。

「はあ」

葉子は何んの苦もなく親しみの限りをこめた返事をした。その一と聲の中には自分でも驚く程な蠱惑の力が籠められてゐた。

事務長が出て行くと、葉子は子供のやうに足なみ輕く小さな船室の中を小跳りして飛び廻つた。而して飛び廻りながら、髮をほごしにかゝつて、時々鏡に映る自分の顏を見やりながら、堪らへ切れないやうに竊み笑ひをした。

十七

事務長のさしがねはうまい坪にはまつた。檢疫官は繪島丸の檢疫事務をいゝ加減にすつかり年老つた次位の醫官に任せてしまつて、自分は船長室で船長、事務長、葉子を相手に、話に花を咲かせながらトランプを弄り通した。あたり前ならば、何んとか彼とか必ず苦情の持ち上るべき英國風の小やかましい檢疫もあつさり濟んで、放蕩者らしい血氣盛りな檢疫官は、船に來てから二時間そこ／＼で機嫌よく歸つて行く事になつた。

停るともなく進行を止めてゐた繪島丸は風のまに／＼少しづつ方向を變へながら、二人の醫官を乘せて行くモーター。ボートが舷側を離れるのを待つてゐた。折り目正しい長めな紺の背

服を着た檢疫官がボートの舵座に立ち上つて、手欄から葉子と一緒に胸から上を乘り出した船長となほ戯談を取り交した。船梯子の下まで醫官を見送つた事務長は、物慣れた樣子でポッケットからいくらかを水夫の手に摑ませておいて、上を向いて合圖をすると、船梯子はきりきりと水平に捲き上げられて行く、それを事もなげに身輕く駈け上つて來た。檢疫官の眼は事務長への挨拶もそこ／＼に、思ひ切り派手な裝ひを凝らした葉子の方に吸ひ付けられるらしかつた。葉子はその眼を迎へて情をこめた流眄を送りかへした。檢疫官がその忙がしい間にも何かしきりに物を云はうとした時、けたゝましい汽笛が一抹の白煙を青空に揚げて鳴りはためき、船尾からはすさまじい推進機の震動が起り始めた。この慌たゞしい船の別れを惜むやうに、檢疫官は帽子を取つて振り動かしながら、噪音にもみ消される言葉を續けてゐたが、固より葉子にはそれは聞こえなかつた。葉子はたゞにこ／＼と微笑みながら點頭いて見せた。而して唯ゝ一時の悪戯心から髪に挿してゐた小さな造花を投げてやると、それがあはよく檢疫官の肩に中つて足許に辷り落ちた。檢疫官が片手に舵綱を操りながら、有頂天になつてそれを拾はうとするのを見ると、船舷に立ちならんで物珍らしげに陸地を見物してゐたステヤレーヂの男女の客は一齊に手をたゝいてどよめいた。葉子はあたりを見廻した。西洋の婦人達は等しく葉子を見やつて、その花々しい服裝から、輕率らしい擧動を苦々しく思ふらしい顏付きをしてゐた。それらの外國人の中には田川夫人も交つてゐた。

　檢疫官は絹島丸が殘して行つた白沫の中で、腰をふらつかせながら、笑ひ興ずる群集にまで幾度も頭を下げた。群集は又思ひ出したやうに漫罵を放つて笑ひどよめいた。それを聞くと日本語のよく解る白髪の船長は、いつものやうに顏を赤くして、氣の毒さうに恥かしげな眼を葉子に送つたが、葉子がはしたない群集の言葉にも、苦しげな船客の顏色にも、少しも頓着しない風で、微笑み續けながらモーター・ボートの方を見守つてゐるのを見ると、未通女らしく更に眞赤になつてその場を外づしてしまつた。

　葉子は何事も屈託なく唯ゝ面白かつた。體中を擽るやうな生の歡びから、やゝもすると何んでもなく微笑が自然に浮び出ようとした。「今朝から私はこんなに生れ代りました御覽なさい」といつて誰れにでも自分の喜びを披露したいやうな氣分になつてゐた。檢疫官の官舍の白い壁も、その方に向つて走つて行くモーター・ボートも見る／＼遠ざかつて小さな箱庭のやうになつた時、葉子は船長室での今日の思ひ出し笑ひをしながら、手欄を離れて心あてに事務長を眼で尋ねた。と、事務長は、遙か離れた船艙の出口に田川夫妻と鼎になつて、何かむづかしい顏をしながら立ち話をしてゐた。いつもの葉子ならば三人の樣子で何事が語られてゐるか位はすぐ見て取るのだが、その日は唯ゝ浮浮した無邪氣な心ばかりが先きに立つて、誰れにでも好意のある言葉をかけて、同じ言葉で酬いられたい衝動に驅られながら、何んの氣なしにそつちに足を向けようとして、ふと氣がつくと、事務長が「來てはいけない」と激しく眼に物を言はせてゐるのが覺れた。氣が付いてよく見ると、田川夫人の額にはまがふかたなき惡意がひらめいてゐた。

「又おせつかいだな」

一秒の躊躇もなく男のやうな口調で葉子はかう小さくつぶやいた。「構ふものか」さう思ひながら葉子は事務長の眼使ひにも無頓着に、快活な足どりでいそ／＼と田川夫妻の方に近づいて行つた。それを事務長もどうすること

も出來なかつた。葉子は三人の前に來ると輕く腰をまげて後れ毛をかき上げながら顏中を蠱惑的な微笑みにして挨拶した。田川博士の頰には逸早くそれに應ずる物やさしい表情が浮ばうとしてゐた。

「あなたは隨分な亂暴をなさる方ですのね—

いきなり震へを帶びた冷やかな言葉が田川夫人から葉子に容赦もなく放げつけられた。それは底意地の惡い挑戰的な調子で震へてゐた。田川博士はこの咄嗟の氣まづい場面を繕ふ爲め何か言葉を入れてその不愉快な緊張をゆるめようとするらしかつたが、夫人の惡意はせき立つて募るばかりだつた。然し夫人は口に出してはもう何んにも云はなかつた。

女の間に起る不思議な心と心との交渉から、葉子は何んといふ事なく、事務長と自分との間に今朝起つたばかりの出來事を、輪郭だけではあるとしても田川夫人が感付いてゐるなと直覺した。唯々一言ではあつたけれども、それには檢疫官とトランプを弄つた事を責めるだけにしては、激し過ぎ、惡意が罩められ過ぎてゐることを直覺した。今の激しい言葉は、その事を深く根に持ちながら、檢疫醫に對する不謹愼な態度をたしなめる言葉のやうにして使はれてゐるのを直覺した。葉子の心の隅から隅まで、溜飮の下るやうな小氣味よさが小躍りしつゝ走せめぐつた。葉子は何をそんなに事々しくたしなめられる事があるのだらうといふやうな少ししやあ〳〵した無邪氣な顏付きで、首をかしげながら夫人を見守つた。

「航海中は兎に角私葉子さんのお世話をお頼まれ申してゐるんですからね—

初めはしとやかに落ち付いて云ふ積りらしかつたが、それが段々激して途切れ勝ちな言葉になつて、夫人は仕舞には激動から息氣をさへはずませてゐた。その瞬間に火のやうな夫人の瞳と、皮肉に落ち付き拂つた葉子の瞳とが、ぱつたり出喰して小ぜり合ひをしたが、又同時に蹴返すやうに離れて事務長の方に振り向けられた。

「御尤もです—

事務長は蛇に當惑した熊のやうな顏付きで、柄にもない謹愼を裝ひながらから受け答へた。それから突然本氣な表情に返つて、

「私も事務長であつて見れば、どのお客樣に對しても責任があるのだで、御迷惑になるやうな事はせん積りですが—

こゝで彼れは急に假面を取り去つたやうににこし出した。

「さう無氣になる程の事でもないぢやありませんか。高が早月さんに一度か二度愛嬌を云うていたゞいて、それで檢疫の時間が二時間から遊ふのですもの、いつでもこゝで四時間の以上無駄をせにやならんのですて—

田川夫人が益々せき込んで、矢繼早にまくしかけようとするのを、事務長は事もなげに輕々とおつかぶせて、

「それにしてからがお話は如何です部屋で伺ひませうか。外のお客樣の手前もいかゞです。博士、例の通り狹つこい所ですが、甲板ではゆつくりも出來ませんで、あそこでお茶でも入れませう。早月さんあなたも如何です」

と笑ひ〳〵云つてからくるりつと葉子の方に向き直つて、田川夫妻には氣が付かないやうな頓狂な顏を一寸して見せた。

橫濱で倉地の後に續いて船室への階子段を下る時始めて嗅ぎ覺えたウヰスキーと葉卷とのまじり合つたやうな甘たるい一種の香が、この時闇かに葉子の鼻をかすめたと思つた。それを嗅ぐと葉子は情熱のほむらが一時に煽り立てられて、人間では考へられもせぬやうな思ひが、旋風の如く頭の中をこそいで通るのを覺えた。

男にはそれがどんな印象を與へたかを顧みる暇もなく、田川夫妻の前といふことも憚らずに、自分では醜いに違ひないと思ふやうな微笑が、覺えず葉子の眉の間に浮び上つた。事務長は又小むづかしい顏になつて振り返りながら、

「いかゞです」

ともう一度田川夫妻を促した。然し田川博士は自分の妻の大人げないのを憐れむ物わかりのいい紳士といふ態度を見せて、體よく事務長にことわりを云つて、夫人と一緒にそこを立ち去つた。

「一寸いらつしやい」

田川夫妻の姿が見えなくなると、事務長は碌々葉子を見むきもしないでかう云ひながら先きに立つた。葉子は小娘のやうにいそ〳〵とその後について、薄暗い階子段にかゝると男におぶひかゝるやうにして小ぜはしく降りて行つた。而して機關室と船員室との間にある例の暗い廊下を通うて、事務長が自分の部屋の戸を開けた時、ぱつと明るくなつた白い光の中に、méchant な diabolic な男の姿を今更のやうに一種の畏れとなつかしさとを罩めて打ち眺めた。

部屋に這入ると事務長は、田川夫人の言葉でも思ひ出したらしく面倒くささうに吐息一つして、帳簿を事務卓の上に抛りなげておいて、又戸から頭だけつき出して、「ボーイ」と大きな聲で呼び立てた。而して戸を閉めきると、始めていゝまともに葉子に向きなほつた。而して腹をゆすり上げて續けさまに思ふ存分笑つてから、

「え」

と大きな聲で、半分は物でも尋ねるやうに、半分は「どうだい」と云つたやうな調子で云つて、脚を開いて akimbo をして突つ立ちながら、ちよいと無邪氣に首をかしげて見せた。

そこにボーイが戸の後ろから顏だけ出した。

「シャンペンだ。船長の所にバーから持つて來さしたのが二三本殘つてるよ。十の字三つぞ(大至急といふ軍隊用語)。……何がをかしいかい」

事務長は葉子の方を向いたまゝから云つたのであるが、實際その時ボーイは意味ありげににやにや薄笑ひをしてゐた。

餘りに事もなげな倉地の樣子を見てゐると葉子は自分の心の切なさに比べて、男の心を恨めしいものに思はずにゐられなくなつた。今朝の記憶のまだ生々しい部屋の中を見るにつけても、激しく高ぶつて來る情熱が妙にこぢれて、ゐても立つてもゐられないもどかしさが苦しく胸に逼るのだつた。今までは丸きり眼中になかつた田川夫人も、三等の女客の中で、處女とも妻ともつかぬ二人の二十女も、果ては事務長にまつはりつくあの小娘のやうな岡までが、寫眞で見た事務長の細君と一緒になつて、苦しい敵意を葉子の心に煽り立てた。ボーイにまで笑ひものにされて、男の皮を着たこの好色の野獸のなぶりものにされてゐるのではないか。自分の身も心も唯〻一と息にひしぎ潰すかと見えるあの恐ろし力は、自分を征服すると共に凡ての女に對しても同じ力で働くのではないか。その澤山の女の中の影の薄い一人の女として彼れは自分を扱つてゐるのでないか。自分には何物にも代へ難く思はれる今朝の出來事があつた後でも、あゝ平氣でゐられるその暢氣さはどうしたものだらう。葉子は物心がついてから始終自分でも言ひ現はす事の出來ない何物かを逐ひ求めてゐた。その何物かは葉子のすぐ手近にありながら、いゝ、しつかりと掴む事は何うしても出來ず、その癖いつでもその力の下に傀儡のやうに的もなく動かされてゐた。葉子は今朝の出來事以來何んとなく思ひ昂つてゐたのだ。それはその何物かが朧ろげながら形

を取つて手に觸れたやうに思つたからだ。然しそれも今から思へば幻影に過ぎないらしくもある。自分に特別な注意も拂つてゐなかつたこの男の出來心に對して、こつちから進んで情をそゝるやうな事をした自分は何んといふ事をしたのだらう。どうしたらこの取り返しのつかない自分の破滅を救ふ事が出來るのだらうと思つて來ると、一秒でもこの忌はしい記憶のさまよふ部屋の中にはゐたゝまれないやうに思へ出した。然し同時に事務長は斷ちがたい執着となつて葉子の胸の底にこびりついてゐた。この部屋をこのまゝで出て行くのは死ぬよりもつらい事だつた。何うしてもはつきりと事務長の心を握るまでは……葉子は自分の心の矛盾に業を煮やしながら、自分を蔑すみ果てたやうな絕望的な怒りの色を脣のあたりに宿して、默つたまゝ陰鬱に立つてゐた。今までそは〳〵と小魔のやうな葉子の心を廻り躍つてゐた華やかな喜び——それは何處に行つてしまつたのだらう。

事務長はそれに氣附いたのか氣が附かないのか、やがて倚りかゝりのない圓い事務椅に尻をすゑて、子供のやうな罪のない顏をしながら、葉子を見て輕く笑つてゐた。葉子はその顏を見て、恐ろしい大膽な惡事を赤兒同樣の無邪氣さで犯し得る質の男だと思つた。葉子はこんな無自覺な狀態にはとてもなつてゐられなかつた。一と足づつ先きを越されてゐるのか知らんといふ不安までが心の平衡をさらに狂はした。

「田川博士は馬鹿馬鹿で、田川の奧さんは悧口馬鹿と云ふんだ。はゝゝゝ」

さう云つて笑つて、事務長は膝頭をはつしと打つた手をかへして、机の上にある葉卷をつまんだ。葉子は笑ふよりも腹立たしく、腹立たしいよりも泣きたい位になつてゐた。脣をぶるぶると震はしながら淚でも溜つたやうに輝く眼は劍を持つて、恨みをこめて事務長を見入つたが、事務長は無頓着に下を向いにまゝ、一心に葉卷に火をつけてゐる。葉子は胸に抑へあまる恨みつらみを云ひ出すには、心があまりに昂へて喉が乾き切つてゐるので、下脣を嚙みしめたまゝ默つてゐた。

倉地はそれを感付いてゐるのだのにと葉子は置きざりにされたやうなやり所のない淋しさを感じてゐた。

ボーイがシャンペンと酒盃とを持つて這入つて來た。而して丁寧にそれを事務卓の上に置いて、先刻のやうに意味ありげな微笑を漏らしながら、そつと葉子を竊み見た。待ち構へてゐた葉子の眼は然しボーイを笑はしてはおかなかつた。ボーイはぎよつとして飛んでもない事をしたといふ風に、すぐ愼み深い給仕らしく、そこ〳〵に部屋を出て行つた。

事務長は葉卷の煙に顏をしかめながら、シャンペンをついで盆を葉子の方にさし出した。葉子は默つて立つたまゝ手を延ばした。何をするにも心にもない作り事をしてゐるやうだつた。この短い瞬間に今までの出來事でいゝ加減亂れてゐた心は、身の破滅がとう〳〵來てしまつたのだといふ懼ろしい豫想に押しひしがれて、頭は氷で捲かれたやうに冷たく氣うとくなつた。胸から喉元につきあげて來る冷たい而して熱い球のやうなものを雄々しく飮み込んでも飮み込んでも淚が動ともすると眼頭を熱く潤ほして來た。薄手の酒盃に泡を立てて盛られた黃金色の酒は葉子の手の中で細かい漣を立てた。葉子はそれを氣取られまいと、强ひて左の手を輕くあげて鬢の毛をかき上げながら、洋盃を事務長のと打ち合せたが、それをきつかけに願でもほどけたやうに今まで辛く持ちこたへてゐた自制は根こそぎ崩れてしまつた。

事務長が洋盃を器用に脣にあてて、仰向き

加減に飲み干す間、葉子は盃を手に持つたまゝ、ぐびり〳〵と動く男の喉を見つめてゐたが、いきなり自分の盃を飲まないまゝ盆の上にかへして、

—よくもあなたはそんなに平氣でいらつしやるのね—

と力を罩めるつもりで云つたその聲はいくぢなくも泣かんばかりに震へてゐた。而して堰を切つたやうに涙が流れ出ようとするのを絲切齒で嚙みきるばかりに强ひて喰ひとめた。

事務長は驚いたらしかつた。眼を大きくして何か云はうとする中に、葉子の舌は自分でも思ひ設けなかつた情熱を帶びて震へながら動いてゐた。

—知つてゐます、知つてゐますとも……。あなたはほんとに……ひどい方ですのね。私何んにも知らないと思つてらつしやるの。えゝ、私は存じません、存じません、ほんとに……—

何を云ふ積りなのか自分でも分らなかつた。唯ゞ激しい嫉妬が頭をぐら〳〵させるばかりに高じて來るのを知つてゐた。男が或る機會には手傷も負はないで自分から離れて行く……さういふ忌々しい豫想で取り亂されてゐた。葉子は生來こんな慘めな眞暗な思ひに捕へられた事がなかつた。それは生命が見す〳〵自分から離れて行くのを見守る程慘めで眞暗だつた。この人を自分から離れさす位なら殺して見せる、さう葉子は咄嗟に思ひつめて見たりした。

葉子はもう我慢にもそこに立つてゐられなくなつた。事務長に倒れかゝりたい衝動を強ひてぢつと堪らへながら綺麗に整へられた寢臺にやうやく腰を下ろした。美妙な曲線を長く描いて長閑に開いた眉根は痛ましく眉間に集まつて、急に痩せたかと思ふ程細つた鼻筋は恐ろしく感傷的な痛々しさをその顔に與へた。いつになく若々しく裝つた服裝までが、皮肉な反語のやうに小股の切れあがつた痩せ形なその肉を痛ましく虐げた。長い袖の下で兩手の指を折れよとばかり組み合せて、何もかも裂いて捨てたいヒステリックな衝動を懸命に抑へながら、葉子は唾も飲みこめない程狂ほしくなつてしまつてゐた。

事務長は偶然に不思議を見つけた子供のやうな好奇な惘れた顔付きをして、葉子の姿を見やつてゐたが、片方のスリッパを脱ぎ落したその白足袋の足許から、やゝ亂れた束髪までをしげしげと見上げながら、

—どうしたんです—

と詰る如く聞いた。葉子はひつたくるやうにいゝさそくに返事をしようとしたけれども、何うしてもそれが出來なかつた。倉地はその樣子を見ると今度は眞面目になつた。而して目の前まで持つて行つた葉卷をそのまゝトレイの上に置いて立ち上りながら、

「どうしたんです」

ともう一度聞きなほした。それと同時に、葉子も思ひきり冷刻に、

—どうもしやしません—

といふ事が出來た。二人の言葉がもつれ返つたやうに、二人の不思議な感情ももつれ合つた。もうこんな所にはゐない、葉子はこの上の壓迫には堪へられなくなつて、華やかな裾を蹴亂しながら、驀地に戸口の方に走り出ようとした。事務長はその瞬間に葉子のなよやかな肩を遮りとめた。葉子は遮られて是非なく事務卓の側に立ちすくんだが、誇りも恥も弱さも忘れてしまつてゐた。どうにでもなれ、殺すか死ぬかするのだ、そんな事を思ふばかりだつた。こらへにこらへてゐた涙を流れるに任せながら、事務長の大きな手を肩に感じたまゝで、しやくり上げて恨めしさうに立つてゐたが、手近に飾つてある事務長の家族の寫眞を見ると、かつと氣

がのぼせて前後の辨へもなく、それを引つたくると共に兩手にあらん限りの力を罩めて、人殺しでもするやうな氣負ひでずた／＼に引き裂いた。而して揉みくたになつた寫眞の屑を男の胸も透れと投げつけると、寫眞の中つたその所に噛みつきもしかねまじき狂亂の姿となつて退いて兩手を伸ばして走りよる葉子をせき止めようとしたが、葉子は我れにもなく我武者にすり入つて、男の胸に顏を伏せた。而して兩手で肩の服地を爪も立てよと掴みながら、暫らく齒を喰ひしばつて震へてゐる中に、それが段々すすり泣きに變つて行つて、仕舞にはさめ／＼と聲を立てて泣きはじめた。而して暫らくは葉子の絶望的な泣き聲ばかりが部屋の中の靜かさをかき亂して響いた。

突然葉子は倉地の手を自分の背中に感じて、電氣にでも觸れたやうに驚いて飛び退いた。倉地に泣きながらすがり付いた葉子が倉地からどんなものを受取らねばならぬかは知れ切つてゐたのに、優しい言葉でもかけて貰へるかの如く縋つた自分の矛盾に憫れて、恐ろしさに兩手で顏を蔽ひながら部屋の隅に退つて行つた。倉地にすぐ近寄つて來た。葉子は猫に見込まれた金絲鳥のやうに身悶えしながら部屋の中を逃げにかゝつたが、事務長は手もなく追ひすがつて、葉子の二の腕を捕へて、力まかせに引き寄せた。葉子も本氣に有らん限りの力を出してさからつた。然しその時の倉地はもう普段の倉地ではなくなつてゐた。今朝寫眞を見てゐた時、後ろから葉子を抱きしめたその倉地が目ざめてゐた。怒つた野獸に見る狂暴な、防ぎやうのない力が嵐のやうに男の五體をさいなむらしく倉地はその力の下に呻きもがきながら、葉子に驀地に掴みかゝつた。

「又俺れを馬鹿にしやがるな」

といふ言葉が喰ひしばつた齒の間から雷のやうに葉子の耳を打つた。

あゝこの言葉――このむき出しな有頂天な興奮した言葉こそ葉子が男の口から確かに聞かうと待ち設けた言葉だつたのだ。葉子は亂暴な抱擁の中にそれを聞くと共に、心の隅に輕い餘裕の出來たのを感じて自分といふものが何處かの隅に頭を擡げかけたのを覺えた。倉地の取つた態度に對して作爲のある應對が出來さうにさへなつた。葉子は前通りにすゝり泣きを續けてはゐたが、その涙の中にはもう僞りの滴すら交つてゐた。

「いやです放して」

から云つた言葉も葉子にはどこか戯曲的な不自然な言葉だつた。然し倉地は反對に葉子の一語一語に醉ひしれて見えた。

「誰れが離すか」

事務長の言葉はみじめにもかすれ戰いてゐた。葉子はどん／＼失つた所を取り返して行くやうに思つた。その癖その態度は反對に益ゝ頼りなげなやる瀨ないものになつてゐた。倉地の廣い胸と太い腕との間に羽がひに抱きしめられながら、小鳥のやうにぶる／＼と震へて、

「本當に離して下さいまし」

「いやだよ」

葉子は倉地の接吻を右に左によけながら、更に激しく啜り泣いた。倉地は致命傷を受けた獸のやうに呻いた。その腕には惡魔のやうな血の流れるのが葉子にも感ぜられた。葉子は程を見計つてゐた。而して男の張りつめた情慾の絲が絶ち切れんばかりに緊張した時、葉子はふと泣きやんできつと倉地の顏を振り仰いだ。その眼からは倉地が思ひもかけなかつた鋭い強い光が放たれてゐた。

「本當に放していたゞきます」

ときつぱり云つて、葉子は機敏に一寸ゆるんだ

倉地の手をすりぬけた。而して逸早く部屋を横筋かひに戸口まで逃げのびて、ハンドルに手をかけながら、

「あなたは今朝この戸に鍵をおかけになつて、……それは手籠めです。……私……」

と云つて少し情に激して俯向いて又何か云ひ續けようとするらしかつたが、突然戸を開けて出て行つてしまつた。

取り殘された倉地は惘れて暫らく立つてゐるやうだつたが、やがて英語で亂暴な呪詛を口走りながら、いきなり部屋を出て葉子の後を追つて來た。而して間もなく葉子の部屋の戸の所に來てノックした。葉子は鍵をかけたまゝ默つて答へないでゐた。事務長はなほ二三度ノックを續けてゐたが、いきなり何か大聲で物を云ひながら船醫の興錄の部屋に這入るのが聞こえた。

葉子は興錄が事務長のさしがねで何んとか云ひに來るだらうと竊かに心待ちにしてゐた。所が何んとも云つて來ないばかりか、船醫室からは時々あたりを憚らない高笑ひさへ聞こえて、事務長は容易にその部屋を出て行きさうな氣配もなかつた。葉子は興奮に燃え立ついらいらした心でそこにゐる事務長の姿を色々に想像してゐた。外の事は一つも頭の中には這入つて來なかつた。而してつく〴〵自分の心の變りかたの激しさに驚かずにはゐられなかつた。

「定子！　定子！」葉子は隣りにゐる人を呼び出すやうな氣で小さな聲を出して見た。その最愛の名を聲にまで出して見ても、その響きの中には忘れてゐた夢を思ひ出した程の反應もなかつた。どうすれば人の心といふものはこんなにまで變り果てるものだらう。葉子は定子を憐れむよりも、自分の心を憐れむ爲めに涙ぐんでしまつた。而して何んの氣なしに小卓の前に腰をかけて、大切なものの中にしまつておいた、その頃日本では珍らしいファウンテン・ペンを取り出して、筆の動くまゝにそこにあつた紙きれに字を書いて見た。

「女の弱き心につけ入り給ふはあまりに酷き御心と唯恨めしく存候妾の運命はこの船に結ばれたる奇しきえにしや候ひけん心がらとは申せ今は過去の凡て未來の凡てを打捨てて唯眼の前の恥かしき思ひに漂ふばかりなる根なし草の身となり果候を事もなげに見やり給ふが恨めしく〳〵

死」

と何んの工夫もなく、よく意味も解らないで一瀉千里に書き流して來たが、「死」といふ字に來ると、葉子はペンも折れよといら〳〵しくその上を塗り消した。思ひのまゝを事務長に云つてやるのは、思ひ存分自分を弄べと云つてやるのと同じ事だつた。葉子は怒りに任せて餘白を亂暴に徒ら書きで汚してゐた。

と、突然船醫の部屋から高々と倉地の笑ひ聲が聞こえて來た。葉子は我れにもなく頭を上げて、暫らく聞耳を立ててから、そつと戸口に歩み寄つたが、後はそれなり又靜かになつた。葉子は恥かしげに座に戻つた。而して紙の上に思ひ出すまゝに勝手な字を書いたり、形の知れない形を書いて見たりしながら、づきん〳〵と痛む額をぎゆつと肘をついた片手で押へて何んと云ふ事もなく考へつゞけた。

念が屆けば木村にも定子にも何んの用があらう。倉地の心さへ摑めば、後は自分の意地一つだ。さうだ。念が屆かなければ　念が屆かなければ……屆かなければ有らゆるものに用が無くなるのだ。さうしたら美しく死なうねえ。……どうして……私はどうして……けれども……葉子はいつの間にか純粋に感傷的になつてゐた。自分にもこんないゝおぼこな思ひが潛んでゐたかと思ふと、抱いて撫でさすつてやりたいほど自分が可愛くもあつた。而して木部と別れて

以來絶えて味はなかつたこの甘い情緒に自分からほだされ溺れて、心中でもする人のやうな、戀に身をまかせる心安さにひたりながら小机に突つ伏してしまつた。

やがて醉ひつぶれた人のやうに頭を擡げた時は、疾に日がかげつて部屋の中には華やかな電燈がともつてゐた。

いきなり船醫の部屋の戸が亂暴に開かれる音がした。葉子ははつと思つた。その時葉子の部屋の戸にどたりと突きあたつた人の氣配がして、「早月さん」と濁つて嗄がれた事務長の聲がした。葉子は身のすくむやうな衝動を受けて、思はず立ち上つてたじろぎながら部屋の隅に逃げかくれた。而して體中を耳のやうにしてゐた。

「早月さんお願ひだ。一寸開けて下さい」

葉子は手早く小机の上の紙を屑籠になげ棄てて、ファウンテン・ペンを物蔭に抛りこんだ。而してせかせかとあたりを見廻したが、慌てながら眼窓のカーテンを閉め切つた、而して又立ちすくんだ、自分の心の恐ろしさにまどひながら。

外部では握り拳で續けさまに戸を敲いてゐる。葉子はそはそはと裾前をかき合せて、肩越しに鏡を見やりながら涙を拭いて眉を撫でつけた。

「早月さん!!」

葉子はやゝ暫しとつおいつ躊躇してゐたが、とうとう決心して、何か慌てくさつて、鍵をがちがちやりながら戸を開けた。

事務長はひどく醉つて這入つて來た。どんなに飲んでも顏色もかへない程の強酒な倉地が、こんなに醉ふのは珍らしい事だつた。締め切つた戸に仁王立ちによりかゝつて、冷然とした樣子で離れて立つ葉子をまじまじと見すゑながら、

「葉子さん、葉子さんが惡ければ早月さんだ。早月さん……僕のする事はするだけの覺悟があつてするんですよ。僕はね、横濱以來あなたに惚れてゐたんだ。それが分らないあなたぢやないでせう。暴力? 暴力が何んだ。暴力は愚かな事つた。殺したくなれば殺しても進ぜるよ」

葉子はその最後の言葉を聞くと眼眩を感ずる程に有頂天になつた。

「あなたに木村さんといふのが附いてる位は、横濱の支店長から聞かされとるんだが、どんな人だか僕は勿論知りませんさ。知らんが僕の方があなたに深惚れしとる事だけは、この胸三寸でちやんと知つとるんだ。それ、それが分らん? 僕は恥も何もさらけ出して云つとるんですよ。これでも分らんですか」

葉子は眼をかゞやかしながら、その言葉を貪つた。噛みしめた。而して呑み込んだ。

かうして葉子に取つての運命的な一日は過ぎた。

十八

その夜船はヴィクトリヤに着いた。倉庫の立ちならんだ長い棧橋に"Car to the Town Fare 15¢"と大きな白い看板に書いてあるのが夜目にもしるく葉子の眼窓から見やられた。米國への上陸が禁ぜられてゐる支那の苦力がこゝから上陸するのと、相當の荷役とで、船の内外は急に騷々しくなつた。事務長は忙がしいと見えてその夜は遂に葉子の部屋に顏を見せなかつた。そこいらが騷々しくなればなる程葉子は喰へやうのない平和を感じた。生れて以來、葉子は生に固着した不安からこれ程まで綺麗に遠ざかり得るものとは思ひも設けてゐなかつた。而かもそれが空疎な平和ではない、飛び立つて踊りたい程の ecstasy を苦もなく抑へ得る強い力の潛んだ平和だつた。總ての事に飽き足つた

人のやうに、又二十五年に亙る長い苦しい戰に始めて勝つて兜を脱いだ人のやうに、心にも肉にも快い疲勞を覺えて、謂はばその疲れを夢のやうに味ひながら、なよ〳〵とソファに身を寄せて燈火を見つめてゐた。倉地がそこにゐないのが淺い心殘りだつた。けれども何んと云つても心安かつた。ともすれば微笑が脣の上を漣のやうにひらめき過ぎた。

けれどもその翌日から一等船客の葉子に對する態度は掌を返したやうに變つてしまつた。一夜の間にこれほどの變化を惹き起す事の出來る力を、葉子は田川夫人の外に想像し得なかつた。田川夫人が世に時めく良人を持つて、人の眼に立つ交際をして、女盛りと云ひ條、もういくらか降り坂であるのに引きかへて、どんな人の配偶にして見ても恥かしくない才能と容貌とを持つた若々しい葉子の便りなげな身の上とが、二人に近づく男達に同情の輕重を起させるのは勿論だつた。然し道德はいつでも田川夫人のやうな立場にある人の利器で、夫人はまたそれを有利に使ふ事を忘れない種類の人であつた。而して船客達の葉子に對する同情の底に潛む野心――はかない、野心とも云へない程の野心――もう一つ云ひ換へれば、葉子の記憶に親切な男として、勇悍な男として、美貌な男として殘りたいと云ふ程な野心――に絕望の斷定を與へる事によつて、その同情を引つ込めさせる事の出來るのも夫人は心得てゐた。事務長が自己の勢力範圍から離れてしまつた事も不快の一つだつた。こんな事から事務長と葉子との關係は巧妙な手段で逸早く船中に傳へられたに違ひない。その結果として葉子は忽ち船中の社交から葬られてしまつた。少くとも田川夫人の前では、船客の大部分は葉子に對して疎々しい態度をして見せるやうになつた。中にも一番憐れなのは岡だつた。誰れが何んと告げ口したのか知らないが、葉子が朝おそく眼を覺まして甲板に出て見ると、毎時ものやうに手欄に倚りかゝつて、もう內海になつた波の色を眺めてゐた彼れは、葉子の姿を認めるや否や、ふいとその場を外づして、何處へか影を隱してしまつた。それからといふもの、岡はまるで幽靈のやうだつた。船の中にゐる事だけは確かだが、葉子が何うかしてその姿を見つけたと思ふと、次ぎの瞬間にはもう見えなくなつてゐた。その癖葉子は思はぬ時に、岡が何處かで自分を見守つてゐるのを確かに感ずる事が度々だつた。葉子はその岡を憐れむ事すらもう忘れてゐた。

結句船の中の人達から度外視されるのを氣安い事とまでは思はないでも、葉子はかゝる結果には一向無頓着だつた。もう船は今日シヤトルに着くのだ。田川夫人やその外の船客達の所謂監視の下に苦々しい思ひをするのも今日限りだ。さう葉子は平氣で考へてゐた。

然し船がシヤトルに着くといふ事は、葉子に外の不安を持ち來さずにはおかなかつた。シカゴに行つて半年か一年木村と連れ添ふ外はあるまいとも思つた。然し木部の時でも二箇月とは同棲してゐなかつたとも思つた。倉地と離れては一日でもゐられさうにはなかつた。然しこんな事を考へるには船がシヤトルに着いてからでも三日や四日の餘裕はある。倉地はその事は第一に考へてくれてゐるに違ひない。葉子は今の平和を強ひてこんな問題でかき亂す事を欲しなかつたばかりでなく迚も出來なかつた。

葉子はその癖、船客と顏を合せるのが不快でならなかつたので、事務長に賴んで船橋に上げてもらつた。船は今瀨戶內のやうな狹い內海を動搖もなく進んでゐた。船長はヴイクトリヤで傭ひ入れた水先案內と二人竝んで立つてゐたが、葉子を見るといつもの通り顏を眞赤にしな

がら帽子を取つて挨拶した。ビスマークのやうな顔をして、船長より一とがけも二たがけも大きい白髪の水先案内はふと振り返つてぢつと葉子を見たが、そのまゝ向き直つて、

「Charmin' little lassie! who's that?」

とスコットランド風な強い發音で船長に尋ねた。葉子には解らない積りで云つたのだ。船長が慌てて何かさゝやくと、老人はから〳〵と笑つて一寸首を引っ込ませながら、もう一度振り返つて葉子を見た。

その毒氣なくから〳〵と笑ふ聲が、恐ろしく氣に入つたばかりでなく、乾いて晴れ渡つた秋の朝の空と何んとも云へない調和をしてゐると思ひながら葉子は聞いた。而してその老人の背中でも撫でてやりたいやうな氣になつた。船は小動ぎもせずに亞米利加松の生え茂つた大島小島の間を縫つて、舷側に來てぶつかる漣の音も長閑だつた。而して晝近くになつて一寸した岬をくるりと船がかはすと、やがてポート・タウンセンドに着いた。そこでは米國官憲の檢査が型ばかりあるのだ。崩した崖の土で埋め立てをして造つた、棧橋まで小さな漁村で、四角な箱に窓を明けたやうな、生々しい一色のペンキで塗り立てた二三階建ての家並みが、險しい斜面に沿うて高く低く立ち連なつて、岡の上には水上げの風車が、青空に白い羽根をゆるゆる動かしながら、かつたんこつとんと暢氣らしく音を立てて廻つてゐた。鷗が群をなして猫に似た聲で啼きながら、船の周りを水に近く長閑に飛び廻るのを見るのも、葉子には絶えて久しい物珍らしさだつた。飴屋の呼賣りのやうな聲さへ町の方から聞こえて來た。葉子はチャート・ルームの壁に凭れかゝつて、ぽか〳〵と射す秋の日の光を頭から浴びながら、靜かな惠み深い心で、この小さな町の小さな生活を眺めやつた。而して十四日の航海の間に、いつの間にか海の心を心としてゐたのに氣が付いた。放埒な、移り氣な、想像も及ばぬパッションにのたうち廻つて呻き惱むあの大海原──葉子は失はれた樂園を慕ひ望むイヴのやうに、靜かに小さくうねる水の皺を見やりながら、遙かな海の上の旅路を思ひやつた。

「早月さん一寸そこからでいゝ、顏を貸して下さい」

直ぐ下で事務長のかう云ふ聲が聞こえた。葉子は母に呼び立てられた少女のやうに、嬉しさに心をときめかせながら、船橋の手欄から下を見下ろした。そこに事務長が立つてゐた。

「One more over there, look!」

かう云ひながら、米國の税關吏らしい人に葉子を指さして見せた。官吏は默頭きながら手帳に何か書き入れた。

船は間もなくこの漁村を出發したが、出發すると間もなく事務長は船橋に昇つて來た。

「Here we are! Seattle is as good as reached now.」

船長にともなく葉子にともなく云つて置いて、水先案内と握手しながら、

「Thanks to you.」

と附け足した。而して三人で暫らく快活に四方山の話をしてゐたが、不圖思ひ出したやうに葉子を顧みて、

「これから又當分は眼が廻る程忙しくなるので、その前に一寸御相談があるんだが、下に來てくれませんか」

と云つた。葉子は船長に一寸挨拶を殘して、すぐ事務長の後に續いた。階子段を降る時でも、眼の先きに見える巖丈な廣い肩から一種の不安が拔け出て來て葉子に逼る事はもうなかつた。自分の部屋の前まで來ると、事務長は葉子の肩に手をかけて戸を開けた。部屋の中には三四人の男が濃く立ち罩めた煙草の煙の中に處

狹く立つたり腰かけたりしてゐた。そこには興錄の顏も見えた。事務長は平氣で葉子の肩に手をかけたまゝ這入つて行つた。

それは始終事務長や船醫と一かたまりのグループを作つて、サルーンの小さな卓を圍んでウヰスキーを傾けながら、時々他の船客の會話に無遠慮な皮肉や茶々を入れたりする連中だつた。日本人が着るといかにも嫌味に見える亞米利加風の背廣も、さして取つてつけたやうには見えない程、太平洋を幾度も往來したらしい人達で、どんな職業に從事してゐるのか、さういふ見分けには人一倍鋭敏な觀察力を持つてゐる葉子にすら見當がつかなかつた。葉子が這入つて行つても、彼等は格別自分達の名前を名乘るでもなく、一番安樂な椅子に腰かけてゐた男が、それを葉子に讓つて、自分は二つに折れるやうに小さくなつて、既に一人腰かけてゐる寢臺に曲りこむと、一同はその樣子に聲を立てて笑つたが、すぐ又前通り平氣な顏をして勝手な口をきゝ始めた。それでも一座は事務長には一目置いてゐるらしく、又事務長と葉子との關係も、事務長から殘らず聞かされてゐる樣子だつた。葉子はさう云ふ人達の間にあるのを結句氣安く思つた。彼等は葉子を下級船員の所謂「姉御」扱ひにしてゐた。

「向うに着いたらこれで悶着ものだぜ。田川の嚊め、あいつ、一と味噌擦らずにはおくまいて」

「因業な生れだなあ」

「何んでも正面から打つ突かつて、いさくさ云はせず決めてしまふ外はないよ」

などと彼等は戯談ぶつた口調で親身な心持を云ひ現はした。事務長は眉も動かさずに、机に倚りかゝつて默つてゐた。葉子はこれらの言葉からそこに居合はす人々の性質や傾向を讀み取らうとしてゐた。興錄の外に三人ゐた、その中の一人は甲斐絹のどてらを着てゐた。

「このまゝこの船でお歸りなさるがいゝね」

とそのどてらを着た中年の世渡り功者らしいのが葉子の顏を窺ひ／＼云ふと、事務長は少し屈託らしい顏をして物憂げに葉子を見やりながら、

「私もさう思ふんだがどうだ」

と訊ねた。葉子は

「さあ……」

と生返事をする外なかつた。始めて口をきく幾人もの男の前で、とつかわ物を云ふのがさすがに億劫だつた。興錄は事務長の意向を讀んで取ると、分別ぶつた顏をさし出して、

「それに限りますよ。あなた一つ病氣におなりなさりや世話なしですさ。上陸した處が急に動くやうにはなれない。又さういふ體では檢疫が兎や角やかましいに違ひないし、この間のやうに檢疫所で眞裸にされるやうな事でも起れば、國際問題だの何んだのつて始末に終へなくなる。それよりは出帆まで船に寢ていらつしやる方がいゝと、そこは私が大丈夫やりますよ。而しておいて船の出際になつて矢張り何うしてもいけないと云へばそれつ限りのものでさあ」

「なに、田川の奧さんが、木村つて云ふのに、味噌さへしこたま擦つてくれれば一番えゝのだが」

と事務長は船醫の言葉を無視した樣子で、自分の思ふ通りをぶつきらぼうに云つてのけた。

木村はその位な事で葉子から手を引くやうなはき／＼した氣性の男ではない。これまでも隨分色々な噂が耳に這入つた筈なのに「僕はあの女の缺陷も弱點も皆んな承知してゐる。私生兒のあるのも固より知つてゐる。唯だ僕はクリスチャンである以上、何んとでもして葉子を救ひ上げる。救はれた葉子を想像して見給へ。僕はその時一番理想的な better half を持ち得ると

信じてゐる」と云つた事を聞いてゐる。東北人のねんぢりむつつりしたその氣性が、葉子には第一我慢のし切れない嫌惡の種だつたのだ。

　葉子は默つて二人の云ふ事を聞いてゐる中に、興錄の軍略が一番實際的だと考へた。而して萎れ〴〵しい調子で興錄を見やりながら、

「興錄さん、さう仰しやれば私假病ぢやないんですの。この間中から診ていたゞかうか知らと幾度か思つたんですけれども、あんまり大袈裟らしいんで我慢してゐたんですが、何ういふもんでせう……少しは船に乘る前からでしたけれども……お腹のこゝが妙に時々痛むんですのよ」

と云ふと、寢臺に曲りこんだ男はそれを聞きながらにやり〳〵笑ひ始めた。葉子は一寸その男を睨むやうにして一緒に笑つた。

「まあ機の悪い時にこんな事を云ふものですから、痛い腹まで探られますわね……ぢや興錄さん後程診ていたゞけて?」

事務長の相談といふのはこんな多愛もない事で濟んでしまつた。

　二人きりになつてから、

「では私これから本當の病人になりますからね」

　葉子は一寸倉地の顏をつゝいて、其の脣に觸れた。而してシャトルの市街から起る煤煙が遠くにぼんやり望まれるやうになつたので、葉子は自分の部屋に歸つた。而して洋風の白い寢衣に着かへて、髮を長い編下げにして寢床に這入つた。戲談のやうにして興錄に病氣の話をしたものの、葉子は實際可なり長い以前から子宮を害してゐるらしかつた。腰を冷やしたり、感情が激昂したりした後では、きつと收縮するやうな痛みを下腹部に感じてゐた。船に乘つた當座は、暫らくの間は忘れるやうにこの不快な痛みから遠ざかる事が出來て、幾年ぶりかで申し所のない健康のよろこびを味つたのだつたが、近頃は又段々痛みが激しくなるやうになつて來てゐた。半身が痲痺したり、頭が急にぼーつと遠くなる事も珍らしくなかつた。葉子は寢床に這入つてから、輕い疼みのある所をそつと平手で擦りながら、船がシャトルの波止場に着く時の有樣を想像して見た。しておかなければならない事が數かぎりなくあるらしかつたけれども、何をしておくといふ事もなかつた。唯だ何んでもいゝ、せつせと手當り次第支度をしておかなければ、それだけの心盡しを見せて置かなければ、目論見通り首尾が運ばないやうに思つたので、一應横になつたものを又むく〳〵と起き上つた。

　先づ昨日着た派手な衣類がそのまゝ散らかつてゐるのを疊んでトランクの中に仕舞ひこんだ。臥る時まで着てゐた着物は、わざと華やかな長襦袢や裏地が見えるやうに衣紋竹に通して壁にかけた。事務長の置き忘れて行つたパイプや帳簿のやうなものは丁寧に引出しに隱した。古藤が木村と自分とに宛てて書いた二通の手紙を取り出して、古藤がしておいたやうに枕の下に差しこんだ。鏡の前には二人の妹と木村との寫眞を飾つた。それから大事な事を忘れてゐたのに氣が付いて、廊下越しに興錄を呼び出して藥瓶や病床日記を調へるやうに賴んだ。興錄の持つて來た藥瓶から藥を半分がた痰壺に捨てた。日本から木村に持つて行くやうに託された品々をトランクから取り分けた。その中からは故鄕を思ひ出させるやうな色々な物が出て來た。香ひまでが日本といふものをほのかに心に觸れさせた。

　葉子は忙はしく働かしてゐた手を休めて、部屋の眞中に立つてあたりを見廻して見た。萎んだ花束が取り除けられて無くなつてゐるばかりで、あとは横濱を出た時の通りの部屋の姿にな

つてゐた。舊い記憶が香のやうに染みこんだそれらの物を見ると、葉子の心は我れにもなくふとぐらつきかけたが、涙もさそはずに淡く消えて行つた。

フォクスルで起重機の音がかすかに響いて來るだけで、葉子の部屋は妙に靜かだつた。葉子の心は風のない池か沼の面のやうに唯ゞどんよりと澱んでゐた。體は何んの譯もなくだるく物懶かつた。

食堂の時計が引きしまつた音で三時を打つた。それを合圖のやうに汽笛がすさまじく鳴り響いた。港に這入つた合圖をしてゐるのだなと思つた。と思ふと今まで鈍く脈打つやうに見えてゐた胸が急に激しく騷ぎ出した。それが葉子の思ひも設けぬ方向に動き出した。もうこの長い船旅も終つたのだ。十四五の時から新聞記者になる修業の爲めに來たい〳〵と思つてゐた米國に着いたのだ。來たいとは思ひながら本當に來ようとは夢にも思はなかつた米國に着いたのだ。それだけの事で葉子の心はもうしみ〴〵としたものになつてゐた。木村は狂ふやうな心を强ひて押し鎭めながら、船の着くのを埠頭に立つて涙ぐみつゝ待つてゐるだらう。さう思ひながら葉子の眼は木村や二人の妹の寫眞の方にさまよつて行つた。それと竝べて寫眞を飾つておく事も出來ない定子の事までが、哀れ深く思ひやられた。生活の保障をしてくれる父親もなく、膝に抱き上げて愛撫してやる母親にもはぐれたあの子は今あの池の端の淋しい小家で何をしてゐるのだらう。笑つてゐるかと想像して見るのも悲しかつた。泣いてゐるかと想像して見るのも憐れだつた。而して胸の中が急にわく〳〵と塞がつて來て、堰きとめる暇もなく涙がはら〳〵と流れ出た。葉子は大急ぎで寢臺の側に駈けよつて、枕許においといたハンケチを拾ひ上げて眼頭に押しあてた。素直な感傷的な涙が唯ゞ譯もなく後から〳〵流れた。この不意の感情の裏切りには然し引き入れられるやうな誘惑があつた。段々底深く沈んで哀しくなつて行くその思ひ、何んの思ひとも定めかねた深い、侘しい、悲しい思ひ。恨みや怒りを綺麗に拭ひ去つて、諦めきつたやうに總てのものを唯ゞしみ〴〵となつかしく見せるその思ひ。いとしい定子、いとしい妹、いとしい父母、……何故こんなになつかしい世に自分の心だけがかう哀しく一人坊ちなのだらう。何故世の中は自分のやうなものを憐れむ仕方を知らないのだらう。そんな感じの零細な斷片がつぎ〳〵に涙に濡れて胸を引きしめながら通り過ぎた。葉子は知らず〳〵それらの感じにしつかりすがり附かうとしたけれども無益だつた。感じと感じとの間には、星のない夜のやうな、波のない海のやうな、暗い深い際涯のない悲哀が 愛憎の凡てを唯ゞ一色に染めなして、どんよりと擴がつてゐた。生を呪ふよりも死が願はれるやうな思ひが、逼るでもなく離れるでもなく、葉子の心にまつはり附いた。葉子は果ては枕に顏を伏せて、本當に自分の爲めにさめ〴〵と泣き續けた。

かうして小半時もたつた時、船は棧橋に繫がれたと見えて、二度目の汽笛が鳴りはためいた。葉子は物懶げに頭を擡げて見た。ハンケチは涙の爲めにしぼる程濡れて丸まつてゐた。水夫等が繫綱を受けたりやつたりする音と、鋲釘を打ちつけた靴で甲板を歩き廻る音とが入り亂れて、頭の上は宛ら火事場のやうな騷ぎだつた。泣いて〳〵泣き盡した子供のやうなぼんやりした取りとめのない心持で、葉子は何を思ふともなくそれを聞いてゐた。

と突然戸外で事務長の、

「こゝがお部屋です」

といふ聲がした。それが丸で雷か何かのやうに恐ろしく聞こえた。葉子は思はずぎよつとなつ

た。準備をしておく積りでゐながら何んの準備も出來てゐない事も思つた。今の心持は平氣で木村に會へる心持ではなかつた。おろ〳〵しながら立ちは上つたが、立ち上つても何うする事も出來ないのだと思ふと、追ひつめられた罪人のやうに、頭を毛を兩手で抑へて、髮の毛をむしりながら、寢臺の上にがばと伏さつてしまつた。

戶が開いた。

「戶が開いた」葉子は自分自身に救ひを求めるやうにかう心の中で呻いた。而して息氣もとまる程身内がしやちこばつてしまつてゐた。

「早月さん木村さんが見えましたよ」

事務長の聲だ。あゝ事務長の聲だ。事務長の聲だ。葉子は身を震はせて壁の方に顏を向けた。……事務長の聲だ……。

「葉子さん」

木村の聲だ。今度は感情に震へた木村の聲が聞こえて來た。葉子は氣が狂ひさうだつた。兎に角二人の顏を見る事は何うしても出來ない。葉子は二人に背ろを向け益々壁の方に藻掻きよりながら、涙の暇から狂人のやうに叫んだ。忽ち高く忽ち低いその震へ聲は笑つてゐるやうにさへ聞こえた。

「出て……お二人ともどうか出て……この部屋を……後生ですから今この部屋を……出て下さいまし……」

木村はひどく不安げに葉子に倚りそつてその肩に手をかけた。木村の手を感ずると恐怖と嫌惡との爲めに身をちゞめて壁に獅嚙みついた。

「痛い……いけません……お腹が……早く出て……早く……」

事務長は木村を呼び寄せて何か暫らくひそひそ話し合つてゐるやうだつたが、二人ながら跫音を盜んでそつと部屋を出て行つた。葉子はなほも息氣も絕え〴〵に、

「どうぞ出て……あつちに行つて……」

と云ひながら、いつまでも泣き續けた。

十九

暫らくの間食堂で事務長と通り一遍の話でもしてゐるらしい木村が、頃を見計らつて再度葉子の部屋の戶を敲いた時にも、葉子はまだ枕に顏を伏せて、不思議な感情の渦卷きの中に心を浸してゐたが、木村が一人で這入つて來たのに氣付くと、始めて弱々しく横向きに寢なほつて、二の腕まで袖口のまくれた眞白な手をさし延べて、默つたまゝ木村と握手した。木村は葉子の激しく泣いたのを見てから、堪へ堪へてゐた感情が更に高じたものか、涙をあふれんばかり眼頭にためて、厚ぼつたい唇を震はせながら、痛々しげに葉子の顏付を見入つて突つ立つた。

葉子は、今まで續けてゐた沈默の惰性で第一口をきくのが物懶かつたし、木村は何んと云ひ出したものか迷ふ樣子で、二人の間には握手のまゝ意味深げな沈默が取りかはされた。その沈默は然し感傷的といふ程度であるには餘りに長く續き過ぎたので、外界の刺戟に感じて過敏なまでに滿干の出來る葉子の感情は、今まで浸つてゐた痛烈な動亂から一皮々々平調に還つて、果てはその底に、かう高じては厭はしいと自分ですらが思ふやうな冷やかな皮肉が、そろ〳〵頭を持ち上げて來るのを感じた。握り合せたむづかゆいやうな手を引つ込めて、眼元まで蒲團を被つて、そこから自分の前に立つ若い男の心の亂れを嘲笑つて見たいやうな心にすらなつてゐた。永く續く沈默が當然牽き起す一種の壓迫を木村も感じてうろたへたらしく、何んとかして二人の間の氣まづさを引き裂くやうな、心の切なさを表はす適當の言葉を案じ求めてゐるらしかつたが、とう〳〵涙に潤つた低い聲で、

もう一度、
「葉子さん」
と愛するものの名を呼んだ。それは先程呼ばれた時のそれに比べると、聞き違へる程美しい聲だつた。葉子は、今まで、これ程切な情を籠めて自分の名を呼ばれた事はないやうにさへ思つた。「葉子」といふ名に際立つて傳奇的な色彩が添へられたやうにも聞こえた。で、葉子はわざと木村と握り合せた手に力をこめて、更に何んとか言葉をつがせて見たくなつた。その眼も木村の脣に勵ましを與へてゐた。木村は急に辯力を回復して、
「一日千秋の思ひとはこの事です」
と滑らかに云つて退けた。それを聞くと葉子は見事期待に背負投げを喰はされて、その場の滑稽に思はず吹き出さうとしたが、如何に事務長に對する戀に溺れ切つた女心の殘虐さからも、さすがに木村の多愛ない誠實を笑ひ切る事は得しないで、葉子は唯ゞ心の中で失望したやうに「あれだから嫌やになつちまふ」とくさ〴〵しながら喞つた。

然しこの場合、木村と同樣、葉子も恰好な空氣を部屋の中に作る事に當惑せずにはゐられなかつた。事務長と別れて自分の部屋に閉ぢ籠つてから、心靜かに考へて置かうとした木村に對する善後策も、思ひよらぬ感情の狂ひからそのまゝになつてしまつて、今になつて見ると、葉子は何う木村をもてあつかつて好いのか、はつきりした目論見は出來てゐなかつた。然し考へて見ると、木部孤笻と別れた時でも、葉子には格別これといふ謀略があつた譯ではなく、唯ゞその時々に我儘を振舞つたに過ぎなかつたのだけれども、その結果は葉子が何か恐ろしく深い企らみと手練を示したかのやうに人に取られてゐた事も思つた。何んとかして漕ぎ拔けられない事はあるまい。さう思つて、先づ落ち付き拂つて木村に椅子をすゝめた。木村が手近にある疊椅子を取り上げて寢臺の側に來て坐ると、葉子は又しなやかな手を木村の膝の上において、男の顏をしげ〴〵と見やりながら、
「本當に暫らくでしたわね。少しおやつれになつたやうですわ」
と云つて見た。木村は自分の感情に打ち負かされて身を震はしてゐた。而してわく〳〵と流れ出る涙が見る〳〵眼から溢れて、顏を傳つて幾筋となく流れ落ちた。葉子は、その涙の一と雫が氣まぐれにも、俯向いた男の鼻の先きに宿つて、落ちないのを見やつてゐた。
「隨分色々と苦勞なすつたらうと思つて、氣が氣ではなかつたんですけれども、私の方も御承知の通りでせう。今度こつちに來るにつけても、それは困つて、有りつたけのものを拂つたりして、漸く間に合せた位だつたもんですから……」

なほ云はうとするのを木村は忙はしく打ち消すやうに遮つて、
「それは十分分つてゐます……」
と顏を上げた拍子に涙の雫がぽたりと鼻の先きからズボンの上に落ちたのを見た。葉子は、泣いた爲めに妙に脹れぼつたく赤くなつて、てら〳〵と光る木村の鼻の先きが急に氣になり出して、惡いとは知りながらも、兎もするとそこへばかり眼が行つた。

木村は何から何う話し出していゝか分らない樣子だつた。
「私の電報をヴィクトリヤで受取つたでせうね」
などともてれ隱しのやうに云つた。葉子は受取つた覺えもない癖にいゝ加減に、
「えゝ、難有う御座いました……」
と答へておいた。而して一時も早くこんな息氣づまるやうに壓迫して來る二人の間の心のもつ

れから逃れる術はないかと思案してゐた。

「今始めて事務長から聞いたんですが、あなたが病氣だつたと云つてましたが、一體何處が悪かつたんです。さぞ困つたでせうね。そんな事はちつとも知らずに、今が今まで、祝福された、輝くやうなあなたを迎へられるとばかり思つてゐたんです。あなたは本當に試煉の受けつゞけと云ふもんですね。何處でした悪いのは」

葉子は、不用意にも女を捕へてぢかづけに病氣の種類を聞きたゞす男の心の粗雜さを忌みながら、當らずさはらず、前からあつた胃病が、船の中で食物と氣候との變つた爲めに、段々高じて來て起きられなくなつたやうに云ひ繕つた。木村は痛ましさうに眉を寄せながら聞いてゐた。

葉子はもうこんな程々な會話には堪へ切れなくなつて來た。木村の顏を見るにつけて思ひ出される仙臺時代や、母の死といふやうな事にも可なり惱まされるのをつらく思つた。で、話の調子を變へる爲めに強ひていくらか快活を裝つて、

「それはさうとこちらの御事業はいかゞ」

と仕事とか樣子とか云ふ代りに、わざと事業といふ言葉をつかつてから尋ねた。

木村の顏付きは見る／＼變つた。而して胸のポッケットに覗かせてあつた大きなリンネルのハンケチを取り出して、器用に片手でそれをふはりと丸めておいて、ちんと鼻をかんでから、又器用にそれをポッケットに戻すと、

「駄目です」

といかにも絶望的な調子で云つたが、その眼は既に笑つてゐた。桑港の領事が在留日本人の企業に對して全然冷淡で盲目であるといふ事、日本人間に嫉視が激しいので、桑港での事業の目論見は豫期以上の故障に遇つて大體失敗に終つた事、思ひ切つた發展は矢張り想像通り米國の西部よりも中央、殊にシカゴを中心として計畫されなければならぬといふ事、幸に、桑港で自分の話に乘つてくれる或る手堅い獨逸人に取次ぎを頼んだといふ事、シャトルでも相當の店を見出しかけてゐるといふ事、シカゴに行つたら、そこで日本の名譽領事をしてゐる可なりな鐵物商の店に先づ住み込んで米國に於ける取引きの手心を呑み込むと同時に、その人の資本の一部を動かして、日本との直取引を始める算段であるといふ事、シカゴの住居はもう決つて、借りるべきフラットの圖面まで取り寄せてあるといふ事、フラットは不經濟のやうだけれども部屋の明いた部分を又貸しをすれば、大して高いものにもつかず、住まひ便利は非常にいゝといふ事……さう云ふ點にかけては、中々綿密に行き屆いたもので、それをいかにも企業家らしい說服的な口調で順序よく述べて行つた。會話の流れがかう變つて來ると、葉子は始めて泥の中から足を拔き上げたやうな氣輕な心持になつて、ずつと木村を見つめながら、聞くともなしにその話に聞耳を立ててゐた。木村の容貌は暫らくの間に見違へる程 refine されて、元から白かつたその皮膚は何か特殊な洗料で底光りのする程磨きがかけられて、日本人とは思へぬまで滑らかなのに、油で綺麗に分けた濃い黑髮は、西洋人の金髮には又見られぬやうな趣きのある對照をその白皙の皮膚に與へて、カラーとネックタイの關係にも人に氣のつかぬ凝り方を見せてゐた。

「會ひたてからこんな事を云ふのは恥かしいですけれども、實際今度といふ今度は苦鬪しました。こゝまで迎へに來るにも碌々旅費がない騷ぎでせう」

と云つてさすがに苦しげに笑ひにまぎらさうとした。その癖木村の胸にはどつしりと重さうな金鎖がかゝつて、兩手の指には四つまで寶石

入りの指輪がきらめいてゐた。葉子は木村の云ふ事を聞きながらその指に眼をつけてゐたが、四つの指輪の中に婚約の時取り交した純金の指輪もまじつてゐるのに氣がつくと、自分の指にはそれを嵌めてゐなかつたのを思ひ出して、何喰はぬ樣子で木村の膝の上から手を引つ込めて頤まで蒲團を被つてしまつた。木村は引つ込められた手に追ひすがるやうに椅子を乘り出して、葉子の顏に近く自分の顏をさし出した。

「葉子さん」

「何？」

又 love-scene か。さう思つて葉子はうんざりしたけれども、すげなく顏を背ける譯にも行かず、やゝ當惑してゐると、折よく事務長が型ばかりのノックをして這入つて來た。葉子は寢たまゝ、眼でいそ〳〵と事務長を迎へながら、

「まあ好うこそ……先程は失禮。何んだか下らない事を考へ出してゐたもんですから、つい我儘をしてしまつて濟みません……お忙がしいでせう」

と云ふと、事務長はからかひ半分の冗談をきつかけに、

「木村さんの顏を見るとえらい事を忘れてゐたに氣がついたで。木村さんからあなたに電報が來とつたのを、私やヴィクトリヤのどさくさでころり忘れとつたんだ。濟まん事でした。こんな皺になりくさつた」

と云ひながら、左のポッケットから折目に煙草の粉がはさまつて揉みくちやになつた電報紙を取り出した。木村は先刻葉子がそれを見たと確かに云つたその言葉に對して、怪訝な顏付きをしながら葉子を見た。些細な事ではあるが、それが事務長にも關係を持つ事だと思ふと、葉子も一寸どぎまぎせずにはゐられなかつた。然しそれは唯ゞ一瞬間だつた。

「倉地さん、あなたは今日少し何うかなすつていらつしやるわ。それはその時ちやんと拜見したぢやありませんか」

と云ひながらすばやく眼くばせすると、事務長はすぐ何か譯があるのを氣取つたらしく、巧みに葉子にばつを合せた。

「何？ あなた見た？ ……おゝさう〳〵……これは寢ぼけ返つとるぞ、はゝゝゝ」

而して互に顏を見合はせながら二人はしたたか笑つた。木村は暫らく二人を片身代りに見較べてゐたが、これもやがて聲を立てて笑ひ出した。木村の笑ひ出すのを見た二人は無性に可笑しくなつてもう一度新らしく笑ひこけた。木村といふ大きな邪魔者を眼の前に据ゑておきながら、互の感情が水のやうに苦もなく流れ通ふのを二人は子供らしく樂しんだ。

然しこんな悪戯めいた事の爲めに話は一寸途切れてしまつた。下らない事に二人から湧き出た少し仰山過ぎた笑ひは、かすかながら木村の感情を害ねたらしかつた。葉子は、この場合、なほ居殘らうとする事務長を遠ざけて、木村とさし向ひになるのが得策だと思つたので、程もなく生眞面目な顏付きに歸つて、枕の下を探つて、そこに入れて置いた古藤の手紙を取り出して木村に渡しながら、

「これをあなたに古藤さんから。古藤さんには隨分お世話になりましてよ。でもあの方のぶまさ加減つたら、それはじれつたい程ね。愛や貞の學校の事もお頼みして來たんですけれども心許ないもんよ。きつと今頃は喧嘩腰になつて皆んなと談判でもしていらつしやるでせうよ。見えるやうですわね」

と水を向けると、木村は始めて話の領分が自分の方に移つて來たやうに、顏色をなほしながら、事務長をそつちのけにした態度で、葉子に對しては自分が第一の發言權を持つてゐると云はんばかりに、色々と話し出した。事務長は暫

らく風向きを見計らつて立つてゐたが突然部屋を出て行つた。葉子はすばやくその顏色を窺ふと妙にけはしくなつてゐた。

「一寸失禮」

木村の癖で、こんな時まで妙によそ／＼しく斷つて、古藤の手紙の封を切つた。西洋罫紙にペンで細かく書いた幾枚かの可なり厚いもので、それを木村が讀み終るまでには暇がかゝつた。その間、葉子は仰向けになつて、甲板で盛んに荷揚げしてゐる人足等の騷ぎを聞きながら、やゝ暗くなりかけた光で木村の顏を見やつてゐた。少し眉根を寄せながら、手紙に讀み耽ける木村の表情には、時々苦痛や疑惑やの色が往つたり來たりした。讀み終つてからほつとした溜息と共に木村は手紙を葉子に渡して、

「こんな事を云つてよこしてゐるんです。あなたに見せても構はないとあるから御覽なさい」

と云つた。葉子は別に讀みたくもなかつたが、多少の好奇心も手傳ふので兎に角眼を通して見た。

「僕は今度位不思議な經驗を嘗めた事はない。兄が去つて後の葉子さんの一身に關して、責任を持つ事なんか、僕はしたいと思つても出來はしないか、若し明白に云はせてくれるなら、兄はまだ葉子さんの心を全然占領したものとは思はれない」

「僕は女の心には全く觸れた事がないと云つていゝ程の人間だが、若し僕の事實だと思ふ事が不幸にして事實だとすると、葉子さんの戀には――若しそんなのが戀と云へるなら――大分餘裕があると思ふね」

「これが女の tact といふものかと思つたやうな事があつた。然し僕には解らん」

「僕は若い女の前に行くと變にどぎまぎしてしまつて碌々物も云へなくなる。所が葉子さんの前では全く違つた感じで物が云へる。これは考へものだ」

「葉子さんといふ人は兄が云ふ通りに優れた天賦を持つた人のやうにも實際思へる。然しあの人は何處か片輪ぢやないかい」

「明白に云ふと僕はあゝ云ふ人は一番嫌ひだけれども、同時に又一番牽き附けられる、僕はこの矛盾を解きほごして見たくつて堪らない。僕の單純を許してくれ給へ。葉子さんは今までの何處かで道を間違へたのぢやないか知らん。けれどもそれにしては餘り平氣だね」

「神は惡魔に何一つ與へなかつたが attraction だけは與へたのだ。こんな事も思ふ。……葉子さんの attraction は何處から來るんだらう。失敬々々。僕は亂暴を云ひ過ぎてるやうだ」

「時々は憎むべき人間だと思ふが、時々は何んだか可哀さうで堪らなくなる時がある。葉子さんがこゝを讀んだら恐らく唾でも吐きかけたくなるだらう。あの人は可哀さうな人の癖に、可哀さうがられるのが嫌ひらしいから」

「僕には結局葉子さんは何が何んだかちつとも分らない。僕は兄が彼女を選んだ自信に驚く。然しかうなつた以上は、兄は全力を盡して彼女を理解してやらなければいけないと思ふ。どうか兄等の生活が最後の榮冠に至らん事を神に祈る」

こんな文句が斷片的に葉子の心に沁みて行つた。葉子は激しい侮蔑を小鼻に見せて、手紙を木村に戻した。木村の顏にはその手紙を讀み終へた葉子の心の中を見透さうとあせるやうな表情が現はれてゐた。

「こんな事を書かれてあなたどう思ひます」

葉子は事もなげにせゝら笑つた。

「どうも思ひはしませんわ、でも古藤さんも手

紙の上では一枚がた男を上げてゐますわね」
木村の意氣込みは然しそんな事ではごまかされさうにはなかつたので、葉子は面倒くさくなつて少し險しい顏になつた。
「古藤さんの仰しやる事は古藤さんの仰しやる事。あなたは私と約束なさつた時から私を信じ私を理解して下さつていらつしやるんでせうね」
木村は恐ろしい力をこめて、
「それはさうですとも」
と答へた。
「そんならそれで何も云ふ事はないぢやありませんか。古藤さんなどの云ふ事――古藤さんなんぞに分られたら人間も末ですわ――でもあなたはやつぱり何處か私を疑つていらつしやるのね」
「さうぢやない……」
「さうぢやない事があるもんですか。私は一旦からと決めたら何處までもそれで通すのが好き。それは生きてる人間ですもの、こつちの隅あつちの隅と小さな事を捕へて尤めだてを始めたら際限はありませんさ。そんな馬鹿な事つたらありませんわ。私見たいな氣隨な我儘者はそんな風にされたら窮屈で窮屈で死んでしまふでせうよ。私がこんなになつたのも、つまり、皆んなで寄つてたかつて私を疑ひ拔いたからです。あなただつてやつぱりその一人かと思ふと心細いもんですのね」
木村の眼は輝いた。
「葉子さんそれは疑ひ過ぎといふもんです」
而して自分が米國に來てから甞め盡した奮鬪生活もつまりは葉子といふものがあればこそ出來たので、若し葉子がそれに同情と鼓舞とを與へてくれなかつたら、その瞬間に精も根も枯れ果ててしまふに違ひないといふ事を繰り返し繰り返し熱心に說いた。葉子はよそ〱しく聞いてゐたが、
「うまく仰しやるわ」
と留めをさしておいて、暫らくしてから思ひ出したやうに、
「あなた田川の奧さんにお遇ひなさつて」
と尋ねた。木村はまだ遇はなかつたと答へた。葉子は皮肉な表情をして、
「いまに屹度お遇ひになつてよ。一緒にこの船でいらしつたんですもの。而して五十川の小母さんが私の監督をお賴みになつたんですもの。一度お遇ひになつたらあなたは屹度私なんぞ見向きもなさらなくなりますわ」
「どうしてです」
「まあお遇ひなさつて御覽なさいまし」
「何かあなた非難を受けるやうな事でもしたんですか」
「えゝ〱澤山しましたとも」
「田川夫人に？　あの賢夫人の非難を受けるとは、一體どんな事をしたんです」
葉子はさも愛想が盡きたといふ風に、
「あの賢夫人！」
と云ひながら高々と笑つた。二人の感情の緖は又も紏れてしまつた。
「そんなにあの奧さんにあなたの御信用があるのなら、私から申しておく方が早手廻しですわね」
と葉子は半分皮肉な半分眞面目な態度で、橫濱出航以來夫人から葉子が受けた暗々裡の壓迫に尾鰭をつけて語つて來て、事務長と自分との間に何か當り前でない關係でもあるやうな疑ひを持つてゐるらしいと云ふ事を、他人事でも話すやうに冷靜に述べて行つた。その言葉の裏には、然し葉子に特有な火のやうな情熱が閃いて、その眼は鋭く輝いたり淚ぐんだりしてゐた。木村は電火にでも打たれたやうに判斷力を失つて、一部始終をぼんやりと聞いてゐた。

言葉だけにも何處までも冷靜な調子を持たせ續けて葉子は凡てを語り終つてから、

「同じ親切にも眞底からのと、通り一遍のと二つありますわね。その二つが何うかしてぶつかり合ふと、毎時でも本當の親切の方が惡者扱ひにされたり、邪魔者に見られるんだから面白う御座んすわ。横濱を出てから三日ばかり船に醉つてしまつて、どうしませうと思つた時にも、御親切な奧さんは、わざと御遠慮なさつてでせうね、三度々々食堂にはお出になるのに、一度も私の方へはいらしつて下さらないのに、事務長つたら幾度もお醫者さんを連れて來るんですもの、奧さんのお疑ひも尤もと云へば尤もですの。それに私が胃病で寝込むやうになつてからは、船中のお客様がそれは同情して下さつて、色々として下さるのが、奧さんには大のお氣に入らなかつたんですの。奧さんだけが私を親切にして下さつて、外の方は皆んな寄つてたかつて、奧さんを親切にして上げて下さる段取りにさへなれば、何もかも無事だつたんですけれどもね、中でも事務長の親切にして上げ方が一番足りなかつたんでせうよ」

と言葉を結んだ。木村は唇を嚙むやうにして聞いてゐたが、いま／＼しげに、

「判りました／＼」

合點しながらつぶやいた。

葉子は額の生え際の短い毛を引つ張つては指に卷いて上眼で眺めながら、皮肉な微笑を脣のあたりに浮ばして、

「おわかりになつた？　ふん、何うですかね」

と空嘯いた。

木村は何を思つたかひどく感傷的な態度になつてゐた。

「私が惡かつた。私は何處までもあなたを信ずる積りでゐながら、他人の言葉に多少とも信用をかけようとしてゐたのが惡かつたのです。……考へて下さい、私は親類や友人の凡ての反對を冒して此處まで來てゐるのです。もうあなたなしには私の生涯は無意味です。私を信じて下さい。乾度十年を期して男になつて見せますから……若しあなたの愛から私が離れなければならんやうな事があつたら……私はそんな事を思ふに堪へない……葉子さん」

木村はかう云ひながら眼を輝してすり寄つて來た。葉子はその思ひつめたらしい態度に一種の恐怖を感ずる程だつた。男の誇りも何も忘れ果て、捨て果てて、葉子の前に誓を立ててる木村を、うま／＼僞つてゐるのだと思ふと、葉子はさすがに針で突くやうな痛みを鋭く深く良心の一隅に感ぜずにはゐられなかつた。然しそれよりもその瞬間に葉子の胸を押しひしぐやうに狹めたものは、底のない薄い不安だつた。その木村とは何うしても連れ添ふ心はない。その木村に……葉子は溺れた人が岸邊を望むやうに事務長を思ひ浮べた。男といふものの女に與へる力を今更に強く感じた。こゝに事務長がゐてくれたらどんなに自分の勇氣は加はつたらう。然し　何うにでもなれ。どうかしてこの大事な瀨戶を漕ぎぬけなければ浮ぶ瀨はない。葉子は大それた謀反人の心で木村の caress を受くべき身構へ心構へを案じてゐた。

二十

船の着いたその晚、田川夫妻は見舞の言葉も別れの言葉も殘さずに、大勢の出迎人に圍まれて堂々と威儀を整へて上陸してしまつた。その餘の人々の中にはわざ／＼葉子の部屋を訪れて來たものが數人はあつたけれども、葉子は如何にも親しみをこめた別れの言葉を與へはしたが、後まで心に殘る人とては一人もゐなかつた。その晚事務長が來て、狹つこい boudoir のやうな船室で晚くまでしめ／＼と打ち語つた間に、

葉子はふと二度程岡の事を思つてゐた。あんなに自分を慕つてゐはしたが岡も上陸してしまへば、詮方なくボストンの方に旅立つ用意をするだらう。而して軈て自分の事もいつとはなしに忘れてしまふだらう。それにしても何んといふ上品な美しい青年だつたらう。こんな事をふと思つたのも然し束の間で、その追憶は心の戸を敲いたと思ふと果敢なくも何處かに消えてしまつた。今は唯ゞ木村といふ邪魔な考へが、もや〳〵と胸の中に立ち迷ふばかりで、その奥には事務長の打ち勝ちがたい暗い力が、魔王のやうに小動ぎもせず蹲つてゐるのみだつた。

荷役の目まぐるしい騒ぎが二日續いた後の繪島丸は、泣きわめく潰族に取り圍まれた虚ろな死骸のやうに、がらんと靜まり返つて、騒々しい棧橋の雜鬧の間に淋しく横はつてゐる。水夫が、輪切りにした椰子の實で汚れた甲板の板を單調にごし〳〵ごし〳〵と擦る音が、時といふものをゆる〳〵磨り減らすやすりのやうに日がな日ねもす聞こえてゐた。

葉子は早く〳〵こゝを切り上げて日本に歸りたいといふ子供染みた考への外には、をかしい程その外の興味を失つてしまつて、他郷の風景に一瞥を與へる事も厭はしく、自分の部屋の中に籠り切つて、ひたすら發船の日を待ち侘びた。尤も木村が毎日、米國といふ香を鼻をつくばかり身の廻りに漂はせて、葉子を訪れて來るので、葉子はうつかり寢床を離れる事も出來なかつた。

木村は來る度毎に是非米國の醫者に健康診斷を頼んで、大事なければ思ひ切つて檢疫官の檢疫を受けて、兎も角も上陸するやうにと勸めて見たが、葉子は何處までもいやを云ひ通すので二人の間には時々危險な沈默が續く事も珍らしくなかつた。葉子は然し何時でも手際よくその場合々々を操つて、それから甘い歡語を引き出すだけの機才を持ち合してゐたので、この一箇月程見知らぬ人の間に立ち交つて、貧乏の屈辱を存分に嘗め盡した木村は、見る〳〵溫柔な葉子の言葉や表情に醉ひしれるのだつた。カリフオルニヤから來る水々しい葡萄やバナナを器用な經木の小籃に盛つたり、美しい花束を携へたりして、葉子の朝化粧がしまつたかと思ふ頃には木村が缺かさず尋ねて來た。而して毎日くど〳〵と興錄に葉子の容態を聞き糺した。興錄はいゝ加減な事を云つて一日延ばしに延ばしてゐるので堪らなくなつて木村が事務長に相談すると、事務長は興錄よりも更に要領を得ない受け答へをした。仕方なしに木村は途方に暮れて、又葉子に歸つて來て泣きつくやうに上陸を迫るのであつた。その毎日のいきさつを夜になると葉子は事務長と話し合つて笑ひの種にした。

葉子は何んと云ふ事なしに、木村を困らして見たい、いぢめて見たいといふやうな不思議な殘酷な心を、木村に對して感ずるやうになつて行つた。事務長と木村とを目の前に置いて、何も知らない木村を、事務長が一流のきび〳〵した惡辣な手で思ふさま飜弄して見せるのを眺めて樂しむのが一種の痼疾のやうになつた。而して葉子は木村を通して自分の過去の凡てに血の滴る復讐を敢へてしようとするのだつた。そんな場合に、葉子はよく何處かでうろ覺えにしたクレオパトラの插話を思ひ出してゐた。クレオパトラが自分の運命の窮迫したのを知つて自殺を思ひ立つた時、幾人も奴隷を目の前に引き出さして、それを毒蛇の餌食にして、その幾人もの無辜の人々が悶えながら絶命するのを、眉も動かさずに見てゐたといふ插話を思ひ出してゐた。葉子には過去の凡ての呪詛が木村の一身に集まつてゐるやうにも思ひなされた。母の虐げ、五十川女史の術數、近親の壓迫、社會の

環視、女に對する男の覬覦、女の苟合などといふ葉子の敵を木村の一身におつかぶせて、それに女の心が企らみ出す殘虐な仕打ちのあらん限りを濯ぎかけようとするのであつた。

「あなたは丑の刻參りの藁人形よ」

こんな事を何うかした拍子に面と向つて木村に云つて、木村が怪訝な顏でその意味を掛みかねてゐるのを見ると、葉子は自分にも譯の分らない涙を眼に一杯溜めながらヒステリカルに笑ひ出すやうな事もあつた。

木村を拂ひ捨てる事によつて、蛇が殼を拔け出ると同じに、自分の凡ての過去を葬つてしまふ事が出來るやうにも思ひなして見た。

葉子は又事務長に、どれ程木村が自分の思ふまゝになつてゐるかを見せつけようとする誘惑も感じてゐた。事務長の眼の前では隨分亂暴な事を木村に云つたりさせたりした。時には事務長の方が見兼ねて二人の間をなだめにかゝる事さへある位だつた。

ある時木村の來てゐる葉子の部屋に事務長が來合せた事があつた。葉子は枕許の椅子に木村を腰かけさせて、東京を發つた時の樣子を委しく話して聞かせてゐる所だつたが、事務長を見るといゝいきなり樣子をかへて、さも／＼木村を疎んじた風で、

「あなたは向うにいらしつて頂戴」

と木村を向うのソファに行くやうに眼で指圖して、事務長をその跡に坐らせた。

「さ、あなたこちらへ」

と云つて仰向けに寢たまゝ上眼をつかつて見やりながら、

「いゝお天氣のやうですことね。……あの時々ごーつと雷のやうな音のするのは何？……私うるさい」

「トロですよ」

「さう……お客樣がたんとおありですつてね」

「さあ少しは知つとるものがあるもんだで」

「昨夕もその美しいお客がいらしつたの？　とう／＼お話にお見えにならなかつたのね」

木村を前に置きながら、この無謀とさへ見える言葉を遠慮會釋もなく云ひ出すのには、さすがの事務長もぎよつとしたらしく、返事も碌々しないで木村の方に向いて、

「どうですマッキンレーは。驚いた事が持ち上りをつたもんですね」

と話題を轉じようとした。この船の航海中シヤトルに近くなつた或る日、當時の大統領マッキンレーは兇徒の短銃に斃れたので、この事件は米國での噂の中心になつてゐるのだつた。木村はその當時の模樣を委しく新聞紙や人の噂で知り合せてゐたので、乘氣になつてその話に身を入れようとするのを、葉子は膠もなく遮つて、

「何んですねあなたは貴婦人の話の腰を折つたりして。そんなごまかし位ではだまされてはゐませんよ。倉地さん、どんな美しい方です。亞米利加生粹の人つてどんななんでせうね。私、見たい。逢はして下さいましな今度來たら。ここに連れて來て下さるんですよ。他のものなんぞ何んにも見たくはないけれども是ればかりは是非見たう御座んすわ。そこに行くとね、木村なんぞはそりやあ野暮なもんですことよ」

と云つて木村のゐる方を遙かに下眼で見やりながら、

木村さんどう？　こつちに入らしつてから、いゝとは女のお友達がお出來になつて？　Lady Friend といふのが？」

「それが出來んで堪るか」

と事務長は木村の內行を見拔いて裏書きするやうに大きな聲で云つた。

「所が出來てゐたらお慰み、さうでせう？　倉地さんまあかうなの。木村が私を貰ひに來た時にはね。石のやうに堅く坐りこんでしまつて、

まるで命の取りやりでもし兼ねない談判の仕方ですのよ。その頃母は大病で臥つてゐましたの。何んとか母に仰しやつてね、母に。私忘れちやならない言葉がありましたわ。えゝと……さう〳〵（木村の口調を上手に眞似ながら）「私若し外の人に心を動かすやうな事がありましたら神樣の前に罪人です」ですつて……さういふ調子ですもの」

　木村は少し怒氣をほのめかす顏付きをして遠くから葉子を見詰めたまゝ口もきかないでゐた。事務長はから〳〵と笑ひながら、

「それぢや木村さん今頃は神樣の前にいゝくら加減罪人になつとるでせう」

と木村を見返したので、木村も已むなく苦り切つた笑ひを浮べながら、

「己れを以て人を計る筆法ですね」

と答へはしたが、葉子の言葉を皮肉と解して、人前でたしなめるにしては稍〻輕過ぎるし、冗談と見て笑つてしまふにしては確かに强過ぎるので、木村の顏色は妙にぎごちなくこだはつてしまつて何時までも晴れなかつた。葉子は脣だけに輕い笑ひを浮べながら、膽汁の漲つたやうなその顏を下眼で快げにまじ〳〵と眺めやつた。而して苦い淸涼劑でも飲んだやうに胸のつかへを透かしてゐた。

　やがて事務長が座を立つと、葉子は、眉をひそめて快からぬ顏をした木村を、强ひて又舊のやうに自分の側近く坐らせた。

「いやな奴つちやないの。あんな話でもしてゐないと、外に何んにも話の種のない人ですの……あなたさぞ御迷惑でしたらうね」

と云ひながら、事務長にしたやうに上眼に媚を集めてぢつと木村を見た。然し木村の感情はひどくほつれて容易に解ける樣子はなかつた。葉子を故意に威壓しようと企らむわざとな改まり方も見えた。葉子は惡戯者らしく腹の中でくすくす笑ひながら、木村の顏に好意をこめた眼付きで眺め續けた。木村の心の奧には何か云ひ出して見たい癖に、何んとなく腹の中が見透かされさうで、云ひ出しかねてゐる物があるらしかつたが、途切れ勝ちながら話が小半時も進んだ時、とてつもなく、

「事務長は、何んですか、夜になつてまであなたの部屋に話しに來る事があるんですか」

とさりげなく尋ねようとするらしかつたが、その語尾は我れにもなく震へてゐた。葉子は陷穽にかゝつた無智な獸を憫み笑ふやうな微笑を脣に浮べながら、

「そんな事がされますものかこの小さな船の中で。考へても御覧なさいまし。さき程私が云つたのは、この頃は毎晩夜になると暇なので、あの人達が食堂に集まつて來て、酒を飲みながら大きな聲で色んな下らない話をするんですの。それがよくこゝまで聞こえるんです。それに昨夜あの人が來なかつたからからかつてやつただけなんですのよ。この頃は質の惡い女までが隊を組むやうにしてどつさり船に來て、それは騷々しいんですの。……ほゝゝあなたの苦勞性つたらない」

　木村は取りつく島を見失つて二の句がつげないでゐた。それを葉子は可愛い眼を上げて、無邪氣な顏をして見やりながら笑つてゐた。而して事務長が這入つて來た時途切らした話の絲口を見事に忘れずに拾ひ上げて、東京を發つ時の模樣を又子細に話しつゞけた。

からした風で葛藤は葉子の手一つで勝手に紛らされたりほごされたりした。

　葉子は一人の男をしつかりと自分の把持の中に置いて、それを猫が鼠でも弄ぶやうに、勝手に弄ぶつて樂しむのをやめる事が出來なかつたと同時に、時々は木村の顏を一と眼見たばかりで、蟲唾が走る程厭惡の情に驅り立てられて、

我れながら何うしていゝか分らない事もあつた。そんな時には唯々一圖に腹痛を口實にして、一人になつて、腹立ち紛れに有り合せたものを取つて床の上に抛つたりした。もう何もかも云つてしまはう。弄ぶにも足らない木村を近づけておくには當らない事だ。何もかも明らかにして氣分だけでもさつぱりしたいとさう思ふ事もあつた。然し同時に葉子は戰術家の冷靜さを以て、實際問題を勘定に入れる事も忘れはしなかつた。事務長をしつかり自分の手の中に握るまでは、早計に木村を逃がしてはならない。「宿屋きめずに草鞋を脱ぐ」……母がこんな事を葉子の小さい時に教へてくれたのを思ひ出したりして、葉子は一人で苦笑ひもした。

さうだ、まだ木村を逃がしてはならぬ。葉子は心の中に書き記してでも置くやうに、上眼を使ひながらこんな事を思つた。

また或る時葉子の手許に米國の切手の貼られた手紙が屆いた事があつた。葉子は船へなぞ宛てて手紙をよこす人はない筈だがと思つて開いて見ようとしたが、又例の惡戯な心が動いて、わざと木村に開封させた。その內容がどんなものであるかの想像もつかないので、それを木村に讀ませるのは、武器を相手に渡して置いて、自分は素手で挌鬪するやうなものだつた。葉子はそこに興味を持つた。而してどんな不意な難題が持ち上がるだらうかと、心をときめかせながら結果を待つた。その手紙は葉子に簡單な挨拶を殘したまゝ上陸した岡から來たものだつた。如何にも人柄に不似合ひな下手な字體で、葉子がひよつとすると上陸を見合せてそのまゝ歸るといふ事を聞いたが、若しさうなつたら自分も斷然歸朝する。氣違ひじみた仕業とお笑ひになるかも知れないが、自分には何う考へて見てもそれより外に道はない。葉子に離れて路傍の人の間に伍したらそれこそ狂氣になるばかりだらう。今まで打ち明けなかつたが、自分は日本でも屈指な豪商の身內に一人子として生れながら、體が弱いのと母が繼母である爲めに、父の慈悲から洋行する事になつたが、自分には故國が慕はれるばかりでなく、葉子のやうに親しみを覺えさしてくれた人はないので、葉子なしには一刻も外國の土に足を止めてゐる事は出來ぬ。兄弟のない自分には葉子が前世からの姉とより思はれぬ。自分を憐れんで弟と思つてくれ。せめては葉子の聲の聞こえる所顏の見える所にゐるのを許してくれ。自分はそれだけの憐れみを得たいばかりに、家族や後見人の譏りも何んとも思はずに歸國するのだ。事務長にもそれを許してくれるやうに賴んで貰ひたい。といふ事が、少し甘い、然し眞率な熱情をこめた文體で長々と書いてあつたのだつた。

葉子は木村が問ふまゝに包まず岡との關係を話して聞かせた。木村は考へ深くそれを聞いてゐたが、そんな人なら是非會つて話をして見たいと云ひ出した。自分より一段若いと見ると、かくばかり寛大になる木村を見て葉子は不快に思つた。よし、それでは岡を通して倉地との關係を木村に知らせてやらう。而して木村が嫉妬と憤怒とで眞黑になつて歸つて來た時、それを思ふまゝ操つて又元の鞘に納めて見せよう。さう思つて葉子は木村の云ふまゝに任せて置いた。

次ぎの朝、木村は深い感激の色を湛へて船に來た。而して岡と會見した時の樣子を委しく物語つた。岡はオリエンタル・ホテルの立派な一室にたつた一人でゐたが、そのホテルには田川夫妻も同宿なので、日本人の出入りがうるさいと云つて困つてゐた。木村の訪問したといふのを聞いて、ひどくなつかしさうな樣子で出迎へて、兄でも敬ふやうにもてなして、稍々落ち付いてから隱し立てなく眞率に葉子に對する自

分の憧憬の程を打ち明けたので、木村は自分の云はうとする告白を、他人の口からまざ〳〵と聞くやうな切な情にほだされて、貰ひ泣きまでしてしまつた。二人は互に相憐れむといふやうななつかしみを感じた。是れを縁に木村は何處までも岡を弟とも思つて親しむ積りだ。が、日本に歸る決心だけは思ひ止まるやうに勸めて置いたと云つた。岡はさすがに育ちだけに事務長と葉子との間のいきさつを想像に任せてはしたなく木村に語る事はしなかつたらしい。木村はその事に就いては何んとも云はなかつた。葉子の期待は全く外づれてしまつた。役者下手な爲めに折角の芝居が芝居にならずにしまつた事を物足らなく思つた。然しこの事があつてから岡の事が時々葉子の頭に浮ぶやうになつた。女にしてもみまほしいかの華車な青春の姿がどうかするといとしい思ひ出となつて葉子の心の隅に潛むやうになつた。

船がシヤトルに着いてから五六日經つて、木村は田川夫妻にも面會する機會を造つたらしかつた。その頃から木村は突然傍目にもそれと氣が附く程考へ深くなつて、ともすると葉子の言葉すら聞き落して慌てたりする事があつた。而して或る時とう〳〵一人胸の中には納めてゐられなくなつたと見えて、

「私にやあなたが何故あんな人と近しくするか分りませんがね」

と事務長の事を噂のやうに云つた。葉子は少し腹部に痛みを覺えるのを殊更ら誇張して脇腹を左手で抑へて、眉をひそめながら聞いてゐたが、尤もらしく幾度も點頭いて、

「それは本當に仰しやる通りですから何も好んで近づきたいとは思はないんですけれども、これまで隨分世話になつてゐますしね、それにあ見えてゐて思ひの外親切氣のある人ですから、ボーイでも水夫でも怖がりながらなついてゐますわ。おまけに私お金まで借りてゐますもの」

とさも當惑したらしく云ふと、

「あなたお金は無しですか」

木村は葉子の當惑さを自分の顏にも現はしてゐた。

「それはお話したぢやありませんか」

「困つたなあ」

木村は餘程困り切つたらしく握つた手を鼻の下にあてがつて、下を向いたまゝ暫らく思案に暮れてゐたが、

「いくら程借りになつてゐるんです」

「さあ診察料や滋養品で百圓近くにもなつてゐますか知らん」

「あなたは金は全く無しですね」

木村は更に繰り返して云つて溜息をついた。葉子は物慣れぬ弟を教へいたはるやうに、

「それに萬一私の病氣がよくならないで、一先づ日本へでも歸るやうになれば、なほ〳〵歸りの船の中では世話にならなければならないでせう。……でも大丈夫そんな事はないとは思ひますけれども、先き〴〵までの考へをつけておくのが旅にあれば一番大事ですもの」

木村はなほも握つた手を鼻の下に置いたなり、何んにも云はず、身動きもせず考へ込んでゐた。

葉子は術なささうに木村のその顏を面白く思ひながらまじ〳〵と見やつてゐた。

木村はふと顏を上げてしげ〳〵と葉子を見た。何かそこに字でも書いてありはしないかとそれを讀むやうに。而して默つたまゝ深々と歎息した。

「葉子さん。私は何から何まであなたを信じてゐるのがいゝ事なのでせうか。あなたの身の爲めばかり思つても云ふ方がいゝかとも思ふんですが……」

「では仰しやつて下さいましな何んでも」
葉子の口は少し親しみを籠めて冗談らしく答へてゐたが、その眼からは木村を默らせるだけの光が射られてゐた。輕はずみな事を苟くも云つて見るがいゝ、頭を下げさせないでは置かないから。さうその眼はたしかに云つてゐた。

　木村は思はず自分の眼をたじろがして默つてしまつた。葉子は片意地にも眼で續けさまに木村の顏を鞭つた。木村はその笞の一つ〳〵を感ずるやうにどぎまぎした。

「さ、仰しやつて下さいまし……さ」
葉子はその言葉には何處までも好意と信賴とを罩めて見せた。木村は矢張り躊躇してゐた。葉子はいきなり手を延ばして木村を寢臺に引きよせた。而して半分起き上つてその耳に近く口を寄せながら、

「あなた見たいに水臭い物の仰しやり方をなさる方もないもんね。何んとでも思つていらつしやる事を仰しやつて下さればいゝぢやありませんか。……あ、痛い……いゝえさして痛くもないの。何を思つていらつしやるんだか仰しやつて下さいまし、ね、さ。何んでせうねえ。伺ひたい事ね。そんな他人行儀は……あ、あ、痛い、おゝ痛い……一寸此處のところを押へて下さいまし。……さし込んで來たやうで……あ、あ」

と云ひながら、眼をつぶつて、床の上に寢倒れると、木村の手を持ち添へて自分の脾腹を押へさして、つらさうに齒を喰ひしばつてシーツに顏を埋めた。肩でつく息氣がかすかに雪白のシーツを震はした。

　木村はあたふたしながら、今までの言葉などはそつちのけにして介抱にかゝつた。

二十一

　繪島丸はシヤトルに着いてから十二日目に纜を解いて歸航する筈になつてゐた。その出發があと三日になつた十月十五日に、木村は、船醫の興錄から、葉子は何うしても一先づ歸國させる方が安全だといふ最後の宣告を下されてしまつた。木村はその時にはもう大體覺悟を決めてゐた。歸らうと思つてゐる葉子の下心を朧げながら見て取つて、それを飜へす事は出來ないと諦めてゐた。運命に從順な羊のやうに、然し執念く將來の希望を命にして、現在の不滿に服從しようとしてゐた。

　緯度の高いシヤトルに冬の襲ひかゝつて來る樣はすさまじいものだつた。海岸線に沿うて遙か遠くまで連續して見渡されるロッキーの山々はもうたつぷりと雪がかゝつて、穩やかな夕空に現はれ慣れた雲の峰も、古綿のやうに形の崩れた色の寒い霰雲に變つて、人をおびやかす白いものが、今にも地を拂つて降りおろして來るかと思はれた。海沿ひに生え揃つた亞米利加松の翠ばかりが毒々しい程黑ずんで眼に立つばかりで、濶葉樹の類は、何時の間にか、葉を拂ひ落した枝先を針のやうに鋭く空に向けてゐた。シヤトルの町並みがあると思はれる邊からは――船の繫がれてゐる處から市街は見えなかつた――急に煤煙が立ち增さつて、忙はしく冬支度を整へながら、やがて北半球を包んで攻め寄せて來る眞白な寒氣に對して覺束ない抵抗を用意するやうに見えた。ポッケットに兩手をさし入れて、頭を縮め氣味に、波止場の石疊を步き廻る人々の姿にも、不安と焦燥との窺はれる忙はしい自然の移り變りの中に、繪島丸は慌たゞしい發航の準備をし始めた。絞盤の齒車のきしむ音が船首と船尾とからやかましく冴え返つて聞こえ始めた。

　木村はその日も朝から葉子を訪れて來た。殊に青白く見える顏付きは、何かわく〳〵と胸の中に煮え返る想ひをまざ〳〵と裏切つて、見る

人の憐れを誘ふ程だつた。背水の陣と自分でも云つてゐるやうに、亡父の財產をありつたけ金に代へて、手つ拂ひに日本の雜貨を買ひ入れて、こちらから通知書一つ出せば、何時でも日本から送つてよこすばかりにしてあるものの、手許には些かの錢も殘つてはゐなかつた。葉子が來たならばと金の上にも心の上にもあてにしてゐたのが見事に外づれてしまつて、葉子が歸るにつけては、無けなしの所から又々何んとかしなければならないはめに立つた木村は、二三日の中に、糠喜びも一時の間で、孤獨と冬とに圍まれなければならなかつたのだ。

葉子は木村が結局事務長にすがり寄つて來る外に道のない事を察してゐた。

木村は果して事務長を葉子の部屋に呼び寄せてもらつた。事務長はすぐやつて來たが、服なども仕事着のまゝで何か餘程せはしさうに見えた。木村はまあと云つて倉地に椅子を與へて、今日は毎時のすげない態度に似ず、折り入つて色々と葉子の身の上を賴んだ。事務長は始めの忙はしさうだつた樣子に引きかへて、どつしりと腰を据ゑて正面から例の大きく木村を見やりながら、眞身に耳を傾けた。木村の樣子の方が却つてそは／＼しく眺めやられた。

木村は大きな紙入れを取り出して、五十弗の切手を葉子に手渡しした。

「何もかも御承知だから倉地さんの前で云ふ方が世話なしだと思ひますが、何んと云つてもこれだけしか出來ないんです。こ、これです」

と云つて淋しく笑ひながら、兩手を出して擴げて見せてから、チョッキをたゝいた。胸にかゝつてゐた重さうな金鎖も、四つまで嵌められてゐた指輪の三つまでも失くなつてゐて、たつた一つ婚約の指輪だけが貧乏臭く左の指にはまつてゐるばかりだつた。葉子はさすがに「まあ」と云つた。

「葉子さん、私はどうにでもします。男一匹なりや何處にころがり込んだからつて、――そんな經驗も面白い位のものですが、これんばかりぢやあなたが足りなからうと思ふと、面目もないんです。倉地さん、あなたにはこれまででさへいゝ加減世話をしていたゞいて何んとも濟みませんですが私共二人は打ち明け申した所、かう云ふていたらくなんです。横濱へさへおとどけ下さればその先きは又どうにでもしますから、若し旅費にでも不足しますやうでしたら、御迷惑序でに何んとかしてやつて頂く事は出來ないでせうか」

事務長は腕組みをしたまゝまじ／＼と木村の顏を見やりながら聞いてゐたが、

「あなたはちつとも持つとらんのですか」

と聞いた。木村はわざと快活に强ひて聲高く笑ひながら、

「綺麗なもんです」

と又チョッキをたゝくと、

「そりやいかん。何、船賃なんぞ入りますものか。東京で本店にお拂ひになればいゝんぢやし、横濱の支店長も萬事心得とられるんだで、御心配入りませんわ。そりやあなたお持ちになるがいゝ。外國にゐて文なしでは心細いもんですよ」

と例の嗄辛聲でやゝ不機嫌らしく云つた。その言葉には不思議に重々しい力が罩つてゐて、木村は暫らく彼是れと押問答をしてゐたが、結局事務長の親切を無にする事の氣の毒さに、直な心からなほ色々と旅中の世話を賴みながら、又大きな紙入れを取り出して切手をたゝみ込んでしまつた。

「よし／＼それで何も云ふ事はなし。早月さんは俺しが引き受けた」

と不敵な微笑を浮べながら、事務長は始めて葉子の方を見返つた。

葉子は二人を眼の前に置いて、いつものやうに見比べながら二人の會話を聞いてゐた。當り前なら、葉子は大抵の場合、弱いものの味方をして見るのが常だつた。如何な時でも、強いものがその強味を振りかざして弱い者を壓迫するのを見ると、葉子はかつとなつて、理が非でも弱いものを勝たしてやりたがつた。今の場合木村は單に弱者であるばかりでなく、その境遇も慘めな程便りない苦しいものである事は存分に知り抜いてゐながら、木村に對しての同情は不思議にも湧いて來なかつた。齢の若さ、姿のしなやかさ、境遇のゆたかさ、才能の華やかさといふやうなものを便りにする男達の蠱惑の力は、事務長の前では吹けば飛ぶ塵の如く對照された。この男の前には、弱いものの哀れよりも醜さがさらけ出された。

何んといふ不幸な青年だらう。若い時に父親に死に別れてから、萬事思ひのまゝだつた生活からいきなり不自由な浮世のどん底に抛り出されながら、めげもせずにせつせと働いて、後指をさゝれないだけの世渡りをして、誰れからも働きのある行末頼もしい人と思はれながら、それでも心の中の淋しさを打ち消す爲めに思ひ入つた戀人は仇し男に反いてしまつてゐる。それを又さうとも知らずに、その男の情けにすがつて、消えるに決つた約束をのがすまいとしてゐる。……葉子は強ひて自分を説服するやうにかう考へて見たが、少しも身にしみた感じは起つて來ないで、動ゝもすると笑ひ出したいやうな氣にすらなつてゐた。

「よし〳〵それで何も云ふ事はなし。早月さんは俺しが引き受けた」

といふ聲と不敵な微笑とがどやすやうに葉子の心の戸を打つた時、葉子も思はず微笑を浮べてそれに應じようとした。が、その瞬間、眼ざとく木村の見てゐるのに氣がついて、顏には笑ひの影は微塵も現はさなかつた。

「俺しへの用はそれだけでせう。ぢや忙はしいで行きますよ」

とぶつきらぼうに云つて事務長が部屋を出て行つてしまふと、殘つた二人は妙にてれて、暫らくは互に顏を見合はすのも憚つて默つたまゝでゐた。

事務長が行つてしまふと葉子は急に力が落ちたやうに思つた。今までの事が丸で芝居でも見て樂しんでゐたやうだつた。木村のやる瀨ない心の中が急に葉子に逼つて來た。葉子の眼には木村を憐れむとも自分を憐れむとも知れない涙がいつの間にか宿つてゐた。

木村は痛ましげに默つたまゝで暫らく葉子を見やつてゐたが、

「葉子さん今になつてさう泣いて貰つちや私が堪りませんよ。機嫌を直して下さい。又いゝ日も廻つて來るでせうから。神を信ずるもの――さう云ふ信仰が今あなたにあるか何うか知らないが――お母さんがあゝいふ堅い信者でありなさつたし、あなたも仙臺時分には確かに信仰を持つてゐられたと思ひますが、こんな場合には尚更ら同じ神樣から來る信仰と希望とを持つて進んで行きたいものだと思ひますよ。何事も神樣は知つてゐられる……そこに私は撓まない希望をつないで行きます」

決心した所があるらしく力強い言葉でかう云つた。何の希望！　葉子は木村の事については、木村の所謂神樣以上に木村の未來を知りぬいてゐるのだ。木村の希望といふのはやがて失望に而して絶望に終るだけのものだ。何の信仰！　何の希望！　木村は葉子が据ゑた道を――行きどまりの袋小路を――天使の昇り降りする雲の梯のやうに思つてゐる。あゝ何の信仰！

葉子はふと同じ眼を自分に向けて見た。木村

を勝手氣儘にこづき廻す威力を備へた自分は又誰れに何者に勝手にされるのだらう。何處かで大きな手が情けもなく容赦もなく冷然と自分の運命を操つてゐる。木村の希望が果敢なく斷ち切れる前、自分の希望が逸早く斷たれてしまはないとどうして保障する事が出來よう。木村は善人だ。自分は惡人だ。葉子はいつの間にか純な感情に捕へられてゐた。

「木村さん。あなたは屹度、仕舞には屹度祝福をお受けになります……どんな事があつても失望なさつちやいやですよ。あなたのやうな善い方が不幸にばかりお遇ひになる譯がありませんわ。……私は生れるとから呪はれた女なんですもの。神、本當に神樣を信ずるより……信ずるより憎む方が似合つてゐるんです……ま、聞いて……でも私卑怯はいやだから信じます……神樣は私見たいなものを何うなさるか、しつかり眼を明いて最後まで見てゐます」

と云つてゐる中に誰れにともなく口惜しさが胸一杯にこみ上げて來るのだつた。

「あなたはそんな信仰はないと仰しやるでせうけれども……でも私にはこれが信仰です。立派な信仰ですもの—」

といつていきつぱり思ひ切つたやうに、火のやうに熱く眼に溜つたまゝで流れずにゐる涙を、ハンケチでぎゆつと押し拭ひながら、黯然と頭を垂れた木村に、

「もうやめませうこんなお話。こんな事を云つてると、云へば云ふ程先きが暗くなるばかりです。ほんとに思ひ切つて不仕合せな人はこんな事をつべこべと口になんぞ出しはしませんわ。ね、いや、あなたは自分の方から滅入つてしまつて、私の云つた事位で何んですねえ、男の癖に—」

木村は返事もせずに眞靑になつて俯向いてゐた。

そこに「御免なさい」と云ふかと思ふと、いきなり戸を開けて這入つて來たものがあつた。木村も葉子も不意を打たれて氣先きをくじかれながら、見ると、何日ぞや錨綱で足を怪我した時、葉子の世話になつた老水夫だつた。彼れはとうとう跛脚になつてゐた。而して水夫のやうな仕事には迚も役に立たないから、幸ひオークランドに小農地を持つて兎や角暮しを立ててゐる甥を尋ねて厄介になる事になつたので、禮かたがた暇乞ひに來たといふのだつた。葉子は紅くなつた眼を少し恥かしげにまたゝかせながら、色々と慰めた。

「何ねから老いぼれちや、こんな稼業をやつてるがてんでうそなれど、事務長さんとボンスン（水夫長）とが可哀さうだと云つて、使つてくれるで、いゝ氣になつたが罰あたつたんだね」

と云つて臆病に笑つた。葉子がこの老人を憐れみいたはる樣は傍目にもいぢらしかつた。日本には傳言を頼むやうな近親さへない身だといふやうな事を聞く度に、葉子は泣き出しさうな顏をして合點々々してゐたが、仕舞には木村の止めるのも聞かず寢床から起き上つて、木村の持つて來た果物をありつたけ籃につめて、

「陸に上ればいくらもあるんだらうけれども、これを持つてお出で。而してその中に果物でなく這入つてゐるものがあつたら、それもお前さんに上げたんだからね、人に取られたりしちやいけませんよ」

と云つてそれを渡してやつた。

老人が來てから葉子は夜が明けたやうに始めて晴れやかな普段の氣分になつた。而して例の惡戯らしいにこ〳〵した愛嬌を顏一面に湛へて、

「何んといふ氣さくなんでせう。私あんなお爺さんのお内儀さんになつて見たい……だから

ね、いゝものを遣つちまつた」

きよとりとしてまじ〲木村のむつつりとした顏を見やる樣子は大きな子供とより思へなかつた。

「あなたから頂いたエンゲーヂ・リングね、あれをやりましてよ。だつて何んにも無いんですもの」

何んとも云へない媚をつゝむおとがひが二重になつて、綺麗な齒並みが笑ひの漣ののやうに唇の汀に寄せたり返したりした。

木村は、葉子といふ女は何うしてかうむら氣で上すべりがしてしまふのだらう、情けないと云ふやうな表情を顏一面に漲らして、何か云ふべき言葉を胸の中で整へてゐるやうだつたが、急に思ひ捨てたといふ風で、默つたまゝでほつと深い溜息をついた。

それを見ると今まで珍らしく抑へつけられてゐた反抗心が又もや旋風のやうに葉子の心に起つた。「ねち〲さつたらない」と胸の中をいらいらさせながら、序での事に少しいぢめてやらうといふ企らみが頭を擡げた。然し顏は何處までも前のまゝの無邪氣さで、

「木村さんお土產を買つて頂戴な。愛や貞もですけれども、親類達や古藤さんなんぞにも何かしないぢや顏が向けられませんもの。今頃は田川の奧さんの手紙が五十川の小母さんの所に着いて、東京では屹度大騷ぎをしてゐるに違ひありませんわ。發つ時には世話を燒かせ、留守は留守で心配させ、ぼかんとしてお土產一つ持たずに歸つて來るなんて、木村も一體木村ぢやないかと云はれるのが、私死ぬよりつらいから、少しは驚く程のものを買つて頂戴。先程のお金で相當のものが買れるでせう」

木村は駄々兒をなだめるやうにわざとおとなしく、

「それは宜しい、買へとなら買ひもしますが、私はあなたがあれを纏つたまゝ持つて歸つたらと思つてゐるんです。大抵の人は橫濱に着いてから土產を買ふんですよ。その方が實際恰好ですからね。持ち合せもなしに東京に着きなさる事を思へば、土產なんかどうでもいゝと思ふんですがね」

「東京に着きさへすればお金はどうにでもしますけれども、お土產は……あなた橫濱の仕入れものはすぐ知れますわ……御覽なさいあれを」

と云つて棚の上に在る帽子入れのボール箱に眼をやつた。

「古藤さんに連れて行つて頂いてあれを買つた時は、隨分吟味した積りでしたけれども、船に來てから見てゐる中にすぐ厭きてしまひましたの。それに田川の奧さんの洋服姿を見たら、我慢にも日本で買つたものを被つたり着たりする氣にはなれませんわ」

さう云つてる中に木村は棚から箱をおろして中を覗いてゐたが、

「成程型はちつと古いやうですね。だが品はこれならこつちでも上の部ですぜ」

「だからいやですわ。流行おくれとなると値段の張つたものほど見つともないんですもの」

暫らくしてから、

「でもあのお金はあなた御入用ですわね」

木村は慌てて辯解的に、

「いゝえあれはどの道あなたに上げる積りでゐたんですから……」

と云ふのを葉子は耳にも入れない風で、

「ほんとに馬鹿ね私は……思ひやりも何んにもない事を申上げてしまつて、どうしませうねえ。……もう私どんな事があつてもそのお金だけは頂きません事よ。かう云つたら誰れが何んと云つたつて駄目よ」

ときつぱり云ひ切つてしまつた。木村は固より一度云ひ出したら後へは引かない葉子の日頃の

性分を知り抜いてゐた。で、云はず語らずの中に、その金は品物にして持つて歸らすより外に道のない事を觀念したらしかつた。

* * *

その晩事務長が仕事を終へてから葉子の部屋に來ると、葉子は何か氣に障へた風をして碌々もてなしもしなかつた。

「とう／＼形がついた。十九日の朝の十時だよ出航は」

と云ふ事務長の快活な言葉に返事もしなかつた。男は怪訝な顏付きで見やつてゐる。

「惡黨」

と暫らくしてから、葉子は一言これだけ云つて事務長を睨めた。

「何んだ？」

と尻上りに云つて事務長は笑つてゐた。

「あなた見たいな殘酷な人間は私始めて見た。木村を御覽なさい可哀さうに。あんなに手ひどくしなくつたつて……恐ろしい人つてあなたの事ね」

「何？」

と又事務長は尻上りに大きな聲で云つて寢床に近づいて來た。

「知りません」

と葉子はなほ怒つて見せようとしたが、いかにも刻みの荒い、單純な、他意のない男の顏を見ると、體の何處かが搖られる氣がして來て、わざと引き締めて見せた脣の邊から思はずも笑ひの影が潛み出た。

それを見ると事務長は苦い顏と笑つた顏とを一緒にして、

「何だい下らん」

と云つて、電燈の近所に椅子をよせて、大きな長い脚を投げ出して、夕刊新聞を大きく開いて眼を通し始めた。

木村とは引きかへて事務長がこの部屋に來ると、部屋が小さく見える程だつた。上向けた靴の大きさには葉子は吹き出したい位だつた。葉子は眼で撫でたりさすつたりするやうにして、この大きな子供見たやうな暴君の頭から足の先きまでを見やつてゐた。ごわつ／＼と時々新聞を折り返す音だけが聞こえて、積荷が荒かた片付いた船室の夜は靜かに更けて行つた。

葉子はさうしたまゝで ふと木村を思ひやつた。

木村は銀行に寄つて切手を現金に換へて、店の締らない中にいくらか買物をしてそれを小脇に抱へながら、夕食もしたゝめずに、ジャクソン街にあるといふ日本人の旅店に歸り着く頃には、町々に燈がともつて、寒い靄と煙との間を勞働者達が疲れた五體を引きずりながら歩いて行くのに澤山出遇つてゐるだらう。小さなストーヴに煙の多い石炭がぶし／＼燃えて、けばけばしい電燈の光だけが、鞭つやうにがらんとした部屋の薄穢さを煌々と照してゐるだらう。その光の下で、ぐら／＼する椅子に腰かけて、ストーヴの火を見つめながら木村が考へてゐる。暫らく考へてから淋しさうに見るともなく部屋の中を見廻して、又ストーヴの火に眺め入るだらう。その中にあの涙の出易い眼からは涙がほろほろと留度もなく流れ出るに違ひない。

事務長が音をたてて新聞を折り返した。

木村は膝頭に手を置いて、その手の中に顏を埋めて泣いてゐる。祈つてゐる。葉子は倉地から眼を放して、上眼を使ひながら木村の祈りの聲に耳を傾けようとした。途切れ／＼な切ない祈りの聲が涙にしめつて確かに……確かに聞こえて來る、葉子は眉を寄せて注意力を集注しながら、木村が本當にどう葉子を思つてゐるかをはつきり見窮めようとしたが、どうしても思ひ浮べて見る事が出來なかつた。

事務長がまた新聞を折り返す音を立てた。

葉子ははいゝつとして淀みに支へられた木の葉が又流れ始めたやうにすら〳〵と木村の所作を想像した。それが段々岡の上に移つて行つた。哀れな岡！　岡もまだ寐ないでゐるだらう。木村なのか岡なのかいつまでも〳〵寐ないで火の消えかゝつたストーヴの前に蹲つてゐるのは……更けるまゝにしみ込む寒さはそつと床を傳はつて足の先きから這ひ上つて來る。男はそれにも氣が付かぬ風で椅子の上にうなだれてゐる。凡ての人は眠つてゐる時に、木村の葉子も事務長に抱かれて安々と眠つてゐる時に……。

こゝまで想像して來ると小說に讀み耽つてゐた人が、ほつと溜息をしてばいゝたんと書物をふせるやうに、葉子も何とはなく深い溜息をしてはいゝつきりと事務長を見た。葉子の心は小說を讀んだ時の通り無關心の Pathos をかすかに感じてゐるばかりだつた。

「おやすみにならない？」

と葉子は鈴のやうに涼しい小さい聲で倉地に云つて見た。大きな聲をするのも憚られる程あたりはしいんと靜まつてゐた。

「うゝ」

と返事はしたが事務長は煙草をくゆらしたまま新聞を見續けてゐた、葉子も默つてしまつた。

やゝ暫らくしてから事務長もほいゝつと溜息をして、

「どれ寐るかな」

と云ひながら椅子から立つて寢床に這入つた。葉子は事務長の廣い胸に巣喰ふやうに丸まつて少し震へてゐた。

やがて子供のやうにすや〳〵と安らかな小さな鼾が葉子の脣から漏れて來た。

倉地は暗闇の中で長い間まんじりともせず大きな眼を開いてゐたが、やがて、

「おい惡黨」

と小さな聲で呼びかけて見た。

然し葉子の規則正しく樂しげな寢息は露ほども亂れなかつた。

眞夜中に、恐ろしい夢を葉子は見た。よくは覺えてゐないが、葉子は殺してはいけないいけないと思ひながら人殺しをしたのだつた。一方の眼は尋常に眉の下にあるが、一方のは不思議にも眉の上にある、その男の額から黑血がどくどくと流れた。男は死んでも物すごくにやりにやりと笑ひ續けてゐた。その笑ひ聲が木村々々と聞こえた。始めの中は聲が小さかつたが段々大きくなつて數も殖えて來た。その「木村々々」といふ數限りもない聲がうざ〳〵と葉子を取り捲き始めた。葉子は一心に手を振つてそこから遁れようとしたが手も足も動かなかつた。

木村……
木村　木村……
木村　木村　木村……
木村　木村　木村　木村……
木村　木村　木村　木村　木村……

ぞつとして寒氣を覺えながら、葉子は闇の中に眼をさました。恐ろしい凶夢の名殘りは、ど、ど、……と激しく高くうつ心臟に殘つてゐた。葉子は恐怖におびえながら一心に暗い中をおどおどと手探りに探ると事務長の胸に觸れた。

「あなた」

と小さい震へ聲で呼んで見たが男は深い眠りの中にあつた。何んとも云へない氣味惡さがこみ上げて來て、葉子は思ひ切り男の胸をゆすぶつて見た。

然し男は朽木のやうに感じなく熟睡してゐた。

二十二

何處かから菊の香がかすかに通つて來たやう

に思つて葉子は快い眠りから眼を覺ました。自分の側には、倉地が頭からすつぽりと蒲團を被つて、鼾も立てずに熟睡してゐた。料理屋を兼ねた旅館のに似合はしい華手な縮緬の夜具の上にはもう大分高くなつたらしい秋の日の光が障子越しに射してゐた。葉子は往復一箇月の餘を船に乘り續けてゐたので、船脚の搖めきの名殘りが殘つてゐて、體がふらり〳〵と搖れるやうな感じを失つてはゐなかつたが、廣い疊の間に大きな軟かい夜具をのべて、五體を思ふまゝ延ばして、一晩ゆつくりと眠り通したその心地よさは格別だつた。仰向けになつて、寒からぬ程度に暖まつた空氣の中に兩手を二の腕までむき出しにして、軟かい髮の毛に快い觸覺を感じながら、何を思ふともなく天井の木目を見やつてゐるのも、珍らしい事のやうに快かつた。

稍ゝ小半時もさうしたまゝでゐると、帳場でぼん〳〵時計が九時を打つた。三階にゐるのだけれどもその音はほがらかに乾いた空氣を傳つて葉子の部屋まで響いて來た。と、倉地がいきなり夜具をはね除けて床の上に上體を立てて眼をこすつた。

「九時だな今打つたのは」

と陸で聞くとをかしい程大きな皺がれ聲で云つた。どれ程熟睡してゐても、時間には鋭敏な船員らしい倉地の樣子が何んの事はなく葉子を微笑ました。

倉地が立つと、葉子も床を出た。而してその邊を片付けたり、煙草を吸つたりしてゐる間に(葉子は船の中で煙草を吸ふ事を覺えてしまつたのだつた)倉地は手早く顔を洗つて部屋に歸つて來た。而して制服に着かへ始めた。葉子はいそ〳〵とそれを手傳つた。倉地特有な西洋風に甘つたるいやうな一種の匂ひがその體にも服にもまつはつてゐた。それが不思議に何時でも葉子の心をときめかした。

「もう飯を喰つとる暇はない。又暫らく忙がしいで木つ葉微塵だ。今夜は晩いかも知れんよ。俺れ達には天長節も何もあつたもんぢやない」

さう云はれて見ると葉子は今日が天長節なのを思ひ出した。葉子の心はなほ〳〵寛濶になつた。

倉地が部屋を出ると葉子は緣側に出て手欄から下を覗いて見た。兩側に櫻並木のずつとならんだ紅葉坂は急勾配をなして海岸の方に傾いてゐる、そこを倉地の紺羅紗の姿が勢よく歩いて行くのが見えた。半分がた散り盡した櫻の葉は眞紅に紅葉して、軒並みに掲げられた日章旗が、風のない空氣の中に鮮やかに列んでゐた。その間に英國の國旗が一本交つて眺められるのも開港場らしい風情を添へてゐた。

遠く海の方を見ると稅關の棧橋に繋はれた四艘程の汽船の中に、葉子が乘つて歸つた繪島丸もまじつてゐた。眞青に澄み渡つた海に對して今日の祭日を祝賀する爲めに檣から檣にかけわたされた小旗が玩具のやうに眺められた。

葉子は長い航海の始終を一場の夢のやうに思ひやつた。その長旅の間に、自分の一身に起つた大きな變化も自分の事のやうではなかつた。葉子は何がなしに希望に燃えた活々した心で手欄を離れた。部屋には小ざつぱりと身支度をした女中が來て寢床を擧げてゐた。一間半の大床の間に飾られた大花活けには、菊の花が一抱へ分も活けられてゐて、空氣が動く度毎に仙人じみた香を漂はした。その香を嗅ぐと、ともするとまだ外國にゐるのではないかと思はれるやうな旅心が一氣にくだけて、自分はもう確かに日本の土の上にゐるのだと云ふ事がしつかり思はされた。

「いゝお日和ね。今夜あたりは忙がしんでせう」

と葉子は朝飯の膳に向ひながら女中に云つて見た。

「はい今夜は御宴會が二つばかり御座いましてね。でも濱の方でも外務省の夜會にいらつしやる方も御座いますから、たんと込み合ひは致しますまいけれども」
さう應へながら女中は、昨晩遲く着いて來た、一寸得體の知れないこの美しい婦人の素性を探らうとするやうに注意深い眼をやつた。葉子は葉子で「濱」と云ふ言葉などから、横濱と云ふ土地を形にして見るやうな氣持がした。
　短くなつてはゐても、何んにもする事なしに一日を暮らすかと思へば、その秋の一日の長さが葉子にはひどく氣になり出した。明後日東京に歸るまでの間に、買物でも見て歩きたいのだけれども、土産物は木村が例の銀行切手を崩して有り餘る程買つて持たしてよこしたし、手許には哀れな程より金は殘つてゐなかつた。一寸でもぢつとしてゐられない葉子は、日本で着ようとは思はなかつたので、西洋向きに註文した華手過ぎるやうな縮入れに手を通しながら、とつ追ひつ考へた。
「さうだ古藤に電話でもかけて見てやらう」
　葉子はこれはいゝ思案だと思つた。東京の方で親類達がどんな心持で自分を迎へようとしてゐるか、古藤のやうな男に今度の事がどう響いてゐるだらうか、これは單に慰みばかりではない、知つておかなければならない大事な事だつた。さう葉子は思つた。而して女中を呼んで東京に電話を繋ぐやうに賴んだ。
　祭日であつた故か電話は思ひの外早く繋がつた。葉子は少し惡戲らしい微笑を笑窪の入るその美しい顏に輕く浮べながら、階段を足早に降りて行つた。今頃になつて漸く床を離れたらしい男女の客がしどけない風をして廊下の此處彼處で葉子とすれ違つた。葉子はそれらの人々には眼もくれずに帳場に行つて電話室に飛び込むとぴつしりと戸をしめてしまつた。而して受話器を手に取るが早いか、電話に口を寄せて、
「あなた義一さん？　あゝさう。義一さんそれは滑稽なのよ」
とひとりでにすら〳〵と云つてしまつて我れながら葉子ははつと思つた。その時の浮々した輕い心持から云ふと、葉子にはさう云ふより以上に自然な言葉はなかつたのだけれども、それでは餘りに自分といふものを明白にさらけ出してゐたのに氣が付いたのだ。古藤は案の定答へ澁つてゐるらしかつた。頓には返事もしないで、ちやんと聞こえてゐるらしいのに、唯〻「何んです？」と聞き返して來た。葉子はすぐ東京の樣子を呑み込んだやうに思つた。
「そんな事どうでもよござんすわ。あなたお丈夫でしたの」
と云つて見ると「えゝ」とだけすげない返事が、機械を通してであるだけに殊更らすげなく響いて來た。而して今度は古藤の方から、
「木村……木村君はどうしてゐます。あなた會つたんですか」
とはつきり聞こえて來た。葉子はすかさず、
「はあ會ひましてよ。相變らず丈夫でゐます。難有う。けれども本當に可哀相でしたの。義一さん……聞こえますか。明後日私東京に歸りますわ。もう叔母の所には行けませんからね、あすこには行きたくありませんから……あのね、透矢町のね、雙鶴館……つがひの鶴……さう、お分りになつて？……雙鶴館に行きますから……あなた來て下される？……でも是非聞いていたゞかなければならない事があるんですから……よくつて？……さう是非どうぞ。明々後日の朝？　難有うきつとお待ち申してゐますから是非ですのよ」
　葉子がさう云つてゐる間、古藤の言葉は仕舞まで奥齒に物のはさまつたやうに重かつた。而して動ゝともすると葉子との會見を拒まうとす

る様子が見えた。若し葉子の銀のやうに澄んだ涼しい聲が、古藤を選んで哀訴するらしく響かなかつたら、古藤は葉子の云ふ事を聞いてはゐなかつたかも知れないと思はれる程だつた。

朝から何事も忘れたやうに快かつた葉子の氣持はこの電話一つの爲めに妙にこぢれてしまつた。東京に歸れば今度こそは中々容易ならざる反抗が待ちうけてゐるとは十二分に覺悟して、その備へをしておいた積りではゐたけれども、古藤の口うらから考へて見ると、面とぶつかつた實際は空想してゐたよりも重大であるのを思はずにはゐられなかつた。葉子は電話室を出ると今朝始めて顏を合はした内儀に帳場格子の中から挨拶されて、部屋にも伺ひに來ないで忙々しく言葉をかけるその仕打ちにまで不快を感じながら、匆々三階に引き上げた。

それからはもう本當に何んにもする事がなかつた。唯〻倉地の歸つて來るのばかりがいらいらする程待ちに待たれた。品川臺場沖あたりで打ち出す祝砲が幽かに腹にこたへるやうに響いて、子供等は往來でその頃頻りにはやつた南京花火をぱち〳〵と鳴らしてゐた。天氣がいゝので女中達ははしやぎ切つた冗談などを云ひ〳〵あらゆる部屋を明け放して、仰山らしくはたきや箒の音を立てた。而して唯〻一人この旅館では居殘つてゐるらしい葉子の部屋を掃除せずに、いきなり縁側に雜巾をかけたりした。それが出て行けがしの仕打ちのやうに葉子には思へば思はれた。

「何處か掃除の濟んだ部屋があるんでせう。暫らくそこを貸して下さいな。而してこゝも綺麗にして頂戴。部屋の掃除もしないで雜巾がけなぞしたつて何んにもなりはしないわ」

と少し劍を持たせて云つてやると、今朝來たのとは違ふ、横濱生れらしい、惡ずれのした中年の女中は、始めて縁側から立ち上つて小面倒さうに葉子を疊廊下一つを隔てた隣りの部屋に案内した。

今朝まで客がゐたらしく、掃除は濟んでゐたけれども、火鉢だの、炭取りだの、古い新聞だのが、部屋の隅にはまだ置いたまゝになつてゐた。開け放した障子から乾いた暖かい光線が疊の表三分ほどまで射しこんでゐる、そこに膝を横崩しに坐りながら、葉子は眼を細めて眩しい光線を避けつゝ、自分の部屋を片付けてゐる女中の氣配に用心の氣を配つた。どんな所にゐても大事な金目なものをくだらないものと一緒に抛り出しておくのが葉子の癖だつた。葉子はそこにいかにも伊達で寛濶な心を見せてゐるやうだつたが、同時に下らない女中づれが出來心でも起しはしないかと思ふと、細心に監視するのも忘れはしなかつた。かうして隣りの部屋に氣を配つてゐながらも、葉子は部屋の隅に几帳面に折りたゝんである新聞を見ると、日本に歸つてからまだ新聞と云ふものに眼を通さなかつたのを思ひ出して、手に取り上げて見た。テレビン油のやうな香がぷん〳〵するのでそれが今日の新聞である事がすぐ察せられた。果して第一面には「聖壽萬歳」と肉太に書かれた見出しの下に貴顯の肖像が掲げられてあつた。葉子は一箇月の餘も遠退いてゐた新聞紙を物珍らしいものに思つてざつと眼をとほし始めた。

一面にはその年の六月に伊藤内閣と交迭して出來た桂内閣に對して色々な註文を提出した論文が掲げられて、海外通信には支那領土内に於ける日露の經濟的關係を説いたチリコフ伯の演説の梗概などが見えてゐた。二面には富口といふ文學博士が「最近日本に於ける所謂婦人の覺醒」と云ふ續き物の論文を載せてゐた。福田と云ふ女の社會主義者の事や、歌人として知られた與謝野晶子女史の事などの名が現はれてゐるのを葉子は注意した。然し今の葉

子にはそれが不思議に自分とはかけ離れた事のやうに見えた。

三面に來ると四號活字で書かれた木部孤笻と云ふ字が眼に着いたので思はずそこを讀んで見る葉子はあつと驚かされてしまつた。

○某大汽船會社船中の大怪事
事務長と婦人船客との道ならぬ戀――
船客は木部孤笻の先妻

かう云ふ大仰な標題が先づ葉子の眼を小痛く射つけた。

「本邦にて最も重要なる位置にある某汽船會社の所有船○○丸の事務長は、先頃米國航路に勤務中、嘗て木部孤笻に嫁して程もなく姿を晦ましたる莫連女某が一等船客として乘り込みゐたるをそゝのかし、その女を米國に上陸せしめず竊かに連れ歸りたる怪事實あり。而かも某女と云へるは米國に先行せる婚約の夫まである身分のものなり。船客に對して最も重き責任を擔ふべき事務長にかゝる不埒の舉動ありしは、事務長一個の失態のみならず、其汽船會社の體面にも影響する由々しき大事なり、事の子細は漏れなく本紙の探知したる所なれども、改悛の餘地を與へん爲め、暫らく發表を見合せおくべし。若しある期間を過ぎても、兩人の醜行改まる模樣なき時は、本紙は容赦なく詳細の記事を掲げて畜生道に陷りたる二人を懲戒し、併せて汽船會社の責任を問ふ事とすべし。讀者請ふ刮目してその時を待て」

葉子は下唇を噛みしめながらこの記事を讀んだ。一體何新聞だらうと、その時まで氣にも留めないでゐた第一面を繰り戻して見ると、麗々と「報正新報」と書してあつた。それを知ると葉子の全身は怒りの爲めに爪の先きまで青白くなつて、抑へつけても〳〵ぶる〳〵と震へ出した。「報正新報」と云へば田川法學博士の機關新聞だ。その新聞にこんな記事が現はれるのは意外でもあり當然でもあつた。田川夫人と云ふ女は何處まで執念く卑しい女なのだらう。田川夫人からの通信に違ひないのだ。報正新報はこの通信を受けると、讀者の好奇心を煽る爲めと、報道の先鞭をつけておく爲めに、逸早くあれだけの記事を載せて、田川夫人から更に委しい消息の來るのを待つてゐるのだらう。葉子は鋭くもかう推した。若しこれが外の新聞であつたら、倉地の一身上の危機でもあるのだから、葉子はどんな祕密な運動をしても、この上の記事の發表は揉み消さなければならないと腹を定めたに相違なかつたけれども、田川夫人が惡意を籠めてさせてゐる仕事だとして見ると、どの道書かずにはおくまいと思はれた。郵船會社の方で高壓的な交渉でもすれば兎に角、その外には道がない。くれ〴〵も憎い女は田川夫人だ……から一圖に思ひめぐらすと葉子は船の中での屈辱を今更にまざ〳〵と心に浮べた。

「お掃除が出來ました」

さう襖越しに云ひながら先刻の女中は顏も見せずにさつさと階下に降りて行つてしまつた。葉子は結句それを氣安い事にして、その新聞を持つたまゝ、自分の部屋に歸つた。何處を掃除したのだと思はれるやうな掃除の仕方で、はたきまでが違ひ棚の下におき忘られてゐた。過敏に几帳面で綺麗好きな葉子はもう堪らなかつた。自分でてい、い、きぱきとそこいらを片付けて置いて、パラゾルと手提げを取り上げるが否やその宿を出た。

、往來に出るとその旅館の女中が四五人早仕舞をして晝間の中を野毛山の大神宮の方にでも散歩に行くらしい後姿を見た。い、い、そそくさと朝の掃除を急いだ女中達の心も葉子には讀めた。葉子はその女達を見送ると何んといふ事なしに淋

しく思つた。

帶の間に挾んだまゝにしておいた新聞の切抜きが胸を燒くやうだつた。葉子は歩き〳〵それを引き出して手提げに仕舞ひかへた。旅館は出たが何處に行かうと云ふあてもなかつた葉子は俯向いて紅葉坂を下りながら、さしもしないパラゾルの石突きで霜解になつた土を一足々々突きさして歩いて行つた。何時の間にかじめじめした薄汚い狹い通りに來たと思ふと、端なくもいつか古藤と一緒に上つた相模屋の前を通つてゐるのだつた。「相模屋」と古めかしい字體で書いた置行燈の紙までがその時のまゝで煤けてゐた。葉子は見覺えられてゐるのを恐れるやうに足早にその前を通りぬけた。

停車場前はすぐそこだつた。もう十二時近い秋の日は華やかに照り滿ちて、思つたより數多い群衆が運河にかけ渡したいくつかの橋を賑やかに往來してゐた。葉子は自分一人が皆んなから振り向いて見られるやうに思ひなした。それが當り前の時ならば、どれ程多くの人にじろじろと見られようとも度を失ふやうな葉子ではなかつたけれども、たつた今忌々しい新聞の記事を見た葉子ではあり、いかにも西洋じみた野暮臭い綿入れを着てゐる葉子であつた。服裝に塵ほどでも批點の打ちどころがあると氣がひけてならない葉子としては、旅館を出て來たのが悲しい程後悔された。

葉子はとう〳〵稅關波止場の入口まで來てしまつた。その入口の小さな煉瓦造りの事務所には、年の若い監視補達が二重金釦の背廣に、海軍帽を被つて事務を取つてゐたが、そこに近づく葉子の樣子を見ると、昨日上陸した時から葉子を見知つてゐるかのやうに、その飛び放れて華手造りな姿に眼を定めるらしかつた。物好きなその人達は早くも新聞の記事を見て問題となつてゐる女が自分に違ひないと目星をつけてゐるのではあるまいかと葉子は何事につけても愚痴つぽくひけ目になる自分を見出した。葉子は然しさうした風に見つめられながらもそこを立ち去る事が出來なかつた。若しや倉地が晝飯でも喰べにあの大きな五體を重々しく動かしながら船の方から出て來はしないかと心待がされたからだ。

葉子はそろ〳〵と海岸通りをグランド・ホテルの方に歩いて見た。倉地が出て來れば、倉地の方でも自分を見つけるだらうし、自分の方でも後ろに眼はないながら、出て來たのを感付いて見せるといふ自信を持ちながら、後ろも振り向かずに段々波止場から遠ざかつた。海沿ひに立て連ねた石杭を繋ぐ嚴乘な鐵鎖には、西洋人の子供達が犢程な洋犬や、あまに附き添はれて事もなげに遊び戯れてゐた。而して葉子を見ると心安立てに無邪氣に微笑んで見せたりした。小さな可愛い子供を見るとどんな時どんな場合でも、葉子は定子を思ひ出して、胸がしめつけられるやうになつて、すぐ涙ぐむのだつた。この場合は殊更らさうだつた。見てゐられない程それらの子供達は悲しい姿に葉子の眼に映つた。葉子はそこから避けるやうに足をかへして又稅關の方に歩み近づいた。監視課の事務所の前を來たり往つたりする人數は絡繹として絶えなかつたが、その中に事務長らしい姿は更に見えなかつた。葉子は繪島丸まで行つて見る勇氣もなく、そこを幾度もあちこちして監視補達の眼にかゝるのもうるさかつたので、すご〳〵と稅關の表門を縣廳の方に引き返した。

二十三

その夕方倉地が埃にまぶれ汗にまびれて紅葉坂をすた〳〵と登つて歸つて來るまでも葉子は旅館の閾を跨がずに櫻の並木の下などを徘徊して待つてゐた。さすがに十一月となると夕暮

を催した空は見る〳〵薄寒くなつて風さへ吹き出してゐる。一日の行樂に遊び疲れたらしい人の群れに交つて不機嫌さうに額をしかめた倉地は眞向に坂の頂上を見つめながら近づいて來た。それを見やると葉子は一時に力を恢復したやうになつて、すぐ跳り出して來る惡戯心のまゝに、一本の櫻の木を楯に倉地をやり過ごしておいて、後ろから靜かに近づいて手と手とが觸れ合はんばかりに押し列んだ。倉地はさすがに不意を喰つてまじ〳〵と寒さの爲めに少し涙ぐんで見える大きな涼しい葉子の眼を見やりながら、「何處から湧いて出たんだ」と云はんばかりの顏付きをした。一つ船の中に朝となく夜となく一緒になつて寢起きしてゐたものを、今日始めて半日の餘も顏を見合はさずに過ごして來たのが思つた以上に物淋しく、同時にこんな所で思ひもかけず出遇つたが豫想の外に滿足であつたらしい倉地の顏付きを見て取ると、葉子は何もかも忘れて唯ゞ嬉しかつた。その眞黑に汚れた手をいきなり引つ掴んで熱い脣で嚙みしめて勞つてやりたい程だつた。然し思ひのままに寄り添ふ事すら出來ない大道であるのを何うしよう。葉子はその切ない心を拗ねて見せるより外なかつた。

「私もうあの宿屋には泊りませんわ。人を馬鹿にしてゐるんですもの。あなたお歸りになるなら勝手に獨りでいらつしやい」

「どうして……」

と云ひながら倉地は當惑したやうに往來に立ち止つてしげ〳〵と葉子を見なほすやうにした。

「これぢや（と云つて埃に塗れた兩手を擴げ襟頸を拔き出すやうに延ばして見せて澁い顏をしながら）何處にも行けやせんわな」

「だからあなたはお歸りなさいましと云つてるぢやありませんか」

さう冒頭をして葉子は倉地と押し竝んでそろそろ歩きながら、女將の仕打ちから、女中のふしだらまで尾鰭をつけて讒訴けて、早く雙鶴館に移つて行きたいとせがみにせがんだ。倉地は何か思案するらしくそつぽを見い〳〵耳を傾けてゐたが、やがて旅館に近くなつた頃もう一度立ち止つて、

「今日雙鶴館から電話で部屋の都合を知らしてよこす事になつてゐたがお前聞いたか……（葉子はさう云ひ附けられながら今まですつかり忘れてゐたのを思ひ出して、少しくてれたやうに首を振つた）……えゝわ、ぢや電報を打つてから先きに行くがいゝ。俺しは荷物をして今夜後から行くで」

さう云はれて見ると葉子は又一人だけ先きに行くのがいやでもあつた。と云つて荷物の始末には二人の中どちらか一人居殘らねばならない。

「どうせ二人一緒に汽車に乘る譯にも行くまい」

倉地がかう云ひ足した時葉子は危く、では今日の報正新報を見たかと云はうとする所だつたが、はつと思ひ返して喉の所で抑へてしまつた。

「何んだ」

倉地は見かけの割りに恐ろしい程敏捷に働く心で、顏にも現はさない葉子の躊躇を見て取つたらしくかう詰るやうに尋ねたが、葉子が何んでもないと應へると、少しも拘泥せずに、それ以上を問ひ詰めようとはしなかつた。

何うしても旅館に歸るのがいやだつたので、非常な物足らなさを感じながら、葉子はそのままそこから倉地に別れる事にした。倉地は力の籠つた眼で葉子をぢつと見て一寸點頭くと後を見ないでどん〳〵と旅館の方に濶歩して行つた。葉子は殘り惜しくその後姿を見送つてゐたが、それに何んと云ふ事もない輕い誇りを感じて微かな微笑みながら、倉地が登つて來た坂

道を一人で降つて行つた。

停車場に着いた頃にはもう瓦斯の灯がそこらに點つてゐた。葉子は知つた人に遇ふのを極端に恐れ避けながら、汽車の出るすぐ前まで停車場前の茶店の一と間に隱れてゐて一等室に飛び乘つた。だだつ廣いその客車には外務省の夜會に行くらしい三人の外國人が銘々、デコルテーを着飾つた婦人を介抱して乘つてゐるだけだつた。いつもの通りその人達は不思議に人を牽き付ける葉子の姿に眼を欹てた。けれども葉子はもう左手の小指を器用に折り曲げて、左の鬢のほつれ毛を美しくかき上げるあの嬌態をして見せる氣は無くなつてゐた。室の隅に腰かけて、手提げとパラソルとを膝に引きつけながら、たつた一人その部屋の中にゐるもののやうに鷹揚に構へてゐた。偶然顔を見合せても、葉子は張りのあるその眼を無邪氣に―本當にそれは罪を知らない十六七の乙女の眼のやうに無邪氣だつた―大きく見開いて相手の視線をはにかみもせず迎へるばかりだつた。先方の人達の年齢がどの位で容貌がどんな風だなどといふ事も葉子は少しも注意してはゐなかつた。その心の中には唯ゞ倉地の姿ばかりが色々に描かれたり消されたりしてゐた。

列車が新橋に着くと葉子はしとやかに車を出たが、丁度そこに、唐棧に角帶を締めた、箱丁とでも云へば云へさうな、氣の利いた若い者が電報を片手に持つて、眼ざとく葉子に近づいた。それが雙鶴館からの出迎へだつた。

横濱にも增して見るものにつけて聯想の群がり起る光景、それから來る強い刺戟……葉子は宿から廻された人力車の上から銀座通りの夜の有樣を見やりながら、危く幾度も泣き出さうとした。定子の住む同じ土地に歸つて來たと思ふだけでももう胸はわく／＼した。愛子も貞世もどんな恐ろしい期待に震へながら自分の歸るのを待ち侘びてゐるだらう。あの叔父叔母がどんな激しい言葉で自分をこの二人の妹に描いて見せてゐるか。構ふものか。何んとでも云ふがいい。自分は何うあつても二人を自分の手に取り戻して見せる。かうと思ひ定めた上は指もさゝせはしないから見てゐるがいゝ。……ふと人力車が尾張町の角を左に曲ると暗い細い通りになつた。葉子は目指す旅館が近づいたのを知つた。その旅館といふのは、倉地が色沙汰でなく贔屓にしてゐた藝者が或る財産家に落籍されて開いた店だと云ふので、倉地から豫め懸け合つておいたのだつた。人力車がその店に近づくに從つて葉子はその女將といふのにふとした懸念を持ち始めた。未知の女同志が出遇ふ前に感ずる一種の輕い敵愾心が葉子の心を暫らくは餘の事柄から切り放した。葉子は車の中で衣紋を氣にしたり、束髮の形を直したりした。

昔の煉瓦建てをそのまゝ改造したと思はれる漆喰塗の嚴乘な、角地面の一構へに來て、煌煌と明るい入口の前に車夫が梶棒を降ろすと、そこにはもう二三人の女の人達が走り出て待ち構へてゐた。葉子は裾前をかばひながら車から降りて、そこに立ち竝んだ人達の中からすぐ女將を見分ける事が出來た。脊丈けが思ひ切つて低く、額形も整つてはゐないが、三十女らしく分別の備はつた、いゝきかん氣らしい、垢ぬけのした人がそれに違ひないと思つた。葉子は思ひ設けた以上の好意をすぐその人に對して持つ事が出來たので、殊更ら快い親しみを持ち前の愛嬌に添へながら、挨拶をしようとすると、その人は事もなげにそれを遮つて、

「いづれ御挨拶は後ほど、嘸お寒う御座いませう。お二階へどうぞ」

と云つて自分から先きに立つた。居合せた女中達は眼はしを利かして色々と世話に立つた。入口の突當りの壁には大きなぼん／＼時計が一つ

かゝつてゐるだけで何んにもなかつた。その右手の嶮乘な踏み心地のいゝ階子段を上りつめると、他の部屋から廊下で切り放されて、十六疊と八疊と六疊との部屋が鍵形に續いてゐた。塵一つすゑずにきちんと掃除が届いてゐて、三箇所に置かれた鐵瓶から立つ湯氣で部屋の中は軟かく暖まつてゐた。

「お座敷へと申す所ですが、御氣散苦にこちらでおくつろぎ下さいまし……三間ともとつて御座いますが」

さう云ひながら女將は長火鉢の置いてある六疊の間へと案内した。

そこに坐つて一通りの挨拶を言葉少なに濟ますと、女將は葉子の心を知り拔いてゐるやうに、女中を連れて階下に降りて行つてしまつた。葉子は本當に暫らくなりとも一人になつて見たかつたのだつた。輕い暖かさを感ずるまゝに重い縮緬の羽織を脱ぎ捨てて、ありたけの懷中物を帶の間から取り出して見ると、凝りがちな肩も、重苦しく感じた胸もすが／＼しくなつて、可なり強い疲れを一時に感じながら、猫板の上に肘を持たせて居住ひを崩して凭れかゝつた。古びを帶びた蘆屋釜から鳴りを立てて白く湯氣の立つのも、綺麗にかきならされた灰の中に、堅さうな櫻炭の火が白い被衣の下でほんのりと赤らんでゐるのも、精巧な用箪笥の嵌め込まれた一間の壁に續いた器用な三尺床に、白菊を插した唐津燒きの釣花活けがあるのも、幽かにたきこめられた沈香の匂ひも、目のつんだ杉柾の天井板も、細つそりと磨きのかゝつた皮付きの柱も、葉子に取つては——重い、硬い、堅い船室から漸く解放されて來た葉子に取つてはなつかしくばかり眺められた。こゝこそは屈竟の避難所だと云ふやうに葉子はつく／＼とあたりを見廻した。而して部屋の隅にある生漆を塗つた桑の廣蓋を引き寄せて、それに手提げや懷中物を入れ終ると、飽く事もなくその縁から底にかけての圓味を持つた微妙な手觸りを愛で慈しんだ。

場所柄とてそこゝからこの界隈に特有な樂器の聲が聞こえて來た。天長節であるだけに今日は殊更らそれが賑やかなのかも知れない。戸外にはぽくりやあづま下駄の音が少し冴えて絶えずしてゐた。着飾つた藝者達が磨き上げた顏をぴり／＼するやうな夜寒に惜げもなく傳法に曝して、さすがに寒氣に足を早めながら、招ばれた所に繰り出して行くその樣子が、まざまざと履物の音を聞いたばかりで葉子の想像には描かれるのだつた。合乘りらしい人力車の轍の音も威勢よく響いて來た。葉子はもう一度、これは屈竟な避難所に來たものだと思つた。この界隈では葉子は眦を反して人から見られる事はあるまい。

珍らしくあつさりした、魚の鮮しい夕食を濟ますと葉子は風呂をつかつて、思ひ存分髮を洗つた。足しない船の中の淡水では洗つても洗つてもねち／＼と垢の取り切れなかつたものが、觸れば手が切れる程さば／＼と油が拔けて、葉子は頭の中まで輕くなるやうに思つた。そこに女將も食事を終へて話相手になりに來た。

「大變お遲う御座いますこと、今夜の中にお歸りになるでせうか」

さう女將は葉子の思つてゐる事を魁けに云つた。「さあ」と葉子もはつきりしない返事をしたが、小寒くなつて來たので浴衣を着かへようとすると、そこに袖だたみにしてある自分の衣物につく／＼愛想が盡きてしまつた。この邊の女中に對してもそんなしつこいけば／＼しい柄の衣物は二度と着る氣にはなれなかつた。さうなると葉子は遮二無二それが堪らなくなつて來るのだ。葉子はうんざりした樣子をして自分の衣物から女將に眼をやりながら、

「見て下さいこれを。この冬は米國にゐるのだ

とばかり決めてゐたので、あんなものを作つて見たんですけれども、我慢にももう着てゐられなくなりましたわ。後生。あなたの所に何か普段着の明いたのでもないでせうか」

「どうしてあなた。私はこれで御座んすもの」

と女將は剽輕にも氣輕くちやんと立ち上つて自分の脊丈けの低さを見せた。そして立つたまゝで暫らく考へてゐたが、踊りで仕込み拔いたやうな手つきではたと膝の上をたゝいて、

「ようございます。私一つ倉地さんをびつくらさして上げますわ。私の妹分に當るのに柄と云ひ年恰好といひ、失禮ながらあなた樣とそつくりなのがゐますから、それのを取寄せて見ませう。あなた樣は洗ひ髮でいらつしやるなり……いかゞ、私がすつかり仕立てて差上げますわ」

この思ひ付きは葉子には強い誘惑だつた。葉子は一も二もなく勇み立つて承知した。

その晩十一時を過ぎた頃に、纏めた荷物を人力車四臺に積み乘せて、倉地が雙鶴館に着いて來た。葉子は女將の入れ智慧でわざと玄關には出迎へなかつた。葉子は惡戲者らしく獨笑ひをしながら立て膝をして見たが、それには自分ながら氣がひけたので、右足を左の腿の上に積み乘せるやうにしてその足先きをとんびにして坐つて見た。丁度そこに可なり醉つたらしい樣子で、倉地が女將の案内も待たずにずしんずしんといふ足どりで這入つて來た。葉子と顏を見合はした瞬間には部屋を間違へたと思つたらしく、少し慌てて身を引かうとしたが、直ぐ櫛卷きにして黑襟をかけたその女が葉子だつたのに氣が付くと、いつもの澁いやうに顏を崩して笑ひながら、

「何んだ馬鹿をしくさつて」

とほざくやうに云つて、長火鉢の向座にどつかと胡坐をかいた。跟いて來た女將は立つたまゝ暫らく二人を見較べてゐたが、

「よう／＼……變てこなお内裏雛樣」

と陽氣にかけ聲をして笑ひこけるやうにぺちやんとそこに坐り込んだ。三人は聲を立てて笑つた。

と、女將は急に眞面目に返つて倉地に向ひ、

「こちらは今日の報正新報を……」

と云ひかけるのを、葉子はすばやく眼で遮つた。倉地は醉眼を女將に向けながら、

「何」

と尻上りに問ひ返した。

「さう早耳を走らすと聾と間違へられますとさ」

と女將は事もなげに受け流した。三人は又聲を立てて笑つた。

倉地と女將との間に一別以來の噂話が暫らくの間取り交はされてから、今度は倉地が眞面目になつた。而して葉子に向つてぶつきらぼうに、

「お前もう寢ろ」

と云つた。葉子は倉地と女將とを竝べて一と眼見たばかりで二人の間の潔白なのを見て取つてゐたし、自分が寢て後の相談と云うても、今度の事件を上手に纏めようといふについての相談だと云ふ事が呑み込めてゐたので、素直に立つてその座を外した。

中の十疊を隔てた十六疊に二人の寢床は取つてあつたが、二人の會話は折々可なりはつきり漏れて來た。葉子は別に疑ひをかけると云ふのではなかつたが、矢張りぢつと耳を傾けないではゐられなかつた。

何かの話の序でに入用な事が起つたのだらう、倉地は頻りに身のまはりを探つて、何かを取り出さうとしてゐる樣子だつたが、「あいつの手提けに入れたか知らん」といふ聲がしたので葉子ははつと思つた。あれには報正新報の切拔

きが入れてあるのだ。もう飛び出して行つても遲いと思つて葉子は斷念してゐた。やがて果して二人は切拔きを見つけ出した樣子だつた。

「何んだあいつも知つとつたのか」

思はず少し高くなつた倉地の聲がかう聞こえた。

「道理でさつき私がこの事を云ひかけるとあの方が眼で留めたんですよ。矢張り先方でもあなたに知らせまいとして。いぢらしいぢやありませんか」

さう云ふ女將の聲もした。而して二人は暫らく默つてゐた。

葉子は寢床を出てその場に行かうかとも思つた。然し今夜は二人に任せておく方がいゝと思ひ返して蒲團を耳まで被つた。而して大分夜が更けてから倉地が寢に來るまで快い安眠に前後を忘れてゐた。

二十四

その次ぎの朝女將と話をしたり、呉服屋を呼んだりしたので、日が可なり高くなるまで宿にゐた葉子は、いそ／＼ながら倒のけば／＼しい綿入れを着て、羽織だけは女將が借りてくれた、妹分といふ人の鳥羽黑の縮緬の紋付きにして旅館を出た。倉地は昨夜の夜更しにも係はらずその朝早く横濱の方に出懸けた後だつた。今日も空は菊日和とでも云ふ美しい晴れ方をしてゐた。

葉子はわざと宿で車を頼んで貰はずに、煉瓦通りに出てから綺麗さうな辻待ちを傭つてそれに乘つた。そして池の端の方に車を急がせた。定子を眼の前に置いて、その小さな手を撫でたり、絹絲のやうな髮の毛を弄ぶ事を思ふと葉子の胸は我れにもなく唯わく／＼とせき込んで來た。眼鏡橋を渡つてから突當りの大時計は見えながら中々そこまで車が行かないのをもどかしく思つた。膝の上に乘せた土産の玩具や小さな帽子などをやきもきしながらひねり廻したり、膝掛けの厚い地をぎゆつと握り締めたりして、逸る心を押し鎭めようとして見るけれどもそれを何うする事も出來なかつた。車が漸く池の端に出ると葉子は右、左、と細い道筋の角々で指圖した。而して岩崎の屋敷裏にあたる小さな横町の曲り角で車を乘り捨てた。

一箇月の間來ないだけなのだけれども、葉子にはそれが一年にも二年にも思はれたので、その界隈が少しも變化しないで元の通りなのが却つて不思議なやうだつた。じめ／＼した小溝に沿うて根際の腐れた黑板塀の立つてる小さな寺の境內を突つ切つて裏に廻ると、寺の貸地面にぽつゝり立つた一戸建ての小家が乳母の住む所だ。沒義道に頭を切り取られた高野槇が二本舊の姿で臺所前に立つてゐる、その二本に干竿を渡して小さな襦袢や、丸洗ひにした胴着が暖かい日の光を受けてぶら下つてゐるのを見ると葉子はもう堪らなくなつた。涙がぼろ／＼と多愛もなく流れ落ちた。家の中では定子の聲がしなかつた。葉子は氣を落ち着ける爲めに案內を求めずに入口に立つたまゝ、そつと垣根から庭を覗いて見ると、日あたりのいゝ緣側に定子がたつた一人、葉子にはしごき帶を長く結んだ後姿を見せて、一心不亂にせつせと少しばかりの壞れ玩具をいぢくり廻してゐた。何事にまれ眞劍な樣子を見せつけられると、――傍目もふらず畑を耕す農夫、踏切りに立つて子を背負つたまゝ旗をかざす女房、汗をしとゞに垂らしながら坂道に荷車を押す共稼ぎの夫婦――譯もなく涙につまされる葉子は、定子のさうした姿を一と眼見たばかりで、人間力ではどうする事も出來ない悲しい出來事にでも出遇つたやうに、しみ／＼と寂しい心持になつてしまつた。

「定ちやん」

涙を聲にしたやうに葉子は思はず呼んだ。定子が喫驚して後ろを振り向いた時には、葉子は戸を開けて入口を駈け上つて定子の側にすり寄つてゐた。父に似たのだらう痛々しい程華車作りた定子は、何處をどうしてしまつたのか、聲も姿も消え果てた自分の母が突然側近くに現はれたのに氣を奪はれた樣子で、頓には聲も出さずに驚いて葉子を見守つた。

「ママちやん」

もう聲が續かなかつた。

「定ちやんママだよ。よく丈夫でしたね。そしてよく一人でおとなにして……」

さう突然大きな聲で云つて定子は立ち上りざま臺所の方に駈けて行つた。

「婆やママちやんが來たのよ」

と云ふ聲がした。

「え！」

と驚くらしい婆やの聲が裏庭から聞こえた。

と、慌てたやうに臺所を上つて、定子を横抱きにした婆やが、被つてゐた手拭を頭から外づしながら轉がり込むやうにして座敷に這入つて來た。二人は向き合つて坐ると兩方とも涙ぐみながら無言で頭を下げた。

「ちよつと定ちやんをこつちにお貸し」

暫らくしてから葉子は定子を婆やの膝から受取つて自分の懷ろに抱きしめた。

「お孃さま……私にはもう何が何だかちつとも分りませんが、私は唯〻もう口惜う御座います。……どうしてかう早くお歸りになつたんで御座いますか……皆樣の仰しやる事を伺つてゐるとあんまり業腹で御座いますから……もう私は耳をふさいで居ります。あなたから伺つた所がどうせから年を取りますと腑に落ちる氣遣ひは御座いません。でもまあお體がどうかと思つてお案じ申して居りましたが、御丈夫で何よりで御座いました……何しろ定子樣がお可哀さうで……」

葉子に溺れ切つた婆やの口からさも口惜さうにかうした言葉がつぶやかれるのを、葉子は淋しい心持で聞かねばならなかつた。耄碌したと自分では云ひながら、若い時に亭主に死別れて立派に後家を通して後指一本指されなかつた昔氣質のしつかり者だけに、親類達の蔭口や噂で聞いた葉子の亂行には惘れ果ててゐながら、この世での唯〻一人の祕藏物として葉子の頭から足の先きまでも自分の誇りにしてゐる婆やの切ない心持は、ひし／＼と葉子にも通じるのだつた。婆やと定子……こんな純粹な愛情の中に取り圍まれて、落ち着いた、しとやかな、而して安穩な一生を過ごすのも、葉子は望ましいと思はないではなかつた。殊に婆やと定子とを眼の前に置いて、つゝましやかな過不足のない生活を眺めると、葉子の心は知らず／＼なじんで行くのを覺えた。

然し同時に倉地の事を一寸でも思ふと葉子の血は一時に湧き立つた。不穩な、その代り死んだも同然な一生が何んだ。純粹な、その代り冷えもせず熱しもしない愛情が何んだ。生きる以上は生きてるらしく生きないでどうしよう。愛する以上は命と取り代へつこをする位に愛せずにはゐられない。さうした衝動が自分でも何うする事も出來ない強い感情になつて、葉子の心を本能的に煽ぎ立てるのだつた。この奇怪な二つの矛盾が葉子の心の中には平氣で兩立しようとしてゐた。葉子は眼前の境界でその二つの矛盾を割合に困難もなく使ひ分ける不思議な心の廣さを持つてゐた。ある時には極端に涙脆く、ある時には極端に殘虐だつた。丸で二人の人が一つの肉體に宿つてゐるかと自分ながら疑ふやうな事もあつた。それが時には忌々しかつた、時には誇らしくもあつた。

「定ちやま。よう御座いましたね、ママちやん

お早くお歸りになつて。お立ちになつてからでもお聞き分けよくママのマの字も仰しやらなかつたんですけれども、どうかするとかうぼんやり考へてでもいらつしやるやうなのがお可哀さうで、一時はお體でも惡くなりはしないかと思ふ程でした。こんなでも中々心は働いていらつしやるんですからねえ」

と婆やは、葉子の膝の上に巢喰ふやうに抱かれて、默つたまゝ、澄んだ瞳で母の顏を下から覗くやうにしてゐる定子と葉子とを見較べながら、述懷めいた事を云つた。葉子は自分の頰を、暖かい桃の膚のやうに生毛の生えた定子の頰にすりつけながら、それを聞いた。

「お前のその氣性で分らないとお云ひなら、くど〳〵云つた所が無駄かも知れないから、今度の事については私何んにも話すまいが、家の親類達の云ふ事なんぞは屹と氣にしないでおくれよ。今度の船には飛んでもない一人の奧さんが乘り合はしてゐてね、その人が一寸した氣まぐれから有る事無い事取りまぜてこつちに云つてよこしたので、事あれかしと待ち構へてゐた人達の耳に這入つたんだから、これから先きだつてどんなひどい事を云はれるか知れたもんぢやないんだよ。お前も知つての通り私は生れ落ちるとから旋毛曲りぢやあつたけれども、あんなに周圍からこづき廻されさへしなければこんなになりはしなかつたのだよ。それは誰れよりもお前が知つてゝお呉れだわね。これからだつて私は私なりに押し通すよ。誰れが何んと云つたつて構ふもんですか。その積りでお前も私を見てゐておくれ。廣い世の中に私がどんな失策をしでかしても、心から思ひやつてくれるのは本當にお前だけだわ。……今度からは私もちよい〳〵來るだらうけれども、この上とも此子を頼みますよ。ね、定ちやん。よく婆やの云ふ事を聞いていゝ子になつて頂戴よ。ママちやんは此處にゐる時でもゐない時でも、いつでもあなたを大事に大事に思つてるんだからね。……さ、もうこんなむづかしいお話はよしてお晝のお支度でもしませうね。今日はママちやんがおいしい御馳走を作らへて上げるから定ちやんも手傳ひして頂戴ね」

さう云つて葉子は、氣輕さうに立ち上つて臺所の方に定子と連れだつた。婆やも立ち上りはしたがその顏は妙に冴えなかつた。そして臺所で働きながらも動ともすると内所で鼻をすゝつてゐた。

そこには葉山で木部孤笻と同棲してゐた時に使つた調度が今だに古びを帶びて保存されたりしてゐた。定子を側においてそんなものを見るにつけ、少し感傷的になつた葉子の心は涙に動かうとした。けれどもその日は何んと云つても近頃覺えない程しみ〴〵とした樂しさだつた。何事にでも器用な葉子は不足勝ちな臺所道具を巧みに利用して、西洋風な料理と菓子とを三品ほど作つた。定子はすつかり喜んでしまつて、小さな手足をまめ〳〵しく働かしながら、「はい〳〵」と云つて庖丁をあつちに運んだり、皿をこつちに運んだりした。三人は樂しく晝飯の卓に就いた。而して夕方まで水入らずにゆつくり暮した。

その夜は妹達が學校から來る筈になつてゐたので葉子は婆やの勸める晩飯も斷わつて夕方その家を出た。入口の所につくねんと立つて婆やに兩肩を支へられながら姿の消えるまで葉子を見送つた定子の姿がいつまでも〳〵葉子の心から離れなかつた。夕闇にまぎれた幌の中で葉子は幾度かハンケチを眼にあてた。

宿に着く頃には葉子の心持は變つてゐた。玄關に這入つて見ると、女學校でなければ履かれないやうな安下駄の汚くなつたのが、お客や女中達の氣取つた履物の中に交つて脫いであ

るのを見て、もう妹達が來て待つてゐるのを知つた。早速に出迎へに出た女將に、今夜は倉地が歸つて來たら他處の部屋で寢るやうに用意をしておいて貰ひたいと頼んで、靜々と二階に上つて行つた。

襖を開けて見ると二人の姉妹はぴつたりとくつゝき合つて泣いてゐた。人の足音を姉のそれだとは十分に知りながら、愛子の方は泣き顏を見せるのが氣まりが惡い風で、振り向きもせずに一入首垂れてしまつたが、貞世の方は葉子の姿を一と眼見るなり、跳るやうに立ち上つて激しく泣きながら葉子の懷ろに飛びこんで來た。葉子も思はず飛び立つやうに貞世を迎へて、長火鉢の傍の自分の座に坐ると、貞世はその膝に突つ伏してすゝり上げ〳〵可憐な背中に波を打たした。これ程までに自分の歸りを待ち侘びてもゐ、喜んでもくれるのかと思ふと、骨肉の愛着からも、妹だけは少くとも自分の掌握の中にあるとの滿足からも、葉子はこの上なく嬉しかつた。然し火鉢から遙か離れた向側に、恭しく居住ひを正して、愛子がひそ〳〵と泣きながら、規則正しくお辭儀をするのを見ると葉子はすぐ癪に障つた。どうして自分はこの妹に對して優しくする事が出來ないのだらうとは思ひつゝも、葉子は愛子の所作を見ると一々氣に障らないではゐられないのだ。葉子の眼は意地惡く劒を持つて冷やかに小柄で堅肥りな愛子を激しく見据ゑた。

「會ひたてからつけ〳〵云ふのも何んだけれども、何んですねえそのお辭儀のしかたは、他人行儀らしい。もつと打ち解けてくれたつていゝぢやないの」

と云ふと愛子は當惑したやうに默つたまゝ眼を上げて葉子を見た。その眼は然し恐れても恨んでもゐるらしくはなかつた。小羊のやうな、睫毛の長い、形のいゝ大きな眼が、涙に美しく濡れて夕月のやうにぽつかりと列んでゐた。悲しい眼付きのやうだけれども、悲しいと云ふのでもない。多恨な眼だ。多情な眼でさへあるかも知れない。さう皮肉な批評家らしく葉子は愛子の眼を見て不快に思つた。大多數の男はあんな眼で見られると、この上なく詩的な靈的な一瞥を受取つたやうにも思ふのだらう。そんな事さへ素早く考への中に附け加へた。貞世が廣い帶をして來てゐるのに、愛子が少し古びた袴をはいてゐるのさへ蔑まれた。

「そんな事はどうでもよう御座んすわ。さ、夕飯にしませうね」

葉子はやがて自分の妄念をかき掃ふやうにかう云つて、女中を呼んだ。

貞世は寵兒らしくすつかりはしやぎ切つてゐた。二人が古藤に連れられて始めて田島の塾に行つた時の樣子から、田島先生が非常に二人を可愛がつてくれる事から、部屋の事、食物の事、さすがに女の子らしく細かい事まで自分の一人の興に乘じて談り續けた。愛子も言葉少なに要領を得た口をきいた。

「古藤さんが時々は來て下さるの？」

と聞いて見ると、貞世は不平らしく、

「いゝえ、ちつとも」

「では御手紙は？」

「來てよ、ねえ愛姉さま。二人の所に同じ位づつ來ますわ」

と、愛子は控へ目らしく微笑みながら上目越しに貞世を見て、

「貞ちやんの方に餘計來る癖に」

と何んでもない事で爭つたりした。愛子は姉に向つて、

「塾に入れて下さると古藤さんが私達に、もうこれ以上私のして上げる事はないと思ふから、用がなければ來ません。その代り用があつたら何時でもさう云つておよこしなさいと仰し

やつたきり入らつしやいませんのよ。而してこちらでも古藤さんにお願ひするやうな用は何んにもないんですもの」
と云つた。葉子はそれを聞いて微笑みながら古藤が二人を築地に伴れて行つた時の樣子を想像して見た。例のやうに何處の玄關番かと思はれる風體をして、髮を刈る時の外剃らない顎鬚を一二分程も延ばして、巖乘な容貌や體格に不似合な羞かんだ口付で、田島といふ、男のやうな女學者と話をしてゐる樣子が見えるやうだつた。
暫らくそんな表面的な噂話などに時を過ごしてゐたが、いつまでもさうはしてゐられない事を葉子は知つてゐた。この年齡の違つた二人の妹に、どつちにも堪念の行くやうに今の自分の立場を話して聞かせて、惡い結果をその幼い心に殘さないやうに仕向けるのはさすがに容易な事ではなかつた。葉子は先刻から頻りにそれを案じてゐたのだ。
「これでも召上がれ」
食事が濟んでから葉子は米國から持つて來たキャンディーを二人の前に置いて、自分は煙草を吸つた。貞世は眼を丸くして姉のする事を見やつてゐた。
「姉さまそんなもの吸つていゝの？」
と會釋なく尋ねた。愛子も不思議さうな顏をしてゐた。
「えゝこんな惡い癖がついてしまつたの。けれども姉さんにはあなた方の考へても見られないやうな心配な事や困る事があるものだから、つい憂さ晴らしにこんな事も覺えてしまつたの。今夜はあなた方に判るやうに姉さんが話して上げて見るから、よく聞いて頂戴よ」
倉地の胸に抱かれながら、醉ひしれたやうにその巖乘な、日に焼けた、男性的な顏を見やる葉子の、乙女と云ふよりももつと子供らしい様子は、二人の妹を前に置いてきちんと居住ひを正した葉子の何處にも見出されなかつた。その姿は三十前後の、十分分別のある、しつかりした一人の女性を思はせた。貞世もさう云ふ時の姉に對する手心を心得てゐて、葉子から離れて眞面目に坐り直した。こんな時うつかりその威嚴を冒すやうな事でもすると、貞世にでも誰れにでも葉子は少しの容赦もしなかつた。然し見た所はいかにも慇懃に口を開いた。
「私が木村さんの所にお嫁に行くやうになつたのはよく知つてますね。米國に出懸けるやうになつたのもその爲めだつたのだけれどもね、もと〳〵木村さんは私のやうに一度前にお嫁入りした人を貰ふやうな方ではなかつたんだしするから、本當は私どうしても心は進まなかつたんですよ。でも約束だからちやんと守つて行くには行つたの。けれどもね先方に着いて見ると私の體の具合が何うもよくなくつて上陸は迚も出來なかつたから仕方なしに又同じ船で歸るやうになつたの。木村さんは何處までも私をお嫁にして下さる積りだから、私もその氣ではゐるのだけれども、病氣では仕方がないでせう。それに恥かしい事を打ち明けるやうだけれども、木村さんにも私にも有り餘るやうなお金がないものだから、行きも歸りもその船の事務長といふ大切な役目の方にお世話にならなければならなかつたのよ。その方が御親切にも私をこゝまで連れて歸つて下さつたばかりで、もう一度あなた方にも遇ふ事が出來たんだから、私はその倉地と云ふ方――倉はお倉の倉で、地は地球の地と書くの。三吉といふお名前は貞ちやんにも分るでせう――その倉地さんには本當にお禮の申しやうもない位なんですよ。愛さんなんかはその方の事で叔母さんなんぞから色々な事を聞かされて、姉さんを疑つてゐやしないかと思ふけれども、それには又それで面倒な譯のある事なのだから、夢にも人の

いふ事なんぞをそのまゝ受取つて貰つちや困りますよ。姉さんを信じてお呉れ、ね、よござんすか。私はお嫁なんぞに行かないでもいゝ、あなた方とかうしてゐる程嬉しい事はないと思ひますよ。木村さんの方にお金でも出來て、私の病氣が治りさへすれば結婚するやうになるかも知れないけれども、それは何時の事とも分らないし、それまでは私はかうしたまゝで、あなた方と一緒に何處かにお家を持つて樂しく暮しませうね。いゝだらう貞ちやん。もう寄宿なんぞにゐなくつてもよう御座んすよ」

「お姉さま私寄宿では夜になると本當は泣いてばかりゐたのよ。愛姉さんはよくお寢になつても私は小さいから悲しかつたんですもの」

さう貞世は白狀するやうに云つた。先刻まではいかにも樂しさうに云つてゐたその可憐な同じ脣から、こんな哀れな告白を聞くと葉子は一入しんみりした心持になつた。

「私だつてもよ。貞ちやんは宵の口だけくすくす泣いても後はよく寢てゐたわ。姉樣、私は今まで貞ちやんにも云はないでゐましたけれども……皆んなが聞こえよがしに姉樣の事を彼是れ云ひますのに、偶に惡いと思つて貞ちやんと叔母さんの所に行つたりなんぞすると、それは本當にひどい……ひどい事を仰しやるので、どつちに行つても口惜しう御座いましたわ。古藤さんだつてこの頃はお手紙さへ下さらないし……田島先生だけは私達二人を可哀相がつて下さいましたけれども……」

葉子の思ひは胸の中で煮え返るやうだつた。

「もういゝ勘忍して下さいよ。姉さんが矢張り至らなかつたんだから。お父さんがいらつしやればお互にこんないやな目には遇はないんだらうけれども（から云ふ場合葉子はおくびにも母の名は出さなかつた）親のない私達は肩身が狹いわね。まああなた方はそんなに泣いちや駄目。愛さん何んですねあなたから先きに立つて、姉さんが歸つた以上は姉さんに何んでも任して安心して勉強して下さいよ。そして世間の人を見返しておやり」

葉子は自分の心持を憤ろしく云ひ張つてゐるのに氣が付いた。何時の間にか自分までが激しく興奮してゐた。

火鉢の火は何時か灰になつて、夜寒が祕やかに三人の姉妹に遣ひよつてゐた。もう少し睡氣を催して來た貞世は、泣いた後の濃い眼を手の甲でこすりながら、不思議さうに興奮した青白い姉の顏を見やつてゐた。愛子は瓦斯の灯に顏を背けながらしく／＼と泣き始めた。

葉子はもうそれを止めようとはしなかつた。自分ですら聲を出して泣いて見たいやうな衝動をつき返し／＼水月の所に感じながら、火鉢の中を見入つたまゝ細かく震へてゐた。

生れかはらなければ恢復しやうのないやうな自分の越し方行く末が絕望的にはつきりと葉子の心を寒く引き締めてゐた。

それでも三人が十六疊に床を敷いて寢て大分たつてから、横濱から歸つて來た倉地が廊下を隔てた隣りの部屋に行くのを聞き知ると、葉子はすぐ起きかへつて暫らく妹達の寢息氣を窺つてゐたが、二人がいかにも無心に赤々とした頰をしてよく寢入つてゐるのを見窮めると、そつとどてらを引つかけながらその部屋を脫け出した。

二十五

それから一日置いて次ぎの日に古藤から九時頃に來るがいゝかと電話がかゝつて來た。葉子は十時過ぎにしてくれと返事をさせた。古藤に會ふには倉地が横濱に行つた後がいゝと思つたからだ。

東京に歸つてから叔母と五十川女史の所へ

は歸つた事だけを知らせては置いたが、どつちからも訪問は元よりの事一言半句の挨拶もなかつた。責めて來るなり慰めて來るなり、何んとかしさうなものだ。餘りと云へば人を踏みつけにした仕業だとは思つたけれども、葉子としては結句それが面倒がなくつていゝとも思つた。そんな人達に會つていさくと口をきくよりも、古藤と話しさへすれば、その口裏から東京の人達の心持も大體は判る。積極的な自分の態度はその上で決めても遅くはないと思案した。

雙鶴館の女將は本當に眼から鼻に拔けるやうに落度なく、葉子の影身になつて葉子の爲めに盡してくれた。その後ろには倉地がゐて、あの如何にも疎大らしく見えながら、人の氣もつかないやうな綿密な所にまで氣を配つて、采配を振つてゐるのは判つてゐた。新聞記者などが何處を何うして探り出したか、始めの中は押し強く葉子に面會を求めて來たのを、女將が手際よく追ひ拂つたので、近付きこそはしなかつたが遠巻きにして葉子の擧動に注意してゐる事などを、女將は眉をひそめながら話して聞かせたりした。本部の戀人であつたといふ事がひどく記者達の興味を牽いたやうに見えた。葉子は新聞記者と聞くと、雲へ上る程いやな感じを受けた。小さい時分に女記者にならうなどと人にも口外した覺えがある癖に、探訪などに來る人達の事を考へると一番賤しい種類の人間のやうに思はないではゐられなかつた。仙臺で、新聞社の社長と親佐と葉子との間に起つた事として不倫な捏造記事（葉子はその記事の中、母に關してはどの邊までが捏造であるか知らなかつた。少くとも葉子に關しては捏造だつた）が掲載されたばかりでなく、母の所謂寃罪は堂々と新聞紙上で雪がれたが、自分のはとう／＼そのまゝになつてしまつた、あの苦い經驗などが益々葉子の考へを頑なにした。葉子が報正新報の記事を見た時も、それほど田川夫人が自分を迫害しようとするなら、こちらも何處かの新聞を手に入れて田川夫人に致命傷を與へてやらうかと云ふ（道德を米の飯と同樣に見て生きてゐるやうな田川夫人に、その點に傷を與へて顔出しが出來ないやうにするのは容易な事だと葉子は思つた）企らみを自分獨りで考へた時でも、あの記者といふものを手なづけるまでに自分を墮落させたくないばかりにその目論見を思ひ止つた程だつた。

その朝も倉地と葉子とは女將を話相手に朝飯を食ひながら新聞に出たあの奇怪な記事の話をして、葉子が疾うにそれをちやんと知つてゐた事などを談り合ひながら笑つたりした。

「忙がしいにかまけて、あれはあのまゝにして居つたが……つは餘り短兵急にこつちから出しやばると足許を見やがるで、……あれは何んとかせんと面倒だて」

と倉地はがら／＼と箸を膳に捨てながら、葉子から女將に眼をやつた。

「さうですともさ。下らない、あなた、あれであなたの御職掌にでもけちが附いたら本當に馬鹿々々しう御座んすわ。報正新報社になら私御懇意の方も一人や二人はいらつしやるから、何んなら私からそれとなくお話して見てもよう御座いますわ。私は又お二人とも今まであんまり平氣でいらつしやるんで、もう何んとかお話がついたのだとばかり思つてましたの」

と女將は怜しさうな眼に眞味な色を見せてかう云つた。倉地は無頓着に「さうさな」と云つたきりだつたが、葉子は二人の意見が略々一致したらしいのを見ると、いくら女將が巧みに立ち廻つてもそれを揉み消す事は出來ないと云ひ出した。何故と云へばそれは田川夫人が何か葉子を深く意趣に思つてさせた事で、報正新報にそれが現はれた譯は、その新聞が田川博士の機關

新聞だからだと說明した。倉地は田川と新聞との關係を始めて知つたらしい樣子で意外な顏付きをした。

「俺れは又興錄の奴……あいつはぺら／＼した奴で、右左のはつきりしない油斷のならぬ男だから、あいつの仕事かとも思つて見たが、成程それにしては記事の出かたが少し早過ぎるて」

さう云つてやをら立ち上りながら次ぎの間に着かへに行つた。

女中が膳部を片付け終らぬ中に古藤が來たと云ふ案內があつた。

葉子は一寸當惑した。誂へておいた衣類がまだ出來ないのと、着具合がよくつて、倉地からもしつくり似合ふと讃められるので、その朝も藝者のちよい／＼着らしい、黑繻子の襟の着いた、傳法な棒縞の身幅の狹い着物に、黑繻子と水色匹田の晝夜帶をしめて、どてらを引つかけてゐたばかりでなく、髮まで矢張り櫛卷きにしてゐたのだつた。えゝ、構ふものか、どうせ鼻をあかさせるならのつけからあかさせてやらう、さう思つて葉子はそのまゝの姿で古藤を待ち構へた。

昔のまゝの姿で、古藤は旅館といふよりも料理屋と云つた風の家の樣子に少し鼻じろみながら這入つて來た。而して飛び離れて風體の變つた葉子を見ると、尙更ら勝手が違つて、これがあの葉子なのかと云ふやうに驚きの色を隱し立てもせずに顏に現はしながら、ぢつとその姿を見た。

「まあ義一さん暫らく。お寒いのね。どうぞ火鉢によつて下さいましな。一寸御免下さいよ」

さう云つて、葉子はあでやかに上體だけを後ろにひねつて、廣蓋から紋付きの羽織を引き出して、坐つたまゝどてらと着直した。なまめかしい匂ひがその動作につれて密やかに部屋の中に動いた。葉子は自分の服裝がどう古藤に印象してゐるかなどを考へても見ないやうだつた。十年も着慣れた普段着で昨日も會つたばかりの弟のやうに親しい人に向ふやうなとりなしをした。古藤は頓には口もきけないやうに思ひ惑つてゐるらしかつた。多少垢になつた薩摩絣の衣物を着て、觀世撚の羽織紐にも、きちんとはいた袴にもその人の氣質が明らかに書き記してあるやうだつた。

「こんなで大變へんな所ですけれどもどうか氣樂になさつて下さいまし。それでないと何んだか改まつてしまつてお話がし憎くつていけませんから」

心置きない、而して古藤を信賴してゐる樣子を巧みにもそれとなく氣取らせるやうな葉子の態度は段々古藤の心を靜めて行くらしかつた。古藤は自分の長所も短所も無自覺でゐるやうな、その癖何處かに鋭い光のある眼を擧げてまじ／＼と葉子を見始めた。

「何より先きにお禮。難有う御座いました妹達を。一昨日二人でこゝに來て大變喜んでゐましたわ」

「何んにもしやしない、唯だ塾に連れて行つて上げただけです。御丈夫ですか」

古藤はありのまゝをありのまゝに云つた。そんな序曲的な會話を少し續けてから葉子は徐ろに探り知つておかなければならないやうな事柄に話題を向けて行つた。

「今度こんなひよんな事で私亞米利加に上陸もせずに歸つて來る事になつたんですが、本當を仰しやつて下さいよ、あなたは一體私を何うお思ひになつて」

葉子は火鉢の緣に兩肘をついて、兩手の指先きを鼻の先きに集めて組んだりほどいたりしながら、古藤の顏に浮び出る總ての意味を讀まうとした。

「え、、本當を云ひませう」

さう決心するもののやうに古藤は云つてから一と膝乗り出した。

「この十二月に兵隊に行かなければならないものだから、それまでに研究室の仕事を片付くものだけは片づけて置かうと思つたので、何もかも打ち捨ててゐましたから、この間横濱からあなたの電話を受けるまでは、あなたの歸つて來られたのを知らないでゐたんです。尤も歸つて來られるやうな話は何處かで聞いたやうでしたが。而して何かそれには重大な譯があるに違ひないとは思つてゐましたが、所があなたの電話を切ると間もなく木村君の手紙が屆いて來たんです。それは多分繪島丸より一日か二日早く大北汽船會社の船が着いた筈だから、それが持つて來たんでせう。こゝに持つて來ましたが、それを見て僕は驚いてしまつたんです。隨分長い手紙だから後で御覽になるなら置いて行きませう。簡單に云ふと（さう云つて古藤はその手紙の必要な要點を心の中で整頓するらしく暫らく默つてゐたが）木村君はあなたが歸るやうになつたのを非常に悲しんでゐるやうです。而してあなた程不幸な運命に弄ばれる人はない。又あなた程誤解を受ける人はない。誰れもあなたの複雜な性格を見窮めて、その底にある尊い點を拾ひ上げる人がないから、色々な風にあなたは誤解されてゐる。あなたが歸るについては日本でも種々さま〴〵な風說が起る事だらうけれども、君だけはそれを信じてくれちや困る。それから……あなたは今でも僕の妻だ……病氣に苦しめられながら、世の中の迫害を存分に受けなければならない憐れむべき女だ。他人が何んと云はうと君だけは僕を信じて……若しあなたを信ずる事が出來なければ僕を信じて、あなたを妹だと思つてあなたの爲めに戰つてくれ……本當はもつと最大級の言葉が使つてあるのだけれども大體そんな事が書いてあつたんです。それで……」

「それで？」―

葉子は眼の前で、こんがらかつた絲が靜かにほどれて行くのを見つめるやうに、不思議な興味を感じながら、顏だけは打ち沈んでかう促した。

「それでですね。僕はその手紙に書いてある事とあなたの電話の『滑稽だつた』と云ふ言葉とをどう結び付けて見たらいゝか分らなくなつてしまつたんです。木村の手紙を見ない前でもあなたのあの電話の口調には……電話だつた故か丸で暢氣な冗談口のやうにしか聞こえなかつたものだから……本當を云ふと可なり不快を感じてゐた所だつたのです。思つた通りを云ひますから怒らないで聞いて下さい」

―何を怒りませう。ようこそはつきり仰しやつて下さるわね。あれは私も後で本當に濟まなかつたと思ひましたのよ。木村が思ふやうに私は他人の誤解なんぞそんなに氣にしてはゐないの。小さい時から慣れつこになつてるんですもの。だから皆さんが勝手なあて推量なぞをしてゐるのが少しは癪にさはつたけれども、滑稽に見えて仕方がなかつたんですのよ。そこに以て來て電話であなたのお聲が聞こえたもんだから、飛び立つやうに嬉しくつて思はずしらずあんな輕はずみな事を云つてしまひましたの。木村から頼まれて私の世話を見て下さつた倉地といふ事務長の方もそれはきさくな親切な人ぢやありますけれども、船で始めて知り合ひになつた方だから、お心安立てなんぞは出來ないでせう。あなたのお聲がした時には本當に敵の中から救ひ出されたやうに思つたんですもの……まあ然しそんな事は辯解するにも及びませんわ。それから何うなさつて？」―

古藤は例の厚い理想の衣の下から、深く隱さ

れた感情が時々きら〳〵とひらめくやうな眼を、少し物惰げに大きく見開いて葉子の顔をつれ〳〵と見やつた。初對面の時には人並み外づれて遠慮勝ちだつた癖に、少し慣れて來ると人を見徹さうとするやうに凝視するその眼は、いつでも葉子に一種の不安を與へた。古藤の凝視にはづう〳〵しいと云ふ所は少しもなかつた。又故意にさうするらしい様子も見えなかつた。少し鈍と思はれる程世事に疎く、事物の本當の姿を見て取る方法に暗いながら、眞正直に惡意なくそれをなし遂げようとするらしい眼付きだつた。古藤なんぞに自分の祕密が何んで發かれてたまるものかと高をくゝりつゝも、その物軟らかながらどん〳〵人の心の中に這入り込まうとするやうな眼付きに遇ふと、何時か祕密のどん底を過たず摑まれさうな氣がしてならなかつた。さうなるにしても然しそれまでには古藤は長い間忍耐して待たなければならないだらう、さう思つて葉子は一面小氣味よくも思つた。

こんな眼で古藤は、明らかな疑ひを示しつつ葉子を見ながら、更に語り續けた所によれば、古藤は木村の手紙を讀んでから思案に餘つて、その足ですぐ、まだ釘店の家の留守番をしてゐた葉子の叔母の所を尋ねてその考へを尋ねて見ようとした所が、叔母は古藤の立場がどちらに同情を持つてゐるか知れないので、うつかりした事は云はれないと思つたか、何事も打ち明けずに、五十川女史に尋ねて貰ひたいと逃げを張つたらしい。古藤は已むなく又五十川女史を訪問した。女史とは築地の或る教會堂の執事の部屋で會つた。女史の云ふ所によると、十日程前に田川夫人の所から船中に於ける葉子の不埒を詳細に知らしてよこした手紙が來て、自分としては葉子の獨旅を保護し監督する事は迚も力に及ばないから、船から上陸する時も何んの挨拶もせずに別れてしまつた。何んでも噂で聞くと病氣だと云つてまだ船に殘つてゐるさうだが、萬一そのまゝ歸國するやうにでもなつたら、葉子と事務長との關係は自分達が想像する以上に深くなつてゐると斷定しても差支へない。折角依賴を受けてその責を果さなかつたのは誠に濟まないが、自分達の力では手に餘るのだから推知していたゞきたいと書いてあつた。で、五十川女史は田川夫人がいゝ加減な捏造などする人でないのをよく知つてゐるから、その手紙を重立つた親類達に示して相談した結果、若し葉子が繪島丸で歸つて來たら、回復の出來ない罪を犯したものとして、木村に手紙をやつて破約を斷行させ、一面には葉子に對して親類一同は絕緣する申合せをしたといふ事を聞かされた。さう古藤は語つた。

「僕はこんな事を聞かされて途方に暮れてしまひました。あなたは先刻から倉地といふその事務長の事を平氣で口にしてゐるが、こつちではその人が問題になつてゐるんです。今日でも僕はあなたにお會ひするのがいゝのか惡いのか散々迷ひました。然し約束ではあるし、あなたから聞いたらもつと事柄もはつきりするかと思つて、思ひ切つて伺ふ事にしたんです。……あつちにたつた一人ゐて五十川さんから恐ろしい手紙を受取らなければならない木村君を僕は心から氣の毒に思ふんです。若しあなたが誤解の中にゐるんなら聞かせて下さい。僕はこんな重大な事を一方口で判斷したくはありませんから」

と話を結んで古藤は悲しいやうな表情をして葉子を見つめた。小癪な事を云ふもんだと葉子は心の中で思つたけれども、指先きで弄びながら少し振仰いだ顏はそのまゝに、憐れむやうな、からかふやうな色を微かに浮べて、

「えゝ、それはお聞き下さればどんなにでもお話はしませうとも。けれども人から私を信じて下さらないんならどれ程口を酸くしてお話をしたつて無駄ね」

「お話を伺つてから信じられるものなら信じようとしてゐるのです僕は」

「それはあなた方のなさる學問ならそれでよう御座んせうよ。けれども人情づくの事はそんなものぢやありませんわ。木村に對して狡ましい事は致しませんと云つたつてあなたが私を信じてゐて下さらなければ、それまでのものですし、倉地さんとはお友達といふだけですと誓つた所が、あなたが疑つていらつしやれば何んの役にも立ちはしませんからね。……さうしたもんぢやなくつて？」

「それぢや五十川さんの言葉だけで僕にあなたを判斷しろと仰しやるんですか」

「さうね。……それでもよう御座いませうよ。兎に角それは私が御相談を受ける事柄ぢやありませんわ」

さう云つてる葉子の顏は、言葉に似合はず何處までも優しく親しげだつた。古藤はさすがに怜しく、かう縺れて來た言葉を何處までも追はうとせずに默つてしまつた。而して「何事も明らさまにしてしまふ方が本當はいゝのだがな」と云ひたげな眼付きで、格別虐げようとするでもなく、葉子が鼻の先きで組んだりほどいたりする手先きを見入つた。さうしたまゝでやゝ暫らくの時が過ぎた。

十一時近いこの邊の町並みは一番靜かだつた。葉子はふと雨樋を傳ふ雨垂れの音を聞いた。日本に歸つてから始めて空は時雨れてゐたのだ。部屋の中は盛んな鐵瓶の湯氣でさう寒くはないけれども、戸外は薄ら寒い日和になつてゐるらしかつた。葉子はぎごちない二人の間の沈默を破りたいばかりに、ひよつと首を擡げて腰窓の方を見やりながら、

「おや何時の間にか雨になりましたのね」

と云つて見た。古藤はそれには答へもせずに、五分刈りの地藏頭を俯垂れて深々と溜息をした。

「僕はあなたを信じ切る事が出來ればどれ程幸だか知れないと思ふんです。五十川さんなぞより僕はあなたと話してゐる方がずつと氣持がいゝんです　それはあなたが同じ年頃で、……大變美しいといふ爲めばかりぢやないと（その時古藤はおぼこらしく顏を赧らめてゐた）思つてゐます。五十川さんなぞは何んでも物を僻目で見るから僕はいやなんです。けれどもあなたは……どうしてあなたはそんな氣性でゐながらもつと大膽に物を打ち明けて下さらないんです。僕は何んと云つてもあなたを信ずる事が出來ません。こんな冷淡な事を云ふのを許して下さい。然しこれにはあなたにも責めがあると僕は思ひますよ。……仕方がない僕は木村君に今日あなたと會つたこのまゝを云つてやります。僕には何う判斷のしやうもありませんもの……然しお願ひしますがねえ。木村君があなたから離れなければならないものなら、一刻でも早くそれを知るやうにしてやつて下さい。僕は木村君の心持を思ふと苦しくなります」

「でも木村は、あなたに來たお手紙によると私を信じ切つてくれてゐるのではないんですか」

さう葉子に云はれて、古藤は又返す言葉もなく默つてしまつた。葉子は見る／＼非常に興奮して來たやうだつた。抑へ／＼てゐる葉子の氣持が抑へ切れなくなつて激しく働き出して來ると、それは何時でも惻々として人に迫り人を壓した。顏色一つ變へないで元のまゝに親しみ込めて相手を見やりながら、胸の奥底の心持を傳へて來るその聲は、不思議な力を電氣のやうに感じて震へてゐた。

「それで結構。五十川の小母さんは始めからいやだ〱と云ふ私を無理に木村に添はせようとして置きながら、今になつて私の口から一言の辯解も聞かずに、木村に離縁を勸めようと云ふ人なんですから、そりや私恨みもします。腹も立てます。え丶、私はそんな事をされて默つて引つ込んでゐるやうな女ぢやない積りですわ。けれどもあなたは初手から私に疑ひをお持ちになつて、木村にも色々御忠告なさつた方ですもの、木村にどんな事を云つておやりにならうとも私にはねつから不服はありませんことよ。……けれどもね、あなたが木村の一番大切な親友でいらつしやると思へばこそ、私は人一倍あなたを頼りにして今日もわざ〱こんな所まで御迷惑を願つたりして……でもをかしいものね、木村はあなたも信じ私も信じ、私は木村も信じあなたも信じ、あなたは木村は信ずるけれども私を疑つて……そ、まあ待つて……疑つてはいらつしやりません。さうです。けれども信ずる事が出來ないでいらしやるんですわね……かうなると私は倉地さんにでもおすがりして相談相手になつていたゞく外仕樣がありません。いくら私が娘の時から周圍から責められ通しに責められてゐても、今だに女手一つで二人の妹まで背負つて立つ事は出來ませんからね……」

古藤は二重に折つてゐたやうな腰を立てて、少しせきこんで、

「それはあなたに不似合な言葉だと僕は思ひますよ。若し倉地と云ふ人の爲めにあなたが誤解を受けてゐるのなら……」

さう云つてまだ言葉を切らない中に、もう疾うに横濱に行つたと思はれてゐた倉地が、和服のまゝで突然六疊の間に這入つて來た。これは葉子にも意外だつたので、葉子は鋭く倉地に眼くばせしたが、倉地は無頓着だつた。そして古藤のゐるのなどは度外視した傍若無人さで、火鉢の向座にどつかと胡坐をかいた。

古藤は倉地を一と眼見るとすぐ倉地と悟つたらしかつた。いつもの癖で古藤はすぐ極度に固くなつた。中斷された話の續きを持ち出しもしないで、默つたまゝ少し伏眼になつてひかへてゐた。倉地は古藤から顏の見えないのをいゝ事に、早く古藤を返してしまへと云ふやうな顏付きを葉子にして見せた。葉子は譯は分らないままにその注意に從はうとした。で、古藤の默つてしまつたのをいゝ事に、倉地と古藤とを引き合せる事もせずに自分も默つたまゝ靜かに鐵瓶の湯を土瓶に移して、茶を二人に勸めて自分も悠々と飮んだりしてゐた。

突然古藤は居住ひをなほして、

「もう僕は歸ります。お話は中途ですけれども何んだか僕は今日はこれでお暇がしたくなりました。あとは必要があつたら手紙で書きます」

さう云つて葉子にだけ挨拶して座を立つた。葉子は例の藝者のやうな姿のまゝで古藤を玄關まで送り出した。

「失禮しましてね、本當に今日は。もう一度でよう御座いますから是非お會ひになつて下さいましな。一生の御願ひですから、ね」

と耳打ちするやうに囁いたが古藤は何んとも答へず、雨の降り出したのに傘も借りずに出て行つた。

「あなたつたらまづいぢやありませんか、何んだつてあんな幕に顏をお出しなさるの」

かう詰るやうに云つて葉子が座につくと、倉地は飮み終つた茶碗を猫板の上にとんと音をたてて伏せながら、

「あの男はお前、馬鹿にしてかゝつてゐるが、話を聞いてゐると妙に粘り強い所があるぞ。馬鹿もあの位眞直に馬鹿だと油斷の出來ない

ものなのだ。も少し話を續けてゐて見ろ、お前の遣り繰りでは間に合はなくなるから。一體何んでお前はあんな男をかまひつける必要があるんか、詰らないぢやないか。木村にでも未練があれば知らない事」

から云つて不敵に笑ひながら押し付けるやうに葉子を見た。葉子はぎくりと釘を打たれたやうに思つた。倉地をしつかり握るまでは木村を離してはいけないと思つてゐる胸算用を倉地に偶然に云ひ當てられたやうに思つたからだ。然し倉地が本當に葉子を安心させる爲めには、しなければならない大事な事が少くとも一つ殘つてゐる。それは倉地が葉子と表向き結婚の出來るだけの始末をして見せる事だ。手取り早く云へばその妻を離緣する事だ。それまではどうしても木村をのがしてはならない。それぱかりではない、若し新聞の記事などが問題になつて、倉地が事務長の位置を失ふやうな事にでもなれば、少し氣の毒だけれども木村を自分の鎖から解き放さずにおくのが何かにつけて便宜でもある。葉子は然し前の理由はおくびにも出さずに後の理由を巧みに倉地に告げようと思つた。

「今日は雨になつたで出かけるのが大儀だ。晝には湯豆腐でもやつて寢てくれようか」

さう云つて早くも倉地がそこに横にならうとするのを葉子は強ひて起き返らした。

二十六

「水戸とかでお座敷に出てゐた人ださうですが、倉地さんに落籍されてからもう七八年にもなりませうか、それは穩當ないゝ奥さんで、迚も商賣をしてゐた人のやうではありません。尤も水戸の士族のお娘御で出るが早いか倉地さんの所にいらつしやるやうになつたんださうですからその筈でもありますが、ちつとも擦れていらつしやらないでゐて、氣もお附きにはなるし、しとやかでもあり、……」

ある晩雙鶴館の女將が話に來て四方山の噂の序でに倉地の妻の樣子を語つたその言葉は、はつきりと葉子の心に燒きついてゐた。葉子はそれが優れた人であると聞かされれば聞かされる程妬ましさを增すのだつた。自分の眼の前には大きな障碍物が眞暗に立ちふさがつてゐるのを感じた。嫌惡の情にかきむしられて前後の事も考へずに別れてしまつたのではあつたけれども、假にも戀らしいものを感じた木部に對して葉子が抱く不思議な情緒、――普段は何事もなかつたやうに忘れ果ててはゐるものの、思ひも寄らないきつかけに、不圖胸を引き締めて捲き起つて來る不思議な情緒、一種の絶望的なノスタルヂア――それを葉子は倉地の妻にも寄せて考へて見る事の出來る不幸を持つてゐた。又自分の生んだ子供に對する執着。それを男も女も同じ程度に嚴しく感ずるものか何うかは知らない。然しながら葉子自身の實感から云ふと、何んと云つても喩へやうもなくその愛着は深かつた。葉子は定子を見ると知らぬ間に木部に對して戀に等しいやうな強い感情を動かしてゐるのに氣が附く事が屢々だつた。木部との愛着の結果定子が生れるやうになつたのではなく、定子といふものがこの世に生れ出る爲めに、木部と葉子とは愛着の羈に繫がれたのだとさへ考へられもした。葉子は又自分の父がどれ程葉子を溺愛してくれたかをも思つて見た。葉子の經驗から云ふと、兩親共ゐなくなつてしまつた今、慕はしさなつかしさを餘計感じさせるものは、格別是れと云つて情愛の徵を見せはしなかつたが、始終軟かい眼色で自分達を見守つてくれてゐた父の方だつた。それから思ふと男と云ふものも自分の生ませた子供に對しては女に讓らぬ執着を持ち得るものに相違ない。こんな過去の甘い回想ま

でが今は葉子の心を鞭つ笞となつた。而かも倉地の妻と子とはこの東京にちやんと住んでゐる。倉地は毎日のやうにその人達に遇つてゐるのに相違ないのだ。

思ふ男を何處から何處まで自分のものにして、自分のものにしたと云ふ證據を握るまでは、心が責めて〳〵責めぬかれるやうな戀愛の殘虐な力に葉子は晝となく夜となく打ちのめされた。船の中での何事も打ち任せ切つたやうな心易い氣分は他人事のやうに、遠い昔の事のやうに悲しく思ひやられるばかりだつた。どうしてこれほどまでに自分といふものの落ち付き所を見失つてしまつたのだらう。さう思ふ下から、からしては一刻もゐられない。早く〳〵する事だけをして仕舞はなければ、取り返しがつかなくなる。何處からどう手をつければいゝのだ。敵を斃さなければ、敵は自分を斃すのだ。何んの躊躇。何んの思案。倉地が去つた人達に未練を殘すやうならば自分の戀は石や瓦と同樣だ。自分の心で何もかも過去は一切燒き盡して見せる。木部もない、定子もない。まして木村もない。皆んな捨てる、皆んな忘れる。その代り倉地にも過去といふ過去を悉皆忘れさせずにおくものか。それ程の蠱惑の力と情熱の炎とが自分にあるかないか見てゐるがいゝ。さうした一圖な熱意が身をこがすやうに燃え立つた。葉子は新聞記者の來襲を恐れて宿にとぢ籠つたまま、火鉢の前に坐つて、倉地の不在の時はこんな妄想に身も心もかきむしられてゐた。段々募つて來るやうな腰の痛み。肩の凝り。そんなものさへ葉子の心をます〳〵焦立たせた。

殊に倉地の歸りのおそい晩などは、葉子は座にも居たゝまれなかつた。倉地の居間になつてゐる十疊の間に行つて、そこに倉地の面影を少しでも忍ばうとした。船の中での倉地との樂しい思ひ出は少しも浮んで來ずに、何んな構へとも想像は出來ないが、兎に角倉地の住居の或る部屋に、三人の娘達に取り捲かれて、美しい妻にかしづかれて杯を干してゐる倉地ばかりが想像に浮んだ。そこに脫ぎ捨てて在る倉地の普段着は益々葉子の想像を擅まゝにさせた。いつでも葉子の情熱を引つ掴んでゆすぶり立てるやうな倉地特有な膚の香、芳醇な酒や煙草から香ひ出るやうなその香を葉子は衣類をかき寄せて、それに顏を埋めながら、痲痺して行くやうな氣持で嗅ぎに嗅いだ。その香の一番奥に、中年の男に特有なふけのやうな不快な香、他人のものであつたなら葉子は一たまりもなく鼻を掩ふやうな不快な香を嗅ぎつけると、葉子は肉體的にも一種の陶醉を感じて來るのだつた。その倉地が妻や娘達に取り捲かれて樂しく一夕を過ごしてゐる。さう思ふと有り合せるものを取つて打ち毀すか、掴んで引き裂きたいやうな衝動が譯もなく高じて來るのだつた。

それでも倉地が歸つて來ると、それは夜おそくなつてからであつても葉子は唯ゝ子供のやうに幸福だつた。それまでの不安や焦燥は何處かに行つてしまつて、悪夢から幸福な世界に目覺めたやうに幸福だつた。葉子はすぐ走つて行つて倉地の胸に多愛なく抱かれた。倉地も葉子を自分の胸に引き締めた。葉子は廣い厚い胸に抱かれながら、單調な宿屋の生活の一日中に起つた些細な事までを、その表情の裕かな、鈴のやうな涼しい聲で、自分を樂しませてゐるものの如く語つた。倉地は倉地でその聲に醉ひしれて見えた。二人の幸福は何處に絶頂があるのか判らなかつた。二人だけで世界は完全だつた。葉子のする事は一つ〳〵倉地の心がするやうに見えた。倉地のかうあり度いと思ふ事は葉子が豫めさうあらせてゐた。倉地のしたいと思ふ事は、葉子がちやんと仕遂げてゐた。茶碗の置き場所まで、着物の仕舞所まで、倉地は自分の

手でした通りを葉子がしてゐるのを見出してゐるやうだつた。
「然し倉地は妻や娘達を何うするのだらう」こんな事をそんな幸福の最中にも葉子は考へない事もなかつた。然し倉地の顏を見ると、そんな事は思ふも恥かしいやうな些細な事に思はれた　葉子は倉地の中にすつかり融け込んだ自分を見出すのみだつた。定子までも犧牲にして倉地をその妻子から切り放さうなど云ふたくらみは餘りに馬鹿らしい取越苦勞であるのを思はせられた。
「さうだ、生れてからこのかた私が求めてゐたものはとう／＼來ようとしてゐる。然しこんな事がかう手近にあらうとは本當に思ひもよらなかつた。私見たいな馬鹿はない。この幸福の頂上が今だと誰れか敎へてくれる人があつたら、私はその瞬間に喜んで死ぬ。こんな幸福を見てから下り坂にまで生きてゐるのはいやだ。それにしてもこんな幸福でさへが何時かは下り坂になる時があるのだらうか―
そんな事を葉子は幸福に浸り切つた夢心地の中に考へた。
葉子が東京に着いてから一週間目に、宿の女將の周旋で、芝の紅葉館と道一つ隔てた苔香園といふ薔薇專門の植木屋の裏にあたる二階建の家を借りる事になつた。それは元紅葉館の女中だつた人が或る豪商の妾になつたについて、その豪商といふ人が建ててあてがつた一構へだつた。雙鶴館の女將はその女と懇意の間だつたが、女に子供が幾人か出來て少し手狹過ぎるので他所に移轉しようかと云つてゐたのを聞き知つてゐたので、女將の方で適當な家を探し出してその女を移らせ、その跡を葉子が借りる事に取計らつてくれたのだつた。倉地が先きに行つて中の樣子を見て來て、杉林の爲めに少し日當りはよくないが、當分の隱れ家としては屈竟だと云つたので、直ぐさまそこに移る事に決めたのだつた。誰れにも知れないやうに引越さねばならぬといふので、荷物を小別けして持ち出すのにも、女將は自分の女中達にまで、それが倉地の本宅に運ばれるものだと云つて知らせた。運搬人は凡て芝の方から頼んで來た。而して荷物があらかた片付いた所で、ある夜遲く、而かもびしよ／＼と吹き降りのする寒い雨風の折を選んで葉子は幌車に乘つた。葉子としてはそれ程の警戒をするには當らないと思つたけれども、女將がどうしても聽かなかつた。安全な所に送り込むまでは一旦お引受けした手前、氣が濟まないと云ひ張つた。
葉子が誂へておいた仕立おろしの衣類を着かへてゐるとそこに女將も來合せて脫ぎ返しの世話を見た。襟の合せ目をピンで留めながら葉子が着がへを終へて座につくのを見て、女將は嬉しさうに揉み手をしながら、
「これであすこに大丈夫着いて下さりさへすれば私は重荷が一つ降りると申すものです。然しこれからがあなたは御大抵ぢや御座いませんね。あちらの奧樣の事など思ひますと、どちらにどうお仕向けをしていゝやら私には判らなくなります。あなたのお心持も私は身にしみてお察し申しますが、何處から見ても批點の打ち所のない奧樣のお身の上も私には御不便で涙がこぼれてしまふんで御座いますよ。でね、これからの事についちや私はかう決めました。何んでも出來ます事ならと申上げたいんで御座いますけれども、私には心底をお打ち明け申しました處、どちら樣にも義理が立ちませんから、薄情でも今日かぎりこのお話には手をひかせていたゞきます。……どうか惡くお取りになりませんやうにね……どうも私はこんなでゐながら甲斐性が御座いませんで……」
さう云ひながら女將は口を切つた時の嬉しげ

な様子にも似ず、襦袢の袖を引き出す隙もなく眼に涙を一杯ためてしまつてゐた。葉子にはそれが恨めしくも憎くもなかつた。唯〻何んとなく親身な切なさが自分の胸にもこみ上げて來た。

「惡く取るどころですか。世の中の人が一人でもあなたのやうな心持で見てくれたら、私はその前に泣きながら頭を下げて難有う御座いますと云ふ事でせうよ。これまでのあなたのお心盡しで私はもう十分。又いつか御恩返しの出來る事もありませう。……それではこれで御免下さいまし。お妹御にもどうか着物のお禮をくれ〴〵もよろしく」

少し泣き聲になつてさう云ひながら、葉子は女將とその妹分にあたるといふ人に禮心に置いて行かうとする米國製の二つの手提げをしまひこんだ違ひ棚を一寸見やつてそのまゝ座を立つた。

雨風の爲めに夜は賑やかな往來もさすがに人通りが絶え〴〵だつた。車に乗らうとして空を見上げると、雲はさう濃くはかゝつてゐないと見えて、新月の光が朧ろに空を明るくしてゐる中を嵐模様の雲が恐ろしい勢で走つてゐた部屋の中の暖かさに引きかへて、濕氣を十分に含んだ風は裾前を煽つてぞく〳〵と膚に逼つた。ばた〳〵と風に弄られる前幌を車夫がかけようとしてゐる隙から、女將がみづ〳〵しい丸髷を雨にも風にも思ふまゝ打たせながら、女中のさしかざさうとする雨傘の蔭に隠れようともせず、何か車夫に云ひ聞かせてゐるのが大事らしく見やられた。車夫が梶棒を擧げようとする時女將が祝儀袋をその手に渡すのが見えた。

「左様なら」

「お大事に」

憚るやうに車の内外から聲が交はされた。幌にのしかゝつて來る風に抵抗しながら車は闇の中を動き出した。

向ひ風がうなりを立てて吹きつけて來ると、車夫は思はず車を煽らせて足を止める程だつた。この四五日火鉢の前ばかりにゐた葉子に取つては身を切るかと思はれるやうな寒さが、厚い膝かけの目まで通して襲つて來た。葉子は先程女將の言葉を聞いた時には左程とも思つてゐなかつたが、少し程立つた今になつて見ると、それがひし〳〵と身に應へるのを感じ出した。自分はひよつとするとあざむかれてゐる、弄びものにされてゐる。倉地は矢張り何處までもあの妻子と別れる氣はないのだ。唯〻長い航海中の氣まぐれから、出來心に自分を征服して見ようと企てたばかりなのだ。この戀のいきさつが葉子から持ち出されたものであるだけに、こんな心持になつて來ると、葉子は矢も楯もたまらず自分にひけ目を覺えた。幸福――自分が夢想してゐた幸福がとう〳〵來たと誇りがに喜んだその喜びはさもしい糠喜びに過ぎなかつたらしい。倉地は船の中でと同様の喜びでまだ葉子を喜んではゐる。それに疑ひを入れよう餘地はない。けれども美しい貞節な妻と可憐な娘を三人まで持つてゐる倉地の心がいつまで葉子に牽かされてゐるか、それを誰れが語り得よう、葉子の心は幌の中に吹きこむ風の寒さと共に冷えて行つた。世の中から綺麗に離れてしまつた孤獨な魂がたつた一つそこには見出されるやうにも思へた。何處に嬉しさがある、樂しさがある。自分は又一つの今までに味はなかつたやうな苦惱の中に身を投げ込まうとしてゐるのだ。又うま〳〵と惡戯者の運命にしてやられたのだ。それにしてももうこの瀬戸際から引く事は出來ない。死ぬまで‥さうだ死んでもこの苦しみに浸り切らずに置くものか。葉子には樂しさが苦しさなのか、苦しさが樂しさなのか、全く見界がつかなくなつて

しまつてゐた。魂を締め木にかけてその油でも搾りあげるやうな悶えの中に已むに已まれぬ執着を見出して我れながら驚くばかりだつた。

ふと車が停つて梶棒が卸されたので葉子ははつと夢心地から我れに返つた。恐ろしい吹き降りになつてゐた。車夫が片足で梶棒を踏まへて、風で車のよろめくのを防ぎながら、前幌をはづしにかゝると、眞暗だつた前方から幽かに光が漏れて來た。頭の上ではざあ〳〵と降りしきる雨の中に、荒海の潮騒のやうな物淒い響きが何か變事でも湧いて起りさうに聞こえてゐた。葉子は車を出ると風に吹き飛ばされさうになりながら、髪や新調の着物の濡れるのもかまはず空を仰いで見た。漆を流したやうに雲で固く鎖された雲の中に、漆よりも色濃くむら〳〵と立騒いでゐるのは古い杉の木立だつた　花壇らしい竹垣の中の灌木の類は枝先を地につけんばかりに吹き靡いて、枯葉が渦のやうにばら〳〵と飛び廻つてゐた。葉子は我れにもなくそこにべつたり坐り込んでしまひたくたつた。

「おい早く這入らんかよ、濡れてしまふぢやないか」

倉地がランプの灯をかばひつゝ家の中から怒鳴るのが風に吹きちぎられながら聞こえて來た。倉地がそこにゐると云ふ事さへ葉子には意外のやうだつた。大分離れた所でどたんと戸か何か外づれたやうな音がしたと思ふと、風はまた一しきりうなりを立てゝ杉叢をこそいで通りぬけた。車夫は葉子を助けようにも梶棒を離れれば車をけし飛ばされるので、提灯の尻を風上の方に斜に向けて眼八分に上げながら何か大聲に後ろから聲をかけてゐた。葉子はすご〳〵として玄關口に近づいた。一杯機嫌で待ちあぐんだらしい倉地の顔の酒ほてりに似ず、葉子の顔は透き通る程青ざめてゐた。なよ〳〵と先づ敷臺に腰を下して、十歩ばかり歩くだけで泥になつてしまつた下駄を、足先きで手傳ひながら脱ぎ捨てて、やうやく板の間に立ち上つてから、虚ろな眼で倉地の顔をぢつと見入つた。

「どうだつた寒かつたらう。まあこつちにお上り」

さう倉地は云つて、そこに出合はしてゐた女中らしい人に手ランプを渡すと花車な少し急な階子段を昇つて行つた。葉子は吾妻コートも脱がずに、いゝ加減濡れたまゝで默つてその後から跟いて行つた。

二階の間は電燈で晝間より明るく葉子には思はれた。戸といふ戸ががたぴしと鳴りはためいてゐた。板葺きらしい屋根に一寸釘でも敲きつけるやうに雨が降りつけてゐた。座敷の中は暖かくいきれて、飲み食ひする物が散らかつてゐるやうだつた。葉子の注意の中にはそれだけの事が辛うじて入つて來た。そこに立つたまゝの倉地に葉子は吸ひつけられるやうに身を投げかけて行つた。倉地も迎へ取るやうに葉子を抱いたと思ふとそのまゝそこにどつかと胡坐をかいた。そして自分の火照つた頬を葉子のにすり附けるとさすがに驚いたやうに

「こりやどうだ冷えたにも氷のやうだ」

と云ひながらその顔を見入らうとした。然し葉子は無上に自分の顔を倉地の廣い暖かい胸に埋めてしまつた。なつかしみと憎しみとのもつれ合つた、嘗て經驗しない激しい情緒がすぐに葉子の涙を誘ひ出した。ヒステリーのやうに間歇的に牽き起る啜り泣きの聲を嚙みしめても嚙みしめても止める事が出來なかつた。葉子はさうしたまゝ倉地の胸で息氣を引き取る事が出來たらと思つた。それとも自分の嘗めてゐるやうな魂の悶えの中に倉地を捲き込む事が出來たらばとも思つた。

いそ〳〵と世話女房らしく喜び勇んで二階

に上つて來る葉子を見出すだらうとばかり思つてゐたらしい倉地は、この理由も知れぬ葉子の狂體に驚いたらしかつた。

「どうしたと云ふんだな、え」

と低く力を罩めて云ひながら、葉子を自分の胸から引き離さうとするけれども、葉子は唯〻無上にかぶりを振るばかりで、駄々兒のやうに、倉地の胸にしがみついた。出來るならその肉の厚い男らしい胸を噛み破つて、血みどろになりながらその胸の中に顏を埋めこみたい――さう云ふやうに葉子は倉地の着物を噛んだ。

徐かにではあるけれども倉地の心は段々葉子の心持に染められて行くやうだつた。葉子をかき抱く倉地の腕の力は靜かに加はつて行つた。その息氣づかひは荒くなつて來た。葉子は氣が遠くなるやうに思ひながら、締め殺すほど引きしめてくれと念じてゐた。そして顏を伏せたまゝ涙の隙から切れ〴〵に叫ぶやうに聲を放つた。

「捨てないで頂戴とは云ひません……捨てるなら捨てて下さつてもよう御座んす……その代り……その代り……いゝ、いゝ、はつきり仰しやつて下さい、ね、……私は唯〻引きずられて行くのがいやなんです……」

「何を云つてるんだお前は……」

倉地の噛んでふくめるやうな聲が耳許近く葉子にかうさゝやいた。

「それだけは……それだけは誓つて下さい……ごまかすのは私はいや……いやです」

「何を……何をごまかすかい」

「そんな言葉が私は嫌ひです」

「葉子！」

倉地はもう熱情に燃えてゐた。然しそれは何時でも葉子を抱いた時に倉地に起る野獸のやうな熱情とは少し違つてゐた。そこにはやさしく女の心をいたはるやうな影が見えた。葉子はそれを嬉しくも思ひ、物足らなくも思つた。

葉子の心の中は倉地の妻の事を云ひ出さうとする熱意で一杯になつてゐた。その妻が貞淑な美しい女であると思へば思ふ程、その人が二人の間に挾まつてゐるのが呪はしかつた。縱令捨てられるまでも一度は倉地の心をその女から根こそぎ奪ひ取らなければ堪念が出來ないやうなひた向きに狂暴な欲念が胸の中でははち切れさうに煮えくり返つてゐた。けれども葉子はどうしてもそれを口の端に上せる事は出來なかつた。その瞬間に自分に對する誇りが塵芥のやうに踏み躪られるのを感じたからだ。葉子は自分ながら自分の心がじれつたかつた。倉地の方から一言もそれを云はないのが恨めしかつた。倉地はそんな事は云ふにも足らないと思つてゐるのかも知れないが……いゝえそんな事はない、そんな事のあらう筈はない。倉地は矢張り二股かけて自分を愛してゐるのだ。男の心にはそんな婬らな未練がある筈だ。男の心とは云ふまい、自分も倉地に出遇ふまでは、異性に對する自分の愛を勝手に三つにも四つにも裂いて見る事が出來たのだ。……葉子はこゝにも自分の暗い過去の經驗の爲めに責めさいなまれた。進んで戀の虜となつたものが當然陷らなければならない喩へやうのない程暗く深い疑惑は後から後から口實を作つて葉子を襲ふのだつた。葉子の胸は言葉通りに張り裂けようとしてゐた。

然し葉子の心が傷めば傷むほど倉地の心は熱して見えた。倉地は何うして葉子がこんなに機嫌を惡くしてゐるのかを思ひ迷つてゐる樣子だつた。倉地はやがて強ひて葉子を自分の胸から引き放してその顏を強く見守つた。

「何をさう理窟もなく泣いてゐるのだ……お前は俺れを疑ぐつてゐるな」

葉子は「疑はないでゐられますか」と答へよう

としたが、どうしてもそれは自分の面目にかけて口には出せなかつた。葉子は涙に解けて漂ふやうな眼を恨めしげに大きく開いて默つて倉地を見返した。

「今日俺れはとう／＼本店から呼び出されたんだつた。船の中での事をそれとなく聞き糺さうとしをつたから、俺れは殘らず云つて退けたよ。新聞に俺れ達の事が出た時でもが、慌てるがものはないと思つとつたんだ。どうせ何時かは知れる事だ。知れる程なら、大つぴらで早いがいい位のものだ。近い中に會社の方は首にならうが、俺れは、葉子、それが滿足なんだぞ。自分で自分の面に泥を塗つて喜んでる俺れが馬鹿に見えような」

さう云つてから倉地は激しい力で再び葉子を自分の胸に引き寄せようとした。

葉子は然しさうはさせなかつた。素早く倉地の膝から飛び退いて疊の上に頬を伏せた。倉地の言葉をそのまゝ信じて、素直に嬉しがつて、心を涙に溶いて泣きたかつた。然し萬一倉地の言葉がその場遁れの勝手な造り事だつたら：：何故倉地は自分の妻や子供達の事を云つては聞かせてくれないのだ。葉子は譯の解らない涙を泣くより術がなかつた。葉子は突つ伏したままでさめ／＼と泣き出した。

戸外の嵐は氣勢を加へて、物凄じく更けて行く夜を荒れ狂つた。

「俺れの云うた事が解らんならまあ見とるがいいさ。俺れはくどい事は好かんからな」

さう云ひながら倉地は自分を抑制しようとするやうに強ひて落ち着いて、葉卷を取り上げて煙草盆を引き寄せた。

葉子は心の中で自分の態度が倉地の氣をまづくしてゐるのをはら／＼しながら思ひやつた。氣をまづくするだけでもそれだけ倉地から離れさうなのがこの上なくつらかつた。然し自分で自分をどうする事も出來なかつた。

葉子は嵐の中に我れと我が身をさいなみながらさめ／＼と泣き續けた。

二十七

「何を私は考へてゐたんだらう。どうかして心が狂つてしまつたんだ。こんな事はつひぞ無い事だのに」

葉子はその夜倉地と部屋を別にして床に就いた。倉地は階上に、葉子は階下に。繪島丸以來二人が離れて寢たのはその夜が始めてだつた。倉地が眞心をこめた樣子で彼れ是れ云ふのを、葉子はすげなく跳ねつけて、折角とつてあつた二階の寢床を、女中に下に運ばしてしまつた。横になりはしたが何時までも寢付かれないで二時近くまで言葉通りに輾轉反側しつゝ、繰返し繰返し倉地の夫婦關係を種々に妄想したり、自分にまくしかゝつて來る將來の運命をひたすらに黑く塗つて見たりしてゐた。それでも果ては頭も體も疲れ果てて夢ばかりな眠りに陷つてしまつた。

うつら／＼とした眠りから、突然喩へやうのない淋しさにひし／＼と襲はれて――それはその時見た夢がそんな暗示になつたのか、それとも感覺的な不滿が眼を覺ましたのか分らなかつた――葉子は暗闇の中に眼を開いた。嵐の爲めに電線に故障が出來たと見えて、眠る時には點け放しにしておいた灯が何處も此處も消えてゐるらしかつた。嵐は然し何時の間にか凪ぎてしまつて、嵐の後の晩秋の夜は殊更ら靜かだつた。山内一面の杉森からは深山のやうな鬼氣がしんしんと吐き出されるやうに思へた。蟋蟀が隣りの部屋の隅でかすれ／＼に聲を立ててゐた。僅かな而かも淺い睡眠には過ぎなかつたけれども葉子の頭は曉前の冷えを感じて冴え／＼と澄んでゐた。葉子は先づ自分がたつた一人で寢て

ゐた事を思つた。　倉地と關係がなかつた頃はいつでも一人で寢てゐたのだが、好くもそんな事が永年に亙つて出來たものだつたと自分ながら不思議に思はれる位、それは今の葉子を物足らなく心淋しくさせてゐた。かうして靜かな心になつて考へると倉地の葉子に對する愛情が誠實であるのを疑ふべき餘地は更になかつた。日本に歸つてから幾日にもならないけれども、今までは兎に角倉地の熱意に少しも變りが起つた所は見えなかつた。如何に戀に眼がふさがつても、葉子はそれを見極める位の冷靜な眼力は持つてゐた。そんな事は十分に知り拔いてゐる癖に、おぞましくも昨夜のやうな馬鹿な眞似をしてしまつた自分が自分ながら不思議な位だつた。どんなに情に激した時でも大抵は自分を見失ふやうな事はしないで通して來た葉子にそれがひどく恥かしかつた。船の中にゐる時にヒステリーになつたのではないかと疑つた事が二三度ある――それが本當だつたのではないか知らんとも思はれた。而して夜着にかけた洗ひ立てのキャリコの裏の冷え〴〵するのをふくよかな頤に感じながら心の中で獨語ちた。

「何を私は考へてゐたんだらう。どうかして心が狂つてしまつたんだ。こんな事はつひぞない事だのに」

さう云ひながら葉子は肩だけ起き直つて、枕頭の水を手さぐりでした〻か飲みほした。氷のやうに冷え切つた水が咽許を靜かに流れ下つて胃の腑に擴がるまではつきりと感じられた。酒も飲まないのだけれども、醉後の水と同樣に、胃の腑に味覺が出來て舌の知らない味を味ひ得たと思ふ程快く感じた。それほど胸の中は熱を持つてゐたに違ひない。けれども脚の方は反對に恐ろしく冷えを感じた。少しその位置を動かすと白さをそのまゝな寒い感じがシーツから逼つて來るのだつた。葉子は又きびしく倉地の胸を思つた。それは寒さと愛着とから葉子を追ひ立てて二階に走らせようとする程だつた。然し葉子は既にそれをぢつと耐へるだけの冷靜さを恢復してゐた。倉地の妻に對する處置は昨夜のやうであつては手際よくは成し遂げられぬ。もつと冷めたい智慧に力を借りなければならぬ――から思ひ定めながら曉の白むのを知らずに又眠りに誘はれて行つた。

翌日葉子はそれでも倉地より先きに眼を覺まして手早く着がへをした。自分で板戸を繰り開けて見ると、緣先には、枯れた花壇の草や灌木が風の爲めに吹き亂された小庭があつて、その先きは、杉、松、その他の喬木の茂みを隔てて苔香園の手廣い庭が見やられてゐた。昨日までゐた雙鶴館の周圍とは全く違つた、同じ東京の内とは思はれないやうな靜かな鄙びた自然の姿が葉子の眼の前には見亙された。まだ晴れ切らない狹霧を罩めた空氣を通して、杉の葉越しに射しこむ朝の日の光が、雨にしつとりと潤つた庭の黑土の上に、眞直な杉の幹を縞のやうな影にして落してゐた。色さま〴〵な櫻の落葉が、日向では黃に紅に、日蔭では樺に紫に庭を彩つてゐた。彩つてゐると云へば菊の花もあちこちにしつけられてゐた。然し一帶の趣味は葉子の喜ぶやうなものではなかつた。塵一つさへない程、貧しく見える瀟洒な趣味か、何處にでも金銀がそのまゝ捨ててあるやうな驕奢な趣味でなければ滿足が出來なかつた。殘つたのを捨てるのが惜しいとか勿體ないとか云ふやうな心持で、餘計な石や植木などを入れ込んだらしい庭の造り方を見たりすると、すぐさまむしり取つて眼にかゝらない所に投げ捨てたく思ふのだつた。その小庭を見ると葉子の心の中にはそれを自分の思ふやうに造り變へる計畫がうず〳〵する程湧き上つて來た。

それから葉子は家の中を隅から隅まで見て廻つた。昨日玄關口に葉子を出迎へた女中が、戸を繰る音を聞きつけて、逸早く葉子の所に飛んで來たのを案內に立てた。十八九の小綺麗な娘で、きび〳〵した氣性らしいのに、如何にも蓮葉でない、主人を持てば主人思ひに違ひないのを葉子は一と目で見貫いて、是れはいゝ人だと思つた。それは矢張り雙鶴館の女將が周旋してよこした、宿に出入りの豆腐屋の娘だつた。つや（彼女の名はつやと云つた）は階子段下の玄關に續く六疊の茶の間から始めて、その隣りの床の間附きの十二疊、それから十二疊と廊下を隔てて玄關と並ぶ茶席風の六疊を案內し、廊下を通つた突き當りにある思ひの外手廣い臺所、風呂場を經て張り出しになつてゐる六疊と四疊半（そこがこの家を建てた主人の居間となつてゐたらしく、總ての造作に特別な數寄が凝らしてあつた）に行つて、その雨戶を繰り明けて庭を見せた。そこの前栽は割合に荒れずにゐて、眺めが美しかつたが、葉子は垣根越しに苔香園の母屋の下の便所らしい汚い建物の屋根を見附けて困つたものがあると思つた。その外には臺所の側につやの四疊半の部屋が西向きについてゐた。女中部屋を除いた五つの部屋はいづれもなげし附きになつて、三つまでは床の間さへあるのに、何うして集めたものか兎に角掛物なり置物なりがちやんと飾られてゐた。家の造りや庭の樣子などには可なりの註文も相當の眼識も持つてはゐたが、繪畫や書の事になると葉子はおぞましくも鑑識の力がなかつた。生れつき機敏に働く才氣のお蔭で、見たり聞いたりした所から、美術を愛好する人々と膝を並べても、兎に角餘りぼろらしいぼろは出さなかつたが、若い美術家などが讃める作品を見ても何處が優れて何處に美しさがあるのか葉子には少しも見當のつかない事があつた。繪と云はず字と云はず、文學的の作物などに對しても葉子の頭は憐れな程通俗的であるのを葉子は自分で知つてゐた。然し葉子は自分の負けじ魂から自分の見方が凡俗だとは思ひたくなかつた。藝術家など云ふ連中には、骨董などをいぢくつて古味と云ふやうなものを難有がる風流人と共通したやうな氣取りがある。その似而非氣取りを葉子は幸にも持ち合はしてゐないのだと決めてゐた。葉子はこの家に持ち込まれてゐる幅物を見て廻つても、本當の値打ちがどれ程のものだか更に見當がつかなかつた。唯ゞあるべき所にさういふ物のある事を滿足に思つた。

つやの部屋のきちんと手際よく片付いてゐるのや、二三日空家になつてゐたのにも係はらず、臺所が綺麗に拭き掃除がされてゐて、布巾などが清々しくから〳〵に乾かして懸けてあつたりするのは一々葉子の眼を快く刺戟した。思つたより住まひ勝手のいゝ家と、はき〳〵した清潔好きな女中とを得た事が先づ葉子の寢起きの心持をすが〳〵しくさせた。

葉子はつやの汲んで出した丁度いゝ加減の湯で顏を洗つて、輕く化粧をした。昨夜の事などは氣にもかゝらない程心は輕かつた。葉子はその輕い心を抱きながら靜かに二階に上つて行つた。何とはなしに倉地に甘えたいやうな、詫びたいやうな氣持でそつと襖を明けて見ると、あの強烈な倉地の膚の香が暖かい空氣に滿たされて鼻をかすめて來た。葉子は我れにもなく駈けよつて、仰向けに熟睡してゐる倉地の上に羽がひにのしかゝつた。

暗い中で倉地は眼覺めたらしかつた。而して默つたまゝ葉子の髮や着物から花瓣のやうにこぼれ落ちるなまめかしい香を夢心地に嗅いでゐるやうだつたが、やがて物惰げに、

「もう起きたんか。何時だな」

と云つた。丸で大きな子供のやうなその無邪氣

さ。葉子は思はず自分の頬を倉地のにすり附けると、寢起きの倉地の頬は火のやうに熱く感ぜられた。

「もう八時。…お起きにならないと横濱の方がおそくなるわ」

倉地は矢張り物惰げに、袖口からによきんと現はれ出た太い腕を延べて、短い散切頭をごし〳〵と搔き廻しながら、

「横濱？…横濱にはもう用はないわい。何時首になるか知れない俺れがこの上の御奉公をしてたまるか。是れも皆んなお前のお蔭だぞ。業つくばり奴」

と云つていきなり葉子の頸筋に腕をまいて自分の胸に押しつけた。

暫らくして倉地は寢床を出たが、昨夜の事などはけろりと忘れてしまつたやうに平氣でゐた。二人が始めて離れ〴〵に寢たのにも一言も云はないのがかすかに葉子を物足らなく思はせたけれども、葉子は胸が廣々として何んと云ふ事もなく喜ばしくつて堪らなかつた。で、倉地を殘して臺所に下りた。自分で自分の食べるものを料理するといふ事にも嘗てない物珍らしさと嬉しさとを感じた。

疊一疊がた日の射しこむ茶の間の六疊で二人は朝餉の膳に向つた。嘗ては葉山で木部と二人でかうした樂しい膳に向つた事もあつたが、その時の心持と今の心持とを比較する事も出來ないと葉子は思つた。木部は自分でのこ〳〵と臺所まで出かけて來て、長い自炊の經驗などを得意げに話して聞かせながら、自分で米を磨いだり、火を燃きつけたりした。その當座は葉子もそれを樂しいと思はないではなかつた　然し暫らくの中にそんな事をする木部の心持がさもしくも思はれて來た。おまけに木部は一日々々と物臭さになつて、自分では手を下しもせずに、邪魔になる所に突つ立つたまゝ指圖がましい事を云つたり、葉子には何等の感興も起させない長詩を例の御自慢の美しい聲で朗々と吟じたりした。葉子はそんな日に遇ふと輕蔑し切つた冷やかな眸でじろりと見かへしてやりたいやうな氣になつた。倉地は始めからそんな事はてんでしなかつた。大きな駄々兒のやうに、顏を洗ふといきなり膳の前に胡坐をかいて、葉子が作つて出したものを片端からむしや〳〵と綺麗に片付けて行つた。これが木部だつたら、出す物の一つ〳〵に知つたか振りの講釋をつけて、葉子の腕前を感傷的に賞めちぎつて、可なり澤山を喰はずに殘してしまふだらう。さう思ひながら葉子は眼で撫でさするやうにして倉地が一心に箸を動かすのを見守らずにはゐられなかつた。

やがて箸と茶碗とをからりと投げ捨てると、倉地は所在無ささうに葉卷をふかして暫らくそこらを眺め廻してゐたが、いきなり立ち上つて尻つぱしよりをしながら裸足のまゝ庭に飛んで降りた。而してハーキュリーズが針仕事でもするやうなぶきつちやうな樣子で、狹い庭を步き廻りながら片隅から片附け出した。まだびしやびしやするやうな土の上に大きな足跡が縱橫に印された。まだ枯れ果てない菊や萩などが雜草と一緒くたに情けも容赦もなく根こぎにされるのを見るとさすがの葉子もはら〳〵した。而して椽際にしやがんで柱に凭れながら、時には餘りのをかしさに高く聲を擧げて笑ひこけずにはゐられなかつた。

倉地は少し働き疲れると苔香園の方を窺つたり、臺所の方に氣を配つたりしておいて、大急ぎで葉子のゐる所に寄つて來た。而して泥になつた手を後ろに廻して、上體を前に折り曲げて、葉子の鼻の先きに自分の顏を突き出してお壺口をした。葉子も惡戯らしく周圍に眼を配つてその顏を兩手に挾みながら自分の脣を與

へてやつた。倉地は勇み立つやうにして又土の上にしやがみこんだ。

倉地はかうして一日働き續けた。日がかげる頃になつて葉子も一緒に庭に出て見た。唯ゞ亂暴な、せう事なしの惡戯仕事とのみ思はれたものが、片附いて見ると何處から何處まで要領を得てゐるのを發見するのだつた。葉子が氣にしてゐた便所の屋根の前には、庭の隅にあつた椎の木が移してあつたりした。玄關前の兩側の花壇の牡丹には、藁で器用に霜圍ひさへしつらへてあつた。

こんな淋しい杉森の中の家にも、時々紅葉館の方から音曲の音がくゞるやうに聞こえて來たり、苔香園から薔薇の香りが風の具合でほんのいいりと香つて來たりした。こゝにかうして倉地と住み續ける喜ばしい期待はひと向きに葉子の心を奪つてしまつた。

平凡な人妻となり、子を生み、葉子の姿を魔物か何かのやうに嘲笑はうとする、葉子の舊友達に對して、嘗て葉子が抱いてゐた火のやうな憤りの心、腐つても死んでもあんな眞似はして見せるものかと誓ふやうに心であざけつたその葉子は、洋行前の自分といふものを何處かに置き忘れたやうに、そんな事は思ひも出さないで、舊友達の通つて來た道筋にひた走りに走り込まうとしてゐた。

二十八

こんな夢のやうな樂しさが多愛もなく一週間程は何んの故障も牽き起さずに續いた。歡樂に耽溺し易い、從つて何時でも現在を一番樂しく過ごすのを生れながら本能としてゐる葉子は、こんな有頂天な境界から一歩でも踏み出す事を極端に憎んだ。葉子が歸つてから一度しか會ふ事の出來ない妹達が、休日にかけて頻りに遊びに來たいと訴へ來るのを、病氣だとか、家の中が片附かないとか、口實を設けて拒んでしまつた。木村からも古藤の所か五十川女史の所かに宛てて便りが來てゐるに相違ないと思つたけれども、五十川女史は固より古藤の所にさへ住所が知らしてないので、それを廻送してよこす事も出來ないのを葉子は知つてゐた。定子――この名は時々葉子の心を未練がましくさせないではなかつた。然し葉子は何時でも思ひ捨てるやうにその名を心の中から振り落さうと努めた。倉地の妻の事は何かの拍子につけて心を打つた。この瞬間だけは葉子の胸は呼吸も出來ない位引き締められた。それでも葉子は現在目前の歡樂をそんな心痛で破らせまいとした。而してその爲めには倉地にあらん限りの媚びと親切とを捧げて、倉地から同じ程度の愛撫を貪らうとした。さうする事が自然にこの難題に解決をつける導火線にもなると思つた。

倉地も葉子に讓らない程の執着を以て葉子が捧げる杯から歡樂を飲み飽きようとするらしかつた。不休の活動を命としてゐるやうな倉地ではあつたけれども、この家に移つて來てから、家を明けるやうな事は一度もなかつた。それは倉地自身が告白するやうに破天荒な事だつたらしい。二人は、初めて戀を知つた少年少女が世間も義理も忘れ果てて、生命さへ忘れ果てて肉體を破つてまでも魂を一つに溶かし度いとあせる、それと同じ熱情を捧げ合つて互々を樂しんだ。樂しんだと云ふよりも苦しんだ。その苦しみを樂しんだ。倉地はこの家に移つて以來新聞も配達させなかつた。郵便だけは移轉通知をして置いたので倉地の手許に屆いたけれども、倉地はその表書きさへ眼を通さうとはしなかつた。毎日の郵便はつやの手によつて束にされて、葉子が自分の部屋に定めた玄關側の六疊の違ひ棚に空しく積み重ねられた。葉子の手許には妹達からの外には一枚の葉書さへ

來なかつた。それほど世間から自分達を切り放してゐるのを二人とも苦痛とは思はなかつた。苦痛どころではない、それが幸ひであり誇りであつた。門には「木村」とだけ書いた小さい門札が出してあつた。木村と云ふ平凡な姓は二人の樂しい巣を世間に發くやうな事はないと倉地が云ひ出したのだつた。

然しこんな生活を倉地に永い間要求するのは無理だと云ふ事を葉子は遂に感付かねばならなかつた。ある夕食の後食地は二階の一と間で葉子を力強く膝の上に抱き取つて、甘い私語を取り交はしてゐた時、葉子が情に激して倉地に與へた熱い接吻の後にすぐ、倉地が思はず出た欠伸をぢつと嚙み殺したのを逸早く見て取ると、葉子はこの種の歡樂が既に峠を越した事を知つた。その夜は葉子には不幸な一夜だつた。辛うじて築き上げた永遠の城寨が、果敢なくも瞬時の蜃氣樓のやうに見る〳〵崩れて行くのを感じて、倉地の胸に抱かれながら殆んど一夜を眠らずに通してしまつた。

それでも翌日になると葉子は快活になつてゐた。殊更ら快活に振舞はうとしてゐたには違ひないけれども、葉子の倉地に對する溺愛は葉子をして殆んど自然に近い容易さを以てそれをさせるに十分だつた。

「今日は私の部屋で面白い事をして遊びませう。いらつしやいな」

さう云つて少女が少女を誘ふやうに牡牛のやうに大きな倉地を誘つた。倉地は煙つたい顏をしながら、それでもその後から跟いて來た。

部屋はさすがに葉子のものであるだけ、何處となく女性的な軟味を持つてゐた。東向きの腰高窓には、もう冬といつていゝ十一月末の日が熱のない強い光を射つけて、亞米利加から買つて歸つた上等の香水をふりかけた匂ひ玉から幽かながら極めて上品な芳芬を靜かに部屋の中にまき散らしてゐた。葉子はその匂ひ玉の下つてゐる壁際の柱の下に、自分にあてがはれたいゝいゝきらびやかな縮緬の座蒲團を移して、それに倉地を坐らせておいて、違ひ棚から郵便の束をいくつとなく取り下ろして來た。

「さあ今朝は岩戸の隙から世の中を覗いて見るのよ。それも面白いでせう」

と云ひながら倉地に寄り添つた。倉地は幾十通とある郵便物を見たばかりでいゝ加減げんなりした樣子だつたが、段々と興味を催して來たらしく、日の順に一つの束からほどき始めた。

如何につまらない事務用の通信でも、交通遮斷の孤島か、障壁で高く圍まれた美しい牢獄に閉ぢこもつてゐたやうな二人に取つては豫想以上の氣散じだつた。倉地も葉子も有り觸れた文句にまで思ひ存分の批評を加へた。かう云ふ時の葉子はその迸るやうな暖かい才氣の爲めに世にすぐれて面白味の多い女になつた。口を衝いて出る言葉々々がどれもこれも絢爛な色彩に包まれてゐた。二日目の所には岡から來た手紙が現はれ出た。船の中での禮を述べて、とうとう葉子と同じ船で歸つて來てしまつた爲めに、家元では相變らずの薄志弱行と人毎に思はれるのが彼れを深く責める事や、葉子に手紙を出したいと思つてあらゆる手がかりを尋ねたけれども、何うしても解らないので會社に聞き合せて事務長の住所を知り得たからこの手紙を出すと云ふ事や、自分は唯ゝ葉子を姉と思つて尊敬もし慕ひもしてゐるのだから、せめてその心を通はすだけの自由が與へて貰ひたいと云ふ事だのが、思ひ入つた調子で、下手な字體で書いてあつた。葉子は忘却の廢址の中から生々とした少年の大理石像を掘りあてた人のやうに面白がつた。

「私が愛子の年頃だつたらこの人と心中位してゐるかも知れませんね。あんな心を持つた人

でも少し齢を取ると男はあなた見たいになつちまふのね」
「あなたとは何んだ—
『あなた見たいな惡黨に—
「それはお門が違ふだらう—
「違ひませんとも……御同樣にと云ふ方がいゝわ。私は心だけあなたに來て、體はあの人に遣るとほんとはよかつたんだが……—
「馬鹿！ 俺れは心なんぞに用はないわい」
「ぢや心の方をあの人にやらうか知らん」
「さうしてくれ。お前にはいくつも心がある筈だから、有りつたけくれてしまへ」
「でも可哀さうだから一番小さゝうなのを一つだけあなたの分に殘して置きませうよ—
さう云つて二人は笑つた。倉地は返事を出す方に岡のその手紙を仕分けた。葉子はそれを見て輕い好奇心が湧くのを覺えた。

澤山の中からは古藤のも出て來た。宛名は倉地だつたけれども、その中からは木村から葉子に送られた分厚な手紙だけが封じられてゐた。それと同時な木村の手紙が後から二本まで現はれ出た。葉子は倉地の見てゐる前で、その凡てを讀まない中にずた／＼に引き裂いてしまつた。

「馬鹿な事をするぢやない。讀んで見ると面白かつたに—
葉子を占領し切つた自信を誇りがな微笑に見せながら倉地はかう云つた。
「讀むと折角の晝御飯がおいしくなくなりますもの—
さう云つて葉子は胸糞の惡いやうな顏付きをして見せた。二人は又多愛なく笑つた。

報正新報社からのもあつた。それを見ると倉地は、一時は揉消しをしようと思つて、わたりを附けたりしたのでこんなものが來てゐるのだがもう用はなくなつたので見るには及ばないと云つて、今度は倉地が封のまゝに引き裂いてしまつた。葉子はふと自分が木村の手紙を裂いた心持を倉地のそれにあてはめて見たりした。然しその疑問もすぐ過ぎ去つてしまつた。

やがて郵船會社から宛てられた江戸川紙の大きな封書が現はれ出た。倉地は一寸眉に皺をよせて少し躊躇した風だつたが、それを葉子の手に渡して葉子に開封させようとした。何んの氣なしにそれを受取つた葉子は魔がさしたやうにはつと思つた。とう／＼倉地は自分の爲めに……葉子は少し顏色を變へながら封を切つて中から卒業證書のやうな紙を二枚と、書記が丁寧に書いたらしい書簡一封とを探り出した。

果してそれは免職と、退職慰勞金との會社の辭令だつた。手紙には退職慰勞金の受取方に關する注意が事々しい行書で書いてあるのだつた。葉子は何んと云つていゝか分らなかつた。こんな戀の戯れの中から斯程な打擊を受けようとは夢にも思つてはゐなかつたのだ。倉地がこゝに着いた翌日葉子に云つて聞かせた言葉は本當の事だつたのか。これ程までに倉地は親身になつてくれてゐたのか。葉子は辭令を膝の上に置いたまゝ下を向いて默つてしまつた。眼がしらの所が非常に熱い感じを得たと思つた、鼻の奧が暖かく塞がつて來た。泣いてゐる場合ではないと思ひながらも、葉子は泣かずにはゐられないのを知り抜いてゐた。
「本當に私が惡う御座いました……許して下さいまし……（さう云ふ中に葉子はもう泣き始めてゐた）……私はもう日蔭の妾としてでも圍ひ者としてでもそれで十分に滿足します。えゝ、それで本當によう御座んす。私は嬉しい……—

倉地は今更ら何を云ふと云ふやうな平氣な顏で葉子の泣くのを見守つてゐたが、
「妾も圍ひ者もあるかな、俺れには女はお前

一人より無いんだからな。離縁狀は橫濱の土を踏むと一緒に嚊に向けてぶつ飛ばしてあるんだ」

と云つて胡坐の膝で貧乏ゆすりをし始めた。さすがの葉子も息氣をつめて、泣きやんで、惘れて倉地の顔を見た。

「葉子、俺れが木村以上にお前に深惚れしてゐるといつか船の中で云つて聞かせた事があつたな。俺れはこれでいざとなると心にもない事は云はない積りだよ。雙鶴館にゐる間も俺れは幾日も濱には行きはしなんだのだ。大抵は家內の親類達との談判で頭を惱ませられてゐたんだ。だが大抵鳧がついたから、俺れは少しばかり手廻りの荷物だけ持つて一と足先きにこゝに越して來たのだ。……もうこれでえゝや。氣がいゝいゝすつぱりしたわ。これには雙鶴館のお內儀も驚きくさるだらうて……」

會社の辭令ですつかりいゝ倉地の心持をどん底から感じ得た葉子は、この上倉地の妻の事を疑ふべき力は消え果ててゐた。葉子の顔は涙に濡れひたりながらそれを拭き取りもせず、倉地にすり寄つて、その兩肩に手をかけて、ぴつたいゝりと橫顔を胸にあてた。夜となく晝となく思ひ惱みぬいた事が既に解決されたので、葉子は喜んでも喜んでも喜び足りないやうに思つた。自分も倉地と同樣に胸の中がすいゝつきりすべき筈だつた。けれどもさうは行かなかつた。葉子はいつの間にか去られた倉地の妻その人のやうな淋しい悲しい自分になつてゐるのを發見した。

倉地はいとしくつてならぬやうにエボニー色の雲のやうに眞黑にふいゝつくりと亂れた葉子の髮の毛をやさしく撫で廻した。而して每時もに似ずしいゝんみりした調子になつて、

「とう〳〵俺れも埋れ木になつてしまつた。これから地面の下で濕氣を喰ひながら生きて行くより外にはない。……俺れは負け惜みを云ふは嫌ひだ。かうしてゐる今でも俺れは家內や娘達の事を思ふと不便に思ふさ。それがない事なら俺れは人間ぢやないからな。……だが俺れはこれでいゝ。滿足この上なしだ。……自分ながら俺れは馬鹿になり腐つたらしいて」

さう云つて葉子の首を固くかき抱いた。葉子は倉地の言葉を酒のやうに醉ひ心地に呑み込みながら「あなただけにさうはさせておきませんよ。私だつて定子を見事に捨てて見せますからね」と心の中で頭を下げつゝ幾度も詫びるやうに繰り返してゐた。それが又自分で自分を泣かせる暗示となつた。倉地の胸に橫たへられた葉子の顔は、綿入れと襦袢とを通して倉地の胸を暖かく侵す程熱してゐた。而して泣き入る葉子を大事さうにかゝへたまゝ、倉地は上體を前後に搖すぶつて、赤子でも寢かしつけるやうにした。戶外では又東京の初冬に特有な風が吹き出たらしく、杉森がごう〳〵と鳴りを立てて、枯葉が明るい障子に飛鳥のやうな影を見せながら、から〳〵と音を立てて乾いた紙にぶつかつた。それは埃立つた、寒い東京の街路を思はせた　けれども部屋の中は暖かだつた。葉子は部屋の中が暖かなのか寒いのかさへ解らなかつた。唯〻自分の心が幸福に淋しさに燃え爛れてゐるのを知つてゐた。唯〻このまゝで永遠は過ぎよかし。唯〻このまゝで眠りのやうな死の淵に陷れよかし。とう〳〵倉地の心と全く融け合つた自分の心を見出した時、葉子の魂の願ひは生きようといふ事よりも死なうと云ふ事だつた。葉子はその悲しい願ひの中に勇み甘んじて溺れて行つた。

二十九

この事があつてから又暫らくの間、倉地は葉子と唯〻二人の孤獨に沒頭する興味を新らしくしたやうに見えた。而して葉子が家の中をい

やが上にも整頓して、倉地の爲めに住み心地のいゝ巣を造る間に、倉地は天氣さへよければ庭に出て、葉子の逍遙を樂しませる爲めに精魂を盡した。何時苔香園との話をつけたものか、庭の隅に小さな木戸を作つて、その花園の母屋からずつと離れた小逕に通ひ得る仕掛けをしたりした。二人は時々その木戸をぬけて目立たないやうに、廣々とした苔香園の庭の中をさまよつた。店の人達は二人の心を察するやうに、成るべく二人から遠ざかるやうに勉めてくれた。十二月の薔薇の花園は淋しい廢園の姿を目の前に擴げてゐた。可憐な花を開いて可憐な匂を放つ癖にこの灌木は何處か強い執着を持つ植木だつた。寒さにも霜にもめげず、その枝の先きにはまだ裏咲きの小さな花を咲かせようと藻掻いてゐるらしかつた。種々な色の蕾が大方葉の散り盡した梢にまで殘つてゐた。然しその花瓣は存分に霜に虐げられて、黄色に變色して互に膠着して、恵み深い日の日に遇つても開きやうがなくなつてゐた。そんな間を二人は靜かな豐かな心でさまよつた。風のない夕暮れなどには苔香園の表門を拔けて、紅葉館前のだらだら坂を東照宮の方まで散歩するやうな事もあつた。冬の夕方の事とて人通りは稀れで二人が彷ふ道としてはこの上もなかつた。葉子はたまたま行き過ふ女の人達の衣裳を物珍らしく眺めやつた。それがどんなに粗末な不恰好な、いゝでたちであらうとも、女は自分以外の女の服裝を眺めなければ滿足出來ないものだと葉子は思ひながらそれを倉地に云つて見たりした。つやの髪から衣服までを毎日のやうに變へて裝はしてゐた自分の心持にも葉子は新らしい發見をしたやうに思つた。本當は二人だけの孤獨に苦しみ始めたのは倉地だけではなかつたのか。ある時にはその淋しい坂道の上下から、立派な馬車や抱へ車が續々坂の中段を目ざして集まるのに遇ふ事があつた。坂の中段から紅葉館の下に當る邊に導かれた廣い道の奥からは、能樂のはやしの音が床しげに漏れて來た。二人は能樂堂での能の催しが終りに近づいてゐるのを知つた。同時にそんな事を見たのでその日が日曜日である事にも氣が付いた位、二人の生活は世間からかけ離れてゐた。

かうした樂しい孤獨も然しながら永遠には續き得ない事を、續かしてゐてはならない事を鋭い葉子の神經は眼ざとく覺つて行つた。ある日倉地が例のやうに庭に出て土いぢりに精を出してゐる間に、葉子は惡事でも働くやうな心持で、つやに云ひつけて反故紙を集めた箱を自分の部屋に持つて來さして、いつか讀みもしないで破つてしまつた木村からの手紙を選り出さうとする自分を見出してゐた。色々な形に寸斷された厚い西洋紙の斷片が木村の書いた文句の斷片をいくつも〳〵葉子の眼に曝し出した。暫らくの間葉子は引きつけられるやうにさう云ふ紙片を手當り次第に手に取り上げて讀み耽つた。半成の畫が美しいやうに斷簡には云ひ知れぬ情緒が見出された。その中に正しく織り込まれた葉子の過去が多少の力を集めて葉子に逼つて來るやうにさへ思へ出した。葉子は我れにもなくその思ひ出に浸つて行つた。然しそれは長い時が過ぎる前に壞れてしまつた。葉子はすぐ現實に取つて返してゐた。而して凡ての過去に嘔氣のやうな不快を感じて箱ごと臺所に持つて行くと、つやに命じて裏庭でその全部を燒き捨てさせてしまつた。

然しこの時も葉子は自分の心で倉地の心を思ひやつた。而してそれが何うしてもいゝ徴候でない事を知つた。そればかりではない。二人は霞を喰つて生きる仙人のやうにしては生きてゐられないのだ。職業を失つた倉地には、口こそ出さないが、この問題は遠からず大きな問

題として胸に忍ばせてあるのに違ひない。事務長位の給料で餘財が出來てゐるとは考へられない。まして倉地のやうに身分不相應な金遣ひをしてゐた男にはなほの事だ。その點だけから見てもこの孤獨は破られなければならぬ。而してそれは結局二人の爲めにいゝ事であるに相違ない。葉子はさう思つた。

或る晩それは倉地の方から切り出された。長い夜を所在なささうに讀みもしない書物などをいぢくつてゐたが、ふと思ひ出したやうに、

「葉子。一つお前の妹達を家に呼ばうぢやないか……それからお前の子供つて云ふのも是非こゝで育てたいもんだな。俺れも急に三人まで子を失くしたら淋しくつてならんから……」

飛び立つやうな思ひを葉子は逸早くも見事に胸の中で押し鎭めてしまつた。而して、

「さうですね」

と如何にも興味なげに云つてゆつくり倉地の顔を見た。

「それよりあなたのお子さんを一人なり二人なり來て貰つたらいかゞ。……私奥さんの事を思ふといつでも泣きます。(葉子はさう云ひながらもう涙を一杯に眼にためてゐた)けれど私は生きてる間は奥さんを呼び戻して上げて下さいなんて……そんな僞善者じみた事は云ひません。私にはそんな心持は微塵もありませんもの。お氣の毒なといふ事と、二人がかうなつてしまつたといふ事とは別物ですものねえ。せめては奥さんが私を詛ひ殺さうとでもして下されば少しは氣持がいゝんだけれども、しとやかにしてお里に歸つていらつしやると思ふとつい身につまされてしまひます。だからと云つて私は自分が命を投げ出して築き上げた幸福を人に上げる氣にはなれません。あなたが私をお捨てになるまではね、喜んで私は私を通すんです。……けれどもお子さんなら私本當にいゝとも構ひはしない事よ。どう、お呼び寄せになつては?」

「馬鹿な。今更らそんな事が出來てたまるか」

倉地は噛んで捨てるやうにさう云つて横を向いてしまつた。本當を云ふと倉地の妻の事を云つた時には葉子は心の中をそのまゝ云つてゐたのだ。その娘達の事を云つた時にはまざ〳〵とした虚言をついてゐたのだ。葉子の熱意は倉地の妻を香はせるものは凡て憎かつた。倉地の家の方から持ち運ばれた調度すら憎かつた。況してその子が詛はしくなくつて何うしよう。葉子は單に倉地の心を引いて見たいばかりに怖々ながら心にもない事を云つて見たのだつた。倉地の噛んで捨てるやうな言葉は葉子を滿足させた。同時に少し強過ぎるやうな語調が懸念でもあつた。倉地の心底をすつかり見て取つたといふ自信を得た積りでゐながら、葉子の心は何かの機につけてからぐらついた。

「私が是非といふんだから構はないぢやありませんか」

「そんな負け惜みを云はんで、妹達なり定子なりを呼び寄せようや」

さう云つて倉地は葉子の心を隅々まで見拔いてるやうに、大きく葉子を包みこむやうに見やりながら、いつもの少し澁いやうな顔をして微笑んだ。

葉子はいゝ潮時を見計つて巧みにも不承不承さうに倉地の言葉に折れた。而して田島の塾からいよ〳〵妹達二人を呼び寄せる事にした。同時に倉地はその近所に下宿するのを餘儀なくされた。それは葉子が倉地との關係をまだ妹達に打ち明けてなかつたからだ。それはもう少し先きに適當な時機を見計つて知らせる方がいゝといふ葉子の意見だつた。倉地にもそれに不服はなかつた。而して朝から晩まで一緒に寝起きをするよりは、離れた所に住んでゐ

て、氣の向いた時に遇ふ方がどれ程二人の間の戯れの心を滿足させるか知れないのを、二人は暫らくの間の言葉通りの同棲の結果として認めてゐた。倉地は生活を支へて行く上にも必要であるし、不休の活動力を放射するにも必要なので、解職になつて以來何か事業の事を時時思ひ耽つてゐるやうだつたが、いよ〳〵計畫が立つたので、それに着手する爲めには、當座の所、人々の出入りに葉子の顏を見られない所で事務を取るのを便宜としたらしかつた。その爲めにも倉地が暫らくなりとも別居する必要があつた。

　葉子の立場は段々と固まつて來た。十二月の末に試驗が濟むと、妹達は田島の塾から少しばかりの荷物を持つて歸つて來た。殊に貞世の喜びと云つてはなかつた。二人は葉子の部屋だつた六疊の腰窓の前に小さな二つの机を竝べた。今まで何んとなく遠慮勝ちだつたつやも生れ代つたやうに快活なはき〳〵した少女になつた。唯ゞ愛子だけは少しも嬉しさを見せないで、唯ゞ愼み深く素直だつた。

「愛姉さん嬉しいわねえ」

貞世は勝ち誇るものゝ如く、縁側の柱に倚りかかつて凝と冬枯れの庭を見詰めてゐる姉の肩に手をかけながら倚り添つた。愛子は一所を瞬きもしないで見詰めながら、

「えゝ」

と齒切れ惡く答へるのだつた。貞世はじれつたさうに愛子の肩をゆすりながら、

「でもちつとも嬉しさうぢやないわ」

と責めるやうに云つた。

「でも嬉しいんですもの」

愛子の答へは冷然としてゐた。十疊の座敷に持ち込まれた行李を明けて、汚れ物などを選り分けてゐた葉子はその樣子をちらと見たばかりで腹が立つた。然し來たばかりのものをたしなめるでもないと思つて蟲を殺した。

「何んて靜かな所でせう。塾よりも屹度靜かよ。でもこんなに森があつちや夜になつたら淋しいわねえ。私ひとりでお便所に行けるか知らん。……愛姉さん、そら、あすこに木戸があるわ。屹度隣りのお庭に行けるのよ。あのお庭に行つてもいゝのお姉樣。誰れのお家むかうは？……」

貞世は眼に這入るものはどれも珍らしいと云ふやうに獨りでしやべつては、葉子にとも愛子にともなく質問を連發した。そこが薔薇の花園であるのを葉子から聞かされると、貞世は愛子を誘つて庭下駄をつつかけた。愛子も貞世に續いてそつちの方に出かける樣子だつた。

　その物音を聞くと葉子はもう我慢が出來なかつた。

「愛さんお待ち。お前さん方のものがまだ片附いてはゐませんよ。遊び廻るのは始末をしてからになさいな」

愛子は從順に姉の言葉に從つて、その美しい眼を伏せながら座敷の中に這入つて來た。

　それでもその夜の夕食は珍らしく賑やかだつた。貞世がはしやぎ切つて、胸一杯のものを前後も連絡もなくしやべり立てるので愛子さへも思はずにやりと笑つたり、自分の事を容赦なく云はれたりすると恥かしさうに顏を赤らめたりした。

貞世は嬉しさに疲れ果てて夜の淺い中に寢床に這入つた。明るい電燈の下に葉子と愛子と向ひ合ふと、久しく遇はないでゐた骨肉の人々の間にのみ感ぜられる淡い心置きを感じた。葉子は愛子にだけは倉地の事を少し具體的に知らしておく方がいゝと思つて、話のきつかけに少し言葉を改めた。

「まだあなた方にお引き合せがしてないけれども倉地つて云ふ方ね、繪島丸の事務長の……

（愛子は從順に落ち着いてうなづいて見せた）……あの方が今木村さんに成りかはつて私の世話を見てゐて下さるのよ。木村さんからお賴まれなさつたものだから、迷惑さうにもなく、こんないゝ家まで見付けて下さつたの。木村さんは米國で色々事業を企てていらつしやるんだけれども、どうもお仕事がうまく行かないで、お金が注ぎ込みにばかりなつてゐて、迚もこつちには送つて下されないの、私の家はあなたも知つての通りでせう。どうしても暫らくの間は御迷惑でも倉地さんに萬事を見ていたゞかなければならないのだから、あなたもその積りでゐて頂戴よ。ちよく〳〵こゝにも來て下さるからね。それにつけて世間では何かくだらない噂をしてゐるに違ひないが、愛さんの塾なんかでは何んにもお聞きではなかつたかい」

「いゝえ、私達に面と向つて何か仰しやる方は一人もありませんわ。でも」

と愛子は例の多恨らしい美しい眼を上眼に使つて葉子を竊み見るやうにしながら、

「でも何しろあんな新聞が出たもんですから」

「どんな新聞？」

「あらお姉樣御存じなしなの。報正新報に續き物でお姉樣とその倉地といふ方の事が長く出てゐましたのよ」

「へーえ」

葉子は自分の無智に惘れるやうな聲を出してしまつた。それは實際思ひもかけぬと云ふよりは、ありさうな事ではあるが今の今まで知らずにゐた、それに葉子は惘れたのだつた。然しそれは愛子の眼に自分を非常に無辜らしく見せただけの利益はあつた。さすがの愛子も驚いたらしい眼をして姉の驚いた顔を見やつた。

「何時？」

「今月の始め頃でしたか知らん。だもんですから皆さん方の間では大變な評判らしいんですの。今度も塾を出て來年から姉の所から通ひますと田島先生に申上げたら、先生も家の親類達に手紙や何んかで大分お聞き合せになつたやうですのよ。而して今日私達を自分のお部屋にお呼びになつて―私はお前さん方を塾から出したくはないけれども、塾に居續ける氣はないか」と仰しやるのよ。でも私達は何んだか塾にゐるのが肩身が……どうしてもいやになつたもんですから、無理にお願ひして歸つて來てしまひましたの」

愛子は普段の無口に似ずから云ふ事を話す時にはちやんと筋目が立つてゐた。葉子には愛子の沈んだやうな態度がすつかり讀めた。葉子の憤怒は見る〳〵その血相を變へさせた。田川夫人といふ人は何處まで自分に對して執念を寄せようとするのだらう。それにしても夫人の友達には五十川と云ふ人もある筈だ。若し五十川の小母さんが本當に自身の改悛を望んでゐてくれるなら、その記事の中止なり訂正なりを夫、田川の手を經てさせる事は出來る筈なのだ。田島さんも何んとかしてくれやうがありさうなものだ。そんな事を妹達に云ふ位なら何故自分に一言忠告でもしてはくれないのだ。（こゝで葉子は歸朝以來妹達を預つてもらつた禮をしに行つてゐなかつた自分を顧みた。然し事情がそれを許さないのだらう位は察してくれてもよささうなものだと思つた）それほど自分はもう世間から見くびられ除け者にされてゐるのだ。葉子は何かたゝき附けるものでもあれば、而して世間と云ふものが何か形を備へたものであれば、力の限り得物をたゝきつけてやりたかつた。葉子は小刻みに震へながら、言葉だけはしとやかに、

「古藤さんは」

「たまにお便りを下さいます」

「あなた方も上げるの」

「えゝたまに」
「新聞の事を何か云つて來たかい」
「何んにも」
「こゝの番地は知らせて上げて」
「いゝえ」
「何故」
「お姉様の御迷惑になりはしないかと思つて」
この小娘はもう皆んな知つてゐる、と葉子は一種の怖れと警戒とを以て考へた。何事も心得ながら白々しく無邪氣を裝つてゐるらしいこの妹が敵の間諜のやうにも思へた。
「今夜はもうお休み。疲れたでせう」
葉子は冷然として、燈の下に俯向いてきちんと坐つてゐる妹を尻眼にかけた。愛子はしとやかに頭を下げて從順に座を立つて行つた。
その夜十一時頃倉地が下宿の方から通つて來た。裏庭をぐるつと廻つて、毎夜戸じまりをせずにおく張出しの六疊の間から上つて來る音が、じれながら鐵瓶の湯氣を見てゐる葉子の神經にすぐ通じた。葉子はすぐ立ち上つて猫のやうに足音を盜みながら急いでそつちに行つた。丁度緣側を上らうとしてゐた倉地は暗い中に葉子の近づく氣配を知つて、いつもの通り、立ち上りざまに葉子を抱擁しようとした。然し葉子はさうはさせなかつた。而して急いで戸を締め切つてから、電燈のスヰッチをひねつた。火の氣のない部屋の中は急に明るくなつたけれども身を刺すやうに寒かつた。倉地の顏は酒に醉つてゐるやうに赤かつた。
「どうした、顏色がよくないぞ」
倉地は訝るやうに葉子の顏をまじ／＼と見やりながらさう云つた。
「待つて下さい、今私こゝに火鉢を持つて來ますから。妹達が寢ばなだからあすこでは起すといけませんから」
さう云ひながら葉子は手あぶりに火をついで持つて來た。而して酒肴もそこにとゝのへた。
「色が惡い筈……今夜はまたすつかり向つ腹が立つたんですもの。私達の事が報正新報に皆んな出てしまつたのを御存じ？」
「知つとるとも」
倉地は不思議でもないといふ顏をして眼をしばだたいた。
「田川の奥さんといふ人は本當にひどい人ね」
葉子は齒を嚙みくだくやうに鳴らしながら云つた。
「全くあれは法圖のない悧巧馬鹿だ」
さう吐き捨てるやうに云ひながら倉地の語る所によると、倉地は葉子に、屹度その中掲載される報正新報の記事を見せまい爲めに引越して來た當座わざと新聞はどれも購讀しなかつたが、倉地だけの耳へは或る男（それは繪島丸のどてらを着て寢床の中に二つに折れ込んでゐたその男であるのが後で知れた。その男は名を正井と云つた）からつやの取次ぎで内祕に知らされてゐたのださうだ。郵船會社はこの記事が出る前から倉地の爲めに又會社自身の爲めに、極力揉み消しをしたのだけれども、新聞社では一向應ずる色がなかつた。それから考へるとそれは當時新聞社の慣用手段の懷金を貪らうといふ目論見ばかりから來たのでない事だけは明らかになつた。あんな記事が現はれてはもう會社としても默つてはゐられなくなつて、大急ぎで詮議をした結果、倉地と船醫の興錄とが處分される事になつたと云ふのだ。
「田川の嚊の惡戯に決つとる。馬鹿に口惜しかつたと見えて。……がからなりや結局パッとなつた方がいゝわい。皆んな知つとるだけ――申し譯を云はずと濟む。お前はまたまだそれしきの事にくよ／＼しとるんか。馬鹿な。……それより妹達は來とるんか。寢顏にでもお目

に懸つておからよ。寫眞――船の中にあつたね――で見ても可愛らしい子達だつたが……」

二人はやをらその部屋を出た。而して十疊と茶の間との隔ての襖をそつと明けると、二人の姉妹は向ひ合つて別々の寢床にすや／＼と眠つてゐた。綠色の笠のかゝつた、電燈の光は海の底のやうに部屋の中を思はせた。

「あつちは」

「愛子」

「こつちは」

「貞世」

葉子は心竊かに、世にも艷やかなこの少女二人を妹に持つ事に誇りを感じて暖かい心になつてゐた。而して靜かに膝をついて、切り下げにした貞世の前髮をそつと撫であげて倉地に見せた。倉地は聲を殺すのに少からず難儀な風で、

「さうやるとこつちは、貞世は、お前によく似とるわい。……愛子は、ふむ、これは又素的な美人ぢやないか。俺れはこんなのは見た事がない：：お前の二の舞でもせにや結構だが……」

さう云ひながら倉地は愛子の顏ほどもあるやうな大きな手をさし出して、さうしたい誘惑を退けかねるやうに、紅椿のやうな紅いその脣に觸れて見た。

その瞬間に葉子はぎよつとした。倉地の手が愛子の脣に觸れた時の樣子から、葉子は明らかに愛子がまだ目覺めてゐて、寢たふりをしてゐるのを感付いたと思つたからだ。葉子は大急ぎで倉地に目くばせしてそつとその部屋を出た。

三十

「僕が毎日――毎日とは云はず每時間貴女に筆を執らないのは執りたくないから執らないのではありません。僕は一日貴女に書き續けてゐてもなほ飽き足らないのです。それは今の僕の境界では許されない事です。僕は朝から晩まで機械の如く働かねばなりませんから。

貴女が米國を離れてから此の手紙は多分七回目の手紙として貴女に受取られると思ひます。然し僕の手紙はいつまでも暇を竊んで少しづつ書いてゐるのですから、僕から云ふと日に二度も三度も貴女にあてて書いてる譯になるのです。然し貴女はあの後一回の音信を惠んでは下さらない。

僕は繰り返し／＼云ひます。縱令貴女にどんな過失どんな誤謬があらうとも、それを耐へ忍び、それを許す事に於ては主基督以上の忍耐力を持つてゐるのを僕は自ら信じてゐます。誤解しては困ります。僕が如何なる人に對してもかゝる力を持つてゐると云ふのではないのです。唯ゝ貴女に對してです。貴女は何時でも僕の品性を尊く導いてくれます。僕は貴女によつて人がどれ程愛し得るかを學びました。貴女によつて世間で云ふ墮落とか罪惡とか云ふ者がどれ程まで寬容の餘裕があるかを學びました。而してその寬容によつて、寬容する人自身がどれ程品性を陶冶されるかを學びました。僕は又自分の愛を成就する爲めにはどれ程の勇者になり得るかを學びました。これほどまでに僕を神の眼に高めて下さつた貴女が、僕から萬一にも失はれると云ふのは想像が出來ません。神がそんな試煉を人の子に下される殘虐はなさらないのを僕は信じてゐます。そんな試煉に堪へるのは人力以上ですから。今の僕から貴女が奪はれると云ふのは神が奪はれるのと同じ事です。貴女は神だとは云ひますまい。然し貴女を通してのみ僕は神を拜

む事が出來るのです。
時々僕は自分で自分を憐れんでしまふ事があります。自分自身だけの力と信仰とで凡てのものを見る事が出來たらどれ程幸福で自由だらうと考へると、貴女を煩はさなければ一歩を踏み出す力をも感じ得ない自分の束縛を詛ひたくもなります。同時にそれ程慕はしい束縛は他にない事を知るのです。束縛のない所に自由はないと云つた意味で貴方の束縛は僕の自由です。
貴女は――一旦僕に手を與へて下さると約束なさつた貴女は、遂に僕を見捨てようとして居られるのですか。何うして一回の音信も惠んでは下さらないのです。然し僕は信じて疑ひません。世に若し眞理があるならば、而して眞理が最後の勝利者ならば貴女は必ず僕に還つて下さるに違ひないと。何故ならば僕は誓ひます。――主よこの僕を見守り給へ――僕は貴女を愛して以來斷じて他の異性に心を動かさなかつた事を。この誠意が貴女によつて認められない譯はないと思ひます。
貴女は從來暗いいくつかの過去を持つてゐます。それが知らず識らず貴女の向上心を躊躇させ、貴女を稍ゝ絶望的にしてゐるのではないのですか、若しさうなら貴女は全然誤謬に陷つてゐると思ひます。凡ての救ひは思ひ切つてその中から飛び出す外にはないのでせう。そこに停滯してゐるのはそれだけ貴女の暗い過去を暗くするばかりです。貴女は僕に信頼を置いて下さる事は出來ないのでせうか。人類の中に少くも一人、貴女の凡ての罪を喜んで忘れようと兩手を擴げて待ち設けてゐるもののあるのを信じて下さる事は出來ないでせうか。
こんな下らない理窟はもうやめませう。
昨夜書いた手紙に續けて書きます。今朝ハミルトン氏の所から至急に來いといふ電話がかゝりました。シカゴの冬は豫期以上に寒いです。仙臺どころの比ではありません。雪は少しもないけれども、イリー湖を多湖地方から渡つて來る風は身を切るやうでした。僕は外套の上に又大外套を重ね着してゐながら、風に向いた皮膚に沁み透る風の寒さを感じました。ハミルトン氏の用と云ふのは來年聖ルイスに開催される大規模な博覽會の協議の爲め急にそこに赴くやうになつたから同行しろと云ふのでした。僕は旅行の用意は何等してゐなかつたが、こゝにアメリカニズムがあるのだと思つてそのまゝ同行する事にしました。自分の部屋の戸に鍵もかけずに飛び出したのですからバビコック博士の奥さんは驚いてゐるでせう。然しさすがに米國です。着のみ着のまゝでこゝまで來ても何一つ不自由を感じません。鎌倉あたりまで行くのにも膝かけから旅カバンまで用意しなければならないのですから、日本の文明はまだ中々のものです。僕達はこの地に着くと、停車場内の化粧室で髭を剃り、靴を磨かせ、夜會に出ても恥かしくない支度が出來てしまひました。而してすぐ協議會に出席しました。貴女も知つて居らるゝ通り獨逸人のあの邊に於ける勢力は偉いものです。博覽會が開けたら、我々は米國に對してよりも寧ろこれらの獨逸人に對して緊褌一番する必要があります。ランチの時僕はハミルトン氏に例の日本に買ひ占めてあるキモノその他の話をもう一度しました。博覽會を前に控へてゐるのでハミルトン氏も今度は乘氣になつてくれまして、高島屋と連絡をつけておく爲めに兎に角品物を取

り寄せて自分の店で捌かして見ようと云つてくれました、これで僕の財政は非常に餘裕が出來る譯です。今まで店がなかつたばかりに、取り寄せても荷厄介だつたものですが、ハミルトン氏の店で取扱つてくれれば相當に賣れるのは分つてゐます。さうなつたら今までと違つて貴女の方にも足りないながら仕送りをして上げる事が出來ませう。早速電報を打つて一番早い船便で取り寄せる事にしましたから不日着荷する事と思つてゐます。

今は夜も大分更けました。ハミルトン氏は今夜も饗應に呼ばれて出かけました。大嫌ひなテーブル・スピーチになやまされてゐるのでせう。ハミルトン氏は實にシャープなビジネスマンライキな人です。而して熱心な正統派の信仰を持つた慈善家です。僕は殊の外信頼され重寶がられてゐます。そこから僕のライフ・キャリヤアを踏み出すのは大なる利益です。僕の前途には確かに光明が見え出して來ました。

貴女に書く事は底止なく書く事です。然し明日の奮鬪的生活（これは大統領ルーズヴェルトの著書の "Strenuous Life" を譯して見た言葉です。今この言葉は當地の流行語になつてゐます）に備へる爲めに筆を止めねばなりません。この手紙は貴女にも喜びを分けていただく事が出來るかと思ひます。

昨日聖ルイスから歸つて來たら、手紙が可なり多數届いてゐました。郵便局の前を通るにつけ、郵便函を見るにつけ、脚夫に行き遇ふにつけ、僕は貴女を聯想しない事はありません。自分の机の上に來信を見出した時は猶更らの事です。僕は手紙の束の間をかき分けて貴女の手蹟を見出さうと勉めました。然し僕は又絶望に近い失望に打たれなければなりませんでした。僕は失望はしませう。然し絶望はしません。出來ません葉子さん、信じて下さい。僕はロングフェローのエヴァンジェリンの忍耐と謙遜とを以て貴女が僕の心を本當に汲み取つて下さる時を待つてゐます。然し手紙の束の中からは僅かに僕を失望から救ふ爲めに古藤君と岡君との手紙が見出されました。古藤君の手紙は兵營に行く五日前に書かれたものでした。未だに貴女の居所を知る事が出來ないので、僕の手紙は矢張り倉地氏にあてて廻送してゐると書いてあります。古藤君はさうした手續きを取るのを甚しく不快に思つてゐるやうです。岡君は人に漏らし得ない家庭内の紛擾や周圍から受ける誤解を、岡君らしく過敏に考へ過ぎて弱い體質を益々弱くしてゐるやうです。書いてある事には處々僕の持つ常識では判斷しかねるやうな所があります。貴女から何時か必ず消息が來るのを信じ切つて、その時を唯一つの救ひとして待つてゐます。その時の感謝と喜悦とを想像で描き出して、小説でも讀むやうに書いてあります。僕は岡君の手紙を讀むと、何時でも僕自身の心がそのまゝ書き現はされてゐるやうに思つて涙を感じます。

何故貴女は自分をそれ程まで躊躇して居られるのか、それには深い譯がある事と思ひますけれども、僕にはどちらの方面から考へても想像がつきません。

日本からの消息はどんな消息も待ち遠しい。然しそれを見終つた僕は屹度憂鬱に襲はれます。僕に若し信仰が與へられてゐなかつたら、僕は今何うなつてゐたかを知りません。

前の手紙との間に三日が經ちました。僕はバビコック博士夫婦と今夜ライシアム座にウエルシ孃の演じたトルストイの「復活」を見物しました。そこには基督教徒として眼を背けなければならないやうな場面がないではなかつたけれども、終りの方に近づいて行つての莊嚴さは見物人の凡てを捕捉してしまひました。ウエルシ孃の演じた女主人公は眞に迫り過ぎてゐる位でした。貴女が若しまだ「復活」を讀んで居られないのなら僕は是非それをお勸めします。僕はトルストイの「懺悔」をK氏の邦文譯で日本にゐる時讀んだだけですが、あの芝居を見てから、暇があつたらもつと深く色々研究したいと思ふやうになりました。日本ではトルストイの著書はまだ多くの人に知られてゐないと思ひますが、少くとも「復活」だけは丸善からでも取り寄せて讀んでいたゞきたい、貴女を啓發する事が必ず多いのは請合ひますから。僕等は等しく神の前に罪人です。然しその罪を悔い改める事によつて等しく選ばれた神の僕となり得るのです。この道の外には人の子の生活を天國に結び付ける道は考へられません。神を敬ひ人を愛する心の萎えてしまはない中にお互に光を仰がうではありませんか。

葉子さん、貴方の心に空虛なり汚點なりがあつても萬望絕望しないで下さいよ。貴女をそのまゝに喜んで受け入れて、――苦しみがあれば貴女と共に苦しみ、貴女に悲しみがあれば貴女と共に悲しむものがここに一人ゐる事を忘れないで下さい。僕は戰つて見せます。どんなに貴女が傷いてゐても、僕は貴女を庇つて勇ましくこの人生を戰つて見せます。僕の前に事業が、而して後ろに貴女があれば、僕は神の最も小さい僕として人類の祝福の爲めに一生を獻げます。

嗚呼、筆も言語も遂に無益です。火と熱する誠意と祈りとを籠めて僕はこゝにこの手紙を封じます。この手紙が倉地氏の手から貴女に屆いたら、倉地氏にも宜しく傳へて下さい。倉地氏に迷惑をおかけした金錢上の事については前便に書いておきましたから見て下さつたと思ひます。願はくは神我等と共に在し給はん事を、

明治三十四年十二月十三日」

倉地は事業の爲めに奔走してゐるのでその夜は年越しに來ないと下宿から知らせて來た。

妹達は除夜の鐘を聞くまでは寢ないなどと云つてゐたが何時の間にか睡くなつたと見えて、餘り靜かなので二階に行つて見ると、二人とも寢床に這入つてゐた。つやには暇が出してあつた。葉子に內證で報正新報を倉地に取り次いだのは、縱令葉子に無益な心配をさせない爲めだと云ふ倉地の注意があつた爲めであるにもせよ、葉子の心持を損じもし不安にもした。つやが葉子に對しても素直な敬愛の情を抱いてゐたのは葉子もよく心得てゐた。前にも書いたやうに葉子は一と眼見た時からつやが好きだつた。臺所などをさせずに、小間使として手廻りの用事でもさせたら顏容と云ひ、性質と云ひ、取り廻しと云ひこれ程理想的な少女はないと思ふ程だつた。つやにも葉子の心持はすぐ通じたらしく、つやはこの家の爲めに陰日向なくせつせと働いたのだつた。けれども新聞の小さな出來事一つが葉子を不安にしてしまつた。倉地が雙鶴館の女將に對しても氣の毒がるのを構はず、妹達に働かせるのが却つていゝからとの口實の下に暇をやつてしまつたのだつた。で勝手の方にも人氣はなかつた。

葉子は何を原因ともなくその頃氣分がいらい

らし勝ちで寢付きも惡かつたので、ぞく／＼沁み込んで來るやうな寒さにも係はらず、火鉢の側にゐた。而して所在ないまゝにその日倉地の下宿から屆けて來た木村の手紙を讀んで見る氣になつたのだ。

葉子は猫板に片肘を持たせながら、必要もない程高價だと思はれる厚い書翰牋に大きな字で書き綴つてある木村の手紙を一枚々々讀み進んだ。大人びたやうで子供つぽい、さうかと思ふと感情の高潮を示したと思はれる所も妙に打算的な所が離れ切らないと葉子に思はせるやうな内容だつた。葉子は一々精讀するのが面倒なので行から行に飛び越えながら讀んで行つた。而して日附けの所まで來ても格別な情緒を誘はれはしなかつた。然し葉子はこの以前倉地の見てゐる前でしたやうにずた／＼に引き裂いて捨ててしまふ事はしなかつた。しなかつた所ではない、その中には葉子を考へさせるものが含まれてゐた。木村は遠からずハミルトンとか云ふ日本の名譽領事をしてゐる人の手から、日本を去る前に思ひ切つてして行つた放資の回收をして貰へるのだ。不卽不離の關係を破らずに別れた自分のやり方は矢張り圖に中つてゐたと思つた。「宿屋きめずに草鞋を脫」ぐ馬鹿をしない必要はもうない、倉地の愛は確かに自分の手に握り得たから。然し口にこそ出しはしないが、倉地は金の上では可なりに苦しんでゐるに違ひない。倉地の事業と云ふのは日本中の開港場にゐる水先案內業者の組合を作つて、その實權を自分の手に握らうとするのらしかつたが、それが仕上るのは短い日月には出來る事ではなさうだつた。殊に時節が時節がら正月にかゝつてゐるから、さう云ふものの設立には一番不便な時らしくも思はれた。木村を利用してやらう。

然し葉子の心の底には何處かに痛みを覺えた。散々木村を苦しめ拔いた擧句に、なほあの根の正直な人間をたぶらかしてなけなしの金を搾り取るのは俗に云ふ「つゝもたせ」の所業と違つてはゐない。さう思ふと葉子は自分の墮落を痛く感ぜずにはゐられなかつた。けれども現在の葉子に一番大事なものは倉地と云ふ情人の外にはなかつた。心の痛みを感じながらも倉地の事を思ふとなほ心が痛かつた。彼れは妻子を犧牲に供し、自分の職業を犧牲に供し、社會上の名譽を犧牲に供してまで葉子の愛に溺れ、葉子の存在に生きようとしてくれてゐるのだ。それを思ふと葉子は倉地の爲めには何んでもして見せてやりたかつた。時によると我れにもなく侵して來る淚ぐましい感じをぢつと堪へて、定子に會ひに行かずにゐるのも、さうする事が何か宗敎上の願がけで、倉地の愛を繫ぎとめる禁厭のやうに思へるからしてゐる事だつた。木村にだつて何時かは物質上の償ひ目に對して物質上の返禮だけはする事が出來るだらう。自分のする事は「つゝもたせ」とは形が似てゐるだけだ。やつてやれ。さう葉子は決心した。讀むでもなく讀まぬでもなく手に持つて眺めてゐた手紙の最後の一枚を葉子は無意識のやうにぽたりと膝の上に落した。而してそのまゝぢつと鐵瓶から立つ湯氣が電燈の光の中に多樣な渦紋を描いては消え描いては消えするのを見つめてゐた。

暫らくしてから葉子は物憂げに深い吐息を一つして、上體をひねつて棚の上から手文庫を取り下ろした。而して筆を嚙みながら又上眼でぢつと何か考へるらしかつた。と、急に生きかへつたやうにはき／＼なつて、上等の支那墨を眼の三つまで這入つた眞圓るい硯にすり下ろした。そして輕く麝香の香の漂ふなかで男の字のやうな健筆で、精巧な雁皮紙の卷紙に、一氣に、次ぎのやうに認めた。

「書けばきり、い、が御座いません。何へばきり、い、が御座いません。だから書きも致しませんでした。あなたのお手紙も今日いたゞいたものまでは拜見せずにずた〳〵に破つて捨ててしまひました。その心をお察し下さいまし。

噂にもお聞きとは存じますが、私は見事に社會的に殺されてしまひました。何うして私がこの上あなたの妻と名乘れませう。自業自得と世の中では申します。私も確かにさう存じてゐます。けれども親類、緣者、友達にまで突き放されて、二人の妹を抱へて見ますと、私は眼もくらんで仕舞ひます。倉地さんだけが何う云ふ御緣かお見捨てなく私共三人をお世話下さつてゐます。からして私は何處まで沈んで行く事で御座いませう。本當に自業自得で御座います。今日拜見したお手紙も本當は讀まずに裂いてしまふので御座いましたけれども……私の居所を誰方にもお知らせしない譯などは申し上げるまでも御座いますまい。

この手紙はあなたに差上げる最後のものかとも思はれます。お大事にお過し遊ばしませ。蔭ながら御成功を祈り上げます。

只今除夜の鐘が鳴ります。

大晦日の夜　　　　葉より

木村様

葉子はそれを日本風の狀袋に收めて、毛筆で器用に表記を書いた。書き終ると急にいらいらし出して、いゝ、いきなり兩手に握つて一と思ひに引き裂かうとしたが、思ひ返して捨てるやうにそれを疊の上に投げ出すと、我れにもなく冷やかな微笑が口尻をかすかに引きつらした。

葉子の胸をどき、い、んとさせる程高く、すぐ最寄りにある增上寺の除夜の鐘が鳴り出した。遠くから何處の寺のとも知れない鐘の聲がそれに應ずるやうに聞こえて來た。その音に引入れられて耳を澄ますと夜の沈默の中にも聲はあつた。十二時を打つぼん〳〵時計、「かるた」を讀み上げるらしいはしやいだ聲、何に驚いてか夜啼きをする鷄……葉子はそんな響きを探り出すと、人の生きてゐるといふのが恐ろしい程不思議に思はれ出した。

急に寒さを覺えて葉子は寢支度に立ち上つた。

三十一

寒い明治三十五年の正月が來て、愛子達の冬期休暇も終りに近づいた。葉子は妹達を再び田島塾の方に歸してやる氣にはなれなかつた。田島といふ人に對して反感を抱いたばかりではない。妹達を再び預かつて貰ふ事になれば葉子は當然挨拶に行つて來べき義務を感じたけれども、どう云ふものかそれが憚られて出來なかつた。横濱の支店長の永井とか、この田島とか、葉子には自分ながら譯の分らない苦手の人があつた。その人達が格別偉い人だとも、恐ろしい人だとも思ふのではなかつたけれども、どう云ふものかその前に出る事に氣が引けた。葉子は又妹達が不言不語の中に生徒達から受けねばならぬ迫害を思ふと不便でもあつた。で、毎日通學するには遠すぎると云ふ理由の下にそこをやめて、飯倉にある幽蘭女學校といふのに通はせる事にした。

二人が學校に通ひ出すやうになると、倉地は朝から葉子の所で退校時間まで過ごすやうになつた。倉地の腹心の仲間たちもちよい〳〵出入りした。殊に正井といふ男は倉地の影のやうに倉地のゐる所には必ず居た。例の水先案內業者組合の設立について正井が一番働いてゐるのらしかつた。正井と云ふ男は、一見放漫なやう

に見えてゐて、剃刀のやうに目端の利く人だつた。その人が玄關から這入つたら、そのあとに行つて見ると履物は一つ殘らず揃へてあつて、傘は傘で一隅にちやんと集めてあつた。葉子も及ばない素早さで花瓶の花の萎れかけたのや、茶や菓子の足しなくなつたのを見て取つて、翌日は忘れずにそれを買ひ調へて來た。無口の癖に何處かに愛嬌があるかと思ふと、馬鹿笑ひをしてゐる最中に不思議に陰險な眼付きをちらつかせたりした。葉子はその人を觀察すればする程その正體が分らないやうに思つた。それは葉子をもどかしくさせる程だつた。時々葉子は倉地がこの男と組合設立の相談以外の祕密らしい話合ひをしてゐるのに感付いたが、それは何うしても明確に知る事が出來なかつた。倉地に聞いて見ても、倉地は例の暢氣な態度で事もなげに話題を外らしてしまつた。

葉子は然し何んと云つても自分が望み得る幸福の絶頂に近い所にゐた。倉地を喜ばせる事が自分を喜ばせる事であり、自分を喜ばせる事が倉地を喜ばせる事である、さうした作爲のない調和は葉子の心をしとやかに快活にした。何にでも自分がしようとさへ思へば適應し得る葉子に取つては、拔け目のない世話女房になる位の事は何んでもなかつた。妹達もこの姉を無二のものとして、姉のしてくれる事は一も二もなく正しいものと思ふらしかつた。始終葉子から繼子あつかひにされてゐる愛子さへ、葉子の前には唯〻從順なしとやかな少女だつた。愛子としても少くとも一つは何うしてもその姉に感謝しなければならない事があつた。それは年齡のお蔭もある。愛子は今年で十六になつてゐた。然し葉子がゐなかつたら、愛子はこれ程美しくはなれなかつたに違ひない。二三週間の中に愛子は山から掘り出されたばかりのルビーと磨きをかけ上げたルビーと程に變つてゐた。小肥りで脊丈けは姉よりも遙かに低いが、ぴち〳〵と締つた肉付きと、拔け上るほど白い艶のある皮膚とは、いゝ均整を保つて、短くはあるが類のない程肉感的な手足の指の先き細な處に利點を見せてゐた。むつくりと牛乳色の皮膚に包まれた地藏肩の上に据ゑられたその顔は又葉子の苦心に十二分に酬いるものだつた。葉子が頸際を剃つてやるとそこに新らしい美が生れ出た。髮を自分の意匠通りに束ねてやるとそこに新らしい蠱惑が湧き上つた。葉子は愛子を美しくする事に、成功した作品に對する藝術家と同樣の誇りと喜びとを感じた。暗い處にゐて明るい方に振り向いた時などの愛子の卵形の顔形は美の神ヴィーナスをさへ妬ます事が出來たらう。顔の輪郭と、稍〻額際を狹くするまでに厚く生え揃つた黒漆の髮とは闇の中に溶けこむやうにぼかされて、前からのみ來る光線の爲めに鼻筋は、希臘人のそれに見るやうな、規則正しく細長い前面の平面を際立たせ、潤ひ切つた大きな二つの瞳と、締つて厚い上下の脣とは、皮膚を切り破つて現はれ出た二對の魂のやうになま〳〵しい感じで見る人を打つた。愛子はさうした時に一番美しいやうに、闇の中に淋しく獨りでゐて、その多恨な眼でぢつと明るみを見詰めてゐるやうな少女だつた。

葉子は倉地が葉子の爲めにして見せた大きな英斷に酬いる爲めに、定子を自分の愛撫の胸から裂いて捨てようと思ひきはめながらも、どうしてもそれが出來ないでゐた。あれから一度も訪れこそしないが、時折り金を送つてやる事と、乳母から安否を知らさせる事だけは續けてゐた。乳母の手紙は何時でも恨みつらみで滿たされてゐた。日本に歸つて來て下さつた甲斐が何處にある。親がなくて子が子らしく育つものか育たぬものか一寸でも考へて見て貰ひたい。

乳母も段々年を取つて行く身だ。痲疹にかゝつて定子は毎日々々ママ、の名を呼び續けてゐる、その聲が葉子の耳に聞こえないのが不思議だ。こんな事が消息の度毎にたど〳〵しく書き連ねてあつた。葉子はゐても立つても堪らないやうな事があつた。けれどもそんな時には倉地の事を思つた。一寸倉地の事を思つただけで、齒を喰ひしばりながらも、苔香園の表門からそつと家を拔け出る誘惑に打ち勝つた。

倉地の方から手紙を出すのは忘れたと見えて、岡はまだ訪れては來なかつた。木村にあれほど切な心持を書き送つた位だから、葉子の住所さへ分れば尋ねて來ない筈はないのだが、倉地にはそんな事はもう念頭に無くなつてしまつたらしい。誰れも來るなと願つてゐた葉子もこの頃になつて見ると、ふと岡の事などを思ひ出す事があつた。横濱を立つ時に葉子にかじり附いて離れなかつた青年を思ひ出す事なぞもあつた。然しかう云ふ事がある度毎に倉地の心の動き方をも屹度推察した。而しては何時でも願をかけるやうにそんな事は夢にも思ひ出すまいと心に誓つた。

倉地が一向に無頓着なので、葉子はまだ籍を移してはゐなかつた。尤も倉地の先妻が果して籍を拔いてゐるか何うかも知らなかつた。それを知らうと求めるのは葉子の誇りが許さなかつた。凡てさう云ふ習慣を天から考への中に入れてゐない倉地に對して今更らそんな形式事を迫るのは、自分の度胸を見透かされるといふ上からもつらかつた。その誇りといふ心持も、度胸を見透かされるといふ恐れも、本當を云ふと葉子が何處までも倉地に對してひけ目になつてゐるのを語るに過ぎないとは葉子自身存分に知り切つてゐる癖に、それを勝手に踏み躪つて、自分の思ふ通りを倉地にして退けさす不敵さを持つ事はどうしても出來なかつた。それなのに葉子は動ゝともすると倉地の先妻の事が氣になつた。倉地の下宿の方に遊びに行く時でも、その近所で人妻らしい人の往來するのを見かけると葉子の眼は知らず識らず熟視の爲めにかゞやいた。一度も顏を合せないが、僅かな時間の寫眞の記憶から、屹度その人を見分けて見せると葉子は自信してゐた。葉子は何處を歩いても嘗てそんな人を見かけた事はなかつた。それが又妙に裏切られてゐるやうな感じを與へる事もあつた。

航海の初期に於ける批點の打ち處のないやうな健康の意識はその後葉子にはもう歸つて來なかつた。寒氣が募るにつれて下腹部が鈍痛を覺えるばかりでなく、腰の後ろの方に冷たい石でも釣り下げてあるやうな、重苦しい氣分を感ずるやうになつた。日本に歸つてから足の冷え出すのも知つた。血管の中には血の代りに文火でも流れてゐるのではないかと思ふ位寒氣に對して平氣だつた葉子が、床の中で倉地に足のひどく冷えるのを注意されたりすると不思議に思つた。肩の凝るのは幼少の時からの痼疾だつたがそれが近頃になつて殊更ら激しくなつた。葉子はちよい〳〵按摩を呼んだりした。腹部の痛みが月經と關係があるのを氣付いて、葉子は婦人病であるに相違ないとは思つた。然しさうでもないと思ふやうな事が葉子の胸の中にはあつた。若しや懷姙では……葉子は喜びに胸を躍らせてさう思つても見た。牝豚のやうに幾人も子を生むのは迚も耐へられない。然し一人は何うあつても生みたいものだと葉子は祈るやうに願つてゐたのだ。定子の事から考へると自分には案外子運があるのかも知れないとも思つた。然し前の懷姙の經驗と今度の徴候とは色色な點で全く違つたものだつた。

一月の末になつて木村からは果して金を送つて來た。葉子は倉地が潤澤につけ届けする

金よりもこの金を使ふ事に寧ろ心安さを覺えた。葉子はすぐ思ひ切つた散財をして見たい誘惑に驅り立てられた。

　ある日當りのいゝ日に倉地とさし向ひで酒を飲んでゐると苔香園の方から藪鶯の啼く聲が聞こえた。葉子は輕く酒ほてりのした顏を擧げて倉地を見やりながら、耳では鶯の啼き續けるのを注意した。

「春が來ますわ」

「早いもんだな」

「何處かへ行きませうか」

「まだ寒いよ」

「さうねえ……組合の方は」

「うむあれが片付いたら出かけようわい。いゝ加減くさ〳〵しをつた」

　さう云つて倉地はさも面倒さうに杯の酒を一煽りに煽りつけた。

　葉子はすぐその仕事がうまく運んでゐないのを感付いた。それにしてもあの毎月の多額な金は何處から來るのだらう。さうちらつと思ひながら素早く話を他にそらした。

三十二

　それは二月初旬の或る日の晝頃だつた。からつと晴れた朝の天氣に引きかへて、朝日が暫らく東向きの窓に射す間もなく、空は薄曇りに曇つて西風がごう〳〵と杉森にあたつて物凄い音を立て始めた。何處かに春をほのめかすやうな日が來たりした後なので、殊更ら世の中が暗澹と見えた。雪でもまくしかけて來さうに底冷えがするので、葉子は茶の間に置火燵を持ち出して、倉地の着替へをそれにかけたりした。土曜だから妹達は早退けだと知りつゝも倉地は物臭さうに外出の支度にかゝらないで、どてらを引つかけたまゝ火鉢の側にうづくまつてゐた。葉子は食器を臺所の方に運びながら、來たり行つたりする序でに倉地と物を云つた。臺所に行つた葉子に茶の間から大きな聲で倉地が云ひかけた。

「おいお葉（倉地は何時の間にか葉子をから呼ぶやうになつてゐた）俺れは今日は二人に對面して、これから勝手に出這入りの出來るやうにするぞ」

　葉子は布巾を持つて臺所の方からいそ〳〵と茶の間に歸つて來た。

「何んだつてまた今日……」

　さう云つてつき膝をしながらちやぶ臺を拭つた。

「いつまでもかうしてゐるが氣づまりでしやうないからよ」

「さうねえ」

　葉子はそのまゝそこに坐り込んで布巾をちやぶ臺にあてがつたまゝ考へた。本當はこれは疾うに葉子の方から云ひ出すべき事だつたのだ。妹達のゐない隙か、寢てからの暇を窺つて、倉地と會ふのは、始めの中こそあひびきのやうな興味を起させないでもないと思つたのと、葉子は自分の通つて來たやうな道はどうしても妹達には通らせたくない所から、自分の裏面を窺はせまいと云ふ心持とで、今までついずるずるに妹達を倉地に近づかせないで置いたのだつたが、倉地の言葉を聞いて見ると、さうしておくのが少し延び過ぎたと氣が附いた。又新らしい局面を二人の間に開いて行くにもこれは惡い事ではない。葉子は決心した。

「ぢや今日にしませう。……それにしても着物だけは着替へてゐて下さいましな」

「よし來た」

　と倉地はにこ〳〵しながらすぐ立ち上つた。葉子は倉地の後ろから着物を羽織つておいて羽がひに抱きながら、今更に倉地の巖乘な雄々しい體格を自分の胸に感じつゝ、

「それは二人ともいゝ子よ。可愛がつてやつて下さいましよ。……けれどもね、木村とのあの事だけはまだ內證よ。いゝ折を見つけて、私から上手に云つて聞かせるまでは知らん振りをしてね……よくつて……あなたはうつかりするとあけすけに物を云つたりなさるから……今度だけは用心して頂戴」
「馬鹿だなどうせ知れる事を―」
「でもそれはいけません……是非―」
葉子は後ろから脊延びをしてそつと倉地の後頸を吸つた。而して二人は顏を見合はせて微笑みかはした。
その瞬間に勢よく玄關の格子戸ががらつと開いて「おゝ寒い」と云ふ貞世の聲が癇高く聞こえた。時間でもないので葉子は思はずぎよつとして倉地から飛び離れた。次いで玄關口の障子が開いた。貞世は茶の間に駈け込んで來るらしかつた。
「お姉樣雪が降つて來てよ」
さう云つていきなり茶の間の襖を開けたのは貞世だつた。
「おやさう……寒かつたでせう」
とでも云つて迎へてくれる姉を期待してゐたらしい貞世は、置火燵に這入つて胡坐をかいてゐる途方もなく大きな男を姉の外に見附けたので、驚いたやうに大きな眼を見張つたが、そのまゝすぐに玄關に取つて返した。
「愛姉さんお客樣よ」
と聲をつぶすやうに云ふのが聞こえた。倉地と葉子とは顏を見合はして又微笑みかはした。
「こゝにお下駄があるぢやありませんか―」
さう落ち付いていふ愛子の聲が聞こえて、やがて二人は靜かに這入つて來た。而して愛子はしとやかに、貞世はべちやんと坐つて、聲を揃へて「只今」と云ひながら辭儀をした。愛子の年頃の時、嚴格な宗教學校で無理强ひに男の子のやうな無趣味な服裝をさせられた、それに復讐をするやうな氣で葉子の裝はした愛子の身なりはすぐ人の眼を牽いた。お下げをやめさせて、束髮にさせた項とたぼの所には、その頃米國での流行そのまゝに、蝶結びの大きな黑いリボンがとめられてゐた。古代紫の紬地の着物に、カシミヤの袴を裾短かにはいて、その袴は以前葉子が發明した例の尾錠どめになつてゐた。貞世の髮は又思ひ切つて短くおかつぱに切りつめて、橫の方に深紅のリボンが結んであつた。それがこの才はじけた童女を、膝まで位な、わざと短く仕立てた袴と共に可憐にもいたづらいたづらしく見せた。二人は寒さの爲めに頰を眞紅にして、眼を少し涙ぐましてゐた。それが殊更ら二人に別々な可憐な趣を添へてゐた。
葉子は少し改まつて二人を火鉢の座から見やりながら、
「お歸りなさい。今日はいつもより早かつたのね。……お部屋に行つてお包みをおいて袴を取つていらつしやい、その上でゆつくりお話する事があるから……」
二人の部屋からは貞世が獨りではしやいでゐる聲が暫らくしてゐたが、やがて愛子は廣い帶を普段着と着かへた上にしめて、貞世は袴をぬいだだけで歸つて來た。
「さあこゝにいらつしやい。(さう云つて葉子は妹達を自分の身近に坐らせた)この方がいつか雙鶴館でお噂した倉地さんなのよ。今までも時々いらしつたんだけれどもつひにお目に懸る折がなかつたわね。これが愛子、これが貞世です」
さう云ひながら葉子は倉地の方を向くともうくすぐつたいやうな顏付きをせずにはゐられなかつた。倉地は澁い笑を笑ひながら案外眞面目に、
「お初に(と云つて一寸頭を下げた)二人と

も美しいねえ」
さう云つて貞世の顔をちよつと見てからぢつと眼を愛子にさだめた。愛子は格別恥ぢる樣子もなくその柔和な多恨な眼を大きく見開いてまんじりと倉地を見やつてゐた。それは男女の區別を知らぬ無邪氣な眼とも見えた。先天的に男といふものを知りぬいてその心を試みようとする婬婦の眼とも見られない事はなかつた。それほどその眼は奇怪な無表情の表情を持つてゐた。
「始めてお目に懸るが、愛子さんおいくつ」
倉地はなほ愛子を見やりながらかう尋ねた。
「私始めてでは御座いません。……いつぞやお目に懸りました」
愛子は靜かに眼を伏せてはつきりと無表情な聲でかう云つた。愛子があの年頃で男の前にはつきりあゝ受け答へが出來るのは葉子にも意外だつた。葉子は思はず愛子を見た。
「はて、何處でね」
倉地もいぶかしげにかう問ひ返した。愛子は下を向いたまゝ口をつぐんでしまつた。そこにはかすかながら憎惡の影がひらめいて過ぎたやうだつた。葉子はそれを見逃がさなかつた。一寢入を見せた時に矢張り彼女は眼を覺ましてゐたのだな。それを云ふのか知らん」とも思つた。倉地の顔にも思ひかけず一寸どぎまぎしたらしい表情が浮んだのを葉子は見た。—なあに……—激しく葉子は自分で自分を打消した。
貞世は無邪氣にも、この熊のやうに大きな男が親しみ易い遊び相手と見て取つたらしい。貞世がその日學校で見聞きして來た事などを例の通り殘らず姉に報告しようと、何んでも構はず、何んでも隱さず、云つてのけるのに倉地が興に入つて合槌を打つので、こゝに移つて來てから客の味を全く忘れてゐた貞世は嬉しがつて倉地を相手にしようとした。倉地は散々貞世と戯れて、晝近く立つて行つた。
葉子は朝食がおそかつたからと云つて、妹達だけが晝食の膳についた。
「倉地さんは今、ある會社をお立てになるので色々相談事があるのだけれども、下宿では周りがやかましくつて困ると仰しやるから、これからいつでもこゝで御用をなさるやうに云つたから、屹度これからもちよく／＼いらつしやるだらうが、貞ちやん、今日のやうに遊びのお相手にばかりしてゐては駄目よ。その代り英語なんぞで分らない事があつたら何んでもお聞きするといゝ、姉さんより色々の事をよく知つていらつしやるから。……それから愛さんは、これから倉地さんのお客樣も見えるだらうから、そんな時には一々姉さんの指圖を待たないではきはきお世話をして上げるのよ」
と葉子は豫め二人に釘をさした。
妹達が食事を終つて二人で後始末をしてゐると又玄關の格子が靜かに開く音がした。貞世は葉子の所に飛んで來た。
「お姉樣又お客樣よ。今日は隨分澤山入らつしやるわね。誰れでせう」
と物珍らしさうに玄關の方に注意の耳をそばだてた。葉子も誰れだらうと訝つた。やゝ暫らくして靜かに案内を求める男の聲がした。それを聞くと貞世は姉から離れて驅け出して行つた。愛子が襷を外づしながら臺所から出て來た時分には、貞世はもう一枚の名刺を持つて葉子の所に取つて返してゐた。金縁のついた高價らしい名刺の表には岡一と記してあつた。
「まあ珍しい」
葉子は思はず聲を立てて貞世と共に玄關に走り出た。そこには處女のやうに美しく小柄な岡が雪のかゝつた傘をつぼめて、外套の滴りを紅をさしたやうに赤らんだ指の先きではじきながら、女のやうにはにかんで立つてゐた。

「いゝ所でせう、お出でには少しお寒かつたかも知れないけれども、今日はほんとにいゝ折柄でしたわ。隣りに見えるのが有名な苔香園、あすこの森の中が紅葉館、この杉の森が私大好きですの。今日は雪が積つて猶更ら綺麗ですわ」

葉子は岡を二階に案内して、そこの硝子戸越しにあちこちの雪景色を誇りがに指呼して見せた。岡は言葉少なながら、ちか〳〵と眩しい印象を眼に殘して、降り下り降り頻る雪の向うに隱見する山内の木立の姿を嘆賞した。

「それにしても何うしてあなたはこゝを……倉地から手紙でも行きましたか」

岡は神祕的に微笑んで葉子を顧みながら「いいえ」と云つた。

「そりやをかしい事……それでは何うして」

縁側から座敷へ戻りながら徐ろに、

「お知らせがないもんで上つては屹度いけないとは思ひましたけれども、こんな雪の日ならお客もなからうからひよつとかすると會つて下さるかとも思つて……」

さう云ふ云ひ出しで岡が語る所によれば、岡の從妹に當る人が國蘭女學校に通學してゐて、正月の學期から早月と云ふ姉妹の美しい生徒が來て、それは芝山内の裏坂に美人屋敷と云つて界隈で有名な家の三人姉妹の中の二人であると云ふ事や、一番の姉に當る人が報正新報で噂を立てられた優れた美貌の持主だと云ふ事やが、早くも口さがない生徒間の評判になつてゐるのを何かの折に話したのですぐ思ひ當つたけれども、一日々々と訪問を躊躇してゐたのだとの事だつた。葉子は今更に世間の案外に狹いのを思つた。愛子と云はず貞世の上にも、自分の行跡がどんな影響を與へるかも考へずにはゐられなかつた。そこに貞世が、愛子が調へた茶器をあぶなつかしい手附きで、眼八分に持つて來た。貞世はこの日淋しい家の内に幾人も客を迎へる物珍らしさに有頂天になつてゐたやうだつた。滿面に僞りのない愛嬌を見せながら、丁寧にぺつちやんとお辭儀をした。而して額にたれかゝる黑髮を振り仰いで頭を後ろにさばきながら、岡を無邪氣に見やつて、姉の方に寄り添ふと大きな聲で「どなた」と聞いた。

「一緒にお引き合せしますからね、愛さんにもお出でなさいと云つていらつしやい」

二人だけが座に落ち付くと岡は涙ぐましいやうな顏をしてぢつと手あぶりの中を見込んでゐた。葉子の思ひなしかその顏にも少しやつれが見えるやうだつた。普通の男ならば多分左程にも思はないに違ひない家の中のいさくさなどに纖細過ぎる神經をなやまして、それにつけても葉子の慰撫を殊更にあこがれてゐたらしい樣子は、そんな事については一言も云はないが、岡の顏にははつきりと描かれてゐるやうだつた。

「そんなにせいたつていやよ貞ちやんは。せつかちな人ねえ」

さう穩かにたしなめるらしい愛子の聲が階下でした。

「でもそんなにおしやれしなくつたつていゝわ。お姉樣が早くつて仰しやつてよ」

無遠慮にかう云ふ貞世の聲もはつきり聞こえた。葉子はほゝゑみながら岡を暖かく見やつた。岡もさすがに笑ひを宿した顏を上げたが、葉子と見交はすと急に頰をぽつと赤くして眼を障子の方に外らしてしまつた。手あぶりの縁に置かれた手の先きが幽かに震ふのを葉子は見のがさなかつた。

やがて妹達二人が葉子の後ろに現はれた。葉子は坐つたまゝ手を後ろに廻して、

「そんな人のお尻の所に坐つて、もつとこつちにお出でなさいな。……これが妹達ですの。どうかお友達にして下さいまし。お船で御一緒

だつた岡一樣。……愛さんあなたお知り申してゐないの……あの失禮ですが何んと仰しやいますの・お從妹御さんのお名前は」

と岡に尋ねた。岡は言葉通りに神經を顚倒させてゐた。それはこの青年を非常に醜く且つ美しくして見せた。急いで坐り直した居住ひをすぐ意味もなく崩して、それを又非常に後悔したらしい顏付きを見せたりした。

「は？」

「あの私共の噂をなさつたそのお孃樣のお名前は」

「あの矢張り岡と云ひます」

一岡さんならお顏は存じ上げてをりますわ。一つ上の級にいらつしやいます」

愛子は少しも騷がずに、倉地に對した時と同じ調子でぢつと岡を見やりながら卽座にかう答へた。その眼は相變らず、婬蕩と見える程極端に純潔だつた。純潔と見える程極端に婬蕩だつた。岡は怖ぢながらもその眼から自分の眼を外らす事が出來ないやうにまともに愛子を見て見る〳〵耳たぶまでを眞赤にしてゐた。葉子はそれを氣取ると愛子に對して一段の憎しみを感ぜずにはゐられなかつた。

「倉地さんは……」

岡は一路の逃げ路をやうやく求め出したやうに葉子に眼を轉じた。

「倉地さん？　たつた今お歸りになつたばかり惜しい事をしましてねえ。でもあなたこれからはちよく〳〵入らしつて下さいますわね。倉地さんもすぐお近所にお住ひですから何時か御一緒に御飯でもいたゞきませう。私日本に歸つてからこの家にお客樣をお上げするのは今日が始めてですのよ。ねえ貞ちやん。……本當によく來て下さいました事。私疾うから來ていたゞきたくつて仕樣がなかつたんですけれども、倉地さんから何んとか云つて上げて下さるだらうと、それぱかりを待つてゐたのですよ。私からお手紙を上げるのはいけませんもの。（そこで葉子は解つて下さるでせうと云ふやうな優しい眼付を強い表情を添へて岡に送つた）木村からの手紙であなたの事は委しく伺つてゐましたわ。色々お苦しい事がおありになるんですつてね」

岡はその頃になつてやうやく自分を恢復したやうだつた。しどろもどろになつた考へや言葉も稍ゝ整つて見えた。愛子は一度しげ〳〵と岡を見てしまつてからは、決して二度とはその方を向かずに、眼を疊の上に伏せてぢつと千里も離れた事でも考へてゐる樣子だつた。

「私の意氣地のないのが何よりもいけないんです。親類の者達は何んと云つても私を實業の方面に入れて父の事業を嗣がせようとするんです。それは多分本當にいゝ事なんでせう。けれども私には何うしてもさう云ふ事が判らないから困ります。少しでも判れば、どうせこんなに病身で何も出來ませんから、母はじめの云ふ事を聽きたいんですけれども……私は時時乞食にでもなつて仕舞ひたいやうな氣がします。皆んなの主人思ひな眼で見つめられてゐると、私は皆んなに濟まなくなつて、何故自分見たいな屑な人間を惜しんでゐてくれるのだらうとよくさう思ひます……こんな事今まで誰れにも云ひはしませんけれども。突然日本に歸つて來たりなぞしてから私は内々監視までされるやうになりました。……私のやうな家に生れると友達といふものは一人も出來ませんし、皆んなとは表面だけで物を云つてゐなければならないんですから……心が淋しくつて仕方がありません」

さう云つて岡はすがるやうに葉子を見やつた。

岡が少し震へを帶びた、汚れつ氣の塵ほどもない聲の調子を落してしんみりと物を云ふ樣子には自らな氣高い淋しみがあつた。戸障子をき

しませながら雪を吹きまく戸外の荒々しい自然の姿に比べては殊更らそれが目立つた。葉子には岡のやうな消極的な心持は少しも分らなかつた。然しあれでゐて、米國くんだりから乘つて行つた船で歸つて來る所なぞには、粘り强い意力が潛んでゐるやうにも思へた。平凡な青年なら出來ても出來なくとも周圍のものに煽てあげられれば疑ひもせずに父の遺業を嗣ぐ眞似をして喜んでゐるだらう。それが何うしても出來ないと云ふ所にも何處か違つた所があるのではないか。葉子はさう思ふと何んの理解もなくこの青年を取捲いて唯ゞわい〳〵騷ぎ立ててゐる人達が馬鹿々々しくも見えた。それにしても何故もつとはき〳〵とそんな下らない障礙位打ち破つてしまはないのだらう。自分ならその財産を使つてから「かうすればいゝのかい」とでも云つて、關りで世話を燒いた人間達を胸のすき切るまで思ひ存分笑つてやるのに。さう思ふと岡の煮え切らないやうな態度が齒がゆくもあつた。然し何んと云つても抱きしめたい程可憐なのは岡の纖美な淋しさうな姿だつた。岡は上手に入れられた甘露を啜り終つた茶碗を手の先きに据ゑて綿密にその作りを賞翫してゐた。

「御覺えになるやうなものぢや御座いません事よ」

岡は惡い事でもしてゐたやうに顏を赤くしてそれを下においた。彼れはいゝ加減な世辭は云へないらしかつた。

岡は始めて來た家に長居するのは失禮だと來た時から思つてゐて、機會ある毎に座を立たうとするらしかつたが、葉子はさう云ふ岡の遠慮に感付けば感付く程巧みにも凡ての機會を岡に與へなかつた。

「もう少しお待ちになると雪が小降りになりますわ。今、こなひだ印度から來た紅茶を入れて見ますから召上つて見て頂戴。普段いゝものを召上りつけていらつしやるんだから、鑑定をしていたゞきますわ。一寸、……ほんの一寸待つていらしつて頂戴よ」

さう云ふ風にいつて岡を引き止めた。始めの間こそ倉地に對してのやうにはなつかなかつた貞世も段々と岡と口をきくやうになつて、仕舞には岡の穩やかな問に對して思ひのまゝを可愛らしく語つて聞かせたり、話題に窮して岡が默つてしまふと貞世の方から無邪氣な事を聞き糺して、岡をほゝゑましたりした。何んと云つても岡は美しい三人の姉妹が(その中愛子だけは他の二人とは全く違つた態度で)心を籠めて親しんで來るその好意には敵し兼ねて見えた。盛んに火を起した暖かい部屋の中の空氣にこもる若い女達の髮からとも、懷ろからとも、膚からとも知れぬ柔軟な香りだけでも去りがたい思ひをさせたに違ひなかつた。何時の間にか岡はすつかり腰を落ち着けて、云ひやうなく快く胸の中のわだかまりを一掃したやうに見えた。

それからと云ふもの、岡は美人屋敷と噂される葉子の隱れ家に折々出入りするやうになつた。倉地とも顏を合はせて、互に快く船の中での思ひ出し話などをした。岡の眼の上には葉子の眼が義眼されてゐた。葉子のよしと見るものは岡もよしと見た。葉子の憎むものは岡も無條件で憎んだ。唯ゞ一つその例外となつてゐるのは愛子といふものらしかつた。勿論葉子とて性格的には何うしても愛子と納れ合はなかつたが、骨肉の情として矢張り互に云ひやうのない執着を感じあつてゐた。然し岡は愛子に對しては心から愛着を持ち出すやうになつてゐる事が知れた。

兎に角岡の加はつた事が美人屋敷の彩りを多様にした。三人の姉妹は時折り、倉地、岡に

伴はれて苔香園の表門の方から三田の通りなどに散歩に出た。人々はそのきらびやかな群れに物好きな眼をかゞやかした。

三十三

岡に住所を知らせてから、すぐそれが古藤に通じたと見えて、二月に這入つてからの木村の消息は、倉地の手を經ずに直接葉子にあてて古藤から廻送されるやうになつた。古藤は然し頑固にもその中に一言も自分の消息を封じ込んでよこすやうな事はしなかつた。古藤を近づかせる事は一面木村と葉子との關係を斷絶さす機會を早める恐れがないでもなかつたが、あの古藤の單純な心をうまく操りさへすれば、古藤を自分の方になづけてしまひ、從つて木村に不安を起させない方便になると思つた。葉子は例のいたづら心から古藤を手なづける興味をそゝられないでもなかつた。然しそれを實行に移すまでにその興味は高じては來なかつたのでそのまゝにしておいた。

木村の仕事は思ひの外都合よく運んで行くらしかつた。「日本に於ける未來のピーボデー」といふ標題に木村の肖像まで入れて、ハミルトン氏配下の敏腕家の一人として、又品性の高潔な公共心の厚い好箇の青年實業家として、やがては日本に於て、米國に於けるピーボデーと同樣の名聲を贏ち得べき約束にあるものと賞讃したシカゴ・トリビューンの「青年實業家評判記」の切拔きなどを封入して來た。思ひの外巨額の爲替をちよい〳〵送つてよこして、倉地氏に支拂ふべき金額の全體を知らせてくれたら、どう工面しても必ず送付するから、一日も早く倉地氏の保護から獨立して世評の誤謬を實行的に訂正し、併せて自分に對する葉子の眞情を證明してほしいなどと云つてよこした。葉子は――倉地に溺れ切つてゐる葉子は鼻の先きでせゝら笑つた。

それに反して倉地の仕事の方はいつまでも目鼻がつかないらしかつた。倉地の云ふ所によれば日本だけの水先案內業者の組合と云つても、東洋の諸港や西部米國の沿岸にあるそれらの組合とも交渉をつけて連絡を取る必要があるのに、日本の移民問題が米國の西部諸州でやかましくなり、排日熱が過度に煽動され出したので、何事も米國人との交渉は思ふやうに行かずにその點で行きなやんでゐるとの事だつた。さう云へば米國人らしい外國人が屢々倉地の下宿に出入りするのを葉子は氣がついてゐた。或る時はそれが公使館の館員でもあるかと思ふやうな、禮裝をして見事な馬車に乘つた紳士である事もあり、或る時はズボンの折り目もつけない程だらしの無い風をした人相のよくない男でもあつた。

兎に角二月に這入つてから倉地の樣子が少しづつ荒んで來たらしいのが目立つやうになつた。酒の量も著しく增して來た。正井が嚙みつくやうに怒鳴られてゐる事もあつた。然し葉子に對しては倉地は前にも勝つて溺愛の度を加へ、あらゆる愛情の證據を摑むまでは執拗に葉子を虐げるやうになつた。葉子は眼もくらむ火酒を煽りつけるやうにその虐げを喜んで迎へた。

ある夜葉子は妹達が就寢してから倉地の下宿を訪れた。倉地はたつた一人で淋しさうにソーダ・ビスケットを肴にウヰスキーを飲んでゐた。ちやぶ臺の周圍には書類や港灣の地圖やが亂暴に散らけてあつて、臺の上の虛のコップから察すると、正井か誰れか、今客が歸つた所らしかつた。襖を明けて葉子の這入つて來たのを見ると倉地は每時もになく一寸險しい眼付きをして書類に眼をやつたが、そこにあるものを猿臂を延ばして引き寄せて忙ばしく一まとめ

に床の間に移すと、自分の隣りに座蒲團を敷いて、それに坐れと顎を突き出して合圖した。而して激しく手を鳴らした。

「コップと炭酸水を持つて來い」

用を聞きに來た女中にから云ひ附けておいて、激しく葉子をまともに見た。

「葉ちやん（これはその頃倉地が葉子を呼ぶ名前だつた。妹達の前で葉子と呼び捨てにも出來ないので倉地は暫らくの間お葉さん〳〵と呼んでゐたが、葉子が貞世を貞ちやんと呼ぶのから思ひついたと見えて、三人を葉ちやん、愛ちやん、貞ちやんと呼ぶやうになつた。而して差向ひの時にも葉子をさう呼ぶのだつた）は木村に貢がれてゐるな。白狀しつちまへ」

「それがどうして？」

葉子は左の片肘をちやぶ臺について、その指先きで鬢のほつれをかき上げながら、平氣な顏で正面から倉地を見返した。

「どうしてがあるか。俺れは赤の他人に俺れの女を養はす程腑拔けではないんだ」

「まあ氣の小さい」

葉子はなほも動じなかつた。そこに婢が這入つて來たので話の腰が折られた。二人は暫らく默つてゐた。

「俺れはこれから竹柴へ行く。な、行かう」

「だつて明朝困りますわ。私が留守だと妹達が學校に行けないもの」

「一筆書いて學校なんざあ休んで留守をしろと云つてやれい」

葉子は勿論一寸そんな事を云つて見ただけだつた。妹達の學校に行つた後でも、苔香園の婆さんに言葉をかけておいて家を明ける事は常始終だつた。殊にその夜は木村の事について倉地に合點させておくのが必要だと思つたので、云ひ出された時から一緒する下心ではあつたのだ。葉子はそこにあつたペンを取り上げて紙切れに走り書きをした。倉地が急病になつたので介抱の爲めに今夜はこゝで泊る。明日の朝學校の時刻までに歸つて來なかつたら、戸締りをして出懸けていゝ。さういふ意味を書いた。その間に倉地は手早く着替へをして、書類を大きな支那鞄に突つ込んで錠を下ろしてから、綿密に開くか開かないかを調べた。而して考へこむやうに俯向いて上眼をしながら、兩手を懐ろにさし込んで鍵を腹帯らしい所に仕舞ひ込んだ。

九時過ぎ十時近くなつてから二人は連れ立つて下宿を出た。増上寺前に來てから車を傭つた。滿月に近い月がもう大分寒空高くから〳〵とかゝつてゐた。

二人を迎へた竹柴館の女中は倉地を心得てゐて、すぐ庭先きに離れになつてゐる二間ばかりの一軒に案内した。風はないけれども月の白さでひどく冷え込んだやうな晩だつた。葉子は足の先きが氷で包まれた程感覺を失つてゐるのを覺えた。倉地の浴した後で、熱目な鹽湯にゆいゝつくり浸つたのでやうやく人心地がついて戻つて來た時には、素早い女中の働きで酒肴が調へられてゐた。葉子が倉地と遠出らしい事をしたのはこれが始めてなので、旅先きにゐるやうな氣分が妙に二人を親しみ合はせた。況してや座敷に續く芝生のはづれの石垣には海の波が來て靜かに音を立ててゐた。空には月が冴えてゐた。妹達に取り捲かれたり、下宿人の眼をかねたりしてゐなければならなかつた二人は、くつろいだ姿と心とで火鉢に倚り添つた。世の中は二人きりのやうだつた。いつの間にか良人とばかり倉地を考へ慣れてしまつた葉子は、こゝに再び情人を見出したやうに思つた。而して何とはなく倉地をじらしてじらしてじらし拔いた擧句に、その反動から來る蜜のやうな歡語を思ひ切り味ひたい衝動に驅られてゐた。而

してそれが又倉地の要求でもある事を本能的に感じてゐた。

「いゝわねえ。何故もつと早くこんな所に來なかつたでせう。すつかり苦勞も何も忘れてしまひましたわ」

葉子はすべ〳〵とほてつて少しこはばるやうな頬を撫でながら、とろけるやうに倉地を見た。もう大分酒の氣のまはつた倉地は、女の肉感をそゝり立てるやうな匂ひを部屋中に撒き散らす葉卷をふかしながら、葉子を尻目にかけた。

「それは結構。だが俺れにはさつきの話が喉につかへて殘つとるて。胸糞が惡いぞ」

葉子はあきれたやうに倉地を見た。

「木村の事？」

「お前は俺れの金を心任せに使ふ氣にはなれないんか」

「足りませんもの」

「足りなきや何故云はん」

「云はなくつたつて木村がよこすんだからいゝぢやありませんか」

「馬鹿！」

倉地は右の肩を小山のやうに聳やかして、上體を斜に構へながら葉子を睨みつけた。葉子はその眼の前で海から出る夏の月のやうに微笑んで見せた。

「木村は葉ちやんに惚れとるんだよ」

「而して葉ちやんは嫌つてるんですわね」

「冗談は措いてくれ……俺りや眞劍で云つとるんだ。俺れ達は木村に用はない筈だ。俺れは用のないものは片つ端から捨てるのが立て前だ。嚊だらうが子だらうが……見ろ俺れを……よく見ろ。お前はまだこの俺れを疑ぐつとるんだな。後釜には木村を何時でもなほせるやうに喰ひ殘しをしとるんだな」

「そんな事はありませんわ」

「では何んで手紙の遣り取りなどし居るんだ」

「お金が欲しいからなの」

葉子は平氣な顔をして又話をあとに戻した。而して獨酌で杯を傾けた。倉地は少し吃る程怒りが募つてゐた。

「それが惡いと云つとるのが解らないか……俺れの面に泥を塗りこくつとる……こつちに來い。（さう云ひながら倉地は葉子の手を取つて自分の膝の上に葉子の上體をたくし込んだ）云へ、隱さずに。今になつて木村に未練が出て來をつたんだらう。女と云ふはさうしたもんだ。木村に行きたくば行け、今行け。俺れのやうなやくざを構つとると芽は出やせんから。……お前は太て腐れがいつちよく似合つとるよ……但し俺れをだましにかゝると見當違ひだぞ」

さう云ひながら倉地は葉子を突つ放すやうにした。葉子はそれでも少しも平靜を失つてはゐなかつた。あでやかに微笑みながら、

「あなたもあんまり分らない……」

と云ひながら今度は葉子の方から倉地の膝に後向きに凭れかゝつた。倉地はそれを退けようとはしなかつた。

「何が分らんかい」

暫らくしてから、倉地は葉子の肩越しに杯を取り上げながらかう尋ねた。葉子には返事がなかつた。又暫らくの沈默の時間が過ぎた。倉地がもう一度何か云はうとした時、葉子は何時の間にかしく〳〵と泣いてゐた。倉地はこの不意打ちに思はずはつとしたやうだつた。

「何故木村から送らせるのが惡いんです」

葉子は涙を氣取らせまいとするやうに、然し打ち沈んだ調子でかう云ひ出した。

「あなたの御樣子でお心持が讀めない私だとお思ひになつて？　私故に會社をお引きになつてから、どれ程暮し向きに苦しんでいらつしやるか……その位は馬鹿でも私にはちやんと響いてゐます。それでもしみつたれた事をする

のはあなたもお嫌ひ、私も嫌ひ……私は思ふやうにお金をつかつてはゐました。ゐましたけれども……心では泣いてたんです。あなたの爲めならどんな事でも喜んでしよう……さうこの頃思つたんです。それから木村にとう／＼手紙を書きました。私が木村を何んと思つてるか、今更らそんな事をお疑ひになるのあなたは。そんな水臭い廻し氣をなさるからつい口惜しくなつちまひます。……そんな私だか私ではないか……（そこで葉子は倉地から離れてきちんと坐り直して袂で顏を被うてしまつた）泥棒をしろと仰しやる方がまだ増しです……あなたお一人でくよ／＼なさつて……お金の出所を……暮し向きが張り過ぎるなら張り過ぎると……何故相談に乘らせては下さらないの……矢張りあなたは私を親身には思つていらつしやらないのね……」

倉地は一度は眼を張つて驚いたやうだつたが、やがて事もなげに笑ひ出した。

「そんな事を思つとつたのか。馬鹿だなあお前は。御好意は感謝します……全く。然しなんぼ痩せても枯れても、俺れは女の子の二人や三人養ふに事は缺かんよ。月に三百や四百の金が手廻らんやうなら首をくゝつて死んで見せる。お前をまで相談に乘せるやうな事はいらんのだよ。そんな蔭にまはつた心配事はせん事にせうや。この暢氣坊の俺れまでがいらん氣を揉ませられるで……」

「そりや虚言です」

葉子は顏を被うたまゝきつぱりと矢繼早に云ひ放つた。倉地は默つてしまつた。葉子もそのまま暫らくは何んとも云ひ出でなかつた。

母屋の方で十二を打つ柱時計の聲が幽かに聞こえて來た。寒さもしん／＼と募つてゐたには相違なかつた。然し葉子はその何れをも心の戸の中までは感じなかつた。始めは一種の企らみから狂言でもするやうな氣でかゝつたのだつたけれども、かうなると葉子は何時の間にか自分で自分の情に溺れてしまつてゐた。木村を犧牲にしてまでも倉地に溺れ込んで行く自分が憐れまれもした。倉地が費用の出所をつひぞ打ち明けて相談してくれないのが恨みがましく思はれもした。知らず識らずの中にどれ程葉子は倉地に喰ひ込み、倉地に喰ひ込まれてゐたかをしみ／＼と今更に思ひ知つた。何うならうと何うあらうと倉地から離れる事はもう出來ない。倉地から離れる位なら自分は屹度死んで見せる。倉地の胸に齒を立ててその心臟を嚙み破つてしまひたいやうな狂暴な執念が葉子を底知れぬ悲しみへ誘ひ込んだ。

心の不思議な作用として倉地も葉子の心持は刺青をされるやうに自分の胸に感じて行くらしかつた。稍ゝ程經つてから倉地は無感情のやうな鈍い聲で云ひ出した。

「全くは俺れが惡かつたのかも知れない。一時は全く金には弱り込んだ。然し俺れは早や世の中の底潮にもぐり込んだ人間だと思ふと度胸が据わつてしまひ居つた。毒も皿も喰つてくれよう、さう思つて（倉地はあたりを憚るやうに更に聲を落した）やり出した仕事があの組合の事よ。水先案內の奴等は委しい海圖を自分で作つて持つとる。要塞地の樣子も玄人以上ださ。それを集めにかゝつて見た。思ふやうには行かんが、食ふだけの金は餘る程出る」

葉子は思はずぎよつとして息氣がつまつた。近頃怪しげな外國人が倉地の所に出入りするのも心當りになつた。倉地は葉子が倉地の言葉を理解して驚いた樣子を見ると、ほと／＼惡魔のやうな顏をしてにやりと笑つた。捨鉢な不敵さと力とが漲つて見えた。

「愛想が盡きたか……」

愛想が盡きた。葉子は自分自身に愛想が盡き

ようとしてゐた。葉子は自分の乘つた船は毎時でも相客諸共に轉覆して沈んで底知れぬ泥土の中に深々と潛り込んで行く事を知つた。賣國奴、國賊、――或はさう云ふ名が倉地の名に加へられるかも知れない……と思つただけで葉子は怖毛を振つて、倉地から飛び退かうとする衝動を感じた。ぎよつとした瞬間に唯〻瞬間だけ感じた。次ぎに何うかしてそんな恐ろしいはめから倉地を救ひ出さなければならないと云ふ殊勝な心にもなつた。然し最後に落ち着いたのは、その深みに倉地を殊更ら突き落して見たい惡魔的な誘惑だつた。それ程までの葉子に對する倉地の心盡しを、臆病な驚きと躊躇とで迎へる事によつて、倉地に自分の心持の不徹底なのを見下げられはしないかと云ふ危惧よりも、倉地が自分の爲めにどれ程の墮落でも汚辱でも甘んじて犯すか、それをさせて見て、滿足しても滿足しても滿足し切らない自分の心の不足を滿たしたかつた。そこまで倉地を突き落すことは、それだけ二人の執着を强める事だとも思つた。葉子は何事を犧牲に供しても灼熱した二人の間の執着を續けるばかりでなく更に强める術を見出さうとした。倉地の告白を聞いて驚いた次ぎの瞬間には、葉子は意識こそせねこれだけの心持に働かれてゐた。「そんな事で愛想が盡きてたまるものか」と鼻であしらふやうな心持に素早くも自分を落ち着けてしまつた。驚きの表情はすぐ葉子の顏から消えて、妖婦にのみ見る極端に肉的な蠱惑の微笑がそれに代つて浮み出した。

「一寸驚かされはしましたわ。……い〻わ、私だつて何んでもしますわ」

倉地は葉子が不言不語の中に感激してゐるのを感得してゐた。

「よしそれで話は分つた。木村……木村からも搾り上げろ、搆ふもんか。人間並みに見られない俺れ達が人間並みに振舞つてゐてたまるかい。葉ちやん……命」

「命！……命!! 命!!!」

葉子は自分の激しい言葉に眼もくるめくやうな醉ひを覺えながら、あらん限りの力を籠めて倉地を引き寄せた。膳の上のものが音を立てて覆へるのを聞いたやうだつたが、その後は色も音もない焰の天地だつた。すさまじく燒け爛れた肉の欲念が葉子の心を全く暗ましてしまつた。天國か地獄かそれは知らない。而かも何もかも微塵につき摧いて、びり〳〵と震動する炎炎たる焰に燃やし上げたこの有頂天の歡樂の外に世に何者があらう。葉子は倉地を引き寄せた。倉地に於て今まで自分から離れてゐた葉子自身を引き寄せた。而して切るやうな痛みと、痛みからのみ來る奇怪な快感とを自分自身に感じて陶然と醉ひしれながら、倉地の二の腕に齒を立てて、思ひ切り彈力性に富んだ熱したその肉を噛んだ。

その翌日十一時過ぎに葉子は地の底から掘り起されたやうに地球の上に眼を開いた。倉地はまだ死んだもの同然にいぎたなく眠つてゐた。戸板の杉の赤みが鰹節の心のやうに半透明に眞赤に光つてゐるので、日が高いのも天氣が美しく晴れてゐるのも察せられた。甘酸ぱく立ち罩つた酒と煙草の餘燻の中に、隙間漏る光線が、透明に輝く飴色の板となつて縱ま〻に薄暗さの中を區切つてゐた。いつもならば眞赤に充血して、精力に充ち滿ちて、眠りながら働いてゐるやうに見える倉地も、その朝は周圍に死色をさへ注してゐた。むき出しにした腕には青筋が病的と思はれる程高く飛び出て這ひずつてゐた。泳ぎ廻る者でもゐるやうに頭の中がぐらぐらする葉子には、殺人者が兇行から眼覺めて行つた時のやうな底の知れない氣味惡さが感ぜられた。葉子は密やかにその部屋を拔け出して

戸外に出た。

降るやうな眞晝の光線に遇ふと、兩眼は腦心の方に遮二無二引きつけられて堪らない痛さを感じた。乾いた空氣は息氣をとめる程喉を干からばした。葉子は思はずよろけて入口の下見板に寄りかゝつて、打撲を避けるやうに兩手で顏を隱して俯向いてしまつた。

漸て葉子は人を避けながら芝生の先きの海際に出て見た。滿月に近い頃の事とて潮は遠く退いてゐた。蘆の枯葉が日を浴びて立つ沮洳地のやうな平地が眼の前に擴がつてゐた。然し自然は少しも昔の姿を變へてはゐなかつた。自然も人も昨日のまゝの營みをしてゐた。葉子は不思議なものを見せつけられたやうに茫然として潮干潟の泥を見、鱗雲で飾られた青空を仰いだ。昨夜の事が眞實ならこの景色は夢であらねばならぬ。この景色が眞實なら昨夜の事は夢であらねばならぬ。二つが兩立しよう筈はない。……葉子は茫然としてなほ眼に這入つて來るものを眺め續けた。

麻痺し切つたやうな葉子の感覺は段々恢復して來た。それと共に眩暈を感ずる程の頭痛を先づ覺えた。次いで後腰部に鈍重な疼みがむくむくと頭を擡げるのを覺えた。肩は石のやうに凝つてゐた。足は氷のやうに冷えてゐた。

昨夜の事は夢ではなかつたのだ……而して今見るこの景色も夢ではあり得ない……それは餘りに殘酷だ、殘酷だ。何故昨夜を界にして、世の中は加留多を裏返したやうに變つてゐてはくれなかつたのだ。

この景色の何處に自分は身を措く事が出來よう。葉子は痛切に自分が落ち込んで行つた深淵の深みを知つた。而してそこにしやごんでしまつて、苦い涙を泣き始めた。

懺悔の門を堅く閉された暗い道がたゞ一筋、葉子の心の眼には行く手に見やられるばかりだつた。

三十四

兎も角も一家の主となり、妹達を呼び迎へて、その敎育に興味と責任とを持ち始めた葉子は、自然々々に妻らしく又母らしい本能に立ち歸つて、倉地に對する情念にも何處か肉から精神に移らうとする傾きが出來て來るのを感じた。それは樂しい無事とも考へれば考へられぬ事はなかつた。然し葉子は明かに倉地の心がさう云ふ狀態の下には少しづつ硬ばつて行き冷えて行くのを感ぜずにはゐられなかつた。それが葉子には何よりも不滿だつた。倉地を選んだ葉子であつて見れば、日が經つに從つて葉子にも倉地が感じ始めたと同樣な物足らなさが感ぜられて行つた。落ち着くのか冷えるのか、兎に角倉地の感情が白熱して働かないのを見せつけられる瞬間は深い淋しみを誘ひ起した。こんな事で自分の全我を投げ入れた戀の花を散つてしまはせてなるものか。自分の戀には絕頂があつてはならない。自分にはまだどんな難路でも舞ひ狂ひながら登つて行く熱と力とがある。その熱と力とが續く限り、ぼんやり腰を据ゑて周圍の平凡な景色などを眺めて滿足してはゐられない。自分の眼には絕巓のない絕巓ばかりが見えてゐたい。さうした衝動は小休みなく葉子の胸に蟠つてゐた。繪島丸の船室で倉地が見せてくれたやうな、何もかも無視した、神のやうな狂暴な熱心――それを繰返して行きたかつた。

竹柴館の一夜は正しくそれだつた。その夜葉子は、次ぎの朝になつて自分が死んで見出されようとも滿足だと思つた。然し次ぎの朝生きたまゝで眼を開くと、その場で死ぬ心持にはもうなれなかつた。もつと高じた歡樂を追ひ試みようといふ慾念、而してそれが出來さうな期待

が葉子を未練にした。それからと云ふもの葉子は忘我渾沌の歡喜に浸る爲めには、凡てを犧牲としても惜しまない心になつてゐた。而して倉地と葉子とは互々を樂しませ而して牽き寄せる爲めにあらん限りの手段を試みた。葉子は自分の不可犯性(女が男に對して持つ一番强大な蠱惑物)の凡てまで惜しみなく投げ出して、自分を倉地の眼に娼婦以下のものに見せるとも悔いようとはしなくなつた。二人は、傍眼には酸鼻だとさへ思はせるやうな肉慾の腐敗の末遠く、互に婬樂の實を互々から奪ひ合ひながらずるずると壞れこんで行くのだつた。

然し倉地は知らず、葉子に取つてはこの忌はしい腐敗の中にも一縷の期待が潛んでゐた。一度ぎゆつと掴み得たらもう動かない或る物がその中に横はつてゐるに違ひない、さう云ふ期待を心の隅から拭ひ去る事が出來なかつたのだつた。それは倉地が葉子の蠱惑に全く迷はされてしまつて再び自分を恢復し得ない時期があるだらうといふそれだつた。戀をしかけたもののひけめとして葉子は今まで、自分が倉地を愛する程倉地が自分を愛してはゐないとばかり思つた。それが何時でも葉子の心を不安にし、自分といふものの居据り所までぐらつかせた。どうかして倉地を癡呆のやうにしてしまひたい。葉子はそれが爲めには有る限りの手段を取つて悔いなかつたのだ。妻子を離縁させても、社會的に死なしてしまつても、まだ〳〵物足らなかつた。竹柴館の夜に葉子は倉地を極印附きの兇状持ちにまでした事を知つた。外界から切り離されるだけそれだけ倉地が自分の手に落ちるやうに思つてゐた葉子はそれを知つて有頂天になつた。而して倉地が忍ばねばならぬ屈辱を埋め合せる爲めに葉子は倉地が欲すると思はしい激しい情慾を提供しようとしたのだ。而してさうする事によつて、葉子自身が結局自己を銷盡して倉地の興味から離れつゝある事には氣附かなかつたのだ。

兎にも角にも二人の關係は竹柴館の一夜から面目を革めた。葉子は再び妻から情熱の若々しい情人になつて見えた。さう云ふ心の變化が葉子の肉體に及ぼす變化は驚くばかりだつた。葉子は急に三つも四つも若やいだ。二十六の春を迎へた葉子はその頃の女としてはそろ〳〵老いの徵候をも見せる筈なのに、葉子は一つだけ年を若く取つたやうだつた。

ある天氣のいゝ午後——それは梅の蕾がもう少しづつふくらみかゝつた午後の事だつたが——葉子が縁側に倉地の肩に手をかけて立ち竝びながら、うつとりと上氣して雀の交はるのを見てゐた時、玄關に訪れた人の氣配がした。

「誰れでせう」

倉地は物惰ささうに、

「岡だらう」

と云つた。

「いゝえ屹度正井さんよ」

「なあに岡だ」

「ぢや賭けよ」

葉子は丸で少女のやうに甘つたれた口調で云つて玄關に出て見た。倉地が云つたやうに岡だつた。葉子は挨拶も碌々しないでいきなり岡の手をしつかりと取つた。而して小さな聲で、

「よく入らしつてね。その間着のよくお似合ひになる事。春らしいいゝ色地ですわ。今倉地と賭けをしてゐたところ。早くお上り遊ばせ」

葉子は倉地にしてゐたやうに岡のやさ肩に手を廻してならびながら座敷に這入つて來た。

「矢張りあなたの勝ちよ。あなたはあて事がお上手だから岡さんを讓つて上げたらうまく中つたわ。今御褒美を上げるからそこで見ていらつしやいよ」

さう倉地に云ふかと思ふと、いきなり岡を抱き

すくめてその頰に强い接吻を與へた。岡は少女のやうに恥ぢらつて强ひて葉子から離れようと藻搔いた。倉地は例の澁いやうに口許をねぢつて微笑みながら、

「馬鹿！……この頃この女は少しどうかしとりますよ。岡さん、あなた一つ背中でもどやしてやつて下さい。……まだ勉强か」

と云ひながら葉子に天井を指して見せた。葉子は岡に背中を向けて「さあどやして頂戴」と云ひながら、今度は天井を向いて、

「愛さん、貞ちやん、岡さんが入らしつてよ。お勉强が濟んだら早く下りてお出で」

と澄んだ美しい聲で蓮葉に叫んだ。

「さうお」

と云ふ聲がしてすぐ貞世が飛んで下りて來た。

「貞ちやんは今勉强が濟んだのか」

と倉地が聞くと貞世は平氣な顏で、

「えゝ今濟んでよ」

と云つた。そこにはすぐ華やかな笑ひが破裂した。愛子は中々下に降りて來ようとはしなかつた。それでも三人は親しくちやぶ臺を圍んで茶を飮んだ。その日岡は特別に何か云ひ出したさうにしてゐる樣子だつたが、やがて、

「今日は私少しお願ひがあるんですが皆樣聽いて下さるでせうか」

重苦しく云ひ出した。

「えゝ／＼あなたの仰しやる事なら何んでも……ねえ貞ちやん（とこゝまでは冗談らしく云つたが急に眞面目になつて）……何んでも仰しやつて下さいましな、そんな他人行儀をして下さると變ですわ」

と葉子が云つた。

「倉地さんもゐて下さるので却つて云ひよいと思ひますが古藤さんをこゝにお連れしちやいけないでせうか。……木村さんから古藤さんの事は前から伺つてゐたんですが、私は初めてのお方にお會ひするのが何んだか億劫な質なもので二つ前の日曜日までとう／＼お手紙も上げないでゐたら、その日突然古藤さんの方から尋ねて來て下さつたんです。古藤さんも一度お尋ねしなければいけないんだがと云つてゐなさいました。で私、今日は水曜日だから、用便外出の日だから、これから迎へに行つて來たいと思ふんです。いけないでせうか」

葉子は倉地だけに顏が見えるやうに向き直つて「自分に任せろ」と云ふ眼付きをしながら、

「いゝわね」

と念を押した。倉地は祕密を傳へる人のやうに顏色だけで「よし」と答へた。葉子はくるりと岡の方に向き直つた。

「よう御座いますとも（葉子はそのようにアクセントを附けた）あなたにお迎ひに行つて頂いてはほんとに濟みませんけれども、さうして下さると本當に結構。貞ちやんもいゝでせう。又もう一人お友達が殖えて……而かも珍らしい兵隊さんのお友達……」

「愛姉さんが岡さんに連れていらつしやいつてこの間さう云つたのよ」

と貞世は遠慮なく云つた。

「さう／＼愛子さんもさう仰しやつてでしたね」

と岡は何處までも上品な丁寧な言葉で事の序でのやうに云つた。

岡が家を出ると暫らくして倉地も座を立つた。

「いゝでせう。うまくやつて見せるわ。却つて出入りさせる方がいゝわ」

玄關に送り出してさう葉子は云つた。

「どうかな彼奴、古藤の奴は少し骨張り過ぎてる……が惡かつたら元々だ……兎に角今日俺れのゐない方がよからう」

さう云つて倉地は出て行つた。葉子は張出しに

になつてゐる六疊の部屋を綺麗に片付けて、火鉢の中に香を焚きこめて、心靜かに目論見をめぐらしながら古藤の來るのを待つた。暫らく會はない中に古藤は大分手硬くなつてゐるやうにも思へた。そこを自分の才力で丸めるのが時に取つての興味のやうにも思へた。若し古藤を軟化すれば木村との關係は今よりも繋ぎがよくなる…。

三十分程たつた頃一ツ木の兵營から古藤は岡に伴はれてやつて來た。葉子は六疊にゐて、貞世を取次ぎに出した。

「貞世さんだね。大きくなつたね」

丸で前の古藤の聲とは思はれぬやうな大人びた黑ずんだ聲がして、がちや〳〵と佩劍を取るらしい音も聞こえた。やがて岡の先きに立つて恰好の悪い汚い黑の軍服を着た古藤が、皮類の腐つたやうな香ひをぷん〳〵させながら葉子のゐる所に這入つて來た。

葉子は他意なく好意を籠めた眼付きで、少女のやうに晴れやかに驚きながら古藤を見た。

「まあこれが古藤さん？　何んて怖い方になつてお仕舞ひなすつたんでせう。元の古藤さんはお額のお白い所だけにしか殘つちやゐませんわ。がみ〳〵と叱つたりなすつちやいやです事よ。本當に暫らく。金輪際來ては下さらないものと諦めてゐましたのに、よく…よく入らしつて下さいました。岡さんのお手柄ですわ…難有う御座いました」

と云つて葉子はそこに竝んで坐つた二人の青年をかたみ代りに見やりながら輕く挨拶した。

「さぞお辛いでせうねえ。お湯は？　お召しにならない？　丁度沸いてゐますわ」

「大分臭くつてお氣の毒ですが、一度や二度湯につかつたつてなほりはしませんから…まあ這入りません」

古藤は這入つて來た時のしかつめらしい樣子に引きかへて顔色を和らがせられてゐた。葉子は心の中で相變らずの simpleton だと思つた。

「さうねえ何時まで門限は？…え、六時？　それぢやもういくらもありませんわね。ぢやお湯はよしていたゞいてお話の方をたんとしませうねえ。いかゞ軍隊生活は、お氣に入つて？」

「這入らなかつた前以上に嫌ひになりました」

「岡さんはどうなさつたの」

「私まだ猶豫中ですが檢査を受けたつて屹度駄目です。不合格のやうな健康を持つと、私軍隊生活の出來るやうな人が羨ましくつてなりません。…體でも強くなつたら私、もう少し心も強くなるんでせうけれども…」

「そんな事はありませんねえ」

古藤は自分の經驗から岡を說伏するやうにさう云つた。

「僕もその一人だが、鬼のやうな體格を持つてゐて、女のやうな弱蟲が隊にゐて見ると澤山ゐますよ。僕はこんな心でこんな體格を持つてゐるのが先天的の二重生活を强ひられるやうで苦しいんです。これからも僕はこの矛盾の爲めに屹度苦しむに違ひない」

「何んですねお二人とも、妙な所で謙遜のしつこをなさるのね。岡さんだつてさうお弱くはないし、古藤さんと來たらそれは意志堅固…」

「さうなら僕は今日もこゝなんかには來やしません。木村君にも疾うに決心をさせてゐる筈なんです」

葉子の言葉を中途から奪つて、古藤はしたゝか自分自身を鞭つやうに激しくかう云つた。葉子は何もかも解つてゐる癖にしらを切つて不思議さうな顔付きをして見せた。

「さうだ、思ひ切つて云ふだけの事は云つてしまひませう。…岡君立たないで下さい。君がゐて下さると却つていゝんです」

さう云つて古藤は葉子を暫らく熟視してから云

ひ出す事を纏めようとするやうに下を向いた。
岡も一寸形を改めて葉子の方を竊み見るやうにした。葉子は眉一つ動かさなかつた。而して側にゐる貞世に耳うちして、愛子を手傳つて五時に夕食の食べられる用意をするやうに、而して三縁亭から三皿程の料理を取り寄せるやうに云ひつけて座を外づさした。古藤は躍るやうにして部屋を出て行く貞世をそつと眼のはづれで見送つてゐたが、やがて徐ろに顔を擧げた。日に燒けた顔が更に赤くなつてゐた。
「僕はね……(さう云つておいて古藤は又考へた)……あなたが、そんな事はないとあなたは云ふでせうが、あなたが倉地と云ふその事務長の人の奥さんになられると云ふのなら、それが惡いつて思つてる譯ぢやないんです。そんな事があるとすりやそりや仕方のない事なんだ。……而してですね、僕にもそりや解るやうです。……解るつて云ふのは、あなたがさうなればなりさうな事だと、それが解るつて云ふんです。然しそれならそれでいゝから、それを木村にはつきりと云つてやつて下さい。そこなんだ僕の云はむとするのは。あなたは怒るかも知れませんが、僕は木村に幾度も葉子さんとはもう縁を切れつて勸告しました。これまで僕があなたに默つてそんな事をしてゐたのは惡かつたからお斷りをします。(さう云つて古藤は一寸誠實に頭を下げた。葉子も默つたまゝ眞面目に合點いて見せた)けれども木村からの返事は、それに對する返事はいつでも同一なんです。葉子から破約の事を申出て來るか、倉地といふ人との結婚を申出て來るまでは、自分は誰れの言葉よりも葉子の言葉と心とに信用をおく。親友であつてもこの問題に就いては、君の勸告だけでは心は動かない。かうなんです。木村つてのはそんな男なんですよ。(古藤の言葉は一寸曇つたがすぐ元のやうになつた)それをあなたは默つておくのは少し變だと思ひます」
「それで……」
葉子は少し座を乘り出して古藤を勵ますやうに言葉を續けさせた。
「木村からは前からあなたの所に行つてよく事情を見てやつてくれ、病氣の事も心配でならないからと云つて來てはゐるんですが、僕は自分ながら何うしやうもない妙な潔癖があるもんだからつい伺ひおくれてしまつたのです。成程あなたは先よりは瘦せましたね。而して顔の色もよくありませんね」
さう云ひながら古藤はぢつと葉子の顔を見やつた。葉子は姉のやうに一段の高みから古藤の眼を迎へて鷹揚に微笑んでゐた。云ふだけ云はせて見よう、さう思つて今度は岡の方に眼をやつた。
「岡さん。あなた今古藤さんの仰しやる事をすつかりお聞きになつてゐて下さいましたわね。あなたはこの頃失禮ながら家族の一人のやうにこちらに遊びにお出で下さるんですが、私を何うお思ひになつて入らつしやるか、御遠慮なく古藤さんにお話しなすつて下さいましな。決して御遠慮なく……私どんな事を伺つても決して〳〵何んとも思ひは致しませんから」
それを聞くと岡はひどく當惑して顔を眞赤にして處女のやうに羞恥かんだ。古藤の側に岡を置いて見るのは、靑銅の花瓶の側に咲きかけの櫻を置いて見るやうだつた。葉子はふと心に浮んだその對比を自分ながら面白いと思つた。そんな餘裕を失はないでゐた。
「私から云ふ事柄には物を云ふ力はないやうに思ひますから……」
「さう云はないで本當に思つた事を云つて見て下さい。僕は一徹ですからひどい思ひ間違ひをしてゐないとも限りませんから。どうか聞かして下さい」

さう云つて古藤も肩章越しに岡を顧みた。

「本當に何も云ふ事はないんですけれども……木村さんには私口に云へない程御同情してゐます。木村さんのやうないゝ方が今頃どんなに獨りで淋しく思つて居られるかと思ひやつただけで私淋しくなつてしまひます。けれども世の中には色々な運命があるのではないでせうか。而して銘々は默つてそれを耐へて行くより仕方がないやうに私思ひます。そこで無理をしようとすると凡ての事が惡くなるばかり……それは私だけの考へですけれども。私さう考へないと一刻も生きてゐられないやうな氣がしてなりません。葉子さんと木村さんと倉地さんとの關係は私少しは知つてるやうにも思ひますけれども、よく考へて見ると却つてちつとも知らないのかも知れませんねえ。私は自分自身が少しも解らないんですからお三人の事なども、分らない自分の、分らない想像だけの事だと思ひたいんです。……古藤さんにはそこまではお話しませんでしたけれども、私自分の家の事情が大變苦しいので心を打ち開けるやうな人を持つてゐませんでしたが……、殊に母とか姉妹とか云ふ女の人に……葉子さんにお目にかゝつたら、何んでもなくそれが出來たんです。それで私は嬉しかつたんです。而して葉子さんが木村さんと何うしても氣がお合ひにならない、その事も失禮ですけれども今の所では私想像が違つてゐないやうにも思ひます。けれどもその外の事は私何んとも自信を以て云ふ事が出來ません。そんな所まで他人が想像をしたり口を出したりしていゝものか何うかも私判りません。大變獨善的に聞こえるかも知れませんが、そんな氣はなく、運命に出來るだけ從順にしてゐたいと思ふと、私進んで物を云つたりしたりするのが恐ろしいと思ひます。……何んだか少しも役に立たない事を云つてしまひまして……私矢張り力がありませんから、何も云はなかつた方がよかつたんですけれども……」

さう絕え入るやうに聲を細めて岡は言葉を結ばぬ中に口をつぐんでしまつた。その後には沈默だけがふさはしいやうに口をつぐんでしまつた。

實際その後には不思議な程しめやかな沈默が續いた。たき込めた香の香ひがかすかに動くだけだつた。

「あんなに謙遜な岡君も（岡は慌ててその讃辭らしい古藤の言葉を打ち消さうとしさうにしたが、古藤がどん／＼言葉を續けるのでそのまゝ顏を赤くして默つてしまつた）あなたと木村とが何うしても折合はない事だけは少くとも認めてゐるんです。さうでせう」

葉子は美しい沈默をがさつな手でかき亂された不快をかすかに物足らなく思ふらしい表情をして、

「それは洋行する前、いつぞや横濱に一緒に行つていたゞいた時委しくお話したぢやありませんか。それは私誰方にでも申上げてゐた事ですわ」

「そんなら何故……その時は木村の外には保護者はゐなかつたから、あなたとしてはお妹さん達を育てて行く上にも自分を犧牲にして木村に行く氣でお出でだつたかも知れませんが何故……何故今になつても木村との關係をそのまゝにしておく必要があるんです」

岡は激しい言葉で自分が責められるかのやうにはら／＼しながら首を下げたり、葉子と古藤の顏とを片身代りに見やつたりしてゐたが、とう／＼居たゝまれなくなつたと見えて、靜かに座を立つて人のゐない二階の方に行つてしまつた。葉子は岡の心持を思ひやつて引き止めなかつたし、古藤は、ゐて貰つた所が何んの役にも

立たないと思つたらしくこれも引き止めはしなかつた。插す花もない青銅の花瓶一つ……葉子は心の中で皮肉に微笑んだ。

「それより先きに伺はして頂戴な、倉地さんはどの位の程度で私達を保護していらつしやるか御存じ？」

古藤はすぐつゝと詰つてしまつた。然しすぐ盛り返して來た。

「僕は岡君と違つてブルジョアの家に生れたものですからデリカシーと云ふやうな美徳を餘り澤山持つてゐないやうだから、失禮な事を云つたら許して下さい。倉地つて人は妻子まで離縁した……而かも非常に貞節らしい奥さんまで離縁したと新聞に出てゐました」

「さうね新聞には出てゐましたわね。……よう御座いますわ、假りにさうだとしたらそれが何か私と關係のある事だとでも仰しやるの」

さう云ひながら葉子は少し氣に障へたらしく、炭取りを引き寄せて火鉢に炭をつぎ足した。櫻炭の火花が激しく飛んで二人の間に彈けた。

「まあひどいこの炭は、水をかけずに持つて來たと見えるのね。女ばかりの世帶だと思つて出入りの御用聞きまで人を馬鹿にするんですのよ」

葉子はさう云ひ〳〵眉をひそめた。古藤は胸をつかれたやうだつた。

「僕は亂暴なもんだから……云ひ過ぎがあつたら本當に許して下さい。僕は實際如何に親友だからと云つて木村にばかりをいゝやうにと思つてる譯ぢやないんですけれども、全くあの境遇には同情してしまふもんだから……僕はあなたも自分の立場さへはつきり云つて下さればあなたの立場も理解が出來ると思ふんだけれどもなあ。……僕は餘り直線的過ぎるんでせうか。僕は世の中を sun-clear に見たいと思ひますよ。出來ないもんでせうか」

葉子は撫でるやうな好意のほゝゑみを見せた。

「あなたが私本當に羨ましう御座んすわ。平和な家庭にお育ちになつて素直に何んでも御覽になれるのは難有い事なんですわ。そんな方ばかりが世の中にいらつしやると面倒がなくなつてそれはいゝんですけれども、岡さんなんかはそれから見ると本當にお氣の毒なんですの。私見たいなものをさへあゝして賴りにしていらつしやるのを見るといぢらしくつて今日は倉地さんの見てゐる前でキスして上げつちまつたの。……他人事ぢやありませんわね。（葉子の顏はすぐ曇つた）あなたと同樣はき〳〵した事の好きな私がこんなに意地をこぢらしたり、人の氣をかねたり、好んで誤解を買つて出たりするやうになつてしまつた、それを考へて御覽になつて頂戴。あなたには今はお分りにならないかも知れませんけれども……それにしてももう五時。愛子に手料理を作らせておきましたから久し振りで妹達にも會つてやつて下さいまし、ね、いゝでせう」

古藤は急に固くなつた。

「僕は歸ります。僕は木村にはつきりした報告も出來ない中に、こちらで御飯をいたゞいたりするのは何んだか氣が尤めます。葉子さん賴みます、木村を救つて下さい。而してあなた自身を救つて下さい。僕は本當を云ふと遠くに離れてあなたを見てゐると何うしても嫌ひになつちまふんですが、かうやつてお話してゐると失禮な事を云つたり自分で怒つたりしながらも、あなたは自分でもあざむけないやうなものを持つて居られるのを感ずるやうに思ふんです。境遇が惡いんだ屹度。僕は一生が大事だと思ひますよ。來世があらうが過去世があらうがこの一生が大事だと思ひますよ。生き甲斐があつたと思ふやうに生きて行きたいと思ひますよ。轉ん

だつて倒れたつてそんな事を世間のやうに彼れ是れくよ〳〵せずに、轉んだら立つて、倒れたら起き上つて行きたいと思ひます。僕は少し人並み外づれて馬鹿のやうだけれども、馬鹿者でさへがさうして行きたいと思つてるんです」

古藤は眼に涙をためて痛ましげに葉子を見やつた。その時電燈が急に部屋を明るくした。

「あなたは本當にどこか惡いやうですね。早く治つて下さい。それぢや僕はこれで今日は御免蒙ります。左樣なら」

牝鹿のやうに敏感な岡さへが一向注意しない葉子の健康狀態を、鈍重らしい古藤が逸早く見て取つて案じてくれるのを見ると、葉子はこの素朴な青年になつかし味を感ずるのだつた。

葉子は立つて行く古藤の後ろから、

「愛さん貞ちやん古藤さんがお歸りになるといけないから早く來ておとめ申しておくれ」

と叫んだ。玄關に出た古藤の所に臺所口から貞世が飛んで來た。飛んで來はしたが、倉地に對してのやうにすぐ躍りかゝる事は得しないで、口もきかずに、少し恥かしげにそこに立ちすくんだ。その後から愛子が手拭を頭から取りながら急ぎ足で現はれた。玄關のなげしの所に照り返しをつけて置いてあるランプの光をまともに受けた愛子の顏を見ると、古藤は魅られたやうにその美に打たれたらしく、口禮もせずにその立姿に眺め入つた。愛子はにこりと左の口尻に笑窪の出る微笑を見せて、右手の指先きが廊下の板にやつと觸るほど膝を折つて輕く頭を下げた。愛子の顏には羞恥らしいものは少しも現はれなかつた。

「いけません、古藤さん。妹達が御恩返しの積りで一生懸命にしたんですから、おいしくはありませんが、是非、ね。貞ちやんお前さんそのお帽子と劍とを持つてお逃げ」

葉子にさう云はれて貞世はすばしこく帽子だけ取り上げてしまつた。古藤はおめ〳〵と居殘る事になつた。

葉子は倉地をも呼び迎へさせた。

十二疊の座敷にはこの家に珍らしく賑やかな食卓がしつらへられた。五人がおの〳〵座に就いて箸を取らうとする所に倉地が這入つて來た。

「さあ入らつしやいまし、今夜は賑やかですのよ。こゝへどうぞ。(さう云つて古藤の隣りの座を眼で示した)倉地さん、この方がいつもお噂をする木村の親友の古藤義一さんです。今日珍らしく入らしつて下さいましたの。これが事務長をしていらしつた倉地三吉さんです」

紹介された倉地は心置きない態度で古藤の傍に坐りながら、

「私はたしか雙鶴館で一寸お目に懸つたやう思ふが御挨拶もせず失敬しました。こちらには始終お世話になつとります。以後宜しく」

と云つた。古藤は正面から倉地をぢつと見やりながら一寸頭を下げたきり物も云はなかつた。倉地は輕々しく出した自分の今の言葉を不快に思つたらしく、苦り切つて顏を正面に直したが、强ひて努力するやうに笑顏を作つてもう一度古藤を顧みた。

「あの時からすると見違へるやうに變られましたな。私も日清戰爭の時は半分軍人のやうな生活をしたが、中々面白かつたですよ。然し苦しい事も偶にはおありだらうな」

古藤は食卓を見やつたまゝ、

「えゝ」

とだけ答へた。倉地の我慢はそれまでだつた。一座はその氣分を感じて何んとなく白け渡つた。葉子の手慣れた tact でもそれは中々一掃されなかつた。岡はその氣まづさを强烈な電氣のやうに感じてゐるらしかつた。獨り貞世だけはしやぎ返つた。

「このサラダは愛姉さんがお酢とオリーヴ油を間違つて油を澤山かけたから屹度油つこくつてよ」
愛子はおだやかに貞世を睨むやうにして、
「貞ちやんはひどい」
と云つた。貞世は平氣だつた。
「その代り私が又お酢を後から入れたから酸ぱ過ぎる所があるかも知れなくなつてよ。もう少し序でにお薬も入れればよかつてねえ、愛姉さん」
皆んなは思はず笑つた。古藤も笑ふには笑つた。然しその笑ひ聲はすぐ鎭まつてしまつた。
やがて古藤が突然箸を措いた。
「僕が惡い爲めに折角の食卓を大變不愉快にしたやうです、濟みませんでした。僕はこれで失禮します」
葉子は慌てて、
「まあそんな事はちつともありません事よ。古藤さんそんな事を仰しやらずに仕舞までいらしつて頂戴どうぞ。皆んなで途中までお送りしますから」
ととめたが古藤は何うしても聽かなかつた。人は食事半ばで立ち上らねばならなかつた。古藤は靴を履いてから、帶革を取り上げて劍をつると、洋服の皺を延ばしながら、ちらつと愛子に鋭く眼をやつた。始めから殆んど物を云はなかつた愛子は、この時も默つたまゝ、多恨な柔和な眼を大きく見開いて、中座をして行く古藤を美しくたしなめるやうにぢつと見返してゐた。それを葉子の鋭い視覺は見逃がさなかつた。
「古藤さん、あなたこれから屹度度々いらしつて下さいましよ。まだ〳〵申上げる事が澤山殘つてゐますし、妹達もお待ち申してゐますから、屹度ですことよ」
さう云つて葉子も親しみを込めた眸を送つた。
古藤はしやちこ張つた軍隊式の立禮をして、さく〳〵と砂利の上に靴の音を立てながら、夕闇の催した杉森の下道の方へと消えて行つた。
見送りに立たなかつた倉地が座敷の方で獨語のやうに誰れに向つてともなく「馬鹿!」と云ふのが聞こえた。

三十五

葉子と倉地とは竹柴館以來度々家を明けて小さな戀の冒險を樂しみ合ふやうになつた。さう云ふ時に倉地の家に出入する外國人や正井などを同伴する事もあつた。外國人は主に米國の人だつたが、葉子は倉地がさう云ふ人達を同座させる意味を知つて、その滑らかな英語と、誰れでも——殊に顏や手の表情に本能的な興味を持つ外國人を——蠱惑しないでは置かない華やかな應接振りとで、彼等を虜にする事に成功した。それは倉地の仕事を少からず助けたに違ひなかつた。倉地の金まはりは益々潤澤になつて行くらしかつた。葉子一家は倉地と木村とから貢がれる金で中流階級にはあり得ない程餘裕のある生活が出來たのみならず、葉子は十分の仕送りを定子にして、なほ餘る金を女らしく毎月銀行に預け入れるまでになつた。
然しそれと共に倉地は益々荒んで行つた。眼の光にさへ舊のやうに大海にのみ見る寛濶な無頓着な而して恐ろしく力強い表情はなくなつて、いら〳〵と宛てもなく燃えさかる石炭の火のやうな熱と不安とが見られるやうになつた。動ゝともすると倉地は突然譯もない事にきびしく腹を立てた。正井などは木葉微塵に叱り飛ばされたりした。さう云ふ時の倉地は嵐のやうな狂暴な威力を示した。
葉子も自分の健康が段々惡い方に向いて行くのを意識しないではゐられなくなつた。倉地の心が荒めば荒む程葉子に對して要求するものは燃え爛れる情熱の肉體だつたが、葉子も亦知ら

ず識らず自分をそれに適應させ、且つは自分が倉地から同樣な狂暴な愛撫を受けたい欲念から、先きの事も後の事も考へずに、現在の可能の凡てを盡して倉地の要求に應じて行つた。腦も心臟も振り廻して、ゆすぶつて、敲きつけて、一氣に猛火であぶり立てるやうな激情、魂ばかりになつたやうな、肉ばかりになつたやうな、極端な神經の混亂、而してその後に續く死滅と同然の倦怠疲勞。人間が有する生命力をどん底から驗めし試みるさう云ふ虐待が日に二度も三度も繰返された。さうしてその後では倉地の心は乾度野獸のやうに更に荒んでゐた。葉子は不快極まる病理的の憂鬱に襲はれた。靜かに鈍く生命を脅やかす腰部の痛み、二匹の小魔が肉と骨との間に這入り込んで、肉を肩にあてて骨を踏んばつて、うんと力任せに反り上るかと思はれる程の肩の凝り、段々鼓動を低めて行つて、呼吸を苦しくして、今働きを止めるかと危むと、一時に耳にまで音が聞こえる位激しく動き出す不規則な心臟の動作。もや／＼と火の霧で包まれたり、透明な氷の水で滿たされるやうな頭腦の狂ひ、……かう云ふ現象は日一日と生命に對する、而して人生に對する葉子の猜疑を激しくした。

有頂天の溺樂の後に襲つて來る淋しいとも、悲しいとも、果敢ないとも形容の出來ないその空虛さは何よりも葉子につらかつた。假令その場で命を絕つてもその空虛さは永遠に葉子を襲ふもののやうにも思はれた。唯ゝこれから遁れる唯ゝ一つの道は捨鉢になつて、一時的のものだとは知り拔きながら、而してその後には更に苦しい空虛さが待ち伏せしてゐるとは覺悟しながら、次ぎの溺樂を逐ふ外はなかつた。氣分の荒んだ倉地も同じ葉子と同じ心で同じ事を求めてゐた。かうして二人は底止する所のない何處かへ手をつないで迷ひ込んで行つた。

ある朝葉子は朝湯を使つてから、例の六疊で鏡臺に向つたが一日々々に變つて行くやうな自分の顏には唯ゞ驚くばかりだつた。少し縱に長く見える鏡ではあるけれども、そこに映る姿は餘りに細つてゐた。その代り眼は前にも增して大きく鈴を張つて、化粧燒けとも思はれぬ薄い紫色の色素がその周りに現はれて來てゐた。それが葉子の眼に例へば森林に圍まれた澄んだ湖のやうな深みと神祕とを添へるやうにも見えた。鼻筋は瘦せ細つて精神的な敏感さを際立たしてゐた。頰の傷々しくこけた爲めに、葉子の顏に云ふべからざる暖かみを與へる笑窪を失はうとしてはゐたが、その代りにそこには悄ましく物思はしい張りを加へてゐた。唯ゝ葉子がどうしても辯護の出來ないのは益ゝ眼立つて來た固い下顎の輪郭だつた。然し兎にも角にも肉情の興奮の結果が顏に妖凄な精神美を附け加へてゐるのは不思議だつた。葉子はこれまでの化粧法を全然改める必要をその朝になつてしみ／＼と感じた。而して今まで着てゐた衣類までが殘らず氣に喰はなくなつた。さうなると葉子は矢も盾もたまらなかつた。

葉子は紅の交つた紅粉を殆んど使はずに化粧をした。顎の兩側と眼の圍りとの紅粉をわざと薄く拭き取つた。枕を入れずに前髮を取つて、束髮の髷を思ひきり下げて結つて見た。鬢だけを少しふくらましたので顎の張つたのも眼立たず、額の細くなつたのもいくらか調節されて、そこには葉子自身が期待もしなかつたやうな廢頹的な同時に神經質的な凄くも美しい一つの顏面が創造されてゐた。有り合はせのものの中から出來るだけ地味な一揃ひを選んでそれを着ると葉子はすぐ越後屋に車を走らせた。

晝過ぎまで葉子は越後屋にゐて註文や買物に時を過ごした。衣服や身の周りのものの見立てについては葉子は天才と云つてよかつた。自

分でもその才能には自信を持つてゐた。從つて思ひ存分の金を懷ろに入れてゐて買物をする位興の多いものは葉子に取つては他になかつた。越後屋を出る時には、感興と興奮とに自分を傷めちぎつた藝術家のやうにへと〳〵に疲れ切つてゐた。

歸りついた玄關の靴拔ぎ石の上には岡の細長い華車な半靴が脫ぎ捨てられてゐた。葉子は自分の部屋に行つて懷中物などを仕舞つて、湯呑でなみ〳〵と一杯の白湯を飲むと、すぐ二階に上つて行つた。自分の新らしい化粧法がどんな風に岡の眼を刺戟するか、葉子は子供らしくそれを試みて見たかつたのだ。彼女は不意に岡の前に現はれよう爲めに裏階子からそつと登つて行つた。而して襖を開けるとそこに岡と愛子だけがゐた。貞世は苔香園にでも行つて遊んでゐるのか、そこには姿を見せなかつた。

岡は詩集らしいものを開いて見てゐた。そこにはなほ二三册の書物が散らばつてゐた。愛子は緣側に出て手欄から庭を見下ろしてゐた。然し葉子は不思議な本能から、階子段に足をかけた頃には、二人は決して今のやうな位置に、今のやうな態度でゐたのではないと云ふ事を直覺してゐた。二人が一人は本を讀み、一人が緣に出てゐるのは、如何にも自然でありながら非常に不自然だつた。

突然――それは本當に突然何處から飛び込んで來たのか知れない不快の念の爲めに葉子の胸はかきむしられた。岡は葉子の姿を見ると、わざつと寬がせてゐたやうな姿勢を急に正して、讀み耽つてゐたらしく見せた詩集を餘りに惜しげもなく閉ぢてしまつた。而していつもより少し馴れ〳〵しく挨拶した。愛子は緣側から靜かにこつちを振り向いて平生と少しも變らない態度で、柔順に無表情に緣板の上に一寸膝をついて挨拶した。然しその沈着にも係はらず、葉子は愛子が今まで淚を眼にためてゐたのをつきとめた。岡も愛子も明らかに葉子の顏や髮の樣子の變つたのに氣附いてゐない位心に餘裕のないのが明らかだつた。

「貞ちやんは」

と葉子は立つたまゝで尋ねて見た。二人は思はず慌てて答へようとしたが、岡は愛子を竊み見るやうにして控へた。

「隣りの庭に花を買ひに行つて貰ひましたの」

さう愛子が少し下を向いて髻だけを葉子に見えるやうにして素直に答へた。「ふゝん」と葉子は腹の中でせゝら笑つた。而して始めてそこに坐つて、ぢつと岡の眼を見つめながら、

「何？　讀んでいらしつたのは」

と云つて、そこに在る四六細型の美しい表裝の書物を取り上げて見た。黑髮を亂した妖艷な女の頭、矢で貫かれた心臟、その心臟からぽた〳〵落ちる血の滴りが自ら字になつたやうに圖案された「亂れ髮」といふ標題――文字に親しむ事の大嫌ひな葉子も噂で聞いてゐた有名な鳳晶子の詩集だつた。そこには「明星」といふ文藝雜誌だの、秋雨の「無果花」だの、兆民居士の「一年有半」だのと云ふ新刊の書物も散らばつてゐた。

「まあ岡さんも中々のロマンティストね、こんなものを愛讀なさるの」

と葉子は少し皮肉なものを口尻に見せながら尋ねて見た。岡は靜かな調子で訂正するやうに、

「それは愛子さんのです。私今一寸拜見しただけです」

「これは」

と云つて葉子は今度は「一年有半」を取り上げた。

「それは岡さんが今日貸して下さいましたの。私判りさうもありませんわ」

愛子は姉の毒舌を豫め防がうとするやうに。

「へえ、それぢや岡さん、あなたは又大したリアリストね」

葉子は愛子を眼中にもおかない風でから云つた。去年の下半期の思想界を震撼したやうなこの書物と續編とは倉地の貧しい書架の中にもあつたのだ而して葉子は面白く思ひながらその中を時々拾ひ讀みしてゐたのだつた。

「何んだか私とはすつかり違つた世界を見るやうでゐながら、自分の心持が殘らず云つてあるやうでもあるんで……私それが好きなんです。リアリストと云ふ譯ではありませんけれども……」

「でもこの本の皮肉は少し痩せ我慢ね。あなたのやうな方には一寸不似合ですわ」

「さうでせうか」

岡は何とはなく今にでも腫物に觸られるかのやうにそは／＼してゐた。會話は少しもいつものやうには彈まなかつた。葉子はいら／＼しながらもそれを顏には見せないで今度は愛子の方に槍先きを向けた。

「愛さんお前こんな本をいつお買ひだつたの」

と云つて見ると、愛子は少し躊つてゐる樣子だつたが、すぐに素直な落ち着きを見せて、

「買つたんぢやないんですの。古藤さんが送つて下さいましたの」

と云つた。葉子はさすがに驚いた。古藤はあの會食の晩、中座したつきり、この家には足踏みもしなかつたのに……。葉子は少し激しい言葉になつた。

「何んだつて又こんな本を送つておよこしなさつたんだらう。あなたお手紙でも上げたのね」

「えゝ、……下さいましたから」

「どんなお手紙を」

愛子は少し俯向き加減に默つてしまつた、かう云ふ態度を取つた時の愛子のしぶとさを葉子はよく知つてゐた。葉子の神經はびり／＼と緊張して來た。

「持つて來てお見せ」

さう嚴格に云ひながら、葉子はそこに岡のゐる事も意識の中に加へてゐた。愛子は執拗に默つたまゝ坐つてゐた。然し葉子がもう一度催促の言葉を出さうとすると、その瞬間に愛子はつと立ち上つて部屋を出て行つた。

葉子はその隙に岡の顏を見た。それはまだ無垢童貞の青年が不思議な戰慄を胸の中に感じて、反感を催すか、牽き付けられかしないではゐられないやうな眼で岡を見た。岡は少女のやうに顏を赤めて、葉子の視線を受け切れないで眸をたじろがしつゝ眼を伏せてしまつた。葉子はいつまでもそのデリケートな横顏を注視めつづけた。岡は唾を飲みこむのも憚るやうな樣子をしてゐた。

「岡さん」

さう葉子に呼ばれて、岡は已むを得ずおづ／＼頭を上げた。葉子は今度は詰じるやうにその若若しい上品な岡を見詰めてゐた。

そこに愛子が白い西洋封筒を持つて歸つて來た。葉子は岡にそれを見せつけるやうに取り上げて、取るにも足らぬ輕いものでも扱ふやうに飛び／＼に讀んで見た。それには唯ゞ當り前な事だけが書いてあつた。暫らくめで見た二人の大きくなつて變つたのには驚いたとか、折角寄つて作つてくれた御馳走をすつかり賞味しない中に歸つたのは殘念だが、自分の性分としてはあの上我慢が出來なかつたのだから許してくれとか、人間は他人の見やう見眞似で育つて行つたのでは駄目だから、縱令どんな境遇にゐても自分の見識を失つてはいけないとか、二人には倉地といふ人間だけは何うかして近づけさせたくないと思ふとか、而して最後に、愛子さんは詠歌が中々上手だつたがこの頃出來るか、出來るならそれを見せてほしい、軍隊生活の乾燥無

味なのには堪へられないからとしてあつた。而して宛名は愛子、貞世の二人になつてゐた。

「馬鹿ぢやないの愛さん、あなたこのお手紙でいゝ氣になつて、下手糞なぬたでもお見せ申したんでせう……いゝ氣なものね……この御本と一緒にもお手紙が來た筈ね―」

愛子はすぐ又立たうとした。然し葉子はさうはさせなかつた。

「一本々々お手紙を取りに行つたり歸つたりしたんぢや日が暮れますわ。……日が暮れると云へばもう暗くなつたわ。貞ちやんは又何をしてゐるだらう……あなた早く呼びに行つて一緒にお夕飯の支度をして頂戴」

愛子はそこに在る書物を一と抱へに胸に抱いて、俯向くと愛らしく二重になる頤で押へて座を立つて行つた。それが如何にもしを〳〵と、細かい擧動の一つ〳〵で岡に哀訴するやうに見れば見なされた。「互に見交はすやうな事をして見るがいゝ」さう葉子は心の中で二人をたしなめながら、二人に氣を配つた。岡も愛子も申合はしたやうに瞥視もし合はなかつた。けれども葉子は二人がせめては眼だけでも慰め合ひたい願ひに胸を震はしてゐるのをはつきりと感ずるやうに思つた。葉子の心はおぞましくも苦々しい猜疑の爲めに苦しんだ。若さと若さとが互ひにきびしく求め合つて、葉子などを易々と袖にするまでにその情炎は高じてゐると思ふと耐へられなかつた。葉子は強ひて自分を押し鎮める爲めに、帯の間から煙草入れを取り出してゆつくり煙を吹いた。煙管の先きが端なく火鉢にかざした岡の指尖きに觸れると電氣のやうなものが葉子に傳はるのを覺えた。若さ……若さ……

そこには二人の間に暫らくぎごちない沈默が續いた。岡が何を云へば愛子は泣いたんだらう。愛子は何を泣いて岡に訴へてゐたのだらう。葉子が數へ切れぬ程經驗した幾多の戀の場面の中から、激情的な色々の光景がつぎ〳〵に頭の中に描かれるのだつた。もうさうした年齢が岡にも愛子にも來てゐるのだ。それに不思議はない。然しあれほど葉子にあこがれ溺れて、謂はば戀以上の戀とも云ふべきものを崇拜的に捧げてゐた岡が、あの純直な上品な而して極めて内氣な岡が、見る〳〵葉子の把持から離れて、人もあらうに愛子――妹の愛子の方に移つて行かうとしてゐるらしいのを見なければならないのは何んと云ふ事だらう。愛子の涙――それは察する事が出來る、愛子は屹度涙ながらに葉子と倉地との間にこの頃募つて行く奔放な放埓な醜行を訴へたに違ひない。葉子の愛子と貞世とに對する偏頗な愛憎と、愛子の上に加へられる御殿女中風な壓迫とを歎いたに違ひない。而かもそれをあの女に特有な多恨らしい、冷やかな、寂しい表現法で、而して息氣づまるやうな若さと若さとの共鳴の中に……。

勃然として燒くやうな嫉妬が葉子の胸の中に堅く凝りついて來た。葉子はすり寄つておどおどしてゐる岡の手を力強く握りしめた。葉子の手は氷のやうに冷たかつた。岡の手は火鉢にかざしてあつた故か、珍らしく火照つて、臆病らしい脂汗が掌にしとゞに滲み出てゐた。

「あなたは私がお怖いの」

葉子はさりげなく岡の顔を覗き込むやうにしてかう云つた。

「そんな事……」

岡はせう事なしに腹を据ゑたやうに割合にしいやいんとした聲でかう云ひながら、葉子の眼をゆついゝくり見やつて、握られた手には少しも力を籠めようとはしなかつた。葉子は裏切られたと思ふ不滿の爲めにもうそれ以上冷靜を裝つてはゐられなかつた。昔のやうに何處までも自分を失はない、粘り氣の強い、鋭い神經はもう葉

子にはなかつた。

「あなたは愛子を愛してゐて下さるのね。さうでせう。私がこゝに來る前愛子はあんなに泣いて何を申上げてゐたの？……仰しやつて下さいな。愛子があなたのやうな方に愛していたゞけるのは勿體ない位ですから、私喜ぶとも、尤め立てなどはしません、屹度。だから仰しやつて頂戴。……いゝえ、そんな事を仰しやつてそれや駄目、私の眼はまだこれでも黑う御座んすから。……あなたそんな水臭いお仕向けを私になさらうと云ふの？ まさかとは思ひますがあなた私に仰しやつた事を忘れなさつちや困りますよ。私はこれでも眞劍な事には眞劍になる位の誠實はある積りです事よ。私あなたのお言葉は忘れてはをりませんわ。姉だと今でも思つてゐて下さるなら本當の事を仰しやつて下さい。愛子に對しては私は私だけの事をして御覽に入れますから……さ」

さう癇走つた聲で云ひながら葉子は時々握つてゐる岡の手をヒステリックに激しく振り動かした。泣いてはならぬと思へば思ふ程葉子の眼からは涙が流れた。宛ら戀人に不實を責めるやうな熱意が思ふざま湧き立つて來た。仕舞には岡にもその心持が移つて行つたやうだつた。而して右手を握つた葉子の手の上に左の手を添へながら、上下から挾むやうに抑へて、岡は震へ聲で靜かに云ひ出した。

「御存じぢやありませんか、私、戀の出來るやうな人間ではないのを。年こそ若う御座いますけれども心は妙にいぢけて老いてしまつてゐるんです。何うしても戀の遂げられないやうな女の方にでなければ私の戀は動きません。私を戀してくれる人があるとしたら、私、心が卽座に冷えてしまふのです。一度自分の手に入れたら、どれ程尊いものでも大事なものでも、もう私には尊くも大事でもなくなつて仕舞ふんです。だから私、淋しいんです。何んにも持つてゐない、何んにも空しい……その癖さう知り抜きながら私、何か何處かにあるやうに思つて摑む事の出來ないものに憬れます。この心さへなくなれば淋しくつてもそれでいゝのだがなと思ふ程苦しくもあります。何にでも自分の理想をすぐあてはめて熱するやうな、そんな若い心が欲しくもありますけれども、そんなものは私には來はしません……春にでもなつて來ると餘計世の中は空しく見えて堪りません。それを先刻ふと愛子さんに申上げたんです。さうしたら愛子さんがお泣きになつたんです。私、あとですぐ惡いと思ひました、人に云ふやうな事ぢやなかつたのを……」

かう云ふ事を云ふ時の岡は、云ふ言葉にも似ず冷酷とも思はれる程唯ゞ淋しい顔になつた。葉子には岡の言葉が解るやうでもあり、妙にからんでも聞こえた。而して一寸すかされたやうに氣勢を殺がれたが、どん〳〵湧き上るやうに内部から襲ひ立てる力はすぐ葉子を理不盡にした。

「愛子がそんなお言葉で泣きましたつて？ 不思議ですわねえ。……それならそれでよう御座んす。……（こゝで葉子は自分にも堪へ切れずにさめ〴〵と泣き出した）岡さん私も淋しい……淋しくつて、淋しくつて……」

「お察し申します」

岡は案外しんみりした言葉でさう云つた。

「お判りになつて？」

と葉子は泣きながら取りすがるやうにした。

「判ります。……あなたは墮落した天使のやうな方です。御免下さい。船の中で始めてお眼にかゝつてから私、ちつとも心持が變つてはゐないんです。あなたがいらつしやるんで私、やうやく淋しさからのがれます」

「噓！……あなたはもう私に愛想をおつかし

なのよ。私のやうに墮落したものは……」

葉子は岡の手を放して、とう〳〵ハンケチを顏にあてた

「さう云ふ意味で云つた譯ぢやないんですけれども……」

稍ゝ暫らく沈默した後に、當惑し切つたやうに淋しく岡は獨語ちて又默つてしまつた。岡はどんなに淋しさうな時でも中々泣かなかつた。それが彼れを一層淋しく見せた。

三月末の夕方の空はなごやかだつた。庭先きの一重櫻の梢には南に向いた方に白い花瓣が何處からか飛んで來て粘着いたやうにちらほら見え出してゐた。その先きには赤く霜枯れた杉森がゆるやかに暮れ初めて、光を含んだ青空が靜かに流れるやうに漂つてゐた。苔香園の方から園丁が間遠に鋏をならす音が聞こえるばかりだつた。

若さから置いて行かれる……さうした淋しみが嫉妬に代つてひし〳〵と葉子を襲つて來た。葉子はふと母の親佐を思つた。葉子が木部との戀に深入りして行つた時、それを見守つてゐた時の親佐を思つた。親佐のその心を思つた。自分の番が來た……その心持は堪らないものだつた。と、突然定子の姿が何よりもなつかしいものとなつて胸に逼つて來た。葉子は自分にもその突然の聯想の徑路は判らなかつた。突然も餘りに突然……然し葉子に逼るその心持は、更に葉子を疊に突伏して泣かせる程強いものだつた

玄關から人の這入つて來る氣配がした。葉子はすぐそれが倉地である事を感じた。葉子は倉地と思つただけで、不思議な憎惡を感じながらその動靜に耳をすました。倉地は臺所の方に行つて愛子を呼んだやうだつた。二人の跫音が玄關の隣りの六疊の方に行つた。而して暫らく靜かだつた。と思ふと、

「いや」

と小さく退けるやうに云ふ愛子の聲が確かに聞こえた。抱きすくめられて、もがきながら放たれた聲らしかつたが、その聲の中には憎惡の影は明らかに薄かつた。

葉子は雷に撃たれたやうに突然泣きやんで頭を擧げた。

すぐ倉地が階子段を昇つて來る音が聞こえた。

「私臺所に參りますからね」

何も知らなかつたらしい岡に、葉子は僅かにそれだけを云つて、突然座を立つて裏階子に急いだ。と、かけ違ひに倉地は座敷に這入つて來た。強い酒の香がすぐ部屋の空氣を汚した。

「やあ春になり居つた。櫻が咲いたぜ。おい葉子」

いかにも氣さくらしく鹽がれた聲でから叫んだ倉地に對して、葉子は返事も出來ない程興奮してゐた。葉子は手に持つたハンケチを口に押し込むやうに銜へて、震へる手で壁を細かく敲くやうにしながら階子段を降りた。

葉子は頭の中に天地の壞れ落ちるやうな音を聞きながら、そのまゝ縁に出て庭下駄を履かうとあせつたけれども何うしても履けないので、跣足のまゝ庭に出た。而して次ぎの瞬間に自分を見出した時には何時戸を開けたとも知らず物置小屋の中に這入つてゐた。

三十六

底のない悒鬱がともすると烈しく葉子を襲ふやうになつた。謂はれのない激怒がつまらない事にもふと頭を擡げて、葉子はそれを押し鎭める事が出來なくなつた。春が來て、木の芽から疊の床に至るまで凡てのものが膨らんで來た。愛子も貞世も見違へるやうに美しくなつた。その肉體は細胞の一つ〳〵まで素早く春を嗅ぎつ

け、吸收し、飽滿するやうに見えた。愛子はその壓迫に堪へないで春の來たのを恨むやうなけだるさと淋しさとを見せた。貞世は生命そのものだつた。秋から冬にかけてによき／＼と延び上つた細々した體には、春の精のやうな豐麗な脂肪がしめやかに沁み亙つて行くのが眼に見えた。葉子だけは春が來ても痩せた。來るにつけて痩せた。ゴム毬の弧線のやうな肩は骨ばつた輪郭を、薄着になつた着物の下から覗かせて、潤澤な髪の毛の重みに堪へないやうに頸筋も細々となつた。痩せて悒鬱になつた事から生じた別種の美 ―― さう思つて葉子が便りにしてゐた美もそれは段々冴え增さつて行く種類の美ではない事を氣附かねばならなくなつた。その美はその行手には夏がなかつた。寒い冬のみが待ち構へてゐた。

歡樂ももう歡樂自身の歡樂は持たなくなつた。歡樂の後には必ず病理的な苦痛が伴ふやうになつた。或る時にはそれを思ふ事すらが失望だつた。それでも葉子は凡ての不自然な方法によつて、今は振り返つて見る過去にばかり眺められる歡樂の絕頂を幻影としてでも現在に描かうとした。而して倉地を自分の力の支配の下に繫がうとした。健康が衰へて行けば行く程この焦燥の爲めに葉子の心は休まなかつた。全盛期を過ぎた伎藝の女にのみ見られるやうな、傷ましく廢頽した、腐菌の燐光を思はせる凄慘な蠱惑力を僅かな力として葉子は何處までも倉地を虜にしようとあせりにあせつた。

然しそれは葉子の傷ましい自覺だつた。美と健康との凡てを備へてゐた葉子には今の自分がさう自覺されたのだけれども、始めて葉子を見る第三者は、物凄い程冴え切つて見える女盛りの葉子の惑力に、日本には見られないやうなコケットの典型を見出したらう。おまけに葉子は肉體の不足を極端に人目を牽く衣服で補ふやうになつてゐた。その當時は日露の關係も日米の關係も嵐の前のやうな暗い徵候を現はし出して、國人全體は一種の壓迫を感じ出してゐた。臥薪嘗膽といふやうな合ひ言葉が頻りと言論界には說かれてゐた。然しそれと同時に日淸戰爭を相當に遠い過去として眺め得るまでに、その戰役の重い負擔から氣のゆるんだ人人は、漸く調整され始めた經濟狀態の下で、生活の美装といふ事に傾いてゐた。自然主義は思想生活の根柢となり、當時病天才の名を擅まゝにした高山樗牛等の一團はニイチェの思想を標榜して「美的生活」とか「淸盛論」と云ふやうな大膽奔放な言說を以て思想の維新を叫んでゐた。風俗問題とか女子の服裝問題とか云ふ議論が守舊派の人々の間には喧しく持ち出されてゐる間に、その反對の傾向は、殼を破つた芥子の種のやうに四方八方に飛び散つた。からして何か今までの日本にはなかつたやうなものの出現を待ち設け見守つてゐた若い人々の眼には、葉子の姿は一つの天啓のやうに映つたに違ひない。女優らしい女優を持たず、カフェーらしいカフェーを持たない當時の路上に葉子の姿は眩しいものの一つだ。葉子を見た人は男女を問はず眼を欹てた。

或る朝葉子は裝ひを凝らして倉地の下宿に出かけた。倉地は寢ごみを襲はれて眼を覺ました。座敷の隅には夜を更かして樂しんだらしい酒肴の殘りが敗えたやうにかためて置いてあつた。例の支那鞄だけはちやんと錠がおりて床の間の隅に片付けられてゐた。葉子は毎時の通り知らん振りをしながら、そこらに散らばつてゐる手紙の差出人の名前に鋭い觀察を與へるのだつた。倉地は宿醉を不快がつて頭を敲きながら寢床から半身を起すと、

「何んで今朝は又そんなにしやれ込んで早くからやつて來をつたんだ」

とそつぽに向いて、欠伸でもしながらのやうに云つた。これが一箇月前だつたら、少くとも三箇月前だつたら、一夜の安眠に、あの逞ましい精力の全部を回復した倉地は、いきなり寢床の中から飛び出して來て、さうはさせまいとする葉子を否應なしに床の上に捩ぢ伏せてゐたに違ひないのだ。葉子は傍目にもこせ〳〵とうるさく見えるやうな敏捷さでその邊に散らばつてゐる物を、手紙は手紙、懷中物は懷中物、茶道具は茶道具とどん〳〵片付けながら、倉地の方も見ずに、

「昨日の約束ぢやありませんか」

と無愛想につぶやいた。倉地はその言葉で始めて何か云つたのをかすかに思ひ出した風で、

「何しろ俺れは今日は忙がしいで駄目だよ」

と云つて、やうやく伸びをしながら立ち上つた。葉子はもう腹に据ゑかねる程怒りを發してゐた。

「怒つてしまつてはいけない。これが倉地を冷淡にさせるのだ」――さう心の中には思ひながらも、葉子の心にはどうしてもその云ふ事を聞かぬ惡戯好きな小惡魔がゐるやうだつた。卽座にその場を一人だけで飛び出して仕舞ひたい衝動と、もつと巧みな手練でどうしても倉地をおびき出さなければいけないと云ふ冷靜な思慮とが激しく戰ひ合つた。葉子は暫らくの後に辛うじてその二つの心持を混ぜ合はせる事が出來た。

「それでは駄目ね……又にしませうか。でも口惜しいわ、このいゝお天氣に……いけない、あなたの忙がしいは噓ですわ。忙がしい〳〵つて云つときながらお酒ばかり飮んでいらつしやるんだもの。ね、行きませうよ。こら見て頂戴」

さう云ひながら葉子は立ち上つて、兩手を左右に廣く開いて、袂が延びたまゝ兩腕からすらりと垂れるやうにして、稍ゝ險を持つた笑ひを笑ひながら倉地の方に近寄つて行つた。倉地もさすがに、今更らその美しさに見惚れるやうに葉子を見やつた。天才が持つと稱せられるあの青色をさへ帶びた乳白色の皮膚、それがやゝ淺黑くなつて、眼の縁に憂ひの雲をかけたやうな薄紫の暈、霞んで見えるだけにそつと刷いた白粉、際立つて赤く彩られた脣、黑い焰を上げて燃えるやうな眸、後ろにさばいて束ねられた黑漆の髮、大きな西班牙風の玳瑁の飾り櫛、くつきりと白く細い喉を攻めるやうにきりつと重ね合はされた藤色の襟、胸の凹みに一寸覗かせた、燃えるやうな緋の帶上げの外は、濡れたかとばかり體にそぐつて底光りのする紫紺色の袷、その下に愼ましく潛んで消える程薄い紫色の足袋、(かう云ふ色足袋は葉子が工夫し出した新らしい試みの一つだつた)さう云ふものが互々に溶け合つて、長閑やかな朝の空氣の中にぽつかりと、葉子と云ふ世にも稀れな程凄艷な一つの存在を浮き出してゐた。その存在の中から黑い焰を上げて燃えるやうな二つの眸が生きて動いて倉地をぢつと見やつてゐた。

倉地が物を云ふか、身を動かすか、兎に角次ぎの動作に移らうとするその前に、葉子は氣味の惡い程滑らかな足取りで、倉地の眼の先きに立つてその胸の所に、兩手をかけてゐた。

「もう私に愛想が盡きたら盡きたとはつきり云つて下さい、ね。あなたは確かに冷淡におなりね。私は自分が憎ら御座んす、自分に愛想を盡かしてゐます。さあ云つて下さい、……今……この場で、はつきり……でも死ねと仰しやい、殺すと仰しやい。私は喜んで……私はどんなにうれしいか知れないのに。……よう御座んすわ、何んでも私本當が知りたいんですから。さ、云つて下さい。私どんなきつい言葉でも覺悟してゐますから。惡びれなんかはしません

から……あなたは本當にひどい……」

葉子はそのまゝ倉地の胸に顏をあてた。而して始めの中はしめやかにしめやかに泣いてゐたが、急に激しいヒステリー風な啜り泣きに變つて、汚いものにでも觸れてゐたやうに倉地の熱氣の強い胸許から飛びしざると、寢床の上にがばと突伏して激しく聲を立てて泣き出した。

この咄嗟の激しい脅威に、近頃さう云ふ動作には慣れてゐた倉地だつたけれども、慌てて葉子に近づいてその肩に手をかけた。葉子はおびえるやうにその手から飛び退いた。そこには獸に見るやうな野性のまゝの取り亂し方が美しい衣裳にまとはれて演ぜられた。葉子の齒も爪も尖つて見えた。體は激しい痙攣に襲はれたやうに痛ましく震へをのゝいてゐた。憤怒と恐怖と嫌惡とがもつれ合ひいがみ合つてのた打ち廻るやうだつた。葉子は自分の五體が靑空遠くかきさらはれて行くのを懸命に喰ひ止める爲めに蒲團でも疊でも爪の立ち齒の立つものに獅嚙みついた。倉地は何よりもその激しい泣き聲が隣り近所の耳に這入るのを恥ぢるやうに背に手をやつてなだめようとして見たけれども、その度毎に葉子は更に泣き募つて遁れようとばかりあせつた。

「何を思ひ違ひをしとる、これ」

倉地は喉笛を開けつ放した低い聲で葉子の耳許にかう云つて見たが、葉子は理不盡にも激しく頭を振るばかりだつた。倉地は決心したやうに力任せにあらがふ葉子を抱きすくめて、その口に手をあてた。

「えゝ、殺すなら殺して下さい……下さいとも」

といふ狂氣じみた聲をしいつと制しながら、その耳許にさゝやかうとすると、葉子は我れながら夢中で、あてがつた倉地の手を骨も摧けよと嚙んだ。

「痛い……何しやがる」

倉地はいきなり一方の手で葉子の細頸を取つて自分の膝の上に乘せて締めつけた。葉子は呼吸が段々苦しくなつて行くのをこの狂亂の中にも意識して快く思つた。倉地の手で死んで行くのだなと思ふとそれが何んとも云へず美しく心安かつた。葉子の五體からはひとりでに力が拔けて行つて、震へを立てて嚙み合つてゐた齒がゆるんだ。その瞬間をすかさず倉地は嚙まれてゐた手を振りほどくと、いきなり葉子の頰げたをひし〳〵と五六度續けさまに平手で打つた。葉子はそれがまた快かつた。そのびり〳〵と神經の末梢に應へて來る感覺の爲めに體中に一種の陶醉を感ずるやうにさへ思つた。「もつとお打ちなさい」と云つてやりたかつたけれども聲は出なかつた。その癖葉子の手は本能的に自分の頰を庇ふやうに倉地の手の下るのを支へようとしてゐた。倉地は兩肘まで使つて、ばたばたと裾を蹴亂して暴れる兩脚の外には葉子を身動きも出來ないやうにしてしまつた。酒で心臟の興奮し易くなつた倉地の呼吸は霰のやうにせはしく葉子の顏にかゝつた。

「馬鹿が……靜かに物を云へば判る事だに……俺れがお前を見捨てるか見捨てないか……靜かに考へても見ろ、馬鹿が。恥曝しな眞似をしやがつて……顏を洗つて出直して來い」

さう云つて倉地は捨てるやうに葉子を寢床の上にどんと抛り投げた。

葉子の力は使ひ盡されて泣き續ける氣力さへないやうだつた。而してそのまゝ昏々として眠るやうに仰向いたまゝ眼を閉ぢてゐた。倉地は肩で激しく息氣をつきながら傷ましく取り亂した葉子の姿をまんじりと眺めてゐた。

一時間程の後には葉子は然したつた今泣き起された亂脈騷ぎをけろりと忘れたもののやうに快活で無邪氣になつてゐた。而して二人は

樂しげに下宿から新橋驛に車を走らした。葉子が薄暗い婦人待合室の色の剝げたモロッコ皮のディヴンに腰かけて、倉地が切符を買つて來るのを待つてる間、そこに居合はせた貴婦人と云ふやうな四五人の人達は、すぐ今までの話を捨ててしまつて、こそ〱と葉子に就いて私語き交はすらしかつた。高慢と云ふのでもなく謙遜といふのでもなく、極めて自然に落ち着いて眞直に腰かけたまゝ、柄の長い白の琥珀のパラゾルの握りに手を乘せてゐながら、葉子にはその貴婦人達の中の一人がどうも見知り越しの人らしく感ぜられた。或は女學校にゐた時に葉子を崇拜してその風俗をすら眞似た連中の一人であるかとも思はれた。葉子がどんな事を噂されてゐるかは、その婦人に耳打ちされて、見るやうに見ないやうに葉子を竊み見る他の婦人達の眼色で想像された。

「お前達は惘れ返りながら心の中の何處かで私を羨んでゐるのだらう。お前達の、その物怯ぢしながらも金目をかけた派手作りな衣裳や化粧は、社會上の位置に恥ぢないだけの作りなのか、良人の眼に快く見えよう爲めなのか。そればかりなのか。お前達を見る路傍の男達の眼は勘定に入れてゐないのか。……臆病卑怯な僞善者共め！」

葉子はそんな人間からは一段も二段も高い所にゐるやうな氣位を感じた。自分の扮粧がその人達のどれよりも立ち勝つてゐる自信を十二分に持つてゐた。葉子は女王のやうに誇りの必要もないと云ふ自らの鷹揚を見せて坐つてゐた。

そこに一人の婦人が這入つて來た。田川夫人――葉子はその影を見るか見ないかに見て取つた。然し顏色一つ動かさなかつた。（倉地以外の人に對しては葉子はその時でも可なり勝れた自制力の持主だつた　田川夫人は元よりそこに葉子がゐるようなどとは思ひもかけないので、葉子の方に一寸眼をやりながらも一向に氣付かずに、

「お待たせ致しまして濟みません」

と云ひながら貴婦人等の方に近寄つて行つた。互の挨拶が濟むか濟まない中に、一同は田川夫人によりそつてひそ〱と私語いた。葉子は靜かに機會を待つてゐた。ぎよつとした風で、葉子に後ろを向けてゐた田川夫人は、肩越しに葉子の方を振り返つた。待ち設てゐた葉子は今まで正面に向けてゐた顏をしとやかに向けかへて田川夫人と眼を見合はした。葉子の眼は憎むやうに笑つてゐた。田川夫人の眼は笑ふやうに憎んでゐた。「生意氣な」……葉子は田川夫人が眼を外らさない中に、すつくと立つて田川夫人の方に寄つて行つた。この不意打ちに度を失つた夫人は（明らかに葉子が眞紅になつて顏を伏せるとばかり思つてゐたらしく、居合はせた婦人達もその樣を見て、容貌でも服裝でも自分等を蹴落さうとする葉子に對して溜飲を下ろさうとしてゐるらしかつた）少し色を失つて、そつぽを向かうとしたけれどももう遲かつた。葉子は夫人の前に輕く頭を下げてゐた　夫人も已むを得ず挨拶の眞似をして、高飛車に出る積りらしく、

「あなたは誰方？」

いかにも横柄に魁けて口を切つた。

「早月葉で御座います」

葉子は對等の態度で惡びれもせずから受けた。

「繪島丸では色々お世話樣になつて難有う存じました。あのう……報正新報も拜見させていただきました。（夫人の顏色が葉子の言葉一つ毎に變るのを葉子は珍らしいものでも見るやうにまじ〱と眺めながら）大層面白う御座いました事。よくあんなに委しく御通信になりましてねえ　お忙がしく入らつしやいましたらうに。……倉地さんも折よくこゝに來合はせていらつ

しやいますから……今一寸切符を買ひに……お連れ申しませうか」

田川夫人は見る／＼眞青になつてしまつてゐた。折返して云ふべき言葉に窮してしまつて、拙くも、

「私はこんな所であなたとお話するのは存じがけません。御用でしたら宅へお出でを願ひませう」

と云ひつゝ今にも倉地がそこに現はれて來るかと只管それを怖れる風だつた。葉子はわざと夫人の言葉を取り違へたやうに、

「いゝえどう致しまして私こそ……一寸お待ち下さい直ぐ倉地さんをお呼び申して參りますから」

さう云つてどん／＼待合所を出てしまつた。後に殘つた田川夫人がその貴婦人達の前でどんな顏をして當惑したか、それを葉子は眼に見るやうに想像しながら惡戯者らしくほくそ笑んだ。丁度そこに倉地が切符を買つて來かゝつてゐた。

一等の客室には他に二三人の客がゐるばかりだつた。田川夫人以下の人達は誰れかの見送りか出迎へにでも來たのだと見えて、汽車が出るまで影も見せなかつた。葉子は早速倉地に事の始終を話して聞かせた。而して二人は思ひ存分胸をすかして笑つた。

「田川の奧さん可哀さうにまだあすこで今にもあなたが來るかともじ／＼してゐるでせうよ、外の人達の手前あゝ云はれてこそ／＼と逃げ出す譯にも行かないし」

「俺れが一つ顏を出して見せれば又面白かつたにな」

「今日は妙な人に遇つて仕舞つたから又屹度誰れかに遇ひますよ。奇妙ねえ、お客様が來たとなると不思議にたて續くし……」

「不仕合せなんぞも來出すと束になつて來くさるて」

倉地は何か心ありげにから云つて澁い顏をしながらこの笑ひ話を結んだ。

葉子は今朝の發作の反動のやうに、田川夫人の事があつてから唯々何となく心が浮々して仕やうがなかつた。若しそこに客がゐなかつたら、葉子は子供のやうに單純な愛嬌者になつて、倉地に澁い顏ばかりはさせておかなかつたらう。「どうして世の中には何處にでも他人の邪魔に來ましたと云はんばかりにから澤山人がゐるんだらう」と思つたりした。それすらが葉子には笑ひの種となつた。自分達の向座にしかつめらしい顏をして老年の夫婦者が坐つてゐるのを、葉子は暫らくまじ／＼と見やつてゐたが、その人達のしかつめらしいのが無性にグロテスクな不思議なものに見え出して、とう／＼我慢がし切れずに、ハンケチを口にあてていゝいゝきゆつきゆつと噴き出してしまつた。

三十七

天心に近くぽつりと一つ白く湧き出た雲の色にも形にもそれと知られるやうな闌はな春が、所々の別莊の建物の外には見渡すかぎり古く寂びれた鎌倉の谷々にまで溢れてゐた。重い砂土の白ばんだ道の上には落椿が一重櫻の花とまじつて無殘に落ち散つてゐた。櫻の梢には紅味を持つた若葉がきら／＼と日に輝いて、淺い影を地に落した。名もない雜木までが美しかつた。蛙の聲が眠むく田圃の方から聞こえて來た。休暇でない故か、思ひの外に人の雜閙もなく、時折り、同じ花簪を、女は髮に男は襟にさして先達らしいのが紫の小旗を持つた、遠い所から春を逐つて經めぐつて來たらしい田舍の人達の群れが、酒の氣も借らずにしめやかに話し合ひながら通るのに行き遇ふ位のものだつた。

倉地も汽車の中から自然に氣分が晴れたと見

えて、いかにも屈託なくなつて見えた。二人は停車場の附近にある或る小綺麗な旅館を兼ねた料理屋で中食をしたゝめた。日朝様ともどんぶく様とも云ふ寺の屋根が庭先きに見えて、そこから眼病の祈禱だと云ふ團扇太鼓の音がどんぶくどんぶくと單調に聞こえるやうな所だつた。東の方はその名さながらの屛風山が若葉で花よりも美しく裝はれて霞んでゐた。短く美しく苅り込まれた芝生の芝はまだ萌えてはゐなかつたが、處疎らに立ち連なつた小松は綠をふきかけて、八重櫻はのぼせたやうに花で首垂れてゐた。もう袷一枚になつて、そこに食物を運んで來る女中は襟前を寬げながら夏が來たやうだと云つて笑つたりした。

「こゝはいゝわ。今日はこゝで宿りませう」

葉子は計畫から計畫で頭を一杯にしてゐた。而してそこに用らないものを預けて、江ノ島の方まで車を走らした。

歸りには極樂寺坂の下で二人とも車を捨てて海岸に出た。もう日は稻村ケ崎の方に傾いて砂濱はやゝ暮れ初めてゐた。小坪の鼻の崕の上に若葉に包まれてたつた一軒建てられた西洋人の白ペンキ塗りの別莊が、夕日を受けて綠色に染めたコケットの、髮の中のダイヤモンドのやうに輝いてゐた。その崕下の民家からは炊煙が夕靄と一緒になつて海の方に棚引いてゐた。波打際の砂はいゝ程に濕つて葉子の吾妻下駄の齒を吸つた。二人は別莊から散歩に出て來たらしい幾組かの上品な男女の群れと出遇つたが、葉子は自分の容貌なり服裝なりが、そのどの群れのどの人にも立ち勝つてゐるのを意識して、輕い誇りと落ち付きを感じてゐた。倉地もさう云ふ女を自分の伴侶とするのを强ち無頓着には思はぬらしかつた。

「誰れかひよんな人に遇ふだらうと思つてゐましたが甘く誰れにも遇はなかつてね。向うの小坪の人家の見える所まで行きませうね。而して光明寺の櫻を見て歸りませう。さうすると丁度お腹がいゝ空き具合になるわ」

倉地は何んとも答へなかつたが、無論承知でゐるらしかつた。葉子はふと海の方を見て倉地に又口を切つた。

「あれは海ね」

「仰せの通り」

倉地は葉子が時々途徹もなく判り切つた事を少女見たいな無邪氣さで云ふ、又それが始まつたといふやうに澁さうな笑ひを片頰に浮べて見せた。

「私もう一度あの眞只中に乘り出して見たい」

「してどうするのだい」

倉地もさすがに長かつた海の上の生活を遠く思ひやるやうな顏をしながら云つた。

「たゞ乘り出して見たいの。どーつと見界もなく吹きまく風の中を、大波に思ひ存分搖られながら、顚覆へりさうになつては立ち直つて切り拔けて行くあの船の上の事を思ふと、胸がどきどきする程もう一度乘つて見たくなりますわ。こんな所嫌やねえ、住んで見ると」

さう云つて葉子はパラソルを開いたまゝ柄の先きで白い砂をざく／＼と刺し通した。

「あの寒い晩の事、私が甲板の上で考へ込んでゐた時、あなたが灯をぶら下げて岡さんを連れて、やつて入らしつたあの時の事などを私は譯もなく思ひ出しますわ。あの時私は海でなければ聞けないやうな音樂を聞いてゐましたわ。陸の上にはあんな音樂は聞かうと云つたつてありやしない。おーい、おーい、おい、おい、おい、おーい……あれは何？」

「何んだそれは」

倉地は怪訝な顏をして葉子を振り返つた。

「あの聲」

「どの」

一海の聲……人を呼ぶやうな……お互で呼び合ふやうな」
「何んにも聞こえやせんぢやないか」
「その時聞いたのよ……こんな淺い所では何が聞こえますものか」
「俺れは永年海の上で暮したが、そんな聲は一度だつて聞いた事はないわ」
「さうお。不思議ね。音樂の耳のない人には聞こえないのか知ら。確かに聞こえましたよ、あの時に……それは氣味の惡いやうな物凄いやうな……謂はばね、一緒になるべき筈なのに一緒になれなかつた……その人達が幾億萬と海の底に集まつてゐて、銘々死にかけたやうな低い音で、おーい、おーいと呼び立てる、それが一緒になつてあんなぼんやりした大きな聲になるかと思ふやうなそんな氣味の惡い聲なの……何處かで今でもその聲が聞こえるやうよ」
「木村がやつてゐるのだらう」
さう云つて倉地は高々と笑つた。葉子は妙に笑へなかつた。而してもう一度海の方を眺めやつた。眼も屆かないやうな遠くの方に、大島が山の腰から下は夕靄にぼかされて無くなつて、上の方だけがへの字を描いてぼんやりと空に浮んでゐた。

二人は何時か滑川の川口の所まで來着いてゐた。稻瀨川を渡る時、倉地は、橫濱埠頭で葉子にまつはる若者にしたやうに、葉子の上體を右手に輕々とかゝへて、苦もなく細い流れを跳り越してしまつたが、滑川の方はさうは行かなかつた。二人は川幅の狹さうな所を尋ねて段々上流の方に流れに沿うて上つて行つたが、川幅は廣くなつて行くばかりだつた。
「面倒臭い、歸りませうか」
大きな事を云ひながら、光明寺までには半分道も來ない中に、下駄全體が滅入りこむやうな砂道で疲れ果てて仕舞つた葉子はかう云ひ出した。
「あすこに橋が見える。兎に角あすこまで行つて見ようや」
倉地はさう云つて、海岸線に沿うてむつくり盛れ上つた砂丘の方に續く砂道を昇り始めた。葉子は倉地に手を引かれて息氣をせい〳〵云はせながら、筋肉が强直するやうに疲れた足を運んだ。自分の健康の衰退が今更にはつきり思はせられるやうなそれは疲れ方だつた。今にも破裂するやうに心臟が鼓動した。
「一寸待つて、辨慶蟹を踏みつけさうで步けやしませんわ」
さう葉子は申し譯らしく云つて幾度か足を停めた。實際その邊には紅い甲良を背負つた小さな蟹がいかめしい鋏を上げて、ざわ〳〵と音を立てる程夥しく橫行してゐた。それが如何にも晚春の夕暮れらしかつた。
砂丘を上り切ると材木座の方に續く道路に出た。葉子はどうも不思議な心持で、濱から見えてゐた亂橋の方に行く氣になれなかつた。然し倉地がどん〳〵そつちに向いて步き出すので、少しすねたやうにその手に取りすがりながらも、いつれ合つて人氣のないその橋の上まで來てしまつた。
橋の手前の小さな掛茶屋には主人の婆さんが葭で圍つた薄暗い小部屋の中で、こそ〳〵と店をたゝむ支度でもしてゐるだけだつた。
橋の上から見ると、滑川の水は輕く薄濁つて、まだ芽を吹かない兩岸の枯葦の根を靜かに洗ひながら音も立てずに流れてゐた。それが向うに行くと吸ひ込まれたやうに砂の盛れ上つた後ろに隱れて、又その先きに光つて現はれて、穩やかなリヅムを立てて寄せ返す海邊の波の中に溶けこむやうに注いでゐた。
ふと葉子は眼の下の枯葦の中に動くものがあるのに氣が付いて見ると、大きな麥桿の海水帽

を被つて、杭に腰かけて、釣竿を握つた男が、帽子の庇の下から眼を光らして葉子をぢつと見つめてゐるのだつた。葉子は何んの氣なしにその男の顔を眺めた。

木部孤笻だつた。

帽子の下に隠れてゐる故か、その顔は一寸見忘れる位年がいつてゐた。而して服裝からも、樣子からも落魄といふやうな一種の氣分が漂つてゐた。木部の顔は假面のやうに冷然としてゐたが、釣竿の先きは不注意にも水に浸つて、釣絲が女の髪の毛を流したやうに水に浮いて輕く慄へてゐた。

さすがの葉子も胸をどきんとさせて思はず身を退らせた。「おーい、おい、おい、おい、おーい」それがその瞬間に耳の底をすーつと通つてすーつと行方も知らず過ぎ去つた。怯づ怯づと倉地を窺ふと、倉地は何事も知らぬげに、暖かに暮れて行く青空を振り仰いで眼一杯に眺めてゐた。

「歸りませう」

葉子の聲は慄へてゐた。倉地は何んの氣なしに葉子を顧みたが、

「寒くでもなつたか、脣が白いぞ」

と云ひながら欄干を離れた。二人がその男の後ろを見せて五六歩歩み出すと、

「一寸お待ち下さい」

と云ふ聲が橋の下から聞えた。倉地は始めてそこに人のゐたのに氣が付いて、眉をひそめながら振り返つた。ざわ〳〵と葦を分けながら小路を登つて來る跫音がして、ひよつこり眼の前に木部の姿が現はれ出た。葉子はその時は然し凡てに對する身構へを十分にしてしまつてゐた。

木部は少し馬鹿丁寧な位に倉地に對して帽子を取ると、すぐ葉子に向いて、

「不思議な所でお目に懸りましたね。暫らく――」

と云つた。一年前の木部から想像してどんな激情的な口調で呼びかけられるかも知れないと危ぶんでゐた葉子は、案外冷淡な木部の態度に安心もし、不安も感じた。木部はどうかすると居直るやうな事をしかねない男だと葉子は豫て思つてゐたからだ。然し木部といふ事を先方から云ひ出すまでは包めるだけ倉地には事實を包んで見ようと思つて、唯〻にこやかに、

――こんな所でお目に懸らうとは……私も本當に驚いてしまひました。でもまあ本當にお珍らしい……只今こちらの方にお住ひで御座いますの？」

――住ふといふ程もない……くすぶりこんでゐますよハヽヽヽ」

と木部は虚ろに笑つて、鍔の廣い帽子を書生つぽらしく阿彌陀に被つた。と思ふと又急いで取つて、

――あんな所からいきなり飛び出して來てかう馴れ〳〵しく早月さんにお話をしかけて變にお思ひでせうが、僕は下らんやくざ者で、これでも元は早月家には色々御厄介になつた男です。申上げる程の名もありませんから、まあ御覧の通りの奴です。……どちらにお出でです」

と倉地に向いて云つた。その小さな眼には勝れた才氣と、負け嫌ひらしい氣性とが迸つてはゐたけれども、ぢぢむさい顎髯と、伸びるまゝに伸ばした髪の毛とで、葉子でなければその特徴は見えないらしかつた。倉地は何處の馬の骨かと思ふやうな調子で、自分の名を名乗る事は固よりせずに、輕く帽子を取つて見せただけだつた。而して、

――光明寺の方へでも行つて見ようかと思つたのだが、河が渡れんで……この橋を行つても行かれますだらう」

三人は橋の方を振り返つた。眞直な土堤道が白く山の際の方まで續いてゐた。

――行けますがね、それは濱傳ひの方が趣があり

ますよ。防風草でも摘みながらいらつしやい。河も渡れます、御案内しませう」
と云つた。葉子は一時も早く木部から遁れたくもあつたが、同時にしんみりと一別以來の事などを語り合つて見たい氣もした。いつか汽車の中で遇つてこれが最後の對面だらうと思つた、あの時からすると木部はずつとさばけた男らしくなつてゐた。その服裝がいかにも生活の不規則なのと窮迫してゐるのを思はせると、葉子は親身な同情にそゝられるのを拒む事が出來なかつた。
倉地は四五歩先立つて、その後から葉子と木部とは間を隔てて竝びながら、父辨慶蟹のうざうざゐる砂道を濱の方に降りて行つた。
「あなたの事は大抵噂や新聞で知つてゐましたよ……人間てものはをかしなもんですね。……私はあれから落伍者です。何をして見ても成り立つた事はありません。妻も子供も里に返してしまつて今は一人でこゝに放浪してゐます。毎日釣をやつてね……あゝやつて水の流れを見てゐると、それでも晩飯の酒の肴位なものは釣れて來ますよハヽヽヽヽ」
木部は又虚ろに笑つたが、その笑ひの響きが傷口にでも應へたやらに急に默つてしまつた。砂に喰ひ込む二人の下駄の音だけが聞こえた。
「然しこれでゐて全くの孤獨でもありませんよ。ついこの間から知り合ひになつた男だが、砂山の砂の中に酒を埋めておいて、ぶらりとやつて來てそれを飲んで醉ふのを樂しみにしてゐるのと知り合ひになりましてね……そいつの人生觀が馬鹿に面白いんです。徹底した運命論者ですよ。酒を呑んで運命論を吐くんです。丸で仙人ですよ」
倉地はどん〳〵歩いて二人の話聲が耳に入らぬ位遠ざかつた。葉子は木部の口から例の感傷的な言葉が今出るか今出るかと思つて待つてゐたけれども、木部には些かもそんな風はなかつた。笑ひばかりでなく、凡てに虚ろな感じがする程無感情に見えた。
「あなたは本當に今何をなさつて入らつしやいますの」
と葉子は少し木部に近寄つて尋ねた。木部は近寄られただけ葉子から遠退いて又虚ろに笑つた。
「何をするもんですか。人間に何が出來るもんですか。……もう春も末になりましたね」
途徹もない言葉を強ひてくつ附けて木部はそのよく光る眼で葉子を見た。而してすぐその眼を返して、遠ざかつた倉地をこめて遠く海と空との境目に眺め入つた。
「私あなたとゆつくりお話がして見たいと思ひますが……」
かう葉子はしんみり竊むやうに云つて見た。木部は少しもそれに心を動かされないやうに見えた。
「さう……それも面白いかな。……私はこれでも時折はあなたの幸福を祈つたりしてゐますよ、をかしなもんですね。ハヽヽ（葉子がその言葉につけ入つて何か云はうとするのを木部は悠々とおつかぶせて）あれが、あすこに見えるのが大島です。ぽつんと一つ雲か何かのやうに見えるでせう空に浮いて……大島つて云ふ伊豆の先きの離れ島です。あれが私の釣をする所から正面に見えるんです。あれでゐて、日によつて色がさまざまに變ります。どうかすると噴煙がぽーつと見える事もありますよ」
又言葉がぽつんと切れて沈默が續いた。下駄の音の外に波の音も段々と近く聞こえ出した。葉子は唯々胸が切なくなるのを覺えた。もう一度どうしてもゆつくり木部に遇ひたい氣になつてゐた。
「木部さん……あなたさぞ私を恨んでいらつ

しやいませうね。……けれども私あなたにどうしても申上げておきたい事がありますの。何んとかして一度私に會つて下さいません？その中に、私の番地は……」

「お會ひしませう『その中に』……その中にはいい言葉ですね。その中に……。話があるからと女に云はれた時には、話を期待しないで抱擁か虛無かを覺悟しろつて名言がありますぜ、ハヽヽヽ」

「それは餘りな仰しやり方ですわ」

葉子は極めて冗談のやうに又極めて眞面目のやうにかう云つて見た。

「餘りか餘りでないか……兎に角名言には相違ありますまい、ハヽヽヽ」

木部は又虛ろに笑つたが、又痛い所にでも觸れたやうに突然笑ひやんだ。

倉地は波打際近くまで來ても渡されさうもないので遠くからこつちに振り向いて、むづかしい顏をして立つてゐた。

「どれお二人に橋渡しをして上げませうかな」

さう云つて木部は川邊の葦を分けて暫らく姿を隱してゐたが、やがて小さな田舟に乘つて竿をさして現はれて來た。その時葉子は木部が釣道具を持つてゐないのに氣がついた。

「あなた釣竿は」

「釣竿ですか……釣竿は水の上に浮いてるでせう。いまにこゝまで流れて來るか……來ないか……」

さう應へて案外上手に舟を漕いだ。倉地は行き過ぎただけを急いで取つて返して來た。而して三人は危かしく立つたまゝ舟に乘つた。倉地は木部の前も構はず脇の下に手を入れて葉子を抱へた。木部は冷然として竿を取つた。三突きほどで多愛なく舟は向う岸に着いた。倉地が逸早く岸に飛び上つて、手を延ばして葉子を助けようとした時、木部が葉子に手を貸してゐたので、葉子はすぐにそれを掴んだ。思ひ切り力を籠めた爲めか、木部の手が舟を漕いだ爲めだつたか、兎に角二人の手は握り合はされたまゝ小刻みに烈しく震へた。

「やつ、どうも難有う」

倉地は葉子の上陸を助けてくれた木部にから禮を云つた。

木部は舟からは上らなかつた。而して鍔廣の帽子を取つて、

「それぢやこれでお別れします」

と云つた。

「暗くなりましたから、お二人とも足許に氣をおつけなさい。左樣なら」

と附け加へた。

三人は相當の挨拶を取り交はして別れた。一町程來てから急に行手が明るくなつたので、見ると光明寺裏の山の端に、夕月が濃い雲の切れ目から姿を見せたのだつた。葉子は後ろを振り返つて見た。紫色に暮れた砂の上に木部が舟を葦間に漕ぎ返して行く姿が影繪のやうに黑く眺められた。葉子は白琥珀のパラゾルをぱつと開いて、倉地にはいたづらに見えるやうに振り動かした。

三四町來てから倉地が今度は後ろを振り返つた。もうそこには木部の姿はなかつた。葉子はパラゾルを畳まうとして思はず涙ぐんでしまつてゐた。

「あれは一體誰れだ」

「誰れだつていゝぢやありませんか」

暗さにまぎれて倉地に涙は見せなかつたが、葉子の言葉は痛ましく癇走つてゐた。

「ローマンスの澤山ある女はちがつたものだな」

「えゝ、その通り……あんな乞食見たいな見つともない戀人も持つた事があるのよ」

「さすがはお前だよ」

―だから愛想が盡きたでせう―突如として又云ひやうのない淋しさ、哀しさ、口惜しさが暴風のやうに襲つて來た。又來たと思つてもそれはもう遲かつた。砂の上に突伏して、今にも絕え入りさうに身もだえする葉子を、倉地は聞こえぬ程度に舌打ちしながら介抱せねばならなかつた。

その夜旅館に歸つてからも葉子はいつまでも眠らなかつた。そこに來て働く女中達を一人一人突慳貪に厳しくたしなめた。仕舞には一人として寄りつくものが無くなつて仕舞ふ位。倉地も始めの中はしぶ〳〵つき合つてゐたが、遂には勝手にするがいゝと云はんばかりに座敷を代へて獨りで寢てしまつた。

春の夜は唯ゞ、事もなくしめやかに更けて行つた。遠くから聞こえて來る蛙の鳴き聲の外には、日勝樣の森あたりで啼くらしい梟の聲がするばかりだつた。葉子とは何んの關係もない夜鳥でありながら、その聲には人を馬鹿にし切つたやうな、それでゐて聞くに堪へない程淋しい響きが潛んでゐた。ほう、ほう……ほう、ほうほうと間違に單調に同じ木の枝と思はしい所から聞こえてゐた。人々が寢鎭まつて見ると、憤怒の情は何時か消え果てて、云ひやうのない寂寞がその後に殘つた。

葉子のする事云ふ事は一つ〳〵葉子を倉地から引き離さうとするものばかりだつた。今夜も倉地が葉子から待ち望んでゐたものを葉子は明らかに知つてゐた。而かも葉子は譯の分らない怒りに任せて自分の思ふまゝを振舞つた結果、倉地には不快極まる失望を與へたに違ひない。かうしたまゝで日がたつに從つて、倉地は否應なしに更に新らしい性的興味の對象を求めるやうになるのは目前の事だ。現に愛子はその候補者の一人として倉地の眼には映り始めてゐるのではないか。葉子は倉地との關係を始めから考へ辿つて見るに連れて、どうしても間違つた方向に深入りしたのを悔いないではゐられなかつた。然し倉地を手なづける爲めにはあの道を擇ぶより仕方がなかつたやうにも思へる。倉地の性格に缺點があるのだ。さうではない。倉地に愛を求めて行つた自分の性格に缺點があるのだ。……そこまで理窟らしく理窟を辿つて來て見ると、葉子は自分といふものが踏みにじつても飽き足りない程いやな者に見えた。

「何故私は木部を捨て木村を苦しめなければならないのだらう。何故木部を捨てた時に私は心に望んでゐるやうな道を驀地に進んで行く事が出來なかつたのだらう。私を木村に强ひて押し附けた五十川の小母さんは惡い……私の恨みはどうしても消えるものか。……と云つておめおめとその策略に乘つてしまつた私は何んといふ腑甲斐ない女だつたのだらう。倉地にだけは私は失望したくないと思つた。今までの凡ての失望をあの人で全部取り返してまだ餘り切るやうな喜びを持たうとしたのだつた。私は倉地とは離れてはゐられない人間だと確かに信じてゐた。而して私の持つてる凡てを……醜いものの凡てをも倉地に與へて悲しいとも思はなかつたのだ。私は自分の命を倉地の胸にたゝきつけた。それだのに今は何が殘つてゐる……何が殘つてゐる……。今夜かぎり私は倉地に見放されるのだ。この部屋を出て行つてしまつた時の冷淡な倉地の顏!……私は行かう。これから行つて倉地に詫びよう、奴隸のやうに疊に頭をこすり附けて詫びよう……さうだ。……然し倉地が冷刻な顏をして私の心を見も返らなかつたら……私は生きてる間にそんな倉地の顏を見る勇氣はない。……木部に詫びようか……木部は居所さへ知らさうとはしないのだもの……」

葉子は瘦せた肩を痛ましく震はして、倉地から絕緣されてしまつたもののやうに、淋しく哀し

く涙の涸れるかと思ふまで泣くのだつた。靜まり切つた夜の空氣の中に、時々鼻をかみながらすゝり上げ〳〵泣き伏す痛ましい聲だけが聞こえた。葉子は自分の聲につまされて猶更ら悲哀から悲哀のどん底に沈んで行つた。

稍〻暫らくしてから葉子は決心するやうに、手近にあつた硯箱と料紙とを引き寄せた。而して震へる手先を強ひて繰りながら簡單な手紙を乳母にあてゝ書いた。それには乳母とも定子とも斷然緣を切るから以後他人と思つてくれ。若し自分が死んだらこゝに同封する手紙を木部の所に持つて行くがいゝ。木部は屹度どうしてでも定子を養つてくれるだらうからと云ふ意味だけを書いた。而して木部あての手紙には、

「定子はあなたの子です。その顏を一目御覽になつたらすぐお分りになります。私は今まで意地からも定子は私一人の子で私一人のものとする積りでゐました。けれども私が世にないものとなつた今は、あなたはもう私の罪を許して下さるかとも思ひます。せめては定子を受入れて下さいませう。

葉子の死んだ後

憐れなる定子のマヽより

定子のお父樣へ」

と書いた。涙は卷紙の上に留度なく落ちて字をにじました。東京に歸つたら溜めて置いた預金の全部を引出してそれを爲替にして同封する爲めに封を閉ぢなかつた。

最後の犧牲……今までとつおいつ捨て兼ねてゐた最愛のものを最後の犧牲にして見たら、多分は倉地の心がもう一度自分に戻つて來るかも知れない。葉子は荒神に最愛のものを生贄として願ひを聽いて貰はうとする太古の人のやうな必死な心になつてゐた。それは胸を張り裂くやうな犧牲だつた。葉子は自分の眼からも英雄的に見えるこの決心に感激して又新らしく泣き崩れた。

「どうか、どうか、……どうーか」

葉子は誰れにともなく手を合はして、一心に念じておいて、雄々しく涙を押し拭ふと、そつと座を立つて、倉地の寢てゐる方へと忍びよつた。廊下の明りは大半消されてゐるので、硝子窓から朧ろにさし込む月の光が便りになつた。廊下の半分がた燐の燃えたやうなその光の中を、瘦せ細つて一層脊丈けの伸びて見える葉子は、影が歩むやうに音もなく靜かに歩みながら、そつと倉地の部屋の襖を開いて中に這入つた。薄暗く點つた有明けの下に倉地は何事も知らぬげに快く眠つてゐた。葉子はそつとその枕許に座を占めた。而して倉地の寢顏を見守つた。

葉子の眼にはひとりでに涙が湧くやうに溢れ出て、厚ぼつたいやうな感じになつた唇は我れにもなくわな〳〵と震へて來た。葉子はさうしたまゝで默つてなほも倉地を見續けてゐた。葉子の眼に溜まつた涙の爲めに倉地の姿は見る見るにじんだやうに輪郭がぼやけてしまつた。葉子は今更ら人が違つたやうに心が弱つて、受け身にばかりならずにはゐられなくなつた自分が悲しかつた。何んと云ふ情けない可哀さうな事だらう。さう葉子はしみ〴〵と思つた。

段々葉子の涙はすゝり泣きに代つて行つた。倉地が眠りの中でそれを感じたらしく、うるささうに呻き聲を小さく立てて寢返りを打つた。葉子はぎよつとして息氣をつめた。

然しすぐすゝり泣きは又歸つて來た。葉子は何事も忘れ果てて、倉地の床の側にきちんと坐つたまゝいつまでも〳〵泣き續けてゐた。

三十八

「何をさう怯づ〳〵してゐるのかい。そのボタンを後ろにはめてくれさへすればそれでいゝの

だに」

倉地は倉地にしては特にやさしい聲でかう云つた、ワイシャツを着ようとしたまゝ葉子に背を向けて立ちながら。葉子は飛んでもない失策でもしたやうに、シャツの背部につけるカラーボタンを手に持つたまゝおろ／＼してゐた。

「ついシャツを仕替へる時それだけ忘れてしまつて……」

「言ひ譯なんぞはいゝわい。早く頼む」

「はい」

葉子はしとやかにさう云つて寄り添ふやうに倉地に近寄つてそのボタンをボタン孔に入れようとしたが、糊が硬いのと、氣おくれがしてゐるので一寸は這入りさうになかつた。

「濟みませんが一寸脱いで下さいましな」

「面倒だな、このまゝで出來ようが」

葉子はもう一度試みた。然し思ふやうには行かなかつた。倉地はもう明らかにいら／＼し出してゐた。

「駄目か」

「まあ一寸」

「出せ、貸せ俺れに。何んでもない事だに」

さう云つてくるりと振返つて一寸葉子を睨みつけながら、ひつたくるやうにボタンを受取つた。而して又葉子に後ろを向けて自分でそれを嵌めようとかゝつた。然し中々うまく行かなかつた。見る／＼倉地の手は烈しく震へ出した。

「おい、手傳つてくれてもよからうが」

葉子が慌てて手を出すと機みにボタンは疊の上に落ちてしまつた。葉子がそれを拾はうとする間もなく、頭の上から倉地の聲が雷のやうに鳴り響いた。

「馬鹿！　邪魔をしろと云ひやせんぞ」

葉子はそれでも何處までも優しく出ようとした。

「御免下さいね、私お邪魔なんぞ……」

「邪魔よ。これで邪魔でなくて何んだ……ええ、そこぢやありやせんよ。そこに見えとるぢやないか」

倉地は口を尖らして顎を突き出しながら、どしんと足を擧げて疊を踏み鳴らした。

葉子はそれでも我慢した。而してボタンを拾つて立ち上ると倉地はもうワイシャツを脱ぎ捨ててゐる所だつた。

「胸糞の惡い……おい日本服を出せ」

「襦袢の襟がかけずにありますから……洋服で我慢して下さいましね」

葉子は自分が持つてゐると思ふ程の媚びをある限り眼に集めて歎願するやうにかう云つた。

「お前には頼まんでよ……愛ちやん」

倉地は大きな聲で愛子を呼びながら階下の方に耳を澄ました。葉子はそれでも根かぎり我慢しようとした。階子段をしとやかに昇つて愛子がいつものやうに柔順に部屋に這入つて來た。

倉地は急に相好を崩してにこやかになつてゐた。

「愛ちやん頼む、シャツにそのボタンをつけておくれ」

愛子は何事の起つたかを露知らぬやうな顏をして、男の肉感をそゝるやうな堅肉の肉體を美しく折り曲げて、雪白のシャツを手に取り上げるのだつた。葉子がちやんと倉地にかしづいてそこにゐるのを全く無視したやうなづう／＼しい態度が、ひがんでしまつた葉子の眼には憎々しく映つた。

「餘計な事をおしでない」

葉子はとう／＼かつとなつて愛子をたしなめながらいきなり手にあるシャツをひつたくつてしまつた。

「貴樣は……俺れが愛ちやんに頼んだに何故餘計な事をしくさるんだ」

とさう云つて威丈高になつた倉地には葉子はも

ら眼もくれなかつた。愛子ばかりが葉子の眼には見えてゐた。

「お前は下にゐればそれでいゝ人間なんだよ。おさんどんの仕事も碌々出來はしない癖に餘計な所に出しやばるもんぢやない事よ。……下に行つてお出で」

愛子はかうまで姉にたしなめられても、逆ふでもなく怒るでもなく、默つたまゝ柔順に、多恨な眼で姉をぢつと見て靜々とその座を外づしてしまつた。

こんなもつれ合つたいさかひがともすると葉子の家で繰返されるやうになつた。獨りになつて氣が鎭まると葉子は心の底から自分の狂暴な振舞ひを悔いた。而して氣を取直した積りで何處までも愛子をいたはつてやらうとした。愛子に愛情を見せる爲めには義理にも貞世につらく當るのが當然だと思つた。而して愛子の見てゐる前で、愛するものが愛する者を憎んだ時ばかりに見せる殘虐な呵責を貞世に與へたりした。葉子はそれが理不盡極まる事だとは知つてゐながら、さう偏頗に傾いて來る自分の心持を何うする事も出來なかつた。それのみならず葉子には自分の鬱憤を漏らす爲めの對象が是非一つ必要になつて來た。人でなければ動物、動物でなければ草木、草木でなければ自分自身に何かなしに傷害を與へてゐなければ氣が休まなくなつた。庭の草などを摑んでゐる時でも、ふと氣が付くと葉子はしやがんだまゝ一莖の名もない草をたつた一本摘みとつて、眼に涙を一杯溜めながら爪の先きで寸々に切り虐んでゐる自分を見出したりした。

同じ衝動は葉子を驅つて倉地の抱擁に自分自身を思ふ存分虐げようとした。そこには倉地の愛を少しでも多く自分に繋ぎたい欲求も手傳つてはゐたけれども、倉地の手で極度の苦痛を感ずる事に不滿足極まる滿足を見出さうとしてゐたのだ。精神も肉體も甚しく病に蝕まれた葉子は抱擁によつての有頂天な歡樂を味ふ資格を失つてから可なり久しかつた。そこには唯ゞ地獄のやうな呵責があるばかりだつた。凡てが終つてから葉子に殘るものは、嘔吐を催すやうな肉體の苦痛と、強ひて自分を忘我に誘はうと藻搔きながら、それが裏切られて無益に終つた、その後に襲つて來る唾棄すべき倦怠ばかりだつた。倉地が葉子のその悲慘な無感覺を分け前して喩へやうもない憎惡を感ずるのは勿論だつた。葉子はそれを知ると更に云ひ知れない便りなさを感じて又烈しく倉地に挑みかゝるのだつた。倉地は見る〳〵一歩々々葉子から離れて行つた。而して益々氣分は荒んで行つた。

「貴樣は俺れに厭きたな。男でも作り居つたんだらう」

さう唾でも吐き捨てるやうに忌々しげに倉地がいゝあらはに云ふやうな日も來た。

「どうすればいゝんだらう」

さう云つて額の所に手をやつて頭痛を忍びながら葉子は獨り苦しまねばならなかつた。

或る日葉子は思ひ切つて竊かに醫師を訪れた。醫師は手もなく、葉子の凡ての惱みの原因は子宮後屈症と子宮内膜炎とを併發してゐるからだと云つて聞かせた。葉子は餘りに分り切つた事を醫師がさも知つたか振りに云つて聞かせるやうにも、又そののつぺりした白い顏が、恐ろしい運命が葉子に對して裝うた假面で、葉子はその言葉によつて眞暗な行手を明らかに示されたやうにも思つた。而して怒りと失望とを抱きながらその家を出た。歸途葉子は本屋に立ち寄つて婦人病に關する大部な醫書を買ひ求めた。それは自分の病症に關する徹底的な知識を得よう爲めだつた。家に歸ると自分の部屋に閉ぢ籠つて大體を讀んで見た。後屈症は外科手術を施して位置矯正をする事によつ

て、内膜炎は内膜炎を扶搔する事によつて、それが器械的の發病である限り全治の見込みはあるが、位置矯正の場合などに施術者の不注意から子宮底に穿孔を生じた時などには、往々にして激烈な腹膜炎を結果する危險が伴ないでもないなどと書いてあつた。葉子は倉地に事情を打ち明けて手術を受けようかとも思つた。

普段ならば常識がすぐそれを葉子にさせたに違ひない。然し今はもう葉子の神經は極度に脆弱になつて、あらぬ方向にばかり我れにもなく鋭く働くやうになつてゐた。倉地は疑ひもなく自分の病氣に愛想を盡かすだらう。縱令そんな事はないとしても入院の期間に倉地の肉の要求が倉地を思はぬ方に連れて行かないとは誰れが保證出來よう。それは葉子の僻見であるかも知れない、然し若し愛子が倉地の注意を牽いてゐるとすれば、自分の留守の間に倉地が彼女に近づくのは唯ゞ一歩の事だ。愛子があの年であの無經驗で、倉地のやうな野性と暴力とに興味を持たぬのは勿論、一種の厭惡をさへ感じてゐるのは察せられないではない。愛子は屹度倉地を退けるだらう。然し倉地には恐ろしい無恥がある。而して一度倉地が女を已れの力の下に取り拉いだら、如何なる女も二度と倉地から遁れる事の出來ないやうな奇怪な痲醉の力を持つてゐる。思想とか禮儀とかに煩はされない、無盡藏に強烈で征服的な生のまゝな男性の力は如何な女をもその本能に立ち歸らせる魔術を持つてゐる。而かもあの柔順らしく見える愛子は葉子に對して生れるとからの敵意を挾んでゐるのだ。どんな可能でも描いて見る事が出來る。さう思ふと葉子は我が身で我が身を燒くやうな未練と嫉妬の爲めに前後も忘れてしまつた。何んとかして倉地を縛り上げるまでは葉子は甘んじて今の苦痛に堪へ忍ばうとした。

その頃からあの正井と云ふ男が倉地の留守を窺つては葉子に會ひに來るやうになつた。

「あいつは犬だつた。危く手を噛ませる所だつた。どんな事があつても寄せ付けるではないぞ」

と倉地が葉子に云ひ聞かせてから一週間も經たない後に、ひよつこり正井が顏を見せた。中々のしやれ者で、寸分の隙もない身なりをしてゐた男が、どこかに貧窮を香はすやうになつてゐた。カラーには薄つすり汗じみが出來て、ズボンの膝には燒けこげの小さな孔が明いたりしてゐた。葉子が上げる上げないも云はない中に、懇意づくらしくどん〱玄關から上りこんで座敷に通つた。而して高價らしい西洋菓子の美しい箱を葉子の眼の前に風呂敷から取り出した。

「折角お出で下さいましたのに倉地さんは留守ですから、憚りですが出直してお遊びに入らしつて下さいまし。これはそれまでお預りおきを願ひますわ」

さう云つて葉子は顏には如何にも懇意を見せながら、言葉には二の句がつげない程の冷淡さと強さとを示してやつた。然し正井はしやあ〱として平氣なものだつた。ゆつくり内衣嚢から卷煙草入れを取り出して、金口を一本摘まみ取ると、炭の上に溜つた灰を靜かにかき除けるやうにして火をつけて、長閑かに香りのいゝ煙を座敷に漂はした。

「お留守ですか……それは却つて好都合でした……もう夏らしくなつて來ましたね、隣りの薔薇も吹き出すでせう……遠いやうだがまだ去年の事ですねえ、お互樣に太平洋を往つたり來たりしたのは……あの頃が面白い盛りでしたよ。私達の仕事もまだ睨まれずにゐたんでしたから……時に奥さん——

さう云つて折入つて相談でもするやうに正井は煙草盆を押し退けて膝を乘り出すのだつた。人

を侮つてかゝつて來ると思ふと葉子はぐいつと癪に障つた。然し以前のやうな葉子はそこにはゐなかつた。若しそれが以前であつたら、自分の才氣と力量と美貌とに十分の自信を持つ葉子であつたら、毛の末ほども自分を失ふ事なく、優婉に閑滑に男を自分のかけた陷穽の中に陷れて、自縄自縛の苦い目に遇はせてゐるに違ひない。然し現在の葉子は多愛もなく敵を手許まで潛りこませてしまつて唯ゝいら／＼とあせるだけだつた。さう云ふ破目になると葉子は存外力のない自分であるのを知らねばならなかつた。

正井は膝を乘り出してから、暫らく默つて敏捷に葉子の顏色を窺つてゐたが、これなら大丈夫と見極めをつけたらしく、

「少しばかりでいゝんです、一つ融通して下さい」

と切り出した。

「そんな事を仰しやつたつて、私にどうしやうもない位は御存じぢやありませんか。それや餘人ぢやなし、出來るものなら何んとか致しますけれども、姉妹三人が何うか斯うかして倉地に養はれてゐる今日のやうな境界では、私に何が出來ませう。正井さんにも似合はない的違ひを仰しやるのね。倉地なら御相談にもなるでせうから面と向つてお話し下さいまし。中に這入ると私が困りますから」

葉子は取りつく島もないやうに嫌味な調子でづけ／＼とから云つた。正井はせゝら笑ふやうに微笑んで、金口の灰を靜かに灰吹きに落した。

「もう少しざつくばらんに云つて下さいよ昨日今日のお交際ぢやなし。倉地さんとまづくなつた位は御承知ぢやありませんか。……知つていらしつてさう云ふ口のきゝかたは少しひど過ぎますぜ、（こゝで假面を取つたやうに正井は不貞腐れた態度になつた。然し言葉はどこまでも穩當だつた）嫌はれたつて私は何も倉地さんを何うしようのかうしようのと、そんな薄情な事はしない積りです。倉地さんに怪我があれば私だつて同罪以上ですからね。……然し……一つ何んとかならないもんでせうか―

葉子の、怒りに興奮した神經は正井のこの一言にすぐおびえてしまつた。何もかも倉地の裏面を知り抜いてる筈の正井が、捨鉢になつたら倉地の身の上にどんな災難が降りかゝらぬとも限らぬ。そんな事をさせては飛んだ事になるだらう。そんな事をさせては飛んだ事になる。葉子は益ゝ弱身になつた自分を救ひ出す術に困じ果ててゐた。

……それを御承知で私の所に入らしつたつて……縱令私に都合がついたとした所で、何うしやうもありませんぢやないの。なんぼ私だつても、倉地と仲たがへをなさつたあなたに倉地の金を何する……―

「だから倉地さんのものをおねだりはしませんさ。木村さんからもたんまり來てゐる筈ぢやありませんか。その中から……たんとたあ云ひませんから、窮境を助けると思つてどうか」

正井は葉子を男たらしと見くびつた態度で、情夫を持つてる妾にでも逼るやうな圖々しい顏色を見せた。この押問答の結果葉子はとうとう正井に三百圓程の金をむざ／＼とせびり取られてしまつた。葉子はその晩倉地が歸つて來た時もそれを云ひ出す氣力はなかつた。貯金は全部定子の方に送つてしまつて、葉子の手許にはいくらも殘つてはゐなかつた。

それからと云ふもの正井は一週間とおかずに葉子の所に來ては金をせびつた。正井はその折折に、繪島丸のサルンの一隅に陣取つて酒と煙草とにひたりながら、何か知らんひそ／＼話をしてゐた數人の人達――人を見貫く眼の鋭い葉

子にも何うしてもその人達の職業を推察し得なかつた數人の人達の仲間に倉地が這入つて始め出した祕密な仕事の巨細を漏らした。正井が葉子を脅やかす爲めに、その話には誇張が加へられてゐる、さう思つて聞いて見ても、葉子の胸をひやつとさせる事ばかりだつた。倉地が日淸戰爭にも參加した事務長で、海軍の人達にも航海業者にも割合に廣い交際がある所から、材料の蒐集者としてその仲間の牛耳を取るやうになり、露國や米國に向つて漏らした祖國の軍事上の祕密は中々容易ならざるものらしかつた。倉地の氣分が荒んで行くのも尤だと思はれるやうな事柄を數々葉子は聞かされた。葉子は仕舞には自分自身を護る爲めにも正井の機嫌を取り外づしてはならないと思ふやうになつた。而して正井の言葉が一語々々思ひ出されて、夜なぞになると眠らせぬ程に葉子を苦しめた。葉子はまた一つの重い祕密を背負はなければならぬ自分を見出した。このつらい意識はすぐに又倉地に響くやうだつた。倉地は兎もすると敵の間諜ではないかと疑ふやうな險しい眼で葉子を睨むやうになつた。而して二人の間には又一つの溝がふえた。

そればかりではなかつた。正井に祕密な金を融通する爲めには倉地からのあてがひだけでは迚も足りなかつた。葉子はありもしない事を誠しやかに書き連ねて木村の方から送金させねばならなかつた。倉地の爲めなら兎にも角にも、倉地と自分の妹達とが豐かな生活を導く爲めになら兎にも角にも、葉子は一種の獰惡な誇りを以てそれをして、男の爲めになら何事でもと云ふ捨鉢な滿足を買ひ得ないではなかつたが、その金が大抵正井の懷ろに吸收されてしまふのだと思ふと、いくら間接には倉地の爲めだとは云へ葉子の胸は痛かつた。木村からは送金の度毎に相變らず長い消息が添へられて來た。木村の葉子に對する愛着は日を追うてまさるとも衰へる樣子は見えなかつた。仕事の方にも手違ひや誤算があつて始めの見込み通りには成功とは云へないが、葉子の方に送る位の金は何うしてでも都合がつく位の信用は得てゐるから構はず云つてよこせとも書いてあつた。こんな信實な愛情と熱意を絕えず示されるこの頃は葉子もさすがに自分のしてゐる事が苦しくなつて、思ひ切つて木村に凡てを打ち開けて、關係を絕たうかと思ひ惱むやうな事が時々あつた、その矢先きなので、葉子は胸に殊更ら痛みを覺えた。それが益々葉子の神經をいらだたせて、その病氣にも影響した。而して花の五月が過ぎて、青葉の六月にならうとする頃には、葉子は痛ましく瘦せ細つた、眼ばかりどぎつい純然たるヒステリー症の女になつてゐた。

三十九

巡査の制服は一氣に夏服になつたけれども、その年の氣候はひどく不順で、その白服が羨ましい程暑い時と、氣の毒な程惡冷えのする日が入れ代り立ち代り續いた。從つて晴雨も定めがたかつた。それがどれ程葉子の健康にさし響いたか知れなかつた。葉子は絕えず腰部の不愉快な鈍痛を覺ゆるにつけ、暑くて苦しい頭痛に惱まされるにつけ、何一つ身體に申分の無かつた十代の昔を思ひ忍んだ。晴雨寒暑といふやうなものがこれほど氣分に影響するものとは思ひも寄らなかつた葉子は、寢起きの天氣を何よりも氣にするやうになつた。今日こそは一日氣が晴れ〳〵するだらうと思ふやうな日は一日も無かつた。今日も亦つらい一日を過ごさねばならぬと云ふその忌はしい豫想だけでも葉子の氣分を害ふには十分過ぎた。

五月の始め頃から葉子の家に通ふ倉地の足は段々遠退いて、時々何處へとも知れぬ旅に出

るやうになつた。それは倉地が葉子のしつつこい挑みと、激しい嫉妬と、理不盡な癇癪の發作とを避けるばかりだとは葉子自身にさへ思へない節があつた。倉地の所謂事業には何か可なり致命的な内場破れが起つて、倉地の力でもそれを何うする事も出來ないらしい事はおぼろげながら葉子にも判つてゐた。債權者であるか、商賣仲間であるか、兎に角さう云ふ者を避ける爲めに不意に倉地が姿を隱さねばならぬらしい事は確かだつた。それにしても倉地の疎遠は一向に葉子には憎かつた。

或る時葉子は激しく倉地に迫つてその仕事の内容をすつかり打ち明けさせようとした。倉地の情人である葉子が倉地の身に大事が降りかからうとしてゐるのを知りながら、それに助力もし得ないと云ふ法はない、さう云つて葉子はせがみにせがんだ。

「これぱかりは女の知つた事ぢやないわい。俺れが喰ひ込んでもお前にはとばつちりが行くやうにはしたくないで、打ち明けないのだ。何處に行つても知らない／＼で一點張りに通すがいいぞ。……二度と聞きたいとせがんで見ろ、俺れはもう、そほんなしにお前とは手を切つて見せるから――

その最後の言葉は倉地の平生に似合はない重苦しい響きを持つてゐた。葉子は息氣をつめてそれ以上を何うしても迫る事が出來ないと斷念する程重苦しいものだつた。正井の言葉から判じても、それは女手などでは實際どうする事も出來ないものらしいので葉子はこれだけは斷念して口をつぐむより仕方がなかつた。

墮落と云はれようと、不貞と云はれようと、他人手を待つてゐては迚も自分の思ふやうな道は開けないと見切りをつけた本能的の衝動から、知らず識らず自分で選び取つた道の行手に眼も眩むやうな未來が見えたと有頂天になつた繪島丸の上の出來事以來、一年もたゝない中に、葉子が命も名も捧げてかゝつた新らしい生活は見る／＼土臺から腐り出して、もう今は一陣の風さへ吹けば、さしもの高樓ももんどり打つて地上に崩れてしまふと思ひやると、葉子は屢々眞劍に自殺を考へた。倉地が旅に出た留守に倉地の下宿に行つて急用あり直ぐ歸れといふ電報をその行く先きに打つてやる。而して自分は心靜かに倉地の寢床の上で刃に伏してゐよう。それは自分の一生の幕切れとしては、一番ふさはしい行爲らしい。倉地の心にもまだ自分に對する愛情は燃えかすれながらも殘つてゐる。それがこの最期によつて一時なりとも美しく燃え上るだらう。それでいゝ、それで自分は滿足だ。さう心から涙ぐみながら思ふ事もあつた。

實際倉地が留守の筈のある夜、葉子はふらふらと普段空想してゐたその心持に嚴しく捕へられて前後も知らず家を飛び出した事があつた。葉子の心は緊張し切つて天氣なのやら曇つてゐるのやら、暑いのやら寒いのやら更に差別がつかなかつた。盛んに羽蟲が飛びかはして往來の邪魔になるのをかすかに意識しながら、家を出てから小半町裏坂を下りて行つたが、不圖自分の體が穢れてゐて、この三四日湯に這入らない事を思ひ出すと、死んだ後の醜さを恐れてそのまゝ家に取つて返した。而して妹達だけが這入つたまゝになつてゐる湯殿に忍んで行つて、さめかけた風呂につかつた。妹達は疾に寢入つてゐた。手拭掛けの竹竿に濡れた手拭が二筋だけかゝつてゐるのを見ると、寢入つてゐる二人の妹の事がひし／＼と心に逼るやうだつた。葉子の決心は然しその位の事では動かなかつた。簡單に身仕舞をして又家を出た。

倉地の下宿近くなつた時、その下宿から急ぎ足で出て來る脊丈けの低い丸髷の女がゐた。夜の事ではあり、その邊は街燈の光も暗いので、

葉子にはさだかにそれと分らなかつたが、どうも雙鶴館の女將らしくもあつた。葉子はかつとなつて足早にその後をつけた。二人の間は半町とは離れてゐなかつた。段々二人の間の距離がちゞまつて行つて、その女が街燈の下を通る時などに氣を付けて見ると何うしても思つた通りの女らしかつた。偖は今まであの女を眞正直に信じてゐた自分はまんまと詐られてゐたのだつたか。倉地の妻に對しても義理が立たないから、今夜以後葉子とも倉地の妻とも關係を絕つ。惡く思はないでくれと確かにさう云つた、その義俠らしい口車にまんまと乘せられて、今まで殊勝な女だとばかり思つてゐた自分の愚かさは何うだ。葉子はさう思ふと眼が廻つてその場に倒れてしまひさうな口惜しさ恐ろしさを感じた。而して女の形を目がけてよろ〳〵となりながら駈け出した。その時女はその邊に辻待ちをしてゐる車に乘らうとする所だつた。取り逃がしてなるものかと、葉子はひた走りに走らうとした。然し足は思ふやうにはかどらなかつた。さすがにその靜けさを破つて聲を立てる事も憚られた。もう十間と云ふ位の所まで來た時車はがら〳〵と音を立てて砂利道を動きはじめた。葉子は息氣せき切つてそれに追ひつかうとあせつたが、見る〳〵その距離は遠ざかつて、葉子は杉森で圍まれた淋しい暗闇の中にたゞ一人取り殘されてゐた。葉子は何んと云ふ事なくその辻車のゐた處まで行つて見た。一臺よりゐなかつたので飛び乘つて後を追ふべき車もなかつた。葉子はぼんやりそこに立つて、そこに字でも書き殘してあるかのやうに暗い地面をぢつと見詰めてゐた。確かにあの女に違ひなかつた。背恰好と云ひ、髷の形と云ひ、小刻みな歩き振りと云ひ、……あの女に違ひなかつた。旅行に出ると云つた倉地は疑ひもなくうそを使つて下宿にくすぶつてゐるに違ひない。而してあの女を仲人に立てて先妻とのよりを戾さうとしてゐるに決つてゐる。それに何んの不思議があらう。永年連れ添つた妻ではないか。可愛い三人の娘の母ではないか。葉子と云ふものに一日々々疎くならうとする倉地ではないか。それに何んの不思議があらう。……それにしても餘りと云へば餘りな仕打ちだ。何故それならさうと明らかに云つてはくれないのだ。云つてさへくれれば自分にだつて戀する男に對しての女らしい覺悟はある。別れろとならば綺麗さつぱりと別れても見せる。……何んと云ふ踏みつけ方だ。何んと云ふ恥曝しだ。倉地の妻はおほそれた貞女振つた顏を顫はして、淚を流しながら、「それではお葉さんといふ方にお氣の毒だから、私はもう亡いものと思つて下さいまし……」……見てゐられぬ、聞いてゐられぬ。……葉子と云ふ女はどんな女だか、今夜こそは倉地にしつかり思ひ知らせてやる……。

葉子は醉つたもののやうにふら〳〵した足どりでそこから引き返した。而して下宿屋に來着いた時には、息氣苦しさの爲めに聲も出ない位になつてゐた。下宿の女達は葉子を見ると「又あの氣狂ひが來た」と云はんばかりの顏をして、その夜の葉子の殊更に取りつめた顏色には注意を拂ふ暇もなく、その場を外づして姿を隱した。葉子はそんな事には氣もかけずに物凄い笑顏で殊更らしく帳場にゐる男に一寸頭を下げて見せて、そのまゝふら〳〵と階子段を昇つて行つた。こゝが倉地の部屋だと云ふその襖の前に立つた時には、葉子は泣き聲に氣がついて驚いた程、我れ知らず啜り上げて泣いてゐた。身の破滅、戀の破滅は今夜の今、さう思つて荒々しく襖を開いた。

部屋の中には案外にも倉地はゐなかつた。隅から隅まで片付いてゐて、倉地のあの強烈な體の香ひも更に殘つてはゐなかつた。葉子は思は

ずふら／＼とよろけて、泣きやんで、部屋の中なに倒れこみながらあたりを見廻した。居るに違ひないと獨り決めをした自分の妄想が破れたと云ふ氣は少しも起らないで、確かにゐたものが突然溶けてしまふか何うかしたやうな氣味の惡るい不思議さに襲はれた。葉子はすつかり氣拔けがして、髮も衣紋も取り亂したまゝ横坐りに坐つたきりでぼんやりしてゐた。

あたりは深山のやうにしーんとしてゐた。唯ゞ葉子の眼の前をうるさく行ったり來たりする黑い影のやうなものがあつた。葉子は何物と云ふ分別もなく始めは唯ゞうるさいとのみ思つてゐたが、仕舞には堪らへかねて手を擧げて頻りにそれを追ひ拂つて見た。追ひ拂つても／＼そのうるさい黑い影は眼の前を立ち去らうとはしなかつた。……暫らくさうしてゐる中に葉子は寒氣がするほどぞつと怖ろしくなつて氣がはつきりした。

急に周圍には騷がしい下宿屋らしい雜音が聞こえ出した。葉子をうるさがらしたその黑い影は見る／＼小さく遠ざかつて、電燈の周圍をきり／＼と舞ひ始めた。よく見るとそれは大きな黑い夜蛾だつた。葉子は神がかりが離れたやうにきよとんとなつて、不思議さうに居住ひを正して見た。

何處までが眞實で、何處までが夢なんだらう……。

自分の家を出た、それに間違ひはない。途中から取つて返して風呂をつかつた、……何んの爲めに？ そんな馬鹿な事をする筈がない。でも妹達の手拭が二筋濡れて手拭かけの竹竿にかゝつてゐた、（葉子はさう思ひながら自分の額を撫でたり、手の甲を調べて見たりした。而して確かに湯に這入つた事を知つた）それならそれでいゝ。それから雙鶴館の女將の後をつけたのだつたが、……あの邊から夢になつたのか知らん。あすこにゐる蛾をもや／＼した黑い影のやうに思つたりしてゐた事から考へて見ると、いま／＼しさから自分は思はず脊丈けの低い女の幻影を見てゐたのかも知れない。それにしてもゐる筈の倉地がゐないといふ法はないが……葉子は何うしても自分のして來た事にはつきり連絡をつけて考へる事が出來なかつた。

葉子は……自分の頭ではどう考へて見ようもなくなつて、ベルを押して番頭に來て貰つた。

「あのう、あとでこの蛾を追ひ出しておいて下さいな……それからね、さつき……と云つた所がどれ程前だか私にもはつきりしませんがね、こゝに三十恰好の丸髷を結つた女の人が見えましたか」

「こちら樣には誰方もお見えにはなりませんが……」

番頭は怪訝な顏をしてから答へた。

「こちら樣だらうが何んだらうが、そんな事を聞くんぢやないの。この下宿屋からそんな女の人が出て行きましたか」

「左樣……へ、一時間ばかり前ならお一人お歸りになりました」

「雙鶴館のお内儀さんでせう」

圖星をさゝれたらうと云はんばかりに葉子はわざと鷹揚な態度を見せてから聞いて見た。

「いゝえさうぢや御座いません」

番頭は案外にもさうきつぱりと云ひ切つてしまつた。

「それぢや誰れ」

「兎に角他のお部屋にお出でなさつたお客樣で、手前共の商賣上お名前までは申上げ兼ねますが」

葉子もこの上の問答の無益なのを知つてそのまゝ番頭を歸してしまつた。

葉子はもう何者も信用する事が出來なかつ

た。本當に雙鶴館の女將が來たのではないらしくもあり、番頭までが倉地とぐるになつてゐてしら／＼しい虛言を吐いたやうにもあつた。何事も當てにはならない。何事もうそから出た誠だ。……葉子は本當に生きてゐる事がいやになつた。

……そこまで來て葉子は始めて自分が家を出て來た本當の目的が何んであるかに氣付いた。凡てに蹉いて、凡てに見限られて、凡てを見限らうとする、苦しみぬいた一つの魂が、虛無の世界の幻の中から消えて行くのだ。そこには何んの未練も執着もない。嬉しかつた事も、悲しかつた事も、悲しんだ事も、苦しんだ事も、畢竟は水の上に浮いた泡がまたはじけて水に歸るやうなものだ。倉地が、死骸になつた葉子を見て歎かうが歎くまいが、その倉地さへ幻の影ではないか。雙鶴館の女將だと思つた人が、他人であつたやうに、他人だと思つたその人が、案外雙鶴館の女將であるかも知れないやうに、生きると云ふ事がそれ自身幻影でなくつて何んであらう。葉子は覺め切つたやうな、眠りほうけてゐるやうな意識の中でから思つた。しん／＼と底も知らず澄み透つた心が唯ゞ一つぎり／＼と死の方に働いて行つた。葉子の眼には一と雫の淚も宿つてはゐなかつた。妙に冴えて落ち付き拂つた眸を靜かに働かして、部屋の中を靜かに見廻してゐたが、やがて夢遊病者のやうに立ち上つて、戶棚の中から倉地の寢具を引き出して來て、それを部屋の眞中に敷いた。而して暫らくの間その上に靜かに坐つて眼を瞑つて見た。それから又立ち上つて全く無感情な顏付きをしながら、もう一度戶棚に行つて、倉地が始終身近に備へてゐる短銃をあちこちと尋ね求めた。仕舞にそれが本箱の引出しの中の幾通かの手紙と、書き損ねの書類と、四五枚の寫眞とがごつちやに仕舞ひ込んであるその中から現はれ出た。葉子は妙に無關心な心持でそれを手に取つた。而して恐ろしいものを取扱ふやうにそれを體から離して右手にぶら下げて寢床に歸つた。その癖葉子は露程もその兇器に怖れを懷いてゐる譯ではなかつた。寢床の眞中に坐つてから短銃を膝の上に置いて手をかけたまゝ暫らく眺めてゐたが、やがてそれを取り上げると胸の所に持つて來て鷄頭を引き上げた。

きりつ、

と齒切れのいゝ音を立てて彈筒が少し回轉した。同時に葉子の全身は電氣を感じたやうにびりつと戰いた。然し葉子の心は水が澄んだやうに搖がなかつた。葉子はさうしたまゝ短銃を又膝の上に置いてぢつと眺めてゐた。

ふと葉子は唯ゞ一つ仕殘した事のあるのに氣が附いた。それが何んであるかを自分でもはつきりとは知らずに、謂はば何物かの餘儀ない命令に服從するやうに、又寢床から立ち上つて戶棚の中の本箱の前に行つて引出しを開けた。而してそこにあつた寫眞を丁寧に一枚づつ取り上げて靜かに眺めるのだつた。葉子は心竊かに何をしてゐるんだらうと自分の動作を怪しんでゐた。

葉子はやがて一人の女の寫眞を見詰めてゐる自分を見出した。長く／＼見詰めてゐた。……その中に、白癡がどうかして段々眞人間に還る時はさうもあらうかと思はれるやうに、葉子の心は靜かに／＼自分で働くやうになつて行つた。女の寫眞を見て何うするのだらうと思つた。早く死ななければいけないのだがと思つた。一體その女は誰れだらうと思つた。……それは倉地の妻の寫眞だつた。さうだ倉地の妻の若い時の寫眞だ。成程美しい女だ。倉地は今でもこの女に未練を持つてゐるだらうか。この妻には三人の可愛い娘があるのだ。「今でも時時思ひ出す」さう倉地の云つた事がある。こん

な寫眞が一體この部屋なんぞにあつてはならないのだが。それは本當にならないのだ。倉地はいまだこんなものを大事にしてゐる。この女はいつまでも倉地に歸つて來ようと待ち構へてゐるのだ。而してまだこの女は生きてゐるのだ。それが幻なものか。生きてゐるのだ、生きてゐるのだ。……死なれるか、それで死なれるか。何が幻だ、何が虛無だ。この通りこの女は生きてゐるではないか　危く……危く自分は倉地を安堵させる所だつた。而してこの女を……このまだ生のあるこの女を喜ばせる所だつた。

　葉子は一刹那の違ひで死の境から救ひ出された人のやうに、驚喜に近い表情を顏一面に漲らして裂ける程眼を見張つて、寫眞を持つたまゝ飛び上らんばかりに突つ立つたが、急に襲ひかゝる遣瀨ない嫉妬の情と憤怒とに怖ろしい形相になつて、齒がみをしながら、寫眞の一端を銜へて、「いゝ……」と云ひながら、總身の力をこめて眞二つに裂くと、いきなり寢床の上にどうと仆れて、物凄い叫び聲を立てながら、涙も流さずに叫びに叫んだ。

　店のものが慌てて部屋に這入つて來た時には、葉子はしをらしい樣子をして、拳銃を床の下に隱してしまつて、しく／＼と本當に泣いてゐた。

　番頭は已むを得ず、てれ隱しに、

「夢でも御覽になりましたか、大層なお聲だつたものですから、つい御案內も致さず飛び込んで仕舞ひまして――」

と云つた。葉子は、

「えゝ、夢を見ました。あの黑い蛾が惡いんです。早く追ひ出して下さい――」

そんな譯の分らない事を云つて、漸く涙を押し拭つた。

　かう云ふ發作を繰り返す度每に、葉子の顏は暗くばかりなつて行つた。葉子には、今まで自分が考へてゐた生活の外に、もう一つ不可思議な世界があるやうに思はれて來た。而して動ともすればその兩方の世界に出たり入つたりする自分を見出すのだつた。二人の妹達は唯々はら／＼して姉の狂暴な振舞ひを見守る外はなかつた。倉地は愛子に刃物などに注意しろと云つたりした。

　岡の來た時だけは、葉子の機嫌は沈むやうな事はあつても狂暴になる事は絕えてなかつたので、岡は妹達の言葉にさして重きを置いてはゐないやうに見えた。

四十

　六月のある夕方だつた。もう誰彼時で、電燈が點つて、その周圍に夥しく杉森の中から小さな羽蟲が集まつてうるさく飛び廻り、藪蚊がすさまじく鳴きたてて軒先きに蚊柱を立ててゐる頃だつた。暫らくめで來た倉地が、張出しの葉子の部屋で酒を飲んでゐた。葉子は痩せ細つた肩を單衣物の下に尖らして、神經的に襟をぐいつと搔き合せて、きちんと膝の側に坐つて、華車な團扇で酒の香に寄りたかつて來る蚊を追ひ拂つてゐた。二人の間にはもう元のやうに滾々と泉の如く湧き出る話題はなかつた。偶に話が少し彈んだと思ふと、どちらにか差しさはるやうな言葉が飛び出して、ぷつんと會話を途絕してしまつた。

「貞ちやん矢張り駄々をこねるか」

一と口酒を飲んで、溜息をつくやうに庭の方に向いて氣を吐いた倉地は、自分で氣分を引き立てながら思ひ出したやうに葉子の方を向いてかう尋ねた。

「えゝ、仕樣がなくなつちまひました。この四五日つたら殊更らひどいんですから」

「さうした時期もあるんだらう。まあたんとい

びらないで置くがいゝよ」
「私時々本當に死にたくなつちまひます」
葉子は途徹もなく貞世の噂とは緣もゆかりもないこんなひよんな事を云つた。
「さうだ俺れもさう思ふ事があるて。……落ち目になつたら最後、人間は浮き上るが面倒になる。船でもが浸水し始めたら埒はあかんからな。……したが、俺れはまだもう一反り反つて見てくれる。死んだ氣になつて、やれん事は一つもないからな」
「本當ですわ」
さう云つた葉子の眼はいら〳〵と輝いて、睨むやうに倉地を見た。
「正井の奴が來るさうぢやないか」
倉地はまた話題を轉ずるやうにかう云つた。葉子がさうだとさへ云へば、倉地は割合に平氣で受けて「困つた奴に見込まれたものだが、見込まれた以上は仕方がないから、空腹がらないだけの仕向けをしてやるがいゝ」と云ふに違ひない事は、葉子によく分つてはゐたけれども、今まで祕密にしてゐた事を何んとか云はれやしないかとの氣遣ひの爲めか、それとも倉地が祕密を持つのならこつちも祕密を持つて見せるぞと云ふ腹になりたい爲めか、自分にもはつきりとは判らない衝動に驅られて、何と云ふ事なしに、
「いゝえ」
と答へてしまつた。
「來ない？……それやお前いゝ加減ぢやらう」
と倉地はたしなめるやうな調子になつた。
「いゝえ」
葉子は頑固に云ひ張つてそつぽを向いてしまつた。
「おいその團扇を貸してくれ、煽がずにゐては蚊でたまらん……來ない事があるものか」
「誰れからそんな馬鹿な事お聞きになつて？」
「誰れからでもいゝわさ」
葉子は倉地がまた齒に衣着せた物の云ひ方をすると思ふとかつと腹が立つて返辭もしなかつた。
「葉ちやん。俺れは女の機嫌を取る爲めに生れて來はせんぞ。いゝ加減を云つて甘く見くびるとよくはないぜ」
葉子はそれでも返事をしなかつた。倉地は葉子の拗ね方に不快を催したらしかつた。
「おい葉子！　正井は來るのか來んのか」
正井の來る來ないは大事ではないが、葉子の虛言を訂正させずには置かないと云ふやうに、倉地は詰め寄せて嚴しく問ひ迫つた。葉子は庭の方にやつてゐた眼を返して不思議さうに倉地を見た。
「いゝえと云つたらいゝえとより云ひやうはありませんわ。あなたの『いゝえ』と私の『いゝえ』は『いゝえ』が違ひでもしますか知ら」
「酒も何も飲めるか……俺れが暇を無理に作つてゆつくりくつろがうと思うて來れば、いらん事に角を立てて……何んの藥になるかいそれが」
葉子はもう胸一杯悲しくなつてゐた。本當は倉地の前に突つ伏して、自分は病氣で始終身體が自由にならないのが倉地に氣の毒だ。けれどもどうか捨てないで愛し續けてくれ。身體が駄目になつても心の續く限りは自分は倉地の情人でゐたい。さうより出來ない。そこを憐れんでせめては心の誠を捧げさしてくれ。若し倉地が明々地に云つてくれさへすれば、元の細君を呼び迎へてくれても構はない。而してせめては自分を憐れんでなり愛してくれ。さう歎願がしたかつたのだ。倉地はそれに感激してくれるかも知れない。俺れはお前も愛するが去つた妻も捨てるには忍びない。よく云つてくれた。それならお前の言葉に甘えて哀れな妻を呼び迎へよう。妻もさぞお前の黃金のやうな心には感ず

るだらう。俺れは妻とは家庭を持たう。然しお前とは戀を持たう。さう云つて涙ぐんでくれるかも知れない。若しそんな場面が起り得たら葉子はどれ程嬉しいだらう。葉子はその瞬間に、生れ代つて、正しい生活が開けてくるのにと思つた。それを考へただけで胸の中からは美しい涙が滲み出すのだつた。けれども、そんな馬鹿を云ふものではない、俺れの愛してゐるのはお前一人だ。元の妻などに俺れが未練を持つてゐると思ふのが間違ひだ。病氣があるのなら早速病院に這入るがいゝ、費用はいくらでも出してやるから。から倉地が云はないとも限らない。それはありさうな事だ。その時葉子は自分の心を斷ち割つて誠を見せた言葉が、情けも容赦も思ひやりもなく、踏み躪られ穢されてしまふのを見なければならないのだ。それは地獄の呵責よりも葉子には堪へがたい事だ。縱令倉地が前の態度に出てくれる可能性が九十九あつて、後の態度を採りさうな可能性が一つしかないとしても、葉子には思ひ切つて歎願をして見る勇氣が出ないのだ。倉地も倉地で同じやうな事を思つて苦しんでゐるらしい。何んとかして元のやうな懸け隔てのない葉子を見出して、段々と陷つて行く生活の窮境の中にも、せめては暫らくなりとも人間らしい心になりたいと思つて、葉子に近づいて來てゐるのだ。それを何處までも知り拔きながら、而して身につまされて深い同情を感じながら、どうしても面と向ふと殺したい程憎まないではゐられない葉子の心は自分ながら悲しかつた。

葉子は倉地の最後の一言でその急所に觸れられたのだつた。葉子は倉地の眼の前で見る〳〵しをれてしまつた。泣くまいと氣張りながら幾度も雄々しく雄々しく涙を飮んだ。倉地は明らかに葉子の心を感じたらしく見えた。

「葉子！　お前は何んでこの頃さう他處々々しくしてゐなければならんのだ。えゝ」

と云ひながら葉子の手を取らうとした。その瞬間に葉子の心は火のやうに怒つてゐた。

「他處々々しいのはあなたぢやありませんか」

さう知らず〳〵云つてしまつて、葉子は沒義道に手を引つ込めた。倉地を睨みつける眼からは熱い大粒の涙がぼろ〳〵とこぼれた。而して、

「あゝ……あ、地獄だ〳〵」

と心の中で絕望的に切なく叫んだ。

二人の間には又もや忌はしい沈默が繰り返された。

その時玄關に案內の聲が聞こえた。葉子はその聲を聞いて古藤が來たのを知つた。而して大急ぎで涙を押し拭つた。二階から降りて來て取次ぎに立つた愛子がやがて六疊の間に這入つて來て、古藤が來たと告げた。

「二階にお通ししてお茶でも上げてお置き。何んだつて今頃……御飯時も構はないで……」

と面倒臭さうに云つたが、あれ以來來た事のない古藤に遇ふのは、今のこの苦しい壓迫から遁れるだけでも都合がよかつた。このまゝ續いたら又例の發作で倉地に愛想を盡かさせるやうな事を仕出かすにきまつてゐたから。

「私一寸會つて見ますからね、あなた構はないでいらつしやい。木村の事も探つておきたいから」

さう云つて葉子はその座を外づした。倉地は返事一つせずに杯を取り上げてゐた。

二階に行つて見ると、古藤は例の軍服に上等兵の肩章を附けて、胡坐をかきながら貞世と何か話をしてゐた。葉子は今まで泣き苦しんでゐたとは思へぬ程美しい機嫌になつてゐた。簡單な挨拶を濟ますと古藤は例の云ふべき事から先きに云ひ始めた。

「御面倒ですがね、明日定期檢閱な所が今度は室內の整頓なんです。所が僕は整頓風呂敷を

洗濯しておくのをすつかり忘れてしまつてね。今特別に外出を伍長にそつと頼んで許して貰つて、これだけ布を買つて來たんですが、縁を縫つてくれる人がないんで弱つて驅けつけたんです。大急ぎでやつていたゞけないでせうか」

「お易い御用ですともね。愛さん！」

大きく呼ぶと階下にゐた愛子が平生に似合はず、あたふたと階子段を昇つて來た。葉子はふと又倉地を念頭に浮べていやな氣持になつた。然しその頃貞世から愛子に愛が移つたかと思はれる程葉子は愛子を大事に取扱つてゐた。それは前にも書いた通り、强ひても他人に對する愛情を殺す事によつて、倉地との愛がより緊く結ばれると云ふ迷信のやうな心の働きから起つた事だつた。愛しても愛し足りないやうな貞世につらく當つて、何うしても氣の合はない愛子を蟲を殺して大事にして見たら、或は倉地の心が變つて來るかも知れないとさう葉子は何がなしに思ふのだつた。で、倉地と愛子との間にどんな奇怪な徴候を見つけ出さうとも、念にかけても葉子は愛子を責めまいと覺悟をしてゐた。

「愛さん古藤さんがね、大急ぎでこの縁を縫つて貰ひたいと仰しやるんだから、あなたして上げて頂戴な。古藤さん、今下には倉地さんが來ていらつしやるんですが、あなたはお嫌ひねお遇ひなさるのは……さう、ぢやこちらでお話でもしますからどうぞ」

さう云つて古藤を妹達の部屋の隣りに案内した。古藤は時計を見い／＼せはしさうにしてゐた。

「木村から便りがありますか」

木村は葉子の良人ではなく自分の親友だと云つたやうな風で、古藤はもう木村君とは云はなかつた。葉子はこの前古藤が來た時からそれを氣付いてゐたが、今日は殊更らその心持が目立つて聞こえた。葉子は度々來ると答へた。

「困つてゐるやうですね」

「えゝ、少しはね」

「少し所ぢやないやうですよ僕の所に來る手紙によると。何んでも來年に開かれる筈だつた博覽會が再來年に延びたので、木村は又この前以上の窮境に陷つたらしいのです。若い中だからいゝやうなものゝあんな不運な男も少くない。金も送つては來ないでせう」

何んと云ふぶしつけな事を云ふ男だらうと葉子は思つたが、餘り云ふ事にわだかまりがないので皮肉でも云つてやる氣にはなれなかつた。

「いゝえ相變らず送つてくれますことよ」

「木村つて云ふのはさうした男なんだ」

古藤は半ば自分に云ふやうに感激した調子でから云つたが、平氣で仕送りを受けてゐるらしく物を云ふ葉子にはひどく反感を催したらしく、

「木村からの送金を受取つた時、その金があなたの手を燒きたゞらかすやうには思ひませんか」

と激しく葉子をまともに見詰めながら云つた。而して油で汚れたやうな赤い手で、せはしなく胸の眞鍮釦をはめたり外づしたりした。

「何故ですの」

「木村は困り切つてるんですよ。……本當にあなた考へて御覧なさい……」

勢込んでなほ云ひ募らうとした古藤は、襖も明け開いたまゝの隣りの部屋に愛子達がゐるのに氣付いたらしく、

「あなたはこの前お眼にかゝつた時からすると、又ひどく瘦せましたねえ」

と言葉を反らした。

「愛さんもう出來て？」

と葉子も調子をかへて愛子に遠くからから尋ね、「いゝえまだ少し」と愛子が云ふのをしいほに

葉子はそちらに立つた。貞世はひどくつまらなさうな顔をして、机に兩肘を持たせたまゝ、ぼんやりと庭の方を見やつて、二人の擧動などには眼もくれない風だつた。垣根沿ひの木の間からは、種々な色の薔薇の花が夕闇の中にもちらほら見えてゐた。葉子はこの頃の貞世は本當に變だと思ひながら、愛子の縫ひかけの布を取り上げて見た。それはまだ半分も縫ひ上げられてはゐなかつた。葉子の癇癪はぎり〳〵募つて來たけれども、強ひて心を押し鎮めながら、

「これつぽつち……愛子さん何うしたと云ふんだらう。どれ姉さんにお貸し、而してあなたは……貞ちやんも古藤さんの所に行つてお相手をしてお出で……」

「僕は倉地さんに遇つて來ます」

突然後向きの古藤は疊に片手をついて肩越しに向き返りながらかう云つた。而して葉子が返事をする暇もなく立ち上つて階子段を降りて行かうとした。葉子はすばやく愛子に眼くばせして、下に案内して二人の用を足してやるやうにと云つた。愛子は急いで立つて行つた。

葉子は縫ひ物をしながら多少の不安を感じた。あの何んの技巧もない古藤と、癇癪が募り出して自分ながら始末をしあぐねてゐるやうな倉地とがまともに打突かり合つたら、どんな事を仕出來すかも知れない。木村を手の中に丸めておく事も今日二人の會見の結果で駄目になるかも分らないと思つた。然し木村と云へば、古藤の云ふ事などを聞いてゐると葉子もさすがにその心根を思ひやらずにはゐられなかつた。葉子はこの頃倉地に對して持つてゐるやうな氣持からは、木村の立場や心持があからさま過ぎる位想像が出來た。木村は戀するものの本能から疾うに倉地と葉子との關係は了解してゐるのに違ひないのだ。了解して一人ぼつちで苦しめるだけ苦しんでゐるに違ひないのだ。それにも係はらずその善良な心から何處までも葉子の言葉に信用を置いて、何時かは自分の誠意が葉子の心に徹するのを、あり得べき事のやうに思つて、苦しい一日々々を暮してゐるのに違ひない。而して又落ち込まうとする窮境の中から血の出るやうな金を缺かさずに送つてよこす。それを思ふと、古藤が云ふやうにその金が葉子の手を焼かないのは不思議と云つていゝ程だつた。尤も葉子であつて見れば、木村に醜いエゴイズムを見出さない程暢氣ではなかつた。木村が何處までも葉子の言葉を信用してかゝつてゐる點にも、血の出るやうな金を送つてよこす點にも、葉子が倉地に對して持つてゐるよりは、もつと冷静な功利的な打算が行はれてゐると決める事が出來る程木村の心の裏を察してゐないではなかつた。葉子の倉地に對する心持から考へると木村の葉子に對する心持にはまだ隙があると葉子は思つた。葉子が若し木村であつたら、どうしておめ〳〵米國三界にゐ續けて、遠くから葉子の心を飜へす手段を講ずるやうな暢氣な眞似がして濟ましてゐられよう。葉子が木村の立場にゐたら、事業を捨てても、乞食になつても、すぐ米國から歸つて來ないぢやゐられない筈だ。米國から葉子と一緒に日本に引き返した岡の心の方がどれだけ素直で誠しやかだか知れやしない。そこには生活と云ふ問題もある、事業といふ事もある。岡は生活に對して懸念などする必要はないし、事業と云ふやうなものはてんで持つてはゐない。木村とは何んと云つても立場が違つてはゐる。と云つた所で、木村の持つ生活問題なり事業なりが、葉子と一緒になつてから後の事を顧慮してされてゐる事だとして見ても、そんな氣持でゐる木村には、何んと云つても餘裕があり過ぎると思はないではゐられない物足りなさがあつた。縱し眞裸かになる程、職業から離れて無一文になつてゐて

もいゝ、葉子の乘つて歸つて來た船に木村も乘つて一緒に歸つて來たら、葉子は或は木村を船の中で人知れず殺して海の中に投げ込んでゐようとも、木村の記憶は哀しくなつかしいものとして死ぬまで葉子の胸に刻みつけられてゐたらうものを。……それはさうに相違ない。それにしても木村は氣の毒な男だ。自分の愛しようとする人が他人に心を牽かれてゐる……それを發見する事だけで悲慘は十分だ。葉子は本當は、倉地は葉子以外の人に心を牽かれてゐるとは思つてはゐないのだ。唯〻少し葉子から離れて來たらしいと疑ひ始めただけだ。それだけでも葉子は既に熱鐵を呑まされるやうな焦燥と嫉妬とを感ずるのだから、木村の立場はさぞ苦しいだらう。……さう推察すると葉子は自分の餘りと云へば餘りに殘虐な心に胸の中がちく〳〵と刺されるやうになつた。「金が手を燒くやうに思ひはしませんか」との古藤の云つた言葉が妙に耳に殘つた。

　さう思ひ〳〵布の一方を手早く縫ひ終つて、縫ひ目を器用にしごきながら眼を擧げると、そこには貞世が先刻のまゝ机に兩肘をついて、たかつて來る蚊も追はずにぼんやりと庭の向うを見續けてゐた。切り下げにした厚い黑漆の髮の毛の下に覗き出した耳朶は霜燒けでもしたやうに赤くなつて、それを見ただけでも、貞世は何か興奮して向うを向きながら泣いてゐるに違ひなく思はれた。覺えがないではない。葉子も貞世程の齡の時には何か知らず急に世の中が悲しく見える事があつた。何事も唯〻明るく快く賴もしくのみ見えるその底からふいつと悲しいものが胸を抉つて湧き出る事があつた。取り分けて快活ではあつたが、葉子は幼い時から妙な事に臆病がる兒だつた。ある時家族中で北國の淋しい田舍の方に避暑に出かけた事があつたが、ある晩がらんと客の空いた大きな旅籠屋に宿つた時、枕を竝べて寢た人達の中で葉子は床の間に近い一番端に寢かされたが、どうした加減でか氣味が惡くて堪らなくなり出した。暗い床の間の軸物の中からか、置物の蔭からか、得體の分らないものが現はれ出て來さうなやうな氣がして、さう思ひ出すとぞく〳〵と總身に震へが來て、迚も頭を枕につけてはゐられなかつた。で、眠りかゝつた父や母にせがんで、その二人の中に割りこまして貰はうと思つたけれども、父も母も、そんなに大きくなつて何を馬鹿を云ふのだと云つて少しも葉子の云ふ事を取り上げてはくれなかつた。葉子は暫らく兩親と爭つてゐる中に何時の間にか寢入つたと見えて、翌日眼を覺まして見ると、矢張り自分が氣味の惡いと思つた所に寢てゐた自分を見出した。その夕方、同じ旅籠屋の二階の手摺から少し荒れたやうな庭を何んの氣なしにぢつと見入つてゐると、急に昨夜の事を思ひ出して葉子は悲しくなり出した。父にも母にも世の中の凡てのものにも自分は何うかして見放されてしまつたのだ。親切らしく云つてくれる人は皆んな自分に虛事をしてゐるのだ。いゝ加減の所で自分はどんと皆んなから突き放されるやうな悲しい事になるに違ひない。どうしてそれを今まで氣附かずにゐたのだらう。さうなつた曉に一人でこの庭をからして見守つたらどんなに悲しいだらう。少さいながらにそんな事を一人で思ひ耽つてゐるともう留度なく悲しくなつて來て、父が何んと云つても母が何んと云つても、自分の心を自分の涙にひたし切つて泣いた事を覺えてゐる。

　葉子は貞世の後姿を見るにつけてふいとその時の自分を思ひ出した。妙な心の働きから、その時の葉子が貞世になつてそこに幻のやうに現はれたのではないかとさへ疑つた。これは葉子には始終ある癖だつた。始めて起つた事が、

どうしても何時かの過去にそのまゝ起つた事のやうに思はれてならない事がよくあつた。貞世の姿は貞世ではなかつた。苔香園は苔香園ではなかつた。美人屋敷は美人屋敷ではなかつた。周圍だけが妙にもや〳〵して心の方だけが澄み切つた水のやうにはつきりしたその頭の中には、貞世のとも、幼い時の自分のとも區別のつかない果敢なさ悲しさがこみ上げるやうに湧いてゐた。葉子は暫らくは針の運びも忘れてしまつて、電燈の光を背に負つて夕闇に埋れて行く木立に眺め入つた貞世の姿を、恐ろしさを感ずるまでになりながら見續けた。

「貞ちやん」

とう〳〵默つてゐるのが無氣味になつて葉子は沈默を破りたいばかりにかう呼んで見た。貞世は返事一つしなかつた。……葉子はぞつとした。貞世はあゝしたまゝで通り魔にでも魅られて死んでゐるのではないか。それとももう一度名前を呼んだら、線香の上に溜つた灰が少しの風で崩れ落ちるやうに、聲の響きでほろ〳〵とかき消すやうにあのいたいけな姿は失くなつてしまふのではないだらうか。而してその後には夕闇に包まれた苔香園の木立と、二階の緣側と、小さな机だけが殘るのではないだらうか……普段の葉子ならば何んといふ馬鹿だらうと思ふやうな事をおど〳〵しながら眞面目に考へてゐた。

その時階下で倉地のひどく激昂した聲が聞こえた。葉子ははつとして長い惡夢からでも覺めたやうに我れに歸つた。そこにゐるのは姿は元のまゝだが、矢張りまがふ方なき貞世だつた。葉子は慌てて何時の間にか膝からずり落してあつた白布を取り上げて、階下の方にきつと聞き耳を立てた。事態は大分大事らしかつた。

「貞ちやん。……貞ちやん……」

葉子はさう云ひながら立ち上つて行つて、貞世を後ろから羽がひに抱きしめてやらうとした。然しその瞬間に自分の胸の中に自然に出來上らしてゐた結願を思ひ出して、心を鬼にしながら、

「貞ちやんと云つたらお返事をなさいな。何んの事です拗ねたまねをして。臺所に行つてあとのすゝぎ返しでもしてお出で、勉強もしないでぼんやりばかりしてゐると毒ですよ」

「だつてお姉樣私苦しいんですもの」

「嘘をお云ひ。この頃はあなた本當にいけなくなつた事。我儘ばかししてゐると姉さんは聽きませんよ」

貞世は淋しさうな恨めしさうな顏を眞赤にして葉子の方を振り向いた。それを見ただけで葉子はすつかり打ち摧かれてゐた。水月のあたりをすつと氷の棒でも通るやうな心持がすると、喉の所はもう泣きかけてゐた。何んといふ心に自分はなつてしまつたのだらう……葉子はその上その場にはゐたゝまれないで、急いで階下の方へ降りて行つた。

倉地の聲に交じつて古藤の聲も激して聞こえた。

四十一

階子段の上り口には愛子が姉を呼びに行かうか行くまいかと思案するらしく立つてゐた。そこを通り拔けて自分の部屋に來て見ると、胸毛をあらはに襟を濶げて、セルの兩袖を高々とまくり上げた倉地が、胡坐をかいたまゝ、電燈の灯の下に熟柿のやうに赤くなつてこつちを向いて威丈高になつてゐた。古藤は軍服の膝をきちんと折つて眞直に固く坐つて、葉子には後ろを向けてゐた。それを見るともう葉子の神經はびり〳〵と逆立つて自分ながら何うしやうもない程荒れすさんで來てゐた。「何もかもいやだ。どうでも勝手になるがいゝ」するとすぐ頭

が重くかぶさつて來て、腹部の鈍痛が鉛の大きな球のやうに腰を虐げた。それは二重に葉子をいら〳〵させた。

「あなた方は一體何をそんなに云ひ合つていらつしやるの」

もうそこには葉子はタクトを用ゐる餘裕さへ持つてゐなかつた。始終腹の底に冷静さを失はないで、あらん限りの表情を勝手に操縦してどんな難關でも、葉子に特有な仕方で切り開いて行くそんな餘裕はその場には迚も出て來なかつた。

「何をと云つてこの古藤と云ふ青年は餘り禮儀を辨へんからよ。木村さんの親友々々と二言目には鼻にかけたやうな事を云はるゝが、俺しも俺しで木村さんからは頼まれとるんだから、一人よがりの事は云うて貰はんでもがいゝのだ。それをかいこべ碌々あなたの世話も見ずにおきながら、云ひ立てなさるので、筋が違つてゐようと云つて聞かせて上げた所だ。古藤さん、あなた失禮だが一體いくつです」

葉子に云つて聞かせるでもなくさう云つて、倉地は又古藤の方に向き直つた。古藤はこの侮辱に對して口答への言葉も出ないやうに激昂して默つてゐた。

「答へるが恥しければ強ひても聞くまい。が、いづれ二十は過ぎてゐられるのだらう。二十過ぎた男があなたのやうに禮儀を辨へずに他人の生活の内輪にまで立ち入つて物を云ふは馬鹿の證據ですよ。男が物を云ふなら考へてから云ふがいゝ」

さう云つて倉地は言葉の激昂してゐる割合に、又見かけのいかにも威丈高な割合に、十分の餘裕を見せて、空嘯くやうに打水をした庭の方を見ながら團扇をつかつた。

古藤は暫らく默つてゐてから後ろを振り仰いで葉子を見やりつゝ、

「葉子さん……まあ、す、坐つて下さい」

と少しどもるやうに強ひて穏やかに云つた。葉子はその時始めて、我れにもなくそれまでそこに突立つたまゝぼんやりしてゐたのを知つて、自分に當てないやうなとんきよな事をしてゐたのに氣が附いた。而して自分ながらこの頃は本當に變だと思ひながら、二人の間に、出來るだけ氣を落ち着けて座についた。古藤の顔を見るとやゝ青ざめて、顳顬の所に太い筋を立ててゐた。葉子はその時分になつて始めて少しづつ自分を恢復してゐた。

「古藤さん、倉地さんは少しお酒を召上つた所だからこんな時むづかしいお話をなさるのはよくありませんでしたわ。何んですか知りませんけれども今夜はもうそのお話は綺麗にやめませう。如何？……又ゆつくりね……あ、愛さん、あなたお二階に行つて縫ひかけを大急ぎで仕上げて置いて頂戴、姉さんがあらかたしてしまつてあるけれども……」

さう云つて先刻から逐一二人の爭論を聽いてゐたらしい愛子を階上に追ひ上げた。暫らくして古藤はやうやく落ち着いて自分の言葉を見出だしたやうに、

「倉地さんに物を云つたのは僕が間違つてゐたかも知れません。ぢや倉地さんを前に置いてあなたに云はして下さい。お世辭でも何んでもなく、僕は始めからあなたには倉地さんなんかには無い誠實な所が、何處かに隠れてゐるやうに思つてゐたんです。僕の云ふ事をその誠實な所で判斷して下さい」

「まあ今日はもういゝぢやありませんか、ね。私、あなたの仰しやらうとする事はよつく分つてゐますわ。私決して仇やおろそかには思つてゐません本當に。私だつて考へてはゐますわ。その中とつくり私の方から伺つていたゞき度いと思つてゐた位ですからそれまで……」

一今日聞いて下さい。軍隊生活をしてゐると三人でかうしてお話する機會はさうありさうにはありません。もう歸營の時間が逼つてゐますから、長くお話は出來ないけれども……それだから我慢して聞いて下さい一

それなら何んでも勝手に云つて見るがいゝ、仕儀によつては默つてはゐないからといふ腹を、かすかに皮肉に開いた脣に見せて葉子は古藤に耳を假す態度を見せた。倉地は知らん振りをして庭の方を見續けてゐた。古藤は倉地を全く度外視したやうに葉子の方に向き直つて、葉子の眼に自分の眼を定めた。率直な明らさまなその眼にはその場合にすら子供じみた羞恥の色々湛へてゐた。例の如く古藤は胸の金釦をはめたり外づしたりしながら、

「僕は今まで自分の因循からあなたに對しても木村に對しても本當に友情らしい友情を現はさなかつたのを恥かしく思ひます。僕は疾うにもつと何うかしなければいけなかつたんですけれども……木村、木村つて木村の事ばかり云ふやうですけれども、木村の事を云ふのはあなたの事を云ふのも同じだと僕は思ふんですが、あなたは今でも木村と結婚する氣が確かに有るんですか無いんですか、倉地さんの前でそれをはつきり僕に聞かせて下さい。何事もそこから出發して行かなければこの話は畢竟まはりばかり廻る事になりますから。僕はあなたが木村と結婚する氣はないと云はれても決してそれをどうと云ふんぢやありません。木村は氣の毒です。あの男は表面はあんなに樂天的に見えてゐて、意志が強さうだけれども、隨分涙つぽい方だから、その失望は思ひやられます。けれどもそれだつて仕方がない。第一始めから無理だつたから……あなたのお話のやうなら……。然し事情が事情だつたとは云へ、あなたは何故いやならいやと……そんな過去を云つた所が始まらないからやめませう。……葉子さん、あなたは本當に自分を考へて見て、何處か間違つてゐると思つた事はありませんか。誤解しては困りますよ、僕はあなたが間違つてゐると云ふ積りぢやないんですから。他人の事を他人が判斷する事なんかは出來ない事だけれども、僕はあなたが何處か不自然に見えていけないんです。よく世の中では人生の事はさう單純に行くもんぢやないと云ひますが、而してあなたの生活なんぞを見てゐると、それは極く外面的に見てゐるからさう見えるのかも知れないけれども、實際隨分複雜らしく思はれますが、さうあるべき事なんでせうか。もつと／＼ clear に sum-clear に自分の力だけの事、德だけの事をして暮せさうなものだと僕自身は思ふんですがね……僕にもさうでなくなる時代が來るかも知れないけれども、今の僕としてはさうより考へられないんです、一時は混雜も來、不和も來、喧嘩も來るかは知れないが、結局はさうするより仕方がないと思ひますよ。あなたの事についても僕は前からさういふ風にはつきり片付けてしまひたいとは思つてゐたんですけれど、姑息な心からそれまでに行かずとも、いゝ結果が生れて來はしないかと思つたりして今日までどつちつかずで過ごして來たんです。然しもうこの以上僕には我慢が出來なくなりました。

「倉地さんとあなたと結婚なさるならなさるで木村も斷念めるより外に道はありません。木村に取つては苦しい事だらうが、僕から考へるといゝ、どつち附かずで煩悶してゐるのよりどれだけいいか分りません。だから倉地さんに意向を伺はうとすれば、倉地さんは頭から僕を馬鹿にして話を親身に受けては下さらないんです一

一馬鹿にされる方が惡いのよ一

倉地は庭の方から顏を返して．「どこまで馬鹿に出來上つた男だらう」といふやうに苦笑ひを

しながら古藤を見やつて、又知らぬ顔に庭の方を向いてしまつた。

「そりやさうだ。馬鹿にされる僕は馬鹿だらう。然しあなたには……あなたには僕等が持つてる良心といふものがないんだ。それだけは馬鹿でも僕には判る。あなたが馬鹿と云はれるのと、僕が自分を馬鹿と思つてゐるそれとは、意味が違ひますよ」

「その通り、あなたは馬鹿だと思ひながら、何處か心の隅で、何馬鹿なものか、と思ひよるし、私はあなたを嘘本なしに馬鹿と云ふだけの相違があるよ」

「あなたは氣の毒な人です」

古藤の眼には怒りと云ふよりも、或る激しい感情の涙が薄く宿つてゐた。古藤の心の中の一番奥深い所が汚されないまゝで、ふと眼から覗き出したかと思はれる程、その涙をためた眼は一種の力と清さとを持つてゐた。さすがの倉地もその一言には言葉を返す事なく、不思議さうに古藤の顔を見た。葉子も思はず一種改まつた氣分になつた。そこにはこれまで見慣れてゐた古藤はゐなくなつて、その代りに胡魔化しの利かない強い力を持つた一人の純潔な青年がひよつこり現はれ出たやうに見えた。何を云ふか、又いつものやうなあり來りの道徳論を振り廻すと思ひながら、一種の輕侮を以て默つて聞いてゐた葉子は、この一言で、謂はば古藤を壁際に思ひ存分押し附けてゐた倉地が手もなく彈き返されたのを見た。言葉の上や仕打ちの上やで如何に高壓的に出て見ても、どうする事も出來ないやうな眞實さが古藤から溢れ出てゐた。それに刃向ふには眞實で刃向ふ外はない。倉地はそれを持ち合はしてゐるか何うか葉子には想像がつかなかつた。その場合倉地は暫らく古藤の顔を不思議さうに見やつた後、平氣な顔をして膳から杯を取り上げて、飲み殘して冷えた酒をてれかくしのやうに煽りつけた。葉子はこの時古藤とこんな調子で向ひ合つてゐるのが恐ろしくつてならなくなつた。古藤の眼の前で、ひよつとすると今まで築いて來た生活が崩れてしまひさうな危惧をさへ感じた。で、そのまゝ默つて倉地の眞似をするやうだが、平氣を裝ひつゝ煙管を取り上げた。その場の仕打ちとしては拙いやり方であるのを齒痒くは思ひながら。

古藤は暫らく言葉を途切らしてゐたが、又改まつて葉子の方に話しかけた。

「さう改まらないで下さい。その代り思つただけの事をいゝ加減にしておかずに話し合はせて見て下さい。いゝですか。あなたと倉地さんとのこれまでの生活は、僕見たいな無經驗なものにも、疑問として片付けておく事の出來ないやうな事實を感じさせるんです。それに對するあなたの辯解は詭辯とより僕には響かなくなりました。僕の鈍い直覺ですらがさう考へるのです。だからこの際あなたと木村との關係を明らかにして、あなたから木村に僞りのない告白をして頂きたいんです。木村が一人で生活に苦しみながら譬へやうのない疑惑の中に藻搔いてゐるのを少しでも想像して見たら……今のあなたにはそれを要求するのは無理かも知れないけれども……。第一こんな不安定な狀態からあなたは愛子さんや貞世さんを救ふ義務があると思ひますよ僕は。あなただけに限られずに、四方八方の人の心に響くといふのは恐ろしい事だとは本當にあなたには思へませんかねえ。僕には側で見てゐるだけでも恐ろしいがなあ。人にはいつか總勘定をしなければならない時が來るんだ。いくら借りになつてゐてもびくともしないと云ふ自信もなくつて、ずるずるべつたりに無反省に借りばかり作つてゐるのは考へて見ると不安ぢやないでせうか。葉子さん、あなたには美しい誠實があるんだ。僕はそれを知つて

ゐます。木村にだけは何うした譯か別だけれども、あなたはびた一文でも借りをしてゐると思ふと寢心地が惡いと云ふやうな氣性を持つてゐるぢやありませんか。それに心の借金なら幾ら借金をしてゐても平氣でゐられる譯はないと思ひますよ。何故あなたは好んでそれを踏み躙らうとばかりしてゐるんです。そんな情けない事ばかりしてゐては駄目ぢやありませんか。：：僕ははつきり思ふ通りを云ひ現はし得ないけれども：：云はうとしてゐる事は分つて下さるでせう」

古藤は思ひ入つた風で、脂で汚れた手を幾度も眞黑に日に燒けた眼頭の所に持つて行つた。蚊がぶん〳〵と攻めかけて來るのも忘れたやうだつた。葉子は古藤の言葉をもうそれ以上は聞いてゐられなかつた。折角そつとして置いた心のよどみが掻きまはされて、見まいとしてゐた穢いものがぬら〳〵と眼の前に浮き出て來るやうでもあつた。塗りつぶし〳〵してゐた心の壁に罅が入つて、そこから面も向けられない白い光がちらと射すやうにも思つた。もう然しそれは凡て餘り遲い。葉子はそんな物を無視してかゝる外に道がないと思つた。胡魔化してはいけないと古藤の云つた言葉はその瞬間にもすぐ葉子にきびしく應へたけれども、葉子は押し切つてそんな言葉をかなぐり捨てないではゐられないと自分から諦めた。

「よく分りました。あなたの仰しやる事は何時でも私にはよく判りますわ。その中私乾度木村の方に手紙を出すから安心して下さいまし。この頃はあなたの方が木村以上に神經質になつていらつしやるやうだけれども、御親切はよく私にも分りますわ。倉地さんだつてあなたのお心持は通じてゐるに違ひないんですけれども、あなたが：：何んと云つたらいゝでせうねえ：：あなたがあんまり眞正面から仰しやるもんだから、つい向つ腹をお立てなすつたんでせう。さうでせう、ね、倉地さん。：：こんないやなお話はこれだけにして妹達でも呼んで面白いお話でもしませう」

「僕がもつと偉いと、云ふ事がもつと深く皆さんの心に這入るんですが、僕の云ふ事は本當の事だと思ふんだけれども仕方がありません。それぢや乾度木村に書いてやつて下さい。僕自身は何も物數寄らしくその内容を知りたいとは思つてる譯ぢやないんですから：：」

古藤がまだ何か云はうとしてゐる時に愛子が整頓風呂敷の出來上つたのを持つて、二階から降りて來た。古藤は愛子からそれを受取ると思ひ出したやうに慌てゝ時計を見た。葉子はそれには頓着しないやうに、

「愛さんあれを古藤さんにお目に懸けよう。古藤さん一寸待つていらしつてね。今面白いものをお目に懸けるから。貞ちやんは二階？　ゐないの？　何處に行つたんだらう：：貞ちやん！」

から云つて葉子が呼ぶと臺所の方から貞世が打ち沈んだ顏をして泣いた後のやうに頰を赤くして這入つて來た。矢張り自分の云つた言葉に從つて一人ぼつちで臺所に行つてすゝぎ物をしてゐたのかと思ふと、葉子はもう胸が逼つて眼の中が熱くなるのだつた。

「さあ二人でこの間學校で習つて來たダンスをして古藤さんと倉地さんとにお目にお懸け　一寸コティロンのやうで又變つてゐますの。さ」

二人は十疊の座敷の方に立つて行つた。倉地はこれをきつかけにからつと快活になつて、今までの事は忘れたやうに、古藤にも微笑を與へながら、「それは面白からう」と云ひつゝ後に續いた。愛子の姿を見ると古藤も釣り込まれる風に見えた。葉子は決してそれを見逃さなかつた。

可憐な姿をした姉と妹とは十疊の電燈の下

に向ひ合つて立つた。愛子はいつでもさうなやうにこんな場合でもいかにも冷靜だつた。普通ならばその年頃の少女としては、遣り所もない羞恥を感ずる筈であるのに、愛子は少し眼を伏せてゐる外にはしら〳〵としてゐた。きやつきやつと嬉しがつたり恥かしがつたりする貞世はその夜はどうしたものかたゞ物憂げにそこにしよんぼりと立つた。その夜の二人は妙に無感情な一對の美しい踊り手だつた。葉子が「一二三」と合圖をすると、二人は兩手を腰骨の所に置き添へて靜かに回旋しながら舞ひ始めた。兵營の中ばかりにゐて美しいものを全く見なかつたらしい古藤は、暫らくは何事も忘れたやうに恍惚として二人の描く曲線のさま〳〵に見とれてゐた。

と、突然貞世が兩袖を顏にあてたと思ふと、急に舞の輪から外づれて、一散に玄關側の六疊に駈け込んだ。六疊に達しない中に痛ましく啜り泣く聲が聞こえ出した。古藤ははつと慌ててそつちに行かうとしたが、愛子が一人になつても、顏色も動かさずに踊り續けてゐるのを見るとそのまゝ又立ち止つた。愛子は自分の仕遂すべき務めを仕遂せる事に心を集める樣子で舞ひつゞけた。

「愛さん一寸お待ち」

と云つた葉子の聲は低いながら帛を裂くやうに癇癪らしい調子になつてゐた。別室に妹の駈け込んだのを見向きもしない愛子の不人情さを憤る怒りと、命ぜられた事を中途半端でやめてしまつた貞世を憤る怒りとで葉子は自制が出來ない程慄へてゐた。愛子は靜かにそこに兩手を腰から降ろして立ち止つた。

「貞ちやん何んですその失禮は。出ておいでなさい」

葉子は激しく隣室に向つてから叫んだ。隣室から貞世のすゝり泣く聲が哀れにもまざ〳〵と聞こえて來るだけだつた。抱きしめても〳〵飽き足らない程の愛着をそのまゝ裏返したやうな憎しみが、葉子の心を火のやうにした。葉子は愛子に嚴しく云ひつけて貞世を六疊から呼び返さした。

やがてその六疊から出て來た愛子は、さすがに不安な面持ちをしてゐた。苦しくつて堪らないと云ふから額に手をあてて見たら火のやうに熱いと云ふのだ。

葉子は思はずぎよつとした。生れ落ちるとから病氣一つせずに育つて來た貞世は前から發熱してゐたのを自分で知らずにゐたに違ひない。氣むづかしくなつてから一週間位になるから、何かの熱病にかゝつたとすれば病氣は可なり進んでゐる筈だ。ひよつとすると貞世はもう死ぬ……それを葉子は直覺したやうに思つた。眼の前で世界が急に暗くなつた。電燈の光も見えない程に頭の中が暗い渦卷きで一杯になつた。えゝ、一層の事死んでくれ。この血祭りで倉地が自分にはつきり繫がれてしまはないと誰れが云へよう。人身御供にしてしまはう。さう葉子は恐怖の絶頂にありながら妙にしんとした心持で思ひめぐらした。而してそこにぼんやりしたまゝ突つ立つてゐた。

いつの間に行つたのか、倉地と古藤とが六疊の間から首を出した。

「お葉さん……ありや泣いた爲めばかりの熱ぢやない。早く來て御覽」

倉地の慌てるやうな聲が聞こえた。

それを聞くと葉子は始めて事の眞相が分つたやうに、夢から眼覺めたやうに、急に頭がはつきりして六疊の間に走り込んだ。貞世は一際脊丈けが縮まつたやうに小さく丸まつて、座蒲團に顏を埋めてゐた。膝をついて側によつて後頸の所を觸つて見ると、氣味の惡い程の熱が葉子の手に傳はつて來た。

その瞬間に葉子の心はでんぐり返しを打つた。いとしい貞世につらく當つたら、而して若し貞世がその爲めに命を落すやうな事でもあつたら、倉地を大丈夫掴む事が出來ると何がなしに思ひ込んで、而かもそれを實行した迷信とも妄想とも例へやうのない、狂氣染みた結願が何んの苦もなくばら／＼に崩れてしまつて、その跡にはどうかして貞世を活かしたいといふ素直な涙ぐましい願ひばかりがしみ／＼と働いてゐた。自分の愛するものが死ぬか活きるかの境目に來たと思ふと、生への執着と死への恐怖とが、今まで想像も及ばなかつた強さでひしひしと感ぜられた。自分を八つ裂きにしても貞世の命は取りとめなくてはならぬ。若し貞世が死ねばそれは自分が殺したんだ。何も知らない、神のやうな少女を……葉子はあらぬことまで勝手に想像して勝手に苦しむ自分をたしなめる積りでゐても、それ以上に種々な豫想が激しく頭の中で働いた。

葉子は貞世の背を擦りながら、嘆願するやうに哀愁をこふやうに古藤や倉地や愛子までを見まはした。それらの人々は何れも心痛げな顏色を見せてゐないではなかつた。然し葉子から見るとそれは皆んな贋物だつた。

やがて古藤は兵營への歸途醫者を頼むといつて歸つて行つた。葉子は、一人でも、どんな人でも貞世の身近から離れて行くのをつらく思つた。そんな人達は多少でも貞世の生命を一緒に持つて行つてしまふやうに思はれてならなかつた。

日はとつぷり暮れてしまつたけれども何處の戸締りもしないこの家に、古藤が云つてよこした醫者がやつて來た。而して貞世は明らかに腸チブスに罹つてゐると診斷されてしまつた。

四十二

「お姉樣……行つちやいやあ……」

まるで四つか五つの幼兒のやうに頑是なく我儘になつてしまつた貞世の聲を聞き殘しながら葉子は病室を出た。折りからじめ／＼と降りつづいてゐる五月雨に、廊下には夜明けからの薄暗さがそのまゝ殘つてゐた。白衣を着た看護婦が暗いだだつ廣い廊下を、上草履の大きな音をさせながら案内に立つた。十日の餘も、夜晝の見界もなく、帶も解かずに看護の手を盡した葉子は、どうかするとふら／＼となつて、頭だけが五體から離れて何處ともなく漂つて行くかとも思ふやうな不思議な錯覺を感じながら、それでも緊張し切つた心持になつてゐた。凡ての音響、凡ての色彩が極度に誇張されてその感覺に觸れて來た。貞世が腸チブスと診斷されたその晩、葉子は擔架に乘せられたその憐れな小さな妹に附添つてこの大學病院の隔離室に來てしまつたのであるが、その時別れたなりで、倉地は一度も病院を尋ねては來なかつたのだ。葉子は愛子一人が留守する山内の家の方に、少し不安心ではあるけれどもいつか暇をやつたつやを呼び寄せておかうと思つて、宿許に云つてやると、つやはあれから看護婦を志願して京橋の方の或る病院にゐるといふ事が知れたので、已むを得ず倉地の下宿から年を取つた女中を一人頼んでゐて貰ふ事にした。病院に來てからの十日――それは昨日から今日にかけての事のやうに短く思はれもし、一日が一年に相當するかと疑はれる程永くも感じられた。

その長く感じられる方の期間には、倉地と愛子との姿が不安と嫉妬との對象となつて葉子の心の眼に立ち現はれた。葉子の家を預かつてゐるものは倉地の下宿から來た女だとすると、それは倉地の犬と云つてもよかつた。そこに一人殘された愛子……長い時間の間にどんな事でも起り得ずにゐるものか。さう氣を廻し出す

と葉子は貞世の寢臺の傍にゐて、熱の爲めに脣がかさ〳〵になつて、半分眼を開けたまゝ昏睡してゐるその小さな顏を見詰めてゐる時でも、思はずかつとなつてそこを飛び出さうとするやうな衝動に驅り立てられるのだつた。

然し又短く感じられる方の期間にはたゞ貞世ばかりがゐた。末子として兩親から甞める程溺愛もされ、葉子の唯一の寵兒ともされ、健康で、快活で、無邪氣で、我儘で、病氣といふ事などはつひぞ知らなかつたその子は、引き續いて父を失ひ、母を失ひ、葉子の病的な呪詛の犧牲となり、突然死病に取りつかれて、夢にも現にも思ひもかけなかつた死と向ひ合つて、ひたすらに恐れをのゝいてゐる、その姿は、千丈の谷底に續く崕の際に兩手だけで垂れ下つた人が、そこの土がぼろ〳〵と崩れ落ちる度每に、懸命になつて助けを求めて泣き叫びながら、少しでも手がかりのある物に獅嚙み附かうとするのを見るのと異ならなかつた。而かもそんなはゝめに貞世を陷れてしまつたのは結局自分に責任の大部分があると思ふと、葉子はいとしさ悲しさで胸も腸も裂けるやうになつた。貞世が死ぬにしても、せめては自分だけは貞世を愛し拔いて死なせたかつた。貞世を假りにもいぢめるとは……まるで天使のやうな心で自分を信じ切り愛し拔いてくれてゐた貞世を假りにも沒義道に取扱つたとは……葉子は自分ながら自分の心の埒なさ恐ろしさに悔いても〳〵及ばない悔いを感じた。そこまで詮じつめて來ると、葉子には倉地もなかつた。唯ゝ命にかけても貞世を病氣から救つて、貞世が元通りにつやつやしい健康に歸つた時、貞世を大事に〳〵自分の胸にかき抱いてやつて、

「貞ちやんお前はよくこそ治つてくれたね。姉さんを恨まないでおくれ。姉さんはもう今までの事を皆んな後悔して、これからはあなたをいつまでも〳〵後生大事にしてあげますからね」

としみ〴〵と泣きながら云つてやりたかつた。たゞそれだけの願ひに固まつてしまつた。さうした心持になつてゐると、時間は唯ゝ矢のやうに飛んで過ぎた。死の方へ貞世を連れて行く時間は唯ゝ矢のやうに飛んで過ぎると思へた。

この奇怪な心の葛藤に加へて、葉子の健康はこの十日程の激しい興奮と活動とでみじめにも害ひ傷つけられてゐるらしかつた。緊張の極點にゐるやうな今の葉子には左程と思はれないやうにもあつたが、貞世が死ぬか治るかして一と息つく時が來たら、何うして肉體を支へる事が出來ようかと危まないではゐられない豫感が嚴しく葉子を襲ふ瞬間は幾度もあつた。

さうした苦しみの最中に珍らしく倉地が尋ねて來たのだつた。丁度何もかも忘れて貞世の事ばかり氣にしてゐた葉子は、この案内を聞くと、まるで生れ代つたやうにその心は倉地で一杯になつてしまつた。

病室の中から叫びに叫ぶ貞世の聲が廊下まで響いて聞こえたけれども、葉子はそれには頓着してゐられない程無氣になつて看護婦の後を追つた。歩きながら衣紋を整へて、例の左手を擧げて鬢の毛を器用にかき上げながら、應接室の所まで來ると、そこはさすがに幾分か明るくなつてゐて、開き戸の側の硝子窓の向うに巖乘な倉地と、思ひもかけず岡の華車な姿とが眺められた。

葉子は看護婦のゐるのも岡のゐるのも忘れたやうに、いきなり倉地に近づいて、その胸に自分の顏を埋めてしまつた。何よりもかによりも長い〳〵間遇ひ得ずにゐた倉地の胸は、數限りもない聯想に飾られて、凡ての疑惑や不快を一掃するに足る程なつかしかつた。倉地の胸からは觸れ慣れた衣ざはりと、强烈な肉の匂ひとが、葉子の病的に高じた感覺を亂醉さす程に傳はつ

て來た。

「どうだ、ちつとはいゝか」

「おゝこの聲だ、この聲だ―…」葉子はかく思ひながら悲しくなつた。それは長い間闇の中に閉ぢこめられてゐたものが偶然燈の光を見た時に胸を突いて湧き出て來るやうな悲しさだつた。葉子は自分の立場を殊更ら憐れに描いて見たい衝動を感じた。

「駄目です。貞世は、可哀さうに死にます」

「馬鹿な…あなたにも似合はん、さう早う落膽する法があるものかい。どれ一つ見舞つてやらう」

さう云ひながら倉地は先刻からそこにゐた看護婦の方に振り向いた樣子だつた。そこに看護婦も岡もゐるといふ事はちやんと知つてゐながら、葉子は誰れもゐないもののやうな心持で振舞つてゐたのを思ふと、自分ながらこの頃は心が狂つてゐるのではないかとさへ疑つた。看護婦は倉地と葉子との對話振りで、この美しい婦人の素性を呑み込んだと云ふやうな顏をしてゐた。岡はさすがに愼ましやかに心痛の色を顏に現はして椅子の背に手をかけたまゝ立つてゐた。

「あゝ、岡さんあなたもわざ／＼お見舞下さつて難有う御座いました」

葉子は少し挨拶の機會をおくらしたと思ひながらもやさしくかう云つた。岡は頰を紅めたまゝ默つてうなづいた。

「丁度今見えたもんだで御一緒したが、岡さんはこゝでお歸りを願つたがいゝと思ふが…」（さう云つて倉地は岡の方を見た）何しろ病氣が病氣ですから…」

「私、貞世さんに是非お會ひしたいと思ひますからどうかお許し下さい」

岡は思ひ入つたやうにかう云つて、丁度そこに看護婦が持つて來た二枚の白い上つ張りの中少し古く見える一枚を取つて倉地よりも先きに着始めた。葉子は岡を見るともう一つのたくらみを心の中で案じ出してゐた。岡を出來るだけ度々山内の家の方に遊びに行かせてやらう。それは倉地と愛子とが接觸する機會をいくらかでも妨げる結果になるに違ひない。岡と愛子とが互に愛し合ふやうになつたら…なつたとしてもそれは惡い結果といふ事は出來ない。岡は病身ではあるけれども地位もあれば金もある。それは愛子のみならず、自分の將來に取つても役に立つに相違ない。…とさう思ふすぐその下から、どうしても蟲の好かない愛子が、葉子の意志の下にすつかり繋ぎ附けられてゐるやうな岡を偸んで行くのを見なければならないのが面憎くも妬ましくもあつた。

葉子は二人の男を案内しながら先きに立つた。暗い長い廊下の兩側に立ち列んだ病室の中からは、呼吸困難の中からかすれたやうな聲でディフテリヤらしい幼兒の泣き叫ぶのが聞こえたりした。貞世の病室からは一人の看護婦が半ば身を乘り出して、部屋の中に向いて何か云ひながら、頻りとこつちを眺めてゐた。貞世の何か云ひ募る言葉さへが葉子の耳に屆いて來た。その瞬間にもう葉子はそこに倉地のゐる事なども忘れて、急ぎ足でその方に走り近づいた。

「そらもう歸つていらつしやいましたよ」

と云ひながら顏を引つ込めた看護婦に續いて、飛び込むやうに病室に這入つて見ると、貞世は亂暴にも寢臺の上に起き上つて、膝小僧も露はになる程取り亂した姿で、手を顏にあてたまゝおい／＼と泣いてゐた。葉子は驚いて寢臺に近寄つた。

「何んと云ふあなたは聞き譯のない…貞ちやんその病氣で、あなた、寢臺から起き上つたりすると何時までも治りはしませんよ。あなたの好きな倉地の小父さんと岡さんがお見舞に來て

下さつたのですよ。はつきり分りますか そら、そこを御覽、横になつてから……

さう云ひ〳〵葉子は如何にも愛情に滿ちた器用な手つきで輕く貞世を抱へて床の上に臥かしつけた。貞世の額は今まで盛んな運動でもしてゐたやうに美しく活々と紅味をさして、房々した髮の毛は少しもつれて汗ばんで額際に粘りついてゐた。それは病氣を思はせるよりも過剩の健康とでも云ふべきものを思はせた。唯ゞその兩眼と脣だけは明らかに尋常でなかつた。すつかり充血したその眼は普段よりも大きくなつて二重瞼になつてゐた。その眸は熱の爲めに燃えて、おど〳〵と何者かを見詰めてゐるやうにも、何かを見出さうとして尋ねあぐんでゐるやうにも見えた。その樣子は例へば葉子を見入つてゐる時でも、葉子を貫いて葉子の後ろの方遙かの所にある或る者を見極めようと有らん限りの力を盡してゐるやうだつた。脣は上下ともからからになつて、內紫といふ柑類の實をむいて天日に干したやうに乾いてゐた。それは見るもいた〳〵しかつた。その脣の中から高熱の爲めに一種の臭氣が呼吸の度毎に吐き出される、その臭氣が脣の著しいゆがめ方の爲めに、眼に見えるやうだつた。貞世は葉子に注意されて物憂げに少し眼をそらして倉地と岡とのゐる方を見たが、それが何うしたんだといふやうに、少しの興味も見せずに又葉子を見入りながらせつせと肩をゆすつて苦しげな呼吸をつゞけた。

「お姉さま……水……氷……もう行つちやいや……」

これだけ幽かに云ふともう苦しさうに眼をつぶつてほろ〳〵と大粒の涙をこぼすのだつた。

倉地は陰鬱な雨脚で灰色になつたガラス窓を背景にして突つ立ちながら、默つたまゝ不安らしく首をかしげた。岡は日頃の滅多に泣かない性質に似ず、倉地の後ろにそつと引きそつて涙ぐんでゐた。葉子には後ろを振り向いて見ないでもそれが眼に見るやうにはつきり分つた。貞世の事は自分一人で背負つて立つ。餘計な憐れみはかけて貰ひたくない。そんないら〳〵しい反抗的な心持さへその場合起らずにはゐなかつた。過ぐる十日といふもの一度も見舞ふ事をせずにゐて、今更らその由々しげな顏付きは何んだ。さう倉地にでも岡にでも云つてやりたい程葉子の心は棘々しくなつてゐた。で、葉子は後ろを振り向きもせずに、箸の先きにつけた脫脂綿を氷水の中に浸しては、貞世の口を拭つてゐた。

かうやつてものの稍ゝ二十分が過ぎた。飾り氣も何もない板張りの病室には段々夕暮の色が催して來た。五月雨はじめ〳〵と小休みなく戶外では降りつゞいてゐた。「お姉樣治して頂戴よう」とか「苦しい……苦しいからお藥を下さい」とか「もう熱を計るのはいや」とか時々囈言のやうに云つては、葉子の手に嚙り附く貞世の姿は何時息氣を引取るかも知れないと葉子に思はせた。

「ではもう歸りませうか」

倉地が岡を促すやうにかう云つた。岡は倉地に對し葉子に對して少しの間返事を敢てするのを憚つてゐる樣子だつたが、とう〳〵思ひ切つて、倉地に向つて云つてゐながら少し葉子に對して歎願するやうな調子で、

「私、今日は何んにも用がありませんから、こちらに殘らしていたゞいて、葉子さんのお手傳ひをしたいと思ひますから、お先きにお歸り下さい」

と云つた。岡はひどく意志が弱さうに見えながら、一度思ひ入つて云ひ出した事は、とう〳〵仕果せずにはおかない事を、葉子も倉地も今までの經驗から知つてゐた。葉子は結局それを許す外はないと思つた。

「ぢや俺しはお先きするがお葉さん一寸……」と云つて倉地は入口の方にしざつて行つた。折から貞世はすや／＼と昏睡に陥つてゐたので、葉子はそつと自分の袖を捕へてゐる貞世の手をほどいて、倉地の後から病室を出た。病室を出るとすぐ葉子はもう貞世を看護してゐる葉子ではなかつた。

　葉子はすぐに倉地に引き添つて肩をならべながら廊下を應接室の方へ傳つて行つた。

「お前け隨分と疲れとるよ。用心せんといかんぜ」

「大丈夫……こつちは大丈夫です。それにしてもあなたは……お忙しかつたんでせうね」

例へば自分の言葉は稜針で、それを倉地の心臓に揉み込むと云ふやうな鋭い語氣になつてさう云つた。

「全く忙しかつた。あれから俺しはお前の家には一度もよう行かずにゐるんだ」

さう云つた倉地の返事には如何にもわだかまりがなかつた。葉子の鋭い言葉にも少しも引けめを感じてゐる風は見えなかつた。葉子でさへが危くそれを信じようとする程だつた。然しその瞬間に葉子は燕返しに自分に歸つた。何をいゝ加減な……それは白々しさが少し過ぎてゐる。この十日の間に、倉地に取つてはこの上もない機會を與へられた十日の間に、杉森の中の淋しい家にその足跡の印されなかつた譯があるものか。……さらぬだに、病み果て疲れ果てた頭腦に、極度の緊張を加へた葉子は、ぐら／＼とよろけて足許が廊下の板に着いてゐないやうな憤怒に襲はれた。

　應接室まで來て上つ張りを脱ぐと、看護婦が噴霧器を持つて來て倉地の身のまはりに消毒藥を振りかけた。その幽かな匂ひがやうやく葉子をはつきりした意識に歸らした。葉子の健康が一日々々と云はず、一時間毎にもどん／＼弱つて行くのが身に沁みて知れるにつけて、倉地の何處にも批點のないやうな巖乘な五體にも心にも、葉子は遣り所のないひがみと憎しみを感じた。倉地に取つては葉子は段々と用のないものになつて行きつゝある。絶えず何か眼新らしい冒險を求めてゐるやうな倉地に取つては、葉子は、もう散り際の花に過ぎない。

　看護婦がその室を出ると、倉地は窓の所に寄つて行つて、衣嚢の中から大きな鰐皮のポッケットブックを取出して、拾圓札の可なりの束を引き出した。葉子はそのポッケットブックにも色々の記憶を持つてゐた。竹柴館で一夜を過ごしたその朝にも、その後の度々のあひびきの後の支拂ひにも、葉子は倉地からそのポッケットブックを受取つて、贅澤な支拂ひを心持よくしたのだつた。而してそんな記憶はもう二度とは繰り返せさうもなく、何んとなく葉子には思へた。そんな事をさせてなるものかと思ひながらも、葉子の心は妙に弱くなつてゐた。

「又足らなくなつたらいつでも云つてよこすがいゝから……俺れの方の仕事はどうも面白くなくなつて來をつた。正井の奴何か容易ならぬ惡戯をしをつた樣子もあるし、油斷がならん。度度俺れがこゝに來るのも考へ物だて」

紙幣を渡しながらかう云つて倉地は應接室を出た。可なり濡れてゐるらしい靴を履いて、雨水で重さうになつた洋傘をばさ／＼云はせながら開いて、倉地は輕い挨拶を殘したまゝ夕闇の中に消えて行かうとした。間を置いて道側に點された電燈の灯が、濡れた青葉を辷り落ちて泥濘の中に燐のやうな光を漂はしてゐた。その中を段々南門の方に遠ざかつて行く倉地を見送つてゐると葉子は迚もそのまゝそこに居殘つてはゐられなくなつた。

　誰れの履物とも知らずそこにあつた吾妻下駄をつかけて葉子は雨の中を玄關から走り出

て倉地の後を追つた。そこにある廣場には欅や櫻の木が疎らに立つてゐて、大規模な増築の爲めの材料が、煉瓦や石や、處々に積み上げてあつた。東京の中央にこんな所があるかと思はれる程物淋しく靜かで、街燈の光の屆く所だけに白く光つて斜めに雨のそゝぐのがほのかに見えるばかりだつた。寒いとも暑いとも更に感じなく過ごして來た葉子は、雨が襟脚に落ちたので初めて寒いと思つた。關東に時々襲つて來る時ならぬ冷え日でその日もあつたらしい。葉子は輕く身震ひしながら、一圖に倉地の後を追つた。稍〻十四五間も先きにゐた倉地は跫音を聞きつけたと見えて立ち停つて振り返つた。葉子が追ひ付いた時には、肩はいゝ加減濡れて、雨の滴が前髮を傳つて額に流れかゝるまでになつてゐた。葉子は幽かな光にすかして、倉地が迷惑さうな顏付きで立つてゐるのを知つた。葉子は我れにもなく倉地が傘を持つ爲めに水平に曲げたその腕にすがり付いた。

「先刻のお金はお返しします。義理づくで他人からしていたゞくんでは胸がつかへますから……」

倉地の腕の所で葉子のすがり付いた手はぶるぶると震へた。傘からは滴りが殊更ら繁く落ちて、單衣をぬけて葉子の肌に滲み通つた。葉子は、熱病患者が冷たいものに觸れた時のやうな不快な惡寒を感じた。

「お前の神經は全く少しどうかしとるぜ。俺れの事を少しは思つて見てくれてもよからうが……疑ふにもひがむにも程があつていゝ筈だ。俺れはこれまでにどんな不貞腐れをした。云へるなら云つて見ろ」

さすがに倉地も氣にさへてゐるらしく見えた。

「云へないやうに上手に不貞腐れをなさるのぢや、云はうつたつて云へやしませんわね。何故あなたははつきり葉子には厭きた、もう用がないとお云ひになれないの。男らしくもない。さ、取つて下さいましこれを」

葉子は紙幣の束をわな〳〵する手先きで倉地の胸の所に押しつけた。

「而してちやんと奧さんをお呼び戻しなさいまし。それで何もかも元通りになるんだから。憚りながら……」

「愛子は」と口許まで云ひかけて、葉子は恐ろしさに息氣を引いてしまつた。倉地の細君の事まで云つたのはその夜が始めてだつた。これほど露骨な嫉妬の言葉は、男の心を葉子から遠ざからすばかりだと知り拔いて愼んでゐた癖に、葉子は我れにもなく、がみ〳〵と妹の事まで云つて退けようとする自分に惘れてしまつた。

葉子がそこまで走り出て來たのは、別れる前にもう一度倉地の強い腕でその暖かく廣い胸に抱かれたい爲めだつたのだ。倉地に惡たれ口をきいた瞬間でも葉子の願ひはそこにあつた。それにも拘はらず口の上では全く反對に、倉地を自分からどん〳〵離れさすやうな事を云つて退けてゐるのだ。

葉子の言葉が募るにつれて、倉地は人目を憚るやうにあたりを見廻した。互々に殺し合ひたい程の執着を感じながら、それを言ひ現はす事も信ずる事も出來ず、要もない猜疑と不滿とに遮られて、見る〳〵路傍の人のやうに遠ざかつて行かねばならぬ、――そのおそろしい運命を葉子は殊更ら痛切に感じた。倉地があたりを見廻した――それだけの擧動が、機を見計つていきなりそこを逃げ出さうとするもののやうにも思ひなされた。葉子は倉地に對する憎惡の心を切ないまでに募らしながら、益〻相手の腕に堅く寄り添つた。

暫らくの沈默の後、倉地はいきなり洋傘をそこにかなぐり捨てて、葉子の頭を右腕で卷きすくめようとした。葉子は本能的に激しくそれに

逆つた。而して紙幣の束を泥濘の中に敲きつけた。而して二人は野獸のやうに爭つた。

「勝手にせい……馬鹿つ」

やがてさう激しく云ひ捨てると思ふと、倉地は腕の力を急にゆるめて、洋傘を拾ひ上げるなり、後をも向かずに南門の方に向いてずん〳〵と歩き出した。憤怒と嫉妬とに興奮し切つた葉子は躍起となつてその後を追はうとしたが、脚は痺れたやうに動かなかつた。唯〻段々遠ざかつて行く後姿に對して、熱い涙が留度なく流れ落ちるばかりだつた。

しめやかな音を立てて雨は降りつゞけてゐた。隔離病室の有る限りの窓にはかん〳〵と灯が點つて、白いカーテンが引いてあつた。陰慘な病室にさう赤々と灯の點つてゐるのは却つてあたりを物すさまじくして見せた。

葉子は紙幣の束を拾ひ上げる外、術のないのを知つて、しを〳〵とそれを拾ひ上げた。貞世の入院料は何んと云つてもそれで仕拂ふより仕樣がなかつたから。言ひやうのない口惜涙が更に湧き返つた。

四十三

その夜遲くまで岡は本當に忠實やかに貞世の病床に附添つて世話をしてくれた。口少なにしとやかによく氣をつけて、貞世の欲する事を豫め知り拔いてゐるやうな岡の看護振りは、通り一片な看護婦の働き振りとは丸で較べものにならなかつた。葉子は看護婦を早く寢かしてしまつて、岡と二人だけで夜の更けるまで氷嚢を取りかへたり、熱を計つたりした。

高熱の爲めに貞世の意識は段々不明瞭になつて來てゐた。退院して家に歸りたいとせがんで仕やうのない時は、そつと向きをかへて臥かしてから、「さあもうお家ですよ」と云ふと、嬉しさうに笑顏を漏らしたりした。それを見なければならぬ葉子は堪らなかつた。どうかした拍子に、葉子は飛び上りさうに心が責められた。これで貞世が死んでしまつたなら、どうして生き永へてゐられよう。貞世をこんな苦しみに陷れたものは皆んな自分だ。自分が前通りに貞世に優しくさへしてゐたら、こんな死病は夢にも貞世を襲つて來はしなかつたのだ。人の心の報いは恐ろしい……さう思つて來ると葉子は誰れに詫びやうもない苦惱に息氣づまつた。

綠色の風呂敷で包んだ電燈の下に、氷嚢を幾つも頭と腹部とにあてがはれた貞世は、今にも絕え入るかと危まれるやうな荒い息氣づかひで夢現の間をさまよふらしく、聞きとれない囈言を時々口走りながら、眠つてゐた。岡は部屋の隅の方に愼ましく突つ立つたまゝ、綠色を透して來る電燈の光で殊更ら青白い顏色をして、ぢつと貞世を見守つてゐた。葉子は寢臺に近く椅子を寄せて、貞世の顏を覗き込むやうにしながら、貞世の爲めに何かし續けてゐなければ、貞世の病氣が益〻重るといふ迷信のやうな心づかひから、要もないのに絕えず氷嚢の位置を取りかへてやつたりなどしてゐた。

而して短い夜は段々に更けて行つた。葉子の眼からは絕えず涙がはふり落ちた。倉地と思ひもかけない別れ方をしたその記憶が、たゞ譯もなく葉子を涙ぐました。

と、ふつと葉子は山內の家の有樣を想像に浮べた。玄關側の六疊ででもあらうか、二階の子供の勉强部屋ででもあらうか、この夜更けを下宿から送られた老女が寢入つた後、倉地と愛子とが話し續けてゐるやうな事はないか。あの不思議に心の裏を決して他人に見せた事のない愛子が、倉地を何う思つてゐるかそれは分らない。恐らくは倉地に對しては何んの誘惑も感じてはゐないだらう。然し倉地はあゝ云ふしたたか者だ。愛子は骨に徹する怨恨を葉子に對して

抱いてゐる。その愛子が葉子に對して復讐の機會を見出したと此の晩思ひ定めなかつたと誰れが保證し得よう。そんな事は疾うの昔に行はれてしまつてゐるのかも知れない。若しさうなら、今頃は、このしめやかな夜を……太陽が消えて失くなつたやうな寒さと闇とが葉子の心に被ひかぶさつて來た。愛子一人位を指の間に握りつぶす事が出來ないと思つてゐるのか……見てゐるがいゝ。葉子は苛立ち切つて毒蛇のやうな殺氣立つた心になつた。而して靜かに岡の方を顧みた。

何か遠い方の物でも見つめてゐるやうに少しぼんやりした眼付きで貞世を見守つてゐた岡は、葉子に振り向かれると、その方に素早く眼を轉じたが、その物凄い無氣味さに脊髓まで襲はれた風で、顏色をかへて眼をたじろがした。

「岡さん。私一生のお頼み……これからすぐ山内の家まで行つて下さい。而して不用な荷物は今夜の中に皆んな倉地さんの下宿に送り返してしまつて、私と愛子の普段使ひの着物と道具とを持つて、すぐこゝに引越して來るやうに愛子に云ひつけて下さい。若し倉地さんが家に來てゐたら、私から確かに返したと云つてこれを渡して下さい。(さう云つて葉子は懷紙に拾圓紙幣の束を包んで渡した)何時までかゝつても構はないから今夜の中にね。お頼みを聞いて下さつて?」

何んでも葉子の云ふ事なら口返答をしない岡だけれどもこの常識を外づれた葉子の言葉には當惑して見えた。岡は窓際に行つてカーテンの蔭から戸外を透かして見て、ポッケットから巧緻な浮彫を施した金時計を取り出して時間を讀んだりした。而して少し躊躇するやうに、

「それは少し無理だと私、思ひますが……あれだけの荷物を片付けるのは……」

「無理だからこそあなたを見込んでお願ひするんですわ。さうねえ、入用のない荷物を倉地さんの下宿に屆けるのは何かも知れませんわね。ぢや構はないから置手紙を婆やといふのに渡しておいて下さいまし。而して婆やに云ひつけて明日でも倉地さんの所に運ばして下さいまし。それなら何もいさくさはないでせう。それでもおいや? いかゞ?……よう御座います。それぢやもうよう御座います。あなたをこんなに晩くまでお引きとめしておいて、又候面倒なお願ひをしようとするなんて私もどうかしてゐましたわ。……貞ちやん何んでもないのよ。私今岡さんとお話してゐたんですよ。汽車の音でも何んでもないんだから、心配せずにお休み……どうして貞世はこんなに怖い事ばかり云ふやうになつてしまつたんでせう。夜中などに一人で起きてゐて譫言を聞くとぞーつとする程氣味が惡くなりますのよ。あなたはどうぞもうお引取り下さいまし。私車屋をやりますから……」

「車屋をおやりになる位なら私行きます」

「でもあなたが倉地さんに何んとか思はれなさるやうぢやお氣の毒ですもの」

「私、倉地さんなんぞを憚つて云つてゐるのではありません」

「それはよく分つてゐますわ。でも私はしてはそんな結果も考へて見てからお頼みするんでしたのに……」

かう云ふ押問答の末に岡はとう／＼愛子の迎へに行く事になつてしまつた。倉地がその夜は屹度愛子の所にゐるに違ひないと思つた葉子は、病院に泊るものと高をくゝつてゐた岡が突然眞夜中に訪れて來たので倉地もさすがに慌てずにはゐられまい。それだけの狼狽をさせるにしても快い事だと思つてゐた。葉子は宿直部屋に行つて、しだらなく睡入つた當番の看護婦を呼び起して人力車を頼ました。

岡は思ひ入つた樣子でそつと貞世の病室を出

た。出る時に岡は持つて來たパラフィン紙に包んである包みを開くと美しい花束だつた。岡はそれをそつと貞世の枕許において出て行つた。暫らくすると、しと／＼と降る雨の中を、岡を乘せた人力車が走り去る音が幽かに聞こえて、やがて遠くに消えてしまつた。看護婦が激しく玄關の戸締りする音が響いて、その後は寂莫と夜が更けた。遠くの部屋でチフテリヤに罹つてゐる子供の泣く聲が間遠に聞こえる外には、音といふ音は絶え果ててゐた。

葉子は唯々一人徒らに興奮して狂ふやうな自分を見出した。不眠で過ごした夜が三日も四日も續いてゐるのに拘はらず、睡氣といふものは少しも襲つて來なかつた。重石を垂り下げたやうな腰部の鈍痛ばかりでなく、脚部は拔けるやうにだるく冷え、肩は動かす度毎にめりめり音がするかと思ふ程固く凝り、頭の心は絶間なくぎり／＼と痛んで、そこから遣り所のない悲哀と癇癪とが滾々と湧いて出た。もう鏡は見まいと思ふ程顔はげつそりと肉がこけて、眼の周りの青黑い暈は、さらぬだに大きい眼を殊更にぎら／＼と大きく見せた。鏡を見まいと思ひながら、葉子は折ある毎に帶の間から懷中鏡を出して自分の顔を見詰めないではゐられなかつた。

葉子は貞世の寢息を伺つていつものやうに鏡を取り出した。而して顔を少し電燈の方に振り向けてぢつと自分を映して見た。夥しい毎日の拔毛で額際の著しく透いてしまつたのが第一に氣になつた。少し振り仰いで顔を映すと頰のこけたのが左程に目立たないけれども、顎を引いて下俯きになると、口と耳との間には縱に大きな溝のやうな凹みが出來て、下顎骨が目立つていかめしく現はれ出てゐた。長く見詰めてゐる中には段々慣れて來て、自分の意識で强ひて矯正する爲めに、痩せた顔も左程とは思はれなくなり出すが、ふと鏡に向つた瞬間には、これが葉子々々と人々の眼を欹たした自分かと思ふ程醜かつた。さうして鏡に向つてゐる中に、葉子はその投影を自分以外の或る他人の顔ではないかと疑ひ出した。自分の顔より映る筈がない。それだのにそこに映つてゐるのは確かに誰れか見も知らぬ人の顔だ。苦痛に虐げられ、惡意に歪められ、煩惱の爲めに支離滅裂になつた亡者の顔：：葉子は脊筋に一時に氷をあてられたやうになつて、身震ひしながら思はず鏡を手から落した。

金屬の床に觸れる音が雷のやうに響いた。葉子は慌てて貞世を見やつた。貞世は眞赤に充血して熱の籠つた眼をまんじりと開いて、さも不思議さうに中有を見やつてゐた。

「愛姉さん：：遠くでピストルの音がしたやうよ」

はつきりした聲でかう云つたので、葉子が顔を近寄せて何か云はうとすると昏々として多愛もなく又眠りに陷るのだつた。貞世の眠るのと共に、何んとも云へない無氣味な死の脅やかしが卒然として葉子を襲つた。部屋の中にはそこら中に死の影が滿ち／＼てゐた。眼の前の氷水を入れたコップ一つも次ぎの瞬間にはひとりでに倒れて壞れてしまひさうに見えた。物の影になつて薄暗い部分は見る／＼部屋中に擴がつて、凡てを冷たく暗く包み終るかとも疑はれた。死の影は最も濃く貞世の眼と口の周りに集まつてゐた。そこには死が蛆のやうにゝゝよろにゝゝよろと蠢めいてゐるのが見えた。それよりも：：それよりもその影はそろ／＼と葉子を眼がけて四方の壁から集まり近づかうと犇めいてゐるのだ。葉子は殆んどその死の姿を見るやうに思つた。頭の中がしいんと冷え通つて、冴え切つた寒さがぞく／＼と四肢を震はした。

その時宿直室の掛時計が遠くの方で一時を

打つた。

　若しこの音を聞かなかつたら、葉子は恐ろしさのあまり自分の方から宿直室に駈け込んで行つたかも知れなかつた。葉子はおびえながら耳を欹てた。宿直室の方から看護婦が草履をばた〳〵と引きずつて來る音が聞こえた。葉子はほつと息氣をついた。而して慌てるやうに身を動かして、貞世の頭の氷嚢の溶け具合を驗べて見たり、搔巻きを整へてやつたりした。海の底に一つ沈んでぎらつと光る貝殼のやうに、床の上で影の中に物凄く横はつてゐる鏡を取り上げて懷ろに入れた。而して一室々々と近づいて來る看護婦の跫音に耳を澄ましながら又考へ續けた。

　今度は山内の家の有様が宛らまざ〳〵と眼に見るやうに想像された。岡が夜更けにそこを訪れた時には倉地が確かにゐたに違ひない。而して毎時の通り一種の粘り強さを以て葉子の言傳てを取次ぐ岡に對して、激しい言葉でその理不盡な狂氣染みた葉子の出來心を罵つたに違ひない。倉地と岡との間には暗々裡に愛子に對する心の爭鬪が行はれたらう。岡の差出す紙幣の束を怒りに任せて疊の上に敲きつける倉地の威丈高な様子、少女にはあり得ない程の冷靜さで他人事のやうに二人の間のいきさつを伏眼ながらに見守る愛子の一種毒々しい妖艶さ。さう云ふ姿が宛ら眼の前に浮んで見えた。普段の葉子だつたらその想像は葉子をその場にゐるやうに興奮させてゐたであらう。けれども死の恐怖に激しく襲はれた葉子は何んとも云へない嫌惡の情を以ての外にはその場面を想像する事が出來なかつた。何んと云ふ淺間しい人の心だらう。結局は何もかも滅びて行くのに、永遠な灰色の沈默の中に崩れ込んで仕舞ふのに、目前の貪婪に心火の限りを燃やして、餓鬼同様に命を嚙み合ふとは何んと云ふ淺間しい心だらう。而かもその醜い爭ひの種子を播いたのは葉子自身なのだ。さう思ふと葉子は自分の心と肉體とが宛ら蛆蟲のやうに汚く見えた。……何んの爲めに今まで有つて無いやうな妄執に苦しみ拔いて、それを生命そのもののやうに大事に考へ拔いてゐた事か。それは丸で貞世が始終見てゐるらしい惡夢の一つよりも更に果敢ないものではないか。……からなると倉地さへが縁もゆかりもないもののやうに遠く考へられ出した。葉子は凡てのものの空しさに惘れたやうな眼を擧げて今更らしく部屋の中を眺め廻した。何んの飾りもない、修道院の内部のやうな裸かな室内が却つてすが〳〵しく見えた。岡の殘した貞世の枕許の花束だけが、而して恐らくは（自分では見えないけれども）これ程の忙がしさの間にも自分を粉飾するのを忘れずにゐる葉子自身がいかにも浮薄な便りないものだつた。葉子はかうした心になると、熱に浮かされながら一歩々々何んの心のわだかまりもなく死に近づいて行く貞世の顏が神々しいものにさへ見えた。葉子は祈るやうな詫びるやうな心でしみ〴〵と貞世を見入つた。

　やがて看護婦が貞世の部屋に這入つて來た。形式一遍のお辭儀を睡さうにして、無頓着な風に葉子が入れておいた檢溫器を出して灯にすかして見てから、胸の氷嚢を取りかへにかゝつた。葉子は自分一人の手でそんな事をしてやり度いやうな愛着と神聖さとを貞世に感じながら看護婦を手傳つた。

「貞ちやん……さ、氷嚢を取りかへますからね……」

　とやさしく云ふと、囈言を云ひ續けてゐながら矢張り貞世はそれまで眠つてゐたらしく、痛々しいまで大きくなつた眼を開いて、まじ〳〵と意外な人でも見るやうに葉子を見るのだつた。

「お姉様なの……何時歸つて來たの。お母様が

先刻入らしつてよ……いやお姉様、病院いや歸る〳〵……お母様〳〵（さう云つてきよろ〳〵とあたりを見廻しながら）歸らして頂戴よう。お家に早く、お母様のゐるお家に早く……」

葉子は思はず毛孔が一本々々逆立つ程の寒氣を感じた。嘗て母と云ふ言葉も云はなかつた貞世の口から思ひもかけずこん事を聞くと、その部屋のどこかにぼんやり立つてゐる母が感ぜられるやうに思へた。その母の所に貞世は行きたがつてあせつてゐる。何んと云ふ深い淺間しい骨肉の執着だらう。

看護婦が行つてしまふと又病室の中はしいんとなつてしまつた。何んとも云へず可憐な澄んだ音を立てて水溜りに落ちる雨垂れの音はなほ絶間なく聞こえ續けてゐた。葉子は泣くにも泣かれないやうな心になつて、苦しい呼吸をしながらもうつら〳〵と生死の間を知らぬげに眠る貞世の顏を覗き込んでゐた。

と、雨垂れの音に混つて遠くの方に車の轍の音を聞いたやうに思つた。もう眼を覺まして用事をする人もあるかと、何んだか違つた世界の出來事のやうにそれを聞いてゐると、その音は段々病室の方に近寄つて來た。……愛子ではないか――葉子は愕然として夢から覺めた人のやうにきつとなつて耳を欹てた。

もうそこには死生を瞑想して自分の妄執の果敢なさをしみ〴〵と思ひやつた葉子はゐなかつた。我執の爲めに緊張し切つたその眼は怪しく輝いた。而して大急ぎで髪のほつれをかき上げて、鏡に顏を映しながら、あちこちと指先きで容子を整へた。衣紋もなほした。而してまたぢつと玄關の方に聞き耳を立てた。

果して玄關の戸の開く音が聞こえた。暫らく廊下がごた〳〵する樣子だつたが、やがて二三人の跫音が聞こえて、貞世の病室の戸がしめやかに開かれた。葉子はそのしめやかさでそれは岡が開いたに違ひない事を知つた。やがて開かれた戸口から岡に一寸挨拶しながら愛子の顏が靜かに現はれた。葉子の眼は知らず〳〵その何處までも從順らしく伏目になつた愛子の面に激しく注がれて、そこに書かれた凡てを一時に讀み取らうとした。小羊のやうに睫毛の長いやさしい愛子の眼は然し不思議にも葉子の鋭い眼光にさへ何物をも見せようとはしなかつた。葉子はすぐいら〳〵して、何事も發かないではおくものかと心の中で自分自身に誓言を立てながら、

「倉地さんは」

と突然眞正面から愛子にかう尋ねた。愛子は多恨な眼をはじめてまともに葉子の方に向けて、貞世の方にそれを外らしながら、又葉子を縋み見るやうにした。而して倉地さんが何うしたと云ふのか意味が讀み取れないといふ風を見せながら返事をしなかつた。生意氣をして見るがい……葉子はいらだつてゐた。

「小父さんも一緒に入らしつたかいと云ふんだよ」

「いゝえ」

愛子は無愛想な程無表情に一言さう答へた。二人の間にはむづかしい沈默が續いた。葉子は坐れとさへ云つてやらなかつた。一日々々と美しくなつて行くやうな愛子は小肥りな體を愼ましく整へて靜かに立つてゐた。

そこに岡が小道具を兩手に下げて玄關の方から歸つて來た。外套をびつしより雨に濡らしてゐるのから見ても、この眞夜中に岡がどれ程働いてくれたかが分つてゐた。葉子は然しそれには一言の挨拶もせずに、岡が道具を部屋の隅におくが否や、

「倉地さんは何か云つてゐまして？」

と劒を言葉に持たせながら尋ねた。

「倉地さんはお出でがありませんでした。で婆

やに言傳てをしておいて、お入用の荷物だけ造つて持つて來ました。これはお返ししておきます」

さう云つて衣嚢の中から例の紙幣の束を取り出して葉子に渡さうとした。

愛子だけならまだしも、岡までがとう〳〵自分を裏切つてしまつた。二人が二人ながら見え透いた虚言をよくもあゝしら〴〵しく云へたものだ。おほそれた弱蟲共め。葉子は世の中が手ぐすね引いて自分一人を敵に廻してゐるやうに思つた。

「へえ、さうですか。どうも御苦勞さま。……愛さんお前はそこにさうぼんやり立つてる爲めにこゝに呼ばれたと思つてゐるの？　岡さんのその濡れた外套でも取つてお上げなさいな。而して宿直室に行つて看護婦にさう云つてお茶でも持つてお出で。あなたの大事な岡さんがこんなにおそくまで働いて下さつたのに……さあ岡さんどうぞこの椅子にへと云つて自分は立ち上つた。……私が行つて來るわ、愛さんも働いてさぞ疲れたらうから……よござんす、よござんすつたら愛さん……」

自分の後を追はうとする愛子を刺し貫く程睨めつけておいて葉子は部屋を出た。而して火をかけられたやうにかつかつと逆上しながら、ほろほろと口惜涙を流して暗い廊下を夢中で宿直室の方へ急いで行つた。

四十四

敲きつけるやうにして倉地に返して仕舞はうとした金は、矢張り手に持つてゐる中に使ひ始めてしまつた。葉子の性癖として何時でも出來るだけ豐かな快い夜晝を送るやうにのみ傾いてゐたので、貞世の病院生活にも、誰れに見せてもひけを取らないだけの事を上邊ばかりでもしてゐたかつた。夜具でも調度でも家にあるものの中で一番優れたものを選んで來て見ると、凡ての事までそれにふさはしいものを使はなければならなかつた。葉子が專用の看護婦を二人も頼まなかつたのは不思議なやうだが、どう云ふものか貞世の看護を何處までも自分一人でして退けたかつたのだ。その代り年とつた女を二人傭つて交代に病院に來さして、洗ひ物から食事の事までを賄はした。葉子は迚も病院の食事では濟ましてゐられなかつた。材料のいゝ惡いは兎に角、味は兎に角、何よりも穢ならしい感じがして箸もつける氣になれなかつたので、本郷通りにある或る料理屋から日々入れさせる事にした。こんな鹽梅で、費用は知れない所に思ひの外かゝつた。葉子が倉地が持つて來てくれた紙幣の束から仕拂はうとした時は、いづれその中木村から送金があるだらうから、あり次第それから埋め合せをして、すぐその儘返さうと思つてゐたのだつた。然し木村からは、六月になつて以來一度も送金の通知は來なかつた。葉子はそれだから猶更の事もう來さうなものだと心待ちをしたのだつた。それがいくら待つても來ないとなると已むを得ず持ち合はせた分から使つて行かなければならなかつた。まだ〳〵と思つてゐる中に束の厚みはどん〳〵減つて行つた。それが半分程減ると、葉子は全く返濟の事などは忘れてしまつたやうになつて有るに任せて惜しげもなく仕拂ひをした。

七月に這入つてから氣候は滅切り暑くなつた。椎の樹の古葉もすつかり散り盡して、松も新らしい緑に代つて、草も木も青い焔のやうになつた。長く寒く續いた五月雨の名殘りで、水蒸氣が空氣中に氣味惡く飽和されて、さらぬだに急に堪へ難く暑くなつた氣候を益々堪へ難いものにした。葉子は自身の五體が、貞世の恢復をも待たずにずん〳〵崩れて行くのを感じない譯には行かなかつた。それと共に勃發的に起つ

て來るヒステリーはいよ〳〵募るばかりで、その發作に襲はれたが最後、自分ながら氣が違つたと思ふやうな事が度々になつた。葉子は心竊かに自分を恐れながら、日々の自分を見守る事を餘儀なくされた。

葉子のヒステリーは誰れ彼れの見界なく破裂するやうになつたが殊に愛子に屈竟の逃げ場を見出した。何んと云はれても罵られても、打ち擲ゑられさへしても、屠所の羊のやうに柔順に默つたまゝ、葉子にはまどろしく見える位ゆつくり落ち着いて働く愛子を見せつけられると、葉子の癇癪は高じるばかりだつた。あんな素直な殊勝氣な風をしてゐながらしら〴〵しくも姉を欺いてゐる。それが倉地との關係に於てであれ、岡との關係に於てであれ、ひよつとすると古藤との關係に於てであれ、愛子は葉子に打ち明けない祕密を持ち始めてゐる筈だ。さう思ふと葉子は無理にも平地に波瀾が起して見たかつた。殆んど毎日――それは愛子が病院に寢泊りするやうになつた爲めだと葉子は自分決めに決めてゐた――幾時間かの間、見舞に來てくれる岡に對しても、葉子はもう元のやうな葉子ではなかつた。どうかすると思ひもかけない時に明白な皮肉が矢つやうに葉子の脣から岡に向つて飛ばされた。岡は自分が恥ぢるやうに顏を紅らめながらも、上品な態度でそれを堪へた。それが又猶更ら葉子をいらつかす種になつた。

もう來られさうもないと云ひながら倉地も三日に一度位は病院を見舞ふやうになつた。葉子はそれをも愛子故と考へずにはゐられなかつた。さう激しい妄想に驅り立てられて來ると、どういふ關係で倉地と自分とを繫いでおけばいゝのか、どうした態度で倉地をもちあつかへばいゝのか、葉子にはほと〳〵見當がつかなくなつてしまつた。親身に持ちかけて見たり、よそ〳〵しく取りなして見たり、その時の氣分氣分で勝手な無技巧な事をしてゐながらも、どうしても遁れ出る事の出來ないのは倉地に對するいゝ、こちんと固まつた深い執着だつた。それは情けなくも激しく強くなり增さるばかりだつた。もう自分で自分の心根を憫然に思つてそゞろに涙を流して、自らを慰めると云ふ餘裕すらなくなつてしまつた。乾き切つた火のやうなものが息苦しいまでに胸の中にぎつしりつまつてゐるだけだつた。

唯ゞ一人貞世だけは……死ぬか生きるか分らない貞世だけは、この姉を信じ切つてくれてゐる……さう思ふと葉子は前にも增した愛着をこの病兒にだけは感じないでゐられなかつた。「貞世がゐるばかりで自分は人殺しもしないでかうしてゐられるのだ」と葉子は心の中で獨語ちた。

けれども或る朝そのかすかな希望さへ破れねばならぬやうな事件がまくし上つた。

その朝は曉から水が滴りさうに空が晴れて、珍らしくすが〳〵しい涼風が木の間から來て窓の白いカーテンをそつと撫でて通るさわやかな天氣だつたので、夜通し貞世の寢臺の傍に附添つて、睡くなるとさうしたまゝでうと〳〵と居睡りしながら過ごして來た葉子も、思の外頭の中が輕くなつてゐた。貞世もその晩はひどく熱に浮かされもせずに寢續けて、四時頃の體溫は七度八分まで下つてゐた。綠色の風呂敷を通して來る光でそれを發見した葉子は飛び立つやうな喜びを感じた。入院してから七度臺に熱の下つたのはその朝が始めてだつたので、もう熱の剝離期が來たのかと思ふと、とう〳〵貞世の命は取り留めたといふ喜悅の情で淚ぐましいまでに胸は一杯になつた。やうやく一心が屆いた。自分の爲めに病氣になつた貞世は、自分の力でなほつた。そこから自分の運命は又新らしく開けて行くかも知れない。屹度開けて行

く。もう一度心置きなくこの世に生きる時が來たら、それはどの位いゝ事だらう。今度こそは考へ直して生きて見よう。もう自分も二十六だ。今までのやうな態度で暮してはゐられない。倉地にも濟まなかつた。倉地があれ程ある限りのものを犧牲にして、而かもその事業と云つてゐる仕事はどう考へて見ても思はしく行つてゐないらしいのに、自分達の暮し向きは丸でそんな事も考へないやうな寛濶なものだつた。自分は決心さへすればどんな境遇にでも自分を嵌め込む事位出來る女だ。若し今度家を持つやうになつたら凡てを妹達に云つて聞かして、倉地と一緒にならう。而して木村とはいゝ、はつきり緣を切らう。木村と云へば……さうして葉子は倉地と古藤とが云ひ合ひをしたその晩の事を考へ出した。古藤にあんな約束をしながら、貞世の病氣に紛れてゐたと云ふ外に、てんで眞相を告白する氣がなかつたので今までも何んの消息もしないでゐた自分が尤められた。本當に木村にも濟まなかつた。今になつてやうやく長い間の木村の心の苦しさが想像される。若し貞世が退院するやうになつたら――而して退院するに決つてゐるが――自分は何を措いても木村に手紙を書く。さうしたらどれ程心が安く而して輕くなるか知れない。……葉子はもうそんな境界が來てしまつたやうに考へて、誰れとでもその喜びを分ちたく思つた。で、椅子にかけたまゝ右後ろを向いて見ると、床板の上に三疊疊を敷いた部屋の一隅に愛子が多愛もなくすや／＼と眠つてゐた。うるさがるので貞世には蚊帳を吊つてなかつたが、愛子の所には小さな白い西洋蚊帳が吊つてあつた。その細かい目を通した見る愛子の顏は人形のやうに整つて美しかつた。その愛子をこれまで憎み通しに憎み、疑ひ通しに疑つてゐたのが、不思議を通り越して、奇怪な事にさへ思はれた。葉子はにこ／＼しながら立つて行つて蚊帳の側によつて、

「愛さん……愛さん」

さう可なり大きな聲で呼びかけた。昨夜遲く枕に就いた愛子はやがてやうやく睡さうに大きな眼を靜かに開いて、姉が枕許にゐるのに氣がつくと、寢過ごしでもしたと思つたのか、慌てるやうに半身を起して、そつと葉子を竊み見るやうにした。日頃ならばそんな擧動をすぐ癇癪の種にする葉子も、その朝ばかりは可哀さうな位に思つてゐた。

「愛さんお喜び、貞ちやんの熱がとう／＼七度臺に下つてよ。一寸起きて來て御覽、それはいい顏をして寢てゐるから……靜かにね」

「靜かにね」と云ひながら葉子の聲は妙に彈んで高かつた。愛子は柔順に起き上つてそつと蚊帳をくゞつて出て、前を合せながら寢臺の側に來た。

「ね？」

葉子は笑みかまけて愛子にかう呼びかけた。

「でも何んだか、大分に蒼白く見えますわね」

と愛子が靜かに云ふのを葉子は忙はしく引たくつて、

「それは電燈の風呂敷の故だわ……それに熱が取れれば病人は皆んな一度は却つて惡くなつたやうに見えるものなのよ。本當によかつた。あなたも親身に世話してやつたからよ」

さう云つて葉子は右手で愛子の肩をやさしく抱いた。そんな事を愛子にしたのは葉子としては始めてだつた。愛子は恐れをなしたやうに身をすぼめた。

葉子は何んとなくぢつとしてはゐられなかつた。子供らしく、早く貞世が眼を覺ませばいゝと思つた。さうしたら熱の下つたのを知らせて喜ばせてやるのにと思つた。然しさすがにその小さな眠りを搖り覺ます事はし得ないで、頻りと部屋の中を片付け始めた。愛子が注意の上に

注意をしてこそとの音もさせまいと氣を遣つてゐるのに、葉子がわざとするかとも思はれる程騷々しく働く様は、日頃とは丸で反對だつた。愛子は時々不思議さうな眼付きをしてそつと葉子の擧動を注意した。

その中に夜がどん〳〵明け離れて、電燈の消えた瞬間は一寸部屋の中が暗くなつたが、夏の朝らしく見る〳〵中に白い光が窓から容赦なく流れ込んだ。晝になつてからの暑さを豫想させるやうな涼しさが青葉の輕い匂ひと共に部屋の中に充ち溢れた。愛子の着かへた大柄な白の飛白も、赤いメリンスの帶も、葉子の眼を淸々しく刺戟した。

葉子は自分で貞世の食事を作つてやる爲めに宿直室の側に在る小さな庖廚に行つて、洋食店から屆けて來たソップを溫めて鹽で味をつけてゐる間も、段々起き出て來る看護婦達に貞世の昨夕の經過を誇りがに話して聞かせた。病室に歸つて見ると愛子が既に目覺めた貞世に朝仕舞をさせてゐた。熱が下つたので機嫌のよかるべき貞世は一層不機嫌になつて見えた。愛子のする事一つ〳〵に故障を云ひ立てて、中中云ふ事を聞かうとはしなかつた。熱の下つたのに連れて始めて貞世の意志が人間らしく働き出したのだと葉子は氣が付いて、それも許さなければならない事だと、自分の事のやうに心で辯疏した。漸く洗面が濟んで、それから寢臺の周圍を整頓するともう全く朝になつてゐた。今朝こそは貞世が屹度賞美しながら食事を取るだらうと葉子はいそ〳〵と丈けの高い食卓を寢臺の所に持つて行つた。

その時思ひがけなくも朝がけに倉地が見舞ひに來た。倉地も涼しげな單衣に絽の羽織を羽織つたまゝだつた。その強健な、物を物ともしない姿は夏の朝の氣分としつくりそぐつて見えたばかりでなく、その日に限つて葉子は繪島丸の中で語り合つた倉地を見出したやうに思つて、その寬濶な樣子がなつかしくのみ眺められた。倉地も勉めて葉子の立ち直つた氣分に同じてゐるらしかつた。それが葉子を一層快活にした。葉子は久し振りでその銀の鈴のやうな澄み透つた聲で高調子に物を云ひながら二言目には涼しく笑つた。

「さ、貞ちやん、姉さんが上手に味をつけて來て上げたからソップを召上れ。今朝は屹度おいしく食べられますよ。今までは熱で味も何もなかつたわね、可哀さうに─」

さう云つて貞世の身近に椅子を占めながら、糊の強いナプキンを枕から喉にかけてあてがつてやると、貞世の顏は愛子の云ふやうにひどく青味がかつて見えた。小さな不安が葉子の頭をつきぬけた。葉子は淸潔な銀の匙に少しばかりソップをしやくひ上げて貞世の口許にあてがつた。

「まづい」

貞世はちらつと姉を睨むやうに竊み見て、口にあるだけのソップを强ひて飮みこんだ。

「おやどうして」

「甘つたらしくつて」

「そんな筈はないがねえ。どれそれぢやも少し鹽を入れてあげますわ」

葉子は鹽をたして見た。けれども貞世は美味いとは云はなかつた。又一と口飮み込むと、もういやだと云つた。

「さう云はずとも少し召上れ、ね、折角姉さんが加減したんだから。第一食べないでゐては弱つてしまひますよ」

さう促して見ても貞世は金輪際あとを食べようとはしなかつた。

突然自分でも思ひも寄らない憤怒が葉子に襲ひかゝつた。自分がこれ程骨を折つてしてやつたのに、義理にももう少しは食べてよささうな

ものだ。何んと云ふ我儘な子だらう。(葉子は貞世が味覺を恢復してゐて、流動食では滿足しなくなつたのを少しも考へに入れなかつた)

さうなるともう葉子は自分を統御する力を失つてしまつてゐた。血管の中の血が一時にかつと燃え立つて、それが心臟に、而して心臟から頭に衝き進んで、頭蓋骨はばり／＼と音を立てて破れさうだつた。日頃あれ程可愛がつてやつてゐるのに、……憎さは一倍だつた。貞世を見つめてゐる中に、その痩せ切つた細首に鍬形にした兩手をかけて、一思ひにしめつけて、苦しみ悶く樣子を見て、「そら見るがいゝ」と云ひ捨ててやりたい衝動がむづ／＼と湧いて來た。その頭の廻りにあてがはるべき兩手の指は思はず知らず熊手のやうに折れ曲つて、烈しい力の爲めに細かく顫へた。葉子は兇器に變つたやうなその手を人に見られるのが恐ろしかつたので、茶碗と匙とを食卓にかへして、前垂れの下に隱してしまつた。上瞼の一文字になつた眼をきりゝと据ゑてはたと貞世を睨みつけた。葉子の眼には貞世の外にその部屋のものは倉地から愛子に至るまですつかり見えなくなつてしまつてゐた。

「食べないかい」

「食べないかい。食べなければ云々」と小言を云つて貞世を責める筈だつたが、初句を出しただけで、自分の聲の餘りに激しい震へやうに言葉を切つてしまつた。

「食べない……食べない……御飯でなくつてはいやあだあ」

葉子の聲の下からすぐかうした我儘な貞世のすねにすねた聲が聞こえたと葉子は思つた。眞黑な血潮がどつと心臟を破つて腦天に衝き進んだと思つた。眼の前で貞世の顏が三つにも四つにもなつて泳いだ。その後には色も聲も痺れ果ててしまつたやうな暗黑の忘我が來た。

「お姉樣……お姉樣ひどい……いやあ……」

「葉ちやん……あぶない……」

貞世と倉地の聲とがもつれ合つて、遠い所からのやうに聞こえて來るのを、葉子は誰れかが何か貞世に亂暴をしてゐるのだなと思つたり、この勢ひで行かなければ貞世は殺せやしないと思つたりしてゐた。何時の間にか葉子はたゞ一筋に貞世を殺さうとばかりあせつてゐたのだ。葉子は闇黑の中で何か自分に逆らふ力と根限りあらそひながら、物凄い程の力をふり搾つて闘つてゐるらしかつた。何が何んだか解らなかつた。その混亂の中に、或は今自分は倉地の喉笛に針のやうになつた自分の十本の爪を立てて、ねぢり藻掻きながら爭つてゐるのではないかとも思つた。それもやがて夢のやうだつた。遠ざかりながら人の聲とも獸の聲とも知れぬ音響が幽かに耳に殘つて、胸の所にさし込んで來る痛みを吐氣のやうに感じた次ぎの瞬間には、葉子は昏々として熱も光も聲もない物すさまじい暗黑の中に眞逆樣に浸つて行つた。

ふと葉子は擽むるやうなものを耳の所に感じた。それが音響だと解るまでにはどの位の時間が經過したか知れない。兎に角葉子はがや／＼と云ふ聲を段々とはつきり聞くやうになつた。而してぽつかり視力を恢復した。見ると葉子は依然として貞世の病室にゐるのだつた。愛子が後向きになつて寢臺の上にゐる貞世を介抱してゐた。自分は……自分はと葉子は始めて自分を見廻さうとしたが、身體は自由を失つてゐた。そこには倉地がゐて葉子の首根つこに腕を廻して、膝の上に一方の足を乘せて、しつかりと抱きすくめてゐた。その足の重さが痛い程感じられ出した。やつぱり自分は倉地を死神の許へ追ひこくらうとしてゐたのだなと思つた。そこには白衣を着た醫者も看護婦も見え出した。

葉子はそれだけの事を見ると急に氣のゆるむ

のを覺えた。而して涙がぽろ〳〵と出てしかたがなくなつた。をかしな……どうしてから涙が出るのだらうと怪しむ中に、やる瀬ない悲哀がどつとこみ上げて來た。底のないやうな淋しい悲哀……その中に葉子は悲哀とも睡さとも區別の出來ない重い力に壓せられて又知覺から物のない世界に落ち込んで行つた。

本當に葉子が眼を覺ました時には、眞蒼に晴天の後の夕暮が催してゐる頃だつた。葉子は部屋の隅の三疊に蚊帳の中に横になつて寢てゐたのだつた。そこには愛子の外に岡も來合せて貞世の世話をしてゐた。倉地はもうゐなかつた。

愛子の云ふ所によると、葉子は貞世にソップを飲まさうとして色々に云つたが、熱が下つて急に食慾のついた貞世は飯でなければ何うしても食べないと云つて聽かなかつたのを、葉子は涙を流さんばかりになつて執念くソップを飲ませようとした結果、貞世はそこにあつたソップ皿を臥てゐながらひつくり返してしまつたのだつた。さうすると葉子はいきなり立ち上つて貞世の胸許を摑むなり寢臺から引きずり下ろしてこづき廻した。幸に居合した倉地が大事にならない中に葉子から貞世を取り放しはしたが、今度は葉子は倉地に死物狂ひに喰つてかかつて、その中に激しい癪を起してしまつたのだとの事だつた。

葉子の心は空しく痛んだ。何處にとて取りつくものもないやうな空しさが心には殘つてゐるばかりだつた。貞世の熱はすつかり元通りに昇つてしまつて、ひどくおびえるらしい囈言を絶間なしに口走つた。節々はひどく痛みを覺えながら、發作の過ぎ去つた葉子は、普段通りになつて起き上る事も出來るのだつた。然し葉子は愛子や岡への手前直ぐ起き上るのも變だつたのでその日はそのまゝ寢續けた。

貞世は今度こそは死ぬ。とう〳〵自分の末路も來てしまつた。さう思ふと葉子はやる方なく悲しかつた。縱令貞世と自分とが幸ひに生き殘つたとしても、貞世は屹度永劫自分を命の敵と怨むに違ひない。

「死ぬに限る」

葉子は窓を通して青から藍に變つて行きつゝある初夏の夜の景色を眺めた。神祕的な穩かさと深さとは腦心に沁み通るやうだつた。貞世の枕許には若い岡と愛子とが睦まじげに居たり立つたりして貞世の看護に餘念なく見えた。その時の葉子にはそれは美しくさへ見えた。親切な岡、柔順な愛子……二人が愛し合ふのは當然でいゝ事らしい。

「どうせ凡ては過ぎ去るのだ」

葉子は美しい不思議な幻影でも見るやうに、電氣燈の緑の光の中に立つ二人の姿を、無常を見貫いた隱者のやうな心になつて打ち眺めた。

四十五

この事があつた日から五日經つたけれども倉地はぱつたり來なくなつた。便りもよこさなかつた。金も送つては來なかつた。餘りに變なので岡に賴んで下宿の方を調べて貰ふと三日前に荷物の大部分を持つて旅行に出ると云つて姿を隱してしまつたのださうだ。倉地がゐなくなると、刑事だと云ふ男が二度か三度色々な事を尋ねに來たとも云つてゐるさうだ。岡は倉地からの一通の手紙を持つて歸つて來た。葉子は直ぐに封を開いて見た。

「事重大となり姿を隱す。郵便では累を及ぼさん事を恐れ、これを主人に託しおく。金も當分は送れぬ。困つたら家財道具を賣れ。その中には何んとかする。讀後火中」

とだけ認めて葉子への宛名も自分の名も書いてはなかつた。倉地の手蹟には間違ない。然しあの發作以後益〻ヒステリックに根性のひね

くれてしまつた葉子は、手紙を讀んだ瞬間にこれは造り事だと思ひ込まないではゐられなかつた。とう〳〵倉地も自分の手から遁れてしまつた。やる瀨ない恨みと憤りが眼も眩む程に頭の中を攪き亂した。

岡と愛子とがすつかり打ち解けたやうになつて、岡が殆んど入り浸りに病院に來て貞世の介抱をするのが葉子には見てゐられなくなつて來た。

「岡さん、もうあなたこれからこゝには入らつしやらないで下さいまし。こんな事になると御迷惑があなたに懸らないとも限りませんから。私達の事は私達がしますから。私はもう他人に賴りたくはなくなりました」

「さう仰しやらずにどうか私をあなたのお側に置かして下さい。私、決して傳染なぞを恐れはしません」

岡は倉地の手紙を讀んではゐないのに葉子は氣がついた。迷惑と云つたのを病氣の傳染と思ひ込んでゐるらしい。さうぢやない。岡が倉地の犬でないとどうして云へよう。倉地が岡を通して愛子と慇懃を通はし合つてゐないと誰れが斷言出來る。愛子は岡をたらし込む位は平氣でする娘だ。葉子は自分の愛子位の年頃の時の自分の經驗の一々が生き返つてその猜疑心を煽り立てるのに自分から苦しまねばならなかつた。あの年頃の時、思ひさへすれば自分にはそれ程の事は手もなくして退ける事が出來た。而して自分は愛子よりもつと無邪氣な、おまけに快活な少女であり得た。寄つてたかつて自分を欺しにかゝるのなら、自分にだつてして見せる事がある。

「そんなにお考へならお出で下さるのは勝手ですが、愛子をあなたにさし上げる事は出來ないんですからそれは御承知下さいましよ。ちやんと申上げておかないと後になつていさくさが起るのはいやですから……愛さんお前も聞いてゐるだらうね」

さう云つて葉子は疊の上で貞世の胸にあてる濕布を縫つてゐる愛子の方にも振り向いた。首垂れた愛子は顏も上げず返事もしなかつたから、どんな樣子を顏に見せたかを知る由はなかつたが、岡は羞恥の爲めに葉子を見かへる事も出來ない位になつてゐた。それは然し岡が葉子の餘りと云へば露骨な言葉を恥ぢたのか、自分の心持を發かれたのを恥ぢたのか葉子の迷ひ易くなつた心にはしつかりと見窮められなかつた。

是れにつけ彼れにつけもどかしい事ばかりだつた。葉子は自分の眼で二人を看視して同時に倉地を間接に看視するより外はないと思つた。こんな事を思ふすぐ側から葉子は倉地の細君の事も思つた。今頃は彼等はのう〳〵として邪魔者がゐなくなつたのを喜びながら一つ家に住んでゐないとも限らないのだ。それとも倉地の事だ、第二第三の葉子が葉子の不幸をいゝ事にして倉地の側に現はれてゐるのかも知れない。……然し今の場合倉地の行方を尋ねあてる事は一寸むづかしい。

それからと云ふもの葉子の心は一秒の間も休まらなかつた。勿論今までも葉子は人一倍心の働く女だつたけれども、その頃のやうな激しさは嘗てなかつた。而かもそれが每時も表から裏を行く働き方だつた。それは自分ながら全く地獄の呵責だつた。

その頃から葉子は屢〻自殺といふ事を深く考へるやうになつた。それは自分でも恐ろしい程だつた。肉體の生命を絶つ事の出來るやうな物さへ眼に觸れれば、葉子の心はおびえながらもはつと高鳴つた。藥局の前を通るとずらつと列んだ藥瓶が誘惑のやうに眼を射た。看護婦が帽子を髮にとめる爲めの長い帽子ピン、天井の張つてない湯殿の梁、看護婦室に薄赤い色をし

て金盥にたゝへられた昇汞水、腐敗した牛乳、剃刀、鋏、夜更けなどに上野の方から聞こえて來る汽車の音、病室から眺められる生理學教室の三階の窓、密閉された部屋、しごき帶、……何んでも彼でもが自分の肉を喰む毒蛇の如く鎌首を立てて自分を待ち伏せしてゐるやうに思へた。ある時はそれ等をこの上なく恐ろしく、ある時は又この上なく親しみ深く眺めやつた。一疋の蚊にさゝれた時さへそれがマラリヤを傳へる種類であるかないかを疑つたりした。

「もう自分はこの世の中に何んの用があらう。死にさへすればそれで事は濟むのだ。この上自身も苦しみたくない。他人も苦しめたくない。いやだ〳〵と思ひながら自分と他人とを苦しめてゐるのが堪へられない。眠りだ、長い眠りだ。それだけのものだ」

と貞世の寢息を窺ひながらしつかり思ひ込むやうな時もあつたが、同時に倉地が何處かで生きてゐるのを考へると、忽ち燕返しに死から生の方へ、苦しい煩惱の生の方へ激しく執着して行つた。倉地の生きてる間に死んでなるものか……それは死よりも強い誘惑だつた。意地にかけても、肉體の凡ての機關が目茶々々になつても、それでも生きてゐて見せる。……葉子は而してそのどちらにも本當の決心のつかない自分に又苦しまねばならなかつた。

凡てのものを愛してゐるのか憎んでゐるのか判らなかつた。貞世に對してですらさうだつた。葉子はどうかすると、熱に浮かされて見界のなくなつてゐる貞世を、繼母がまゝ子をいびり拔くやうに沒義道に取扱つた。而して次ぎの瞬間には後悔し切つて、愛子の前でも看護婦の前でも構はずにおい〳〵と泣きくづをれた。

貞世の病狀は惡くなるばかりだつた。

ある時傳染病室の醫長が來て、葉子が今のまゝでゐては迚も健康が續かないから、思ひ切つて手術をしたらどうだと勸告した。默つて聞いてゐた葉子は、すぐ岡の差入れ口だと邪推して取つた。その後ろには愛子がゐるに違ひない。葉子が附いてゐたのでは貞世の病氣は癒るどころか惡くなるばかりだ。(それは葉子もさう思つてゐた。葉子は貞世を全快させてやりたいのだ。けれどもどうしてもいびらなければゐられないのだ。それはよく葉子自身が知つてゐると思つてゐた)それには葉子を何んとかして貞世から離しておくのが第一だ。そんな相談を醫長としたものがゐない筈がない。ふむ、……甘い事を考へたものだ。その復讐は屹度してやる。根本的に病氣を癒してからしてやるから見てゐるがいゝ。葉子は醫長との對話の中に早くもかう決心した。而して思ひの外手取早く手術を受けようと進んで返答した。

婦人科の室は傳染病室とはずつと離れた所に近頃新築された建物の中にあつた。七月の央ばに葉子はそこに入院する事になつたが、その前に岡と古藤とに依頼して、自分の身近にある貴重品から、倉地の下宿に運んである衣類までを處分して貰はなければならなかつた。金の出所は全く途絶えてしまつてゐたから。岡が頻りと融通しようと申出たのもすげなく斷つた。弟同樣の少年から金まで融通して貰ふのはどうしても葉子のプライドが承知しなかつた。

葉子は特等を選んで日當りのいゝ廣々とした部屋に這入つた。そこは傳染病室とは比べものにもならない位新式の設備の整つた居心地のいゝ所だつた。窓の前の庭はまだ掘りくり返したまゝで赤土の上に草も生えてゐなかつたけれども、廣い廊下の冷やかな空氣は涼しく病室に通りぬけた。葉子は六月の末以來始めて寢床の上に安々と體を横へた。疲勞が回復するまで暫らくの間手術は見合せるといふので葉子は每日一度づゝ内診をして貰ふだけでする

事もなく日を過ごした。

然し葉子の精神は興奮するばかりだつた。一人になつて暇になつて見ると、自分の心身がどれ程破壞されてゐるかが自分ながら恐ろしい位感ぜられた。よくこんな有樣で今まで通して來たと驚くばかりだつた。寢臺の上に臥て見ると二度と起きて歩く勇氣もなく、又實際出來もしなかつた。唯ゞ鈍痛とのみ思つてゐた痛みは、どつちに臥返つて見ても我慢の出來ない程な激痛になつてゐて、氣が狂ふやうに頭は重くうづいた。我慢にも貞世を見舞ふなどと云ふ事は出來なかつた。

かうして臥ながらにも葉子は斷片的に色々な事を考へた。自分の手許にある金の事を先づ思案して見た。倉地から受取つた金の殘りと、調度類を賣拂つて貰つて出來た纏まつた金とが何にもかにもこれから姉妹三人を養つて行く唯ゞ一つの資本だつた。その金が使ひ盡された後には今の所、何をどうするといふ目途は露ほどもなかつた。葉子は普段の葉子に似合はずそれが氣になり出して仕方がなかつた。特等室なぞに這入り込んだ事が後悔されるばかりだつた。と云つて今になつて等級の下つた病室に移して貰ふなどとは葉子としては思ひも寄らなかつた。

葉子は贅澤な寢臺の上に横になつて、羽根枕に深々と頭を沈めて、氷嚢を額にあてがひながら、かん／＼と赤土に射してゐる眞夏の日の光を、廣々と取つた窓を通して眺めやつた。而して物心附いてからの自分の過去を針で揉み込むやうな頭の中でずつと見渡すやうに考へ辿つて見た。そんな過去が自分のものなのか、さう疑つて見ねばならぬ程にそれは遙かにもかけ隔たつた事だつた。父母――殊に父の甞めるやうな寵愛の下に何一つ苦勞を知らずに清い美しい童女としてすら／＼と育つたあの時分が矢張り自分の過去なのだらうか。木部との戀に醉ひ耽つて、國分寺の櫟の林の中で、その胸に自分の頭を託して、木部の云ふ一語々々を美酒のやうに飲みほしたあの少女は矢張り自分なのだらうか。女の誇りと云ふ誇りを一身に集めたやうな美貌と才能の持主として、女達からは羨望の的となり、男達からは嘆美の祭壇とされたあの青春の女性は矢張りこの自分なのだらうか、誤解の中にも攻撃の中にも昂然と首を擡げて、自分は今の日本に生れて來べき女ではなかつたのだ、不幸にも時と處とを間違へて天上から送られた王女であるとまで自分に對する矜誇に滿ちてゐた、あの妖婉な女性はまがふ方なく自分なのだらうか。絵島丸の中で味ひ盡し甞め盡した歡樂と陶醉との限りは、始めて世に生れ出た生甲斐をしみ／＼と感じた誇りがな暫らくは今の自分と結び付けていゝ過去の一つなのだらうか……日はかん／＼と赤土の上に照りつけてゐた。油蟬の聲は御殿の池をめぐる鬱蒼たる木立の方から沁み入るやうに聞こえてゐた。近い病室では輕病の患者が集まつて、何かみだらしい雜談に笑ひ興じてゐる聲が聞こえて來た。それは實際なのか夢なのか。それ等の凡ては腹立たしい事なのか、哀しい事なのか、笑ひ捨つべき事なのか、歎き恨まねばならぬ事なのか。……喜怒哀樂のどれか一つだけでは表はし得ない、不思議に交錯した感情が、葉子の眼から留度なく涙を誘ひ出した。あんな世界がこんな世界に變つてしまつた。さうだ貞世が生死の境に彷徨つてゐるのはまちがひやうのない事實だ。自分の健康が衰へ果てたのも間違ひのない出來事だ。若し毎日貞世を見舞ふ事が出來るのならばこのまゝこゝにゐるのもいゝ。然し自分の身體の自由さへ今はきかなくなつた。手術を受ければいゝ、どうせ當分は身動きも出來ないのだ。岡や愛子……そこまで來ると葉子は夢の中にゐる女ではなかつた。まざ／＼とした煩惱

が勃然としてその齒嚙みした物凄い鎌首をきつと擡げるのだつた。それもよし。近くゐても看視の利かないのを利用したくば思ふさま利用するがいゝ。倉地と二人で勝手な陰謀を企てるがいゝ。どうせ看視の利かないものなら、自分は貞世の爲めに何處か第二流か第三流の病院に移らう。而していくらでも貞世の方を安樂にしてやらう。葉子は貞世から離れると一圖にそのあはれさが身に沁みてから思つた。

葉子はふとつやの事を思ひ出した。つやは看護婦になつて京橋あたりの病院にゐると雙鶴館から云つて來たのを思ひ出した。愛子を呼び寄せて電話で搜させようと決心した。

四十六

眞暗な廊下が古ぼけた緣側になつたり、緣側の突當りに階子段があつたり、日當りのいゝ中二階のやうな部屋があつたり、納戶と思はれる暗い部屋に屋根を打ち拔いてガラスを嵌めて光線が引いてあつたりするやうな、謂はばその界隈に澤山ある待合の建物に手を入れて使つてゐるやうな病院だつた。つやは加治木病院といふその病院の看護婦になつてゐた。

長く天氣が續いて、その後に激しい南風が吹いて、東京の市街は埃まぶれになつて、空も、家屋も、樹木も、黃粉でまぶしたやうになつた揚句、氣持ち惡く蒸し〳〵と膚を汗ばませるやうな雨に變つた或る日の朝、葉子は僅かばかりな荷物を持つて人力車で加治木病院に送られた。後ろの車には愛子が荷物の一部分を持つて乘つてゐた。須田町に出た時、愛子の車は日本橋の通りを眞直に一足先きに病院に行かして、葉子は外濠に沿うた道を日本銀行から暫らく行く釘店の橫丁に曲らせた。自分の住んでゐた家を他處ながら見て通りたい心持になつてゐたからだつた。前幌の隙間から覗くのだつたけれども、一年の後にもそこにはさして變つた樣子は見えなかつた。自分のゐた家の前で一寸車を止まらして中を覗いて見た。門札には叔父の名は無くなつて、知らない他人の姓名が揭げられてゐた。それでもその人は醫者だと見えて、父の時分からの永壽堂病院といふ看板は相變らず玄關の楣に見えてゐた。長三洲と署名してあるその字も葉子には親しみの深いものだつた。

葉子が亞米利加に出發した朝も九月ではあつたが矢張りその日のやうにじめ〳〵と雨の降る日だつたのを思ひ出した。愛子が櫛を折つて急に泣き出したのも、貞世が怒つたやうな顏をして眼に淚を一杯溜めたまゝ見送つてゐたのもその玄關を見ると描くやうに思ひ出された。

「もういゝ早くやつておくれ」

さう葉子は、車の上から淚聲で云つた。車は轅棒を向け換へられて、又雨の中を小さく搖れながら日本橋の方に走り出した。葉子は不思議にそこに一緖に住んでゐた叔父叔母の事を泣きながら思ひやつた。あの人達は今何處に何うしてゐるだらう。あの白痴の兒ももう隨分大きくなつたらう。でも渡米を企てゝからまだ一年とは經つてゐないんだ。へえ、そんな短い間にこれ程の變化が……葉子は自分で自分に惘れるやうにそれを思ひやつた。それではあの白痴の兒も思つた程大きくなつてゐる譯ではあるまい。葉子はその子を思ふと何うした譯か定子の事を胸が痛む程嚴しく想ひ出してしまつた。鎌倉に行つた時以來、自分の懷ろからもぎ放してしまつて、金輪際忘れてしまはうと堅く心に契つてゐたその定子が……それはその場合葉子を全く慘めにしてしまつた。

病院に着いた時も葉子は泣き續けてゐた。而してその病院のすぐ手前まで來て、そこに入院しようとした事を心から後悔してしまつた。こんな落魄したやうな姿をつやに見せるのが堪

へがたい事のやうに思はれ出したのだ。

暗い二階の部屋に案內されて、愛子が準備しておいた床に橫になると葉子は誰れに挨拶もせずに唯ゝ泣き續けた。そこは運河の水の匂ひが泥臭く通つて來るやうな所だつた。愛子は煤けた障子の蔭で手廻りの荷物を取り出して案排した。口少なの愛子は姉を慰めるやうな言葉も出さなかつた。外部が騷々しいだけに部屋の中は猶更らひつそりと思はれた。

葉子はやがて靜かに顏を擧げて部屋の中を見た。愛子の顏色が黃色く見える程その日の空も部屋の中も寂れてゐた。少し黴を持つたやうに埃つぽくぶく／＼する疊の上には丸盆の上に大學病院から持つて來た藥瓶が乘せてあつた。障子際には小さな鏡臺が、違ひ棚には手文庫と硯箱が飾られたけれども、床の間には幅物一つ、花活け一つ置いてなかつた。その代りに草色の風呂敷に包み込んだ衣類と黑い柄のパラゾルとが置いてあつた。藥瓶の載せてある丸盆が、出入りの商人から到來のもので、緣の所に剝げた所が出來て、表には赤い短冊のついた矢が的に命中してゐる畫が安つぽい金で描いてあつた。葉子はそれを見ると盆もあらうにと思つた。それだけでもう葉子は腹が立つたり情けなくなつたりした。

「愛さんあなた御苦勞でも每日一寸づつは來てくれないぢや困りますよ。貞ちやんの樣子も聞きたいしね。……貞ちやんも頼んだよ。熱が下つて物事が分るやうになる時には私も癒つて歸るだらうから……愛さん」

每時もの通りはき／＼とした手答へがないので、もうぎり／＼して來た葉子は險を持つた聲で、「愛さん」と語氣強く呼びかけた。言葉をかけるとそれでも片付けものの手を置いて葉子の方に向き直つた愛子は、この時やうやく顏を上げておとなしく「はい」と返事をした。葉子の眼はすかさずその顏を發矢と鞭つた。而して寢床の上に半身を肘に支へて起き上つた。車で搖られた爲めに腹部は痛みを增して聲を擧げたい程うづいてゐた。

「あなたに今日はいゝはつきり聞いておきたい事があるの……あなたはよもや岡さんとひよんな約束なんぞしてはゐますまいね」

「いゝえ」

愛子は手もなく素直にから答へて眼を伏せてしまつた。

「古藤さんとも？」

「いゝえ」

今度は顏を上げて不思議な事を問ひたゞすと云ふやうにぢつと葉子を見詰めながらかう答へた。そのタクトがあるやうな、ないやうな愛子の態度が葉子をいやが上にいらだたした。岡の場合には何處か後ろめたくて首を垂れたとも見える。古藤の場合にはわざとしらを切る爲めに大膽に顏を上げたとも取れる。又そんな意味ではなく、あまり不思議な詰問が二度まで續いたので、二度目には怪訝に思つて顏を上げたのかとも考へられる。葉子は疊みかけて倉地の事まで問ひ正さうとしたが、その氣分は摧かれてしまつた。そんな事を聞いたのが第一愚かだつた。隱し立てをしようと決心した以上は、女は男よりも遙かに巧妙で大膽なのを葉子は自分で存分に知り拔いてゐるのだ。自分から進んで內兜を見透かされたやうなもどかしさは一層葉子の心を憤らした。

「あなたは二人から何かそんな事を云はれた覺えがあるでせう。その時あなたは何んと御返事したの」

愛子は下を向いたまゝ默つてゐた。葉子は圖星をさしたと思つて嵩にかゝつて行つた。

「私は考へがあるからあなたの口からもその事を聞いておきたいんだよ。仰しやいな」

「お二人とも何んにもそんな事は仰しやりはしませんわ」
「仰しやらない事があるもんかね」
憤怒に伴つてさしこんで來る痛みを憤怒と共にぐつと押へつけながら葉子はわざと聲を和げた。而して愛子の擧動を爪の先きほども見逃すまいとした。愛子は默つてしまつた。この沈默は愛子の隱れ家だつた。さうなるとさすがの葉子もこの妹をどう取扱ふ術もなかつた。
岡なり古藤なりが告白をしてゐるのなら、葉子がこの次ぎに云ひ出す言葉で樣子は知れる。この場合うつかり葉子の口車には乘られないと愛子は思つて沈默を守つてゐるのかも知れない。岡なり古藤なりから何か聞いてゐるのなら、葉子はそれを十倍も二十倍もの強さにして使ひこなす術を知つてゐるのだけれども、生憎その備へはしてゐなかつた。愛子は確かに自分をあなどり出してゐると葉子は思はないではゐられなかつた。寄つてたかつて大きな詐僞の網を造つて、その中に自分を押しこめて、周圍から眺めながら面白さうに笑つてゐる。岡だらうが古藤だらうが何があてになるものか。……葉子は手傷を負つた猪のやうに一直線に荒れて行くより仕方がなくなつた。
「さあお云ひ愛さん、お前さんが默つてしまふのは惡い癖ですよ。姉さんを甘くお見でないよ。……お前さん本當に默つてる積りかい……さうぢやないでせう、有れば有る無ければ無いで、はつきり分るやうに話をしてくれるんだらうね……愛さん……あなたは心から私を見くびつてかゝるんだね」
「さうぢやありません」
餘り葉子の言葉が激して來るので、愛子は少し怖れを感じたらしく慌ててかう云つて言葉で支へようとした。
「もつとこつちにお出で」
愛子は動かなかつた。葉子の愛子に對する憎惡は極點に達した。葉子は腹部の痛みも忘れて、寢床から跳り上つた。而していきなり愛子のたぶさを掴まうとした。
愛子は普段の冷靜に似ず、葉子の發作を見て取ると、敏捷に葉子の手許をすり拔けて身をかはした。葉子はふら／＼とよろけて一方の手を障子紙に突つ込みながら、それでも倒れるはずみに愛子の袖先きを掴んだ。葉子は倒れながらそれをたぐり寄せた。醜い姉妹の爭鬪が、泣き、わめき、叫び立てる聲の中に演ぜられた。愛子は顏や手に掻き傷を受け、髮をおどろに亂しながらも、やうやく葉子の手を振り放して廊下に飛び出した。葉子は蹣跚とした足取りでその後を追つたが、迚も愛子の敏捷さに叶はなかつた。而して階子段の降口の所でつやに喰ひ止められてしまつた。葉子はつやの肩に身を投げかけながらおい／＼と聲を立てて子供のやうに泣き沈んでしまつた。
幾時間かの人事不省の後に意識がはつきりして見ると、葉子は愛子とのいきさつを唯ゞ惡夢のやうに思ひ出すばかりだつた。而かもそれは事實に違ひない。枕許の障子には葉子の手のさし込まれた孔が、大きく破れたまゝ殘つてゐる。入院のその日から、葉子の名は口さがない婦人患者の口の端にうるさく上つてゐるに違ひない。それを思ふと一時でもそこにぢつとしてゐるのが、堪へられない事だつた。葉子はすぐ外の病院に移らうと思つてつやに云ひつけた。然しつやはどうしてもそれを承知しなかつた。自分が身に引受けて看護するから、是非ともこの病院で手術を受けて貰ひたいとつやは云ひ張つた。葉子から暇を出されながら、妙に葉子に心を引き付けられてゐるらしい姿を見ると、この場合葉子はつやにしみ／＼とした愛を感じた。清潔な血が細いしなやかな血管を

滯りなく流れ廻つてゐるやうな、すべ〳〵と健康らしい、淺黑いつやの皮膚は何よりも葉子には愛らしかつた。始終吹出物でもしさうな、膿つぽい女を葉子は何よりも呪はしいものに思つてゐた。葉子はつやのまめやかな心と言葉に引かされてそこに殘る事にした。

　これだけ貞世から隔たると葉子は始めて少し氣のゆるむのを覺えて、腹部の痛みで突然眼を覺ます外には多愛なく眠るやうな事もあつた。然し何んと云つても一番心に懸るものは貞世だつた。さゝくれて、赤く乾いた脣から漏れ出るあの囈言……それが何らかすると近々と耳に聞こえたり、ぼんやりと眼を開いたりするその顏が浮き出して見えたりした。それればかりではない、葉子の五官は非常に敏捷になつて、おまけにイリュージョンやハルシネーションを絶えず見たり聞いたりするやうになつてしまつた。倉地なんぞはすぐ側に坐つてゐるなと思つて、苦しさに眼をつぶりながら手を延ばして疊の上を探つて見る事などもあつた。そんなにはつきり見えたり聞こえたりするものが、凡て虛構であるのを見出す淋しさは喩へやうがなかつた。

　愛子は葉子が入院の日以來感心に毎日訪れて貞世の容體を話して行つた。もう始めの日のやうな狼藉はしなかつたけれども、その顏を見たばかりで、葉子は病氣が重るやうに思つた。殊に貞世の病狀が輕くなつて行くといふ報告は激しく葉子を怒らした。自分があれ程の愛着を籠めて看護してもよくならなかつたものが、愛子なんぞの通り一遍の世話で治る筈がない。又愛子はいゝ加減な氣休めに虛言をついてゐるのだ。貞世はもうひよつとすると死んでゐるかも知れない。さう思つて岡が尋ねて來た時に根掘り葉掘り聞いて見るが、二人の言葉が餘りに符合するので、貞世の段々よくなつて行きつゝあるのを疑ふ餘地はなかつた。葉子には運命が狂ひ出したやうにしか思はれなかつた。愛情と云ふものなしに病氣が治せるなら、人の生命は機械でも造り上げる事が出來る譯だ。そんな筈はない。それだのに貞世は段々よくなつて行つてゐる。人ばかりではない、神までが、自分を自然法の他の法則で弄ばうとしてゐるのだ。

　葉子は齒がみをしながら貞世が死ねかしと祈るやうな瞬間を持つた。

　日は經つけれども倉地からは本當に何んの消息もなかつた。病的に感覺の興奮した葉子は、時々肉體的に倉地を慕ふ衝動に驅り立てられた。葉子の心の眼には、倉地の肉體の凡ての部分は觸れる事が出來ると思ふ程具體的に想像された。葉子は自分で造り出した不思議な迷宮の中にあつて、意識の痺れ切るやうな陶醉にひたつた。然しその醉が醒めた後の苦痛は、精神の疲弊と一緖に働いて、葉子を半死半生の境に打ちのめした。葉子は自分の妄想に嘔吐を催しながら、倉地と云はず凡ての男を呪ひに呪つた。

　愈々葉子が手術を受けるべき前の日が來た。葉子はそれを左程恐ろしい事とは思はなかつた。子宮後屈症と診斷された時、買つて歸つて讀んだ浩瀚な醫書によつて見ても、その手術は割合に簡單なものであるのを知り拔いてゐたから、その事については割合に安々とした心持でゐる事が出來た。唯ゞ名狀し難い焦燥と悲哀とは何う片付けやうもなかつた。毎日來てゐた愛子の足は二日おきになり三日おきになり段々遠ざかつた。岡などは全く姿を見せなくなつてしまつた。葉子は今更に自分の周りを淋しく見廻して見た。出遇ふかぎりの男と女とが何がなしに牽き着けられて、離れる事が出來なくなる、そんな磁力のやうな力を持つてゐるといふ自負に氣負つて、自分の周圍にけ知ると知らざるとを問はず、何時でも無數の人々の心が待つてゐるやうに思つてゐた葉子は、今は凡ての人

から忘られ果てて、大事な定子からも倉地からも見放し見放されて、荷物のない物置部屋のやうな貧しい一室の隅つこに、夜具にくるまつて暑氣に蒸されながら崩れかけた五體を賴りなく横へねばならぬのだ。それは葉子に取つてはあるべき事とは思はれぬまでだつた。然しそれが確かな事實であるのを何うしよう。

それでも葉子はまだ立ち上らうとした。自分の病氣が癒え切つたその時を見てゐるがいゝ。どうして倉地をもう一度自分のものに仕遂せるか、それを見てゐるがいゝ。

葉子は臍心にたぐり込まれるやうな痛みを感ずる兩眼から熱い涙を流しながら、徒然なままに火のやうな一心を倉地の身の上に集めた。葉子の額にはいつでもハンケチがあてがはれてゐた。それが十分も經たない中に熱く濡れ通つて、つやに新らしいのと代へさせねばならなかつた。

四十七

その夜六時過ぎ、つやが來て障子を開いて、段々滿ちて行かうとする月が瓦屋根の重なりの上にぽつかり上つたのを覗かせてくれてゐる時、見知らぬ看護婦が美しい花束と大きな西洋封筒に入れた手紙とを持つて這入つて來てつやに渡した。つやはそれを葉子の枕許に持つて來た。葉子はもう花も何も見る氣にはなれなかつた。電氣もまだ來てゐないのでつやにその手紙を讀ませて見た。つやは薄明りにすかし〳〵讀み憎さうに文字を拾つた。

「あなたが手術の爲めに入院なさつた事を岡君から聞かされて驚きました。で、今日が外出日であるのを幸ひにお見舞します。

「僕はあなたにお目にかゝる氣にはなりません。僕はそれ程褊狹に出來上つた人間です。けれども僕は本當にあなたをお氣の毒に思ひます。倉地といふ人間が日本の軍事上の祕密を外國に漏らす商賣に關係した事が知れると共に、姿を隱したといふ報道を新聞で見た時、僕はそんなに驚きませんでした。然し倉地には二人程の外妾があると附け加へて書いてあるのを見て、本當にあなたをお氣の毒に思ひました。この手紙を皮肉に取らないで下さい。僕には皮肉は云へません。

「僕はあなたが失望なさらないやうに祈ります。僕は來週の月曜日から習志野の方に演習に行きます。木村からの便りでは、彼れは窮迫の絶頂にゐるやうです。けれども木村はそこを突き拔けるでせう。

「花を持つて來て見ました。お大事に。

古藤生」

つやは間へ〳〵それだけを讀み終つた。始終古藤を遙か年下な子供のやうに思つてゐる葉子は、一種侮蔑するやうな無感情を以てそれを聞いた。倉地が外妾を二人持つてると云ふ噂は初耳ではあるけれども、それは新聞の記事であつて見ればあてにはならない。その外妾二人と云ふのが、美人屋敷と評判のあつたそこに住む自分と愛子位の事を想像して、記者ならば云ひさうな事だ。唯さう輕くばかり思つてしまつた。

つやがその花束をガラス瓶に活けて、何んにも飾つてない床の上に置いて行つた後、葉子は前同樣にハンケチを額にあてて、機械的に働く心の影と戰はうとしてゐた。

その時突然死が——死の問題ではなく——死がはつきりと葉子の心に立ち現はれた。若し手術の結果、子宮底に穿孔が出來るやうになつて腹膜炎を起したら、命の助かるべき見込みはないのだ。そんな事を不圖思ひ起した。部屋の

姿も自分の心も何處と云つて特別に變つた譯ではなかつたけれども、何處となく葉子の周圍には確かに死の影がさまよつてゐるのをしつかりと感じないではゐられなくなつた。それは葉子が生れてから夢にも經驗しない事だつた。これまで葉子が死の問題を考へた時には、どうして死を招き寄せようかと云ふ事ばかりだつた。然し今は死の方がそろ〳〵と近寄つて來てゐるのだ。

月は段々光を増して行つて、電燈に灯も點つてゐた。眼の先きに見える屋根の間からは、炊煙だか、蚊遣火だかが薄すらと水のやうに澄み渡つた空に消えて行く。履物、車馬の類、汽笛の音、うるさい程の人々の話聲、さういふものは葉子の部屋をいつもの通り取り捲きながら、而して部屋の中は兎に角整頓して灯が點つてゐて、少しの不思議もないのに、何處とも知れずそこには死が這ひ寄つて來てゐた。

葉子はぎよつとして、血の代りに心臟の中に氷の水を瀉ぎこまれたやうに思つた。死なうとする時はとう〳〵葉子には來ないで、思ひもかけず死ぬ時が來たんだ。今まで留度なく流してゐた涙は、近づく嵐の前のそよ風のやうに何處ともなく姿をひそめてしまつてゐた。葉子は慌てふためいて、大きく眼を見開き、鋭く耳を欹かして、そこにある物、そこにある響きを捕へて、それにすがり附きたいと思つたが、眼にも耳にも何か感ぜられながら、何が何やら少しも分らなかつた。唯ゞ感ぜられるのは、心の中が、譯もなく唯ゞわく〳〵として、すがり附くものがあれば何にでもすがり附きたいと無上にあせつてゐる、その目まぐるしい欲求だけだつた。葉子は震へる手で枕を撫で廻したり、シーツを摘み上げてぢつと握り締めて見たりした。冷たい脂汗が、掌に滲み出るばかりで、握つたものは何んの力にもならない事を知つた。その失望は形容の出來ない程大きなものだつた。葉子は一つの努力ごとにがつかりして、又懸命に便りになるもの、根のあるやうなものを追ひ求めて見た。然し何處を探して見ても凡ての努力が全く無駄なのを心では本能的に知つてゐた。

周圍の世界は少しのこだはりもなくずる〳〵と平氣で日常の營みをしてゐた。看護婦が草履で廊下を歩いて行く、その音一つを考へて見ても、そこには明らかに生命が見出された。その足は確かに廊下を踏み、廊下は礎に續き、礎は大地に据ゑられてゐた。患者と看護婦との間に取り交はされる言葉一つにも、それを與へる人と受ける人とがちやんと大地の上に存在してゐた。然しそれらは奇妙にも葉子とは全く無關係で沒交渉だつた。葉子のゐる所には何處にも底がない事を知らねばならなかつた。深い谷に過つて落ち込んだ人が落ちた瞬間に感ずるあの焦燥‥‥それが連續して止む時なく葉子を襲ふのだつた。深さの分らないやうな暗い闇が、葉子を唯ゞ一人眞中に据ゑておいて、果てしなくそのまはりを包まうと靜かに〳〵近づきつゝある。葉子は少しもそんな事を欲しないのに、葉子の心持には頓着なく、休む事なく止まる事なく、悠々閑々として近づいて來る。葉子は恐ろしさにおびえて聲も得上げなかつた。而して唯ゞそこから遁れ出たい一心に心ばかり焦りに焦つた。

もう駄目だ、力が盡き切つたと、觀念しようとした時、然し、その奇怪な死は、すうつと朝霧が晴れるやうに、葉子の周圍から消え失せてしまつた。見た所、そこには何一つ變つた事もなければ變つた物もない。唯ゞ夏の夕が涼しく夜に繋がらうとしてゐるばかりだつた。葉子はきよとんとして庇の下に水々しく漂ふ月を見やつた。

唯ゞ不思議な變化の起つたのは心ばかりだつ

た。荒磯に波又波が千變萬化して追ひかぶさつて來ては激しく打ち摧けて、眞白な飛沫を空高く突き上げるやうに、これと云つて取り留めのない執着や、憤りや、悲しみや、恨みやが蛛手によれ合つて、それが自分の周圍の人達と縛び附いて、譯もなく葉子の心を掻きむしつてゐたのに、その夕方の不思議な經驗の後では、一筋の透明な淋しさだけが秋の水のやうに果てしもなく流れてゐるばかりだつた。不思議な事には寢入つても忘れ切れない程な頭腦の激痛も痕なくなつてゐた。

神がかりに遇つた人が神から見放された時のやうに、葉子は深い肉體の疲勞を感じて、寢床の上に打ち伏さつてしまつた。さうやつてゐると自分の過去や現在が手に取るやうにはつきり考へられ出した。而して冷やかな悔恨が泉のやうに湧き出した。

「間違つてゐた……から世の中を歩いて來るんぢやなかつた。然しそれは誰れの罪だ。分らない。然し兎に角自分には後悔がある。出來るだけ、生きてる中にそれを償つておかなければならない」

内田の顏がふと葉子には思ひ出された。あの嚴格な基督の教師は果して葉子の所に尋ねて來てくれるか何うか分らない。さう思ひながらも葉子はもう一度内田に遇つて話をしたい心持を止める事が出來なかつた。

葉子は枕許のベルを押してつやを呼び寄せた。而して手文庫の中から洋紙でとぢた手帳を取り出さして、それに毛筆で葉子の云ふ事を書き取らした。

「木村さんに。

「私はあなたを詐つて居りました。私は是れから他の男に嫁入ります。あなたは私を忘れて下さいまし。私はあなたの所に行ける女ではないのです。あなたのお思ひ違ひを十分御自分で調べて見て下さいまし。

「倉地さんに。

「私はあなたを死ぬまで。けれども二人とも間違つてゐた事を今はつきり知りました。死を見てから知りました。あなたにはお分りになりますまい。私は何もかも恨みはしません。あなたの奥さんはどうなさつておいでです。……私は一緒に泣く事が出來る。

「内田の小父さんに。

「私は今夜になつて小父さんを思ひ出しました。小母樣によろしく。

「木部さんに。

「一人の老女があなたの所に女の子を連れて參るでせう。その子の顏を見てやつて下さいまし。

「愛子と貞世に。

「愛さん、貞ちやん、もう一度さう呼ばしておくれ。それで澤山。

「岡さんに。

「私はあなたをも怒つてはゐません。

「古藤さんに。

「お花とお手紙とを難有う。あれから私は死を見ました。　七月二十一日　葉子」

つやはこんなぽつり〳〵と短い葉子の言葉を書き取りながら、時々怪訝な顏をして葉子を見た。葉子の唇は淋しく震へて、眼にはこぼれない程度に涙が滲み出してゐた。

「もうそれでいゝ難有うよ。あなただけね、こんなになつてしまつた私の側にゐてくれるのは。……それだのに、私はこんなに零落した姿をあなたに見られるのがつらくつて、來た日は途中から外の病院に行つて仕舞はうかと思つたのよ。馬鹿だつたわね」

葉子は口ではなつかしさうに笑ひながら、ほろほろと涙をこぼしてしまつた。

「それをこの枕の下に入れておいておくれ。今夜こそは私久し振りで安々とした心持で寢られるだらうよ、明日の手術に疲れないやうによく寢ておかないといけないわね。でもこんなに弱つてゐても手術は出來るのか知らん……もつとそつちに引つ張つて行つて、月の光が額にあたるやうにして頂戴な。戸は寢入つたら引いておくれ。それから一寸あなたの手をお貸し。……あなたの手は溫かい手ね。この手はいゝ手だわ」

葉子は人の手といふものをこんなになつかしいものに思つた事はなかつた。力を籠めた手でそうつと抱いて、いつまでもやさしくそれを撫でてゐたかつた。つやも何時か葉子の氣分に引入れられて、鼻をすゝるまでに涙ぐんでゐた。

葉子はやがて打ち開いた障子から蚊帳越しに、、、うつとりと月を眺めながら考へてゐた。葉子の心は月の光で淸められたかと見えた。倉地が自分を捨てて逃げ出す爲めに書いた狂言が計らず其筋の嫌疑を受けたのか、それとも恐ろしい賣國の罪で金をすら葉子に送れぬやうになつたのか、それは何うでもよかつた。縦令ば妾が幾人あつてもそれも何うでもよかつた。唯ゞ凡てが空しく見える中に倉地だけが唯ゞ一人本當に生きた人のやうに葉子の心に住んでゐた。互ひを墮落させ合ふやうな愛し方をした、それも今はなつかしい思ひ出だつた。木村は思へば思ふ程涙ぐましい不幸な男だつた。その思ひ入つた心持は何事もわだかまりのなくなつた葉子の胸の中を淸水のやうに流れて通つた。多年の迫害に復讐する時機が來たといふやうに、岡までをそゝのかして、葉子を見捨ててしまつたと思はれる愛子の心持にも葉子は同情が出來た。愛子の情けに引かされて葉子を裏切つた岡の氣持は猶更らよく分つた。泣いても泣いても泣き足りないやうに可哀さうなのは貞世だつた。愛子はいまに屹度自分以上に恐ろしい道に踏み迷ふ女だと葉子は思つた。その愛子の唯ゞ一人の妹として……若しも自分の命が無くなつてしまつた後は……さう思ふにつけて葉子は内田を考へた。凡ての人は何かの力で流れて行くべき先きに流れて行くだらう。而して仕舞には誰れでも自分と同樣に一人坊ちになつてしまふんだ。……どの人を見ても憐れまれる。葉子はさう思ひ耽りながら、靜かに〳〵西に廻つて行く月を見入つてゐた。その月の輪郭が段々ぼやけて來て、空の中に浮き漂ふやうになると、葉子の睫毛の一つ〳〵にも月の光が宿つた。涙が眼尻から溢れて兩方の顳顬の所を擽ぐるやうにする〳〵と流れ下つた。口の中は粘液で粘つた。許すべき何人もない。許さるべき何事もない。唯ゞあるがまゝ……唯ゞ一抹の淸い悲しい靜けさ。葉子の眼はひとりでに閉ぢて行つた。整つた呼吸が輕く小鼻を震はして流れた。

つやが戸をたてにそうつとその部屋に這入つた時には、葉子は病氣を忘れ果てたもののやうに、がたぴしと戸を締める音にも目覺めずに安らけく寢入つてゐた。

四十八

その翌朝手術臺に上らうとした葉子は昨夜の葉子とは別人のやうだつた。激しい呼鈴の音で呼ばれてつやが病室に來た時には、葉子は寢床から起き上つて、認め終つた手紙の狀袋を封じてゐる所だつたが、それをつやに渡さうとする瞬間に、、、いきなり嫌やになつて、脣をぶるぶる震はせながらつやの見てゐる前でそれをずた〳〵に裂いてしまつた。それは愛子に宛てた手紙だつたのだ。今日は手術を受けるから九時までに是非とも立會ひに來るやうにと認めたのだつた。いくら氣丈夫でも腹を斷ち割る恐ろし

い手術を年若い少女が見てはゐられない位は知つてゐながら、葉子は何がなしに愛子にそれを見せつけてやりたくなつたのだ。自分の美しい肉體が酷らしく傷けられて、そこから靜脈を流れてゐるどす黒い血が流れ出る、それを愛子が見てゐる中に氣が遠くなつて、そのまゝそこに打つ倒れる。そんな事になつたらどれ程快いだらうと葉子は思つた。幾度來てくれろと電話をかけても、何んとか口實をつけてこの頃見も返らなくなつた愛子に、これだけの復讐をしてやるのでも少しは胸がすく、さう葉子は思つたのだ。然しその手紙をつやに渡さうとする段になると、葉子には思ひもかけぬ躊躇が來た。若し手術中にはしたない囈言でも言つてそれを愛子に聞かれたら。あの冷刻な愛子が面も背けずにぢつと姉の肉體が切りさいなまれるのを見續けながら、心の中で存分に復讐心を滿足するやうな事があつたら。こんな手紙を受取つてもいゝ、相手にしないで愛子が來なかつたら……そんな事を豫想すると葉子は手紙を書いた自分に愛想がつきてしまつた。

　つやは恐ろしいまでに激昂した葉子の顏を見やりもし得ないで、おづ〳〵と立ちもやらずにそこにかしこまつてゐた。葉子はそれが堪らない程癪に障つた。自分に對して凡ての人が普通の人間として交らうとはしない。狂人にでも接するやうな仕打ちを見せる。誰れも彼れもさうだ。醫者までがさうだ。

「もう用はないのよ。早くあつちにお出で。お前は私を氣狂ひとでも思つてゐるんだらうね。……早く手術をして下さいつてさう云つてお出で。私はちやんと死ぬ覺悟をしてゐますからつてね」

昨夕なつかしく握つてやつたつやの手の事を思ひ出すと、葉子は嘔吐を催すやうな不快を感じてから云つた。汚い〳〵何もかも汚い。つやは所在なげたそつとそこを立つて行つた。葉子は眼で噛み付くやうにその後姿を見送つた。

　その日天氣は上々で東向きの壁は觸つて見たら内部からでもほんのりと暖か味を感ずるだらうと思はれる程暑くなつてゐた。葉子は昨日までの疲勞と衰弱とに似ず、その日は起きるとから默つて臥てはゐられない位、體が動かしたかつた。動かす度毎に襲つて來る腹部の鈍痛や頭の混亂をいやが上にも募らして、思ひ存分の苦痛を味はつて見たいやうな捨鉢な氣分になつてゐた。而してふら〳〵と少しよろけながら、衣紋も亂したまゝ部屋の中を片付けようとして床の間の所に行つた。懸軸もない床の間の片隅には昨日古藤が持つて來た花が、暑さの爲めに蒸れたやうに萎みかけて、甘つたるい香を放つてうなだれてゐた。葉子はガラス瓶ごとそれを持つて縁側の所に出た。而してその花のかたまりの中に無手と熱した手を突つ込んだ。死屍から來るやうな冷たさが葉子の手に傳はつた。葉子の指先きは知らず〳〵縮まつて行つて沒義道にそれを爪も立たんばかり握りつぶした。握りつぶしては瓶から引き拔いて手欄から戸外に投げ出した。薔薇、ダリア、小田卷、などの色とりどりの花がばら〳〵に亂れて二階から部屋の下に當る汚い路頭に落ちて行つた。葉子は殆んど無意識に一摑みづつさうやつて投げ捨てた。而して最後にガラス瓶を力任せに敲きつけた。瓶は眼の下で激しく壞れた。そこから溢れ出た水が乾き切つた縁側板に丸い斑紋をいくつとなく散らかして。

　ふと見ると向うの屋根の物干臺に浴衣の類を持つて干しに上つて來たらしい女中風の女が、ぢつと不思議さうにこつちを見つめてゐるのに氣がついた。葉子とは何んの關係もないその女までが、葉子のする事を怪しむらしい樣子をしてゐるのを見ると、葉子の狂暴な氣分は益々

募つた。葉子は手欄に両手をついてぶる〳〵と震へながら、その女を何時までも〳〵睨みつけた。女の方でも葉子の仕打ちに氣附いて、暫らくは意趣に見返す風だつたが、やがて一種の恐怖に襲はれたらしく、干物を竿に通しもせずにあたふたと慌てて干物臺の急な階子を駈け下りてしまつた。後には燃えるやうな青空の中に不規則な屋根の波ばかりが眼をちか〳〵させて殘つてゐた。葉子は何故にとも知れぬ溜息を深くついてまんじりとそのあからさまな景色を夢かなぞのやうに眺め續けてゐた。

やがて葉子は又我れに返つて、ふくよかな髮の中に指を突つ込んで激しく頭の地をかきながら部屋に戻つた。

そこには寢床の側に洋服を着た一人の男が立つてゐた。激しい外光から暗い部屋の方に眼を向けた葉子には、たゞ眞黒な立姿が見えるばかりで誰れとも見分けがつかなかつた。然し手術の爲めに醫員の一人が迎へに來たのだと思はれた。それにしても障子の開く音さへしなかつたのは不思議な事だ。這入つて來ながら聲一つかけないのも不思議だ。と、思ふと得體の分らないその姿は、その周りの物が段々明らかになつて行く間に、たつた一つだけ眞黒なまゝで何時までも輪郭を見せないやうだつた。謂はば人の形をした眞暗な洞穴が空氣の中に出來上つたやうだつた。始めの間好奇心を以てそれを眺めてゐた葉子は見詰めれば見詰める程、その形に實質がなくつて、眞暗な空虛ばかりであるやうに思ひ出すと、ぞうつと水を浴せられたやうに怖毛を震つた。「木村が來た」……何と云ふ事なしに葉子はさう思ひ込んでしまつた。爪の一枚々々までが肉に吸ひ寄せられて、毛と云ふ毛が强直して逆立つやうな薄氣味惡さが總身に傳はつて、思はず聲を立てようとしながら、聲は出ずに、脣ばかりが幽かに開いてぶるぶると震へた。而して胸の所に何か突きのけるやうな具合に手を擧げたまゝ、ぴつたりと立ち止つてしまつた。

その時その黒い人の影のやうなものが始めて動き出した。動いて見ると何んでもない、それは矢張り人間だつた、見る〳〵その姿の輪郭がはつきり判つて來て、暗さに慣れて來た葉子の眼にはそれが岡である事が知れた。

「まあ岡さん」

葉子はその瞬間のなつかしさに引き入れられて、今まで出なかつた聲を吃るやうな調子で出した。岡はかすかに頰を紅らめたやうだつた。

而していつもの通り上品に、一寸疊の上に膝をついて挨拶した。まるで一年も牢獄にゐて、人間らしい人間に遇はないでゐた人のやうに葉子には岡がなつかしかつた。葉子とは何んの關係もない廣い世間から、一人の人が好意を籠めて葉子を見舞ふ爲めにそこに天降つたとも思はれた。走り寄つてしつかりとその手を取りたい衝動を抑へる事が出來ない程に葉子の心は感激してゐた。葉子は眼に涙をためながら思ふままの振舞ひをした。自分でも知らぬ間に、葉子は、岡の側近く坐つて、右手をその肩に、左手を疊に突いて、しげ〳〵と相手の顏を見やる自分を見出した。

「御無沙汰してゐました」

「よく入らしつて下さつてね」

どちらから云ひ出すともなく二人の言葉は親しげにからみ合つた。葉子は岡の聲を聞くと、急に今まで自分から逃げてゐた力が快復して來たのを感じた。逆境にゐる女に對して、どんな男であれ、男の力がどれ程强いものであるかを思ひ知つた。男性の賴もしさがしみ〴〵と胸に逼つた。葉子は我れ知らずすがり附くやうに、岡の肩にかけてゐた右手を辷らして、膝の上に乘せてゐる岡の右手の甲の上からしつかり

と捕へた。岡の手は葉子の觸覺に妙に冷たく響いて來た。

「永く〳〵お過ひしませんでしたわね。私あなたを幽靈ぢやないかと思ひましてよ。變な顏付きをしたでせう。貞世は：：あなた今朝病院の方から入らしつたの？」

岡は一寸返事を躊つたやうだつた。

「いゝえ家から來ました。ですから私、今日の御樣子は知りませんが、昨日までの所では段々およろしいやうです。眼さへ覺めていらつしやると『御姉樣々々』とお泣きなさるのが本當にお可哀さうです」

葉子はそれだけ聞くともう感情が脆くなつてゐて胸が張り裂けるやうだつた。岡は眼ざとくもそれを見て取つて、悪い事を云つたと思つたらしかつた。而して少し慌てたやうに笑ひ足しながら、

「さうかと思ふと、大變お元氣な事もあります。熱の下つていらつしやる時なんかは、愛子さんに面白い本を讀んでお貰ひになつて、喜んで聞いておいでです」

と附け足した。葉子は直覺的に岡がその場の間に合せを云つてゐるのだと知つた。それは葉子を安心させる爲めの好意であるとは云へ、岡の言葉は決して信用する事が出來ない。毎日一度づつ大學病院まで見舞ひに行つて貰ふつやの言葉に安心が出來ないでゐて、誰れか眼に見た通りを知らせてくれる人はないかと焦つてゐた矢先き、この人ならばと思つた岡も、つや以上にいゝ加減を云はうとしてゐるのだ。この調子では、疾うに貞世が死んでしまつてゐても、人達は岡が云つて聞かせるやうな事を何時までも自分に云ふのだらう。自分には誰れ一人として胸を開いて交際しようといふ人はゐなくなつてしまつたのだ。さう思ふと淋しいよりも、苦しいよりも、かつと取り上氣せる程貞世の身の上が氣遣はれてならなくなつた。

「可哀さうに貞世は：：嘸痩せてしまつたでせうね？」

葉子は口裏をひくやうにかう尋ねて見た。

「始終見つけてゐる故ですか、そんなにも見えません」

岡はハンケチで頭の周りを拭つて、ダブル・カラーの合せを左の手でくつろげながら少し息氣苦しさうにかう答へた。

「何んにもいたゞけないんでせうね」

「ソップと重湯だけですが兩方ともよく食べなさいます」

「ひもじがつて居りますか」

「いゝえそんなでも」

もう許せないと葉子は思ひ入つて腹を立てた。腸チブスの豫後にあるものが、食慾がない：：そんなしら〴〵しい虚構があるものか。皆んな虚構だ。岡の云ふ事も皆んな虚構だ。昨夜は病院に泊らなかつたといふ、それも虚構でなくて何んだらう。愛子の熱情に燃えた手を握り慣れた岡の手が、葉子に握られて冷えるのも尤もだ。昨夜はこの手に：：葉子は眸を定めて自分の美しい指にからまれた岡の美しい右手を見た。それは女の手のやうに白く滑らかだつた。然しこの手が昨夜は、：：葉子は顏を擧げて岡を見た。殊更に鮮かに紅いその脣：：この脣が昨夜は：：

眩暈がする程一度に押し寄せて來た憤怒と嫉妬との爲めに、葉子は危くその場に有り合せたものに噛み附かうとしたが、辛くそれを支へると、もう熱い涙が眼をこがすやうに痛めて流れ出した。

「あなたはよく嘘をおつきなさるのね」

葉子はもう肩で氣息をしてゐた。頭が激しい動悸の度毎に震へるので、髮の毛は小刻みに生き物のやうに戰いた。而して岡の手から自分の手

を離して、袂から取り出したハンケチでそれを押し拭つた。眼に入る限りのもの、手に觸れる限りのものが又穢らはしく見え始めたのだ。岡の返事も待たずに葉子は疊みかけて吐き出すやうに云つた。

「貞世はもう死んでゐるんです。それを知らないとでもあなたは思つていらつしやるの。あなたや愛子に看護して貰へば誰れでも難有い往生が出來ませうよ。本當に貞世は仕合せな子でした。……お〻〳〵貞世！　お前はほんとに仕合せな子だねえ。……岡さん云つて聞かせて下さい、貞世はどんな死に方をしたか。飲みたい死水も飲まずに死にましたか。あなたと愛子がお庭を步き廻つてゐる中に死んでゐましたか。それとも……それとも愛子の眼が憎々しく笑つてゐるその前で眠るやうに息氣を引き取りましたか。どんなお葬式が出たんです。早桶は何處で註文なさつたんです。私の早桶は貞世のより少し大きくしないと這入りませんよ。……私は何んと云ふ馬鹿だらう、早く丈夫になつて思ひ切り貞世を介抱してやりたいと思つたのに……もう死んでしまつたのですものねえ。嘘です……それなら何故あなたも愛子ももつとしげ〳〵私の見舞には來て下さらないの。あなたは今日私を苦しめに……なぶりにいらしつたのね……」

「そんな飛んでもない！」

岡がせきこんで葉子の言葉の切れ目に云ひ出さうとするのを、葉子は激しい笑ひで遮つた。

「飛んでもない……その通り。あ〻頭が痛い。私は存分に詛ひを受けました。御安心なさいましとも。決して御邪魔はしませんから。私は散々踊りました。今度はあなた方が踊つてい〻番ですものね。……ふむ、踊れるものなら見事に踊つて御覽なさいまし。……踊れるものなら、は〻〻」

葉子は狂女のやうに高々と笑つた。岡は葉子の物狂ほしく笑ふのを見ると、それを恥ぢるやうに眞紅になつて下を向いてしまつた。

「聞いて下さい」

やがて岡はかう云つてきつとなつた。

「伺ひませう」

葉子もきつとなつて岡を見やつたが、すぐ口尻に酷たらしい皮肉な微笑を湛へた。それは岡の氣先きをへし折るに十分な程の皮肉さだつた。

「お疑ひなさつても仕方がありません。私、愛子さんに深い親しみを感じて居ります……」

「そんな事なら伺ふまでもありませんわ。私をどんな女だと思つていらつしやるの。愛子さんに深い親しみを感じていらつしやればこそ、今朝はわざ〳〵何日頃死ぬだらうと見に來て下さつたのね。何んとお禮を申していゝか、そこはお察し下さいまし。今日は手術を受けますから、死骸になつて手術室から出て來る所をよつく御覽なさつてあなたの愛子に知らせて喜ばしてやつて下さいましよ。死にに行く前に篤とお禮を申します。繪島丸では色々御親切を難有う御座いました。お蔭樣で私は淋しい世の中から救ひ出されました。あなたをお兄さんともお慕ひしてゐましたが、愛子に對しても氣恥しくなりましたから、もうあなたとは御縁を斷ちます。と云ふまでもない事ですわね。もう時間が來ますからお立ち下さいまし」

「私、ちつとも知りませんでした。本當にそのお體で手術をお受けになるのですか」

岡は惘れたやうな顏をした。

「毎日大學に行くつやは馬鹿ですから何も申上げなかつたんでせうよ。申上げてもお聞こえにならなかつたかも知れませんわね」

と葉子は微笑んで、眞青になつた顏にふりかゝる髮の毛を左の手で器用にかき上げた。その小指は瘦せ細つて骨ばかりのやうになりながらも、美しい線を描いて折れ曲つてゐた。

「それは是非お延ばし下さいお願ひしますから……お醫者さんもお醫者さんだと思ひます」

「私が私だもんですからね」

葉子はしげ〳〵と岡を見やつた。その眼からは涙がすつかり乾いて、額の所には脂汗が滲み出てゐた。觸れて見たら氷のやうだらうと思はれるやうな青白い冷たさが生え際かけて漂つてゐた。

「ではせめて私に立會はして下さい」

「それほどまでにあなたは私がお憎いの？……麻醉中に私の云ふ譫言でも聞いておいて笑話の種になさらうと云ふのね。え丶、よう御座います入らつしやいまし、御覧に入れますから。詛ひの爲めに痩せ細つてお婆さんのやうになつてしまつたこの體を頭から足の爪先きまで御覧に入れますから……今更らお憫れになる餘地もありますまいけれど—

さう云つて葉子は痩せ細つた顔にあらん限りの媚びを集めて、流眄に岡を見やつた。岡は思はず顔を背けた。

そこに若い醫員がつやを伴れて這入つて來た。葉子は手術の支度が出來た事を見て取つた。葉子は默つて醫員に一寸挨拶したま丶衣紋をつくろつて直ぐ座を立つた。それに續いて部屋を出て來た岡などは全く無視した態度で、怪しげな薄暗い階子段を降りて、これも暗い廊下を四五間辿つて手術室の前まで來た。つやが戸のハンドルを廻してそれを開けると、手術室からはさすがに眩しい豐かな光線が廊下の方に流れて來た。そこで葉子は岡の方に始めて振り返つた。

「遠方をわざ〳〵御苦勞さま。私はまだあなたに肌を御覧に入れる程の莫連者にはなつてゐませんから……」

さう小さな聲で云つて悠々と手術室に這入つて行つた。岡は勿論押し切つて後に跟いては來なかつた。

着物を脱ぐ間に、世話に立つたつやに葉子はからうやうやくにして云つた。

「岡さんが這入りたいと仰しやつても入れてはいけないよ。それから……それから（こ丶で葉子は何がなしに涙ぐましくなつた）若し私が譫言のやうな事でも云ひかけたら、お前に一生のお願ひだからね、私の口を……口を抑へて殺してしまつておくれ。賴むよ。屹度！—

婦人科病院の事とて女の裸體は毎日幾人となく扱ひつけてゐる癖に、矢張り好奇な眼を向けて葉子を見守つてゐるらしい助手達に、葉子は痩せさらばへた自分をさらけ出して見せるのが死ぬよりつらかつた。ふとした出來心から岡に對して云つた言葉が、葉子の頭にはいつまでもこびり附いて、貞世はもう本當に死んでしまつたもののやうに思へて仕方がなかつた。貞世が死んでしまつたのに何を苦しんで手術を受ける事があらう。さう思はないでもなかつた。然し場合が場合でかうなるより仕方がなかつた。

眞白な手術衣を着た醫員や看護婦に圍まれて、矢張り眞白な手術臺は刑場のやうに葉子を待つてゐた。そこに近づくと葉子は我れにもなく急におびえが出た。思ひ切り鋭利なメスで手際よく切り取つてしまつたら嘸さつぱりするだらうと思つてゐた腰部の鈍痛も、急に痛みが止つてしまつて、身體全體がしびれるやうにしやちこばつて冷汗が額にも手にもしとゞに流れた。葉子は唯一つの慰藉のやうにつやを顧みた。そのつやの勵ますやうな顔を唯一つの便りにして、細かく震へながら仰向けに冷やつとする手術臺に横はつた。

醫員の一人が白布の口あてを口から鼻の上にあてがつた。それだけで葉子はもう息氣がつまる程の思ひをした。その癖眼は妙に冴えて眼の前に見る天井板の細かい木理までが動いて走

るやうに眺められた。神經の末梢が大風に遇つたやうにざわ／＼と小氣味惡く騷ぎ立つた。心臟が息氣苦しい程時々働きを止めた。

　やがて芳芬の激しい藥滴が布の上にたらされた。葉子は兩手の脈所を醫員に取られながら、その香を薄氣味惡く嗅いだ。

「ひとーつ」

執刀者が鈍い聲でから云つた。

「ひとーつ」

葉子のそれに應ずる聲は激しく震へてゐた。

「ふたーつ」

　葉子は生命の尊さをしみ／＼と思ひ知つた。死若しくは死の隣りへまでの不思議な冒險・・・さう思ふと血は凍るかと疑はれた。

「ふたーつ」

葉子の聲は益々震へた。かうして數を讀んで行く中に、頭の中がしん／＼と冴えるやうになつて行つたと思ふと、世の中がひとりでに遠退くやうに思へた。葉子は我慢が出來なかつた。いきなり右手を振りほどいて力任せに口の所を搔い拂つた。然し醫員の力はすぐ葉子の自由を奪つてしまつた。葉子は確かにそれにあらがつてゐる積りだつた。

「倉地が生きてる間――死ぬものか、・・・どうしてももう一度その胸に・・・やめて下さい。狂氣で死ぬとも殺されたくはない。やめて・・・人殺し」

　さう思つたのか云つたのか、自分ながらどつちとも定めかねながら葉子は悶えた。

「生きる／＼・・・死ぬのはいやだ・・・人殺し！・・・」

葉子は力のあらん限り戰つた、醫者とも藥とも・・・運命とも・・・葉子は永久に戰つた。然し葉子は二十も數を讀まない中に、死んだ者同樣に意識なく醫員等の眼の前に横はつてゐたのだ。

四十九

　手術を受けてから三日を過ぎてゐた。その間非常に望ましい經過を取つてゐるらしく見えた容體は三日目の夕方から突然激變した。突然の高熱、突然の腹痛、突然の煩悶、それは激しい驟雨が西風に伴はれて嵐がかつた天氣模樣になつたその夕方の事だつた。

　その日の朝から何んとなく頭の重かつた葉子は、それが天候の爲めだとばかり思つて、强ひてさう云ふ風に自分を說服して、憂慮を抑へつけてゐると、三時頃からどん／＼熱が上り出して、それと共に激しい下腹部の疼痛が襲つて來た。子宮底穿孔?!　なまじつか醫書を讀み嚙つた葉子はすぐそつちに氣を廻した。氣を廻しては强ひてそれを否定して、一時延ばしに容體の回復を待ちこがれた。それは然し無駄だつた。つやが慌てて當直醫を呼んで來た時には、葉子はもう生死を忘れて床の上に身を縮み上らしておい／＼と泣いてゐた。

　醫員の報告で院長も時を移さずそこに馳けつけた。應急の手あてとして四個の氷嚢が下腹部にあてがはれた。葉子は寢衣が一寸肌に觸るだけの事にも、生命をひつぱたかれるやうな痛みを覺えて思はずきやつと絹を裂くやうな叫び聲を立てた。見る／＼葉子は一寸の身動きも出來ない位疼痛に痛めつけられてゐた。

　激しい音を立てて戶外では雨の脚が瓦屋根を敲いた。むし／＼する晝間の暑さは急に冷え冷えとなつて、にはかに暗くなつた部屋の中に、雨から逃げ延びて來たらしい蚊がぷーんと長く引いた聲を立てて飛び廻つた。青白い薄闇に包まれて葉子の顏は見る／＼崩れて行つた。瘦せ細つてゐた頰は殊更らげつそりとこけて、高々と聳えた鼻筋の兩側には、落ち窪んだ兩眼が、中有の中を處嫌はずおど／＼と何物かを探し求めるやうに輝いた。美しく弧を描いて延びてゐ

た眉は、日茶苦茶に歪んで、眉間の八の字の所に近々と寄り集まつた。かさ〳〵に乾き切つた脣からは吐く息氣ばかりが強く押し出された。そこにはもう女の姿はなかつた。得體の分らない動物が悶え藻搔いてゐるだけだつた。

　間を置いてさし込んで來る痛み……鐵の棒を眞赤に燒いて、それで下腹の中を處嫌はずゑぐり廻すやうな痛みが來ると、葉子は眼も口も出來るだけ堅く結んで、息氣もつけなくなつてしまつた。何人そこに人がゐるのか、それを見廻すだけの氣力もなかつた。天氣なのか嵐なのか、それも分らなかつた。稻妻が空を縫つて走る時には、それが自分の痛みが形になつて現はれたやうに見えた。少し痛みが退くと、ほつと吐息をして、助けを求めるやうにそこに附いてゐる醫員に眼ですがつた。痛みさへ治してくれれば殺してもいゝといふ心と、とう〳〵自分に致命的な傷を負はしたと恨む心とが入り亂れて、旋風のやうに體中を通り拔けた。倉地がゐてくれたら　木村がゐてくれたら……あの親切な木村がゐてくれたら……そりや駄目だ。もう駄目だ。……駄目だ。貞世だつて苦しん、ゐるんだ、こんな事で　痛い〳〵……つやはゐるのか。（葉子は思ひ切つて眼を開いた。眼の中が痛かつた）ゐる。心配相な顏をして、……うそだあの顏が何が心配相な顏なものか。……皆んな他人だ……何んの緣故もない人達だ……皆んな暢氣な顏をして何事もせずに唯ゞ見てゐるんだ……この惱みの百分の一でも知つたら……あ、痛い〳〵〳〵！　定子……お前はまだ何處かに生きてゐるのか、貞世は死んでしまつたのだよ、定子……私も死んだ、死ぬよりも苦しい、この苦しみは……ひどい、これで死なれるものか　こんなにされて死なれるものか……何か　何處か……誰れか……助けてくれさうなものだのに……神樣！　あんまりです……………。

　葉子は身悶えも出來ない激痛の中で、シーツまで濡れ透る程な脂汗を體中にかきながら、こんな事をつぎ〳〵に口走るのだつたが、それは固より言葉にはならなかつた。唯ゞ時々痛いと云ふのが慘たらしく聞こえるばかりで、傷ついた牛のやうに叫ぶ外はなかつた。

　ひどい吹き降りの中に夜が來た。然し葉子の容體は險惡になつて行くばかりだつた。電燈が故障の爲めに來ないので、室内には二本の蠟燭が風に煽られながら、薄暗くともつてゐた、熱度を計つた醫員は一度々々その側まで行つて、眼をそばめながら度盛りを見た。

　その夜苦しみ通した葉子は明方近く少し痛みから遁れる事が出來た。シーツを思ひ切り摑んでゐた手を放して、弱々と額の所を撫でると、度々看護婦が拭つてくれたのにも係はらず、ぬる〳〵する程手も額も脂汗でしとゞになつてゐた。「迚も助からない」と葉子は他人事のやうに思つた。さうなつて見ると、一番強い望みはもう一度倉地に會つて唯ゞ一と目その顏を見たいといふ事だつた。それは然し望んでも叶へられる事でないのに氣付いた。葉子の前には暗いものがあるばかりだつた。葉子はほつと溜息をついた、二十六年間の胸の中の思ひを一時に吐き出して仕舞はうとするやうに。

　やがて葉子はふと思ひ付いて眼でつやを求めた。夜通し看護に餘念のなかつたつやは眼ざとくそれを見て寢床に近づいた。葉子は半分眼付きに物を云はせながら、

「枕の下〳〵」

と云つた。つやが枕の下を探すとそこから、手術の前の晩につやが書取つた書き物が出て來た。葉子は一生懸命な努力でつやにそれを燒いて捨てろ、今見てゐる前で燒いて捨てろと命じた。葉子の命令は判つてゐながら、つやが躊

踏してゐるのを見ると、葉子はかつと腹が立つて、その怒りに前後を忘れて起き上らうとした。その爲めに少しなごんでゐた下腹部の痛みが一時に押し寄せて來た。葉子は思はず氣を失ひさうになつて聲を擧げながら、脚を縮めてしまつた。けれども一生懸命だつた。もう死んだ後には何んにも殘しておきたくない。何んにも云はないで死なう。さう云ふ氣持ばかりが激しく働いてゐた。

「燒いて」

悶絶するやうな苦しみの中から、葉子は唯〻一言これだけを夢中になつて叫んだ。つやは醫員に促されてゐるらしかつたが、やがて一臺の蠟燭を葉子の身近に運んで來て、葉子の見てゐる前でそれを燒き始めた。めら／＼と紫色の焰が立ち上るのを葉子は確かに見た。

それを見ると葉子は心からがつかりしてしまつた。これで自分の一生は何んにもなくなつたと思つた。もういゝ……誤解されたまゝで、女王は今死んで行く……さう思ふとさすがに一味の哀愁がしみ／＼と胸をこそいで通つた。葉子は涙を感じた。然し涙は流れて出ないで、眼の中が火のやうに熱くなつたばかりだつた。

又もひどい疼痛が襲ひ始めた、葉子は神の締め木にかけられて、自分の體が見る／＼痩せて行くのを自分ながら感じた。人々が薄氣味惡げに自分を見守つてゐるのにも氣が付いた。

それでとう／＼その夜も明け離れた。

葉子は精も根も盡き果てようとしてゐるのを感じた。身を切るやうな痛みさへが時々は遠い事のやうに感じられ出したのを知つた。もう仕殘してゐた事はなかつたかと働きの鈍つた頭を懸命に働かして考へて見た。その時ふと定子の事が頭に浮んだ。あの紙を燒いてしまつては木部と定子とが遇ふ機會はないかも知れない。誰れかに定子を賴んで……葉子は慌てふためきながらその人を考へた。

内田……さうだ内田に賴まう。葉子はその時不思議ななつかしさを以て内田の生涯を思ひやつた。あの偏頗で頑固で意地張りな内田の心の奥の奥に小さく潛んでゐる澄み透つた魂が始めて見えるやうな心持がした。

葉子はつやに古藤を呼び寄せるやうに命じた。古藤の兵營にゐるのはつやも知つてゐる筈だ。古藤から内田に云つて貰つたら内田が來てくれない筈はあるまい。内田は古藤を愛してゐるから。

それから一時間苦しみ續けた後に、古藤の例の軍服姿は葉子の病室に現はれた。葉子の依賴を漸く飮みこむと、古藤は一圖な顏に思ひ入つた表情を湛へて、急いで座を立つた。

葉子は誰れにとも何にともなく息を引き取る前に内田の來るのを祈つた。

然し小石川に住んでゐる内田は中々にやつて來る樣子を見せなかつた。

「痛い／＼／＼……痛い」

葉子が前後を忘れ我れを忘れて、魂を搾り出すやうにから呻く悲しげな叫び聲は、大雨の後の晴れやかな夏の朝の空氣をかき亂して、慘ましく聞こえ續けた。

（一九一一年一月――一九一三年三月、白樺所揭）
（一九一九年五月、新作）

ドモ又の死（禁無断興行）

（これはマーク・トウェインの小話から暗示を得て書いたものだ。）

人物
花田
澤本（諢名、生蕃）
戸部（諢名、ドモ又）　若き畫家
瀬古（諢名、若様）
青島
とも子——モデルの娘

處　畫室

時　現代　氣候のよい時節

澤本と瀬古とがとも子をモデルにして畫架に向つてゐる。戸部は物憂さうに床の上に臥ころんでゐる。

澤本——（瀬古に）おい瀬古、ドモ又がうなつてゐるぞ、死ぬんぢやあるまいな。

瀬古——僕も全くうなりたくなるねえ。……ともちやん、お前もおなかがすいたらう。

とも子——もう物をいつてもいゝの、若様。

瀬古——いゝよ。おなかがすいたらう。

とも子——そんなでもないことよ。

戸部うなる。

どうしたの、戸部さん、あなた死ぬとこなの。まだ早いわ。

瀬古——ともちやんはこゝに來る前に何か食べて來たね。

とも子——えゝ食べてよ、おはぎを。

澤本——默れ〱、あゝ俺れはもう駄目だ。（腹をかゝへる）唾も出なくなつちまひやがつた。

瀬古——ふうん、おはぎを……强勢だなあ、いくつ食べたい。

とも子——まあいやな瀬古さん。

瀬古——而しておはぎはあんこのかい、きなこのかい、それとも胡麻……白狀おし、どれをいくつ……

澤本——瀬古やめないか、俺れは本當に怒るぞ。飢じい時にそんな話をする奴が……あゝ俺れはもう駄目だ。三日食はないんだ、三日。

瀬古——澤本は生蕃だけに藝術家としての想像力に乏しいよ。僕が今こゝにおはぎを出すから見てろ——ぢやない聞いてろ。ともちやんが家を出ようとすると、お母さんが「ともや、こゝにこんなものが取つてあるから食べておいでな」といつて、鼠入らずの中から、ラーヴェンダー色のあんこと、ネープルス・エローのきなこと、あのヴェラスケスが用ゐたといふプアーリッシ・グレーの胡麻……

戸部うなり聲を立てる。

澤本——だから貴様は若様だなんて輕蔑されるんだ。そんなだらしのない空想が俺れ達の藝術に取つて何んの足しになると思つてるんだ。俺れ達は眞實の世界に立脚して、根强い作品を創り出さなければならないんだ。だから……俺れは殘念ながら腹がからつぽで、頭まで少し變になつたやうだ。

とも子——生蕃さんは普段あんまり大喰ひをするから、こんな時に困るんだわ。……それにしてもどうしてこゝにゐる人達の畫はこんなに賣れないんでせうねえ。

澤本——わかり切つてゐるぢやないか。俺れ達

が立派なものを描くからだ……世の中の奴には俺れ達の仕事が解らないんだ……あゝ俺れはもう駄目だ。

瀬古―ともちやん、そのおはぎの舌ざはりは一體どんなだつたい……僕には今日はおはぎがシスティン・マドンナの胸のやうに想像されるよ。ともちやん、お前のその帶の間に、マドンナの胸の肉を少しばかり買ふ金がありやしないか。

とも子―なかつたわ。私隨分長い間何んにも貰はないんですもの。

瀬古―許しておくれ。ともちやん、僕達はお前んちの貧乏もよく知つてるんだが……

澤本―惡い〳〵。そんなに長く何んにも君にやらなかつたかい、俺れ達は全く惡いや。待てよ、と。ない。無い筈だ。今頃やる物がある位なら疾の昔にやつてゐるんだ。

戸部―お母さん怒らないか。

とも子―偶にいやな顏はしてよ。

戸部―ぢや君は、もうこゝには寄りつかなくなるね。(うなる)

とも子―そんなこと……餘計なお世話よ。私のしたいやうにするんだから。

澤本―瀬古の若樣がひかへてゐる間は大丈夫だが……

とも子―人聞きの惡い……よして下さい。

　戸部うなる。

瀬古―ともちやん、賴むから毎日來ておくれ。賴むよ。僕達は一人殘らずお前を崇拜してゐるんだ。お前が歸ると、この畫室の中は荒野同樣だ。僕達は寄つてたかつてお前を讃美して夜を更かすんだよ。尤もこの頃は、餘り夜更かしをすると、なほのこと腹が空くんで、少し控へ氣味にはしてゐるがね。

とも子―何んて讃美するの。ともの奴はおかめつ面のあばずれだつて。

瀬古―だが收入が無くつちやお前んちも暮らせないねえ。

とも子―知れたこつてすわ、馬鹿々々しい。

澤本―ぢや矢張りドモ又がいつたやうに、君は何處かに河岸をかへるんだな。

とも子―さあねえ。さうするより仕方がないわね。私は一體畫伯とか先生とかのくつ附いた畫かきが大嫌ひなんだけれども、……いやよ、本當にあいつらは……何んていふと、お高くとまる癖に、ひとの體にさはつて見たがつたりして……けれどもお金にはなるわね。あなた方見たいに食べるものもなくなつちや私は半日だつてやり切れないわ。大の男が五人も寄つてる癖に全くあなた方は甲斐性なしだわ。

戸部―畜生……出て行け、今出て行け。

とも子―だから餘計なお世話だつてさつき云つたぢやないの。いやな戸部さん。(悔しさうに淚を眼にためる)

　戸部うなる。

云はれなくたつて、出たけりや勝手に出ますわ、あなたのお內儀さんぢやあるまいし。

戸部―俺れ達の仕事が認められないからつて、裏切りをするやうな奴は……出て行け。

瀬古―腹がすくと人は怒りつぽくなる。戸部の氣むづかしやの腹がすいたんだから、謂はばペガサスに惡魔が飛び乘つたやうなもんだよ。お前氣を惡くしちやいけないよ。

とも子―だつて戸部さん見たいな解らず屋つてないんだもの。畫なんてちつとも賣れない畫かきばかりの、こんな穢ない小屋に、私もう半年の餘も通つてゐてよ。餘程難有く思つていゝ譯だわ。それを人の氣も知らないで……

戸部―貴樣は(瀬古を指し)こいつの顏が見たいばかりで……

とし――燒所やき。

戸部――馬鹿。（うなる）

澤本――あゝ俺れはもう駄目だ。死ぬ位なら俺れは畫をかきながら死ぬ。畫筆を握つたまゝぶつ倒れるんだ。おい、ともちやん、惡體をついてるひまにモデル臺に乘つてくれ。‥‥それにしても花田や靑島の奴、どうしたんだ。

瀬古――全くおそいね。計略を敵に見すかされてむざ〳〵と討死したかな。一體計略々々つて花田の奴は何をする氣なんだらう。

澤本――おい、ともちやん‥‥乘るんだ。君は俺れ達のモデルぢやないか。若樣も描けよ。

瀬古――うん描かう。一體計略々々つて‥‥おい生蕃、ガランスをくれ。

澤本――その色こそは余が汝に求めんとしつゝあつたものなんだ。貴樣のところにも無いんか。

とも子――ドモ又さんもお描きなさいな。人つてものはうなつてばかりゐたつてお金にはならないわ、自動車ぢやあるまいし。

澤本――ドモ又ガランスを出せ。

戸部――（自分の畫箱の方に這ひずつて行つて中を探しながら）無い。

瀬古――ペガサスの腰ぬけはないぜ。お前も起き上つて描けよ。花田の畫箱はどうだ。（隣りの部屋から畫箱を持ち出して探しながら歌ふ）

「一本のガランスをつくせよ
空もガランスに塗れ
木もガランスに描け
草もガランスに描け
□□もガランスにて描き奉れ
神をもガランスにて描き奉れ
ためらふな、恥ぢるな
まつすぐにゆけ
汝の貧乏を
一本のガランスにて塗りかくせ」

村山槐多も貧乏して死んだんだ。あゝあ、あいつの畫箱にもガランスは無かつたらうな。描き奉つてしまつたんだから。「天にまします我等の神よ」途中はぬかします。「我等に日用の糧を今日も」ぢやない「今日こそは與へ給へ。」序でに我等にガランスを與へ給へ。あとは腹がへつてゐるからぬかします。「アーメン。」えゝと我等にガランスを與へ給へ。ガランスを與へ給へ。我等に日用の糧を與へ給へ。（銀紙に包んだものを探り出す）我等に（銀紙を開きながら喜色を帶ぶ）日用‥‥糧を‥‥我等に日用の糧を‥‥（急に跳り上つて手に持つた紙包をふりまはす）‥‥ブラボー〳〵ブラビッシモ‥‥おゝ太陽は登つた。

一同思はず瀬古の周圍に走りよる。

澤本――食へさうなものが出て來たんか。

戸部――ガランスか。

瀬古――澤本、お前はさもしい男だなあ、なんぼ生蕃と諢名されてゐるからつて、美術家ともあらうものが「食へさうなもの」とは何んだね。

澤本――食へさうなものが出て來たんかといつただけで、何んでさもしい。あゝ俺れはもう駄目だ。食へさうなものなんて云つたら駄目になつた‥‥畜生、俺れは畫を描く。ガランスが無けりや血で描くんだ。

畫架の方に行きかける。

瀬古――いゝ覺悟だ。そこでともちやん、これを何んだと思ふ。これは勿體なくもチョコレットの食ひ殘りなんだ。

澤本と戸部と勢込んで瀬古に逼る。

戸部――俺れによこせ。

瀬古――これはガランスぢやないよ。

戸部――ガランスかつて聞いたのは、ガランス

だと困ると思つてさら聞いたんだ。俺れはガランス位ほしくはない。それは俺れのだ。俺れによこせ。

澤本——ガランスが無けりや、俺れだつて食へさうなものを辭退する譯ぢやないぞ。ドモ又いゝ加減をいふな。これは俺れんだ。

瀨古——さうがつ／＼するなよ。待て／＼。今僕が公平な分配をしてやるから。（パレットナイフでチョコレットに筋をつける）これで公平だらう。

澤本——四つに分けてどうするんだ。

瀨古——（澤本と戸部にチョコレットを食ひかゝせながら）最後の一片は勿論僕達の守護女神ともちやんに獻げるのさ。僕は何んといふ幻滅の悲哀を味はねばならないんだ。このチョコレットの代りにガランスが出て來て見ろ、君達はこれほど眼の色を變へて熱狂しはしなからう。ミューズの女神も一片のチョコレットの前には、醜い老いぼれ婆に過ぎないんだ。（今度は自分が食ひかく）ミューズを老いぼれ婆にしくさつたチョコレット奴、藝術家が今復讐するから覺悟しろ。（ぼり／＼と甘さうに食ふ。とも子の方に向け最後の一片をさし出しながら）ともちやん、さあ。

とも子——まあいやだ、誰れがひとの食べかいたものなんか食べるもんですか。

瀨古——（驚いた樣子をしながら）え、食べない。これを。食べないとはお前偉らいねえ。お前の趣味がそれ程ノーブルに洗煉されてゐるとは思はなかつた。全くお前は見上げたもんだねえ。お前は全くいゝ意味で貴族的だねえ。レディイのやうだね。それぢや僕が……

澤本と戸部とが襲ひかゝる前に瀨古逸早くそれを口に入れる。

瀨古——來た／＼花田達が來たやうだ。早く口を拭へ。

花田と青島登場。

花田——（指をぼきん／＼鳴らす癖がある）お前達は始終俺れのことを俗物だ／＼といつてゐやがつたな。若樣どうだ。

瀨古——僕は汚されたミューズの女神の爲めに今命がけの復讐をしてゐるところだ。待つてくれ。（口をもが／＼させながら物を云ふ）

花田——貴樣俺れのチョコレットを喰つてるな。この畫室にはそのほかに食ふものはない筈だ。俺れはそれを昨日畫箱の中にちやんとしまつておいたんだ。

澤本——隱し食ひをしておきながら……貴樣はチョコレットで畫が描けるとでも思つてるんか。神聖なる畫箱にチョコレットを……だから貴樣は俗物だよ。

花田——何んとでもいへ。然し俺れがゐなかつたら、お前達は飢ゑ死にをするより仕方ないところだつたんだ。

澤本——まあいゝから、貴樣の計略といふものの報告を早くしろ。

花田——さうだ。愚圖々々しちやゐられない。おい青島、堂脇は九頭龍の奴と一緒に來るといつてたか。

青島——そんなことをいつてたやうだ。何しろ堂脇のお孃さんていふのには、僕は全く憧憬してしまつた。その姿に見とれてゐたもんで、おやぢの言葉なんか、半分がた聞き漏らしちやつた。

澤本——馬鹿。

青島——あの娘なら藝術が本當にわかるに違ひない。藝術家の妻になるために生れて來たやうな處女だ。あの大俗物の堂脇があんな天女を生むんだから皮肉だよ。而してかの女は、藝術に對する心からの憧憬を踏みにじられて、遂には大金持ちの馬鹿息子のところにでも片付けられてしまふんだ……あんな人

をモデルにつかつて一度でも畫が描いて見たいなあ。

瀨古――そんなか。

靑島――そんなだとも。

とも子――今日はもう私、用がないやうだから歸りますわ。

戸部――俺れ用があるよ。くだらないことばかりいつてやがる、俺れが描くから……

とも子――又うなりを立てて、床の上にへたばるんぢやなくつて。

戸部――いゝから……こいつら、うつちやつておけ。

戸部ひとりだけとも子をモデルにして描きはじめる。その間に次ぎの會話が行はれる。

花田――全くともちやんに歸られちや困るよ。靑島、貴樣餘計なことをいふからいかんよ。……兎に角皆んな氣を落ちつけて俺れの報告を聞け。ドモ又もともちやんも、そこで聞いてるんだぜ……待てよ、（時計を出して見ようとして、無くなつてるのを發見）時計もセブンか。セブンどころぢやないイレブン位だらうもう。いそがないと間に合はない。今朝俺れは靑島と手分けをして、靑島は堂脇んちの庭に行き、俺れは九頭龍の店に行つた。迚てもたまらない奴だ。はじめの間は中々取りつく島もなかつたが、たうとう利を以ておびき出してやつた。名は今一寸いへないが私共の仲間に一人、圖拔けてえらい天才がゐる、油でもコンテでも全然拔群で美校の校長も、黑馬會の白島先生も藤田先生も、凡そ先生と名のつく先生は、彼れの作品を見たものは一人殘らず、唯々驚嘆するばかりで、是非展覽會に出品したらといふんだが、奴、旋毛曲りで、うんといはないばかりか、てんで今の大家なんか眼中になく、貧乏しながらも、默つてこつ〳〵と畫ばかり描いてゐた。だから世間では、俺れ達の仲間の外に、奴のことを知つてるものは一人だつてゐやあしない。

澤本――うん全くそれはその通りだ。

花田――ところがその男が貧に逼り、飢ゑに疲れてたうとう昨日死んでしまつた。

澤本――馬鹿をいふない。俺れは兎に角まだ生きてるぞ。

花田――誰れが死んだのはお前だつてさういつたい。……ところで俺れ達は實に悲嘆に暮れてしまつた。一體俺れ達が、五人揃つて貧乏のどんづまりに引きさがりながらも、鼻歌まじりで勇んで暮してゐるのは、誰れにもあづけておけない仕事があるからだ。その仕事をし遂げるまでは、縱令死神が手をついて迎へに來ても、死神の方をたゝき殺す位な勢ひでやつてゐるんだ。その中でもがんばり方といひ、力量といひ、一段も二段も立ち勝つてゐたのは奴だつた。東京の隅つこから世界の美術をひつくり返すやうな仕事が出るのを俺れ達は彼れに於て期待してゐた。だのに、餘りに勝れたものは神も妬むのだらう、奴は倒れてしまつた。奴は火だつた。焰だつた。奴の燃えることは奴の滅びることだつたんだ。

戸部――貴樣さういつたか。

花田――うむ。

戸部――よくいつた。

花田――俺れはまだかうもいつた、奴には一人の弟があつて、その弟の細君といふのが、心と姿との美しい女だつた。而してその女が毎日俺れ達の畫室に來てモデルになつてくれた。俺れ達のやうな、物質的には無能力に近いグループの爲めに盡してくれるその女の志は美しいものだつた。奴は竊かにその弟の細君に戀をしてゐた。けれども定め

られた運命だから如何することも出來ない。奴は苦しんだ、而してその苦しみと無限の淋しみとを、幾枚もの畫に描き上げた。風景や靜物にも素晴らしいのはあるが、その女の肖像畫に至つては神品だといふより外に言葉がない。

瀨古——おい〳〵それは誰れの事だい。ともちやん、お前覺えがある。

花田——まあ、あとでわかるから默つて聞け。……ところで、奴が死んで見ると、俺れ達彼れの仲間は、奴の作品を最も正しい方法で後世に遺す義務を感ずるのだ。ところで、俺れは九頭龍にいつた、苟くもお前さんが押しも押されもしない書畫屋さんである以上、書畫屋といふ商賣にふさはしい見識を見せるのが、お前さんの譽れにもなるし沽券にもなる。一つお前さんあれを一手に引受けて遺作展覽會をやる氣はありませんか。さうしたら、九頭龍の野郎、それは耳よりなお話ですから、私も一つ損得を捨てて乘らないものでもありませんが、それ程先生方がお讚めになるもんなら、展覽會の案內書に先生方から一言づつでもお言葉を頂戴することにしたらどんなものでせうといやがつた。

瀨古——僕はいやだよ、そんなのは。僕等の藝術に先生方の裏書きをして貰ふ位なら、僕は野末でのたれ死をして見せる。

とも子——えらいわ若樣。

瀨古——ひやかすなよ。

花田——全くだ。第一俺れ達のやうな頭骨の固い謀叛人に對して、大家先生達が裏書きどころか、俺れ達と先生方と何のかゝはりあらんやだ。……ところで俺れはいつた、そんなら、こちらでお斷りする外はない。奴の畫はそんなけちな畫ではない。大手をふつて一人で通つて行く畫だ。さういふものを發見するのが書畫屋の見識といふものではないか。さういふ見識から儲けが生れて來なければ、大きな儲けは生れはしない。

澤本——俗物の本音を出したな。

花田——俺れがそんなことでもして大きな儲けをしたら俗物とでも何んとでもいふがいゝ。融通のきかないのをいゝ事にして仙人ぶつてるお前達とは少し違ふんだから。……ところで九頭龍が大分頭を縦にかしげ始めた。まあ來て御覽なさいといつたら、それではすぐ上りますといつた。……ところで、これからが本當の計略になるんだが、……おい皆んな嚴肅な氣持ちで俺れのいふことを聞け。お前達の中誰れでも、この場に死んだとして、今まで描いたものを後世に遺して恥ぢないだけの自信があるか。どうだ。生蕃どうだ。

澤本——無くつてどうする。

花田——よし。瀨古はどうだ。

瀨古——僕は恥ぢる恥ぢないで畫を描いてるんぢやないよ。僕は描きたいから描くんだ。

花田——わかつた。ぢやその氣持ちは純粹だな。

瀨古——今更らそんなことを……水くさい男だなあ。

花田——ドモ又はどうだ。

戸部——出來たものは皆んないやだ。けれども人のに比べれば、俺れのの方がいゝと俺れは思つてゐる。俺れはそれを知つてゐる。

花田——青島の心持ちはもう聞いた。青島も俺れも、自分の仕事を後世に殘して恥かしいとは思はない。俺れ達は皆んな謂はば子供だ。けれども子供がいつでも大人の家來ぢやないからな。

一同——さうだとも。

花田——ぢやいゝか。俺れ達五人の中一人はこの場合死なけやならないんだ。あとの四人

が畫を描きつゞけて行く費用を造り出すための犧牲となつて俺れ達のグループから消え去らなければならないんだ。

瀨古――おい〳〵花田、お前氣でも違つたのか。僕達は藝術家だよ。殉教者ぢやないよ。

花田――藝術の爲に殉死するのさ。その位の意氣があつてもいゝだらう。その代り死んだ奴の畫は九頭龍の手で後世まで殘るんだ。

澤本――何んといふ智慧のない計略を貴樣は考へ出したもんだ。そんなことを考へ出した奴は自分が先きに死ぬがいゝんだ。

花田――俺れが死んでいゝかい。……さうだもう一つといふことを忘れてゐたが、死ぬ番にあたつた奴は、その褒美としてともちやんを奧さんにすることが出來るんだ。この大事な條件をいふのを忘れてゐた。おいともちやん……ドモ又、もう描くのをやめろよ……ともちやん、お前賴むから俺れ達五人の中の誰れでもいゝ、お前の氣に入つた人と本當に結婚してくれないか。

とも子――何んですねえ途徹もない。

花田――俺れ達五人の中に一人、お前の旦那にしてもいゝと思ふのがゐるつてお前いつかのろけてゐたぢやないか。

とも子――そりや……そりやゐないこともないことよ。

花田――待てよ。「ゐないこともないことよ」といふのは結局、ゐるといふことだね。

とも子――知らないわ。

花田――女が「知らないわ」といつたら、もうしめたもんだ。お前が一人選んだら、俺れ達あとに殘された四人は、綺麗に未練を捨てて、二人が一緒になれるやうに、極力奔走する。成功させるために乾度盡力する。だからお前、本氣になつてこの五人の中から選ぶんだ。そこに行くと俺れ達ボヘミヤンは自由なものだ。ともちやんだつて、俺れ達の仲間になつてくれてる以上はボヘミヤンだ。ねえ。さうだらう。構はないから選び給へ。俺れ達は縱令選にもれても、ストイックのやうに忍ぶから……心配せずに。俺れ達の方にはともちやんを細君に持つのに反對する奴は一人もゐまい。どうだ皆んないゝか。よければ「よし」といへ。

一同　よし。

とも子――選んだらどうするの。

花田――そいつが殘る四人の爲めに死なければならないんだ。

とも子――冗談もいゝ加減にするものよ、人を馬鹿にして。(涙ぐむ)

花田――なあに、冗談ぢやないさ。わけはない、ころつと死にさへすりやいゝんだよ。

戸部――花田、貴樣は殘酷な奴だ。……ともちやんをすぐ寡婦にする……そんな……貴樣。

花田――(初めて思ひついたやうに堪らない程笑ふ)何んだ、貴樣達はともちやんのハスが本當に……

瀨古――死なけりやならないんだらう。

花田――死ぬことになるんださ。

瀨古――同じぢやないか。

花田――同じぢやないさ。

青島――花田のいひ方が惡いんだよ。死ぬことになるんぢやない、つまり死んだことにするんだよ。わかつたらう。つまり死ぬんぢやない、死んでしまふこと……でもないかな。

花田――つまり、かうだ。いゝか、頭を冷靜にしてよく聞け。いゝか。ともちやんに選ばれた奴は實はその選ばれた奴の弟なんだ。いゝか。而してともちやんとその弟とは前から夫婦なんだ。ともちやんは、俺れ達に理解と同情とを持つてゐて、モデルも傭へない程貧乏な俺れ達のためにモデルになつてくれたの

だ。いゝか。ところでともちやんのハスの兄貴にあたるのが、本當は俺れ達五人の仲間の一人で、それがともちやんに戀をして、貧乏と戀との爲めに業半ばにして死ぬことになるんだ。今度はわかつたらう。……まだ解らないのか……濟度しがたい奴だなあ。ぢや青島、實物でやつて見せるより仕方がない、あれを持ち込まう。

花田と青島黑布に被はれたる寢棺を擔きこむ。

とも子——いや……緣起の惡い……

澤本——全く貴樣はどうかしやしないか。

花田——さあ、ともちやん、俺れ達の中から一人選んでくれ。俺れが引き受けた、お前の旦那は決して死なしはしないから。

とも子——だつてそんな寢棺を持ち込む以上は……。

花田——死骸になつてこゝに這入る奴はこれだ。（といひながら、壁にかけられた石膏面を指す）こいつに繪具を塗つてお前の選んだ男の代りに入れればいゝんだよ。例へば俺れがお前に選ばれたとするね。本當にさうありたいことだが。すると俺れは俺れの弟となつてお前と夫婦になるんだ。而してこいつ（石膏面）が俺れの身代りになつてこの棺の中にはひるんだ。

とも子——はゝあ……少し解つて來てよ。

花田——わかつたかい。天才畫家の花田は死んでしまふんだ。本當にもうこの世の中にはゐなくなつてしまふんだ。その代り花田の弟といふのがひよこり出來上るんだ。それが俺れさ。而してお前のハスさ。

とも子——はゝあ……大分解つて來てよ。

花田——な。そこに大俗物の九頭龍と、頭の惡い美術好きの成金堂脇左門とが、娘でも連れてはひつて來る。花田の弟になり切つた俺れがお前と一緒にこゝにゐて愁歎場を見せるといふ仕組みなんだ。どうだ仙人共もわかつたか。花田の弟になる俺れは生きて行くが、花田の兄貴なる本當の花田は死んだことにするんだ。ぢやない死ぬことになるんだ。現在死なねばならないんだ。それだから俺れは始めから死ぬんだ〳〵といつて聞かせてゐるのに。貴樣達はまるで木偶の坊見たいだからなあ。……ところで俺れの弟は、兄貴の志をついで天才畫家になるとしても、兎に角俺れが死なねばならぬといふのは悲壯な事實だよ。死にさへすれば、殊に若死さへすれば、大抵の奴は天才になるに決つてゐるんだ。（石膏面をながめながら）死は如何なる場合に於ても、嚴かな悲しいもんだ。だからかゝる犧牲を拂ふからには、俺れがともちやんのハスとして選ばれる位のことが必要になるんだ。

とも子——何もあなたなんかまだ選びはしないことよ。

花田——さうつけ〳〵やり込めるものぢやないよ、女つてものは。

澤本——俺れはもう駄目だ。俺れは或る女を戀してゐた。而して飢ゑが遣つて來た、あゝ俺れは死んだ方がいゝ。俺れは天才畫家として畫筆を握つたまゝ死にたいよ。

とも子——花田さん、私、死ぬ人を旦那さんにするんぢやないのね。私の旦那さんが死ぬことになるのでせう。

澤本——さうつけ〳〵やり込めるものぢやないよ、女つてものは。

花田——皆んな俺れの計略が解つたな。俺れ達は今俺れ達の共同の敵なるフィリスティンと戰はねばならぬ時が來た。青島、お前と堂脇との遭遇戰についても簡單に報告しろよ。

青島——僕はかまはず堂脇の家の廣い庭にはひ

りこんで畫を描いてゐてやつた。さうしたら堂脇がお孃さんを連れて散歩にやつて來た。堂脇はこんな風に歩いて、お孃さんはこんな風に歩いて。而して俺れの脇に突つ立つて畫を描くのをぢつと見てゐたつけが、庭にはひりこんだのを怒ると思ひの外、ふんと感心したやうな鼻息を漏らした。お孃さんまでが「まあ綺麗だこと」と御意遊ばした。僕はしめたと思つて、物をいひ出すつぎ穂に苦心したが、あんな海千山千の動物には俺れの言葉はとてもわからないと思つて默つてゐた。全くあんな怪物の前に行くと薄氣味の惡いもんだね。さうしたら堂脇が案外やさしい聲で、「失禮ながらどちらで御勉强です、大層お見事だが」と切り出した。僕は花田に敎へられたとほり、自分の畫なんか何んでもないが、昨日死んだ仲間の畫は實に大したものだ、若しそれが世間に出たら、一世を驚かすだらうと、一生懸命になつて吹聽したんだ。いかもの食ひの名人だけあつて堂脇の奴すぐ乘り氣になつた。僕は九頭龍の主人が來て見ることになつてゐるから、何んなら連れ立つておいでなさいといつて飛び出して來た。何しろお孃さんがちか／＼動物電氣を送るんで、僕はとても長くゐたゝまれなかつた。どうして最も美を憧憬する僕達の世界には、ナチュール、モルトの外に美がよりつかないんだらうかなあ。

瀨古——どうかしてそのお孃さんを描かうぢやないか。

靑島——あの人がモデルになつてくれれば僕はモナ・リザ以上のものを描いて見せるよ、屹度。

瀨古——僕はワットーの精神でそのデカダンの美を見きはめてやる。

靑島——見もしないで何をいふんだい。

瀨古——君は藝術家の想像力を……

花田——報告終り。事務第一。さ、皆んな覺悟はいゝか。ともちやん、さあ選んでくれ。

とも子——私……恥かしいわ。

瀨古——お前の無邪氣さでやつちまひ給へ。何、一と言、誰れつていつてしまへば、それだけのことだよ。

とも子——ぢや一生懸命で勇氣を出して……けど、私がこれつていつた人は、いやだなんていはないで頂戴ね。でないと、私本當に自殺してよ。

花田——誓ひを立てたんだから皆んな大丈夫だ。

瀨古は自信をもつて歩きまはる。花田は重いものを度々落して自分の方に注意を促がす。澤本は苦痛の表情を强めて同情を惹く。靑島はとも子の前に坐つてぢつとその顏を見ようとする。戶部は畫箱の掃除をはじめる。

とも子——（人々から顏をそむけ）では始めてよ。……花田さん、あなたは才覺があつて畫がお上手だから、いまに立派な畫の會を作つて、その會長さんにでもおなりなさるわ。お嫁にしてもらひたいつて、學問の出來る美しい方が掃いて捨てる程集まつて來てよ屹度。澤本さんは男らしい、正直な生蕃さんね。あなたとは隨分口喧嘩をしましたが、奥さんが出來たら隨分可愛がるでせうね、而してお子さんも澤山出來るわ。而して物干竿におしめが賑やかにならびますわ。靑島さんは花田さんと一緒に會をやつて、屹度偉くなるわ。いまに皆んながあなたの畫を認めて大騷ぎする時が來てよ。而して堂脇さんとやらが、美しいお孃さんを貰つて下さいつて、先方から頭を下げて來るかも知れないわ。けれどもあんまり浮氣をしちやいけなくつてよ。瀨古

さん……あなた若様ね。きさくで親切で、顔付きだつて一番上品で綺麗だし、お友達にはうつてつけな方ね。でもあなた、屹度日本なんかいやだつて外國にでも行つちまふんでせう。お大事にお暮しなさい。戸部さんは吃りで、癇癪持ちで、氣むづかしやね。いつまでたつてもあなたの畫は賣れさうもないことね。けれどもあなたは强がりなくせに變に淋しい方ね。……

戸部――畜生……

とも子――惡口になつたら、許して頂戴。でも私は心から皆さんにお禮しますわ。私見たいながら〳〵した物のわからない人間を、皆さんで可愛がつて下さつたんですもの。お金にはちつともならなかつたけれども、私、何處に行くよりも、こゝに來るのが一番嬉しかつたの。ともどもに苦勞しながら、銘々が一番偉いつもりで、仲よく勉强してゐるのを見てゐると、何んだか知らないが、私時々涙がこぼれつちまひましたわ。……でも私、自分の旦那さんを極めなければならないんだわ。いやになるねえ。私がいゝ人を選んでも、どうか怒らないで頂戴よ。私、これでも身の程をわきまへて選ぶつもりですから……（急に戸部の前にかけ寄り、ぴつたりそこに坐り頭を下げる）戸部さん、私あなたのお内儀さんになります。怒らないで頂戴よ。私あなたのことを思ふと、變に悲しくなつて、泣いちまふんですもの……

戸部――君……冗談をいふない、冗談を

花田――ともちやん、出來したぞ。全くお前に似合はしい選び方だ。だがドモ又におはちが廻らうとは俺れも實は今の今まで思はなかつたよ。ともちやんが戸部一人のものになつて明日から來なくなると思ふと、急に俺れ達の上には秋が來たやうだなあ……然しもう何もいふな。皆んなもう何もいふな。勇ましく運命に默從する外はない。而して戸部ともちやんとの未來を祝福しようぢやないか。

戸部――俺れはともちやんをなぐつたことがある。

とも子――えゝ、たしかに二度なぐられてよ。

戸部――それでも、俺れのところに來る氣か。

とも子――行きます。その代り、今度こそはなぐられてばかりはゐないわ。

瀨古――夫婦喧嘩の仲裁なら僕がしてやるよ。

戸部――餘計な世話だ。

とも子――（同時）餘計なお世話よ。

靑島――氣が强くなつたなあ。

花田――それどころぢやない。もうおつつけ九頭龍等がやつて來る。おい若夫婦、お前達は今日は花形だから忙しいぞ。ともちやん……ぢやない、奥さんは庭にお出なすつて、お兄さんの棺を飾る花をお集め下さいませんか。ドモ又、お前が描いた畫といふ畫は何んでもかんでも持ち出してサインをしろ。而して靑島、お前一つこの石膏面に繪具を塗つてドモ又の死顔らしくしてくれ。それから澤本と瀨古とは部屋を片付けて……但し畫室らしく片付けろよ。藝術家の尊嚴を失ふ程きちんと片付けちや駄目だよ。美的にそこいらを散らかすのを忘れちやいかんぜ。そこで俺れはと……俺れはドモ又をドモ又の弟に仕立て上げる役目にまはるから……お前の畫は大抵隣りの部屋にあるんだらう。これはお前んだ。これも〳〵皆んな持つて行かう。

とも子は庭に、戸部と花田別室に入り去る。

靑島――こんなアポロの面にいくら繪具をなすりつけたつて、ドモ又の顏にはなりやしないや。も少し獅子鼻でできぼくのある……まあこれだな、ベトーヴェンで間に合はせるんだな。

青島塗りはじめる。

澤本——あゝ俺れはもう駄目だ。興奮が過ぎ去つたら急に又腹がへつて來た。一體花田の奴餘計なことをしやがる奴だ。……あの可憐な自然兒ともちやんも、人妻なんていふ人間じみたものに……あゝ、俺れはもう駄目だ。若樣、貴樣勝手に掃除しろ。

瀨古——僕もすつかり悲觀したよ。もとはつていへば青島が惡いんだ。堂脇のお孃さんのモデル事件さへ無ければ、運命はもつと正しい道筋を歩いてゐたんだ。

青島——僕が惡いんぢやない、堂脇のお孃さんが存在してゐたのが惡いんだ。お孃さんの存在が惡いんぢやない、その存在を可能ならしめた堂脇のぢぢいの存在してゐたのが惡いんだ。つまり堂脇のぢぢいが俺れ達の運命をすつかり狂はしてしまつたんだよ……どうだ少しドモ又に似て來たか……他人の運命を狂はした罪科に對して、堂脇は存分に罰せらるべきだよ。

澤本——さうだとも。何しろ彼奴の金力が美の標準を目茶苦茶にする爲めに使はれてゐたんだ。その爲めに俺れ達は三度のものも食へない程に飢ゑてしまふんだ。ドモ又が死んで色づけのベトーヱンになる結果に陷つたんだ。ドモ又の命が買ひもどせる位の罰金を出させなけりや、俺れ達の腹の蟲は納まらないや。

瀨古——而してそれが結局堂脇や九頭龍を敎育することになるんだからなあ。いくら高く買はせたつてドモ又の畫は高くはないよ。今度あいつらは生れてはじめて畫といふものを拜むんだ。うんと高く賣りつけてやるんだなあ。

澤本——さうすると、俺れ達はうんと飯を食つて底力を養ふことが出來るぞ。

青島——さうだ。

澤本——あゝ早く我等の共同の敵なるフィリスティン共が來るといゝなあ。おい若樣、少し働から。

二人であらかた畫室を片付ける。花田と戸部とがはひつて來る。戸部は頭を虎斑に刈りこまれて髭を剃り落されてゐる。

花田——諸君、ドモ又の戸部が死んだについて、その令弟が急を聞いて尋ねて來られたんだ。諸君に紹介します。

一同笑ひながら頭を下げる。

戸部——俺れ……ぢやない、俺れの兄貴の死顏を一寸見せてくれ。

青島——どうだこれで。(石膏面を見せる)

戸部——俺れの兄貴は醜男だつたなあ。

花田——醜男はいゝが髭が生えてゐないぢやないか。近所の人が悔みに來るとまづいから、剃り落した髭を植ゑてやらう。それから體の方も造らなきや……この棺を隣りに持つていつて……おいドモ又の弟、お前そこで殘つたのにサインをしろ。

戸部を殘し一同退場。戸部しきりとサインをしてゐる。とも子花を持ちて入場。

とも子——(戸部とは氣がつかず次ぎの部屋に行かうとする)あの、御免下さいまし……。

戸部——ともちやん……俺れだ……俺れだ……

とも子——あら……あなた戸部さんぢやなくつて。

戸部——俺れは君のハスで……戸部の弟だよ。

とも子——あらさうだわ。まあそれに違ひないわ。戸部さんの弟つて、戸部さんより若い方ねえ。

戸部——ともちやん……俺れは君に遇つた時から君が好きだつた。けれども俺れは、女なんかに緣はないと思つて……諦めてゐたんだが……

とも子——御免なさいよ。私、はじめこゝに來

た時、あなたなんて默りこくつた醜男な人、ゐるんだかゐないんだかわからなかつたんですけど、だん〱、だんだあん好きになつて來てしまひましたわ。花田さんが私の旦那さんに誰れでも選んでいゝつていつた時は、本當は隨分嬉しかつたけれど、あなたは乾度私が嫌ひなんだと思つて隨分心配したわ。

戸部――何しろ俺れは幸福だ…俺れは自分の藝術の外には、もう何んにも望みはないよ。…俺れはもう君をなぐらないよ。

とも子――(嬉しさに涙ぐみつゝ)なぐつてもいゝことよ。いゝから私を可愛がつて下さいね。私も一生懸命であなたを可愛がりますわ。あなたは寶の珠のやうに、可愛がれば可愛がる程光りが出て來る人だつてことを、私ちやんと知つてゝよ。あなたは泥だらけな寶の珠だわ。

戸部――俺れは口がきけないから…思つたことがいへない…

とも子の手を取つて引き寄せようとする。澤本突然戸を開けて登場。

澤本――おうい、ドモ又…と、あの、貴様のその上衣をよこせ、貴様の兄貴に着せるんだから。その代りこれを着ろ…ともちやん花が取れたかい。それか。それをおくれ、棺を飾るんだから…

澤本退場。…戸部とも子寄り添はんとす。別室にて哄笑の聲。二人口惜しさうに離れたところに坐る。

とも子――今夜歸つたら、私すぐお母さんにさういつて、いやでも應でも承知させますわ。で、今度のあなたの名前は…。

戸部――俺れは何んといふ名前にするかな…

とも子――いゝわ、私の名を上げるから、戸部友又ぢやいけない　それぢやをかしいわね。あのね…あなた又畫かきになるんでせう…

とも子近づかうとする。瀨古登場。

瀨古――ちよつと〱。こゝにお前の畫がまだ殘つてゐたから…

戸部――うるさい奴だなあ…

瀨古退場。別室にて哄笑の聲。やがて一同飾りを終つて棺をかついで登場。

花田――早く〱…もうやつて來るぞ。棺のこつちにこの椅子をおいて…これをこゝに、おい青島…それをそつちにやつてくれ…おい皆んな手傳へな…一時間の後には俺れ達はしこたま御馳走が食へる身分になるんだ。生蕃、そんな及び腰をするなよ、みつともない。…これで大體いゝ…さあ皆んな舞臺よきところに坐れ。若夫婦はその椅子だ。何しろ俺れ達は、一人の大事な友人を犧牲に供して飯を食はねばならぬ悲境にあるんだ。ドモ又は俺れ達五人の仲間から消えてなくなるんだ。ドモ又の弟はその細君のともちやんと旅の空に出かけることになるだらう。俺れ達のやうに良心を以て眞劍に働く人間がこんな大きな損失を忍ばねばならぬといふのは世にも悲慘なことだ。然し俺れ達は自分の愛護する藝術の爲めに最後まで戰はねばならない。俺れ達の主張を成就するためには手段を選んではゐられなくなつたんだ。俺れ達はこの棺の中に死んで横はるドモ又の靈にかけて誓ひを立てよう。俺れ達はこの友人の死に値ひするだけの立派な藝術を生み出すことを誓ふ。

一同――誓ふ。

花田――俺れ達は力を協せて、九頭龍といふ惡ブローカー及び堂脇といふ似而非美術保護者の金嚢から、能ふかぎりの罰金を支拂はせることを誓ふ。

一同――誓ふ。

花田――その爲めには日頃の馬鹿正直を拋つて、巧みに權謀術數を用ふることを誓ふ。

一同――誓ふ。

花田――但し尻尾を出しさうな奴は默つて引つ込んでゐる方がいゝぜ。それでは俺れ達四人は戸部とともちやんとに最後の告別をしようぢやないか。……戸部、お前のこれまでの藝術は、若くして死んだ天才戸部の藝術として世に殘るだらう。然しそこでお前の生活が中斷するのを俺れ達はすまなく思ふ。然しその償ひにともちやんを得た以上、不平をいはないでくれ、な。而してお前は新たに戸部の弟として新生面を開いてくれ。俺れ達はそれを待つてゐるから。ぢやさよなら。

一同交る〴〵握手する。

花田――ともちやん、お前は俺れ達の力だつた。慰めだつた。お母さんだつた、可愛い娘だつた。お前と別れるのは俺れ達全くつらいや。だからお前の額に一度だけ皆んなで接吻するのを許しておくれ。なあ戸部いゝだらう。

戸部――よし、一度限り許してやる。

花田――ともちやんさよなら。（額に接吻する）

とも子――さよなら花田さん。

澤本――俺れはまあやめとく。握手だけしとく。

とも子――さよなら生蕃さん。

青島――さよなら。（額に接吻する）

とも子――お大事に浮氣屋さん。

瀬古――脣をよくお見せ、あゝあ。（額に接吻する）

とも子――さよなら可愛い若様。

とも子さすがに感情せまつて泣き出す。

花田――よし。それからドモ又の弟にいふが、不精をしてゐると、頭の毛と髭とが延びて來て、ドモ又にあと戻りする恐れがあるから、今後決して不精髭を生やさないことにしてくれ。

とも子――そんなこと、私がさせときませんわ。

戸外にて戸をたゝく音聞こゆ。

人の聲――えゝ、御免下さいまし、九頭龍で御座いますが、花田さんはおいでで御座いませうか。

他の人の聲――私は堂脇ですが……

花田――そら來やがつた。……皆んないゝか大丈夫か……俺れ達は非常な不幸に遇つたんだぞ。悲しみのどん底にゐるんだぞ。此際笑ひでもした奴は敵に内通した謀叛人として皆んなで制裁するからさう思へ。九頭龍も堂脇も……今開けます、一寸待つて下さい……九頭龍も堂脇もたまらない俗物だが、攻略上向腹を立てて事をし損じないやうに皆んな誓へ。

一同――誓ふ。

花田――泣ける奴は時々涙をこぼすやうにしろ、いゝか……ぢや開けるぞ。

澤本――花田、ちよつと待て……（茶碗に二杯水を入れて戸部の所に持つて行く）おいドモ又、貴様の涙をこの中に入れとくぞ。これはともちやんのだ。尻の後ろにやつとけ。慌ててこぼすな。

花田――しいつ。（觀客の方に向いて笑ふのを制する）ぢや開けるぞ。皆んなしかめつ面をしてろ。

とも子はさつきから本當に泣いてゐる。戸部茶碗から水をすくつて眼のふちに塗る。花田戸を開けに行く。

――幕――

（一九二二年十月、「泉」所掲）

惜みなく愛は奪ふ

一

太初に道があつたか行があつたか、私はそれを知らない。然し誰れがそれを知つてゐよう、私はそれを知りたいと希ふ。而して誰れがそれを知りたいと希はぬだらう。けれども私はそれを考へたいとは思はない。知る事と考へる事との間には埋め得ない大きな溝がある。人はよくこの溝を無視して、考へることによつて知ることに達しようとはしないだらうか。私はその幻覺にはもう迷ふまいと思ふ。知ることは出來ない。が、知らうとは欲する。人は生れると直ちにこの「不可能」と「欲求」との間にさいなまれる。不可能であるといふ理由で私は欲求を抛つことが出來ない。それは私として何んといふ我儘であらう。而して自分ながら何んといふ可憐さであらう。

太初の事は私の欲求をもつてそれに私を結び付けることによつて滿足しよう。私にはとても目あてがないが、知る日の來らんことを欲求して滿足しよう。

私がこの奇異な世界に生れ出たことについては、而してこの世界の中にあつて今日まで生命を續けて來たことについては、私は明らかに知つてゐる。この認識を誇るべきにせよ、恥づべきにせよ、私は胡魔化しておくことが出來ない。私は私の生命を考へてばかりはゐない。確かに知つてゐる。哲學者が知つてゐるやうに知つてゐるのではないかも知れない。又深い生活の冒險者が知つてゐるやうに知つてゐるのではないかも知れない。然し私は知つてゐる。この私の所有を他のいかなるものもくらますことは出來ない。又他のいかなる威力も私からそれを奪ひ取ることは出來ない。これこそは私の存在が所有する唯一つの所有だ。

恐るべき永劫が私の周圍にはある。永劫は恐ろしい。ある時には氷のやうに冷やかな、凝然としてよどみ亙つた或るものとして私にせまる。又ある時は眼もくらむばかりかゞやかしい、瞬時も動搖流轉をやめぬ或るものとして私にせまる。私はそのものの隅か、中央かに落された點に過ぎない。廣さと幅と高さとを點は持たぬと幾何學は私に敎へる。私は永劫に對して私自身を點に等しいと思ふ。永劫の前に立つ私は何ものでもないだらう。それでも點が存在する如く私も亦永劫の中に存在する。私は點となつて生れ出た。而して瞬く中に跡方もなく永劫の中に溶け込んでしまつて、私はゐなくなるのだ。それも私は知つてゐる。而して私はゐなくなるのを恐ろしく思ふよりも、點となつてこゝに私が私として生れ出たことを恐ろしく思ふ。

然し私は生れ出た。私はそれを知る。私自身がこの事實を知る主體である以上、この私の生命は何んといつても私のものだ。私はこの生命を私の思ふやうに生きることが出來るのだ。私の唯一の所有よ。私は凡ての懷疑にかかはらず、結局それを尊重愛撫しないでゐられようか。涙にまで私は自分を痛感する。

一人の旅客が永劫の道を行く。彼れを彼れ自身のやうに知つてゐるものは何處にもゐない。陽の照る時には、彼れの忠實な伴侶はその影であるだらう。空が曇り果てる時には、而して夜には、伴侶たるべき彼れの影もない。その時彼

れは獨り彼れの裏にのみ忠實な伴侶を見出されねばならぬ、拙くとも、醜くとも、彼れにとつては彼れ以上のものを何處に求め得よう。から私は自分を一人の旅客にして見る時もある。

私はかくの如くにして私自身である。けれども私の周圍にある人や物やは明らかに私ではない。私が一つの言葉を申し出る時、私以外の誰れが、而して何が、私がその言葉をあらしめるやうにあらしめ得るか。私は周圍の人と物とにどう繋がれたら正しい關係におかれるのであらう。如何なる關係も可能ではあり得ないのか。可能ならばそれを私はどうして見出せばいゝのか。誰れがそれを私に敎へてくれるのだらう。……結局それは私自身ではないか。

思へばそれは淋しい道である。最も無力なる私は私自身にたよる外の何物をも持つてゐない。自己に矛盾し、自己に蹉跌し、自己に困迷する、それに何んの不思議があらうぞ。私は時々私自身に對して神のやうに寛大になる。それは時々私の姿が、母を失つた嬰兒の如く私の眼に映るからだ。嬰兒は何處をあてともなく匍匐する。その姿は既に十分憐れまれるに足る。嬰兒は屢〻過つて火に陷る。若しくは水に溺れる。而して僅かにそこから這ひ出ると、べそをかきながら又匍匐を續けて行く。このいたいけな姿を憐れむのを自己に阿るものとのみ云ひ退けられるものであらうか。縱令道德がそれを自己耽溺と罵らば罵れ、私は自己に對するこの哀憐の情を失ふに忍びない。孤獨な者は自分の掌を見つめることにすら、熱い涙をさそはれるではないか。

思へばそれは嶮しい道でもある。私の主體とは私自身だと知るのは、私を極度に嚴肅にする。他人に對しては與へ得ないきびしい鞭打を與へざるを得ないものは畢竟自身に對してだ。誘惑にかゝつたやうに私はそこに導かれる。笞にはげまされて振ひ立つ私を見るのも、打撲に抵抗し切れなくなつて倒れ伏す私を見るのも、共に私が生きて行く上に、無くてはならぬものであるのを知る。その時に私は勇ましい。私の前には力一杯に生活する私の外には何物をも見ない。私は乘り越え乘り越え、自分の力に押され押されて未見の境界へと險難を侵して進む。而して如何なる生命の脅威にもおびえまいとする。その時傷の痛みは私に或る甘さを味はせる。然しこの自己緊張の極點には往々にして恐ろしい自己疑惑が私を待ち設けてゐる。遂に私は疲れ果てようとする。私の力がもうこの上には私を動かし得ないと思はれるやうな瞬間が來る。私の唯〻一つの城郭なる私自身が見る〳〵廢墟の姿を現はすのを見なければならないのは、私の眼前を暗黑にする。

けれどもそれらの不安や失望が常に私を脅やかすにもかゝはらず、太初の何んであるかを知らない私には、自身を措いてたよるべき何者もない。凡ての矛盾と渾沌との中にあつて私は私自身であらう。私を實價以上に値ぶみすることをしまい。私を實價以下に虐待することもしまい。私は私の正しい價の中にあることを勉めよう。私の價値がいかに低いものであらうとも、私の正しい價値の中にあらうとするそのこと自身は何物かであらねばならぬ。縱しそれが何物でもないにしろ、その外に私の採るべき態度はないではないか。一個の金剛石を持つものは、その寶玉の正しい價値に於てそれを持たうと願ふのだらう。私の私自身は寶玉のやうに尊いものではないかも知れない。然し心持に於ては寶玉を持つ人の心持と少しも變るところがない。

私は私のもの、私のたゞ一つのもの。私

は私自身を何物にも代へ難く愛することから始めねばならない。

若し私のこの貧しい感想を讀む人があつた時、この出發點を首肯することが出來ないならば、私はその人に更にいひ進むべき何物をも持ち得ない。太初が道であるか行であるかを(考へるのではなく)知り切つてゐる人に取つては、この感想は無視さるべき無益なものであらう。私は自分が極めて低い生活途上に立つてゐるものであることをよく知りぬいてゐる。たゞ、今の私はそこに一番堅固な立場を持つてゐるが故に、そこに立つことを恥ぢまいとするものだ。前にもいつたやうに、私はより高い大きなものに對する欲求を以て、知り得たる現在に安住し得るのを自己に感謝する。

二

私のいはうとする事が讀者に十分の理解を與へ得なくはないかと恐れる。人が人自身をいひ現はすのは一番容易なことであらねばならぬ。何んとなればそれはその人自身が最もよく知り拔いてゐる筈の事柄だから。

實際は然しさうではない。私達の用ひてゐる言葉は謂はば狼穽のやうなものだ。それは獲物を取るには役立つけれども、私達自身に向つては妨げにこそなれ、役には立たない。或は擴大鏡のやうなものだ。私達はそれによつて身外を見得るけれども、私達自身の顏を見ることは出來ない。或は又精巧な機械といつてもよい。私達はそれによつて有らゆるものを造り出し得るとしても、遂に私達自身を造り出すことは出來ない。

言葉は意味を表はす爲めに案じ出された。然しそれは當初の目的から段々に墮落した。心の要求が言葉を創つた。然し今は物がそれを占有する。吃る事なしには私達は自分の心を語る事が出來ない。戀人の耳にさゝやかれる言葉はいつでも流暢であるためしがない。心から心に通ふ爲めには、何んといふ不完全な乘物に私達は乘らねばならぬのだらう。

のみならず言葉は不從順な僕である。私達は屢〻言葉の爲めに裏切られる。私達の發した言葉は私達が針ほどの誤謬を犯すや否や、すぐに刄を反して私達に切つてかゝる。私達は自分の言葉故に人の前に高慢となり、卑屈となり、狡智となり、魯鈍となる。

かゝる言葉に依賴して私はどうして私自身を誤りなく云ひ現はすことが出來よう。私は已むを得ず言葉に潛む暗示により多くの賴みをかけなければならない。言葉は私を云ひ現はしてくれないとしても、その後ろにつゝましやかに隱れてゐるあの睿智の獨なる暗示こそは、裏切る事なく私を求める者に傳へてくれるだらう。

暗示こそは人に與へられた子等の中、最も優れた娘の一人だ。然し彼女が愼み深く、穩かで、且つ容易にその面紗を顏からかきのけない爲めに、人々は屢〻この氣高く美しい娘の存在を忘れようとする。殊に近代の科學は何んの容赦もなく、如何なる場合にも抵抗しない彼女を、幽閉の憂目にさへ遇はせようとした。抵抗しないといふ美德を逆用して人は彼女を無視しようとする。

人間がどうして斯程優れた娘を生み出したかと私は驚くばかりだ。彼女は自分の美德を認めるものが現はれ出るまで、それを沽らうと企てたことが嘗てない。沽らうとした瞬間に美德が美德でなくなるといふ第一義的な眞理を本能の如く知つてゐるのは彼女だ。又正しく彼女を取扱ふことの出來ないものが、假初にも彼女に近づけば、彼女は見る〳〵そのやさしい存在から萎れて行く。そんな人が彼女を捕へ得た

と思つた時には、必ず美しい死を遂げたその亡骸を抱くのみだ。粘土から創り上げられた人間が、どうしてかゝる氣高い娘を生み得たらう。

私は私自身を云ひ現はす爲めに彼女に優しい助力を乞はう。私は自分の生長が彼女の柔らかな胸の中に抱かれることによつて成就したのを經驗してゐるから。而して人間そのものの向上がどれ程彼女――人間の不斷の無視にもかゝはらず――によつて運ばれたかを知つてゐるから。

けれども私は暗示に私を託するに當つて私自身を恥ぢねばならぬ。私を最もよく知るものは私自身であるとは思ふけれども、私の知りかたは餘りに亂雜で不秩序だ。而して私は言葉の正當な使ひ道すらも十分には心得てゐない。その言葉の後ろに安んじて巣喰ふべき暗示の座が成り立つだらうかとそれを私は恐れる。

然し私は行かう。私に取つて已み難き要求なる個性の表現の爲めに、あらゆる有縁の個性と私のそれとを結び付けようとする嚴しい欲求の爲めに、私は敢て私から出發して歩み出して行かう。

私が餓ゑてゐるやうに、或る人々は餓ゑてゐる。それらの人々に私は私を與へよう。而してそれらの人々から私も受取らう。その爲めには假りに自分の引込思案を捨ててかゝらう。許されるかぎりに於て大膽にならう。私が知り得る可能性を存分に申し出して見よう。唯ゝこの貧しい言葉の中から暗示が姿を隱してしまはない事を私は祈る。

三

神を知つたと思つてゐた私は、神を知つたと思つてゐたことを知つた。私の動亂はそこから芽生えはじめた。

ある人は私を僞善者ではないかと疑つた。どうしてそこに疑ひの餘地などがあらう。私は明らかに僞善者だ。明らかに私は僞善者である、さう言明するのが、どれ程僞善的な行爲であるぞとの非難が、當然喚び起されるのを知らない私ではない。それにもかゝはらず私は明らかに僞善者であると言明せねばならぬ。私は屢ゝ私自身に顧慮する以上に外界に顧慮してゐるからだ。それは悲しい事には私が弱いからだ。私は弱い者の有らゆる窮策によく通じてゐる。僅かな原因ですぐ陷つた一つの小さな虚僞の爲めに、二つ三つ四つ五つと虚僞を重ねて行かねばならぬ、その苦痛をも知つてゐる。弱いが故に強ひて自分を強く見せようとして、いつでも胸の中を戰慄させてゐねばならぬ不安も知つてゐる。苦肉の策から、自分の弱身を殊更に捨鉢に人の前にあらはに取り出して、不意に乘じて一種の尊敬を、さうでなければ一種の憐憫を、搾り取らうとする自瀆も知つてゐる。弱さは眞に醜さだ。それを私はよく知つてゐる。

然し僞善者とは弱いといふことばかりがその本質ではない。本當に弱いものは、その弱さから來る自分の醜さをも悲慘さをも意識しないが故に、その人はそのまゝの境地に滿足することが出來よう。僞善者は不幸にしてたゞ弱いばかりでなく、その反面に多少の強さを持つてゐる。彼れは自分の弱味によつて惹き起した醜さ悲慘さを意識し得る強さをも持つてゐるのだ。而してその弱さを強さによつて彌縫しようとするのだ。

強者がその強味を知らず、弱味を知らない間に、僞善者はよくその強味と弱味とを知つてゐる。人はいふだらう、僞善者の本質は、強味を以て弱味を彌縫するばかりでなく、その彌縫に無恥な安住を敢てする點にあると。だから僞

善者は救はるゝことが出來ないのだと。かういつて聞かされると私は僞善者の爲めに辯解をしないではゐられない心持になる。私自身が僞善者であるが故に自分自身の爲めに辯解しようとするだけではない。僞善者そのものになり代つて、僞善者の一人なる私が、義人に申し出たいと思はずにはゐられないのだ。

　何事にも例外はある。その例外を殊更に色濃く描くのをひかへて見て貰つたら、僞善者といふものが、强味を以て弱味を彌縫する所に無恥な安住をしてゐるといふのは、少しさばけ過ぎた見方だとは云はれまいか。私は義人が次ぎの點に於て僞善者を信じていたゞきたいと思ふ。それは僞善者も亦心竊かに苦しんでゐるといふ一事だ。考へて見てもほしい、多少の强さと弱さとを同時に持ち合はしてゐるものが、二つの力の矛盾を感じないでゐられようか。矛盾を感じながら平然としてそこに無恥の安住をのみ續けてゐることが出來ようか。

　僞善者よ、お前は全くひどい目に遇はされた。それは當然な事だ。お前は本當に不愉快な人間だから。お前はいつでも然り〳〵否々といひ切ることが出來ないから。毎時でもお前には陰險なわけへだてが附きまつはつてゐるから。お前は憎まれていゝ。辱かしめられていゝ。惡魔視されていゝ。然しお前の心の隅の人知れぬ苦痛をそつと眺めてやる人はないのか。お前が人並みに見られたい爲めに、お前自身にさへ隱さうと企てゝゐるその人知れぬ苦痛を一寸でも暖かく觸らうといふ人はないのか。僞善者よ、私は自身僞善者であるが故によくそれを知つてゐる。義人のすぐ隣りに住むと考へられてゐる罪人（己れの罪を知つてそれを悲しむ人）は自分の强味と弱味との矛盾を聲高く叫び得る幸福な人達なのだ。罪人の持つものも僞善者の持つものも畢竟は同じなのだ。たゞ罪人は叫ぶ。それを神が聞く。僞善者は叫ばうとする程に强さを持ち合はしてゐない。故に神は聞かない。それだけの差だと私には思へる。よきサマリヤ人と惡しきサドカイ人とは、隣り合せに住んでゐるのではないか。僞善者なる私は屢〻他人を僞善者と呼んだ。今にして私はそれを悲しく思ふ。何故に私は人と人との距てをこんなに大きくしようとはしたらう。

　かういつたとて私は、世の義人に僞善者を判く手心をゆるめて貰ひたいと歎願するのではない。僞善者は何んといつても義人からきびしく判かれるふしだらさを持つてゐる。私はたゞ僞善者もその心の片隅には人に示すのを敢てしない苦痛を持つてゐるといふ事を知つて貰へばいいのだ。それが私の辯解なのだ。

　私もその苦痛は持つてゐた。人の前に私を私以上に立派に見せようとする虛妄な心はあり餘るほど持つてゐたけれども、そこに埋めることの出來ない苦痛をも全く失つてはゐなかつた。而してある時には、烏が鵜の眞似をするやうに、罪人らしく自分の罪を上辷りに人と神との前に披露もした。私は私らしく神を求めた。どれ程完全な罪人の形に於て私はそれをなしたらう。恐らく私は誰れの眼からも立派な罪人のやうに見えたに違ひない。私は斷食もした。不眠にも陷つた。瘦せもした。一人の女の肉をも犯さなかつた。ある時は神を見出し得んためには、自分の生命を好んで斷つのを意としなかつた。

　他人眼から見て相當の精進と思はれるべき私の生活が幾百日か續いた後、私はある決心を以て神の懷に飛び入つたと實感のやうに空想した。弱さの醜さよ。私はこの大事を見事に空想的に實行してゐた。

　而して私は完全にせよ、不完全にせよ甦生してゐたらうか。復活してゐたらうか。神によ

つて罪の根から切り放された約束を與へられたらうか。

神の懷に飛び入つたと空想した瞬間から、私が格段に瑕瑾の少い生活に入つたことはそれは確かだ。私が隣人から模範的の青年として取扱はれたことは、私の誇りとしてではなく、私のみじめな懺悔としていふことが出來る。

けれども私は本當は神を知つてはゐなかつたのだ。神を知り神によりすがると宣言した手前、强ひて私の言行をその宣言にあてはめてゐたに過ぎなかつたのだ。それらが如何に弱さの生み出す空想によつて色濃く彩られてゐたかは、私が見事に人の眼をくらましてゐたのでも察することが出來る。

この時若し私に人の眼の前に罪を犯すだけの强さがあつたなら、卽ち私の顧慮の對象なる外界と私とを絶縁すべき事件が起つたら、私は僞善者から一躍して正しき意味の罪人になつてゐたかも知れない。私は自分の罪を眞劍に叫び出したかも知れない。而してそれが恐らくは神に聞かれたらう。然し私はさうなるには餘りに弱かつた。人はこの場合の私を餘り强過ぎたからだといはうとするかも知れない。若しさういふ人があるなら私は明らかにそれが誤謬であるのを自分の經驗から斷言することが出來る。本當に罪人となり切る爲めには、自分の凡てを捧げ果てる爲めには、私の想像し得られないやうな强さが必要とせられるのだ。このパラドックスとも見れば見える申し出では決して虛妄でない。罪人のあの柔和なレシグネーションの中に、昂然として何物にも屈しまいとする强さを私は明らかに見て取ることが出來る。神の信仰とは强者のみが與り得る貴族の團欒だ。私は羨ましくそれを眺めやる。然し私にはその入場券は與へられてゐない。私は單にその埒外にゐて貴族の物眞似をしてゐたに過ぎないのだ。

基督の教會に於て、私は明らかに僞善者の一群に屬すべきものであるのを見出してしまつた。

砂礫のみが砂礫を知る。金のみが金を知る。これは悲しい事實だ。僞善者なる私の眼には、自ら教會の中の僞善の分子が見え透いてしまつた。こんな事を書き進むのは、殆ど私の堪へ得ない所だ、私は餘りに自分を裸かにし過ぎる。然しこれを書き拔かないと、私のこの拙い感想の筆は放げ棄てられなければならない。

本當は私も强い人になりたい。而して教會の中に强さが生み出した眞の生命の多くを尊く拾ひ上げたい。私は近頃ある尊敬すべき老學者の感想を讀んだが、その中に宗教に身をおいたものが、それを捨てるといふやうなことをするのは、如何にその人の性格の高貴さが足らないかを現はすに過ぎないといふことが强い語調で書かれてゐるのを見た。私はその老學者に深い尊敬を拂つてゐるが故に、而して氏の生得の高貴な性格を知つてゐるが故に、その言葉の空しい罵詈でないのを感じて私自身の卑陋を悲しまねばならなかつた。氏が凡ての虛僞と墮落とに飽滿した基督教の中にありながら、根ざし深く潛在する尊い要素に自分のけだかさを化合させて、巖のやうに堅く立つその態度は、私を驚かせ羨ませる。私は全くそれと反對なことをしてゐたやうだ。私は自分が卑陋であるが故に、多くの卑陋なものを見てしまつた。私はそれを悲しまねばならない。

然し私は自分の卑陋から、周圍に卑陋なものを見出しておきながら、高貴な性格の人があるやうにそれを見ないでゐることはさすがに出來なかつた。卑陋なものを見出しながら、しらじらしく見ない振りをして、寬大にかまへてゐる

ことは出來なかつた。その程度までの僞善者になるには、私の强味が弱味より多過ぎたのかも知れない。而して私は自分の僞善が私の屬する團體を汚さんことを恐れて、而して團體の惡い方の分子が私の心を苦しめるのを厭つて、その團體から逃げ出してしまつた。私の卑陋はこゝでも私に卑陋な行をさせた。私の屬してゐた團體の言葉を借りていへば、私の行の根柢には大それた高慢が働いてゐたと云へる。

けれども私は小さな聲で私にだけ囁きたい。心の奥底では、私はどうかして私を僞善者から更に僞善者に導かうとする誘因を避けたい氣持がないではなかつたといふことを。それを突き破るだけの强さを持たない私はせめてはそれを避けたいと念じてゐたのだ。前にもいつたやうに外界に支配され易い私は、手厳しい外界に圍まれてゐればゐる程、自分すら思ひもかけぬ僞善を重ねて行くのに氣づき、而してそれを心から恐れるやうになつてはゐたのだ。

だから私は私の屬してゐた團體を退くと共に、それまで指導を受けてゐた先輩達との直接の接觸からも遠ざかり始めた。

僞善者であらぬやうになりたい。これは私として過分な欲求であると見られるかも知れないけれども、僞善者は凡て、僞善者でなかつたらよからうといふ心持を何處かの隅に隱しながら持つてゐるのだ。私も少しそれを持つてゐたばかりだ。

義人、僞善者、罪人、さうした名稱が可なり判然區別されて、それがびし〳〵と人にあてはめられる社會から私が離れて行つたのは、結局惡いことではなかつたと私は今でも思つてゐる。

神を知つたと思つてゐた私は、神を知つたと思つてゐたことを知つた。私の動亂はそこから芽生えはじめた。その動亂の中を私はそろ〳〵と自分の方へと歸つて行つた。目指す故鄕はいつの間にか遙に距つてしまひ、而して私は屢々蹉いたけれども、それでも動亂に動亂を重ねながらそろ〳〵と故鄕の方へと歸つて行つた。

四

長い廻り道。

その長い廻り道を短くするには、自分の生活に對する不滿を本當に感ずる外にはない。生老病死の諸苦、性格の缺陷、あらゆる失敗、それを十分に嚙みしめて見ればそれでいゝのだ。それは然し如何に言說するに易く實現するに難き事柄であらうぞ。私は幾度かかゝる悟性の幻覺に迷はされはしなかつたか。而してかゝる悟性と見ゆるものが、實際は既定の概念を尺度として測定されたものではなかつたか。私は稀にはポーロのやうに藻搔いた。然し私のやうには藻搔かなかつた。親鸞のやうには悟つた。然し私のやうには悟らなかつた。それが一體何にならう。これほど體裁のいゝ外貌と、內容の空虛な實質とを併合した心の狀態が外にあらうか。この近道らしい迷路を避けなければならないと知つたのは、長い彷徨を續けた後のことだつた。それを知つた後でも、私はやゝもすればこの忌はしい袋小路につきあたつてすご〳〵と引き返さねばならなかつた。

私は自分の個性がどんなものであるかを知りたいために、他人の個性に觸れて見ようとした。歷史の中にそれを見出さうと勉めたり、藝術の中にそれを見出さうと試みたり、鄰人の中にそれを見出さうと求めたりした。私は多少の知識は得たに違ひなかつた。私の個性の輪郭はおぼろげながら私の眼に映るやうに思へぬではなかつた。然しそれは結局私ではなか

つた。

物を見る事、物をそれ自身の生命に於てあまたず捕捉する事、それは私が考へてゐたやうに容易なことではない。それを成就し得た人こそは世に類なく幸福な人だ。私は見ようと欲しないではなかつた。然し見るといふことの本當の意味を辨へてゐたといへようか。掴み得たと思ふものが暫らくするといつの間にか影法師に過ぎぬのを發見するのは苦い味だ。私は自分の心を沙漠の砂の中に眼だけを埋めて、獵人から已れの姿を隱し遂せたと信ずる駝鳥のやうにも思ふ。駝鳥が一つの機能の働きだけを隱すことによつて、全體を隱し得たと思ひこむのと反對に、私は一つの機能だけを働かすことによつて、私の全體を働かしてゐると信ずることが屢ゝある。かうして眺められた私の個性は、整つた矛盾のない姿を私に描いて見せてくれるやうだけれども、見てゐる中にそこには何等の生命もないことが明らかになつて來る。それは感激なくして書かれた詩のやうだ。又着る人もなく裁たれた錦繡のやうだ。美しくとも、價高くあがなはれても、ありながらある甲斐のない塵芥に過ぎない。

私が私自身に歸らうとして、外界を機緣にして私の當體を築き上げようとした試みは空しい失敗に終らねばならなかつた。

聰明にして上品な人は屢ゝ假象に滿足する。滿足するといふよりは、人の現象と稱へるものも、人の實在と稱へるものも、畢竟は意識の——それ自身が假象であるところの——假初めな遊戲に過ぎないと諦觀する。そこに何等かの執着をつなぎ、葛藤を加へるのは、要するに下根粗笨な外面的見斷に支配されての迷妄に過ぎない。それらの境を靜かに超越して、嬰兒の戲れを見る老翁のやうに凡ての努力と蹉跌との上に、淋しい微笑を送らうとする。そこには冷やかな、然し皮相でない上品さが漂つてゐる。或は又凡てを容れ凡てを抱いて、飽くまで外界の跳梁に身を任す。晝には歡樂、夜には遊興、身を凡俗非議の外に置いて、死にまでその恣まゝな姿を變へない人もある。そこには皮肉な、然し熱烈な聰明が窺はれないではない。私はどうしてそれらの人を彈劾することが出來よう。果てしのない迷路にさまよはねばならぬ人の宿命であつて見れば、各ゝの瞬間をたゞ樂しんで生きる外に殘される何事があらうぞとその人達はいふ。その心持に對して私は白眼を向けることが出來るか。私には出來ない。人は或はかくの如き人々を、醉生夢死の徒と呼んで唾棄するかも知しない。然し私にはその人人の何處かに私を牽き付けるあるものが感ぜられる。私には生來持ち合はしてゐないある上品さ、ある聰明さが窺はれるからだ。

何んと多趣多樣な生活の相だらう。それはそのまゝで尊いではないか。そのまゝで完全な自然な姿を見せてゐるではないか。若し自然にあの絢爛な多趣多樣があり、獨り人間界にそれがなかつたならば、宇宙の美と眞とはその時に崩れるといつてもいゝだらう。主義者といはれる人の心を私はこの點に於て淋しく物足らなく思ふ。彼れは自分が授つただけの天分を提げて人間全體をたゞ一つの色に塗りつぶさうとする人ではないか。その意氣の尊さはいふまでもない。然しその尊さの蔭には尊さそのものをも冰らせるやうな淋しさが潛んでゐる。

たゞ私は私自身を私に恰好なやうに守つて行きたい。それだけは私に許される事だと思ふのだ。而してその立場からいふと私はかの聰明にして上品な人々と同情の人であることが出來ない。私にはまださもしい未練が殘つてゐて、凡てを假象の戲れだと見て心を安んじてゐることが出來ない。そこには上品とか

聰明といふことから遙かに遠ざかつた多くの vulgarity が殘つてゐるのを私自身よく承知してゐる。私は全く凡下な執着に驅られて齷齪する衆生の一人に過ぎない。たゞ私はまだその境界を捨て切ることが出來ない。而して捨て切ることの出來ないのを惡いことだとさへ思はない。漫然と私自身を他の境界に移したら、即ち私の個性を本當に知らうとの要求を擲つたならば、私は今あるよりもなほ多くの不安に責められるに違ひないのだ。だから私は依然として私自身であらうとする衝動から離れ去ることが出來ない。

外界の機緣で私を創り上げる試みに失敗した私は、更に立ちなほつて、私と外界とを等分に向ひ合つて立たせようとした。

私がある。而して私がある以上は私に對立して外界がある。外界は私の内部に明らかにその影を投げてゐる。從つて私の心の働きは二つの極の間を往來しなければならない。而してそれが何故惡いのだ。私はまだどんな言葉で、この二つの極の名稱をいひ現はしていゝか知らない。然しこの二つの極は昔から色々な名によつて呼ばれてゐる。希臘神話ではディオニソスとアポロの名で、又歐洲の思潮ではヘブライズムとヘレニズムの名で、佛典では色相と空相の名で、或は唯物唯心、或は個人社會、或は主義趣味、……凡て世にありとあらゆる名詞に對を成さぬ名詞はないといつてもいゝだらう。私も亦このアンティセシスの下にある。自分が思ひ切つて一方を取れば、是非退けねばならない他の一方がある。チェーナスの顏のやうにこの二つの極は融渾を許さず相反いてゐる。然し私としてはその二つの何れをも潔く捨てるに忍びない。私の生の欲求は思ひの外に強く深く、何者をも失はないで、凡てを味ひ盡して墓場に行かうとする。縱令私が純一無垢の生活を成就しようともこの存在に屬するものの中から何かを捨ててしまはねばならぬとなら、それは私には堪へ得ぬまでに淋しいことだ。よし私は矛盾の中に住み通さうとも、人生の味ひの凡てを味ひ盡さなければならぬ。相反して見ゆる二つの極の間に徨ふために、内部に必然的に起る不安を得ようとも、それに忍んで兩極を恐れることなく摑まねばならぬ。若しそれらを摑むのが不可能のことならば、公平な觀察者鑑賞者となつて、兩極の持味を髣髴して死なう。

人間として持ち得る最大の特權はこの外にはない、この特權を捨てて、そのあとに殘されるものは捨てるにさへ値しない枯れさびれた殘り滓のみではないか。

五

けれども私はそこにも滿足を得ることが出來なかつた。私は思ひもよらぬ物足らぬ發見をせねばならなかつた。兩極の觀察者にならうとした時、私の力はどん／＼私から遁れ去つてしまつたのだ。實驗のみをしてゐて、經驗をしない私を見出した時、私は何んともいへない空虛を感じ始めた。私が觸れ得たと思ふ何れの極も、共に私の命の糧にはならないで、何處にまれ動き進まうとする力は姿を隱した。私はいつまでも一箇所に立つてゐる。

これは私として極端に堪へがたい事だ。かのハムレットが感じたと思はれる空虛や賴りなさは又私にも存分にしみ通つて、私は始めて主義の人の心持を察することが出來た。あの人々は生命の空虛から救ひ出されたい爲めに、他人の自由にまで踏み込んでも、力の限りを一つの極に向つて用ひつゝあるのだ。それはある場合には他人にとつて迷惑なことであらうとも、その人々に取つては致命的に必要なことなのだ。

主義の爲めには生命を捨ててもその生命の緊張を保たうとするその心持はよく解る。

然しながら私には生命を賭しても主張すべき主義がない。主義といふべきものはあるとしても、それが爲めに私自身を見失ふまでにその爲めに沒頭することが出來ない。

矢張り私はその長い廻り道の後に私に歸つて來た。然し何んといふみじめな情けない私の姿だらう。私は凡てを捨ててこの私に賴らねばならぬだらうか。私の過去には何十年の遠さに亙る歷史がある。又私の身邊にはあらゆる社會の活動と優れた人間とがある。大きな力強い自然が私の周圍を十圍二十圍に取り卷いてゐる。これらのものの絕大な重壓はこの憐れな私をおびえさすのに十分過ぎる。私が今まで自分自身に歸り得ないで、あらん限りの躊躇をしてゐたのも、思へばこの外界の威力の前に私自身の無爲を感じてゐたからなのだ。而して何等かの手段を運らしてこの絕大の威力と調和し若しくは妥協しようとさへ試みてゐたのだつた。而かもそれは私の場合に於ては凡て失敗に終つた。さういふ試みは一時的に多少私の不安を撫でさすつてくれたとしても、更に深い不安に導く媒になるに過ぎなかつた。私はかゝる試みをする始めから、何かどうしてもその境遇では滿足し得ない豫感を持ち、而してそれがいつでも事實になつて現はれた。私はどうしてもそれらのものの前に at home に自分自身を感ずることが出來なかつた。

それは私が大膽で且つ誠實であつたからではない。僞善者なる私にも少しばかりの誠實はあつたと云へるかも知れない。けれど少くとも大膽ではなかつた。私は弱かつたのだ。

誰れでも弱い人がいかなる心の狀態にあるかを知つてゐる。何物にも信賴する事の出來ないのが弱い人の特長だ。而かも何物にか信賴しないではゐられないのが他の特長だ。兎は弱い動物だ。その耳はやむ時なき猜疑に震へてゐる。彼れは巖乘な石窟に身を託する事も、幽邃な深林にその住居を構へることも出來ない。彼れは小さな藪の中に彼れらしい穴を掘る。而して雷が鳴つても、雨が來ても、風が吹いても、犬に追はれても、獵夫に迫られても、逃げ廻つた後にはそのみじめな、壞れ易い土の穴に最後の隱れ家を求めるのだ。私の心も亦兎のやうだ。大きな威力は無盡藏に周圍にある。然し私の怯えた心はその何れにも無條件的な信賴を持つことが出來ないで、危懼と躊躇とに滿ちた彷徨の果てには、我れながら憐れと思ふ自分自身に歸つて行くのだ。

然し私はこれを弱いものの強味と呼ぶ。何故といへば私の生命の一路はこの極度の弱味から徐ろに育つて行つたからだ。

こゝまで來て私は自ら任じて強しとする人人と袂を訣たねばならぬ。その人々はもう私に倦れねばならぬ時が來た。私はせうことなしに弱さに純一になりつゝ、益〻強い人々との交渉から身を退けて行くからだ。ニイッチェは弱い人だつた。彼れも亦弱い人の通性として頑固に自分に執着した。そこから彼れの超人の哲學は生れ出たが、而してそれは強い人に恰好な背景を與へる結果にはなつたが、それを解して彼れが強かつたからだと思ふのは大きな錯誤といはねばならぬ。ルッソーでもショーペンハウエルでも等しくさうではなかつたか。強い人は幸にして偉人となり、義人となり、君子となり、節婦となり、忠臣となる。弱い人はまた幸にして一個の尋常な人間となる。それは人々の好き〻〻だ。私は弱いが故に後者を選ぶ外に途が殘されてゐなかつたのだ。

運命は畢竟不公平であることがない。彼等

には彼等のものを與へ、私には私のものを與へてくれる。而かも兩者は一度は相失ふ程に分れ別れても、何時かは何處かで十字路頭にふと出遇ふのではないだらうか。それは然し私が顧慮するには及ばないことだ。私は私の道を驀地に走つて行く外はない。で、私は更にこの筆を續けて行く。

六

私の個性は私に告げてから云ふ。

私はお前だ。私はお前の精髓だ。私は肉を離れた一つの概念の幽靈ではない。また靈を離れた一つの肉の盲動でもない。お前の外部と内部との溶け合つた一つの全體の中に、お前がお前の存在を有つてゐるやうに、私も亦その全體の中で嚴しく働く力の總和なのだ。お前は地球の地殼のやうなものだ。千態萬様の相に分れて、地殼は目まぐるしい變化を現じてはゐるが、畢竟そこに見出されるものは、靜止であり、結果であり、死に近づきつゝあるものであり、奥行きのない現象である。私は謂はゞ地球の外部だ。單純に見るとそこには渾沌と單一とがあるばかりとも思はれよう。けれどもその實質をよく考へて見ると、それは他の星の世界と同じ實質であり、その中に潜む力は一瞬時にして、地殼を思ひのまゝに破壞することも出來、新たに地表を生み出すことも出來るのだ。私とお前とはある意味に於て同じものだ。然し他の意味に於て較べものにならない程違つたものだ。地球の内部は外部からは見られない。外部から見て一番よく氣のつく所は何んといつても表面だ。だから人は私に注意せずに、お前ばかりを見て、お前の全體だと思つてゐるし、お前も亦お前だけの姿を見て、私を顧みず、恐れたり、迷つたり、臆したり、外界を見るにもその表面だけを伺つて滿足してゐる。私に歸つて來ない前にお前が見た外界の姿は、誠の姿ではない。お前は私が如何なるものであるかを本當に知らない間は、お前の外界を見る眼はその正しい機能を失つてゐるのだ。それではいけない、そんなことでは縱令お前がどれ程齷齪して進んで行かうとも、急流を溯らうとする下手な泳手のやうに、無益に藻搔いて而かも一歩も進んではゐないのだ。地球の内部が殘つてゐるさへすれば、縱令地殼が跡方なく壞れてしまつても、一つの遊星としての存在は續ける事が出來るのだ。然し内部のない地球といふものは想像して見ることも出來ないだらう。それと同じに私のないお前は想像することが出來ないのだ。

お前に取つて私以上に完全なものはない。さういつたとて、その意味は、世の中の人が概念的に案出する神や佛のやうに、完全であらうといふのではない。お前が今まで、宗教や、倫理や、哲學や、文藝などから提供せられた想像で測れば、勿論不完全だといふことが出來るだらう。成程私は惡魔のやうに恥知らずではないが、又天使のやうに清淨でもない。私は人間のやうに人間的だ。私の今のこの瞬間の誇りは、全力を擧げて何んの躊躇もなく人間的であるといふことに歸する。私の所に惡魔だとか天使だとか、お前の頭の中でこね上げた偶像を持つて來てくれるな。お前が生きなければならないこの現在にとつて、それらのものとお前との間には無益有害な廣い距離が挾まつてゐる。

お前が私の極印を押された許可狀を持たずに、靈から引き放した肉だけにお前の身賣りをすると、そこに實質のない惡魔といふものが、さも嚴めしい實質を備へたらしく立ち現はれるのだ。又お前が肉から強ひて引き離した靈だけに身賣りをすると、そこに實質のない天使とい

ふものが、さも嚴めしい實質を備へたらしく立ち現はれるのだ。そんな事をしてる中に、お前は段々私から離れて行つて、實質のない幻影に捕へられ、そこに奇怪な空中樓閣を描き出すやうになる。而してお前の裏には苦しい二元が建立される。靈と肉、天國と地獄、天使と惡魔・それから何、それから何……對立した觀念を持ち出さなければ何んだか安心が出來ない、その癖對立してゐると何んだか安心が出來ない、兩天秤にかけられたやうな、底のない空虛に浮んでゐるやうな不安がお前を襲つて來るのだ。さうなればなる程お前は私から遠ざかつて、お前のいふことなり、思ふことなり、實行することなりが、一つ殘らず外部の力によつて支配されるやうになる。お前には及びもつかぬ理想が出來、良心が出來、道德が出來、神が出來る。而してそれは、皆私がお前に命じたものではなくて、外部から借りて來たものばかりなのだ。さういふものを振り廻して、お前はお前の寄木細工を造り始めるのだ。而してお前は一面に、惡魔でさへが眼を塞ぐやうな醜い賤しい思ひをいだきながら、人の眼につく所では、しらじらしくも、自分でさへ恥かしい程立派なことをいつたり、立派なことを行つたりするのだ。而かもお前はそんな蔑むべきことをするのに、尤もらしい理由をこしらへ上げてゐる。聖人や英雄の眞似をするのは——も少し聞えのいい言葉遣ひをすれば——聖人や英雄の言行を學ぶのは、やがて聖人でもあり英雄でもある素地を造る第一歩をなすものだ。我れ、舜の言を言ひ、舜の行を行はば、即ち舜のみといふそれである。かくしてお前は、心の隅に容易ならぬ矛盾と、不安と、情けなさとを感じながら、益々高く虛妄なバベルの塔を登りつめて行かうとするのだ。

惡いことには、お前のさうした態度は、社會の習俗には都合よくあてはまつて行く態度なのだ。人間の生活はその欲求の奧底には必ず生長といふ大事な因子を持つてゐるのだけれども、社會の習俗は平和——平和といふよりも單なる無事に執着しようとしてゐる。何事もなく昨日の生活を今日に繋ぎ、今日の生活を明日に延ばすやうな生活を最も面倒のない生活と思ひ、さういふ無事の日暮しの中に、一日でも安きを偸まうとしてゐるのだ。これが社會生活に強い惰性となつて膠着してゐる。さういふ生活態度に適應する爲めには、お前のやうな行き方は大變に都合がいゝ。お前の內部にどれ程の矛盾があり表裏があつても、それは習俗的な社會の頓着する所ではない。單にお前が殊勝な言行さへしてゐれば、社會は無事に治まつて泰平なのだ、社會はお前を褒めあげて、お前に、お前が心竊かに恥ぢねばならぬやうな過大な報償を贈つてよこす。お前は腹の中で心苦しい苦笑ひをしながらも、その過分な報償に報ゆるべく、益々私から遠ざかつて、心にもない犬馬の勞を盡しつゝ身を終らうとするのだ。

そんなことをして、お前が外部の壓迫の下に、虛僞な生活を續けてゐる間に、何時しかお前は私をだしぬいて、思ひもよらぬ聖人となり英雄となりおほせてしまふだらう。その時お前はもうお前自身ではなくなつて、即ち一個の人間ではなくなつて、人間の皮を被つた專門家になつてしまふのだ。仕事の上の專門家を私達は尊敬せねばならぬ。然し生活の習俗性の要求にのみ耳を傾けて、自分を置きざりにして、外部にのみ身賣りをする專門家は、既に人間ではなくして、いかに立派でも、立派な一つの機械にしか過ぎない。

いかにさもしくとも力なくとも人間は人間であることによつてのみ尊い。人間の有する尊

さの中、この尊さに優る尊さを何處に求め得よう。この尊さから退くことは、お前を死滅に導くのみならず、お前の奉仕しようとしてゐる社會そのものを死滅に導く。何故ならば人間の社會は生きた人間に依つてのみ造り上げられ、維持され、存續され、發達させられるからだ。

お前は機械になることを恥ぢねばならぬ。若し聊かでもそれを恥とするなら、さう輕はずみな先走りばかりはしてゐられない筈だ。外部ばかりに氣を取られてゐずに、少しは此方を向いて見るがいゝ。而して本當のお前自身なるお前の個性がこゝにゐるのを思ひ出せ。

私を見出したお前は先づ失望するに違ひない。私はお前が夢想してゐたやうな立派な姿の持主ではないから。お前が外部的に教へ込まれてゐた理想の物差にあてはめて見ると、私はいかにも物足らない存在として映るだらう。私はキャリバンではない代りにエーリヤルでもない。惡魔ではない代りに天使でもない。私にあつては靈肉といふやうな區別は全く無益である。また善惡といふやうな差別は全く不可能である。私は凡ての活動に於て全體として生長するばかりだ。花屋は花を珍重するだらう。果物屋は果實を珍重するだらう。建築家はその幹を珍重するだらう。然し櫻の木自身にあつては、かゝる善惡差別を絶した所にたゞ生長があるばかりだ。然し私の生長は、お前が思ふ程迅速なものではない。私はお前のやうに頭だけ大きくしたり、手脚だけ延ばしたりしただけでは滿足せず、その全體に於て動き進まねばならぬからだ。理想といふ疫病に犯されてゐるお前は、私の歩き方をもどかしがつて、生意氣にも私をさしおいて、外部の要求にのみ應じて、先走りをしようとするのだ。お前は私より早く走るやうだが、畢竟は遲く走つてゐるのだ。何故といへば、お前が私を出し拔いて、外部の刺戟ばかりに身を任せて走り出して、何處かに行き着くことが出來たとしても、その時お前は既に人間ではなくなつて、一個の專門家卽ち非情の機械になつてゐるからだ。お前自身の面影は段々淡くなつて、その淡くなつた所が、聖人や英雄の襤褸布で、つぎはぎになつてゐるからだ。その醜い姿をお前はいつか發見して後悔せねばならなくなる。後悔したお前はまたすご／＼と私の所まで後戻りするより外に道がないのだ。

だからお前は私の全支配の下にゐなければならない。お前は私に抱擁せられて歩いて行かなければならない。

個性に立ち歸れ。今までのお前の名譽と、功績と、誇りとの凡てを捨てて私に立ち歸れ。お前は生れるとから外界と接觸し、外界の要求によつて育て上げられて來た。外界は謂はばお前の皮膚を包む皮膚のやうになつてゐる。お前の個性は分化擴張して、而かも稀薄な內容になつて、中心から外部へ散漫に流出してしまつた。だからお前が、私をだし拔いて先走りをするのも一面からいへば無理のないことだ。而してお前は私に相談もせずに、愛のない時に、愛の籠つたやうな行をしたり、憎しみを心の中に燃やしながら、寛大らしい振舞ひをしたりしたらう。而してそんな浮薄なことをする結果として、不可避的に心の中に惹き起される不愉快な感じを、お前は努力に伴ふ自らの感じだと强ひて思ひこんだ。お前の感情を訓練するのだと思つた。そんな風にお前が私と沒交渉な愚かなことをしてゐる間は、縱令山程の仕事をし遂げようとも、お前自身は十分の生長をもなし得てはゐないのだ。而してこの淺ましい行爲によつて、お前は本當の人間の生活を阻害し、生命のない生活の殘り滓を、いやが上に人生の路上に塵芥として積み上げるのだ。花屋の爲

めに一本の櫻の樹は花ばかりの生存をしてゐてもいゝかも知れない。その結果それが枯れ果てたら、花屋は遠慮なくその幹を切り倒して他の苗木を植ゑるだらうから。然し人間の生活の中に在る一人の人間はかくあつてはならない。その人間が個性を失ふのは、取りもなほさず社會そのものの生命を弱めることだ。

お前も一度は信仰の門をくゞつたことがあらう。人のすることを自分もして見なければ、何か物足りないやうな淋しさから、お前は宗教といふものにも指を染めて見たのだ。お前が知るであらう通りに、お前の個性なる私は、渴仰的といふ點、即ち生長の欲求を烈しく抱いてゐる點では、宗教的といふことが出來る。然し私はお前のやうな浮薄な歩き方はしない。

お前は私のこゝにゐるのを碌々顧みもせずに、習慣とか輕い誘惑とかに引きずられて、直ぐに友達と、聖書と、教會とに走つて行つた。私は深い危惧を以てお前の例の先走りを見守つてゐた。お前は例の如く努力を始めた、お前の努力から受ける感じといふのは、柄にもない飛び上りな行ひをした後に毎時でも殘される苦い後味なのだ。お前は一方に崇高な告白をしながら、基督のいふ意味に於て、正しく盜みをなし、姦淫をなし、人殺しをなし、僞りの祈禱をなしてゐたではないか。お前の行が疚しくなると「人の義とせらるゝは信仰によりて、律法の行に依らず」といつて、乞食のやうに、神なるものに情けを乞うたではないか。またお前の信仰の虚僞を發かれようとすると「主よ〳〵といふもの悉く天國に入るにあらず、吾が天に在す神の旨に遵るもののみなり」といつてお前を辯護したではないか。お前の神と稱してゐたものは、畢竟ずるに極くかすかな私の影に過ぎなかつた。お前は私を出し拔いて宗教生活に奔つておきながら、お前の信仰の對象なる神を、私の姿になぞらへて造つてゐたのだ。而してお前の生活には本質的に何等の變化も來さなかつた。若し變化があつたとしても、それは表面的なことであつて、お前以外の力を天啓としてお前が感じたことなどはなかつた。お前は強ひて頭を働かして神を想像してゐたに過ぎないのだ。即ちお前の最も表面的な理智と感情との作用で、かすかな私の姿を神にまで捏ねあげてゐたのだ。お前には、お前以外の力がお前に加つて、お前がそれを避けるにもかゝはらず、その力によつて奮ひ起たなければならなかつたやうな經驗は一度もなかつたのだ。それだからお前の祈りは、空に向つて投げられた石のやうに、冷たく、力なく、再びお前の上に落ちて來る外はなかつたのだ。それらの苦々しい經驗に苦しんだにもかゝはらず、お前は頑固にもお前自身を欺いて、それを精進と思つてゐた。而してお前自身を欺くことによつて他人をまで欺いてゐた。

お前はいつでも心にもない言行に、美しい名を與へる詐術を用ひてゐた、然しそれに飽き足らず思ふ時が遂に來ようとしてゐる。まだいくらか誠實が殘つてゐたのはお前に取つて何んたる幸だつたらう。お前は絶えて久しく捨てておいた私の方へ顔を向けはじめた。今、お前は、お前の行爲の大部分が虚僞であつたのを認め、またお前は眞の意味で、一度も祈禱をしたことのない人間であるのを知つた。これからお前は前後もふらず、お前の個性と合一する爲めにいそしまねばならない。お前の個性に生命の泉を見出し、個性を礎としてその上にありのままのお前を築き上げなければならない。

七

私の個性は更に私に告げてから云ふ。

お前の個性なる私は、私に即して行くべき

道のいかなるものであるかを說かうか。

先づ何よりも先きに、私がお前に要求することは、お前が凡ての外界の標準から眼をそむけて、私に歸つて來なければならぬといふ一事だ。恐らくはそれがお前には賴りなげに思はれるだらう。外界の標準といふものは、古い人類の歷史——その中には凡ての偉人と凡ての聖人とを含み、凡ての哲學と科學、凡ての文化と進步とを蓄へた宏大もない貯藏場だ——と、現代の人類活動の諸相との集成から成り立つてゐる。それからお前が全く眼を退けて、私だけに注意するといふのは、便りなくも心細くも思はれることに違ひない。然し私はお前に云ふ。躊躇するな。お前が外界に向けて擴げてゐた鬚根の凡てを拔き取つて、先きを揃へて私の中に插し入れるがいゝ、お前の個性なる私は、多くの人の個性に比べて見たら、卑しく劣つたものであらうけれども、お前にとつては、私の外により完全なものはないのだ。

かくてやうやく私に歸つて來たお前は、これまでお前が外界に對してし慣れてゐたやうに、私を勝手次第に切りこまざいてはならぬ。お前が外界と交渉してゐた時のやうに、善惡美醜といふやうな見方で、强ひて私を理解しようとしてはならぬ。私の要求をその統合のまゝに受け入れねばならぬ。お前が私の全要求に應じた時に於てのみ私は生長を遂げるであらう。私にお前が從ふ爲めに結果される思想なり、言說なり行爲なりが、假りに外界の傳說、習慣、敎訓と衝突矛盾を惹き起すことがあらうとも、お前は決して心を亂して、私を疑ふやうなことをしてはならぬ。急かず、躊はず、お前の個性の生長と完成とを心がけるがいゝ。然しこゝにくれ〴〵もお前に注意しておかねばならぬのは、今までお前が外面的の、約束された、習俗的な考へ方で、個性の働きを解釋したり、助成したりしてはならぬといふ事だ。例へば個性の要求の結果が一見肉に屬する慾の遂行のやうに思はれる時があつても、それをお前が今まで考へてゐたやうに、簡單に肉慾の遂行とのみ見てはならぬ。同樣に、その要求が一見靈に屬するもののやうに思はれても、それを全然肉から離して考へるといふことは、個性の本然性に背いた考へ方だ。私達の肉と靈とは、哲學者や宗教家が槪念的に考へてゐるやうに、ものの二極端を現はしてゐるものでないのは勿論、それは差別の出來ない一體となつてのみ個性の中には生きてゐるのだ。水を考へようとする場合に、それを水素と酸素とに分解して、どれ程綿密に二つの元素を研究した所が、何んの役にも立たないだらう。水は水そのものを考へることによつてのみ理解される。だから私がお前に望むところは、私の要求を、お前が外界の標準によつて、支離滅裂にすることなく、その全體をそのまゝ攝受して、そこにお前の滿足を見出す外にない。これだけの用意が出來上つたら、もう何んの躊躇もなく驀進すべき準備が整つたのだ。私の誇りがなる時は誇りがとなり、私の謙遜な時は謙遜となり、私の愛する時愛し、私の憎む時憎み、私の欲するところを欲し、私の厭ふところを厭へばいゝのである。

かくしてお前は、始めてお前自身に立ち歸ることが出來るだらう、此の世に生れ出て、產衣を着せられると同時に、今日までに亙つて加へられた外界の壓迫から、お前は今始めて自由になることが出來る。これまでお前が、自分をある外界の型に嵌める必要から、强ひて不用のものと見て、切り捨ててしまつたお前の部分は、今は本當の價値を回復して、お前に取つては矢張り必要缺くべからざる要素となつた。お前の凡ての枝は、等しく日光に向つて、喜んで若

芽を吹くべき運命に遇ひ得たのだ。その時お前は永遠の否定を後ろにし、無關心の谷間を通り越して、初めて永遠の肯定の門口に立つことが出來るやうになつたのだ。

お前の實生活にもその影響がない譯ではない。これからのお前は必然によつて動いて、無理算段をして動くことはない。お前の個性が生長して今までのお前を打ち破つて、更に新らしいお前を造り出すまで、お前は外界の壓迫に餘儀なくされて、無理算段をしてまでもお前が動く必要を見なくなる。例へばお前が外界に即した生活を營んでゐた時、お前は控へ目といふ道德を實行してゐたらう。お前は心にもなく善行をし過ごすことを恐れて、控へ目に善行をしてゐたらう。然しお前は自分の缺點を隱すことに於ては、中々控へ目には隱してゐなかつた、寧ろ恐ろしい大膽さを以て、お前の心の醜い祕密を人に知られまいとしたではないか。お前は人の前では、祕かに自任してゐるよりも、低く自分の德を披露して、控へ目といふ德性を滿足させておきながら、慾念といふやうな實際の弱點は、一寸見には見つからない程、綿密に上手に隱しおほせてゐたではないか。さういふ態度を私は無理算段と呼ぶのだ。然し私に即した生活にあつては、そんな無理算段はいらないことだ。いかなる慾念も、畢竟お前の個性の生長の糧となるのであるが故に、お前はそれに對して臆病であるべき必要がなくなるだらう。即ち、お前は、私の生長の必然性のためにのみ變化して、外界に對しての顧慮から伸び縮みする必要は絕對になくなるべき筈だ。何事もそれからのことだ。

お前はまた私に歸つて來る前に、お前が全く外界の標準から眼を退けて、私を唯一無二の力と賴む前に、人類に對するお前の立場の調和について迷つたかも知れない。驀地にお前が私と一緒になつて進んで行くことが、人類に對して迷惑となり、その爲めに人間の進步を妨げ、從つて生活の秩序を破り、節度を壞すやうな結果を多少なりとも惹き起しはしまいか。さうお前は迷つたらう。

それは外界にのみ執着しなれたお前に取つては考へられさうなことだ。然しお前がこの問題に對して眞劍になればなる程、さうした外部的な顧慮は、お前には考へようとしても考へられなくなつて來るだらう。水に溺れて死なうとする人が、世界の何處かの隅で、小さな幸福を得た人のあるのを想像して、それに祝福を送るといふやうなことがとてもあり得ないと同樣に、お前がまことに緊張して私に來る時には、それから結果される影響などは考へてはゐられない筈だ。自分の罪に苦しんで、荊棘の中に身をころがして、悶えなやんだ聖者フランシスが、その悔悟の結果が、人類にどういふ影響を及ぼすだらうかと考へてゐたかなどと想像するやうなものは、人の心の正しい尊さを、露程も味つたことのない憐れな人といはなければならないだらう。

お前にいつて聞かす。さういふ問ひを發し、さういふ疑ひになやむ間は、お前は本當に私の所に歸つて來る資格は持つてはゐないのだ。お前はまだ徹底的に體裁ばかりで動いてゐる人間だ。それを捨てろ。それを捨てなければならぬ程に今までの誤謬に眼を開け。私は前後を顧慮しないではゐられない程、緩漫な步き方はしてゐない。自分の生命が脅やかされてゐるくせに、外界に對してなほ閑葛藤を繫いでゐるやうなお前に對しては、恐らく私は無慈悲な傍觀者であるに過ぎまい。私は冷然としてお前の慘死を見守つてこそゐるだらうが、一臂の力にも恐らくなつてはやらないだらう。

又お前は、前にもいつたことだが、單に專門

家になつたことだけでは滿足が出來なくなる。一體人は自分の到る處に自分の主でなければならぬ。然るに專門家となるといふことは、自分を人間生活のある一部門に賣り渡すことである。多かれ少かれ外界の要求の犠牲となることである。完全な人間——個性の輪郭のはつきりまとまつた人間となりたいと思はないものが何處にあらう。然るにお前はよくこの第一義の要求を忘れてしまつて、外聞といふ誘惑や、もう少し進んだ所で、社會一般の進歩を促し進めるといふやうな、柄にもない非望に驅られて、お前は甘んじて一つしかないお前の全生命を片輪にしてしまひたがるのだ。然しながら私の所に歸つて來たお前は、そんな危險な火山頂上の舞踏はしてゐない。お前の手は、お前の頭は、お前の職業は、いかに分業的な事柄に亙つて行かうとも、お前は常にそれをお前の個性なる私に繋いでゐるからだ。お前は大抵の分業にたづさはつても自分自身であることが出來る。しかのみならず、若しお前のしてゐる仕事が、到底お前の個性を滿足し得ない時には、お前は個性の滿足の爲めに仕事を投げ捨てることを意としないであらう。少くとも斯かる理不盡な生活を無くなすやうに、お前の個性の要求を申出すだらう。お前のかくすることは、無事といふことにのみ執着したがる人間の生活には不都合を來す結果になるかも知れない。又表面的な進歩ばかりをめやすにしてゐる社會には不便を起すことがあるかも知れない。然しお前はそれを氣にするには及ばない。私は明らかに知つてゐる。人間生活の本當の要求は無事といふことでもなく、表面だけの進歩といふことでもないことを。その本當の要求は、一個の人間の要求と同じく生長であることを。だからお前は安んじて、確信をもつて、お前の道を選べばいいのだ。精神と物質とを、個性と仕事とを互に切り放した文明がどれ程進歩しようとも、それは無限の沙漠に流れこむ一條の河に過ぎない。それはいつか細つて枯れはててしまふ。

私はこれ以上をもうお前にいふまい。私は老婆親切の饒舌の爲めに既に餘りに疲れた。然しお前は少し動かされたやうだな。選ぶべき道に迷ひ果てたお前の眼には、故郷を望み得たやうな光が私に對して浮んでゐる。憐れな僞善者よ。強さとの平均から常に破れて、ある時は稍〻強く、ある時は強さを羨む外にない弱さに陷る僞善者よ。お前の強さと弱さとが平均してゐないのはまだしもの幸だつた。お前は多分そこから救ひ出されるだらう。その不平均の撞着の間から僅かばかりなりともお前の誠意を拾ひ出すだらう。その誠實を取り逃すな。若しそれが純であるならば、誠實は微量であつても事足りる。本當をいふと不純な誠實といふものはない。又量定さるべき誠實といふものはない。誠實がある。そこには純粹と凡てとがあるのだ。だからお前は誠實を見出した所に勇み立つがいゝ、恐れることはない。

起て。そこにお前の眼の前には新たな視野が開けるだらう。それをお前は私に代つて云ひ現はすがいゝ。

お前は私にこの長い言葉を無駄に云はせてはならない。私は暖かい手を擴げてお前の來るのを待つてゐるぞよ。

私の個性は私にかく告げてしづかに口をつぐんだ。

八

私の個性は少しばかりではあるが、私に誠實を許してくれた。然し誠實とはそんなものでいゝのだらうか。私は八方摸索の結果、すがり附くべき一莖の藁をも見出し得ないで、已むことなく覺束ない私の個性——それは私自身に

すら他の人のそれに比して少しも優れたところのない――に最後の隱家を求めたに過ぎない。それを誠實といつていゝのだらうか。けれども名前はどうでもいゝ。ある人は私の最後の到達を私の卑屈がさせた業だといふだらう。ある人はまた私の勇氣がさせた業だといふかも知れない。たゞ私自身にいはせるなら、それは必至なある力が私をそこまで連れて來たといふ外はない。誰れでもがこの同じ必至の力に促されていつか一度はその人自身に歸つて行くのだ。少くとも死が間近に彼れに近づく時には必ずその力が來るに相違ない。一人として早　個性との遭遇を避け得るものはない。私も亦人間の一人として人間並みにこの時個性と顏を見合はしたに過ぎない。ある人よりは少し早く、而してある人よりは甚だおそく。

これは少くとも私に取つては何よりもいゝことだつた。私は長い間の無益な動亂の後に始めて些かの安定を自分の裏に見出した。こゝは居心がいゝ。仕事を始めるに當つて先づ坐り心地のいゝ一脚の椅子を得たやうに思ふ。私の仕事はこの椅子に倚ることによつて最もよく取り運ばれるにちがひないのを得心する。私はこれからでも無數の煩悶と失敗とを繰り返すではあらうけれども、それらのものはもう無益に繰り返される筈がない。煩悶も必ず滋養ある食物として私に役立つだらう。私はこの椅子に身を託して、私の知り得た所を主に私自身のために書き誌しておかうと思ふ。私はこれを宣傳の爲めに書くのではない。私の經驗は狹く貧しくして、とてもそんな普遍的な訴へをなし得ないことを私はよく知つてゐる。たゞ私に似たやうな心の過程にある少數の人がこれを讀んで僅かにでも會心の微笑を酬ゆる事があつたら、私自身を表現する喜びの上に更に大きな喜びが加へられることになる。

秩序もなく系統もなく、たゞ喜びをもつて私は書きつゞける。

九

センティメンタリズム、リアリズム、ロマンティシズム――この三つのイズムは、その何れかを抱く人の資質によつて決定せられる。ある人は過去に現はれたもの、若しくは現はるべかりしものに對して愛着を繋ぐ。而して現在をも未來をも能ふべくんば過去といふ基調によつて導かうとする。凡ての美しい夢は、經驗の結果から生れ出る。經驗そのものからではない。さういふ見方によつて生きる人はセンティメンタリストだ。

またある人は未來に現はれるもの、若しくは現はるべきものに對して憧憬を繋ぐ。既に現はれ出たもの、今現はれつゝあるものは、凡て醜く歪んでゐる。やむ時なき人の欲求を滿たし得るものは現はれ出ないものの中にのみ潛んでゐなければならない。さういふ見方によつて生きる人はロマンティシストだ。

更に又ある人は現在に最上の價値をおく。既に現はれ終つたものはどれほど優れたものであらうとも、それを現在にも未來にも再現することは出來ない。未來にいかなるよいものが隱されてあらうとも、それは今私達の手の中にはない。現在には過去にあるやうな美しいものはないかも知れない。又未來に夢見られるやうな輝かしいものはないかも知れない。然しこゝには具體的に把持さるべき私達自身の生活がある。全力を盡してそれを活きよう。さういふ見方によつて生きる人はリアリストだ。

第一の人は傳說に、第二の人は理想に、第三の人は人間に。

この私の三つのイズムに對する見方は過つてゐないだらうか。若し過つてゐないなら、私

はリアリストの群れに屬する者だといはなければならぬ。何故といへば、私は今私自身の外に依賴すべき何者をも持たないから。而してこの私なるものは現在にその存在を持つてゐるのだから。

私にも私の過去と未來とはある。然し私が一番頼らねばならぬ私は、過去と未來とに挾まれたこの私だ。現在のこの瞬間の私だ。

私は私の過去や未來を蔑ろにするものではない。縱令蔑ろにした所が、實際に於て過去は私の中に滲み透り、未來は私の現在を未知の世界に導いて行く。それをどうすることも出來ない。唯ゞ私は、過去未來によつて私の現在を見ようとはせずに、現在の私の中に過去と未來とを攝取しようとするものだ。私の現在が、私の過去であり、同時に未來であらせようとするものだ。卽ち過去に對しては感情の自由を獲得し、未來に對しては意志の自由を主張し、現在の中にのみ必然の規範を立しようとするものだ。

何故お前はその立場に立つのだと問はれるなら、さうするのが私の資質に適するからだといふ外には何等の理由もない。

私には生命に對する生命自身の把握といふ事が一番尊く思はれる。卽ち生命の緊張が一番好ましいものに思はれる。而して生命の緊張はいつでも過去と未來とを現在に引きよせるではないか。その時傳說によつて私は判斷されずに、私が傳說を判斷する。又私の理想は近々と現在の私に這入りこんで來て、このまゝの私の中にそれを實現しようとする。かくて私は現在の中に三つのイズムを統合する。委しくいふと、そこにはもう、三つのイズムはなくして私のみがある。かうした個性の狀態を私は一番私に親しいものと思はずにゐられないのだ。

私の現在はそれがある如くある外はない。それは他の人の眼から見ていかに不完全な、而して汚點だらけのものであらうとも、又私が時間的に一歩その境から踏み出して、過去として反省する時、それがいかに物足らないものであらうとも、現在に生きる私に取つては、その現在の私は、それがあるやうにしかあり得ない。善くとも惡くともその外にはあり得ないのだ。私に取つては、私の現在はいつでも最大無限の價値を持つてゐる。私にはそれに代ふべき他の何者もない。私の存在の確實な承認は各ゝの現在に於てのみ與へられる。

だから私に取つては現在を唯一の寶玉として尊重し、それを最上に生き行く外に殘された道はない。私はそこに背水の陣を布いてしまつたのだ。

といつて、私は如何にして過去の凡てを蔑視し、未來の凡てを無視することが出來よう。私の現在は私の魂にまつはりついた過去の凡てではないか。そこには私の親もゐる。私の祖先もゐる。その人達の仕事の全量がある。その人々や仕事を取り圍んでゐた大きな世界もある。ある時にはその上を日も照らし雨も潤した。ある時は天界を果てから果てまで遊行する彗星が、その稀れなる光を投げた。ある時は地球の地軸が角度を變へた。それらのあらゆる力はその力の凡てを集めて私の中に積み重つてゐるのではないか。私はどうしてそれを蔑視することが出來よう。私は假りにその力を忘れてゐようとも、その力は瞬轉の間も私を忘れることはない。たゞ私はそれらのものを私の現在から遊離して考へるのを全く無益徒勞のことと思ふだけだ。それらのものは嚴密に私の現在に織りこまれることによつてのみその價値を有し得るといふことに氣が付いたのだ。畢竟現在の中に攝取し盡された過去は、人が假りにそれを過去といふ言葉で呼ばうとも、私に取

つては現在の外の何者でもない。現在といふものの本體をこゝまで持つて來なければ、その内容は全く成り立たない。

私は遊離した狀態にある過去を現在と對立させて、その比較の上に個性の座位を造らうとする虚ろな企てには厭き果てたのだ。それは科學者がその實驗物を取扱ふ態度を直ちに生命にあてはめようとする愚かな、無駄な企てではないか。科學者と實驗との間には明らかに主客の關係がある。然し私と私の個性との間には十分の間隙も上下もあつてはならぬ。凡この對立は私にあつて消え去らなければならぬ。

未來についても私は同じ事がいひ得ると思ふ。私を除いて私の未來（といはず未來の全體）を完成し得るものはない。未來の成行きを考へる場合、私といふ一人の人間を度外視しては、未來の相は成り立たない。これは少しも高慢な言葉ではない。その未來を築き上げるものは私の現在だ、私の現在が失はれてゐるならば、私の未來は生れ出て來ない。私の現在が最上に生きられるなら、私の未來は最上に成り立つ。眼前の緊張からゆるんで、單に未來を空想することが何んで未來の創造に塵ほどの

益にもなり得よう。未來を考へないまでに現在に力を集めた時、よき未來は刻々にして創り出されてゐるのではないか。

センティメンタリストの痛ましくも甘い涙は私にはない。ローマンティストの快く華やかな想像も私にはない。凡ての缺陷と凡ての醜さとを持ちながらも、この現在は私に取つていかに親み深くいかに尊いものだらう。そこにある強い充實の味と人間らしさとは私を牽きつけるに十分である。この饗應は私を存分に飽き足らせる。

＋

然しながら個性の完全な飽滿と緊張とは如何に得がたきものであるよ。燃燒の生活とか白熱の生命とかいふ言葉は紙と筆とをもつてこそ表はし得ようけれども、私の實際の生活の上には容易に來てくれることがない。然し私にも全くないことではなかつた。私はその境界がいかに尊く難有きものであるかを幽かながらも窺ふことが出來た。而してその醍醐味の前後にはその境に至り得ない生活の連續がある。その關係を私はこれから朧ろげにでも書き留めておかう。

外界との接觸から自由であることの出來ない私の個性は、縱令自主的な生活を導きつゝあつても、常に外界に對し何等かの角度を保つてその存在を持續しなければならない。ある時は私は外界の刺戟をそのまゝに受け入れて、反省もなく生活してゐる。ある時は外界の刺戟に對して反射的に意識を動かして生活してゐる。又ある時は外界の刺戟を待たずに、私の生命がある已むなき内的の力に動かされて外界に働きかける。かゝる變化はたゞ私の生命の緊張度の强弱によつて結果される。これは知的活動、情的活動、意志的活動といふやうに、生命を分解して生活の狀態を現はしたものではない。人間の個性の働きを云ひ現はす場合にかゝる分解法によるのは私の最も忌む所である。人間の生命的過程に知情意といふやうな區別は實は存在してはゐないのだ。生命がある對象に對して變化なく働き續ける場合を意志と呼び、對象を變じ、若しくは力の量を變化して生命が働きかける場合を情といひ、生命が二つ以上の對象について選擇をなす場合を知と名づけたに過ぎないのだ。人の心的活動は三頭政治の支配を受けてゐるのではない。もつと純一な統合的な力によつて總

轄されてゐるのだ。だから少し綿密な觀察者は、知と情との間に、情と意志との間に、又意志と知との間に、判然とはその何れにも從はせることの出來ない幾多の心的活動を發見するだらう。虹彩を檢する時、赤と靑と黄との間に無限數の間色を發見するのと同一だ。赤靑黄は元來白によつて統一さるべき假象であるからである。かくて私達が太陽の光線そのものを見窮めようとする時、分解された諸色をいかに研究しても、それから光線そのものの特質の全體を知悉することが出來ぬと同樣に、知情意の現象を如何に科學的に探究しても、心的活動そのものを摑むことは思ひもよらない。歸納法は記述にのみ役立つ。然し本體の表現には役立たない。この簡單な原理は屢〻閑却される。科學に、從つて科學的研究に絶大の價値をおからとする現代にあつては、歸納法の根本的缺陷は往々無反省に閑却される。

偖て私は岐路に迷ひ込まうとしたやうだ。私は再び私の當面の問題に歸つて行かう。

外界の刺戟をそのまゝ受け入れる生活を假りに習性的生活(habitual life)と呼ぶ。それは石の生活と同樣の生活だ。石は外界の刺戟なしには永久に一所にあつて、永い間の中にただ滅して行く。石の方から外界に對して働きかける場合は絶無だ。私には下等動物といはれるものに通有な性質が殘つてゐるやうに、無機物の生活さへが膠着してゐると見える。それは人の生活が最も緩漫となる所には何時でも現はれる現象だ。私達の祖先が經驗し盡した事柄が、更に繰り返されるに當つては、私達はもう自分の能力を意識的に働かす必要はなくなる。かゝる物事に對する生活活動は單に習性といふ形でのみ私達に殘される。

チェスタートンが「いかなる革命家でも家常茶飯事については、少しも革命家らしくなく、尋常人と異ならない尋常なことをしてゐる」といつたのはまことだ。革命家でもない私にはかかる生活の態度が私の活動の大きな部分を占めてゐる。毎朝私は顏を洗ふ。而して顏を洗ふ器具に變化がなければ、何等の反省もなく同じ方法で顏を洗ふ、若し不注意の爲めにその方法を誤るやうなことでもあれば、却つてそれを不愉快の種にする位だ。この生活に於ては私は全く過去の支配の下にある。私の個性の意識は少しもそこに働いてゐない。

私はかゝる生活を無益だといふのではない。かゝる生活を有するが爲めに私の日常生活はどれ程繁雜な葛藤から救はれてゐるか知れない。この緩漫な生活が一面に成り立つことによつて、私達は他面に、必要な方面、緊張した生活の欲求を感じ、それを達成することが出來る。

然しかゝる生活は私の個性からいふと、個性の中に屬させたらいゝものかわるいものかが疑はれる。何故ならば私の個性は嚴密に現在に執着しようとし、かゝる生活は過去の集積が私の個性とは連絡なく私にあつて働いてゐるといふに過ぎないから。その上かゝる生活の内容は甚だ不安定な狀態にある。外界の事情が聊かでも變れば、もうそこにはこの生活は成り立たない。而して私がこれからいはうとする知的生活の圏内に這入つてしまふ。私は安んじてこの生活に倚りかゝつてゐることが出來ない。

又本能として自己の表現を欲求する個性は、習性的生活にのみ依賴して生存するに堪へない。單なる過去の繰り返しによつて滿足してゐることが出來ない。何故ならそこには自己がなくしてたゞ習性があるばかりだから。外界と自己との間には無機的な因緣があるばかりだから。私は石から、せめては草木なり鳥獸になり

進んで行きたいと希ふ。この欲求の緊張は私を驅つて更に異なつた生活の相を選ばしめる。

十一

それを名づけて私は知的生活（intelectual life）とする。

この種の生活に於て、私の個性は始めて獨立の存在を明らかにし、外界との對立を成就する。それは反射の生活である。外界が個性に對して働きかけた時、個性はこれに對して意識的の反應をする。即ち經驗と反省とが私の生活の上に表はれて來る。これまで外界に征服されて甘んじてゐた個性はその獨自性を發揮して、外界を相手取つて挑戰する。習性的生活に於て私は無元の世界にゐた。知的生活に於て私は始めて二元の世界に入る。こゝには私がゐる。かしこには外界がある。外界は私に攻め寄せて來る。私は經驗といふ形式によつて外界と衝突する。而してこの經驗の戰場から反省といふ結果が生れ出て來る。それはある時には勝利で、ある時には敗北であるであらう。

その何れにせよ、反省は經驗の結果を似寄りの部門に選び分ける。かく類別せられた經驗の堆積を人々は知識と名づける。知識を整理する爲めに私は信憑すべき一定の法則を造る。かく知識の堆積の上に建て上げられた法則を人々は道德と名づける。

道德は對人的なものだといふ見解は一應道理ではあるけれども、私はさうは思はない。孤島に上陸したばかりの孤獨なロビンソン・クルーソーにも自己に對しての道德はあつたと思ふ。何等の意味に於てであれ、外界の刺戟に對して自己をよりよくして行かうといふ動向は道德とはいへないだらうか。クルーソーが彼れの爲めに難破船まで什器食料を求めに行つたのは、彼れ自身に取つての道德ではなかつたらうか。然しクルーソーはやがてフライデーを殺人者から救ひ出した。クルーソーとフライデーとは最上の關係に於て生きることを互に要求した。クルーソーは自己に對する道德とフライデーに對する道德との間に分讓點を見出さねばならなかつた。フライデーも同じ努力をクルーソーに對してなした。この二人の努力は幸に一致點を見出した。かくて二人は孤島にあつて、美しい間柄で日を過ごしたのみならず、遂に船に救はれて英國の土を踏むことが出來た。フライデーが來てからはその孤島には對人的道德即ち社會道德が出來たけれども、クルーソー一人の時には、そこに一の道德も存在しなかつたと云はうとするのは、思ひ誤りでありはしまいか。道德とは自己と外界、それが自然であらうと人間であらうと、との知識に基する正しい自己の立場の決定である。だから、道德は一人の人の上にも、二人以上の人々の間にも當然成り立たねばならぬものだ。但し兩方の場合に於て道德の內容は知識の變化と共に變化する。知識の內容は外界の變化と共に變化する。それ故道德は外界の變化につれて又變化せざるを得ぬ。

世には道德の變易性を物足らなく思ふ人が少くないやうだ。自分を律して行くべき唯一の規準が絕えず變化せねばならぬといふ事は、直ちに人間生活の不安定そのものを豫想させる。人間の持つてゐる道德の後ろには何か不變な或るものがあつて、變化し易い末流の道德も謂はばそこに假りの根ざしを持つものに相違ない。不完全な人間は一氣にその普遍不易の道德の根元を把握しがたい爲めに、摸索の結果として過つてその一部を彼等の規準とするに過ぎぬ。一部分であるが故に、それは外界の事情によつては、修正の必要を生ずるだらうけれども、それは直ちに徹底的に道德そのものの變易

性を證據立てるものにはならない。さうある人は考へるかも知れない。

それでも私は道徳の内容は絶えず變易するものだといひ張りたい。私に普遍不易に感ぜられるものは、私に内在する道徳性である。即ち知識の集成の中から必ず自己を外界に對して律すべき規準を造り出さうとする動向は、その内容（緊張度の增減は論じないで）に於て變化することなく自存するのを知つてゐる。然し道徳性と道徳とが全く異なつた觀念であるのは、誰れでも容易に判る筈だ、私に取つては、道徳の内容の變化するのは少しも不思議ではない。又困ることでもない。たゞ變へようと思つても變へることの出來ないのは、道徳を生み出さうとする動向だ。而してその内容が變化すると假定するのは私に取つて淋しいことだ。然し幸に私はそれを不安に思ふ必要はない。私は自分の經驗によつてその不易を十分に知つてゐるから。

知識も道徳も變化する。然しそれがある期間固定してゐて、私の生活の努力がその内容を充實し得ない間は、それはどこまでも知識として、又道徳として嚴存する。然し私の生活がそれらを乘り越してしまふと、知識も道徳も習性の閾の中に退き去つて、知識若しくは道徳としての價値が失はれてしまふ。私が無意識に、たゞ外界の刺戟にのみ順應して行つてゐる生活の中にも、或は他のある人が見て道徳的行爲とするものがあるかも知れない。然しその場合私に取つては決して道徳的行爲ではない。何故ならば道徳的である爲めには私は努力をしてゐなければならないからだ。

知的生活は反省の生活であるばかりでなく努力の生活だ。人類はこゝに長い經驗の結果を綜合して、相共に依據すべき範律を作り、その範律に則つて自己を生活しなければならぬ。努力は實に人を石から篩ひ分ける大事な試金石だ。動植物にあつてはこの努力といふ生活活動は無意識的に、若しくは苦痛なる生活の條件として履行されるだらう。然し人類は努力を單なる苦痛とのみは見ない。人類に特に發達した意識的動向なる道徳性の要求を充たすものとして感ぜられる。その動向を滿足する爲めに人類は道徳的努力に伴ふ苦痛を侵すことを意としない。この現はれは人類の歴史を莊嚴なものにする。

誰れが知的生活の所産なる知識と道徳とを讃美しないものがあらう。それは眞理に對する人類の倦むことなき精進の一路を示唆する現象だ。凡ての懷疑と凡ての破壞との間にあつて、この大きな力は嘗て磨滅したことがない。かのフェニックスが火に燒かれても、再び若々しい存在に甦つて、絶えず兩翼を大空に向つて張るやうに、この精進努力の生活は人類がなほ地上の王なる左券として、長くこの世に榮えるだらう。

然し私はこの生活に無上の安立を得て、更に心の空しさを感ずることがないか。私は否と答へなければならない。私は長い迴り道の末に、尋ねあぐれた故郷を私の個性に見出した。この個性は外界によつて十重二十重に圍まれてゐるにもかゝはらず、個性自身に於て滿ち足らねばならぬ。その要求が成就されるまでは絶對に飽きることがない。知的生活はそれを私に滿たしてくれたか。滿たしてはくれなかつた。何故ならば知的生活は何んといつても二元の生活であるからだ。そこにはいつでも個性と外界との對立が必要とせられる。私は自然若しくは人に對してある身構へをせねばならぬ。經驗する私と經驗を強ひる外界とがあつて知識は生れ出る。努力せんとする私とその對象たる外界があつて道徳は發生する。

私が知識そのものではなく道徳そのものではない。それらは私と外界とを合理的に繋ぐ橋梁に過ぎない。私はこの橋梁即ち手段を實在そのものと混同することが出來ないのだ。私はまた平安を欲すると共に進歩を欲する。潤色(elaboration)を欲すると共に創造を欲する。平安は既存の事態の調節的持續であり、進歩は既存の事態の建設的破棄である。潤色は在るものをよりよくすることであり、創造は在らざりしものをあらしめることである。私はその一方にのみ安住してゐるに堪へない。私は絶えず個性の再造から再造に飛躍しようとする。然るに知的生活は私のこの飛躍的な内部要求を充足してゐるか。

知的生活の出發點は經驗である。經驗とは要するに私の生活の殘滓である。それは反省――意識のふりかへり――によつてのみ認識せられる。一つの事象が知識になるためにはその事象が一たび生活によつて濾過されたといふことを必要な條件とする。こゝに一つの知識があるとする。私がそれを或る事象の認識に役立つものとして承認するためには、縱令その知識が他人の經驗の結果によつて出來上つたものであれ、私の經驗も亦それを裏書きしたものでなければならぬ。私の經驗が若しその知識の基本となつた經驗と全然沒交渉であつたなら、私は到底それを自分の用ひ得る知識として承認することは出來ない筈だ。だから私の有する知識とは、要するに私の過去を整理し、未來に起り來るべき事件を取扱ふ上の參考となるべき用具である。私と道徳とに於ける關係も亦全く同樣な考へ方によつて定めることが出來る。即ち知識も道徳も既存の經驗に基いて組み立てられたもので、それがそのまゝ役立つためには、私の生活が同一軌道を繰り返し〱往來するのを一番便利とする。而してそこには進歩とか創造とかいふ動向の活躍がおのづから忌み避けられなければならない。

私の生活が平安であること、而してその内容が潤色されることを私は喜ばないとはいはない。私の内部にはいふまでもなくかゝる要求が大きな力を以て働いてゐる。私はその要求の達成を知的生活に向つて感謝せねばならぬ。けれども私は永久にこの保守的な動向にばかり膠着して滿足するだらうか。

一個人よりも活動の遲鈍になり勝ちな社會的生活にあつては、この保守的な知的生活の要求は自然に一個人のそれよりも強い。平安無事といふことは、社會生活の基調となりたがる。だから今の程度の人類生活の樣式にあつては、個人的の飛躍的動向を無視壓迫しても、知的生活の確立を希望する。現代の政治も、教育も、學術も、產業も、大體に於てはこの知的生活の強調と實踐とにその目標をおいてゐる。だから若し私がこの種の生活にのみ安住して、社會が規定した知識と道徳とに依據してゐたならば、恐らく社會から最上の報酬を與へられるだらう。而して私の外面的な生存權は最も確實に保障されるだらう。而して社會の内容は益〻平安となり、潤色され、整然たる形式の下に統合されるだらう。

然し――社會にもその動向は朧ろげに看取される如く――私には知的生活よりも更に緊張した生活動向の嚴存するのを何うしよう。私はそれを社會生活の爲めに犧牲とすべきであるか。社會の最大の要求なる平安の爲めに、進歩と創造の衝動を抑制すべきであるか。私の不滿は謂れのない不滿であらねばならぬだらうか。

社會的生活は往々にして一個人のそれより遲鈍であるとはいへ、私の持つてゐるものを社會が全然缺いでゐるとは思はれない。何故な

らば、私自身が社會を組み立ててゐる一分子であるのは間違ひのないことだから。私の欲する所は社會の欲する所であるに相違ない。而して私は平安と共に進歩を欲する。潤色と共に創造を欲する。その衝動を社會は今繼子扱ひにはしてゐるけれども——而して社會なるものは性質上多分永久にさうであらうけれども——その何處かの一隅には必ず潜勢力としてそれが伏在してゐなければならぬ。社會は社會自身の意志に反して絶えず進歩し創造しつゝあるから。

私が私自身になり切る一元の生活、それを私は久しく憧れてゐた。私は今その神殿に徐ろに進みよつたやうに思ふ。

十二

こゝまでは縦令たどたどしいにせよ、私の言葉は私の意味しようとする所に忠實であつてくれた。然しこれから私が書き連ねる言葉は、恐らく私の使役に反抗するだらう。然し縦令反抗するとも私は、これで筆を擱くことは出來ない。私は言葉を鞭つことによつて自分自身を鞭つて見る。私も私の言葉もこの個性表現の困難な仕事に對して蹉くかも知れない。こゝまで私の伴侶であつた、恐らくは少數の讀者も、絶望して私から離れてしまふかも知れない。私はその時讀者の忍耐の弱さを不滿に思ふよりも私自身の體驗の不十分さを悲しむ外はない。私は言葉の墮落をも尤めまい。かすかな暗示的表出をたよりにして兎に角私は私自身をいひ現はして見よう。

無元から二元に、二元から一元に。保存から整理に、整理から創造に。無努力から努力に、努力から超努力に。これらの各〻の過程の最後のものが今表現せらるべく私の前にある。

個性の緊張は私を拉して外界に突貫せしめる。外界が個性に向つて働きかけない中に、個性が進んで外界に働きかける。即ち個性は外界の刺戟によらず、自己必然の衝動によつて自分の生活を開始する。私はこれを本能的生活(impulsive life)と假稱しよう。

何が私をしてこの衝動に燃え立たせるか。私は知らない。然し人は自然界の中にこの衝動の假の姿を認めることが出來ないだらうか。

地球が造られた始めにはそこに痕跡すら有機物は存在しなかつた。そこに、ある時期に至つて有機物が現はれ出た。それはある科學者が想像するやうに他の星體から隕石に混入して地表に齎されたとしても、少くとも有機物の存在に不適當だつた地球は、いつの間にかその發達にすら適合するやうに變化してゐたのだ。有機物の發生に次いで單細胞の生物が現はれ出た。而して生長と分化とが始まつた。その姿は無機物の結晶に起る生長らしい現象とは多くの點に於て相違してゐた。單細胞生物はやがて複細胞生物となり、一は地上に固着して植物となり、一は移動性を利用して動物となつた。而して動物の中から人類が發生するまでに、その進化の過程には屢〻創造と稱せらるべき現象が續出した。續出したといふよりも凡ての過程は創造から創造への連續といつていゝ。習性及び形態の保存に固着してカリバンのやうに固有の生活にしがみ附かうとする生物をある神祕な力が鞭ちつゝ、分化から分化へと飛躍させて來た。誰れがこの否む可らざる目前の事實に驚異せずにはゐられよう。地上の存在をかく導き來つた大きな力はまた私の個性の核心を造り上げてゐる。私の個性はある已みがたい力に促されて、新たなる存在へ躍進しようとする。その力の本源はいつでも內在的である。內發的である。一つの花から採收した月見草の種子が、同一の土壤に埋められ、同一の環境の下に生ひ出て

も、多樣多趣の形態を取つて萠え出づるといふドフリスの實驗報告は、私の個性の欲求をさながらに飜譯して見せてくれる。若しドフリスの mutation theory が實驗的に否認される時が來たとしても、私の個性は、それは單にドフリスの實驗の誤謬であつて、自然界の誤謬ではないと主張しよう。少くとも地球の上には、意識的であると然らざるとに係はらず、個性認識、個性創造の不思議な力が働いてゐるのだ。ベルグソンのいふ純粹持續に於ける認識と體驗は正しく私の個性が承認するところのものだ。個性の中には物理的の時間を超越した經驗がある。意識のふりかへりなる所謂反省によつては掴めない經驗そのものが認識となつて現はれ出る。そこにはもう自他の區別はない。二元的な對立はない。これこそは本當の生命の赤裸々な表現ではないか。私の個性は永くこの境地への歸還にあこがれてゐたのだ。

例へば大きな水流を私は心に描く。私はその流れが何處に源を發し、何處に流れ去るのかを知らない。然しその河は漾々として無涯際から無涯際へと流れて行く。私はまたその河の兩岸をなす土壤の何物であるかをも知らない。然しそれはこの河が億劫の年所をかけて自己の中から築き上げたものではなからうか。私の個性も亦その河の水の一滴だ。その水の押し流れる力は私を拉して何處かに押し流して行く。ある時に私は岸邊近く流れて行く。而して岸邊との摩擦によつて、私を囲む水も私自身も、中流の水にはおくれがちに流れ下る。更にある時は、人がよく實際の河流で觀察し得るやうに、中流に近い水の速力の爲めに蹴押されて逆流することさへある。かゝる時に私は不幸だ。私は新たなる展望から展望へと進み行くことが出來ない。然し私が一たび河の中流に持ち來されるなら、もう私は極めて安全で且つ自由だ。私は河自身の速力で流れる。河水の凡てを押し流すその力によつて私は走つてゐるのだけれども、私はこの事實をすら感じない。私は自分の欲求の凡てに於て流れ下る。何故ならば河の有する最大の流速は私の欲求そのものに外ならないから。だから私は絶對に自由なのだ。而して兩岸の摩擦の影響を受けねばならぬ流域に近づくに從つて、私は自分の自由が制限せられて來るのを苦々しく感じなければならない。そこに始めて私自身の外に嚴存する運命の手が現はれ出る。私はそこでは否むべからざる宿命の感じにおびえねばならぬ。

河の水は自らの位置を選擇すべき道を知らぬ。然し人間はそれを知つてゐる。而してその選擇を實行することが出來る。それは人間の有する自覺がさせる業である。

人は運命の主であるか奴隷であるか。この問題は屢々私達を惱ましてゐる。この問題の決定的批判なしには、神に對する悟りも、道德律の確定も、科學の基礎も、人間の立場も凡て不安定となるだらう。私もまたこの問題には永く苦しんだ。然し今はかすかながらもその解決に對する曙光を認め得た心持がする。

若し本能的生活が體驗せられたなら、それを體驗した人は必ず人間の意志の絶對自由を經驗したに違ひない。本能の生活は一元的であつてそれを牽制すべき何等の對象もない。それはそれ自身の必然な意志によつて、必然の道を踏み進んで行く。意志の自由とは結局意志そのものの必然性をいふのではないか。意志の欲求を認めなければ、その自由不自由の問題は起らない。意志の欲求を認め、その意志の欲求が必然的であるのを認め、本能的境地に置かれた意志は本能そのものであつて、それを遮る何者もないことを知つたなら、私達のいふ意志の自由はそのまゝ肯定せられなければならぬ。

知的生活以下に於てはさういふ譯には行かない。知的生活は常に外界との調節によつてのみ成り立つ。外界の存在なくしてはこの生活は働くことが出來ない。外界は常に知的生活とは對立の關係にあつて、而かも知的生活の所縁になつてゐる。かくしてその生活は自由であることが出來ない。のみならず知的生活の樣式は必ず過去の反省によつて成り立つといふ事を私は前に申出した。既になし遂げられた生活は　縱令それが本能的生活であつても――なし遂げられた生活である。その形は復と變易することがない。知的生活は實にこの種の固定し終つた生活の認識と省察によつて成り立つのである。その省察の持ち來たす概念がどうして宿命的な色彩を以て色づけられないでゐよう。

だから人の生活は或は宿命的であり或は自由であり得るといはう。その宿命的である場合は、その生活が正しき緊張から退縮した時である。正しい緊張に於て生活される間は個性は必ず絶對的な自由の意識の中にある。だから一層正しくいへば根柢的な人間の生活は自由なる意志によつて導かれ得るのだ。

同時に本能の生活には道徳はない。從つて努力はない。この生活は必至的に自由な生活である。必至には二つの道はない。二つの道のない所には善惡の選擇はない。故にそれは道徳を超越する。自由は sein であつて sollen ではない。二つの道の間に選ぶためにこそ努力は必要とせられるけれども、唯ゝ一筋道を自由に押し進む所に何んの努力の助力が要求されよう。

私は創造の爲めに遊戲する。私は努力しない。從つて努力に成功することも、失敗することもない。成功するにつけて、運命に對して謙遜である必要はない。又失敗するにつけて運命を顧みて辯疏させる必要もない。凡ての責任は――若しそれを強ひていふならば――私の中にある。凡ての報償は私の中にある。

例へばこゝにある田園がある。その中には田疇と、山林と、道路と、家屋とが散在して、人々は各ゝそのある部分を私有し、田園の整理と平安とに勤んでゐる。他人の畑を收穫するものは罪に問はれる。道路を歩まないで山林を徘徊するものは警戒される。それはさうあるべきことだ。何故といへば畑はその所有者の生計のために存在し、道路は旅人の交通のために設けられてゐるのだから。それは私に知的生活の鳥瞰圖を開展する。こゝに人がある。彼れはその田園の外に擴がる未踏の地を探見すべき衝動を感じた。彼れは田園を踏み出して、その荒原に足を入れた。そこには彼れの踏み進むべき道路はない。又掠奪すべき作物はない。誰れがその時彼れの踏み出した脚の一歩について尤めだてをすることが出來るか。彼れが自ら奮つて一歩を未知の世界に踏み出したことそれ自身が善といへば善だ。彼れの脚は道徳の世界ならざる世界を踏んでゐるのだ。それは私に本能的生活の面影をかすかながら髣髴させる。

黑雲を劈いて天の一角から一角に流れて行く電光の姿はまた私に本能の奔流の力強さと鋭さを考へさせる。力ある弧狀を描いて走るその電光のこゝかしこに本流から分岐して大樹の枝のやうに目的點に星馳する支流を見ることがあるだらう。あの支流の末は往々にして、黑雲に呑まれて消え失せてしまふ。人間の本能的生活の中にも屢ゝかゝる現象は起らないだらうか。ある人が純粹に本能的の動向によつて動く時、過つて本能そのものの歩みよりも更に急がうとする。而して遂に本能の主潮から逸して、自滅に導く迷路の上を驀地に馳せ進む。而して遂に何者でもあらぬべく消え去つてしまふ。それは悲壯な自己矛盾である。彼

れの創造的衝動が彼れを空しく自滅せしめる。知的生活の世界からこれを眺めると、一つの愚かな蟲戲として眼に映ずるかも知れない。たしかに合理的ではない。又かゝる現象が知的生活の渦中に發見された場合には道德的ではない。然しその生活を生活した當體なる一つの個性に取つては、善惡、合理非合理の閾葛藤を挿むべき餘地はない。かくばかり緊張した生活が、自己滿足を以て生活された、それがあるばかりだ。知的生活を基調として生活し、その生活の基準に慣らされた私達は動ともするとこの基準のみを以て凡ての現象を理智的に眺めてゐはしないか。而して知的生活を一歩踏み出した所に、更に緊張した純眞な生活が伏在するのを見落すやうなことはないか。若しさうした態度にあるならば、それはゆゝしき誤謬といはねばならぬ。人間の創造的生活はその瞬間に停止してしまふからだ。この本能的に對しておぼろげながらも肯定の出來ない社會は、誰の眼にも慘な社會だといひ得る外の何者でもあり得ない。

自由なる創造の世界は遊戲の世界であり、趣味の世界であり、無目的の世界である。努力を必要としないが故に遊戲といつたのである。義務と必要としないが故に趣味といつたのである。生活そのものが目的に達する手段でにないが故に無目的といつたのである。放漫な、回顧的な生活にのみ困絆されてゐる地上の生活に於て、私はその最も純粹に近い現はれを、相愛の極、完全な愛人の間に結ばれる抱擁に於て見出すことが出來ると思ふ。彼等の床に近づく前に道徳知識の世界は影を隠してしまふ。二人の男女は全く愛の本能の化身となる。その時彼等は彼等の隣人を顧みない、彼等の生死を慮らない。二人は單に愛のしるしを與へることと受取ることとにのみ燃える。而して忘我的な、苦痛にまでの有頂天、それは極度に緊張された愛の遊戲である。その外に何者でもない。而かもその間に、人間のなし得る創造としては神秘な絶大な創造が成就されてゐるのだ。ホイットマンが「アダムの子等」に於て、性慾を歌ひ、大自然の[illegible]々しい裸かな、姿を髣髴させるやうな瞬間を讃美したことに何んの不思議があらう。而してエマソンがその撤回を強要した時、彼は毅然として耳を傾けなかつた理由が如何に明白であるよ。内にまで押し進んでも更に悔いと悲しみとを齎さない戀こそは眞の戀である。その戀の外には比べるもののなく美しい。私は又本能的生活の素朴に近い現はれた無邪氣な小兒の熱中した遊戲の中に見出すことが出來ると思ふ。彼れは正しく時間からも外聞からも超越する。彼れには遊戲そのものの外に何等の目的もない。彼れの表面的な目的は縱令一個の紙箱を造ることにありとするも、その製作に熱中してゐる瞬間には、紙箱を造る手段そのものの中に目的は吸ひ込まれてしまふ。そこには何等の努力も義務も附纏してはゐない。あの純一無雜な生命の流露を見守つてゐると私は涙がにじみ出るほど羨ましい。私の生活があゝいふ態度によつて導かれる瞬間が偶にあつたならば、私は甫めて眞の創造を成就することが出來るであらうものを。

私は本能的生活の記述を蔑ろにして、あまり多くをその讃美の爲めに空費したらうか。私は假りにそれを許してもらひたい。何故なら、私は本能的生活を知的生活の上位に置かうと思ふからだ。誰れでも私のいふ知的生活た智性的生活の上におかぬものはなからう。然し本能的生活を知的生活の上におかうとする場合になると、多くの人々はそこに躊躇を感じはしないだらうか。現在人類の生活が知的生活をその基調としてゐるといふ點に於て、その

躊躇は無理のないことだともいへる。單に功利的な立場からのみ考へればその躊躇は正當なことだともいへる。然し凡ての生存は、それが本能の及ぶだけ純粹なる表現である場合に最も眞であるといふ大事な要件が許されるならば、本能的生活は私にとつて知的生活よりもより價値ある生活である。若し價値をもつてそれを定めるのが不當ならば、より尊い生活である。而かも私はこの生活の内容を的確に發想することが出來ない。（それはこの生活が理智的表現を超越してゐるが故でもある）その場合私は比喩と讃美とによつてわづかにこの尊い生活を偲ぶより外に道がないだらう。

十三

十四

本能といふ意味を用ひるに當つて私は多少の誤解を恐れないではない。この言葉は殊に科學によつてその正しい意味から墮落させられてゐる。といふよりは、科學が素朴的に用ひたこの言葉を俗衆が徹底的に歪め穢してしまつた。然し今はそれが固有の意味にまで引き上げられなければならない。ベルグソンはこの言葉をその正しき意味に於て用ひ始めた。ラッセル（私は氏の文章を一度も讀んだことがないけれども）も亦ベルグソンを繼承して、この言葉の正當な使用を心懸けてゐるやうに見える。

本能とは大自然の持つてゐる意志を指すものとも考へることが出來る。野獸にはこの力が野獸なりに赤裸々に現はれてゐる。自然科學はその現はれを觀察して、詳細にそれを記述した。而してそれが人類の活動の中にも看取せられるのを附け加へた。この記述はいふまでもなく明らかな事實である。然しその事實から、人類の活動の全部が野獸に現はれた本能だけから成り立つとは科學は結論してゐないのだ。然るに人は往々にして科學の記述を逆用しようとする。これは單なる誤解とのみ見て過すことが出來ないと私は思ふ。

人間は人間である。野獸ではない。野獸が無自覺に近い心でなす所を人は十分なる自覺をもつてなしてゐるのである。若し人がその自覺を逆用して、肉にまで至る愛の要求のない場合に、單に外觀的に觀察された野獸の本能に基つたならば、それは明らかに人間の有する本能の全體的な活動といふことが出來ない。同時に、人間の本能の中から野獸と共通な部分を理智的に引き離して、純靈といふやうな境地を捏造しようとするのは、明らかに本能に對する謂れのない迫害である。本能は分解とは兩立することが出來ない。本能はいつでもその全體に於て働かねばならぬ。人間の本能——野獸の本能でもなく又天使の本能でもない——もその本能の全體に於て働かねばならぬ。そこからのみ、若し生れるならば、人間以上の新らしい存在への本能は生れ出るだらう。本能を現實のきびしさに於て受取らないで、ローマンティックに考へる所に純靈の世界といふ空虛な空中樓閣が築き上げられる。肉と靈とを峻別し得るものの如く考へて、その一方に偏倚するのを最上の生活と決めこむやうな禁慾主義の義務律

法はそこに胚胎されるのではないか。又本能を現實のきびしさに於て受取らないで、センティメンタルに考へる所に肉慾の世界といふ墮落した人生觀が假想される。この野獸の過去にまでの歸還は、また本能の分裂が結果するところのもので、人間を人間としての莊嚴の座から引きおろすものではないか。私の生活が何等かの意味に於てその緊張度を失ひ、現實への安立から知らず〳〵未來か過去かへ遠ざかる時、必ずかゝる本能の分裂がその結果として現はれ出るのを私はよく知つてゐる。私はその境地にあつて必ず何等かの不滿を感ずる。而して一歩を誤れば、その不滿を醫さんが爲めに、益々本能の分裂に向つて猪突する。それは危い。その時私は明らかに自己を葬るべき墓穴を掘つてゐるのだ。それを何人も救つてくれることは出來ない。本當にそれを救ひ得るのは私自身のみだ。

私の意味する本能を逆用して、自滅の方に進むものがあるならば、私はこの上更にいふべき何者をも持たぬだらう。本當をいへば、誤解を恐れるなら、私は始めから何事をもいはぬがいゝのだ、私は私の柄にもない不遜な老婆親切をもうやめねばならぬ。

十五

人間は人間だ。野獸ではない。天使でもない。人間には人間が大自然から分與された本能があると私はいつた。それならその本能とはどんなものであるかと反問されるだらう。私は當然それに答へるべき責任を持つてゐる。私は貧しいなりにその責任を果さう。私の小さな體驗が私に書き取らせるものをこゝに披瀝して見よう。

人間によつて切り取られた本能の流れを私は今まで漫然とたゞ本能と呼んでゐた。それは一面に許さるべきことである。人間の有する本能も亦大自然の本能の一部なのだから。然しこゝまで私の考察を書き進めて來ると、私はそれを特殊な名によつて呼ぶのを便利とする。

人間によつて切り取られた本能――それを人は一般に愛と呼ばないだらうか。老子が道の道とすべきは常の道にあらずと謂つたその道も或はこの本能を意味するのかも知れない。孔子が忠信のみといつたその忠信も或はこれを意味するのかも知れない。釋尊の菩提心、ヨハネのロゴス、その他無數の名稱はこの本能を意味すべく構出されたものであるかも知れない。

然し私は自分の便宜の爲めに假りにそれを愛と名づける。愛には、本能と同じやうに既に種種な不純な屬性的意味が膠着してゐるけれども、多くの名稱の中で最も專門的でなく、且つ比較的に普遍的な內容をその言葉は含んでゐるやうだ。愛といへば人は常識的にそれが何を現はすかを朧ろげながらに知つてゐる。然し概念的に物事を考へる習慣に縛られてゐる私達は、愛といふ重大な問題を考察する時にも、極めて習慣的な外面的な概念に捕へられて、その眞相とは往々にして對角線的にかけへだたつた結論に達してゐることはないだらうか。

人は愛を考察する場合、他の場合と同じく、愛の外面的表現を觀察することから出發して、その本質を見窮めようと試みないだらうか。ポーロはその書翰の中に愛は「惜みなく與へ」云々といつた、それは愛の外面的表現を遺憾なくいひ現はした言葉だ。愛する者とは與へる者の事である。彼れは自己の所有から與へ得る限りを與へんとする。彼れからは今まであつたものが失はれて、見た所貧しくはなるけれども、その爲めには彼れは憂へないのみか、却つて欣喜

し雀躍する。これは疑ひもなく愛の存する處には何處にも觀察される現象である。實際愛するものの心理と行爲との特徴は放射することであり與へることだ。人はこの現象の觀察から出發して、愛の本質を歸納しようとする。而して直ちに、愛とは與へる本能であり放射するエネルギーであるとする。多くの人は省察をここに限り、愛の體驗を十分に嚙みしめて見ることをせずに、逸早くこの觀念を受け入れ、その上に各自の人生觀を築く。この觀念は私達の道德の大黑柱として認められる。愛他主義の倫理觀が構成される。而して人間生活に於ける最も崇高な行爲として犧牲とか獻身とかいふ德行が高調される。而して更にこの觀念が利己主義の急所を衝くべき最も銳利な武器として考へられる。

さう思はれることを私は一概に排斥するものではない。愛が知的生活に持ち來たされた場合には、さう結論されるのは自然なことだ。知的生活にあつては愛は理智的にのみ考察されるが故に、それは決して生活の內部にあつて働くまゝの姿では認められない。愛は生活から假りに切り放されて、一つの固定的な現象としてのみ觀察される。謂はゞ理智が愛の周圍――それはいかに綿密であらうとも――のみを廻轉し圍繞してゐる。理智的にその結論が如何に周匝で正確であらうとも、それが果して本能なる愛の本體を把握し得た結論といふことが出來るだらうか。

本能を把握するためには、本能をその純粹な形に於て理解するためには、本能的生活中に把握される外に道はない。體驗のみがそれを可能にする。私の體驗は、縱しそれが貧弱なものであらうとも――愛の本質を與へる本能として感ずることが出來ない。私の經驗が私に告げる所によれば、愛は與へる本能である代りに奪ふ本能であり、放射するエネルギーである代りに吸引するエネルギーである。

他のためにする行爲を利他主義といひ、己れのためにする行爲を利己主義といふのなら、その用語は正當である。何故ならば利するといふ言葉は行爲を表現すべき言葉だからである。然し倫理學が定義するやうに、他のためにせんとする衝動若しくは本能を認めて、これを利他主義といひ、己れのためにせんとする衝動若しくは本能を主張してこれを利己主義といふのなら、その用語は正鵠を失してゐる。それは當然愛他主義愛己主義といふ言葉で書き改められなければならないものだ。利と愛との兩語が自明的に示すが如く、利は行爲或は結果を現はす言葉で、愛は動機或は原因を現はす言葉であるからだ。この用語の錯誤が偶ゝ愛の本質と作用とに對する混同を暴露してはゐないだらうか。即ち人は愛の作用を見て直ちにその本質を揣摩し、これに對して本質にのみ名づくべき名稱を與へてゐるのではないか。又人は愛が他に働くの動向を愛他主義と呼び、己れに働く動向を利己主義と呼ぶならはしを持つてゐる。これも偶ゝ人が一種の先入僻見を以て愛の働き方を見てゐる證據にはならないだらうか。二つの言葉の中、物質的な聯想の附帶する言葉を己れへの場合に用ひ、精神的な聯想を起す言葉を他への場合に用ひてゐるのは、恐らく愛が他を益する時その作用を完うし得るといふ既定の觀念に制せられてゐるのを現はしてゐるやうだ。この愛の本質と現象との混淆から、私達の理解は思ひもよらぬ迷宮に迷ひ込むだらう。

十六

愛を傍觀してゐずに、實感から滑りこんで、これまで認められてゐた觀念が正しいか否かを檢證して見よう。

私は私自身を愛してゐるか。私は躊躇することなく愛してゐると答へることが出來る。

私は他を愛してゐるか。これに肯定的な答へを送るためには、私はある條件と限度とを附することを必要としなければならぬ。他が私と何等かの點で交渉を持つにあらざれば、私は他を愛することが出來ない。切實にいふと、私は己れに對してこの愛を感ずるが故にのみ、己れに交渉を持つ他を愛することが出來るのだ。私が愛すべき己れの存在を見失つた時、どうして他との交渉を持ち得よう。而して交渉なき他にどうして私の愛が働き得よう。だから更に切實にいふと、他の何等かの狀態に於て私の中に攝取された時にのみ、私は他を愛してゐるのだ。然し己れの中に攝取された他は、本當をいふともう他ではない。明らかに己れの一部分だ。だから私が他を愛してゐる場合も、本質的にいへば他を愛することに於て己れを愛してゐるのだ。而して己れをのみだ。

但し己れを愛するとは何事を示すのであらう。私は己れを愛してゐる、そこには聊かの虚飾もなく誇張もない。又それは傲慢な云ひ分ともすることは出來ない。唯ゝあるがまゝをあるがまゝに申出たに過ぎない。然し私が私自身をいかに深くいかによく愛してゐるかを省察すると問題は自ら別になる。若し私の考へる所が謬つてゐないなら、これまで一般に認められてゐた利己主義なるものは、極めて功利的な、物質的な、外面的な立場からのみ考察されてはゐなかつたらうか。即ち生物學の自己保存の原則を極めて安價に査定して、それを愛己の本能と結び付けたものではなかつたらうか。「生物發達の狀態を研究して見ると、利己主義は常に利他主義以上の力を以て働いてゐる。それを認めない譯には行かない」といつたスペンサーの生物一般に對しての漫然たる主張が、何んといつても利己主義の理解に關する基調になつてゐはしないだらうか。その主張が全事實の一部をなすものだといふことを私も認めない譯ではない。然しそれだけで滿足し切ることを、私の本能の要求は明らかに拒んでゐる。私の生活動向の中には、もつと深くもつとよく己れを愛したい欲求が十二分に潛んでゐることに氣づくのだ。私は明らかに自己の保存が保障されただけでは飽き足らない。進んで自己を押し擴げ、自己を充實しようとし、而して意識的にせよ、無意識的にせよ、休む時なくその願望に驅り立てられてゐる。この切實な欲求が、かの功利的な利己主義と同一水準におかれることを私は斥けなければならない。それは愛己主義の意味を根本的に破壞しようとする恐るべき傾向であるからである。私の愛己的本能が若し自己保存にのみあるならば、それは自己の平安を希求することで、知的生活に於ける欲求の一形式にしか過ぎない。愛は本能である。かくの如き境地に滿足する譯がない。私の愛は私の中にあつて最上の生長と完成とを欲する。私の愛は私自身の外に他の對象を求めはしない。私の個性はかくして生長と完成との道程に急ぐ。然らば私はどうしてその生長と完成とを成就するか。それは奪ふことによつてである。愛の表現は惜みなく與へるだらう。然し愛の本體は惜みなく奪ふものだ。

アミイバが觸指を出して身外の食餌を抱へこみ、やがてそれを自己の蛋白素中に同化し終るやうに、私の個性は絕えず外界を愛で同化することによつてのみ生長し完成してゆく。外界に個性の貯藏物を投げ與へることによつて完成するものではない。例へば私が一羽のカナリヤを愛するとしよう。私はその愛の故に、美しい籠と、新鮮な食餌と、やむ時なき愛撫

とを與へるだらう。人は、私のこの愛の外面の現象を見て、私の愛の本質は與へることに於てのみ成り立つと速斷することはないだらうか。然しその推定は根柢的に的をはづれた悲しむべき誤謬なのだ。私がその小鳥を愛すれば愛する程、小鳥はより多く私に攝取されて、私の生活と不可避的に同化してしまふのだ。唯一つまでも分離して見えるのは、その外面的な形態の關係だけである。小鳥のしば鳴きに、私は小鳥と共に或は喜び或は悲しむ。その時喜びなり悲しみなりは小鳥のものであると共に、私にとつては私自身のものだ。私が小鳥を愛すれば愛するほど、小鳥はより多く私そのものである。私にとつては小鳥はもう私以外の存在ではない。小鳥ではない。小鳥は私だ。私が小鳥を活きるのだ。(The little bird is myself, and I live a bird.)" I live a bird." …英語にはこの適切な愛の發想法がある。若しこの表現をうなづく人があつたら、その人は確かに私の意味しようとする所をうなづいてくれるだらう。私は小鳥を生きるのだ。だから私は美しい籠と、新鮮な食餌と、やむ時なき愛撫とを外物に惠み與へた覺えはない。私は明らかにそれらのものを私自身に與へてゐるのだ。私は小鳥とその所有物の凡てを殘す所なく外界から私の個性へ奪ひ取つてゐるのだ。見よ愛は放射するエネルギーでもなければ與へる本能でもない。愛は掠奪する烈しい力だ。與へると見るのは、愛者被愛者に直接の交渉のない第三者が、愛するものの愛の表現を極めて外面的に觀察した時の結論に過ぎないのを知るだらう。

かくて愛の本能に從つて、私は他を私の中に同化し、他に愛せらるゝことによつて、私は他の中に投入し、私と他とは巻絹の經緯の如く、そこに自ら美しい生活の紋様を織りなして行くのだ。私の個性がよりよく、より深くなり行くに從つて、よりよき外界はより深く私の個性の中に取り込まれる。生活全體の實績はかくの如くして始めて成就する。そこには犧牲もない。又義務もない。唯感謝すべき特權と、ほゝ笑ましい飽滿とがあるばかりだ。

十七

目を擧げて見るもの、それは凡てが神祕である。私の心が平生の立場からふと視角をかへてゐる時、私の目前に開かれるものはたゞ驚異すべき神祕があるばかりだ。然しながら現實の世界に執着を置き切つた私には、かゝる神祕は神祕でありながらあたり前の事實だ。私は小兒のやうに常に驚異の眼を見張つてゐることは出來なくなつた。その現實的な、散文的な私にも、愛の働きのみは近づきがたき神祕な現はれとして感ぜられる。

愛は私の個性を哺くむために外界から奪ひ取つて來る。けれどもその爲めに外界は寸毫も失はれることがない。例へば私は愛によつてカナリヤを私の衷に奪ひ取る。けれどもカナリヤは奪はるゝことによつて幸福にはなるとも不幸福にはならない。かの小鳥は少くとも物質的に美しい籠(それは醜い籠にあるよりも確かにいゝことだらう)と新鮮な食餌とを以て富ませられる。物質の法則を超越したこの神祕は私を存分に驚かせ感傷的にさへする。愛といふ世界は何んといふいゝ世界だらう。そこでは白晝に不思議な魔術が絶えず行はれてゐる。それを見守ることによつて私は凡ての他の神祕を忘れようとさへする。私はこの贈物一つを持ち得ることによつて、凡ての存在にしみ〴〵とした感謝の念を持たざるを得ない。

愛は與へる本能といふのだと主張する人は、恐らく私のこの揚言を聞いて嗤ひ出すだらう。

お前のいふことは夙の昔に私がいひ張つた所だ、愛は與へることによつて二倍する、その不思議を知らないのか。愛を與へるものは與へるが故に富み、愛を受けるものは受けるが故に富む。地球が古いほど古いこの眞理をお前は今まで知らないでゐたのか、と。

私はそれを知らないではない。然し私はその提言には一つの條件をおく必要を感ずる。愛が與へることによつて二倍するといふ現象は愛するものと愛せられたるものとの間に愛が相互的に成り立つた場合に限るのだ。若しその愛が完全に受取られた場合には、その愛の惠みは確かに二倍するだらう。然し愛せられるものが愛するもののあることを知らなかつた時はどうだ。或はそれを斥けた時はどうだ。それでも愛は二倍されてゐる事と感ずることが出來るか。それは一種感情的な自觀の假想に過ぎないのではないか。或は人工的な神祕主義に強ひて一般的な考へを結び付けて考へる結果に過ぎないのではないか。

若し愛が片務的に動いた場合に、愛するといふことを恩惠を施すといふ如く考へてゐる人には、愛するといふ行爲に一種の自己滿足を感ずるが故に、愛する人の受ける心の豐さは二倍になると主張するなら、それは愛の作用を沒我的でなければならぬと強言する愛他主義者としてはあるまじきことだといはねばならぬ。その時その人は愛することによつて明らかに報酬を得てゐるからである。報酬を得て（それが人からであらうと、神からであらうと）若しくは報酬を得ることを期待し得てする仕事が何んで愛他主義であらうぞ。愛するのは自分のためではなく、他人のためだと主張する人は、先づこの邊の心持を偏見なく省察して見る必要があると思ふ。彼等はよく功利主義々々々々といつて報酬を目あてにする行爲を蛇蝎の如く忌み惡んでゐる。然るに彼等自身の行爲や心持にもさうした傾向は見られないだらうか。その報酬に對する心持が違ふ。それは比べものにもならぬ程凡下の功利主義より高尚だといはうか。私にはそんな心持は通じない。高尚だといへばいふ程それがうそに見える。非常に巧みな、而して狡猾な假面の下に隱れた功利主義としか思はれない。物質的でないにせよ、純粹に精神的であるにせよ、（そんな表面な區別は私には本當は通用しないが、假りにある人々の主張するやうな言葉遣ひにならつて）何等かの報酬が想像されてゐる行爲に何んの獻身ぞ、何んの犧牲ぞ。若し僞善といひ得べくんば、これこそ大それた忌はしい僞善ではないか。何故なら當然期待さるべき功利的な結果を、彼等は知らぬ顏に少しも功利的でないものの如くに主張するからだ。

或はいふかも知れない。愛するといふことは人間内部の至上命令だ。愛する時人は水が低きに流れるが如く愛する。そこには何等報酬の豫想などはない。その結果がどうであらうとも愛する者は愛するのだ。これを以てかの報酬を目的にして行爲を起す功利主義者と同一視するのは、人の心の絶妙な働きを知らぬものだと。私はそれを詭辯だと思ふ。一度愛した經驗を有するものは、愛した結果が何んであるかを知つてゐる、それは不可避的に何等かの意味の獲得だ。一度この經驗を有つたものは、再び自分の心の働きを利他主義などとは呼ばない筈だ。他に殉ずる心などとはいはない筈だ。さういふことはあまり勿體ないことである。

愛は自己への獲得である。愛は惜みなく奪ふものだ。愛せられるものは奪はれてゐるが不思議なことには何物も奪はれてはゐない。然し愛するものは必ず奪つてゐる。ダンテが少年の時ビヤトリスを見て、世の常ならぬ愛を經驗

した。その後彼れは長くビヤトリスを見ることがなかつた。而してたゞ一度あつた。それはフロレンスの街上に於てだつた。ビヤトリスは一人の女伴れと共に紅い花をもつてゐた。而してダンテの挨拶に對してしとやかな會釋を返してくれた。その後ビヤトリスは他に嫁いだ。ダンテはその婚姻の席に列つて激情のあまり卒倒した。ダンテはその時以後彼れの心の奧の愛人を見ることがなかつた。而してビヤトリスは凡ての美しいものの運命に似合はしく、若くしてこの世を去つた。文獻によればビヤトリスは切なるダンテの熱愛に觸れることなくして世を終つたらしい。ダンテの愛はビヤトリスと相互的に通ひ合はなかつた。(愛は相互的にのみ成り立つとのみ考へる人はこゝに注意してほしい)ダンテだけが、祕めた心の中に彼女を愛した。而かも彼れは空しかつたか。ダンテはいかにビヤトリスから奪つたことぞ。彼れは一生の間ビヤトリスを浪費してなほ餘る程この愛人から奪つてゐたではないか。彼れの生活は淋しかつた。骯髒であつた。然しながら強く愛したことのない人々の淋しさと比べて見たならばそれは何んといふ相違だらう。ダンテはその愛の獲得の飽滿さを自分一人では抱へきれずに、「新生」として「聖曲」として心外に吐き出した。私達はダンテのこの飽滿からの餘剩にいかに多くの價値を置くことぞ。ホイットマンも嘗てその可憐な即興詩の中に「自分は嘗て愛した。その愛は酬いられなかつた。私の愛は無益に終つたらうか。否。私はそれによつて詩を生んだ」と歌つてゐる。

見よ愛がいかに奪ふかを。愛は個性の飽滿と自由とを成就することにのみ全力を盡してゐるのだ。愛は嘗て義務を知らない。犧牲を知らない。獻身を知らない。奪はれるものが奪はれることをゆるしつゝあらうともあるまいとも、それらに煩はされることなく愛は奪ふ。若し愛が相互的に働く場合には、私達は爭つて互に互を奪ひ合ふ。決して與へ合ふのではない。その結果私達は互に何物をも失ふことがなく互に獲得する。人が通常いふ愛するものは二倍の惠みを得るとはこれをいふのだ。私は豫期するとほりの獲得に對して歡喜し、有頂天になる。而して明らかにその獲得に對して感激し感謝する。その感激と感謝とは僞善でも何んでもない。あるべかりしものがあつたについての人の有し得る自らの情である。愛の感激……正しくいふとこの外に私の生命はない。私は明らかに他を愛することによつて凡てを自己に取り入れてゐるのを承認する。若し人が私を利己主義者と呼ばうとならば、私はさう呼ばれるのを妨げない。若し必要ならば愛他的利己主義者と呼んでもかまはない。苟くも私が自發的に愛した場合なら、私は必ず自分に奪つてゐるのを知つてゐるからだ。

この求心的な容赦なき愛の作用こそは、凡ての生物を互に結び付けさせた因子ではないか。野獸を見よ。如何に彼等の愛の作用(相奪ふ狀)が端的に現はれてゐるかを。それが人間に至つて全く反對の方向を取るといふのか。そんな事があり得べきでけない。たゞ人間はnicetyの假面の下に自分自らを瞞着しようとしてゐるのだ。而して人間はたしかにこの僞瞞の天罰を被つてゐる。それは野獸にはない、人間にのみ見る僞善の出現だ。何故愛をその根柢的な本質に於てのみ考へることが惡いのだ。それをその本質に於て考へることなしには人間の生活には遂に本當の進歩創作は持ち來されないであらう。

知的生活の動向はいつでも本能を墮落させ、それを第二義的な狀態に於てのみ利用する。知的生活の要求するものは平安無事である。こ

の生活にあつては、愛の本質よりもその現はれが必要である。内部の要求はさもあらばあれ、互に與へ合ふ事さへ行れば、それで平安は保たれてゆく。それ故に倫理道徳は義務と獻身との徳を高調する。人は遂にこの固定的な概念にあざむかれる。而して愛のない所に、愛が行ふのと同じ行をする。即ち愛の極印なき所有物を外界に向つて恥ぢることもなく放射する。けれども愛の極印のない所有物は、一度外界に放射されると、またとはその人に返つて來ない。その時彼れにとつては行爲の結果に對する苦い後味が殘る。その後味を胡魔化すために、彼れは人の爲めに社會の爲めに義務を果し、獻身の行をしたといふ謙めの心になる。而してそこに誇るべからざる誇りを感じようとする。社會はかくの如き人の動機の如何は顧慮することなく、直ちに彼れに與へるのに社會人類の恩人の名を以てする。それには知的生活にあつては奬勵的にさうするのが便利だからだ。そんな人はそんな事は歯牙にかけるに足らないことのやうに云ひもし思ひもしながら、衷心の滿ち足らなさから、知らず〳〵それを歯牙にかけてゐる。かくてその人はその適用から來る冥罰を表面的な概念と社會の賞讃によつて塗抹し、社會はその人の表面的な行爲によつて平安をつないで行く。かくてその結果は生命と關係のない物質的な塵芥となつて、生活の路上に堆く堆積する。その堆積の餘燼は何んであらう。それは誰れでも察し得る如く人間そのものの死ではないか。

十八

愛は個性の生長と自由とである。さう お前はいひ張らうとするが、と又ある人は私にいふだらう。この世の中には他の爲めに自滅を敢てする例がいくらでもあるがそれをどう見ようとするのか。人間までに發達しない動物の中にも相互扶助の現象は見られるではないか。お前の愛己主義はそれをどう解釋する積りなのか。その場合にもお前は絶對愛他の現象のあることを否定しようとするのか。自己を滅してお前は何ものを自己に獲得しようとするのだ。とある人は私に問ひ詰めるかも知れない。科學的な立場から愛を說かうとする愛己主義者は、自己保存の一變態と見るべき種族保存の本能なるものによつてこの難題に當らうとしてゐる。然しそれは愛他主義者を存分に滿足させないやうに、又私をも滿足させる解釋ではない。私はもつと違つた視角からこの現象を見なければならぬ。

愛がその飽くことなき掠奪の手を擴げる烈しさは、習慣的に、なまやさしいものとのみ愛を考へ馴れてゐる人の想像し得る所ではない。本能といふ言葉が誤解をまねき易い屬性によつて煩はされてゐるやうに、愛といふ言葉にも多くの歪んだ意味が與へられてゐる。通常愛といへば、すぐれて優しい女性的な感情として見られてゐはしないか。好んで愛を語る人は、頭の軟らかなセンティメンタリストと見られるおそれがありはしまいか。それは然し愛の本質とは極めてかけ離れた考へ方から起つた危險な謬僻だといはなければならぬ。愛は優しい心に宿り易くはある。然し愛そのものは優しいものではない。それは烈しい容赦のない力だ。それが人間の生活に赤裸のまゝ現はれては、却つて生活の調子を崩してしまひはしないかと思はれるほど容赦のない烈しい力だ。思へ、たゞ假初めの戀にも愛人の頰はこけるではないか。たゞいさゝかの子の病にも、その母の眼はくぼむではないか。

個性はその生長と自由とのために、愛によつて外界から奪ひ得るものの凡てを奪ひ取らう

とする。愛は手近い所からその事業を始めて、右往左往に戰利品を運び歸る。個性が強烈であればある程、愛の活動も亦目ざましい。若し私が愛するものを凡て奪ひ取り、愛せられるものが私を凡て奪ひ取るに至れば、その時に二人は一人だ。そこにはもう奪ふべき何物もなく奪はるべき何物もない。

だからその場合彼れが死ぬことは私が死ぬことだ。殉死とか情死とかはかくの如くして極めて自然であり得ることだ。然し二人の愛が互に完全に奪ひ合はないでゐる場合でも、若し私の愛が強烈に働くことが出來れば、私の生長は益〻擴張する。而してある世界が——時間と空間をさへ蔑無するほどの擴がりを持つたある世界が——個性の中にしつかりと建立される。而してその世界の持つ飽くことなき擴充性が、これまでの私の習慣を破り、生活を變へ、遂には弱い、はかない私の肉體を打壞するのだ。破裂させてしまふのだ。

難者のいふ自滅とは畢竟何をさすのだらう。それは單に肉體の亡滅を指すに過ぎないではないか。私達は人間である。人間は必ずいつか死ぬ。何時か肉體が亡びてしまふ。それを避けることはどうしても出來ない。然し難者が、私が愛したが故に死なねばならぬ場合、私の個性の生長と自由とが失はれてゐると考へるのは間違つてゐる。それは個性の亡失ではない。肉體の破滅を伴ふまで生長し自由になつた個性の擴充を指してゐるのだ。愛なきが故に、個性の充實を得切らずに定命なるものを繋いで死なねばならぬ人がある。愛あるが故に、個性の充實を完うして時ならざるに死ぬ人がある。然しながら所謂定命の死、不時の死とは誰れが完全に決めることが出來るのだ。愛が完うせられた時に死ぬ、即ち個性がその擴充性をなし遂げてなほ餘りある時に肉體を破る、それを定命の死といはないで何處に正しい定命の死があらう。愛したものの死ほど心安い潔い死はない。その他の死は凡て苦痛だ。それは他の爲めに自滅するのではない。自滅するものの個性は死の瞬間に最上の生長に達してゐるのだ。即ち人間として奪ひ得る凡てのものを奪ひ取つてゐるのだ。個性が充實して他に何んの望むもののなき境地を人は假りに沒我といふに過ぎぬ。

この事實を思ふにつけて、いつでも私に深い感銘を與へるものは、基督の短い地上生活とその死である。無學な漁夫と稅吏と娼婦とに圍繞された、人眼に遠いその三十三年の生涯にあつて、彼れは比類なく深く善い愛の所有者であり使役者であつた。四十日を荒野に斷食して過ごした時、彼れは貧民救濟と、地上王國の建設と、奇蹟的能力の修得を以ていざなはれた。然し彼れは純粹な愛の事業の外には何物をも擇ばなかつた。彼れは知的生活の爲めには、即ち地上の平安の爲めには何事をも敢てなさなかつた。彼れはその母や弟とは不和になつた。多くの子をその父から反かせた。ユダヤ國を攪亂するおそれによつてその愛國者を怒らせた。では彼れは何をしたか。彼れはその無上愛によつて三世に亙つての人類を自己の内に攝取してしまつた。それだけが彼れの已むに已まれぬ事業だつたのだ。彼れが與へて與へてやまなかつた事實は、彼れが如何に個性の擴充に滿足し、自己に與へることを喜びとしたかを證據立てるものである。「汝自身の如く隣人を愛せよ」といつたのは彼れではなかつたか。彼れは確かに自己を愛するその法悅をしみ〴〵と知つてゐた最上一人といふことが出來る。彼れに若し、その愛によつて衆生を攝取し盡したといふ意識がなかつたなら、どうしてあの甘美の生活を破壞にのみ圍まれて晏如たることが出來

よう。而して彼れは「汝等も亦我にならへ」といつてゐる。それはこの境界が基督自身のものではなく、私達凡下の衆も亦同じ道を歩み得ることを、彼れ自身が證言してくれたのだ。

やがて基督が肉體的に滅びねばならぬ時が來た。彼れは苦しんだ。それに何んの不思議があらう。彼れは自分の愛の對象を、眼もて見、耳もて聞き、手もて觸れ得なくなるのを苦しんだに違ひない。又彼れの愛の對象が、彼れほどに愛の力を理解し得ないのを苦しんだに違ひない。然し最も彼れを苦しめたものは、彼れの愛がその掠奪の事業を完全に成就したか否かを迷つた瞬間にあつたであらう。然し遂に最後の安心は來た。「父よ（父よは愛よである）我れわが身を汝に委ぬ。」而して本當に神々しく、その辛酸に痩せた肉體を、最上の滿足の爲めに脚の下に踏み躙つた。

基督の生涯の何處に義務があり、犧牲があるのだらう。人は屢くいふ、基督はあらゆるものを犧牲に供し、救世主たるの義務の故に、凡ての迫害と窮乏とを甘受し、十字架の死をさへ敢て畢へ忍んだ。だからお前達は基督の受難によつて罪からあがなはれたのだ。お前達も亦彼れにならつて、犧牲獻身の生活を送らなければならないと。私は私一個として基督が私達に遺して行つた生活をかく考へることはどうしても出來ない。基督は與へることを苦痛とするやうな愛の貧乏人では決してなかつたのだ。基督は私達を既に彼れの中に奪つてしまつたのだ。彼れは私の耳に囁いていふ「基督の愛は世の凡ての高きもの、清きもの、美しきものを攝取し盡した。惡しきもの、醜きものも又私に攝取されて淨化した。眼を開いて基督の所有の如何に豐富であるかを見るがいゝ。基督が與へ且つ施したと見えるものすべては、實は凡て基督自身に與へ施してゐたのだ。基督は與へざる一つのものもない。而かも何物をも失はず、凡てのものを得た。この大歡喜にお前も亦與かるがいゝ。基督のお前に要求するところはただこの一つの大事のみだ。お前が縱令凡てを施し與へようとも永遠の生命を失つてゐたらそれが何になる。お前は僞善者を知つてゐるか。それは犧牲獻身といふ美名をむさぼつて、自己に同化し切らない外物に對して浪費する人をいふのだ。自己に同化し切つたものに施すのは卽ち自己に施すのだといふ、世にも感謝すべき事實を認め得ない程に、愛の隱家を見失つてしまつた人のことだ。浪費の後の苦々しい後味を、強ひて笑ひにまぎらすその歪んだ顏付きを見るがいゝ。それは悲しい錯誤だ。お前が愛の極印のないものを施すのは一番大きな罪だと知らねばならぬ。而して愛の極印のあるものは、縱令お前がそれを地獄の底に擲たうとも、忠實な犬のやうに逸早くお前の膝許に歸つて來るだらう。恐れる事はない。事實は遂に傳說に打ち勝たねばならぬのだ」と。

本當にさうだ。私は愛を犧牲獻身の德を以て律し縛めてゐてはならぬ。愛は知的生活の世界から自由に解放されなければならぬ。この發見は私にとつては小さな發見ではなかつた。小さな弱い經驗ではあるが、私の見た所も存分にこれを裏書きする。私が創作の衝動に驅られて容赦なく自己を檢察した時、見よ、そこには生氣に充ち滿ちた新らしい世界が開展されたではないか。實生活の波瀾に乏しい、孤獨な道を踏んで來た私の衷に、思ひもかけず、多數の個性を發見した時、私は眼を見張つて驚かずにはゐられなかつたではないか。私が眼を据ゑて憚りなく自己を見つめれば見つめるほど、大きな眞實な人間生活の諸相が明瞭に現はれ出た。私の內部に充滿して私の表現を待ち望んでゐるこの不思議な世界、何んだそれは。私は

今にしてそれが何んであるかを知る。それは私の祖先と私とが、愛によつて外界から私の裏に連れ込んで來た、謂はば愛の捕虜の大きな群れなのだ。彼等は各〻自身の言葉を以て自身の一生を訴へてゐる。而して私の心にさへよき準備ができてゐるならば、それを聞き分け、見分け、その眞の生命に於て再現するのは可能なことであるのを私は知る。私は既に十分を持つてゐる。藝術制作の素材には一生かゝつて表現してもなほあり餘るものを持つてゐる。外界から奪ひ取る愛の働きを無視しては、どうしてこの明らさまな事實を説明することが出來よう。而かも私の愛はなほ足ることを知らずに奪はうとしてゐる。何んといふ飽くことを知らぬ烈しいそれは力だらう。

私達を貫く本能の力強さ。人間に表はれただけでもそれはかくまでに力強い。その力の總和を考へることは、私達の思考力のはかなさを暴露するやうなものであらうけれども、その限られた思考力にさへ、それは限りなく偉大な、熱烈なものとして現はれるではないか。

十九

私は他を愛する形に於て凡てを私の個性の中に奪つてゐる。私はより正しきものを奪ひ取らんが爲めに、より善く、より深く愛せねばならぬ。自己を愛することが且つ深く且つ善いに從つて、私は他から何を攝取しなければならぬかをより明瞭にし得るだらう。

愛する以上は、憎まねばならぬ一面のあるのを忘れることが出來ない、愛憎のかなたにある愛、さういふものがあるだらうか。憎愛の二極を撥無して、陰陽を統合した太極といふやうな形の愛、それは理論的に考へて見られぬでもないことではあるが、かくの如きものが果して私達人間の生活を築き上げてゆく上になくてはならぬ重大問題だらうか。少くとも私には、それは欲求であり得る外價値を持つてゐない。神の世界に於ては、或は超越的形而上學の世界に於ては、かゝることは捨ておかれぬ喫緊事として考へられねばならぬだらう。然しながら一箇の人間としての私に取つては、それよりも大切な事は私が愛し且つ憎むといふ動かすことの出來ない嚴然たる事實があるばかりだ。この一見矛盾した二つの心的傾向の共存は、私をいらだたせ且つ不幸にする。何故ならば、私の個性はいかなる場合にも純一無雜な一路へとのみ志してゐるからである。

然しながらよく考へて見ると、愛と憎みとは、相反馳する心的作用の兩極を意味するものではない。憎みとは人間の愛の變じた一つの形式である。愛の反對は憎みではない。愛の反對は愛しないことだ。だから、愛しない場合にのみ、私は何ものをも個性の中に奪ひ取ることが出來ないのだ。憎む場合にも私は奪ひ取る。それは私が憎んだ所の外界と、而して私がそれに對して擲つたおくりものとである。愛する場合に於ては、例へば私が飢ゑた人を愛して、これに一飯を遣つたとすれば、その愛された人と一飯とは共に還つて來て私自身の骨肉となるだらう。憎しみの場合に於ても、例へば私が私を陷れたものを憎んで、これに罵詈を加へたとすれば、憎まれた人も、その醜い私の罵詈も共に還つて來て私の裏に巣喰ふのだ。それには愛によつての獲得と同じやうに永く私の裏にあつて消え去ることがない。私はそれによつて、不消化な石ころを受け入れた胃腑のやうな思ひをさせられる。私の愛の本能が正しく働いてゐる限りは、それは私の裏に溶けこまずに、いつまでも私の本質の異分子の如くに存續する。私は常住それによつて不快な思ひをしなければならぬ。誰れか憎まない人があら

う。それだから人間として誰れか悒鬱な眉をひそめない人があらう。人間が現はす表情の中、見る人を不快にさせる悒鬱な表情は、實に憎みによつて奪ひ取つて來た愛の鬼子が、彼れの裏にあつて彼れを刺戟するのに因るのではないか。私はよくこの苦々しい悒鬱を知つてゐる。それは人間が辛うじて到達し得た境界から私が一歩を退轉した、その意識によつて引き起されるのだらう。多少でも愛することの樂しさを知つた私は、憎むことの苦しさを痛感する。それはいづれも本能のさせる業ではあるけれども、愛するより憎むことが如何に樂しからぬものであるかを知つて苦しまねばならぬ。恐らくはよく愛するものほど、強く憎むことを知つてゐるだらう。同時に又憎むことの如何に苦しいものであるかを痛感するだらう。而してどうかして憎まずにあり得ることに對して骨を折るだらう。

憎まない、それは不可能のことだらうか。人間としては或は不可能であるかも知れない。然し少くとも憎惡の對象を減ずることは出來る。出來る筈であるのみならず、私達は始終それを勉めてゐるではないか。愛と憎みとが若し同じ本能から生れたものであるとすれば、それは必ず成就さるべきものだ。如何なるものも、ある視角から憎むべきものならば、他の視角から必ず愛すべきものであることに私達は氣附くだらう。こゝに一つの器がある。若しも私がその器を愛さなかつたならば、私に取つてそれは無いに等しい。然し私がそれを憎みはじめたならば、もうその器は私と嚴密に交渉をもつて來る。愛へはもう一歩に過ぎない。私はその用途を私が考へてゐたよりは他の方面に用ふることによつて、その器を私に役立てることが出來るだらう。その時には私の憎みは、もう愛に變つてしまふだらう。若し憎みの故にその器を取つて直ちに粉碎してしまふ人があつたとすれば、その人は愛することに於ても亦同樣に淺くしか愛し得ない人だ。愛の強い人とは執着の強い人だ。憎みの場合に於ても、かかる人の憎みは深刻な苦痛によつて裏付けられる。從つて容易にその憎しみの對象を捨てゝはしまはない。而してその執着の間に、ふとしたきつかけにそれを愛の對象に代へてしまふだらう。

かくして私の愛が深く善くなるに從つて、私はより多くを愛によつて攝取し、攝取された凡てのものは、あるべき排列をなして私の裏に同化されるだらう。かくて私の裏にある完き世界が新たに生れ出るだらう。この大歡喜に對して私は何物をも惜みなく投げ與へるだらう。然しそのなげ與へたものが如何に高價なものであらうとも、その歡喜に比しては比較にもならぬほど些少なものであるのを知つた時、況してや投げ與へたと思つたその贈品すら、畢竟は復た自己に還つて來るものであるのを發見した時、第三者にはたとひ私の生活が犧牲と見え、獻身と見えようとも、私自身に取つては、それが獲得であり生長であるのを感じた時、その時、私が徹底した人生の肯定者ならざる何人であり得よう。凡ての人がかくの如く本能の要求によつて生活し、相交渉した時、そこに本當の健全な社會が生れ出ないで何が生れ出よう。凡ての行爲が義務でなく遊戲であらねばならぬとの要求が眞に感ぜられた時、人間の生活がこれから如何に進展せねばならぬかの示唆は適確に與へられるのだ。この本能を抑壓する必要のある、若しくは抑壓すべき道德の上に成り立たねばならぬとの主張の上に据ゑられた人類の集團生活には見逃すことの出來ないうそがある。このうそを、あらねばならぬことのやうに力說し、人間の本能をその從屬者たらしめることに

心血を濺いで得たりとしてゐる道學者は災ひである。卽ち知的生活に人間活動の外圍を限つて、それを以て無上最勝の一路となす道學者は災ひである。その人はいつか、本能的體驗の不足から人間生活の足手まとひとなつてゐた事を發見する悲しみに遇はねばならぬだらうから。

二十

愛せざる所に愛する眞似をしてはならぬ。憎まざる所に憎む眞似をしてはならぬ。若し人間が守るべき至上命令があるとすればこの外にはないだらう。愛は烈しい働きの力であるが故に、これを逆用するものはその場に傷けられなければならぬ。その人は癒すべからざる諦めか不平かを以てその傷を繃帶する外道はあるまい。

* * *

愛は自足してなほ餘りがある。愛は嘗て物ほしげなる容貌をしたことがない。物ほしげなる貌を愼めよ。

* * *

基督は「汝等互にさばくなかれ」といつた。その言葉は普通受取られてゐる以上の意味を持つてゐる。何故なら愛の生活は愛するもの一人にかゝはることだ。その結果がどうであつたとした所が、他人は絕對にそれを判斷すべき尺度を持つてゐない。然るに知的生活に於ては心外に想定された尺度がある。人は誰れでもその尺度にあてはめて、ある人の行爲を測定することが出來る。だから基督の言葉は知的生活にあてはむべきものではない。基督は愛の生串の如何なるものであるかを知つてをられたのだ。ただその現はれに於ては愛から生れた行爲と、愛の眞似から生れた行爲とを區別することが人間に取つては殆んど不可能だ。だから人は人をさばいてはならぬのだ。而かも今の世に、人はいかに易々とさばかれつゝあることよ。

* * *

犧牲とか、獻身とか、義務とか、奉仕とか、服從の德の說かれる所には、私達は警戒の眼を見張らねばならぬ。かくて神學者は專制政治の型に則つて神人の關係を案出した。かくて政治家は神人の例に則つて君臣の關係を案出した。社會道德と產業組織とはそのあとに續いた。それらは皆同じ法則の上に組み立てられてゐる。そこには必ず治者と被治者とがあらねばならぬ。而して治者に特權である所のものは被治者には義務だ。被治者の所有する所のものは治者の所有せざるものだ。治者と被治者とは異つた原素から成り立つてゐる。かしこには治者の生活があり、こゝには被治者の生活がある。生活そのものにかゝる二元的分離はあるべき事なのか。兎にも角にも本能の生活にはかゝる分離はない。石の有する本能の方向に有機物は生じた。有機物の有する本能の方向に諸生物は生じた。諸生物の本能の有する方向に人間は生じた。人間の有する本能の方向に本能そのものは動いて行く。凡てが自己への獲得だ。その間に一つの斷層もない。百八十度角の方向轉換はない。

* * *

今のやうな人間の進化の程度にあつては、知的生活の棄却は恐らく人間生活そのものの崩壞であるであらう。然しながら、その故を以て本能的生活の危險を說き、壓抑を主張するものがあるとすれば、それは又自己と人類とを自滅に導かうとするものだといはなければならぬ。この問題を私がこのやうに抽象的に出[illegible]ると異存のある人はないやうだ。けれども假りにニイッチェ一人を持ち出して來ると、その門人の哲學は忽ち四方からの非難攻擊に遇はねば

ならぬのだ。

* * *

權力と輿論とは知的生活の所産である。權威と獨創とは本能的の所産である。而して現世では、いつでも前者が後者を壓倒する。

* * *

釋迦は龍樹によつて、基督は保羅によつて、孔子は朱子によつて、凡てその愛の寶座から智慧と聖德との座にまで引きずりおろされた。

* * *

愛を優しい力と見くびつた所から生活の誤謬は始まる。

* * *

女の持つ愛はあらはだけれども小さい。男の持つ愛は大きいけれども遮られてゐる。而して大きい愛は屢々あらはな愛に打ち負かされる。

* * *

ダギンチは「知ることが愛することだ」といつた。愛することが知ることだ。

* * *

人の生活の必至最極の要求は自己の完成である。社會を完成することが自己の完成であり、自己の完成がやがて社會の完成となるといふ如きは、現象の輪廻相を說明したにとゞまつて、要求そのものをいひ現はした言葉ではない。

自己完成の要求が過つて自己の一局部のそれに向けられた瞬間に、自己完成の道は跡方もなく崩れ終る。

* * *

一人の人の個性はその人の持つ過去全體の總和に過ぎないとある人はいふだらう。否、凡ての個性はそれが持つ過去全體の總和に「今」が加はつたものだ。而して「今」は過去と未來とを支配し得る。

* * *

ラッセルは本能を區別して創造本能と所有本能の二つにしたと私は聞かされてゐる。私はさうは思はない。本能の本質は所有的動向である。而してその作用の結果が創造である。

* * *

何故に戀愛が屢々藝術の主題となるか。藝術は愛の可及的純粹な表現である。而して戀愛は人間の他の行爲に勝つて愛の集約的な、而して全體的な作用であるからだ。

* * *

試みに沒我的愛他主義者に問ひたい。あなたがその主義を主張するやうになつてから、あなたはあなた自身に何者をも與へなかつたのですか。縱令何ものかを與へたとしても、それは全然他を愛する爲めの生存に必要なために與へたのですか。然し與へられない爲めに悶死する人がこの世の中には絕えずゐるのですね。それでもあなたはその人達を助ける爲めに先づ自分に必要なものを與へてゐるのですか。そこに何等かの矛盾を感ずることはありませんか。

* * *

私は自分自身を有機的に生活しなければならない。そのためには行爲が內部からのみ現はれ出なければならない。石の生長のやうにではなく、植物の萌芽のやうに。

* * *

一艘の船が海賊船の重圍に陷つた。若し敗れたら、海の藻屑とならなければならない。若し降つたら、賊の刀の錆とならなければならない。この危機にあつて、船員は銘々が最も端的にその生命を死の威脅から救ひ出さうとするだらう。而してその必死の努力が同時に、その船の安全を希はせ、船中にあつて彼れと協力すべき人々の安全を希はせるだらう。各員の間にはいはず語らずの中に、完全な共同作業が行はれるだらう、この同じ心持で人類が常に生きて

ゐたら。少くとも事なき時に、私達がこの心持を蔑ろにすることがなかつたならば。

＊　＊　＊

習性的生活はその所產を自己の上に積み上げる。知的生活はその所產を自己の中に貯へる。本能的生活は常にその所產を捨てて飛躍する。

二十一

私は澱みに來た、而して暫らく渦紋を描いた。

私は再び流れ出よう。

私はまづ、愛を出發點として藝術を考へて見る。

凡ての思想凡ての行爲は表象である。

表象とは愛が已れ自ら表現するための煩悶である。その煩悶の結果が即ち創造である。藝術は創造だ。故に凡ての人は多少の意味に於て藝術家であらねばならぬ。若し謂ふところの藝術家のみが創造を司り、他はこれに與らないものだとするなら、如何して藝術品が一般の人に訴へることが出來よう。藝術家と然らざる人との間に愛の隔てがあるならば、藝術家の表現的努力は畢竟無益ではないか。

一人の水夫があつて檣の上から落日の大觀を擅まゝにし得た時、この感激を人に傳へ得るやう表現する能力がなかつたならば、その人は詩人とはいへない、とある技巧派の文學者はいつた。然し私はさうは思はない。その莊嚴な光景に對した水夫が感激を感じた以上は、その瞬間に於て彼れは詩人だ。何故ならば、彼れは彼れ自身に對して黙想的にその感激を表現してゐるからだ。

世には多くの啞の藝術家がゐる。彼等は人に傳ふべき表現の手段を持つてはゐないが、その感激は往々にして所謂藝術家なるものを遙かに凌ぎ越えてゐる。小兒——彼れは何んといふ驚くべき藝術家だらう。彼れの心には習慣の痂が固着してゐない。その心は痛々しい程にむき出しで鋭敏だ。私達は物を見る所に物に捕はれる。彼れは物を見る所に物を捕へる。物そのものの本質に於てこれを捕へる。而して叡智の始めなる神々しい驚異の念にひたる。そこには何等の先入的僻見がない。これこそは純眞な藝術的態度だ、愛はかくの如き階級を經て最も明らかに自己を表現する。

けれども私達の多くはこの大事な一點を屢々顧みないやうな生活をしてはゐないか。ジェームスは古來色々に分派した凡ての哲學の色合は、結局それをその構成者の稟賦(tempera-ment)に歸することが出來るといつてゐる。これは至言だといはなければならぬ。私達の生活の樣式にも亦同樣のことがいはれるであらう。ある人は前人が殘し置いた材料を利用して愛の(即ち個性の)表現を試みようとする。又ある人は愛の純粹なる表現を欲するが故に前人の糟粕を嘗めず、彼れ自らの表現手段に依らうとする。前者はより多く知的生活に依據し、後者はより多く本能的生活に依據せんとするものである。若し更にジェームスの言葉を借りていへば、前者を strong-minded と呼び、後者を tender-hearted と呼ぶことが出來ようか。

知的生活に依據して個性を表現しようとする人は、表現の材料を多く身外に求める。例へば石、例へば衣裳、例へば軍隊、例へば權力。而して表現の量に重きをおいて、深くその質を省みない。表現材料の精選よりもその排列に重きをおく。「始めて美人を花に譬へた人は天才であるが、二度目に同じことをいつた人は馬鹿だ」とヴォルテールがいつた。少くとも知的生活に固執する人は美人を花に譬へる創意的なことはしない。然しそれを百合の花若しくは薔薇の

花に譬へることはしない限りでない。その點に於て彼れは明らかに馬鹿でないことが出來る。十分に智者でさへあり得る。然しその人は個性の表現に於て delicacy の尊さを多く認めないで、亂雜な成行きに委せやすい。所謂事業家とか、政治家とか、煽動家とかいふやうな典型の人には、かゝる傾向が極めて多くあり易い。

全く實用のためにのみ造られた眞四角な建築物一つにも、そこに個性の表現が全然ないといふことは出來ない。然しながらその中から個性を、即ち愛を探し出すといふことは極めて困難なことだ、個性は無意味な用材の爲めに遺憾なく押しひしがれて、おまけに用材との有機的な關係から危く斷たれようとしてゐる。然し個性が全く押しひしがれ、關係が全く斷たれてしまつたなら、その醜い建築物といへどもそこに存在することは出來ないだらう。それは何んといつても、かすかにもせよ、個性の働きによつてのみその存在をつなぎ得るのだ。けれども若し私達の生活がかくの如きもののみによつて關連されることを想像するのは淋しいことではないか。この時私達の個性は必ずかゝる物質的な材料に對して叛逆を企てるだらう。かゝる建築物の如きものが然しもつと見えのいゝ形で私達の生活をきびしく取り圍んでゐることはないだらうか。一人の野心的政治家があるとする、彼れは自己の野心を滿足せんが爲めに、即ち彼れの衷にあつて表現を求めてゐる愛に、粗雜な、見當違ひな滿足を與へんが爲めに愛國とか、自由とか、國威の宣揚とかいふ心にもない旗印をかゝげ、彼れの奇妙な牽引力と、物質的報酬とを以て、彼れには無緣な民衆を煽動する。民衆はその好餌に引き寄せられ、自分等の眞の要求とは全く關係もない要求に屈服し、過去に起つたある同じやうな立派な事件に、自分達の無價値な行動を強ひて結び付けて、そこに申譯と希望とを築き上げ、而してその大それた指導者の命令のまに〳〵、身命をさへ賭してその事業の成就を心がける。而して、若し運命がその政治家に苛酷でなかつたならば、彼れは巍然たる國家的若しくは世界的大事業なるものを完成する。然しそこに出來上つた結果はその政治家の肖像でもなく、民衆の投影でもなく、粗雜な不明瞭な重ね寫眞に過ぎない。而してそれは當事者なる政治家その人の一生を無價値にし、民衆全體の進歩を阻止し、事業そのものは、段々人間の生活から分離して、遂には生活途上の用もない瓦礫となつて、徒らに人類進歩の妨げになるだらう。このやうな事象は、その大小廣狹の差こそあれ、私達が幾度も繰り返して遭遇せねばならぬことなのだ。しかも私達は往々その悲しい結果を曉らないのみか、かくの如きはあらねばならぬ須要のことのやうに思ひなし易い。

けれども幸ひにして人類はかくの如き稟資の人ばかりからは成り立つてゐない。そこにはもつと愛の純眞な表現を可能ならしめようとする人がある。さうしないではゐられない人がある。そのためには彼れは一見彼れに利益らし、見える結果にも惑はされない。彼れには專念すべきたゞ一事がある。それは彼れの力の及ぶかぎり、愛の純粹な表現を成就しようといふことだ。縱令その人が政治にかゝはつてゐようが、生産に從事してゐようが、娼婦であらうが、その粗雜な生活材料のゆるす限りに於て最上の生活を目指してゐるのである。それらの人々の生活はそのまゝよき藝術だ。彼等が表現に役立てた材料は粗雜なものであるが故に、やがては古い皮袋のやうに崩れ去るだらうけれども、そのあとには必ず不思議な愛の作用が殘る。粗雜な材料はその中に力強く籠められる愛の力によつて破れ果て、そ

れが人類進歩の妨げになるやうなことはない。けれども愛の要求以上に外界の要求に從つた人たちの建て上げたものは、愛がそれを破壞し終る力を持たない故に、いつまでもその醜い殘骸をとゞめて、それを打ち壞す愛のあらはれる時に及ぶ。

愛の純粹なる表現を更に切實に要求する人は、地上の職業にまで狹い制限を加へて、思想家若しくは普通意味せられるところの藝術家とならずにはゐられないだらう。その人々は愛が汚されざらんが爲めに、先づ愛の表現に役立たしむべき材料の嚴選を行ふ。思想に增して純粹な材料を、私達人間は考へつくことが出來ない。哲人又は信仰の人などといはれる人は――若しそれがまがひものでなかつたなら――こゝにその出發點を持つてゐるに違ひない。普通意味せられるところの藝術家、卽ち藝術を仕事としてゐる人々は思想を具象化するについて、思想家のやうに抽象的な手段によらず、具體的な形に於てせんとするものだ。然しながらその具體的な形の中、及ぶだけ純粹に近い形に依らうとする。その爲めに彼等は洗煉された感覺を以て洗煉された感覺に訴へようとする。感覺の世界は割合に人々の間に共通であり、愛にまで直接に飜譯され易いからである。感覺の中でも、實生活に緣の近い觸覺若しくは味覺などに依るよりも、非功利的な機能を多量に有する視覺聽覺の如きに依らうとする。それらの感覺に訴へる手段にも又等差が生ずる。

同じ言葉である。然しその言葉の用ひ方がいかに藝術家の稟資を的確に表はし出すだらう。ある人は言葉をその素朴な用途に於て使用する。ある人は一つの言葉にもある特殊な意味を盛り、雜多な意味を除去することなしには用ひることを肯んじない。散文を綴る人は前者であり、詩に行く人は後者である。詩人とは、その表現の材料を、卽ち言葉を知的生活の桎梏から極度にまで解放し、それによつて内部生命の發現を端的にしようとする人である。だからその所産なる詩は常に散文よりも藝術的に高い位置にある。私は僅かばかりの小說と戲曲とを書いたものであるが、そのさゝやかなる經驗からいつても、表現手段として散文がいかに幼稚なものであるかを感じないではゐられない。私の個性が表現せられるために、私は自分ながらもどかしい程の廻り道をしなければならぬ。數限りもない捨石が積まれた後でなければ、そこには私は現はれ出て來ない。何故そんなことをしてゐねばならぬかと私は時々自分を齒がゆく思ふ。それは明らかに愛の要求に對する私の感受性が不十分であるからである。私にもつと鋭敏な感受性があつたなら、私は凡てを捨てて詩に走つたであらう。そこには詩人の世界が截然として創り上げられてゐる。私達は殆んど言葉を飛躍してその後ろの實質に這入りこむことが出來る。而してその實質は驚くべく純粹だ。

或はいふ人があるかも知れない。私達の生活は昔のやうな素朴な單純な生活ではない。それは見透しのつかぬほど複雜になり難解になつてゐる。それが言葉によつて現はされる爲めには、勢ひ周到な表現を必要とする。詩は昔の人の爲めにだ。而して小說と戲曲とは今の人の爲めにだ、と。

私はさうは思はない。表現さるべき最後のものは昔も今も異なることがないのだ。縱令外面的な生活が複雜にならうとも、言葉の持つ意味の長い傳統によつて蕪雜になつてゐようとも、一人の詩人の徹視はよく亂れた絲のやうな生活の混亂をうち貫き、言葉をその純粹な形に立ち歸らせ、其手によつて書き下された十行の詩はよく、生の統流を眼前に展くに足るべ

きである。然しそれとなし得るためには、詩人は必ず深い愛の體驗者でなければならぬ。出でよ詩人よ。而して私達は直下に愛と相對し得べき一路を開け。
　私は又詩にも限つた表現の楔子を音樂に於て見出さうとするものだ。かの單調にしては何等の意味もなき音聲、それを組合せてその中に愛を宿らせる仕事はいかに樂しくも快いことであらうぞ。それは人間の愛をまじり氣なく表現し得る樂園といはなければならない。ハーモニーとメロディーとは眞に知的生活の何事にも役立たないであらう。これこそは愛が直接に人間に與へた愛子だといつてい丶。立派な音樂を聽く人を凡ての地上の羈絆から切り放す。人はその前に氣化して直ちに運命の本流に流れ込む。人間に取つては意味の分らない、餘りに意味深い、感激が熱い涙を誘ひ出す。而して人は強い衝動によつて、推進の力を與へられる。それが何處へであるかは知られない。たゞ望ましい方向にであるのは明らかに感知される。その時人は偶に乘移られてゐるのだ。
　美術の世界に於て、未來派の人々が企圖するところも、またこの音樂の聖境に對する一路の憧憬でないといへようか。色もまた色そのものには音の如く意味がない。而もまた面そのものには色の如く意味がない。然しながら形象の模倣再現から這入つたこの藝術は永くその傳統から逃れ出ることが出來ないで、その色その面を形の奴婢にのみ充てゝゐた。色は物象の面と空間とを埋めるために、面は物象の量と積とを表はすためにのみ用ひられた。而して印象派の勃興はこの固定觀念に幽かなゆるぎを與へた。卽ち繪畫の方面に於て、色と色との關係に價値をおくことが考へつけられた。色が何を表はすかといふことより、色と色との關係の中に何が現はれねばならぬかと云ふことが注意され出した。これは物質から色の解放への第一步であらねばならぬ。然しこの傾向は未來派に至つて極度に高調された。色は全く物質から救ひ出された。色は遂に獨立するに至つた。
　然し音樂が成就しただけのことを未來派は繪畫に於て成就し得てゐるだらうかといふ問題は自ら別に考へられなければならぬ。私はこれらの藝術に對して何等具體的の知識を持つてゐるものでない。だから私はかゝる比較論に來ると口をつぐむ外はない。けれども未來派の傾向を全然斥けらるべきものだと主張する人に對しては、私は以上の見地からこの派の傾向の可能性を申出ることが出來はしないかと思つてゐる。若し物象が具象化されなければ滿足が出來ないと人がいふならば、その人の爲めには、文學の領內に詩と小說とが併存するやうに、「これまでのやうな繪畫を存續させておくのも亦妨げないだらう。然しながら美術家の個性が益〻高調せられねばならぬ時はやがて來るだらう。その時になつて未來派のやうな傾向が起るのは、私の立場からいふと、極めて自然なことであるといはねばならぬのだ。
　人間は十分に惠まれてゐる。私達は愛の自己表現の動向を滿足すべきあらゆる手段を持つてゐる。厘毛の利を爭ふことから神を創ることに至るまで、僞らずに內部の要求に耳を傾ける人ほど、彼れは裕かに惠まれるであらう。凡ての人は藝術家だ。そこに十二分な個性の自由が許されてゐる。私は何よりもそれを重んじなければならない。

二十二

　私はまた愛を出發點として社會生活を考へて見よう。
　社會生活は個人生活の延長であらねばあらぬ。個人的欲求と社會的欲求とが軒輊する

といふ考へは根柢的に間違つてゐる。若しそこに越えることの出來ない溝渠があるといふならば、私は寧ろ社會生活を破壞して、かの孤棲生活を營む獅子や飛鷹の習性に依らう。

然しかゝる必要のないことを私の愛は知つてゐる。社會生活に對する概念の中に誤つた所があるか、個人生活の概念の中に誤つた所があるかによつて、この不合理な結論が引き出されると私は知つてゐる。

先づ個人の生活はその最も正しい內容によつて導かれなければならぬ。正しき內容とは何をいふのか。知的生活が習性的生活を是正する時には、私は知的生活に從つて習性的生活を導かねばならぬ。本能的生活が知的生活を是正する時には、私は本能的生活に從つて知的生活を導かねばならぬ。卽ち常に習性的生活の上に知的生活を、知的生活の上に本能的生活を置くことを第一の仕事と心懸けねばならぬ。正しき內容とはそれだけのことだ。

習性的生活と知的生活との關係についてはいふまでもあるまい。習性的生活が知的生活の指導によつて適合を得なければならないといふのは自明のことであるから。

然しながら知的生活が本能的生活によつて指導されねばならぬといふことについては不服を有つ人がないとはいへない。知的生活は多くの人々の經驗の總和が生み出した結果であり約束であるが、本能的生活は純粹な個性內部の衝動であるが故に、必ずしも社會生活と順應することが出來ないだらうとの杞憂は起りがちに見えるからである。

けれども私は私の意味する本能的生活の意味が正しく理解されることを希ふ。本能の欲求はいつでも各人の個性全體の上に働く所のものだ。その衝動は常に個性全體の飽滿を伴つて起る。この例は卑陋であるかも知れないが、理解を容易ならしむる爲めにいつて見ると、こゝに一人の男がゐて、肉慾の衝動に驅られて一人の少女を辱しめたとしよう。肉慾も一つの本能である。その衝動の滿足を求めたことは、そのまゝ許されることではないか。さうある人は私に詰問するかも知れない。私はその人に問ひ返して見よう。あなたが考へる前に先づあなたをその男の位置におけ。あなたが肉慾的にのみその少女を欲してゐるのに、あなたはその少女に近づく時、(全く固定的な道德觀念を度外視しても)何等の不滿をもあなたの個性に感じなかつたか。あなたはまたあなたと見知らない少女の姿全體に、極度の恐怖と憎惡とを見出したらう。あなたはそれに少しでも打たれなかつたか。而してそこに苦い味を感じなかつたか。若しあなたに人並みの心があるなら、私のこの問に應じて否と答へるの外はあるまい。だから私はいふ。その場合あなたが本能の衝動らしく思つたものは、精神から切り放された肉慾の衝動にしか過ぎなかつたのだ。だからあなたはその衝動を行爲に移す第一の瞬間に既に見事に罰せられてしまつたのだ。若しあなたが本當に本能の(個性全體の)衝動によつてその少女を欲するなら、あなたは先づその少女にあなたの切ない愛を打明けるだらう。而して少女が若しあなたの愛に酬いるならば、その時あなたはその少女をあなたの衷に奪ひ取り、少女はまたあなたを彼女の衷に奪ひ取るだらう。その時あなたと少女とは二人にして一人だ。(前にもいつた如く)而してあなたは十分な飽滿な感じを以て心と肉とに於て彼女と一體となることが出來る。その時、その事の前に何等の不滿もなく、その事の後には美しい飽滿があるばかりだらう。(これは餘事に亙るが好奇な人のために附け加へておく。若し少女がその人の愛に酬いることを拒まねばならなかつた

場合はどうだ。その場合でも彼れの個性は愛したことによつて生長する。悲しみも痛みも亦本能の糧だ。少女は永久に彼れの裏に生きるだらう。而して更に附け加へることが許されるなら、彼れの肉慾は著しくその働きを減ずるだらう。そこには事件の精神化が自ら行はれるのだ。若し然しその人の個性がその事があつたために分散し、精神が靡爛し、肉慾が昂進したとするならば、もうその人に於て本能の統合は破れてしまつたのだ。本能的生活はもうその人とは係はりはない。然しそんな人を知的生活が救ふことが出來るか。彼れは道徳的に强ひて自分の行爲を律して、他の女に對してその肉慾を試みるやうなことはしないかも知れない。然しその瞬間に彼れは僞善者になり了せてしまつてゐるのだ。彼れはその心に姦淫しつゞけなければならないのだ。それでもそれは知的生活の平安の爲めには役立つかも知れない。けれどもかくの如き平安によつて保たれる人も社會も災ひである。若し彼れがある動機から、猛然としてもとの自己に眼覺める程緊張したならばその時彼れは本能的生活の圏内に歸還してゐるのだ。だから知的生活の圏内に於ける生活にあつてこそ、知識も道徳もなくては叶はぬものであるが、本能的生活の葛藤にあつては、知的生活の生んだ規範は、單にその傷を醜く蔽ふ繃帶にすらあたらぬことを知るだらう。その時精神は精神ではなく、肉慾は肉慾ではない。兩者は全くその區別を沒して、愛の純流の中に溶けこんでしまふ。單なる形の似よりから凡ての現はれと同じものと見るのは、甚しき愚昧な見斷である。

この一つの例は私の本能に對する見解を朧ろげながらも現はし得たではなからうか。かくの如く本能は、全體的な而して内部的な個性の要求だ。然るに知的生活はこれとは趣きを異にしてゐる。縱令知的生活は、長い間かゝつた、多くの人の經驗の集成から成り立つものだとはいへ、その個性に働く作用はいつでも外部からであつて、而かも部分的である。その外部的である譯は、それが誰れの内部生活からも離れて組み立てられたものであるからだ。それは生活の全部を統率するために、人間によつて約束された規範であるからだ。それなら何故部分的であるか。知的生活にあつては義務と努力とが必要な條件として申出られてゐるからだ。義務にも努力にも、人間の欲求のある部分の棄捨が豫想されてゐる。ある欲求を壓抑するといふ意識なしには、義務も努力も實行されはしない。即ち個性の全要求の滿足といふ事は行はれ得ない約束にある。若しかゝる約束にある知的生活が生活の基調をなし、指導者とならなければならぬとしたら、人間は果して晏如としてゐることが出來るだらうか。私としてはそれを最上のものとして安んじてゐることが出來ない。私はその上に、私の個性の全要求を滿足し、而かもその滿足が同時によいことであるべき生活を追ひ求めるだらう。而してそれは本能的生活に於て與へられるのだ。本能的生活によつて知的生活は内面化されなければならぬ。本能的生活によつて知的生活は統合化されなければならぬ。かくいへば、私が、本能的生活は知的生活を指導せねばならぬと主張した理由が明らかになると思ふ。

然らば社會生活は私がいつた個人の生活過程を逆にでも行かねばならぬといふのか。社會生活にあつては、知的生活をもつて本能的生活の指導者たらしめ、若しくは習性的生活をもつて知的生活の是正者たらしめねばならぬとでもいふのか。若し果してさうならば、社會生活と個人生活とはたしかに軒輊するであらう。私にはさうは思はれない。社會の欲

求も亦その終極はその生活內部の全體的飽滿にあらねばならぬ。縱令現在、その生活の基調は知的生活におかれてあるとても、その欲求としては本能的生活が目指されてゐねばならぬ。社會がその社會的本能によつて動く時こそ、その生活は純一無雜な境地に達するだらう。

こゝである人は多分いふだらう。お前の言葉は明らかにその通りだ。進化の過程としては、社會も亦本能的生活に這入ることをその理想とせねばならぬ。けれども現在にあつては、個人には本能的生活の消息を解し、それを實行し得る人があるとしても、社會はまだかゝる境地に達せんには遠い距離がある。かゝる狀態にあつて、個人生活と社會生活とが軒輊するのは當然なことではないか、と。

私はこの抗議を肯じよう。然しこの場合、改めねばならぬのは個人の生活であるか、社會の生活であるか、どちらだ。兩者の間に完全な調和を持ち來すために進步させねばならぬ生活はどちらの生活だ。社會生活の現狀を維持する爲めに、私達はこゝまで進んで來た個人生活を停止し若しくは退步させて、社會生活との適合に持ち來さねばならぬといふのか。多くの人はさうあるべき事のやうに考へてゐるやうに見える。私は斷じてこれを不可とする。

變らねばならぬものは社會の生活樣式である。それが變つて個人の生活樣式にまで追付かねばならぬ。

國家も產業も社會生活の一樣式である。近代に至つて、この二つの樣式に對する根本的な批判を敢てする二つの見方が現はれ出た。それは個性の要求が必至的に創り出した見方であつて、徒らなる權力が如何ともすべからざる一個の權威である。一時は權力を以て壓倒することも出來よう。然しながら結局は、現存の國家なり產業組織なりが、合理的な批判を以てそれを打壞し得るにあらずんば、決して根絕することの出來ない見方である。私のいふ二つの見方とは、社會主義であり、無政府主義である。

この二つの主義のかくまでの力强さは何處にあるか。それは、縱令不完全であらうとも、個性の全的要求が生み出した主義だからである。社會主義者は自ら人間の社會的本能が生み出した見方であると主張するけれども、その主義の根柢をなすものは生存競爭なる自然現象である。生存競爭は個性から始まつて始めて階級爭鬪に移るのだ。だからその點に於て社會主義者の主張は裏切られてゐる。無政府主義に至つては固より始めから個性生活の絕對自由をその標幟としてゐる。

社會主義はダーウィンの進化論から生存競爭の原理を拔いてその主張の出發點としたことは前に述べた通りだ。クロポトキンはこれに對立して無政府主義を宣言するに當り、進化論の一原理なる相互扶助の動向を取つてその論陣を堅めた。兩者共に、個性から發して動植物兩界の致命的要素たる本能であるとせられてゐる。一方の主義者は生存競爭の爲めの相互扶助だと主張し、一方の主義者は相互扶助の爲めの生存競爭だと主張する。私はこゝで敢て主義者の見地を裁斷しようとも思はないし、又私の自然科學に對する空疎な知識はそれをすることも許しはしない。

然し私はかういふことを申出して見たい。ケーベル博士がそのカント論に於て「生物學に於て取扱はれる動物本能は、畢竟人間にある本能の投影に過ぎない。認識作用が事物に適合するのではなく、却つて事物（現象としての）が認識作用に適合するのである」といつた言葉は、單に唯心論者の常套語とばかりはいひ退け

てしまふことが出來ない。そこには動かすことの出來ない實際的睿智が動いてゐるのを私は感ずることが出來る　惟ふに動物には、ダーウィンが發見した以外に幾多の本能が潜んでゐるに相違ない。而してそれがより以上の本能の力によつて、統合されてゐるに相違ない。然しながら十九世紀の生物學者は、眼覺めかけて來た個性の要求（それは十八世紀の佛國の哲學者等に負ふ所が多いだらう）と社會の要求との間にある廣い距離を感じたのではなかつたらうか。而して動物中に行はれる現狀打破の本能を際立つて著しいものと認めたのではなからうか。然しその時學者達の頭の中には、個性は社會を組織するある小さな因子としてのみ映つてゐたらう。加之科學的研究法の必然的な條件として、凡てのものを二元的に見ることに慣らされてゐた。彼等はひとりでに個性と社會とを對立させた。從つてその結論も個性と社會との中、個性に重きをおいた場合には生存競爭として現はれ、社會に重きをおいた場合には相互扶助として現はれたのだ。然し前者には社會が、後者には個性が、少しも度外視されてゐはしない。

私達はこの時代的着色から躍進しなければならぬと私は思ふ。私は個性の尊嚴を體驗した。個性の要求の前には、社會の要求は無條件的に變らねばならぬことを知つた。而して人間の個性に宿つた本能即ち愛が如何なる要求を持つかを諳んじた。而して更に又動物に現はれる本能が無自覺的で、人間に現はれる本能が自覺的であるのを區別した。自覺とは普遍智の要求を意味する。個性は最早個性の社會に對する本能的要求を以て滿足せず、個性自身、その全體の滿足の中にのみ滿足する。そこには競爭すべき外界もなく、扶助すべき外界もない。人間は愛の抱擁にまで急ぐ。彼れの愛の動くところ、凡ての外界は即ち彼れだ、我れの正しい生長と完成。この外に結局何があらうぞ。

（以下十餘行内務省の注意により抹殺）

私はこの本質から出發した社會生活改造の法式を說くことはしまいと思ふ。それは自らその人がある。私は單にこゝに一個の示唆を提供することによつて滿足する。私が持つて生れた役目はそれを成就すれば足りるのだから。

宗教も亦社會生活の一つの樣式である。信仰は固より人々のことであるが、宗教といへばそれは既に社會にまで擴大された意味をもつてゐる。而して何故に現在の宗教がその權威を失墜してしまつたか。昔は一國の帝王が法皇の寬恕を請ふために、乞食の如くその膝下に伏拜した。又ある佛僧は皇帝の愚昧なる一言を聞くと、一撥を殘したまゝ飄然として竹林に去つてしまつた。昔にあつては何が宗教にかくの如き權威を附與し、今にあつては、何が私達の見るが如き退縮を招致したか。それは宗教が全く知的生活の羈絆に自己を委ね終つたからである。宗教はその生命を自分自身の中に見出すことを忘れて、社會的生活に全然適合することによつて、その存在を僥倖しようとしたからだ。國家には治者と被治者とがあつて、その間には動向の根柢的な衝突が行はれる。宗教は無反省にもこの概念を取つて、自分に適用した。神（つまり私はこゝで信仰の對象を指してゐるのだ。その名は何んでもいゝ）は宗教界にあつて、國家に於ける主權者の位置にある。彼れは人からあらゆる捧げものを要求する。人の生活は畢竟神の前にあつては無に等しい。神は凡ての權能の主體である。人は神の前にあつて無であることを榮譽としなければならない。神に對し自己を生牲にすることが彼れの有する唯一の權利（若しさういふ言葉が使へるなら）で

ある。神の欲する所と人の欲する所との間には、渡らるべき橋も綱もない。神と人とは全く本質を異にした二元として對立してゐる。

國家の組織が無反省にそのまゝ人民によつて肯定せられてゐた時代には、この神人關係の概念も亦無反省に受取られることが出來たらう。然し個性の欲求が、愛の動向が、體達せられた今にあつては、この神人關係の矛盾は直ちに苦痛となつて、個性によつて感ぜられる。生活根源の動向は凡て同じ方向に向上せなければならぬ。私達は既に石から人間に至るまでの過程に於て、同じ方向に向上して來た本能の流れを見た。私達の内部生活は獲得によつてのみ向上飛躍するのを見た。然るに現存の宗教は、神にのみその動向を認めて、人間にはそれを拒まうとしてゐるではないか。

ある人は私に告げるであらう。時勢に取り殘されたるものよ。お前は神人合一の教理が夙の昔から叫ばれてゐるのを知らないのか。神は人間と對立してゐるやうなものではない。實に人間の裏にあつて働くべきものだ。人間は又神の衷にあつて動くべきものだ。神と自己とを對立させるが故に人間は墮落するのだ。神の要求はそのまゝ人間の要求でなければならぬのだ。お前はそれをすら知らないで、一體何んの囈言をいはうとするのだと。然らば私はその人に向つて問ひたい。それなら何故今でも教壇の上からやむことなく犧牲の義務と獻身の德とが高調して説かれなければならないのだらう。神は嘗て犧牲を拂ひ獻身を敢てしたか。(基督教徒よここで基督の生涯を引照するだらう。然し基督の生涯を犧牲でも獻身でもないことは前に説いた)然るに現在教壇からは、神にないものが人間にあらねばならぬとして要求されてゐるのはどうしたことなのか。私はそれが人間性の根本に對する理解の不十分から來てゐるのではないかと疑ふ。而してその疑ひに全く理由がないではあるまいと思ふ。神人合一といふ概念だけは自然の必要から建て上げられた。それは政治に於て、專制政體が立憲政體に變更されたのとよく似てゐる。その形に於てはある改造が成就されたやうに見える。立法の主體は稍ゝ移動したかも知れない。而かも治者と被治者とが全く相反した要求によつて律せられてゐる點に於ては寸毫も是正されてはゐないのだ。神と人とは合一する。その言葉は如何に美しいだらう。然しその合一の實が擧つてゐなかつたら、その美しい空論が畢竟何んの益になるか。

私はかくの如き妥協的な改良説を一番恐れなければならない。それはその外貌の美しさが私をあざむきやすいからである。

宗教が國家の機械、即ち美しい言葉でいへば政務の要具たることから自分を救ひ出さねばならぬことは勿論ではあるが、現存の國家がその據りどころとする知的生活、その知的生活から當然抽出される二元的見斷から自分自身を救ひ出して、愛の世界にまで高まらなかつたら、それは永久にその權威を回復することが出來ないだらう。

私は神を知らない。神を知らないものが神と人との關係などに對して意見を申出るのは出過ぎたことだといはれるかも知れない。然し宗教が社會生活の一樣式として考へ得られる時、その樣式に對して私が思ふ所を述べるのは許されることだと思ふ。私の態度を惜むものは、私の意見を無視すればそれで足りる。けれども私は私自身を無視しはしない。

教育といふものについても、私はこゝでいふべき多くを持つてゐる。然し聰明な讀者は、私が社會生活の諸部門について述べて來たところから、私が教育に對して何をいはうとするかを十分に見拔いてゐられると思ふ。私は徒ら

な重複を避けなければならない。然しこゝにも數言を費やすことが許されたい。

子供は子供自身の爲めに敎育されなければならない。この一事が見過されてゐたなら敎育の本義はその瞬間に滅びるのみならず、それは却つて有害になる。社會の爲めに子供を敎育する――それは驚くべく悲しむべき錯誤である。

仕事に勤勉なれと敎へる。何故正しき仕事を選べと敎へないのか。正しい仕事を選び得たものは懶惰であることが出來ないのだ。私は嘗てある卒業式に列した。そこの校長は自分が一度も少年の時期を潛りぬけた經驗を持たぬやうな鹿爪らしい顏をして、君主の恩、父母の恩、先生の恩、境遇の恩、この四恩の尊さ難有さを繰り返し〳〵說いて聞かせた。かのいたいけな少年少女たちは、この四つの重荷の下にうめくやうに見やられた。彼等は十分に義務を敎へられた。然し彼等の最上の寶なる個性の權威は全く顧みられなかつた。美しく磨き上げられた個性は恩を知ることが出來ないとでもいふのか。餘りなる無理解。不必要な老婆親切。私は父である。而して父である體驗から明らかにいはう。私は子供に感謝すべきものをこそ持つて居れ、子供から感謝さるべき何者をも持つてはゐない。私が子供に對して拂つた犧牲らしく見えるものは、子供の愛によつて酬はれてなほ餘りがある。それが何故分らないのだらう。正しき仕事を選べと敎へるやうに、私は、私の子供に子供自身の價値が何んであるかを敎へてもらひたい。彼れはその餘の凡てを彼れ自身で處理して行くだらう。私は今假りに少年少女を中等敎育にも高等敎育にも延長して考へることが出來ると思ふ。學問の內容よりも學問そのものを重んじさせるといふこと、知識よりも暗示を與へるといふこと、人間を私の所謂專門家に仕立て上げないことなど。

二十三

私は更に愛を出發點として男女の關係と家族生活とを考へて見たい。

今男女の關係はある狂ひを持つてゐる。男女は往々にして爭鬪の狀態におかれてゐる。かゝる僻事はあるべからざることだ。

どれ程長い時間の間に馴致されたことであるか分らない。然しながら人間の生活途上に於て女性は男性の奴隷となつた。それは確かに筋肉勞働の世界に奴隷が生じた時よりも古いことに相違ない。

性の殊別が生殖の結果を健全にし確固たらしめんがために自然が案出した妙算であるのは疑ふべき餘地のないことだ。その變體が色々な形を取つて起り、ある時はその本務的な目的から全く切り放されたプラトーニック・ラヴともなり、又かゝる關係の中に、人類が思ひもかけぬよき收得をする場合もないではない。私はかゝる現象の出現をも十分に許すことが出來る。然しそれは決して性的任務の常道ではない。だから私が男女關係のある狂ひといつたのは、男女が分擔すべき生殖現象の狂ひを指すことになる。男女のその他の關係がいかに都合よく運ばれてゐても、若しこの點が狂つてゐるなら、結局男女の關係は狂つてゐるのである。

既に業に多くの科學者や思想家が申出たやうに、女性は產兒と哺育との負擔からして、實生活の活動を男性に依託せねばならなかつた。男性は、野の獸があるやうに、始めは甘んじて、勇んでこの分業に從事した。けれども長い歲月の間に、男性はその活動によつて益々その心身の能力を發達せしめ、女性の能力はある退縮を結果すると共に、益々活動の範圍を狹めて行つて、遂にはその活動を全く家稽のこと

にのみ限るやうになつた。かうなると男性は女性の分をも負擔して活動せねばならぬ故に、生活の荷は苦痛として男性の肩上にかゝつて來た。男性はかくてこの苦痛の不滿を醫やすべき報償を女性に要求するに至つた。女性は然しこの時に於ては、實生活の仕事の上で男性に何者をか提供すべき能力を失ひ果ててゐた。女性には單に彼女の肉體があるばかりだつた。而してその點から Prostitution は始まつたのだ。女性は忍んで彼女の肉體を男性に提供することを餘儀なくされたのだ。かくて女性は遂に男性の奴隷となり終つた。而して女性は自らがある以上に自分を肉慾的にする必要を感じた。女性は殊に著しい美的扮裝、(それは極めて外面的の。女性は屢〻練絹の外衣の下に襤褸の肉衣を着る)本能の如き嬌態、女性間の嫉視反目(姑と嫁、妻と小姑の關係はいふまでもあるまい。私はよく婦人から同性中に心を許し合ふことの出來る友人のないことを聞かされる)はそこから生れ出る。男性は女性からのこの提供物を受取つたことによつて、又自分自らを罰せなければならなかつた。彼れは先づ自分の家の中に暴虐性を植ゑつけた。専制政治の濫觴をこゝに造り上げた。而して更に惡いことには、その生んだ子に於て、彼等以上の肉慾性を發揮するものを見出さねばならなかつた。

これは私はいはないでも多くの讀者は知つて而して肯んずる事實であらうと思ふ。私はこゝでこの男女關係の狂ひが何故最も惡い狂ひであるかをいひたい。この墮落の過程に於て最も惡いことは、人間がその本能的要求を知的要求にまで引き下げたといふ點にあるのだ。男女の愛は本能の表現として純粹に近く且つ全體的なものである。同性間の愛にあつては本能は分裂して、精神的(若し同性間に異性關係の假想が成立しなければ)といふ一方面にのみ表現される。親子の愛にしても、兄弟の愛にしても皆等しい。然し男女の愛に於て、本能は甫めてその全體的な面目を現はして來る。愛する男女のみが眞實なる生命を創造する。だから生殖の事は全然本能の全要求によつてのみ遂げられなければならぬのだ。これが男女關係の純一無上の條件である。然るに女性は必要に逼られるまゝに、過つてこの本能的欲求を知的生活の要求に妥協させてしまつた。即ち本能の欲求以外の欲求、即ち單なる生活欲の道具に使つた。而して男性は卑しくもそれをそのまゝ使用した。これが最も惡いことだつたと私は云ふのだ。これより惡いことが多く他にあらうか。

樂園は既に失はれた。男女はその腰に木の葉をまとはねばならなくなつた。女性は男性を恨み、男性は女性を侮りはじめた。戀愛の領土には數限りもなく假想的戀愛が出現するので、眞の戀愛をたづねあてるためには、女性は極度の警戒を、男性は極度の冒險をなさねばならなくなつた。野の獸にも生殖を營むべき時期は一年の中に定まつて來るのに、人間ばかりは已む時なく肉慾の爲めにさいなまれなければならぬ。而かも更に惡いことには、人間はこの運命の狂ひを悔いることなく、殆んど捨鉢な態度で、この狂ひを潤色し、美化し、享樂しようとさへしてゐるのだ。

私達は幸ひにして肉體の力のみが主として生活の手段である時期を通過した。頭腦も亦生活の大きな原動力となり得べき時代に到達した。女性は多くを失つたとしても、體力に失つたほどには腦力に失つてゐない。これが女性のその故郷への歸還の第一程となることを私は祈る。この男女關係の墮落はどれ程の長い時間の間に馴致されたか、それは殆んど計ることが出來ない。然しそれが墮落である以上は、それに氣がついた時から、私達は樂園への

歸還を企圖せねばならぬ。一人でも二人でも、そこに氣付いた人は一人でも二人でも忍耐によつてのみ成就される長い旅に上らなければならない。

私はよくそれが如何に不可能事に近いとさへ思はれる困難な道であるかを知る。私も亦その狂ひの中に生れて育つて來た憐れな一人の男性に過ぎない。私は躓きどほしに躓いてゐる。然し私の本能のかすかな聲は私をそこから立ち上らせるに十分だ。私はその聲に推し進められて行く。その旅路は長い耽溺の過去を持つた私を淋しく思はせないではない。然しそれにもかゝはらず私は行かざるを得ない。

この男女關係の狂ひから當然歸納されることは、現在の文化が男女兩性の協力によつて成り立つものではないといふ事だ。現時の文化は大は政治の大から小は手柄の小に至るまで悉く男子の天才によつて作り上げられたものだといつていゝ。男性はその凡ての機關の恰好な使用者であるけれども、女性がそれに與かるためには、ある程度まで男性化するにあらざれば與かることが出來ない。男性は巧みにも女性を家族生活の片隅に祭りこんでしまつた。しかも家族生活にあつても、その大權は確實に男性に握られてゐる、家族に供する日常の食膳と、衣服とは女性が作り出すことが出來よう。然しながら饗應の鹽梅と、晴れの場の衣裳とは、遂に男性の手によつてのみ巧みに作られ得る。それは女性に能力がないといふよりは、それらのものが凡てその根柢に於て男性の嗜好を滿足するやうに作られてゐるが故に、それを産出するのも亦自ら男性の手によつてなされるのを適當とするだけのことだ。

地球の表面には殆んど同數の男女が活きてゐる。而してその文化が男性の欲求にのみ適合して成り立つとしたら、それが如何に不完全な內容を持つたものであるかが直ちに看取されるだらう。

女性が今の文化生活に與からうとする要求を私は無下に斥けようとする者ではない。それは然しその成就が、完全な女性の獨立とはなり得ないといふことを私は申出したい。若し女性が今の文化の制度を肯定して、全然それに順應することが出來たとしても、それは女性が男性の嗜好に降伏して自分達自らを男性化し得たといふ結果になるに過ぎない。それは女性の獨立ではなく、女性の降伏だ。

唯ゝ外面的にでも女性が自ら動くことの出來る餘地を造つておいて、その上で女性の眞要求を尋ね出す手段としてならば、私は女權運動を承認する。

それにも増して私が女性に望む所は、女性が力を合せて女性の中から女性的天才を生み出さんことだ。男性から眞に解放された女性の眼を以て、現在の文化を見直してくれる女性の出現を祈らんことだ。女性の要求から創り出された文化が、これまでの文化と同一內容を持つだらうか、持たぬだらうか、それは男性たる私が如何に努力しても、臆測することが出來ない。而して恐らくは誰れも出來ないだらう。その異同を見極めるだけにでも女性の中から天才の出現するのは最も望まるべきことだ。同じであつたならそれでよし、若し異つてゐたら、男性の創り上げた文化と、女性のそれとの正しき抱擁によつて、それによつてのみ、私達凡ての翹望する文化は成り立つであらう。

更に私は家族生活について申出しておく。家族とは愛によつて結び付いた神聖な生活の單位である。これ以外の意味をそれに附け加へることは、その內容を混亂することである。法定の手續と結婚の儀式とによつて家族は本當の意味に於て成り立つと考へられてゐるが、愛する

男女に取つては、本質的にいふと、それは少しも必要な條件ではない。又離婚即ち家族の分散が法の認許によつて成り立つといふことも必要な條件ではない。凡てかゝる條件は、社會がその平安を保持するために案出して、これを凡ての男女に強制してゐるところのものだ。國家が今あるがまゝの狀態で、民衆の生活を整理して行くためには、家族が小國家の狀態で強固に維持されることを極めて便利とする。又財產の私有を制度となさんためには、家族制度の存立と財產繼承の習慣とが缺くべからざる必要事である。これらの外面的な情實から、家族は國家の柱石、資本主義の根據地となつてゐる。その爲めには、縱令愛の失はれた男女の間にも、家族たる形體を固守せしめる必要がある。それ故に家族の分散は社會が最も忌み嫌ふ所のものである。

おしなべての男女も亦、社會のこの不言不語の强壓に對して柔順である。彼等の多數は愛のない所にその形骸だけを續ける。男性はこの習慣に依賴して自己の强權を保護され、女性はまたこの制度の庇護によつてその生存を保障される。而してかくの如き空虛な集團生活の必然的な結果として、愛なき所に多數の子女が生產される。而して彼等は親の保護を必要とする現在の社會にあつて（私は親の保護を必要としない社會を豫想してゐるが故にかくいふのだ）親の愛なくして育たねばならぬ。而して又一方には、縱令愛する男女でも、家族を形造るべき財產がないために、結婚の形式を取らずに結婚すれば、その子は私生兒として生涯隣保の擯斥を受けねばならぬ。

社會からいつたならば、かゝる缺陷は縱令必然的に起つて來るとしても、なほ家族制度を固執することに多分の便利が認められよう。然し個性の要求及びその完成から考へる時、それはいかに不自然な結果を生ずるであらうよ。第一この制度の强制的存在のために、家族生活の神聖は、似而非なる家族の交雜によつて著しく汚される。愛なき男女の結合を强制することは、そのまゝ生活の墮落である。愛によらざる產子は、產者にとつて罪惡であり、子女にとつて救はれざる不幸である。愛によつて生れ出た子女が侮辱を蒙らねばならぬのは、この上なき曲事である。私達はこれを救はなければならない。それが第一の喫緊事だ。それらのことについて私達はいかなるものの犧牲となつてゐることも出來ない。若しこの欲求の遂行によつて外界に不便を來すなら、その外界がこの欲求に適應するやうに改造されなければならぬ筈だ。

愛のある所には常に家族を成立せしめよ。愛のない所には必ず家族を分散せしめよ。この自由が許されることによつてのみ、男女の生活はその忌むべき虛僞から解放され得る。自由戀愛から自由結婚へ。

更に又、私は戀愛そのものについて一言を附け加へる。戀愛の前に個性の自己に對する深き要求があることを思へ。正しくいふと個性の全的要求によつてのみ、人は愛人を見出すことに誤謬なきことが出來る。而して個性の全的要求は容易に愛を異性に對して動かせないだらう。その代り一度見出した愛人に對しては、愛はその根柢から搖ぎ動くだらう。かくてこそその愛は强い。而して貴い。愛に對する本能の覺醒なしには、縱令男女交際にいかなる制限を加ふるとも、いかなる修正を施すとも、その努力は徒勞に終るばかりであらう。

二十四

もう私は私の饒舌から沈默すべき時が來た。若し私のこの感想が讀者によつて考へられる

ならば、部分的に於てでなく、全體に於て考へられんことを望む。殊に本能的生活の要求を現實の生活にあてはめて私が申出た言葉に於てさうだ。社會生活はその總量に於て常に顧慮されなければならぬ。その一部門だけに對する凝視は、往々にして人を迷路に導き込むだらう。私も亦部分的考察に走り過ぎた嫌ひがないとはいへない。私は人間に現はれた本能即ち愛の本能をもつと委しく語つてやむべきであつたかも知れない。然しもう云はれたことは云はれてしまつたのだ。

願はくは一人の人をもあやまることなくこの感想は行け。

二十五

あまりに明らかであつて、而かも往々顧みられない事實は、一つの思想が體驗的の檢察なしに受取られるといふことだ。それは思想の提供者を空しく働かせ、享受者を空しく苦しめる。

二十六

ニイツチエが「私は自分が主張を固執するために焼き殺される場合があつたら、それを避けよう。主張の固執は私の生命を値ひするほど重大なものではない。然し主張を變じたが故に焼き殺されねばならぬといふのなら、私は甘んじて焼かれよう。それは死に値ひする」といふ意味のことをいつたさうだ。この逆說は正しいと私は思ふ。生命の向上は思想の變化を結果する。思想の變化は主張の變化を豫想する。生きんとするものは、既成の主張を以て自己を金縛りにしてはなるまい。

二十七

思想は一つの實行である。私はそれを忘れてけゐない。

二十八

私の發表したこの思想に、最も直接な示唆を與へてくれたのは阪田泰雄氏である。この機會を以て私は君に感謝する。その他、私の內面的經驗に關はりを持つた人と物との凡てに對して、私は深い感謝の意を捧げる。

二十九

これは哲學の素養もなく、社會學の造詣もなく、科學に暗く、宗教を知らない一人の平凡な僞善者の僅かばかりな誠實が叫び出した訴へに過ぎない。この訴へから些かでもよいものを聽き分けるよい耳の持主があつたならば、而してその人が彼れの爲めによき環境を準備してくれたならば、彼れも亦僞善者たるの苦しみから救はれることが出來るであらう。

凡てのよきものの上に饒かなる幸あれ。

（一九二〇年三月十五日――三十一日）

著作年表

一八九五年（十八歳）
九月――斬魔劒

一八九八年（二十一歳）
遠友夜學校校歌

一八九九年（二十二歳）
花語り

一九〇〇年（二十三歳）
人生の歸趣（論文、「學藝會雜誌」第三十四、五號所揭）
札幌農學校校歌

一九〇一年（二十四歳）
リビングストン傳（森本厚吉と共著）
七月――鎌倉幕府初代の農政（札幌農學校卒業論文）
十一月――五日集（短、長詩）
札幌獨立教會（歷史、「聖書之研究」第十四、五・六號所揭）

一九〇三年（二十六歳）
五月――獨旅短信
七月――草いきれ

一九〇五年（二十八歳）
ブランド（研究、一九〇五、六年にかけ「校友會雜誌」に發表。更に一九一九年四月、「白樺」に再揭）

一九〇六年（二十九歳）
四月――イブセン雜感（一九〇八年三月「文武會報」第五十三號所揭）
かん〳〵蟲（小說、一九一〇年十月「白樺」所揭）

一九〇八年（三十一歳）
四月――米國の田園生活（「文武會報」第五十四號所揭）
十二月――札幌獨立教會沿革（「獨立教會」第三十七號附錄）
日記より（「文武會報」第五十四、五號所揭）

一九〇九年（三十二歳
二月――半日（短篇）

一九一〇年（三十三歳）
四月――シェンキウヰッチ「西方古傳」（飜譯、「白樺」所揭）
五月――二つの道（感想、「白樺」所揭）
七月――老船長の幻覺（一幕物、「白樺」所揭）
八月――も一度「二つの道」に就いて（「白樺」所揭）
十一月――叛逆者（ロダンに關する考察、「白樺」所揭）

一九一一年（三十四歳）
一月――或る女のグリンプス（後に「或る女」と改題、「白樺」に連載し始む）
二月――泡鳴氏への返事（「白樺」所揭）
四月――『お目出度人』を讀みて（「白樺」所揭）
同級生（雜文消息）

一九一二年（三十五歳）
三月――ガルスウォーシー『小さい夢』（摸譯、「白樺」所揭）

一九一三年（三十六歳）
二月――或る女のグリンプス（前篇「本集の『或る女』二十一まで」脫稿）
六月――ワルト・ホヰットマンの一斷面（「文武會報」所揭。更に一九一九年一月「大觀」に再揭）
草の葉（ホヰットマンに關する考察）

一九一四年（三十七歳）
一月―― ストリンドベルヒ「眞夏の夢」（飜

譯、「小樽新聞」所揭)
二月——新しい畫派からの暗示(「小樽新聞」所揭)
四月——An incident (短篇、「白樺」所揭)
七月——內部生活の現象
八月——幻想(「白樺」所揭)

一九一五年 (三十八歲)

三月——首途(「迷路」の序篇、「白樺」所揭)
宣言(七月—十二月「白樺」所揭)
九月——サムソンとデリラ(三幕戲曲、「白樺」所揭、未定稿)

一九一六年 (三十九歲)

一月——お末の死(短篇、「白樺」所揭) 大洪水の前(四幕戲曲、「白樺」所揭、未定稿)
三月——フランシスの額(短篇、「新家庭」所揭)
四月——「惠迪寮歌集」序
七月——クロポトキンの印象(「新潮」所揭)
八月——『松蟲』の序と跋
潮霧(短篇、「時事新報」所揭)
十一月——自我の考察(東北帝國大學農科大學辯論部講演會講演)

一九一七年 (四十歲)

一月——『聖書』の權威(「新潮」所揭)
二月——『或る女』前篇の書後
三月——ミレー禮讚(「新小說」所揭)
五月——死と其の前後(戲曲、「新公論」所揭)
六月——惜みなく愛は奪ふ(「新潮」所揭)
七月——著作集に就いて。藝術制作の解放(「大觀」所揭) 平凡人の手紙(短篇、「新潮」所揭) カインの末裔(短篇、「新小說」所揭)
八月——『平凡人の手紙』に就いて(「讀賣新聞」所揭) クララの出家(短篇、此月十五日執筆、九月「太陽」所揭) 實驗室(短篇、此月十九日執筆、九月「中央公論」所揭)
九月——凱旋(短篇、此月八日執筆、十月「文章世界」所揭) 奇蹟の詛ひ(對話、此月二十日執筆、十月「東方時論」所揭)
十月——私の母(感想、「新家庭」所揭) 云ひ度い事二つ(感想、「中外」所揭) 藝術を生む胎(感想、「新潮」所揭) 迷路(長篇、「中央公論」所揭)
十二月——四つの事(感想、「新潮」所揭) 岩野泡鳴氏に(「讀賣新聞」所揭)

一九一八年 (四十一歲)

一月——曉闇(「迷路」續篇、「新小說」所揭)
小さき者へ(短篇、「新潮」所揭) 動かぬ時計(短篇、「中央公論」所揭)
二月——藝術を造るものは所謂實生活に非ず(感想、「新潮」所揭)
三月——死を畏れぬ男(小說、「新時代」所揭)
四月——想片(感想、「新潮」所揭) 林檎の野(「花の趣味と各國民性」といふ問に答へて、「新小說」所揭) 石にひしがれた雜草(小說、「太陽」所揭) 生れ出づる惱み(小說、「大阪毎日新聞」に一部發表)
六月——武者小路兄へ(此月二十日執筆、七月「中央公論」所揭)
七月——ある六月の日記(「新潮」所揭) 若き友に(此月九日執筆八月「靑年文壇」所揭)
八月——私の友達(「文章俱樂部」所揭) 大なる健全性へ(「文章世界」所揭)
九月——讀者に(「白樺」及び「新しき村」所揭) 旅する心(「讀賣新聞」所揭) 著作集に就いて
十月——運命と人(感想、「中外」所揭) 予に對する公開狀の答(「新潮」所揭)
十二月——私の父と母(「中央公論」所揭)

一九一九年 (四十二歲)

一月——小さき影(五日—十二日「大阪毎日

新聞」所揭）

二月――御嶽教の中教正となつた祖母（「中央文學」所揭）　批評といふもの（「早稻田文學」所揭）　松井須磨子の死（「新潮」所揭）　雜信一束（「我等」に連載し始む）

三月――『リビングストン傳』の序（第四版の序文）　將來の新劇團に對する二三の註文（「早稻田文學」所揭）

四月――「野性の呼聲」あとがき　春（散文、「新小說」所揭）

五月――往來雜記（感想、「大阪朝日新聞」所揭）「或る女」後篇脫稿（六月著作集第九輯に於いて發表）『或る女』の後篇の書後

七月――若き友の訴へに對して（「新潮」所揭）

九月――『リビングストン傳』の序（第五版の序文）

十月――サムソンとデリラ（完稿）　大洪水の前（完稿）　聖餐（三幕戲曲、三十一日完稿）

十一月――帝展の日本畫より石山氏のそれへ（「太陽」所揭）『三部曲』の書後。　文學は如何に味ふべきか（講演筆記、「女學世界」所揭）

一九二〇年（四十三歲）

一月――內部生活の現象（「婦人の友」所揭）　文藝と「問題」（「新潮」所揭）　ルベックとイリーネのその後（感想、「文章世界」所揭）　美術鑑賞の方法に就いて（「太陽」所揭）

二月――イブセン研究（二、三月「大學評論」所揭）

三月――自分に云ひ聞かせる言葉（感想、「改造」所揭）　惜みなく愛は奪ふ（論文、十五日―三十一日）

四月――美術鑑賞の方法に就いて再び（「雄辯」所揭）　藝術に就いての一考察（「中央公論」所揭）　婦人解放の問題（「改造」所揭）　ケーベル博士小品集（批評、「著作評論」所揭）　水野仙子氏の作品に就いて（『水野仙子集』の跋、此月二十五日深更）　再び本間久雄氏に（此月六日稿。六月「早稻田文學」所揭）　生活と文學（論文、「文化生活研究」所揭）

五月――溝を埋めよ（論文、「婦人公論」所揭）　價値の否定と固定と移動（論文、「人間」所揭）『惜みなく愛は奪ふ』の書後（此月八日夜）

六月――信濃日記（「新家庭」所揭）

七月――イブセンの仕事振り（「新潮」所揭）　三つの希望（十五日「婦人俱樂部」所揭）

八月――『槐多の歌へる』（批評、「著作評論」所揭）　愛（米川正夫氏に、二十九日「時事新報」所揭）

十月――『悲痛の哲理』（批評、「著作評論」所揭）一つの提案（「女性日本人」所揭）　自分自身の覺醒（文學者の女性觀、「婦人公論」所揭）　卑怯者（短篇、二十三日ホヰットマンに就いて（新人會第二回學術講演會に於いて）　旅する心の書後（十日）

十一月――文藝家と社會主義同盟に就いて（「人間」所揭）

備考――運命の訴へ（小說、未完結、一九二〇年春作とのみにて月日不明）

一九二一年（四十四歲）

一月――自己の要求（「改造」所揭）　秋（散文、「婦女界」所揭）　藝術の不變性（能樂文藝講演會にて、「謠曲」所揭）　白官舍（長篇、「星座」の前半、「新潮」所揭）

三月――一人の人の爲めに（感想、自由教育」所揭）　生活と文學（完稿）

四月――雜信一束（完稿）「小さな灯」の書後

五月――地方の青年諸君に（「寸鐵」所掲） 美を護るもの（評論、文化生活講演集『私共の主張』所掲） 泉（文化生活講演集『私共の主張』所掲）
六月――餘裕と文化（論文、「文化生活」所掲）
七月――紅海を離れて（散文、「週刊朝日」所掲） 筆頭語（「新文學」所掲） 自然と人（「文化生活」所掲）
十月――ホヰットマン詩集(1)出づ
十一月――生活といふこと（「文化生活」所掲） 藝術家の生活に就いて（「文章倶樂部」所掲）
備考――一房の葡萄、溺れかけた兄妹、碁石を飲んだ八つちやん、僕の帽子の話（以上童話四篇、一九二一年作とのみにて月日不明

一九二二年（四十五歲）

一月――宣言一つ（「改造」所掲） 藝術に就いて思ふこと（「大觀」所掲） 自由は與へられず（「文化生活」所掲） 驚異（同上） 廣津氏に答ふ（十九日「東京朝日新聞」所掲） 第四階級の藝術（一日「讀賣新聞」所掲） 片輪者（童話、「良婦の友」所掲）
二月――生活よりジャーナリズムを排せよ（「文化生活」所掲） 野尻湖（「婦女界」所掲） 雪の日の思ひ出（「母の友」所掲）
三月――片信（「我等」所掲） 主義はない（「野依雜誌」所掲） 謠曲『綾鼓』（「新潮」所掲） 御柱（一幕物、「白樺」所掲）
四月――反キリスト教問題より一般宗教批判へ（談話筆記、「讀賣新聞」所掲） 藝術と革命の關係（一、二日「時事新報」所掲） 私の態度（「文章倶樂部」所掲） 星座（完稿、五月著作集第十四輯に於いて發表） 小兒の寢顏（感想、「文化生活」所掲） 本書を讀みて（『涙の底から』の序）
五月――子供の世界（「報知新聞」所掲） 想片（「新潮」所掲） 互の立場を認めよ（「文化生活」所掲） ホヰットマンに對する一英國婦人の批評（「學藝」所掲） マルクス女史の女に就いて。教育者の藝術的態度（「帝國教育」所掲）
六月――己れを主とするもの（「文化生活」所掲）『太陽の沈みゆく時』の序（二十九日朝） 繰り返しの生活を憎む（「報知新聞」所掲） 生活の歐化と文化生活（「婦人公論」所掲） 言葉と文字（「オヒサマ」所掲） 新舊藝術の交渉
七月――描かれた花（「改造」所掲） 生命によつて書かれた文章（「文化生活」所掲） 獨りゆく者（同上） 子供の素樸さ（「新潮」所掲） 三大偉人の懺悔（「婦人世界」所掲）『米國學生生活』の序（二十六日午後）『藝術と生活』の書後（三十一日夜）
八月――心に沁みる人々（「中央公論」所掲） 火事とポチ（童話、「婦人公論」所掲） 上田博士の就任を機に漢字制限に就いての意見を徵されたのに答ふ（三日「讀賣新聞」所掲） 木曾山中（「婦女界」所掲）
九月――文藝に就いて（「婦女新聞」所掲）
十月――「泉」を創刊するに當つて。ホヰットマンの『言葉の歌』から。ドモ又の死。小作人への告別（以上「泉」第一卷第一號所掲） 愛に就いて（大阪毎日新聞社主催文化大學講座講演筆記） 道德と道理（國民婦人會講演會に於いて）
十一月――『靜思』を讀んで倉田氏に（「泉」第一卷第二號所掲）
十二月――前號記事梗概。『靜思』を讀んで倉田氏に（承前）（「泉」第一卷第三號所掲）

一九二三年（四十六歲）

一月――酒狂（小說）。文化の末路（感想）。

愛の表現（ワルト・ホヰットマン）（以上「泉」第二卷第一號所揭）ワルト・ホヰットマン（『草の葉』所揭）

二月――或る施療患者（小説、「泉」第二卷第二號所揭）ホヰットマン詩集2出版

三月――斷橋（一幕戲曲）。ホヰットマン第二輯を出すに當つて。永遠の叛逆（感想）（以上「泉」第二卷第三號所揭）『濕地の火』の序

四月――骨（小説）。瞳なき眼（詩其一）。詩への逸脱（感想）（以上「泉」第二卷第四號所揭）農村問題の歸結（「青年」所揭）農場開放の顛末（「帝國大學新聞」所揭）

五月――親子（小説）。瞳なき眼（詩其二）（以上「泉」第二卷第五號所揭）文化生活の基礎（「文化生活」所揭）藝術教育私見（「藝術教育」所揭）

六月――獨斷者の會話（對話劇）。バルビュスの『クラルテ』の譯文を讀みて（感想）（以上「泉」第二卷第六號所揭）農民文化といふこと（「文化生活」所揭）時評三つ（「女性改造」所揭）文化に就いて（『文化講演集』所揭）

七月――行き詰れるブルジョア（「文化生活」所揭）

八月――歌十首（絕筆、「泉」終刊有島武郎記念號所揭）

備考――秋風（渡米前・札幌時代）たとへばなし（歸朝後・札幌時代）北歐文學が與ふる教訓（未定稿、同上）テニスン『ドラ』（譯詩、同上）の外、自著の廣告文がある。

絕筆（歿後書齋で發見されたもの）

世の常のわか戀ならはかくはかりおそましき火に身はや燒くへき

幾年の命を人は遂けんとや思ひ入りたるよろこひも見得

修禪する人の如くに世にそむき靜かに戀の門にのそまむ

道はなし世に道は無し心して荒野の土に汝か足を置け

さかしらに世に立てりける我かこれ神に似るまで愚かしき今

生れ來る人は持たすなわかうけし悲しき性とうれはしき道

雲に入るみさこの如き一筋の戀とし知れは心は足りぬ

蟬一つ樹をは離れて地に落ちぬ風なき秋の靜かなるかな

明日知らぬ命の際に思ふこと色に出つらむあちさゐの花

命絕つ咎しあらは手に取りて世の見る前に我を打たまし

「有島武郎集」の後に

誰の作を讀むにしても、其の作者の生活と思想とに結び付けて考へて見る事は、忘れてはならない事である。先生の場合に於て、特にこの事は大切である。

私は先生の生涯を、三つの時代に分けて見たい。

（一）一九一〇年（明治四十三年）より一九一六年（大正五年）まで。先生三十三歳の時から、三十九歳の時まで。――「白樺」創刊の年から、安子夫人死去の年までである。

（二）一九一六年より一九二〇年（大正九年）、先生四十三歳の時、「惜みなく愛は奪ふ」發表の歳まで。

（三）一九二〇年以後。

先生が札幌農學校在學時代、忠實なキリスト教信者であつた事は、作家としての先生を見る場合にも、看過出來ない事實である。信仰を見失ひ始めてから、始めて先生の藝術に對する眼が、本當に自由に發達し始めたのであるから。

米國留學時代に信仰を見失つて、迷路に立たれた時、先生が「破戒僧の樣な稍〻棄て鉢な心持」（『リビングストン傳』の序）で入つて行かれたのが文學である。

三年有餘の留學を終へて歸朝した先生の生活にとつて、最早キリスト教は何の力にもならなかつた。先生は、「一人の文學愛好者として、教員でもして一生を過ごさうと云ふ決心」を持つて歸朝されたのである。そして札幌は、信者としての先生を、教職に迎へたのである。淋しい雪國に押れて居られた幾年かは、先生の魂を育てあげるのには十分な年月であつた。夫として、父としての平和な月日が、魂の苦惱を包んで過ぎて行つた。かうして創作の春を待つ準備は十分に出來て居た。

明治四十三年四月、雜誌「白樺」が創刊されると共に、先生の文學的活動は始まつた。その心の準備に於て、その教養に於て、既に十二分なものがあつたと言つて好い。併し、私の言ふ第一期に於ける勞作は、『惜みなく愛は奪ふ』に表現されて居る思想の萌芽である數個の論文以外には、短篇が多い。それ等の短篇は、十分に黎明を思はしめるものがあつても、未だ曉霧を脫し得ぬ魂の幻想である。

『或る女』の前篇（本集の「或る女」二十一まで）は、初め「或る女のグリンプス」と題して一九一一年一月から一九一三年三月まで「白樺」誌上に連載されたものである。作品として、構想の上からも表現の上からも多くの缺點があるにしても、この作は先生に取つて好い試煉であつたに違ひない。この作に就て、先生は次の如くに語つて居られる。

「畏れる事なく醜にも邪にもぶつかつて見よう。その底には何があるか。その底に何もなかつたら、人生の可能は否定されなければならない。私は無力ながら敢てこの冒險を企てた。」（有島武郎全集第四卷、附錄六一頁）

讀者は、胸を開いて、早月葉子なる「或る女」に接しなければならない。彼の女は、女性の情愛を以て、先づ何よりも先きに、自分の神經の末端までも愛した。女性の盲目さを以て、自分のあらゆる才能を生かさうとした。併し、人は如何に彼の女を取扱つたか。如何に彼の女は周圍に反撥したか。――先生は、子に盲目な母の愛

を以て葉子を生かして居る。先生の心の純情さは、生きようとするものは、微細なものまで殺し得なかつたのである。純にして清朗な心を開いて人生の底を見極めようとして、其處に「何」を見出し得たか。「或る女」の後篇（二十二以下本集の「或る女」）が一九一九年に至つて完成した事、及びその終末が如何に暗いものであるかを、讀者は考へて見るが好い。

『或る女のグリンプス』は、先生の眞に尊い初期の試作である。併し、作家としての先生の眞實な活動は、先生が教會を退き、教職を辭し、東京に轉住してから以後の事である。札幌は昔の先生を知り過ぎて居て、先生の更生を虚心に迎へてくれる處ではなかつた。その地を離れて始めて、先生は新しい生活を建設する事が出來たのである。生活と藝術とを不即不離に考へる先生にとつて、藝術に徹する爲めには、先づ生活の更新をしなければならなかつた。

生活更新の意志は漸次に固められつゝあつたのであるが、それを急激に實行せしめたのは、夫人の病であり、その死去である。先生の藝術は、夫人の死に依つて誕生したと言つても、過言でないと私は思ふ。『小さき者へ』一篇は、先生の再生の宣言である。信仰を棄てて心の支柱を失ひ、夫人の死に會つて家庭生活の支柱を失ひ、凡てを失つて始めて、先生は藝術に再生したのである。母に取殘された小さき者の運命を思ふ先生の愛憐の情に、讀者の瞳はぬれるであらうが、先生の瞳から輝き出る悲壯な人生肯定の意志を見落すほど、讀者は眼を曇らせてはならない。内に潛められた底力ある生きんとする意力は、一篇の言々句々に表はれて、讀者をして運命を直視せしめずにはおかない。小さい三つの影を背に負つて、力強く歩む先生の姿の尊さ。

「お前達の母上の死によつて、私は自分の生きて行くべき大道にさまよひ出た。」

──大道に踏み出だして以來、即ち一九一六年以後の先生の仕事は、量に於て多く、質に於ても殆ど先生の代表作のすべてが、僅か數年間に完成された程、素晴しいものがあつた。この集に收められた三つの名作も亦、私の云ふ第二期の間に書かれたものである。

『クララの出家』は、『カインの末裔』と好い對照をなす作品である。

「これも正しく人間生活史の中に起つた實際の出來事の一つである。」

と云つて、聖クララの清い魂の戀が物語つてある。かくも清い聖クララも亦、人間であつた事を、はつきりと先生は見定めたのである。『クララの出家』に於て、先生は人間を清さの限りに於て眺めて見たのである。

そして、『カインの末裔』に於て、人間の醜惡の限りを見た。地に生きる生物として人間の姿が、まざ〳〵と描寫されて居る。人間性の二つの兩極端を追求したこれ等の二作に於て、先生の人生に對する視野が如何に擴大されたかが窺はれる。しかもこの二作は作品として見るも、成功したものと言つて好い。殊に後者が人間性の醜惡な一面を描きながらも、藝術的氣品を失つて居らない事は、先生の人としての氣品があつて始めてなし得る事である。

『生れ出づる惱み』の印象は、更に大きく廣いものがある。

「凡て、誕生を待つよき魂に對する謙遜な讃歎を唱へようとした。自然は大きな産蓐だ。私はその産蓐の一隅につゝましく坐つて華やかな誕生を祝する歌手でありたい。」（有島武郎全集第四卷、附錄六一頁）

と云つて居られる。例ひ此の一篇が、素材のまゝの荒けづりなものであつたにせよ、その力強く迫る人間をめぐる自然の原始的な底力を感

ぜぬものはあるまい。

人間の姿を有りのまゝに描寫し、ある時は淸く、或る時は醜悪の極を直視せしめ、そして、運命の黒い瞳に見据ゑられて居る人間の生命をまで思はしめる、廣く深い作は、先生の作をおいて他に現代日本文學にその比を見ない。しかも、その人間愛の深さに於て私は特に先生の作品を擧げたい。その作品の氣品は全く先生の人間愛から溢れる芳香である。

先生の作品を讀んで、私達が先づ感じることは、同じ血につながる同族に感じる親しさである。疑ふ者は暫く先生のあの鋭角的な表現の印象から身を退けて、先生を眺めて見るが好い。私の言葉は、その後に首肯されるであらう。

何處からあの特異な表現形式が産れて來るのだらう。凡てのものを愛して止まぬ愛情と、僅かな惡も退けずにはおけぬ鋭利な反省とは、一個の人間先生の心の隅にあるものまでも批判解剖し盡くし、生きるものの凡ての運命までもよりよくせずにはおかなかつたのである。この情熱と理性が筆に表はれた時、如何に鋭いものであつたか。この鋭い表現を心に沁み入らせてから、暫く身を退いて先生を眺めて見るが好い。

先生の思想の凝結したものとも言ふべき述作、『惜みなく愛は奪ふ』を讀むにしてもこの態度を忘れてはならない。「少くとも五年以上の歳月を折りたゝんで築きあげた」（有島武郞全集第四卷、附錄六二頁）と言つて居られる此論文は、その表現形式の特異さに於て先づ人の心を動かす。その表題に於て、「本能生活」の强調に於て。故に、讀者に一歩退いて讀む心の準備がなかつたら時として誤つて讀まれないとも限らない。

若し、讀者にしてこの準備があるなら、その内容を私が解說するまでもない。讀者は先づ讀み行く内に、先生の心へ心へと牽き入れられるであらう。讀後、離れて靜に先生を眺めるなら、純なる先生の魂を見る、純なる魂の苦鬪を見る、と共に、讀者は人間有島氏に限りないなつかしさを覺えるであらう。純にして平凡なる人間、純なるが故に尊く、平凡なるが故にしたはしい。

純なる平凡人有島武郞の魂の苦鬪の跡、『惜みなく愛は奪ふ』の一篇を、若し熟讀するならば、幾多の疑問と衝動を起したその死に至る肯定から否定への徑路を辿ることも亦、至難の事ではあるまい。

斯くも强く鋭く叫ばれた自己肯定も、やがて崩れはじめなければならなかつた。他から糧を奪ひぬいて、伸び行くまゝに獨り生きるには、先生の心は餘りに廣く暖かすぎた。自我の檢討を終へた先生は、眼を轉じて社會相を觀察し始めた。自己意志の肯定を、更らに社會に生きる一人としての正當なる生活を以て、裏付けようとした。

私の謂ふ第三期の勞作は、第二期のものと比較するならば、より力强い太い線で描かれた人生觀察であると言へる。『ドモ又の死』にみるやうな、原始的な生活意志がある。自らの手で生きるが故に新鮮な力がある。自由にして自然なるが故に妥協を知らぬ。妥協を知らぬものは現實の社會の下層に沈湎しなければならぬ。自然にして自由なる生活を、押しひしぐものは何か。

――「永遠の叛逆者」の前奏曲は奏ではじめられた。その途を阻むものは、焼きつくされるであらう。

生命まで燃燒しつくして――何處へ行く。獨り行く者の跡を追ふものは誰か。

昭和二年六月

織田 正信

有島生馬集

小序

有島生馬

わが藝術をわちわが憧憬までである希望でない、正義でも光明でもない、もし太陽が夜のなく佛に三つの不能がなく、栗の葉が蛇のやうなのだつたら、又胃が満の胃袋が餓のなかつたら、私は文学などに来もしなかつた、然しあの不可触ささもの餓らしく廣能なる精神ある人が私の氣まぐれならない、どこより不老不死な医術を発見を経給して何ぞ萬人無意がである、私は一度だつて宗教と理想や、道徳と完成や、人道社会と出現なりし無駄な心得がなかつたのかけたこともない。

私乃藝術は絶対的な不満な寂しさから出発してゐる、だから私はその藝術の形、それ自身より、驚異尚早真実悦惚を求めて行くのだ。

鳩飼ふ娘

三度目に妻が逃げ出した時、もう無駄だと思つた。幾歳になつてもあの癖は直らない、私は直接男に手紙をやつて、今度はもう歸つて來られないやうな埒を作つた。

私は名論卓説に耳を傾けるのが嫌になつた。役所で其向の議論が湧いて面倒になる事があつても、默つて濟む事なら、打捨て置いた。さうすると大概は夫れで片付いて終つた。殊に問題が人生觀などいふ雜談に移ると席に堪へられなくなつた。皆んな蜃氣樓だ、私には唯ださうとしか響かなくなつた。好きだつた專門以外の書物も閉ぢた、同じ人間を神様のやうに崇めるのも興がなくなつた。

女の居ない家の中は火が消えたも同じだつた。がらりと内の容子が變つた。壁でも窓でも愛翫してゐた古畫でも、串合せて今が今まで自分を詐つてゐたやうに、急に素氣なく冷かな態度に變つた。トラス・テヴェレの借屋は私一人には廣過ぎもしたし、明るい近代風の建築にも厭きが來た。どつちにしても永く其家に住まつてゐる氣はなくなつた。

羅馬の公使館は其頃Ｍといふ町にあつた。歸途は電車にも乘らないで役所から極く近いヴィラ・ボルゲエゼ公園を一周し、ピアッツァ・デル・ポポロの門から再び市内に這入つてテヱレ河を渡り、歩いて自家へ歸るのを日課にしてゐた。その役所から公園に行く近道にＳ町といふ東西の短い通があつた。朝夕僅か日光が射す許りで、霜解けなどは却々乾かなかつた。一體このルドヴヰコといふ區は貴族的な土地柄で、建築も新しいのが多かつたのに、Ｓ町許りは例外のやうに周圍と異つてゐた。近所の往來には門構の立派な屋敷か、店といつても花屋か帽子屋の飾窓があるに過ぎなかつた。所がＳ町の角には古風な藥種屋があつた。其隣が靴屋、それに並んで荒物屋、肉屋、八百屋、仕立屋といふ風で、全く他と調子が變つてて、陰氣な貧乏臭い空氣がいつも漂つてゐた。私は好んで其處を通抜けた。すると小娘が木履をつゝかけて自分の前を驅け拔けた。やつと歩ける位な子が倒れて大きな口をあいて泣いた。こんな些細の事まで妙に私の氣を惹いた。何んでも裏表のない事が懷かしかつたのだ。Ｓ町を出ると廣いヴェネトの並木通で、古い市壁の一部と公園の入口とが見えた。其處では自用の自動車が着飾つた人々を乘せて勢よく走つてた。自分は沈んだまゝ片側に寄つて公園へ歩を移した。

謝肉祭の頃になると町を流して來る藝人が多くなつた。私は或る夕方Ｓ町で十許りになる男の子が盲目の爺の手引しながら俗謠を唄ふのを聞いた。疳の高い張金のやうな細い―軟かな少年の肺が今にも裂け相な聲―それが總身の毛孔から心臟の方へ傳はつて身體を震はせた。私は思はず立停つた。小錢が方々の窓から往來の石に落ちて跳返つた。其翌日Ｓ町の南側の中程に黄色な貸間札が下つてゐるのを見付けて一通り見た丈けで直ぐ契約した。それから一週間もして、又元の氣輕な下宿生活に歸つた。チュリヤが出奔してから二月、結婚してからかれこれ八年目で。

七階と七階の間に挾まれた五六間幅のＳ町は狹苦しくつて薄暗かつた。それでも朝夕の日影は壁の灰色の石に光を觸れた。日が高くなる

と屋根と屋根との間を斜にぎらぎらした日光が敷石の上にまでとゞいた。然しほんの日盛の一時だつた。比較的緯度の高い羅馬のこんな町では日光のいかに烈しく射す時でも陰はひやりと感じられた。

部屋にゐさへすれば私は往來を眺め、向側の壁を見、壁で隱されてゐる日常生活の瞳のやうなその窓を見て暮した。又靜かに耳を傾けてこの井戸の底に似た往來で起る音、その反響にまで注意を拂つた。物賣りの呼聲は段々近代から消え行きつゝあるものの一つであるが、伊太利では未だその詩的な習慣が殘つてゐる。色彩の施してある荷馬車でアチエトオザ噴泉の罎詰になつた飲料水を賣つて歩く、「アアクワアチエトザー！」と云ふ謠のやうな呼聲は愉快な波動を硝子に傳へた。私はいつもその呼聲で目を醒ました。ナポリの血のやうな蜜柑でも、紫緋の無果花でもかうして賣りに來た。すると高い五階六階の上から、小さな籠に錢を入れて下げてやる。それに相當するだけの果物が籠に盛られる。Va bene! の掛聲で綱が手繰られる。小さな籠が搖れ乍ら引上げられる。私はそんなことも子供のやうに眺め興じた。前の靴屋では每日々々同じやうに釘を打つてゐる。仕立屋の亭主は朝から晩までミシンをがたがた云はせながら毎時も同じ場所に坐つてゐる。之等忍耐強い然も快活な人々の單調な生活を見ながら、自分も慰めの少い單調な日を送つてゐた。

私の目や耳の友達になつて呉れたものは獨り靴屋と仕立屋の二人にはとゞまらなかつた。尙ほ樣々な役者が代る〴〵狹い町の中に表はれてやゝもすれば考へ込む私を紛らして呉れた。夫れは人間許りとも限らなかつた。肉屋の犬も、八百屋の鸚鵡も、六階の黑猫も、向ひの鳩も皆な私にとつては友達だつた。互に何一つ言葉を交はすのでもなかつたから、神さん達が八百屋で油を賣つて行くのも、犬の吠えるのも、洗濯屋の娘が一日中唄つて居るのも、乃至鸚鵡がパパ、ママとけたゝましく囀るのも、私にはどうせ同じ事だつた。私のエゴイズムはかうして自分を相手から認められる事なしに、此町の諸ての物から慰安や友誼を受けつゝあつたのである。

私の部屋と同じ三階の、眞向うの窓に鳩が一羽飼つてあつた。綠色の籠の中で聖靈のやうに眞白な鳥は末廣に似た尾を擴げたり、羽搏をしたり、玉を呑むやうな鳴聲をしたり、退屈な風もせず日を送つてゐた。

朝自分の目醒める頃は籠は大概もう窓の外に置かれてゐた。弱い春の日があたると鳩は小さな頭を縮めて目を細くした。アヴェ・マリアの鐘が鳴る頃には又部屋の中へ運ばれた。娘達が其間に代る〴〵水や豆やパン等を入れてやつた。云ひ忘れたがそのアッパルタメエントには帽子屋の一家族が住んでゐて、年期奉公といふ風な四五人の若い娘達が每日通つて來てゐた。然し主に鳩の世話をしたり、日曜には籠を綺麗に洗つてやつたりするのは矢張り家の娘のナナであつた。

かの少娘が窓の所へ來て鳩に餌をやつたり、籠を搖ぶつたり、話をしかけたりしてゐると母親がいつも大きな聲でナナ！ ナナ！ と呼ぶので、直ぐ私は娘の名を覺えた。それにナナはどうかすると逃げて行つたチュリヤに似てゐると思ふ事があつた。それでなくともナナにしろ白鳩にしろ、大切な私の友達だつたから、その名は假令一度聞いた丈けでも忘れて終ふやうな事はなかつたらうと思ふ。

ナナは恐ろしく色の白い權のある、どつちかといへば少し寂しい顏容の娘で、神經質らしく笑ふ事も少く、いつも眞面目腐つてゐた。チュ

リヤの方がもつと肥えて頰が赤く愛嬌があつた。さう比べてみると餘り似てはゐない。髮の毛の栗色な事や目の葡萄のやうに青い事位しか共通な點はなかつた。尤も其頃はヂュリヤに似た女をよく方々で見るやうに思つたから、ナナとヂュリヤの空似も自分でさへ的にはしてゐなかつた。

ナナは每時も樺色の上着を着てゐた。夫れが色白な彼女に似合つた。時々鳩を籠から出してやる事があつた。袖をまくり上げた細々した少女らしい腕に搦まつて鳩が勢よく翼を擴げ飛び立ち相な風をした。すると羽根をそつと押へて小さな圓い頭を頰にすりつけて可愛がつた。鳩はくつくと鳴いて彼女の翫物になるのを喜んでゐるやうだつた。若しヂュリヤの娘があつたら、あんなでもあらうかと思ふ時もあつた。ナナはやつと十五位に私の目にはみえた。

もうシロッコのやうな生溫い南風が吹いて、堅く閉されてゐた窓も開かれ窓掛の間から內の中の生活が窺はれるやうになつた。ナナは四五人の娘達と一緒に大きな仕事臺に向つて帽子作りに餘念がなかつた。月曜日の朝早くから、土曜日の遲くまで、又月曜から土曜の夕暮まで、彼女等は絕間なく他の帽子許り作る單調な月日を送つた。こんな閉詰められた休息のない日々の生活を見ると、若い娘達を憐んでか、それとも自分自身を憐んでか、それも分らないやうな惱みを感じた。牢屋だ、內縛も外縛も、放たれるのも繋がれるのも、自分のやうな氣樂な人間も、あの籠の鳥も皆んな同じ事だ。到る處の陰に息苦しいやうな束縛の隱れてゐるのが慘く堪へがたく目に付くやうになつた。

S町へ來てから朝はよくボルゲエゼ公園の牧場へ朝飯の代りに牛乳を飲みに出かけた。柵の上へ角のある首を乘せた牛が大きな滑かな舌で鼻を嘗めてゐる傍に、淸洒な椅子テーブルが備へられ、搾りたての乳とパン、菓子などが散步に來る客の爲に供されてゐた。或日曜の朝、確か四月三四日頃だつたと覺えてゐる、私は例の通り牛乳店を出てから公園の奧の方へ進んで行つた。大きな樫の下に芝生が色々な草花を咲かせ始めたのは既に二月以來の事である。羅馬の草は一年中靑々してゐると云つていゝ位である。細い砂利を混へた小徑は綺麗に掃除が出來てゐて軟い朝の空氣も快かつた。私は少し下坂にかゝつて大きな帶のやうな窪地の傾斜に臨んで立つた。森蔭になつたその一帶の濕地は古くは小川でも流れてゐた跡かと思はれた。涸れ果てた流の跡には半圓形の腰掛臺や、古びた噴水が僅かにあちこち殘つてゐた。大理石を積上げた噴水の土臺は朽ち、靑苔の厚い衣で掩はれてゐる。その間から淸水は滲み出るやうに湧いてゐる。菖蒲のやうな草が一面に繁茂した部分もあつた。此谷に沿つて段々下つて行くと動物園から流れて來る瀧で一つの小川が出來、やがて丘の陰の沼に落ちてゐる。

私は窪地へ下りて行つた。そこには見上げるやうな大木が澤山あつた、その枝の下から遠くに運動場が廣々と見えた。自轉車に乘る人、フット・ボオルを蹴る人、タムブレルロといふ片面の太鼓のやうなものを右手に持つて球を打合ふ遊戲者等が豆のやうに走り廻るグラウンドの上に、一面に大きな日向があつた。眞直ぐ窪地を橫ぎつて上ると「天上の愛地上の愛」などの名畫が藏められてゐるヴヰラ・ボルゲエゼの美術館が一軒寂し相に建つてゐる。私はそつちに行くのはやめて右に曲り窪地に沿つて次第に登つた。樹木はやつと新芽を吹き出した許りであつた。足下には枯葉が積重なつて黑く朽ちてゐた。奧床しい一種の苔の匂が周圍に充ちてゐる。私は腰でも下ろされ相な場所を求める爲可成り長い間步き廻つた。段々濕つぽい窪地

を離れ灌木の林へ來た。其處等には珍らしく鳥が鳴いてた程、閑靜な別天地であつた。
　坐り心地のいゝ木の根を選んで新聞を讀みかけたまゝ林を見てゐると、近頃になく晴々した氣分になつた。時間はないやうに寂かだつた。
その寂寞を破つて突然頭の上に足音が聞えた。私の陣取つた直ぐ背後には一つの低い土堤が築かれてゐて前の窪地の方しか見る事は出來なかつたのだ。その土堤の上へ一人の少年が飛び上つて私を驚ろかしたのであつた。然しその少年は私より一層驚ろいたもののやうにこつちをみて顏を赧くしながら直ぐ又土堤の裏に飛び下りて隱れて終つた。
　少年は十六七でもあらうか、粘のついた白カラアなどもせず、職人か何かのやうに縞のある布で二巻程頸を卷いて前で襟飾りのやうにその端を結んでゐた。希臘風な輪廓の正しい顏容はすぐ私の美術心をそゝつた。彼は神話中の人物かなんどのやうな印象を薄暗い森の中に殘して置いて消えて終つた。少年の皮膚の色艶や活々した動作が私の胸に考へられたと云ふより、見てゐるやうに尙ほ目に浮んでゐた。森は靜かだつた。何氣なく自分の手を出して指を動かしてみた。四十といふ年齡は明かに皮膚や飛び出てゐる血管に醜く刻まれてゐた。私はチェリヤの手の柔かで白かつた事や、その指に嵌つてゐた指環の形などを思ひ出した。青春を妬む心が憐むべき自分に起つてきた。
　私はもう一度今の少年を見たいと思つた。徐かに土堤に近寄つてその上から頭を出してみた。其處は牧場の續きで林も極めて淺く、遠くを行く馬車の響も聞え相に思はれた。これは全く意外だつた。然し私はそれ以上驚くべきものを見て殆んど倒れようとした。
　私の目の下の雜木と草の間に二人の少年少女がゐた。木の葉を透して男の横顏のみが見られた。男は今の少年だつた。彼は相手の少女の額に臆病らしく接吻をしてゐた。
　私は眩暈を感じた。その感動は今でも明かに解剖してみる事は出來ないが、何か神祕的なものだつた。
　いつの間にか草の上に坐つてゐた私は間もなく立上つたが再び土堤へ近づかうともしない代り、枯葉をがさ〳〵云はせて其處から立去るにも忍びなかつた。新聞の上に無數の黒い線を唯だ茫然と見詰めてゐた。
　ものゝ十分も過ぎた頃と思ふ、鋭い譴責の叫聲に愕然として私は再び我に歸つた。思はず土堤の方へ行つてみた。土堤の下には憲兵が二人、白い革帶で劍を下げて立つてゐた。その一人が少年の肩に手をかけ怒鳴りながら小突き廻した。憐れな少年は土氣色になつておど〳〵しながら碌に口もきけずにゐる。襟飾りが解けて房々した髮の毛が白い額に亂れた樣が私の心を傷けた。
　少女は草の上に打伏せになつたまゝ泣いてゐた。私はそれを凝視するに忍びない氣がした。
　その意地の惡い憲兵が又少女に近寄つて無雜作に引起さうとした。彼女は目に腕をあてたまゝ身體を捧げた。
　どうです、それが間違ひのないナナだつた。
　私の息は詰つて終つた。
　憲兵は二人の住所や姓名を訊問し、鉛筆を動かしながら一々それを手帳へ書きつけた。ナナの青ざめた頰には後から後から涙が雨のやうに止度なく流れた。
「今度丈けは許すから、直ぐ歸れと先刻もあれ程云渡して置いたのに、又こんな不始末を仕出かすとは怪しからん、もう許されない一緒に警察まで來い。」と左も大事件でもあるかのやうに怒鳴り散らしてゐる。年をとつた方の憲兵は流石に憐愍の情を表はして、近寄らうとする二三

の見物を制してゐた。

二人が公園の外へ引立てられ、突倒されん許りにして連れて行かれた頃は、見物人も増えてゐた。誰れ一人この若い憲兵の處置に嘲るやうな面持をしない者はゐなかつた。

「これは何んと云ふ十字架を擔つて蹣跚き行く光景だ！　いゝ加減にしてやればいゝに、何處まで引張つて行く積りだらう。」私は興奮した。

彼等の行列は公園の門を出ると直ぐもう見えなくなつた。入れちがひに數臺の馬車が這入つて來た。痛いやうな淋しいやうな胸から思はず溜息を漏して私は踵を廻した。

落ちつかないで散歩もそこ〳〵に毎時より早くS町へ歸つた。午餉の支度をする焦げつくやうな油臭い臺所の煙が陰氣な町に漂つてゐた。私は殆ど本能的に鳩の籠を見上げた。鳩は日光を樂むやうに光を浴びて白く輝いてた。螺旋形の暗い梯子段を登り自分の部屋に這入つて又向ひの鳩を眺めた。ナナの內の中は靜かで毎時と少しも異つた容子はなかつた。一刻も早く知らせてやり度いとは思つた。人の好さ相な兩親はどんなに驚き歎く事だらう。それにしてもどうして知らせよう、何んと云つたらいゝものか、私は樣々に孤疑し躊躇して居るうちに午になつた。午からは友人を訪問する約束があつた、午後は內にゐなかつた。

友人と別れたのは八時頃だつた。S町のどの窓にも燈火がついて、どの鎧戶も閉されてゐた。ナナの窓許りが開いてゐて、鳩の籠がいつになく未だ窓の外に出た儘になつてゐた。今頃內では、どんなに取込んでゐるだらうと思つた。

十時過ぎだつた。鎧扉の掛金を徐かに外づして部屋から町の容子を眺めた。こちら側の屋根の上から蒼白い月光がさつと斜めに流れてゐて、深い谷のやうな町の底近くまで照らしてゐた。ナナの窓にも月光が射して死灰色の扉はいつの間にか閉されてゐた。その窓は何事も知らないやうに冷かに眠入つてゐる。暗い街燈の陰を影法師のやうな人が折々通つて行く許り、寂しい感が町全體を支配してゐた。

私は窓際に椅子をすゑ、燐のやうな月光と靄に包まれた影とが作つてゐる家と家、壁と壁、その間の小天地をいかに荒寥な寂寞なものと考へたらう。自分は限りのない孤獨を感じた。屹立した斷崖のやうな向側の壁を染めてる月影は少しづつ形を變へて、春の夜は更けて行つた。若しやナナがあすこの扉をあけて顏を出しはしまいか。彼の少年があすこの下へ來て口笛でも吹きはしまいかなどと色々空想してみたが、どこの窓もどこの窓も寢返り一つ打たうともせず愈々深い昏睡の裡に沈んで行きつゝあるかのやうに見えた。

翌朝例によつて水賣りの呼聲で目を醒ました。私は直ぐ氣にしてナナの窓を見た。鳩の籠は未だ外に出てゐなかつた。ことに由つたら警察に拘留されたまゝ昨夜は歸らなかつたのだらうか。

顏を洗つて終つた頃、ナナが寢間着のまゝ鳥籠を持つて窓へ出て來た。

私はおやつと思つた。胸がどき〳〵する程吃驚した。八年前のヂュリヤが再び其處に表はれた：：私は本當にさう思つた。

ナナは毎時より一層沈着に取澄してゐた。私の見てゐるのには一向氣附かない風を裝つてゐた。(勿論昨日の事件を私が知つてゐようとは夢にも知るまいが)その眞面目腐つた貞操の女神のやうな高慢な顏附が私には餘り滑稽で悲しかつた。然しナナの今朝位美しかつた事もなかつた。

ナナは栗色の髮を房々と双方の肩の上にさげて、淺黃の寢間着の廣い襟の間から蒼白い胸を露はしてゐた。――左うだ。ヂュリヤのあの時

の面影に宛然だ！

チュリヤと私が識合になつたのはモンテ・カッテナといふ山の溫泉場での事であつた。私は其夏一月許り彼女と一つホテルで暮して深く愛するやうになつた。周圍の事情も先づ申分がなかつた。夫れに拘らず結婚といふ最後の決心がいつまでもつかなかつたのには一つの原因があつた。信賴してゐた友達が彼女の貞操に關して或る警告をして吳れたからであつた。

八月二十一日の夕方だつたと記憶してゐる。突然公使からの電報で直ぐ羅馬へ歸らねばならなくなつた。其晚チュリヤの監督者だつた伯母さんの許可を得て、二人は長い散步をしながら結婚問題に就いて話し合つた。私にどうしても解けない一つの謎、暗い所があつた。チュリヤは又それを解かうとして吳れなかつた。吾々は悲しい心に充たされたまゝ冷い握手を交はして彼女の部屋の扉の前で別れた。私は一晩悶えて結婚を斷然思ひ切らうと決心した。

一番に乘らうと思つた私は未だ鷄の鳴かない內から荷造りを終つて馬車の來るのを待つてゐた。やがて馬の嘶を遠方に聞いた。もう永久に彼女と別れる時が來た。下男は蠟燭を片手に荷物を運搬しに來た。馬は鬣を振ひながら步き出した。ホテルの玄關から山道の方へ曲ると

チュリヤの部屋の窓があつた。

「伯母さんに知れないやうに明朝はきつと御見送りをしますから、私の窓を忘れないで見て下さい」と前夜彼女が云つた。私は約束通りその部屋の窓を見上げた。チュリヤは夜中一睡も出來なかつたやうな姿で、悲しげに窓際に立つてゐた。其寂しい彼女の寢間着姿は實に美しかつた。嘗て感じた事のないやうな誘惑と煩惱が其時から形そのまゝで私の胸に宿つた。妙なもので其れから後はチュリヤの事を考へると每時際立つて眞劍な氣高かつた其瞬間の面影しか目に浮んで來なくなつた。而して再び彼女の純潔と貞操を疑ふまいと決心した。運命は遂に羅馬で其冬の十二月吾々を結婚させた。然し彼女は既に處女でなかつた。

ナナが鳥籠を持つて窓に表はれた時、八年前モンテ・カッテナのホテルの窓で朝早く私を見送つて吳れたチュリヤの再現を見た。二人は似てゐたのではない。全く同じだつたのだ。から云つたら人は笑ふかもしれないが、私には決して笑ふ事の出來ない決して忘れる事の出來ない苦い實驗だつた。

程なくS町からピンチョの崖の上へ私は居を移す事にした。そこの窓の前にはもう窓はなく、唯無數の屋根瓦が河原の石のやうに日の下に展けて見える許りであつた。（終）

又どれほどの人達が海に來て友と呼びかけたか知れない。

山に向つて云はれないこの言葉も、海に向つては容易に云ふのが常だ。海は人性を含み、山は神性を含んでゐる。

海は滑かで動く。近寄り、慕ひ、話しかける。觸れようとし、逃げようとする。子供や犬も海をみると戲れずには置かない。

（『白夜雨稿』の「海」より）

美少年

　彼は實に綺麗な青年であつた。
　彼の事を回顧する時には、必ずその美貌も思ひ出さない事はない。彼の瞳眸は澄んだ青い葡萄色にも見えたし、或時はその裡に鳶色の斑點を見たやうにも記憶してゐる。金色の髪の毛を額の眞中で左右へ分けて古い畫にある美術家のやうに長く伸ばしてゐた。それが又よく似合つて、一度でも自分に不自然な不快な感を起させた事がなかつた。
　彼はよく帽子を脱いで手に持つたまゝ歩いてゐた。或時は日光がその軟い毛に輝いた。或時は風が來て分けた毛を散らした。そんな細い記憶まで心に彼を呼び起す種になるのであるが、寫眞を出して見ると却つて遠く彼は去つて終ふやうな心地がされる。寫眞は恐ろしく怖い顔にとれてゐる。少女のやうな皮膚の色艶と魅力とは皆んな消えてゐる。眞赤な細い唇は一文字に堅く締つて、眼窩でも、眉毛でも、頤でも悉く彼の激しい意志の權化としかみえない。長くこの肖像を視詰めてゐると青年とは云はれなくなる。彼の初々しい屈託のない少年らしさ、時によれば處女のやうな柔和と優美な表情は影をかくし、默思する彼、叛逆者然たる彼が鮮かに寫つてゐる。寫眞の彼は若いまゝ既に成熟した人であつた。
　七月の初必要があつて書架から解剖圖を取出し、塵を拂つて畫室へ持つて來た。此解剖圖は"Müvészeti Boncolástan"と云ふ大册の一部で、實は自分も此表題を何んと發音すべきものか、又何んといふ字義であるか全く知らない。此本は油土と繪具と手垢で酷く古びてゐる。その油土と繪具の匂ひを嗅いで、憶出したのはやはり羅馬の裏町にあつた彼れの借り間の有樣であつた。同書はテリエスニツキ・カルマンといふ博士の著で、洪牙利語で書かれた藝用解剖學として名高いものである。自分は暑い畫室の中でこの解剖圖をひつくり返しながら、別れて久しい彼の事を考へた。繪具の散らかつた机の上には紫陽花が重い頭を傾けて、あの寂しい青い色で自分の瞑想する無形の道を明るくして呉れた。
　それから二週間程後である、ある朝思ひがけなくも洪牙利 Somogy の Felsögeges 1 といふ町から一通の書留郵便を受け取つた。差出人は Antoine Shim:t-Wamb:e:szky といふので勿論自分が彼と呼んで來た青年の事である。八年目で突然彼の消息を得てどんなに喜んだらう。
　況して彼は常にから云つてゐた。僕から便りのない間は元氣で居るのだと思つて呉れ、若し死ぬ時或は死んだ時はきつと報知が行くと。彼から便りがあつた、而して夫れは死の通知ではなかつた。自分は一日中機嫌がよかつた。再びかの解剖書や寫眞を出して見た。手紙はやつと意味が通じる許りの滅茶苦茶な伊太利語で書かれてゐた。自分丈けには樣々な回顧を起させ興奮に價するものが潛んでゐるのであるが、他人に取つては至つて平凡な手紙にちがひない。大略左の通りである。

　お前は生れ故郷でどうして暮してゐる。お前の故郷の有樣は幾度も／＼俺の考へあぐんだ事だ。手紙を出したいと思ひながら宛名を失つて終つて、それも心に任せなかつた。でも封筒に書いたやうな番地を

考へ出してみた。或は此手紙がお前の手に届くかもしれない、（彼の發明にかゝる不思議な番地でも幸ひに到着はしたが）

愛する友よ、善い手紙を書いてお吳れ。伊太利語は既に吾々二人にとつては困難な言葉にちがひないが、吾々にはこの不完全な言葉で心を通じ合ふより仕方がない。お前はどうして暮してゐる。お前の夫人はどうだ。（結婚の通知は彼の手に無事に着いて居たものとみえる）お父さんやお母さんもお變りないか。俺の爺は一年前に死んだ。俺は一度伯林のフリドリヒ街で若い日本人に會つて、お前の事を尋ねた事があつた。其人は直接お前を知らなかつたが、お前の作品を知つてゐた。名は覺えてゐないが、何んでも藥學生であるらしかつた。

何か報知して吳れないか。愛する友よ、一體お前の故鄕はどう云ふ風になつて行くのだ。

俺の境遇は今はやゝいゝ。羅馬で別れてから、獨逸、佛蘭西、露西亞、ペルシャ、ヒンドスタン、アフリカ等を無暗に旅行して歩いて、多く／＼學ぶ所があつた。今後兩三年の內には日本までの旅を企ててゐる。日本の藝術を見る事は大きな樂みの一つである。

二三日うちに三四枚の繪葉書を發送しよう。

去らば愛する友よ、何時も／＼元氣でお吳れ。お前の家庭も幸福であれ。

親愛な洪牙利の友

追信。シェベックは三四年前に死んだ相だ、五ケ月前初めてシドロから聞いた。ウブラジン、カニッキ、ベンジャンスキイ等の消息はその後聞かない。モギンは半年許り前自殺した、夫れを新聞でみた。

手紙の內に捕捉し難い空想や、情熱を見る事が出來ないのは物足りない。でも「…露西亞、ペルシャ、ヒンドスタン、アフリカ等を無暗に旅行して歩いて、多く／＼學ぶ所があつた……。」と云ふ一行はまざ／＼彼の風格を忍ばせてゐる。自分は此行を繰り返して微笑せずにはゐられなかつた。遺傳的、本能的な放浪生活、ボヘミヤン流儀をよく發揮してゐた。彼の友達の間には樣々の變化があつたらしい。又八年と云へば有つても不思議ではない。然しヴァンベルスキイの一身には大した變化もなかつたやうにみえた。放浪は彼にとつて決して變化と稱する事は出來ない、却つて夫れが常態である。唯だ自分の知つてゐた彼は Antoine Wamberszky と名乘つてゐたのに、今度の手紙には Antoine Shima-Wamberszky となつてゐる。彼は素敵な日本の憧憬者である、或は其名を日本化する爲に――日本人の或者が其姓名を支那化したり、歐洲化したりするやうに、――したのではないだらうかとも考へた。

今年の夏はどうしたものか、紫陽花が七面鳥のやうに樣々の色を見せない內に、褪色して早く枯死して終つた。雨が少く暑氣は日々烈しくなつて來て、人の胃と頭を鈍らせた。

手紙から一週間おくれて出した一枚の繪葉書が到着した。それは手紙に約束してあつたものの一つなのであらう。四年前に描いたと云ふ可成り大きな相な油繪の複寫で、「寺院の前に立てる洪牙利人」と云ふ題で老爺が一人、女の子が二人かいてあつた。自分は又彼の事を考へさせられた。彼の藝術やその發展についても考へさせられた。この繪には單に Shima としか署名してなかつた。

八月早々何十年來にないと云ふ暑を避けて自分は或る高山の麓の湖畔へ來た。東京の炎

暑は中々衰へないと云ふのに、此處では涼し過ぎるやうな夜が屢々あつた。來て程なく全歐の大亂が持ち上つた。夢想さへ許されなかつた空前の戰禍は列強諸國、及びそれに近接した小國を皆な捲込んで終つた。次で東洋まで飛火が及んだ。其頃になつても此高地の紫陽花は未だ生き殘つてゐる。古寺の書院から湖を眺め、紫陽花を眺め、日々新聞の戰報に接し、自分は未だにヴァンベルスキイへの返事を投函せずに置いた事を悔いた。この形勢では郵便物の運命は計り知る事が出來ない。殊に獨、墺、洪への郵便電報は杜絶の有樣ではあるまいか？

彼は故鄕を篤愛してゐたが、夫れは洪牙利を意味するので、墺地利と獨逸には癒し難い反感を持つてゐた。若し洪牙利が墺國から獨立する義戰でもあつたなら、彼は先鋒軍たるを敢て辭さなかつたらう、然し今度のやうな無名の惡爭に加はるのは必ず彼の本意ではあるまい。獨逸では既に十七歲から四十五歲までの國民軍の召集を行つたといふ。不本意ながら彼も何れ從軍せねばなるまい。不本意で從軍する彼は不幸である。若し嫌や〳〵不本意な義務に服し、不本意な戰死でもする事があるとすれば尙更ら不幸だ。計らず彼の消息を受取つて喜んでからまだ幾日もたゝないのに、忽ちヴァンベルスキイの身上に一大異變が逼つて來ようとは有爲轉變の世の中だ。彼の手紙の突然到着した事も今となれば却つて氣掛りになる。友情とか愛情とかいふ事は一種ミスティックなものだ。之が惡い前兆にならないと誰れが保證して吳れる事が出來よう。彼の所謂「死ぬ時、或は死んだ時」が近づきつゝあるのではないか？今や彼は砲火と硝煙に包まれたまゝ一日々々自分の視線から遠ざかつて行くやうな心細さを感ぜずに居られない。屍骸の山を想像に描いてみる、微笑しつゝある澄みきつた彼の綠の目をそこへ並べてみる。自分は靜寂な湖畔に坐しながら烈しい砲聲を耳にする心地になれる。

こゝに幽かな裡から消えかゝつた彼の記憶を喚び起して書き添へてみよう。

羅馬ヴキーヤ・リペッタにある國立美術學校で初めて彼と識り合ひになつた。

初め自分は某伯爵夫人の個人的な一通の紹介で、ピンチョの丘にある佛國アカデミイへ出入を許して貰つた。其處で逢つた友達が美術學校の自由教室の事を自分に話した。其組織などを色々聞いて居るうちに自分も通學してみたい氣になつた。今度は其頃アカデミイの校長だつたカロリュス・デュラン氏から紹介して貰つて、美術學校へ行つた。何の面倒もなく一片の形式丈けで直ぐ通學を許された。自分は此簡便を至つて重寶に考へ自由な氣風を嬉しく思つた。

自由教室と云ふのは美術學校の一部に設けてある撰科で、朝から晩までモデルが來て立つて居るのを、生徒は自由勝手に研究する所である。同一の姿勢は一週間つゞく。先生は一人も居ない。試驗は受けたいと思つた時勝手な製作を教授會議に提出する事が出來る。然しそれも是非提出せねばならぬのではない。又其他の附屬課目も選擇が自由であるから、當時評判のよかつた解剖學の實習か、古代圖案の講義位にしか、特別な生徒でなければ出席する者はなかつた。さう云ふ風だから生徒の種類も雜多で、長い間修業を積んだ者、未だほんの初歩の者、雜然と混つてゐた。

聖天使城附近のテヴェレの河岸に沿つて行くと、硝子で張つた半圓形の素敵に大きな屋根が民家の上に屹然と聳えてゐる。夫れが自由教場の屋根である。十一月も末の曇つた日、守衞に連れられて、その屋根の下に立つた時の事は忘

れない。流石廣い室内も二つの大きな煖爐と人いきれとで蒸暑く、油、テレビン油、畫用のパンの酸い匂等で息苦しく思はれた。百人餘の生徒は圓心に近い位置に立つた一人の巖丈な裸體の女を幾重にも取卷いて、畫架をする、こゝは俺の領分だと云はぬ許りに陣を張つてゐる。一方の隅では二三人づつ集まつて話し合つてゐる。一方の隅では一人の女學生を四五人の男が取卷いてゐる。椅子に坐つて居るもの、立つて居るもの、笑つて居るもの、議論に花を咲かせて居るもの、やかましいと怒鳴るもの、餘り遠いので双眼鏡をもつてモデルの細部を研究しながら筆をとつてゐるもの、實に殺風景で小戰場の有様だ。

幸ひ自分が此室に這入つたのを多数の學生は氣附かずにゐた。然し入口に沿つて座を占めて居た人々は珍らし相に自分を見て私語いた。此廣い、やかましい教室になれるため、一隅の椅子に座を占めて見てゐると段々自分を見物する人が増えて來た。巴里などとちがつて日本人の少い土地柄ではあるし、日露戰爭の有難迷惑な御蔭もあつたりして、止むを得ないがいゝ心持はしなかつた。

モデルは一時間のうち四十五分立つて、十五分づつ休憩するのであつた。モデル臺の上に大きな時計があつて、時刻が來ると、方々から「時間だ」「時間だ」と怒鳴る。モデルは臺を下りて煖爐に近づいて休息した。

休憩時間の度に見物人が段々増えて來た。又自分を此畫室に誘つた青年が矢鱈と人々に紹介した。自分は休憩時間がなければいゝと思つた。然しこんな一種の刑罰もさう長くは續くまいと自ら慰めてゐた。

モデルが臺に登つたり、降りたりしてゐる間に時間がたつた。左うして又た日が經ち、週が變つて行つた。次の週には六十位の老爺が白いトオガを着て、演說でもするやうな姿勢でモデル臺に立つた。その次の週は又女のモデルであつた。モデルの多くは純粋な羅馬人が選ばれた。そのクラシックな莊重な骨格と適度な肉附きとは總ての外國人を驚ろかした。齊均の正しい優良な人種と云ふ事はどのモデルも皆な個性を失はずに、然も共通して具へてゐた。段々自分にも羅馬人と他の地方の人との相違などが判るやうになつた。學生等は又東洋種の自分に慣れたと見えて、段々好奇心を失つて來た。漸くほんとに相手になり得べき人々が殘つた。

此時一人のポオランドの娘と、ヴァンベルスキイとが目についた。圓顏の小じんまりと肥つた娘は眞赤な上衣など着て、毎時でも快活に笑つて、誰れにでも直ぐ身體をすりつけるやうにして話をした。他の多くの女學生が威權を保つて身のまはりに一種の埒を設けて居るのとは異つて、いかにも無雜作であつた。此無雜作がその容貌以上に多くの男を引つけた。或人は淫賣だとも云つた。夫れは少し酷評であらうが、一寸そんな感の娘であつた。或時三四人の學生が此娘をとりまいて話してゐるのを聞いた。

私は昨夜天使の夢を見た。その中で一番綺麗な〳〵天使が貴女でした……。

こんな告白を人の前で眞面目腐つてする男も男、それを平氣で笑つて聞いてゐる娘も娘だと思ふ事もあつた。此娘とヴァンベルスキイの容貌がどことなく似てゐた。

ヴァンベルスキイと云ふ青年は自席にぢつとして居られないで、よく足音のしないやうに徐かに畫室の隅々や廊下の方まで歩き廻る癖があつた。初めて人と人の間から彼の首だけ見た時は、少女だと思つた。彼はやつと十八歳位ででもあつたらう。長い金髪を紺色の頭巾で央かくしてゐた。彼が双の手をズボンのかくしに插入

れて、風のやうに輕く飄々然と形容すべき形で自分の傍を通り過ぎたとき、男だつたかと思つた。彼はめつたに人と話さなかつた。方々の群に立混つて暫時話を聞いて居るかと思ふと、例の飄然たる姿で餘所へ行つて終つた。彼は守衞の机に身體を凭せかけて、頰杖などして守衞をからかつたりしてゐた。

二三週經つ間に、彼がいつも自分に對して細い注意を拂ひつゝある事に氣附き出した。彼の薔薇色の頰はぢきに赤くなりやすかつた。遠くの方から自分を視てゐる時、何氣なく彼の視線と自分の視線が出逢ふと、少し狼狽したやうに顏を赤くし、双手をかくしに入れたまゝ、其處を徐かに歩き出して終つた。

ある日食後の休みに、人氣の少くなつて椅子許り目立つ畫室の中で、自分は日本から來た手紙を讀んでゐた。何時の間にか彼が自分の傍に立つてゐたのを知らなかつた。手紙を讀み終ると彼は愼ましやかな、然も強い親みの力を自分にあびせかけて微笑んだ。至つて低く、不思議な伊太利語で話しかけた。

彼も多くの人と同じやうに、極く平凡な質問から初めた。日本の文字は上から下へ、右から左へ書くのだと云ふやうな事を說明しなければならなかつた。唯だ彼の質問には恐ろしく熱心な所があつて、其奧底に何者かあるやうな感じが通つて來た。彼は日本語に就いて少し學びたい、これは久しい間の夢想であつたのだから許して呉れと繰り返し繰り返し云つた。

モデルが這入つて來た。小使が石炭を煖爐に投込んで行つた。學生が段々增えて來た。彼は又飄然と自分の傍を去つて終つた。

夫れから二人は休憩時間とか、描き厭きた時とかに時々話し合つた。彼は穴の明く程自分の目だの皮膚だのを凝視して、何か神祕な大發明をしたやうに驚く事があつた。たつた一つの目でもほんとによく見た時は、どんなに美妙なものだらうか、そんな事を云つた。元來彼は必ず毎日朝から夕方まで學校へ來てゐたが實際に筆を持つて描いてゐる間は少なかつた。大概そこらをぶら〳〵歩き廻つてゐた。若しくはポケットから小さな本を出して熱心に讀んで居た。然し夫れも二十分とは長く續かなかつた。彼の話は馬鹿々々しい程子供らしい所があつた、夫れに拘らず何んとなく單位の異つた所があつた。

歐羅巴は皆んな惡い人間許りだから、今に日本を取つて終ふ積りでゐるのだ。私だけが夫れを知つてゐるので、お前にそつと話してやるのだとか、聖書は餘り誰れでも〳〵讀む本で、讀んだ者は皆んな略ぼ同じ考へにならなければ止まない。丁度自然科學の平凡に似てゐる。今度出て來る偉人は聖書を讀んだ事のない人でなければならないとか、こんな風な突飛な事を眞面目腐つて云つた。然し其底に言葉以外の或るものが何となく暗示されつゝある趣があつた。

一日吾々は放課後から聖ピエトロ寺院へ行つた。入つてそこらを暫時眺めたと思ふと、もう歸らうと袖を引張る。つまらない御寺だ、見ない方がいゝと云ふ。お前はよく見た事があるのかと聞いたら、初めて來たのだが、こんな寺は見ない方がいゝ、と無理に自分を引張つて外に出てしまつた。彼はいかなる記念物や美術品に對しても、多く興味を動かさなかつたやうに見えた。或は自分に其の感動を祕して居たのかもしれない。一度カペルラ、システィナを見に行かうと云つたら、言葉を左右に託してとうとう行かうとしなかつた。

或る週間には裸體の男が腰をかけて地面に何か書いて居るやうな姿勢が題であつた。其時初めて彼の素描を見た、――何時も彼は描いては消し、描いては消しして、形の見える程描きつゞけた事がなかつたからだ――バックを眞白

にして、裸體を眞黑に描いてあつたが、自分は一見してこれがヴァンベルスキイのやうな少年の手になつたものであらうかと思つた。次の週間には畫室の中にこんな描法を試みる者が急に澤山出來た。

間もなく彼は眞黑なバックの上に、大理石のやうに白い女を見事に描き上げた。模倣した學生等は目を見張つて驚いた。自分がその畫を褒めたらば、こんな者は餘り役に立たないと答へた。而して陰と光、調子、姿勢などの研究は澤山だ、今はもつとモデルそのものを研究したいと云つた。其後彼は寸法許り氣にして、夫れが爲め自分で樣々な描式を作り、彫刻に用ゆる機械を使つてみたりした。

彼の束縛し難い空想は彼をして神祕を愛さしめたかと思ふ。彼が常にポケットに祕めて愛讀してゐた小形な本は、何んとか云ふ洪牙利の星學者の哲學書だと聞いた事があつた。又彼は絶間なく放浪の空想を目で見るやうに設計してゐた。

或る休みに、自分は獨りで解剖學教室の廊下を往來して、午後の始業を待つてゐた。突然大聲で爭ひながら二三人が近づいて來るのであつた。

ほら居た！

彫刻家のシェベックが、下手な畫家のベンジャンスキイの肩を叩いて云つた。ベンジャンスキイは倘ほ大聲で爭つてゐた。もう一人はヴァンベルスキイで、默つて二人の爭を笑つてゐた。自分は何とはなしに動悸がした。

何んだ？　何があつたんだ？

と訊いても、ヴァンベルスキイは答へない。シェベックとベンジャンスキイは益々大聲で手まねを混へ、洪牙利語の荒い發音で爭つてゐる。ヴァンベルスキイはもうぢき降誕祭がある、二十三日から學校は休暇になる、そんな事を話しながら畫室の方に歩いて行つた。教室でシェベックを捕へた。自分はその事が矢張り氣にかかつて居たのだ。シェベックは吾々からみるとずうと年上な、正直な、地味な、賢くない、既に勞れてゐると云ふ風の彫刻家で、ヴァンベルスキイのやうに貧しかつた。

何んだ？　どうしたんだつた？

正直な彼は未だ興奮してゐるやうに、何時にも似ず高聲で次の話をした。

吾々がコルソの通りを歩いて來た、すると前で葡萄酒を積んだ馬車が倒れてゐて、酒が流れてゐる。門を這入つて左側の廊下を日本人が散歩してゐると云つた。僕はヴァンベルスキイが豫言するのをよく知つてゐる。彼は優れたメディウムである。吾々はスピリティズムの信者であるが、ベンジャンスキイは少しも夫れを信じない。吾々が賭をしたのだ。二つの豫言がちやんと當つてゐるのに、ベンジャンスキイは未だ何んのかのと云張つてゐる。恥知らずだ。

彼は急に聲を低くして、

ヴァンベルスキイは天才だ。お前さう思はないか？

ヴァンベルスキイが天才だつて……ヴァンベルスキイが……あはゝゝ。

と何時の間にか近寄つて來てゐたベンジャンスキイはシェベックを冷笑した。シェベックは手に持つてゐた木炭を床に叩きつけて、椅子から立上り、ベンジャンスキイに喰つてかゝつた。喧嘩でもし相な勢であつたが、多勢が口笛を鳴らし、「戸外へ」「戸外へ」と制したので、二人は殘念相に默つて終つた。ヴァンベルスキイは遠くから此有樣を見て一寸肩を上げ、可笑らしく笑つた。

自分はシェベックが神樣のやうにヴァンベルスキイを崇拜して居るのも、ベンジャンスキイ

が何等ヴァンベルスキイの才能を認める事が出來ずに居るのも、よく知つてゐる。唯だヴァンベルスキイが二人に對して何んとも思つてゐないのが面白く思へた。

同國人の中でヴァンベルスキイの重きを置いてゐたらうと思ふ人物は、ウブラジンと云ふ獰猛な青年であつた。彼は身丈け六尺以上もあらうかと思はれた。腕力で彼にかなひ相な男は畫室に一人も居なかつた。彼は毎日銀座のやうなコルソの通りを片手にパンを持ち、片手に林檎を持つて、交る〲嚙りつゝ眞直ぐに上を見たまゝ、素敵な勢で歩いて來た、するとちやんと頭丈けが群集の上に聳えてゐた。彼は毎週大きな畫布を畫室に持ち込んで來て、二三人ぶりの座席を一人で占領し、傍若無人に振まつた。然しその藝術は徒らに粗大で、ヴァンベルスキイの敵ではなかつた。二人は仲よさ相に見えた。並んで往來を歩いてゐると、片方は大地を踏碎きさうに風を起し、虎のやうに歩いて行く。ヴァンベルスキイは之に反し小男で彼の身長の半分位にも見えた、煙か霞のやうに輕く、ウブラジンに搬ばれて行くかと見えた。人人はウブラジンをレオネ（獅子）と綽名し、ヴァンベルスキイをアンゼェルッチョ、マレデットと呼んだ。マレデットは呪はれたの義で、アンゼェルッチョは同じ天使でもいたづら者の天使である。多くの羅馬の女は餘り長く彼の通り過ぎるのを眺めた。

冬休みの前、二十四日の晩はモギンの畫室に集まつて、降誕祭を祝ふ約束をした。此集合は洪牙利人許りであつたが、自分も特に招かれた。それはヴァンベルスキイの解釋に從へば、日本人も洪牙利人も同じ人種であるからだといふのだ。之れは一般に洪牙利人が日本人に對する感情であるらしかつた。

其後彼の日本語研究は中々歩を進めた。日本語と洪牙利語との比較に趣味を持つて居たので、共通な文典共通な語源を見出すや手を拍つて喜んだ。彼は棒に刻まれて保存されて居るといふ洪牙利古語も多少識つてゐるらしかつた。今は皆んな忘れて終つたが、日本語で水をミヅ若しくはアカと云ふが、ミヅが純粹の日本語である事も彼を喜ばせたと覺えてゐる。

降誕祭の夜、家で夜食を濟せカンピドリヨの丘に近いモギンの畫室へ向つた。恐ろしく暗い晩で、北風が寒かつたから、外套の襟を立てて急ぎ足で歩いて行つた。勿論初めて行く家なので暗くはあるし、困つたと思つた。穢い貧乏町で道がごた〲してゐた。二三度往來の人に尋ねて段々近い番地になつた、すると薄暗い街燈のかげにぼんやり立つてゐる人がある。夫れはヴァンベルスキイで、自分を待つてゐて呉れたのであつた。彼は外套も着ず、手まで氷のやうになつてゐた。かくとも知らず定刻からおくれて行つた自分を恥ぢた。彼は穢い露路を幾つも折れ曲つて、狹い階段を登つて行つた。

先に立つた彼は四階のある扉を叩いて、妙な言葉を二言三言云つたと思ふと、暗い廊下に赤い光線と強い油や、大蒜の匂が、白い煙と共に溢れ出た。室内は朦朧と見えた。

彼等は總立ちになつて吾々を迎へた。生暖い室内で上衣を脱いで歌を唄ひながら、食物を作りつゝあつたのだ。二時間も前に出來る筈のものが未だ出來ないと、鍋を手に持つたシェベックが云つた。ベンジャンスキイは肉汁を掻きまはしつゝあつた。カニツキは机を出したりパンを切つたりした。モギンは石炭をつぎ皿を洗つた。獅子のウブラジンは來なかつた。彼は政府の留學生で、有名なパラッツオ・ベネチアなる建物内にある墺洪國大使館の畫室に寄宿して居たので、其方の會合に行かなければならぬからであつたらう。

主人公のモギンも矢張り貧しい畫家だつたから、模寫などして働きつゝ勉强してゐた。素敵な無性者で、着た外套を脱いだのと、被つた帽子をとつたのをつひぞ見た事がない。彼は年中パイプを口に銜へたまゝ、何んでもする、恐らく食事中だけしかあのパイプは取つた事がないだらうと思はれた。繪を描いた後でも、筆についた繪具を壁なり、書架なり手當り次第になすりつけて、洗ふ事なしにその儘箱に仕舞つて終つた。彼は極めて口數をきかず、一人切りでせつせと自分の事をしてゐるやうに見えた。彼等は皆辛苦と缺乏に慣れていかなる事にも平氣で處して行けた。

珍らしく今夜は彼まではしやいでゐた。唄へと云はれれば大きな美しい聲で平氣で唄つた。勿論ベンジャンスキイは有富で、お洒脫で、放蕩者で、吞氣で、少しぬけてゐたから、飲んでは騷いだ。シェベックは一口も飲めなかつた。モギンは一番よく飲んだ。カニツキは餘り酒も飲まず、變人らしく人と話しもしなかつた。

ヴァンベルスキイは何んにもしないで長椅子に仰臥したまゝ、歌がたえたとき、小聲でその間をつないだ。彼はいつもの調子で、自分を相手に國の平野、フィルドの事を話した。どう云ふものか彼はモギンを好まなかつた。彼等が大浮かれに浮かれてゐるのを流眄に見、ランプの光に顏をそむけ、モギンもベンジャンスキイも獸物のやうな猶太人である、今夜は猶太風の御馳走を作つてゐるのだと軟かい言葉で思ひ切つた事を云つてゐた。十時になつてやつと御手製料理が山程出來上つた。惡口を云つたものの、ヴァンベルスキイは中々よく喰つた。大蒜の匂が强いため、自分は一口もいけなかつた。彼等はよく喰ひ、よく飲み、よく唄ひ、よく吹かし、よく騷いで、夜が更けて行つた。シェベックは自分のために何か喰はれ相なものをとなにくれとなく獨り心配して呉れた。

十二時を合圖で、聖母最大寺に彌撒があると云ふ噂であつた。盛大な儀式を見たいのが抑抑の目的で此處へ來た自分は、十一時半頃野蠻な、快活な酒宴の席を辭した。擧つて行く筈であつたものが、寒風を恐れて、いざ行かうと云ふのは、ヴァンベルスキイ一人になつて終つた。彼はカニツキのペレグリンを借りて、身體に卷きつけ、突貫するやうに戸外へ出た。暗かつた空は漸く晴れて、降り相な星が表はれて來た。西南の方にはまだ雲の横はつてゐるのが見られた。二人の靴は石の上に氷るやうな音をたてた。

祭の夜ではあるが、大概此邊の家は靜まり返つて、處々の酒舖から明るい光がもれて來た。寺へ近づくに從つて、二三人づつの人連に逢つた。忽ち眞黑な山のやうな聖母最大寺の前の廣場へ出た。

寺院の西方の正門を飾る廣い見事な階段の上には、既に群集が集まつて、扉の開かれるのを今か今かと待つてゐた。寺院は啞のやうに、幽かな火影さへもらさなかつた。時は遠慮なく過ぎた。その內誰れ云ふともなく今夜は東側の裏門が開かれるのだと傳へた。群集はぶつ〳〵云ひながら長い壁に沿つて東へ廻つた。こゝにも鐵の扉が突立つたまゝ動き相に見えなかつた。群集は耳を厚い扉にあてゝ、內の容子を伺つたが、がや〳〵いふ表の反響が聞かれる許りであつた。時が經つた。不平の聲が段々混つて來た。老婆などは念珠を揉みながら、十字を切つて人々のキエザに對する罵詈を怖れた。何時の間にか一時が過ぎ、二時近くなつた。

自分はヴァンベルスキイの其時の容子をまざまざ思出し得る。彼は此上もなく愉快相であつた。天地の間に何一つ氣にかゝるものもないやうに打ち寛ろいで、群集が傍に居るのも忘れ

果てゐた。そんな時彼は急に饒舌になつた。ペレグリンを着た身體を氷つた石壁にもたせて、東南東北に亙る無邊無量の星界を眺め、得意な天文の祕密を說いた。彼にとつて樣々な不思議や、奇說は空想ではなく、實在であつた。天界を地上に引下げて來ようとは彼の野心ではなかつた。獨り地上を離れて、空想界に赴くのが生れながらの傾向で慾望であつた。彼は亦「過去」を落した人のやうに、嘗て夫れを思出した事がなかつた。自分は、彼が私生兒で、大工の小僧、寺院の小坊主、芝居の子役などをして來た事があると聞いた許りだ。過去には餘り現實の苦味が殘つてゐて、彼を苦しめ悲めたらう、又彼の未來には過去の經驗を役に立てる事が出來なかつた。彼は未來と創造と空想とを混同してゐた。避け得る丈け彼は現實を避けて通つた。現實の世界が彼の裡に増長するのは、精神的に彼が壓迫を蒙る事であつた。このうち何れかの世界を選び、そこに彼は本能の要求の燃えるまま活きねばならなかつた。彼は現實を廻避したとも云へる、又進んで現實を蹂躪したとも云へる。弱者とも云へる、强者とも云へる。彼が所謂文明に對して甚だ冷淡だつたのも、文明を敵とし、反文明主義に與したのではない。唯だ此物質界の推移が彼の住む世界に何等大きな影響を及ぼし得なかつたに過ぎない。

ヴァンベルスキイは星座の刻々變つて行くのを指して、動いて居ると云つた。動いて居ると云ふのは吾々のいふ星の運行の意味ではなかつた。この靜止して居るやうな地球が動きつゝあるのを感ずると云ふのであつた。もつとぴつたり云へば吾々は飄々として天空を歩む時の歡樂と美妙な調和を親しく感じ得るではないかと云ふのであつた。彼の世界は感ずる世界だつた。實在世界の識るといふ言葉は價値がなかつた。實際彼は空漠な事象に對して鋭敏な感觸を備へてゐたやうにみえた。感じて震へた。

待ちあぐんだ人々が段々散り初めた。狐につまゝれたやうな話だが、今夜當院に彌撒はありやしないといふ流言が耳から耳へ傳はつた。一人去り二人去り群集は殘り少くなつた。眞夜中の淋しい寺の前に、百、二百の人が無意味に集まり、又無意味に散つた譯だ。唯だ其處に一種群集の氣分が生れた。地味な複雜な一幕が演じられたやうに思へた。吾々も歩き出した。ヴァンベルスキイは再びモギンの畫室へ歸ると云つて別れた。

ピンチョの丘からスパニャの廣場へ降りる眞白な石段は、龍宮の内部にあつたとしてもふさはしいものだ。冬休が三四日たつた或朝、朝日の漲つてゐるその石段へ來た。羅馬の限りない寺々が青い空に判然と浮んでゐた。廣場には花屋が露店を張つて居る。チョチャラと呼ばれてゐる田舍の少女等が、色彩の特殊な服を着、白手拭を四角に折つて頭に載せ、外國人と見れば花束の押賣りをしてゐる。賑かな往來を二つ三つ横斷すると、書生と淫賣婦の巢窟だといふごちや〳〵した町へ出た。

ヴァンベルスキイはその町で間借りをしてゐた。彼の家の前の肉屋には生々しい豚や、羊や、山羊の屍が丸のまゝ逆さに吊るしてあつた。窓の下に立つてその名を呼んでみた。彼は中二階のやうな部屋を借りてゐたのだ。

ヴァンベルスキイは窓から顏を出して、手眞似で上れと云つた。

小さな部屋は寢臺と箪笥だけでもう一杯だつた。一脚の椅子一脚の机さへない。部屋に居れば彼は立つてゐるか寢てゐた。この狹い室内で彫刻を初めてゐた。休中に仕上げて終ひたいと云つた。それは洪牙利政府が懸賞で何んとか云ふ有名な老政治家の記念碑を募つたのに應じる積りでかゝつてゐたのである。唯つた一枚

の寫眞で着手し、既に幾度も改作した。休中には勿論三月といふ期限までにも、とても出來上り相には見えなかつた。然しそんな事は彼に問題にならなかつた。何度でも熱心に作りなほして、苦心に苦心を重ねた、內に居さへすれば爲たくも外にする仕事がなかつたためでもあらう。

彼は殆ど着のみ着のまゝだつたから簞笥の上に油土の彫刻と、二三册の本が散らばつてゐる許りであつた。今日自分の所有になつてゐるあの解剖の書もその部屋のその簞笥の上に載つてゐたものである。自分があの本を手にして思ひ出したといつたのは卽ち貧しいこの部屋の事である。彼は製本のばら〳〵になるまで繰り返し繰り返し夫れを繙いて、必要なページは暗夜でも直ぐ開き得る程親んでゐた。彼は二言目には必ず此本を出して見せた。

簞笥の抽斗には素描と紙屑がまるめて突込んであつた、紙屑にはまるで電信の記號のやうな文字が鉛筆で一面にかゝれてゐた。彼は所謂スピリティズムの生靈や、死靈と絕えず交通を感じてゐた。靜かな夜など突然來て彼の肩をそつと叩いた。彼は鉛筆をとつて紙に對した。樣々な文字が綴られ、言葉が出來、文章が出來た。それのかゝれるのは非常に早かつた。央は意味をなさないものが出來たが、殘りの何分の幾つかはよく預言をした。シェベックは彼を通じて故鄕で死んだ妹と、死の瞬間及び死後通話をしたと云つた。ヴァンベルスキイは往來に居ても、畫室に居ても、時々靈魂の囁くのを聞くと云つた。彼は晝間でも蒼くなつて震へてゐるやうな事があつた。

テヴェレの河岸へ二人で散步に出かけた。風はあつたが空は益々紺碧に澄み渡つた。流の色は每時も泥のやうに黃色かつた。學校の直ぐ向の彼が日々行くと云ふ料理屋へ行つた。初めて彼がいかに粗食してゐるかを知つて驚いた。彼は月々僅か二十五法の食料を拂ふのみであると云つた。

日が長くなつて空氣が溫められた。畫室の中にも麗かな日光がどうかすると直線を投げ込んで、學生を困らせるやうになつた。秋から冬、冬から春へと、隨分長く畫室で暮したものだと云ふ自覺が人々の心にきざした。學生は三分の二位に減つて終つた。シェベックや、カニツキも歸國した。ベンジャンスキイはポオランドの娘さんの後を追つて北の方へ行つて終つた。吾々はよく郊外へ行つた。枯死した草の間に新芽を見、木末の靑くなるのを見る頃の樂しさは、かうやつて郊外に出てこそしみ〴〵味はれた。ヴァンベルスキイは懸賞の彫刻などは忘れて終つて、よく近郊へ出た。

春が來た。復活祭の前日から羅馬の空氣が眞赤に見えた。ヴァンベルスキイは恐れ戰いた。翌朝それはヴェスヴィヨ山が大爆發をやつた爲めだつたらうと分つた。復活祭の日の正午の鐘はその眞赤な羅馬の空で鳴り響いた、物凄かつた。

プラタノの葉は一日々々擴がつて、街路に影を作るやうになつた。羅馬人は小さな卓をその木蔭に持出して、氷を飮む頃になつた。

稀れにヴァンベルスキイは自分の下宿を尋ねて來た。或日夏着の荷を解いたら中から一卷の江戶錦繪が出た。夫れを丁度遊びに來たヴァンベルスキイに見せた。どんなに彼は驚いたり、悅んだらう。三四日たつてからウブラジンを伴つて來てもう一度見せて呉れろと云つた。二人で話したり爭つたりして、二時間も夫れを眺めてゐた。若しそんなに氣に入つたのなら、持つて歸つて御覽と進めた。ヴァンベルスキイは央ば嬉し相に央ば氣毒相にして、暫時貸して呉れろと夫れを大切に抱へて大滿足で歸つた。

翌朝早く又彼の訪問を受けた。何となく少し落着いてゐなかつた。錦絵に對して色々の意見を述べたり、質問をしたりした。自分はそれがどつちかと云へば二流三流の種類に屬すべき錦絵で、餘り價値はないと云つたが、そんな事は一向聞き入れなかつた。彼は例の解剖書を新聞で包んで持つて來てゐて、貸すから自分に見ろと云つた。言葉が分らないからと云ふ理由で頻りに斷つたが承知しない。方々を明けて説明しながら良い本であるから是非見ろ、插畫を見た丈でも有益だからと云つて、とう／＼その本を殘して歸つて終つた。

其朝以來今日まで再びヴァンベルスキイを見ないのである。或はもう一生見ないかもしれない。

彼はそれから一週間程して可成な修業をなし遂げた羅馬を後に立つたらしかつた、勿論自分には何等の挨拶もしなかつた。それはウブラジンに後から聞いた。ヴァンベルスキイは錦絵は自分が貰つたのだと彼に話した相だ。ウブラジンは呆れてゐた。

日本が獨逸に送つた最後通牒の期限はもう今日限り大正三年八月二十三日で切れる事になつた。今後の雲行は豫想する事が出來ない。彼は死ぬかも知れない。自分は少くも彼からの手紙が無事に着いた事を知らせてやり度いと思つた。四五日前三枚の葉書を出した。折角書いた手紙はそのまゝにしてある。こゝの山では紫陽花が未だよく咲き殘つてゐる。

（大正三年八月二十三日作）

から云ふ風に子供の繪畫は小學校の先生が考へてゐるやうな下手な自然の模倣だけではないのである。これは人形である。これは犬である。これは山である。と單に形を傳へんとする記號や約束だけではないのである。もつと深い本質的な美術の要素が備はつてゐるのだ。人間の本能に基く美的表現の要素が、そこに湧き出して來てゐるのである。A子の畫でみてもそれは明かなことで、或時は寫生、ある時は想像、ある時は空想、ある時は調子と均齊、之等樣々な要素が無邪氣な畫中に一つの律調によつてよく調和を得てゐる。

（『美術の秋』の「新學童の爲に」より）

然し私の檢査しようといふのはあの大藝術家が指して云ふ「自然を見よ」の内容ではなくつて、自由畫論者の「自然を見よ」主義の形式である。又上野の美術學校に於ける「自然を見よ」主義の形式である。凡て淺薄な見地にある寫實主義の見方である。彼等は口を開けば「自然を見よ」といふ。人間には眼が二つあるから、自然が見える筈ではないかといふ位な馬鹿々々しい自然の見方である。網膜上の形象と藝術上の認識とを全然混同した誤謬の上に立てられた議論である。「自然を見よ」といふ言葉は極めて簡單なやうであるが、その内容は到底補足し難い複雜さを持つてゐるのに氣付かないのであらうか。山本君の擧げた彼のレオナルドが指して自然と云つたもの、マネエが指して自然と云つもの、ロダンが指して自然と云つたものでも、その各々の内容はどれ程互に相違してゐるであらうか。自然なるものを、子供のために或る制限されたる範圍内に閉込めようとするのでなければ幸である。

（『白夜雨稿』の「自由畫を難ず」より）

獅子ウブラジンとエレル老人

讀み耽つてゐた本を草の上に投げ出し、起返つて其邊を見廻した。六月初めの朝日は青葉をもれ、丈程高く伸びた牧草の上にあつた。何時の間にか着物はしつとりとなつてゐた。動き易い草の上を風が渡つて行く、梳られては靡き、浪打つては流れ、伏しては起きしてゐる。軟かな其動搖が美しい人の前髪を動かしてゐるやうだ。

一人の逞しい若者が三日月形の大鎌を確かり兩手で握り、腰をすゑ右から左へ身體と一緒に振り廻すと、草は將棋倒しに倒れて行く。寂かな林の隈で草を刈る斷切れのいゝ鎌の音許り聞えてゐた。

倒れた草は日光に蒸され、強い薫を放つた。甘い媚びるやうな匂を嗅ぐと、鼻の爛れる思がする。枯草の匂ふ強い刺戟は樣々な病人を出すといふ話、自分は今更のやうに息苦しくなつて、ぢつとしてゐられなくなつた。

輕い頭痛を感じながら、立上らうとして、直ぐ脚元の草の中に人の首があるのに驚いた。自分より前に既にそこに來て居た人があつたのか、それとも後から來た人か、一向氣附かなかつた。彼も横臥したまゝ顏の上に本を擴げて、日光を遮りながらそれに耽讀してゐた。

其處はヴヰルラボルゲエゼ公園の林の奥にあたつて、めつたに人の來る處ではなかつた。自分と同じやうな此隱家を知つて居る人は抑々何者だらうと思ひ乍ら、草の間を透かしてみると、ウブラジンであつた。彼は帽子を目深に顏の上に載せて、褐色の頭髮を時々無意識に動かし、大きな身體をどつしりと横たへて一心に讀んでゐた。周圍の底のないやうな寂寞を心地よげに領してゐる彼を驚ろかすに忍びない氣がした。そのまゝ立去らうと、一歩二歩動き出すとその足音に氣附いてか、身體を起して彼は訝かし相に自分を見上げた。

自分は再び腰を下した。此處が公園中一番靜かでいゝ隱家であるとか、二人のうちどつちが早く來て居たであらうとか平凡な話を初めた。又ヴァンベルスキイの消息を尋ねてみた。ブタペストから來た一枚の葉書では兩三日中にソモギイへ歸ると書いてあつたと彼は答へた。

開いた本を膝の上に伏せたまゝ、彼は兩手を後ろに突いて半身を起しながら話した。

彼の伊太利語はヴァンベルスキイ以上に拙かつたけれども、故郷は墺獨國境のプレスブルクで、獨逸語は母國語のやうに自由に話した。彼は獨逸語で補ひながら且つ手眞似を混へて說明した。

彼の會話はその體質なり、容貌なりと少しも異らなかつた。武骨で、熱心で、精力に充ちてゐた。吾々は次第に繪の話を初めた。彼はミケランゼエロとティントレットを揚げて、それ以外に眞の藝術はないやうな事を主張した。彼は突然自分に向つて、和蘭陀に行つたかと訊いた。自分の未だと云ふ答へに、何故行かないのだと折返して追窮した。レムブラントの偉大を味ふ爲には、是非行く必要がある、羅馬で彼から何を學ぶ事が出來る、彼を識らないのは歐洲繪畫の眞髓を識らないのと同じ事だと云つて、彼のレムブラント巡禮の話を初めた。

故郷に居た頃日夜この名匠に憧がれ、遂に和蘭陀行の旅を思立つた。今日の世の中に、僅か許りの路銀を懷中して喰はず飮まず、何百里

といふ長途を徒歩で二十日かゝつて、やつとアムステルダムに着いた。夜番の大作の前に立つた瞬間の狂喜と驚愕はもう言葉に餘つて終つた。それを言ひ表はす爲に、彼はむつくと飛上り、兩手を擴げて、「絶大な奇蹟」だと叫んだ。彼の眼は今更のやうに耀き、まざまざと當時を思ひ出したかのやうに、手眞似をしながら、このやうに知らず識らず涙が流れて、とめどがなかつた。繪の前に跪いたまゝ泣いた。それは最早や一面の繪畫ではなく、自然の復活で重い深い威力が人を壓して終ふ。頭を上げ得るものではないと云つた。彼の巨大な身體の隅々には、自己を表現する本能的必要が漲つてゐた。人が例へば美しいと云へば濟む所でも、彼は非常にと力を入れて云ひ張らねば氣が濟まなかつた。然し憧がれに憧がれた名畫の前に、空腹と疲勞とで倒れん許りになつて行着いた時の感情を、今彼がかく云うたとしても必ずしも誇張だと許りは思へなかつた。

彼は歸途ドレスデンの畫堂を見た事も話した。かの若者は相變らず同じ調子で草を刈つて居る。來週土曜——夫れまでは肖像を描く筈だから——畫室に來ないかと云つた。自分は承諾して草の中から立上つた。遠くの林の中を散歩して行く人や、馬車の驅けるのが見えて來て、自分は段々賑かな方へ出た。

由緒の古い數々の宮殿の中でも、パラッオ。ヴェネチアは十五世紀の末、大僧正ベンボ（後に法皇パオロ二世）が大コロッセオの一部を破壞し、その石材を用ゐて造營せしめたもので、城郭に似た簡明至純而も莊重な風格が羅馬宮殿中の一傑作と賞讃されてゐる。建築家は樣々な理由から樣々な人々に擬せられてゐるが明かでないとみえる。盛裝せしめた五百人の從者を有つてゐたといふボルソ・デステもこゝに住んでゐた。佛王シャアル八世の王宮にもなつた。羅馬人から今にその麗容と才徳を忘れられない墺國大使A夫人のサロンにもなつた。ピオ十五世が千五百六十四年にヴェネチア共和國に與へたと云ふ古い關係から、今でも墺洪國大使館になつてゐる。建物が廣過ぎるせゐか、一部を割いて美術留學生の寄宿に宛ててある。ウブラジンも政府の留學生として、其處に住んでゐた。自分は不案内にも、金ぴかのリブレを着て長い杖を突いた門衛が嚴めしく番をしてゐる、大使館の表門から這入つた。受付の男は少し慳貪に、右に曲れ左に曲れ而して又右に曲れといふやうな事を早口に說明して吳れたが、とても分るものではない。忽ち道に迷つて廣い廊下をあちこち迂路ついてゐた。灰色の壁、冷い石敷の廻廊、中庭から來る濕めつぽい午後の蒼白な光、何一つ古い僧院のやうな感を與へないものはなかつた。幸ひ之も留學生の一人らしい青年が幾度も曲り、階段を上り下りし、廣い室を横ぎり案内して吳れた。浮彫のある高い入口の扉に、名刺が一枚畫用のピン針で留めてあつた。ミッシェル・ウブラジン彼の名が讀まれた。

彼は優に三部屋を獨占してゐた。云ふまでもなく廣過ぎてゐた。入つて最初の部屋は少し暗くもあつたが、使ひ古るした彫刻用のモデル臺が一隅に塵だらけになつたまゝ捨ててあつた許り、他に一物もなかつた。次の室はぶつ通して一つの畫室にしてあつた。中庭を北にして少し寒い位の光が十分に這入つてゐた。畫架が三つ四つ、椅子、卓、臺等が散らばつて隅に小さな寢臺が置いてある許り、から云ふ單調な畫家の生活ぶりを由緒ある宮殿の一部に見るのは甚だ淋しい心地がした。

ウブラジンは其中を大股にづしん／＼と歩いて、椅子を運んだりしたが、天井の高い室內で

は流石の彼も少し小さく見えた。畫架には半出來の同じ人間をモデルにした二枚の肖像畫が載せてあつた。どこかで見た顏だと思つたが、思ひ出せなかつた。頭がつるりと禿けて、幅の廣い赭ら顏に片方の目丈け丸く涙ぐんだ鈍い光を放つて、片方はつぶれたやうに小さく、凋びて居た。臀の太い卷き上つた眉毛は目の上に落ちて來て、陰鬱な影を作つてゐた。肉感的な大きな鼻と圓い脣――髭は一本もなかつた――皆な此質の、肥えた老人の物質的な同時に神經質な執着の強い性格を示してゐた。どうしても見た顏だと思つた。さうだ、エレル老人だ。どうして彼がこゝへ來てゐるのだ？ 彼位特色の強い顏は多く類がないのだから、一見直ぐ分る筈であつたのに一寸思出せなかつたと云ふのは、全く別々な方面で識つた二人を無理にウブラジンとの關係で思ひ出さうと努めたからであつた。

ウブラジンは彼に引きかへ、骨張つて肉がごり〳〵と引締つて、双の眼が小さいながらに強く光つてゐた。髮でも髯でも丁度綽名の獅子のやうに白茶けた褐色を帶びてゐた。彼は猛獸のやうに恐ろしい表情を持ちながら、又猛獸のやうに親み易い何者かを持つてゐた。常に攻撃的でありながらすきの多い大ざつぱな所に無邪氣で相手を安心させる美點があつた。彼は先づ自分の思ふ事を十分云ひたい性分であつた。立つたまゝ時々歩きながら大きな聲を出して話した。

自分が畫室に入つた時、彼はレクラム版の厚い本を讀んでゐたらしかつた。やがて彼は其本を取つて、これを讀んだ事があるかと云つた。見ればゲエテの詩集である。その說明によれば、今まで――ウブラジンは吾々より年長で二十七八にもなつてゐた――嘗て詩といふものを讀んだ事がなかつたが、四五日前コルソの通りで何氣なく本屋をのぞくと、ゲエテのこの詩集が目についた。丁度詩を作り初めてゐたので直ぐ夫れを買つて歸つた。ゲエテの詩は實に立派なものだと思ふが、俺の詩は先人のものを讀んだ事なくして作るのだから、一層新鮮である。然しこれからは詩も勉強する。第一にゲエテを卒業せねばならぬ。ファウストをも入れて、一週間あればそれには十分である。それからシェクスピアとダンテを讀む。勿論原語でなければ無意味なものだ。言葉？ 言葉なんか一週間も勉強すればきつと讀める。俺には讀めるやうになるんだ。それから詩作をして今年の秋に、ライプチッヒで出版させる。或友達がもう紹介して呉れて、本屋との契約は略ぼ出來た：・彼はその詩集の必ず成功すべき事を堅く信じてゐた。かくの如く彼は何事にでも強い自信を持つてゐた――少くも本當に自信だけは持つてゐたのであるから、彼が大聲で力を込めてこんな事を眞面目に斷言する時は、いかにも賴もしく、尤らしく見えた。氣の弱い者は威壓を感じて、さうかと思ふやうになる。然し彼がいかに大口で頰張るにせよ、シェクスピアとダンテの鵜呑には驚かされた。

ライプチッヒで彼が出版させると云つた詩の原稿は一尺位の高さに三段に積んで、モデル臺の上に載せてあつた。自分は僅かの間に、よくこんなに澤山書いたと驚くよりは、其原稿紙の不思議なのに呆れた。原稿紙といふのは服地の見本が張つてあつた細長い厚紙を伸したもので、裏には羅紗の貼つてあつた痕がちやんとついてゐる。それに鉛筆で――力強い見事な筆蹟で――詩句が一杯書き聯ねてあつた。彼は一體何處からこんな厚紙を探して來たのだらう？ 何んの必要からこんな廢物を利用せねばならなかつたのだらう？ 單によく鉛筆が滑ると云ふ爲か、どんなに力を入れて書きなぐつても破れ

る惧がないと云ふ爲か、彼の戀人といふ娘が服屋に奉公でもして居たと云ふ爲か？

彼がかく詩人になつたのは緣故だつた。二十七八になる其日まで、戀らしい戀といふものを味はつた事もなく過して來た彼は、偶然な出來事で忽ち物の情を知り初めた譯である。或日コルソの通りを例の傍若無人の勢で進んで行くと、とある四辻の角から、突然若い女が駈け出した。彼女は一人の友達と何か話しながら一寸横見をして來た拍子だつたので、あゝと云ふ間に、ウブラジンの横腹にぶつかつた。彼が身をかはしさへすれば突きあたつてくるのを强ち避け得ぬではなかつたが、餘所見をして居て向から勝手にぶつかつて來る彼女に腹が立つた。まゝよと猛進した來た勢で力をこめて彈ね飛ばしたから、ゴム人形のやうに二三間先きの人道と車道の間にある石に躓つまづいて、前にのめつてどたんと倒れた。我を忘れて少女を抱き起しながら、憤怒と恥辱とで目が眩み相な心地がした。一つは彼女に對して、一つは彼自身の無謀な態度に對してであつた。彼女は頰をすりむいてゐた。手の平からは血が出て眞白な腕まで流れて上着が染まつた。彼はそれを見るとひやりとして今迄の慘忍な激怒は忽ち惻隱の心に變つた、娘は氣丈に起上つたが、跛を引いて一歩も歩けない。彼はもう夢中でいやがる娘を輕々と擁き上げ、その友達の娘に案內させ、遠くもない彼女の家へ連れて行つた。負傷した娘を見知らぬウブラジンの腕に見た母親は、怒り、憎み、恨んだけれども、彼の並外づれて巨大な、野蠻な人相には懼れ畏かざるを得なかつた。小言一つ云ふ事も出來ないで娘を受取つた。彼が姓名と住所を告げ、面に眞實を表はし詫びて歸つた時は、母親もやつと一安心した。

其夜ウブラジンは一睡する事も出來なかつた。翌朝早く見舞に行つて負傷は何んでもないと聞いた時、嬉しくも思ひ、物足らない氣もした。でも娘は二三日外出する事は出來ないで、部屋を守つてゐた。ウブラジンは每日見舞に行つて、娘にも逢つた。娘はサビイナと云つて、父親はもうとうに死んでゐなかつた。兄弟が二人と母親と四人暮であつた。サビイナは或商店へ通つて、いくらづつかの收入を生活のたしにしてゐた。傷は直ぐ平癒して終つたが、ウブラジンが心に負つた傷は反對に一日々々深くなつて次第に爛れそこから血がにじみ出す程になつた。彼は全快したサビイナを見舞ふ術を知らなかつた。もう一度彈ね飛ばして負傷させるやうな機會に遇はぬものかとすら考へた。彼は發熱したやうに身體の置き所に窮した。絕えず喉が渴いて水許り飮んでゐた。製作する事も、會話する事も、眠る事ももう出來なくなつて宛處なく步き廻つた。野でも山でも行き倦れて、せめて其處で眠らうとした。

彼は胸中に點じられた小さな火が、か程の威力をもつて、彼全體を支配しようとは思ひまうけなかつた。無益に戰つて、常に敗れた。知らず識らず作詩を覺えて唯一つの慰安がそこに見出された。彼の詩といふ詩は悉く彼女に對する渴仰と興奮の記錄に外ならなかつた。

或る夕暮、ウブラジンはピンチョの丘から、波打つ瓦の上に日の光のかぶさつて行く市の有樣に眺め入つて、普通一般な情人の愁に心を奪はれてゐた。コルソで偶然起つた珍事、あの人を平氣で抱き起した事を思へば夢のやうである。彼はかの出來事のあつた爲に惱まされつゝある自分を憐み、悔恨の情に攻められながら一方には、それを無上の天惠のやうにも嬉しく樂しく考へた。考へあぐんで、あのサビイナを抱きかゝへた双の手を眺めた。もう何んにも、もう殘つて居ない。今は何を摑めばいゝのか何を握ればいゝのかと、悶えた。石の欄干を堅く

毀れよと握りつめて、廣い空漠な市の上へ首垂れたまゝ、思ひ沈んでゐた。

彼が振り返つて其處に立つてゐるサビイナを見た時は、想像がそのまゝ實現されたのだと感じられた、その恍惚たる熱病的心狀は彼を幸ひした。平日の臆病とはにかみ性とは影をかくして、大膽な握手、思ひ切つた告白が自由に出來た。サビイナは默つて耳を傾けてゐた。彼は此再度の邂逅を奇蹟であると考へた。然し彼自身も奇蹟以上の勇氣を振つてサビイナに對する事が出來たのだつた。彼女は別れに臨んでも、慇懃に再會を許して立去つた。ウブラジンはもう夢中だつた。どこをどう歩いて歸つたか分らなかつた。

ウブラジンの戀は急流のやうに滑つて、深淵に落ちて行つた。熱狂的な單純な戀の筋道はざつと以上の通りであつた。彼は無闇に獨り昂奮許りして、相手のいかなる女であつたかさへ、聞いて居る自分には判然しなかつた。兎も角今はひとの詩でも讀む程の餘裕がやつと出來た譯である。

彼の巖丈な體軀も、意志の塊りのやうな容貌も、野蠻に近い動作も、運命と本能の威力に對しては土塊程の抵抗力もないのを見ては恐ろしかつた。同時に人間芝居の操人形の姿をこの獅子のウブラジンの上に見るのは役割の妙が少し滑稽でもあつた。

彼は臂を伸して、モデル臺から服地見本の詩稿を取上げ、讀んで見るから聞いて居て吳れろと云つた。詩は獨逸語で書いてあつた。勿論自分には何が書いてあつたのか分らなかつたが、朗讀する太い聲の耳觸りが愉快であつたのと、畫室の中の光線をあびた偉大な姿勢が何かドラマティクであつたので、默つて耳を借してゐた。彼は時々朗讀をやめて說明を試みた。讀んだ部分に一人の少女を肉親の父と爭ひ合つて、遂に父の喉に短刀をさしつけ、刻々に死んで行く、その父に向つて戀の甘さを說くといふやうな一節や、村人を悉く相手に嘲り罵りながら、故鄕を飛び出す一節では殊に力を入れて悲壯な聲で呻つた。彼は自ら感動してスブリームだスブリームだと嘆賞にたへぬ風であつた。

自分は椅子を立ち、書架の前に行つて、描きかけの二枚の肖像を比べてみた。ウブラジンもそこへ來て何故に描き直さねばならなかつたかといふ理由を說明した。赤い頰——酒で染まつて終つたあの頰、どうしたつてエレル老人に相違ない、と心に繰り返しながら自分はウブラジンを見上げて、——これはエレルさんだらう？　さうぢやないか？　と訊いた。

彼はひどく驚いた面持で自分を見詰めた。

あゝ、さうだ、その通り。だがどうして……どうして、お前は夫れを知つてゐるのだ。

—俺は彼を度々カヴァルロ・ネエロの料理屋で見た事がある。話をした事もあつた。然し此二三ヶ月は少しも姿を見せなくなつて終つてゐた。

—あゝさうか。さうだ、奴はよくカヴァルロ・ネエロへ行つてゐた、本當だ。

彼は歎息するやうにさう云つた。而してエレル老人に對するオピニオンを窺ふかのやうに自分の顏をしげ〳〵見た。

然し自分とエレル老人との間には、彼に讀まれるやうな何等の深い關係もなかつた。自分は今云つた通り、唯だ食事をしに行くカヴァルロ・ネエロで時々一緒になつたと云ふ丈けであつた。カヴァルロ・ネエロと呼ばれる譯は黑馬の首が入口の上に看板に出てゐたからで、其下に二十文とか三十文とか葡萄酒半リイトルの値段が大きな文字で書きつけてあるといふ格の安

料理屋であつた。學校から遠くない、ヴィア・フレッキといふ裏町の露路の奥に中庭に向つて入口がついてゐた。四方とも高い建物の裏側の壁でかこまれてゐた。表通りを廻つてくれば何町も行かなければならないやうな家と家とが、此裏隣りで顏を突き合せて相接し、その窓から窓へ綱が引張られ、洗濯物がずらりと掛けてある。天氣のいゝ日などは中庭へ卓を出して、滴のたれる乾物を賞美したり、窓から顏を出す口の惡い娘達にからかつたりした。そんな店の亭主とか神さんとかいふものは大概呑氣で、人の好いものである。勞働者であれ、學生であれ、紳士であれ、大通りの料理屋とはちがつて一向差別などは設けない。それで甘いものを喰せ、拂ひも廉い。吾々美術學生はいつもちやんとから云ふ自由な穴を知つてゐる。勿論實用向からの發見であるが、外國から來て居る御孃さんなどは夫れをアアティスティックと心得て、態々見物に連れて行つて吳れとせがむ。垢のついたフオクを氣にしながら大きなビイフテキに膽をつぶし、襁褓の下つた窓を寫眞にまでとつて歸る。恐らく夫れが一生の冒險談の一つに數へられる位なものであらう。

吾々定連は常に五六人ゐた。多くは瑞西から來てゐる畫家であつた。春になつた或日、自分が遲れて二時頃——元來吾々の食事には定刻がなかつた。店でも夫れを心得てゐて何時でも拒むやうな事はしなかつた。何かあるか？ と云へば亭主はいつでもプロント（待つてゐました、と明瞭に答へ、そのあとへ直ぐ白か、黑か？ とつけたして問ひ返した。黑といふのは赤葡萄酒を意味するのである。から云ふ店、トラットリイヤの習慣として若し酒を飮まない人があれば、可なり重い罰金を拂はねばならぬ事になつてゐた。——這入つて行くと連中は空になつた皿を前に置いて、その中へ煙草の吸殼を落しながら、空論に餘念なかつた。彼等の中に一人の見知らぬ老人がゐた。丈の低い橫肥りの、身體の割に頭の大きな、偏盲のやうに見えた（實は片目ではなかつたのであるが）彼は兩臂を机の上にもたせ、酒の入つた洋盃を兩の拳の間に大切相に置いて、前の方にかゞんだまゝ動かなかつた。唯だ時々重相に洋盃を脣に運んでは又元の姿勢に歸つた。日だまりのやうになつた此中庭の春の日の反射と酒の氣とは彼の顏を火のやうに赤くした。目はどんよりと鈍つて、物を正視するに堪へない程だつた。諸てこれら廢頹的の外形に拘らず、どこかに聰明な相が殘されてゐた、或は彼の鐘のやうな沈重に態度と、年齡の錆がさう思はせたのかもしれなかつた。連中は勝手々々な議論をして、誰も熟々彼に耳を傾けてやる者は居なかつたが、彼は平氣で徐々自分の云ふ丈けの事を云つた。彼はセガンティニを論じてゐた。其中で、セガンティニは其天稟と性格に於て伊太利人と云ふ事は出來ない。古いゴオル人の復活して來たものだ。どうださう思はないか？ とか、俺は決して複寫から批評する事をしまいと思ふ、大した誤謬を生ずる事がある、とか云ふ斷片的な言葉を覺えてゐる。後の言葉は友達が自分を日本から來た畫家であると云つて彼に紹介した時であつたと思ふ。彼は日本畫に關しても相應の議論をする事が出來た。

老人は酒を催促しながら、若い者に負けずによく語りよく論じた。激昂する事もなく、衰弱する事もないと云ふのがその會話の態度であつた。自分は何故人々が彼にもつと尊敬を拂つて耳を借してやらないだらうかと訝つた。議論では若い者の方が時々やり詰められてゐた。それに拘らず老人は彼等を支配する事が出來ず、若い者共に彼に下らうとしなかつた。此態度が自分をして老人に同情せしめ、若い者共を少し卑

怯であると思はせた。老人の限りない酒量と談議には吾々が立ちのくより外途がなかつた。

自分はヅブラア、ブッフマンと云ふ二人の友と連立つて黑馬の酒屋を出た。露路のどこかで唄つてゐる女のいゝ聲が、細い張金のやうに四方の壁に響き渡つてゐた。

二人はこの老人に就いて樣々な噂をして吳れた。彼は名をヂェオルヂ・エレルと云つて、一時は美術批評家として有力な人であつた。未だピウヰス・ド・シャヴアンヌが無名の靑年畫家として一向世の中から顧られなかつた時分、その天才技倆を認め激賞した評論を初めて公けにし、此靑年の爲前途を切り開いてやつたのは寔に彼であつた。春のサロンを二つに分離させる爲め奮鬪したのも彼であつた。ゾラに痛快な攻擊を試みたのも彼であつた。彼は十九世紀末の新興藝術の爲、樣々な大切な役を勤めたのであつたといふ。吾々から見れば二昔前の歷史のやうな大事件に關連した人を、から目前に見るのは不可思議な心持がした。そして夫程の履歷を持つた老人を、何故之等靑年が一も二もなく輕蔑しきつてゐるかが分らなかつた。尤も彼は方々の料理屋にまで借金を作つて、時には酒の上とは云ひながら、悲しむべき亂暴を演ずるといふ事實も聞かされたのであつた。

ウブラジンがエレル老人の名を聞いた瞬間に、一種の緊張を精神に受けたのは見逃し得ない明瞭な事實であつた。何か神祕な豫想が自分を襲つた。ヅブラア等の知らない或者がウブラジンとエレル老人との間にあるに違ひない。夫れでなければウブラジンがこんな吃驚したり、その感動を無理に抑へようと努めて、而も抑へきれない筈がない。

ウブラジンは老人に就いて知つてゐる丈けの事を悉く話して吳れと云つた。自分はヅブラアから聞いた事を思出し得た丈け話してやつた。その中には未だ彼の知らない事實もあつたらしかつた。彼は聞き終つてからも尙ほ默然と考へ込んでゐた。今度は自分が當然の權利としてエレル老人に對する彼のオピニオンを促した。

彼が老人を識つたのは別に誰れから紹介された譯でもなかつた。或日古着古道具等の市が立つ、カンポ・デイ・フィオリイの廣場に行つて、偶然小さな聖母のテンペラ畫を見出した事があつた。可成り損じてはゐたが、捨てがたいものだつたので道具屋の爺に十五法にまけよと云つた。爺は二十五法でなければ原が切れるのであるが二十法までならまけてもいゝと云つた。彼は實際十五法より多く持つてゐなかつたのであつた。

そこへエレル老人が來たのである。失敬だが一寸見せて吳れろと彼の手から畫を取り上げ、眼鏡をかけて細かく角から角まで見てゐた。そして二十法ならば廉いものだから買つておやりと云つた。ウブラジンは當惑した。彼は老人を一見して外國人と知つたから、私は十五法でなければどうしても買はない。貴方が欲しければ讓りませうと道具屋に解らないやうに獨逸語で云つた。老人はウブラジンの爪先から頭の上まで見上げて、本當に異存はないかと、之も立派な獨逸語で念を押した。老人は一寸迷惑相な表情をした。實は懷中に十法某しか持つて居ないのだ、此畫は明日まで貴方にあづけるから十法丈け借しては吳れまいかと切り出した。ウブラジンは驚いた。自分よりも尙ほ懷中の乏しい此男が買ふと云ふのである。貧しい人々は思ひやりのいゝものである、直ぐ承諾した。二人はからして識合ひになつたのであつた。

所が不思議なのは佛蘭西人であると自稱して居るエレル老人がウブラジンの生れたプレス

ブルクの些細な事までよく知つて居る一事であつた。彼の言葉に從へば、四十年も前にある事業の爲其町に暫時住んでゐた事があるからだと云ふのである。これらの媒介や、同じ藝術にたづさはる事が直ぐ二人をして親密にした。のみならず此二人には當然相容るべき性格の一致があつたやうに自分には考へられてゐる。

ウブラジンが彼の肖像を描き初めてからは毎日來た。時にはポオヅをすると云つても酔ぱらつてゐて、どうする事も出來なかつた。終ひには僅かの金でも彊制するやうな事があつた。

或日エレル老人はウブラジンの書室にコンニャックの壜を上着の下にかくして、這入つて來た。毎時になく少し調子がはずんで上機嫌だつた。何を思つたか百法の紙幣を二枚出して、お前には此間中から度々借があるから、元利合せてこれ丈け取つて置いて呉れと云つた。彼は其外にも未だ束にした紙幣を澤山持つてゐた。

可成り酔つて這入つて來た上に、コンニャックを一壜一人で煽つたから、椅子にもたれたぎり、ぐつたりなつて終つた。正體を失つた彼は、思ひがけなくも洪牙利語でぺら〳〵喋り出した。普段口にしないやうな事まで喋つた。昔から彼は今日のやうな浮浪人ではなかつた事、伯爵家に一人息子として育つた事、容貌の醜悪が一生祟つて苦しみぬいた事、様々な女に對する果敢ない戀、殊に絶世の美人と唄はれた細君に對する戀、それらを話す時はもう泣いて居るか、呻つて居るか解らなかつた。ウブラジンは先刻から此老爺が癪に障つてたまらなかつた。明日までも動き相もない溶けたやうな醜い姿を見ると、じり〳〵氣がいらだつて、身體中熱い鉛の湯が馳け廻るやうに思はれた。彼は我慢がしきれなくなつて叫んだ。

―あゝ、もう、もう澤山だ。歸つて呉れ。さあ直ぐ歸つて呉れ　誰れが貴様のやうな酔倒れの金なんか受取る奴がある。歸れ！　もう澤山だ！

ウブラジンは猿臂を伸ばして、エレルの襟首を掴んだ。

―歸つて行つて呉れ！　出て行つて呉れ！

老人はぐつたりしたまゝ、解つたのか解らないのか身動きしようともしなかつた。

さあ歸れ！　金はこゝに入れてやる。

彼の手に紙幣を握らせて、かくしに押込んだ。老人は徐かに紙幣を取出して、夫れが果して二枚あるか、又破れでもしないか、注意深く検査した。そして大事相に又夫れを藏めた。ウブラジンは云ふに云はれぬ侮辱を受けたやうに感じた。

―出て行くが一寸待つて呉れ。未だ壜の底に殘がある！

流石のウブラジンも一寸呑まれたら。老人は又悠々と夫れを傾けて終つてから、ぶつ〳〵獨語しながら、椅子を立上つた。彼はちやんと帽子を探して、夫れを被つて戸口の方へ近寄つた。

―愛らしい私の息子よ。お前には未だ人生の苦惱も悲哀も解らないのだ。何れ解る時が來るだらう。俺のした事にそんなに腹を立てゝ呉れるな。俺は苦しい弱い人間だ！

―馬鹿！　早く歸れ！

ウブラジンは彼の背中へ扉を力一杯たゝきつけた。一人になると大きな寂寞が彼の上に落ちて來て、重苦しい氣分に捕はれた。いくら考へまいとしてもエレル老人の事許り考へられた。彼には考へねばならぬ譯があつたのである。

（プレスブルクの町端れに、彼は一人の親友を持つてゐた。その高い家の窓から北に當つて、廣々した庭と立派な屋敷が望まれた。廣間から

庭前の噴水に下りる階段までも手にとるやうに見えた。今は某といふ貴族の別莊になつて居るが、久しい間無住の廢屋であつた。ウブラジンは友達から其家の由緒を聞いた事がある。尤も其話は四十年も昔に溯るのであるが、大概町の人は今でも記憶してゐる有名な事件であつた。

その問題の家にもと住んでゐたといふのは、フォン・ミスコレエツといふ伯爵である。プレスブルクでも家柄の貴族で、同時に金滿家だつた。其上有名な美男であつたから、樣々な婦人と關係して、常に浮名を流した。其好色な殿樣は未だ花の齡で早世して終つた。一人の息子が襲爵した。彼は父に引換へて珍らしい程の無男で、世間の笑物になつてゐた。それは先代が餘り罪を作つたから、神樣の示された當然の誡めであると、陰で噂した。彼が相當の年齡に達した時、殆んど強制的な結婚問題が起つた。自分の醜いのをよく自覺してゐた彼は一生結婚しまいと考へてゐたと傳へられた位だつたが、過つてその結婚に服從する事になつて終つた。

花嫁ヨハンナはワイスキルヘンと云ふ貴族の家から來た。ヨハンナは十三の時母親に別れ、父親の手一つに甘やかされて育つた丈け、我儘な娘であつたが、それを償うて尚ほ餘りある程の美人であつた。世間では二人の容貌を比べて花嫁が可哀相だとか、いくら財產家だとは云へワイスキルヘン男爵の仕方も譯が解らないとか評判した。然しフォン・ミスコレエツの若殿は幸福だつた。どんなに幸福であつたか云ひ盡されない程幸福だつた。

一人の幸福が二人の幸福である事もある。又もう一人の不幸を意味する事もある。ヨハンナは不幸であるといふ事が間もなく噂に上つた。彼女には別に意中の人が――夫れも一人ならず――あつたけれども、良人の強い嫉妬のため、どうする事も出來ないといふのであつた。然るにそれ以上恐るべき事實がやがて傳へられた。花嫁は結婚後いくらにもならないのに、不義を働いてゐる、而もその共謀者は誰れあらう娘を悲境に陷れたと云はれるワイスキルヘン男爵其人で、彼は反つて娘を唆かして婦道を誤らしむべく、樣々の便宜を與へたのである。男爵の此盲目的な行爲は娘が憎いからでは勿論ない、又可愛いばかりからでもなかつた。實は故フォン・ミスコレエツ伯爵に對する深い遺恨からであつた。フォン　ミスコレエツ伯は彼の夫人と彼の名譽とを辱めた上、遂に彼女を悶死するに至らしめたのであつた。ドン・ヂャン――フォン・ミスコレエツ伯は苦惱といふ事を露ほども知らずに現世を去つた。彼の願はせめて其の子をして彼の味つた苦惱の何分の一でもいゝから味はせてやりたいといふ執念に外ならなかつた。

チェオルヂ・フォン・ミスコレエツ伯は男振こそ醜かつたが、十人並優れた聰明な青年であつた。而して父の分までもかの恐るべき自ら苦しめ損ふ的の良心(?)を餘分に持つて生れてゐた。彼が結婚によつて贏ち得た幸福は半歳と長く續かなかつた。彼は直ちに幸福を思切つて終つたが、束縛された禍から逃れる事はどうしても出來なかつた。惡鬪は實に三年の久しい間彼を苦しめぬいた。彼は妻を支配する事も出來ず、自分自身を支配する事も出來ない憐むべき敗北者になつて終つた。ワイスキルヘン男爵の執念は思ふ存分に報い得られた譯である。

可憐なヨハンナの蒼白い顏を死の床に見た人人は凄い程美しかつたと云傳へてゐる。彼女に科せられた樣々な不貞不義の罪名は、悉く無實であつたと云ふ噂が立つて深く憐れまれた。

チェオルヂ・フォン・ミスコレエツ伯は謀殺犯として嚴重に搜索されたが、遂に何年たつても捕縛されなかつた。多分人知れず自殺したらうと云ふ事であつた。」

エレル老人が正體を失つてぐつたり椅子に埋まり、洪牙利語を喋り出した瞬間から、ウブラジンに或る疑が何處からともなく來て心に宿つた。此恐ろしい疑惑は彼の氣分をいら〳〵させてから目前にだらしない老人を見てゐるのが苦痛で堪へられなくなつたのだ。この一種の昂奮から彼は無理にも慘酷らしく老人を戸外に追拂つた。追拂つたものの一層重苦しい氣分に彼は捕へられて終つた。頭の中にプレスブルク町端れの窓から見たあの屋敷での殺人犯の光景が、浮ぶやうに想像された。考へ迷つて彼の頭は熱くなつて來た。どうにか判然解釋をつけねば立つても坐つてもゐられなくなつた。

——どうしてもさうだ。エレルはミスコレエツ伯に相違ない。

と叫びながら椅子から飛び上つて、急いで戸を明け廊下に出たが、その時はもう老人の姿は消えてなかつた。彼は廊下に熱して突立つて居る自分を見て戰いた。俺は何んといふ氣狂ひだ？　俺は抑々何んといふ無謀な考で何を企ててゐたのだ？　エレルは善良な憐むべき醉倒れだ。俺は彼を絞殺でもしかねない有樣だつた。彼に何んの罪があるのだ？　俺にとつて何んの恨があるのだ？

ウブラジンは冷靜になるかと思ふと又昂奮した。二つの力が身體の裡で互に爭ひ合つて居る間にサビイナの姿がちよい〳〵表はれては消えた。或時はサビイナがヨハンナのやうにも思はれた。ヨハンナがサビイナのやうにも思はれた。彼は日暮まで同一の考に支配されて何んにも手につかなかつた。考へあぐんで衰へをさへ感じて來た。彼はサビイナが戀しくて戀しくてたまらなくなつた。この問題を解釋して吳れるのは唯一人彼女が居る許りだとさへ思はれた。點燈の頃彼は破れた帽子を被つて往來に出た。パラツオ・ヴェネチアは影繪のやうに夕映の空にあつた。往來の馬車も自動車も步く人も皆彼女の家へ向けて急ぐやうに見えた。

サビイナとその母親は今日の出來事や、プレスブルクの昔話を、さも熱心に聞いてゐた。それだけでもうウブラジンは今日半日の惡夢を洗ひ去つたやうに思つた。

ウブラジンの話を聞き終つた二人は互に顏を見合せて、ヨハンナに同情を寄せた。ミスコレエツ伯親子に對しては絕對の憎みを感じた。而してエレル老人が或はヂェオルヂ・フォン・ミスコレエツの後身でなからうか、怖ろしいと云つた。尤もウブラジンがさう思はせるやうに話したから、調子を合せるためさう返事したに過ぎなかつた。

翌日も、その翌日も、その翌日もエレル老人は來なかつた。金のある間は飲んでゐるのだらうと思つた。サビイナ親子はウブラジンを見る度に老人のその後の消息を尋ねた。ウブラジンは一時の苦しまぎれにあんな祕密を皆んな打明けて終つた事を深く後悔した。而してサビイナ親子の前に自分自身ひどく決斷のない男、生氣地のない男のやうに思はれた。どうしてももつと明かな判斷を下す責任があると思つたが、それは餘り愛溺な利己的な行爲だといま〳〵しくもなつた。又或時はエレルを憐む心になつたり、或時は自分の無謀が恐ろしくなつたり、果して彼がヂェオルヂ・フォン・ミスコレエツであらうか？　と思つたりした。

ウブラジンは漸く薄暗くなつて來た畫室の中で、エレル老人の肖像畫を後ろにして尙ほ話を續けた。老人の顏は謎のやうに默してゐた。

——四日目の朝……とウブラジンは四つ指を折

つて自分の目前に差つけ、言葉を續けた……扉を叩く者がある。來た……と思つた。俺は急いでからボタンをかけ身構をしてそつと少し扉をあけてのぞいた。彼だ。俺は又扉を閉めて終つた。この扉を明けようか、明けまいか？　若し一旦こゝを明ければ、俺は彼の心の心の底まで見拔いて彼を罰せねばならない時が來る。若しこのまゝ彼を歸して終へば、此四日間繰り返して來たやうな疑惑の裡に悶えねばならない、それは未だしもとして彼を取逃して終ふかもしれない、折角この大犯罪人を見出しながら、自分が今この好機會を逸したならば、誰が再び彼を捕へるだらう？　彼は一生巧に法網を逃れて天壽を全うするかもしれない。既に度々考へ、思いた事であつたが、その瞬間から考へると強い力が全身に溢れて來た。俺は何時の間にか扉を明けて終つた。

—エレル老人は醉つてゐなかつた。俺の顔を靜かに見上げて、用心深く次の動作を見守るやうだつた。この沈着が忽ち俺をいら〳〵させた。俺も默つて彼の顔から何か讀まうとしたが、彼位物を隱すに都合のいゝ顔をもつものは二人とゐまい。俺は何んにも讀む事が出來なかつた。央ば非常な憎みと憤怒で、央ば憐憫と尊敬で、俺は「お這入り」と云つて終つた。彼は少しも怖れる風なく徐かに室内へ這入つて來た。

—俺は一分の隙をも與へまいとしてかう云ふ風に……と彼は立上つて三四歩退いて見せた。その顔は怖ろしい疑惑と威嚇に充ちてゐた……後ろに退つて來た。老人はあすこに來て立停り、帽子をぬいだ。俺はこゝに立つてゐた。

—チェオルチ・フォン・ミスコレエツ伯、それはお前だ！

ウブラジンは鋼鐵の壁を突き破り相に右手を突出して前面を指した。同時に左の足でどしんと床板を蹴つた。自分は現場に立合つたやうな心地がした。

—チェオルチ・フォン・ミスコレエツ！

彼は繰返した。

—エレルは一言も云はなかつた。身動きもしなかつた。彼のふくれた赤ら顔は酒の外決して色の變る事はないのだ。出來得る丈けの力を兩眼に集め彼を睨みすゑて、彼から何か讀まうとしたが夫れは無益に了つた。俺は少し疑ひ出した。チェオルデ・フォン・ミスコレエツの名は思つた千分の一の感動をも彼に與へ得なかつたからである。やがて彼は口の中で何か云つたやうだつたが、俺には聞きとれなかつた。禿げた頭を一撫して右手に持つてゐた帽子を被り、この肖像畫に一瞥を與へながら、

—あれはもういゝのか？　出來上つたのか？

—と横柄に云つた。俺は默つて眺めてゐた。彼は徐かに出口の方に向返つて歩き出した。扉をあけて振向きもしないでそのまゝ出て行つて終つた。

—俺は手持無沙汰に茫然としてゐた。彼を追駈けて捕へてやらうかと思つたが、決斷力は消えて終つた。而も一方に彼が自分を欺いてゐるといふ憤怒は少しも減じなかつた。又自分の卑怯なのが不快に堪へられなくなつて來た。確かにさうだ、……と彼がゐなくなると再び自信が湧いて來た。然しもうその時は遲かつた。彼はその儘羅馬を立つて終つてゐたかも知れない。

ウブラジンは昂奮して此物語をかう結んだ。自分は半出來の肖像畫とウブラジンとを薄暗い中に見比べて、憐れむべきエレル老人が獅子の鋭爪をかくの如くして逃れた事を私かに祝福した。然し果して彼がチェオルデ フォン・ミスコレエツであつたと自分も斷言し得るのではない。

（大正三年十月「白樺」所載）

眞晝の出來事

子供達が砂の上を急いで歩いて行つた。……歩いて行つて終つた。下駄の音か、砂利の音か夏の眞晝の居睡の裡に、それは煩はしい響でもあり、却つていゝ魔薬の一種でもあつた。幸彦の睡は醒めかゝつて、醒めきれないで、又無我境に戻つて行つた。その半意識から無意識に移る途は滑かだつた。だが籐の寢椅子を並べてこれもすや／＼睡つてゐるやうに見えてゐた細君の妙子はその時恐ろしい夢をみてゐた。

兩親の午睡してゐるヴェランダの前を、幸一が黐竿を引ずりながら歩いて行くと、五つになる彦次はその後から二三疋の蟬の這入つた蟲籠を提げて、小鼻に汗をかきながらおくれまいとついて行つた。石の階段には裸の陽が射りつけてゐたから、灰色の房州石が妙に白く浮き上つて見えた。その階段の中程に一疋の蜥蜴が尾を釣針型にひねつて、日向ぼつこしてゐた。それを見付けた幸一はぎよつとして立停り、思はず母を呼ぼうかとした。その時、蜥蜴は幸一の目を見詰めながらちよろ／＼階段の上を二三寸泳ぐやうに動いた。動くと黑くしか感じられなかつたその背が波打つてぎら／＼光つた。金色と紅玉の閃きを殘して深い綠色に光つた。暗く圓く盛上つた兩眼は瞬きもせず幸一の目を睨みつけてゐた。どうしてやらうと幸一は考へた。蛙に似た喉をぴく／＼動かしながら、さも思案ありげに見えるのが憎氣だつた。幸一は黐竿をあげて打つたが何も殺すつもりではなかつた。然し蜥蜴は逸早くもう石の中に消えて終つて、切れたしつぽの先がぴく／＼してゐた。蜥蜴の切れた尾の先が動いてゐる石段の上方に、半分捲上げた簾越しのヴェランダで、よく睡つてゐる兩親を見ると、蟬の聲よりしない廣い庭の中が何か幸一に淋しく感じられた。おかあさん、おとうさん、呼ばうかと思つてみたが、兄さんらしく思ひとまつて、砂利の上に竹竿をかついだ影を運んで行つた。彦次も默つてがらがら下駄で砂利の上を引きずりながら、兄さんのあとについて行つたのだつた。

歩きながら、なぜおかあさんはあんなに睡いんだらうと幸一は少し不平になつてゐた。

さつき午飯のあとで、おとうさんは新聞を讀みながらヴェランダの籐椅子にねそべつてゐた。幸一は無理におかあさんの手を引張つて、そのそばの寢椅子につれて行き、お伽噺を讀んで貰はうとしたら、又ご本かい 何んだか今日は眠いから直ぐ居睡りして終ひますよ、それでもいゝ、さう云つた妙子はおとうさんの方を見て意味ありげににやりと笑つた。あなた怒つちやいやよ、本統にねむいんだからね、少し讀んであげますけれどもね。

妙子は急に幸一の首に手をまはし、その顏に激しく接吻しながら身體があつくなつた。お伽噺の本を幸一から受取つて、ばら／＼頁をひつくり返し、何か外のことを考へてゐた。

おとうさん、おとうさんもねむ相ね。妙子がさう云つてかざしたお伽噺の本のかげから隣の人をみると、もう新聞の屋根の下でねて終つてゐるのか、さつきのやうな笑顔を彼女の方へは向けてくれなかつた。

さあ讀んでつてばおかあさん。こゝよ。幸一はかはいゝ指先で母の手にあるお伽噺の頁をまくると、紙は弓なりに二枚三枚まくれて行つた。さうこゝいらだつたね。うゝんこゝよ。幸一はもう一枚插繪のある頁をまくつた。

—その箱の蓋を明けると中は時計に似た圓い目盛盤のある機械であつたが、針は羅針盤のやうにたつた一本きりしかなかつた。針はかち〳〵時計のやうに音を立てゝ動いてはゐたが、不思議な事には、ある時は早く、ある時は極めて遅くしか進まなかつた。やがて針の劍先がアルマンの胸の方角へ廻つて來ると、息が詰まるやうに苦しくなつて、全身しびれて終つた。そのうち針の先のまはるに從ひ、息苦しいのも、身體のしびれるのも忘れたやうに休んで終つた。やがて針は又一廻りして來た、アルマンは又前以上の苦しみを感じ出し……。聲はいつか消えて行つた。

おかあさん、感じ出し、それからどうしたのよ。

—前以上の苦みを感じ出し、箱を支へてゐた手を引かうとしても、手は糊付けに……—

おかあさんてば、それからどうしたのよ。

—手は糊付けになつたやうにぴたりと箱に吸ひ付き、足は……—

おかあさん。幸一はじれつたくなつて母の頬をつまみ上げた。妙子は眼をあいたが黒目は動かないで白目許り目立つて表れた。

—全身しびれて終つた。そのうち針の先が……—

と襲ひ來る激しい睡魔と戰ひ乍らも、讀み續けようとしたが、どこをどう讀んでゐるのかまるで分らなくなつてゐた。どうかこのまゝねかしてておくれ、妙子にはその外の願はなかつた。

本を胸の上にのせたまゝ眠入つた母の顏を幸一はいつになく不思議なもののやうに眺め入つた。妙子は色が白く、肉附のよい女盛りだつた。幽かに前齒がのぞかれる位に口を開いて匂ふやうな息をしてゐた。幸一は自分の顏を軟い母の腕の上にのせて、その頰と母の頰とを近づけなつかしい甘える心持でゐたが、二三分すると、もう一度小さい聲で、おかあさんと呼んでみた。無理におこして本を讀んで貰ふ氣もなかつたのだが、唯呼んでみたかつたのだ。妙子はそれに答へず少し上に向き直ると脣を動かした、口のなかでは玉のはじけるやうな小さな音がした。幸一は指先で母の眉毛をなぞつてみたり、鼻の先のこり〳〵する軟い部分をいぢつてみたりしてゐたが、妙子はとう〳〵目を醒まさなかつた。

本統にもうねてしまつた。仕方がないな、さうあきらめながら幸一は胸の上の本をぬき取つて、その先を讀まうとした、—手は糊付けになつたやうにぴたりと箱に吸ひ付き、足は感電したやうに……—自分で讀むにしては本が少しむづかし過ぎたので、流石先が知り度くつて仕方のない幸一も、再び本を母の乳の上にのせ、そつと目を醒まさせないやうに寢椅子の隅から立上つた。おとうさんとおかあさんとは八の字をひつくりかへしたやうな位置に足と足とを近寄せて、風通しのいゝヴェランダの入口に向いてねてゐた。幸一は八の字の開いた方から二人の頭の間をぬけて、應接間から食堂、食堂から廊下、廊下から玄關と、弟の彦次を探して庭へ出て行つたのである。

往來に面した、ヴェランダとは反對の側にある門、その門の日蔭に彦次は梅の肩に右手をついてぼんやり往來を眺めてゐた。梅と呼ばれる女中はしやごんで赤いめりんすの帶をこちらに向けてゐた。

彦ちやん、蟬とりに行かない？……こんな

ところでなにしてゐるの。と幸一は馳けながら遠くの方から聲をかけた。彥次はだまつたまゝふり返つて兄さんを夢見るやうな目付で見た。ね、彥ちやんね、行かない、蟬とりに、籠持たせてあげるよ。

うむ、嬉しいといふ顏でも嫌だといふ顏でもなく、いつもの夢見るやうな丸い目でぼんやり庭を見ながら兄に答へた。

二人が梅に別れて蟬をとりながら廣い庭の木立の間をぐる〳〵まはつて、終ひにヴェランダの前に來かゝつたのはそれから二十分もしてからのことだつた。で、兩親のすや〳〵眠つてゐるのを階段の下から見上げた幸一は、なぜ大人はあんなに睡いんだらうともう一度いま〳〵しげに思つた。それが又丁度妙子の恐ろしい夢で目を醒まさうとしてゐた時でもあつたのだ。

つひぞ夢に見たことのない、死んだ父の顏が大きく枕の上にのつてゐた。目を堅くつむつて、八の字を寄せ苦し相にしてゐる。ぶく〳〵水脹れにふくれてゐるので普通の顏の倍位あると思はれた。無性髯が頤一面に生えてゐたが、髯の太さが小指ほどに見えてゐた。顏の周りにはごちや〳〵色々の人が集まつてゐて、少しでもよく父を見ようとしてゐた。妙子は一心に人の間をかき分けてなぜだか譯は分らないが恐ろしい父を見ようとしてゐた。そのうちどや〳〵後から人の押寄せて來る氣配がしたと思ふと、ほらつと云つて子供を一人父の上に投げ出したものがある。それが幸一の姿だつた。目を開く見張つたまゝの小さい顏が父の大きい顏にくつついて、例の太い髯が痛々しく幸一の頰にさゝつた。幸一お前はなぜそんなけがらはしいとこにゐるの、さあこつちへお出で、早く、早く。さう云はうとしても聲が出なかつた。胸をかきむしられる思がした。

おかあさん、さよなら、どこからとなくそんな聲がしたと思つたが、誰れが云つたのか分らなかうつた。も一度幸一の聲が聞き度い。このまゝ分れてはたまらない。さう思ふまに幸一の顏も消え、父の顏も消え、寂しい暗い森のやうな處に來てゐた。幸ちやん、幸ちやん、聲をかぎり妙子が呼んだので、幸彥はつとして籐椅子から半身を起し慌てゝ妻を見た。妙子はお伽噺の本を堅く握り締めたまゝ、靑く堅くなつて幸ちやんを繰返さうとしてゐた。

妙子、妙子どうした、妙子。

幸彥は烈しい動悸を押へながら、妻の名を呼びつゞけた。自分も何んだか恐ろしい夢にうなされて目を醒したやうに不安だつた。日のかんかん照つてゐる庭の中の暗い綠に憂鬱を感じて、たとへ僅かでも睡たことが悔まれる氣分だつた。

あゝ嫌な夢だつた。

いつになく妙子は笑へなかつた。のみならず、夫の顏をみると却つて泣き度くなつた。眼の奧からひとりでに涙がにじみ出た。

夢か。

幸彥は思はず嘆息した。何か夢の內容を聞くのが怖れられた。妻の恐ろしい夢は自分の罪のため、自分の罪は妻の夢の中にまで表はれるだらう、この理由ない恐怖と豫感がかれの氣分を益々めいらして終つた。

さう、夢みたのよ。私なんだつて晝間からこんな夢なんかみたんでせう。あゝ嫌だつた。さう云つて、妙子も半身起き上り、お伽噺の本を肘掛けの上にのせ、あらはな兩手で、髱の後れ毛をかき撫でてゐた。

あら大變な汗、身體中びつしより。氣持が惡

い。
おれも汗をかいた、莫迦に暑いんだよ。一體何度あるんだらう。
でも私のは冷汗よ。こらごらんなさい、こんなですもの。彼女はさう云ひながら一寸襟を明けて見せ、急いで湯殿へ立つて行つた。幸彦は獨り午睡のあとのあのすえたやうな淋しさを味ひ、風に吹かれ、欠伸をしたり、腕を撫でたりしてゐた。

おとうさん、さう云ひながら一段、おとうさん、又さう云ひながら一段、おとうさん、又一段、よた／＼しながら右手の蟲籠をさも／＼大事相に高くもたげて、彦次は階段を上つて父のそばにやつて來た。
どら見せてごらん。澤山とれたね。
一つ二つ三つ四つ。みん／＼よ。
みん／＼か。でもこれとこれとは違ふぢあないか。
でも、みん／＼よ。
でも、みん／＼なのか。
うん、みん／＼。これお兄さんがとつたの、これお兄さんがとつたの、これもお兄さん、これもお兄さん。
みんなお兄さん許りぢあないか。
うん、みんなお兄さんとつたの。
さうしてお兄さんどうした。
お兄さん。お兄さんあつち行つた。
あつちつて。
あつち……。
どこ。
あつち御門の外の方。
ひとりで。
うん。
彦ちやん、お前なぜついて行かなかつたの。
くたびれたから先に歸つて來たの。
でも僕嫌だから。
何が嫌だつた。喧嘩でもしたの。
うゝん。だつて僕嫌だ。
何がさ。
だつて僕識らないんだもの。
識らないつて幸ちやん誰れかと一緒に行つたの。
うん。
どんな人と。
僕知らないな。
識らない人とかい。
うん。
幸ちやんは識つてゐる人なのかい。
僕知らない。
お前どこかで見たことある人かい。
うゝん。
見たことない。
うん。……僕のこの蟬もつてつて梅に縫つけて貰ふの。
一寸お待ち、彦ちやん。その人、男の人、女の人。
女の人。
女の人。幸彦は思はず鸚鵡返しにくり返した。女の人と幸ちやんと一緒に行つたの。……本統かい。
うん。
本統に、本統かい。
うん。
若い人か、おばあさんかい。
……。
若い人。
うん。
おばあさんかい。
うん。
どつち。

どつちだか僕知らない。

寢醒めでぼんやりしてゐた幸彦には二度目が醒めたやうな氣がした。つひぞ一人で門外へも出たことのない幸一だ、それがどうして見知らない女の人などとどこへ行く筈があらう。然しそれがもし誰れかに連れられて行つたものとしたら、果して誰れだつたらう。この邊に識つた人は幾らもない。二三の人の名を彦次に訊いてみたが、それらしくもなかつた。

女中に訊いたら樣子が分るだらうとひどく不安氣な幸彦は、彦次に梅を呼びにやつた。

私氣がつきませんでしたが、臺所の窓からみてをりましたら彦樣一人、御門の方から歸つてお出になりました。彦樣、お兄樣はと申しましたら、お兄さんあつちつておつしやつて、ずうとこちらへ御出になつたのでございます。

なに、どうしたの？

その時妙子は顔を洗ひ化粧を了へてさう訊きながら梅の後に來た。團扇を手に持つて。梅は少し赤くなつて半分奥樣の方へ向き直つたまゝ答へようともしないで突立つてゐた。妙子は彦次を抱き寄せながらヴェランダの入口の椅子に腰を下ろし、どうしたの……つて今度は幸彦の方へ訊いた。その場の氣配が何んとなく不安でならなかつた。

うん、あのなんだ、彦次のいふことが譯が分らないもんだから梅を呼んで訊いてみたのさ。

幸彦にすれば、妙子には何も聞かさないで、そのことが何んでもなく濟むのを願つてゐたのであるが、又それを無理に隱す譯にも行かなかつた。

彦ちやんどうしたの。妙子は片手で坊主あたまを撫で廻はしながら、上から覗き込んで云つた。

なにあの幸一がどこかへ行つたんだとさ。

えゝ、幸一が……どこへ。

彦次と蟬をとつておとなしく庭の中で遊んでゐたのださうだが、今しがた門の外へ出て行つたので、彦次だけ歸つて來たといふのさ。

あら、幸一ひとりで。

それがよく分らないんだ。彦次の云ふことなんだから。

彦次は母の膝から少し怨めし相に父の方を見てむつつりしてゐた。

誰れかと一緒にでも行つたらしいんだが。

彦ちやん、お兄さん誰れかと一緒に行つたの。

頷いてみせたぎりで默つてゐた。

誰れとさ。母親は重ねて訊いた。

それが知らない人らしいんだよ。幸彦が引取つて答へた。

でも女、男。

女の人らしい。

女の人。誰れでせう女の人てば。

さあ清水のお孃さんでもなし、赤倉さんや、並木さんの奥さんでもないらしい。

では久保田さんぢあない。

さういつて夫の顔を見上げたが、幸彦は子供を一心に見詰めたまゝ目を離さなかつた。

さうでもないらしいね。

下を向いて手をいぢつてゐた彦次の首を振るのを見た父親は、さも當惑らしく細君の方をみながら歎息した。妙子も眉を曇らせて、

その人はどこにゐたの。

あの御門の向の方。

向の方つてどこ、彦ちやん悧巧だからよく話しておくれね。

三木さんの方。

三木さんの方、あんなとこでお前達何してゐたの。

蟬とつて……。

その人どうして兄さんを連れて行つたの。……
……何か云つてゐて。
僕にも一緒に行かうと云つたけど、僕ひとりで先に歸つて來た。
彥ちやんはいゝ子だつたね。兄さんはなんだつて知らない人なんかと一緒に行つたんでせうね。
兄さんも嫌だつて云つたけど、無理に手を引張つて行つちまつた。
さう變な人ね。……梅、兎も角お前そこらまで見に行つて來ておくれな、爺やにもさういつて一緒に見てお貰ひ。
梅の出て行くのを見送つた妙子は、
おとうさん、私なんだか心配よ。
なぜ。
なぜつて、さつきの夢ね。嫌な夢だつたんですもの。
夢？
えゝ、幸一の夢だつたの。……幸一と死んだおとうさんの。それは氣味の惡い嫌な夢だつたの。
幸彥はそれになんとも答へないで、目をねむつたまゝ何か考へてゐた。
本統に嫌な夢だつたのよ。
妙子は云はうか云ふまいか、一寸彥次の氣持を氣にしながら、でもその嫌な夢を夫に話さないではゐられなかつた。

門の屋根に陽があたつてゐた。その上に夾竹桃の薄紅い花が高い枝で開いて、周圍の深い綠のなかから幽かな匂を落してゐた。夫婦はその下で外から歸つて來た梅に出逢つた。
梅どうして。
妙子が先づ呼びかけた。
三木さんの向の角まで行つてみましたがお見えになりませんでした。
夫婦の頭にはその三木さんの向角が明かに描かれた。壞れた竹垣の角を曲ると、一目に岩鼻の遠くの方まで見える。一直線な街道の右側に二三軒農家があるものの、人の姿を隱すことは出來なかつた。
爺やは。
爺やはあちらへ見に參りました。
反對の方の道を指して云つた。梅が門の左へ行けば、爺やが右へ行つたのも頷かれた。そつちには四五十軒の農家や溫泉宿が軒を並べてゐた。
しやうのない子だね、一體どこへ行つて了つたんだらう。
妙子はじり〱して來た。
ね、あなたどうしませう。
私はあつちへ行つてみよう。どこかそこらで蟬でもとつて遊んでゐるんだらうから、そんなに心配しないでもいゝよ。
でも私心配よ……ぢあこつちを私搜して見ますわ。
幸彥は街道を橫ぎつて森の深い山の方へ歩き出した。妙子は別莊の裏に沿つてゐる音無川の岸へ下りて行つた。

別莊の石垣の角から圓石を積み重ねた急な段段が河底へ降りて行つてゐる。絕壁の上には雜木に掩はれた山が首をもたげねば半腹も見えないやうな角度で空を狹くしてゐる。向岸から幾本かの筧で用水や溫泉が來てゐる。
石と石との間を白く流れる單調な水音で谿は妙子の前に表はれた。妙子は石段を下りながら隣の別莊の東屋越しに見える上流を眺めやつたが人影さへなかつた。四五町河上の崩れた崖下にある蛇籠に陽があたつて、その邊一帶の深

い淵に渦卷く水をぎら〳〵白銀のやうに光らせてゐる許り寂しかつた。

河原に下りた妙子は匂ふやうな水の近くに來ると、迂曲した河下の岸に建つ温泉宿の二階に、浴衣だの手拭だの、ゆもじだのといふ干物許り鮮かに見えるだけだつた。二人の子供に魚籠をもたせた裸の男が腰まで水につかつて、銛をもち、のぞきの上に丸く身をかゞめてゐるのが遙かな中流で動いてゐた、然しそれが却て幸一とその見識らない婦人のそこらにゐない證據のやうで不安な感を增させるのみだつた。

妙子は歩きにくい石の上を、思はず急ぎ足になつて温泉宿のある河下まで下つて行つた。賴みにはしなかつたが、魚をとつてゐた男にも呼びかけて訊いてみた　念のためその子供達の顏までしげ〳〵と眺めて、さつき夢の中で見た悲しい幸一の顏を思ひ出したりして益々落付かなかつた。

家竝のはづれまで下つて、妙子は空しく引返して來た。陽のかん〳〵射すなかを傘も持たず歩いてゐたので、額から流れる汗はふいてもふいてもとめどなく、着物の襟や、帶のあたりはぐつしよりになつてゐた。それでも無闇に急いで、幾度下駄を踏みはづしたか知れなかつた。

まだ新しい下駄の齒はさゝくれ、疊の角々は毛ば立つて了つた。

河沿ひの裏門に出入するため石垣の間に細い階段が出來てゐる。その附近の河砂には晝顏が繁殖してゐて、あはれな花が一面に咲いてゐた。そこを橫ぎらうとして妙子はふと立停つた。一足の小間下駄がちやんと揃へて草の間に脫ぎ捨てゝあつたからである。

おやこれは私の下駄ぢやあない。さう思ひながらそばに寄つてみると、銀で雲形の模樣のある薄紫の鼻緒のすがつたその下駄はたしかに見覺がある。どうしてこんな突拍子もない處に下駄が脫いであるだらう、而もそれが自分のらしいので、妙子は不審にならざるを得なかつた。で薄氣味惡く思ひながらも手にとつて裏を返して見た。瓢簞に成田屋の商標もあり、それは自分のに相違なかつた。

この下駄がどうしてこんな處にぬいである

…あゝさうだつた。きつとこの下駄だつたに違ひない、さう思ひ當ることがあつた。

四五日前のことだつた。妙子が散歩に出ようとして、下駄をさがしてゐたら、女中がきのふの夕方旦那樣が外からお歸りになつて、どんなのでもいゝから下駄を出しておくれつておつしやつて、結局奥さんの小間下駄一足さげてそのまゝ又外へ出ていらしつた、と云つた。で妙子は今現にはいてゐる新しい方のをつつかけて出た。妙子はその時嫌な氣持がした。それは單に一家の主人とも云はれるものが女下駄をさげて門の外へ出て行つたといふだけで十分だつた。何んのためにその下駄が必要だつたのか、それまで考へるのは餘りに忌はしかつた。

然し聞かうか、聞くまいかと散々迷つた末、大分卑下した心持で、幸彥にそのことを切出して訊いてみた。

あなたきのふ私の下駄を一足お持ちになつた相ね、一體それをどうなさつたの。

あゝ、あれか、あれはね、散歩から歸つて來たら、門の處で下駄の鼻緒を切つて困つてゐた人があつたから持つて行つて上げたのさ。

さう、そんなならなぜ女中にでもお持たせにならなかつたの、旦那樣が見つともないぢやありませんか、自分で下駄をさげて往來に出るなんて。

見つともないかな。でも基督は乞食の足を洗つたことがある。

一體その女はどんな人か妙子は聞きたかつた。然し幸彦はそれ以上話したくないやうだつたから、そのまゝになつて終つた。

妙子はいつとなく忘れて了つてゐたその事實を思出したのである。自分の腑に落ちないところを曖昧にして置いたのが今更らくやまれて腹立しかつた。なぜあの時十分疑を晴らして置かなかつたのだらう。さうさへして置けば、たとひそれがどんな嫌な事實でもこんなに苦しくはなかつたらうにと愚痴に落ちて終つた。

兎も角彼女はその小間下駄を拾ひあげ、二つの不安な出來事からいつになく不快にされて、細い石段を登り裏門から木立の間をぬけてヴェランダへ歸つて來た。もしそこに幸一の、おかあさんといふ可愛らしい聲さへ聞かれたら、すべては何んでもなかつたのであるが、家の中は森として誰れも歸つて來てゐる氣配はなかつた。

街道から外づれて、松林の下の草原を喘ぎながら登つて行つた幸彦は、必ず幸一がそつちに連れられて行つたことを信じてゐた。

青草の匂の高い松の日蔭道は上りながらも豁の間に深く落込んで行つた。白百合も姫百合も散つた頃だが、日扇や撫子、藤袴などはよい程に咲いてゐた。藪からしや、葛の葉、藤など、松の枝から枝にからまつて赤い日を遮り、山蔭の空氣を青く冷々とさせた。

三町も登ると音無川の一部が木末から遠く望まれるやゝ開けた一握の平地に出た。そこは幸彦にとつて忘れられない恐ろしい場所だつた。こないだの夕暮、千代子が鼻緒の切れた小間下駄を捨てたのはそこだ。案の定下駄はそのまゝ藪蔭にころがつてゐた。雨にたゝかれ、露にうたれて泥まみれになつてはゐたが、見覺のある千代子の下駄はそのまゝになつてゐた。

二人は抱き合つて狹い坂道を緩々下りて來てゐた。時々立停つて固く抱き合つたり、更らに手を組み變へたりして、暮れかゝる松林の寂しさを樂んだ。男が戰きながら女の唇を求めると、女はその頰を與へた。男がそれに疲れると女が代つて男の頰を求めた。男は女の髮に顏を押しあて、女は男の頸に接吻した。二人はどうしてそんなに戀しいのか、戀しさの湧いて來る底の深さを知ることが出來なかつた。締め合つて、からみ合つて、歩みもはかばかしくは進まなかつたが、でも女は脣を許さなかつた。

その平地に來たとき、幸彦は千代子の手を振りほどき、帽子を脫ぎ捨て、兩足を投げ出して草の上に坐つた。雪の崩れかゝるやうに千代子も寄り添つて横に坐つた。その時千代子の鼻緒がどうした加減かぷつりと切れた。遠い音無川を松の間から夕空の下に見て、二人は默つてゐたが、

でもやつぱりあなた妙子さんがいゝのよ。

さう云つて寂しく鼻緒の切れた下駄を藪になげ入れた千代子のそのいぢらしい表情を幸彦はまざ／＼思ひ出した。

でもやつぱりあなた妙子さんがいゝのよ。いゝんでせうね、一緒にかうして暮してゐるんですもの、然し夫婦となればいゝとか惡いとか、そんなことは思はないんではないでせうか。

千代子は賴りなさ相に草を引拔いては、小さく千切つて捨てゝゐた。

ではあなたは。

暫らくたつて幸彦が千代子を見て訊いた。

私あなたみたいに思へない。いや。どうして

もいや一緒にゐるの。
なぜでせう。
なぜ？……、先からさう、いや。
遊ぶからとでもいふんですか。
そんなことではない。
ぢあなほ變ですね。
彼女は笑つてそれに答へようとした、然しその乾いた聲は泣くやうにしか聞えなかつた。
お子さんでも、あればいゝんだらうがな。
子供なんか生れつこないことよ。
意外に思ひ詰めた調子に、幸彦は胸にしむ心地がした。
本統になぜなんでせう。
なぜつてことはない、それはさうなの、昔も今も。
性が合はないとでもいふんでせうか。
分つてくれないの、ちつとも。……あなたはなんだか、よく分つて下さるけど。
分る？ 分るつてどう分るの。……私にはあなたの話も分りかねる。田代さんは立派で、よく出來て、その上誰れにでも親切な方だつて評判を聞いてゐます。……あゝ、よしませう、よしませう。そんなことを考へただけでも、からしてゐることが濟まなくなるから。

濟まないのは私だつて同じね。妙子さんに。でも私なんだか惡くないやうな氣がする……あなただつて。
ぢあもうかうして、おとなしく話だけしませう。近寄りつこなしに。
・ね、どうぞさうして。
互に明るい顏を見合せて快活に笑ふことが出來たが、それと同時に二人の間を冷たい風が吹き通る氣がした。千代子は心持上身をのばし、坐りなほして、
妙子さん私のこと御存じないけど、實は私よく知つてゐるの。
さう、それは不思議ですね。
でせう。けど本統は私より亡くなつた父の方がなほよくあの方、あの方のおとうさんを知つてゐた。
さうですか、では古くからですね。
幸彦は何氣なくさういつたが、千代子の父の死が自殺だつたことを憶つた。さうして自殺の原因が關係銀行の破產にあつたことも薄々承知してゐた。だからその話の先をそれ以上聞き質すやうなことは云ふまいとした。
唯知つてゐるといふだけではなかつた。確かに。何か込入つた事情があつて、それから交際も絕えて終つたの。……何しても先に死んだ人が損。
幸彦は本能的にある氣まづさを感じながら千代子の話を聞いた。千代子がこの言葉で何を幸彦に暗示しようとしたか、推察の出來る氣がした。
父が亡くなつてから、私はもう一日も樂しいと思つたことはない、それはない。……あの大磯時代、面白かつたわ。もう一度あんな子供になりたい。
さう云ひながら千代子は幸彦の手を膝の上に拾ひ上げた。
でも今更ら仕方がないぢあありませんか。
仕方がありませんね、仕方がないから悲しい。
妙子さんがあなたのところへおきまりになつた話、あの時分直ぐお友達から聞いた。まさかあなたが妙子さんと結婚なさらうとは思ひもつかなかつた。
千代子は急に袖を顏にあてた。
私口惜しかつた。
幸彦は酒の醒めたやうに手の先まで冷くなつて、ぢつとしてゐた。
おとうさんは私を何よりも可愛がつてゐてくれたから、……どんなに口惜しいだらうと思ふ

と、それだけで泣けた。…でも長い間には段段忘れてゐた。怨むより戀しい方がやつぱり殘るのね。こなひだの晩偶然お目にかゝつた時、私もうすつかり妙子さんのこと忘れてゐた。それは本統。本統に一寸思ひ出さなかつた。

月のあかるい晩だつた。千代子は女中一人連れて溫泉宿を出で、散歩してゐると村端れですれ違ひに幸彦に逅つた。

聲をかけて呼びとめたのは千代子だつた。幸彦はどなたでしたつけといつて月の光でしみじみ向き合つて立つてゐる千代子を見た。髮が黑く顏が青く冷く見えた。

お分りにならない。

千代子さんですか。

やつと憶ひ出して云つた。

おほゝゝ。あんまりお婆さんになつたからでせう。

さういふ譯ぢあないんですけど、まさかあなたがこんな處へ來ていらつしやるとは思はなかつたもんですからつい失禮しました。

幸彦は別れて十年以上にもなる千代子の現在の位置や、心持も計りかねて、初めて會つた婦人に對するやうな鄭重な態度で答へた。

私少し胃を惡くしたの、で、醫者に勸められ、二三日前からこゝへ來てゐます、女中とたつた二人ぎり。

さうですか、邊鄙な處ですから定めて御不自由でせう。私はこの少し河上の方に別莊があるので、七月の中頃から來てゐます、どうぞ用があつたら遠慮なく云つて下さい。

有難う、本統に。

どうも不思議な處でお目にかゝるんですね。同じ東京にゐながら、十年もお目にかゝれないで。

でも私はことによつたらお目にかゝれるかと思つて。

では私がこゝに來てゐることを知つていらつしやつたんですか。

なんだかそんなこと伺つたやうよ……確かではなかつたけど。

話はそれからそれととぎれなかつた。

あなたお急ぎでせう。

云ひにくさうに千代子がきいた。

いゝえ、さうでもありません。月がいゝから少し散步しませうか。

およろしいんですか。

えゝかまひません。

千代子は離れて立つてゐた下女のそばに小走りして行つて何か囁いてゐた。暗い松の影に白い浴衣のぼんやり見えるのが目にうつる夢のやうならば、昔の千代子に偶然めぐりあつて、二人でこの月に散步しようとしてゐるのは心にうつる夢のやうだつた。結婚してもう七八年、妻の外に戀を渉ることを知らなかつた幸彦は一大事の前に立たされたやうに一瞬先の運命に胸を轟かせずにゐられなかつた。

どうも失禮、大變に。

千代子は持つてゐた團扇を女中に渡し手ぶらで彼の方に來て云つた。

二人は街道を河上へ步いて行つた。雄大なスカルピオン星座は正面の連山に落ちかゝつて、アンタレスの目立つた赤い光も薄かつた。殆んど闇い月は三宿より尙ほ高く上つて、二人の影を前に落して行つた。千代子はその影を心竊に憐んだ、影が影に觸れて重なる時には自分が恐ろしくなり、離れる時にはわが影ですら寂しげだつた。

こゝが私の家です。

幸彦は月　を屋根にあびた門の前に來た時立停つて云つた。夾竹桃は黑い簇のやうに門の空

に立つてゐた。
一寸寄つていらつしやいませんか。妙子にも御紹介しますから。
あら今頃！　まあよしてよ。……初めて上るのにあんまり失禮。
さうですか、では又。晝來て下さい。
幸彦は無理に勸めなかつた。運命が渦卷のやうに彼を引いて行く力に唯從つて行くと云つてみたかつた。彼が無理にも千代子を引張つて妻の妙子の所へ行けばいゝことは略ぼ幸彦にも分つてゐた。
やがて人家を離れた河岸の草に出た。膝ほどある千茅の長い葉は夜露にしとつて、河風に幽かにゆられてゐた。黑い淵の底に流れ下る水音は遠くも近くも連らなつて漠然と二人の周圍を包んだ。
千代子は前に立つて月光のとゞかない暗い水の方を見てゐた。幸彦はすれ〳〵にその後から肩越しに同じ方向を見てゐた。千代子の左手の甲と幸彦の右手の甲とが、草の葉の觸れ合ふやうに幽かにふれた。
二人は堅くなつて口がきけなかつた。
あの頃あなたは私のことなんと思つていらしつたんでせう。幸彦が口を切つた。大磯で別れた頃。
彼はさう云ひながら二三歩しざつて、太い榎の幹にもたれかゝり、半身に月光を浴びた千代子の横顏を見守つた。
私はよつぽど子供だつてよ……あなたは。
私はあの時、別れた時泣きました。本統に泣きました。あなたは覺えてゐないでせう。
えゝ、覺えてゐないわ。
千代子は歎息しながら彼の方をまともに振向いた。
彼が十四で、千代子が十一だつた。その春千代子の父親は亡くなつた。三年つゞけて大磯の別莊に避暑しに來た千代子の一家はそれ切りもう來なくなつた。その後幸彦が千代子に逢つたのは千代子の嫁に行くのがきまつた頃だつた。兄の龍衞が大學在學中チブスで急死したので、彼は久しぶりに千代子の家へ出入した。然しその頃二人はもう碌に口をきくのも氣恥しい年頃になつて終つてゐた。
その前の年、幸彦が千代子一家の東京へ歸るのを大磯停車場へ送つたのは二百二十日の荒があがつた夕方だつた。もう時間だといふので赤帽が小荷物をもつて、停車場前の掛茶屋から先に立つて出かけた。見る人も見送られる人も、一かたまりになつて停車場の入口に向つた。
幸彦は獨り掛茶屋の前の柳の樹の幹にかじりついたまゝ、歸つて行く人々の後姿を見ながら動かなかつた。彼の心はもう涙でふくれてゐた。
幸ちやんもいらつしやいよ。
遠くから聲をかけたのは千代子の綺麗なおつかさんだつた。さう云ひながら日傘を振つて見せた。彼は懷しく思つた。
やがて赤い帶を締めた千代子が一人で彼のそばまで馳けて來た。さうして後から幸彦に抱き付いて、幸ちやんどうしたの、こつちにいらつしやいよ、皆んなが待つてゐるぢやありませんか、ね、何をそんなに怒つてゐるの。と耳に顏を寄せて云つた。
彼は口がきけなかつた。
龍ちやんと喧嘩してゐるんでせう。
さうぢやないよ。
ぢあ、いらつしやいよ、もうお別れぢあない。
でも。
彼は泣きながらやつと云つた。
ぢあどうしたの。

どうもしないけど。

幸彦と千代子との大磯での交遊はかうしてぷつりと絶えて了つたのだつた。

その夜も月は圓かつた。幸彦は一人そつと庭に出て時々雲にかくされる月の中で譯もなく泣いた。彼は今その晩のことを思出したのである。さうして掛茶屋の前の柳の幹にかじりついたまゝすねた、その時のことを思ひ出すかと千代子に訊いたのである。

さう本統、と千代子は感謝に充ちた低い聲で云つた。私ちつとも氣がつかなかつたんだからご免なさいね。

なにもあやまつて貰ふやうなことぢやありませんよ。

本統に惡かつたのよ。けど、あなただつてさうよ、兄さんの死んだ時來て下すつたでせう。あの時あんまり餘所々々しくしてゐるんですもの。昔のことなんかまるで忘れたやうにこはい顏して、碌に口もきいて下さらなかつた。

さうでしたね。

なぜ。

なぜつて、あなたはあの時もう田代さんへ行くことがきまつてゐたでせう。

であなた怒つてゐたの。

えゝ。だから私怒つてゐました……。

彼は默つて突然榎の幹にもたれて身體を起し、暗い瀬の方へ歩みよつた。千代子は後から追ひすがつていきなりその手をとつた。

幸彦は松林の下の、奥まつた谷のその平地、鼻緒の切れた下駄を千代子が投げ入れた藪、その前にぐたりと坐つたまゝ、放心した人のやうに耳を澄してゐた。

彼に森の聲が來た。遠い音無川の水の音が來た。又幽かな鳥の啼聲が來た。然し人らしい聲も氣配も谷の中から聞えては來なかつた。

やがて彼はそこを立上つて急いで谷の奥へ進んで行つた。無闇と早く進んで行つた。森は益益深くなる許りだつた。彼は遂に疲れた。汗は額に充ち、心臓は動悸を早めた。

四つんばひになり、高い岩角に幸彦は匍ひ上つた。青々とした無人の谷が目の前にあつた。彼は力一杯の聲を上げ、幸一、幸一と呼んでみた。幸一幸一ともう一度呼んでみた。

（大正十二年十一月十二日作）

本當のことを云はうと一生努めながら、遂に何にも云へないで死んで終ふ人もある。何でもない會話などにも、ひよつと落すやうに本當のことを云つて終ふ人もある。一度も本當のことを云ひ得ないでも、大文豪のやうに云はれ、等身の著を作す人もあり、本當のことを云ひつゞけてゐても一市人として終始する人もある。

若い人達が戀の惱みに自らを滅ぼしたりするのも、本當のことが云へない、云つても通じないやうな場合が少なくなからう。

行爲を補ふ言葉であるのに、それをあべこべに言葉を補ふに行爲を以てする人もある。

（「一夜雨」の「本當の言葉」より）

嘘の果

(常子の手紙)

序

清子さん、

もう二三年するとあなたも、色々な本や小說などを渉つて、一生懸命耽讀するやうな年頃になりますね。その時この小說があなたの目にとまらないとも限りません。よしあなたが氣付かずにゐても、あなたの友達等はきつとこれをあなたに讀ませさうです。そんな事を思ふと小說をかいて、それを公けにする事は誰れにだつてかなり勇氣の要る事です。

御覽の通りこの小說に出て來る男女の青年は社會的生存に適しない、憐まるべき性格の持主です。實生活上背德な彼等からあなたが何等感化を受けよう心配もありませんが、世間には隨分凝り性な人もあるものだといふ話ですからこんな事を書いてみる氣になつたのです。

その話はかうです。兄の創作の熱心な愛讀者の一人で、婚約のあるさる婦人が初め「生れ出る惱み」を讀んで木本のやうな漁夫を見出し、態と戀に陷り、次に「石にひしがれた雜草」を讀んで、その婚約者にM子がAに對して持つたやうな恐怖を抱いて煩悶してみる。そのうち「或女」が出たので今度は葉子になり濟して終ふ。さうして今後自分の身の振方は次に出る有島さんの小說奈何によつて決定するのだと公言してゐるといふのです。

何んと面白い話ではありませんか、作者には迷惑な事でせうが、第三者の私は氣の毒ながら面白いと思つてこの話を聞きました。一見いかにも莫迦氣た仕業のやうですが、考へやうによつては生眞面目な處もあると云へます。なぜなら美的假象は生活感情に影響する許りでなく、有機的生活にまで影響を及ぼすものであると主張する一派の美學者もある位ですから。然しこの婦人の如きに至つては、到底フロオベルの輕蔑した「事の現實を信ずる所の阿房共」の一人たるを免かれないのは云ふまでもないでせう。

もとより私はあなたに小說中の人物の眞似をしてごらんなさいとは煽てません。けれども藝術の咀味にもし交感といふものが全然缺けてゐたならば、吾々は決して完全な鑑賞に到達し得られるものではありますまい。藝術的陶醉に於ける作品と主觀との相互の情緒を戀愛に譬へて、Tete-a-tete.(密會)と云つた人もあります。だからあなたが此作を讀みながら御自分を彼等の位置においてみて、時に悲み、時に喜び、笑つたり泣いたりしたからと云つて、私は敢てあなたの道德的信念を疑ひもせず、ましてあなたを咎めて姦淫の罪を犯したものに齊しいとも思ひません。惡に對する憧憬は私にしてみれば、潛在意識の底に隱されてゐる廣々とした一種の美の世界に過ぎないからです。

賈寶玉といふのは確か「紅樓夢」中の光源氏

の君のやうな人でしたね。彼の放縦極りない魂の動搖が「意淫」といふ言葉で非難される條があつたと思ひます、流石に甘い字を探したものではありませんか。この場合「意淫」は丁度自由とか聰明とかの同義異辭にあたり、寶玉其人を髣髴せしめてゐます。（私が好んで奇矯の言を弄するものと思つては困ります、かの歡樂に沈湎して「幻想を失へる動物」と云はれる人々の想像の貧しさをごらんなさい。又身を持するに聖者のやうだつたセザンヌ翁が描いたオブシエンヌな繪畫や、ヴエヌスの宮を知らぬと自ら云ふフオン・ケエベル博士の人性に關する感想等總て之等をあなたはどう觀察します。）

もと／＼激情は不德を生み易いものです。然し又藝術をも生み出します。さうかと云つて藝術が不德を生むと強ひられる謂れはありません。一藝術の頂は永へに懷疑の闇に閉されてゐて、現實の光は及びやうもないほどの高さに聳えてゐます。そこにのみ無限絶對な眞の自由といふものはあり得ると云はれます。世界中で一番精確な、一番實驗的な精神を持つた哲人等が恍惚としてそこで崇嚴な怡樂に醉ひ、思想の耀をもつて闇を輝してゐます。」オリヴイエはクリストフに彼等生存の理由を答へて、單に自由である喜びのためだと解釋してゐます。勿論その頂は吾々の容易に達し得べき心境でないのは云ふまでもありません。然し吾々が内省により自ら求むるものは果して何であるか。パンよりも、生存の權利よりも、猶ほ貴いものはその自由ではありませんか、いかに吾々が現實といふ室内で安住を得るにせよ、天に向つて開かれた窓の一つもそこにないものならば、どうして吾々は日光と空氣とを享ける事が出來ませう。もしその中で、窒息しないものがあるとすれば、それは精神的盲目の輩が徒らに生を貪り豕のやうに生きんとする醜い姿に過ぎないでせう。

兎も角かうしたあなたの自由は何物をもつても束縛する必要を私は認めません。あなたの藝術はあなたの道德より大きい自由な世界であらせたい。たとひあなたの無經驗な激情はあなたを傷け得る事があるとしても、常子や清の激情が小說の中からあなたの現身にまで手を伸し得ようとは思ひもかけません。

世間並には少し變な言廻しに聞えませうが、今私の云つた事の眞意は大體お分り下さいましたか。

清子さん、

序でにもう一つ申上げて置きたいのはこの小說の中で私はあなたの御兩親――それにあなたのお名まで一寸許り拜借した事です。それとお氣付きになつたら隨分お怨りになるかも知れないと思ひますが、誰れよりもあなた御自身御承知の通り、私があなた方に振り當てた役割は全然跡方もない虛構です。たま／＼あなた方のお名や位置や距離が私をこの落想に誘惑する機緣を作つたと云ふまでの事です。どうぞこの事は深く氣にとめないで下さい。あなた方御一家に對する私の敬愛は今も昔も少しも變つてはをりません。本書の出版に當りあんまりよくないこの駄洒落に就いて改めてお詫びを申上げます。

大正九年八月

輕井澤にて　著者

「戀よ戀、我中空になすな戀、戀には人の死なぬものかは、無慙の者の心やな。」（謡曲――戀重荷）

一

彼の眼の前にあつた窓がごつんと一搖れ搖れてやがて動き出した。驛員に遮ぎられ、乘りそくなつた群集は國府津仕立のこの終列車を見捨て、鬨の聲をあげながら、院線電車のぷらつとほおむへと先を爭つて、ぶりいぢの梯子段に駈け上つた。恐ろしい群集の下駄の響と、機關車の音に混つて驛夫の叫ぶ、まだ電車はありますといふ怒鳴聲とが、石炭の煙で曇つた電燈の下で渦卷いてゐた。

常子は赤い下脣を噛んだまゝで、その時汽車の窓の人込から伸び上つて彼に會釋しようとした。彼は眼だけで彼女の眼に答へた。常子は人に見えない位頭をかしげた。下脣を噛んでゐる一列の細い、白い齒並が、影の多い客車の中で妙に彼の心を引いた。……それからその圓い頬が、ほの白い頬が……いゝ匂のした頬、熱かつた頬、それが彼に今日初めて味はつた許りの新らしい接吻の感覺を蘇生へらした。――瞬間・ほんの一瞬間、彼はどこかに行つてゐた。際限のない空々たる世界か、小さいあるこおゔの蔭か。とにかく其時彼はぷらつとほおむに立つてゐなかつた。再びそこにゐると自覺した時には、常子のから數へて四五番目の窓が次第に早く彼の目前を通り過ぎつゝあつた。

横濱開港××祝賀祭の醉がまだ醒めきらないやうな群集の中にゐて、彼は一人別な人を感じた。今日一日の有ゆる騷擾は、今彼の眼と耳とを掠めて通つた汽車の窓同樣忙しく、うるさく思はれる許りで、何一つ心の底まではとゞかなかつた。旗を振つたり、徽章を胸にかけたりして、亢奮してゐる人々の手前、常子の像を安置した心の龕を内省すると、ある自負と同時に恥ぢねばならぬやうな心持をも感じた。

群集を離れ、彼は唯一人反對側の櫻木町行の電車ぷらつとほおむに降りて行つた。更けて用のない燈火が物凄く光る線路越しにぶりいぢの影を大きく黑く染めてゐるぎり、そこは寂しかつた。硝子張の待合室の中で彼は腰をかけてみた。そこにも人の影さへなかつた。彼は安心して伸をし、つゞいて欠伸をした。若い女性の前で半日緊張させてゐた注意力をかうして自由に解放してやる事は全く快かつた。又欠伸をした、又欠伸をした。電車はまだ來なかつた。

彼はぬいだぱなま帽を、無意識に右手の親指と中指で黑いりぼんのあたりをぱたぱたと拂つた。煙のやうに塵埃が立つて、彼の鼻先に黃色い臭が漂ふと急に今日の夥しい人出、雜沓が考へ出された。聯想は帽子から今朝の事につながつた。帽子は一週間許り前下田の奧さんが中元として彼に贈つたものだつた。それをかぶつて下田へ行つたのは、今朝がお初だつた。皆んな連立つてそこの門を出た時、下田の奧さんはをりいぶ色の日傘をひろげようとしながら態と、彼の身體にそのふくやかな二の腕をふれた。彼は彼女の顏を上からのぞき込むやうに見た。

奧さんはにつこりして、

「清さん、よく似合ひますことよ。」

さう外の人には謎めかしく云つた。二人だけに分つて外の人によく分らない事、これは夏子にとつてどんなにか嬉しかつたらう。

辨天通の角へ來た時、遙か後におくれた連れを待たうと二人は足袋屋の角に立停つた。そこにも流れるやうな人の川が動いてゐた。連れの影を見失つた彼は、知らず識らず往來の眞中へ出て背伸びしながら橋の方を振返つて一心に遠

くを眺めた。往來半分だけに陽がさしてゐた。ぱなま帽、二十七になる青年の血色のいゝ圓顏、その厚い胸を掩ふ白ちよつき、それに麗かな七月の日が耀いてゐた。下田夏子の熱い瞳は吸ひつけられるやうに彼の上に注がれて行つた。彼は陽に照され目映し相にして熱心に一町ほど先を眺めてゐた。あどけない無心なその表情は親切氣に心配相に見えた。それが又どの位彼女に嬉しかつたらう。やつと連れの日傘が近づいて來るのを彼は見つけた。くりいむ色とトき色と、それが確かに連れの二人の傘だつた。くりいむ色とトき色と搖れたり、他の邪魔な日傘に隱されたり、動いたり、停つたり、くりいむ色とトき色と、トき色とくりいむ色ともつれながら搖れながら段々近づいて來た。

くりいむ色は智惠子のだつた。トき色は常子のだつた。堅く口を結んだ常子の鹿爪らしい顏がやがて彼を群集のなかに見附けた。肘で智惠子にそれを知らせながら、につこりした。水々しい娘だ、今更らさう思ひながら、彼は右手をあげ合圖をし、人波の中から夏子のそばへ歸つて來た。

「あなたには黑いのでも、白いのでも、どつちでも似合ふわ。仕方がない方ね。」

彼女は再び清の帽子の事をさう云ひながら往來の雜沓を利用しつゝその手をさがして、やや堅く握つた。喉が渇く位、彼女は此時くちづけに饑ゑ竊かに顫へてゐた。譯もなく清は顏を赤めた……。

この「清さん、よく似合ひますことよ。」とか、「あなたには黑いのでも、白いのでも、どつちでも似合ふわ。」とか云つた夏子のなれ〳〵しい言葉が、今ぱなま帽をいぢりつゝある彼の記憶に浮び上つた。「仕方がない方ね。」それがいかにも三十を越した女盛りの夏子らしい言草だ。遣瀨ないほど烈しい彼女の戀はいつ思つてみても、獨身の彼を戰かせた。彼は先刻顏を赤めた事を思ひ出して、又獨りでゐながら胸を轟かせて顏を赤くした。

急に電車が來た。清は急いで立上つた。降りた人が二十人許りもあつて、すいてゐた電車は益々すいて終つた、清の乘つた車掌臺の脇には乘客は一人もゐなかつた。

「この電車はどこで今の終列車と行違ひでした。」

車掌に近づいて彼が尋ねた、車掌は彼の風采に一瞥を與へながら存外丁寧に、

「え蒲田と……いや鶴見でした。」

常子はどうしてゐました？ から口に出して聞いたら、どんなにこの車掌が驚くだらう、さう思つたら彼は獨りでをかしくなつた。常子に別れてから彼はたんだか愉快で愉快でたまらなくなつてゐた。……何かにつけて無闇と笑ひたくつてたまらなかつた。

二

「やあ、中根君、どこへ。」

かう云はれて、彼は櫻木町停車場の改札口で突然腕を捕へられた。びつくりして常子の幻から目を醒したその鼻の先に、夏子の夫なる下田忠次が祝賀の酒で上機嫌になつて二三の同僚らしい男とふらふらしながら立つてゐるのを見た。

「あはゝゝゝ、あはゝゝゝ。」

慌て、うろたへ、誤魔化す代りに、清は嬉し相に親みのある聲で笑つてゐた。下田もそれに引込まれて快げに笑つた 二人の間にはいつも些のこだはりもなかつた、清はこの恩人を自分の養父よりもいつも懷かしい人だと思つてゐた。××新聞の横濱支局長をしてゐた彼は、祝賀祭の記事で急用が出來たから本社まで行

つて來ると云つた。もう十二時はとつくにまはつてゐるのにと淸は思つた。

「中根君。」

淸が行きかけると後ろから又呼び戻された。づんぐり肥えた下田はまだそこに大儀さうに立停つてゐた。

「今日は妻達が色々ご面倒になつた上に、ご馳走にまでなつたさうだつたね、どうもそれは有難う……。」

さう云ふ風に禮を云つた。中根淸はにこ〳〵しながら、かのぱなま帽をとつて一つお辭儀をした。いい人だのに、さう思ひながら改札口を出た。夏子も、常子も、智惠子も、智惠子の夫の上杉氏もだれもかれもみんな彼に慇懃な人だらけに思へた。この人達で今日一日樂しく過させて吳れたのだ。彼はだれにも惡意は持たなかつた、だれも亦彼に惡意を持たうとは思はなかつた。彼には原因の分らないやうな滿足と、擽つたいやうな喜が、心にも、血にも、肉にも、手にも、足にも漲つてゐるのを今更らしく感じた。さすがに外は更けて冷々してゐた。盛に花火の打ちあげられてゐた空には星や三日月が力弱く光つてゐる許り、祭の提灯もちらほら疲れ果てたやうにしか通らなくなつてゐた。然しどれも滿員の市內電車許りはいつ乘客を運び盡すのか分らないやうだつた。

下田さんは確かに歸らないと……ではこれから行かうか。彼は今常子と別れた許りで、下田の上機嫌な顏を見た許りで、急にこんな夏子の誘惑に惱み初めた。それは自分にも不思議なほど皆な別々な無關係な人々としてしか考へられなかつた。

突然ある匂が彼の鼻を風のやうに掠めて通つた。彼は意外に思つて鼻で二三度忙しい息をしてみた。歩いて行くその足もとには大岡川の濁つた水が緩かな上げ潮で海の香をたゝへてゐた。この匂ではたしかにない、さう思ひながら、後ろの方を振返ると川口に立つ小さな燈臺の光が妙に寂しく彼の眼に映つた。その瞬間、再び風のやうにある匂を嗅いだ。それがその匂だつた。女の匂だつた。若い女の匂だつた。彼は汽車の中にゐる常子の方へ思をやつた。常子さん、常子さん、新らしい戀人をさう切なげに呼んで、半時間前まで接吻する事の出來たその頰やその首筋の思ひ出、慕はしいその匂にひたると、氣もそゞろに亂れさうになつた。

急に思付いてその兩手を鼻に押しあててみた。そこにも常子はゐた。二人は知らぬ顏をしながら手と手だけが恐る恐るさはつた。その時遠く離れて、互に包み隱し合つてゐた感覺と感覺が、ひつくり返つたやうに忽ち近づいて、その露骨な顏を見合せた。群集に押される眞似をしながら、手が手を握り締め握り返した。心は互にうなづいた。やがてはそれだけで足りなくなつた。五本の指がしつかりからまり合つた。二人はいつか連れにはぐれ、群集の後ろにさがつて、高い空の花火に見とれてゐる人々の隙に慌しいくちづけを取り交はした。それから三時間のうちに彼の兩手は、常子の頰、常子の髮、常子の金紗お召、その凡てを知つて終つてゐた。さうしていつかその手は常子の匂で染つてゐた。今この兩手がそこにゐない常子を一しほ懷しく思はせぶりに幽かに匂つた。彼は暫らくその快い殘香をかぐために佇んでゐた。

……常子さん。

もう一度暗闇に向つてこの新らしい名を呼ぶだけでも、ある滿足を得られようかと思つた。然し聲はそのまゝ自分の耳に歸つて來た。氣力のぬけた憐愍を請ふやうなその聲は、自分にも醜かつた。眞夜中とは云ひながら恥かしげもなく、浮氣な心でよその娘を求めて、その名をさも馴れ馴れしく呼んでゐる自分がいかにもさ

もしく慘めに感じられた。色情狂、この言葉を出して誡めてみた。
　長者橋の河岸に沿つて歩いて行つた。常子を忘れようとしてみると、直ぐ今度は夏子の誘惑に陷つた。それは段々彼の近づいて行く地の上にある誘惑だつた。岸に近く碇泊してゐる荷船の弱い燈火が水の上で動いてゐる。船頭一家の眠は彼に夜の更けたみだらさをしみじみ思はせた。身にかけるものもあるかないかのやうな夏の閨の有樣、その中に夏子が寢苦し相に眼をねむつて彼を待つてゐた。
　その部屋は庭木戸を入つて一番奧まつた六疊だつた。杉、あすなろの植込の間を飛石傳ひにそつと雨戸を叩く時の物恐れ、物恐れに伴ふ樂しさは五年の長い間いつまでも相應の新鮮さと刺戟を失はせなかつた。女を盜む樂みにも、物を盜む樂みにも、牢獄の恐怖を忘れさすほどの同じ強さの力が潛んでゐた。
　いつの間にか彼は例の交番の前まで歩いて來た。五年前のあの夜のこと、この交番の赤い電燈が身體をぶる〳〵つと戰かせるほどの恐れを與へたこと、その追憶は今はもう彼を苦笑せしむる役にしか立たなくなつてゐた。そこの角をまがりさへすれば下田の表門は目の前にあつた。彼は交番の方を見ながら角を曲つて表門の潛戸に手をかけてみた。締りがきちんとしてあつて、扉はがたんとも動かなかつた。清はそこでこのまゝ歸らうともう一度思ひ直してみた。下田さんに對してはその方がいゝ。さうだ：：然し：・然し奧さんには？：：。下田さんには又濟まない。でもかうして連れをまいたまんま明日になつて終へば奧さんはきつと怨む。どんなひどい實際以上の邪推をして吾々二人を怨むか知れない。それが彼のやうな男には我慢しきれない苦痛でもあつた。
　表門の二三間先から露路へ這入ると、そこに勝手口の裏門があつた。主人の歸りを待つためか、それとも彼を待つためか、潛は明けたまゝになつてゐた。引戸は案外大きな音を立てて暗闇の中にあいた。

三

　事務室の大きなびゆらおを前にして廻轉椅子にをさまつた中根清は、先づ何よりさきに今玄關脇の來信函から持つて上つて來た數通の書信を閱した。水色の西洋封筒にＴＳとのみいにちあるを認めたのは直ぐ彼の心をときめかした。事務的な數通の書信にざつと目を通すと、最後にその水色の封筒をとりあげて、重さを一寸計つてゐた。これが常子から受取る第六番目の手紙であつた。

　なつかしい清樣、これからはかう書くのを許して下さいませ。よろしうございませう。今日まで手紙をさしあげませんでした。今夜初めてかきます。
　御手紙は今朝ほど頂きました。朝早く第一の配達で。七時半から八時までの間。その頃私は髮を結ふふりをしてをりました。店の上り框に小僧が置いてつて呉れたのを横目で見ながら帶をしめました。お願ひした時間に出して下さつたのね。直ぐにも手が出したいのを、ぢつと控へてゐましたの。悲しかつたり、嬉しかつたりするのに、母のそばでは困りませう。一人でゐて讀まなくつてはなりませんからね。幾度梯子段の上から帶をしめながら封筒の字をのぞいてゐたでせう。でも一目で分りました。
　それから二階の私の部屋へ行つて封を切りました。遲くなつたのをそんなに心配して下さつたのですか。本統に有難う。内の方は下田の

叔母と一緒だつたといふので、又あの日は御祭だつたといふので何んでもありませんでした、どうぞ御安心下さい。私は思ひもかけない最初の冒險を犯して全く夢のやうな心持で汽車にゆられて歸りました。恥かしくて恥かしくて伏目になつて歸りました。あの祭の晩のことを考へると目がくらみ相です。脣が乾いて息苦しうございます。さうして唯きまりが惡くてなりません。あなたに恥かしく、私に恥かしく、お月様に恥かしい――。

今夜は月も星も可愛らしく薄く光つてゐます。もし又お目にかゝれるとして、あゝ私はどうしたらいゝでせう。私の脣をあなたはもう知つていらつしやいます。世界中であなただけが、今日まであなたのために私の脣を穢さずに置いたのは本統に嬉しうございます。でもなんだかお目にかゝるのが辛いやうな氣がします。きまりが惡くつてならないのですもの。

不安な二日をやつと送りました。手紙を書きたくはございません、でももうこれ以上書かずにゐられません。今度お目にかゝつて小鳥のやうにおしやべりしようと思つて、云ふ事をためてゐました。でもかうして一行でも書けば少しは氣が濟みます。

一體何を考へ、何をして暮してゐるとお思ひ? 何一つ致しません、考へてゐる許り。しなくてはならない事澤山積つてゐますけれども、一人で考へて許りゐます。男の方は生活しなければならない。けれども女は一度人を思へば、懐かしく、忍んで許りゐられるといふ幸福を持つてをります。つくづくさう思ひます。私は十分仕合せです。あなたは一概に私のやうなものでもお卻けになりませんでしたもの。

私はそれだけで滿足してゐなければなりませんが、もしも、少しでももし愛して下さるのなら、どんなに嬉しいか分りません。あなたの御言葉に嬉しうございました。きやうだいのやうに? 本統にどうぞ、私もさう望みます。それが一番いゝのでせう、きつと。 私はひがまずにさう思つてゐます、きやうだいのやうに、あなたは私を愛して下さるつて。

あなたが私にお厭きになつた時、あぢうに致しませう。あなたは自分の事許りでなく、私の一生のためを考へてやるとおつしやつて下さいましたね。だから私も私のためよりあなたの事を考へたいと決心いたしました。でもあの晩あの北方の井戸で水を飲ませて下さつた時、かうして戀し、――私のもつてゐるだけのいゝもの――青春、たゞそれだけですが、それを總て差上げて終つて、焦死に死にたいと考へましたの。お笑ひになつてはいやです。でも本統に私は泣きたくなりましたの。あなたに知れないやうにそつとあの時泣きましたのよ。

私はもう外の人には誰れにも目を向けません積りです。十四五になつた頃から私を見る人の目に氣付き初めました。けれどももうあなた一人を之からは眺めてゐませう。私があなたより先にあなたをお慕ひ申したのは私が惡いのですから、たゞ少し許りきやうだいのやうに愛して戴ければそれで嬉しい!

でもあなたがお厭だとおつしやればいつでも私はあぢうをいたします。そんな先の事考へると悲しくなりますから、今は今の幸福だけを思つてゐませう。私は何といふ仕合者でせう! このやうな仕合のあとでは、きつと不幸が來ませう。けれどもそんな不幸は百よつても今のこの幸福にはむかへません。あなたは妙に私をよく見て下さいますのね、わかつてゐて下さるやうなのね、それが嬉しうございます。

あの日もし私が叔母に誘はれてほてるの食事に行かなかつたら、あなたが御案内して下さらなかつたら、公園の人出を避けて海へ出なか

つたら、船から上つて谷戸橋でそのまゝお別れして終つてゐたら、夜にならなかつたら、海岸通りの花火が初まらなかつたら、連れの方々に分れ分れになつて終はなかつたら、人と人との雜沓で私達がもみくちやにされなかつたら、……とさう思ひます。ことによつたら故意に私が皆なをまいて、あなたと二人限りになつたなどと叔母は邪推しないでせうか？　……さうして私を怨まないでせうか。淸樣、……私皆んな知つてゐますのよ。

あらこんな事申上げてお怒りになつては厭！　では又きつとお目にかゝれるやうに。どんなにきまりが惡くつても、お目にかゝるのはかゝられないのよりずうと〳〵ようございます。

ではさやうなら、お休みなさいまし。

あなたを思ひながら。　つね子

七月四日

彼は讀み終るとはんかちいふを取出して顔の脂汗を拭つた。意味の解らないやうな一種の壓力に彼は頭を押へられる苦しさを感じた。思はず手紙を疊んで封筒に藏めると震へる手先で、それをびゆらおの奥へ押しやつて一つ深い溜息をついた。もう一度それを讀み返す勇氣が無いほどの弱々しさをどこかに彼は感じた。

Horrible!

さう云ひながらある物憂さの身體を起して、西側の窓を明けに行つた。港の廣々とした青硝子のやうな波の上から幽かな海の響を混へた風が吹き込んで來た。彼は蘇生るやうな思で呼吸をした。

遠く眺めると今日も快晴。ぐらんどほてる前の東波止場に幾十のよつとが帆を張つたまゝ泊つてゐる。三角な帆は烈しい夏の陽をうけて目映しい極白と熱とに燃え耀いてゐた。

四

總領事一家は愈々明朝、函根の湖畔へ避暑するといふので、この二三日は少し多用だつた。度度書記官のB氏や、Q氏と一緒に領事の部屋へ呼ばれて行つて、留守中の仕事を云ひつけられた。實際にする仕事は彼のが勿論一番多かつた。學校を出て僅か五年の間に、今日の位置を贏ち得たのは、いかに平凡な事務をも厭はない彼の勤勉さと、溫順で盲從的なその性質に由つたが、一つには外國語の達者なのが少なからず彼を幸ひしたのだつた。外國語の達者は彼の頭といふより、その耳にあつた。耳のいゝのは遺傳的にも、家柄にも、幼少からの鍛にもあつた。

その日はそんな雜多な事務でまぎれた。然しなんとなく一日を憂鬱に過した。それは彼にとつては珍らしい事だつた。五時頃、もう片影が出來てから、橋際の領事館を出た。れいすや、眞珠の飾や、貝類、象眼細工、繪葉書、寫眞、ぴか〳〵光らせた眞鍮道具、塗器、女服の仕立屋、西洋家具などの並んでゐる街の間を元町停留所の方へ歩いて行つた。日本人より支那人、支那人より西洋人等がより多くそこの狹い往來に群り、目のさめるやうな流行を街一杯にひろげてゐた。彼は杖をふる手をやめて、時計を出してみ、陽脚の高さを店の屋根の上に眺め、久しぶりで三溪園の方へ行つてみたくなつた。で、ふじ屋に入つて氷つた飲料を取つた。

本牧行の電車は込んでゐた。後ろの車掌臺に立つて異人や女異人の異つた匂の間にはさまつて、薄暗いとんねるを通つた。彼は内かくしに入れて來た常子の手紙を着物の上から無意識に一寸さはつた。堅い西洋紙の角が明かにその指先にふれた。

とんねるを出拔けると港外の海はまともに西

日を反射させて、まるで磨いだ許りの刃物に篝のあたつたやうな黄色、橙色がぎらりとしてゐた。大きな北方の溪、ぶるつふの丘、電車の中の乘客の鼻の下の反射まで、悉く同じ色で染つた。女異人等のひら〳〵させる扇子も光つた。

三溪園の土はまだ盛にほてつてゐて、蓮は病み疲れたやうなあくどい匂を沼の畔りに漲らせてゐた。それは彼の神經を極度に刺戟し、炎熱の火事場、そんな息苦しい場所へ行合せた迷惑さを思はせるほどだつた。彼はひとりでに青い影を求め、待春軒の裏から後ろの丘へたどつて行つた。蟲喰のない梅の青葉で埋まつた丘の小徑には人影も見えなかつた。

そこの捨石に腰をかけてみると、來た甲斐ありと初めて思はれた。同時に彼にはかうして一人になる事はその本來の性質に合はなかつた。人を見ず、人に見られずにゐるのは物足りなかつた。で常子の手紙を讀むといふ實際的な散歩の目的に頭は直ぐ働き初めた。目前の雜念を離れ、何程か深みのある瞑想に耽るといふやうな經驗は、他人の事として書物などで讀んだ外には自分ではまだ一度も味つた事すらなかつた。

もう一度今朝の手紙を一字一句殘さず繰返して讀んでみた。事務的な習慣から時計をはかつて十分かゝると思つた。（もし淸ほどの熱心がある讀者は讀み返して見るといゝ。）常子のペン文字は可なり讀みづらく書かれてゐたためでもあつた。

「それほどでもない。どこか誇張したやうな所、態とらしい所がある。」さう淸は思つてやや寛ろぎを得た。然しどこまでが眞實で、どこからが噓だらう。彼女の脣はまだ誰れにも穢されてゐないといふが、……もつと進んで考へれば、果してまだ處女の誇を保つてゐるのか、それさへ疑はれた。彼女がもう處女でないならば　さうあつて欲しいと望む我慾、それを淸は人のやうに、ある反省にまで持つて行かなかつた。近頃流行る人道主義的な雜誌の一册でも讀んでゐたら、それ位の道德心は養はれてゐたのだらうが。

彼はこの手紙と一緒にして持つて來た、……夏子に連れられて初めて常子を訪問した頃卽ち三月許り前からの手紙五通をひろげて順々に讀み出した。それによつて常子を思ひ出し、甘いせんちめんたるな追憶にひたつてみたかつた許りに。

唯今は失禮致しました。全く思ひがけない出來事でございました。碌にお話も致しませずお詫の申上げやうがございません。折角遠方御越し下さいましたのに。

お名前は疾から存じあげてをりました、餘所ながらはいつも御姿を拜見してをりましたが、こんなに突然お目にかゝる事が出來ようとは存じてをりませんでした。

あなた樣の藝術をどんなに尊敬してをりましたでせう。今後とも御役に立つ事があれば御遠慮なく御申付け下さいまし、何んなりと喜んで御用をお勤め致します。

慈善切符は母とも相談致しまして、出來るだけ澤山御引受け致しませう。さうして今度の日曜を樂みに待つてをります。

一時間前宅へ御出下さつた事まるで噓のやうでございます。初めての手紙にこんな事まで申上げどうぞお許し下さいまし。

では御成功を祈り上げます。

五月二十五日　　つね子

中根樣

御禮の御手紙を頂き恐れ入りました。どうも微力で折角の御賴みに御酬いするほどのこと

が出來ませんでつらう存じます。それにあんな御禮狀で、常はたゞもう喜んだと思召し下さいませ。切符の勘定書は別に差上げさせます。今度の事を友達仲間へ話しましたら、きつとあんなに中根さん、中根さんて申してをりました私の願が、とう〳〵屆いたせゐだと申しませう。私の誠實の無駄にならなかつた事、それが嬉しうございます。

一昨日の邯鄲なんといふ御立派な御出來榮でございましたらう。「浮世の旅に迷ひきて迷ひきて、夢路をいつと定めん」あの次第のなだらかさ、雄々しい御聲のうちに、なよ〳〵したさむぼりつくな暗示が、一曲の背景になつてをります、楚の國羊飛山に近い、邯鄲の里に私共の魂をつれて行つて終ひました。

「一村雨の雨やどり、日はまだ殘る中宿に、假寢の夢を見るやと、」邯鄲の枕に就かれる所、盧生といふ少し粗暴な、でもどこかに熱のある求道者の苦寢でもしてみようかといふ、やゝ投げやりな氣分が大まかで、無雜作に出てゐてなんとも申されませんでした。

「楚國の帝位に卽かれ、寂光の都、喜見城の榮華と、仙家のこんづ、かうがいの盃に一千歲の壽命を享けられる夢の段では、「御身、代をもち給ふべき其瑞相こそまします。」とたゝへられになるあなた樣のあの時の威嚴貫祿は思はず私の襟を正させるほどおごそかでございました。

粟飯が出來たと知らせに來る、宿の亭主の扇子の音に、「盧生は夢さめて、〳〵、五十の春秋の、榮花もたちまちに、たゞ茫然と起きあがる。」一炊の夢幻劇、今までも私はずゐぶんやたらに能を見ましたが、こんなに深い空想の世界へ導き入れられたためしはございませんでした。あなた樣の藝術は何か特別な暗示の力を持つてをります、あなた樣にはそんなおつもりがなくつても、見てをります私には本統にさうなのでございます。

私などがあなた樣の藝術を批評するなんて、何んといふなまいきでございませう。けれども私は眞面目で申上げてをるのでございます。本統にさう思ふ事でなければ私には一行も書けませんのでございますから。

もうよします、いつまで書いても、私が今まであなた樣に抱いてゐた尊敬の情は書ききれるものではございません。

私のやうな感じ易い、ふるへ易い心のものは、世間がそれだけ恐ろしうございます。この方はいゝ方か、お慕ひする價値があるか、ないか、それをどの位考へ拔くでせう。こんな事これはあなた樣へ申上げないでいゝ事でございますが。

あなた樣は外にも澤山私のやうな、いえそれ以上の崇拜者をお持ちでございませう。けれども私は一向かまひません。私は私一人で勝手にあなた樣の御榮え遊ばすのを蔭から祈つてゐればいゝのでございますから。それだけならばあなた樣の御許しはなくとも、御迷惑のかゝる事でなし、私は私で許してもいゝと存じてをります。

女の身としてこんな事申上げるものでないかも知れませんが、あなた樣は一面藝術家でいらつしやいます。私は觀衆の一人として感じたまゝを申上げるのでございます。どうぞお許し下さいまし。

今夜はもう皆休んで終ひました。大層おそくなりましたからこれで失禮致します。

六月三日　　つね子

中根清樣

先程は御出下さいまして有難うございまし

た。再びお目にかゝる機會が近くあらうと思つてをりませんでしたので嬉しうございました。でも雨か、晴れかと昨日から今日の日曜を案じ暮しましたが、今朝のうちは雨、細い雨が霧のやうに降つてゐましたので、私はもうすつかり、あきらめてをりました。

もしあなた樣が御見えになつたらと店のものに頼んで白金の教會へまゐりましたが、何んにも身にしみませんでした。いつだつてもたゞ好きな歌を唄ひ、好きな人々の上を護つて下さいましと祈つてくるだけなのでございます。いつもは姉や母やお友達の事を祈ります。今日はあなた樣のを祈りました。

教會から歸りましたら、御出がなかつたといふのでやつと一安心致しました。

午後の一時間は三時間位に思へました。その間もう一度邯鄲を讀み返さうとして謠本をあけたまゝぼんやりしてをりました。したらお聲がきこえました。私は邯鄲の枕に一寸よりかかつてゐたやうな心持がしてをりました折なので、本統に嬉しうございました。

それに綺麗な花束を有難う存じます。どんなに嬉しうございませう。思ひがけなかつたのですもの。枯れたり凋んだりしては厭でございます。眺めて許りをります。

一寸いらしつて御用だけで、直ぐ御歸りになりましたので、それに下田の叔母と御一緒だつたので、頭の中はいろ〳〵の事がごた〳〵して何んにも考へられません。これ切りもうお目にかゝれないものと思ふのはつらうございます。又何かそのうち次の御用が出來ればいゝと思つたりして。

私のやうなみつともないものの寫眞をおとり下さいまして、どんなにをかしく、みにくく出來る事でございませう。お恥かしくてなりません。どうかあの寫眞が駄目になつてほしいやうな、よく寫つてほしいやうな心持が致します。

それよりも私はほかにほしい寫眞がございますのよ。

もう横濱へ御歸りになつた時刻でございますね。叔母の處へ遊びに參ればお目にかゝれませうか。それなら私參り度く存じます。

又何か御用をさがして御云つけ下さいまし。

今日お目にかゝれた事うれしうございますが、頭の中がごた〳〵して何も分らなくなつてをりますから、私のした失禮な事みんなお許し下さいまし。ごきげんよう。

六月十五日　　常子

御手紙を態々有難うございます。唯今までそれを顔にあてゝ泣いてをりました。

一昨日お目にかゝつたのは幾ら考へても噓のやうに思へます。でも色々の事柄がはつきり目に見えるのでございますから本統に違ひございません。昨日も今日もあなた樣の事許り思ひつづけてをりました。私は今世の中で一番〳〵幸福なものと思つてをります。その幸福は死ぬまで續くものとも、また續かぬものともまるでそんな事は考へないでをりました。けれどもよく考へれば直ぐ分ることでございます。

あなた樣のやうな方に一生親しくさせて頂く事は、又私だつていつまでもこのまゝでゐる事は、出來るものではございますまい。さう考へただけでももう悲しくてなりません。

あなた樣が永い事おつきあひしてゐるとおつしやつた叔父が羨ましうございます。叔母が羨ましうございます。羨ましうございます。あなた樣にお目にかゝりました幸福は私のこれから先きの生命よりも必ず尊いものと思つてをります。

今までいろ〳〵の人も見ました。又私に思

をかけてくれたかと思はれる人も少しはあつたやうでございます。私からもさう云へば云へる人もございます。けれども私ちつとも驚きませんでした。いつもぢつとしてゐて微笑んで許りをりました。

　ところが私はあなた樣を知りました。あなた樣がたとへ能樂の歷とした家柄にお生れなさらず、その藝の奧義に達せられず、お若いのに一角の立派な位置にお出にならずとも、私はきつとあなた樣をおなつかしく尊い方に思うたでせう。それだのにあなた樣はあれほど豐かな天分を持つていらつしやいますんです。

　どうぞ私の無作法をお許し下さいまし、あなた樣に申上げないで私は誰れに申しませう。悲しい事、辛い事、それを私は今日まで一人でぢつと堪へて參りました。考へてみれば又これから先もさうせねばなりますまい。

　私はあなた樣にお目にかゝらうなどとは夢にも願はず、唯他所ながら舞臺の上のあなた樣をなつかしんでをりました。それがさも譯もなくお目にかゝれる事になりました。これが私の幸福の總てでなくてどう致しませう。

　頂きました花が少し凋みかゝりました。枯れないやう凋まないやうにと氣をもんでをります。でも、それがどうして出來る事でせう。私の好きな西洋せきちくは懷かしげに匂つてをりますし、だりあもまだ呼吸をしてをります。今まで知らなかつたやうな愛を花に注いでをります。

　この一月程の間私は割合に自由がきゝました。それは兄が留守だつたからでございます、けれども今夜兵營から兄は歸つて參りませう。でも私はまだもう一度位お目にかゝれ相な氣がしてなりません。私は既にもう二度お目にかかれました。これすら望外の喜でしたのに、もつと〳〵お目にかゝり度いのでございますもの、本統にいけないつね子でございます。

　私は何も〳〵考へないで前の通り小鳥のやうに微笑んで許りゐたらよかつたのでございませうに。

　知らず〳〵こんな愼みのない手紙を書いて終ひました。きつとお讀みになるのがお厭でございませう。私の心なく申上げたこと、どうぞおさげすみ下さいませんやう、お忘れ下さるやう、御慈悲でございます。

　六月十七日　　　　つね子

（その次は祝賀祭の一週間ほど前に來た手紙。）

　急に大變おあつくなりました。もう本統の夏でございますのね。お障りもございませんか、私少し暑さ負けしてしまつていけません。

　また今日も手紙を書きます。お邪魔だからと思ひながら、つい書くやうになりますの、久しぶりですからお許し下さいまし。

　私はこの間、まだお目にかゝらない前のあなた樣に關する記憶を書き集めてみました。その中には日記の中からの拔書もございます。ここに書き切れない位の分量がございました。

　一番早い記憶に殘つてをりますのはあなた樣が××堂でなさつた春榮でございます。私はまだやつと十位ででもございましたらう。あの時の「して」は此間亡くなりました××だつたと覺えてをります。あれが私の能を見て泣いた最初の記憶でございます。草色地の錦小袖、白の大口、本統にりゝしい美しい御曹子で、增尾の太郎種直の愛弟、宇治橋の合戰に生け捕られた春榮殿は、御年恰好といひ、御器量といひ誠にこんなでもあつたらうと今だに思ひ出します。

　それから春秋、年に二度か三度はきつとあなた樣の御姿を舞臺の上で拜見致しましたから、

後姿でも一寸した横向でも、いつもすつかり胸の中には疊み込まれてをりました。あなた樣が初めて「して」をなさいましたのは××での夜討曾我ではございませんでしたの？　そんな事を見物の人達が話合つてをりました。あの時の感動は忘れも致しません。白刄を提げて「あらおびたゞしの軍兵やな、我等兄弟うたんとて、多くの勢は騒ぎあひてこゝを先途と見えたるぞや、十郎殿、十郎殿、何とて御返事はなきぞ十郎殿。」あの時の血腥い殺氣を帶びた雄々しいお姿！　御所の五郎丸が薄衣引かつぎ、唐戸の脇にたゝずむのを「まことの女ぞと油斷して一瞥を與へてお通り過ぎなさらうとする一瞬間の情味！　あゝした藝は殊に若い娘の心を引きむしるやうでございました。でも千手のやうなもの、班女のやうなものにもあなた樣のなまめかしい、艶つぽい藝風は御成功なさいます。「重衡輿に乘じ琵琶を引きよせ彈じ給へば、また玉琴の緒合に、合せて聞けば、峰の松風かよひ來にけり。琴を枕の短夜の轉寢、夢も程なく東雲も、ほの〴〵と明けわたる空の、あさまにやなりぬべき、あさまにやなりなんと。」引離るゝ袖と袖との露涙は本統に、重衡と千手の別れほど

私にその幕切れが殘り惜しうございました。

班女でも、「さびしき夜半の鐘の音、雞籠の山に響きつゝ、明けなんとして別れを催し、せめて閨もる月だにも、しばし枕に殘らずして、又ひとりねに成りぬるぞや。翠帳紅閨にまくらならぶる床の上、なれし衾の夜すがらも、同穴の跡夢もなし。よしそれも同じ世の命のみをさりともと、いつまで草の露のまも、比翼連理のかたらひ、其驪山宮のさゝめごとも、誰か聞きつたへて、今の世まで漏らすらん！」あの「中の舞」の流暢さ、女でありながら、これ等の女の幻にひたすら憧れ得る感激の深さは、全く藝術の賜物と涙を流しました。

然しこの二月、月並會での澁い芭蕉も誠に結構に拜見致しました。「芭蕉に落ちて松の聲、あだにや風の破るらん。」風が窓から吹込んで燈火の消え易い、月がもれて眠りにくい、楚國小水の法華持經の山居の有樣は私のやうな若い女の身にとりまして、縁遠いものに相違ございませんが、女人草木一切成佛するといふ藥草喩品の諸法實相の御教は寂びた藝術の包に包まれてまことに、「思ひの家ながら、火宅を出づる道」を暗示されるやうに私にも思はれました。「さも愚なる女とて、さなきだに、あだなる芭蕉の、女の衣は薄色の、花染ならぬに、袖のほころびも恥かしや。それ非情草木といつぱ、誠に無相眞如の體、一塵法界の心地の上に、雨露霜雪の形を見す。」の段或は「面影うつる露の間に、山おろし松の風、吹き拂ひ〳〵、花も千草もちり〴〵に、花も千草もちり〴〵になれば、芭蕉は破れ殘るといふあの邊の幽玄な舞は全く夢幻的な抽象の世界に私を連れて行つて終ひます。私があなた樣によつてあんな藝術に接すると、あべこべに枯れた山の薪で生命の炎が點ぜられ、玉杯の中の新酒が沸返るやうにしか思はれません。「柳は綠、花は紅と知る事も、唯そのまゝの色香の、草木成佛の國土」がもしあるものならば、それが一番嬉しうはございませんか。

私は少しづつ、ほんの少しづつ、西洋の歌を唄ふのを稽古してをります。謠曲とは全く異つた感覺を持つたものでございますから、能といふものの作り上げるあの舞臺の上の幻覺は私にとりまして誠に不可思議な力でございます。私のやうな門外者の心をもどうしてからまで深く恍惚の世界へ誘ふのでございませうか。

あなた樣には私の心がお分りでございますか。自分の手をふれた事のないものは本統に驚異でございます。あんな單純な線だの、色だの

が、普段全く意識にない世界を私のうちに有有とつくるのでございます。私はまざ〳〵とその世界を感じます。私の空想は若く生々して、少しも鈍つてはをりませんもの！

今度の横濱の御祭に叔母が來いと申して呉れます。參りませうか？　お目にかゝれますこと？　もう一度でいゝからお目にかゝりたいと先日申上げた事を考へると顔が赤くなります。本統にさうは思ひますけれども、思つた事をそのまゝ申上げるといふ無躾はこの世の中の掟ではございませんもの。どんなにお目にかゝり度くとも、そんな事は申さないもの。私もう我儘な自分勝手な事申上げませんの。ですから今日までの事お許し下さいまし。その時さへくれば、又お目にかゝれる事もございませう。やつと近頃はさう思へるやうになりました。

先月頂いた花が散りました頃、こんなものが出來ました。をかしいでございませう。

小さな蟲が空で
あつい、あつい
眞晝中の空で。

あなたはどこ？
空にでも、そこにでも、
こゝにでも見えますわ。

あら小さい蟲が
戴いた紅い花へ、あゝ花もしぼんだ、
私のやうにもう。

きのふは消えた
今と思つたきのふは消えて終つた、
花も蟲もさう云つた顔よ。

こんなもの恥かしいから、どうぞお破り下さい。

六月二十四日

彼は暫らくうつとり考へてゐたが、そこの捨石を立上ると同時に、どうしてこんなまことらしい、口からでまかせの嘘が書けるものかしら、と呟いた。嘘だ嘘だ、皆んな嘘だ、さう思返しながら、名前や、人に見られて困るやうな部分だけ丁寧に破り取つてあとをずた〳〵に引裂いてみた。さすがそれでも惜い濟まない事をしたやうな心殘りがした。で歩きながらその紙切れを一枚一枚讀み返してみた。

「手紙に顔をあてゝ泣──かゝつたのはいくら考──やうに思へますけれ」こんな一片があつた。「もう一度でいゝから──申し上げた事──あります。本統──だと思つた事」「にかゝれないもの──らでございます──のやうなもの──だのに本統」どの紙切れにも、どの紙切れにも同じやうな言葉許り出て來た。

彼は何んだか少し面白くなつたので、それを小徑のあちこち、清淨な地の上や、戀人等がそつと立寄り相な場所を入念に見つけながら、五六枚づつ方々へまき散らして行つた。桃色、水色、薄紫、乳色、この戀文の散華はきつと自分以外の戀人等にある輕い歡びを與へ得るだらうと思つたりした。

戀する人皆に皆に、歡であれ！　さう云ひながら戀の散華をまいて歩いた。

五

翌日は日曜なのを幸、清はB書記官と一緒に領事一行を迎へて、箱根の宮の下まで上つて行つた。そこのほてるで中食し、三時頃からぼつ〳〵險しい早川沿ひの坂道を下りて來た。滯

在や、その日歸りの客が狹い道をやたらと自動車、人力などでふさいでゐた。白百合の盛りで山も溪も賑かに見えたやうに、暗い道筋の崖も都から來てゐる女客の派手な浴衣で明るく思へた。どこへ行つても先づ淸達の目につくものは白百合のやうな女だつた。

早雲寺や、玉垂れの瀧へ廻つて時を作り、××へ行つた。B氏はもう五十近かつたが獨身でもあり、淸をいゝ遊相手にしてゐた。やがて顏なじみのある腐りかゝつた果實のやうな女が二三人そこの座敷へ呼ばれて來た。

外の女がそばにゐる間、彼は常子の事をあまり思出さなかつた。でも翌朝湯本を立つ時四五枚の繪葉書を書く事を忘れ得ないほどには思出した。夏子、常子、靜江、貞子、お梅、だれも捨てがたく、だれもそれぞれの情けを持つてゐるやうに思へた。彼は一人一人にふさはしい文句を選んでは書いた。十四五の時から淸はその實父や周圍の感化で旣に旣に復數の戀を習ひ覺えて終つてゐた。

その木曜日、彼は家で常子の手紙を受取つた。家の方へ寄越す手紙はなるべく歐文か羅馬字で書くやうにと云つたのを彼女は忘れなかつた。淸の母は無斷で時々女名前の手紙を開封してみた。もしそれが淸の身のためによくないやうなもの――他所の細君との逢曳とか藝者からの呼出し狀のやうなものであれば、默つて燒捨てて終つた。彼は母に面と向つて何一つ怒れるやうな男ではなかつたが、この無鐵砲な戰略には時々當惑してゐた。

Natsukashii Hakone kara no ohagaki arigatô. Atashi wa donnani odorokimashita desho. Ano hoteru ni irashitta no desu ka? Mâ chittomo shirimasendeshita no yo. Sugu soba no Sokokura ni atashi mo anitachi to itte imashita no ni. Keredo kore mo sadamerareta koto desu wa ne. Demo atashi no koto omoidashite kudasaimashita no? Arigatô. Moshimo ome ni kakareta no deshitara donnani ureshikatta deshô.

Kondo no Sunday hontoni ome ni kakareru no? Uso de nai no? Atashi ureshii. Tsugo wa tsuku tsumori desu; keredomo gogo de nakereba chotto dô desu ka?

Murini ome ni kakaritai nado môshimasen no yo; atashi iiko desu kara. Tada otsugô de: soshite oiya de nakereba sô onegai itashimasu no; gozen demo ii kamo shirenai wa. Moshi ome ni kakaretara sore ga mô saigo to omoimashô ne.

Kakinarenai node donnani jirettai deshô. Demo hajimete Rômaji ga suki ni narimashita no yo. Fushigina mono yo. Machigaidarake deshô? Owarai ni natte wa iya.

Dewa kore de sayônara. Minna omemoji no uede. Gokigen yoo. Sayonara a a a.

Tsuneko.

彼はこの手紙に對し次の十二日の日曜、午後一時頃迄に品川の停車場へ行くといふ返事を書いた。さうしてその日が仲々待遠しかつた。祭の日の記憶はもう旣に薄れて終つてゐたが、常子の手紙は荒んだ彼の心に、外の女の持てない誘惑を感じさせた。それが淸に珍らしく嬉しく

響いたのだつた。

今日のたなばた様が私をお惠み下さいました。此間はほんの僅かなところでお目にかゝれなくなるのでした。私もう歸らうと思つてゐましたの、もう三時過ぎてをりましたもの。叔母が御引留めしたのでせう。厭な叔母さんね。でもよく來て下さいましたのね。

けれどもさうとは知らず別にお怨みもいたしませんでした。きつと何かお都合が惡いのだらうと存じてゐました。でも私は待合室の中で青ざめてゐましたでせう? 遣瀨ない氣がしてゐましたから。いつも恐しい時は知らず識らず祈禱のまねをするのですけれど、このやうな邪な行爲のための幸福を祈る氣にはなれませんでした。祈らうとする瞬間目が覺めます。きりすとのきびしい目をふつと思ふと顏があげられません。よるべないやうな心持の私です。それをちつとなら愛して下さるとおつしやいますのね。なぜ御言葉だけでもいゝから、たくさん愛するとおつしやつて下さらないの? 私はあなたを戀した事夢にも悔みません、却つて祝福してをります。けれども不幸な戀だとは考へてゐます。あなたも御迷惑でせう。私も、私の最初の戀がこんな罪に似た思をしようとは考へてゐませんでした。私は前世にきつと何か重い罪を犯した者でせう。

何も知らない肉親のものに濟まないと考へたり、一度でもあなたと御一緒に通つた道は再びもう通れない氣がしたり、隨分世の中が狹くなりました。叔母にも心の中では泣きながら御詫びしてをります。私そんな惡者ではございませんのに、こんな惡者になつて終ひました。あなたのお思ひになるよりもつと〳〵初心な者です。皆んな戀がさせる業です。私があなたに戀をしかける、そんな事をあなたに考へられるのすら苦しうございます。あきれたものだとおさげすみなさつていらつしやるに相違ありません。けれどそれが私にとつてなんでせう、私盲目ではございません。

あなたの今朝程の御手紙、もうこれぎりのあぢうぢあないのかと思ひましたら、今まで堪へてゐた淚が一度に流れて、胸は板のやうに切なくなりました。

鏡に寫る私の眞靑な顏にはもう紅い帶も、藤色の襟も、お白いも、帶止めも何一つそぐはないやうに思へます。けれども私を聞分のない我儘者と思つてはいやです。どんな事でも私は同じ年頃の人より、よく飮込める積りです。決してあなたの御邪魔にはなりません。あぢうを申さなければならない時がくれば、きつと機嫌よくあぢうと申しませう。來年の春あなたは×國へ御洋行になるのでせう、おかくしになつても知つてゐます。今からその時の覺悟はしてをりますのよ。一月に一度でも結構ですからお逢ひ下さらない? 少くもそれまでに七八遍お目にかゝる事になりますわ。それで結構ですの。長い事お目にかゝらずにゐるのもいけないし、あまり度々お目にかゝる事もいけないし、これだけなら決して無理な註文ではないでせう。機嫌よく、樂しくお星様方のやうに靜かにそつと。

あの日は僅か三時間許りの間でしたがほんとにいゝ散歩でした。惡魔に御禮を云ふものでせうか、神樣では少し變ですわね。けれど歸つてから一寸いけなかつたのよ。兄に叱られました。私默つてあなたの事考へてゐましたからさう苦しくありませんでしたの。私が自分勝手に出歩くつてですの。ほんとにさうです、この通り手紙も書いてゐます。ですから又當分お目にかゝられないでせう。私今度又お目にかゝる日が十日目なら、あとの二十日、二十日目なら、

あとの一月、もう外出しないから今日だけ出して下さいつて兄に頼むつもりです。こんな欺りを兄や母に云ふのが一番辛いけれど、それも我慢します。

今何していらつしやるの？　私はあなただけを思つてゐるのに、あなたはさうぢやないのね。一寸口惜しい！　つねは可哀想ではないこと？

私はあんまり派手過ぎて人目につき易くていけませんね。桃色の日傘なんか持つて。でもぢみなもの持つてゐないのですから仕方がない。我慢しておつき合ひ下さいね。

今度お目にかゝれても遠い先の事ね。お別れするとすぐ又逢ひたくなりますから困ります。

七月十五日　　つね子

唯今までお店の奥で頭を押しつけてぢつとしてをりました。もう之であぢらかも知れないといふ、不吉な豫想で青ざめながら、あの日の事許り思ひ出してをります。

この二三日は涼しい風の通る部屋で一人留守番をして着物を縫つてをります。誰れもそばに來ませんから、膝を崩したり、足を一寸横へ出したり、考へたり、ぼんやりしたりしてゐても何んにも云はれません。その代り縫物はちつとも捗りません。

縫ふ手を休め
その手を合せ、
つい拜むの、
叱られる許りで
よるべない心は
ついいのるの、
もうあぢら？
たつた一度
たつたもう一度、
縫ふ手を休め
その手を合せ、
せめて祈るその悲しさ。

なぜ御手紙が來ないだらうと毎日待つてをります。郵便は一日に大概六度配達されます。その時間もうちやんと分つてをりますから、大丈夫私の手でお受取りします。なぜ來ないのかと郵便屋が怨めしくなります。自分を無望と知りながら、戀しい御手紙が早く頂き度いのですもの。どんなに戀しいかあなた御存じ。

七月十七日　　小さい　つね子

今から和歌の會へ參ります。あなたが戀しい。

私ぼんやりあの日を考へ出してをります、生れてから一番樂しかつたあのお祭の日を。いつでも忘れません。

今日は昨日よりずつと私きれいです。もしこれがお目にかゝりに行くのだつたらと思ひます。

七月十八日

取りいそぎ認め申候。

昨朝の御手紙にて、御言葉通り、折角の日曜の御約束を取消しに致し外出差控へ候處、あなた樣は態々又御出かけに相成り候由の御手紙今朝ほど拜見、萬一をあてにしてやはり參り候へばよかりしにと驚き、悲みに氣もみだ

るゝやう存候。本統に何と申上げてよき事かと思ひ候。も早や何事も都合よくは參らぬものか、すべて神樣に見はなされ候やうにて一向に悲しく候。たゞ〳〵あなた樣のさうした御心づかひ御禮の申上げやうもなき程有難く存じをり候。

昨朝はその積りにて心がまへ着更へまで致居り候ものを何故參らざりしか、繰返し〳〵口惜み申候。朝あの御手紙を拜見せし時はがつかり氣ぬけ致し何事も手にさへつかず候ひしものを、やはり私無駄になる事を覺悟して御約束の時間に參ればよろしかりしに候。お斷りの御手紙が朝までには着かずやとの御心配から態々品川まで御運び下され候ひしかと思へば、今は誰も怨む由なく、一時間早く着き過ぎたる御手紙がかなしくこそ候。

何卒もう一度お目にかゝれるやう御繰合せを願上候。私かく一圖にお慕ひ申上候失禮を深くとがめ給はず、その日と時と處と御示し下され候はゞ間違ひなく今度は參り候。東京中いやな人達で埋つてゐて、何處へも私達の參る處なきやう存ぜられ候もうたてし。

ゆうべは夢にまみえ上げ候。まざ〳〵とお目にかゝりし夢！あけがたの夢は正夢と申候とか、はかなき事も今はたのみに致され候よ。

七月二十一日、月曜

二三日おきに淸のびゆらおや自宅にこんな手紙が舞ひ込んで來た。彼にも常子の事はいつからともなくなほざりに考へられないやうな心持がし出して來た。然し役所の方、謠曲の內稽古と出稽古で、彼は相應にその日その日を忙しく暮してゐた上に、夏子といふ人もゐた、その外靜江、貞子、お梅、そんな人の事も忘れては終へなかつた。とは云へ常子は水々しい娘だ。靜江のやうに苦勞しぬいた女でもなく、貞子のやうに唯だぼんやり育つた御嬢さんでもなく、お梅のやうな黑人でもなかつた。叔母さんの夏子とよく似たやうな烈しい情を胸に包みながら、どこかまだ幼い夢の醒めきれない、自分勝手にさう步けもせずじれてゐるやうな遣瀨なさが、いつもきまり切つた匂しかない花の樣々を嗅ぎあきた彼に珍らしい素馨の香を放つのが常子だつた。彼は初めてその香を嗅いだ日の胸騷ぎを考へ出した。さうして此ぢあすみんの香にも亦餘り馴れ切つて終はないやうに、遠くはなして置いて、たゞ時々近づけて嗅いでみた。まさに咲いた許りの芳烈な花の香はそつと嗅ぐだけで十分だつた。彼はいつまでも輕い接吻で滿足しようとした。

六

Natsukashii kata ni;

Sakihodo wa shitsurei itashimashita. Yôyaku ome ni kakarete donnani ureshii ka wakarimasen. Kyô wa hon-tô ni ii hi deshita wa ne. Nagai koto ome ni kakarenakatta node iyani natte imashita no yo. Demo kyô wa nanimo-ka mo tsugô yoku ikimashita node ima-made no kuyashii koto mo minna wasurete shimaimashita wa, "Atashi ne, okkasan, otomodachi no toko de ano fukuro koshiraete ita no; dakara osoku-natta no yo." to sô iimashita no. Shi-kararemasen deshita kara dôzo goanshin. Densha no nakakara ome ni narimashita.

Yoshi ya yoshi,
mi wa muruma tomo
Yokohama ni

Kimi tsukan toki,

ame haro yo; ame!

Anata wa atashi nado ikura nuretemo iito oomoi nasatta deshô ne? Nikurashii wa. Momoware mo kowarete shimaimashita. Atashi mo nantonaku tsukarete imashita. Itadaita ano kudamono, kâsan to isshoni tabete, "oh oishii, oh oishii" to ittara, kâsan mo oishii, oishii to iimashita no yo.

Iroiro no koto atashi kangaemasu; atashi wa dô shitara ii no desu no? Atashi niwa wakarimasen no yo. Mata kurushimanakute wa naranai no desu ka? Nannimo omowanai de tada anata o oshitai môshite iru no ga ichiban tanoshii no. Ome ni kakaru to mata aitaku narimasu kara komarimasu.

Atashi bakari anata no yume o mite, anata wa atashi no yume mo mite kudasaranai no wa kuyashii kara, mô miru no wa yame ni shimashô.

Anata to isshô ni môtto nagai nagai tabi ga dekitara tanoshii deshô. Demo sonna koto shitara taihen taihen. Tsune wa sonna koto suru no kowai no yo. Gomennasai.

Dewa sayônara. Oyasuminasai.

(その直ぐ翌日の手紙。)

今夜からこの桃色の紙に致します。あやめ色はさめ易いと申しますから、私達には不吉でございませう。かうして手紙をかいてゐる間も氣が氣でございません。こんないらない苦勞をたんとしなくてはならないのも誰れのためでせう。

今日は風がありましたが、やはり昨日ほどお暑うございました。あなたは今日も御仕事だらうと思ひました、昨日の事などまるで知らない顔なさつて！　私もすましてゐますのよ。

今日から袋に刺繍を初めました。あなたのお歌をぬはうかと考へましたが、あんまりですから止めましたわ。それであなたのお好きな花にしたいと思ひつきましたが、それも知らず、何もかもやめ、よく伺つて置けばよかつたこと。

今夜髪を洗ひました。もうあんな重い桃割などに結つてゐなくともいゝんですもの。それにすつかりこはれて終ひましたもの。やつかいな髪ね、でも思ひ出の一つなら、可愛い髪よ、やつぱり。

秘密を抱いてゐるといふ事恐ろしいけれど、おもしろい所もあるのね。私がしてゐるやうな事少しでも内へ知れたらどんなに大變でせう。私の内の人は皆なきびしい人許り。さうなつたら私とても内にゐられなくなりますわ。それは知れ切つた事です。私内を飛び出して死ぬなり、どうなりするからいゝとして、どんなに内であなたを惡い人に思ふでせう。あなたの御名はよごれて終ひますわ。私それが怖い、辛い、だから大變な事はしたくないのよ。あなただつておいやでせう。だからそんなあぶなつかしい事しない方がいゝの。でも今にきつと一度は知れるでせう。あゝ私困つて終ふわ。さうなつたら私どうしていゝか分らない、まるで子供よ。どうぞ私をかばつて可哀想と思つて下さい。私も因果ね、怖くつて震へてゐますの。

お目にかゝれば今の青ざめた頬も紅く色づきます。あなたはそれに青い〳〵とおつしやるのね。私には譯がわかりませんわ。

七月二十八日　　つね子

Natsukashii kata ni:—

Ashita no asa kyôkai e mairimasu; keredomo ome ni kakareyô to wa omoi-ma'en no. Ano konoaida môshiageta uta no yôni.

Usugurai tasogare no hikari de kono tegami o anata o omoi nagara kaite imasu. Anata mo atashi o wasurenaide kudasaimasu? Utsukushiku mo nantomo nai watashi desu noni. Ome ni kakatte ashita de isshûkan. Ashita wa mata Sunday ne. Anata o shinjite kono machidôna nagai nanoka o sugoshi-mashita koto yo.

Mô kurakutte kak masen. Tada ome ni kakareru yôni kore kara oinori shimashô.

Shizumari kaketa omoi ga mata mida-resome, warenagara kokoro ni naru towa osoroshii koto de gozaimasu. Itsu made kôshite iru wareru deshô. Atashi wa atashi no kokoro o shikatte orimasu no. Demo sore wa sugu ni naoru mono tomo omowaremasen! Kawaisôna atashi no kokoro yo.

Anata hitori no Tsune.

(以上 大宮季治氏 羅馬字譯)

なんだつてあんなに早く左樣ならを云つて御別れして終つたのでせう。御別れしてから急に戀しくなつて、もう一度おそばに寄りそひたくなりました。内へ歸るまでどこか道で又お目にかゝれる奇蹟があらはれて呉れゝばいゝと思へば、本統にそれがあり相に思はれる位、私の心は變なものでした。

あなたはお車にお乘りになつて、どこへいらつしやつたの？ よしませう、よしませう、そんな事、もうこんな嫉妬をおこすなんて、いけないわね。でも初めての嫉妬だから私にはいつまでもきつと忘れられないのでせう。

今朝は祈禱をしてふと顏を上げると、入口の横にあなたが私の方を見ていらしつたのですもの、本統に驚きましたわ。神樣の御宮で逢曳をする、そんな人達が又とありますものでせうか？ その罰か知りませんが、今日は左樣ならのきすもして頂けませんでした。何んだつて忘れたのでせう、毎日逢へるのでもないのに！今更らそれを悔んでも仕方がない、諦めませう。今度の日曜と申上げたけれども、そんなに長くお目にかゝらないでゐるの厭です。もつと早く逢はせて下さい。でもだめね、仕方がないわ。もつとたんと逢はせて頂きたいけれども、そんなにたんと逢へばおいやになるかも知れないし困つて終ふわね。

今日は大層元氣で喜ばし相だとおつしやつて下さいましたのね。それはあなたが本統に少しは可愛がつて下さると、さう思つたせゐなのですわ。でも今はさうぢやないの、何だか悲しいのよ、あなたに抱かれたまゝ、あなたのお胸に顏を埋めて死んで終ひたい、そんな心地がしてゐるのよ。

青ざめた顏して泣いてゐる私、桃色の顏してお目にかゝる私、あなたは自由に私の頰をお染めになる化粧師ね。

いつそ二人の間が公然になつて終つたら、たとひそれはいたづらな不義な二人であるとしても、どんなに私は嬉しいでせう。御一緒に旅も出來る、箱根へでも、修善寺へでも、京都へで

も。

さうなると大變、おゝ大變です。

聖なる母、まりあ樣、お許し下さい。

私の誕生日覺えてゐて下さつて有難う。うれしかつてよ。どうぞいつまでも忘れないで下さい。私の神、戀人、あなた！

あなたの御誕生日はいつ？　私内々で知らうと思つてゐたのですけれども分りませんでした。五月か、六月か、その邊があなたに丁度いゝやうな氣がしてゐますのよ。

早く九月になれ、九月になれ、そしてあなたの女郎花を見に行くの、うれしいわ。この秋はきつと仕合せでせうと思ひますの。晝間は能を見て、夕方からお目にかゝれば、この上なく嬉しいと思ひます。

なるだけ早く、たゞそれだけ！　……それと常子をいつも同じやうに愛してゐて下さいつてこと！

八月三日、その夜。　あなたの　常子

今朝も赤髮を結つてゐる時御手紙をいたゞきました。あなたの御手紙は封を切らない前の方がうれしくて、讀んで終ふと何とも云へない悲い心になります。

昨日は寢るまで御手紙を待ちこがれて失望してねました。今朝は多分！　と思ふだけで私ははしやいでをりました。私のこの願がとゞきました。

一つを得て二つを望み、二つを得て三つを望む、このはてしを知らない私の心、今更らこの心がおそろしい。この心が怨めしくなります。われとわが心の判斷が出來ずに、昨日も今日もかうしてをりました。これから又どうなりませう。もう考へる事も出來ません。物には始めがあり、さうして終りがございます。かうして始めあつた事は、やがてそれだけの終りがございませう。どうか終りをあらせたくない、そして終りの來るやうな氣もいたしませんけれども、あるふああり、おめがありとは眞實の事でせう。眞實の事はきつと私達にぶつかつて來る事でございます。どうしてもやがて終りのあるものならば、せめてはその始めと終りをつなぐ間だけでも幸多く、樂しく送りたい！　そしてなるべく終りを遠くする事を唯つとめればいゝと思ひます。それだけが私共人間に許された幸福の範圍なのでございませう。

多くの戀の落ち行く處、そこはどこです？　恐ろしい心地がします。もしもそこへ行かなくてはならなくなつたならば、身代りに私一人喜んで參ります。その時こそ私はあなたに立派にあぢうを申上げて、あなたのあたゝかいお手から脱け出ます。さすが常子は常子だとあなたに云はれたいと思ひます。あなたを戀し、あなたを愛するのは、あなたを尊びあなたを幸福にしたいからです。さうしてそれがためにはさうしなければならないものでございます。

果敢ない世の、果敢ない戀に命を總て投げ入れて終ふこと、昔ならばいざ知らず、今の世の人間には思ひもよりますまい、哀れなものでございます。生ぬるい、冷い戀の道かも知れませんが、それに從ふ事が今日の習はしと思へば、惡いとも思はれません。かうしてゐられるだけでも私達は本統に幸福でございますから。私の心は靜さを求めてゐます。他人を戀せず、靜かなあなたを戀した事を却つて幸福とも今は思ひます。然しあなたはそのおやさしい心から、ある戀する少女を哀れとお思召になつた許りに、つい私の方へお傾きになつたのでせう。拾ひたくもない私を失望させたくない許りで……さう思ふと心は苦しくなります。どうぞ〳〵この事け許して下さい。私のこの罪は必ずい

つか私が支拂をする時が参りませう、どうぞその時、常は嘘をつかなかつたときつと思召すでせう。

これで私の心はよくお分りになりまして？あなたは唯ぢつと許り私を愛して下さればいゝの。でも私はたくさん愛しますよ。仕方ないとお諦め下さいまし。私も仕方ないと諦めます、私の思つてゐる凡そ十分の一もあなたは私を愛しては下さらないといふ事を……。

私の心持、私の考へ方、私の望がからとお分りになれば、あなたも御安心でせう。どうぞ御安心下さい。内のものが嫁に行けと申せば、はいと云つてどこへでも参ります、婿をとれと申せばはいと云つて取ります、然しあなたの事は忘れません、その人は可哀想ですが、私がその夫を愛せるかどうか、それはとても分りません。

今は許されるだけ長く、楽しい月日の續くやう祈つてゐます。篝のやうにぱつと燃えて消えるより、油のあるうち同じ光と熱で輝いてゐる灯がしたはしうございますもの。

私のやうなおきやんな娘がこんな事しみじみ考へてゐるとは思ひもおかけにならないでせう。だからきつとあなたは今のまゝの關係ではいつか、私が満足しないだらうと不安に思召していらつしやつたでせう。

幸か不幸か、私の友達等と人並でない考を持つて生れた私とでは、そんな事はまるでちがつて考へてゐます。友達は仕方なしに私を優れてゐるのだと慰め顔に申します、けれども、自分ではこれが私を知らず／＼不幸にする性質だと思つてゐます。……云々。

八月五日

今日歌の會があつて参りました。此頃は歌にも興味がもてません。歌許りではございません何んにも。ことに題を出されて歌など詠めようと思はれません。

あなたを考へるのには大勢の人中にゐるのはいけませんわ。一人で内にゐてぢつとしてゐる方がいゝのよ。人中ではどうしてもいくらかそつちに氣をとられますから。そのいくらかの缺けるのが口惜しいのですわ。でも熱を病んでゐるやうにあなたを思ひ續けてをりました。脣許り乾きました、いつこの脣を濡して下さいますか。早くその日が来るやうに。

八月六日

私いゝ事を考へつきましたの。明日からでも一日おきか——或は毎日でも、刺繍のお稽古をしに行かうと思ふのですの。午前とも午後ともはつきりきめずに、ですからあなたの御都合のいゝ時、午前でも午後でも自由に外出が出来るやうになります。内でさしつかへのない限りは。ですから前日までに何日何時までにどこへとおつしやつて下されば、私きつと参ります。

私は私の今してゐる事悪い事とは思ひません。人を戀ふといふ事は悪い事でせうか。先にはあんまり無理をして出たので悪い事のやうに心が咎めたりしましたのね。良心がしびれたといふ譯でなく、近頃は内證でお目にかゝる事、不孝に相違ないけれど、さうしなくてはならないのだから仕方ない、さう思ひ切るやうになりました。どうして世の中で私一人が悪いでせう。

私今お別れしても二年程經つたら、きつと又御手に歸るやうな氣がしますの。これはをかしいけれども、そんな豫覺がして仕方がないのです。私が自由な私になつたら、何をさて置いても眞先にあなたの所へ行きますわ。

私この頃は割に元氣です。一頃は病氣になり相でした。で驚いて自ら心をとり直しました。毎日弟達を相手にふざけたり、喧嘩したり賑かに暮してゐます。もと通り快活な活々した私になりませう。

それに昨日お目にかゝつたのですつかり生き返りましたもの。これからももつと靜かな心でお話をしたいと思ひますの、それにはあんな處でお目にかゝるのは厭、あなたもきつとお厭でせう。私は人一倍人に氣をかねる方なので困ります。人のゐない靜かな美しい處つてものは東京にはないのでせうか。

人つてものは近くより遠くの方が美しく立派に見えるものですのに、あなたはさうでないと思つて嬉しうございます。私の立場を考へて下さるとおつしやつた最初のお言葉通りいつまでも私を尊敬してゐて下さいます、その事を考へると私は穴へ入りたい程はづかしくなります。どうぞ許して下さいましね。私いゝ子になりたいの、あなたに愛想を盡されないために。

あなたは世の中の善に惡の香をつけ、惡に却つて善の味をつけてお終ひになる方ですわね　あなたを見てゐると、あなたが善で、神樣が惡になつて終ひますもの、私にはもうあなたが唯一の善です、神樣も怖くありません。……云云。

八月十一日、月曜。

花を戴いたあの日もこんなに晴れた暑い日でございました。今思出して泣いてをりました。私については私よく分つてゐる積りです、だのにこの心ばかりは少しも分りません。あなたのやうな方をなんだつて無考へにお慕ひしたのでせう。それからしてが分りません。仇花のやうな私共の戀ではありませんか。

あの祭の夜は僅か四十日許り前ですのに、私にはどうしてもさうは思へません。もう〳〵遠い昔のやうな氣が致します。

此月日の間になめた苦みは生れて初めての經驗でございます。また考へ直せば、こんな幸福も決してなかつたと信じます。人生にこんな悅びのある事を知らずによくも今年まで生きて來られたものとも思ひます。二十になる今日まで嬉しいと思ひ、幸と思ひ、歡ばしいと思つた事、今考へれば皆なつまらない、下らないもの許りでした。それが初めて今分りました。でもそれだけ世の中は小さくたつた一つになつて終ひました。

この尊い得がたいものから、離れなくてはならないといふ考だけで、どれ程私は顫へあがるか、考へてみる勇氣もございません。

私はどうして長い一生を過しませうか、唯だ日暮しといふ事だけならば、どうにか過ぎて行くでせう。けれども私を捕へてはなさない過去の生々した感情をどうしませう。それは一生の暗闇を照す光です。私には今日以上の歡びが來て私を過去から自由にしてくれる筈がないと思ひますから。……云々。

八月十三日

……私には過ぎてる方だ！　さう思ひながらとう〳〵深間へ落ちて戀して終ひました。あなたはどの位御迷惑でせう。段々それが分つて參りましたが、もう遲うございました。飛んでもない事をしてしまひました。どうぞ御許し下さい。

私の一生の事お考へ下さいますか、有難うございます、何と御禮を申上げませう。でも私、私の今の身がいやになりました。娘！

娘！　むすめだから大事なのでございませう。箱の中に入れられてゐねばならないのでございませう。今の娘といふ身だけが大切なのでございます。何一つしてはいけないのでございませう。勿論戀もしてはいけないのでございます……。

私の戀した方は唯一人です。その方は餘り戀してはいけないとおつしやいます。でも私はこの通り戀してをります。死んでもいゝのです。私はもう先から決心してをりました。私の壽命を縮めてもいゝから、あなたに愛して頂きたいと。だから私の一生の事をお考へ下さるなら、どうぞその積りでお考へ下さい。

でもその後色々考へました。然し今ではもう何も考へる餘地はなくなりました、何もかもあなたにお任せ申します。あなたにおすがりしてゐます。私はもう何も知らない、何も分らないめくらになつて終ひました。唯だあなたの御手に縋つて生きて行く許りです。どうぞあなたの御心のまゝになさつて下さい。御心のまゝになさつて下さい！

あなたをこれ程信じ、これ程愛してをります。私は總てあなたのものです、心も身體も總てあなたのものです。どうぞ御心のまゝになさつて下さい。人を戀したと云つても心許り上げるのではいけない、まだ足らない、さう云ふ事も本統に心の底から段々分つて參りました。それならば、あゝそれも當然の運命でせう。私はあなたのものです、どうぞ御心のまゝになさつて下さい！　私を本統の仕合せにして下さい。どうぞ愛して下さい。一時も忘れないで愛して下さい。いつまでも離さないで下さい。……云々。

八月十八日、月曜。

（此間の手紙數通その筋の注意により略す。）

七

御手紙がとう〳〵、唯今夜の七時半の配達で參りました！　待つ筈のない御手紙をいつの間にか待つてゐましたの。下さる筈がないと思ひながら、待つてゐたといふ事はをかしうございましたね。今は物の道理なんて忘れて終つてをります。

郵便つて投げ込んで行きました、隨分ひどい配達ですわ。この世の中にはどんな大切な手紙があるものか、あの男には分らないのでせう。可哀想な男ね。

私は大きな柄の浴衣がけで、ぼんやり刺繍の材料になりさうな模樣を雜誌からさがしてゐましたの、さうしてあなたの事を考へて――お目にかゝり度いつて……。

あの初めて御手紙を頂いたのは六月の二日でございましたから、今日でもう丸三月になります。その同じ日に又御手紙を戴いたのは一層うれしうございました。その間御目にかゝつたのは八度、長いやうな、短いやうな氣がします。あなたといふものが私の考に入つて來ますと、總てがらりと一度にこはれて標準といふものは一つもなくなつて終ひます。

夏ももう終り近くなりましたね。領事の御家族は山からお歸りになつて？　秋は私大變好きでございます。冷いやうな、熱いやうな秋が！　私が生れたせゐか、それともあなたの冷さにどこか似てゐるせゐか、とも思ひます。でも之からは夏も好きになりませう。そこに色々な思出がありますから、さうして秋も、冬も、春も、段々今に、一年中が好きになつて行くでせう！

でも秋風が吹くと扇子のやうに捨てられるのではないでせうか。うそね？　嘘だつておつし

やつて頂戴！ そんな事私いやよ。どうぞいつまでも私を愛して下さい。私死ぬまで戀してゐる、それは出來ない事ではないのですもの！ 私どうせそんなに長く生きてゐようと思ひません。せいぜい三十五位で、唄にあるやうに死にたいと思ひますわ。笑つていやよ。ことによるとそれはあたります。ですからあなたを愛しつづける事も可能な譯でせう。あなたも三十五までなら愛してやるとお誓ひ下さつて？ それともあんまり長過ぎます？

私の若い日をみんなあなたを思ふ事のために費さうと思つてをります。ですからどんな一日も、どんな一時も、尊うございます。この樂しい生々した少女の日がいつまで續きませう？ その眞中にあなたを飾つて私は生きてゐます。

一昨日敎會へ參りました。御出にならないと承知しながら、でも少し氣にかゝりましたわ。あの日から一週間になると繰返し思ひました。今日お友達に「此間はなんだつて左樣ならもしないであなた歸つて終つたの？」つて云はれて赤くなりながら、「えゝ、急に忘れて來た用を思ひ出して」つて云つた私を御想像下さい。高いすてんどぐらすを仰いで、どんな強い感情にひたつてゐたでせう。窓の隙から晴々した青空も、ふは〲した白雲も見えてゐました。雲のやうに少しも心配しないで知らない海の向うの國へでもなんでも行けたらどんな嬉しいでせう。

今日も亦御役所？ 私雲になれなければ、風になつて、そつとあなたの御部屋へ入つて行きたいわ。極く内證でそつと。さうすればあなたにも逢へるし、ことによるとお話も出來ませう。でもこれは勿論駄目！ それに夢をみる事もおやめにしようと申上げたのだから、それも見られないし困つてね。（口惜しいから默つてゐましたが、とう〱此間の晩、お話した夢見て終ひましたわ。）では仕方ないから、……ぢかにお目にかゝる外方法がないわ。これがやつぱり一番ね？

上杉さんのお稽古いかゞ？ 智惠子さんにお逢ひになつて？ 私からあげた繪葉書にあの方の夢見たつて事が書いたつてお話なさらなくつて。あれはかうなの。

智惠子さんと私と長い事お話してゐましたの、勿論夢で、丁度その時分よ、あなたが少しもお便りを下さらなかつたのは。私それを大層心配の餘り、夢の中で智惠子さんにあなたの事聞いたの、どんなに聞きにくかつたでせう！ 本統に罪な方よ。夢にまで私に苦勞させるんですもの。

此間中澤山手紙を書きました、でもお見せしないでもいゝ手紙、自分を慰めるために書いたのですから皆んな破つて終ひました。

此頃はもう先程強くあなたを懷しんではゐません。先程戀しくはないの。いけません？ いいでせう。私なんかね！

本統は……噓よ！ 今でも戀しいの、先よりもつと〱。なぜ先に戀しいだの、懷しいだのつて字をやたらに使つて、使ひへらして終つたのでせう！

九月二日

今朝はめづらしくひいやりと致しますのね。御機嫌如何でいらつしやいますか。私は風邪を引き、歯が痛んでゐますけれども、何んでもない事と思ひます。外國に、歯痛みと惡い戀、つて諺がある相ではございませんか。だからあなたの事お案じしてゐますわ。

この頃はあなたの夢も見ませんのよ。嬉しい筈なのに物足りなくて仕方がありません。見たいんです、夢でもいゝから早くお目にかゝりたくなりました。私の眠てゐる時間はほんの少し

なのですから、それで夢も見る閑がないのかも知れません。でも見る時は、うた〻寢にも見るものね。あなたはもう私から離れていらつしやる下心で、夢ででも逢つて下さらないのだときめて終ひました。悲しうございます。

昨晩も十二時過まで手紙を書きましたが、讀返すとお目にかけるのが厭になつて破つて終ひました。おうるさいだらうと思ひながら又書きます、ご免なさい。

——あ〻つまらないわ、内へ歸つたつて何も樂みが待つてるんぢあないんですもの。——さう云つて刺繍の御稽古から夕方歸つてまゐりました。

昨日の朝も教會へ行つてはいけないつて云はれました。齒醫者へだけつて——あんまり日曜毎に外出し過ぎるのですつて。それもさうね。でも仕方がないわ。私許り悪いとどうも考へられませんもの。私眞青になつて終ひました。でも外の事に事寄せて云ひ譯をし、自分でも驚くやうな勇氣を出して、お白粉ぬつたり、着ものきかへたり、草履をはいて考へ〱内を出ましたの。少しひどい事をかあさんに云はれたので、ではもうこれから一せつ出ませんつて、きつぱり申しました、私口惜しいんですもの、泣き〱あなたにいひつけましたの！　心の中ならいつでも自由自在にお話が出來ますもの。悲しい事、口惜しい事、皆なあなたにいひつけますの。それだけで慰められます、どんなに嬉ばしい事でせう、世界中にたつた一人でも私を愛して下さる方があるつて事！　親兄弟それは心の糧にはなりませんもの。

あなたはとう〱入らつしやいませんでした。教會の中はがらんとしてゐました。神樣のいらつしやらない神殿といふものがありませうか！　不屆な神樣よ。

でもね私は行つただけで安心しました。内を出るのに叱られても、泣いてもかまはなかつたの。あなたを靜かにお待ち申す事が出來たのですもの。たとへお逢ひする事が出來なくつてもすべき事は私致しましたのです。もしその上にお目にか〻れたら！

それは申すまでもありませんが、少し厭なのでした。恥かしいんですもの。あなたまだ覺えていらつしやるでせうきつと、——私は總てあなたのものです——どうぞ御心のま〻になさつて下さい。——あなたおずるいわ、私ひとりこのまんま置いてきぼりにして——さう此間お別れした時申上げたんですもの。そんなこと私云つてはならなかつたんではなかつたでせうか？　自分ながら恥ぢてをります。けれどい〻わ、い〻わ私の云つた言葉の意味はもつと〱深かつたんですもの！

教會の歸り、誂へて置いた本を×屋へ取りに行かうとしてゐましたら、聖坂の下で、車夫が奥さんまゐりませう、つて云ひましてよ。驚いて終ひました。私奥樣？　私奥樣と見えて？　奥樣つてどんなもの？　こんな奥樣てものがありますの？

もつとも昨日はぢみな風をしてゐました。もしあなたと御一緒だつたら、どんなに恥かしかつたでせう。やつぱり私これから派手につくりますわ。

その本は一字一句寶玉のやうなの！　い〻本でしたわ。夢中で先許りいそぎましたので細々しい事は覺えてゐませんから、又ゆつくり讀んでお話して上げませうね。けれどもその中に×といふ主人公が出て來ますの、やさしく、清く、すなほで、美しい中に、まるで反對の慘忍ともいふべきものが含まれてゐますの、私それを考へて恐ろしくなつて終ひました。

昨日田舍へ歸るお友達があつたので、謠曲の本とあなたの望月のお寫眞とを餞別としてあ

げました。さうしてから書きました。中根さんは本職の方でないけれども、その道の由緒深い家柄にお生れになつた、それは優れた私の大變崇拜してゐる藝術家です。どうぞあなたも好きになつて下さいつて。——でも考へてみますとあんまり好きになられたら大變でしたけれど……。

九月八日

八

夜は更けてゐますけれども一寸でいゝから書きます。それでないと又明日中心配で折角の刺繡もどうなるか分りませんから。刺繡なんかたとひどうなつてもいゝんですけれども。

今日は本統にいやな日でした。御病氣のお知らせ？　本統の事？　私嘘のやうな氣持がしてゐます、でもそんな嘘をつく人もないんですものね。なんだつてそんな事になつたんでせう。心配するなとおつしやつても、しないでゐられません、今日は一日心配して暮しました。元氣よくはしやいでみても、ふつと通り魔のやうにその事が心を掠めて通るのでもう駄目になるのですもの。もう大丈夫とおつしやつて下さるまではいつまでも心配してゐます、心配するなとおつしやればおつしやるほど心配します、どうぞよくなつたら直ぐお知らせ下さい、本統に一刻も早く私を安心させるやうに！

こはい／＼。でもすぐもとの通りにおなほりになりませう。死んではいやです、そんな事決して／＼ないと思ひながら、ついそんな時の怖い想像が目に浮ぶの。早くよくなつて下さい。ね。いつおなほりになつて、いつ逢つて下さるの？

今一時が打ちました。もしまだおねむりになれない程だつたらどんなにお苦しいでせう。もし私がお傍でお看護出來たらこんなに心配しないで濟むでせう。急ごしらへの看護婦になりませうか？　之は大變いゝ思付でなくつて。あなたの御内の方はきつと甘く通るわね。でも内の方が駄目。それでやつぱり駄目！

御手紙に七日の日曜は熱が出たため行かれなかつたと讀みました時は息が苦しいやうでした。でも御病氣でいゝ、お心がさめたのよりはその方がいゝ、そんな薄情な心も一寸出ました。……

彼は仰向になつて寢ながらこゝまで常子の手紙を讀んで來ると、思はず微笑し、子供に擽られたやうな愛情を感じた。桃色の洋紙はいつの匂、何々の香料などいふより、女性の肌にみついてゐるやうなもつと人工的な香で染まつてゐた。初めの内は何んとも思はなかつたこの香が、近頃では常子の手紙の文章そのものより餘計、彼女のそこへ表はれて來るやうな幻想を强ひられた。

小さなその二つ折の手紙を鼻の上に屋根にして、目をねむり、暫らく常子を考へ出してゐた。胸襟から帶のあたりが有り／＼と目に映つた。その呼吸が明かに思ひ出された。その癖顏はどうしてもはつきり見えなかつた。はつきりしないのでなほ戀しかつた。

彼は鼻の上の屋根を取つて二つに折り、一つ接吻してそれを封筒にも入れず、無雜作に枕下に押込んで、半分寢返りを打ち壁を向いた。彼はこの四日間といふもの晝夜の差別なく眠りつゞけてゐた。

二三十分も過ぎた。玄關があくと夏子は淸の母に一寸挨拶して置いて、そつと二階へ上つて來た。梯子は暗かつたが、上は下座敷よりも涼しい風が吹き通してゐた。

一間三尺の踊場から、四疊半の書齋があつ

て病人の寝床は床の間付の奥の八疊にのべてあつた。

　清は胸のところまで水色の麻搔卷をかけ、片腕を裸のまゝその上に載せてゐた。色白な皮膚がしつとりと見えた。二三疋の蠅が追ひつ追はれつ、汗ばんだ彼の肌を吸つた。吸はれる度に筋肉が僅かぴく／＼痙攣した。夏子は坐るなりそこにあつた團扇をとり、藥瓶の載せてある盆を心持押しやつて枕元近くにじり寄つた。彼女はやがてその左手を疊につき、團扇を持つた右手と一緒に半身をのばして、注意深く蠅を追つた。清は何んにも知らないでかすかな鼾を立ててねてゐた。寂かな室内に時々見えるやうな風が吹き込んで、掛物の裾は砂壁をこすつた。

　夏子は彼の寝顏に見とれて、日あしの暑いのに態々やつて來た甲斐があつたかと竊かに思つた。目を覺したらどんな顏をして驚くだらうと、その瞬間を想像し、その瞬間を占有すべきものも彼女一人限りであるさう思ふのは樂しかつた。さうしてその樂しい瞬間は間もなく彼女が確實に握るべき幸福であつた。

　然し彼女が清を驚かすより前に、先づ彼女が驚かねばならぬ番が廻つて來た。枕の下から少し許りはみ出てゐた桃色の狀袋がその好奇心をそゝつた。深い考へもなくそつとそれを引張つてみた。案外易くそれはぬきとれた。夏子は持つてゐた團扇を思はず膝に落して吸はれるやうにその手紙を讀んだ。

　1、夜は更けてゐますけれども一寸でもいゝから……

　一體だれ、こんな暢々しい手紙を書くのは、夏子はさう思ひながら裏をひつくり返してみた。裏は白紙だつた。本文と關係のない二行許りの文句が書いてあつた。

　……今日は御宅の方へ上げる手紙ですけれども、羅馬字はいや面倒だから。その代り久原武雄つてものが代筆するのよ。武雄はけしからん男ね、こんな女の手紙を書きます。

　夏子は眉をしかめ、急いで内側を開いてみた。戀しい懷しい清さま——あなたのたつた一人ぎりの常。

　なまいき！　さう云ひながら脣を喰ひしばると夏子は見る／＼青くなつた。慌てて懷中にその手紙を入れようとした。然し清はまだすや／＼眠つてゐた。夏子は再びわく／＼しながら手紙の先を讀んだ。こゝはもう讀んだ、さう思ひながら……夜は更けてゐますけれども、といふ行を二三度夢中で繰返した。讀みながらも彼女の頭の中には樣々な光景が出て來た。常子もやつぱりさうだつた、この考はとつて返しのつかない手落のやうに彼女に思へた。

　彼女は落ちつかない心持でやつとそれを讀み了つた。このまんま持つて歸らうか？……暫らく思案してから、そつと又枕の下に押込んだ。すつかり隱れるまで押込んだ。さうしてそつとそこを立つて、足もとの壁の方の柱にもたれて坐つてゐた。

　知らず／＼兩方の眼から涙が溢れて來た。はんかちいふを出してそれを押へるとなほ涙がにじみ出て來た。清さんが目を醒すまで、かうして泣いてゐよう！　さうだ。何んと清さんに云つていゝか分らないほど口惜しいから。さう思つて彼女は鼻の赤くなるまで口惜し泣に泣いた。

　清はいつまでもすや／＼眠つてゐた。もしやお母さんが上つて來やしないか、夏子の不安はそれ許りだつた。さうしてゐると玄關の格子戶

が突然がらりとあいた。御免下さいといふかすかな女の聲がした。夏子はびくつとした。もしや？　さう思ひながら、急いで帶の間から細長い鏡を取り出し泣顏を直しにかゝつた。

　やがてその女客はお母さんに連れられて二階の方へ來るらしかつた。夏子はどうしようとうろ〳〵してゐたが、淸の枕元へ擦寄つて肩に手をかけた。かすかな淸の汗の匂は夏子に樣々な事を一度に思ひ出させた。彼女の聲は自分でも不思議なほど和らいでゐた。彼の名を呼びつゝ搖ぶつた。

「えゝ。」

　淸がさう云つてやつと目を開くと、目の前に夏子の顏があつた。少し充血した淸の眼がにつこり笑つた。夏子も思はず引入れられてにつこりした。

「お客樣らしいことよ。」

　さう云つたが、淸はそれに答へようともせず、いつの間に來ていらしつたと手を額にあてたまま夏子の顏を見詰めつゝ尋ねた。さあああきつからと彼女は答へて、暗に手紙の事を思はせようとしたが、淸はまるでそれを忘れてゐるやうに見えた。彼女の嫉妬はそれで少してれた。

　女客は梯子段を上つて來た。

　それは紅い帶を締めた貞子だつた。貞子は夏子を見て顏を赤くし閾の處に立つたまゝためらつた。

「さあどうぞ。こちらの方が風がよく通します。」

　夏子は黑繻子の帶に一寸さはつた手で、麻の座蒲團をすゝめながら主人顏に云つた。その落着が益々貞子を小さくさせた。

「先生御病氣はいかゞでございます。兩親からも宜敷申上げろつて……」

　それだけ小聲でやつとこさ云つて、桃割のおくれ毛をかきなでながら、夏子の方に向き直つた。さうして丁寧にお辭儀をした。

　淸はいつの間にか寢床の上にきちんと坐つてゐた。

「ねていらつしやいましな。」

　夏子は子供でもさとすやうに、極度の親みを見せながら云つて、「ねえ」と貞子の方へ顏を振り向けた。さうしてそのまゝじろ〳〵貞子のおつくりや、子柄を批評的に眺めてゐた。瘦せ形で丈の高い貞子は兩袖を膝の上に載せ、その下で手を手でいぢりながら上體を少し弓なりにかゞめて、益々小さくなつて膝の上に目を落してゐた。

　土曜日の夕方本牧へ行つて、水瓜とびいるを一緒にやつた。その晩突然三十九度五分發熱した、と淸は話してゐた。女二人は互の間の葛藤も忘れて、床の中のやつれた淸を眺めてゐた。

「だれお連れは。」

　夏子は聞きとがめるやうに態と不平な顏をして見せた。

「でせう。だから私いつも云ふのよ、Bさんは惡友だつて！　ほらごらんなさい、これでこりるんですよ。」

　淸は唯にこ〳〵笑ひながら貞子を眺めた。貞子も唯にこ〳〵幸福相に笑つてゐた。

　そこへお母さんがさいだあの壜とこつぷを持つて上つてきて、

「淸さん、こんな御見舞を御二方から頂きましたよ。」

　つて夏子からのぢえふあすの罐と貞子からのすばらしい果實の籠を、そこへ置いて見せた。夏子はこの時初めて貞子に對してもある嫉妬を感じずにゐられなくなつた。

　よくこそあの手紙を隱したり、輕卒な怨言を云つたりしなかつた。夏子は淸の上機嫌なのを見て竊かに胸をなで下ろした……。

九

とう／＼雨になつて終ひました。續いておよろしいの？　今日は何だか心細くてたまりません。

御病氣揚句の御出勤をどんなかとお案じしてをります。何から申しませうね。御目にかゝれば、今日は！　よくいらしつてね！　何時頃まで御閑？　どこに行きませう？　久しくお目にかゝりませんでしたね！　つてから云ふのね。私？　常子はどうかとおつしやるの？　常子はね、いつも通り元氣でかうしてをります。どうぞ御安心下さい。

今朝は御手紙をありがたう。お忘れなくよく下さいましたこと、本統に嬉しうございました。御病氣もおなほりになるし。

××堂が段々近くなりますのね。御稽古で御忙しいでせう。東京へは一週に二度づついらつしやるの？　品川を素通りで。でもいゝわ、それがあなたのためになる事なら。

今度の會が評判のいゝやうにとそれ許り祈つてをります。でもわからずやの多い世の中ですもの、下らない評判なんか氣になさらない方がいゝわ。どうぞお天氣だといゝのね、それも祈つておきませう。遠くから舞臺の上のあなたを、私だけのあなたと思つてみてゐるのは、お目にかゝる時と同じほど嬉しいわ。あなたが私の方をちよい／＼見て下さるやうな氣もするの。

御能に行くと云つても此頃は默つてゐます。先の内は誰れにでも、あなたの事許り話してゐたのに、近頃は中根のなの字も口へ出しませんのよ。誰れかに一寸御名前を云はれてもはつとして赤くなります。妙なものね。

私はかあさんと兄弟とを愛する代り、あなた一人にお縋りしてをります。なぜなら私今まで愛つてものを本統に心から知りませんでした。薄情な娘だ、薄情な娘だと、どこでも云はれつけて來ました。それは一つにもう亡くなつたお父さんの罪もあるのでした。お父さんは私がうろ覺の頃から外の女と他所に住んでゐました。（即ち彼女が叔母と呼んでゐる下田夏子は、この父の一番末の異母妹にあたつてゐたのだ。）　これで私は内の中にゐても外にゐても不幸な氣の知れない、人に隔りを置く變な娘になつて終ひました。私は兄弟の中でも一番感じ易い性質でしたから、自然ほかの人より早くから悲しい事が心にしみて、ついひねくれたのでせう。でも心の心からそんな娘ではないのを自分許りは知つてゐました。

今死にたいと思ひます、いつかはあなたも愛して下さらなくなりませうから。

今死ぬのが此上もない幸福ではございませんか。あゝどうして今日はこんな心細い事許り考へるのでせう。御迷惑ねえ、堪忍して頂戴！

これからちよい／＼聲樂の稽古に通ひ出しますの。私ゞおかるなんか上手になるあてもなし、先生も好きではないのですが、折角やりかけたものですから少し又やりませう。

又書き過ぎましたのね。つまらない事許り、讀むのもお厭でせう。突然人が入つて來たので、急いで手紙を隱さうとして、こんなにいんきをこぼして終ひました。机も着物も疊もいんきだらけ。こらこんなに手まで眞黑よ。隱す必要のない時でも、つい隱したりするのはどこかやはり心がやましいからね……。

九月十三日

明日木曜でもお目にかゝれるのね、きつと？　御病後は少しお痩せになつて？

、昨日御手紙嬉しいとは思ひましたが、まだむSの事が氣にかゝりますわ、先に車でいらしつた所だわね。西洋人は綺麗ね。今日は私恐ろしくなりました。あなたは恐ろしい方ですわ。何ぜだか、何故ともはつきりしないけれど、さう思つたら悲しくなつて終ひました。何ぜでせう。Sさんの事考へると、私直ぐあのまだむTを思ひ出しました、私にから云はれたつてあなたは仕方がないでせう！

恐ろしい方、恐ろしい方よ。

明日雨でしたら十九日の金曜ね、四時から。夜は×館の活動？　面白相ですけれど私一寸考へますわ。もしもそこで又まだむSに逢ふと大變だから。

九月十七日

思ひ出す事が多過ぎるので昨夜から悩しく時を過してをります。又雨ね、昨日お目にかゝつて置いてよかつたこと。昨日は何かと有難うございました。

人のゐない時あの指輪はめてをります。本統に綺麗ですね。夜電燈で見ると、あの王冠のやうな上の玉が一層光りますの、あなたが下さつたのね。私今までのは皆んな好きでありませんでしたから、こんな好きなのが出來てうれしい。いつまでも可愛がつて下さる誓のしるしと思ひませう。

私があなたに不足を感じてゐるなんかとお考へなさつてはいやよ。唯私にはまだはつきり信じられませんの、云はゞ私の幸を。なぜあなたが自分のやうなものをこんなに愛して下さるのか、それが分りませんの。夢を見てゐるのではないか、だまされてゐるのではないか、いゝ氣になつて蔭で笑はれるのではないか、信じる事は貴いのですけれども、もし愛されてゐると信じて、それがさうでなかつたらどんなに私の自惚れた顔が滑稽なものでせう！

どうぞ〳〵可愛がつて頂戴！　お約束、指つ切りしませうね。

あなた決してあのほてるにいらしつてはいけません事よ。いゝほてるでせうけれど、でも決していけません。なぜでもいけませんの、きつとよ。

車からそつとのぞいたのにあなたはこちらを向いてゐて下さいませんでした。左樣ならのお聲もおかけ下さいませんでした。淋しく物足りなくお別れして歸りました。

お風呂に入つて、それからおかあさんに×館の寫眞のお話をして、お菓子を喰べて、あなたの代りに指環にきすして、朱塗りの箱枕に重い頭を載せて伏せりました。

私時々神樣が畏ろしくなりますの。ふつと目が覺めたりした時、でもあなたの強いお手に抱かれてゐるうちは大丈夫だと思つて安心してゐますわ。あなたの愛は不思議に大膽で少しも卑怯ぢあないのね。往來でもどこでも、勝手に見ろつてお顔していらつしやるのね、私そんな方好きよ、嬉しいわ。

それに私先からさう思つてゐたのですけれども、人には誰れでもどこかいゝ所があるものよ、それを見出してくれる人がもしあつたら、それはどんな仕合でせうと。さうしたら昨日あなたもさうおつしやつてね。たとへ美しいものがあつても、もしそれを見る人がなかつたらつて、あなたは私から何か見つけて下さつたんですつてね。有難う、私どんなに嬉しいか分りませんわ。

あの髪今夜こはして終ひます。たつた二日しかもたなかつたので母は驚いてゐてよ。根がゆるんだので、つれて痛くつて仕方なかつたんで

すもの。……もう九日ねるとあなたの女郎花が見られるのね、樂みだわ。

九月十九日

長い〳〵間樂み〳〵にして待つてゐた昨日があんな恐ろしい日だらうとは夢にも思ひがけませんでした。本統に何から何まで恐ろしい日でございました。……

からいふ常子の手紙を開いて讀み初めたには讀み初めたが、清はこの先を讀む勇氣を失つて終つた。顏からは脂汗がわれ知らず滲み出た。目をねむつても、目をあいても、醜い己れの姿を追ひ拂ふ事は出來なかつた。

颱風が漸く鎭まりながら朝になりました。どんな恐ろしい一夜をあなたはお過しになりましたの。お宅までお歸り着きになれましたか？（勿論彼はそこへ泊つた。）汽車も電車も停つて終つたでせうに！

第一あなたの女郎花からが恐ろし過ぎました。「男山麓の野邊に來て見れば、千草の花盛んにして、……蟲の音までも心有顏なり」わきの道行が濟み、男山の秋景になるともう寂しい氣持がして參りました。××氏の鼓も心にしみてよく響きました。

橋がかりからあなたが「なら　其花な折り給ひそ、花の色は蒸せる粟の如し……」とお謠ひ出しになつた許りで私の胸はもう一杯になり、目には泪がたまりました。本統に昨日はどうかしてをりましたのね。

「後して」の、若男の面に黑風折、白大口に長絹はよく御似合ひでした。「岩松そばだつて、山聳え谷廻りて、諸木枝を連ねたり」からあの有名な「三千世界」まで夢中で伺つてゐました、手に汗を握つて。「おう曠野人稀なり、我古墳ならで又何物ぞ、骸を爭ふ猛獸は、禁ずるにあたはず。なつかしや聞けば昔の秋の風。」物凄過ぎる文句と節ではございませんか。私は身震ひを致しました。嫉妬から放生川に身をなげた都の女の憐れさはもうぢつとまともには見てゐられなくなりました。

「賴風心に思ふやう、さては我妻の女郎花になりけると、猶花色のなつかしく、草の袂も我袖も露觸れそめて立寄れば、此花恨みたる氣色にて、夫の寄れば靡き退き、又立ち退けばもとの如し。」

「草の袂」の節廻しは怨み聲とも、泣聲ともたとへやうがございませんでした。私は昨日藝術の美も純化も忘れてをりましたの。女の嫉妬と女の念力の恐ろしさしか考へられませんでしたの。賴風を怨む心と憐む心とよりございませんでしたの。こんな恐ろしいお能はどうぞ再びなさらないで下さいまし。いかにいゝものか知りませんが、姥捨だの卒都婆小町だのといふものもなさらないで下さいまし。若いあなたは唯若い感情を活して、そのまゝを唱へて下さい。もしあなたがそれをなさらなければ誰れがそれを致しませう。若い時代の若い天才はやはり若いえるてるの悲みを歌へばいゝのではございませんか。女郎花は何んだか私をぞつとさせました。もう二度と見たくなくなりました。こんな事云つて失禮でございますが欺りのない私の感情を申せばさうでございましたのよ。

そんな氣分でしたらお目にかゝらずに、直ぐ歸つて終へば本統はよかつたのでございます。でもそれが餘り惜いので、勇氣を出して樂屋の方を尋ねて貰ひました。お顏を見た時はやはりお逢ひしてよかつたといふ嬉しさが致しました。

、一寸お話しただけで、直ぐ歸ればまだしもよございました。それだのに御一緒に雨の降る外へ出ました。もう風は吹き初めてゐました。日も暮れかけてゐました。あなたは永い間の重荷を下ろしたやうに、その日の出來榮に御滿足のやうに、嵐にも不拘いつもより何んとなくはしやいで、どこか態とらしい所もお見えになりましたのね。

さうしてあんな家へお連れになるんですもの……

あなたがおひどいわ、あなたが御無理ですわ。たゞ驚きましたの、恐れましたの、恥ぢましたの、うろたへましたの、氣が轉倒しましたの、私どうしたのでございませう。まるでその時別の人間みたやうでございました……。處女の身體には心より嚴かなものがあるのでございます。何んといふ恐ろしい心でございませう。尊い處女の自然には誰れも手を觸れてならないのでございます。畏れねばなりません、心から畏れねばなりません。私は譯もなく唯恐しうございました。譯もなく戰き震へました。私の惡かつた事は今度お目にかゝつて皆んなお詫び致します。靜かに考へればあなたにお惡い所は一つもございません。皆んな私の罪でございます。あなたは今まで誰れにも易く出來ないやうな仕方で私を可愛がつてゐて下さいました。本統にお氣の毒でございます。私が惡かつたのでございます。すまない、どうぞご免下さい！これがどうして私の本心でございませう。あなたに上げるものを私何一つ惜んだり、隱したりする、そんなけちな事致しませう！　あの時私にも分らないもつと大きな力が私を支配したのでございます。それが處女の寶でもございませう。どうぞ哀れな私をお許し下さい。私にすら分らない敬虔な心持、どうしたら申上げられませう。何んとお詫致しませう。なんにももう分りません。大きな寂しさの中で泣いてゐます。常はこの通り泣いてをります。

晝が過ぎて又夜になりました。

なんといふ月！　なんといふ雲でせう！　澄み渡つた空に渦卷く雨後の黑雲が流れ、十六夜月が！　今上らうとしてゐます！　何千か何萬か、數知れぬ行ゆる雲の裾は黃金色に染められて輝き初めます。

生れて初めての恐ろしいあの夜はきのふでしたらうか、あなたの女郎花の面影も嵐にちぎられてめちやくちやになつて終ひました！

窓の前に高く聳え、互に枝を交はしてゐた大木は二本とも中程から無慚に折られ、丸木橋をかけたやうに倒れたまゝになつてゐます。二人の屍のやうでございます。さゝくれた裂目が白く鮮かに見えてゐます。昨夜傷けられたまゝの世界に、鏡のやうな月が上つて參りました。なんと云ふ皮肉でせう。私の顏もその光で蒼白く輝されてゐます。

昨夜の歸途はひどい雷雨になつてゐました。人力の幌を太鼓にして雨が來てそれを破れさうにたゝきました。しぶきは幌の隙間から霧になつて吹き込み、稻妻は劍のやうな光を見せて、幾度も私を脅かしました。これこそ神罰とぢつと我慢して、恐ろしいその咎にお許しの祈禱をしました。

神樣にも、あなたにも、心苦しい私なのに、なほその上内へ歸ればどんな小言が待つてゐるか知れないんですもの。母には、齒が痛んだから、能の歸り齒醫者へ廻り神經をぬかれ、今迄友達のところで休んでゐたと申しました、心の中ではかあさんご免なさいつて泣いてあやまりながら。それから兄さんはときゝました、なんといふ仕合せでせう、午後出た限りまだ歸らないと母が申しました。神樣はまだこんな私を護

つて下さるかと感謝しながらも、亦疑ひもしました。今に今に何倍かの罰があたるのではないか？　さう思つて戰きました。いつの間にかこんな大それた事を私がするやうになつたとどうして母が思ひませう。嵐の中を無事に歸つた事、それだけで母はもう喜んでゐました。

床に就くにはつきましたが、吹き廻る嵐が一刻々々家を搖つて船に乘つてゐるやうな不安を感じさせました。母は小僧達を指圖しながら二階へ上つたり、下へおりたりしてゐました。その騷々しい中でうと〳〵と眠りかけては一緒に、あなたとゐた夕方の恐怖に襲はれて夜道で額を掩ひました。愈々風は烈しくなつたと見えて硝子のかけて落ちる音、枝のちぎれて飛ぶ音、木の裂け倒れる音、雨戶のふるへる音、頻りなしに聞えます。床に起き直つてぢつとそれを聞いてゐるのは辛いものでした。心の中にも嵐は猛つて狂ひ廻つてゐました。

一際强い疾風が吹きつけて來たかと思ふとたん、恐ろしい響を立て家中がぐら〳〵と一搖れ搖れ、大きな物の落ちる音がしました。私はもう生きた心持はしませんでした。

「あゝ物干が落ちた。」母の聲でした。

「とう〳〵落ちたの。」私が答へますと、「落ちたものはもう仕方がない。」と云つて私を慰めて呉れました。

けれども私は電燈の消えて終つた暗闇の中に坐つて思はず手を合せて祈りました。さうする外仕方がございませんもの。嵐は私にとつて怒り、叱り、さいなみだとしか思はれませんでした。日暮れから、初夜、深更、私の遁つて來た心の道に今も嵐は吹き荒んでゐます。魂は木の葉のやうに、命の幹からちぎりはなされ飛んで終ひさうに思はれました。「罰だ！罰だ！」としきりなしに繰返す聲を心が聞きました。

家はたえず搖れてゐました、その中にあなたが現はれ、時々お聲を聞きました。いけない、いけない、あの方の事今思つたりしてはいけない。唯祈つて〳〵この家の倒れないやう護つて頂かう——これが私の悔い改めるのが務めであるやうに思へ、一つに心を集めて祈禱しようとしました。でもあなたは私を抱き、私を撫で、私をきすなさつて、お笑ひになります。なぜそれが罪で、愛されるのが恐ろしかつたのか、今になつてはもう分りません。私はあなたを信じてゐます。決して私を泣かせるやうな事、私の欲しないやうな事をなさる方でない事も知つてをります。それだのにあんなに恐ろしかつたのでございます。何といふ譯もなく物怖ぢしたのでございます。私はどうしてゐたのでせう、畏れてゐたのでございませうか。

晴れ渡つた今宵の空にあなたを戀しく思ひ出してをります。でもあなたはこゝにいらつしやいません。幽かな淋しさにはいつも神樣がいらつしやいます。その代りあなたのゐる處には神樣がいらつしやいません。なぜ神樣もあなたもいつまでも私をお捨てにならないのでせう。もしくはなぜ一緒にゐて下されないのでせう。

いえこれは間違つた考でした。私とあなたと神樣と三人でゐるのでしたね。私それがやつと分りました。だからこれ程私は守護されてゐるのでせう。嬉しい〳〵、私安心しませう。おや、今小さな地震がしました、こんな事書きながら胸がどきりとしました。

月が高く上つて終ひました。

あの嵐の中で身を震はせながら默禱した時、私はまだ聖い、處女だと云ふ自覺を失ひませんでした。私はそれを思つて、この日曜にはきつと教會へ行き感謝の禮拜をしようと神樣へ誓ふ事が出來たのでございます。家がこはれるか

と思つた時、初めはあなたに縋らうとしてみました、然しそれは無駄でした。さうして我知らず神樣の名を呼びました。神樣は御手を下さいました、それはあなたが私をもとのまゝの羊にして置いて下さつたからでございます。だから神樣は私共を救けて下さつたと申すのでございます。硝子はこはれ、瓦は飛ぶやうな暴風雨でも、私共の家は救かつたのだと申すのでございます。

兎も角恐ろしい日は過ぎました。今は一層あなたを好きになる許りでございます。

九月二十九日

（十月は二人にとつて多く記すべき程の出來事もなく、夢のやうな戀を戯れてゐる間に一月はあつけなく過ぎ去つて終つた。）

＋

又手紙を差上げます。ご免下さい用事はないんです。でもなぜ手紙を書くかお分りになりまして？　あなたがきつと私の事をお忘れになつたらうと思つて、それが恐ろしいからですわ。「忘れて下さいませんやうに」つて書きますの。

默つてゐるのは本統に怖いわ。忘れるといふ事より、忘れられるといふのは、どれほどの事でせう！　私あなたには何んでもないものでせうからお目にかゝりたいと申上げるのも氣が引けます。けれど覺えてゐて下さいとお願ひするのは許されるでせう。覺えてゐて頂くだけはそんなに重い荷物にもならないでせうから。

あなた近頃はなんとなく遠い方におなりになつたのね。私のことなんか忘れて、外の美しい方の事ばかり考へて樂しく日を送つていらつしやるのね。でも常はいつもあなたの赤い唇を思ひ出して、どんなに懷しいでせう。私一番あなたのお口元が好きなのですもの。お目も！　でもお笑ひになる目だけ時々怖い事があるの。あなたの今までお愛しになつた方、今可愛がつておあげになつてゐる方々はなんておつしやつて？　やつぱり常子のやうに口元が好きとおつしやるでせう？　こんな事書く時私どんなに辛いでせう。

あなたは先にも後にも唯わたし許り、わたしを一番可愛がつて下さつたのだ、さう信じられたなら、どんなに〳〵仕合せでせう？　あなたの胸の中にゐる澤山の美しい方々の中で、私が一番みにくくつて、にくらしいのだと思ふ事どんなに辛いでせう。私あなたがどうしても愛さずにゐられないほど立派な女に生れて來たかつた事！　私の一番の望はやつぱりあなたに愛して頂きたい、あなたに離れたくない、あなたと一生を……。だめですわ、あなたの心はもう洋行で一杯ね。そんなに來年の春が待遠しいの？

その場になつてみるとあたしやつぱり嫉妬の心つてもの持つてゐますのね。外の人を可愛がつていらつしやると思ふと泣きますの……でももし本統にさうだつたら……。

せるでお目にかゝつて、袷でお目にかゝつて、羽織をきてお目にかゝつたわね。今はもうこおとを着る時節よ。あの最後にお目にかゝつた時、お話した人ね、あめりかから歸つたといふ方、叔母さんに連れられてさきをとゝひ初めて内へ來ました。その事でも私どんなにお目にかゝりたいか分りません。

もしあなたに少しでも私に對する嫉妬があつたらどれほど賴もしいでせう！

近頃はお手紙が頂けないで私許り書いてゐますが、それがためか長い間御使りのないやう

な氣はしません。……。

十月三十日

私どんなに横濱に住みたいか分りません。海岸通り、山下町、さうしてあなたのお家、あの海、山手の丘。その上横濱にさへゐれば偶然街の中でお目にかゝれる事がないとも限りませんもの。さうして色々な事がどんなに都合よくなるでせう。

ではお目にかゝれますのね、一度でもお目にかゝれば、私の氣も濟み、心持よく左樣なら申上げられるかも知れません。でもはつきりお別れして終ふのは今更どんなに悲しいでせう。今まではいつかしら又お目にかゝれるとそんなあてにならない事をあてにする樂みがありました。もしさうなればもう望は絶えて終ひます、でもいゝわ、いゝわ、私あなたの事忘れるやうに無理にしませう。あなたもその方が却つてすつきりした心持におなりになつていゝでせう。さうして私好きでもないあのあめりか歸りの人を無理に好きになつてみませう。その人は喜ぶでせう……云々。

十一月三日

あれだけの手紙に對しやつとお返事が頂けました。それだけでもう私の機嫌は少し直りかけました。

けれどもお言葉をそのまゝ信じていゝのかどうか分りかねてゐます。やはりあなたはもう私なんかお見限りなさつたのだ、怒つていらつしやるのだと思はれてなりません。そんなひがみ自分でも悲しいのですけれど仕方がございません。餘り疑深いつてお怒りになるかも知れませんが、こんなに私をさせてお終ひになつたのはどなたのせゐ？　どなたが惡いの？

私それに怒つてはをりません、唯ちよつとやきもちをやいただけです。でも叔母さんの私に對する仕打は餘り酷うございます。あなたのお名こそ云ひませんが……なぜそれを云つて吳れないのでせう……私が變な手紙をある男へ書いてゐるからと母に云ひつけて終つたらしいのですもの。さうして例の話をどん〳〵進めてゐるらしいのですもの！　母は年内にお嫁に行かなくつてはいけないなどと昨日も申しました。女の身には他の女の方の心もよく推察の出來るものですわ。自分一人の幸福が他の一人の方の不幸になるのはどんなに辛い事でせうとそれ程私は叔母を思つてゐます。それだのに叔母には私の心持なんかまるで分りませんでせう。

もう決して私人を戀さうとは思ひません。こんなに苦しいものならもう〳〵澤山ですわ。なぜこんなに戀しいのでせう。あなたを戀するには私あんまり馬鹿過ぎたの……。

あなたを忘れようと之からは努めます。さうすれば萬事都合がいゝでせう？　それは出來ない事にも思はれますけれども、その方が御迷惑もなし、私にも身のためかも知れません。あなたも愛してゐるとおつしやる、私がさうなのも御承知でせう。ですから今このまゝお別れすれば一番幸ひなのでせう。

私、私、常はなんだつてあなたを戀しちやつたのでせう！　今流れる涙は自分を憐む涙です。さうしてあなたにもすまない事をしたといふお詫の涙です。……云々。

十一月五日　　うらみ顏の　常子

……どうしてもお別れしなくてはならないのでせうか？

私にはあなたのお心はよく分つてをるつもりです。でもそんなにいつも變らないお心つてものがあるものでせうか！　今の私の立場をどうお考へになりますの？　それを唯一言聞かせて頂き度いのよ。あなたは私の舵です、羅針盤です。常子はあなたのお心通りに動かうとしてをります。こんなにまで從順な私をなぜあなたは默つてみていらつしやるの。唯一言でいいのでございます、何んとかおつしやつて下さいまし。……云々

十一月六日

……昨夜久しぶり夢でお目にかゝりました。でもあなたはお元氣がなく、お言葉もかけて下さらないのでした。さうしてどういふ譯かお目が眞赤なのです。不思議に思ひました。夢には叔父も叔母も出て來ました。口惜しく思ひました。久しぶりであなたに逢ふのに二人ぎりでゐられない事！

例の話は兄も前からの友達だけに賛成らしいのです。皆なの心持は、私は聞かないでもよく分つてゐます。又分らなくつてもかまひません。唯あなたのお考だけはあなたのお口から伺ひたいのです。どうぞ逢はせて下さい、決して私は泣いたり、わめいたり、あなたの御迷惑になるやうな事は致しません。たとへ身が八裂にされるやうな場合でも、私はあなたの名譽を穢したり、あなたに怨まれたりするやうな事はしない積りよ。それはあなたもお信じ下さるでせう！　ではきつと逢はせて下さい。お話しなければならない事がたんと積つて終ひました。……云々

十一月八日

世の中がつくづく厭になりました。死にたいと思ひます。

あなたをお知り申してから、あなたの事を思はない週も日もございません。思ひあまつて作るともなく書きためた歌と詩を今夜纏めてお目にかけます。私は「思ひ」つて字をこの半年の間にどの位使つたでせう。先生や兄の手前戀なんて字は使へないので皆んな「思ひ」で間に合せて置きましたの。「君戀し」だの「逢ふべき君」だのつて書いたらそれこそ大變々々。「何を思ひ」餘つてこんな吐息をついてゐるのか、誰れもまだ氣がつかないやうです。若い娘がしきりに「思ひ」なやんでゐるのですから少しは分りさうなものね。口から出まかせのもの許りで少しの飾もなし磨きもかゝつてをりません。お恥かしいものですが、そのうちから憐れな私といふものお探し下さい。かうしてお目にかける時があると知つてゐたなら、あれほどの心の經驗を皆な歌にして置けばよかつたと今になつて殘念です。然しこれだけでもう生涯に二度と再び出來るものと思ひませんから、何んとなくいとしまれ、たゞ捨てゝ終ふ事が惜いのでございます。

これは私の若い片身です。樂しい戀のたつた一つの燃からでございます。私はあなたが夢にも知らないほど苦しんだり、戀しがつたり、惱んだりしました。そのあからさまな姿をたとへ垣根越しとは云へあなたに見られるのは口惜しい心持がします、けれどもそんな痩我慢をする必要ももうありません。私は何よりもすなほで、單純であるべき德をあなたから教へて頂きましたの。來月は例の歌の雜誌でしきりにこの「物思ひ」をしますわ、人に知れない程度で！　閨秀五人集つて云ふのですつて。五人の中で、私が一番若く、名もない作者です。私の歌ぢみで女らしくないの！　歌なんか好きぢやありませんが、出來たからとつて置いたのが段々たまつた

のよ。かう云ふとえらさうですけれどもね。愛される喜びにもまさる、愛する喜びといふもの歌を作りながら自覺しました。さうして本統の心でいつも深く愛してさへゐれば運命は微笑んでゐる、所が少しでも愛が薄らげばすぐもう私の運命は苦い顔をして喜んではくれない。これはつくゞ私實驗しましたわ。これほどの眞實はございませんもの。

でも今はもうそれもみんなおしまひ！

どんなに熱い、どんなに樂しい、どんなに美しい思ひ出が人に知れずこの一巻にこもつてゐるのでせう！　考へてごらんなさい、うつとりなるほどです！　もしも私が少しでもあなたから愛されたと知つたら、世間の娘達はどれほど私を羨み妬むでせうね。もし位置を代へて私がその娘の中の一人だつたら、それこそどんなに火のやうになつてあなたの人を嫉妬するでせう。…あなたは私を愛して下さつた！勿體ないと思つてをります。

私、今こんな呑氣な事落着いて書いてなんかゐられる場合ではないの、それを態と書いてをりましたのよ。もう我慢がし切れなくなりましたからお尋ねします。あなたはどう遊ばしたの、私を見殺しになさるお積り、御返事も下さらない、逢つても下さらない！…云々。

十一月九日

…常は絶望の淵にをります、神樣どうぞお手を下さい。私にはもうあの方の姿が見えなくなりました。神樣々々あの方は私を見捨てて終ひました！　どうぞお手を下さい…

十二日

…私の靈はあなたに上げて終ひましたから、もう誰れにやるものも殘つてをりません。私は喪神した人のやうに驚く許り冷淡に結婚といふものの前に立つてをります、いいえ、立たされてをります。

今朝ほど私は冷かにきつぱり返事をして終ひました。私は自分でも不思議なほど冷え切つてをります。

然し私の口を漏れた冷かな一言のなんであるかを少し考へませば、飛んでもない事！　取返しのつかない事！　が刻々目前に逼つて來る譯でございます…云々。

十三日

十一

今まで私は泣いてをりました。あなたの前では一度も泣いた事のない私ですのに…きのふですらあゝして泣かずに、ほゝゑんでお別れして參りましたのに！

やつとの思でお目にかゝれどんなに嬉しかつたでせう。まして偶然とは云ひながら夜になつて又往來でお目にかゝれたとは。これほどの幸は全く神樣のお惠みと感謝してをります、よく直ぐ私がお分りでしたのね、私は遠くからあなたを見付けてをりましたが。…本統に銀座まで買物に出ていゝ事致しました。あなたのお連の方が女でなくつてどんなによかつたでせう。でも一寸御辭儀一つした丈で他所の人同志のやうに通り過ぎたのですもの、少し悲しうございました！　もう私はなんとなく變つた、そんな事をしみゞ考へさせられ、急に駈け出して母に縋りつき、固くその手を握り、思はず捻りましたら、母はびつくりして、なにをするの此子は、と往來の人に恥かしいやうなとんきよな聲を出しました。私をかしくなりましたわ。…

こゝまで讀むと淸は事務室の廻轉椅子に腰をかけたまゝ身體をすとおぶの方へねぢまげた。そこには赤々と石炭の火が晩秋らしく燃えてゐた。

四五枚の白い紙に細々とペンで書かれた常子の手紙を握つた右手　彼はその右手が自分のものである事を忘れて終つたやうにぶらり肘掛けの下に垂れて目をつむつた。目をつむつて光のない頭の中にその人の面影を見ようとした。まづ常子の胸がそこへ現はれて來た。それから脣、眼、鼻や頬の曲線、軟い髪の毛、首筋、耳、耳朶、その耳朶の觸覺、それから齒、それから舌！

彼は齒と齒との戰きながら觸れ合ふかすかな音をさへ聞くやうな胸騷ぎを感じた。

一昨日のあゝした常子との別れ方がいかにも物足らなく今は感じられた。それはその日だけの別れではなかつた。一寸したはずみから心の奥に手をかけた彼女との長い別れになるのだつた。異性の間で享け得る歡びの大方を半年の間も共にした常子との最後の別れだつた。それだのに又明日でも逢ふ時のやうな心でしか別れられなかつた。永い別れになるかも知れないと、互に口では云つてみても、やはり唯左様ならと云ひ、どうぞ御大切にと云ふ外二人に言葉はなかつた。それが物足りなかつた。その耳朶でも噛み切つて持つて來たかつたそ、んな心持がした。

その朝淸が店の暖簾を潜つて這入つて行くと、樣々な茶壺の古めかしく並べられた噎返るやうな香の中で、茶を包んだり、茶を量つたりしてゐた小僧達は、聲を揃へて、いらつしやいと云つた、物買ふ客と思つたのだ。彼は土間の間を奥へ案内されて通つた。直ぐ店に續く疊敷の一間があつて、常子の兄さんらしい人がそこで取引先の商人と對話してゐた。屋號の染付けられた大きな茶呑茶碗が坐つた二人の間に置かれたのも目立つてゐた。兄さんかしら常子の？　多分さうだらう、それにしては案外美しくない人だ、さう思ひながら淸は御店の二倍もありさうに廣い物置の奥へ導かれて行つた。天井まで積み重ねられた茶箱の間の薄暗がりは異樣な感を彼に與へた。

小僧はそこから奥へ向つて、常ちやん、常ちやんと呼んだ。主人の娘を、常ちやんと呼ぶのも彼には一種異樣に響いた。

常子は二階から駈け下りて來た。普段着のまんま、お化粧もしないで、束髪もくづれかゝつてゐた。彼には常子がいつもより一層丈が高く、肉付のいゝ娘に見えた。おやつと云つて立停つた彼女は赤くなり、急いで襟をかき合せた：：其場合の常子、親げな本統に嬉さうに感謝で輝いた彼女を思つて、彼は今更ら寂しくなつた。

あゝ時が來た。時はとう〳〵常子をもぎとつて行くのだ。自分から彼女をもぎとつて行くものは時だ。然しその「時」の進んで來るのを默つて自由にほつて置いたのは誰れだ。彼自身ではなかつたのか！

常子がいつもをとゝひの朝みたやうにお作りをせず、小さな痩我慢を持たず、壓するやうな戀文を書かず、さうしてもう少しぬけてゐて、浮氣らしく見えなかつたなら！　さうして自分の心を絶間なく他所へ散らさせる幾人かの女性がゐて呉れなかつたなら！　きつと彼女と自分は結婚したらう。：：然しそれはもう後の祭になつた。常子はもう嫁いで行く。永遠に別れて行く。常子は：：自分はどうなる　。

一人の見識らぬ男が常子と結婚をする。誰れでもそれはいゝ。僭越ながら常子を上げよう、その上ちやんと處女といふ熨斗をつけて上げよう。その代りどうぞ鄭重に、大切にして　彼女

を幸福にして貰はう。
清はそんな事をかれこれ思ひつゞけてゐたが、やがて思出したやうに手紙を持ち直して、その先を讀み出した。

態々御祝儀にお出下さつた上に、可愛いお祝物頂き有難うございました。私はどんなに驚いたり、喜んだり致しましたらう。もう嫁いで行かうといふ私にあゝしたあなたのお心盡しはつく〴〵身に沁みました。あの鎖、あの金の鈴、うれしくつて鳴らし通しに鳴らしてをります。夜銀座通りでお目にかゝつた時も、こおとの脇あきから右手を入れて、あの美しい鈴を玩具にしながら、その音を聞いて歩いてをりましたのよ。

もう一度あなたのきすを！　せめてもう一度切りでも！　さう願つてをりましたが、その願が叶へば、又更らに〳〵その上を望みます。私はなんといふあと引上戸でせう。こんなでは逢つても〳〵、これでいゝといふ時がいつ參りませう。私苦しく切ないけれども、諦めねばならぬ時は、あきらめます。

どれ程あなたに御禮申上げたらいゝのですか。あなたのやうな方に愛して頂けたのですから、たとひ私の身は泥水になつても厭ひません積りでしたのに、何にかといたはつて下さつた上に、清いまゝ私を他の手に渡して下さるといふのは全くあなたが本統に私を愛して下さつたからでございます。それを思ふと泣いて感謝してをります。あなたの愛の深さはやつと今になつて分りました。あなたが本統に私を愛してゐて下さつたといふ一番いゝ證據がこれでございます。

でも私はやつぱりいつまでもあなたのものです、いつまでもあなたのものと呼んで下さいな。外の人のものにはなれません。私の胸はあんまり小さくつてあなた以外の人を入れる餘地がもうございません。私きつと〳〵またお目にかゝりますことよ。あなたどうぞ常子に逢つてやつて下さい。水澤といふ名は松本と變りませうが、常子の名にはいつまでも常子です、どうぞその變らない名の常子に逢つてやつて下さい。いつまでも〳〵常子を忘れないで、この美しくも、賢くもない小さな常子がこんなにあなたを戀ひしたつたことをいつまでも忘れないで下さい。この手紙の上にばら〳〵落ちるこの涙を御覽遊ばせ！　いつまでも〳〵愛して變らずにゐて下さいね。

昨夜はこゝまで書きましたが、あまり泣いたので書けなくなつてそのまゝ臥りました。床の中で思ふだけ泣き續けました。幾ら價値のない涙でもこんなに泣けばあなたも少しは憐れとお思ひ下さいませうね。

その人が好きだといふのでもなく、さうかと云つて綺麗でもなく、お金や才能があると云ふでもなく、賢いのでもなんでもないのに、かりそめにも行かうなどとなぜ常は申したものでせう。私の心はやつぱりぐら〳〵なんですわね。母も今夜「一人で仕事してゐたら、淋しくなつてたまらなかつた。お前が一寸ゐないでもこんなだから、これからどうして暮さうと思つたら、心細くて仕方がなかつた。」つて申しますの。「私ももう行くのいやになつたわ。」つて一緒に泣きました。あんなに喜んでゐた母ですらさうですもの。お嫁に行つて終ふつて、思ふより呑氣なものでもないやうですわ。でもこれが私の運命でしたらう。私は初めて今度の話を聞いた時、今度は！　といふ豫感がしました。今はもうどうにもかうにも動けない處までやつて來て終つてゐます。

唯さうなるとなほ戀しいあなた！　あゝあな

たをどうしたらいゝのでせう。

あなたを殘して、かうして私一人が先に行く以上、あなたから忘れられるのは覺悟しなければなりません。生れて來た甲斐があつたと思ふほど感謝されたあなたとの戀も見捨てて、あなたより先に片づくなんて私は天魔にでも見入られたのでしたらう、せめてあなたに一足でもおくれてから結婚すればよかつたと思つても、今はもう後の祭です。

どうにでもなれと諦めませう。

考へ出せば隨分色々な事がありましたわね。晴れた日、曇つた日、雨の日、夏から秋、秋から冬。このなま〱しい面影を抱いたまゝからして他へ嫁ぐのは、その人にも本統に濟まない事でせうね。……致方もございません。その人にだつて戀人があつたと云ふのですから、お互同志なんでせうけれど……。

昨日しめてをりましたあの紅い帶を持つて行くと申しましたら、そんな派手なものしめられますかつて母に叱られました。なぜつてきゝ返しましたら、娘ではあるまいしと申しますの。人妻は紅い帶をしめてはならないのね？

せめてはその紅い帶のしめられる間、にくい常子でせうけれどもどうぞ堪忍して、少し可愛がつてやつて下さることお願ひ出來ませんの？もう出來ませんの？

十一月廿三日、新嘗祭。

今日で十一月もお終ひです。左樣なら十一月さん！ 何を見ても何を聞いても私は今左樣ならと云ひたいやうな氣分でをります。

前の日曜の蟬丸の批評が出てゐる新聞を集め、せめてはそれを見て喜んでをります。M生といふ方の「あらゆる點に優れた趣味のほの見え、立派な一家見を具へた、今なくてはならない人」といふ批評は一番私を喜ばせました。なくてはならない人！ これは本統に適當な言葉ですわ。九月二十八日の女郎花を思ひ出し、今はひとり寂しい思に耽けつてをりますところよ。

明日は日取もしつかりきまりませう、あの人が來る相ですから。私逢はないでゐようかと思つてゐます。好きでもきらひでもない人なんですけれども。……私もうどうなつてもかまひませんわ。

あゝ〱もう一度過ぎ去つたあの熱がほしい、今だつてお名前を見てさへ顫へる心です。

でもあのころは本統に烈しい心持で暮してゐました。私の一生にたつた一人の方、それを外の方へ殘して嫁ぐ私の心、あなたはきつと外の方を私よりもつとお可愛がりになりませう、さう思ふと今になつてあなたを放すのが口惜しく、妬ましうございます。私の心のどこにこんな嫉妬が隱れてゐたか、今が今まで知りませんでした。これは生れた時からもう持つてゐたのでございませうか？ 恐ろしうございます！

どうぞ外の方愛さないつてお誓ひ下さいましな？ あゝ私もう行くのが厭で〱なりません。これでは本統に困ります。でも今更らどうなりませう！ 前を向いても後を向いても、私の思ふやうになる事は一つもなくなつて終ひました。……云々。

十一月三十日

あの人は今日まだ參りません。どうなりますことやら。そんな事に一番平氣でゐるのが當の私でございます。なんといふ矛盾でございませう。

參つてもだき私内へ歸ります。きつと〱歸ります。さうしたらもう箱入娘でもなくなるで

せう。お目にかゝらせて下さいます？　こんな事人に知れたら大變々々。私忌はしい名を受けてもいゝ、あなたが唯お可哀想よ。もう一度ゆつくりお目にかゝりお話がしたい‥‥云々。

十二月一日

今夜は少し暇がありましたので一人靜かにあなたの事を考へてゐましたら、又手紙がさしあげたくなりました。

今晩は！　から云つてからあなたとお話をするのね。

先日あの人が來て、日取は二十六日ときまりました！　そんな忙しい事駄目ですと私が云張りましたが、なんの役にも立ちませんでした、こんな事は二年越しになるといけないとか、年内が忙し序にいゝとか、勝手な理窟のつくものですわね。さうして直ぐ旅行したいといふのだ相です。旅行なさるならお一人の方がいゝでせう。私なんかお連れになつたつて決して面白くはございませんよ、つて云つてやりたうございますけれど。

今日も薄暗くなつてから參りました。兄と何か面白相に話し合つてゐる容子です。

私は一人でゐるのが一番好きです。これ御承知でせう。一人でかうしてゐるのがどんなに幸ひでせう！　他の人と一緒にゐるのは辛い事です、ゐなくてならないのはまだその上辛い事です。

私結婚したら、出來るだけの事を致します積りですが、もしかすると私の性格は結婚生活を不幸にしやしないかとも氣づかはれますの。私は妙な女ですのね、自分で自分が時々怖くなるのですもの。行末の事など考へる時不思議な不安に襲はれます。いつそ白痴にでも生れついたらどんなに氣が樂でしたか知れません。

私は海の夫人のやうです。あのこはい水夫に凝視られながらずる／＼海の底へ引込まれて行きます。私もう遁れやうがないと思ひました。

あの人は今夜泊つて行く容子です。顏合せるのがいやで仕方がございません。

ですからもう少しこの机の前を立たずにゐませう。

さうして最後のお願ひを書きます。丁度いゝ折だと思ひますから。

第一には御身體を御大事に遊ばして下さいといふ事！　お勤めや、お稽古や、お能や餘りお忙しいので、いつも御無理なさいますからどうぞ十分御注意なさつて、私よりも長く／＼長生して頂きたい、たんと／＼お願ひはございますけれども、一番心配なのはやつぱりこのことになつて終ひます。あなたはちつとも御身體を大切になさらない方ですもの。世間のためにも私のためにも勿體なくて仕方がございませんわ。

それからもう外のお方をお可愛がり下さいませんやうに！

第三は來年はきつと洋行なさつてえらい／＼方におなり下さいますやうに！

第四のお願ひは少し申上げにくいのですが、‥‥どうかこれぎりもう叔母さんの處のお稽古だけはおやめ下さい。何んといふ深い意味もないのでございますが、私その事を考へる度どうしても厭な心持になつて仕方がないのでございますもの。こんな妬み深い事を申上げてはおさげすみになるでせうが、一生の常のお願ですからお許し下さいましね。

まだ嫁いでからの事、御能の事、今後の書信のこと、洋行からお歸りになつてからの事、澤山ありますが、慾張り過ぎますから、これだけにして置きませう。(十二月六日夜認む)

今晩は！　また昨夜の續きを書き足します。

月が缺け、さうして又もと通りになる宵。今夜は月蝕ね、月蝕といふもの、あやしい神祕なものではなくつて。

私今あの人から指輪を受取りました。もうこれで身動きのならないといふ證據でございませう。昨晩は泊らないで今日また午後參りました。今日は何度も顏を合せましたが、まだ言葉は交して見ません。

色々一人で氣をもんでゐるやうです。私の歌を見たいつて兄に賴んだ相です。私いやだと答へましたの。でも見るなら見てもさしつかへありません、呑氣な人らしいから平氣かも知れませんわ。今あの人の胸には私といふものがどんなに淸く愛らしく氣高く映つてゐるかと思ふと吹き出したくなります。これが人間の滑稽でなくつてどうしませう。尤も私さう思はれるやうな顏を一寸してゐますの、そんな事誰れにだつて知らず識らず出來るなんでもない事なのですもの！

然しかうして思出してみますと、あなたのお顏より、あの人の顏の方が今日逢つただけにやつぱり判然見えますの。長い間にはお互に段々顏も忘れませうね。仕方のない事ですけれども本統に厭な事ね。私の頰のこの黑子おぼえてゐて下さること？　こつちの頰の片笑靨も！　それから右の目の下の泣黑子もきつといつまでも覺えてゐて下さいね。

十日頃お暇が出來ませうか、私一度叔父さんの處へ暇乞ひに行かなければなりませんから、そちらでお目にかゝれます？　では都合のいゝ日と時をお知らせ下さい。

もう一度お目にかゝれる事嬉しい！　どうぞどうぞたんと〳〵可愛がつて下さい、もう〳〵お終ひね。どうしても仕方がなくなつて終つたのね。御免遊して下さい、私本統に濟まなくつてなりません。

十二月七日

つい先程敎會のくりすますから戻りました。これが最後のお參りでございます。赤や白や靑の蠟燭のちか〳〵光る焔を眺め、一人しみ〳〵泣いて參りました。

兎も角お目にかゝればお目にかゝる度、段々お痛はしくなつて、私の胸はいつも淚で一杯になります。本統に〳〵濟まなかつた……私とう〳〵こんな事をして終つたの、どうぞどうぞご免遊ばせ！

ああ、あともう二日。明日、あさつて！

あなたのために窓をあけ
あなたのために窓をしめ、

せめて二日ほどおそば近くで可愛がつて頂きたかつたことよ！

十二月二十四日、降誕祭の夜。

（以上八年四月、野方村にて）

十二

中根淸は領事館で降誕祭の午餐によばれた歸りがけ、玄關脇の來信函から、一通の手紙を受取つた。それは前夜くりすますの晩、夜更けて常子が最後の別を告げるために淚ながら書いて寄越したものだ。それを持つて海岸通りへ出た。汽船帆船樣々な船を浮べた港の海は風に搖られて、滿潮は石垣へ白波を打付けてゐた。

彼はいつからとなく二十六日の夕暮を不思議にも期待してゐたと此時初めて自分自身の心に氣付いた。二十六日といふ日、その日午後三時

に彼女は××で嚴めしく松本定雄と結婚式を擧げる。新夫人松本常子は××の披露の宴會に出て、やがて湘南の新婚旅行へ出立すると云ふのだ。

何十遍も何百遍も常子はその戀を淸に誓つた。淸一人を命がけで愛すると云つた。さうしながら彼女は嫁いで行く。然しそれだからといつて淸は常子の誓を噓の噓とは夢さら思はなかつた。思はない所ではなく幾度も彼女の口說にはたぢ〳〵となつた程だ。眞劍な手紙の文句にも彼の心は壓しつけられて苦しんだ、それ程彼は彼女の眞實を身に感じてゐた。

それでも然し一點の疑惑は取去られなかつた。なぜなら世の中に愛するとか、思ふとかいふ位、信じにくい言葉は彼になかつたからだ。どうして人の心がそんなに容易に極められよう。戀は信ずるより疑ふのが眞實らしく思へた。彼女は自分ほど浮氣でない、それは十分信じてゐても、人生の一大事といふ結婚にすら束縛されたがらないほど常子の心は自由な心である、それをどうして淸の不實な戀を重しに押へ付けて置かれよう。彼の戀、その複數の戀は僞る意志がなくつてもいつも多くの人の眞實を賣つて終つた。この狹い自分だけの經驗から割り出して、どうも淸には常子の言葉、常子の心を悉く信じ安心してゐる譯に行かなかつた。いくら常子が誓つてくれても疑が少くなるだけで、淺くはならなかつた。又いかほど逢つても逢つても逢はない間の彼女の生活が別にあるやうに思はれてならなかつた。「なぜあなたが自分のやうなものをこんなに愛して下さるか、それが信じられません。」この常子の苦しみはたえず淸にも付纏つてゐた。

かういふ淸に、かういふ風に常子をも思つてゐる淸の心に、二十六日といふ日がどう映るか、それを淸は心待ちにしてゐたのだと氣付いたのだ。二十六日三時が鳴つて、日がくれ、夜になつて行つたら、その時こそ常子に對する彼の本統の戀しさが分りさうに思へたのだ。消え入るやうな悲み、身の置場もないやうな悶えに淸は襲はれるかも知れない。さうしたら自分は思ふ存分にその呵責を受けよう。常子は涙を流しながら嫁いで行くのだ。自分も苛まれるだけ魂を苛まれ、泣けるだけ泣かう。さうしたら本統に戀に活きたやうな心持にもなれるだらうし、不實な自分の罪もそれで幾分淨められ、常子に對する詫にも少しはなるだらうと勝手な空頼みを賴みにしてゐたのだ。

最近二人はしげ〳〵逢曳した。十二月十日、常子は下田の叔父叔母の處へ暇乞に來ると云つて櫻木町の停車場で淸と落合ひ、伊勢山から諏訪山の方まで散步しながら話した。日が暮れかゝつてから急いで彼女は別れて行つた。十五日三時には新橋驛でらんでぶうをして、その近所の奧まつた一室で會つてゐる間に日が暮れて終つた。彼女が束髮を結ひ直し、顏を作つて戶外に出たのは九時過ぎだつた。風は寒かつたが、銀座通りは賑はつてゐた。きつと知つた人に遇ふかも知れないよと、二人は恐れながら、意地張り合つて負けたくない心持と、運試しの冒險的な快味とに操つられつゝ人通りの多い中を步いた。臙脂色の金紗に、るい十六世模樣の羽織、同じ色の長い襟卷をした彼女のすつきり丈の高い姿は步道の人を悉く振向かせるほど派手で美しかつた。その晩常子は自分ながらかうした娘姿を惜むやうに見えた。常子は有樂町から品川まで、淸は櫻木町まで電車に乘つて歸つた。十八日は西洋小間物を買ふのだと僞つて彼女は又横濱へやつて來た。ぐらんどほてるの海に向つた食堂で晩餐を共にした淸は、自動車で品川まで彼女を送り届けた。途中は車内の明りをも消した。最後に又新橋の同じ家で

逢つたのは二十二日の事であつた。

「やつとあなたがいゝ人になつて下さつたかと思ふ時は、もうお別れする時だつたのね。」

常子は彼の手をいぢりながら云つた。

「こんなにして下さつて嬉しいと、今までの半年の間が恨めしくつて、急に悲しくなりますわ。どんなにお手紙を欲しがつたり、逢ひたがつたり、泣いたり、心配したり、じれたりしたでせうに。夕暮れになると空をみて、なぜお手紙を下さらないのかと消えるやうな思をしたあれを考へると、自分ながら可愛くなつて終ひます。なんだつてこんなに素直な、しをらしい心になり下つたかと口惜しくもなりました。でもそんな事も皆んな思出になつて終ひませう。もうこれからはさうしたいと思つたつて出來なくなりますわ。」

さう云つて常子に泣かれた時、清は返す言葉がなかつた。

「私自分でこんな運命を選びながら、……それはあなた許りの罪でないとお慰め下さつてもね……矢張り私の罪なのに、こんな蟲のいゝ事は云はれないんですけど、この後何年たつてもあなたのお心は變らないと信じさせて下さいましね。いゝでせう？　よござんすかきつとよ？　たとへあなたがどなたかと結婚なさつても、私のやうにお心だけは變らないでゐると信じてをりますわ。どうぞあなたもどこまでも私をお信じ下さいね。」

―どうなりますか、私共の運命は何もう分らなくなつて終ひましたけれど、何事も神樣にお任せしませう。今迄私達を守つて下さつた神樣ですから、きつとこれからも、いゝやうにして下さるでせう。もしいゝその神樣のお思召ならば、私あなたと逢ひます、どんなに恐ろしい道を通つても逢ひに參ります。死ねとおつしやる時、私死にませう、さう思へば何んにも怖くありません。あなたのお云付の事は神樣のお言葉だと思つて、きつと守ります。死んでも守りますからね。」

二人が心臟を泪ぐませて、その家を出た時、夜の氣は氣味惡く冷えて、街燈さへいつもとは違つて地の星の輝くやうに目に沁みた。常子は清の腕に縋つて歩いた、清は常子を引ずるやうにして歩いた、でも二人の心にはまだ隙のある物足りなさが喰ひ込んでゐた。もう銀座へも行かなかつた。暗い往來はいつとなく田町まで來て終つてゐた。

停車場の明るみへ入るのを躊躇して、物蔭を探し、二人は最後の接吻をもう一度取交はさうと立停つた。無遠慮な烈しい電車の音が頭の上を通り過ぎた。常子の手は氷のやうに冷えてゐた。清は嗅ぎなれた常子の移香をもうこれ限りと思つて嗅いだ。これ限りと思つてその唇をも吸つた。彼女は却つてもう泣かなかつた。清は思はず熱い涙を流した。最後の別、この考は二人で隱れた物蔭の暗闇のやうに暗く重く、清の胸に初めてひし〳〵と切なく逼つて來た。

電燈に照された下で電車に搖られた時、二人は並んだまゝもう默つてゐた。常子は「蒼ざめて顫へて」ゐた。

清はその時の事も思ひ出した。

十一月末頃から清は何となく疲れるやうに思つたが、此頃ではそれを自分でも目立つて感じ出した。常子も「お目にかゝる度面痩せ」なさるとよく云つた。かうして度々常子に逢つて、過度の亢奮を强ひられて別れて來ると、いつも倦怠と烈しい頭痛とを感じた。歸つて床に入つても仲々寢就かれないで、朝も早くから眼がさめて終つた。夜中夢ともつかない夢に熟睡を妨げられ通した。

この二十六日の朝も、清は五時頃もう目をさましました。目がさめても、眠が淺かつたやうに覺

めた心持もはつきりしなかつた。でも、今日は常子の結婚日だ、と直ぐ彼は心の中で叫んだ。何となく天氣を氣にしながら床を出て二階の縁の雨戸を繰り初めた。

東にあたる港の空には薄葡萄色の綿のやうな層雲が重なり合つて、處々に曙の黄色を透してみせてはゐたが、雲の切れた上半の空には日の光は見られなかつた、暗く曇つてゐた。今にも雨らし相にも、晴れ相にも思へた。瓦屋根と物干臺の上を横ぎる無數の電線の道、朝の烟、港の方の汽笛、彼はそれ等の物の上に常子の顏を、重ねて考へてみた。然し今日嫁ぐといふ常子がどうしてもはつきり考へられなかつた。

定刻に出勤したが、もう年内の仕事は大方片付いてゐた。下書記官と二三泊で銃獵に行く相談などして空しく時を費した。清はこのすぽおとが必ず彼の健康と寂寥とを恢復させて呉れるだらうとそれを思つてみた。

一時が打つと待ちかねて領事館を出た。一人散歩でもして、徐かに常子の事を思出したい、それにはどこに行つてみようと迷つてゐるうちに、いつもの海岸通りに出て來て終つてゐた。かつ七月の一日夏子常子智惠子等と小船に乗つて横ぎつた沖には、冬の潮が流れて、青黒い三角波が立つてゐる。帆船は幾つとなくつながつて今その邊を通つてゐる。一抹の石炭の煙が淀んで動かずにゐるのも何んとなく非常に悲しく見える。彼は今更らしくその日を記憶に喚び起した。常子と過した半年の思出はどれもこれも皆んなもう返らぬ記憶にならうとしてゐる。

清は近頃恐ろしく決斷力が衰へてゐた。どこへ行かうと決斷するのが億劫な許りに、遂づる／＼に家の門に歸つて來た。家に歸つてみても少しも面白くはなかつた。和服に着替へて終ふと珍らしくもきちんと机の前に坐つてみた。やたらと煙草をふかしながら、障子の中の硝子越しに前の屋根や鈍い色の空をぼんやり見てゐた。とう／＼降りもせず天氣豫報通り「曇り」のまゝ日が暮れて行かうとしてゐた。

二十六日はもう暮れて行くぞ、常子はもう××での式を濟せた頃だ、どんな花嫁が出來たものか、今時分はどんな心持でゐるものか、さう様々な事を考へてみようとした。然しそんな空想は容易に纏らなかつた。悲劇の主人公にふさはしい氣分、それを清にその時刻、その事件がおのづからきつと伴つて來て呉れるだらうと期待してゐたが、いつまでたつても特別な感情は湧いて來なかつた。

常子は結婚するのだ、今人妻になるのだ、と彼は自分に向つてさう囁いてみたが、この言葉にはもう此間中から餘り馴れ過ぎて終つてゐた。それにいくら花嫁姿や祝言の場面を想像しようとしても、その日その時が、他の日他の時と特に異る明瞭な幻を魔術的に清の目に示し得る筈はなかつた。却つてどんな恐ろしい悲劇的な空想よりも嘗て常子が無意味に云つた言葉や、單純な動作の方が、餘程強く今も彼の感情に響いた。

彼は机の前でやゝもすれば様々な回想に陷つた。それがあつた事ならいかに些細な記憶でも直ぐ常子を懷かしく思はせたからだ。彼は自分の現實主義に呆れ、今更ら意外な失望を感ぜずにはゐられなかつた。

最後に田町で別れた晩、思はず涙を流した、最後の手紙を受取つた時も、そんな心持がしたのに、彼女の結婚すると云ふ今日はもう清の心は常子から離れかゝつて終つてゐる。思へばあの時が二人の最後の別れであり、同時に魂の別れでもあつたのか。もう二度とあんな悲しい思はしないのか、人間萬事かうも簡單に行つて終ふのか。これが常子のあれだけの喜び悲みに報ゆる自分の仕打なのか、常子が自分に與へ

自分が常子に與へた總ての終りに殘るものはたつたこれだけなのか。

手答あり信じられ相なものは夢のかけらも清に殘つてゐなかつた。

十三

霞ケ浦の銃獵から清が歸つて來ると、横濱の町はもうすつかり正月氣分になつてゐた。停車場でB氏と別れ、蹴込みに獲物をどつしりとのせた俥の上から、門松と門松の間に張り渡された〆繩、仰々しい賣出しの景氣よさを電燈の火影に眺めると都會の歡樂は又新な蠱惑に相違なかつた。恐ろしい人込の間を車夫は威勢よく掛聲をかけて走つた。霞ケ浦の眞菰の水も、大晦日の街の火も、二つながら清にいかにも活々した實在に思へた。聲だか、音だか、都の雜多な響は蜂が唸るやうに耳にこもつて、たつた三四日のことであるが、さも長く聞かないものを聞くやうに感じられた。夜に見る往來の女、それはあの女がこの女がといふのではないが、皆んな恐ろしく美しく見えた。靜江、貞子、お梅‥‥夏子、それに常子のことも切なく思ひ出された。部屋の火鉢も、普段着の心地よさも、養父母の顏も待ち兼ねるやうに懷しくなつた。俥は搖れながら人込を走つた、往來の人は車夫に衝突を喰ひ左右によけながらも賑かに笑つて、清の歸つて來たのを迎へた。

安月給取の型通りな正月に、清は雜煮を祝ひ、屠蘇に醉つた。流石に常子の事は何かにつけて思ひ出してゐた。三日の朝の事であつた。十枚許りの遲れ走せな年賀にまじつて彼女から一通の封書が屆いた。常子からの手紙は思ひ設けてゐなかつたので驚いた。然し恐れるほど意外な驚ではなかつた。死んだと夢でみた人に逢ふほどの喜びを感じた。

買物といつて出て參りましたが、私は郵便局の片隅で、あなたに新年のお挨拶を申上げようとしてをります。それをお許し下さいませうか。でも改つてお芽出度うと申すのも妙に氣が咎めます。何んにもお芽出度い事はございません。

何から申しませう。たつた一週間、それなのに、あんまり遠くお離れ申して終つたやうで手紙を差上げるのも恐ろしうございます。二十六日に式を濟せ、その晩は大磯、それから湯河原に寄つて今は伊東まで參つてをります。避寒客が多くつてまるで東京のやうでございます。少しも落着きません。早く歸りたいと思ひます。歸り度いと申しますけれどもどこへ私は歸りませう。

大晦日の日、六本松の處で、領事の御家族らしい方々にお逢ひしました。あの小さな頤指もなつかしい氣がして、もし御一緒だつたらと思つたら、胸が逼つて暫らく歩けませんでした。

急に用が出來たとかで、あすあさつてにも京橋の方へ歸ります。

其後は續いておよろしいの？　心配でたまりません。どうぞお大事に。突然お許しもなく手紙差上げて惡くはなかつたでせうか、お怒りにはならない？　散々考へたあとです。でもこれでやつと私安心出來たやうな氣が致します。

御免遊ばせ。御機嫌よう左樣なら！

正月一日、午後三時局にて。

殆ど一月ほど經て清は又常子の封書を受取つた。それには月日も名も番地もなかつた。消印には品川とあつた。

開いてみると便りは一行も書いてなかつた。

清の日にも月並な短長の歌が二十首許り寫し
取つてあつた。その多くは伊豆の旅の思出らし
かつた。

○風に
惱みある心を
吹く風よ、
靜かに吹けよ
勞はりつゝ吹けよ。
海の風よ。

○
海原に立つ波きえてあともなけん、
相思とて風に似たれば。

○床にて
疲れて眠れ
夢もみざらんと、
涙じむ目に
なほ讀みつぐ物語、
あはれそこにも
戀の雨風。

○
朝燒の紅色の褪せぬまで、
つかのま人の戀しきものか。

又暫らく常子からの消息は絶えて終つた。…
…二月二十一日清は珍らしくも次の手紙を、
自宅の方で夜の配達に受取つた。

十二月二十四日の夜中の二時、泣きながら最
後の手紙をあなたに書いたこの二階で、我慢し
切れなくなつて又この手紙を認めます。もしお
讀みになるのがお厭だつたら、封のまゝお捨て
下さつても恨みません。色々な事が思ひ出され
ます。星に占ひをした窓、夏の間はいつも蜘蛛
が巣をかけた窓、物語のお姫樣のやうな心持で
遠くお臺場の方の燈火を眺めた窓、涙ぐみなが
らあなたを思ふ歌を作つた窓、どんなに離れが
たい記念の多いこの窓でせう。そんな事を思出
したゞけでもう泣いて終ひます。

でも人のものになつてゐて、まだ外の方を思
ふのは惡い事でせう。どんなにか、あなたも御
迷惑でせう。夫は大變私を愛して呉れるやう
に見えます。もしも私が好きな人を思つてると
知つたら、きつと大變だらうと思ひますの、そ
んな風の人ですもの、熱情家で、私の冷いの
とは大分違ひます。さうしてあなたと似てゐる
所が少しありますのは嬉しいの。感情を餘り
照さうとしない所、人をけなして自分を擧げる
事をしない所、さうして萬年筆で書く字それも
似てゐます。

いつぞや最後にあなたから頂いた御手紙、
あれはまるで佛蘭西あたりの名高い何々夫人と
いふやうな方がお受取りになり相なお便りでし
た。さうではございませんの？　私には少し似
合はないと存じました。

私はあなたのおつしやるやうに、そんな戀の
いゝ遊戲者ではなかつたんです、私は何んにも
知らないほんの娘でした。あなたを戀するのは
私には重荷だつたかも知れません、私は決し
てあなたの戀のお相手にはなれなかつたのでせ
う。私はあなたが戀しい許りに一生懸命に賢
くならう、あなたに笑はれまい、あなたに捨て
られまいとしました。遊戲や、呑氣な心ではを
りませんでした。終始心を張り詰めてゐなく
てはなりませんでした。なぜならあなたが私よ
り百倍もえらかつたんですもの。それが私の戀

を價値づけて吳れたのかも知れません。
でもあなたが、あゝおつしやつて下さつた事も恨みません。あなたは私をどこまでも一人前のものとして見て下さつたのですもの。唯嬉しいと思つてゐます。もし私が下らない人と戀に落ちたら、私の身は今時分どうなつてゐたか分りません。世の中にはあなたのやうないい方‥‥

清は之が果して反語でなく用ひられてゐるのかと顏が熱くなつた。

‥‥あなたのやうないゝ方はたんとゐないのですもの。西山さんでも分ります。西山さんは私の一番いゝお友達の戀人です。それなのに私がこちらへ參ると聞いてから私に失禮な事を云ひました。それで私の友達は西山さんと喧嘩して泣きました。あゝ私本統にいゝ事致しました、あなたを好きになつてゐて‥‥。西山さんは私の心が西山さんのために震へる事を望んでゐたでせうけれども、私にはあなたがありました。西山さんがそれと知つたらどんな顏をしたでせう。知らせて驚かしてやり度い。私の戀は誇りです。でもあなたは恥とお思ひ遊ばさないこと？ それを心配して私はえらくなりたいとあせりましたのよ。戀するなら何か一藝に優れた方を、尊敬出來る方を、さう思つてゐた私の希望はやつと屆きました。いかに多くの犧牲も厭ひません。

一月の末頃から私は長らく品川へ歸つてをります。四日の日歌を一纏めにし思ひ切つてお送りしたのもこの室からでございます。お受取り下さいましたでせうか。夫は旅へ出てをりましたし、その上私は身體の具合が何となく惡うございました。醫者に見て貰ふほどでもなく、母も今に直る一時の事だと申してをりました。月始頃はよく毎日雨が降りました。雨の音を聞いてゐると氣が滅入つて、ほと〳〵死ぬほど惱しうございました。あなたをまた思ひ出してゐたのでございます。そんな時は用箪笥から御手紙を出して、過ぎた日を思つて許りゐました。朝なぞはいつまでも蒲團を被つて泣いてゐました。幾度も手紙を差上げようと思ひましたけれども、あなたの御蔑みが恐ろしくつて、書いては破り、書いては破り致しました。

手紙を上げるのが惡いならば、お目にかゝるのは尙更恐ろしい惡い事でせう。恐ろしい、恐ろしい事に思つて震へてをります。けれどももし惡い事が人間にないならば、神樣の御慈悲といふものは何んの役に立ちませう。神樣私はあなたの御旨に從ひ、あなた任せに致します。あなたの無量な御慈悲を崇めます。今までもさうでした。いつもあなたは十分に私を御守り下さいました。此上もお守り下さい。

此内二度ほど夏子叔母樣に會ひました。他所乍らあなたの御健康がおなほりになつた事を聞き、此上なく喜んでをります。

こゝにも、もう長くはをりません。京橋へ歸りますか、それとも暫らくの間、近くの海岸へでも轉地致しますか、兎も角このなつかしい窓に又も別れて行かねばなりません。

二月二十日

今日一寸品川の家へ參りました。今夜は羽田へ歸らねばなりません。何から申上げませう。今をはづせば、又暫らく手紙が書きにくうございます。なれたこの机でかうして手紙を書くのが唯嬉しいのでございますから大目にごらん下さい。めつたに上げられない手紙と思ふと幾千幾萬の言葉を記せばいゝか急に迷ひます。

なつかしいあなた！　あなたはまだ常子と云

ふ女を覺えてゐて下さいますか。こんな無駄の事を書かねばならぬほど、私共は遠々しくなつてをります。

定雄は此上なく私を愛して吳れます。私も愛してをります。そばにさへゐて吳れゝばさうでもございませんが、雨が降つたりすると矢張りあなたを思ひ出すので困ります。雨が降るときまつてあなたで心が凋み相に憂鬱になり、身も世もない惱しさを覺えます。雨につけての思出が多いせゐでもございませうか。

今は唯もう一度、唯もう一言申上げて、あちうにさせて下さいまし。私の本統に唯一人の戀人！　あなたこそ私の一生に唯一人の戀人でございました、それは日に日に明かにはつきり私に見えて參ります。

唯これだけの事でございます。これだけの事でございますけれども、これはどんなに大切な事でございませう。それをお目にかゝつてしつかり申さないで終つては一生心殘りでございます。どうぞ私のこの願お許し下さい。

これからは夫を愛し、生活を樂しく幸福にするやうに努めますから、どうぞ御安心下さいませ。

でも心の片隅にあなたの面影をとゞめて置く事は許されると思ひます。あゝ何んといふ美しい短い月日でございましたでせう。その時はそれほどとも思はずに過して終つた事、今更ら勿體ないとも何んとも云ひやうがございません。

美しい夢は皆んな去つて終ひました。

あなたもう私の顏お忘れ遊ばして？　では之で、丁度紙もなくなりました、時間もありません。左樣なら。お丈夫で幾千代かけてお榮え遊ばしませ。左樣なら。左樣なら。

（私は今羽田の××館といふのに別館を借りて住んでをります。品川よりは少しそちらへお近くなつた譯です。）

二月二十九日

久しく御無沙汰申しました。御變りもございませんか。

思ひついたやうに時々手紙を差上げる事失禮でない？　お許し下さる？……私無事でやはりこの羽田にくすぶつてをります。多分當分はこの家にかうしてをります。それからの事は適當な家でも見付からなければ分りませんが。

昨晩はBの音樂會でございましたから、無理に都合をつけて帝劇へ參りましたの。ことによるとあなたも入らつしやるかも知れないと叔母から聞いてをりましたから、それが第一の理由で。こんな事申上げるのは惡いと存じますけれども、あんまり長くお目にかゝらないので、二人の間には死の國でも橫はつてゐるやうな心細さが致しますのですもの。路傍の花だつて、一度目にしみた色が褪せて行くのは悲しいものですのに、あなたの影が段々消えるやうに思へますのですもの。それを惜まないでゐられませうか。遠くからでもいゝ、あなたの後姿でもいゝ、とこれだけの望で私參りました。

けれども叔父の取つて置いてくれた椅子があんまり前なのと、大入だつたので、私の望も賴み少くなつて終ひました。

でもあなたは私に御氣付きになりまして？　それだけでも伺ひたいと思つても、それも出來ませんの。

私の右には上杉さん御夫婦、左には北川さん、湯原さん、吉村さんといふ順で並んでゐました。すると吉村さんが湯原さんにこんな事云つてゐるのが聞えました。中根さんは此頃どうなさつたか、常子さんに伺つてみませうか」つて。さうして何か小聲で話しながらくす／＼

笑つていらつしやるの。
思はず火のやうに顔がほてりました。慌てゝ私は智惠子さんに話しかけてまぎらしました。あゝ私こそさう伺ひたかつたのですもの。私はあなたがどこで何をしていらつしやるか知らないのですもの。あの時あの同じ音樂を二階で聞いていらつしやつたのに、それも知らないと申さなければならなかつたのですもの。

歸りに皆さん御一緒の電車で途中までまゐりました。上杉さん御夫婦とはあの夏以來初めてお目にかゝりました。あの七月の日の通り餘り御變りになりませんでしたから、懷しい悲しい心持がしました。それに智惠子さんは何かにつけ態とあなたのお噂をなさるのですもの。停車場で叔父と一緒になりました時、初めてあなたもいらしつてゐた事を知りました。

思はず胸がふさがりました、驚きました。口惜しうございました。

神樣なぜ逢せては下さいませんでした。今迄はよく二人を守つて下さいましたのに。神樣！昨日お目にかゝりそくなつたといふ事丈で、もうこんなに戀しさが增します。なぜ過ぎた日許りが戀しいのかと思ふと生きてゐるのがつらくなりました。ではもうやめます。いつまで書いても同じ事です。唯いつまでも私はやはりもとのまゝの私です、常子でございます、さうお思ひ下さる事出來ますの？

三月六日

音樂會では清もそれとなく常子を探してみたが、つい見損なつて終つた。常子の手紙を受取つてみると、いかにもそれが殘念でもあり、自分の熱心が足りないやうで、申譯なく思へてならなかつた、彼女に對する戀は春と共に新らしく芽ぐんで來た。既に處女を失つた常子、その心身に起つた變化、それを思ふ度清は誘惑に充ちた殆んど病的な惱みに襲はれた。邪念妄執だけはなぜか彼にとつて、彼の他の一切の精神の力より強い誘惑を持つてゐた。それを自ら警戒しながら、自らどうともなし得なかつた。過ぎた夏の頃の清と今の清とでは不思議な位違つて常子を見た。我ながら己の變り行く戀の姿に驚かれた。

遂に清は人目にふれてもいゝ程度の文句にその思をつゞり、上杉智慧子といふ女名前を借りて、返事を書き上げた。出勤の途中、ぽすとの前に立つて、思はずあたりを見廻し、投書口の蓋をあけ、重みのある西洋封筒を急いで投げ入れると、ずしんと底に落ちる音を聞いた。彼の「ちつぽけな良心」は薄氣味のよくない其音に驚かされて幽かな溜息をもらしながら、急いでぽすとから遠ざかつて行つた。

十四

上杉智慧子さんからのお手紙、表書を見た時、不思議に思ひました、封を切らうとして、ことによると……といふ氣がしましたが、それは直ぐ望ない事に思へて終ひました。

何んといふ嬉しい驚でしたらう。今あの驚、喜を思ひ返すのは不可能なやうです。はつとしてあたりを振返りました。有難う、有難う、嬉しうございます。待つた甲斐がありました。あなたは矢張り御返事を下さいましたのね。

あなたはいつまでも靜かに私を思出してゐて下さつた。忘れもせず、亂さうともせず、遠くから私を見てゐて下さつた。

あなたは淋しいとお書き下さいましたね。本統でございますか、少しでも淋しいとお思ひ下さいますか。嬉しいこと！　私はそれを望んで

をりました。私をお手放しになつて、何んともお感じ遊ばさないでいらつしやるとは思ひたくございませんでした。少しは淋しくいらつしやるやうにと內實は願つてをりました。

あなたは今、無理に私を欲するのでもなく、只軟いお心で思出すとお書き下さいました。私今やつと御手紙でさう云ふお心が分りました。淡い戀で人を忍ぶ、この心は優しうございます。誰も咎めは致しますまい。

でもこゝへ來てから二三度云ひやうのない憂鬱に取つかれ、じれてじれてゐました。あなたをあんまり思出したのでございます。でも泣けなかつたのでひとりでにじれたのでございます。傍に人がをりますもの。

いつぞや一二度お話しした九州の人の事餘り思出しませんでしたけれども、此月の歌の雜誌にあの人の切ない戀の歌が澤山載つてゐるのを讀んだ時は泣きました。私はあなたを思つて泣いてゐるのに、その人は私を思つて見ぬ戀に泣いてゐます。あなたのために作つた歌をあの人は自分のためのものと萬一思込みはしなかつたか、もしさうだつたら本統に濟まなく思ひますわ。私にあなたといふ人がある事誰が知つてゐませう。でもこれが世の中なのですわね。その人は私を思つて泣いてゐるのに、私はあなたを思つて泣いてゐるのに、あなたも誰れかを思つて泣いていらつしやるかも知れませんもの！

でも私の心は惡人とは思はれませんから、神樣もお罰しはなさらないでせう。今はお手紙で心が和げられてゐます。死ぬほどあなたを思ふ事なくしませう。あなたのまねをして、無闇に人を欲しがるのはやめませう。あなたは元からさうでしたの？

それでもお目にかゝるのはよくない事でございませうね？

私は我儘に大事にされて暮してゐます。けれどもやつぱり昔は戀しうございます。夫婦となればいかに我儘をしようとしても、ある點までしか我儘が通りません。結局は服從しなければならなくなつて終ひます。今まで意地を張り通して來た私ですが、今では喧嘩でもすれば矢張り妻の私から折れて出なければなりません。愛されてみれば愛されるほど心の荷は重くなるんです。何んとも云へない壓迫を感じさせられ、又昔通り一人になりたいと時々思ひます。私はいつまでも一人で、ぼんやりして暮したい。自由でゐたい。それは勿體ない我儘といふものでせうか？　私一人が女の癖にこんな事を思ふのでせうか、誰れでも嫁いだ人はこんな事を考へるのではないでせうか。

では又きつとお手紙を頂かせて下さいまし。

これも私の我儘でございませうか。餘り蟲のよ過ぎる註文でございませうか。ではあなたのお氣の向くまでまたぢつと我慢して待ちませう。あゝ本統にどんなに私は喜んであなたのお手紙に接吻致しましたらう。あゝこんな事も私はもう申してはなりません！　私は奴隷でございます。主人の望まない事、それはいかに私が望む事でも許されないのでございます。

御機嫌よう。自由な鳥のやうにお謠ひ遊ばせ。段々春が近づいて參ります。いつまで私の冬はつゞくのでございませう。よそながらの謠を承らないのも、久しい久しい感が致します。久しいと書くだけでも淋しうございます。

三月八日

今日は雨が降つて、沖の方がぼうとけぶつてをります。夫は毎日東京へ參り、夜は大概遲くでなければ戻りません。唯今この別館には客がゐなくなり、私一人でございます。どんなに淋しいか分りません。岸に散らばつてゐる

牡蠣の貝殼許り白々と目にしみます。白骨のやうなその貝殼がさも私のいゝ友達のやうにも思へてなりません。

考へてゐるとなんだか私自身が恐ろしくなり、一人でゐられないやうに恐ろしうございます。なぜでせう？　早くもうこゝを引上げて、品川へなり、京橋へなり人のゐる所へ歸りたいと思ひます。

あなたのお手紙を又繰返して讀んで、物足りない心地が致してをります。優しいお心といふものはまるで今日の雨のやうではございませんか。唯ぼうとしてゐる許りでございます。

こんな事退屈まぎれに書きました。お忙しいお方へ、どうぞご免遊ばせ。

三月九日

又今日も雨です。もう春らしい雨が降るやうになりました。雨傘をさして手紙でも出しに行く外に用がない日でございます。

退屈でございます。書くことも思ひ出せないほど退屈でございます。あゝ退屈でございます。死ぬほど退屈でございます。

三月十日

十五

清は約束の出稽古を電話で斷つて置いて、外套のぼけつとに常子の手紙をねぢこみ、五時半頃領事館を出た。彼は多忙しげに市内電車で櫻木町へ行き、そこで院線電車に乘替へた。その間始終誰れか知つた人に會はないかと、それが氣になつていつになく落着かなかつた。

羽田××館の半町ほど手前で彼は停留場から乘つて來た俥を下りた。歩きにくいぬかるみ道を苦心して歩きながらも、いつまでもかうと決心がつかなかつた。もし間がよかつたら××館に入つて夕食でもしてみようか、その位なあやふやな考を持つてゐたに過ぎなかつた。遠くから汽笛や、電車、自動車の響が聞えた。それを聞くと又横濱へでも、東京へでも、歸らうと思へば直ぐ歸れる、歸らうかさういふ氣も一方ではしてゐた。

彼が領事館を出た頃にはもう雨が霽れてゐた。然し空はまだ曇つて、雲が淀んでゐた。暮れるに從つて西の方が茜して來た。ぼおつと赤くなると同時に暗くなつて行つた。往來の泥濘でも、海苔干しの簾でも、沼地の蘆の枯葉でも、板塀でも、したみでも、悉く連日の雨を含み、重げに膿んで、この暮方の光の中から清を見守つてゐた。彼は何んとなく落人の心を感じながら、その濡れた空氣の中を貝臭い磯の方へ行つた。

水面から僅か許り盛土をした濕地の上に、船板などの塀を廻らした場末らしい、それでゐてどこか淫らな趣の建物がこの邊の旅館、鑛泉宿であつた。彼は順々に屋號を讀んで行つた。××館は中でも割に小さな家だつた。角な曇硝子の行燈が門柱から往來をのぞいてて、それにあはれな明りがついてゐた。然し空はまだ明るかつた。

彼は立停つて門內を覗いた。もしその瞬間そこから常子が夫と一緒に出て來たらと思つてみた。玄關までの敷石は清められ、盛鹽などがしてあり、障子はあけ放したまゝ、式臺には薦被りの四斗樽が一つすゑてあつた。誰れにでも、さあお這入り下さいと云つてゐる表情である。然し清にはそれが却つて氣味のよくない、陷穽に導く平坦な道のやうに見えた。

暫らく躊躇してから、彼は小戻りして濡れた塀に沿つて河岸の方へ行つた。薪の積んである物置小屋の前で一人の爺さんがぼんぷで水を汲

み込んでゐるらしく、波の音のたえたうちに、單調なその水波みの音許り夕暮の靜かさを亂してゐた。

××館が立つてゐる方を向いて、淸も塀際に立ちすくんだ。橫濱、洲崎の方まで見える東京灣は割に廣々と彼の目前に展けてゐた。淸の丈位な石垣の上の狹い芝生の上に、二棟の二階建があつた。本館と別館との間には湯殿らしい平家があり、ひよろ〳〵とした煙筒から煙が眞直ぐ上つてゐた。彼は注意しながら、塀のかげを出、石垣を華奢な指先で一寸支へながら、伸上つて内の樣子を覗いた。もう家の内は暗い時刻だのにどこの部屋にも火はついてゐない。それ許りでなく、人氣らしいものは少しも感じられなかつた。

淸は手を石垣から離して、寂し相に自分の指を眺めてゐたが、はんかちいふを出して一寸指先を拭いた。彼の立つた四五間先の海中には海苔を取るため樣々な木の枝で作つた篊の頭が林のやうに並んでゐる。その間を波のうねりは息をしつゝ淸の方へ動いてゐた。彼はもう一度前と同じやうに伸上つて××館の内の容子を覘つた。無益と知りながら二度も三度も同じ事を繰返したが、暗い部屋はいつまでも暗く寂しかつた。確かに留守だと思ふとひどく失望された。幽かな妬みをすら感じさせられた。

彼は石垣と海の間の僅か許りな黑い砂の上を歩いた。外套のぽけつとに兩手を入れたまま行きつ戻りつして歩いた。その人が住んでゐる部屋、そのからつぽの部屋が直ぐ彼の目の前にあると思ふと云ふに云はれない戀しさで胸が一杯になつた。もし常子に逢へたらどんなに嬉しかつたらう。硝子戸の中の彼女は自分を見つける事が出來たらうか、直ぐ庭下駄をはいて出て來られたらうか、さうしてどんなに驚いたり、喜んだりしたらう。……彼は樣々な空想に耽りながら、やがて岸につないだ小舟にのぼつて、舷に腰を下ろし、なほ常子を目の前にゐる人のやうに考へつゞけた。

萬一常子があの二階にゐて、その上その夫がゐて、二人が睦まじげに夕食の膳にでも向つてゐる所だつたとしたら一體淸はどうするつもりだつたらう。それ等に對しては何んにも考へる餘裕はなかつた。唯常子の留守なのを居ないのを、それ許りくやんでゐた。然し彼の失望は實に快い失望だつた。不安の伴はない、彼のちつぽけな良心にも滿足を與へ得る、さうして戀人としてのせんていめんたるな悲哀を味ふに適した、安價な快い失望に過ぎなかつたのである。

彼は長い間舷に腰をかけ、考へたり、海を眺めたりしてゐた。光は海の上からも次第に消えて行つた。水平線に近い空にはどこからともない煙や靄が掩ひかぶさつて來た。やがて海の底のやうに低い此邊の平地の上に、沖の船に、小さい火がついた。潮は益々貝臭く匂つた。海苔とりの篊ももうおぼろげに水と共に暮れた。××館はいつまでも暗いまゝ默つてゐた。淸も默つて夜の中に隱されて行つた。雨上りの三月十一日の宵は或る肉感的な溫みでいつまでも淸を勞はつた。

やがて自分で自分の顏も見えないほど暮れてから淸がそこを立上つた時、では明日又來てみよう、さう暗い心が囁かざるを得ないほど、奪はれた常子は却つて懷かしい人妻になつてゐた。

十六

戀しい淸樣

あゝ私は夢を見たのではないでせうか。昨夜のことどうしても本統とは思へません。夢では

ないでせうか。本統でせうか。でもかうして急に堪へがたく戀しくなつたのをみれば、やつぱり夢ではなかつたのでございませう。本統にお目にかゝれたのでございませう。現とも幻とも私には分り兼ねるほどのことですが。

世にも恐ろしい事、世にも恐ろしいと信じてゐた事、…………………。私には何ももう分りません。

世にも恐ろしい事、…………………。世にも恐ろしい事とはあんな事なのでせうか。あんな事が世にも一番恐ろしい事なのでせうか。それにしては餘り當然の事のやうに思へます。これがそんな怖いことなのでせうか。私は今ちつとも怖くはありません。只嬉しい、嬉しい許りです。今程幸福な事はないとも思へます。

あなたが本統に本統に私を愛して下さつてゐる事がもう明か過ぎるまで明かになりました。あなたが私を本統に愛さないでどうして私はこんなに幸福になる事が出來ませう。

夢にも思はれない幸福が昨夜突然に訪づれて參りました。私は何もかも忘れ、嬉しさに醉ひました。あなたはつきり誓つて下さいましたね。これからは私を戀人にして下さるつて！

本統？　本統なの？

私がどれほどあなたを眞劔に一圖に愛してゐたかも今初めてお分りになりましたでせうね。さうして私との事が知れてもかまはないとお思ひ下さるのですつて、さうして私とどこをお歩きになつても、誰の目にふれても恐れないとおつしやつて下さいましたね。私もう嬉しくつて息がつまり相でした。日蔭にゐたものが、お日樣を仰ぐ事が出來るやうな嬉しさを感じてゐます。もうだれも怖くはなくなりました。さうして初めて私は本統にあなたのものになる事が出來ました。

私は恐ろしい事をしたと思へませんから、曲りなりにも善い事をしたと思ひませう。神樣のお許しがなくて出來る事は何一つ地の上にはない筈ですもの。

それにあなたのお心、あなたの意志、それは何んといふ力です。あなたは思ふ通りこの世の中をお動かしになります。あなたは何んといふえらい方でせう。（どうぞ申上げる事をそのままお信じ下さい。昨夜一晩から考へたのですから―あなたは私の戀人ですね。私がかう大きい聲で申上げられるのは今が初めてです。どんなに今迄それが物足りなかつたでせう。

私はあなたを戀したつて事だけ私の生涯の矜です。私ほど戀し、私ほど望みの叶へられた女が又とありませうか。私は全く仕合せです。

昨夜は何んといふ嬉しい、都合のいゝ一時でしたか！　全くお慈悲です。一昨夜のやうに折角お出下さつたといふのに私のゐないやうな不運もございますんですからね。

私が髮を結つてゐた鏡の中に、何か見えたやうに思ひました。驚いて窓の方を振向きました。そこの硝子にお顏が映つて恥かしい私の姿を笑ひながら見ていらつしやいましたのね。隣室に人の來た氣配は感じてをりましたが、それがあなただらうなどとどうして思ひましたらう！　あの時のお聲、それは地獄から私を呼び返すため、お呼び下さつたやうなお聲でした。あゝあのお聲！

外はもう暗くなつて、私は部屋の中に堅くなつていつまでも突立つてゐました。私はどうすればいゝのか分りませんでしたから。

あなたは音のしないやうに窓を靜かにお明けになりましたのね。私は顫へてをりました。

あなたは少し頰がお痩せになつてゐました。それが何故か大變悲しうございました。私の好きなお顏に私のこの手をあてて私は嬉しい悲し

い思ひをしました。強い大膽なお心を嬉しく、よく來て下さいました、といふ言葉も聲にあまりました。喉がつまつて終ひました。

下女がご膳を持つて上つて來た時、あなたは又窓からお部屋へお遁げになつたでせう。私は何んだか申譯ない事をおさせするやうな心持がしました。でも御食事中、下女とお話なさるお聲が壁を透して來るのを聞くのは待遠しく、短い僅か許りの時間だのになぜ御食事などゆるゆるなさるのかと思ひました。御食事でもなさらなければ、何ぼ變に思はれたのですが……。

折角苦心して來て下さつたのに、私あなたを十分御喜ばせする事も出來ず、申譯なく存じてをります。どうぞご免下さい。私どうしていつまでもこんな子供なんでせう。自分で口惜しくなつて終ひます。

電氣を消し、窓の障子をそつとあけて、黒い後姿をお見送りしましたのに、私の方を見ても下さいませんでしたのね。何んだか泣き度い程淋しかつたんですわ。もう一目見たかつたのに。

床に入つて暫らく枕に靠れうつとりと考へてをりました。悔いなく、嘆きなく、悲みなく、却つて心強く思ひ出してをりました。……

………………。…………………床に私の惱ましい身體を横たへ、枕に私の小さい額を載せ、もう一度お目にかゝれるやうにと御慈悲を願つて、春のやうな夢に入りました。

戻りましたのはもう十二時を過ぎてをりました。何んにも知らないで……何んにも知らないで、…………。その癖私はいら〳〵してをりました。……………………………………………………………………。何もかもいや〳〵つて強情を張り通しました。自分の歸りが遲かつたから、酒を飲んで歸つて來たから、それで私が怒つてゐるさう思つたでございませう。終ひにはとう〳〵自分を厭つてゐるのかとも申しました。

今朝も私に誰か外の人を思つてゐるのだらうと申しましたから、やきもちやきだと云つて、怒りながら泣きました。本統に泣きました。ああ苦しい。

もつと書きたいのですけれども紙がもうなくなりました。明日にしますわ。もう一度、もう一度……………、でもそれはいけない事でせう?

三月十三日

いゝ紙がありませんから、こんな紙に書きます。

一昨夜のやうな事があつてはもう戀もお終ひだといつぞやおつしやつたのお覺えですか。ではあなたはもう私を愛しては下さいませんの? 何んですか心配になつて參りました。どうぞそんな事ないやうにね、お願ひですからいつまでもいつまでも可愛がつて下さい。きつと誓つてね。あなたが外の人は誰れも見ないやうにあなたのお目を縫つておき度い。それを考へると氣になつてなりません。どうぞもう決してそんな事なさらないやうに。

今朝叔母の處から手紙をくれて是非そのうち遊びに來いと言つて寄越しました。そのうち一度訪ねるつもりです。叔母の處であなたとお會ひしたいわ。さうして澄した顏をして叔母のする事を見てゐたいわ。

たとひ一遍でもお目にかゝるといけませんのね。餘計戀しくつて、折角思ひ切りかけてゐたのに、又もとの通りになつて終ひましたもの。……これは私だけの事よ、では左樣なら、左樣なら。

三月十四日

昨夜は遲くお歸りでしたらう心配してよ。

戀すれば
罪と知りつゝ
氷をも踏む、

さめて戰く魂を
强ひて眠らし眠らす、
見果ぬ夢よ長かれ。

罪科に身を穢すも
心を賣るも惜しからざるに
なぜひとりでに淚は流るゝや。

私はあなたにお目にかゝるのを的に、これ以上きたなくなつたり、年とつたりしないやうにしませうね。あなたとお分れした時分、お洒麗するのも張合がぬけてつまらなくつてしやうがなかつたのよ。それに引代へ今の私はどうでせう。こらこんな綺麗にお化粧までしてゐます。ゆうべは嬉しかつたから、今夜は倘ほつまりませんわ。また今度ね。左様なら、お休みなさい。私も寢卷に着替へませう。

三月十六日

十七

可愛いひとりのあなた！

お手紙はどれほど私を待たせたでせう。朝から晩までそれ許り待ち暮しました。十六日の四時頃お出しになつたのを、十八日のたつた今、女中から受取りました。三時頃――四時頃でせうか。時計が停つてをりますが。

これからお返事を書いて、雨の中をあすこの角まで出しに參ります。これ許りは誰れにも賴むことの出來ない大事な手紙なんですもの。

あゝ神樣は何もかもいつもお守り下さいます。けれども私は罪人でせうか。私の罪は重いのではないでせうか？

そんな事はないと思ひます。決して私は心から惡い事をしてゐるのぢやありません。決して決して惡い事ではありません。私は私にかう斷言するのでございます。どうぞあなたも常にさう云つて下さいまし。誰れが私を石うち得ます、誰れがあなたを審判き得ます。決して私と同じことをしないとどうして神に誓へる者がありませう。誰れだつて私の場合になれば、かうより外にはなれなかつたでせう。私にはこれが唯一つの道でした。たとひ外の人にもう一つの道を考へる事が出來ても、私には出來ません。怖い事ぢあない、罪ぢあない、誰れが私にそんな事を云ひます？ あゝなんて醜い、僞りな、本統の心を無くして、人のために許り氣兼しながら生きねばならない世の中でせう。そんな思をして私が生きてゐたつてそれがどれほど自他の役にたちます！ 私はせめて自分を僞らない、自分だけにでも役にたつ女になりたいと思ひます。

けれどもお手紙を開いて讀みながら、私は震へて、がた〳〵してをりました。恐ろしくつて手も膝も震へました。齒もがたがたいつて合ひませんでした。

何んといふ恐ろしさ、寂しさ、孤獨さでせう。私はまるで世の中から追はれ、一人の道連もない者のやうな心持がしてをります。

私はもうゐても立つてもゐられなくなりました。手を合せたり、胸を抑へたり、どうか氣を落ちつけようとしてはゐましたが、目は何んにも見ません、耳は鳴つてゐます。今にも天が裂け、禍が私唯一人の上に落ちて來さうな心

持がしました。あゝ今更何を驚き恐れるのでせう。

でも私達はどの位久しく、どの位賢く、清かつたでせう！　ね、さうでしたらう。それだのに清くないと考へてた方もあります。私が處女だつた事、私のあの人は認めてゐませう。それだけで澤山。これは本統に都合のいゝ事でせう。あなたはいゝ事をして下さつたのよ。

もう誰れが知つたつても關はない。さう思つても恐ろしい、怖い、怖い。なぜでせう。なぜ私の心は大膽な癖に始終恐れてゐるのでせう。なぜこんな弱い心に生れたのでせう。

からなると益々戀しいのはあなたです。今ほど切なく、淋しく戀した事はなかつたやうな氣がします。あゝ懷しい、悲しい、戀しい、逢ひたい。なぜあなたはこゝにゐて下さらない。なぜ抱いて常の涙を拭いては下さらない。…………………………………。私一人にもうこれ以上の物思ひは思ひあまります。

先夜私共二人の寫眞をお目にかけたのは子供のやうな他愛ない心からだつたのですのに、お手紙を見てやつとあなたのお心持に氣付いた位、なんでもなく考へてゐたのでした。叱られてみると、しよげて終ひます。心ない惡い事しました、堪忍して下さい。

私はあなたの外、何んにも望んでゐません。それはよくあなたにも御承知な筈だのに、私に夫を愛せ、よい妻になれとおつしやいます。さうして寫眞なんか見せて呉れるなとおつしやいます。これはあなたの御無理です。あなたは男ですからさうなさいました。私を愛しながら、外の方をもお愛しになつてゐました。それも深くお愛しになるやうに見えました。考へれば妬ましかつたんです。けれどもそれほど他に愛する方がありながら、私をもあんなに可愛がつて下さつたんです。それをどんなに感謝したでせう。今になつて始めてその事のどんなにむづかしかつたか、それがはつきり分ります。今私にその事があんまりむづかしいからです。

お目にかゝるのを恐れてゐます。何かそんな豫覺が私に初めて起つて參りました。でももう一度お目にかゝらせて下さい。晝間は恥かしいけれども……。二十日は仙臺から歸つて來た姉が來ますから、二十一日の午後なら出られます。もうこゝにお出になるのはいけません、危險です。どうぞ都合して、いゝ時といゝ處とを御返事下さい。ではお目にかゝるその待遠しい日まで。

嬉しい／＼お手紙、こんないゝお手紙、破つて終はなければならないんですか。厭なの、どんなに厭でせう。でもお言付ですから諦めます。その代りまたいゝお手紙を下さい。お手紙で生きてゐます。どうしても破らなければならないのなら、すつかり頭に入れてから破らうと、幾度も讀返してゐます。讀み返せば讀み返すほど息苦しくなります。

三月十八日

嘗ても今もあなたの　常子

昨日手紙を書いてから出しに行かうと思ひましたが、あんまり風が酷くつて歩けさうもありませんから、やめて一人で寢てゐました。もし外へ出て何か頭の上へでも落ちて來て死んだらどうしませう。私の死ぬのはそれまでの運命として、あなたに上げる手紙が私の袂の中にははひつてゐるでせう。大變だと思ひましたからです。大層な取越苦勞をしたもんでせう。

だからお目にかゝつたのは一昨日になります。嘘のやうです。有つた事とは思へません。でも唯樂しかつたといふ心持だけは殘つて覺えてをります。目で見たり耳で聞いたりした外の

けれども。世界は皆んな無かつたやうに消えて終ひました

昨晩も十二時過ぎて夫は東京から歸りました。何んて忙しい人でせう。私はそれで床の中で××を讀んでゐました。讀みながら時々枕に額をつけて一昨日のこと思出してみましたのよ。

私があなたより先に着いたので、本屋に腰をかけ、そこの主人と話をしてゐましたのは十分間位なのでしたらうが、其間に三度程店を出て橋の袂の方を見に行きました。あんまりお見えにならないので、橋まで行かうと考へました時、あなたが橋の方へお歩きになつていらつしやるのを見付けました。

その少し前通つた自動車の中にちらつと見えたお姿をあなたぢあないかと思ひましたがやつぱりさうだつたのですわね。運轉手と硝子戸越し何か話していらしつたでせう？

あなただと思ひました時、目の前を流れるやうな闇が通りました。悲しい、淋しい、口惜しい、取返しのつかない事を又して終つたと思へて、氣が遠くなりました。でもふら〳〵と本屋から往來へ出ました。さうして何もかも忘れてあなたに、よく來て下さいましてね、から申上げて終ひました。さうして二人切りで自動車の中へ入りましたのね。

讀んでゐる本が×××でせう。それに少し昔の信仰が返つて來てゐたので、隨分考へさせられました。此上重ねてお目にかゝるのは益々罪の上塗をする事だと思つたりしました。「悔い改める時、その時から淨められる」と長老はあの本の中で云つてゐるでせう。

でも私はまだそんな處まで行つてゐません。惡い事をしたと悔いる心も、もうこれ切りお目にかゝるまいとする心も、もつと可愛がつて頂きたい心も、いつまでもこの戀を續けてゐたい心も、皆んな同じ程度に強いんですもの。

途中自動車の内からちらつと見たあの人が、もし本統に夫の兄弟だつたら、もしもあちらでこちらより、よりよく私達を認めたのだつたら、まあどれ程な騷ぎが起るといふのでせう。

私の身を置く處は明日からもうなくなります。母も兄も姊も弟も、親類の人々も、あちらの父も母も八人の兄弟も、それに續く何十かの親類も、どんなに私一人を恨み悲みませう。私は呪はれ、擲たれ、粉徵塵にされて、道端の泥の中へはふり出されなければなりません。それも怖くはないの、私はあなたを愛してゐますもの、名譽だの命だの、そんなもの何んで惜しいと思ひませう。

でもね、兄さんがどんなに嘆くでせう。世間に對し、松本家に對し、どんなつらい思をしなくてはならないでせう。きつと死んで終ふでせう。兄は私などと全然違つたやうに考へるんです。妙に生れながら道德的觀念などの強い人です。私のやうな思想や感情をどれ程卑み憎み恐れてゐるか分りません。私は私の思想を胸の中に包んでゐますけれども、もしそれと分つたらどんなに嘆き悲むか目に見えるやうです。あの人の立場だつて同じ事です。これでもう滅茶滅茶です。妻にそんな事されるなんて、男として此上もない恥です、私を殺して、自分は死んでも、もう追ひつかないほどの思ひでせう。

あなたは？ あなただつて大變でせう。あなたの生みの御兩親、御養父母、その他の方々もどの位あなたの痛手に惱まなければならないでせう。もし萬一あなたが私と一緒に牢にでも入らなければならなくなつたらどうしませう。領事館の方も、お能の方も、でも藝術家としてあなたの不名譽は幾分許されるやうな所もありませうが。

さうすると私はどうなります。私は死ぬか、

それとも一切を捨てゝ……一切に捨てられて、獨法師になつて、人を避け世を遁がれて終はねばなりますまい、私はさう云ふ風にして隱れてから、さてどうして暮しませう。どうして暮せるでせう。そんな時、肉親の涙や怨言を見聞きするなんてとても私には我慢し切れませんから、それらの總てから全然離れるため自分を隱し滅しに行かなければなりません。

さうなつた時、あなただけは私を見捨てなくつて？ 唯一人でも私の味方になつて下さつて？

あなたはきつとさうして下さる、他の人とは違ふ、他の一切を振捨てても私の手を取つて救けて下さる、さういふ氣がします。けれどもそれは私一人の思過しかも知れません。けれども私はさう信じなくつては一刻もゐられません。さう信じられない方なら、こんなに戀する事は出來ませんもの。さう信じ拔いたからこそ、かういふ所へ來たのですもの。

あなた恐れてはいらつしやらなくて？ 此言葉を聞いてもう私を可愛がるのがお厭になりはしなくつて？

私をさまで可愛がつては下さらないのでせう。そんな危い事まで犯して可愛がつて下さる程、私は價値のある女ではないんですもの。

主よ、御心のまゝになさせ給へ、いゝ敎徒はから祷ります。どうぞ御心のまゝにして頂戴ね……私は、かうあなたに向つて申上げます。

でもこれでは本統に愛する心は物足りません。何が何んでもきつと私を愛して下さい、さうお願ひするこそ本統の心です。でも私あなたに對してはさう云ひ切れないの。あなたの貴い總てのものを私の爲めに下さいつて事まで抑切つて云ふだけの自信が私にはまだどうしてもないのですもの、口惜いけれども。

すると詰り知れなければいゝ、知らせさへしなければいゝ、といふ所へ落ちて來ます。僞り欺きの眞中で手を取つて生きてゐればいゝ、いつまでもこのまゝでお別れしないで濟みます。ではどうぞ永久に、知れないやうにして下さいね、いゝでせう。いけないこと？

でもどんな彈みで知れないとも限りません。そんな時はどこまでも、知らない知らないと云ひ張り切れるものかどうか、それは今から分りません。恐らくとても出來ない事でせう。でもあなたにはいつも、みんねんぐりうつく、といふ運がついてゐて守られてゐるんですもの。それに賢く總てを處理なさる事が出來るんですもの。心配しないでゐますわね。二人の間の祕密は二人の胸だけにいつまでも藏めて、勿體ないから誰れにも見せも、聞かせもしますまいね。……あゝこんな心細い安心立命が又とありませうか？ どうぞ常をお憐み下さい。……云々。

三月二十三日

あなたが先日來て下さつたあの私の隣室に昨夜から人が來ました。まだ若い學生で、病後の養生とかに來たのですつて。どんな人か見たいと思ひます。

唯今は私も一人ぎり、隣も一人ぎりです。

今朝夫の出がけに、私一人この部屋に置いて行くのは心配ぢやないことと、あなたの事を思ひ出しながら聞いてみましたら、夫は笑つてをりました。

私達の聲など聞えませうから、私が若い妻だといふ事は分つてゐませう。もしこれがあなたのやうな人だつたら……。今夜も夫の歸りは多分遲いでせう。でももう駄目、あなたはとうとう二度とあの部屋へは來られなくなつて終ひましたわね。

酷い風ね。この間御一緒に散歩した堤の下の

あの緩かな川も少しは波立つてゐるでせう。あなたが杖でお拂ひになつた葱の青々とした頭もどこかに流れて行つて終つたでせう。私の髪にと折つて下さつた紅い椿、あれをあの家へ置いて來て終つた事も思ひ出して、口惜しうございます。いゝ色でしたもの。

自動車の事、どうも知れやしなかつたかといふ氣がします、それが少し面白くも思はれますの。でもあなたはお困りなさるでせうね。いゝ氣味よ！　本統にいゝ氣味よ…噓よ、それは噓よ。私惡戲好きですから、御用心遊ばせ。

私の脣あのまゝ大事にしてあります。あなたのは？　當になりませんわね。

なんだか私は今日少しはしやいでをります。これだけ書きましたけれども、滅茶々々でお分りにならないでせう。

三月二十四日

十八

隣室の學生は二晩ゐて、本館の方へ移つて終ひました。なぜだかに私に分りませんけれどもさうなつてみると、やつぱり私は人から離れてゐた方がいゝと思ひます。あなたの事思ふのにいゝからです。

この間あなたを仕合せ過ぎる方と申しましたらう。あれは九州の人可哀想だと思つたからさう申上げましたのよ。あの人こそ病氣ではあり、淋しい本統の獨法師です　私と文通をしてあの人の枯野のやうな心に初めてかすかな春が音づれたと書いてありました。短い私との友情の期間は思へば幸福だつたとも書いてありました。

もし私にあなたといふものがなければ、どんなにもあの人を愛して上げる事が出來たでせう。同樣私の夫も愛する事が出來たでせう。私はあなたのために大きな幸福を得ました、その代り數多くの幸福を捨てて惜みませんでした。十のものを唯一つのあなたに代へました。私はどうしてこんなに色々の人を好きになる浮氣者なのでせう。でもそれは本統は何んでもない程度なんです。この位の程度では今までも數へ切れないほどの人がありました。あなただつてきつとさうでせう。

唯あなただけには不思議な魔力で支配されてるやうに引きつけられました。あなたは私の總てです。然しあなたにとつて私は總てではないでせう！　九州の人に或は私が總てだかも知れないのに、私にとつてあの人は確かに總てでない。これを前世の約束ごと、仕方のない因果とでもいふのでせう。何事も思ふやうには行かないと申上げたら、思ふやうに行つたら大變だとおつしやいましたわね、忘れもしない去年の九月二十八日の嵐の日のこと。あの恐ろしかつた日のこと。

あなたにこんな勝手な手紙を書けるのも、いつまでの事か分りません。もつと〳〵長く書きます。書けるだけ長く書きます。あなたはもうお讀みになるのがお厭でせう。もう暫らく我慢して頂戴。

朝起きて第一に思ふのは、今日も亦あなたに手紙書く事が出來るといふ事。自分ながら變な氣がします。可哀想だと思ひます、だつてお手紙を頂く事が出來ないので、せめては書く事が樂しいとはいはなければならないのですもの。

さうして日々起つた事は何んでも皆んなお話したいんですもの。どんな下らない事までも。昨日は少し氣持が惡くつて、とても書けなかつたので、短い散歩をして來ました。一寸した草原があつて、梅や椿の咲いてゐる處へ出ましたの。それは私の大好きな散歩道の一つですのよ。

そこには穢ない子供が六人ゐて、私に「姉ちやんどこへ行くの。」つてきゝました。私は久しぶりで子供の相手になつて、鬼ごつこでもしようかと思ひましたけれど、もしその中の一人でもころんで、泣き出しでもしたら大變だからと思つてよしました。私は子供達の生々した目の光を眺めて思はず涙ぐみました。何んといふ美しい光でせう。近所でぼん／＼を買つて來て分けてやりながら、「いつまでもさうして仲よくお遊び。」といつて別れましたの。皆んなが大人しくぼん／＼を受取つて呉れたので、私どんなに嬉しかつたでせう。その中の誰れか一人にでも、「いらない」なんかと斷られたら、私泣き出したかも知れませんもの。

　さうされるのが私どんなに怖かつたのでせう。なぜなら私の小さい時はさういふ風の子でしたから。昔はそれをいゝ事と思つてゐました。今はたとひ讐敵の手からでも好意をもつて與へられるものは有難うと受けた方がいゝと思ふ心持です。けれどもあの頃の心がまるで無くなつたのでもないと見えます。人には少しすねたやうな所の見える方が、私好きです。なぜ私は僻んだ、すねた人間なのです、そのせゐでこんなに見えるのかも知れません。

夫は私をどうしても戀など出來ない女だと申しますの。そんなに見えるでせうか。「でももし私が戀した事があるとお知りになつたら却つてあなたは氣持が惡くはない？」と申しましたら、それもさうだと云つてをりました。その癖自分は幾度も戀した事があるのに、やはり私に戀人なんかあつたと聞くのは厭なのでせう。男つて隨分勝手なものですわね。

　私が聞けば、今迄にした色々な勝手なまねをいつの間にか得意で話出しますの。色々な國の女、でも日本に清い處女が待つてゐるやうな氣がした許りに、多くの人のやうな墮落はしなかつた。さうして見つけ得たのが私だ相です。

　自分が清くないから、花嫁も清くなくつても仕方がないと諦めてゐたと申しましたから、あらさう、では大變損をしたと私申しましたの。さうではございませんか。でも内心は矢張りさうではないでせう。

　どこでも夫婦は手紙を見せ合ふものだ相ですね。だから夫も私へ來る通信を見たがりますけれども、私初からさう申しましたの。どんな手紙があなた宛に來ても私見ないから、私のもあなたには一切見せませんつて。……お友達は皆んな私一人のために書いて呉れるのに、あなたにまで見せる譯には行きませんつて、きつぱり斷つて置きました。いゝ事をしました。昨日女中にもさう賴んで置きましたの。私宛の手紙はとつて置いて頂戴、あんまり澤山來ると氣まりが惡いからつて……。どうぞですからお手紙を安心して出して下さい。もう今日あたり頂ける頃と心待ちにしてゐます。なるべく時々下さい。朝の内着かなければ猶ほいゝのよ。

　大變お逢ひしたうございます。花の春と一緒に吾々にいゝ日も亦來るやうに望みをかけて筆をとゞめます。

三月二十七日

　お手紙有難う。お能の方お忙しいんですつてね。伊勢山で阿漕をなさるんですか。いゝでございませうね。……拜見致したうございます。ことによると參られるかも知れません。もしさうすれば九月以來半年ぶりですわね。

　唯今のお手紙によると、どうしても一つか二つあなたのお便りで私の手に屆かないのがありさうな氣がして、不安でたまりません……。

　明日の事かしこまりました。きつと參りませう。今度からお手紙はこゝの局宛にして下さい

ませんか。局は宿から近うございますから。あの人のお風呂に入つてゐる間に、大急ぎでこれを書いて出します…。

三月二十八日

部屋の中は又一人になりました。かうして一人あなたに書いてゐられる事はまあ何んといふ仕合でせう。今年はもうあなたに祕密な手紙など書く事はない筈だのに、神樣はどうしてか、まだ樂しい日を與へて下さいます。然しその日は何んだか短く、その上いきなり私を不運に落さうとのお思召からではないかとさへ思はれます。さう思ふと恐ろしくつて震へます。でも、私にはあなたがついてゐて下さる！　さう思つていつも心を取直しますの。

一昨日といふ日がもう十日も前のやうに思へます。私は又あの日から今日まで大層色々な事を考へて終ひました。また品川の家にゐた頃と同じやうになつて終ひました。今の身も忘れ果てたやうに。

いつぞや私は怖がらないと書いた手紙を持つて行つてぽすとに入れ、暫らく散歩してゐる間に、もう恐ろしくつて〳〵たまらなくなつて終ひました。枯れ枯れの野道を泣きたい心で歩きながら、今のまゝの心でゐては結局私の身は破滅だと氣付きました。

さうだとは思召しません？

破滅です。あなたをこれ程戀しながら、外の人を十分に愛する、そんな都合のいゝ事は出來ませんもの。だからせめてあなたをもう少し薄く思はなければならないと考へつきましたの。さうすると目が覺めたやうに、私はまあなんて大變な事をしつゝあるのかと思つて震へましたの。心があんまり泣くと身體が疲れて終ひます。私は野道の眞中で倒れ相になりました。

私は側の草原に行つて樹の根に腰を下ろし、今でも私はあなたを愛してゐるか、それとも夫の方をより多く愛してゐるかつて自分で自分にたづねました。

夫は私を愛してゐて呉れます。然しなんとなく私には物足らない所があります。私があなたを愛し、あなたに求めるやうなものを夫は決して持つてをりません。早い話が夫は心のぬけてゐる私の身體だけを得て、それで滿足してゐるらしいんです。これでも本統の愛といふものでせうか。私もあなたを戀しがり欲しがりました。然しそれはそれだけを求めてゐるのではありません。あなたの心まで得なければどうしても私の氣は濟みません。

私の戀しい人、愛する人はやつぱり一人切だと心は答へます。眞に私を愛して呉れる事の出來るのも只あなたぎりだと思ひます。（けれども時々少し悲しいの。あなたのお心がどこかへ行つて分らなくなる事があるんですもの）さうすると今まで羨んでゐた昔からの名高い物語のどんなに若い、どんなに賢い、どんなに美しい戀人達も羨ましくなくなつて終ひます。もう〳〵いそるでさまだつて、じゆりえつとさまだつて、ふらんちすかさまだつて、私は少しも羨ましくなくなりました。ゑるてるさまが死ぬまで慕はれたといふあの若い夫人を私は昔からどんなに羨ましがつたり、同じやうな仕合を欲しがつたりしたか知れませんでした。けれども今は私自身妬まれる身になりました。あなたは御存じないでせうけれども、女は妬んだり、妬まれたりするのが命です。あゝ何んて仕合でせう。私仕合でございます。

どんな場合が來てもあなたは私を知らないとはおつしやらないでせう、私もうさう信じてゐます。さう信じる事の出來る人を求めてゐましたのですから。私は私の騎士を探しあてまし

た。あなたです、あなたは強い大膽な方です。そのお心も尊いものに慕ひます。誰れに知れてもかまはない。このお言葉を聞くため、半年の間私は悶え惱んでゐたのだつたと今やつと分りました。私のやうな女の心を握るのは善惡の鍵ではございません。それだけならば戀人には限りません。それよりももつと大切なものです。云ふに云はれない不思議な氣合でございます。あなたは強い、少しも卑怯でない。あなたは美しい、その上優れた藝術を持つていらつしやる。私はまあなんて仕合でせう。から思ふのが間違つてゐませうか。間違つてゐると誰れが云ひます。私の事を私が審判かないで、誰れに審判かれようとするものです。私はさう信じさう安心してをります。

　繰返しても仕方のない事ですけれど、私は本統に取返しのつかない事して終ひましたのですもの。どうせ一度は結婚しなくてはならなかつたでせうが、私が考へたより結婚は重荷でした。結婚して得たものより、それによつて失つたり、負はされたりしたものの方がどの位多く、どの位重いか知れません。身動きが出來ません。强ひてすればどの位大勢な人を痛めねばならないか分りませんもの。私は妻として最上等の幸福を與へられたものの一人に相違ないと思つてゐますけれども、それも「妻として」です。「妻として」それほど妻といふものは厭はしいものに思へます。人は結婚して幸福でせうけれども、私には通用しない幸福です。それは私の性格から來てをりませう。娘の頃はどんなに樂しかつたでせう。心は伸々して自由でした。今一度何もかも振捨てゝ晴々しく一人になりたい、一人の幸福の尊さを思ふと、一人になり得た瞬間直ぐ死んでも恨みはないほどそれが慕はしくなります。私のこの心をどうしたら僞りでないと思へるやうに書き表はせるでせう。私奥さんは嫌ひです。最も慘めな奴隷も同じ事です……云々。

三月三十一日

　今日もいゝお天氣ですのね。波の音が靜かで鶯が鳴き風が光つてゐます。もう花もそろそろ咲きませう。

　あの小さな部屋に一人でをります。表の往來を兵隊さんが軍歌を合唱しながら澤山通ります。劍や鐵砲、重い靴の音も混り、皮とも汗ともつかない匂や埃のあがる匂がこゝまで襲つて來ます。その長い長い群が、ぞろ／＼いつまでも通ります。窓から首を出せば日の下に見えますけれども、私はこゝにぢつと坐つて目をつむつてその通るのを聞いてゐます。私はかすかに顫へてゐます。若い人々！ それだのに淋しい悲しい聲ですのね。戰さへあれば死ぬ人々！ 私がかうしてあなたの事を思つてゐるのは、あの人々に對して少し濟まなく申譯なくも考へられます。長い群は通つて終ひました。軍歌の合唱も遠くなります。あの人達を思ふのとあなたを思ふ心持とそれを比べてみたりしてゐます。

　でも私の顏は今大變に綺麗に見えます。これを書いてゐる机の向に立てかけた小さな鏡に私の顏が寫つてゐます。今日は違つた前髮に取つてみましたら、大層子供らしくなりました。目も、眉毛も、頬のふくらみも、今日はうつくしく見えます。どんなに嬉しいでせう。せめて本統にこの半分でも美しいのならどんなにいゝかと思ひます。もし今こゝへあなたが入つていらしつたら、きつと綺麗だ、可愛いつておつしやつて下さるでせう。でもあなたは遠くにいらつしやる。何をして？ どんな樂しい事をして？ 私の事なんかすつかり忘れて？

　毎日私一人で退屈だらうと皆樣がおつしや

つて下さるけれども、私一人でも一人ではないの。あなたに書くだけでも澤山の時間がかゝります。さうしてそれを出しがてら、あなたからの手紙は來てゐないかと局へ散歩へ參ります。それでなければ×××の續きを讀みます。これだけで十分一日はたちます。

あの本は大層面白うございます。一つ一つ皆んな大事件です。私の想像も出來ない世界許りです。誰れも〳〵皆んな氣に入りました。なんて綺麗な人達でせう。Lが好きです。日本には一寸類がない少女でせう。Gも面白い女で、これも好きです。かういふ生活にも自由はあるものですね。自由は求めさへすればどこにでも得られるものらしいではありませんか。CがDの處へ行く所いゝと思ひましたわ。私がCなら死ぬまでDを愛し續けます、Dがどんなに世間的に墮落をしても、善惡を忘れても、私はDが好き、女つてものはかういふものね。好きなものはどこまでも好きなの。でも自分を保護されるためにはやつぱり道德といふやうなものも賴みにしますわ。でもそれは矢張りほんの上つ皮だけの事よ。

Fがそれと知りつゝ、何ものかに引きずられて、もう後へ歸れなくなつて落ちて行く道筋、欺りに被つてゐた嘘の假面が段々假面でなくなつて終ふ順序、から云ふ人をこれ以上に描く、ことは、人間の力には望めないでせう。

「惡魔の後へついて行つても、俺はやつぱり神樣の子だ。」

Dはから云ひませう。本統にさうです。小さいだけで私はやつぱりさうなのね、さうして多くの人々も？　私はこゝへ來ると、然し少し迷ひます。私は神樣が怖くなつて來ると、祈ることも出來なくなるのですもの。神樣の前では何かあなたの手をとるのが恐ろしいのですもの。あなたどうかして私からこの心持を綺麗に取のけて下さる事出來ないでせうか……云々。

四月四日

十九

下女は玄關で彼から帽子と杖を受取つて、どうぞ奧の六疊の方へと云つた。勝手を知つた清は一人で廊下傳ひにその部屋へ通つた。座蒲團二枚向合せて敷いた中に丸胴の桐の手焙りが置いてあつた。いけた櫻炭も半分がた灰になり、疾から彼の待たれてゐたことを語つてゐた。少し座蒲團を滑らし、袂をその上一杯にふくらまして無雜作に坐り、寒くもないのに火鉢の上に手を翳した。火鉢の眞上の電燈は清の眞黑な解かしたての髮に映つて艶々と光つてゐた。

夏子の出て來るのがいつになく遲い、それに今日は何んとなく總て改まつて客扱ひされるやうにも思へた。清にとつて此部屋は六年越しの馴みなので、今更ら目を引く何ものもなかつた。せめて四尺床のうすばたに活けてある鼠柳を眺めて、受け長しの技巧的な嫌さに一寸氣を引かれながら、彼は袂から巻煙草を出してそれに火をつけた。

茶道具を持つて夏子が入つて來た。後手で襖をぴつたりと締めて、

「お待たせしましたね。」

、さう云ひながら斜に坐つた。清は彼女の顏を見たけれども、彼女は目を伏せてゐた。いつもはさうはしなかつた。何んのため態々呼びつけられたのか、清は少しそれを不安に思ひ煩ひながら、彼女の手に持つてゐる染付の急須を見やつた。……六年その長い間には二人の仲も色色に變つた、殊にこんな小さな心持のはぐれた場合などにそれを互にはつきり自覺し回顧した。煎茶は夏子の手からとろ〳〵と茶碗の底に溜つた。それを見詰めながら二人とも外の事を

考へてゐた。
「さつきは來て下さつたんですつてね。」
「えゝ一寸御近所まで用があつたし、長らく御無沙汰だし……それに是非急にお話したい事があつたので、丁度今夜は宿も留守だつたから來て頂からと思つて。」
「急な話つてなんなんです。」
「まあゆつくりにしませうね。」
「話す事は早く話して下さい。何んだかさうしないと落着かないから。」
「そんなに急がないでもいゝ事よ。……どうぞお茶でも一つ召上れ。」
夏子は茶をすゝめながら、少し微笑んでみせた。ぐづ〳〵に丸めてある束髮はやゝもすれば肉の厚い彼女の肩の上に落ちさうにした。上を向いては兩手でそれを直さうとしてゐた。腕は袖口から露はに清の目の前に出た。腕と腕の腹ではさまれたその顏は少し上氣して心持右へかしげられてゐた。常子のより夏子の腕は太い、思はずさう　清は二人の身體や心を比べて餘念なく髮を直す彼女に見とれてゐた。
今度の阿清のことから二人は暫らく能の話をしてゐたが、突然夏子は自分勝手な時、その話をこんな風に持出した。
「清さん、あなたはあんまりの人ぢやなくて。本當に情けない事をして下さるのね。」
「なぜです……。」
清は濁つたとぼけ聲を出した。
「なぜですつて？……清さんそれ所ぢやないでせう。そんな呑氣らしい事を云つてゐてどうするの。」
「……。」
「昨日中村の奧さんが態々東京からそれがため來たんですよ。知つてゐるでせう。中村さん、中村銀藏さんの事、そら常子の表向の媒人をして吳れた人の奧さんですわ。……それも松本家から續く内々で賴まれて來たんですつて。」
彼女は右手で一寸繻子の帶の上から橫腹を叩いて、思はず溜息をした。
「尤も定雄さんにはまだ何んにも云つてないんだ相ですが、あなたが××館宛で常子へお出しになつた手紙も持つて來たことよ。……それから前月の二十一日、あなたは常子と一緒に向島へ行つて？」
「……。」
「行つたでせう！」
「……。」
「隱したつて駄目よ。それから分つたんですつてね。定雄さんの兄さんが常子を途中で見かけたんで、不思議に思ひ自動車の番號を覺えて置いて調べたから、直ぐもうあなた方のした事は手に取るやうに分つて終つたんですつて、中村の奧さんからその話を聞きながら私ははら〳〵しましたよ。」
夏子は默つて暫らく高く持上つた自分の膝を見て涙ぐんでゐた。
「本統にあなたもあなただけども、常子の大膽たのには呆れ返つて終ひましたよ。たつた此間片づいた許りぢやありませんか　それに……」
彼女の目からは急に泪がぽら〳〵とその膝の上にこぼれた。
「それに兄さん（常子の父）もあんなだつたし……」
夏子は自分の身の上を考へ溜息をついたが、少し語調を變へ、
「あの子は小さい時からしんねりむつつりはしてゐたけれど、まさかこんな事はし相にも見えない、陰氣らしい子だつた。いつでしたね、さう〳〵九月の中頃あなたが下痢でねてゐた時、私見舞に行つた事があつたでせう。あの時思はず枕の下にあつた常子の手紙を見て私びつくりしたんでしたわ。仲々な子だと思ひました。…

……お傍に行つてお世話がしたいから、急ごしらへの看護婦になりませうか、なんて書いてあつたんですもの……よくあんなづう／＼しい考が浮ぶものだとつく／＼末恐ろしい氣がしましたつけ。あなたには態と何んにも云はなかつたけれども、その時直ぐ姉に丈けは内々で要心するやうに注意して置いたには置いたけれど、女の末つ子といふので姉さんもあんまり甘やかし過ぎるし、あなたの職業から、妙に世間であなたを別扱ひにするんですもの。それが皆んな悪かつたの。で實は常子の緣談もそれで早くしたの。嫁にさへやればと思つたのも油斷ね。清さんて相手が相手だもの、そんな事なんか頓着しやしないわね……。」

清は蒼ざめてゐた、二重三重の恐怖は身體をぶる／＼震はせた。然し夏子も同樣に震へてゐた。そこまで來ると急に言葉は淀んで終つた。

彼女が…………二十五の時、清は二十一だつた。たつた一人の自分の子供に態々清子といふ名をつけたのも彼女ではなかつたか。

「こんな事私の口からあなたに云つたつて、あなたは蚊に刺されたほどにも思はないでせうね。あなたにすれば却つてお腹の中で私を嗤つていらつしやるでせう！　きつとさうよ。……さう思ふと私はもうどうしていゝか分らなくなつて、唯死んでお詫がしたくなる。あなたには私、きつと私が一番悪い、さう思つてゐるでせう。きつとさうよ。私が一番悪いんです、それはさうですわ。だから死んで姉さんにも、松本家にも、中村さんにも……常子にも詫を云ひませう。……ねえ清さん、あなたがさういふ風に考へて下されば、私はもう誰れにも合せる顔はありませんもの。第一あなたにだつて、この頭は上りませんわ、……あなた皆んな覺えてゐるでせう。だからこんな事云ふ私がさぞ憎らしいでせう。腹が立つでせうね。」

彼女は暫らく打俯いて泣いてゐた。

「でも清さん、私はあなたにも云分はある事よ。あなたが學校を出た許りの時から、今日までどの位陰になり日向になり、出來るだけの事して上げたか、なぜそんなにしたか、その私の心持丈けは分つて下さるんでせうね。何一つでもあなたのためにならないやうな事私した覺えはなくつてよ？　それだのに今度と云ふ今度はこんなになるまで常子の事をこれん許りも打明けて下さらないんだもの。なぜ早くなんとか云つては下さらなかつたの。こつちから何度言出さうかと思つたか知れないけれども、今に云つて下さるか、今か今かと思つてゐたのよ、本統にあんまりでせう。

今までだつてつまらない女の事で何遍か私にも相談して下すつた事があつたのに、常子は私の姪ぢやありませんか、初めて常子に引逢はせたのも私ぢやありませんか。あなたと常子がそれほどの仲ならばどうにでも仕やうがありましたものに、あんまり水臭い仕方をなさるわね。情けないと思つてよ。あの七月のお祭の日の事も、あの手紙の事も、腹にすゑかねるほど私口惜しかつたわ。あなたの浮氣は諦めてゐても、今度ほど怨めしく思つた事はないの。それに常子が憎らしいんですもの。姪の癖になんだつて叔母の顔に泥をぬるやうな事をするんでせう。、私が清さん清さんて大騒ぎしてゐるのは常子だつて百も承知してゐる筈なのに……お能が好きになつたのも、あなたが好きになつたのも、もとは皆んな私のお仕込みぢやないの……本統になまいきな子ね。あなただつてさうよ。誰れにでも聞いてごらんなさい、どの位私があなたを大切に思つてゐるか。陰に廻つては、後指一つ人にさゝせないやうにしてゐるのに、厭よあなたは何んともそれを思つて下さらないなんて。私があなたを贔屓だつて事、皆んなが知つ

てゐますよ、それにまるで他人か、かたきのやうに、眞正面から私に恥をかゝせるやうな事なさるんですもの。私どうしていゝか分らなくなつて終つてよ。せめて私の百分の一でも、千分の一でもいゝから、私の事も考へて下さらない。ね、いゝでせう。考へて下さる、下さいね、きつとよ。そんなあやふやな返事いや、……いや……ではきつと誓つて下さい。さうすれば私にだつて考がありますもの……。」

彼女の考といふのは清と常子との間に起つた忌はしい今度の事件が大事に至らない前に、中村の奥さんと自分との二人に一切をあげて任せては呉れまいか。もしさうして呉れるならば、非常な破綻を見せずに、常子の幸福を計る事も、清の面目を保つ事も出來るやうどうにか盡力してみたいからといふのであつた。

夏子の聲は初めて清に恐ろしかつた。何を恐れるといふ事なしに、唯その聲、その目が恐ろしかつた。夏子の云分には正當な條理に合はない點もあつた。矛盾もあつた。又二人の關係が暴露された場合を思つて豫め不安を感ずるものは清一人に限られてゐる譯でもなかつた。又二人の交情がこれ切り斷れる未練は清より夏子の方により多かつたかも知れない。だから清が優勢な態度を取らうとすれば、取れない筈はなかつた。それだのに清は自分の犯した罪科といふより單に夏子を恐れて、意氣地なく震へてゐた。彼女の嫉妬憤怒が次第に緩み、その聲が和げられ、幾分づつ憐憫の調子に變つて來ると清はやつと胸を撫で下ろし蘇生の思をした。

「これはあなたや、松本家許りのためではないのよ。本統にあなたが常子を可哀想だと思つてやつて下さるなら、ね、どうぞさうして下さい。私達は決して二人の不爲になるやうにはしませんから。いくら莫迦にされたり、酷い目に逢はされたりしたつて、常子はやつぱり私の姪ですし、あなたはあなたですもの……自分や一家の恥を曝らすやうな事がどうして私に出來ます……私の心持よくあなたには分るでせう。何もかも忘れてあなた方を許さう、あなた方の味方にならうと私してゐるのよ。」

何を夏子が許し、何を二人が許されるのか、それは考へてみなかつたけれども、清は夏子の感情がやつと和げられて來たのと、許す味方になると云はれた許りで、もうすつかり有頂天になつて、責任の幾分を彼女に讓つて終つたやうにひたすら喜んだ。憐れにも今常子の彼に對する深い信頼も戀も何もかも危く忘れられようとしてゐる。二人にとつて最も危險な瀨戸際及び將來は一切をあげて、その戀敵である夏子に委ねられようとしてゐるのである。夏子が常子をどうしようと思つてゐるのか、常子が夏子をどう思ふだらうか、それ等に關して清はまるで盲目だつた。

彼が遲い晩餐を振舞はれて、下田家の門を出たのは十時半だつた。月があつて、空も地上も霞んでゐた。彼は全く意氣銷沈の有樣で首を下げたまゝ、月光の滲み込んでゐる白つぽい往來を見詰めながらこそ〳〵と歸つて來た。目前に横る事件の漠然たる輪廓しか彼には見えなかつた。どこをどう突き破つて、どう云ふ風に進んで行けばいゝのか、それ等に對する見當はつかなかつた。そこで自然夏子に云はれたまゝ彼女を頼みにする外はなかつた。彼女に任せて置けば甘くか下手にか、どちらかに片がついて行くだらう位に考へてゐた。なぜなら彼女以上に甘くこの場を切り拔ける名案はとても清にも思付相でなかつたからである。

彼はいつの間にか夢中で家に歸つて來てゐた。玄關で下駄をはいたまゝこつぷに水を貰つて立續けに二三杯飲んだ。喉が渇いて眩暈がして倒れ相だつた。

二十

手が顫へて書けません。何度も書きかけては、あとからあとから込上げて來る涙にぬれて、書きかけた紙を濡らしてしまひます。今私はまあ何んといふ恐ろしい陷穽に落ちて終つたのでせうね、清樣。あなたはどんなにお困りでせう、どんなに御迷惑でせう、どんなに歎いていらつしやるでせう。さうしてこの先どうしようとしていらつしやるの、どうぞそれを私に聞かせて下さいまし。私はもう考へることも、書くことも出來なくなつて終ひました。

　昨晩品川へ參りました歸り、局へ廻つてお手紙を受取り、暗闇を大急ぎで宿へ戻り、明るい樣々な希望にかられながらそれを讀み初めました。あゝその時の驚き！　まるで魂消える許りでした。どうしませう。お手紙を顏にあてゝわつと泣きました。

　そこへ折惡しく夫が歸つて參りました。まだ何んにも知つてはゐません。初めは驚いたり、少し疑つたりしてゐながらも、親切に勞はつて、どうしたのだと色々なだめて呉れました。けれど、さうされゝばされる程私は泣きたくなりました。品川からお母さんに叱られて歸つて來たと、罪もない人を罪にして僞はりましたので、夫は一層心を痛め、骨折つて慰めてゐました。夫の前でこんなに泣いた事は初めてですからことによると却つて嬉しく、可愛らしくも感じたのでせう。あゝ、然しもしそれと知つたら、どんな苦みに夫は惱み、どんなに私を憎んだでせう。その場で直ぐ私を打つたり、蹴つたりしたかも、殺して終つたかも知れませんのに。さう思ふともう切なくなつて總てを打ち明けて終ひたいと思ひました。けれども、いや〳〵私だけの事ではない。大切な大切なあなたがある、さう思ひ返しながら勇氣をつけて、恥ぢながら詫びながら身を悶えて泣きました。熱い涙は目からも、鼻からも……喉からも止め度がございませんでした。

　どうして私達はこんな慘めな、恥かしい面目ない罪人になつて終つたでせう。いゝえ、もとから罪人でした。けれどもかうたつて始めてそれが本統に分りました。目が覺めたやうに、夜が晝になつたやうにはつきり目の前に私達の姿が表はれました。なぜ知れて終つたのでせう、なぜもとのまゝでゐなかつたのでせう、それが口惜しい、然し考へてみれば私達は當然な處へとう〳〵來たのでございませう。

　私は一晩中はまんぢりともせず、夫のそばで考へました。夫はすや〳〵こゝろよげに安眠してゐます。明りを消した床の中で考へる位執念深く考へられるものはありません。でも私は何を考へました。とう〳〵當然な處へ來て終つたと、考へるのが考の終ひで、また始めでした。考は唯渦卷のやうにぐる〳〵廻つてゐる許りでした。

　夜が明けてから寢苦しい眠に入つたかと思ふと、直ぐ夢を見ました。あなたの目は涙に濡れ、あなたの胸は板で押へつけられてゐるやうに苦しいといふ夢でした。

　私は病氣だと云つて起きませんでした。夫は心配しながらも先程出て參りました。本統に私は病氣でございます。こんなに心が痛められ惱んでゐるのに、肉體が丈夫だからといつて、それで病氣でないといふ筈はございません。

　私はどうかしてあなたにお目にかゝり度い。一寸でもいゝからお目にかゝつてあなたのお心持を伺ひたい。又私の決心も聞いて頂き度い。それまでに私も決心を致しませう！　もしそれまでに決心が出來なくつてもお目にかゝりさへすれば、その瞬間にきつと決心がつきませう。

私の前にはあんまり澤山道が見え過ぎます。でもそのどこへ進みませう。道はこんがらかつた綛のやうで見詰めてゐるうちに、どれがどうなるのか少しも分らなくなつて終ひます。

では御返事を直ぐ下さいまし。きつと逢はせて下さい。私は私の心を、どんなにさいなまれてもいゝから、あなたのそれを安らかにさせませう。どうぞいつまでも常子を忘れないで下さい。私を思つてさへ下されば、きつとあなたのお心は輕くなります。私はさう命がけで祈つてゐます。どうぞきつと忘れないでどんな苦しい時でも私を思出して下さい。

四月七日

あゝあなたは、清樣、あなたは私をお見捨てなさらうとなさるの、もう今日は九日の晩です。その二日の間私はどれほど苦みましたらう。ごらんなさい私の顔を！　私の目の色はこんなに物凄く光つてゐます。おゝ！　自分ながら恐ろしうございます。誰れか部屋の中へ來てくれなければとても私は一人でぢつとしてゐられません、恐ろしい。私が今こんなに恐れてゐるのは罪でも罰でも、そんなものではありません、常子です、この恐ろしい常子です。鏡をごらんなさい、私が寫つてゐます、若いまゝの、美しいまゝの私が寫つてゐます。

なぜ直ぐ御返事を下さいません。私は恥しさを忘れ今日は三度も局へ參りました。まだ參りませんか、終ひにはかう尋ねましたが、お手紙は來てゐませんでした。……あゝ清樣！

もしあなたが私から離れて行つてお終ひになるのならば、私はあなたを思切らうかと考へてみました。それが一番穩當な事らしく思へましたの。さうして私は一切を夫に打明けて詫び、離縁して貰ひませう。夫の名譽のためにも、私のためにも、家のためにも一番それがいゝでせう。それよりも第一あなたのためにもきつとそれが一番よくはないでせうか、私は今誰れにいゝ事を考へようより、あなた一人のためにいゝ事を考へればそれでいゝのですわ。それにはどうしても私があなたを思ひ切らなければならないのだと氣付きました、それはどんなに辛いでせう、私の命をとられて終ふ事ですもの。然し私は先からいかなる犠牲でもあなたのために拂ふと誓つてゐました、今その時が來ました。あなたのためにならばきつと笑つて死ねます。どんな慘めな殺され方でも怨みは致しません。こんな不安とこんな苦しい涙とを取除いてくれるものがもしあれば、それは極樂です。

私は泣いてをります。泣きながら神妙にあなたからお指圖の來るのを待つてゐます。あなたは私をお見捨てになりません、あゝさうでした。一寸でもあなたを疑つたのは惡うございました。どうぞ許して下さい。私はあなたをいつも信じてをりました。あなたが私に誓つて下さつた言葉は一つ殘らず胸に甦つて來ます。私はあなたを信じてゐます。いつまでもこの心を變へずに信じてゐませうね。

あなたは大膽で賢くいらしつた。いつでも二人の行く道をちやんと選んで教へて下さつた。それがために私の歩いて來た過去の世界はあんなに美しく樂しかつた。いかほどその過去の行爲が今私を苦めても、過去は過去として悔いようとは思ひません。今の慘めさだけが、この今の私達だけが怨めしく、情けなくなります。

そんな事考へないで、もと通りいつまでも愛し合ひませうね。どうぞいつまでもいつまでも愛してゐて下さい。私は誓ひませう、きつとそれは出來ると。形の上ではあなたか、私かの

死ぬ時があぢうでも、死んでも愛し合ひませうね、きつと。
　あなたにそれが出來ますか。私には出來ます。きつとやりとげます。それが私の生涯の事業でせう。厭になつたらよす、困つたらよすなんて事は人間として此上ない恥かしい事ではありませんか。そんな醜い心は人間の心ではありませんわね。出來ると確信するのが出來るといふ事でせう。私達にそれが出來ないといふ事はない筈ですもの。
　愛だけならゆるぐかも知れませんけれども、私は愛してゐる上に信じてゐます。でもあなたは私を信じてゐて下さるの？　どうぞ云つて下さい。今まで一度もそれを言つて頂きませんでした。あなたは只私を可愛がつて下さつただけ？　それとももつとそれ以上のものがあつて、どう？　どうぞそれを聞かせて下さい。
　あなたを疑つてゐるのぢあないの。さうおとりになつては厭、でも聞かせて下さい。今はその時が來たのですもの。……云々。

　　四月十日

　昨夜手紙を差上げた後へとう／＼叔母から手紙が參りました。至急會ひたいから、明日内へ來るやうにつて……あゝ私はもう何も恐ろしくなくなりかけてゐます。けれども手紙のなかに氣に入らない箇處がありましたので、一層私は煩悶しました。で知んでも行くまいと思つてゐましたが、今朝局へ行つてお手紙を受取つてみて、それではやはり行つた方がいゝのかしらと思ひ直しました。
　ではどうしても參らなければならないのでせうか。厭で厭で仕方がございません。今の私がどうして叔母に顔を合せられます。あなたのお指圖ですけれども、餘り慘酷でございませう！　どうしても氣が進みません。では思ひ切つて參りませうか。行かうか行くまいか、行つた結果はどうなりませう。不安で不安でたまりません。
　では思切つてつらい思をしに參りませうか。一時にこゝを出かけます。その代り五時頃までに櫻木町まで戻つて參るやうに致しますから、あなたはそこへ來てゐて下さいませんか。きつと來てゐて下さい。少し位遲れても必ず待つてゐて下さいましね。ではきつとお待ちします。
　私は叔母に逢ふより、あなたに逢ふため、そちらに參るのでございます。もう手紙では駄目です。後程お目にかゝつて……氣がせきますから。

　　四月十一日、朝

　二時半頃清はこの手紙を領事館で停車場から來た使ひの車夫に受取つた。彼は散々思ひ迷つた。事件の解決がちやんとつくまでは常子とは逢はない、文通もしないと堅く彼は夏子に誓つたのである。然し今からして常子の手紙を受取つてみると、夏子との約束より常子の身の上が餘計心配でならなくなつた。彼は誰れにも信實な戀人でなかつたやうに、又誰れにも不實な無情な男にもなれなかつた。
　もう彼はぢつとしてゐられなかつた。蒼い顔をして室の内をあちこち歩き廻りながら、散々又迷つた揚句、やつぱり常子に逢はうと思つた。一度逢ひたいと思ふと、無暗に逢ひたくなつた。四時頃から慌てゝ彼は領事館を飛び出して終つた。

二十一

　お別れして歸りながらも不安に顫へてをりました。私の方が先に歸つても、夫の方が先で

も恐ろしいと思ひました。祈るにももう祈れない身ですから、苦痛は私を唯打ちのめさうとしてゐました。けれども歸つたのは私の方が先きでした。

歸つて來ると間もなく夫は床に就いて眠入つて終ひました。私も伏せるには伏せりましたが、目をあいてゐるのか、つぶつてゐるのか分りません。考は見えるやうに目の前を幻になつて通りました。どれもどれもはつきりしてゐて考とは思へない程でした。皆ながそのまゝ事實のやうに私を脅しました。私は身の置所もなく床の中で恐れて震へてゐました。

三時頃でした、私は夢中で夫を呼び醒しました。夫が驚いて床の上に坐り直ると、その膝の上に顏を押しあてたまゝ私はわつと泣きました、私はとう／＼總てを夫に打明けて終つたのです。どうぞ私のこの無謀な行爲を御許し下さい。でも夫は許してやると云つてくれました。終ひには、お前の決心を翻し、どうかこれからいゝ妻になつて、いつまでも一緒にゐてくれと歎願しながら、私と一緒に泣いて呉れました。

いつの間にか朝になつてゐました。

夫は外出しようとは致しませんでした。二人はやゝもすれば默つたまゝ海の方を眺め、時時溜息をついて許りゐました。午まへ湯に入つて氣持がよくなつたからと云つて私は化粧などし、晴々した顏を夫に見せました。別れたあとまでも、私の事を美しく思ひ出して貰ひたかつたのでございます。さう思ふ心は獨りで泣いてゐました。

兎も角京橋に行つて下さい、私は必ずおとなしく待つてゐますからと先刻無理に夫を出してやりました。夫に宛てた詫狀はもう書いて終ひました。

どんなに夫が私を引留めてくれましても、亦私が夫の寛大な切ない心に同情しましても、このまゝこゝに私が止つてゐる譯には參りません。この決心を了解して下さるのは天にも地にもあなた一人切りと思ひます。それでよろしうございます。常は滿足してこの悲しい部屋を出て參りませう。

今更ら私はあなたに何んにも云ふ事はございません。今迄に云ひたいだけの事は大方云つて終ひました。もし云ひ殘した事があつたとしても、此際それは皆んな無用な事になつて終ひました。

私はこれから風呂敷包一つ持つたまゝ櫻の咲いてゐる品川の家へ歸ります。夫は直ぐ私を離縁しても呉れますまいが、そのうちには記憶も薄らぎ段々私を忘れて呉れませう。その間に私もゆつくり考へたり、泣いたり致します。

夫は本統に不幸でした、可哀想でした。然しこの上私がそばにゐるのは益々夫を不幸にする許りでございませう。私はどうしても自らこを追ひ出さなければなりません。

私は自分を幸福とか、不幸とかいふ世間並な言葉で批評しようとは思つてをりません。これが私にとつて本統の不幸かどうか、誰れが知つてゐませう。もし私があなたを怨んでゐるだらうと思召になるなら、それだけはおやめ下さい。私はあなたを怨んではをりません。唯これから先あなたの御迷惑になるまいと心がけてをる許りです。

私達の戀はもう夕暮だと昨夕おつしやいましたのね。ではもうぢき夜が來ませう。それも仕方がございません。

もうお目にかゝる事も、手紙を差上げる事もございますまい。ではどうぞ御大事に……。

あなたは私を最後の焔だとおつしやつてね。私はそれを信じたうございます。でも私は今おそばを離れて參ります。そんな事申しても今

更ら甲斐のない事でございます。あゝ苦しうございます。あなたはこれからどんなにも御幸福にお榮え遊ばしませ、あゝもう何も申上げますまい。どうぞ私にこの先の事を云つたりする事をさせないで下さいまし。もう書けません。唯一言清樣、四月十日までは戀しう戀しうございました。唯それだけ、これはきつと死ぬまで忘れずに思ひ續けてゐるでせう。

四月十二日

二十二

中三月おいて、七月十二日の朝刊新聞に中根清と松本定雄の妻常子とが、房州大原の海岸で心中したといふ記事が出た。清の位置職業の目立つただけに當時世間の話題を賑はした。記憶のいゝ讀者は地方通信員が書いたらしい二人の着物の報告なども思ひ出すかも知れない。

十日午前六時大原町××の海岸に縮緬の扱きにて結び合せたる若き男女の抱合死體漂着、警察署より係官出張檢視したるに……云々。男は二十五六歳、紺御召の夏羽織に結城の單衣を着し、獻上博多の角帶を締め、一見相場師か藝人體の美男にして、懷中せる紙入中には現金二百圓餘を所持し……云々。又女は年齡十八九歳位、丈高く丸顏の頗る美人にして、左手に寶石入りの指環三個まで嵌め、派手な金紗縮緬の羽織に夏菊と撫子の模樣ある御召を着し、絽縮珍の花模樣刺繍入りの帶を締め、藤の高彫美事なる金金具の帶留を付け、懷中には横濱××館にて撮影せる男の寫眞一枚を所持しゐたり、此兩人は……云々。

こんな風にいゝ加減な事がさも事實らしく田舍めいて書いてあつた。

常子が品川に歸つてから清は二度も三度も手紙を出したが、一度も返事は來ずに五六の二月は空しく過ぎて終つた。其頃から清は人が變つたやうに陰鬱になつてゐた、自分では神經衰弱のためだと他に云つてゐた。

七月の初頃松本定雄は神戸へ赴任する事になつた。それを機會に幾度か交渉のあつた常子の歸宅が再び問題になつた。其時になつて常子は初めて清に返事を出した。その手紙の日附は七月の一日だつた。清も直ぐそれに返事を書いた。

七月五日第一日曜日、中村銀藏の屋敷へ松本、水澤兩家の代表者及び下田夫婦が集まつて所謂親類會議が開かれた。その席に常子も呼び出された。彼女は口を緘して罪人のやうに首垂れ飽くまで默つてゐた。會議は頗る順潮に運んで行つた。そのうち夏子が二言三言常子に向つて何か云つたかと思ふと、常子は突然顏を上げて叔母に喰つてかゝつた。顏の色は憤怒と嫉妬に燃えて火のやうに輝いた。

「叔母さん！ 叔母さんの前ですけれども、あなただつてそんな事を云はれた義理ではないではございませんか。私は清さんを思へばこそ、かうして罪を悔いて謹愼してをります。これでもまだ足りないとおつしやるんですか。あなたはもつと私をどうかしたいのですか。叔母さんは清さんを私から奪ひたい許りにそんな色々な難題を持ちかけて私をお虐めになるのね。私それだからちつとも御親切とは思ひません。……私も皆樣の前で何もかも申上げて終ひます……。」

から云つて義理も恥も忘れ果てたやうに泣き狂ひ、夏子と清との長い間の關係を訴へ且つ口を極めて罵つたので、會議の席は見る見る蜂の巣をひつくり返したやうな騷ぎになつて

終つた。夏子の夫の下田忠次がいかに寛大でも、その場の突然な出來事に對しどうにも手のつけやうがなかつた。夏子も初めて自分のやり過ぎに氣付き、後悔し、腹立て、泣いたが今更ら追着く事でもなかつた。

常子が淸と突然姿を隱したのはその會議の翌翌日の出來事であつた。遺書が東京へ着いてからも死骸は上らなかつた。大原へ急行した淸の養父、定雄、常子の母や兄は、死んだ二人の泊つてゐた××樓の二階の廊下へ出ては廣い海の上であてどもなく網を引いてゐる漁船の群を茫然と眺め、その底に漂つてゐる若い男女の死體を思つては涙にくれた。彼等は空しく二晩そこへ泊つて死體の上るのを待つ間、二人のために建てる比翼塚の相談などをしてゐた位、內心もう彼等の戀を憐み、その美しさを惜んでゐた。

投身してから五日目の朝、ひとりでに死骸は岸へ打上げられた。二人の眼は四つながら魚の餌食になつて、頗る美人どころか二目とは見られない姿に變つてゐた。

街は樣々な事が傳へられた。

二人が折角身を隱しに來たこの旅館に運惡くも羽田の××館にゐた料理番がゐるのを着いた翌朝偶然常子が見付けた。その時彼女の顏は土のやうになつたとか、その當日の明け方四時近くなつて、朗々たる淸の謠曲の聲を聞いたものがあるとかいふ類の事であつた。

淸の遺書の一節には、自分は社會に對する責任を自覺すればするだけ、どうすることも出來ない重苦しい大きな力の壓迫を感じる。その力は自分を生かして置くまいとする意志であることを悟つた。然しこの瀨戶になつてもまだ戀を疑つてゐる。どうしても死ぬほど戀を信ずる事が出來ないのが殘念だ。一生に唯一度でいゝから本統に戀を感じてみたい。もし死、その瞬間にでも心から常子が自分を信じ戀してくれたやうに、自分も彼女の總てを信ずる事が出來たなら、それはどんな幸福な死か知れない。といふ意味が書かれてゐたといふし、常子のには、自分は決して罪を悔いて身を滅すのではない、戀に醉つて醉つて此上もう醉ふ事が出來なくなつたのだから、あの夏子から淸を奪ひとつて一緖に死ぬまでだといふやうな事が書かれてゐた。

でも淸が橫濱の家を出た時、果して心中する迄の覺悟があつたかどうか、それが疑問にされてゐたが、次の日曜の正午、淸の養母がぼんぼん時計をかけようとして、鍵の入つてゐる分銅の函をあけたら、その中の片隅に彼の實印と銀行の通帳がちやんと隱してあつたといふ事である。

(大正八年十二月九日、野方村にて)

死は暗夜に飛ぶ流星のやうな感動である。突然表はれて、すぐまた見えなくなる、その束の間の感動である。

死は又音高く無限に放たれた强弓のやうである。その弦音に驚いて空を見詰める間に、矢はもう見失はれて終ふ。

死者はその親しい見送りの人々に正しい路を示しつゝ海路を分け行く帆船に似てゐる。やがて帆影が消え、一條の船腳のあとも消える。海は又もとのまゝの海に歸つて終ふ。

海が死だといふのではない。帆船が死者だといふのでもない。

吾々の傍から旅立つごとに人は驚いて死を見守る。吾々は自ら死ぬ時まで死を識ることは出來ないが、この感動によつて死を見詰める。

(「白夜雨言」の「死とは」より)

年譜

明治十五年
十一月廿六日、横濱市月岡町稅關官舍に生る。當時父、武は横濱稅關々長たり。壬午歲に生れたるの故を以て壬生馬と命名。

明治二十一年
横濱師範學校附屬小學校に入學す。

明治二十四年
七月父國債局長として東京に轉任せる爲め、一家を擧げて東京麴町永田町官邸に移る。——麴町小學校に轉學。

明治二十六年
五月父の退官の共に鎌倉由井濱に移住。——神奈川縣師範附屬鎌倉小學校に轉學。

明治二十七年
十一月父の實業界に入れるを機會に復び東京に出づ。

明治二十八年
一月學習院入學。九月中等科に進級。この頃より古典文學及び蕪村・藤村等の作品を耽讀す。

明治三十年
十人近くの友人、志賀直哉、田村寛貞、等と共に、「睦友會雜誌」と題せる廻覽雜誌を創立す。——この頃近衞院長が全學生に向つて懸賞文を課せし時、上級生を凌いで一等賞を受けたることあり。

明治三十三年
三月肋膜炎に罹る。——五月、鎌倉に轉地。——夏、熱海、銚子などに遊び、翌年九州に旅行し、父の鄕里なる鹿兒島に赴き、川内平佐村に留る。——同地に於てカトリックの僧に會ふ。伊太利語等を能くする人にして、宗敎談、伊太利文學藝術の話などを聽き、伊太利に興味を持ち始む。落第す。

明治三十四年
七月外國語學校伊太利語科に受驗入學。

明治三十七年
七月同校卒業。——即日、洋畫を學ぶ決心にて、藤島武二氏へ入門、その畫塾に寄寓す。

明治三十八年
四月、藤島氏の畫塾を去る。
六月十三日、伊太利留學のため、獨逸船ローンに便乘し、日本を去る。シンガポールにて日本海々戰の報に接す。——ナポリ港上陸。
夏期中、青年畫家增井清次郎と共に、ロッカディパアパアといへる避暑地に赴く。『蝙蝠の如く』は、この畫家をモデルとして、その當時の經驗を描けるものなり。——秋、アカデミー・ド・フランスに入學す、當時カロルス・デュラン氏院長たり。
十一月、羅馬國立美術學校に入學す。

明治三十九年
夏、カッシイノ、アブルチア、オルヴィエト地

方を旅行す。九月――アメリカ留學中の兄武郎歐羅巴漫遊のため、ナポリへ上陸、ポンペイ、アマルフィ半島地方を旅行し、更らに羅馬を振出しにフロレンス、ボロニア、ヴェニスの諸所を經てミラノに赴き、當時同所に於て開催中の萬國博覽會を見物せり。是よりスキッツルに入り、諸市を遊覽したる後、シャツハウゼンに暫く滯在し、同地に在るグスタアヴ・ガムペル、ブッフマン等の文學者美術家の群と交遊せり。後、ミュンヘン、ニュールベルヒ、ドレスデン、ライプチヒを經て、ベルリンに入り、それよりウィッテンベルヒに出で、諸詩星の舊蹟たるワイマアに赴く。尙フランクフルト、ケルンを經て和蘭に入り、ベルギイに出で、諸都市を一見して巴里に赴く。

明治四十年

二月巴里より英吉利に赴き、歸朝する武郎を見送り、巴里に留學の決心をなす。――グランド・ショミエル等に通學し、コラン、プリネー氏等の教授を受く。

明治四十一年

アンヂャベルに就きて彫刻を學ぶ。――夏、スキソツルに旅行し、秋巴里に歸る。――この時開催せられたるセザンヌの回顧展覽會を見て、學校教育に嫌惡を感じ、遂に廢學して、自らアトリエを持ち制作に耽る。――ラムブランの「居牛」をルウヴルに模寫す。

明治四十二年

一月南佛蘭西に旅行し、梅原龍三郎、秋山謙藏氏等とマントンに滯在。伊太利に旅行し、ピザを經て羅馬に出で、ナポリに赴く。復び北に上り、フロレンス及びヴェニス、ミラノを經て、マントンに歸る。それよりマルセイユ、グロノオブル、エピナル、アルサス・ロートリンゲン、ナンシイを經て巴里に歸る。――巴里滯在中交遊せる人々――藤島武二、湯淺一郎、荻原守衞、高村光太郎、山下新太郎、齋藤豐作、齋藤與里、白瀧幾之助、南薰造、梅原龍三郎氏等あり。

明治四十三年

マルセイユより宮崎丸にて印度洋を通りて歸朝。麹町下六番町に居を構ふ。――雜誌「白樺」創刊せられ、同誌に寄稿す。若し「白樺」出でざりしならば、或は遂に文筆を執るに至らざりしやも知れず。

七月四日、上野竹之臺に於て白樺社主催の下にて南薰造氏と共に滯歐記念展覽會を開催し、七十點の制作を出品せり。南薰造氏五十四點。これ恐らく日本に於ける個人展覽會の嚆矢ならん。

十一月、原田信子と結婚し、京阪地方へ旅行す。――この年ケーベル博士の肖像を畫く。

明治四十四年

八月長女を擧げ、曉子と命名。

――兄に伴はれて北海道に旅行す。――文部省展覽會に「宿屋の裏庭」を出品す。

大正元年

秋、白樺社主催の下に落選展覽會を赤阪三會堂に於て開催す。これ文展の審査に落選せる自信ある諸家の作品を集めしものなり。

大正二年

二月、最初の短篇集『蝙蝠の如く』を洛陽堂より出版。――秋、文部省展覽會洋畫部に第二科併設の議を同志と共に當局に建議せるも容れられず、遂に文部省より獨立して、第二

科美術展覽會を起すに至れり。

大正三年

四月、上野美術學校に於て「セザンヌの建設」なる題下に處女講演をなす。

夏、甲州舟津に滯在、その間になれる制作を第一回二科美術展覽會に「鬼」「不二」「村の一角」等六點出品。――十月、神田青年會館に於て「戰爭と美術家」なる講演をなし、大戰後の趨勢を豫言す。

大正四年

六月、『歌人』（短篇集）を鈴木三重吉氏編現代名作集の一（第十七編）として出版。――九月鈴木三重吉氏の勸めにより『死ぬほど』を新小說に發表。これ「白樺」以外の雜誌に寄稿せる最初のものなり。

秋、朝鮮――滿洲――奉天――北京等を父と共に旅行す。

大正五年

五月、里方の提議にて妻信子との間に離婚問題起り、幾多の紛紜を重ねたる後、遂に離婚するの已むなきに至る。

六月、第二の短篇集『南歐の日』を新潮社より出版。風俗壞亂の故をもつて發賣禁止となる。後忌諱に觸れたる作品「鳩飼ふ娘」を改竄して改版を出す。

八月嫂安子死す――輕井澤に赴き兄武郎の肖像を畫く。第三回二科展へ「或る詩人の肖像」「切通し坂」等出品。――紐育メトロポリタン座に於て演ずるオペラ「イリス」の背景を圖案す。

十月十九日、妻信子原田家より遁れて歸宅し、遂に原田家と斷つ。

十二月四日、父武を失ふ。

大正六年

九月、二科展覽會に「蚊帳」「カナリヤ」「金魚」「釣」を出品す。――同月新進作家叢書第七篇として『暴君へ』出版。六月末九年間居住せし家より、その隣家の角屋敷現住宅へ轉居。

大正七年

武郎の一家と共に鎌倉泉谷に避寒。四月一家を擧げて京都へ行く。――三月讀賣新聞に「新學童の爲めに」を掲載す、初めて自由畫的提唱をなせるものなり――九月『葡萄棚の中』を春陽堂新興文藝叢書第十篇として出版。二科會出品「谷の竹藪」「花」「夕陽」「曙光」等六點。

大正八年

冬熱海より大島へ到る――五月梅蘭芳來る、その贊を時事に公けにし、神戸までその妙技を追うて見に行く。「ロシアの婦人」「支那絹の日葵」等二科出品。

大正九年

、肺尖を病み鎌倉へ轉地を勸めらる――間島道彥と交る。夏輕井澤にて「白い道」「青い道」その他の畫作をなす。五月ベルナール著『回想のセザンヌ』を叢文閣より、六月『死ぬほど』を春陽堂より、十二月『美術の秋』を叢文閣より出版。十月[illegible]子疫痢にて入院。十一月鎌倉新渡戶博士別莊へ轉住す。

大正十年

極樂寺海岸にて專ら靜養、六月同村内にて轉居――一月『嘘の果』を新潮社より出版。田邊松坡先生の唐宋詩醇の講義に列す。「十

二月の夕陽」「うるめる春」等を二科展へ出品。——十二月姥谷松の屋敷を購入轉居す。

大正十一年

發熱及び盲腸の發作漸く多し。——「ピアノ練習」「マリア」「朝の雪」「觀瀾亭」「神樣の肖像」を二科展へ出品。

大正十二年

澤田節藏夫妻極樂寺に來住。——四月賀古病院へ入院——六月柏崎にて「自由畫を嗤ふ」の講演をなし自由畫の通弊を修正す。——六月八日兄武郎死去、七月九日告別式を行ふ。九月一日大震災、二科展招待日にて上野にあり、家族は鎌倉にて音信不通。母は赤阪に弟行郎と別居。——甥三人を引取り鎌倉より番町本家へ轉住す。

大正十三年

二月十五日再び現住宅へ本家より轉居。——三月一日より三日間本家家財を賣立し、北海道農場の讓與に着手す——五月『白夜雨稿』を金星堂より、同月『片方の心』をプラトン社より、九月代表的名作選集第四十篇として『蝙蝠の如く』を新潮社より出版。——九月末日入院、十月二日第一回盲腸炎手術を受く。經過不良。十一月十九日再手術を受く。十一月二十九日瀟孔を存せるまゝ歸宅臥床。生死を危まる。

大正十四年

四月鎌倉より湯河原へ轉地療養す。——七月二十二日大學病院に入院、二十八日第三回の大手術を受く。——九月十四日全快退院。——「看護婦」「牡丹」「山上の新綠」「菜の花のある靜物」「窓前雪景」等を二科展へ出品。——四月アルス美術叢書第一篇『セザンヌ』を臥床中譯了出版。

大正十五年

中野に畫室を建つ。——文化學院に教授す。——六月間島道彥氏の遺稿『若き科學者の隨筆』を新潮社より出版。——「リラ色の洋裝」「紺色の着物」「黒谷の赤松」「光悦寺の庭先」「日暮の露臺」の外四點を二科展へ出品。——十月京都へ、十一月京都より鄕里鹿兒島縣川內へ歸省。武郎の遺産整理をなす。

昭和二年

三月蕪村詩碑建設の計畫に携り小諸へ實地檢分に赴る。——四月一日より六日間三越にて山下、正宗、坂本と四人洋畫展覽會開催、「大文字山」「琵琶湖」「妙義山」等二十五點を出品す。同二十五日より十日間芳野、紀州等へ旅行。——五月十八日より十日間山陽山陰へ講演旅行。——六月朝日新聞社主催明治大正名作展覽會に「老爺」及び「白い道」出陳せらる。——七月現代日本文學全集第二十七篇として『有島武郎、有島生馬集』出づ。

昭和二年七月一日印刷
昭和二年七月五日發行

現代日本文學全集　第二十七篇

著者　有島武郎
著者　有島生馬

發行者　山本美
東京市麴町區内幸町一丁目參番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌
東京市麴町區内幸町一丁目參番地
幸ビルディング壹階
改造社
振替東京八四〇二番
電話銀座一七三三番
銀座四五五八番
銀座五〇四六番

株式會社秀英舍印刷